

茨城県教育財団文化財調査報告第44集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16

南三島遺跡3・4区(I)

昭和62年12月

住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

南三島遺跡 3・4区(I)

正 誤 表

頁・行	誤	正	頁・行	誤	正
8 下3	ハマガイ	ハイガイ	178 下15	ローム子	ローム粒子
34 上2	47はh種	48はh種	188 上1	呈する	呈する。
39 下13	(25・27・28)	(25・26・27)	190 下3	くび部	くびれ部
39 下15	22・27・28	22・26・27	199 下1	19と21	19と23
49 下3	20～25	20～25 cm	200 上1	22・23は	22・24は
68 上5	現存高4.2 cm	現存高4.2 cm	215 上11	磨消文	磨消縄文
78 下2	内湾するする	内湾する	295 上15	(第193図)	(第193図1)
78 下6	単独縄	単節縄	297 上10	を切っている	に検出された
84 上4	少量を含	少量含	322 下6	(第199図17～19)	(第199図17)
114 上6	灰層を	灰層が	323 上1～3	全文	削除
115 上10	第5溝	第5号溝	323 上11・12	20	18
158 上5	底面2 cm	底面上2 cm	323 下8・9	21	19
161 上18	22の破片	21の破片	324 上7・8	22	20
168 上13	焼土子	焼土粒子	330 上4	28か所が	28か所
169 上2	長形	長径	434 上5	平坦	平坦
169 上3	平坦	平坦	485 表20 スズキ欄	魚骨	角骨

茨城県教育財団文化財調査報告第44集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16

みなみしま

南三島遺跡3・4区(I)

昭和62年12月

住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

序

竜ヶ崎市の北部台地に、住宅・都市整備公団が、竜ヶ崎ニュータウンの建設を進めてまいりましたが、その地域内には、数多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、これらの埋蔵文化財を記録保存するため、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、発掘調査を実施してまいりました。

昭和59年度から昭和61年度にかけて発掘調査を実施した南三島遺跡3・4区からは、郷土の歴史を解明するうえできわめて有益な資料が多数発見され、大きな成果を上げることができました。

昭和61年度には、南三島遺跡3・4区の縄文時代に関する整理を行い、調査報告書を刊行する運びとなりました。本書が郷土の歴史解明はもとより広く学術研究の資料としても活用され、教育・文化の向上に役立つことを願ってやみません。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者の住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対し、厚く感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会、竜ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、心より感謝の意を表します。

昭和62年12月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 川 又 友三郎

例 言

1. 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和59年度から昭和61年度にかけて発掘調査を実施した竜ヶ崎市羽原町に所在する南三島遺跡3・4区の縄文時代に関わる遺構と遺物についてまとめた埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 南三島遺跡3・4区の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	竹 内 藤 男 川 又 友三郎	～昭和61年3月 昭和61年4月～
副 理 事 長	川 又 友三郎 磯 田 勇	～昭和61年3月 昭和61年4月～
常 務 理 事	綿 引 一 夫 萩 原 藤之助 滑 川 貞 雄	～昭和60年3月 ～昭和61年3月 昭和61年4月～
事 務 局 長	小 林 洋 堀 井 昭 生	～昭和60年3月 昭和60年4月～
調 査 課 長	青 木 義 夫	昭和59年4月～
企 画 管 理 班	班 長 市 毛 洋 一 北 畠 健 主任調査員 加 藤 雅 美 山 本 静 男 係 長 田 所 多 佳 男 主 事 鈴 木 三 郎 海 老 沢 一 夫 大 曾 根 徹 山 崎 初 雄 大 部 章	～昭和60年3月 昭和60年4月～ ～昭和61年3月 昭和61年4月～ 昭和60年4月～ ～昭和60年3月 ～昭和60年3月 ～昭和61年3月 昭和60年4月～ 昭和61年4月～

調 査 班	班 長	安 藏 幸 重 倉 本 富美男 沼 田 文 夫	昭和59年度 昭和60年度 昭和61年度
	主任調査員 〃 〃 〃 〃 調 査 員 〃	山 本 静 男 佐 藤 正 好 齊 藤 弘 道 小 山 映 一 高 村 勇 根 本 康 弘 吉 川 明 宏	昭和60年度 3・4区調査 昭和59年度 3区調査 昭和60年度 3・4区調査, 昭和61年度整理・執筆 昭和60年度 3・4区調査, 昭和61年度 4区調査 昭和61年度 4区調査 昭和59年度 3区調査 昭和61年度 4区調査
整 理 班 長		加 藤 雅 美	昭和61年度

3. 本書は、発掘調査担当者の協力を得て、齊藤弘道が執筆・編集を担当した。
4. 本書の作成にあたり、早稲田大学教育学部講師金子浩昌先生に貝類遺体・獣骨・魚骨等の同定を依頼し、御教示を得るとともに玉稿をいただいた。また、石器の石質鑑定は、茨城県立上郷高等学校教頭蜂須紀夫先生の御指導を得た。
5. 本書に使用した記号等については、第3章第1節2の記載方法の項を参照されたい。
6. 発掘調査及び出土遺物の整理等の際し、御指導・御協力を賜った関係各機関及び各位に対し、深く感謝の意を表します。

目 次

序	
例 言	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 遺構と遺物	14
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	14
第2節 竪穴住居跡と出土土器	16
第3節 土坑と出土土器	168
第4節 炉穴と出土土器	310
第5節 埋甕遺構と出土土器	316
第6節 その他の遺構	324
第7節 貝塚と魚骨層	330
第8節 土器以外の人工遺物	349
1 把手	349
2 土製品	354
3 石器および石製品	382
4 骨角貝製品	408
第9節 その他の土器	414
第4章 まとめ	417
第1節 遺構について	417
第2節 遺物について	445
終 章 むすび	479
附 章 南三島遺跡3・4区出土の脊椎動物遺存体	480

插图目次

<p>第 1 图 南三島遺跡 3・4 区遺構 分布图……………卷末折込</p> <p>第 2 图 南三島遺跡大調査区名称图…………… 3</p> <p>第 3 图 南三島遺跡周辺地形及び 周辺遺跡位置图…………… 11</p> <p style="text-align: center;">3 区</p> <p>第 4 图 第 3 号住居跡実測图…………… 17</p> <p>第 5 图 第 3 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(1)…………… 18</p> <p>第 6 图 第 3 号住居跡出土土器 拓影图(2)…………… 19</p> <p>第 7 图 第 3 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(3)…………… 21</p> <p>第 8 图 第 8 号住居跡実測图…………… 22</p> <p>第 9 图 第 8 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(1)…………… 24</p> <p>第 10 图 第 8 号住居跡出土土器 拓影图(2)…………… 25</p> <p>第 11 图 第 9 号住居跡実測图…………… 25</p> <p>第 12 图 第 9 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(1)…………… 27</p> <p>第 13 图 第 9 号住居跡出土土器 拓影图(2)…………… 28</p> <p>第 14 图 第 10 号住居跡実測图…………… 29</p> <p>第 15 图 第 10 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(1)…………… 31</p> <p>第 16 图 第 10 号住居跡出土土器 拓影图(2)…………… 32</p> <p>第 17 图 第 10 号住居跡出土土器 拓影图(3)…………… 33</p> <p>第 18 图 第 16 号住居跡実測图…………… 34</p> <p>第 19 图 第 16 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(1)…………… 36</p> <p>第 20 图 第 16 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(2)…………… 37</p>	<p>第 21 图 第 17 号住居跡実測图…………… 38</p> <p>第 22 图 第 17 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(1)…………… 40</p> <p>第 23 图 第 17 号住居跡出土土器 拓影图(2)…………… 41</p> <p>第 24 图 第 17 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(3)…………… 42</p> <p>第 25 图 第 20 号住居跡実測图…………… 43</p> <p>第 26 图 第 20 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(1)…………… 45</p> <p>第 27 图 第 20 号住居跡出土土器 拓影图(2)…………… 46</p> <p>第 28 图 第 20 号住居跡出土土器 拓影图(3)…………… 47</p> <p>第 29 图 第 20 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(4)…………… 48</p> <p>第 30 图 第 22 号住居跡実測图…………… 50</p> <p>第 31 图 第 22 号住居跡出土土器 拓影图(1)…………… 52</p> <p>第 32 图 第 22 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(2)…………… 53</p> <p>第 33 图 第 28 号住居跡実測图…………… 54</p> <p>第 34 图 第 28 号住居跡出土土器 拓影图(1)…………… 55</p> <p>第 35 图 第 28 号住居跡出土土器 拓影图(2)…………… 56</p> <p>第 36 图 第 34・58 号住居跡実測图…………… 57</p> <p>第 37 图 第 34 号住居跡出土土器 実測图・拓影图(1)…………… 60</p> <p>第 38 图 第 34 号住居跡出土土器 拓影图(2)…………… 61</p> <p>第 39 图 第 34 号住居跡出土土器 拓影图(3)…………… 62</p> <p>第 40 图 第 34 号住居跡出土土器 拓影图(4)…………… 63</p>
---	--

第 41 图	第 34 号住居跡出土土器 実測図・拓影図(5)……………	64	第 64 图	第 74 号住居跡実測図……………	97
第 42 图	第 35 号住居跡実測図……………	65	第 65 图	第 74 号住居跡出土土器 拓影図……………	99
第 43 图	第 35 号住居跡出土土器 実測図・拓影図……………	67	第 66 图	第 79 号住居跡実測図……………	100
第 44 图	第 46 号住居跡実測図……………	68	第 67 图	第 79 号住居跡出土土器 実測図・拓影図……………	101
第 45 图	第 46 号住居跡出土土器 実測図・拓影図……………	70	第 68 图	第 80 号住居跡実測図……………	102
第 46 图	第 47 号住居跡実測図……………	71	第 69 图	第 80 号住居跡出土土器 実測図・拓影図……………	104
第 47 图	第 47 号住居跡出土土器 実測図・拓影図……………	73	第 70 图	第 81 号住居跡実測図……………	106
第 48 图	第 48 号住居跡実測図……………	74	第 71 图	第 81 号住居跡出土土器 実測図・拓影図(1)……………	107
第 49 图	第 48 号住居跡出土土器 実測図・拓影図……………	76	第 72 图	第 81 号住居跡出土土器 拓影図(2)……………	108
第 50 图	第 49・69 号住居跡実測図……………	77	第 73 图	第 83 号住居跡実測図……………	110
第 51 图	第 49 号住居跡出土土器 実測図・拓影図(1)……………	79	第 74 图	第 83 号住居跡出土土器 拓影図(1)……………	111
第 52 图	第 49 号住居跡出土土器 拓影図(2)……………	80	第 75 图	第 83 号住居跡出土土器 実測図(2)……………	112
第 53 图	第 49 号住居跡出土土器 実測図・拓影図(3)……………	81	第 76 图	第 86 号住居跡実測図……………	113
第 54 图	第 56 号住居跡実測図……………	83	第 77 图	第 86 号住居跡出土土器 拓影図……………	114
第 55 图	第 56 号住居跡出土土器 実測図・拓影図(1)……………	85	第 78 图	第 87 号住居跡実測図……………	115
第 56 图	第 56 号住居跡出土土器 実測図・拓影図(2)……………	86	第 79 图	第 87 号住居跡出土土器 実測図・拓影図……………	116
第 57 图	第 58 号住居跡炉実測図……………	87	第 80 图	第 88 号住居跡実測図……………	117
第 58 图	第 58 号住居跡出土土器 実測図・拓影図(1)……………	88	第 81 图	第 88 号住居跡出土土器 拓影図(1)……………	118
第 59 图	第 58 号住居跡出土土器 拓影図(2)……………	89	第 82 图	第 88 号住居跡出土土器 拓影図(2)……………	119
第 60 图	第 69 号住居跡出土土器 実測図(1)……………	92	第 83 图	第 89 号住居跡実測図……………	120
第 61 图	第 69 号住居跡出土土器 実測図(2)……………	93	第 84 图	第 89 号住居跡出土土器 拓影図……………	121
第 62 图	第 72 号住居跡実測図……………	94	第 85 图	第 96 号住居跡実測図……………	122
第 63 图	第 72 号住居跡出土土器 実測図・拓影図……………	95	第 86 图	第 96 号住居跡出土土器 拓影図……………	124
			第 87 图	第 105 号住居跡実測図……………	125
			第 88 图	第 105 号住居跡出土土器	

	实测图·拓影图·····	127	第 111 图	第 7 号住居迹出土土器 拓影图(2)·····	156
第 89 图	第 106 号住居迹实测图·····	128	第 112 图	第 7 号住居迹出土土器 实测图·拓影图(3)·····	157
第 90 图	第 106 号住居迹出土土器 实测图·拓影图·····	129	第 113 图	第 19 号住居迹实测图·····	158
第 91 图	第 109 号住居迹实测图·····	130	第 114 图	第 19 号住居迹出土土器 实测图·拓影图(1)·····	160
第 92 图	第 109 号住居迹出土土器 实测图·拓影图·····	131	第 115 图	第 19 号住居迹出土土器 实测图·拓影图(2)·····	162
第 93 图	第 117·118 号住居迹实测图·····	132	第 116 图	第 50 号住居迹实测图·····	163
第 94 图	第 117 号住居迹出土土器 拓影图·····	133	第 117 图	第 50 号住居迹出土土器 实测图·拓影图(1)·····	165
第 95 图	第 118 号住居迹出土土器 拓影图·····	134	第 118 图	第 50 号住居迹出土土器 实测图·拓影图(2)·····	167
	4 区			3 区	
第 96 图	第 3 号住居迹实测图·····	135	第 119 图	土坑实测图(1)·····	228
第 97 图	第 3 号住居迹出土土器 拓影图·····	136	第 120 图	土坑实测图(2)·····	229
第 98 图	第 4 号住居迹实测图·····	137	第 121 图	土坑实测图(3)·····	230
第 99 图	第 4 号住居迹出土土器 实测图·拓影图·····	138	第 122 图	土坑实测图(4)·····	231
第 100 图	第 5 号住居迹实测图·····	140	第 123 图	土坑实测图(5)·····	232
第 101 图	第 5 号住居迹出土土器 实测图(1)·····	142	第 124 图	土坑实测图(6)·····	233
第 102 图	第 5 号住居迹出土土器 实测图·拓影图(2)·····	144	第 125 图	土坑实测图(7)·····	234
第 103 图	第 5 号住居迹出土土器 拓影图(3)·····	145	第 126 图	土坑实测图(8)·····	235
第 104 图	第 5 号住居迹出土土器 拓影图(4)·····	147	第 127 图	土坑实测图(9)·····	236
第 105 图	第 5 号住居迹出土土器 实测图·拓影图(5)·····	148	第 128 图	土坑实测图(10)·····	237
第 106 图	第 5 号住居迹出土土器 实测图(6)·····	149	第 129 图	土坑实测图(11)·····	238
第 107 图	第 6 号住居迹实测图·····	151	第 130 图	土坑实测图(12)·····	239
第 108 图	第 6 号住居迹出土土器 拓影图·····	152	第 131 图	土坑实测图(13)·····	240
第 109 图	第 7 号住居迹实测图·····	153	第 132 图	土坑实测图(14)·····	241
第 110 图	第 7 号住居迹出土土器 实测图·拓影图(1)·····	155	第 133 图	土坑实测图(15)·····	242
			第 134 图	土坑实测图(16)·····	243
			第 135 图	土坑实测图(17)·····	244
			第 136 图	土坑实测图(18)·····	245
			第 137 图	土坑实测图(19)·····	246
			第 138 图	土坑实测图(20)·····	247
			第 139 图	土坑实测图(21)·····	248
			第 140 图	土坑实测图(22)·····	249
			第 141 图	土坑实测图(23)·····	250

第 142 图	土坑实测图(24)·····	251	第 163 图	第 251 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	272
第 143 图	土坑实测图(25)·····	252	第 164 图	第 286 号土坑出土土器 实测图·拓影图(1)·····	273
第 144 图	土坑实测图(26)·····	253	第 165 图	第 286 号土坑出土土器 实测图·拓影图(2)·····	274
第 145 图	土坑·性格不明遺構实测图(27)·····	254	第 166 图	第 290·294·304 号土坑 出土土器拓影图·····	275
第 146 图	第 28 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	255	第 167 图	第 299 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	276
第 147 图	第 45·56 号土坑出土土器 拓影图·····	256	第 168 图	第 313·322 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	277
第 148 图	第 58·62·68·73 号 土坑出土土器实测图·拓影图·····	257	第 169 图	第 326·330·338 号土坑 出土土器实测图·拓影图·····	278
第 149 图	第 84·88·95 号土坑 出土土器实测图·拓影图·····	258	第 170 图	第 352·353·384·387 号土坑 出土土器实测图·拓影图·····	279
第 150 图	第 95 号土坑出土土器 拓影图·····	259	第 171 图	第 390·394 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	280
第 151 图	第 92 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	260	第 172 图	第 391 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	281
第 152 图	第 102·106 号土坑出土 土器实测图·拓影图·····	261	第 173 图	第 393 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	282
第 153 图	第 106 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	262	第 174 图	第 395·406 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	283
第 154 图	第 106·109·112·123 号 土坑出土土器实测图·拓影图·····	263	第 175 图	第 396 号土坑出土土器 实测图·拓影图(1)·····	284
第 155 图	第 139·148 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	264	第 176 图	第 396 号土坑出土土器 拓影图(2)·····	285
第 156 图	第 154·156 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	265	第 177 图	第 396 号土坑出土土器 实测图·拓影图(3)·····	286
第 157 图	第 156 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	266	第 178 图	第 400 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	287
第 158 图	第 166·172·173·178 号 土坑出土土器实测图·拓影图·····	267	第 179 图	第 404·406 号土坑出土土器 拓影图·····	288
第 159 图	第 178 号土坑出土土器 拓影图(2)·····	268	第 180 图	第 408·428 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	289
第 160 图	第 178 号土坑出土土器 实测图·拓影图(3)·····	269	第 181 图	第 436·450 号土坑出土土器 实测图·拓影图·····	290
第 161 图	第 200·214 号土坑出土土器 拓影图·····	270			
第 162 图	第 214·219·231·241 号 土坑出土土器拓影图·····	271			

第 182 図	第 444 号土坑出土土器 拓影図……………291	第 209 図	土器片錘実測図(8)……………374
第 183 図	第 451 号土坑出土土器 実測図・拓影図……………292	第 210 図	土製円板実測図……………375
第 184 図	第 458・465・484・486 号土坑 出土土器拓影図……………293	第 211 図	土製円板・有孔円板 実測図……………376
第 185 図	第 525・531 号土坑出土土器 実測図・拓影図……………294	第 212 図	有孔円板実測図……………377
	4 区		4 区
第 186 図	土坑実測図(1)……………302	第 213 図	土器片錘実測図(1)……………378
第 187 図	土坑実測図(2)……………303	第 214 図	土器片錘実測図(2)……………379
第 188 図	土坑実測図(3)……………304	第 215 図	土器片錘・土製円板・ 有孔円板実測図……………380
第 189 図	土坑実測図(4)……………305		3 区
第 190 図	土坑実測図(5)……………306	第 216 図	土製品実測図……………381
第 191 図	土坑実測図(6)……………307	第 217 図	石器実測図(1)……………392
第 192 図	土坑実測図(7)……………308	第 218 図	石器実測図(2)……………393
第 193 図	第 24・27・28・33・37・47・ 66・76・170号土坑出土土器 実測図・拓影図……………309	第 219 図	石器実測図(3)……………394
	3 区	第 220 図	石器実測図(4)……………395
第 194 図	炉穴出土土器拓影図……………315	第 221 図	石器実測図(5)……………396
第 195 図	埋甕遺構実測図(1)……………325	第 222 図	石器実測図(6)……………397
第 196 図	埋甕遺構実測図(2)……………326	第 223 図	石器実測図(7)……………398
第 197 図	埋甕遺構出土土器 実測図(1)……………327	第 224 図	石器実測図(8)……………399
第 198 図	埋甕遺構出土土器 実測図(2)……………328	第 225 図	石器実測図(9)……………400
第 199 図	埋甕遺構出土土器 実測図(3)……………329	第 226 図	石器実測図(10)……………401
第 200 図	把手実測図(1)……………352	第 227 図	石器実測図(11)……………402
第 201 図	把手実測図(2)……………353	第 228 図	石器実測図(12)……………403
第 202 図	土器片錘実測図(1)……………367	第 229 図	石器実測図(13)……………404
第 203 図	土器片錘実測図(2)……………368	第 230 図	石器・石製品実測図(14)……………405
第 204 図	土器片錘実測図(3)……………369		4 区
第 205 図	土器片錘実測図(4)……………370	第 231 図	石器実測図(1)……………406
第 206 図	土器片錘実測図(5)……………371	第 232 図	石器実測図(2)……………407
第 207 図	土器片錘実測図(6)……………372		3 区
第 208 図	土器片錘実測図(7)……………373	第 233 図	骨角貝製品実測図(1)……………412
		第 234 図	貝製品実測図(2)……………413
		第 235 図	土坑・グリッド出土土器 実測図……………416
		第 236 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(1)……………468
		第 237 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(2)……………469

第 238 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(3)……………	470	第 243 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(8)……………	475
第 239 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(4)……………	471	第 244 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(9)……………	476
第 240 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(5)……………	472	第 245 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(10)……………	477
第 241 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(6)……………	473	第 246 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(11)……………	478
第 242 図	南三島遺跡縄文土器 分類図(7)……………	474			

表 目 次

表 1	南三島遺跡周辺遺跡地名表……………	12	表 13	石器(石製品)一覧表(3区) ……	386
表 2	南三島遺跡 3 区土坑一覧表……………	216	表 14	石器(石製品)一覧表(4区) ……	391
表 3	南三島遺跡 4 区土坑一覧表……………	299	表 15	骨角貝製品一覧表(3区) ……	410
表 4	南三島遺跡 3・4 区貝塚 一覧表……………	345	表 16	3 区住居跡一覧表……………	418
表 5	把手一覧表(3区) ……	351	表 17	4 区住居跡一覧表……………	419
表 6	土器片錘一覧表(3区) ……	356	表 18	南三島遺跡縄文時代住居 跡数および分布密度……………	419
表 7	土器片錘一覧表(4区) ……	362	表 19	南三島遺跡土坑形態別一覧表……………	433
表 8	土製円板一覧表(3区) ……	364	表 20	南三島遺跡 3 区各土坑別 魚鳥獣類遺存体出土量表……………	485
表 9	土製円板一覧表(4区) ……	365	表 21	南三島遺跡 3 区第 34 号 住居跡魚類遺存体出土量表……………	489
表 10	有孔円板一覧表(3区) ……	365	表 22	南三島遺跡 3 区第 34 号 住居跡鳥獣類遺存体出土量表……………	491
表 11	有孔円板一覧表(4区) ……	366			
表 12	土製品一覧表(3区) ……	366			

写真図版目次

3 区

- PL 1 第3・8～10・16・17・20号
住居跡
- PL 2 第28・34・35・46・47・48・49・
58・69号住居跡
- PL 3 第56・72・74・79～81・83・
86号住居跡
- PL 4 第87～89・96・105・106・109・
117・118号住居跡
- PL 5 第9・34・35・47・49・56号
住居跡炉
- PL 6 第58・69・79～81・83・86・
87号住居跡炉
- PL 7 第88・89・96・105・106・117・
118号住居跡炉
- PL 8 第10・15・16・22・23・28・
35・45・53号土坑
- PL 9 第56・58・60・64・68～70・
72・73号土坑
- PL 10 第76・77・79・81・82・84・
88・90号土坑
- PL 11 第101・104・109・110・112・
114・117・123号土坑
- PL 12 第131・139・156・166・172・173号
土坑
- PL 13 第173・174・177・178・196・
200号土坑
- PL 14 第200・214・217・219・231・
233・234・241号土坑
- PL 15 第245～247・249・251・255・
260号土坑
- PL 16 第263・267・272～275・279・
280号土坑
- PL 17 第285・286・289・290・294・
299・304・336号土坑

- PL 18 第305・308・309・313～315・
320・322号土坑
- PL 19 第326・329・330・333・334・
338・339号土坑
- PL 20 第340・350・352～355・
357・362・363号土坑
- PL 21 第373・387～389・391・
393号土坑
- PL 22 第393～396号土坑
- PL 23 第397・400～404・406号土坑
- PL 24 第407・408・411～415号土坑
- PL 25 第416・418・422・427・428・
432～434号土坑
- PL 26 第435～438・441・444号土坑
- PL 27 第450・451・464・465・470・
480・486・490・491号土坑
- PL 28 第493・497・499・507・525・
531号土坑 第1号性格
不明遺構
- PL 29 第1～7・9号炉穴
- PL 30 第1～4号埋甕遺構
- PL 31 第5～8・10・11号
埋甕遺構
- PL 32 第12～18号埋甕遺構
- PL 33 第1・46・47・49・74号住居
跡遺物出土状況
- PL 34 第9・10・16・34・58号住居
跡遺物出土状況
- PL 35 第79～81・106号住居跡
第400号土坑, 第5号溝,
グリッド遺物出土状況
- ### 4 区
- PL 36 第3～7・19・50号住居跡
- PL 37 第24・26～28・32・33・37・
39・47号土坑

- PL 38 第 47・49・66・68・74・76・
150・167・170 号土坑
- PL 39 第 170・173・176・180 号土坑
第 4・19 号住居跡炉
- PL 40 第 4・5・7・19・50 号
住居跡遺物出土状況
3 区
- PL 41 住居跡出土土器(1)
- PL 42 住居跡出土土器(2)
- PL 43 土坑出土土器(1)
- PL 44 土坑・グリッド出土土器(2)
- PL 45 埋甕遺構出土土器(1)
- PL 46 埋甕遺構出土土器(2)
4 区
- PL 47 住居跡・土坑出土土器
3 区
- PL 48 把手
- PL 49 土器片錘(1)
- PL 50 土器片錘(2)
- PL 51 土製円板・有孔円板
- PL 52 土製品
- PL 53 特殊土器
- PL 54 石器(1)
- PL 55 石器(2)
- PL 56 石器(3)
- PL 57 石器(4)
- PL 58 石器(5)
- PL 59 石器(6) 4区を含む
- PL 60 石器(7) 4区
骨角貝製品
- PL 61 住居跡・土坑内出土貝刃
- PL 62 住居跡・土坑内出土
貝刃・貝

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

竜ヶ崎ニュータウン建設計画は、昭和46年1月に「竜ヶ崎・牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画として策定された。事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地地区画整理事業」と称し、当初、日本住宅公団が計画した。その後、昭和51年5月宅地開発公団茨城開発局の設立により、上記事業を引き継ぎ実施することになった。ニュータウンの人口は75,000人が予定されているが、既に造成工事を完了した北竜台地区には、新居住者が多数入居している。なお、宅地開発公団は、日本住宅公団と昭和56年10月1日付をもって整理統合され、新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。この統合に伴い、従来の契約によって生じた権利・義務は、そのまま住宅都市整備公団に受け継がれ、現在に至っている。

土地地区画整理事業の施行地区は、北竜台では小柴新田町、柏田町の全域と若柴町、稲荷新田町、駒馬町、馴柴町、南中島町、別所町の一部で326.6ha、龍ヶ岡では貝原塚町、羽原町、八代町、長峰町の各一部で344.9haの計671.5haである。開発前の状況は、北竜台においては山林原野が約70%、畑及び水田等の耕地が約24%を占め、龍ヶ岡においては山林原野が50%、畑及び水田等の耕地が約40%以上を占めていた。

茨城県教育委員会は、龍ヶ崎市教育委員会と昭和45年に開発区域内の埋蔵文化財の分布調査を実施し、22遺跡について文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため協議を重ねた。さらに、再度の分布調査や造成工事の進行に伴い、土地地区画整理事業地内において遺跡の追加発見があり、現在では36遺跡⁽¹⁾が確認されている。これらの遺跡について、文化財保護の立場から関係機関で協議を行なったが、現状保存の困難な31遺跡については記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は、昭和52年度以来、当時の宅地開発公団と「北竜台及び龍ヶ岡特定土地地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を結び、竜ヶ崎ニュータウン建設計画区域内の埋蔵文化財調査を実施してきている。

ここに報告するのは、昭和56年4月から遺跡を1～7区に分けて継続調査してきた南三島遺跡の3・4区についてであり、昭和59年12月から昭和61年7月にかけて調査を実施した。なお、発掘調査は、茨城県教育財団本部調査課調査第二班（昭和61年度は調査第一班）が担当した。

注

(1) 竜ヶ崎ニュータウン建設計画区域内の遺跡については、Rの頭文字を付し呼称している。

現在はR33まで付されているが、R6がAとBに分れ、R28がR28、R28A、R28Bに分れているために、遺跡数は36となっている。

第2節 調査方法

1 地区設定

南三島遺跡は、調査対象面積 100,313 m²を有する大遺跡であり、1～7区に分けて調査を進めてきた。3区は 13,602 m²、4区は 16,811 m²である。当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系、X座標 - 8,450 m、Y座標 + 33,500 mの交点を基準点として、40 m四方の大調査区を設定した。その大調査区を東西南北に10等分して4 m四方の小調査区とした。すなわち、40 m四方の大調査区内に4 m四方の小調査区を100個設定したわけである。

大調査区は、基準点から北方へ320 m、西方へ400 mの点を起点とし、北から南へ大文字のアルファベットでA・B・C……、西から東へ1・2・3と付し、A1・B2区などと呼んだ。

小調査区は、同様に北から南へ小文字のアルファベットでa・b・c……i・jとし、西から東へ1・2・3……9・0と付した。各小調査区の名称は、大調査区と小調査区を組みあわせて「A1c1」、「B2b3」のように表記した。

2 層序の検討

南三島遺跡の基本的層序については、既刊の南三島遺跡1・2区⁽¹⁾、6・7区⁽²⁾、5区⁽³⁾の各報告書において詳細に記載され、図示されており、今回の3・4区においても略同様であるので、記載と図示を省略した。上記の各報告書を参照されたい。

3 遺構確認

当遺跡3区における遺構確認作業は、最初に全調査区の8分の1にあたる部分にグリッドを設定して試掘をおこなった結果、多量の遺物とともに住居跡、土坑、溝、貝ブロックなどが検出されたので、重機を導入して全調査区のうち約80%弱の表土除去をおこなった。その後、2回に分けて残存部の南、西側の表土除去をおこない、縄文時代中・後期の住居跡、古墳時代前期、奈良、平安時代の住居跡100余軒、土坑約500基、溝14条、貝ブロック10か所などを確認した。

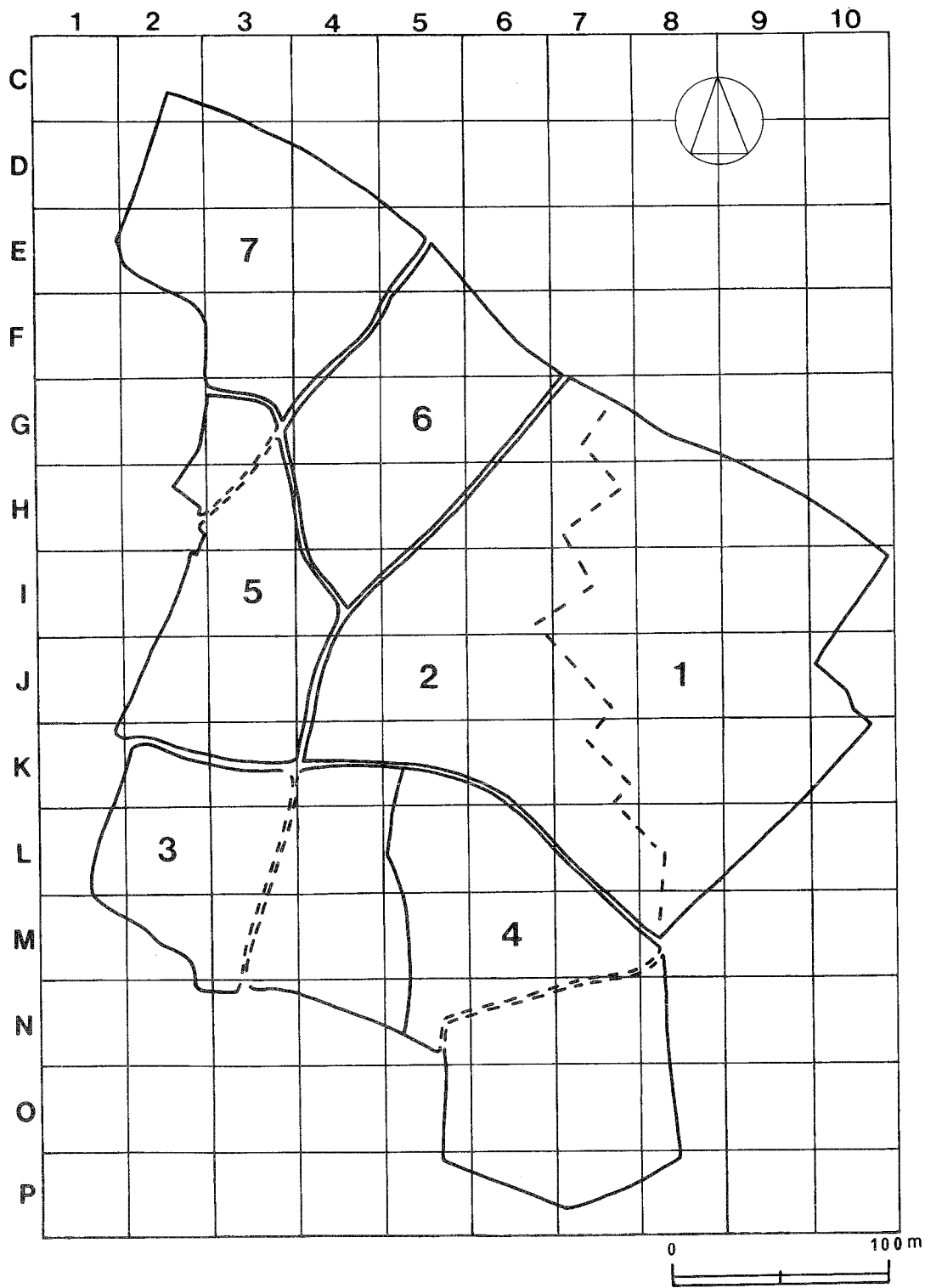
4区における遺構確認作業は、昭和60年5月に調査区のはほぼ全域にあたるL5～6、M5～8、N5～8、O6～7区のトレンチによる試掘をおこない、多数の住居跡、土坑、溝などを確認したので、7月に重機による表土除去を全面にわたって実施した。その結果、遺構の分布は調査区の南西側に濃密であったが、北東側では少数の住居跡・土坑が検出され、分布は疎であった。主な遺構は、竪穴住居跡約50軒、土坑170基、溝20条などであり、貝ブロックも2か所検出された。

注

(1) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10 南三島遺跡1・2区』 茨城県教育財団 昭和59年8月

(2) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11 南三島遺跡6・7区』 茨城県教育財団 昭和60年10月

(3) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12 南三島遺跡5区』 茨城県教育財団 昭和61年3月



第2図 南三島遺跡大調査区名称図

第3節 調査経過

南三島遺跡3区は、調査対象面積 13,602 m²で、昭和59年12月19日に発掘調査を開始し、昭和61年3月26日に調査を終了した。また同遺跡4区は、調査対象面積 16,811 m²で、昭和60年4月25日に発掘調査を開始し、昭和61年7月31日に調査を終了した。3区の調査を先行させたが、調査の進行上一部並行調査をおこなった期間もあった。

以下に発掘調査の経過について、3区と4区を分けて月を追ってその概略を記載する。

3区の調査経過

昭和59年度

- 12月 19日に当遺跡の調査を開始し、除草作業をおこなう。24日から確認調査を実施し、L4区のグリッドを発掘する。
- 1月 7日から調査を再開し、9日から23日にかけてグリッド発掘を継続し、住居跡・土坑・溝・貝塚等を検出し、多量の縄文土器片・土師器片を収納する。K・Lの2、3区に多数の遺構と遺物を検出する。
- 2月 4日から重機による表土除去作業を開始し、あわせて遺構確認作業をおこなう。
- 3月 5日に表土除去作業を終了する。12日には遺構確認作業を終了し、15～16日にかけて遺構配置図の作成をおこなう。住居跡状遺構52軒を認めた他に多数の土坑・溝・貝塚などを検出し、昭和59年度の調査を終了した。

昭和60年度

- 4月 10日から本年度の調査を開始し、約1ヶ月間の空白があったために、遺構の配置が不明瞭となっていたので、遺構の再確認作業を11日から24日までおこなう。地区によっては約10cm以上の残土があり、かなり手間どった。22日から25日にかけて遺構確認状況図を作成し、あわせて杭打ち作業を進める。30日からK2区の遺構調査を開始する。
- 5月 住居跡6号、土坑113号まで調査を進める。作業員が少なく、遺構調査に時間がかかる。縄文時代中期の第3号住居跡からは小さな貝ブロックも検出される。
- 6月 住居跡13号、土坑165号、溝1～5号までの調査をおこなうが、雨天の日が多く、調査は順調とはいえない。
- 7月 15日に梅雨明け宣言があるまでは、天候不順であったが、以後は晴天の日が続いた。住居跡28号、土坑204号まで調査をおこなう。第173号土坑からは、大量のアジを主体とする魚骨層を底面近くに確認する。
- 8月 晴天が続く、調査は順調に進む。住居跡44号、土坑255号、埋甕1～5号までの調査を実施する。13日～18日は盆休業とする。第34号住居跡、第200号土坑、第231号土坑からは、ハマグリを主体とした貝ブロックが検出される。
- 9月 前月につづき、住居跡の調査を中心に進める。住居跡59号、土坑273号、埋甕6～7号までの調査をおこなう。第47号住居跡からは、完形の大形石棒が出土する。
- 10月 今月は、曇や雨の日が多い。遺構調査は、住居跡74号、土坑314号、埋甕8～9号、溝6号まで進める。遺物（土器・貝類）の洗浄作業もあわせて実施する。
- 11月 上旬は、雨天の日が多く、遺構調査が進まず、遺物洗浄などをおこなう。中旬以降は、秋晴れが

つづき、調査が順調となる。住居跡 83 号、土坑 392 号、埋甕 10～13 号、溝 6～10 号まで調査を進める。第 326 号土坑からも、ハマグリ、シオフキ主体の貝ブロックが検出される。

- 12 月 今月も天候に恵まれ、住居跡 89 号、土坑 465 号、埋甕 14～15 号、溝 11～14 号までの調査をおこなう。第 390～400 号までの土坑は、大形円筒形の深い土坑が多く、遺物も多量に出土する。第 395 号土坑の底面近くからは、人体貼付文を有する注口土器が検出され、調査中のトピックとなった。
- 1 月 6 日より調査を開始し、3 区は 12 月までの調査の補足を主としておこない、遺構調査の主力を 4 区におく。3 区は、7 日より調査区域内の表土除去未了部分（M 2・M 3・N 3 区）について伐開、表土除去、遺構確認作業を進め、29 日より第 90 号住居跡から調査を再開する。また、30 日には、柳澤清一氏を講師として招き、「縄文時代中・後期の土器編年について」の班内研修を実施する。
- 2 月 上旬は晴天の日が続いが、中旬から下旬にかけては雪に見舞われ、調査に支障がおきる。住居跡 106 号、土坑 490 号、埋甕 16 号までの調査を進める。第 97 号住居跡の北側の周溝内からは、「富寿神宝」（818 年初鑄）の出土があった。15 日の土曜日に現地説明会を雨の中実施する。
- 3 月 調査も大詰めをむかえ、住居跡 107～118 号、土坑 491～535 号、埋甕 17～18 号の調査とともに溝などの遺構の補足をおこなう。遺跡の南西側に検出された住居跡は、古墳時代～平安時代にかけての時期のものが多い。26 日の調査最終日まで、懸命の調査を続ける。

4 区の調査経過

昭和 60 年度

- 4 月 25 日から 3 区の遺構確認調査と並行してトレンチ試掘予定地の伐開と焼却作業を始め、発掘前の全景写真撮影をおこない、杭打ち作業を進める。
- 5 月 杭打ち作業を継続し、13 日から試掘を開始し、24 日までに終了する。溝、住居跡が検出される。
- 7 月 15 日より 4 区の表土除去作業を開始し、遺構確認作業もあわせておこなう。
- 8 月 6 日に表土除去を完了し、12 日まで遺構確認作業を実施し、19～20 日にかけて遺構配置図の作成をおこなう。
- 1 月 7 日から遺構調査を実施し、住居跡 1～5 号、土坑 1～38 号、溝 1～4 号などの調査をおこなう。住居跡は、第 1・2 号は平安時代、第 3～5 号は縄文時代中期のものである。第 5 号住居跡からは多量の貝ブロックが検出される。
- 2 月 住居跡 6・7 号、土坑 39～53 号および性格不明遺構 5 基の調査をおこなう。第 6・7 号住居跡は、共に縄文時代中期のものである。25 日に第 53 号土坑の図面作成を終了し、4 区の調査を中断し、3 区の調査に集中する。

昭和 61 年度

- 4 月 11 日から調査を再開し、住居跡 8 号から 15 号、土坑 54～80 号の調査を進めるとともに、N・M の 5～7 区の遺構の確認をおこなう。
- 5 月 住居跡の調査を先行させ、50 号住居跡までの掘り込みをおこない、土坑の調査は 81～87 号まで実施する。第 19・50 号住居跡は縄文時代中期のものである。
- 6 月 住居跡のカマド調査、平面実測、断面図作成などをおこない、53 号住居跡まで調査を終了さ

せる。土坑も 88 ～ 179 号まで調査を進め、後半からは溝の掘り込み、土層断面図、平面図の作成などをおこなう。

- 7 月 土坑および溝の写真、図面の作成を中心として作業を進め、土坑は 181 号まで、溝は 17 号までの調査を終了し、24 日に航空写真の撮影をおこない、26 日には現地説明会を開催する。28 日には鈴木敏弘氏を講師として招き、「古墳時代以降の住居跡の時期と集落の変遷」と題した班内研修を実施する。31 日付をもって 4 区の調査を完了する。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

南三島遺跡3・4区は、茨城県竜ヶ崎市羽原町字鹿島原1354ほかに所在する。

竜ヶ崎市は、茨城県の南部に位置し、東西12 km、南北9 kmにわたり、約75 km²の面積を有する。

東方は新利根村、西方は藤代町、南方は利根町と河内村、そして北方は牛久市に接している。

また、市域は北部の筑波・稲敷台地と、南部の鬼怒川・小貝川流域の低地から成り立っている。

筑波・稲敷台地は、北西の筑波台地から連なり、桜川低地と小貝川低地に挟まれながら南東方向に延び、東は霞ヶ浦、南は利根川下流低地に至っている。標高は南東部が26～29 mで、北西部はそれよりやや低い比較的平坦な台地である。また、台地面は北西から南東方向に流れる小野川とその支流により侵食されている。北西の谷田川下流には本市域に属する牛久沼がある。

鬼怒川・小貝川は、栃木県から流下し、大河利根川に合流する。鬼怒川は守谷町で、小貝川は利根町でそれぞれ合流する支流で、この3本の河川によって茨城県南部一帯に沖積地を形成している。この沖積地は幅約10 kmにもおよぶ広大な低地であり、県下最大の穀倉地帯となっている。

この低地帯の中程には、猿島・北相馬台地の南端に連なる標高21 mの奥山台地がほぼ独立した形で存在し、当南三島遺跡が所在する羽原町の台地として対峙している。また、鬼怒川・小貝川低地と向かい合っており、利根川を挟んで千葉県木下台地が位置している。

地質は海成の成田層、河成の成田砂礫層を基盤とし、その上に約1 mほどの厚さを有する常総粘土層が重なり、更にその上に厚さ2～3 m程度の関東ローム層が堆積している。台地周囲の低地谷津部には軟弱な粘土および腐植土の堆積がみられる。

竜ヶ崎市は、茨城県を北上する常磐線の佐貫駅に接続する関東鉄道竜ヶ崎線の竜ヶ崎駅から東方へ市街地が広がっている。現在の人口は約50,000人であるが、ニュータウン建設後には75,000人の人口増が見込まれており、将来は100,000人以上の人口をかかえる大都市に変貌する計画である。

南三島遺跡は、この筑波・稲敷台地の南端部に位置し、竜ヶ崎市街地から北方へ約2.5 km離れた羽原町の台地上に所在する。この台地は、竜ヶ崎ニュータウン建設用地の龍ヶ岡地区の一部で、遺跡の位置する台地の北側は、八代町から貝原塚町にかけて樹枝状に入り込んだ支谷が形成され、台地上との比高差は約12.5 mあり、縁辺部は急傾斜で谷に落ちている。南側も、竜ヶ崎市街地が形成されている沖積地へと急傾斜を示している。調査対象面積は3区が13,602 m²、4区が16,811 m²であり、現況は3・4区とも畑で、両区とも農道で周囲が区画されている。

第2節 歴史的環境

茨城県南部、霞ヶ浦南岸地域には多数の遺跡が所在し、遺跡の宝庫とも称されている。特に縄文時代に属する遺跡が目立ち、貝塚を伴うものが多い。関東地方の縄文式土器編年表中に型式名由来の標式遺跡としてあげられる草創期の花輪台貝塚⁽¹⁾（利根町）、前期の貝ヶ窪貝塚⁽²⁾（桜川村）、興津貝塚⁽³⁾（美浦村）、晩期の前浦遺跡⁽⁴⁾（桜川村）などは代表的遺跡と言って良い。

また、明治時代以降著名となった遺跡も県南部に集中している。日本考古学の原点の1つともいうべき陸平貝塚⁽⁵⁾（美浦村）は言うに及ばず、椎塚貝塚⁽⁶⁾（江戸崎町）、福田貝塚⁽⁷⁾（東村）、立木貝塚⁽⁸⁾（利根町）、中妻貝塚⁽⁹⁾（取手市）は、いずれも縄文時代後～晩期の大貝塚であり、土偶や多数の珍しい土製品等が出土しており、注目されている。

さて、このような周囲の歴史的環境に恵まれている竜ヶ崎市域にも多数の原始古代の遺跡が形成されている。竜ヶ崎市域において、考古学的遺物が発見報告されたのは古く、明治時代にさかのぼる。現在、愛宕中学校が建っている地に古墳が所在していて、埴輪が出土した⁽¹⁰⁾のである。東京大学に所蔵されている人物埴輪は2点で、小形で可愛らしい表情をしている。その後、大正～昭和の20年代にかけては、先学によって遺跡の踏査、紹介はおこなわれた⁽¹¹⁾が、本格的な調査はなされなかった。昭和30年代～40年代は、市内遺跡の散発的な発掘調査が実施された。主なものをあげれば、竜ヶ崎第一高等学校校内遺跡⁽¹²⁾、成沢遺跡⁽¹³⁾、道德谷遺跡⁽¹⁴⁾、向地貝塚⁽¹⁵⁾などである。

その後、竜ヶ崎ニュータウンの建設が具体化され、竜ヶ崎市域も大量調査時代をむかえることになり、北部台地上の龍ヶ岡、北竜台地区で現在までに約30か所の遺跡が記録保存のために発掘調査されている。その結果多量の貴重な資料が収集され、竜ヶ崎市域のみならず、県南部ひいては茨城県の歴史解明に大きく寄与している。

南三島遺跡は、これらの遺跡の中でも最大の規模を有しており、約11万m²が調査対象範囲とされているが、開発区域外にも遺跡が広がっていることは確実で、さらに大きいことが想定される。10万m²をこえて調査された遺跡は全国的にみても例の極少ないものと考えられる。縄文時代の住居跡350軒以上、弥生～古墳、奈良・平安時代の住居跡100軒以上が調査されている。

次に、南三島遺跡の周辺遺跡を中心に、時代を追って遺跡の概要についてふれることにするが、今回の報告が、縄文時代の遺構・遺物に限定されているので、弥生・古墳時代以降の遺跡についての記載は省略する。

先土器時代に属する遺跡は、若柴町沖餅遺跡⁽¹⁶⁾が代表的であるが、この遺跡は先土器時代の終末期に位置づけられるもので、舟底形石器、搔器、削器、尖頭器等に特徴がみられる。沖餅遺跡の石器群より古いと思われるナイフ形石器等が、大羽谷津遺跡⁽¹⁷⁾や山王台遺跡⁽¹⁸⁾で断片的に検出されているが、遺跡としてはとらえられていない。

縄文時代草創期の遺物としては、撚糸文系土器片が、沖餅遺跡⁽¹⁶⁾からややまとまって出土しているほか、仲根台B遺跡⁽¹⁹⁾や南三島遺跡⁽²⁰⁾、屋代B遺跡⁽²¹⁾で断片的にみられるにすぎなく、遺構は検出されていない。

早期の遺跡としては、打越A遺跡⁽²²⁾、廻り地B遺跡⁽²³⁾と南三島遺跡⁽²⁴⁾があげられ、いずれも炉穴が検出されている。南三島遺跡1・2・5・6・7区から検出された炉穴は、野島式土器を伴出するもので、他の2遺跡の炉穴も早期後半の条痕文土器群の時期に所属するものと推定される。

前期の遺跡としては、町田遺跡⁽²⁵⁾が代表的である。前期後半の浮島式土器を主体とし、若干の興津式、諸磯b式を伴う住居跡および堅穴遺構が11軒、土坑130基が調査されている。また、打越C遺跡⁽²⁶⁾からは1軒であるが、黒浜式土器を伴う住居跡が検出されている。別所町宮ノ脇貝塚⁽²⁷⁾は、関山式土器を伴う小貝塚で、ハマガイ、マガキを主体貝種としている。

さて、中期の遺跡としては当南三島遺跡が盟主的存在といえるが、他に赤松遺跡⁽²⁸⁾、別所向地貝塚A地点⁽²⁹⁾、廻り地A遺跡⁽³⁰⁾、打越A遺跡⁽²²⁾、打越C遺跡⁽²⁶⁾、仲根台B遺跡⁽¹⁹⁾があげられる。南三島遺跡

を中心として加曾利 E III～IV 式期の住居跡が多数発見されているが、加曾利 E I～II 式期の遺構が発見されている遺跡は、赤松遺跡だけである。阿玉台式土器を伴う遺構は、南三島遺跡 6 区で土坑 1 基が調査されているにすぎず、非常に少ない。『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』の巻頭カラー図版掲載の羽原遺跡出土の大形深鉢形土器を有する竜ヶ崎市として意外なほどといえよう。

早稲田大学の西村正衛氏が調査された別所町向地貝塚 A 地点では、加曾利 E I 式期のイワシ主体の魚骨層が形成されているのが確認されている。³¹⁾

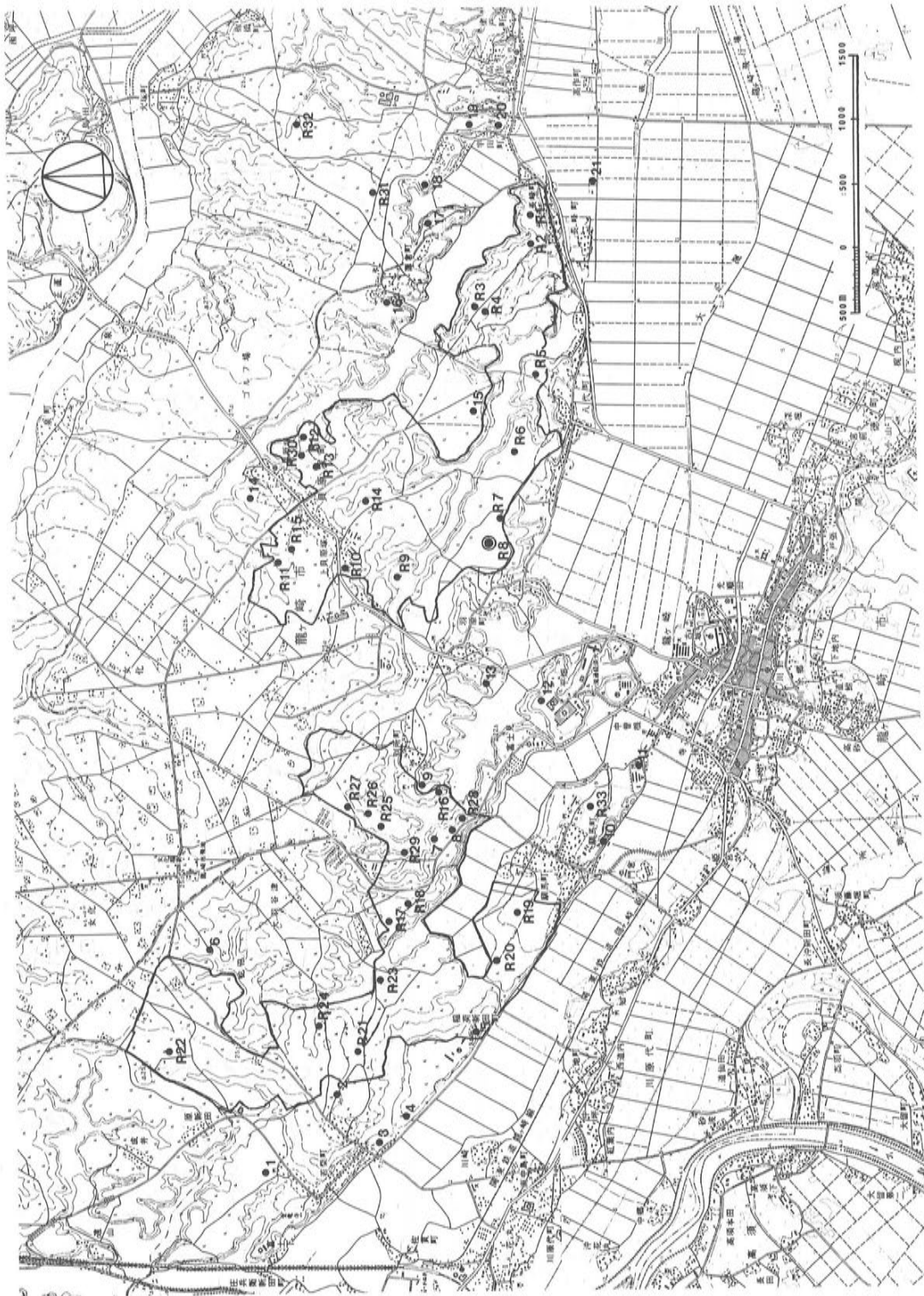
後期の遺跡としては、廻り地 A 遺跡³⁰⁾、仲根台 B 遺跡¹⁹⁾が多数の遺構・遺物を検出しており、注目される。廻り地 A 遺跡では、称名寺式、堀之内 I 式期に位置づけられる住居跡・土坑とともにきわめて多量の遺物が出土している。仲根台 B 遺跡からは、後期前半の堀之内 I 式期を主とした住居跡 11 軒などが検出され、第 3・7・16 号住居跡内にはハマグリ・シオフキ・サルボウ主体の貝ブロックが堆積していた。

後期前半の堀之内 I 式期までは、上記のように遺跡の形成も活発であるが、加曾利 B 式期以降安行式期に至ると本市域内でも遺跡の形成はやや不活発となる。北方貝塚³²⁾、安台貝塚³³⁾などが代表的な遺跡と考えられるが、遺跡数は減少している。北方貝塚からは、最近の調査により晩期前半に属する大形住居跡が検出されたと聞いているが、詳報に接していない。市内で最初の調査例であり、報告が待たれる。

注

- (1) 吉田格「茨城県花輪台貝塚概報」『日本考古学』第 1 巻第 1 号 昭和 23 年
甲野勇・吉田格「花輪台式文化」『縄文文化編年図集』第 1 輯 昭和 24 年
- (2) 西村正衛「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚－東部関東における縄文前期後半の文化研究その 1－」『早稲田大学教育学部学術研究』第 15 号 昭和 41 年
- (3) 西村正衛「茨城県稲敷郡興津貝塚（第一次調査）－東部関東における縄文前期後半の文化研究その 3－」早稲田大学教育学部学術研究』第 17 号 昭和 43 年
西村正衛「茨城県稲敷郡興津貝塚（第二次調査）－東部関東における縄文前期後半の文化研究その 4－」『早稲田大学教育学部学術研究』第 26 号 昭和 52 年
西村正衛「茨城県稲敷郡興津貝塚 F トレンチ出土土器－東部関東における縄文前期後半の文化研究その 5－」『古代探叢』所収 昭和 55 年
西村正衛「茨城県稲敷郡興津貝塚（第二次調査）－東部関東における縄文前期後半の文化研究その 6－」『早稲田大学教育学部学術研究』第 29 号 昭和 55 年
- (4) 川崎純徳「前浦遺跡」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 昭和 54 年
- (5) 飯島魁・佐々木忠次郎「常陸平介墟報告」『学芸志林』第 6 号 明治 13 年
Iijima and Sasaki, "Okadaira shell-mounds at Hitachi" Memoris of the Department, University of Tokyo Vol.1 明治 16 年
- (6) 八木装三郎・下村三四吉「常陸国椎塚介墟発掘報告」『東京人類学会雑誌』第 8 巻 87 号 明治 26 年
- (7) 佐藤伝蔵「常陸国福田村貝塚探究報告」『東京人類学会雑誌』第 9 巻第 100 号 明治 27 年
- (8) 杉原荘介・戸沢充則「茨城県立木貝塚」『考古学集刊』第 3 巻第 2 号 昭和 40 年
- (9) 鈴木正博・鈴木加津子『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－ 上下』取手市教育委員会 昭和 54・56 年

- (10) 大野延太郎「常陸国龍ヶ崎発見の埴輪土偶に就て」 『東京人類学会雑誌』第20巻第229号 明治38年
- (11)a 大野一郎「下総常陸国石器時代遺跡地名表」 『考古学雑誌』第16巻第3号 大正15年
b 大野一郎「北相馬、印旛、稲敷三郡に於ける貝塚の淡鹹及土器の厚薄分布表」 『考古学雑誌』第17巻第11号 昭和2年
c 吉田格・鈴木敏夫・鈴木淳正「茨城県北相馬郡遺跡調査紀行」 『貝塚』第21号 昭和15年
d 江坂輝弥「茨城県稲敷郡八原村別所貝塚見学記」 『貝塚』第24号 昭和25年
- (12) 下津谷達男「茨城県竜ヶ崎市県立第一高校内遺跡」 『上代文化』第37輯 昭和42年
- (13) 岡田猛『茨城県竜ヶ崎市馴馬町成沢遺跡調査報告』 昭和43年
- (14) 西宮一男「道徳谷遺跡」 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』昭和49年
- (15) 西村正衛「向地貝塚」 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』昭和54年
- (16) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3 沖餅遺跡』 茨城県教育財団 昭和55年3月
- (17) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5 大羽谷津遺跡』 茨城県教育財団 昭和56年3月
- (18) 根本康弘「山王台遺跡について」 『年報』5 茨城県教育財団 昭和61年3月
- (19) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9 仲根台B遺跡』 茨城県教育財団 昭和59年3月
- (20) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11 南三島遺跡6・7区』 茨城県教育財団 昭和60年10月
- (21) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13 屋代B遺跡I』 茨城県教育財団 昭和61年3月
- (22) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5 打越A遺跡』 茨城県教育財団 昭和56年3月
- (23) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5 廻り地B遺跡』 茨城県教育財団 昭和56年3月
- (24) 注20の他に下記の文献がある。
『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10 南三島遺跡1・2区』 茨城県教育財団 昭和59年8月
『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12 南三島遺跡5区』 茨城県教育財団 昭和61年3月
- (25) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9 町田遺跡』 茨城県教育財団 昭和59年3月
- (26) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5 打越C遺跡』 茨城県教育財団 昭和56年3月
- (27) 筆者の踏査による。
- (28) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4 赤松遺跡』 茨城県教育財団 昭和55年3月
- (29) 注15に同じ。
- (30) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7 廻り地A遺跡』 茨城県教育財団 昭和57年3月
- (31) 昭和43年11月の発掘調査の際の金子浩昌先生の教示および筆者の実見による。
- (32) 注11cの文献および筆者の踏査による。
- (33) 筆者の踏査による。



第3図 南三島遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

表1 南三島遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	種類	遺跡		の		時	代	備	考
				先土器	縄文	弥生	古墳				
R-1	長峰城跡	長峰町竜ヶ井他	城館跡	●	●	●	●	●	●	昭和61, 62年度調査中	
R-2	長峰古墳群	長峰町宿	古墳群	●	●	●	●	●	●	昭和61, 62年度調査中	
R-3	十三塚群	貝原塚町十三塚	塚群	●	●	●	●	●	●	昭和59年度調査, 昭和61年度報告書刊行	
R-4	尾坪台遺跡	八代町尾坪台	集落跡	●	●	●	●	●	●	昭和59年度調査, 昭和61年度報告書刊行	
R-5	外八代遺跡	八代町新屋敷台	集落跡・城館跡	●	●	●	●	●	●	昭和52, 53年度調査, 昭和54年度報告書刊行	
R-6-A	屋代A遺跡 ¹⁾	八代町城ノ内	集落跡・城館跡	●	●	●	●	●	●	昭和54, 55年度調査, 昭和56年度報告書刊行	
R-6-B	屋代B遺跡 ²⁾	八代町城ノ内	集落跡・城館跡	●	●	●	●	●	●	昭和58~61年度調査, 昭和60, 61年度報告書刊行	
R-7	稲荷塚古墳群	八代町原	古墳群	●	●	●	●	●	●		
R-8	南三島遺跡	羽原町	集落跡・墓跡・貝塚	●	●	●	●	●	●	昭和56~61年度調査, 昭和59, 60, 62年度報告書刊行	
R-9	ダング塚	貝原塚町鶴巻	塚						○		
R-10	町田塚群 ³⁾	貝原塚町後谷	塚群						●	昭和56年度一部(般若塚)調査	
R-11	かみ塚	貝原塚町後谷	塚						○	現状保存	
R-12	高井城下城跡	貝原塚町白蔵寺他	城館跡						●	R-30白蔵寺遺跡と一連のもので調査済	
R-13	前清水遺跡	貝原塚町前清水	集落跡・塚・墓跡	●	●	●	●	●	●	昭和54年度調査, 昭和55年度報告書刊行	
R-14	塚下遺跡 ⁴⁾	貝原塚町塚下	屋敷跡						●	昭和54年度調査	
R-15	町田遺跡	貝原塚町町田	集落跡	●	●	●	●	●	●	昭和56, 57年度調査, 昭和58年度報告書刊行	
R-16	行部内遺跡	若柴町行部内	集落跡・貝塚	●	●	●	●	●	●	現状保存 一部早稲田大学調査	
R-17	大羽谷津遺跡	若柴町大羽谷津	集落跡	●	●	●	●	●	●	昭和54年度調査, 昭和55年度報告書刊行	
R-18	廻り地A遺跡	馴馬町廻り地	集落跡・墓跡・貝塚	●	●	●	●	●	●	昭和54年度調査, 昭和56年度報告書刊行	
R-19	平台遺跡	馴馬町平台	集落跡						●	昭和56年度調査, 昭和57年度報告書刊行	
R-20	成沢遺跡	馴馬町成沢	集落跡・墓跡						●	昭和55年度調査, 昭和56年度報告書刊行	
R-21	松葉遺跡	若柴町松葉	集落跡・塚						●	昭和52年度調査, 昭和53年度報告書刊行	
R-22	康申塚遺跡	若柴町康申塚	集落跡	○	○	○	○	○	○	確認調査の結果消滅	
R-23	沖餅遺跡	若柴町沖餅	集落跡	●	●	●	●	●	●	昭和53年度調査, 昭和54年度報告書刊行	
R-24	赤松遺跡	若柴町赤松	集落跡・生産跡						●	昭和53, 54年度調査, 昭和54年度報告書刊行	
R-25	打越A遺跡	別所町打越	集落跡	●	●	●	●	●	●	昭和54年度調査, 昭和55年度報告書刊行	
R-26	打越C遺跡	別所町打越	集落跡・塚	●	●	●	●	●	●	昭和54年度調査, 昭和55年度報告書刊行	
R-27	ウツタ遺跡 ⁵⁾	別所町ウツタ	包蔵地	●	●	●	●	●	●	昭和54年度調査	
R-28	仲根台塚群(1・2号)	馴馬町仲根台	集落跡・塚	●	●	●	●	●	●	昭和54年度調査, 昭和55年度報告書刊行	
R-28A	仲根台塚群(3・4号) ⁶⁾	馴馬町仲根台	塚						●	昭和56年度調査	
R-28B	仲根台B遺跡	馴馬町仲根台	集落跡・貝塚						●	昭和56年度調査	
R-29	廻り地B遺跡	馴馬町廻り地	集落跡	●	●	●	●	●	●	昭和58年度調査, 昭和55年度報告書刊行	
R-30	白蔵寺遺跡 ⁷⁾	貝原塚町白蔵寺	包蔵地	●	●	●	●	●	●	昭和54年度調査, 昭和55年度報告書刊行	
R-31	薄倉古墳 ⁸⁾	薄倉町新地	塚						●	昭和56年度調査	
R-32	稲荷峰古墳 ⁹⁾	大塚町稲荷峰	塚						●	昭和56年度調査	
R-33	山王台遺跡	馴馬町山王	集落跡						●	昭和58年度調査, 昭和58年度報告書刊行	

●印は発掘調査を実施した遺跡

注

- (1)(2) R 6 - A・Bの屋代 A 遺跡・屋代 B 遺跡は、本来同一遺跡で当初は屋代城跡として登録されていたが、昭和 54・55 年度に遺跡の東側が調査され、弥生時代から平安時代にかけての集落の存在が明らかとなったためにこの地域を城跡から切り離して屋代 A 遺跡と呼称することになった。そのため従来の屋代城跡の方を屋代 B 遺跡と改称した。
- (3) R 10 町田塚群は、般若塚 1 基のみであるが、塚群と呼称している。調査結果については、当財団の『年報』1 に所収されている。
- (4) 『昭和 54 年度埋蔵文化財発掘調査報告』 茨城県教育財団 昭和 55 年 3 月刊の 69 ～ 72 頁に当遺跡の概要が報告されている。
- (5) 注 4 の報告の 91 ～ 93 頁に当遺跡の概要が所収されており、詳細については報告書に委ねると記されているが、未刊行であり報告書の刊行が待たれる。
- (6) R 28 仲根台塚群 (1・2 号), R 28 - A 仲根台塚群 (3・4 号), R 28 - B 仲根台 B 遺跡は、本来同一遺跡であるが、造成工事の進展や調査の都合により分けられたものである。R 28 - A とした仲根台塚群 (3・4 号) の調査結果については、『年報』1 に所収されている。
- (7) 『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅲ (昭和 51 ～ 55 年度)』茨城県教育委員会 昭和 57 年 3 月刊の 102 頁に当遺跡の概要が報告されている。
- (8)(9) R 31・32 の薄倉古墳、稲荷峰古墳については、調査したところ古墳ではなく、塚と判明した。しかし、従来の名称を使用している。両遺跡の調査結果については、『年報』1 に所収されている。

第3章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

南三島遺跡3・4区は、広大な南三島遺跡の南側に位置し、3・4区あわせて約3万m²の面積を有している。3・4区の北側には既報告の2区・5区が隣接している。

当遺跡は、縄文時代早期から近世におよぶ複合遺跡であり、そのうちでも縄文時代中期後半～後期前半、弥生時代終末～古墳時代前期、同後期から奈良・平安時代にかけて盛期をむかえている。

遺構の種類としては、竪穴住居跡、土坑、炉穴、埋甕遺構、地下式坑、溝、井戸などが検出されている。

縄文時代の住居跡は、3区から34軒、4区から7軒の計41軒が検出されており、加曽利EⅢ～Ⅳ式期の住居跡が33軒と大半を占め、後期の称名寺式、堀之内Ⅰ式期の住居跡は8軒と少数である。この中の数軒の住居跡からは、ハマグリ、シオフキ、サルボウなどの貝類が出土しており、特に3区の第34号住居跡（堀之内Ⅰ式期）からは遺物収納箱（容量60×40×20cm）にして約120余箱という多量の貝類とシカ、イノシシなどの獣骨、キジ類などの鳥骨、スズキ、タイなどの魚骨類が出土している。3区の第86号住居跡、4区の第5号住居跡からも貝類の出土が多い。

縄文時代の土坑は、住居跡とほぼ同時期のものが多い。堀之内Ⅰ式期の第173号土坑、第400号土坑などからは底面近くから魚骨層が検出されており、大いに注目される。アジ、ウナギ、スズキなどが同定されている。

上記のような種類の遺構に伴って大量の遺物が検出されている。量的に多数を占めるのは縄文土器であり、早期から晩期まで揃っている。早期の土器は、所謂条痕文系土器群が主体となり、野島式土器が目につく点は、隣接する1・2・5・6区などに共通し、いずれも炉穴に伴っている。前期の土器片はごく少量にすぎず、浮島式土器が散発的に認められる。本期に属すると思われる遺構はない。中期の土器は、後半の加曽利EⅢ～Ⅳ式期のものが大部分で、阿玉台式土器がごく稀に認められるだけである。加曽利EⅢ～Ⅳ式期の資料は充実しており、既報告の当遺跡1・2・5・6・7区の資料と共に活用されるべきものである。後期の土器は、称名寺式、堀之内式、加曽利B式土器などが主に出土しているが、遺構（住居跡、土坑）を伴うものは前二者で、加曽利B式期の明瞭な遺構は把握できなかった。称名寺式土器は、3区の北側に多く出土し、所謂微隆線文を主とする土器（続加曽利EⅣ式土器と仮称されているもの）を伴出するものとしめないものに分れ、注目される。前者の代表例が3区の第47号住居跡である。堀之内Ⅰ式期の土器は、住居跡や土坑に伴って多数出土しているが、堀之内Ⅱ式土器はきわめて少ない。また、堀之内Ⅰ式期に属する第395号土坑から出土した人体貼付文を有する土器は、珍品中の珍品とでも言うべきもので、類例に乏しい。ある意味では、当遺跡を代表する資料と言っても過言ではない。堀之内Ⅰ式土器には、しばしば土製蓋が伴って出土するが、当遺跡でも2・3の良好な資料があり、これについては後章でふれることにする。

加曽利B式期の土器は、3区南側の第5号溝および第107号住居跡（古墳時代前期）の覆土中に大量に含まれていたが、器形復元できるものもない状態であった。安行Ⅰ・Ⅱ式の土器片もごく少量である。また、晩期の土器片も稀である。

弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代の住居跡などの各種遺構に伴出する遺物も多数あるが、当該期の遺構・遺物についての詳細は、後日刊行予定の『南三島遺跡3・4区(Ⅱ)』を参照されたい。

2 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法については、原則として既刊の当遺跡に関する報告書⁽¹⁾に倣ったが、以下の点については別の方法を採用した。

土層の分類の記号化はおこなわず、住居跡および主要な土坑、炉穴、埋甕遺構、性格不明遺構についての覆土の堆積状況などは本文中に記載した。その他の土坑については、堆積土中に基本的にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含んでいるので、土層断面図中に土色をあらわす数字を記入するにとどめた。

その数字は以下のようなものである。

0	黒色	7.5 YR	$\frac{2}{1}$
1	黒褐色	7.5 YR	$\frac{2}{2} \cdot \frac{2}{2}$
2	極暗褐色	7.5 YR	$\frac{2}{3}$
3	暗褐色	7.5 YR	$\frac{3}{3} \cdot \frac{3}{4}$ 10YR $\frac{3}{3} \cdot \frac{3}{4}$
4	褐色	7.5 YR	$\frac{4}{3} \cdot \frac{4}{4} \cdot \frac{4}{6}$ 10YR $\frac{4}{4} \cdot \frac{4}{6}$
5	にぶい褐色	7.5 YR	$\frac{5}{3} \cdot \frac{5}{4} \cdot \frac{5}{6}$
6	明褐色	7.5 YR	$\frac{5}{6} \cdot \frac{5}{8}$
7	赤褐色	5 YR	$\frac{4}{6} \cdot \frac{4}{8}$ 2.5YR $\frac{4}{6} \cdot \frac{4}{8}$
8	暗赤褐色	5 YR	$\frac{3}{3} \cdot \frac{3}{4}$ 2.5YR $\frac{3}{3} \cdot \frac{3}{4}$
9	極暗赤褐色	5 YR	$\frac{2}{3}$ 2.5YR $\frac{2}{3}$
10	にぶい赤褐色	5 YR	$\frac{4}{3} \cdot \frac{4}{4} \cdot \frac{5}{3} \cdot \frac{5}{4}$ 2.5YR $\frac{4}{3} \cdot \frac{4}{4} \cdot \frac{5}{3} \cdot \frac{5}{4}$
11	明赤褐色	5 YR	$\frac{5}{6} \cdot \frac{5}{8}$ 2.5YR $\frac{5}{6} \cdot \frac{5}{8}$
12	黄褐色	10 YR	$\frac{5}{6} \cdot \frac{5}{8}$ 2.5Y $\frac{5}{3} \cdot \frac{5}{4} \cdot \frac{5}{6}$
13	灰褐色	7.5 YR	$\frac{4}{2} \cdot \frac{5}{2} \cdot \frac{6}{2}$ 5 YR $\frac{1}{2} \cdot \frac{5}{2} \cdot \frac{6}{2}$
14	灰黄褐色	10 YR	$\frac{4}{2} \cdot \frac{5}{2} \cdot \frac{6}{2}$
15	にぶい黄褐色	10 YR	$\frac{4}{3} \cdot \frac{5}{4}$
16	灰オリーブ色	5 Y	$\frac{4}{2} \cdot \frac{5}{2} \cdot \frac{6}{2}$
17	橙色	5 YR	$\frac{6}{6} \cdot \frac{6}{8} \cdot 7.5YR \frac{6}{6} \cdot \frac{6}{8} \cdot \frac{7}{6}$
18	褐灰色	5 YR	$\frac{4}{1} \cdot \frac{5}{1} \cdot \frac{6}{1}$ 7.5YR $\frac{4}{1} \cdot \frac{5}{1} \cdot \frac{6}{1}$
19	赤色	10 R	$\frac{4}{6} \cdot \frac{4}{8} \cdot \frac{5}{6} \cdot \frac{5}{8}$

また、土坑の一覧表中に欠番があるが、それは地下式坑・井戸に分類されたものおよび古墳時代以降に構築されたと考えられる遺構で、今回の報告では割愛したためである。

把手・土製品・石器および石製品・骨角貝製品については、一覧表を作成したが、この表は『南三島遺跡6・7区』の方法を準用した。

土器の解説中の第Ⅰ類a種などの表現は、まとめの項の加曾利EⅢ・IV式土器の分類に従っている。

注

(1) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 10 南三島遺跡 1・2区』 茨城県教育財団 昭和59年8月

『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 11 南三島遺跡 6・7区』 茨城県教育財団 昭和60年10月

『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 12 南三島遺跡 5区』 茨城県教育財団 昭和61年3月

第2節 竪穴住居跡と出土土器

3 区

第3号住居跡（第4図）

本跡は、調査区の北側の K2j₀ 区を中心とする位置に検出され、第2号住居跡により本跡の南西壁の一部が切断されている。また、北西壁の一部は第97号土坑により破壊され、本跡の炉は、第123号土坑に切り込まれている。以上の重複関係から本跡が最も古いと判断される。

平面形は、長径7.52m、短径5.90mの楕円形を呈し、長径方向は、N-53.5°-Wを指している。

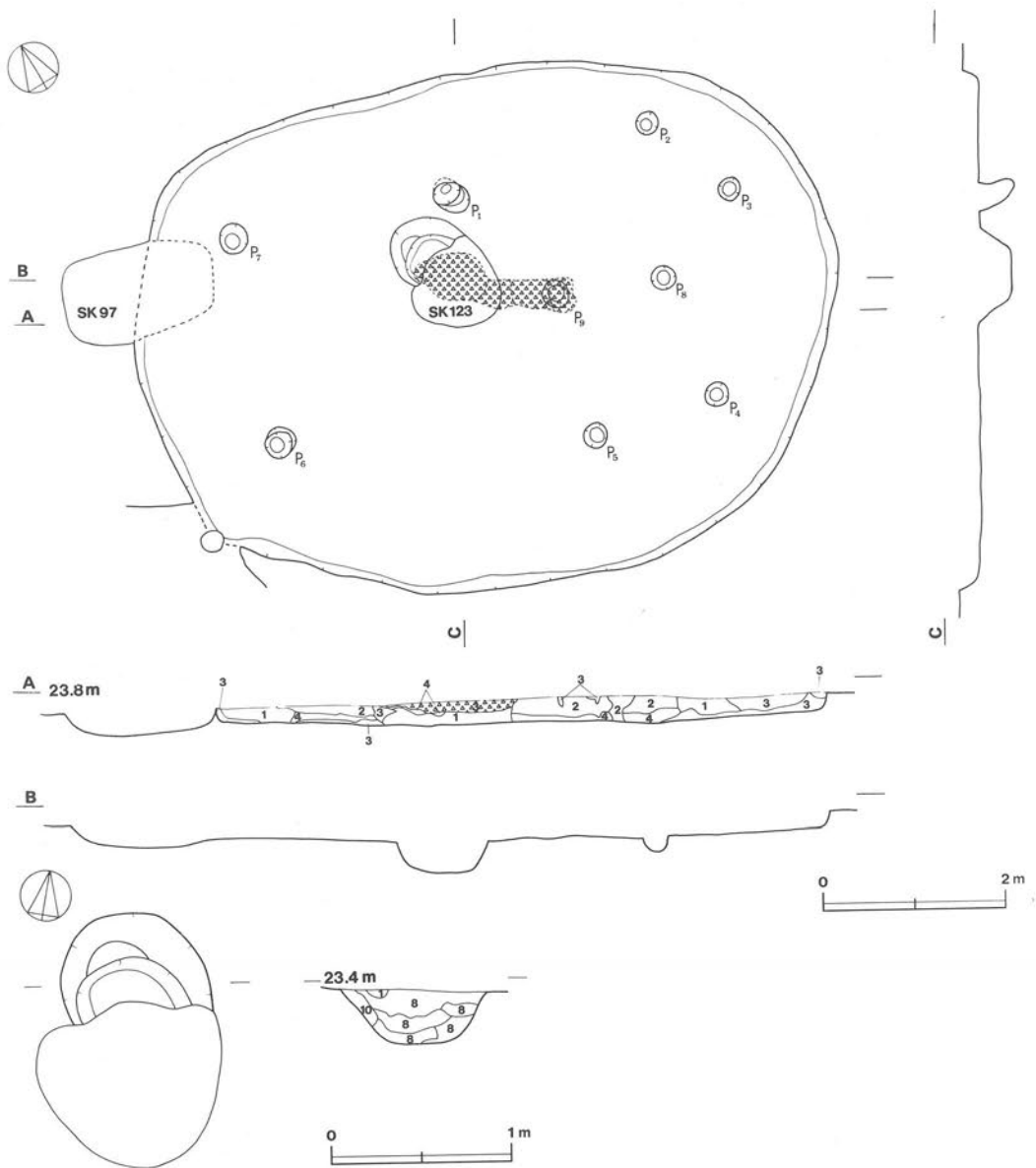
壁は、ローム土ではなく褐色土であり硬くはないが、覆土の暗褐色土、極暗褐色土、黒褐色土とは明瞭に識別できた。壁面は、全体的にやや外傾して立ちあがり、南東、北東側の壁の一部は傾斜が急になっている。壁高は、南西側でやや高く20～25cm、北東側が低く10～15cm程度である。壁溝は認められない。

床面は、ロームで部分的に硬いところもあるが、他はやや軟弱で全体的には平坦であるが、やや中央部が凹み、南東側に傾斜している。

炉は、本跡の中央部やや北西寄りに位置しているが、前記のように第123号土坑によって約半分を失っている。残存部から推定すると、楕円形を呈するものと考えられる。短径82cm、長径の残存部では48cmを測り、挿鉢状に62cm掘り込まれた地床炉でかなり深い。炉壁は緩やかに立ち上り、炉床は平坦である。覆土には、全体的にみて暗赤褐色土が充満しており、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含む締まった土層が上位と壁際に堆積し、下位にはローム土や焼土粒子を多量に含む締まりの弱い土層が堆積している。炉壁や炉床は焼けており、炉を壊して形成された第123号土坑の覆土の下位には焼き締まったロームブロックや焼土・炭化粒子が多量に含まれている。

ピットは、P₁～P₉の9か所検出されたが、P₅～P₇の3本が深さ30～60cmで良好と考えられる他は浅く不良なものが多い。しかし、配置的にみれば上記の3か所にP₂、P₄の2か所を加えた5か所か、あるいはP₅を除いた4か所が支柱穴と判断される。その他のピットは性格不明である。出入口は、南東側と推定されるが、確証はない。

覆土中には、貝ブロックが形成されている。貝ブロックは、本跡の中央部からやや北西側にかけて細長く広がっており、床面から5～10cm浮いている部分がほとんどであるが、bブロックとした貝ブロックは、第123号土坑の覆土上位に堆積したものである。貝ブロックは、北西側から南東側にむけてa, b, c, d, eの5つのブロックに分割したが、bブロック以外は小規模のため一括して取り上げた。全体として貝

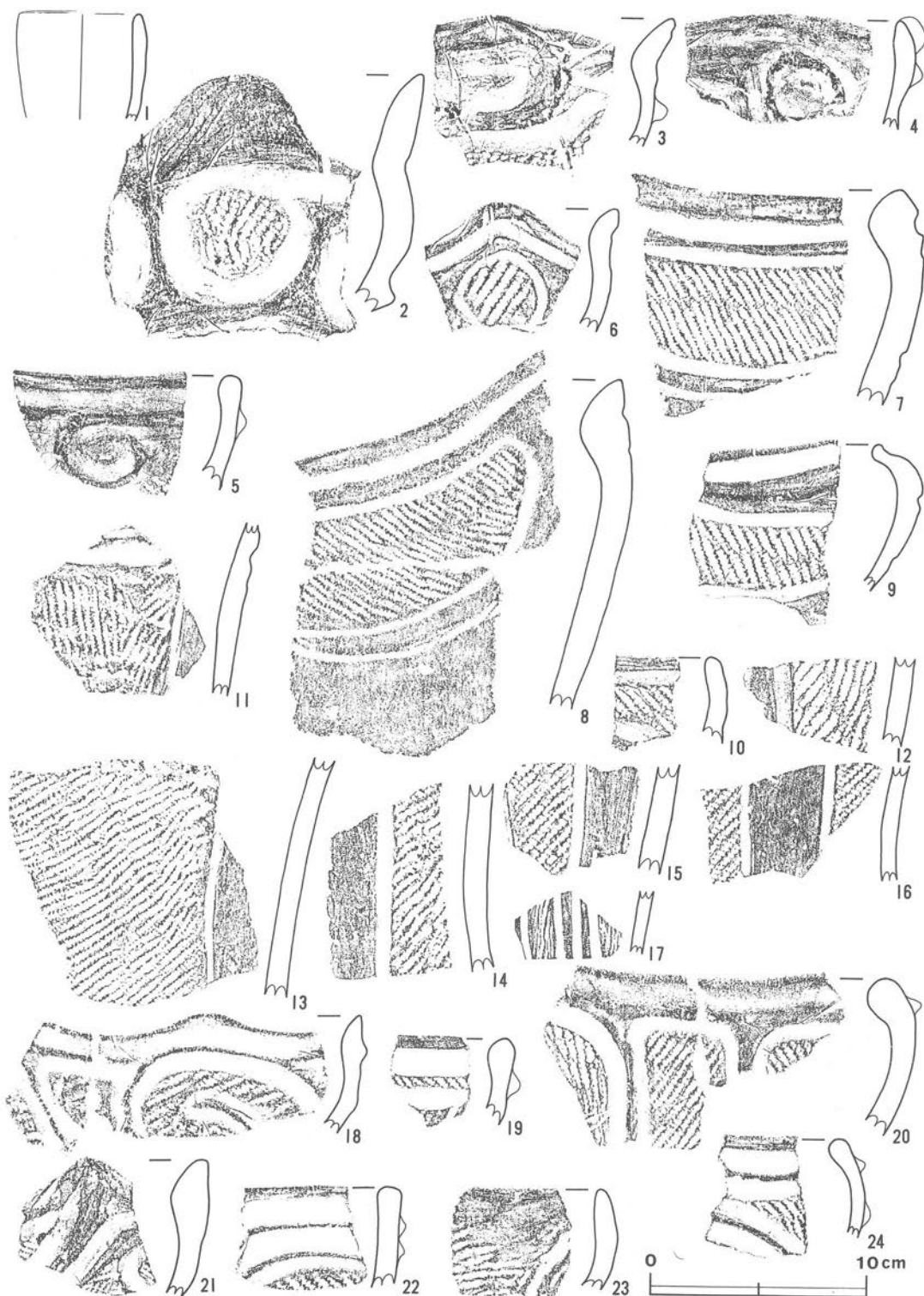


第4図 第3号住居跡実測図

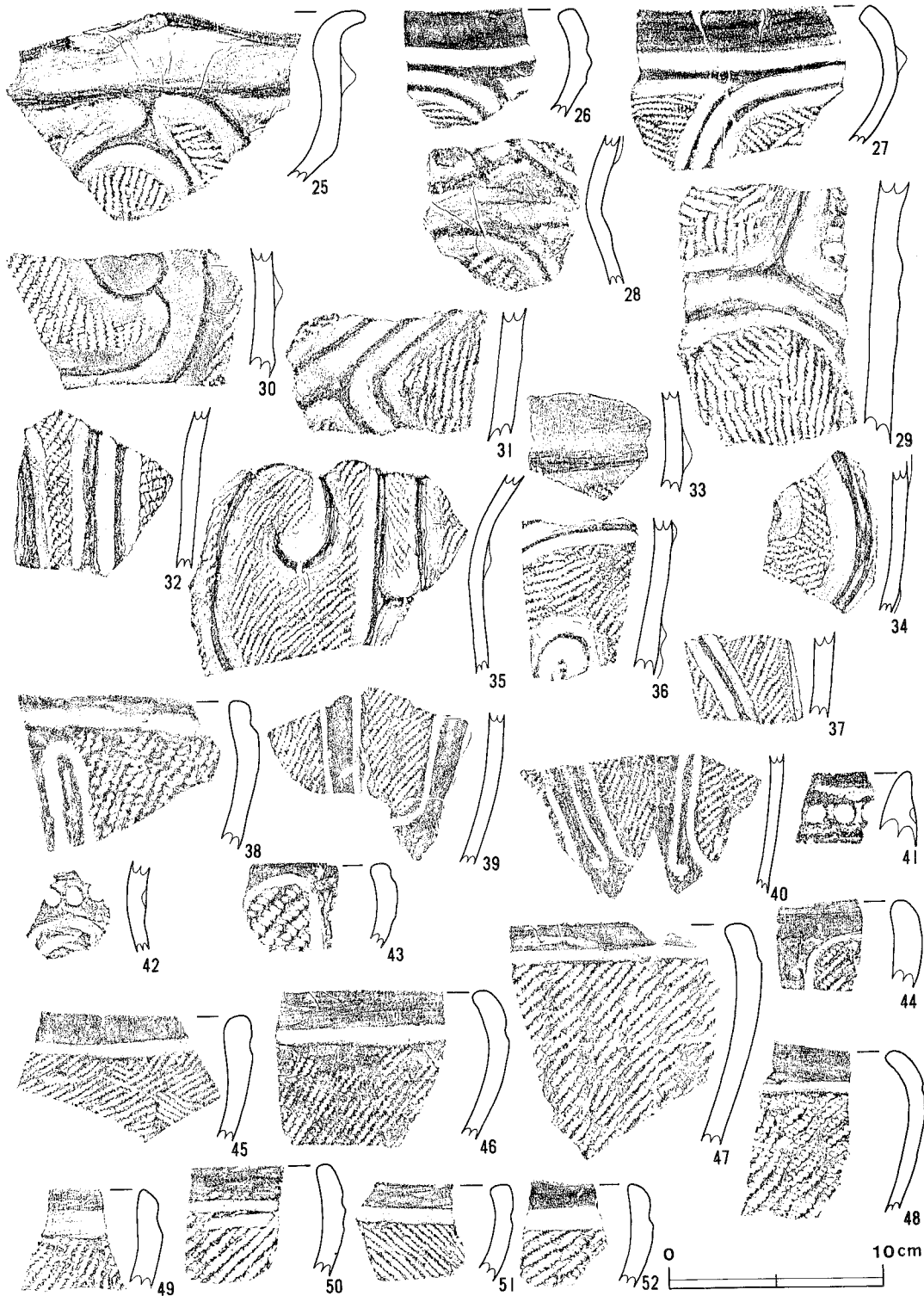
ブロックは、ハマグリ、サルボウを主体貝種とし、シオフキ、アカニシを含むものである。e貝ブロックの直下、床面から2～3cm 浮いた状態で鳥骨片を検出している。

覆土は、全体的にみて暗褐色土、黒褐色土が上位に堆積し、覆土下位には褐色土、暗褐色土が堆積している。下位は締まっており粘性も強い。覆土の全層中にローム粒子が含まれ、炭化粒子、焼土粒子の含まれる量差や有無によって分層される。

遺物は、床面に密着した状態で出土した土器はごく少量で、他は覆土の上・中位で床面より10～20cm 浮いているものが多い。出土状況は、いくつかのブロックにかたまり散在している。P₄、P₅、P₈、P₉



第5图 第3号住居跡出土土器实测图·拓影图(1)



第6图 第3号住居跡出土土器拓影图(2)

に囲まれた部分とP₆の上面およびP₇との間に集中している。土器片は2,271点検出され、その大半は加曾利EⅢ式期のもので、土師器片、内耳土器片が約20点混入している。他に土器片錘7点、土製円板、有孔円板6点が出土している。

本跡の時期は、炉およびピット内出土土器片、覆土中出土土器から判断すれば、加曾利EⅢ式期と考えられる。

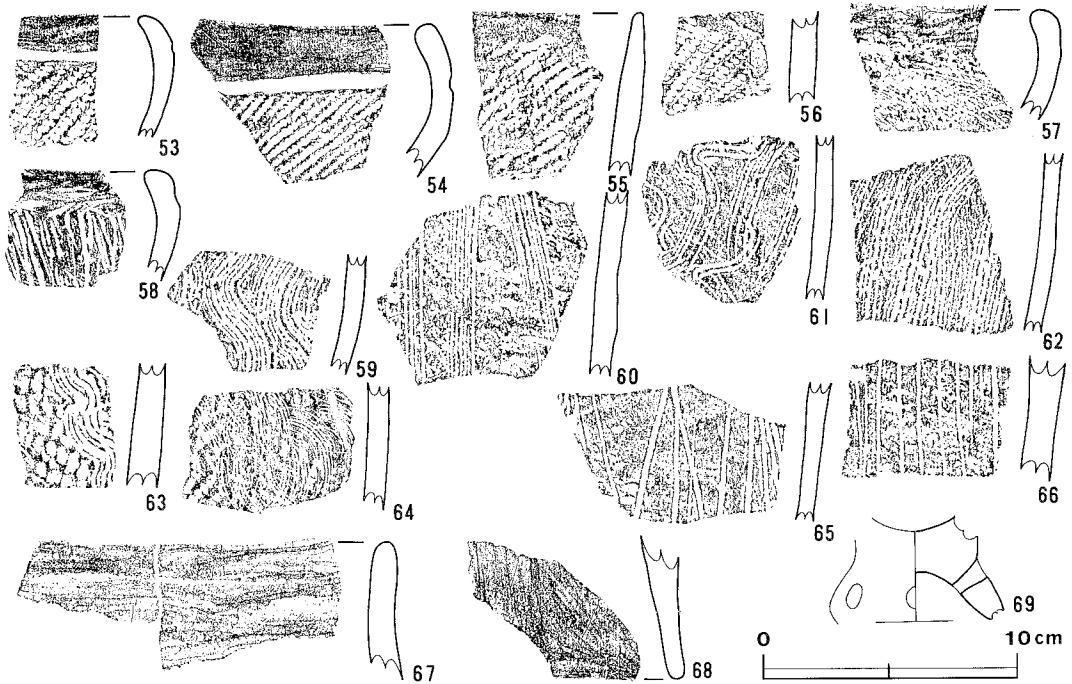
第3号住居跡出土土器（第5～7図1～69）

本跡からの出土土器は破片が多く、器形を復元できたものがごく少ない。第5図1は、北西側の覆土上位から逆位で出土した無文のミニチュア土器で、内外面とも軽いナデが施されている。胎土は細かな長石粒、砂粒を含む。焼成は普通で、色調は明赤褐色を呈する。推定口径5.6cm、現存高5.0cmである。2～16は、第Ⅰ類土器で、2～5はa種、6～11はb種に細分できるが、12～16は胴部片のため細別はできない。2～5はくずれた渦巻状、または楕円形の区画を描き、区画内に縄文を充填している。6～10は、円形や長楕円形状の区画内に縄文を施している。7・8は厚手で波状口縁を呈する。11は、口縁から胴部にかけての破片である。12～16には比較的幅の広い直線的磨消帯が垂下している。17は、幅の狭い磨消帯が撚糸文の地文上に施されている。胴部の小片であるが、ここに含めた。18～37は、第Ⅱ類に属し、18～27は口縁部片、28～37は胴部片である。28は、胴部のくびれ部片で、無文帯が認められ、b種と考えられる。渦巻状の区画（18・21・30・35）や縦長の区画文（20）が目立ち、区画の内外は縄文が充填されている。隆線の断面形は、三角形を呈するものが多いが、29・31などのように低平なものもある。38～44は、第Ⅲ類と考えられる。38はa種と思われ、口縁直下に1条の沈線を巡らし、以下に幅の狭い逆U字状の磨消帯がみられる。39・40は胴部片でU字状のモチーフ内に縄文が施されている。40の磨消帯間に垂下する沈線の末端は軽く渦巻いている。41・42は口縁直下に円形の刺突列が巡るもので、42には逆U字状のモチーフが認められる。43・44は口縁直下から逆U字状のモチーフが描かれるもので、c種に該当する。45～54までは、第Ⅴ類a種に属し、いずれも内湾する深鉢形土器の口縁部片である。区画の沈線は太く浅目のもの（45・46・49・52）、細く明瞭なもの（48・53・54）などの差異がある。50は引き直しのためか2条の沈線が認められる。55は、口縁直下にわずかに無文帯を残し、以下に縄文を施す第Ⅴ類c種である。56は、縄文のみの胴部の小片である。57・58は、第Ⅴ類h種に相当する内湾する口縁部片である。58の条線文は粗く、多截竹管状施文具によるものと思われる。59～62は、条線文のみの胴部片で、縦位波状の例が多い。63・64は、第Ⅴ類i種に分類した縄文と条線文が併用された胴部片である。65・66は、雑な縦位の沈線が施されている胴部片で、65は一部で交差している。67は、ほぼ直立する無文の口縁部片である。68は、台付土器の台部片と考えられ、縦ナデが顕著にみられるだけで無文である。

69は、西側の覆土中位から逆位で出土した無文の台付土器の台部片で、4孔を有する。体部の底面には軽いナデが加えられ、炭化物が少量付着している。台部外面は縦ナデ、内面は横ナデが施されている。胎土は細砂を含み、焼成は普通で、色調はにぶい褐色を呈する。現存部の推定台部径6.5cm、現存高3.5cmである。

第8号住居跡（第8図）

本跡は、調査区の北側のK3i区を中心とする位置にあり、長径3.76m、短径3.65mの不整円形を呈



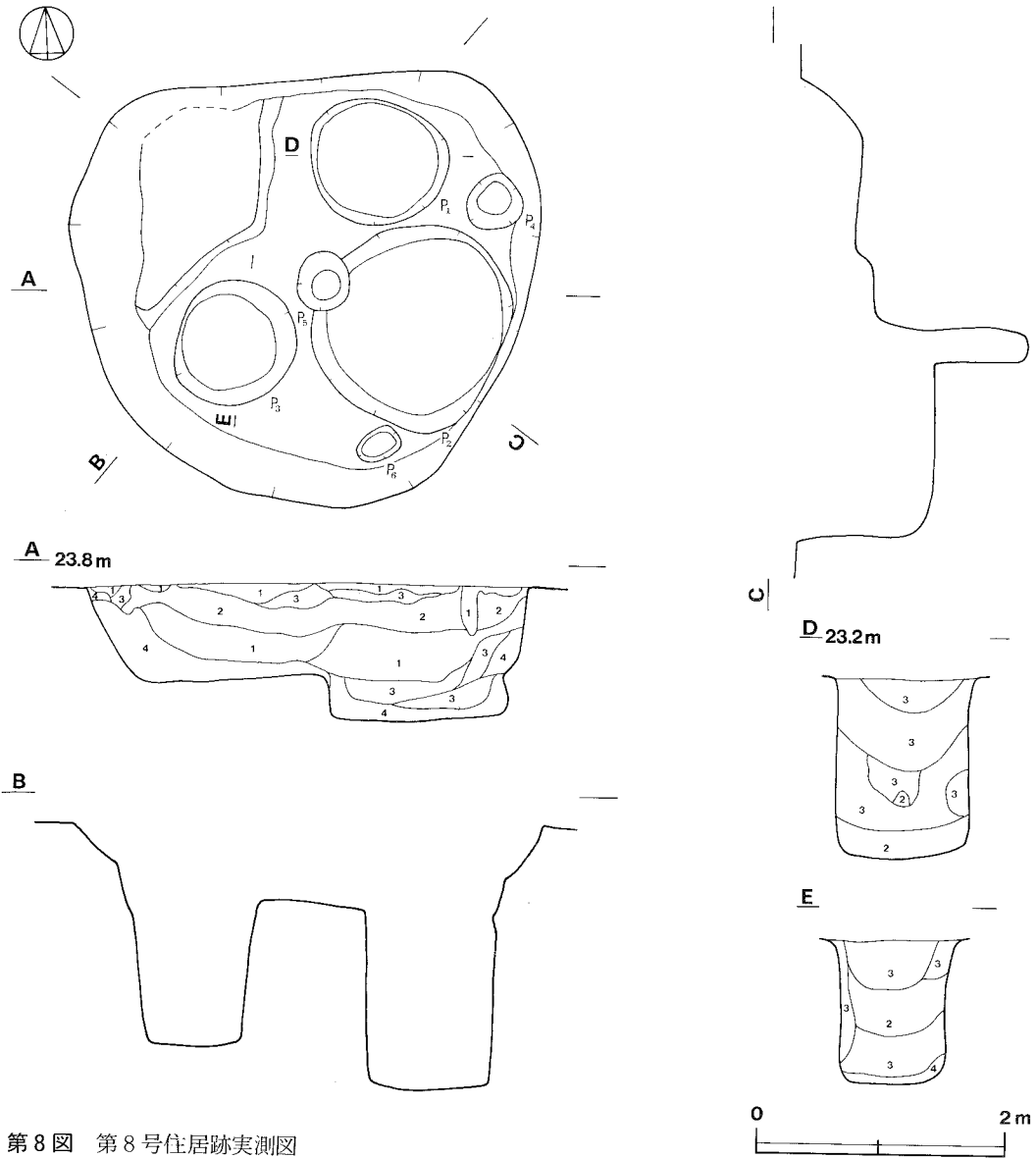
第7図 第3号住居跡出土土器実測図・拓影図(3)

する。本跡は、掘り込みが72 cmと深く、大小のピットを6か所有し、炉をもたないなど、通常の住居跡とは考えられないが、調査の都合上住居跡として扱ったので、ここでは一応住居跡として報告し、本跡の性格については後章で検討する。

長径方向は、N-64°-Wを指している。

本跡は、北側で第10号住居跡と接し、第176号、179号土坑の2基は両者にまたがっている。第176号土坑との重複関係は不明であるが、第179号土坑は、切り合いや出土遺物からみて本跡より新しいと判断される。本跡の南西側4.6 mには第81号住居跡が存在している。

本跡の底面には、P₁、P₂、P₃とした円筒形の土坑3基が穿たれており、他にP₄、P₅、P₆とした柱穴状のピットが3か所検出されている。P₁は、本跡の北側にあり径104 cmの円形を呈し、深さ149 cmを測る。覆土は、暗褐色土を主体としており、底面近くの25 cmほどは黒褐色土が堆積している。暗褐色土には、ローム粒子を多量に含んでおり、ローム小ブロックや炭化粒子が混入していて、締まりは弱い。黒褐色土は、ハードロームブロックを多量に含み、やや粘性がある。P₂は、P₁と北側で接し、東側は壁に接している。長径172 cm、短径160 cmのほぼ円形を呈し、深さは38 cmと比較的浅く、タライ状を呈している。覆土は、上位に暗褐色土、下位と壁際には褐色土が堆積しており、褐色土は締まり、粘性がある。P₃は、本跡の南西側にあり長径102 cm、短径100 cmの円形を呈し、深さ120 cmを測る。覆土は、暗褐色土を主体とし、上位と底部直上には暗褐色土が堆積し、中位には黒褐色土、底面には厚さ8 cm程度の締まりや粘性のある褐色土が堆積している。P₄とP₆は、それぞれ東壁と南壁下に検出されたピットで、深さ20~25 cm、径30~45 cm程度の大きさである。P₄の覆土は、褐色土1層だけでよく締まっている。P₅は、本跡の中央部にP₂の北西壁の一部を切って穿たれた深い柱穴状のピットである。深さは



第8図 第8号住居跡実測図

127 cmで、覆土は、褐色土の1層であるが、上位から下位にかけて締まりが弱くなり、上位はよく締まり、ローム粒子・ローム小ブロック（径3 mm程度）や炭化粒子・焼土粒子を含む。下位は褐色土にローム粒子が混入しているだけである。

本跡の壁は、北壁から東壁にかけてはほぼ直立して立ちあがり、南壁から西壁はやや緩やかに立ちあがっている。特に、北西壁は緩やかで、この一角はソフトロームが掘り残されて段状に高くなっている。入口部の階段としての役割も考えられるが、踏みしめられた形跡はない。壁は掘り込みの上部は褐色土であるが、下部はロームでしっかりしている。底面も硬く良好である。P₁、P₂、P₃の壁、底ともロームで硬く良好である。P₁とP₃の壁はやや内傾気味に立ちあがり、底面は凹凸なく硬く平坦である。P₂の底面近

くには、径2～5 mmの木炭片が認められる。

覆土は、自然堆積と考えられ、所謂レンズ状に堆積している。上位には黒褐色土、暗褐色土、下位と壁近くには褐色土が堆積している。いずれもローム粒子・炭化粒子を含み、焼土粒子やローム小ブロックの有無およびその量差によって土層は区分される。

遺物は、覆土中より多量に出土しているが、P₁～P₃からは少量しか出土していない。土器片は、604点検出されているが、そのほとんどは加曾利EⅢ式期のものであり、土師器片が23点混入している。他には土器片錘6点が出土している。

本跡は、出土土器から判断して加曾利EⅢ式期のものと思われる。

第8号住居跡出土土器（第9～10図1～19）

第9図1は、P₁の覆土の上位から出土した3点の破片とP₃の覆土の西側から出土した破片1点が接合した深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失している。口縁直下に幅1 cm程の無文帯を有し、以下に単節縄文RLを横位、斜位回転で全面に施文している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが加えられている。胎土には粗砂を含み、焼成は普通で、色調は外面がにぶい褐色、内面が橙色を呈する。推定口径26.6 cm、現存高20.0 cmである。

2～12は、第Ⅰ類に分類される。2～7は口縁部片、8～12は胴部片である。2～6はa種に属し、7は小破片であるがb種と思われる。a種は、口縁部の楕円形の区画内に縄文を充填し、胴部に直線的磨消帯を垂下させる。3の波頂部には太い沈線による渦巻文がみられる。8～12の磨消帯の幅は狭いものが多いが、8は広い。13・14は、第Ⅱ類の胴部片で共に器肉が厚い。15は、頸部で強く屈曲する器形を呈し、胴部にわずかに縄文を施しているが不明瞭である。16は、縄文のみの胴部片で、下半が無文となっていることから底部近くと思われる。17・18は、縦位の条線文が施された胴部片で、17は細く密に、18はやや太く粗目に施されている。18の施文具は、多截竹管状施文具によるものと思われる。19は、無文の口縁部片である。

第9号住居跡（第11図）

本跡は、調査区の北側のL3b₆区を中心に確認され、長径4.56 m、短径4.18 mの不整形を呈している。本跡の北側約8 mには第8号住居跡、北西側約5 mには第81号住居跡が存在している。長径方向は、N-45°-Eを指している。

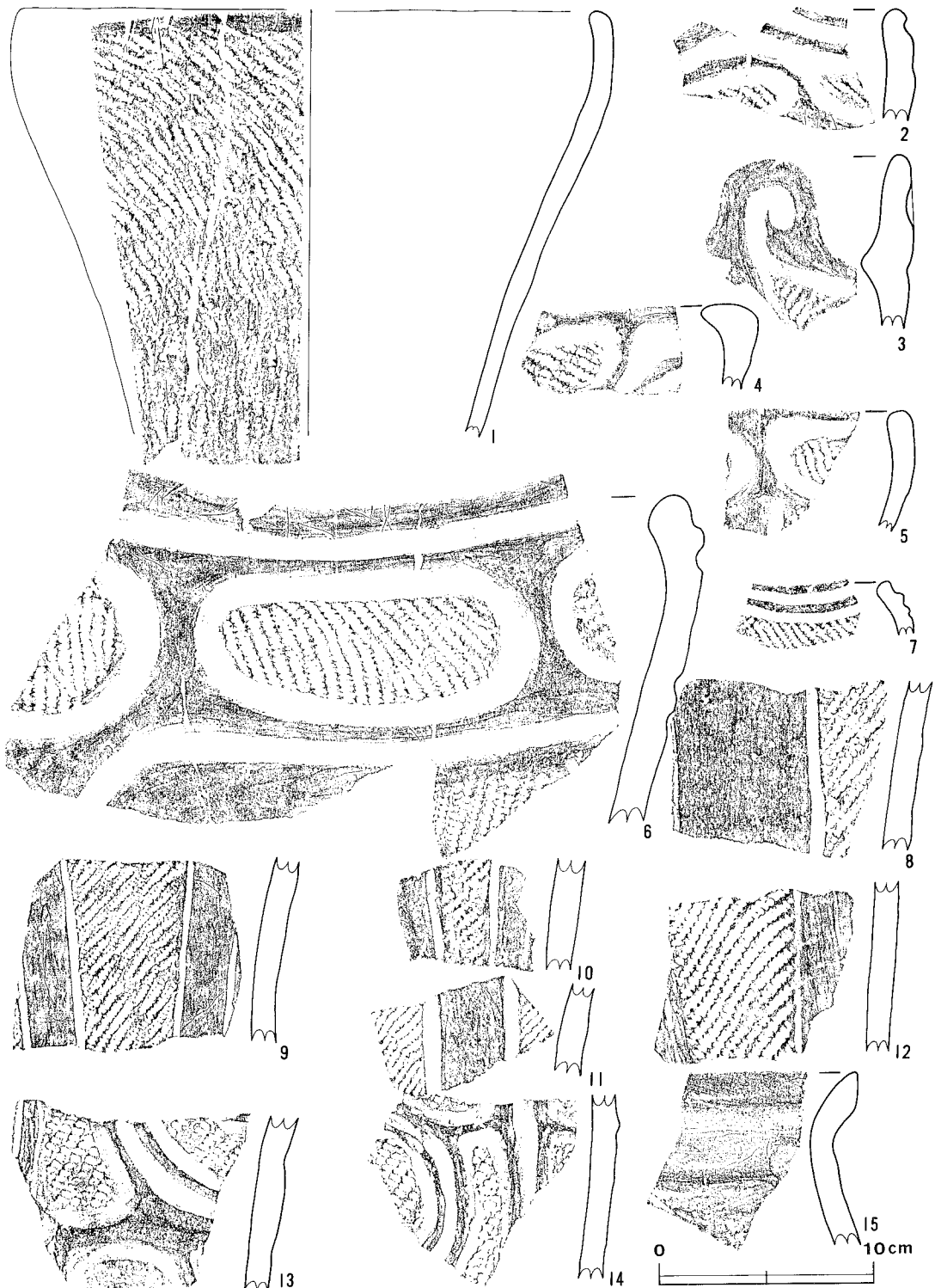
本跡は、単独で検出されており、掘り込みも比較的深く良好な遺存状態を示している。

壁は、やや外傾しながら立ちあがり、壁面は上半部は褐色土、下半部はソフトローム土であり、覆土の褐色土、暗褐色土、極暗褐色土とは明瞭に識別できた。壁高は、24～40 cm程度あり、南東側の壁の一部には、ロームブロックが壁の内側に突出しており、壁が崩れたものと推定される。

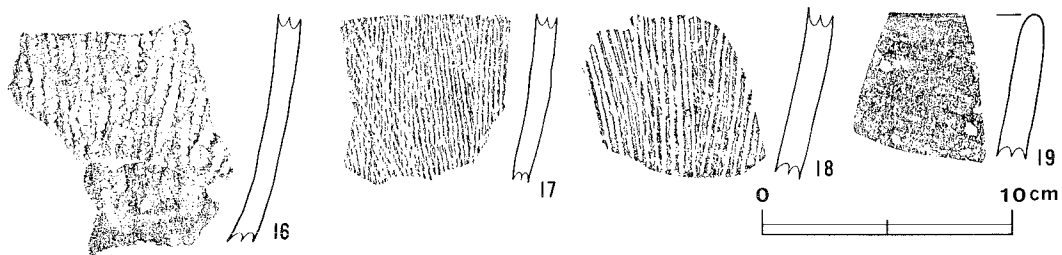
床面は、中央部がやや凹み、壁際が高くなっている。床面はロームで硬く締まっており、ロームブロックが所々に露出している。柱穴に囲まれた内側は踏みしめられており、特に炉の南側は硬く締まっている。

ピットは、P₁～P₇の7か所が検出され、P₁、P₇、P₄、P₅の4か所が、深く40～49 cm、径30～40 cmと揃っており、炉をはさんで対角線上の位置に存在することから支柱穴と判断される。

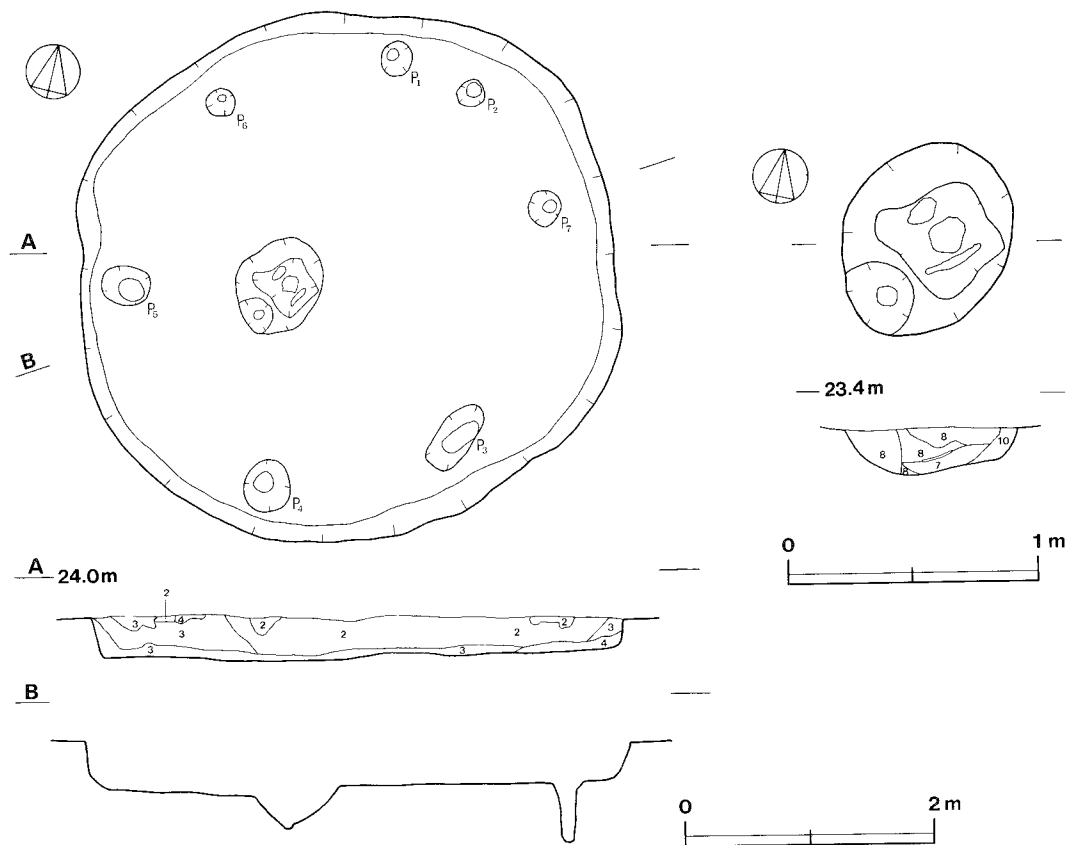
その他のP₂、P₆は、径も小さく、深さも20～25 cmと浅く支柱穴と思われる。P₂については、炉との位置関係からみると出入口にかかわるピットの可能性がある。P₃は不定形の凸凹した掘り込みで性格



第9图 第8号住居跡出土土器实测图·拓影图(1)



第10図 第8号住居跡出土土器拓影図(2)



第11図 第9号住居跡実測図

は不明である。

炉は、本跡の中央より南西側に検出された地床炉で、長径 83 cm、短径 67 cm、深さ 19 cm である。炉壁、炉床は良く焼き締まっており、レンガ状を呈している。特に炉底面の中央部はきわめて良く焼けてガリガリしている。炉の覆土は、暗赤褐色土、赤褐色土が堆積しており、焼土粒子は下半部に多く、炭化粒子は全体的に含まれている。炉床から 5 cm ほど浮いた状態で、深鉢形土器が口縁部を南西側にむけて倒れていた。炉の形状は、やや隅丸方形に近く、炉床の南と北側に浅い溝状の掘り込みが認められた。こ

れは石囲い炉の石が抜かれた痕跡を示すものかも知れないが、明らかではない。炉の南西側にみられるピット状の掘り込みは、深さ 41 cm とかなり深い。覆土は、きわめて軟らかく、締まりなく攪乱と思われる。

覆土は、中央部にはローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含む締まった極暗褐色土や暗褐色土が堆積し、壁際には褐色の締まった土層がみられ、自然堆積と考えられる。

遺物は、壁際に少なく中央部からやや東側にかけての覆土中から多量に出土しているが、床面からの出土はごく少ない。土製円板 3 点が、中央部の覆土中から床面上にかけて出土している。

土器片は、全体で 819 点検出されており、加曽利EⅢ式期のものが主体を占めている。他に土器片 2 点、土製円板 3 点などがある。

本跡の時期は、炉内出土土器および覆土中出土土器の両者から判断して、加曽利EⅢ式期と考えられる。

第 9 号住居跡出土土器（第 12～13 図 1～24）

第 12 図 1 は、本跡の炉内北側の覆土中から逆位で出土した破片 2 点と炉北側の覆土下位から正位で出土した破片 8 点が接合したもので、胴下半部以下を欠失する。口縁部が内湾する深鉢形土器で、口縁直下に幅 1 cm 程度の無文帯を設け、以下に多截竹管状施文具による縦位の雑な条線文を施している。内面は軽くナデが施されているが雑で、凹凸が残る。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好で、色調は外面が暗赤褐色、内面が赤褐色を呈する。推定口径 21.5 cm、現存高 13.4 cm である。

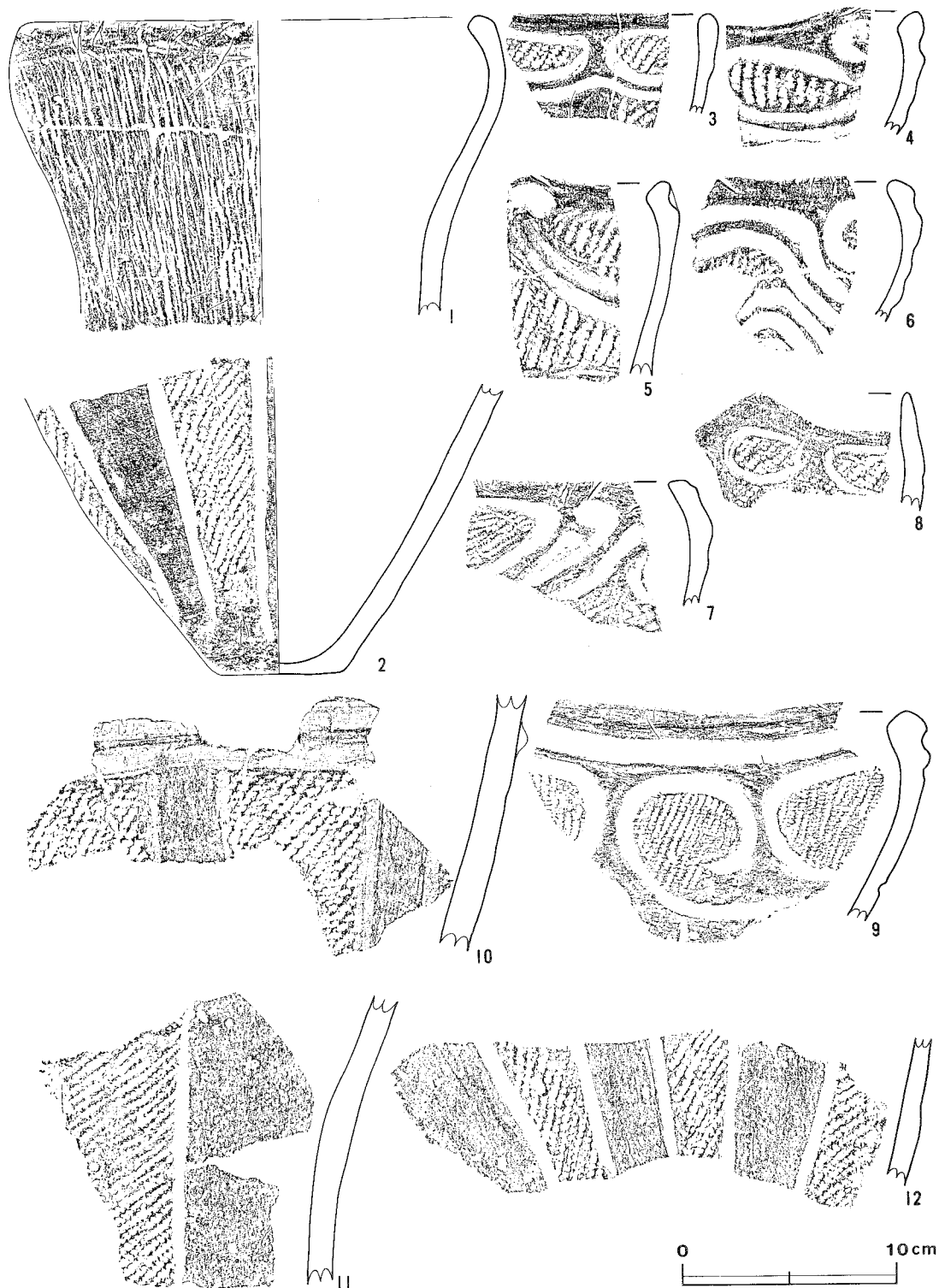
2 は、炉内の中央部から逆位で出土した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片で、外面には直線的磨消帯が推定で 8 単位垂下し、磨消帯内には単節縄文 RL が縦位回転で充填されている。内面は縦ナデが軽く施され、炭化物が付着している。胎土には長石、石英粒を多量に含み粗雑である。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。底径 5.6 cm、現存高 13.2 cm である。

3～15 は、第 I 類に分類され、3～7・10 は a 種、8・9 は b 種に属する。a 種のうち 3・4 は比較的きれいな楕円区画を有しているが、5～7 はくずれが目立ち、特に 6 は沈線による波状文が加わり、やや第 I 類から逸脱するようなモチーフを描いているが、今回はここに含めておいた。b 種では 9 に渦巻状区画の名残りがみられ、楕円区画とあわせて用いられている。a・b 種とも口縁部区画内には縄文が充填されている。10・11 は、口縁部から胴部にかけての破片で厚手で大形の深鉢形土器と思われる。12～15 は胴部片で、直線的磨消帯が垂下している。11 の磨消帯の幅は広く、13 は幅が狭い。16 は、第 II 類に属する胴部の小片である。17～20 は、第 III 類に分類される。17・18 は口縁直下に 1 条の沈線を巡らし、以下に曲線的モチーフを沈線で描き、区画の内か外に縄文を施文する。18 は、2 本組の沈線で大きな波状文を描き、沈線間を磨消し、モチーフの間に蛇行沈線文を付加している。当遺跡では類例の少ないもので、注目される。19 は、口縁直下に沈線と爪形状の刺突列を加えている。20 は、口縁直下に小さな円形刺突列を巡らし、以下に細い沈線による磨消帯と縄文を施しているが、磨滅していて不鮮明である。21 は、第 V 類 a 種で、内湾が著しい。22 は、第 VI 類 a 種で、単節縄文 RL が縦位回転で全面に施文されている。23 は、縦位の条線文が施されている底部近くの破片である。24 は、ほぼ直立する無文の口縁部片である。

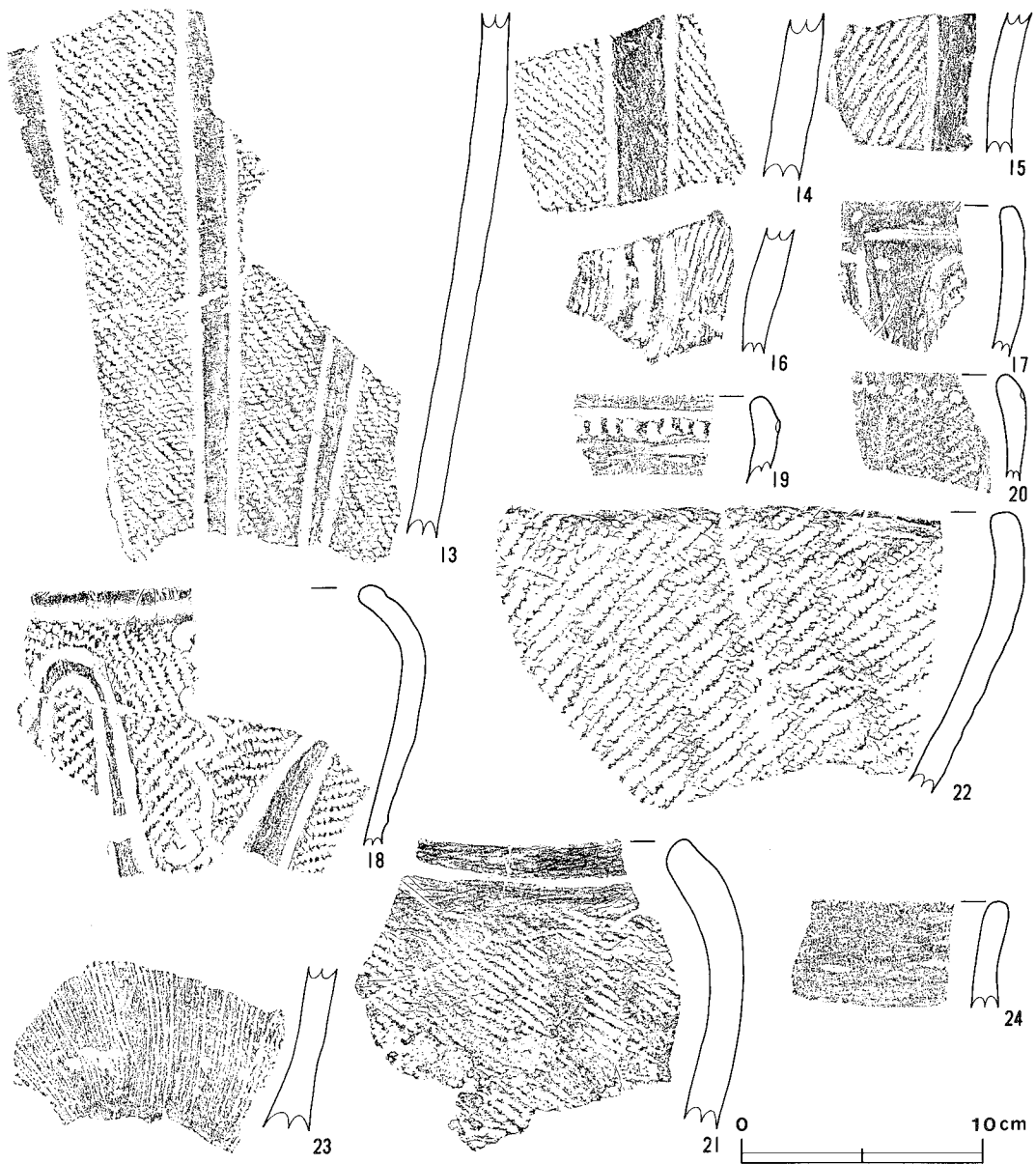
第 10 号住居跡（第 14 図）

本跡は、調査区の北端部の K3g6 区を中心に確認され、多数の土坑と重複しており、東壁を除いて壁は不明瞭であるが、長径 5.64 m、短径 5.40 m の不整形円形を呈するものと思われる。

本跡の南側には第 8 号住居跡が隣接し、南西側約 6 m には第 81 号住居跡が存在している。長径方向は、



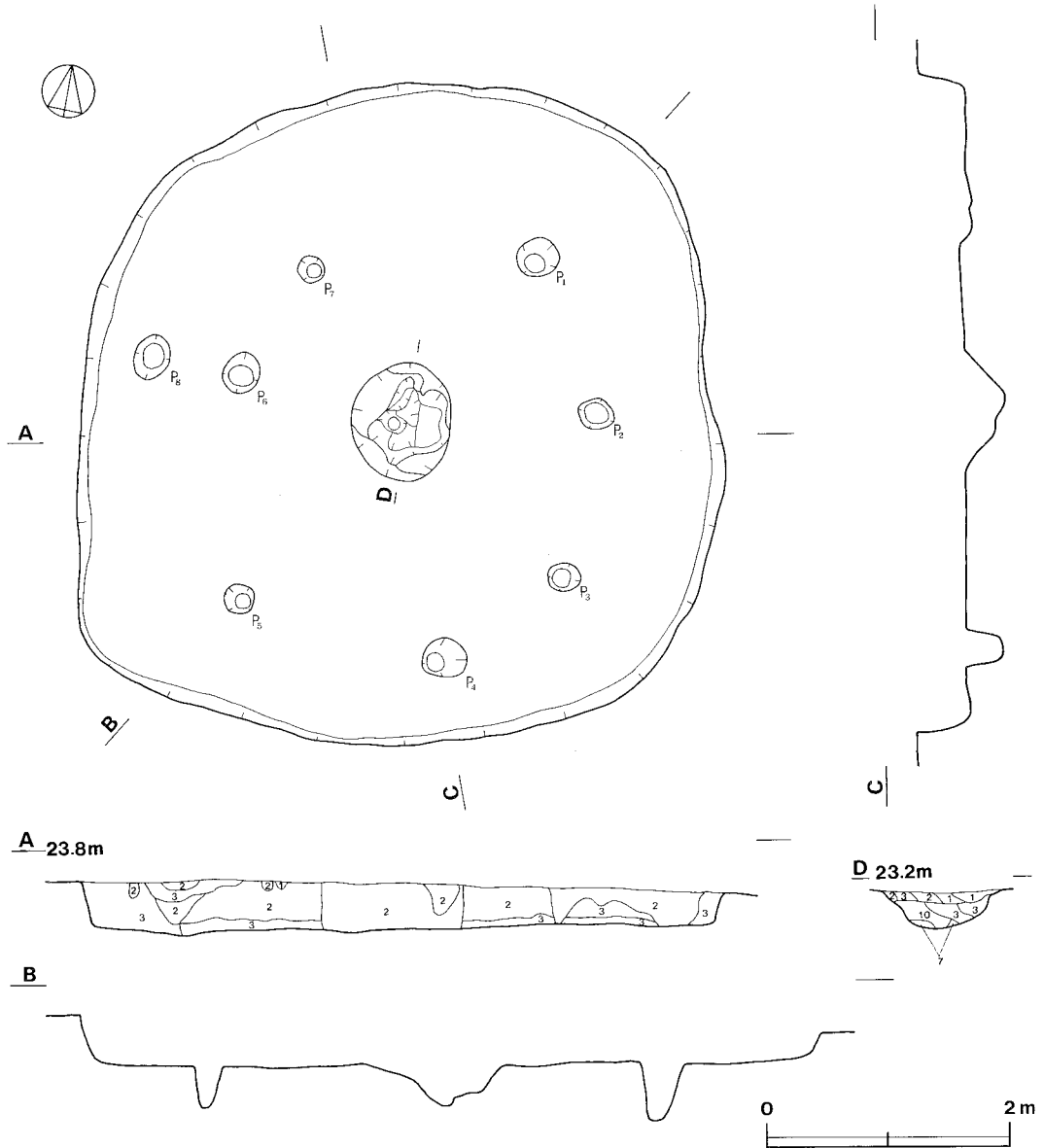
第 12 图 第 9 号住居跡出土土器实测图·拓影图(1)



第 13 図 第 9 号住居跡出土土器拓影图(2)

N-85°-W を指している。

本跡の北壁には大形の第 178 号土坑、北西壁には第 194・195 号土坑、西壁から南西壁にかけては第 177・191・158 号土坑が、南壁には第 176・179 号土坑がそれぞれ重複している。第 179 号土坑は、本跡の床面を切っており、出土遺物からみても本跡より新しいことは確実である。第 177 号土坑は、本跡の壁および床面を切っており本跡より新しい。第 178 号土坑は、覆土が極めて硬く、土坑上面に本跡の貼り床がなされたと考えられるので、本跡より古いと考えられる。しかし、その他の土坑については、本跡との新旧関



第 14 図 第 10 号住居跡実測図

係は不明である。

壁は、前記のように多数の土坑と重複しているため不明瞭な部分が目立つが、重複部にわずかに残存するソフトロームの壁はやや外傾して立ちあがっている。壁高は、北東側で 18 cm と低く、南東・南西側では 40 ~ 45 cm を測り高い。壁面は、床面から内湾しながら立ちあがる部分が、北西壁から南東壁にかけてみられる。

床面には、ロームブロックの凹凸が所々にみられ、特に炉の東側は著しい。床面は、ゴツゴツしたロームで硬く凹凸がみられる。

ピットは、P₁～P₈の8か所が検出されたが、支柱穴は、炉を囲むように穿たれているP₁～P₅、P₇～P₈の7本と考えられる。径20～35cm、深さ30～50cm程度でやや細く、浅めである。

炉は、本跡のほぼ中央部に位置し、長径100cm、短径82cmの楕円形を呈し、碗状に掘り込まれ、中央部の深い個所で32cmを測る。炉床・炉壁ともかなり良く焼けていてしっかりしており、充分に使用されたものと考えられる。覆土の上位には暗褐色土を主に、下位には鈍い赤褐色土、赤褐色土が堆積している。焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子が上位に含まれ、下位にはこの他に焼土ブロックが認められる。

覆土は、攪乱が上位を中心に北西や北東側の壁際などにみられるが、全体としては、暗褐色、極暗褐色土が堆積しており、自然堆積と考えられる。上位の土層中にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含み、下位の床面上10～15cmにはローム粒子・ロームブロックを多量に含む土層が堆積していて、この層は人為的に埋められたとも考えられる。

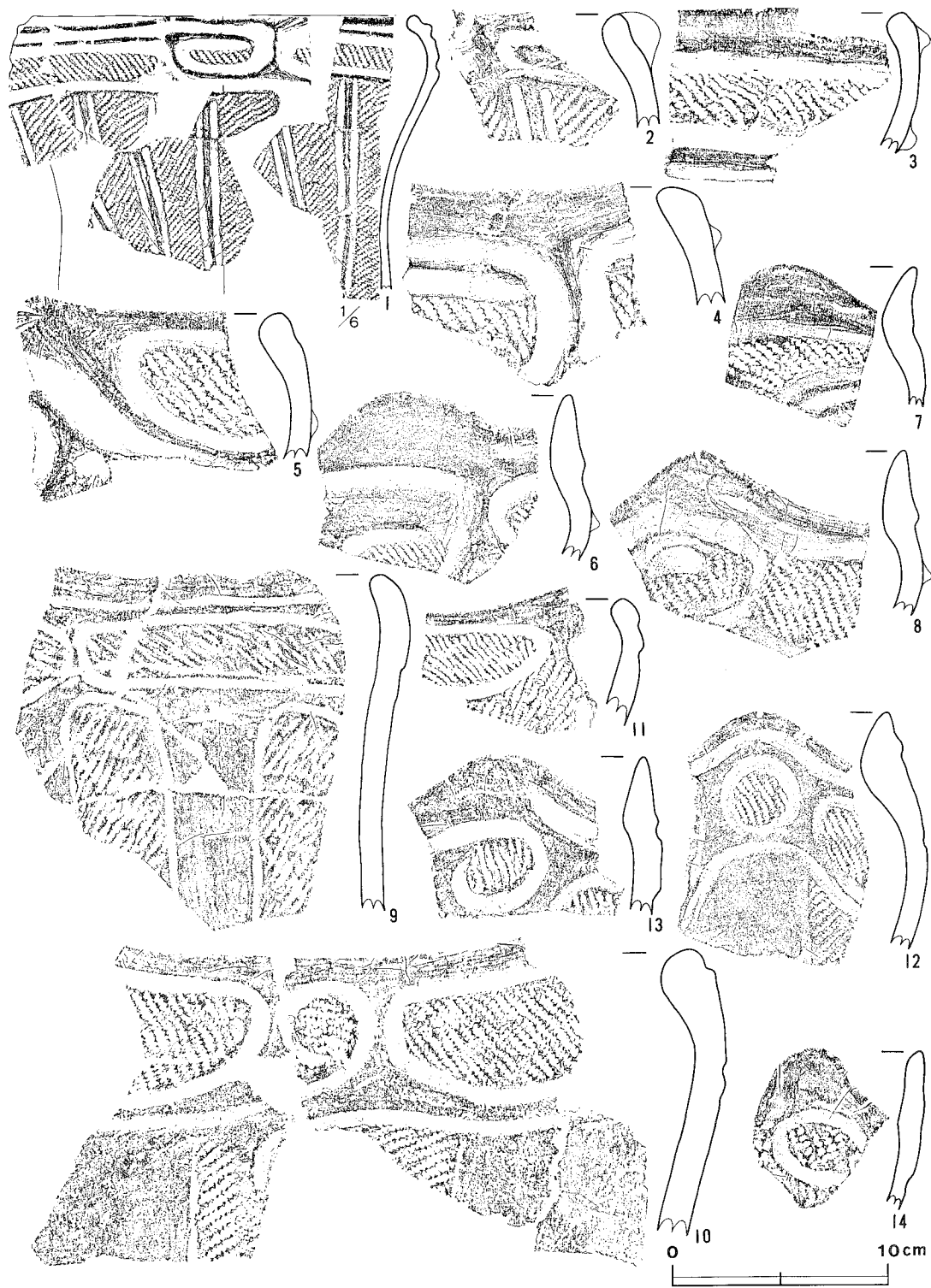
遺物は、きわめて多量に出土しており、3,119点の土器片のほか、土器片錘20点、土製円板、有孔円板あわせて11点、土製品1点、石鏃2点などがみられる。土器片の大半は、加曾利EⅢ式期のものであるが、土師器片48点が含まれている。遺物は、覆土中の全体から出土しているが、炉の東・西側に特に密集しており、北・南側ではやや疎となる。床面上出土のものはほとんどなく、覆土中に投げ込まれたような状態である。

本跡の時期は、炉内出土土器および覆土中から出土して器形復元されたものなどから判断すれば、加曾利EⅢ式期と考えられる。

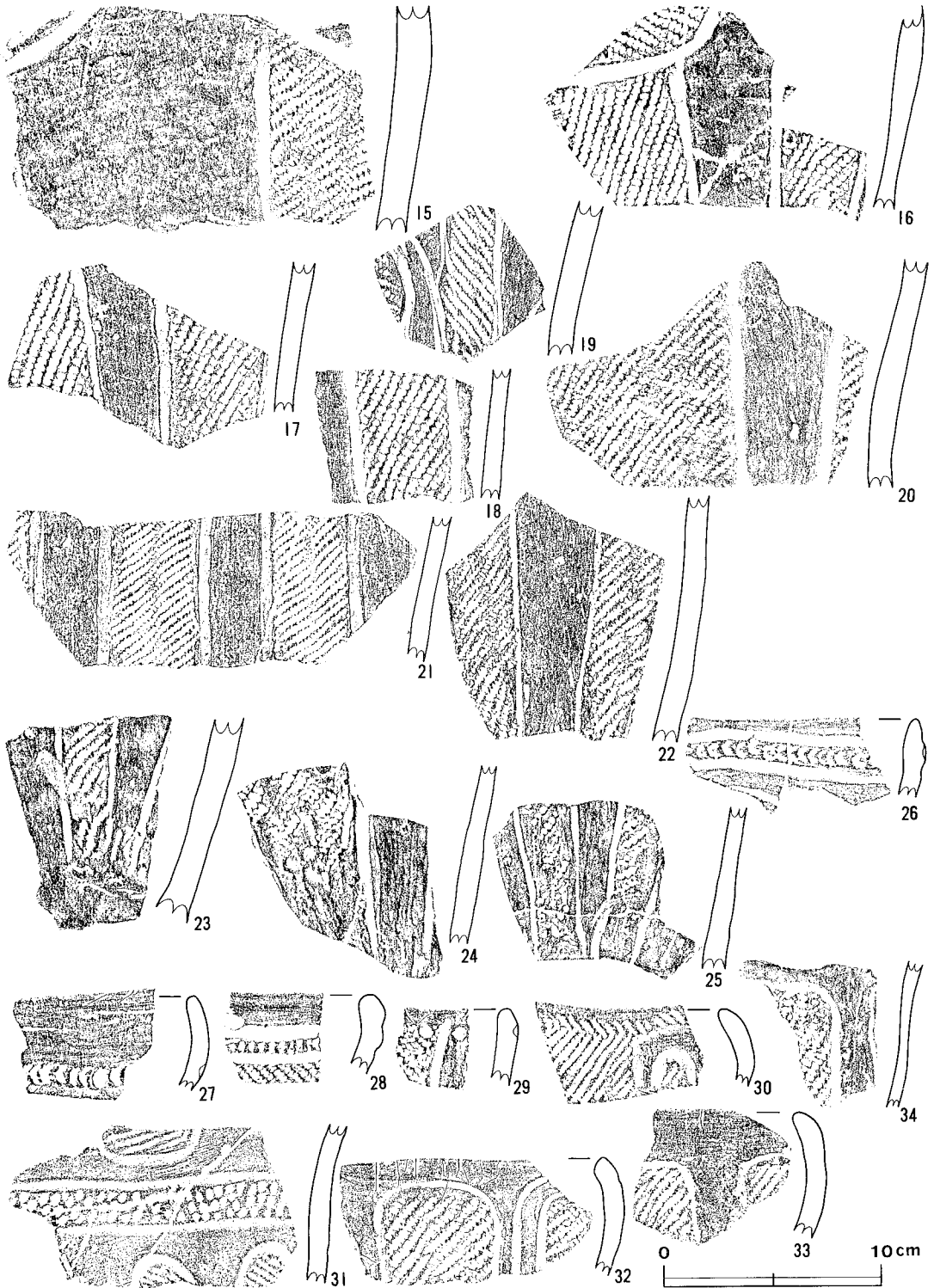
第10号住居跡出土土器（第15～17図1～51）

第15図1は、本跡の南壁際から出土した口縁部片を中心として南側の覆土中から出土した破片12点が接合し、ほぼ器形がうかがえるまで復元されたもので、キャリパー形の深鉢形を呈する。口縁部文様帯は隆線の渦巻文と長楕円形文の組みあわせで区画され、胴部には幅の狭い直線的磨消帯が垂下するが、胴下半部以下は欠失している。口縁部区画内には単節縄文RLが横位回転で、胴部には縦位回転で施文されている。内面は丁寧な横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。推定口径35.4cm、現存高26.0cmである。

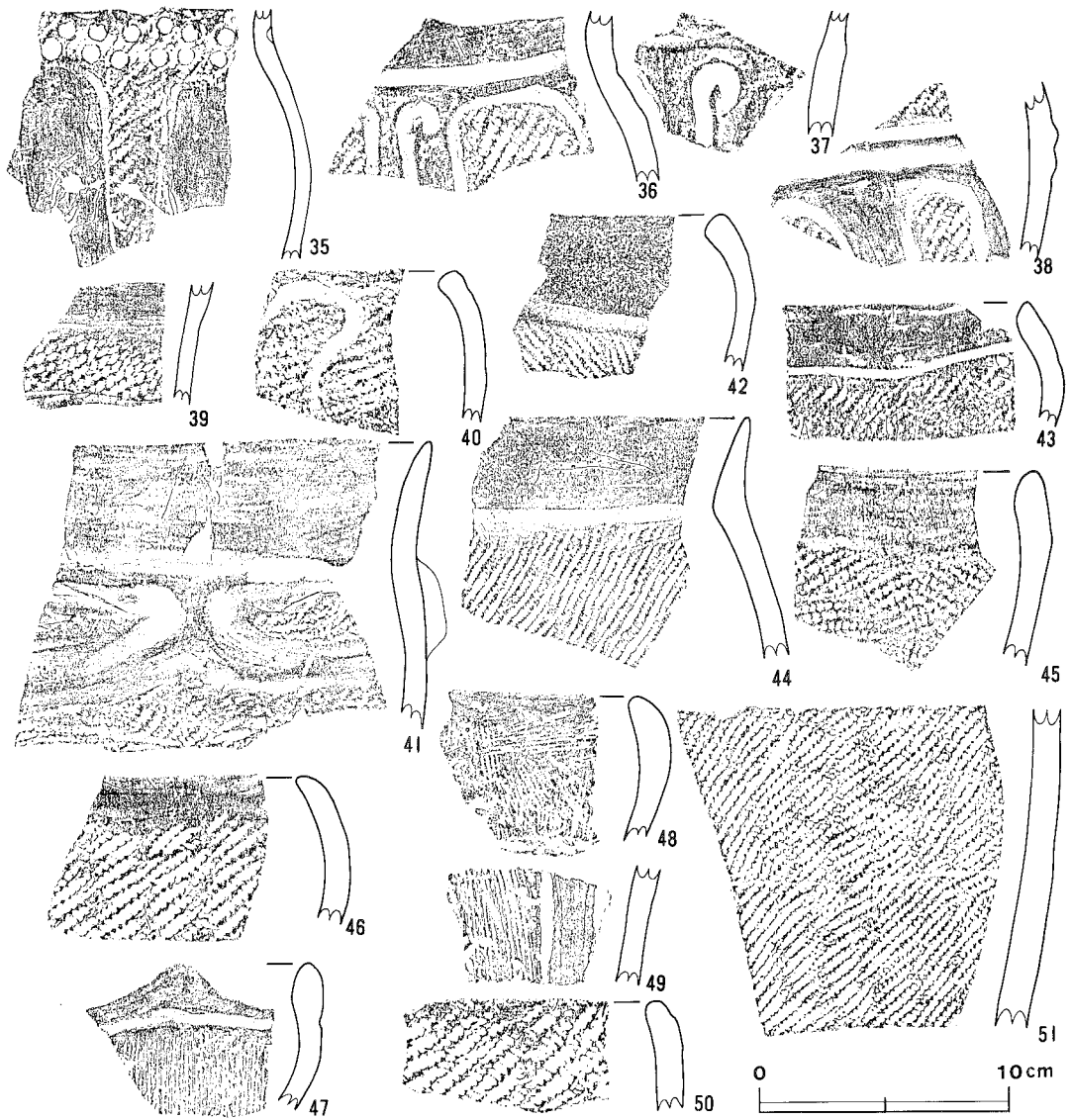
2～25は、第Ⅰ類に分類される。2～8がa種、9～16がb種と判明するが、17～35は胴部片で細分は困難である。2は1よりも口縁部文様帯が狭い。3は1に近似しており、同一個体と思われる。5～8は明確な波状縁を呈している。b種の口縁部文様帯には渦巻文（10・13）、円文（12・14）、楕円文（9～11）などがみられるが、いずれも区画内に縄文が充填されている。11は区画外にも縄文が施されている。胴部の直線的磨消帯の上端は開いている例が普通であるが、9のように閉じて逆U字状の区画となっているものもみられる。10・15はきわめて厚手である。15・16は口縁部から胴部にかけての破片で、15は磨消帯の幅が広い。22～24は底部近くの破片である。26～38は、第Ⅲ類に分類できるが、38は上方に隆線による区画があり、第Ⅰ類a種との関連を示すものかもしれない。26～29は口縁部に刺突文が施され、以下に縄文や沈線文が加えられる。26は、2条の沈線間にC字状の爪形文が付され、27はC字状の爪形文だけが無文帯下に施されている。28は2条の沈線間に刻み目状の刺突が施され、29は口縁直下に円形刺突文が並び、直線的磨消帯が垂下している。30・32・33は口縁部片で、31・34～38は胴部片であるが、いずれも逆U字状の沈線区画が施されている点では共通する。区画内を磨消する（30・35）の例は少なく、縄文を充填する（32・33・34・36・38）が目立っている。写真のポジとネガのような関係



第 15 图 第 10 号住居跡出土土器夷测图・拓影图(1)



第 16 图 第 10 号住居跡出土土器拓影图(2)



第 17 図 第 10 号住居跡出土土器拓影图(3)

がみられる。30・32は第Ⅲ類c種に相当し、26～29はa種かb種であろう。31・35は刺突列が巡るが、31は2条の沈線で区画され、35は区画されない。36・37には逆U字状の区画間に上端が軽く屈曲する懸垂文が施されている。39は、複節縄文が施された胴部の小片で、分類はできない。40は、内湾する口縁部片で、縄文地上に太めの沈線で曲線文が描かれている。類例が無く、ここに含めた。41は、幅広い口縁部無文帯を有する鉢形土器で、隆線による楕円区画文を構成しており、第Ⅰ類a種に近い。42～44

は、第V類 a種で、区画沈線は共にあまり明瞭ではない。44 は内面に鋭い稜を有し、鉢形土器であろう。45・46 は c種、47 は f種、47 は h種に相当する。47 は波状縁を呈し、条線文を施す土器としては珍しい。49 は縦位の条線文が、直線的磨消帯で区画されている胴部片で、第I類の胴部の転用例である。50・51 は縄文のみの破片で、50 は第VI類 a種に属する口縁部片、51 は胴部片である。

第16号住居跡（第18図）

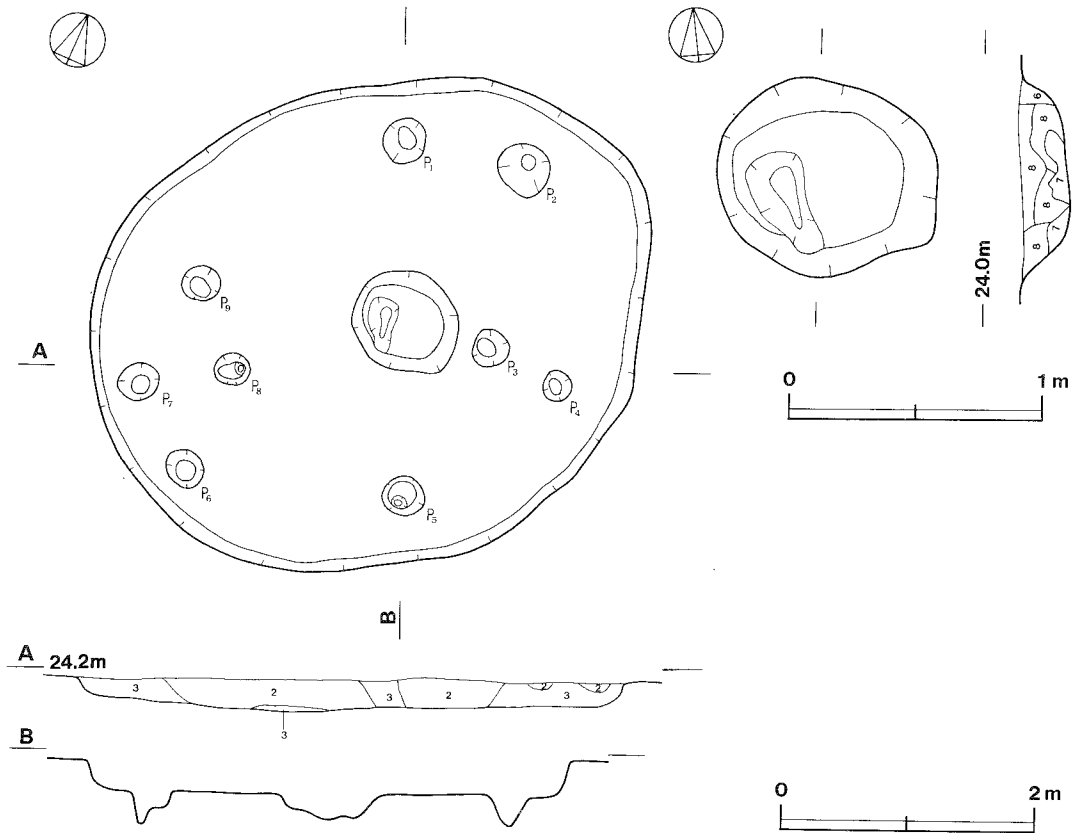
本跡は、調査区の中央部やや南西寄りの L3i4区を中心に確認され、長径4.66 m、短径3.88 mの楕円形を呈している。長径方向は、N-48°-Eを指している。

本跡の東側約13 mには加曽利EIV式期の第88号住居跡が位置している。本跡と他遺構との重複はない。

壁は、ソフトロームからなりやや軟質で、20～25 cmの壁高を有しており、外傾して立ちあがっている。南西側はやや壁高が低く、15 cm程度である。

底面も、ソフトロームであまり硬くなく、ほぼ平坦であるが、南西側が若干高くなっている。

ピットは、P₁～P₉の9か所検出されたが、主柱穴は配列から考えるとP₁、P₄、P₅、P₉の4か所と思われる。いずれも径20～35 cm、深さ20～30 cm前後で比較的揃っている。または上記の4か所にP₆を加えた5本柱の組合せをも考えられるが、P₆はP₇とともに出入口部の施設を構成する可能性が高い



第18図 第16号住居跡実測図

と思われる。P₂は、北東壁近くにあり、径40～45cm、深さ61cmと主柱穴に比べてもずば抜けて深く、その性格は不明である。奥壁に何か柱のようなものが建てられていたことを暗示しているのかも知れない。ピットの覆土は、いずれも褐色土である。

炉は、本跡のほぼ中央部にあり、長径92cm、短径80cmのほぼ円形を呈する地床炉で、深さ21cmを測る。炉の覆土は、上位が焼土粒子、焼土小ブロックなどを含む暗褐色土、下位が焼土粒子、焼土小ブロックを多量に含む赤褐色土で、炉床は、硬く焼けたロームブロック・焼土ブロックでゴツゴツしており、良好である。炉床の西側寄りには他の部分より3cm程度掘り込まれている。

覆土は、僅かに攪乱が認められるが、基本的には極暗褐色土と暗褐色土からなり、中央部にはローム粒子・炭化粒子を含む極暗褐色土、壁際には少量のローム粒子、炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。両層とも締まっている。

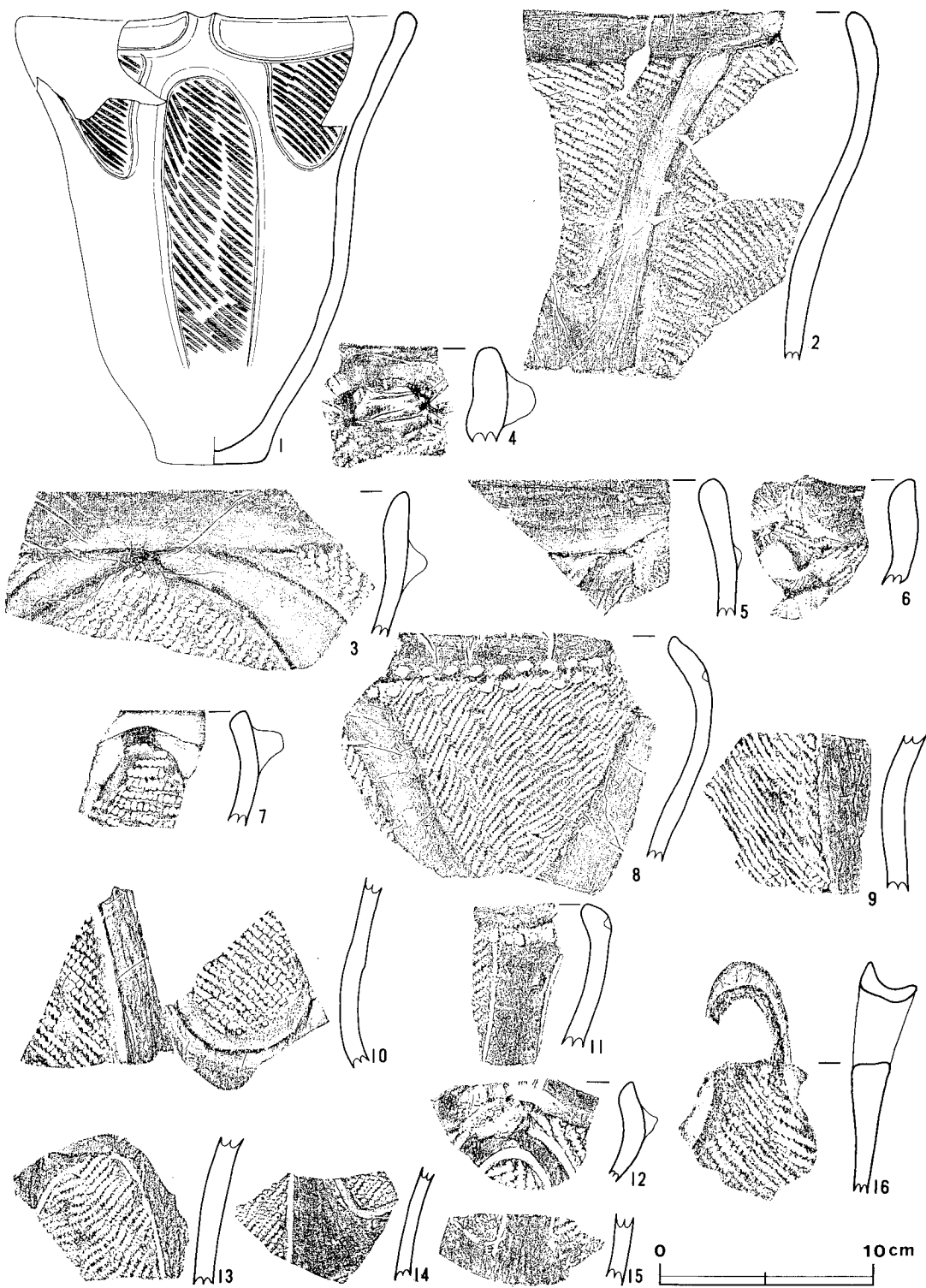
遺物は縄文時代中期の住居跡としては比較的少なく、土器片574点、土製円板2点、有孔の軽石製品1点などが出土しただけである。土器は、炉を中心とした中央部にやや多く、北西、北東、南東側にはごく少量しか認められなかった。炉の北端から北へ約50cmの位置の覆土下位、床面より約10cmほど浮いた状態で、ほぼ完形の小形深鉢形土器が、口縁部を北西側に向けた横倒しの状態で出土している。

本跡の時期は、上記の小形深鉢形土器および炉内の覆土東側から出土した土器などから判断すれば、加曽利EIV式期と考えられる。

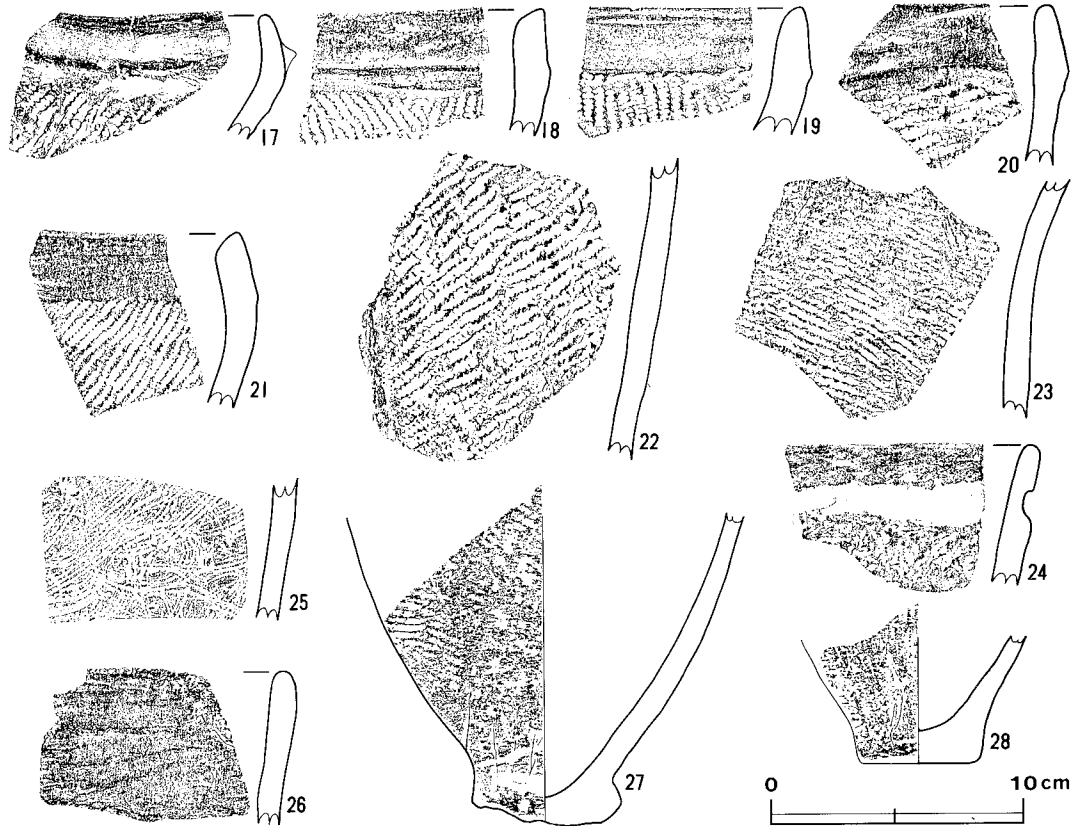
第16号住居跡出土土器（第19～20図1～28）

第19図1は、炉の北側約50cmほどの覆土下位から口縁部を北西方向にむけて横転して出土した平縁の小形深鉢形土器で、口縁部の一部を除いてほぼ完形である。口縁部無文帯は幅1.5～2cm程あり、断面三角形を呈する微隆線で区画され、4か所でX字状をなすように若干突出している。文様は微隆線で描かれ、逆三角形と逆U字状のモチーフが交互に4単位ずつ施され、小突起の部分に逆U字状文が来るように構成されている。モチーフ内には無節縄文Lが縦位回転で充填されている。底面から4～5cmほどモチーフ外は縦ナデされている。内面は上端部が横ナデの他は縦ナデが加えられている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面がにぶい褐色を呈する。口径18.8cm、底径5.0cm、器高21.5cmである。

2～10は、第IV類に分類される。微隆線によるV字状やU字状、逆U字状の区画内には縄文が充填され、モチーフの接点とはつまみあげられたように突出しているが、3・4・7のように高いものが目につく。6には貼付文もみられる。8の口縁部無文帯を区画する微隆線の上下には横長の楕円形を呈する刺突列が巡っている。11は、口縁直下に刺突列を巡らし、以下に細い沈線による磨消帯を垂下させている。12は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に2本組の沈線で逆U字状の磨消帯を描く。上端には把手の欠損部が認められる。13～15は、第III類ないしは第IV類b種の胴部片であろう。16は、波状を呈する口縁部片で、波頂部に環状把手が付加されている珍しい例である。17～21は、第V類e種に分類される口縁部片で、17の微隆線は明瞭な貼り付け手法で、高く突出している。18～21は、ナヅリによる形成と考えられる。縄文はいずれも単節である。22・23は、縄文のみの胴部片で、23には無節縄文Lが縦位回転で施文されている。24は、口縁直下に太く深い凹線が巡り、以下に粗い縄文が施され、分類的には第V類a種となるが、異質である。25は条線文が曲線的に施文されている胴部片、26は無文の口縁部片である。



第 19 图 第 16 号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第 20 図 第 16 号住居跡出土土器実測図・拓影図(2)

27 は 炉 の 南 側 の 覆 土 中 か ら 正 位 で 出 土 し た 深 鉢 形 土 器 の 胴 下 半 部 か ら 底 部 に か け て の 破 片 で、外 面 に は 無 節 縄 文 \perp が 縦 位、斜 位 回 転 で 施 文 さ れ て い る が、磨 滅 が 著 し く 不 明 瞭 で あ る。内 面 に は 縦 ナデ が 施 さ れ て い る。底 部 は 突 出 気 味 で、底 面 は 剝 落 が み ら れ、一 部 を 欠 失 し て い る。胎 土 に は 砂 粒 を 含 み、焼 成 は 普 通 で、色 調 は 外 面 が に ぶ い 橙 色、内 面 が に ぶ い 褐 色 を 呈 す る。底 径 5.8 cm、現 存 高 12.5 cm で あ る。

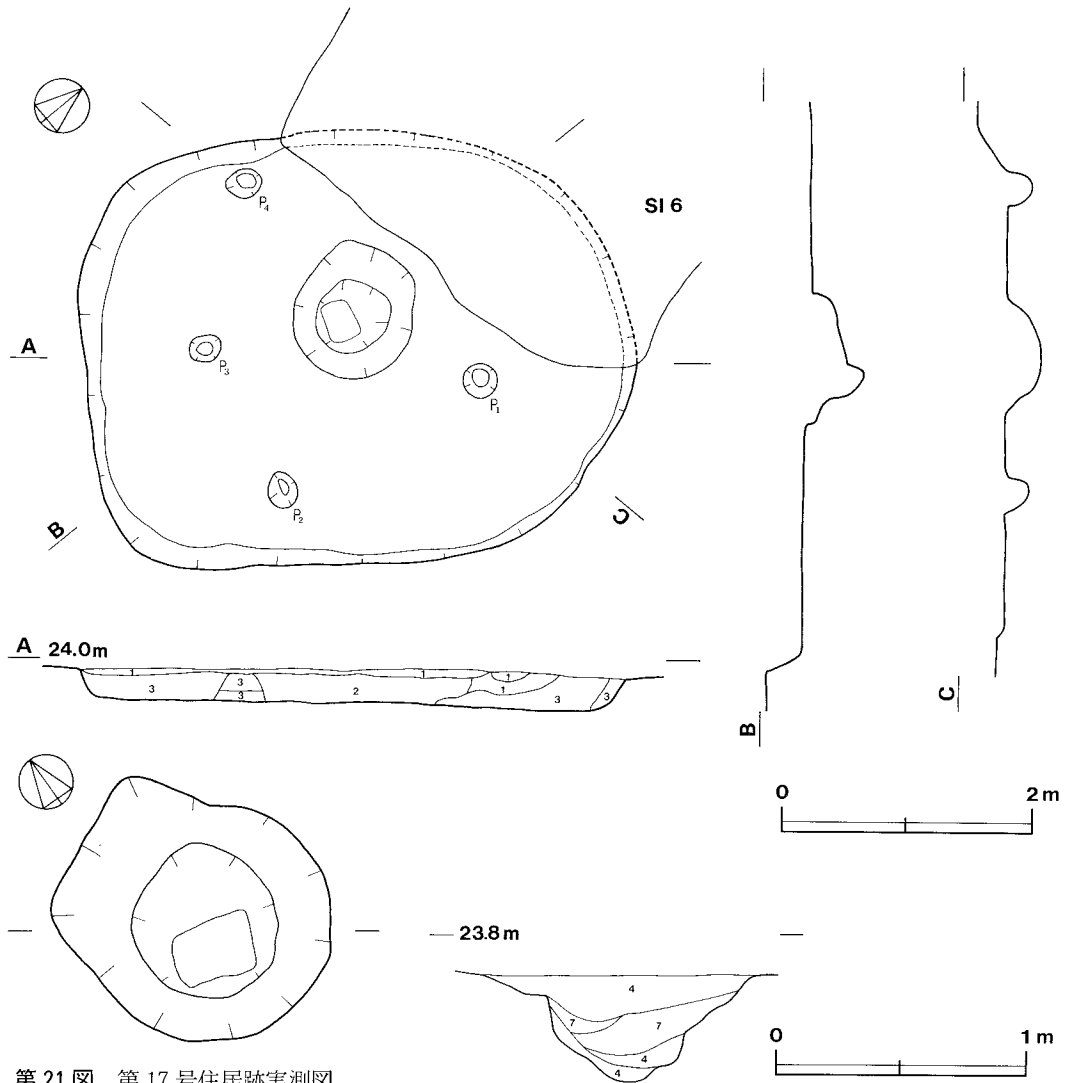
28 は、炉の西側の覆土中から逆位で出土した無文の底部片で、内外面とも粗い縦ナデが加えられている。薄手で小形の土器と思われる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。底径 4.5 cm、現存高 6.2 cm である。

第 17 号住居跡 (第 21 図)

本跡は、調査区の中央部やや西側の L2e9 区を中心とした位置に確認された住居跡で、北西側を第 6 号住居跡により切りとられている。また、本跡の南東側を第 2 号溝が切り込んでいるが、溝が浅いためかろうじて壁と床面は残存している。本跡の東端に重複している第 146 号土坑との新旧関係は不明である。

本跡の西側約 6.5 m には第 20 号住居跡、南西側約 8 m には第 83 号住居跡が存在している。

本跡は、北西側を第 6 号住居跡に切られているために平面形は不確実であるが、長径 4.50 m、短径 2.83 m の隅丸長形状を呈するものと考えられる。長径方向は、N-57.5°-E を指している。



第 21 図 第 17 号住居跡実測図

壁は、比較的良く残っている北東側と南西側では 20～25 cm と高く、北西側では 15～20 cm で、南東側では 8～10 cm 程度である。壁は、ソフトロームで外傾してゆるやかに立ちあがっている。

床は、重複する第 6 号住居跡よりは約 15 cm 程高く、炉周辺を中心にロームブロックが凸凹しており硬くなっているが、周囲はそれほど硬くない。南西側の床面の一部は攪乱によって失われている。

ピットは、P₁～P₄ の 4 か所検出されたが、配列がやや不規則である。径 20～30 cm、深さ 17～31 cm とやや小規模で浅目のピットである。あるいは、第 6 号住居跡に切り込まれた本跡の北側にピットが 1 か所存在したかもしれない。

炉は、本跡の中央部やや北西寄りにあり、長径 112 cm、短径 94 cm の不整楕円形を呈し、比較的大きな地床炉である。播鉢状に深く掘り込まれており、南側の最深部では 45 cm を測る。覆土は、上位に焼土粒子を多量に含む褐色、暗褐色、赤褐色の締めりある土が堆積し、下位には焼けたローム粒子・ロームブロックを含む締まった褐色土が堆積している。炉壁は、良くやけておりロームブロックの硬化が認めら

れ、南西側には部分的には焼土化している個所もある。しかし、炉床はあまり焼けていない。

本跡の覆土は、上位に黒褐色、極暗褐色のローム粒子、炭化粒子を含む締まった土が堆積し、下位と壁際に暗褐色のローム粒子を多量、炭化粒子、焼土粒子を少量含む締まった土が堆積している。

遺物は、本跡の中央部から南西側にかけて集中して出土したが、いずれも床面から5～20 cmほど浮いており、本跡の廃絶後に投げ込まれたものと判断される。床面からの出土はごく少量である。出土土器片の総数は926点で、中には土師器片など12点が含まれているが混入と思われる。他に土器片錘9点、土製円板5点、磨石、石皿片各1点が出土している。

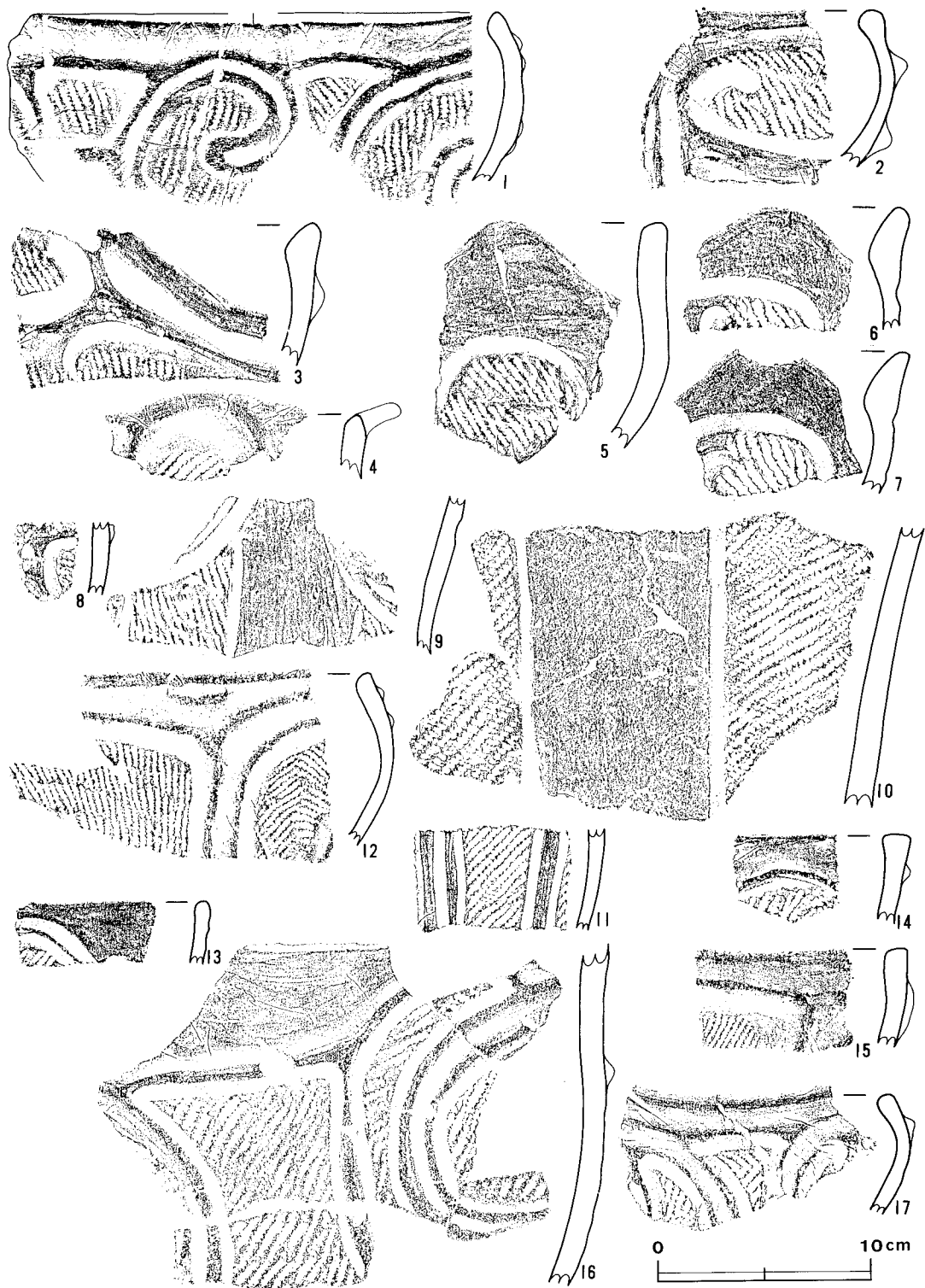
本跡の時期は、炉内出土土器および覆土中出土土器で器形復元できた土器から推定すれば、加曾利EⅢ式期と考えられる。

第17号住居跡出土土器（第22～24図1～48）

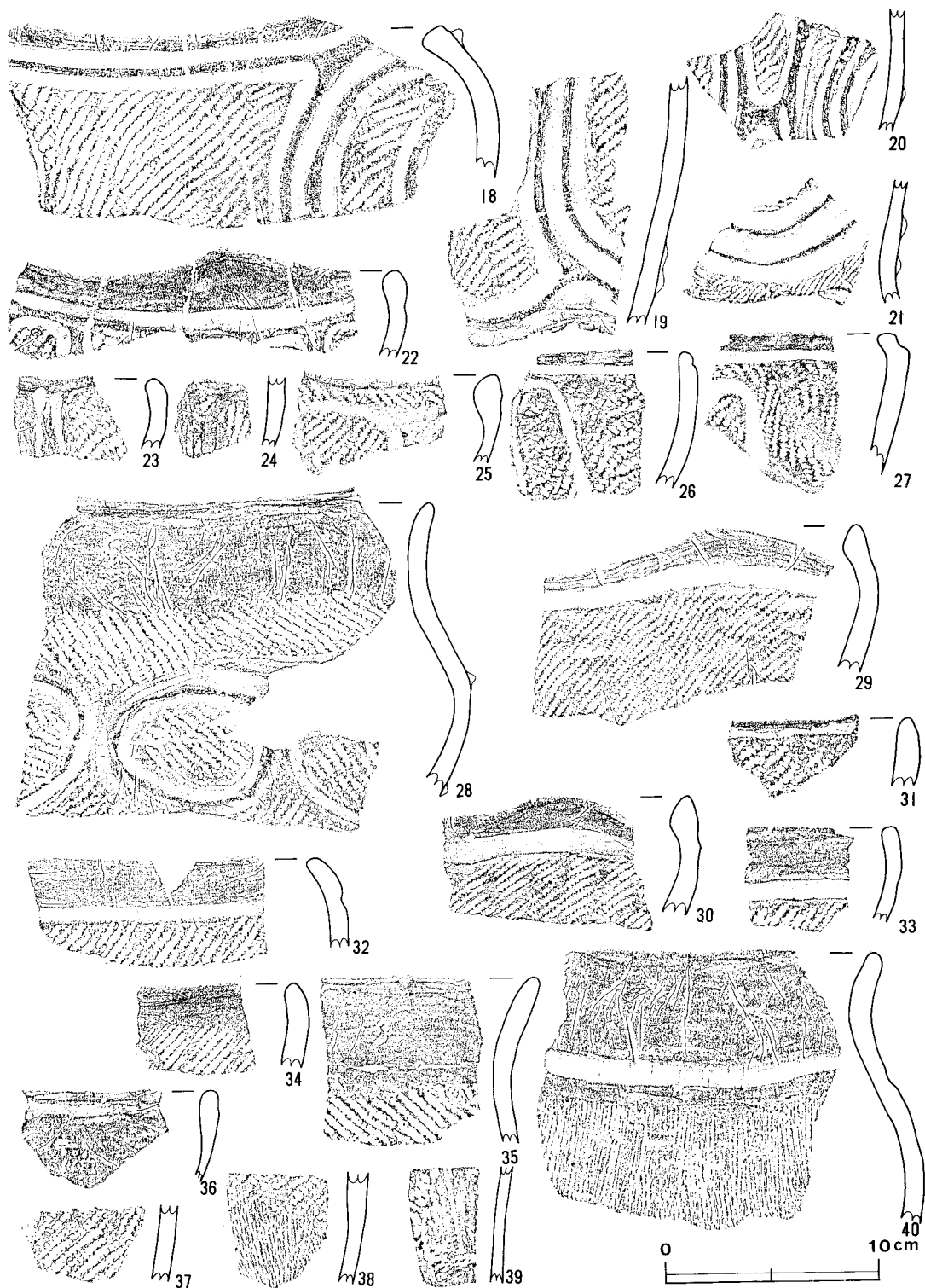
第22図1は、本跡の炉の上面にあたる覆土中から正位で出土した破片を中心に中央部の覆土中から出土した破片7点が接合したもので、この中には本跡を切っている第6号住居跡の南側壁溝内から出土した破片1点も含まれている。内湾する深鉢形土器の口縁部片で、以下を欠失する。口縁直下に幅1～1.5 cm程の無文帯を設け、以下に2本組の隆線による渦巻文などの曲線的モチーフを描いている。モチーフの内外には単節縄文RLを充填している。内面には横ナデが施され、内外面の一部には炭化物が若干付着している。胎土は雲母、長石、石英粒などの粗砂を含み、焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。推定口径21.5 cm、現存高8.0 cmである。

2～11は、第Ⅰ類に属するものと思われる。2～4・8がa種、5～7・9がb種に分類しうる。渦巻状、楕円形状の区画内に縄文が充填されている。3・5～7など波状縁の土器が目立つ。9は、口縁部から胴部にかけての破片である。10は厚手で、きわめて幅の広い磨消帯を有し、11は薄手で、幅の狭い磨消帯間に1本の沈線を付加している。12～21は、第Ⅱ類に相当するもので、12～18が口縁部片、19～21が胴部片である。隆線は2本組のものが多く、断面形は三角形を呈するが、鋭く尖ったものではなくやや太目で丸味を有する。22～27は、第Ⅲ類に分類され、22・27・28はa種かb種、23・25はc種に細別できる。いずれにも逆U字状文が描かれており、区画内に縄文が充填されているもの（22）と、縄文地文上に描かれ磨消が施されないもの（25・27・28）に分れる。28は、口縁部無文帯を広く残す鉢形土器と考えられ、頸部に隆線で楕円区画文が構成され、区画の内外に縄文が施されている。29～33は、第Ⅴ類a種に相当する。29・30はゆるい波状縁を呈し、32・33は平縁と思われる。31は口縁直下に浅く細い沈線が巡るもので、他とは若干異なっている。34～36は、第Ⅴ類c種である。35は無文帯の幅が広く、外反している。36はわずかな縄文がみられる口縁部片である。37は縄文のみの胴部片である。38・39は縄文と条線文が施されている胴部の小片である。39は縄文の上に粗い沈線状の条線が付されている。40～43は条線文のみの資料で、40は幅広い口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、以下に縦位の条線文が密に施されている胴部がふくらむ鉢形土器である。第Ⅴ類f種に相当するが、深鉢形土器ではない。41・42は直線的、43は曲線的に縦位に施文されている。44・45は縄文のみの破片で、44は胴部片で、45は底部近くと判断される。

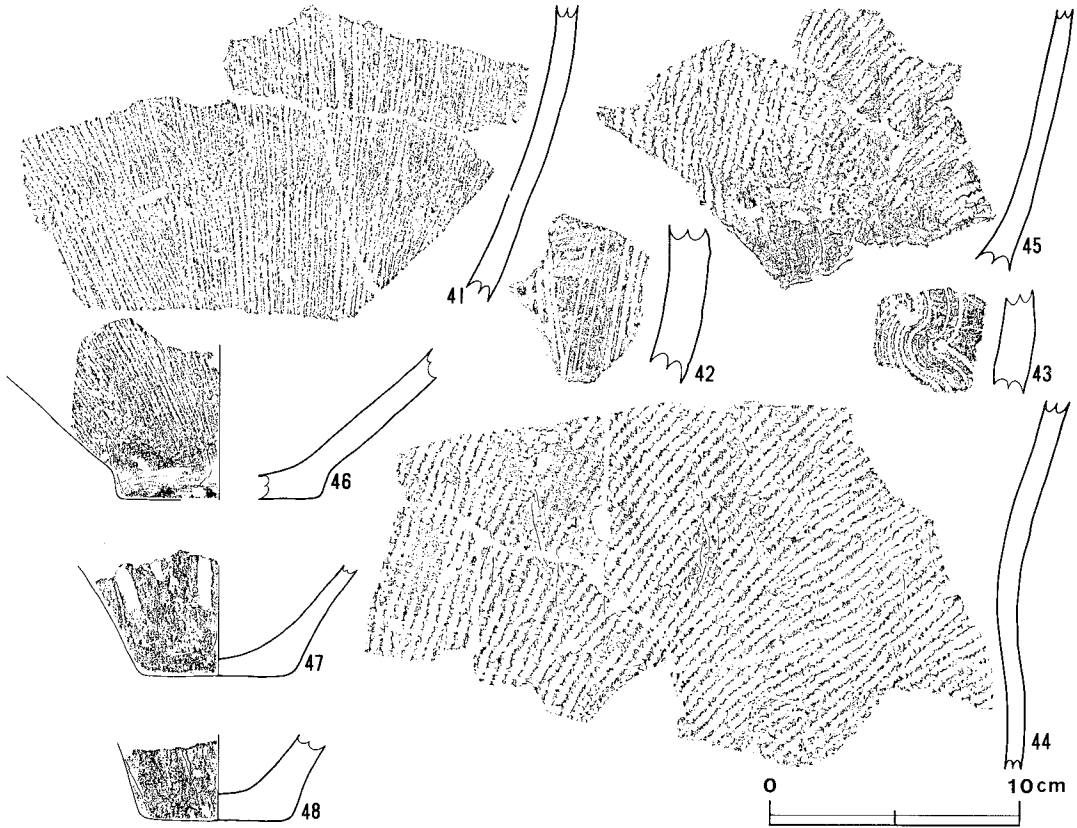
46は、炉の上面にあたる覆土中から正位で出土した底部片で、外面には楕円条線文が縦位に施され、底面近くは横ナデが加えられている。内面は丁寧なナデが施され、赤・黒の付着物が認められる。漆などで施文した可能性がある。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が黒褐



第 22 图 第 17 号住居跡出土土器実測图・拓影图(1)



第23图 第17号住居跡出土土器拓影图(2)



第 24 図 第 17 号住居跡出土土器実測図・拓影図(3)

色を呈する。推定底径 8.0 cm，現存高 5.0 cm である。

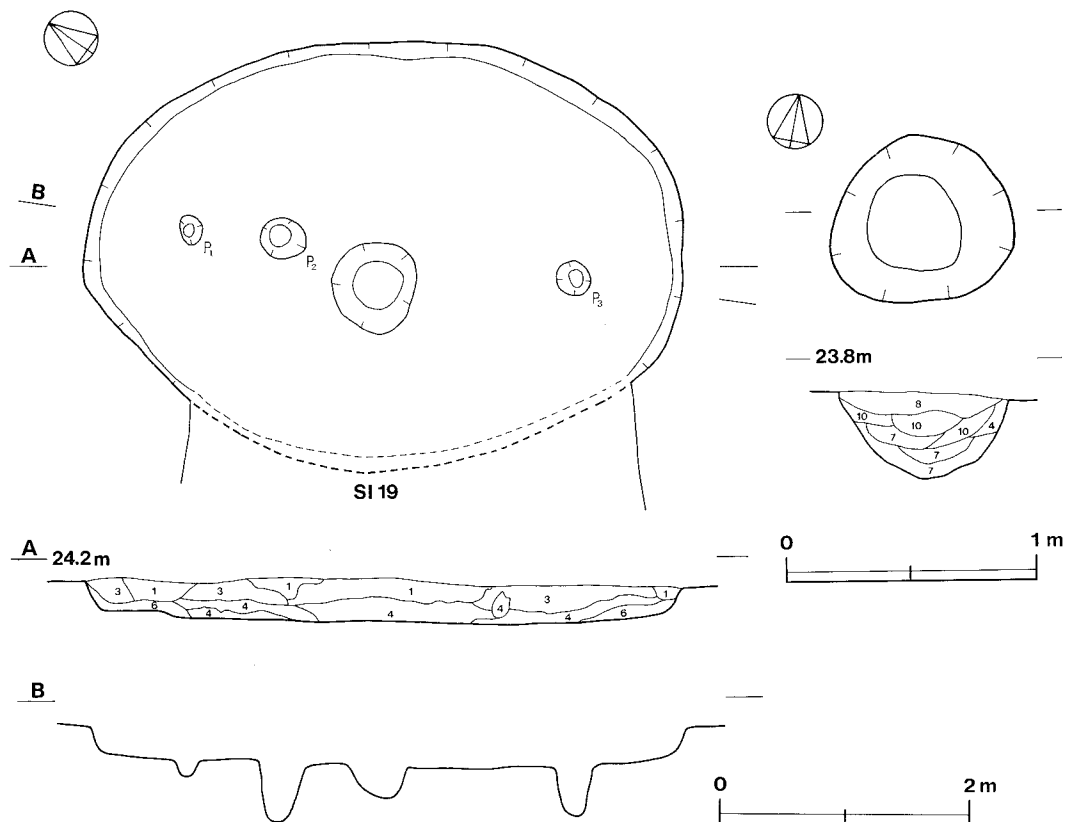
47 は，炉の西側の覆土中から正位で出土した深鉢形土器の底部片で，外面に縦位の沈線が垂下しており，胴部の磨消懸垂文の末端と考えられる。内面は軽いナデが施されている。胎土は長石，石英粒が含まれ，焼成は良好で，色調は外面が褐色，内面が灰褐色を呈する。底径 6.0 cm，現存高 4.4 cm である。

48 は，炉の北東側の覆土中から正位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で，内外面とも縦ナデが加えられている。胎土には細砂を含み，焼成は良好で，色調は外面がにぶい赤褐色，内面が灰褐色を呈している。底径 5.7 cm，現存高 3.1 cm である。

第 20 号住居跡（第 25 図）

本跡は，調査区の中央部やや西側の L2e6，L2e7 区にまたがって検出され，古墳時代前期の第 19 号住居跡と南西側で重複している。このため，本跡の南西側の壁は不明瞭となっている。本跡の南側約 2 m には第 83 号住居跡，東側約 6.5 m には第 17 号住居跡，西南西約 6 m には第 28 号住居跡が存在している。

平面形は，長径 4.80 m，短径 3.48 m の長楕円形を呈しており，長径方向は，N-38.5°-W を指している。



第 25 図 第 20 号住居跡実測図

壁はソフトロームからなりやや外傾して立ちあがり、壁高は約 20 ～ 25 cm である。

床は、重複する第 19 号住居跡より僅かに低く 2 ～ 3 cm の差がある。炉を挟んで南、北側と南西側の床面は、ハードロームが浮き上がっている状態で、硬く良好であるが、なだらかな起伏をもつ。その他はあまり硬くない。

ピットは、 $P_1 \sim P_3$ の 3 か所が検出されているが、ほぼ長径方向に沿って並んでおり、通常の上屋構造を推定させるものではない。 P_1 は、長径 24 cm、短径 18 cm、深さ 17 cm で浅い。 P_2 、 P_3 は、径 28、38 cm、深さ 42、49 cm で良好なピットである。

炉は、本跡の中央部やや西寄りに位置し、長径 74 cm、短径 69 cm を測る地床炉で、碗状に 35 cm ほど掘り込まれている。炉の覆土には、炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子を含む暗赤褐色土、にぶい赤褐色土、赤褐色土が堆積している。特に下位の部分は、良く焼けており、移植ゴテで削るとカリカリする状況を呈している。

本跡の覆土は、南西側で重複する第 19 号住居跡とは明瞭に異なっており、両者にまたがる土層断面からみると、新しい第 19 号住居跡の覆土は黒褐色土を主とし、古い本跡の覆土は、上位の中央部が黒褐色、周辺が暗褐色、下位が褐色土から成っている。黒褐色土は、第 19 号住居跡の覆土と同様で締まり弱く、暗褐色土は、ローム粒子・炭化粒子を含んでいる。褐色土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含

んでいる。

遺物は、本跡の中央部から南側にかけて集中しており、硬い床面の範囲とほぼ一致している。しかし、遺物はそのすべてが覆土中より出土している。土器片 1,681 点のうち 24 点は土師器片で、第 19 号住居跡に属するものと思われる。他に覆土上位から古銭 1 点が出土している。本跡に伴う遺物には、土器片 18 点、土製円板 7 点、土製品 1 点、石鏃 1 点などがある。

本跡の時期は、明瞭な時期決定遺物がないため推定となるが、出土量の多い土器片から判断すれば加曾利 EⅢ 式期と考えられる。

第 20 号住居跡出土土器（第 26～29 図 1～64）

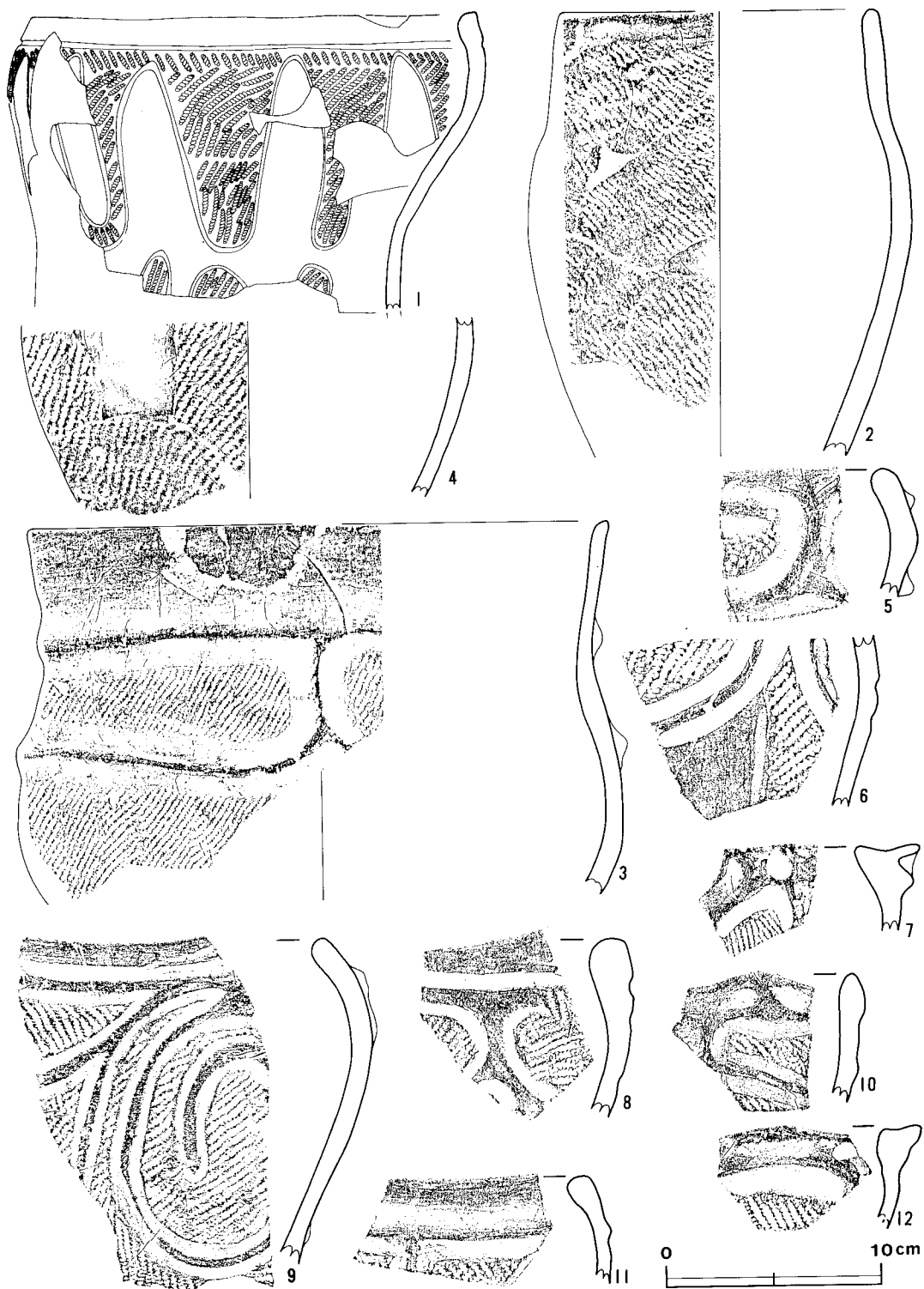
第 26 図 1 は、炉の北西端部にあたる覆土下位から逆位で出土した破片を中心に 24 点が接合したもので、内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。口唇部は内削ぎ状を呈し、口縁部に把手ないし突起を有したものであるが欠損している。幅 1 cm 強ほどの口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画し、胴部には上下に分れて、波調の高い連続波状文を描き、モチーフの波底部分に単節縄文 RL を充填している。下位の文様の大半は欠損しているが、上位とは逆に波頂部分に縄文を充填するようである。口縁直下の縄文 1 段だけは横位回転で、以下は主に縦位で施文されている。上位の施文の一部には乱れがあり、やや幅広くなった波底部分に縦長楕円形のモチーフを描き、内部を磨消するという工夫を凝らしている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。内面の一部には厚く炭化物の付着している個所がある。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が黒褐色を呈する。推定口径 20.8 cm、現存高 14.0 cm である。

2 は、南西壁寄りの覆土中から逆位で出土した破片 10 点が接合したもので、胴上半部に最大径を有する壺形に近い形状を呈する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁直下に幅 1 cm 程の無文帯を有し、以下全面に単節縄文 LR を縦位回転で施文している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデを施している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面上半と内面がにぶい褐色を呈し、外面下半は橙色を呈する。推定口径 14.7 cm、現存高 16.0 cm である。

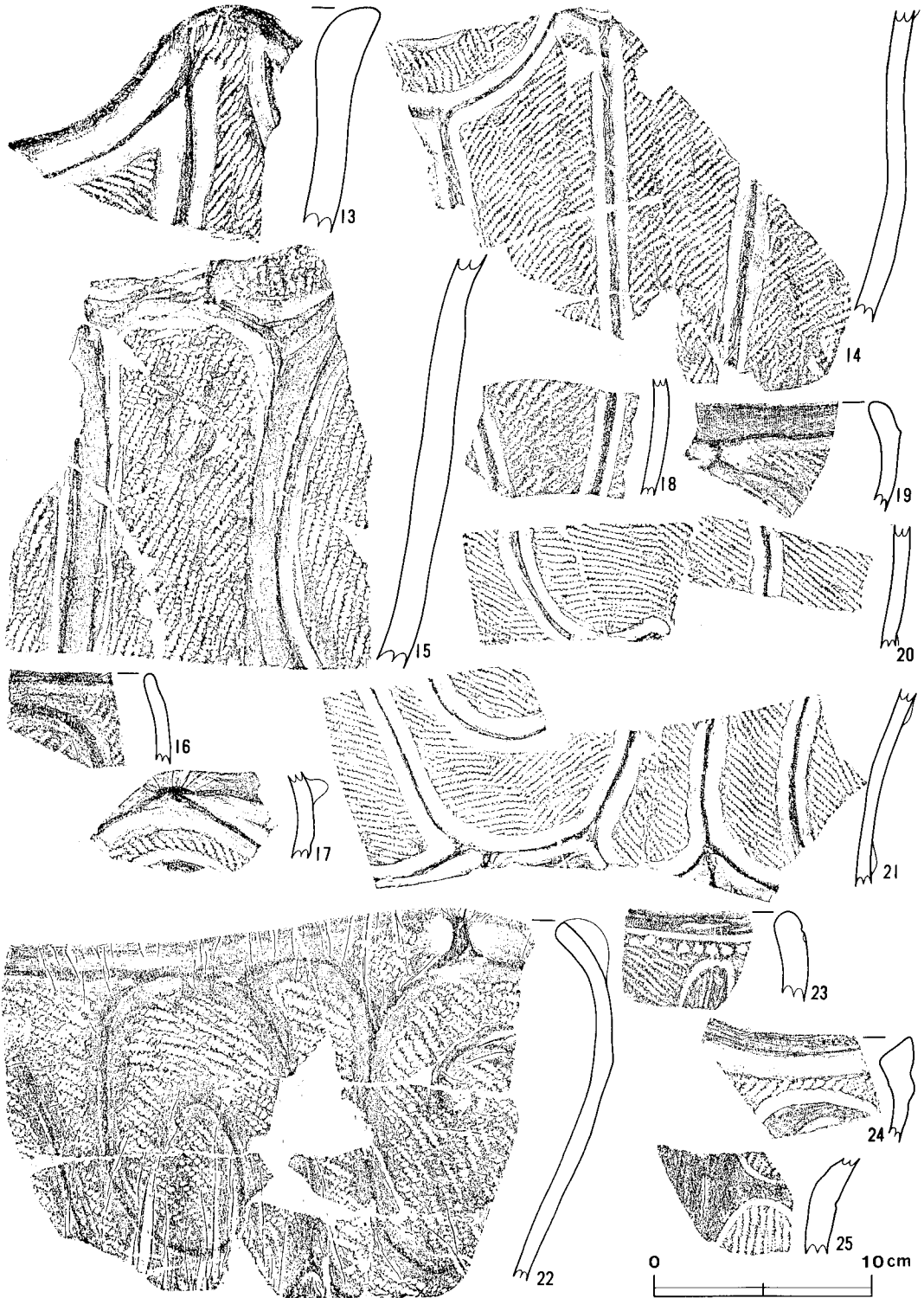
3 は炉の南側の覆土中から正位で出土した鉢形土器の大破片で、胴下半部以下を欠損している。幅の広い口縁部無文帯を有し、頸部に長楕円形の区画文を断面三角形の隆線で施し、以下に縄文を施文する。器形は口縁部がやや外反し、頸部で少しくびれ、胴部がふくらみ、胴部に最大径を有する。頸部と胴部には単節縄文 LR を横位回転で施し、区画文の境界上にも縄文が付されている。内面は丁寧な横ナデが加えられている。胎土には砂粒や小礫を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が褐灰色を呈する。推定口径 27.0 cm、現存高 17.7 cm である。

4 は、南西壁寄り第 19 号住居跡と重複する部分の覆土中から出土した破片 5 点が接合したもので、深鉢形土器の胴下半部片である。破片上端は輪積みで剝がれ、全面に単節縄文 RL が縦位回転で施文されているが、器面は磨滅している。内面は丁寧な縦ナデが施されている。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が灰褐色を呈する。推定胴径 21.0 cm、現存高 8.5 cm である。

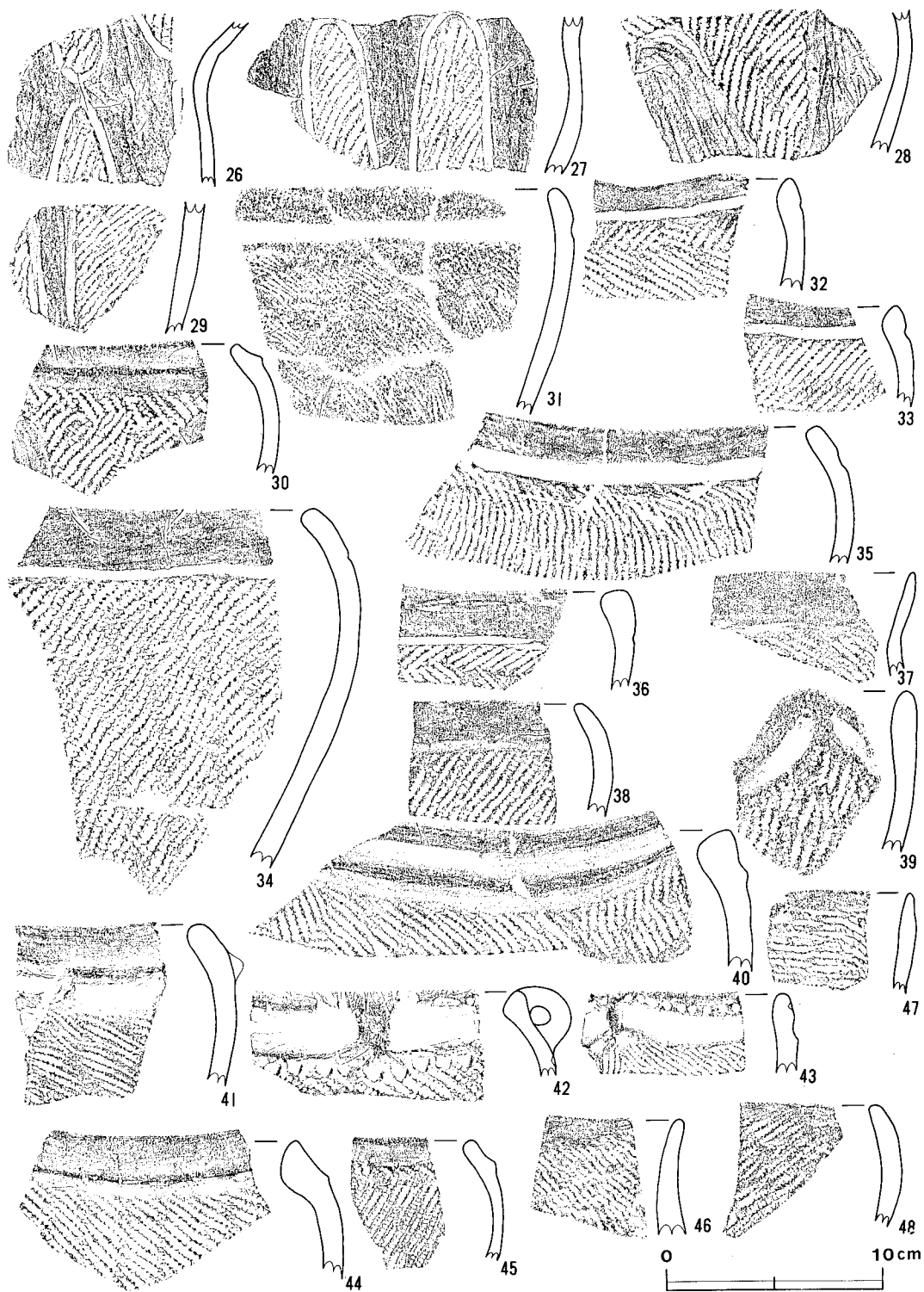
5～8 は、第 I 類に属するものと考えられる。5～7 は a 種、8 は b 種と思われる。5 は楕円区画が隆線でおこなわれ、7 には刺突文も見られる。8 には渦巻状の区画内に縄文が充填されている。9～22 は、第 II 類に分類される。本跡は第 II 類土器が目立っている。隆線の断面形にはやや低平で丸味をもつもの（9・13・14・18）と細く三角形に近いもの（17・19・22）があり、この差が時期差を示すものとも



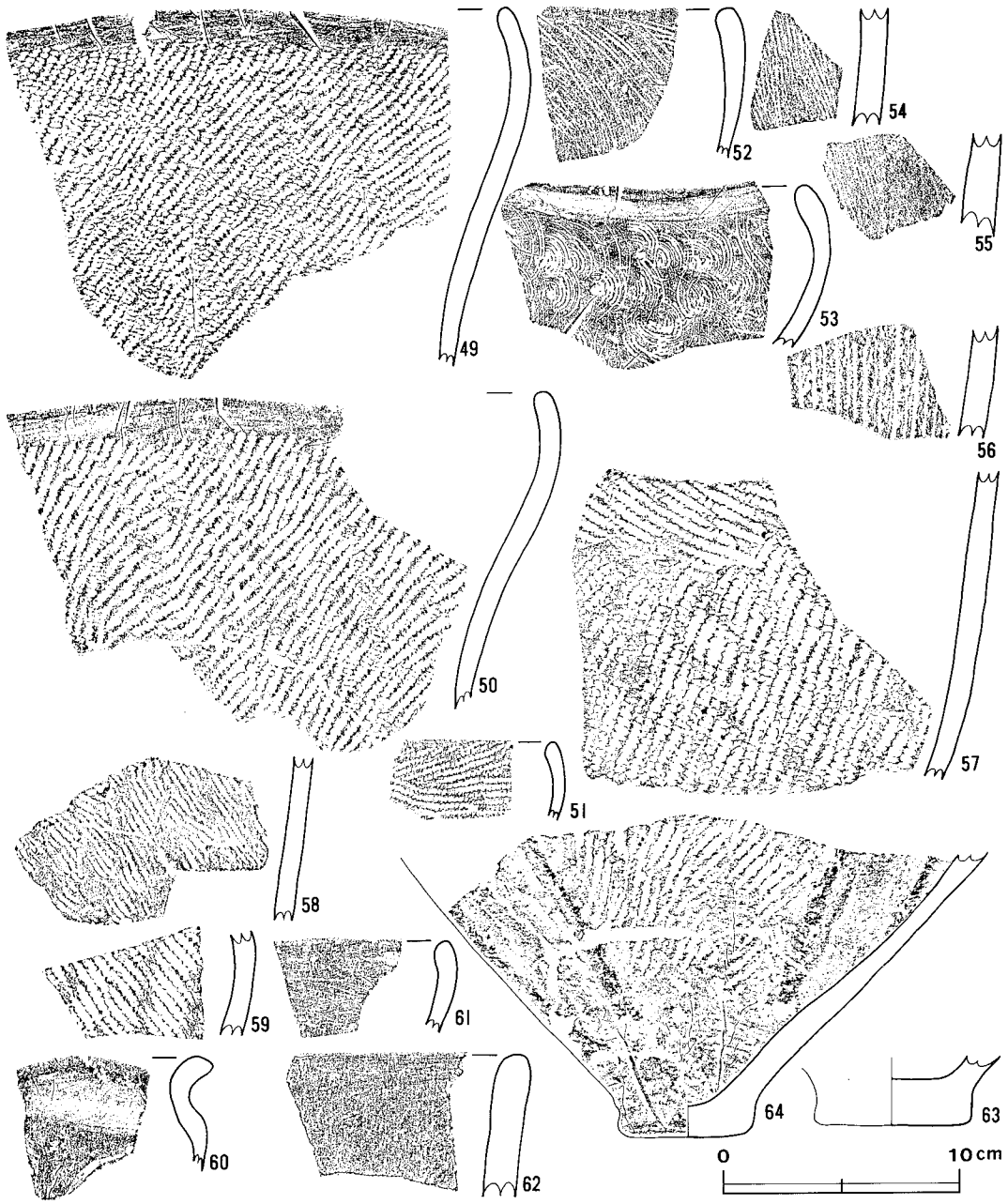
第 26 图 第 20 号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第 27 图 第 20 号住居跡出土土器拓影图(2)



第 28 图 第 20 号住居迹出土土器拓影图(3)



第29図 第20号住居跡出土土器実測図・拓影図(4)

考えられる。モチーフは渦巻文(9・22), 縦長区画文(13~15)が代表的であるが, 前者が主として上半部に, 後者が下半部にみられる例が多い。23~29は, 第Ⅲ類に相当する。23・24が口縁部片, 25~29は胴部片である。23は口縁直下に1条の沈線と刺突列を巡らし, 以下に逆U字状の磨消帯を施し

ている。24は口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下に2本組の沈線による曲線的モチーフを描いている。25・26は胴部のくびれ部の破片で、上下にU字状、逆U字状の区画が接している。27・28は胴下半部の破片である。逆U字状の区画は磨消されるもの(23・28)と縄文が充填されるもの(25～27)に分れる。30は、口縁直下に1条の微隆線を巡らし、以下に細い沈線で逆U字状の磨消帯を施している。31～39は、第V類a種に分類され、区画沈線が明瞭なもの(31～36)、不明瞭なもの(37・38)がある。沈線直下の縄文が1段のみ横位回転され、以下は縦位回転の例(32・36)も少数認められる。31は磨滅が著しい。内湾する例が多いが、37は外反しており薄手である。39は波頂部片で、厳密に考えると本種からはずれる。40・41は、隆線により口縁部無文帯が区画されるb種で、以下は縄文が施されている。42・43は、口縁直下に1条の凹帯と刺突列を有し、以下に縄文が施されている。42は凹帯下に大きな刺突列が巡り、凹帯をまたぐように小さな橋状把手が付されている。43は凹帯上に小さな刺突列が巡り、凹帯の一部につまみあげたような小突起がつけられている。44・45は、断面三角形の微隆線で口縁部無文帯を区画するe種である。46～50は、第V類c種で46・47には無節縄文、その他には単節縄文が施されている。51は、第VI類a種の例である。52～55は、条線文が施文されるもので、52は第VI類b種、53は第V類f種に分類される口縁部片である。53の条線文は半円弧状に施文され、珍しいものである。54～55は胴部片である。56は、縦位の沈線が施された胴部片である。57～59は、縄文のみの胴部片で、58は無節、他は単節縄文を施文している。57は、破片の上半部と下半部で縄文原体が異なっている。60～62は、無文の口縁部片である。60は頸部の屈曲が著しい小形土器で、62は厚手である。

63は、西壁寄りの覆土中から正位で出土した無文の底部片で、内外面ともナデが施されている。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい褐色を呈する。底径6.6cm、現存高2.5cmである。

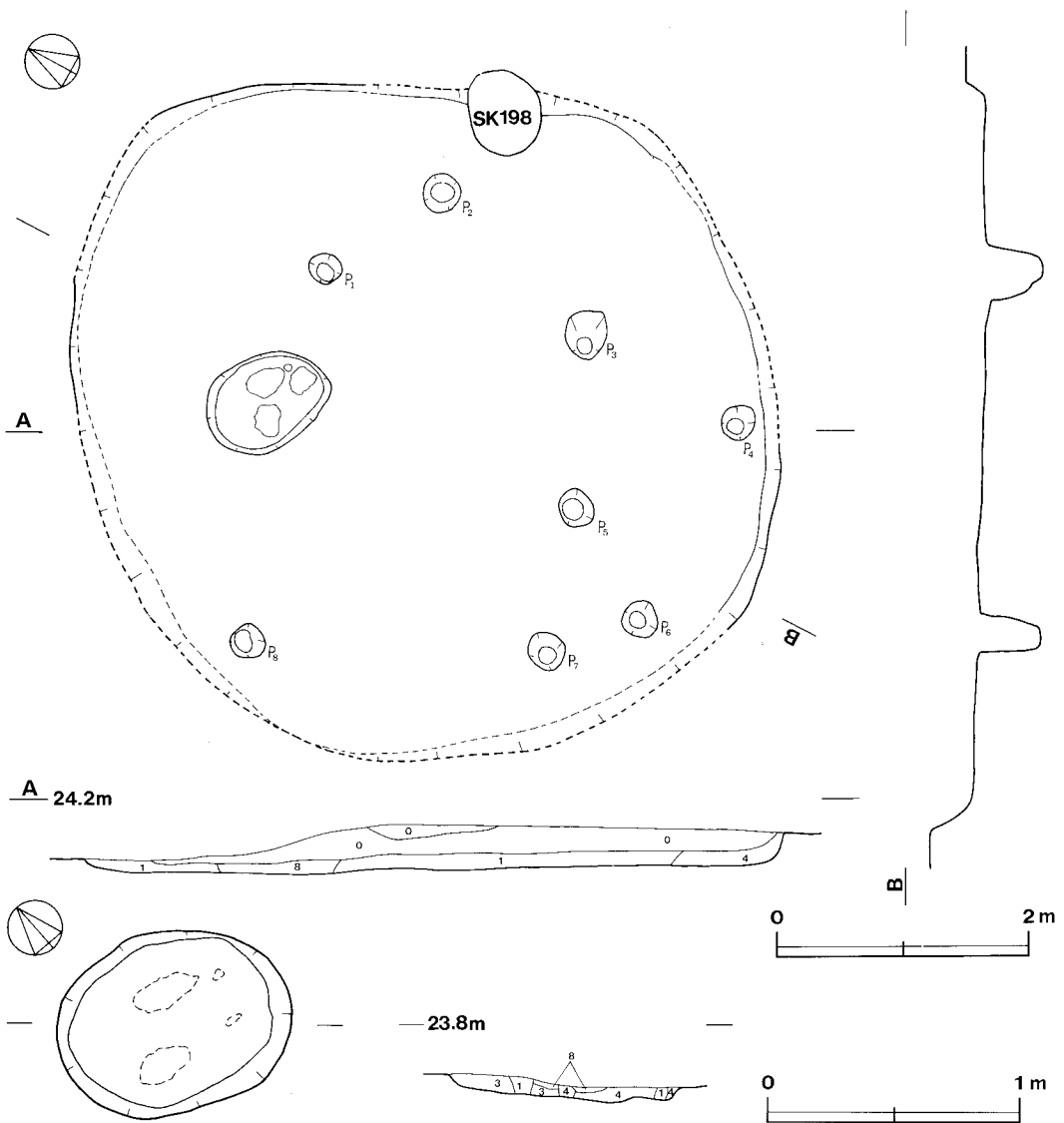
64は、炉の南西側の覆土中から逆位で出土した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片で、7点が接合している。底部から直線的に外傾して立ちあがる。外面には推定4単位の2本組の低平な隆線が垂下しており、隆線間は無文となり、それ以外の器面には単節縄文RLが縦位回転で施文されている。内面は軽いナデが施されている。胎土には多量の石英・長石粒を含み粗雑であるが、焼成は良好である。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰褐色を呈する。底径5.6cm、現存高12.1cmである。

第22号住居跡(第30図)

本跡は、調査区の北西側のL2b5区を中心に確認され、古墳時代前期の所産と推定される第21号住居跡とほぼ同位置で重複している。調査当初は、方形の古墳時代の住居跡1軒と考えていたが、出土土器のほとんどが縄文後期の土器片であり、古墳時代の遺物は土玉1点の他ごく少量の土師器片だけのために、縄文時代の住居跡の複合もあり得ると考え直し、慎重に調査を進めた結果、上下に重複した2軒の住居跡を検出した。本跡の東側には第198号土坑が重複しているが、新旧関係は不明である。また、本跡の北西側を第13号溝が走っている。

本跡は、上記のような状態で検出されたために、平面形は推定による部分が多いが、長径5.70m、短径5.55mのほぼ円形を呈するものと思われ、長径方向はN-0°を指している。

壁高は、南、西、東側でやや高く、20～25を測り、北側で低く8cmである。壁はソフトロームであり硬くないが、覆土の黒色土、黒褐色土とは明瞭な差異がある。南・西壁ではほぼ垂直に立ちあがるが、東・北壁では外傾してゆるやかに立ちあがっている。



第30図 第22号住居跡実測図

床は、ソフトロームであり硬くない。床面中央部が少し凹み、壁際が若干高くなっている。

ピットは、本跡の推定範囲内に9か所認められたが、炉の一部を切っているピットは本跡に伴わないものと判断し、図示しなかった。8か所のピットは、本跡の壁際を巡るように配列されているが、南側に偏在し、炉の北側には認められない。P₁、P₂、P₃、P₅、P₈の5か所が支柱穴と考えられるが、確かではない。P₄、P₆、P₇の3か所のうちの2か所は、その位置からみて出入口に関するピットかと推定される。

炉は、本跡の北側に寄っており、長径96cm、短径74cmの北西側がややふくらんだ楕円形を呈する

地床炉で、掘り込みは最深部で8 cm と浅い。覆土は、中央部に焼土粒子・焼土ブロックを多量、炭化粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色、褐色土が堆積している。炉床は、ロームブロックが凹凸状を呈しており、部分的に硬い個所があるが、本跡の炉はあまり使用された様子はみられない。

本跡の覆土は、上位に第21号住居跡が貼り床を施して構築されているため、覆土下位のローム土を多量に含む黒褐色土と南側の壁際に堆積している締まった褐色土が本跡の本来の覆土であったと考えられる。炉の上面にあたる部分の覆土は、焼けたローム小ブロック・焼土粒子を含む暗赤褐色土である。

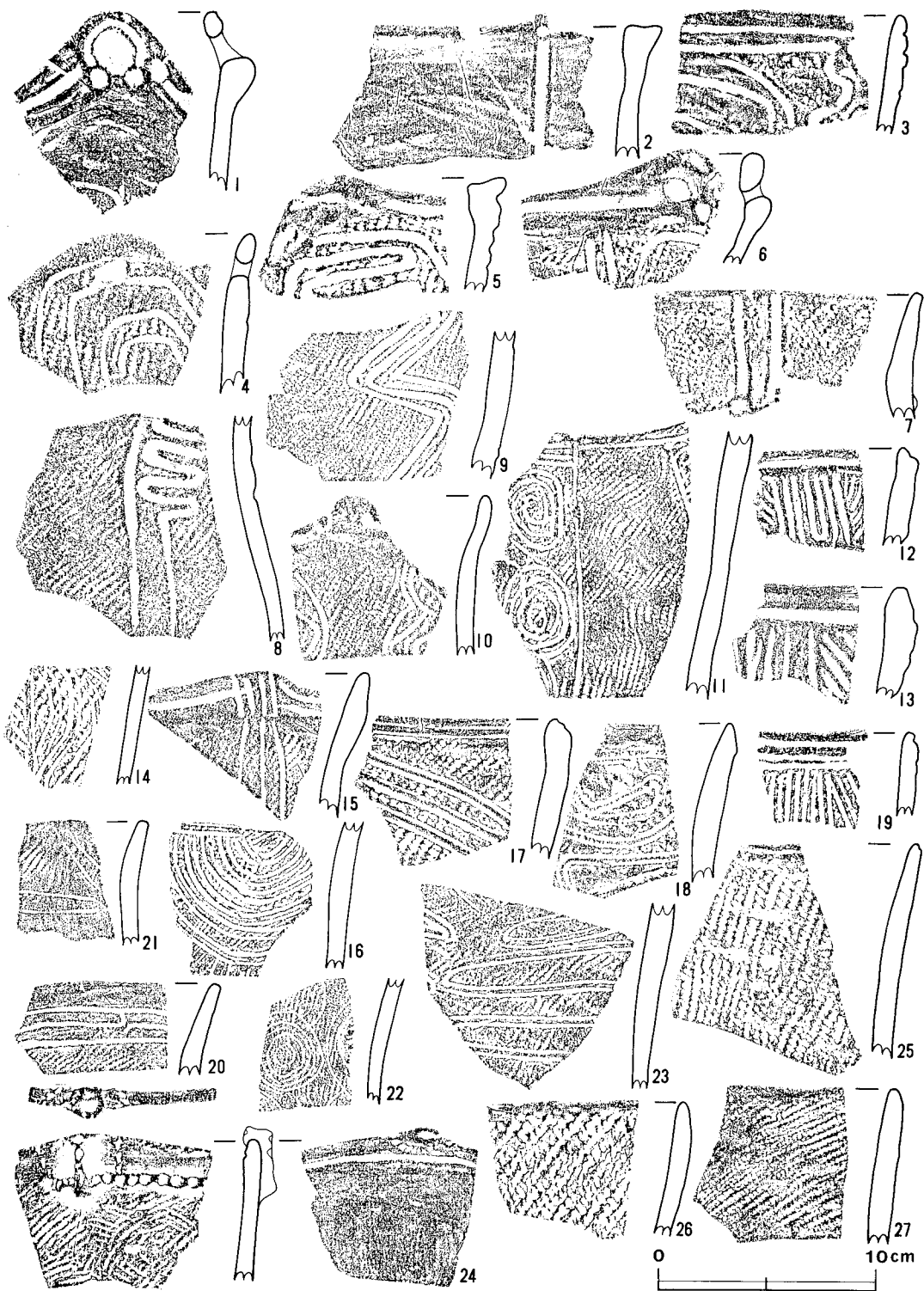
遺物は、覆土中から多量の土器片が出土しており、南西側にやや集中し、東壁際にも1かたまりの集中個所が認められたが、北側からはほとんど出土していない。土器片の総数は419点で、土師器片が4点のみ混入している。

本跡の時期は、覆土中からの出土土器の大半が堀之内Ⅰ式期と判定されるので、ほぼこの時期と推定される。

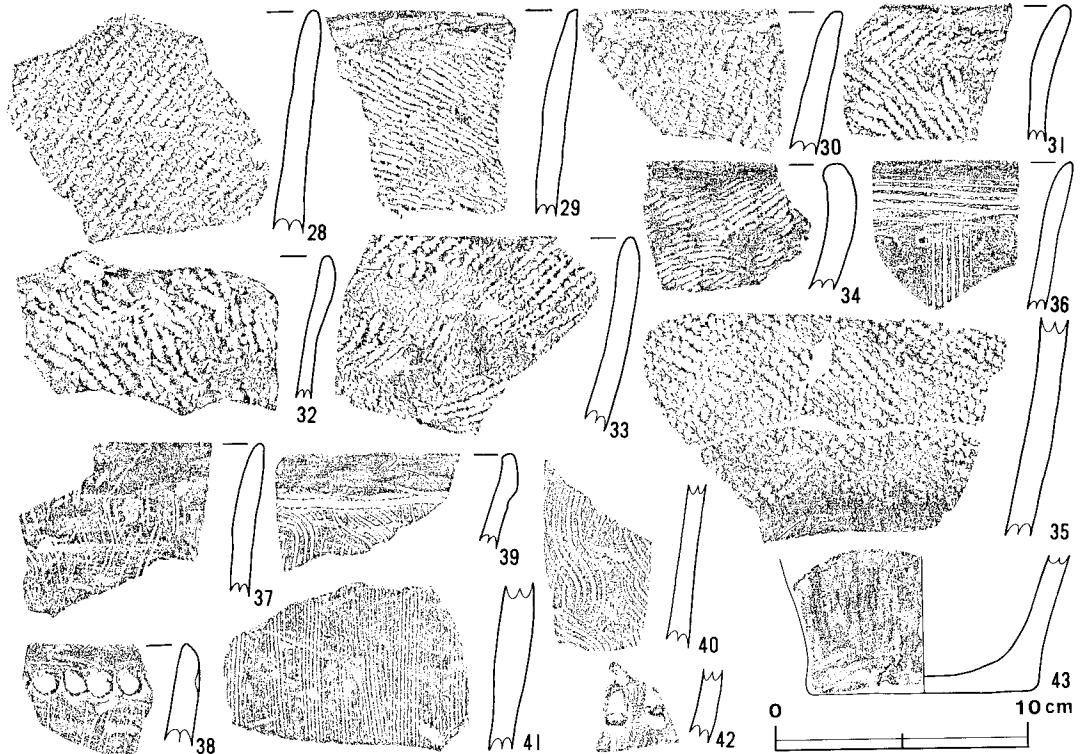
第22号住居跡出土土器（第31～32図1～43）

第31図1・2は、無文地に沈線と刺突文が施される口縁部片である。1は山形の波頂部に1孔を有し、刺突が加えられた円形貼付文が2個付されている。3～22は、縄文地文上に沈線で文様が描かれるものである。3～9の沈線は棒状施工具により施され、太目である。3～7が口縁部片、8・9が胴部片である。6にも1と同様の孔が穿たれているがより小さい。7は縄文地文上に2条の沈線が口唇部から垂下し、2と類似した文様を描いている。8は蕨手文の下半部で、沈線が蛇行しており、9は3本組で鋸歯状に垂下している。10～16・19は、沈線が前者よりも細くなり、多条化する傾向を示している。半円弧状（16）や同心円状（11）および弧状（10・14）、斜位（12・13・19）などに施されている。10・12・13・15・19が口縁部片で、11・14・16は胴部片である。17・18は、半截竹管状施工具により施文される口縁部片で、文様は斜位ないし横位に展開する。18は入組状を呈する。20～23は、細い沈線で文様が描かれるもので、20・21は口縁部片、22・23は胴部片である。器厚は薄くなる傾向を示し、前者より更に新しい様相を呈し、堀之内Ⅱ式とした方がよい例（20・21）も含まれる。22には同心円文があり、11に後続するタイプと考えられる。24～35は、縄文が全面に施文される土器で、35以外は口縁部片である。24は口縁部無文帯を押圧が加えられた1条の紐線で区画し、口唇部から垂下する同様の紐線と結合させ、口唇部上面には小さな円形貼付文が付されている。以下は縄文が施され、口縁部内面には細い沈線が1条巡る。25～34は全面縄文のタイプで、器形は若干外反ないしは直立する例が多いが、26・34は内湾気味で、31は外反がやや強い。口唇部に向って器厚を減ずるものが目立ち、口唇部は丸味をもつ。35は胴下半部の破片である。36～41は、条線文が施されるもので、36～39は口縁部片、40・41は胴部片である。条線文はいずれも縦位に付され、36は条線帯で、38は円形刺突列で、39は1条の沈線で各々口縁部無文帯が区切られている。36・38・41は直線的に、37・39・40は曲線的に施文され、41は密である。42は、刺突文が付された胴部の小片である。

43は、西壁際の覆土中から正位で出土した無文の深鉢形土器の底部片である。外面は縦ナデ、内面は軽いナデが施されている。底面の中央部は薄くなる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。底径9.0 cm、現存高5.5 cmである。



第 31 图 第 22 号住居跡出土土器拓影图(1)



第 32 図 第 22 号住居跡出土土器実測図・拓影図(2)

第 28 号住居跡 (第 33 図)

本跡は、調査区の西側の L2d4 区を中心とした位置に確認され、長径 4.00 m、短径 3.75 m の不整円形を呈し、長径方向は、N-40°-E を指している。

本跡の北東側 6.5 m には第 22 号住居跡、東南東約 6 m には第 20 号住居跡が存在している。

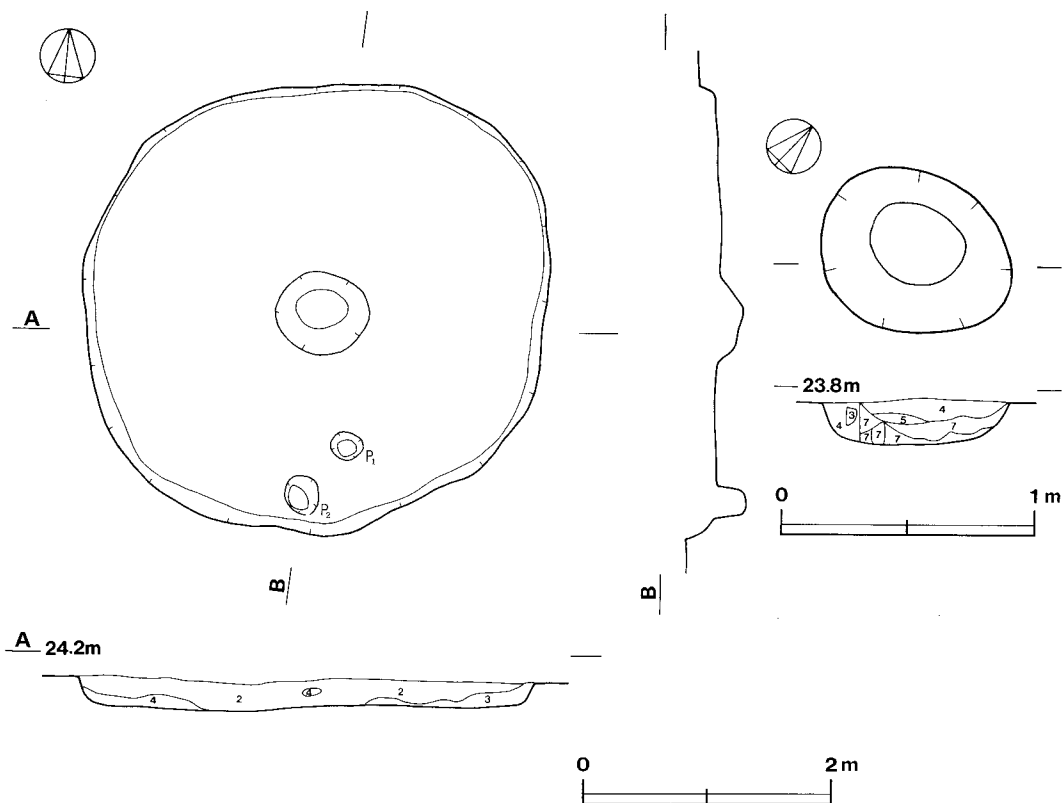
本跡の北西壁を切って第 245 号土坑、本跡の炉の西壁の一部を切って第 219 号土坑がそれぞれ重複し、炉の東側には第 220 号土坑が接している。前 2 者は、本跡より新しいが、第 220 号土坑との新旧関係は不明である。

壁は、ソフトルームで、北壁はほぼ直立し、その他の壁は、やや外傾して立ちあがっている。壁高は、いずれも 20 cm 前後である。

床は、東側がやや高く西側に向かって傾斜している。床面は全体的に平坦で、比較的硬いがあまり強く踏みかためられてはいない。

ピットは、南壁際に P₁、P₂ の 2 か所が検出されたただけである。径 25・30 cm、深さ 17・27 cm の比較的小規模なピットである。

炉は、本跡の中央部に位置し、長径 80 cm、短径 65 cm の東西に長径を有する楕円形の地床炉で、20 cm 程掘り込まれている。炉の上位には、ルーム粒子・焼土粒子を含む褐色土が堆積し、下位にはルーム粒子・焼土粒子を多量に含む赤褐色土が堆積している。炉壁、炉床は良く焼けており、焼土ブロック・ルームブロックがみられる。



第33図 第28号住居跡実測図

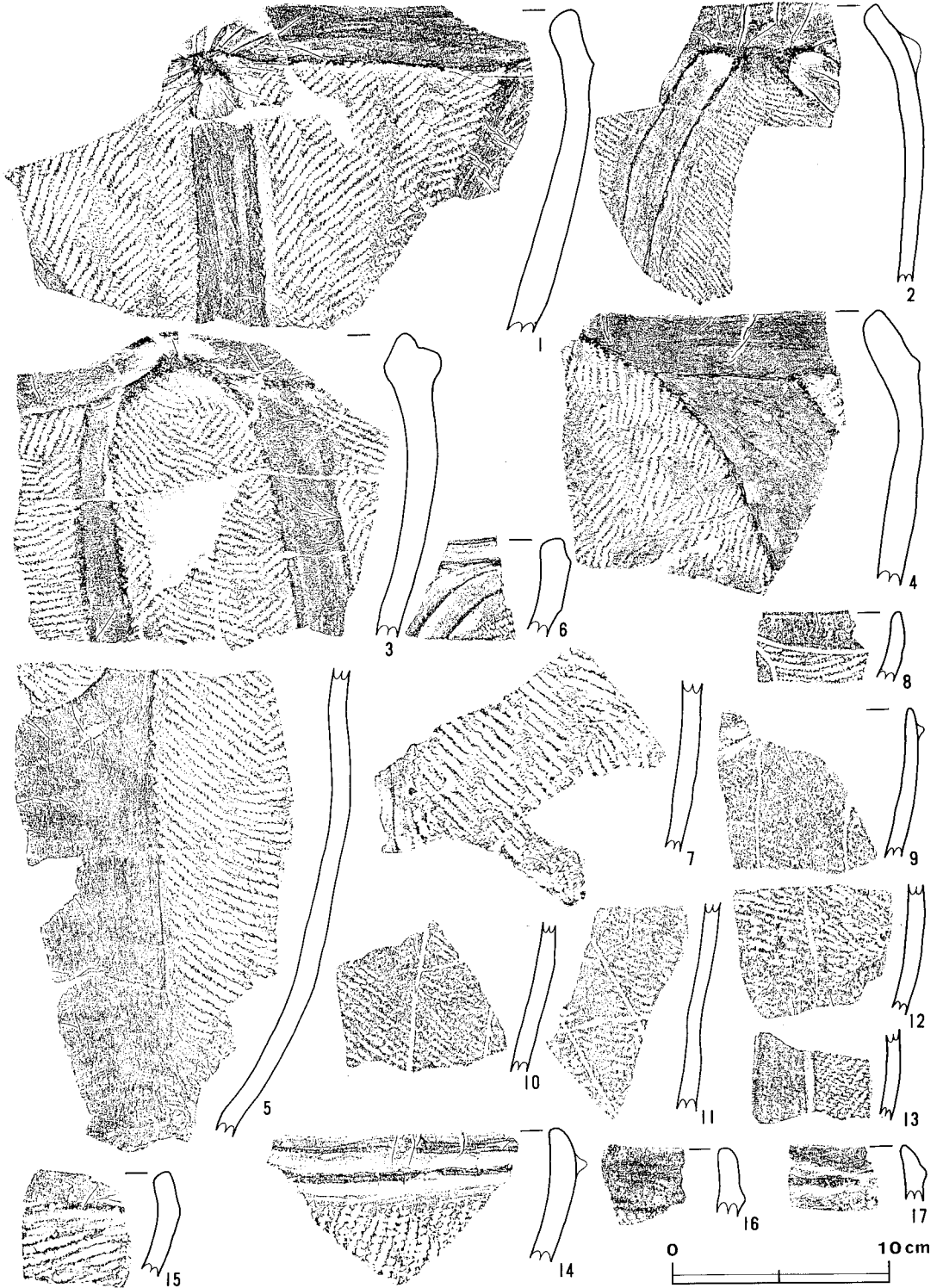
覆土は、基本的には上下の層と壁際の層から成り、上位は極暗褐色土、下位と南・東側の壁近くは暗褐色土、北・西壁近くは褐色土が堆積している。いずれも、ローム粒子・ロームブロックをやや多く含み、炭化粒子・焼土粒子をごく少量混じており、締まりがある。

遺物は、比較的少なく、中央部と北西側の壁際にややまとまっているほかは、北東壁と南壁際に一括土器の出土が見られたにすぎない。土器片の総数は139点で、縄文土器以外は出土していない。

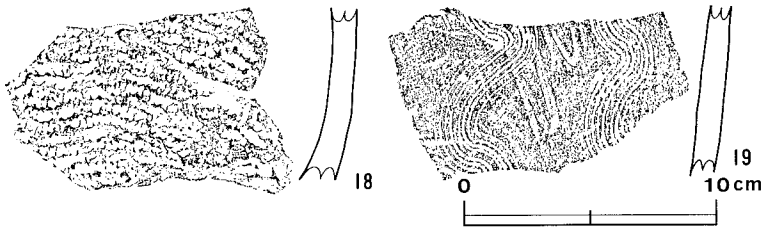
本跡の時期は、覆土中から出土した土器から推定すれば、加曾利EIV式期と考えられる。

第28号住居跡出土土器（第34～35図1～19）

第34図1～7は、第IV類a種に分類される微隆線文が主となる土器群で、V字状、逆U字状の区画内に単節縄文が充填されている。口縁部無文帯を区画する微隆線上にみられる突起は丸味をもっている（2・3）。8・13は、細い沈線だけで施文をおこなう例で、第III類a種かb種に分類されるが、加曾利EIV式期に属する。8が口縁部片、13が胴部片である。9～12は、第IV類b種の好例で、同一個体の可能性が高い。口縁部無文帯を断面三角形の微隆線で区画し、以下は縄文地文上に垂下する細い沈線を施し、口縁部近くは磨消している。a種に比べると薄手であるが、磨滅が著しい。14～17は、口縁部無文帯を微隆線で区画し、以下に縄文を施す第V類e種であるが、14は貼付隆線が太く高目で、b種とも考えられる。18・19は胴部片で、前者は縄文、後者は条線文が縦位波状に施文されている。



第 34 图 第 28 号住居跡出土土器拓影图(1)



第 35 図 第 28 号住居跡出土土器拓影図(2)

第 34 号住居跡 (第 36 図)

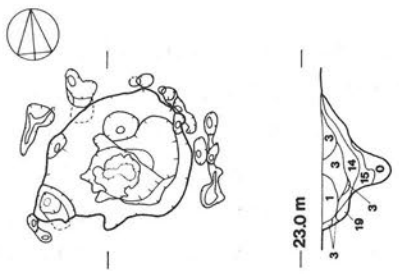
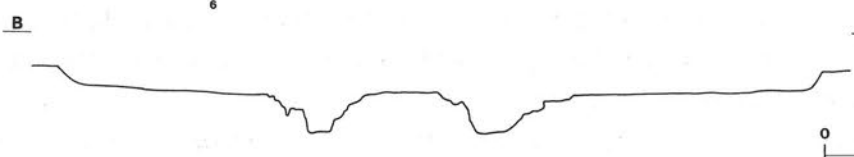
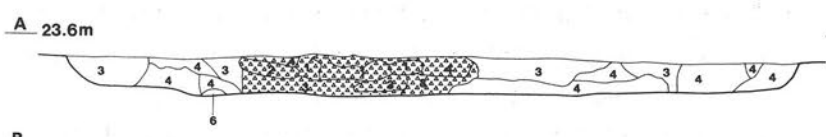
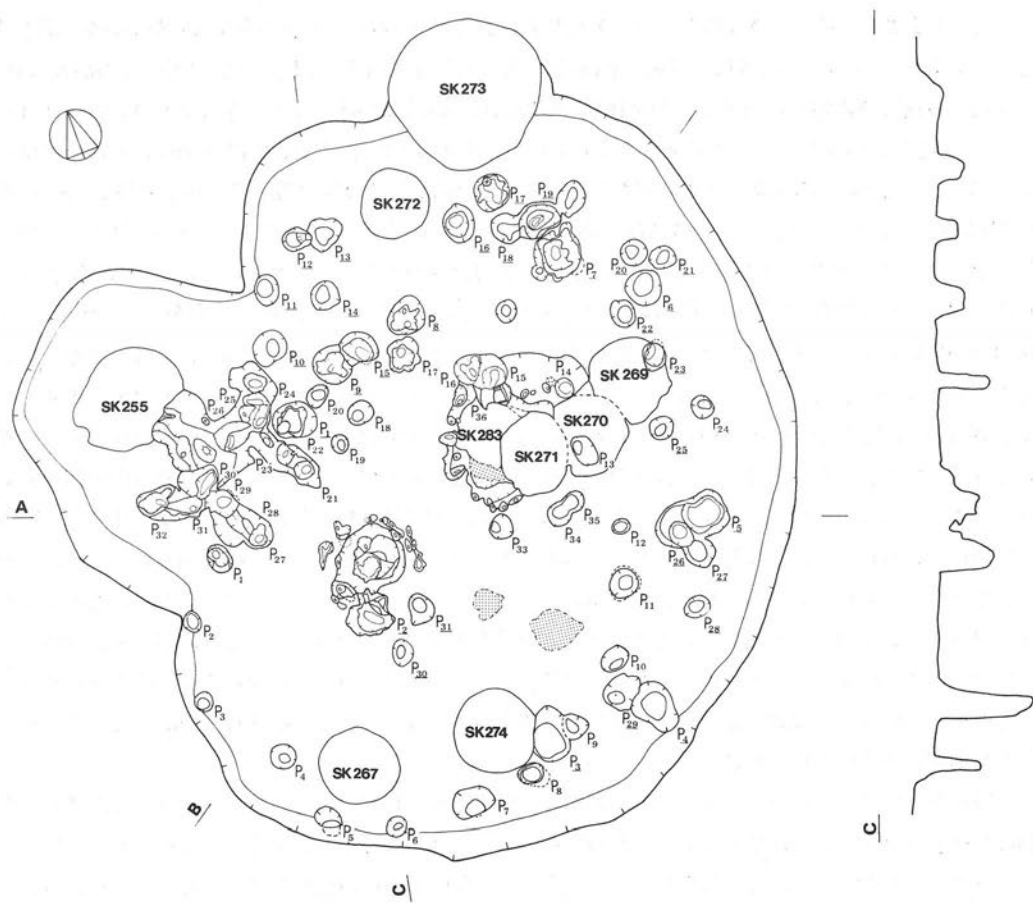
本跡は、調査区の北側の K3f₂区を中心とした位置に、第 58 号住居跡と重複して検出された住居跡で、北西側に張り出し部を有する堀之内 I 式期の住居跡である。本跡の推定範囲内には、多数の土坑が重複している。張り出し部に位置する第 255 号土坑は、貝層を含む覆土の堆積状態から推測すれば、本跡に伴う掘り込みとも考えられる。本跡の南側には、第 267・274 号、北東側には、第 269～271・283 号土坑がある。これらの土坑のうち、出土遺物から時期推定が可能なものは、第 267 号土坑の堀之内 I 式期、第 274 号土坑の加曽利 E Ⅲ 式期だけで、その他は不明である。したがって、第 274 号土坑は、確認面でロームブロックの貼り床が施されていたので、本跡より古い、その他の土坑との新旧関係は不明である。本跡と重複する第 58 号住居跡は、出土土器から判断して加曽利 E Ⅲ 式期と考えられるので、本跡は、第 58 号住居跡の廃絶後、この上に重なるように構築されたものである。また、本跡の南西側には古墳時代前期の第 1 号住居跡が重複している。

張り出し部と炉を通る長径は 8.38 m で、短径は推定で 6.12 m を測り、長径方向は、N-35.5°-W を指している。張り出し部は長さ 87 cm、幅 128 cm を測り、その中央部に第 255 号土坑とした掘り込みを有している。張り出し部の床面は、あまり踏みかためられておらず、壁近くはやや高くなっている。

壁は、南側と張り出し部で検出されたのみで、その他は第 58 号住居跡との重複のため検出できなかった。確認された壁は、ソフトロームから成り、南壁側で 35 cm 前後で外傾して立ちあがり、張り出し部では、20 cm 前後を測り外傾して立ちあがっている。本跡の覆土には多量の貝層が形成されているために、貝層の上面から床面までの深さは 40～45 cm に達しており、最深部では 52 cm を測る。


床は、ロームできわめて硬く良好に踏みしめられており、移植ゴテでたたくと金属音に近い音を発する。床面に段差はなく、全体的には平坦であるが、中央部が少し低く、周壁にむかってやや高くなる傾向を有している。床面の南東部には、径 30～50 cm の焼けた個所が 2 か所認められている。

ピットは、本跡の推定範囲内にきわめて多数穿たれているが、重複する第 58 号住居跡に属すると考えられるピットも多く認められ、本跡にかかわるものと推定されるピットは P₁～P₃₅ の 35 か所である。P₁～P₂₀ の 20 か所は、本跡の炉を取りまくようにほぼ壁に沿って穿たれており、いわゆる壁柱穴が巡るタイプの支柱穴のあり方と考えられる。しかし、これら 20 か所が同時に使用されていたとは考えられず、若干の時間差の存在、建て直しが推測される。P₂₁～P₂₆、P₂₇～P₃₂ はそれぞれ、本跡の北西側の床面上に対となって検出された掘り込みの中に穿たれているピットで、各々 6 か所ずつ相対する位置にあり、深さも大きさも対応している。このピットを伴う掘り込みは、本跡の出入口部の施設に関わるものと判断され、この掘り込みから北西に帯状に延びる浅い掘り込みが各々 2 条あり、これらが張り出し部の第 255 号土坑とした掘り込みに接続している事は、この掘り込みが本跡に伴うものとする理解を可能ならしめると思われる。



第 36 图 第 34・58 号住居跡実測图

さて、本跡に伴うピットのうち P₁～P₂₀の壁柱穴は、径 20～30 cm と小規模なものが多いが、深さはほとんどが 40～60 cm とかなり深く、深さ 80 cm 以上というピットも P₅、P₇、P₁₃などいくつかみられる。

炉は、本跡の南西寄りに位置し、炉本体部の周囲に浅い凹み状の小ピットが巡っており、炉に伴う石囲いなどの何らかの施設があった可能性を示している。小ピットは東側で深さ 10～20 cm の浅い溝状につらなり、北、北西、南西側では不定形な凹みとなっている。炉本体部は長径 79 cm、短径 72 cm の不整楕円形を呈し、35～40 cm ほど播鉢状に掘り込まれている。炉の上部から 20～25 cm ほどゆるやかに掘り込まれてから後にほぼ垂直に 10～15 cm ほど掘り込まれた状況を示している。すなわち  状の形態をなす。炉のほぼ中央部の一段深い掘り込みは、径 25～27 cm ほどの不整形を呈し、側壁に 16 か所の何か硬いものを突き立てたような圧痕が明瞭に残されている。これらのうちのいくつかは相互に切り合うものが認められる。幅 1 cm、長さ 4 cm 程度のものから幅 5 cm、長さ 23 cm のものまで差異があるが、幅 3 cm、長さ 10～15 cm 程度のもものが普通である。炉壁の上位はきわめて良く焼けており、赤く硬くなっている。炉壁の下位や炉床はきわめて硬いが、焼けて赤化はしていない。炉底は中央部がやや盛り上がるように高く、周囲が少し凹んでいる。炉壁の下位の側壁に認められた圧痕は、小石様の硬い物体を立てかけて、五徳のごとき役割をもたせ、その上に土器などをのせて用いた可能性が考えられるが、推測にすぎない。いずれにしても珍しい遺構と思われ、識者のご教示を得たい。本炉の覆土は、大きく上下 2 層に分けられ、上位には黒褐色、暗褐色のローム粒子を多量、貝を少量含む締まりの弱い土が堆積し、下位には灰白色の灰をきわめて多量に含む灰黄褐色、にぶい黄褐色、黒色のやや軟らかい締まりの弱い土が厚く堆積している。一段深い掘り込みの部分には焼土粒子・焼土ブロックを含む灰層が詰まっている。かなり長期間の使用がうかがわれる。

本跡の覆土には、上記のようにきわめて多量の貝層が形成されている。貝層は、本跡の北西側から南東側にかけてブロック状に堆積しており、北西側から順に a, b, c, d, e, f, g の 7 つのブロックに分けた。c, f, g の 3 か所の貝ブロックは長径 40 cm、短径 20 cm 程度の不整楕円形を呈しており、層厚も薄いため一括して取り上げた。その他の各貝層は比較的規模も大きく、層厚も 15～35 cm と厚いので、土層セクションを設けて上位から下位へと順次とりあげた。いずれの貝層も黒褐色、暗褐色の混土貝層、混貝土層で、上位が純貝層に近い混土貝層、下位が混貝土層となる傾向が認められる。ハマグリ、サルボウ、シオフキを主体とする貝層で、部分的にハマグリ主体、ハマグリ・シオフキ主体というような差異がみられるが大きな変化はない。d 貝層の一部は、床上 3～4 cm まで到達しているが、その他の貝層は比較的覆土の上位に集中している。床面から 15～20 cm ほど浮いているブロックが目立っている。この貝ブロックの下に混貝土層が形成されている。貝を含まない部分の覆土は、ローム粒子を含む締まった暗褐色土と褐色土が堆積している。

本跡からの出土土器はきわめて多量に及び、4,712 点に達する。本跡の中央部にやや集中する個所があるが、ほぼ全体から満遍なく出土し、比較的大形の破片が南側の壁近くと北西側に認められる。床面密着の状態で見出された遺物はごく少なく、床面から 20～30 cm 浮いているものが目立っている。土師器片が 24 点含まれていたが、これは本跡の南西側の一部を切って構築された第 1 号住居跡に属するものであろう。縄文土器片は、覆土、貝ブロックの中のいずれも堀之内 I 式期の土器片が多数を占め、加曾利 E III 式期の土器片がこれに次いでいる。後者は、重複する第 58 住居跡に属するものである。土器以外の遺物としては、土器片 8 点、土製円板 2 点、土製品 6 点、石鏃 3 点、貝刃 35 点、貝輪 5 点、骨角製刺突具 4 点、貝製装飾品 5 点などの多彩な資料が出土している。このうち土製品は、第 58 号住居跡に属する可

能性が高い。また、第1号住居跡の覆土中から出土した脚付石皿の半欠品は本跡に伴うものと考えられる。

以上のことから、本跡は北西部に張り出し部を有する堀之内I式期の住居跡と判断される。本跡の特徴の1つは、廃絶後間もない時期にハマグリ、シオフキを主体とした貝ブロックが覆土中に形成され、上記の骨角貝製品を含めた多種多様な人工遺物と自然遺物が検出されたことにある。

第34号住居跡出土土器（第37～41図1～59）

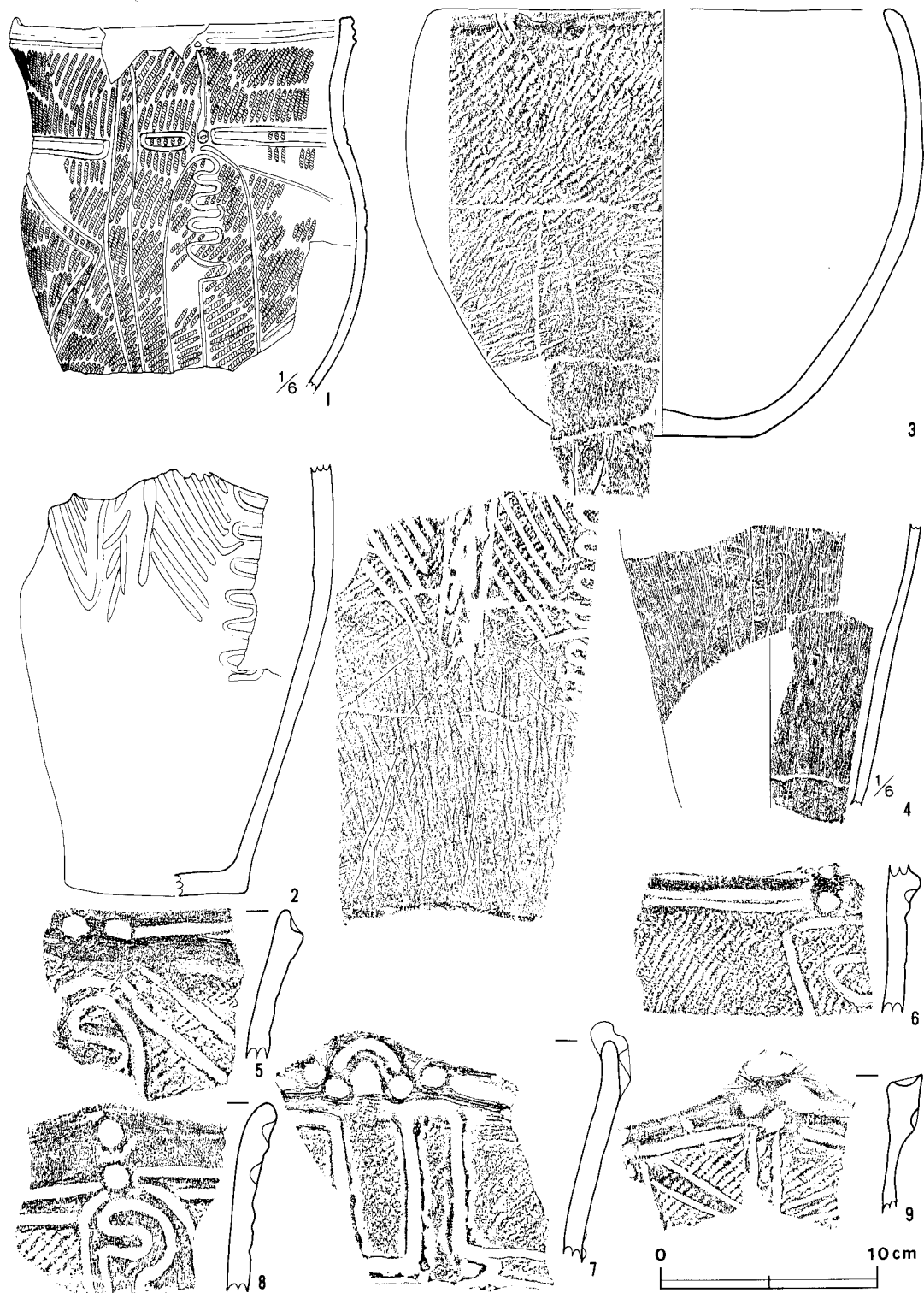
第37図1は、中央やや北東寄りの覆土下位から口縁部を北西方向にむけて逆位で出土した大破片を中心に24点が接合した大形の深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。大小の山形突起を2対ずつ有すると思われるが、小突起1か所を除き欠損している。口縁直下に1条の沈線を巡らし、以下全面に地文となる単節縄文LRを主に横位回転し、斜位回転も一部に用いて施文し、その上に沈線で文様を描いている。突起下から弧状の沈線をゆるくくびれる頸部まで垂下させ、上下端に円形刺突文を付す。頸部は長短の幅の狭い長楕円形区画をもって区画し、各突起下で蕨手文を描き、その間を2本組の「く」の字状の沈線と垂下する沈線で連結している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。推定口径31.6cm、現存高35.2cmである。

2は、炉の直上部の覆土中から出土した底部片を中心に11点が接合した深鉢形土器で、胴下半部から底部にかけてが残存する。外面には単節縄文LRを横位回転で施して地文とし、蛇行沈線、垂下沈線、斜行沈線等を施しているが、欠損部が多く詳細は不明である。底面から9cm程上までは縄文施文後に縦ナデが施されている。内面も縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。底径8.5cm、現存高20.3cmである。

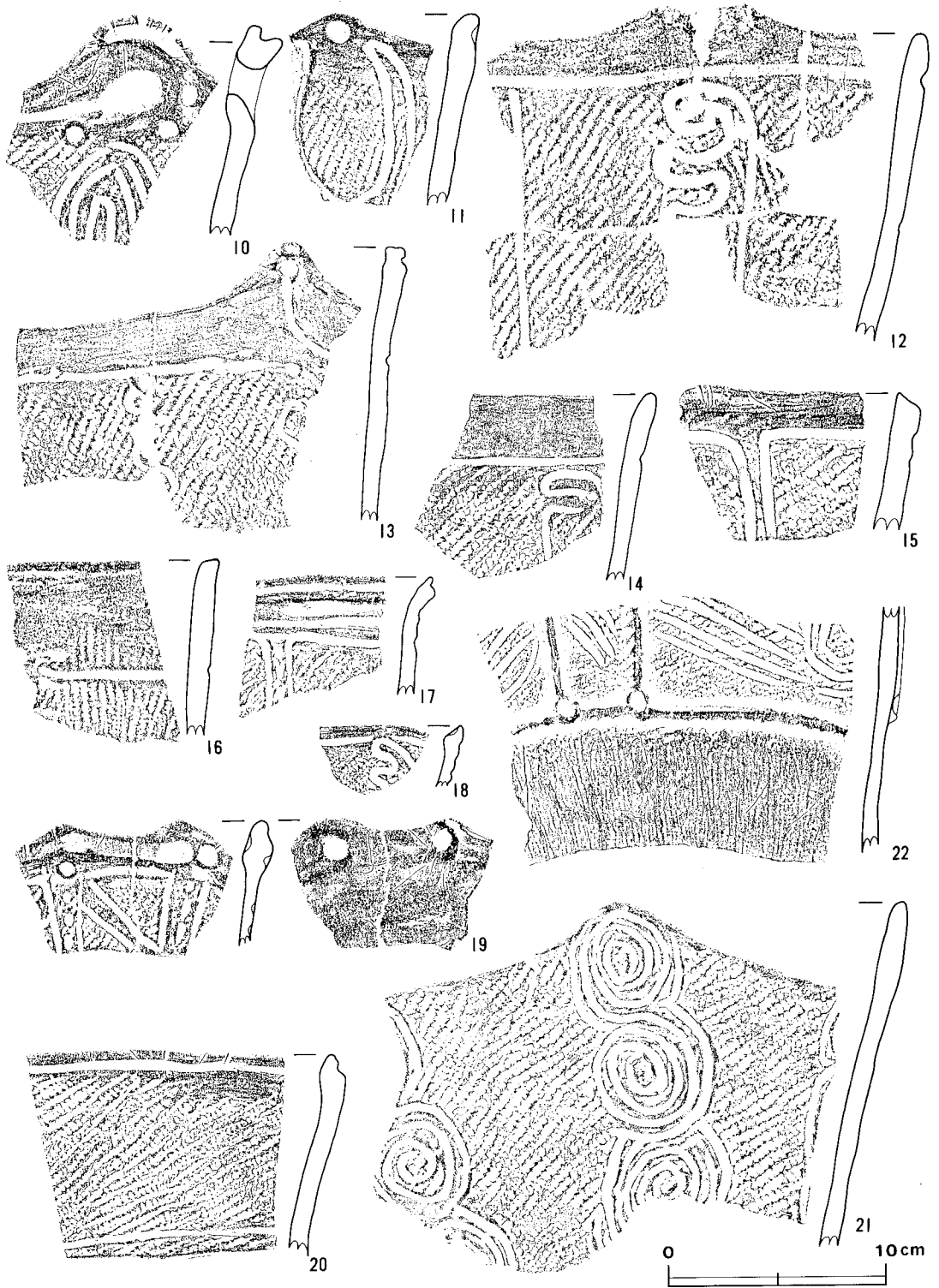
3は、炉の東側および南東側の床面および覆土中から正位で出土した破片7点が接合した内湾する鉢形土器である。口唇部は外削ぎ状を呈し、幅5mmの無文帯を形成し、以下に縄文が付されている。縄文原体は上位と下位で異なり、上位がL $\left\{\frac{L}{R}\right\}$ の合撚り、下位がL $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ の反撚りと思われるが確かではない。底面から4～5cmは無文のまま残されている。底面の中央部は内側へ突出している。内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒や小礫を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。推定口径21.4cm、底径8.8cm、器高20.2cmである。

4は、中央やや北寄りの覆土中から正位で出土した破片を中心に5点が接合したもので、深鉢形土器の胴部片である。外面には多載竹管状施文具による縦位の条線文が施され、胴下半部は縦ナデが軽く加えられている。内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。最大胴径28.1cm、現存高26.3cmである。

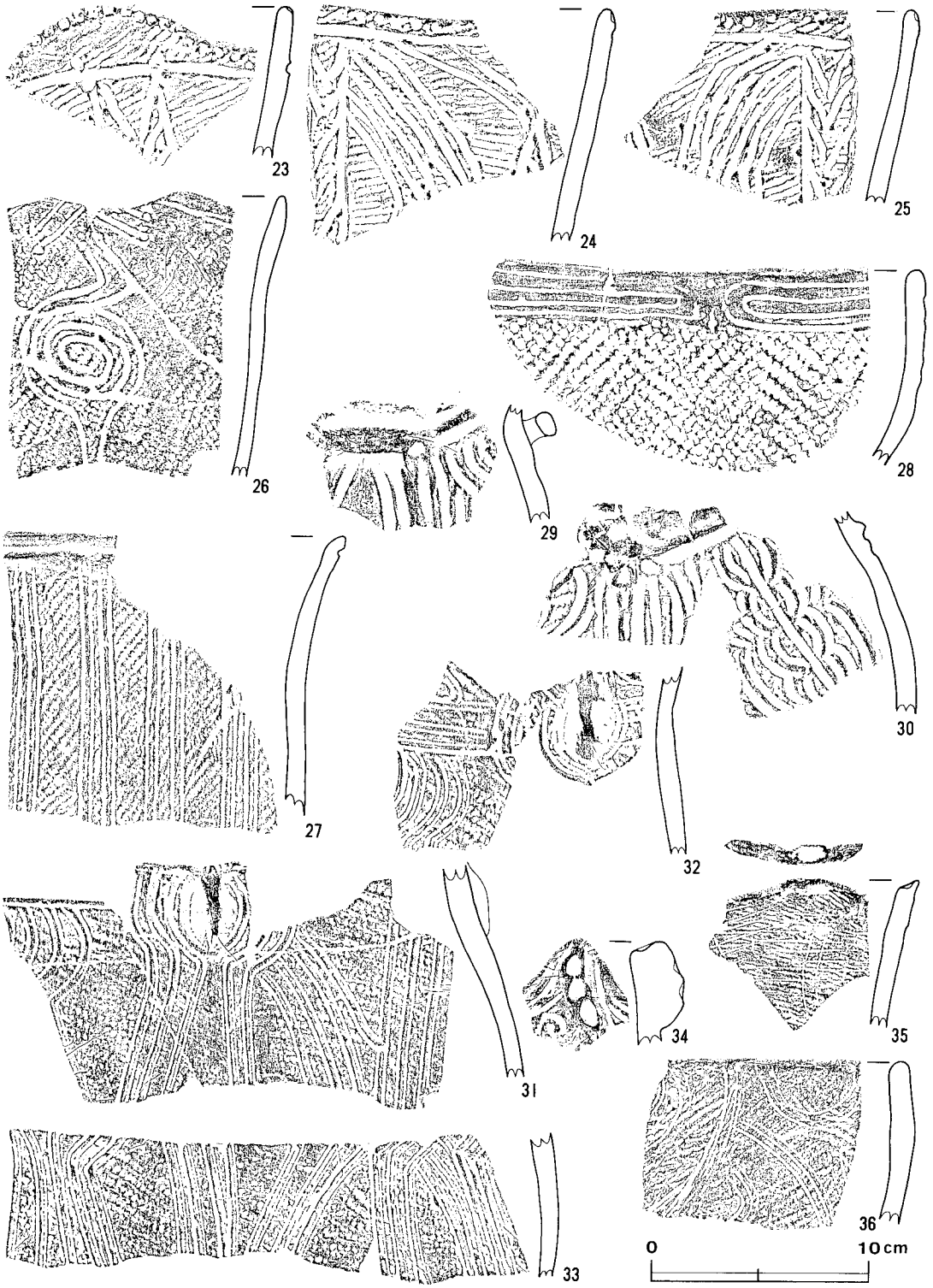
5～37は、縄文地文上に沈線文が施される一群である。この中には各種の土器が含まれる。5～11・13・19は、口縁部に穿孔・刺突文・貼付文など装飾の著しいタイプである。これらは一般に沈線が太く、描かれるモチーフも大柄で、独立性が強い。5・6・8・12・14・18に見られる蕨手文は、この段階に特徴的なモチーフの1つである。18は小形土器である。7の連続コの字状のモチーフは、15・17の長方形の区画文と関連すると思われる。9と19は、縦位と斜位の沈線を組みあわせたモチーフを描いている。11はU字状文を描く。21は、同心円文が縦位に連結するモチーフが独立して施文される土器で、堀之内貝塚の有名な同心円文を有する深鉢形土器の祖形となるものである。22は、深鉢形土器の胴下半部片で、文様帯の下端は隆帯で区画され、以下無文となっている。23～25は、同一個体で単節縄文の地文上に、矢羽状の沈線帯を中心に斜位や弧状の沈線文が充填されている。口唇部外端には小さな円形竹管文が



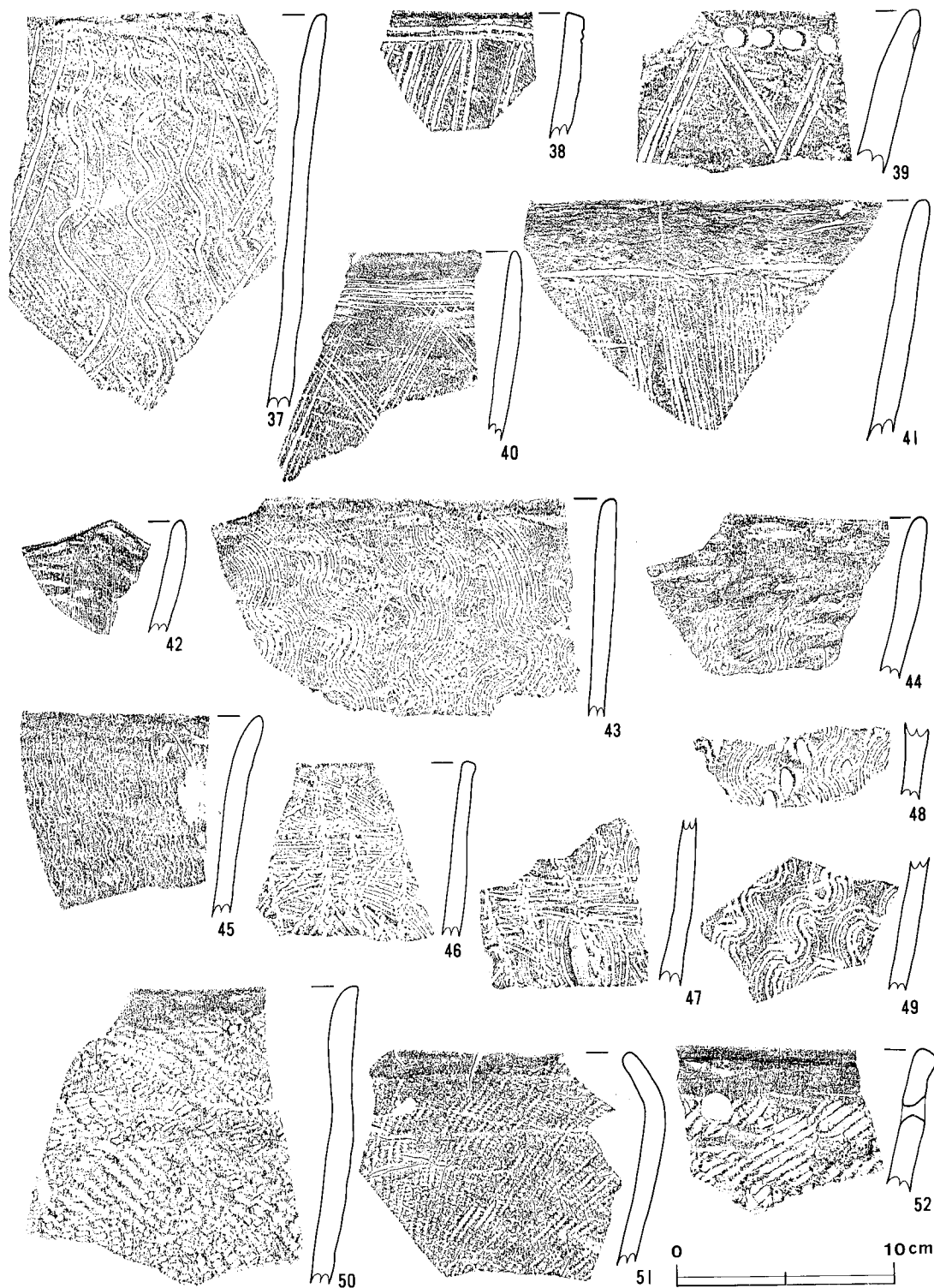
第 37 图 第 34 号住居跡出土土器实测图·拓影图(1)



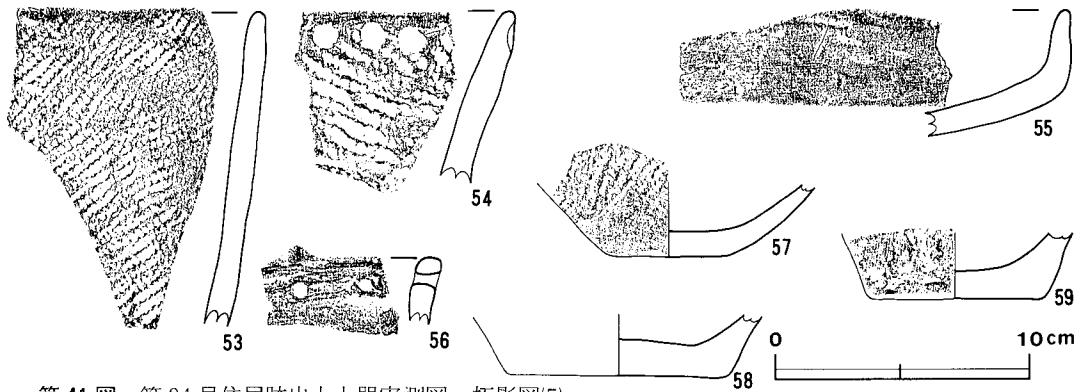
第 38 图 第 34 号住居跡出土土器拓影图(2)



第 39 图 第 34 号住居跡出土土器拓影图(3)



第 40 图 第 34 号住居跡出土土器拓影图(4)



第41図 第34号住居跡出土土器実測図・拓影図(5)

密に施されている。26は、波状を呈する口縁部片で、縄文地文上に同心円文を主に綾杉状の沈線文や刺突文を組みあわせて施文されている。27は、4条単位の縦位の沈線文が施されている。28は、鉢形土器で口縁部に細い沈線で2重の長楕円文を描き、以下に縦位羽状を呈するように縄文を付している。29・30は、同一個体で壺形に近い器形を呈する。隆帯による区画下に串ダング状のモチーフを描いている。31～33も同一個体で、くびれの強い器形をなすと思われる。棒状貼付文を中心に半円弧状文を描き、多截竹管状施文具による沈線で空間をうめる。34は、波頂部の小片で押圧が加えられた隆帯が垂下し、沈線文が施されている。35～36は、細い沈線が横位、弧状に施される土器で、35の波頂部は内側から押圧されて若干凹んでいる。37は、ほぼ直立する深鉢形土器で、縄文地文上に縦位の蛇行沈線が雑に施されている。38～49は、地文に縄文が施されないものである。38・39は、半截竹管状施文具による沈線が縦位・斜位に施される。38は1条の沈線で、39は円形刺突列で口縁部を区画しており、39の沈線は粗い斜格子目状を呈する。40～49は、条線文が文様の主体となる土器で、40～46が口縁部片、47～49は胴部片である。40・41・44は口縁部無文帯を残し、40は条線文数条、41は1条の細い沈線で区画されるが、44は区画されない。42・43・45～47は無文帯を残さず、口縁直下から施文される。条線文は斜格子目状(40)、縦位直線(41・42)、縦位波状(43～45・48・49)、不定方向(46・47)に施文される。46・47は同一個体で、条線文の地文上に押し引き状の沈線文が雑に加えられる。特異な土器であり、同一個体と思われる小片が他の遺構からも出土したが、接合はできなかった。48は、密な条線文間に米粒状の刺突が付加されている。49は、条線というよりは多截竹管状施文具による蛇行文という方が適切かもしれない。50～54は、縄文が主となる土器で、いずれも口縁部片である。50～52は無文帯を残し、53は全面に施文されている。54は口縁直下に円形刺突列が巡っている。52には焼成後の穿孔が認められ、補修孔と思われる。55・56は無文土器で、55は皿状の器形を呈する珍品である。56には焼成前に2孔が穿たれている。

57は、張り出し部に堆積した貝層中から出土した鉢形土器の底部片で、外面に単節縄文LRが横位回転で施され、底面近くと内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が灰褐色、内面が明褐灰色を呈する。底径5.2cm、現存高3.0cmである。

58は、中央やや北寄りの覆土中から正位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、内外面とも軽いナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面にぶい橙色を呈する。底径9.0cm、現存高2.5cmである。

59 は、北西側の張り出し部近くの覆土中から正位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、内外面とも粗いナデが施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。底径 7.0 cm、現存高 2.7 cm である。

第 35 号住居跡 (第 42 図)

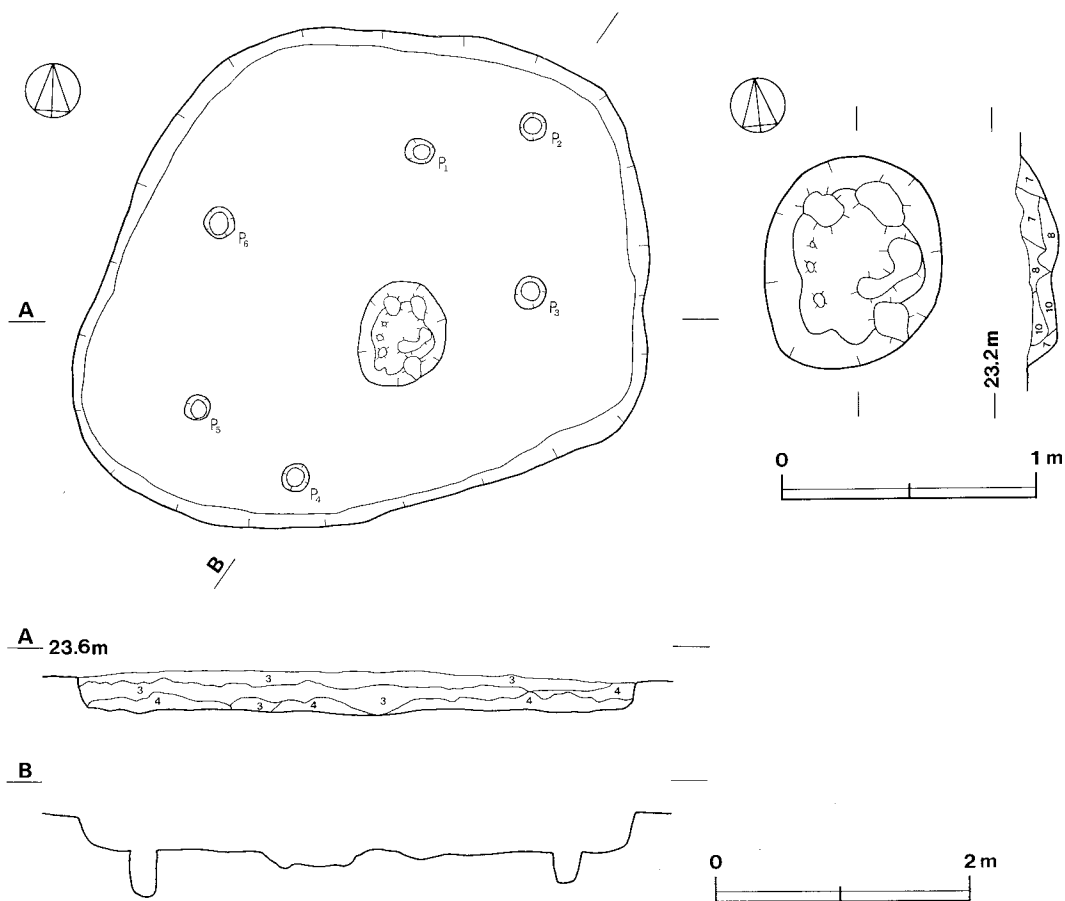
本跡は、調査区の北東側の L4_{b0} 区を中心とした位置に確認されたもので、本跡の西側約 11 m には第 46 号住居跡、西北西約 13 m には第 74 号住居跡、南南西約 16 m には第 47 号住居跡が存在している。

本跡の北東壁には第 383・355 号土坑が重複しているが、新旧関係は不明である。

平面形は、長径 5.30 m、短径 3.92 m の南東側へ張り出す不整楕円形を呈している。東・南壁はほぼ直線的で、北・西壁は曲線的な壁を有している。長径方向は、N-52°-E を指している。

壁面は、やや軟弱であるが、ソフトロームから成り、部分的にロームブロックが混入しており、締まっている。わずかに外傾して立ちあがる部分(北東、南西壁の一部)もあるが、ほぼ直立して立ちあがり、壁高は約 25 ~ 30 cm で、北壁側にやや高い部分がある。

床は、ソフトロームから成り全体的に良く締まり、中央部から北及び北東壁にかけてブロック状のロー



第 42 図 第 35 号住居跡実測図

ムが浮きあがり、ゴツゴツして凹凸があり硬い。特に炉の周辺は締まりが強く、凹凸が激しい状態である。炉の南側約 50 cm、その他の側は約 1 m にわたって硬い面が続いている。床面は、ほぼ平坦であるが、若干西側に向かって傾斜している。東壁から P₂、P₃の周辺の床面は、壁際としては良く締まっており、出入口として使用された可能性がある。

ピットは、炉を挟んで北東側と南西側に 3 か所ずつ計 6 か所穿たれており、いずれも径 20～25 cm、深さ 25～40 cm と小規模でやや浅い。しかし、配列から考えれば、P₁、P₃、P₄、P₆の 4 か所が支柱穴、P₂、P₅の 2 か所を支柱穴とする組み合わせか、P₁～P₆の 6 か所を支柱穴とする組み合わせのいずれかとなると思われる。

炉は、本跡の南側に位置し、南北に長い楕円形を呈する地床炉で、炉床の各所に焼けたロームブロックの高まりが認められ、凸凹している。長径 88 cm、短径 70 cm を測り、深さ 15 cm ほど掘り込まれている。炉壁、炉床とも良く焼き締まり、ガリガリとして赤化・硬化が著しい。炉の覆土に焼土は少ないが、焼土粒子・ローム粒子を含む締まった硬い赤褐色土、暗赤褐色土、鈍い赤褐色土が堆積している。

覆土は、全体としてはレンズ状の自然堆積を示し、上位に暗褐色土、下位と壁際に褐色、黄褐色土が堆積している。いずれの土層にもローム粒子を含み、上位の暗褐色土は焼土粒子、炭化粒子を微量含み締まり弱い。下位と壁際の褐色、黄褐色土は焼土粒子をごく微量含み、締まっている。

出土遺物はかなり多量にのぼり、土器片 1,681 点、土器片錘 16 点、磨石 1 点などがある。土器片の中に 4 点の土師器片が認められたが、これらは混入と思われる。

遺物は、本跡の中央部から南側にかけて集中する傾向を示し、炉より北側ではやや出土が少なく、特に北・西側の壁近くからの出土はほとんどなかった。覆土中からの出土がきわめて多く、床面から出土したものはごく少数である。

本跡の時期は、炉内出土土器片および覆土中出土土器から判断すれば、加曾利 EIV 式期と考えられる。

第 35 号住居跡出土土器（第 43 図 1～32）

第 43 図 1～8 は、微隆線による施文が主となる第 IV 類土器で、1～5 は口縁部片、6～8 は胴部片である。波状を呈する口縁部片が多く、微隆線が左右から寄り合うが、若干の間隔をあけているもの（1・2）と、接してつまみ状に盛り上げる例（5）に細分できる。8 は、下半が無文で底部近くと思われる。9・10 は、橋状把手を有する例で、共に把手上にも縄文が施されている。10 は波頂部片で、9 は口縁直下に大きな橋状把手をもつ。11～14 は、口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し、以下に細い沈線で曲線的モチーフを描いている。11・14 は微隆線の上下に、12・13 は下にだけ円形刺突列を加えている。これらは第 V 類 b 種に分類される。15～22 は、口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し、以下に縄文を施すタイプで、第 V 類 e 種である。断面三角形を呈する微隆線が顕著な例（16・19・20）や不明瞭な例（21・22）もある。16 は無文帯につまみあげられたような突起をもち、17 は波頂部片である。23～25 は、無文帯を区画しない第 V 類 c 種である。23・24 は無文帯の幅がやや広く、25 の幅が狭いのは小形土器の故であろう。27・28 は、縄文のみの胴部片で、28 には浅い凹線が 1 条垂下している。29 は、縦位の蛇行する条線文が施された胴部片で、30 は、無文の口縁部片である。

31 は、覆土中から出土した深鉢形土器の底部片で、外面には胴部文様の末端と考えられる縄文が認められる。縄文は単節 LR の縦位回転である。全体に整形が悪く、底部の内外面とも剥落している。胎土



第 43 图 第 35 号住居跡出土土器実測図・拓影図

は砂粒を含み、焼成は不良で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が明赤褐色を呈する。底径7.0 cm、現存高5.3 cmである。

32は南西側の覆土中から出土した破片2点が接合した無文の小形の深鉢形土器の底部片で、内外面とも縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が褐色、内面が灰褐色を呈する。推定底径5.0 cm、現存高4.2 cmである。

第46号住居跡 (第44図)

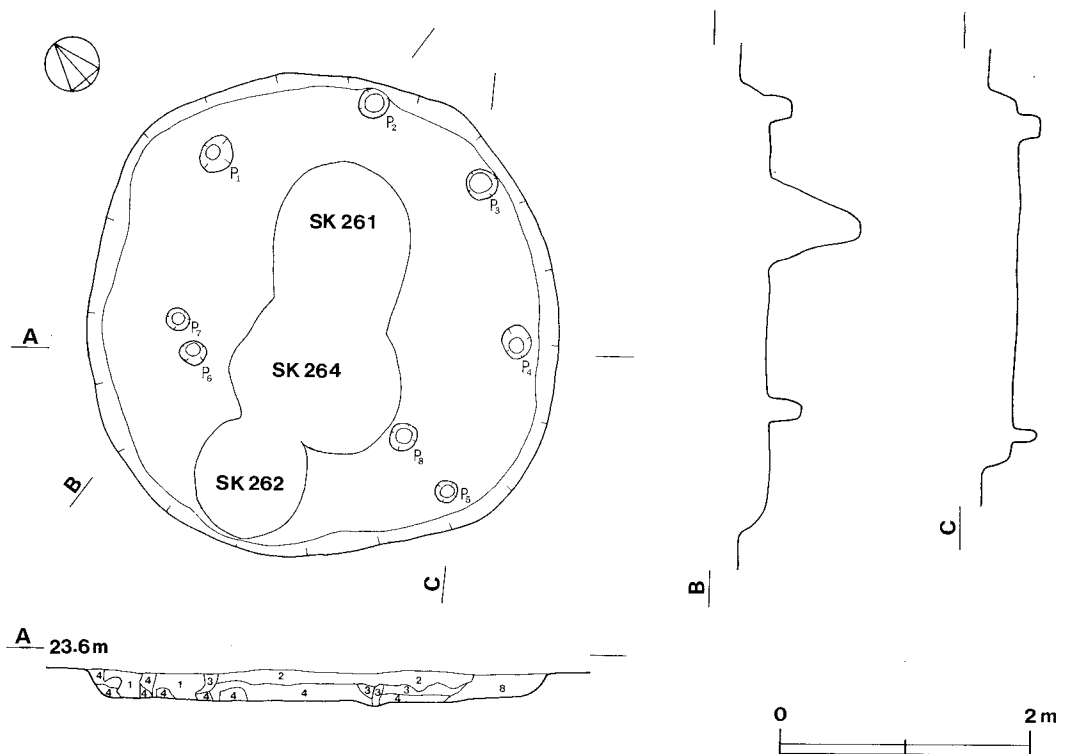
本跡は、調査区の東側のL4c6区を中心とした位置に確認され、重複する第261・262・264号土坑により炉を含めた中央部分を破壊された住居跡である。本跡の北北西約2 mには第74号住居跡、南東側約14 mには第47号住居跡が存在している。

平面形は、長径3.90 m、短径3.77 mの不整形円形を呈している。長径方向は、N-36.5°-Eを指している。

壁は、ソフトロームでやや外傾して立ちあがり、壁高は20~24 cmを測る。

床は、ローム土であり特に踏み固められた様子もなく、やや軟弱で若干西側に傾斜しているが、全体的には平坦である。ロームブロックの浮き上りは全く認められない。

ピットは、P₁~P₈の8か所が検出されたが、P₁を除いては深さが20~30 cmのものが多く、それよりも浅いピットもある。配列や規模から考えれば、本跡の支柱穴はP₁、P₂、P₄、P₅、P₆、P₇と想わ



第44図 第46号住居跡実測図

れるが、第 262 号土坑によって失われた支柱穴もあったことが想定される。その他のピットは浅く、性格不明である。

炉は、本跡の中央部に構築された第 264 号土坑によって破壊されたと考えられ、同坑の覆土にはきわめて多量の焼土粒子が含まれていた。

覆土は、本跡の北西側を中心に攪乱が認められるが、全体としては、上位に極暗褐色土、下位に褐色土が自然堆積している。覆土中には、ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を少量含んでおり、上位は締まりが無く、下位は締まっている。

遺物の出土はやや少なく、全体で土器片 307 点、土器片錘 3 点である。出土状態は、土坑が重複している中央からやや南西側にかけてが多く、南東壁近くと西壁寄りおよび北側に少量まとまっているにすぎない。いずれも覆土中から出土している。

本跡の時期は、重複する他遺構との新旧関係および出土土器から推定すれば、加曾利EⅢ式期と考えられる。

第 46 号住居跡出土土器（第 45 図 1～16）

第 45 図 1 は、隆線と沈線の組みあわせがみられる胴部片で、胴部がやや張る器形を呈する。第Ⅱ類と第Ⅲ類の関連を示すものといえよう。2～4 は、第Ⅲ類と考えられ、3 は口縁直下に爪形状の刺突文を付し、以下に 1 条の沈線を巡らして縄文を施している。2・4 は直線的・曲線的な磨消帯を有する胴部片である。5～7 は微隆線による施文を主とする胴部片である。8 は、無文の口縁部片で断面三角形の隆線を 1 条巡らしている。9 は、第Ⅴ類 a 種で、口縁部無文帯を 1 条の浅い沈線で区画し、以下に縄文を施している。10・11 は、縄文のみの内湾する深鉢形土器で、第Ⅵ類 a 種である。12・13 は縄文のみの、14 は、細かい条線文を有する胴部片である。

15 は、南西側の壁近くの覆土中から正位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、底面中央部が少し凹む。内外面とも縦ナデが施されている。内面は剥落が著しい。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい褐色を呈する。底径 6.0 cm、現存高 5.0 cm である。

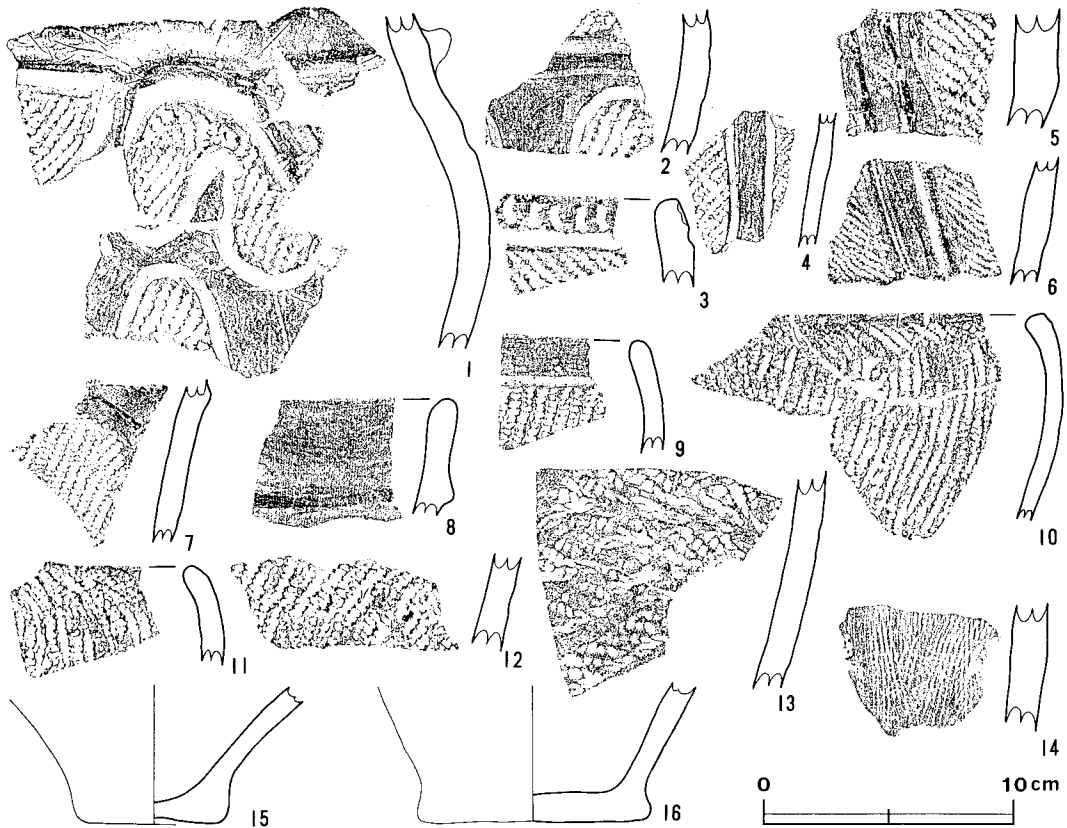
16 は、南西側の覆土中から正位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、底部がやや突出する。内外面とも軽いナデが施されている。胎土は長石・石英粒をやや多く含み粗雑で、焼成は良好である。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。底径 9.0 cm、現存高 5.5 cm である。

第 47 号住居跡（第 46 図）

本跡は、調査区の東側の L4gs 区を中心とした位置に検出され、本跡の南南西約 11.5 m には第 48 号住居跡、北北東約 16 m には第 35 号住居跡が存在する。本跡は、当初、平面形が方形を呈し、覆土が黒褐色、極暗褐色という黒っぽい色調を主とし、確認面から 10 cm 程度掘り込むと、炭化材や焼土ブロックを多量に含む層があらわれたため縄文時代よりも後の住居跡ではないかと想定して調査を開始したが、意外にも縄文時代の遺構であった。

本跡の炉の北側に第 288 号土坑が存在するが、その上面を本跡の貼り床によって覆われていることや出土遺物からみて、土坑は本跡より古い。また、本跡の南東壁際に第 7 号埋甕遺構が検出されたが、これは本跡に伴うものである。

平面形は、長径 5.08m、短径 4.62m の不整円形を呈しており、長径方向は、N-31.5°-W を指して



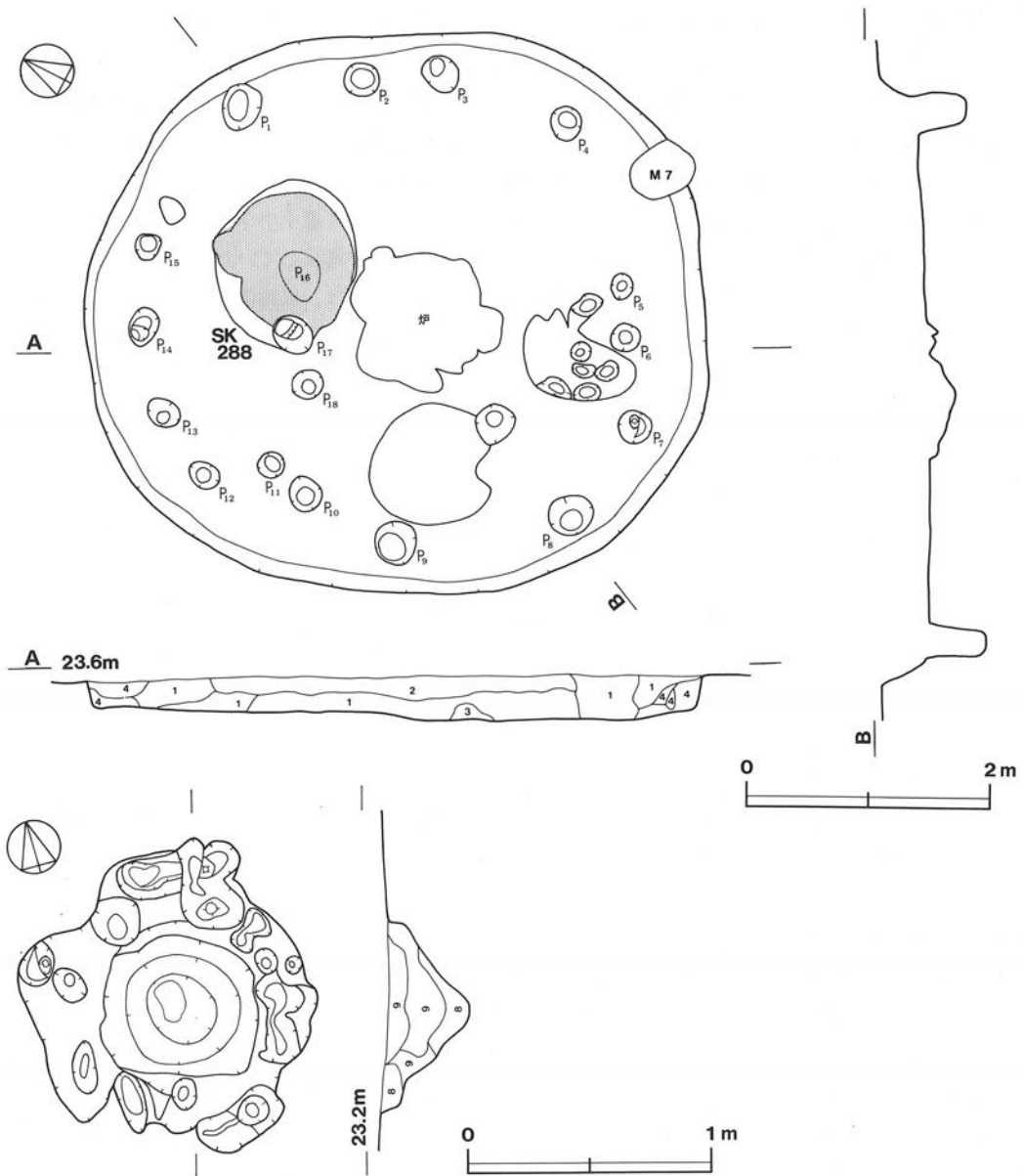
第45図 第46号住居跡出土土器実測図・拓影図

いる。

壁は、ソフトロームで壁高20～35cmを測り、全体としては外傾して立ちあがっている。北・北西側は壁高が低く20～25cm、東・南・南東ではやや高く30～35cmとなっている。

床は、中央部の炉の周辺が低く凹み、壁際に向かって徐々に高くなる。床面は、炉の北側、南側、南西側の3か所に不定形の凹部が認められるほか、小規模な凹みが処々にみられる。全体的に南側がやや低い。床面は、ロームブロックの露出があり、硬くゴツゴツしている。床面上に焼土粒子・焼土ブロックや炭化材が多量に散在しており、炉の南側には焼土ブロックが付着している個所も認められる。これらのことと後記する覆土の様子から判断して、本跡は焼失家屋と思われる。3か所の床面の凹部のうち北側のものは、第288号土坑の上面に施した貼り床のロームが土圧で沈み、凹んだものである。貼り床は敲き締められたように硬く、一部は火を受けて赤変している。南側の凹部は、径・深さとも20cm前後の小ピットと不定形の凹みから成り、覆土と同様の締まりの弱い黒褐色土、暗褐色土が堆積している。南西側の凹部も、南側のものと同様で、凹部の北半部は軽い凹凸が多く、南半部に凹みが集中している。凹みの深さは10～20cmである。

ピットは、壁の内側を巡るように18か所検出され、前記の凹部内に穿たれた20cm前後の深さのピットは除外している。主柱穴の想定はむずかしいが、P₁、P₃、P₅、P₈、P₁₂の5か所は深さが37～51cm



第46図 第47号住居跡実測図

とほぼ揃っており、炉を囲むような位置に穿たれていることからその可能性が高い。しかし、 P_5 、 P_{12} は径が20cm前後と小さく、他のピットと異なる。あるいは壁柱穴として $P_1 \sim P_{15}$ のうちの大多数が同時に使用されたのかもしれない。

炉は、本跡の中央部に位置する地床炉で、周囲に浅い凹み状の小ピット多数を伴っており、第34号住居跡と炉と同様のあり方を示している。周囲の凹みはほぼ拳大の石などで2重に囲った痕跡をあらわすものと考えられるが明らかではない。炉の本体部は、径70×65cm程度の略円形の掘り込みで、断面形は

漏斗状を呈し、最深部は40 cmにも達している。炉壁は底面近くまでよく焼けて締まっており、硬い焼土ブロック状を呈しているが、炉底と立ちあがり部分8 cm程度は赤変が認められない。この部分は、ハードロームが硬化しており、第34号住居跡のような明瞭な痕跡は捉えられなかったが、やはり何かを立てて五徳のごとき用法をとったことが推測される。炉内の覆土は、多量の焼土小ブロック・焼土粒子と少量の炭化粒子を含む締まりの弱い暗赤褐色土、極暗赤褐色土である。

本跡は、上記のように火災住居跡と考えられ、覆土の中央部を中心に焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子を多量に含む締まり弱い土層が堆積していた。含有物の量差を主に1～26層に分層したが、壁際の一部に褐色土が主に認められるほかは、黒褐色土、極暗褐色土、暗褐色土が大半を占めている。火災後に人為的に埋め戻された可能性が高いが、壁際は自然崩壊による埋没が考えられる。

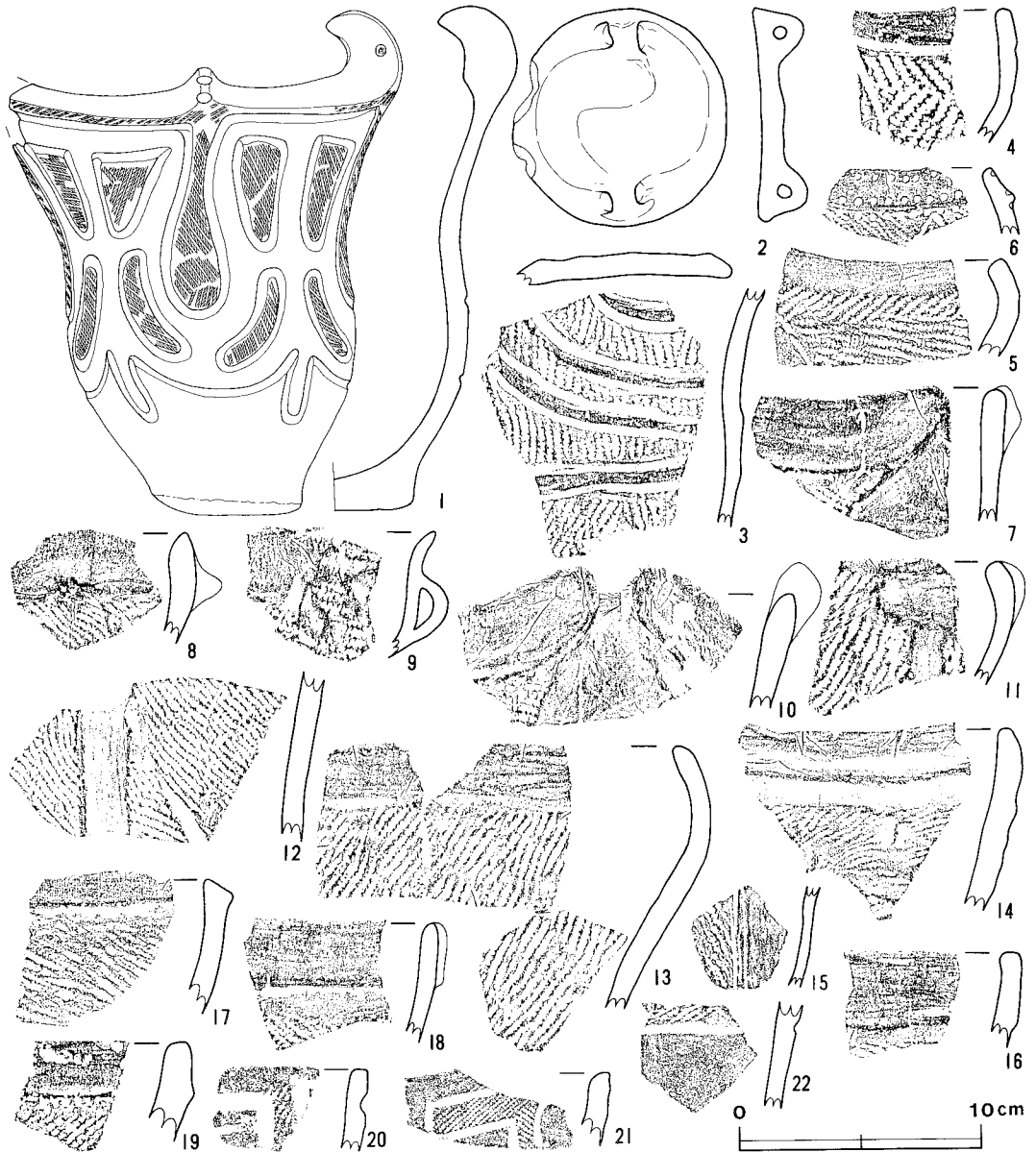
遺物は、特徴のあるものが出土している。完形の石棒が頭部をほぼ西に向けて、床面よりわずかに浮いて出土している。頭部側では床面より5 cm、中央部では3.5 cm、基部側では1.5 cm浮いており、床面直上という出土状態である。石棒の下の土は、炭化粒子を少量含む褐色土で、本跡の焼土前に、石棒が倒れていたと考えられる。第288号土坑の西壁にあたる部分の貼床面に底部を付け、口縁部が北東方向に傾いた状態で出土した小形の深鉢形土器は、称名寺式に比定される完形土器で、本跡の時期を決定し得る資料である。この他、本跡の南東側の覆土下位より、床面より約5 cm浮いて完形の蓋形土器が把手部を上にして中央部に向って傾いた状態で出土している。また、上記の深鉢形土器の北東約90 cm程離れた覆土の下位より裏がえしの状態で石皿片が検出されている。その他の出土遺物としては土器片錘2点、土製円板1点、磨石片1点などがあり、土器は全体で463点検出されている。この中には土器器およびそれ以降に属する土器片55点が含まれているが、混入である。

本跡の時期は、上記の完形土器および蓋形土器、それに本跡に伴うと考えられる第7号埋甕遺構出土土器などから判断すれば、後期初頭の称名寺式期と考えられる。

第47号住居跡出土土器（第47図1～22）

第47図1は、炉の北端から北側に約40 cmほど離れた床面上から口縁部を北東方向にむけた斜位の状態で出土した小形深鉢形土器で、口縁部の小把手の一か所を欠損する他は完形である。口縁部に鳥の嘴状の小把手と小突起を2か所ずつ付けるものと思われ、小把手の両側面には円形刺突文を1個ずつ施している。小突起には各5個ずつの押圧が付されている。口唇部は外削ぎ状を呈し、内面に明確な稜を有している。器面には太目の沈線で幾何学的モチーフが小把手、突起部を中心にパネル区画的に4単位描かれ、モチーフ内には無節縄文Lが充填されている。また、口縁直下にも同様の縄文が施されているが、一部で単節縄文LRと思われる部分も認められる。胴下半部には連弧状の区画沈線が描かれ、U字状の垂下文が4単位連結している。底面近くは縦ナデが施され、底面は磨滅が著しく、粗い胎土が露出している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は大粒の石英・長石粒を多量に含み粗雑であるが、焼成は良好である。色調はにぶい赤褐色を呈する。口径16.5 cm、底径6.0 cm、器高18.7 cmである。

2は、南東側の覆土下位から正位で出土したほぼ完形の蓋形土器で、縁部の一部を欠いている。上面の縁に小さな橋状把手を2か所付け、断面三角形をなす微隆線で曲線的モチーフを描いている。内面は中央部が少し凹むが、平滑にナデられている。縁部は片刃状に整形されている。器面はあれているが、赤彩されていた痕跡が認められる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。長さ9.3 cm、



第 47 図 第 47 号住居跡出土土器実測図・拓影図

短径 9.0 cm，器高 1.0 cm である。

3 は、隆線と沈線の組みあわせによるモチーフが横位に展開する胴部片である。4・5 は、口縁部無文帯を有し、以下に沈線による曲線の磨消帯が構成される。4 は無文帯を沈線で区画するが、5 は区画されない。6 は、口縁部無文帯を断面三角形の微隆線で区画し、以下に逆 V 字状の磨消帯を施す。無文帯と微隆線の上下をあわせて 3 列の刺突列を有し、第 IV 類 b 種に相当する。7～12 は、第 IV 類 a 種に属し、12 の胴部片以外は口縁部片である。7・10 は微隆線が左右から迫り上るタイプで、わずかに離れている。

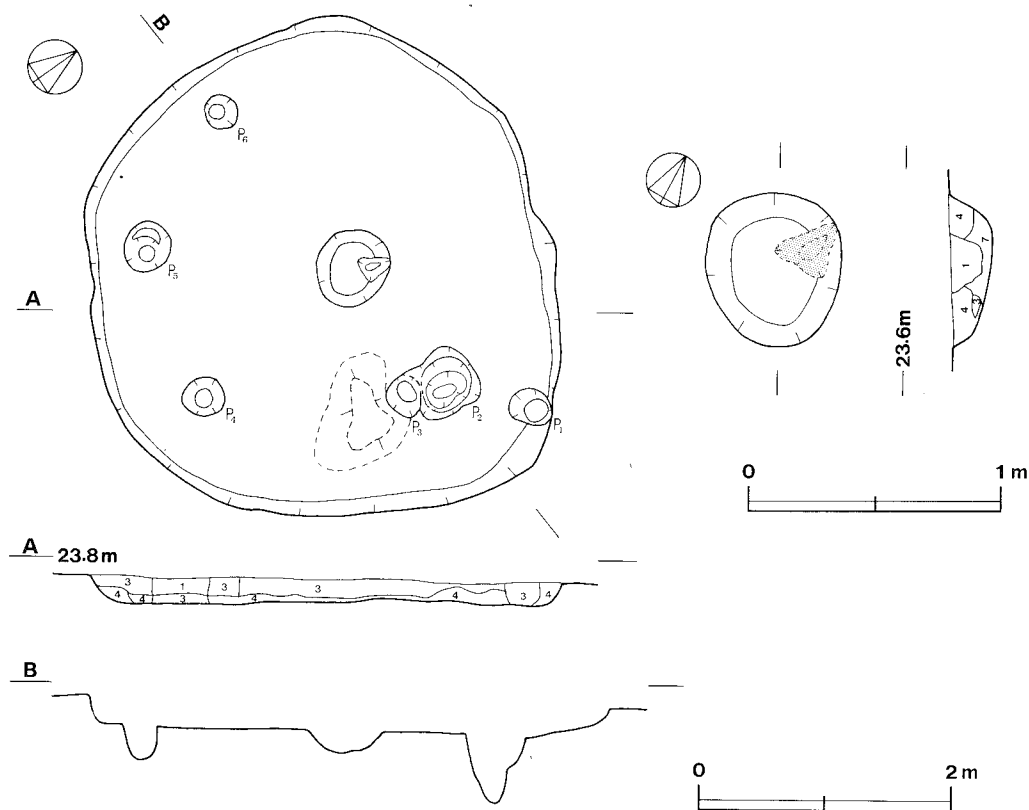
9は小形土器で、小さな橋状把手が付されている。8の微隆線の一部は、突出している。13は、内湾する口縁部片で、無文帯を1条の浅い沈線で区画し、以下に縄文を施している。14は、幅の狭い無文帯を低隆線で区画し、以下に縄文を施している。15は、薄手の胴部片で細い沈線による磨消帯が垂下している。16～19は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を施す第V類e種である。無文帯の幅の広い例（16・18・19）と狭い例（17）に分れる。20～22は、1と同じく称名寺式土器の古段階に属する資料で、20・21は幾何学的な区画内に縄文が充填される口縁部片で、22は胴部片である。

第48号住居跡（第48図）

本跡は、調査区の東側のL4j7・M4a7区にまたがって位置する。単独で検出された住居跡で、遺存状態は比較的良い。遺構確認の段階で遺物がやや目立ったこの区域について注意して精査した結果検出された遺構である。本跡の北方約11.5mには第47号住居跡が存在している。

平面形は、長径4.03m、短径3.73mの小形の不整形円形を呈し、長径方向は、N-54°-Wを指している。

壁は、ソフトロームで、部分的にハードロームブロックをまじえ、壁高は15～22cmを有している。東から南東側の壁はややゆるやかに立ち上り、その他は外傾して立ちあがっている。



第48図 第48号住居跡実測図

床は、ロームで全体的にみると平坦であるが、周壁にむかって徐々に高まっていく。床面はあまり締まっておらず、踏み固められてなく、軟弱な状態である。

ピットは、P₁～P₆の6か所検出されたが、P₂は長径60 cm、短径50 cmほどで、深さ56 cmを測る大形のピットであるが、主柱穴ではない可能性が高い。主柱穴はP₁、P₃～P₆の5か所が考えられるが、北側にもう1～2か所のピットを想定して、精査したにもかかわらず未検出である。ピットのうちP₅は2段に掘り込まれている。主柱穴の径は30～40 cm、深さ30～60 cmである。

南東側の床面上には長径98 cm、短径66 cmの不定形のロームの高まりが認められた。床面上からの最大厚は13 cmを測り、断面観察の結果では特に掘り残されたものではなく投げ込まれたものと判断される。

炉は、本跡のほぼ中央部に位置する地床炉で、長径63 cm、短径56 cmの楕円形を呈し、北東側の炉壁が比較的良く焼けている。深さは、北西側の最深部で35 cm、南東側の最浅部で20 cmを測り、炉床が焼けてロームが硬化し、カリカリするブロック状を呈している。しかし、炉の覆土中には焼土粒子や焼土ブロックの堆積が極く少ない。

覆土は、基本的には上下の2層から成り、上位はローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子少量を含む締まりの弱い暗褐色土、黒褐色土、下位はローム粒子を多量に含む締まった褐色土が堆積している。

遺物は、床面密着の出土状態のものはごく少なく、ほとんどが床面から10～15 cm浮いた状態で覆土中から出土している。分布状況は炉の南東側と西側にやや集中し、北側にも散在的に認められるが、南壁寄りにはあまり出土していない。全体で土器片419点、土器片錘1点が出土している。

本跡の時期は、覆土中から出土した土器およびピット中出土の土器片などから判断すれば、加曾利EⅢ式期と考えられる。

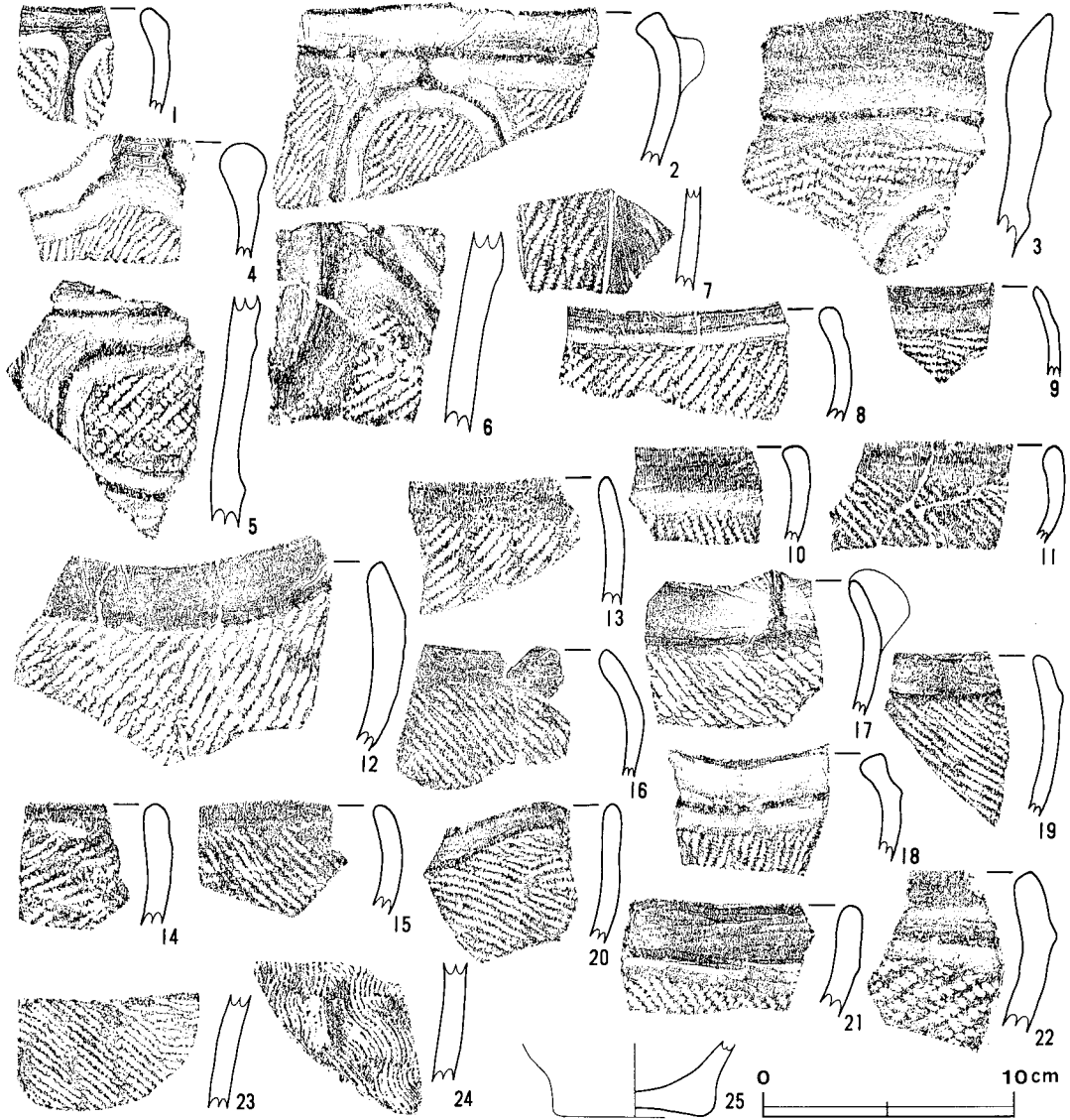
第48号住居跡出土土器（第49図1～25）

第49図1は、第Ⅰ類a種の口縁部片と思われるが、小破片のため不明確である。2～6は、第Ⅱ類であるが、隆線の断面形が三角形に近く、1本組でモチーフが構成されるなど新しい様相がうかがえる。2～4が口縁部片、5・6は胴部片である。2の口縁直下の突起は比較的大きく、高い。7は、細い沈線による磨消帯を有する胴部片である。8～10は、口縁部無文帯を浅い凹線で区画し、以下に縄文を施す第Ⅴ類a種である。9は特に薄手で、小形土器と思われる。11～16は、第Ⅴ類c種で無文帯の区画はなされない。12は波状緑であるが、他は平緑と考えられる。17～22は、微隆線による区画を有する第Ⅴ類e種であるが、微隆線の断面が明瞭なもの（18・19・21・22）と不明瞭なもの（20）に分れる。17は口縁部無文帯につまみあげたような小突起をもっている。23は、縄文のみ、24は、縦位波状の条線文が付されている胴部片である。

25は、南西壁寄りの覆土中から正位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、底面中央部が凹む。外面および底面は磨耗していて整形方向は不明であるが、内面はナデが施されている。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は不良で、色調はにぶい黄褐色を呈する。底径6.5 cm、現存高3.0 cmである。

第49号住居跡（第50図）

本跡は、調査区の中央部やや南側のM3c7区を中心とした位置に検出され、北東側は第69号住居跡と重複しているが、新旧関係は、第69号住居跡の覆土中の貝層が良く残存していることから本跡の方が古



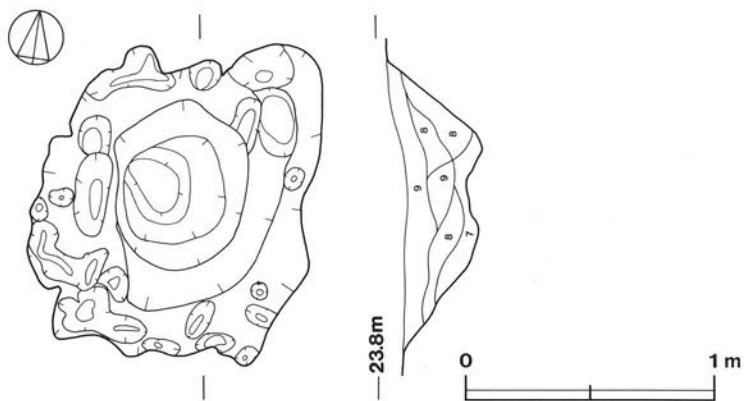
第49図 第48号住居跡出土土器実測図・拓影図

いと考えられる。また、南東側は古墳時代前期の第39号住居跡により切断されている。

本跡は、当初1軒の住居跡と考えて調査を進めていたが、床面精査中に炉2基を検出し、2軒の住居跡が重複していることが判明した。本跡が大きく、第69号住居跡が小形で、床面の高低差はほとんど認められない。本跡の東側約5.5mには第56号住居跡が存在している。

平面形は、東側約半分が第39・69号住居跡との重複により失われているが、推定で長径7.12m、短径5.68mの不整楕円形を呈し、長径方向は、N-38.5°-Eを指すものと思われる。

壁は、ソフトルームで硬く締まっており、南壁は外傾して立ちあがり、28cmほどの壁高を有している。西壁は20cmほど、北壁は15~20cmの壁高を有し、外傾して立ちあがっている。



第 50 图 第 49·69 号住居跡实测图

床は、ロームブロックが処々に露出する状況で硬く踏みしめられているが、壁近くはやや高くなっている。床面の凹部が南東側にあり、不定形で5～10 cm 低くなっている。

ピットは、本跡と重複する第 69 号住居跡の推定範囲内に P₁～P₂₃ の 23 か所が穿たれているが、本跡の主柱穴と考えられるピットは、位置と規模、深さからみて P₇、P₁₃、P₁₅、P₂₃ の 4 か所で、支柱穴は P₅、P₁₁、P₁₂、P₁₄、P₁₆、P₁₉、P₂₀ などが想定される。その他のピットのうち P₈、P₁₇ などは深さも 50 cm 以上を有し、支柱穴としての可能性をもっている。あるいは建て替えに伴う柱穴の移動も考慮されるが、対応関係は明確ではない。支柱穴のうち南側の 2 か所 P₁₅、P₂₃ は規模が径 50～60 cm と大きい、北側の 2 か所 P₇、P₁₃ は径 30～40 cm とやや小さい。しかし、深さは 60～80 cm と揃っている。

炉は、本跡の中央部より北側に位置し、北側の主柱穴の間にある。不整な隅丸方形を呈し、最大長 130 cm、最大幅 115 cm を測り、最深部で 43 cm 掘り込まれている。炉の周囲は、小ピットと小溝が巡っており小石などを立てて囲いとした痕跡と思われる。第 34 号、47 号住居跡の炉とはほぼ同様の構造と推定される。炉本体部の南東側の炉壁下部は赤化が著しく、炉底の北西側の一部が 30 × 25 cm の範囲で 7 cm ほど高まっている。この部分の炉底は赤化しているが、その他の炉底部分はロームの硬化が著しいが、赤化はほとんどしていない。断面形は 2 段に掘り込まれ、炉壁が強く焼けて赤化が著しい。炉床のコーナー部には石を立てたような凹部が確認されたが、その意味は不明である。類例は第 34 号住居跡の炉底部に認められている。炉内には、上位から下位にかけて、焼土粒子、焼土小ブロックなどを含む極暗赤褐色土、暗赤褐色土、赤褐色土が堆積している。

覆土は、中央部が黒褐色土、壁寄りや暗褐色土、壁近くの下位には褐色土が堆積している。いずれもローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子を極少量含む締まりの弱い土層である。貝層を覆土中に有する第 69 号住居跡の覆土によって本跡の北東側の覆土が切られている。

遺物は、本跡の中央部にまとまっており、壁寄りには余り認められなかった。覆土中からの出土が多く、床面密着のものはごく少量である。土器片は、第 69 号住居跡と合わせて 1,774 点出土しているが、復元し器形が窺えるものが 18 個体ある。しかし、そのほとんどは本跡の北東側から出土しており、第 69 号住居跡に伴うものが多いと判断される。土器器片も 11 点あるが、これは第 39 号住居跡に属するものと判断される。この他に土器片 13 点、土製円板 10 点、土製品 2 点、打製石斧 1 点などが出土している。

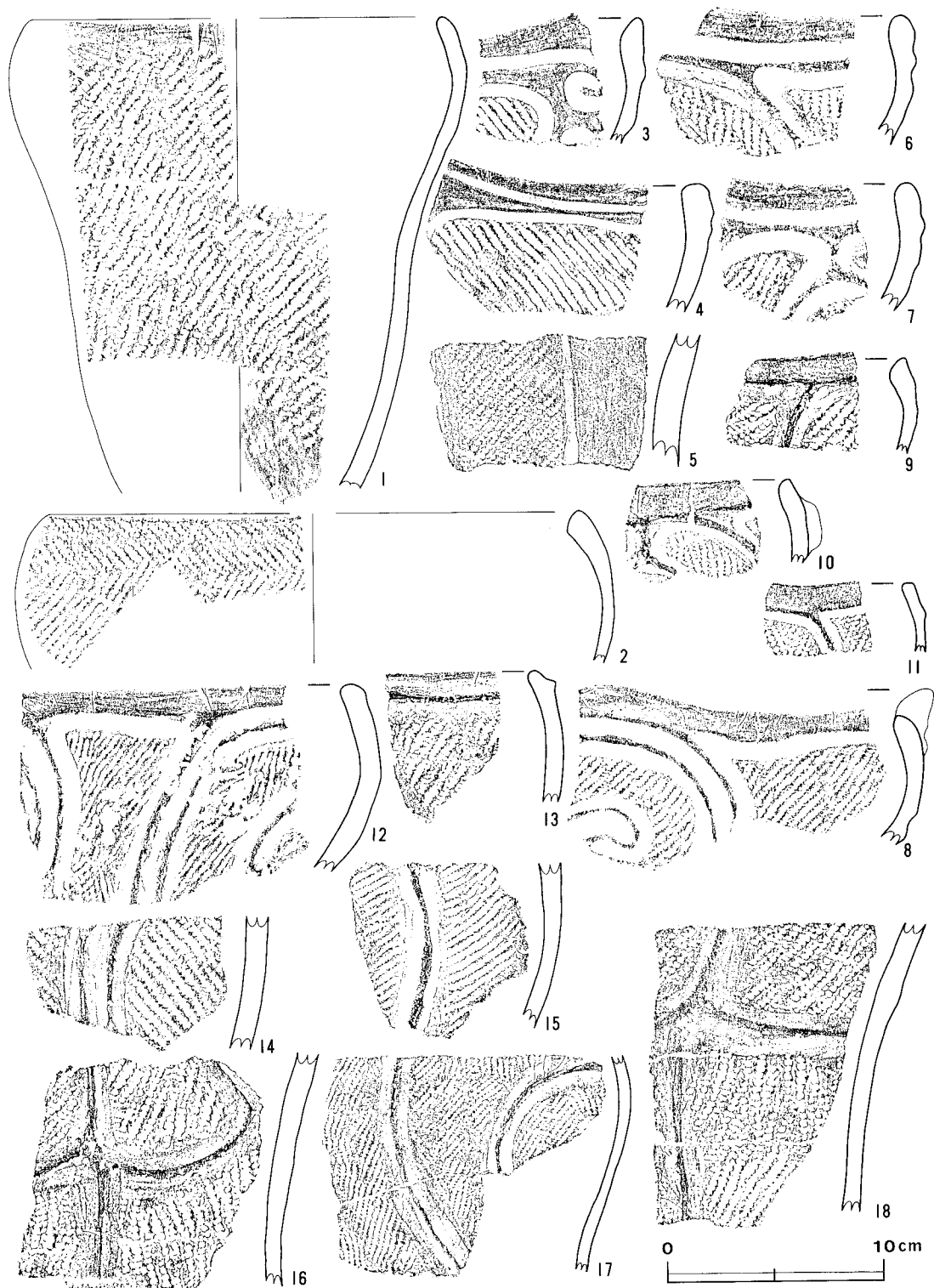
本跡の時期は、遺構の重複関係および出土遺物からみて加曾利 E III 式期の新しい段階と判断される。

第 49 号住居跡出土土器（第 51～53 図 1～56）

本跡は、第 69 号住居跡と重複しており、2 軒の重複と判明するまでは遺物を第 49 号住居跡 1 軒として取り上げているために両者の混在が認められる。拓影図は、本跡に一括して掲載した。

第 51 図 1 は、中央やや西寄りの覆土下位から出土した破片を中心に 16 点が接合したキャリパー状を呈する小形深鉢形土器で、底部を欠失する。口縁直下に幅 1～1.5 cm の無文帯を設け、以下に粗い単独縄文 RL を縦位回転で施文しているが、底部近くは無文のままである。内面上端は横ナデ、以下は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰褐色を呈する。推定口径 19.5 cm、現存高 22.5 cm である。

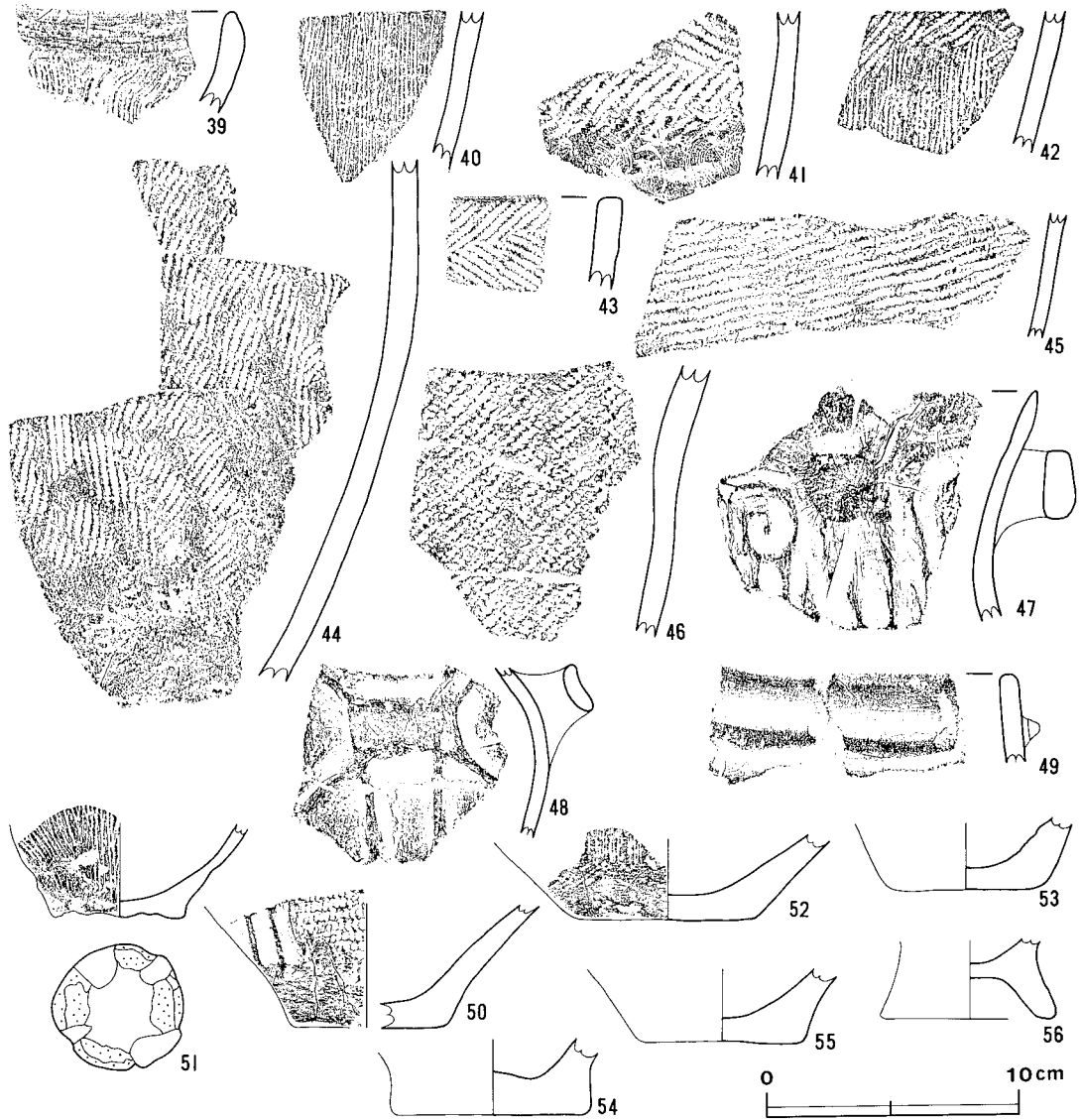
2 は、南東側の覆土上位から逆位で出土した破片 10 点が接合した内湾する深鉢形土器の口縁部片で、以下を欠失する。口縁直下から単節縄文 RL を横位、縦位回転で施文し、口縁直下の内面に稜を



第 51 图 第 49 号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第 52 图 第 49 号住居跡出土土器拓影图(2)



第53図 第49号住居跡出土土器実測図・拓影図(3)

有する。口縁部外面には炭化物が付着している。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が黒褐色、内面が灰褐色を呈する。推定口径 25.4 cm，現存高 7.5 cm である。

3～5は、第Ⅰ類b種と思われる。太目の沈線による楕円区画内に縄文が充填され(3・4)，胴部には幅の広い磨消帯が垂下している(5)。6～21は、第Ⅱ類に分類される。隆線は2本単位の例(8・12・14)が少なく、1本単位で比較的細いものが目立つ。小破片が多く、モチーフの明確なものはないが、渦巻文や縦長区画文から構成される。9～11，16・18などはそれぞれ文様や施文手法が共通し、同一個体と思われる。19～21は、厚手の破片で縄文が残存部に認められないが、第Ⅱ類の胴下半部片と考えた。22～26は、第Ⅲ類に相当する。22・23・27が口縁部片，24～26は胴部片である。23・27はa

種か b 種, 22 は c 種に細分される。22 は波状を呈し, 口縁直下から逆 U 字文が描かれている。23 は口縁直下に 1 条の沈線が巡り, 以下に逆 U 字状の磨消帯が施されている。27 は口縁部無文帯に円形刺突列が施され, 以下に縄文が付される。逆 U 字状の区画内は磨消されるもの (23・24) と縄文が充填されるもの (22・25) の両者がある。28・29 は, 第Ⅳ類に属する土器で, 共に胴部片である。30・31 は, 第Ⅴ類 a 種に分類され, 30 の縄文は斜位回転され, 条が縦走している。32～34 は, 口縁直下に橋状把手を有する土器で, 以下に縄文が施されている。32 は把手上にも縄文が付されている。35～37 は, 第Ⅴ類 c 種に該当し, 37 の無文帯には橋状把手が付けられる。38 は e 種に属し, 断面三角形の微隆線で無文帯が区画されている。39・40 は条線文が施され, 39 は h 種の口縁部片で, 条線文が曲線的に垂下する。40 は胴部片で, 縦位に直線的に施文される。41・42 は i 種に相当し, 縄文と条線文が併用されている。43～46 は縄文のみの土器片で, 43 は第Ⅵ類 a 種に属する小片である。44 は胴下半部片である。47・48 は第Ⅶ類土器で, 微隆線で渦巻文などの曲線的モチーフが描かれ, 横位の橋状把手が口縁直下と胴部の 2 か所に付けられている。49 は第Ⅷ類で, 有孔鏝付土器の口縁部片である。外面には赤彩痕が若干観察できる。孔は鏝部を上から下へ貫通している。

50 は, 南東側の覆土中から出土した深鉢形土器の底部片で, 外面には低隆線が 2 条単位で垂下し, 区画間に単節縄文 LR が斜位回転で施され, 底面から 2～3 cm は軽いナデが加えられ, 無文となっている。内面はナデが施されている。胎土は砂粒と微量の小礫を含み, 焼成は良好で, 色調は外面がにぶい褐色, 内面がにぶい橙色を呈する。推定底径 6.0 cm, 現存高 5.0 cm である。

51 は, 南西側の覆土中から出土した破片 2 点が接合した台付土器の台部片で, 外面に細かい縦位の条線文が施されている。内面は軽いナデが施されている。台部は 4 脚を有するが欠損しており, 4 方から挟り込まれている。胎土は微砂を含み, 焼成は良好で, 色調は外面がにぶい褐色, 内面が灰褐色を呈する。台部径 5.2 cm, 現存高 3.6 cm である。

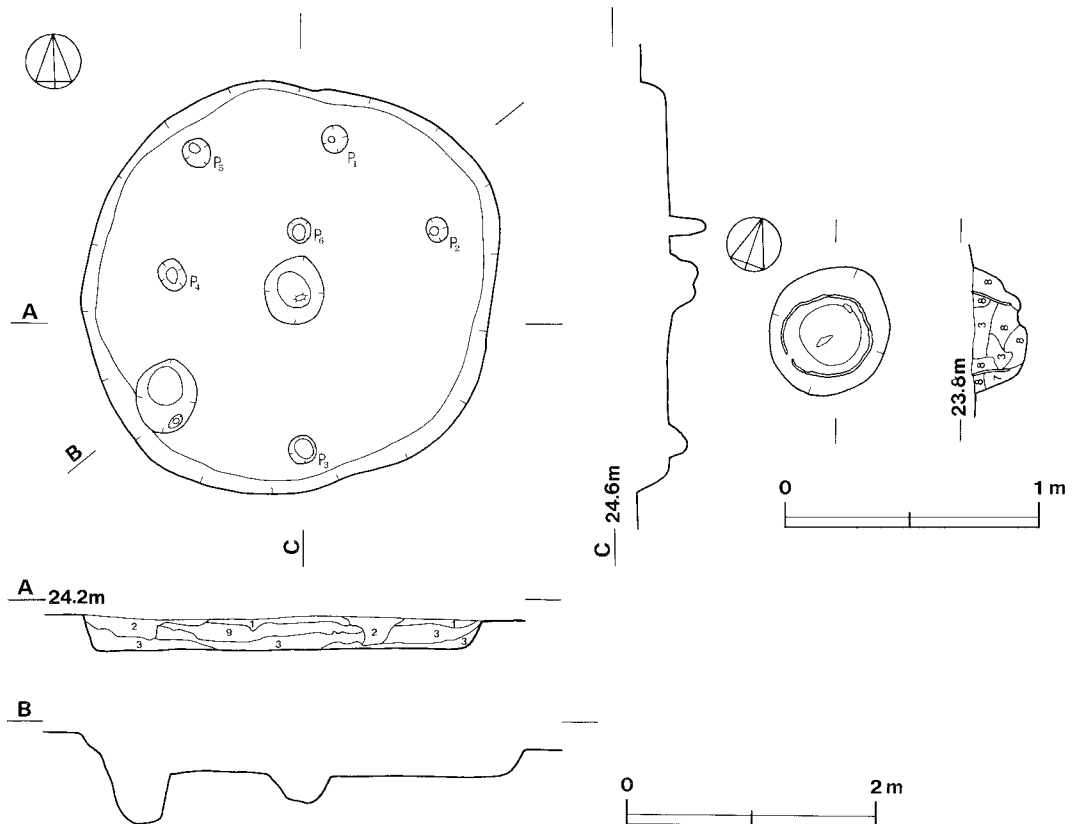
52 は, 中央やや東寄りの覆土上位から逆位で出土した底部片で, 底部の開き具合から推定すると鉢形を呈するものと思われる。外面には縦位の細かい条線が施され, 底面近く 1 cm ほどは横ナデが加えられ無文となっている。内面はナデが施されている。胎土は砂粒を含み, 焼成は良好で, 色調は外面が褐色, 内面がにぶい橙色を呈する。推定底径 7.0 cm, 現存高 3.2 cm である。

53 は, 南西側の覆土上位から正位で出土した深鉢形土器の底部片で, 外面は横ナデが施されているが, 内面は剥落が著しく, 整形方法は不明である。胎土は砂粒を含み, 焼成は良好で, 色調はにぶい橙色を呈する。底径 5.6 cm, 現存高 2.8 cm である。

54 は, 南西寄りの覆土中位から逆位で出土した深鉢形土器の底部片で, 外面は雑な横ナデが施されているが, 内面は剥落していて整形方向は不明である。内面中央には小さな突出部を有している。胎土は砂粒を含み, 焼成は良好で, 色調は外面がにぶい褐色, 内面が灰褐色を呈する。底径 7.8 cm, 現存高 2.5 cm である。

55 は, 中央やや西寄りの覆土下位から逆位で出土した破片を中心に 4 点が接合した深鉢形土器の底部片で, 内外面とも縦ナデが施されている。胎土は微砂を含み, 焼成は良好で, 色調は外面がにぶい褐色, 内面がにぶい褐色を呈する。底径 7.0 cm, 現存高 2.8 cm である。

56 は, 中央部の床面上から逆位で出土した無文の台付土器の台部片で, 端部は磨耗が著しい。外面は縦ナデ, 内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒・石英・長石を含み, 焼成は良好で, 色調は外面がにぶい褐色, 内面が灰褐色を呈する。台部径 7.0 cm, 現存高 3.2 cm である。



第 54 図 第 56 号住居跡実測図

第 56 号住居跡 (第 54 図)

本跡は、調査区のはほぼ中央部の M3c0 区を中心とした位置に単独で検出された住居跡である。本跡の西側約 5.5 m には第 49・69 号住居跡が存在している。

平面形は、長径 3.36 m、短径 3.26 m のほぼ円形を呈し、長径方向は N-19.5°-E を指している。

壁は、ソフトロームから成り外傾して立ちあがり、壁高は、南・西側でやや高く 24~28 cm、北・東側で少し低くなり 18~20 cm である。壁の立ちあがりは明瞭である。

床はソフトロームで締まっており、中央部が少し凹み、周壁部にむかって若干高くなる。床面は特に踏み固められてはいない。

ピットは、P₁~P₆ の 6 か所と南西側壁寄りに長径 60 cm、短径 50 cm の大きなピットが発見された。支柱穴は、配列および規模などの同規格性から判断して P₁~P₅ の 5 か所と思われ、炉の北側に位置する P₆ の性格は不明である。南西壁寄りのピットは最深部で 43 cm の深さを有し、貯蔵穴的な機能が推定されるが、確証はない。また、P₂ と P₃ の間がやや広くっており、この南東側部分が出入口であった可能性が高い。支柱穴 5 か所は、径 18~26 cm、深さ 17~29 cm と小規模で浅く、小形の本跡の平面形に相応したピットといえる。

炉は、本跡のほぼ中央部に検出された土器埋設炉で 23 cm ほど掘り込まれている。長径 52 cm、短径 48 cm の掘り方を穿ち、その中央部に縄文のみが施された深鉢形土器の胴部を正位で埋め込んでいるが、やや南西側に傾いている。炉壁は南西側が良く焼けており、炉床も良く焼けて締まり、ブロック状を呈し凹凸が激しい。炉内の覆土は暗褐色、暗赤褐色を呈し、焼土粒子中量、炭化粒子、焼土ブロックを少量を含むが、埋設土器内の焼土は少ない。

覆土は攪乱が目立つが全体としては、上位が黒褐色、下位が暗褐色の締まりのある土が堆積している。各層ともローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を少量含んでいる。

遺物は、遺構の中央部から南側にかけて集中的に出土しており、西・北側の壁寄りには遺物が余り出土していない。土器片は全体で 711 点出土しており、小形の住居跡としては出土量が多い。他に土器片錘 5 点が出土している。

本跡の時期は、覆土中より出土して器形復元できた土器および炉埋設土器などから判断すると加曾利 E IV 式期の古い段階と考えられる。

第 56 号住居跡出土土器（第 55～56 図 1～19）

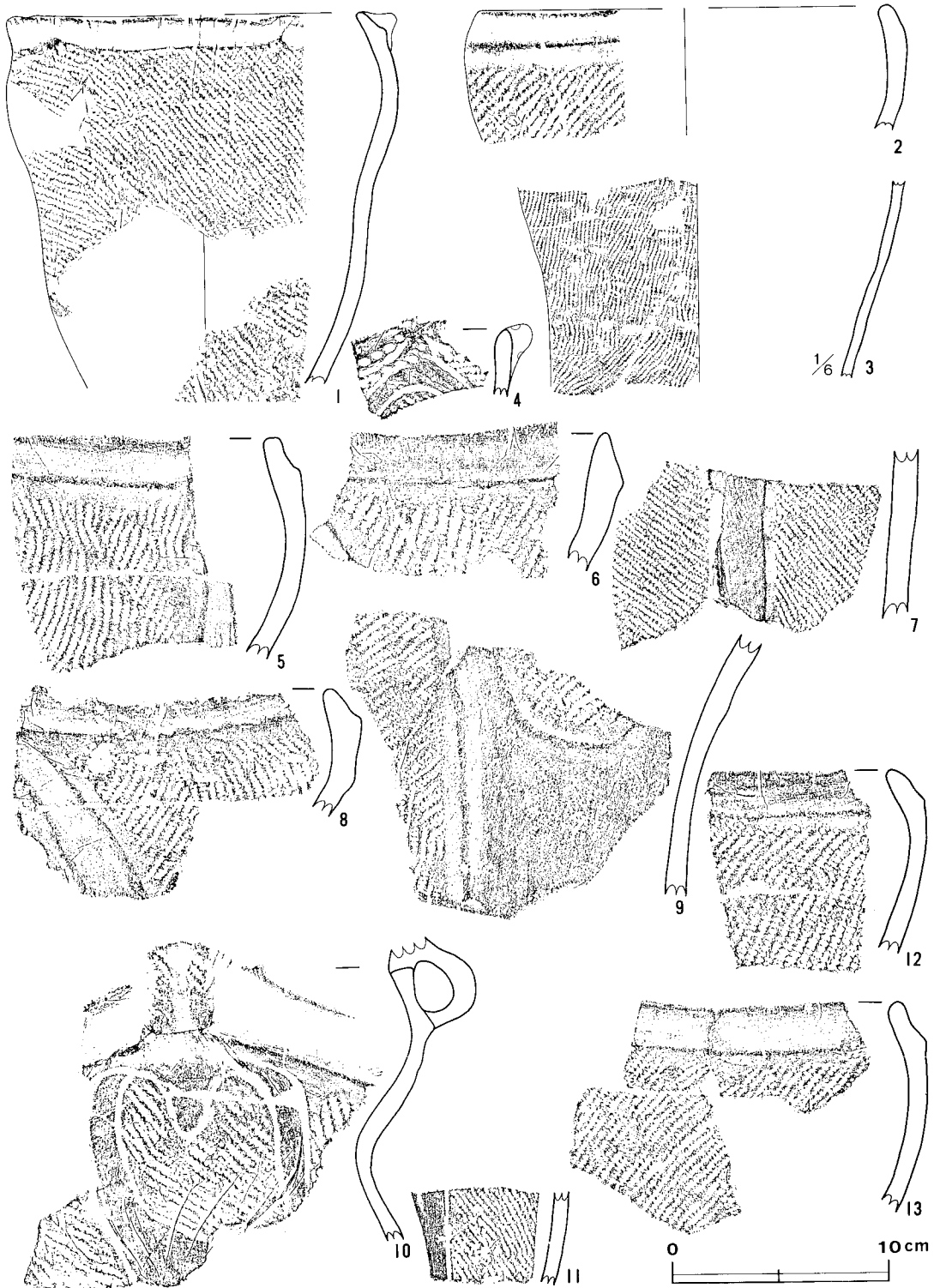
第 55 図 1 は、炉の上面にあたる覆土下位から逆位で出土した破片を中心に炉の北側の覆土中から出土した破片 12 点が接合した小形深鉢形土器で、胴部がゆるくくびれ、口縁部が内湾する。胴下半部以下は欠失する。口縁部の幅 1 cm ほどの無文帯を 1 条の微隆線で区画し、口縁直下に推定 5 単位の小突起を付している。胴部全面に単節縄文 RL を横位回転で施文している。内面は上半横ナデ、下半縦ナデを施している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい黄褐色を呈する。推定口径 18.0 cm、現存高 17.5 cm である。

2 は、中央やや南側の覆土下位から正位で出土した破片を中心に 4 点が接合した小形深鉢形土器の口縁部片で、外面の磨耗、剥落が著しい。幅 1.5 cm 程の口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し、以下に単節縄文 LR を横位回転で施している。内面は横ナデが施され、一部に炭化物が付着している。胎土に砂粒を含み、焼成は普通で、色調は外面がにぶい黄褐色、内面が灰黄褐色を呈する。推定口径 19.0 cm、現存高 6.0 cm である。

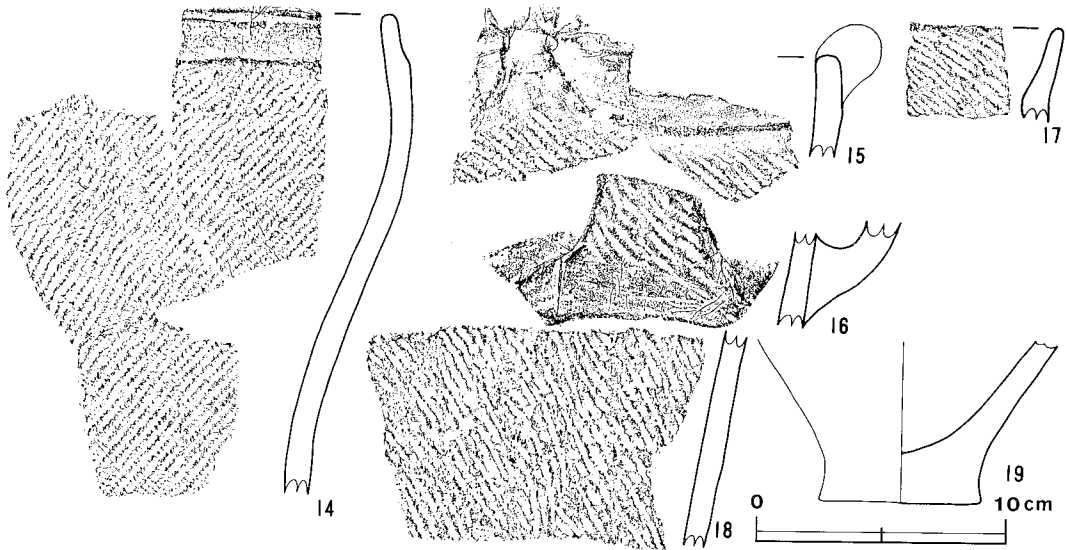
3 は、炉内に正位で埋設されていた深鉢形土器の胴部片で、外面には単節縄文 RL が斜位、縦位回転で全面に施されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土には微砂を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。胴部最大径 35.9 cm、現存高 18.8 cm である。

4 は、波状を呈する口縁部片で、波頂部に小突起と沈線および刺突列を有し、以下に 2 本組の沈線で逆 U 字状の磨消帯が描かれている。5～9 は、第 IV 類土器で 5・6・8 が口縁部片、7・9 が胴部片である。断面三角形の微隆線による V 字状、U 字状の区画内に単節縄文が充填されている。10 は、第 IV 類 b 種の好例で、口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し、以下にハート形の磨消帯を描き、内外に縄文を施文している。波頂部の無文帯には縄文を有する橋状把手を付している。11 は、同種と思われる胴部の小片である。12～16 は、第 V 類 e 種で無文帯を微隆線で区画し、以下に縄文を施している。15・16 には突起・把手が付されている。17・18 は縄文のみの破片で、17 は第 VI 類 a 種である。

19 は、覆土中から出土した深鉢形土器の底部片で内外面とも縦ナデが施されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。底径 6.4 cm、現存高 6.5 cm である。



第 55 图 第 56 号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第56図 第56号住居跡出土土器実測図・拓影図(2)

第58号住居跡 (第36・57図)

本跡は、調査区の北端部のK3f₂区を中心とした位置に、第34号住居跡と重複して検出された住居跡である。当初は、第34号住居跡1軒だけと想着て調査を進めていたが、平面形の不整なこと、多数のピットが検出されたこと、炉が土坑群に破壊されながらも残存していたことなどから別の住居跡の存在が明らかとなった。

本跡は、北・東側の床面と壁の一部が比較的良好に残されているが、他の壁は第34号住居跡によって失われている。また、本跡の炉は、第269～271・283号の各土坑群によって壊されている。さらに、北側の床面および壁の一部は第272、273号土坑に切られている。したがって、本跡は重複する各遺構よりも古いと判断される。

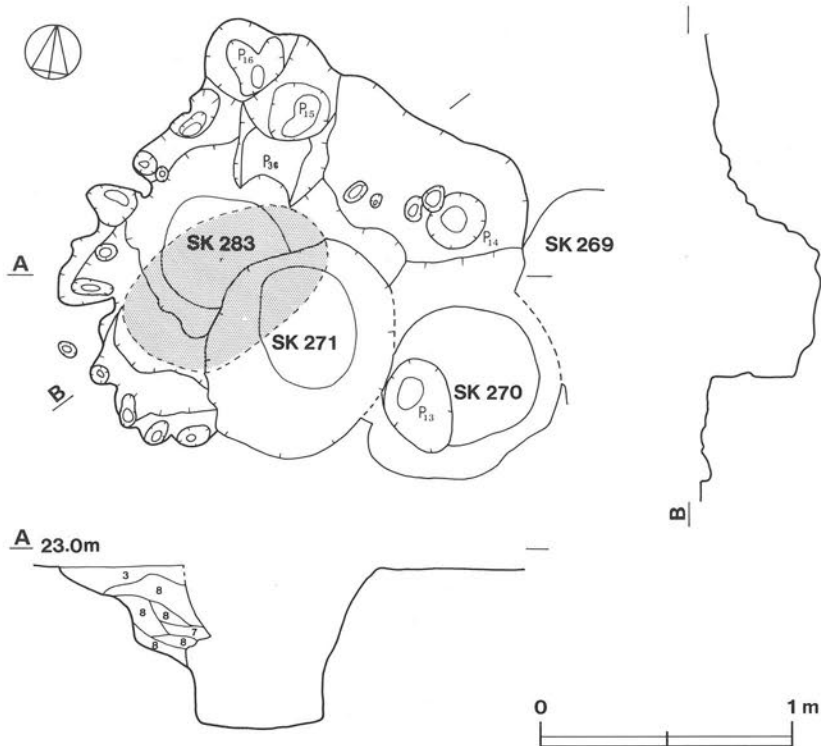
平面形は、上記のような状態のため推測であるが、長径7.80m、短径6.82mの楕円形を呈するものと思われる。長径方向は、N-17.5°-Eを指している。

壁は、残存する北・東壁では20～30cm前後を測り、内湾しながら外傾して立ちあがる部分が多いが、北壁の一部では外傾して立ちあがっている。壁はソフトロームから成っている。

床は、重複する第34号住居跡とほとんど高低差がなく、ロームで硬く踏みしめられており平坦な状態を示しているが、壁近くは少し高くなっている。

ピットは、本跡の推定範囲内にきわめて多数のピットが穿たれているが、そのうちP₁～P₃₁の31か所のピットを本跡に属するものと考えた。この他にも小規模なピットが床面上にはみられる。支柱穴は、P₁～P₁₀、P₁₅、P₁₉の炉を取り囲むように位置しているピットが相当するものと思われるが、これらの中には相互に切り合うものや隣接するものがあり、同時に使用されたとは考えられない。P₁～P₃、P₅、P₇などのような5～6か所のピットの組み合わせも想定できる。これらのピットは、径40～50cm、深さ35～50cm前後のやや大き目で浅く、底部の平坦な共通性を有している。その他の床面上に穿たれたピットは小さく支柱穴としての役割が考えられる。

炉は、本跡の中央部に構築されていたが、上記のように土坑によって破壊され、第283号土坑の壁の南



第 57 図 第 58 号住居跡炉実測図

北両端にきわめて良く焼けた焼土が認められたにすぎない。したがって、炉の掘り込みは確認できなかったが、かなり良く使用されたものと考えられる。炉と思われる位置を囲んで、北・西・南側にかけて浅い溝状の掘り込みと小ピットが多数検出されており、第 34 号住居跡の炉の凹みに類似するものと考えられる。外周を含めると約 1.5 m 程の広がりがあることが認められ、大形の炉と推定される。

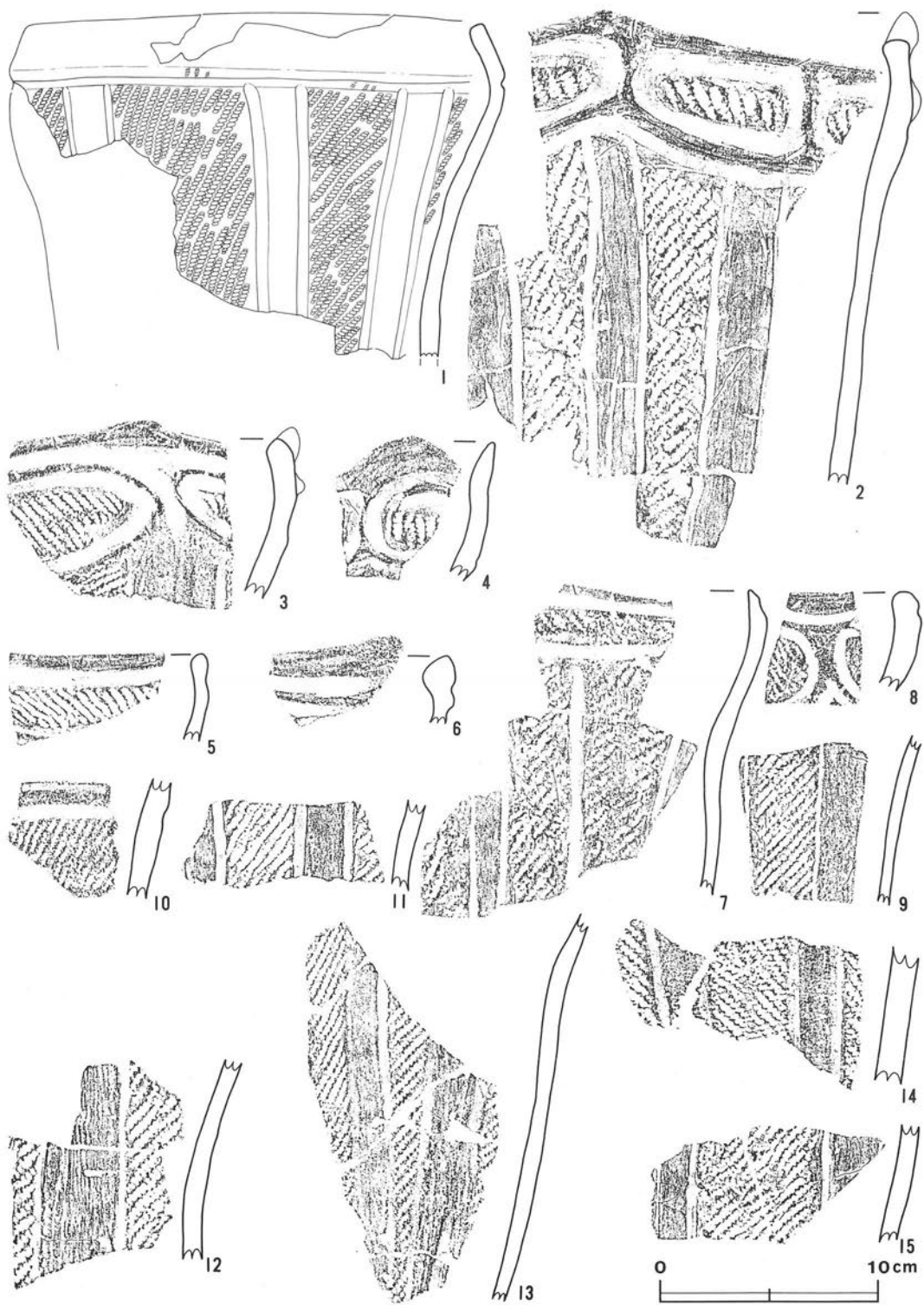
本跡の覆土は、ほぼ第 34 号住居跡によって大半を失っており、残存する北・東側の覆土を観察すると、ローム粒子を中量、炭化粒子、焼土粒子を微量含む良く締まった土が堆積している。

本跡の遺物は、そのほとんどが第 34 号住居跡と重複しており、明瞭に本跡に伴うと考えられるものは北・東側の覆土中から出土したものと本跡の炉、ピット内から出土したものを合わせて 111 点である。このうちには器形復元できたものが 1 個体ある。

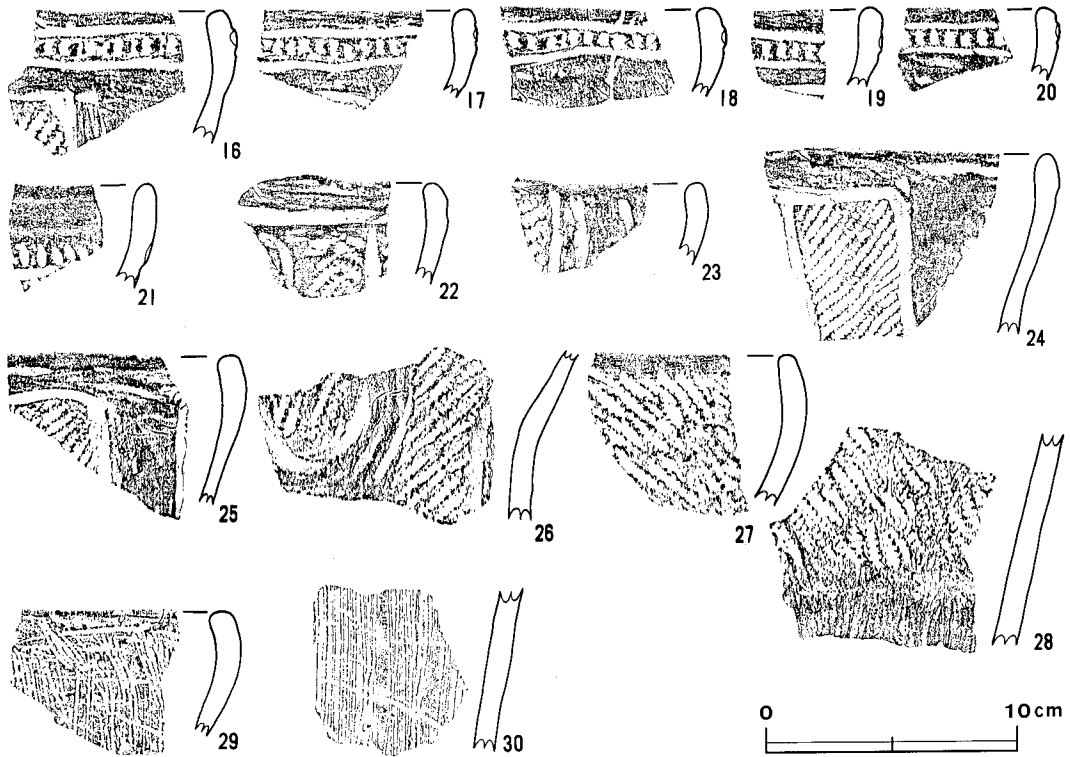
本跡の時期は、遺構の重複関係およびピット内出土土器から判断して、加曾利 E III 式期と考えられる。

第 58 号住居跡出土土器 (第 58 ~ 59 図 1 ~ 30)

第 58 図 1 は、北東壁寄りの覆土下位から出土した破片を中心に 19 点が接合した内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。幅 2 ~ 2.5 cm 程の口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画し、胴部に 2 本の沈線による直線的磨消帯と縄文帯を交互に垂下させる。縄文帯は単節縄文 RL を縦位回転で施文するが、区画線の一部にかかっており、両者の先後関係は明瞭である。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。推定口径 21.0 cm, 現存高 15.7



第 58 图 第 58 号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第 59 図 第 58 号住居跡出土土器拓影图(2)

cm である。

2～15は、第Ⅰ類に分類され、2～4はa種、5～8・10はb種に細別できる。2～4は楕円形の口縁部文様帯内に縄文を充填し、以下に直線的な磨消帯を構成しているが、口縁部の内湾曲が弱くなっている。3点ともゆるい波状を呈する。b種のうちでは7が最も良く残るが、口縁部文様帯の幅が狭く、長楕円形の区画となり、胴部の磨消帯の幅が狭く、広い縄文帯に沈線が1条垂下している。9・11～15は比較的幅の狭い直線的磨消帯が垂下する胴部片である。16～26は、第Ⅲ類に属し、第Ⅱ類土器が含まれない点は注目される。16～20は口縁直下にC字状の爪形刺突を2条の沈線間に加え、以下に逆U字状の区画を描く。21は口縁部無文帯下に刺突列と沈線を巡らし、22は1条の沈線で無文帯を区画する。いずれもa種と思われる。23～25はc種に該当し、口縁直下から直線的磨消帯(23)、逆U字状の区画(24・25)が施される。26はU字状の磨消帯を有するくびれ部片である。27・28は縄文のみの破片で、27は口縁部にわずかに無文帯を有する。28は底部近くの破片である。29・30は条線文が縦位に施されている。29は粗い施文の口縁部片、20は密な施文の胴部片である。

他に図示していないが、器台形土器の破片が2個体分ある。1個体は器受け部の小片で、他は破片3点あるが接合しない脚部の破片で、円孔が穿たれている。

第 69 号住居跡 (第 50 図)

本跡は、調査区の中央部やや南側の M3b8 区を中心とした位置に確認され、第 49 号住居跡と重複している。新旧関係は、本跡の覆土が第 49 号住居跡の覆土を切っていることから本跡の方が新しい。当初、1 軒と考えていたが、床面精査の段階で炉 2 基を検出し、貝ブロックを覆土中に有する本跡と、本跡より古い第 49 号住居跡の 2 軒と判明した。

本跡の南側の一部は古墳時代前期の第 39 号住居跡によって切られている。

平面形は、北・東側の壁が残存するのみで、他は検出できなかったために推定であるが、長径 3.87 m、短径 3.80 m の円形を呈するものと思われる。長径方向は、N-38.5°-W を指している。

壁はロームで硬く良好である。壁高は北側でやや低く 15～16 cm、東側で 20 cm 前後を測り、外傾して立ちあがっている。

床は、ロームでほぼ平坦であり硬く締まっているが、北・東側にかけては床面が徐々にあがり気味となっている。

ピットは、本跡の推定範囲内に 10 か所認められたが、この中には第 49 号住居跡に伴うと思われるものもある。本跡の支柱穴は、P₁～P₃、P₆、P₈～P₁₀ の 7 か所が想定されるが、配列をみると接近しすぎたり、離れすぎているものがあり明瞭ではない。建て替えなどが考えられる。P₁、P₃、P₆、P₈ の組み合わせが妥当なものと思われる。規模は P₁ が径 50 cm、深さ 61 cm と大きく深いが、他は径 25～35 cm、深さ 30～40 cm 前後のものが多い。

炉は、本跡の中央部のやや北側にあり、長径 60 cm、短径 55 cm の不整形円形を呈する地床炉で、炉壁、炉床ともよく焼けており赤化、硬化が著しい。最深部で 32 cm 掘り込まれているが、炉の南西部から北東側の炉床部分にかけて攪乱を受けている。炉内の覆土の中央部上位に極暗赤褐色のローム粒子、焼土粒子を少量含む土が堆積し、下位と壁際には鮮やかな赤褐色の焼土ブロックが主に認められた。

本跡の覆土中には上記のように小さな貝ブロックが 8 か所認められている。ハマグリ、サルボウ、シオフキを主とするもので、ウミナなども少量混じっている。覆土自体は、中央部が黒褐色、極暗褐色、暗褐色のやや暗い色調を呈し、壁際は褐色の明るい土が堆積している。前者は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む締まりが弱く、後者はローム粒子、炭化粒子を少量含む締まっている。

a～c、e～h の貝ブロックは、長径 30～50 cm、短径 20～30 cm 前後の小規模なブロックのために貝層断面を観察せずに一括して取り上げた。d 貝ブロックは、最大長 89 cm、最大幅 80 cm を測る不定形を呈し、量大厚は 20 cm あり、南側から中央部にかけてが厚く、北側は徐々に薄くなる。貝ブロックは黒褐色土、極暗褐色土の中に含まれており、南側のブロックが良く締まっている。d 貝ブロックはほぼ床面に達しており、本跡の廃絶直後に投げ込まれたものと判断できる。a 貝ブロックは、混土率のやや高い混土貝層で、8～12 cm の層厚を有し北西側がやや厚く、南東側が薄い。床面より 5～6 cm 浮いている。b 貝ブロックは、破碎や風化が著しく殻を良好に残す個体が少ない混土貝層で、床面直上より堆積し、層厚は 10 cm 程度である。c 貝ブロックも、破碎や風化が著しく、床面より 2～3 cm 浮いた状態で認められた。層厚は 6.5～8 cm と薄い混土貝層である。e 貝ブロックは、風化のほとんどが認められない混土貝層で、貝層がよく締まっており混土率が高い。大形のハマグリが目立っている。層厚は 10～12 cm で、床面より 3～4 cm 浮いている。g・h 貝ブロックは、いずれも小規模で層厚も 3～4 cm で、床面より 10～15 cm 浮いている。g 貝ブロックは、P₈、P₉ の中へその一部が落ち込んだ状態で検出されており、層厚は 7～10 cm であるが、ピットの部分では 25 cm にも達している。

これらのことから、本跡の貝ブロックは、住居廃絶直後から間もない時点で投げ込まれたものと判断される。

遺物は、本跡の推定範囲内からきわめて多量に出土し、炉の南東側にあたる部分から注口付の壺形土器が南東方向にやや傾いた正位の状態で出土している。土器片は第49号住居跡と合わせて1,774点出土しているが、本跡に属するものが多いと考えられる。

本跡の時期は、第49号住居跡との重複関係および出土遺物からみて加曾利EⅢ式期の新しい段階と考えられる。

第69号住居跡出土土器（第60～61図1～9）

本跡と第49号住居跡は重複しており、炉が2基発見され、2軒の重複と判明するまでは1軒の住居と考えて遺物を取り上げていたため、遺物の混在が認められる。

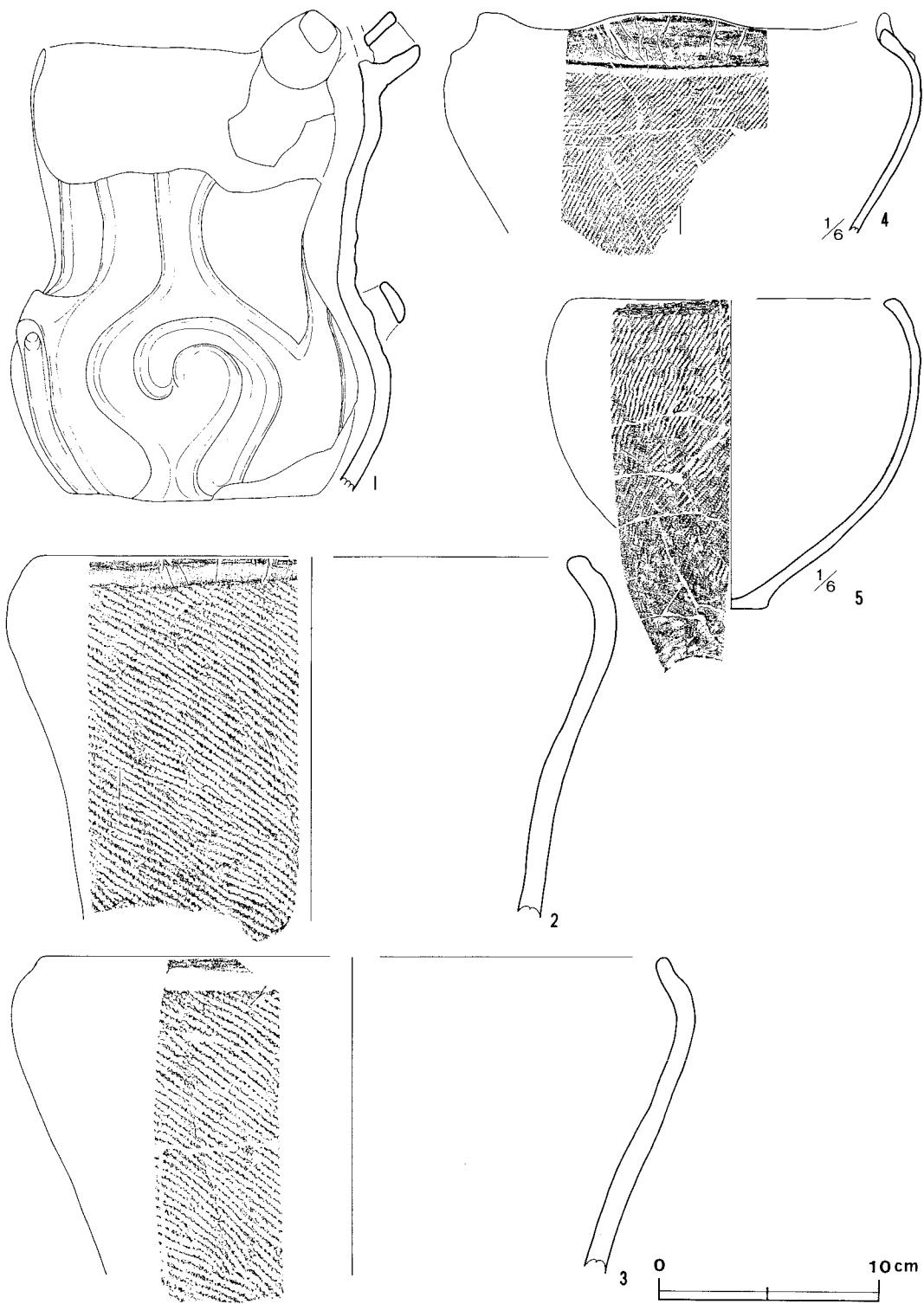
第60図1は、中央やや東寄りの覆土下位から口辺部を南東方向に傾けた斜位の状態で出土した有孔罎付注口土器で、口縁部の大半と胴下半部以下を欠失している。口唇部は欠くが、口縁直下に断面三角形の罎が付され、罎の直上を1条のナヅリが走り、このナヅリが注口の付け根部の上位を通っていることから、ナヅリは注口が器体に圧着されたのちに施されたことが判る。罎には上下に切断するような穴が認められる。注口は罎の下端に付き、やや上方をむいて立ちあがっている。器面には断面三角形を呈する隆線による時計回りと反時計回りの渦巻文が対をなして2単位描かれ、渦巻文の中間部の上位にはV字状のモチーフが加えられ、V字状文の直上に注口が位置している。注口の反対側にも何か工作物があったかもしれないが欠損している。また、注口部と直交する側面2か所には小さな横位の橋状把手が付されているが、片方のみ残存している。外面の一部（把手の内側など）や内面には赤彩痕が残っており、本来は全面に施されていたものと考えられる。器面は丁寧に磨かれ、光沢を有するが、剥落痕もみられる。使用による剥離であろうか。内面は横ナデが主に施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。胴部最大径17.6cm、現存高20.2cmである。

2は、中央やや東寄りの覆土下位から正位で出土した大破片を中心に小破片7点の計8点が接合したキャリパー状を呈する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下全面に単節縄文LRを縦位回転で施文している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。推定口径26.0cm、現存高17.0cmである。

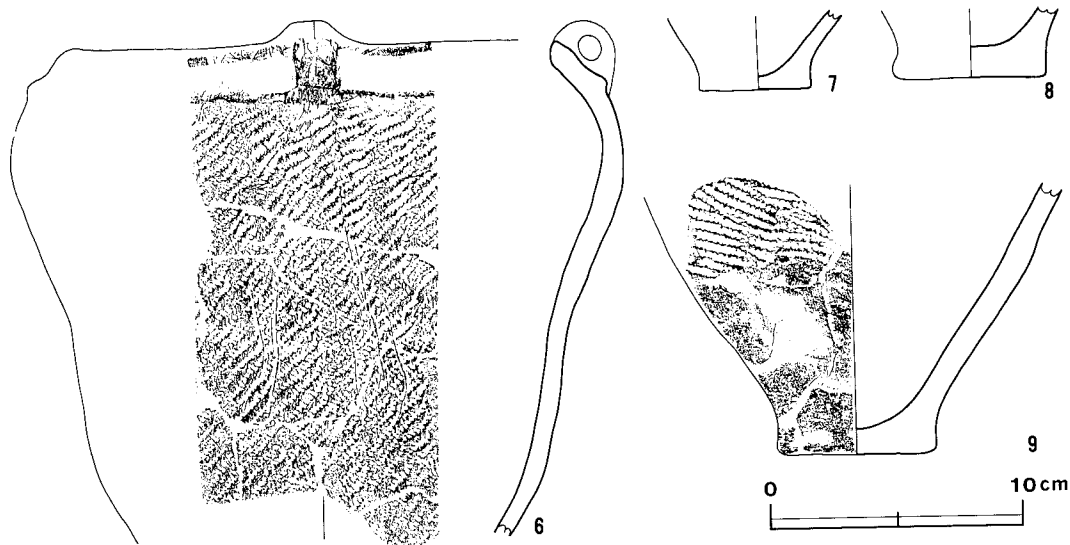
3は、中央やや北寄りの覆土下位から逆位で出土した口縁部片を中心に7点が接合したキャリパー状を呈する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下全面に単節縄文LRを縦位回転で施している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが加えられている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が褐灰色、内面が灰褐色を呈する。推定口径29.0cm、現存高14.8cmである。

4は、北西壁寄りの覆土の下位から正位と逆位で出土した破片6点が接合したもので、ゆるい波状を呈し、内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。波頂部で幅4cm程の口縁部無文帯を1条の断面三角形の微隆線で区画し、以下全面に単節縄文RLを縦位回転で施文する。内面は横ナデが施されている。胎土は長石・石英粒・雲母片をやや多く含む粗雑であるが、焼成は良好である。色調は外面がにぶい褐色、内面が灰褐色を呈する。推定口径38.0cm、現存高20.5cmである。

5は、中央やや東寄りの覆土下位から正位で一括して出土した破片28点が接合し、ほぼ器形がうかがえるまでになったものである。口縁部が内湾する鉢形土器で、口縁直下に幅1cm程の無文帯を有し、以



第60图 第69号住居跡出土土器実測図(1)



第 61 図 第 69 号住居跡出土土器実測図(2)

下に単節縄文 LR 横位回転で施文し、底面から 3～4 cm 程は無文のまま残している。内面は上半横ナデ、下半縦ナデを丁寧に施している。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。推定口径 29.2 cm，推定底径 6.2 cm，器高 29.0 cm である。

6 は、北壁寄りの覆土下位から逆位で一括して出土した破片 23 点が接合した口縁部が内湾する小形深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁部に推定で 4 単位の小さな環状把手を付け、幅 2 cm 程の口縁部無文帯を 1 条の断面三角形を呈する微隆線で区画し、以下全面に単節縄文 RL を縦位回転で施文している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。外面の口縁直下の一部には炭化物が付着している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい黄褐色、内面が黒褐色を呈している。推定口径 20.0 cm，現存高 20.0 cm である。

7 は、炉の北西側の覆土中から正位で出土した無文の小形深鉢形土器の底部片で、内外面とも軽いナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい赤褐色を呈する。底径 4.5 cm，現存高 3.0 cm である。

8 は、北壁寄りの覆土中から正位で出土した深鉢形土器の底部片で、内外面とも縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい橙色を呈する。

9 は、中央やや西寄りの覆土下位から逆位で出土した破片を中心に 10 点が接合した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面には単節縄文 LR が縦位回転で施文され、底面から 6 cm 程は無文で軽いナデが加えられている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が黒褐色を呈する。底径 6.4 cm，現存高 10.5 cm である。

第 72 号住居跡 (第 62 図)

本跡は、調査区の南端部の N4c2 区を中心に確認され、南側約 2 分の 1 は調査区外に延びているために未調査である。本跡の北西側は古墳時代前期の第 71 号住居跡に切られている。

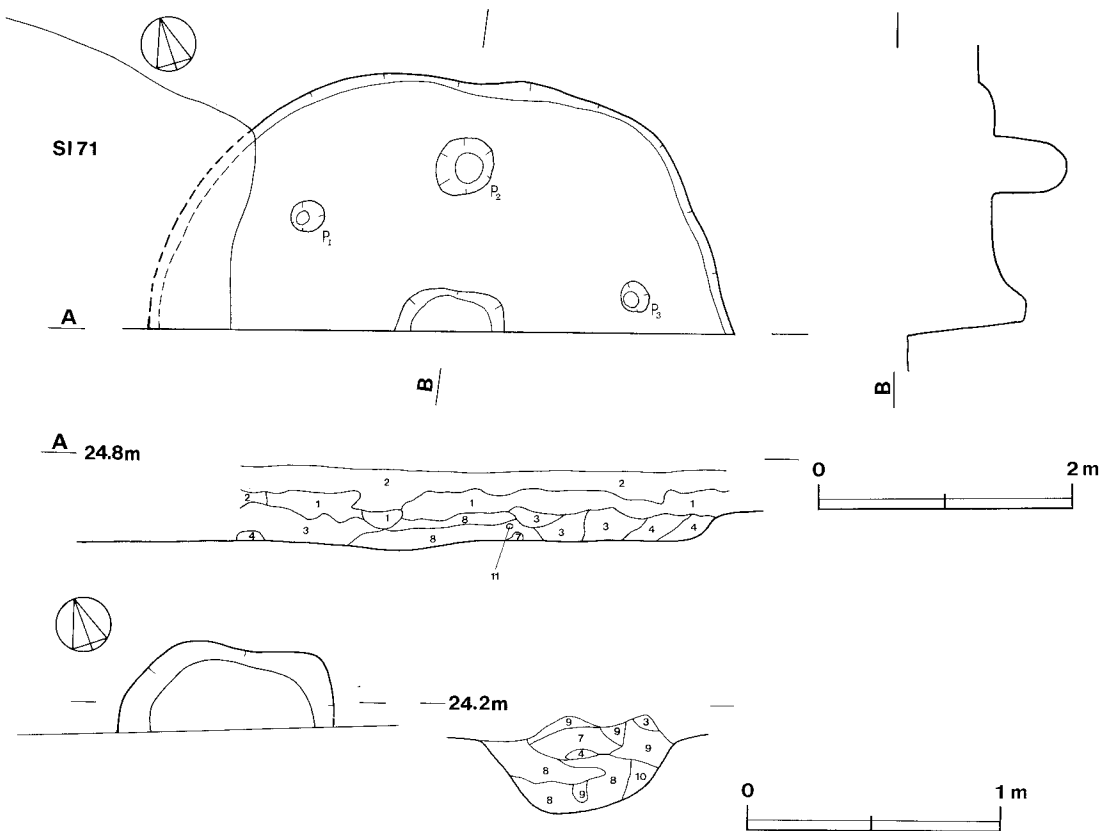
平面形は、推定によれば楕円形と考えられ、長径 4.65 m、短径は調査範囲内で 1.92 m を測る。炉を通る長径方向は、N-69°-W を指すものと思われる。

壁は、北から東側にかけて検出されており、東側は壁高 16 cm で、外傾して立ちあがり、北側は 14 cm で、ゆるやかに立ちあがっている。壁はソフトロームで、覆土の暗褐色、褐色土とは明瞭に識別でき、硬くはないが締まりがある。

床は、ソフトロームではほぼ平坦であるが、特に踏みしめられてはならず軟らかい。しかし、ロームブロックが処々に露出している。

ピットは、P₁~P₃の 3 か所が検出された。P₁、P₃は、径 20~25 cm で位置的にみると本跡の柱穴と思われるが、P₃の覆土は軟らかく、木の根等の攪乱かもしれない。P₁は、覆土も暗褐色で締まりがあり、深さ 41 cm と良好で主柱穴の 1 か所と想定される。P₂は、長径 48 cm、短径 44 cm と大形で、深さも 60 cm と深い。

炉は、本跡のほぼ中央部に検出されたが、南西側約 2 分の 1 が調査区域外に及んでいる。長径 88 cm



第 62 図 第 72 号住居跡実測図

を測る地床炉で、播鉢状に掘り込まれ最深部で28.5 cmである。炉壁、炉床とも良く焼けてロームが硬化はしているが、赤化はしていない。炉の覆土は、全体的に焼土粒子を含むが、上位に多く、下位に少ない。他にローム粒子、炭化粒子を少量含む赤褐色土、暗赤褐色土が主となっている。焼土の広がり、炉の掘り込みより広く長径1.6 m、短径0.7 mにおよんでいる。

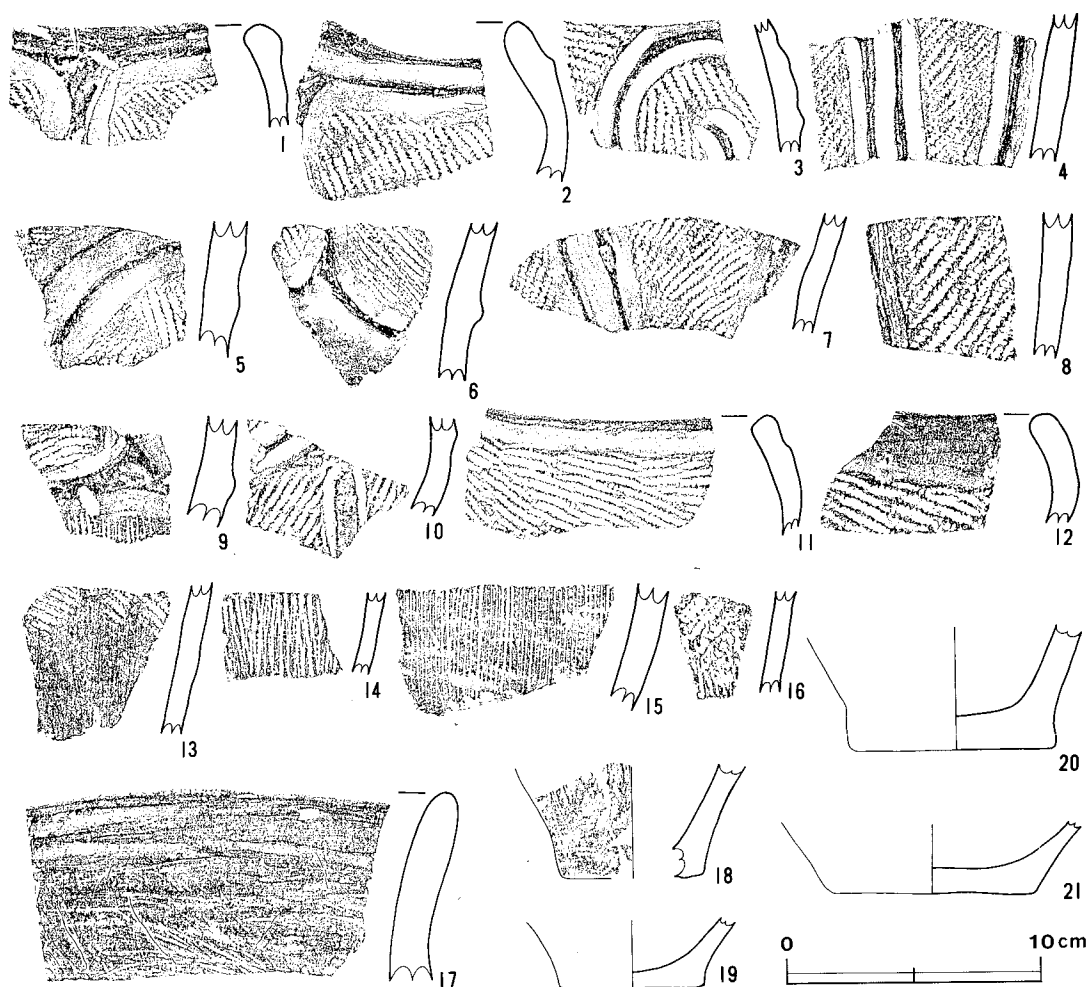
覆土は、中央部に焼土粒子を多く含む暗赤褐色土、壁寄りにはローム粒子などを含む暗褐色土、東壁近くには締まりのある褐色土が堆積している。覆土中の処々には赤褐色土がブロック的に認められる。

遺物は、散在的に出土しており、やや中央部に多い傾向がある。土器片181点が出土し、土師器片は1点のみである。これは第71号住居跡に属するものである。他に土製円板3点がある。

本跡の時期は、炉内および覆土中出土の土器から判断すれば加曾利EⅢ式期と思われる。

第72号住居跡出土土器（第63図1～21）

第63図1・2は、第Ⅰ類a種と考えられるが小片のため不明確である。あるいは第Ⅱ類の口縁部片と



第63図 第72号住居跡出土土器実測図・拓影図

も思われる。3～8は、第Ⅱ類土器の胴部片である。3・4の隆線の断面形はやや丸味を帯び、5～8は細目で、尖り気味である。9は胴部の小片で、上半は楕円区画内に縄文が施され、下半は縦位の条線文が付されており、鉢形土器と思われる。10も胴部片で、隆線と逆U字状の磨消帯が組みあわされている。11は口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下に縄文を施している。12は第Ⅴ類c種である。13～16は胴部の小片である。13は底部近くの破片で上端に縄文がみられる。14・15は条線文が縦位に密に施文され、16は縄文と条線文が併施されている。17は無文厚手の口縁部片で、横ナデが顕著に認められる。

18は、覆土中から出土した小形深鉢形土器の底部片で、外面に細かい縦位の条線文が雑に施文され、内面は軽いナデが加えられている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が黒褐色を呈する。推定底径5.4 cm、現存高4.3 cmである。

19は、確認面から出土した無文の底部片で、内外面ともナデが施されているが、外面は丁寧である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を呈する。底径6.0 cm、現存高2.7 cmである。

20は、北東壁寄りの覆土中から正位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、内外面とも雑なナデが施されている。胎土は長石・石英粒を含み粗雑であるが、焼成は良好である。色調は外面がにぶい褐色、内面が明褐色を呈する。底径8.0 cm、現存高4.7 cmである。

21は、北壁寄りの覆土中から正位で出土した無文の鉢形土器の底部片で、内外面ともに丁寧なナデが加えられ、赤彩痕が残されている。他に接合しない同一個体の小片が4点ある。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。底径8.0 cm、現存高2.8 cmである。

第74号住居跡（第64図）

本跡は、調査区の中央部のL4a5区を中心とした位置に確認され、第337～339号、第369～370号土坑により床面の各所を掘り込まれている。新旧関係は、本跡がいずれの土坑よりも古いと判断される。

平面形は、長径5.81 m、短径5.46 mの不整円形を呈し、長径方向は、N-61.5°-Wを指している。

壁は、ソフトロームでやや外傾して立ちあがるが、壁際の褐色土との識別はあまり明瞭ではなく、焼土粒子、炭化粒子が少量混入していることから区別した。壁高は、各壁とも20～25 cmではほぼ等しい。

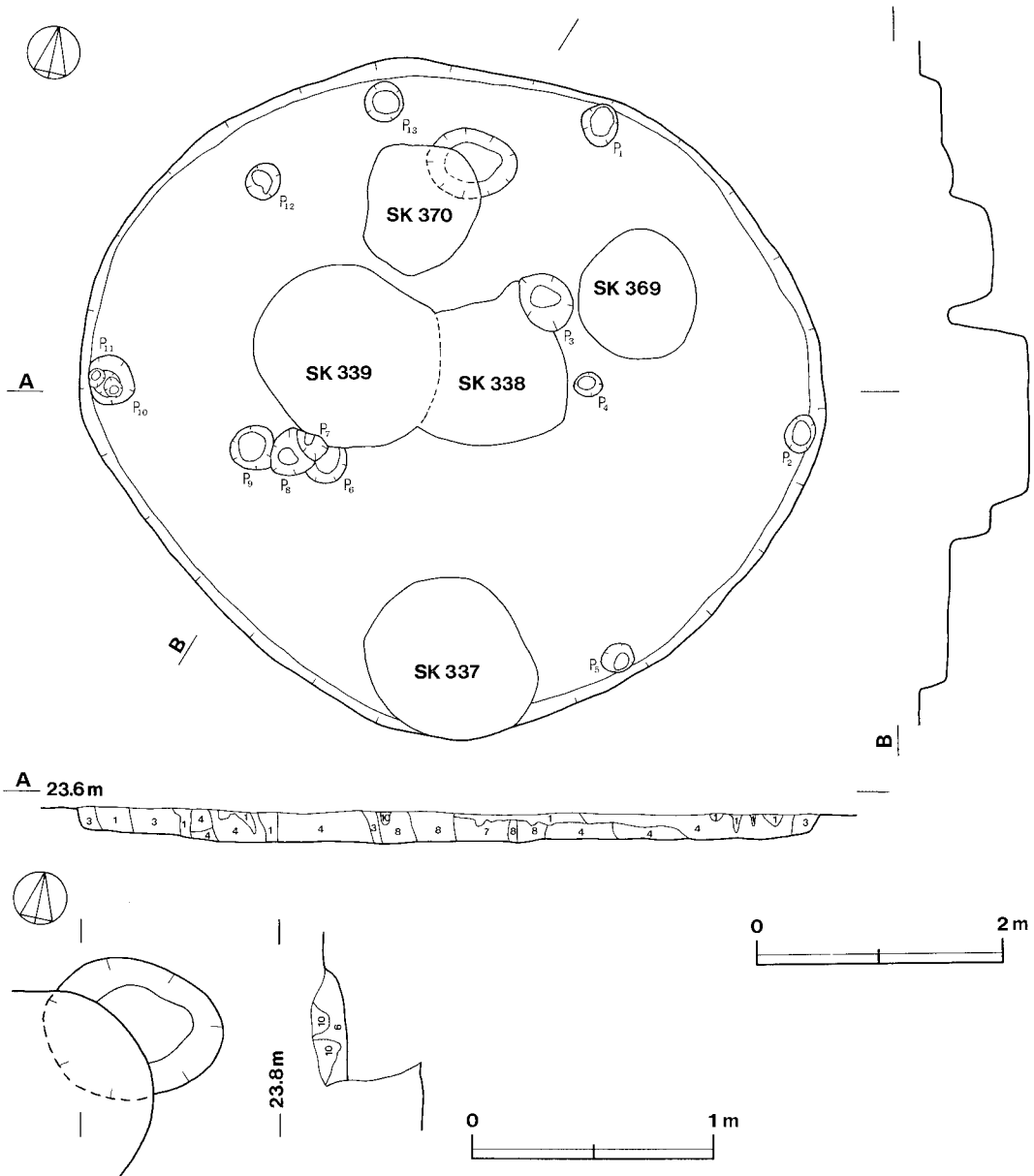
床は、ロームで全体的に平坦であるが、硬く踏みしめられてはならず軟弱である。

ピットは、P₁～P₁₃の13か所穿たれているが、土坑により失われたものも多くあると考えられ、このピットだけから本跡の柱穴配置を推定することは困難である。しかし、周壁に沿って位置するP₁、P₂、P₅、P₁₀～P₁₃などは支柱穴の可能性が高いもので、径25～40 cm、深さ22～46 cmを測る。床面内部のピットの性格は不明である。

炉は、本跡のほぼ中央に位置していたものと思われるが、第338、339号土坑により切られたと考えられる。第338号土坑の覆土上位には焼土が多量に含まれており、本坑が炉を壊したことがうかがえる。また、床面の北壁寄りに焼土が認められたが、第370号土坑により南西側を切られている。この焼土は、深さ7～8 cmの浅い掘り込みを有するが、壁・床とも焼けておらず、ここで火が使用されたとは考えられない。

覆土は、中央部に暗赤褐色土、赤褐色土が、その他は暗褐色土、褐色土が堆積しており、各土層中には焼土粒子、ローム粒子を中量から多量に含み、炭化粒子を少量混じえている。

遺物は、覆土の中～上位から出土しているものが多いが、床面に密着して出土した資料も少量ある。分布状況は全体的に散り、やや中央部から北東側にかけてまとまっているが、南壁と北壁寄りには疎である。



第 64 図 第 74 号住居跡実測図

土器片は 1,070 点出土し、他に土器片錘 8 点、石皿片 1 点、打製石斧 1 点などがある。

本跡の時期は、土坑との重複関係および出土土器から判断すれば、加曾利Ⅲ式期と考えられる。

第 74 号住居跡出土土器（第 65 図 1 ～ 14）

第 65 図 1 ～ 3 は、第 I 類に属する胴部片で、直線的磨消帯が垂下している。1 は口縁から胴部に向け

ての小片である。4・5は、第Ⅱ類の胴部片で渦巻状と垂下する隆線が認められる。6～8は、第Ⅲ類に分類される。6は口縁部片で、口縁直下に各2条の沈線と刺突列が巡り、以下に曲線的な磨消帯が施されている。7・8は胴部片である。9・10は第Ⅴ類a種、11はc種、12・13はe種に相当する。9・10は口縁直下に1条の凹線が巡り、9は無節、10は単節縄文が施されている。11は単節LRの縄文で、最上段の一部のみ横位回転で、以外は縦位回転されている。12は13より無文帯の幅が広い。14は縄文のみが施された胴下半部の破片である。

第79号住居跡（第66図）

本跡は、調査区の北側のK3i3区を中心とした位置に確認され、第81・89号住居跡と重複している。新旧関係は、第81号住居跡の床面が本跡より若干低く、しかも貼り床が認められなかったことから本跡の方が古いと判断される。第89号住居跡は、本跡と第81号住居跡の中間部に炉が検出されたことから命名された住居跡で、平面形は推定によっている。本跡との新旧関係は不明である。また、本跡の西側を第3号溝が切っており、第3号溝内に存する第160号、184号、185号土坑も覆土からみて本跡より新しい。

本跡の推定範囲内の北西壁寄りに第13号埋甕遺構が検出されているが、位置などから判断して本跡に伴うものとは考えられない。

本跡および第81・89号住居跡が検出されたK3i3・i4・j3・j4区は土器片の出土のきわめて多い地区で、遺構の存在を予測して調査した場所であった。本跡の西方約4.5mには第3号住居跡、北方約6mには第34・58号住居跡、北東方向約8mには第10号住居跡が存在しており、縄文時代中・後期の住居跡が密集する地区である。

平面形は、重複が激しいため推定の部分が多いが、長径7.52m、短径5.96mの楕円形を呈し、長径方向は、N-49.5°-Wを指すものと思われる。

壁は、南側と北東側で確認できただけで、他は失われている。壁は、ソフトロームでゆるやかに外傾して立ちあがり、壁高は南側で15cm前後、北東側で8～10cm前後と低い。

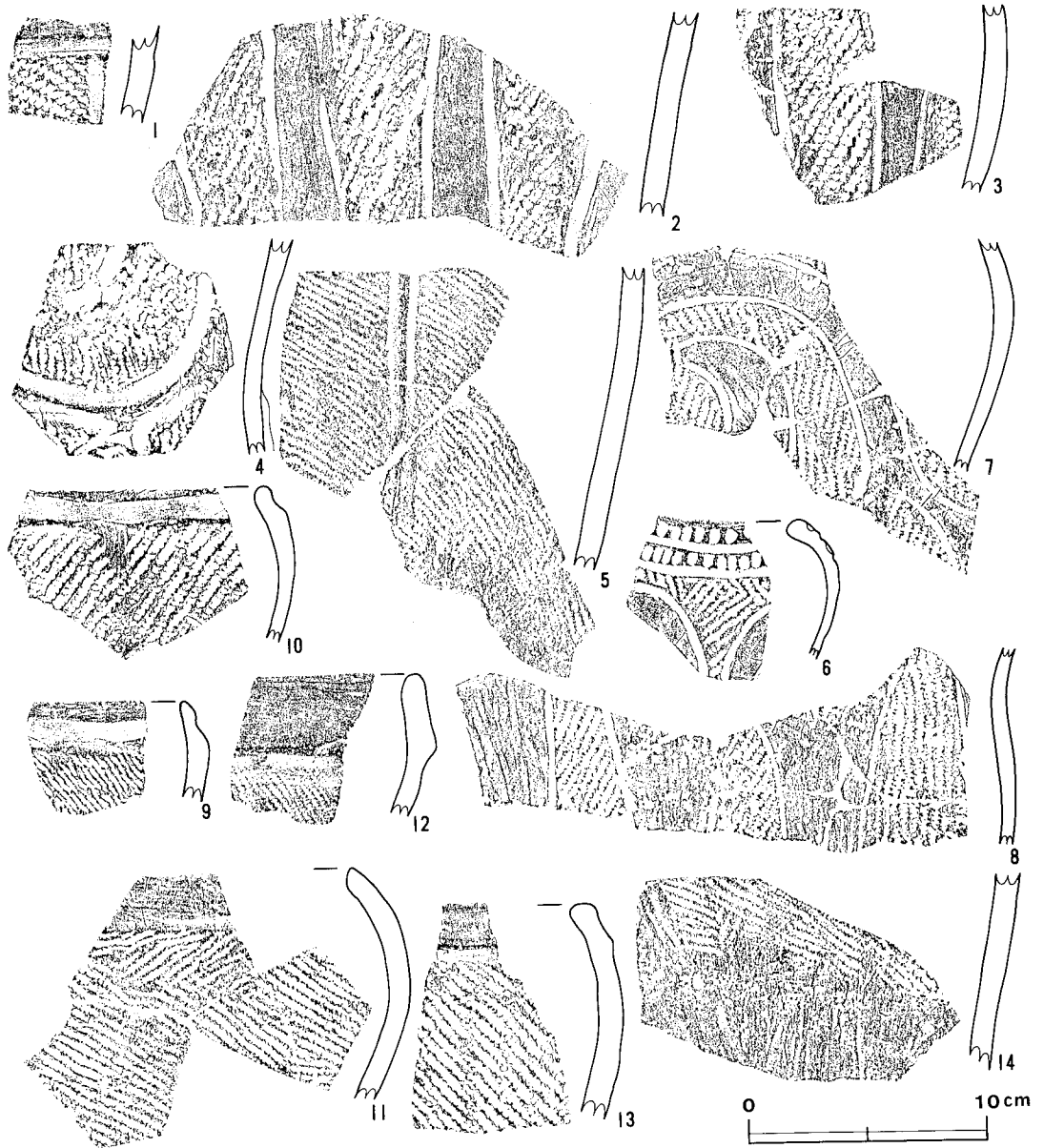
床は、ロームではほぼ平坦であるが明瞭な硬さを有さず、軟弱な状態である。

ピットは、本跡の推定範囲内に11か所穿たれているが、重複する住居跡に属すると考えられるピットも含まれている。本跡の支柱穴は、配置および規模から推定すれば、P₁、P₂、P₅、P₉の4か所と第3号溝により失われた北西側の1か所が想定される。直径30～35cm、深さ27～44cmと比較的揃っている。南・東側に認められる直径20～25cm、深さ17～26cmの小穴のうちいくつかは支柱穴の可能性がある。

炉は、本跡の推定範囲内の北西側に位置しており、炉の北西側約2分の1を第3号溝と第184号土坑により削られている。残存部の長径76cm、短径42cmを測る楕円形を呈する床炉である。塊状に掘り込まれており、中央部が一段凹み、最深部で36cmを測る。炉床は良く焼けて赤化、硬化が著しいが、炉壁はロームの硬化が認められるだけで赤化はしていない。炉の覆土は、ローム粒子多量、焼土粒子を中量から多量に含む褐色土、赤褐色土が堆積しており、上位よりも下位が締まっている。

本跡の覆土は、中央部の上位が暗褐色土、下位と壁際は褐色土が主として堆積しており、部分的に攪乱が入っている。ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子少量を含み締まっている。

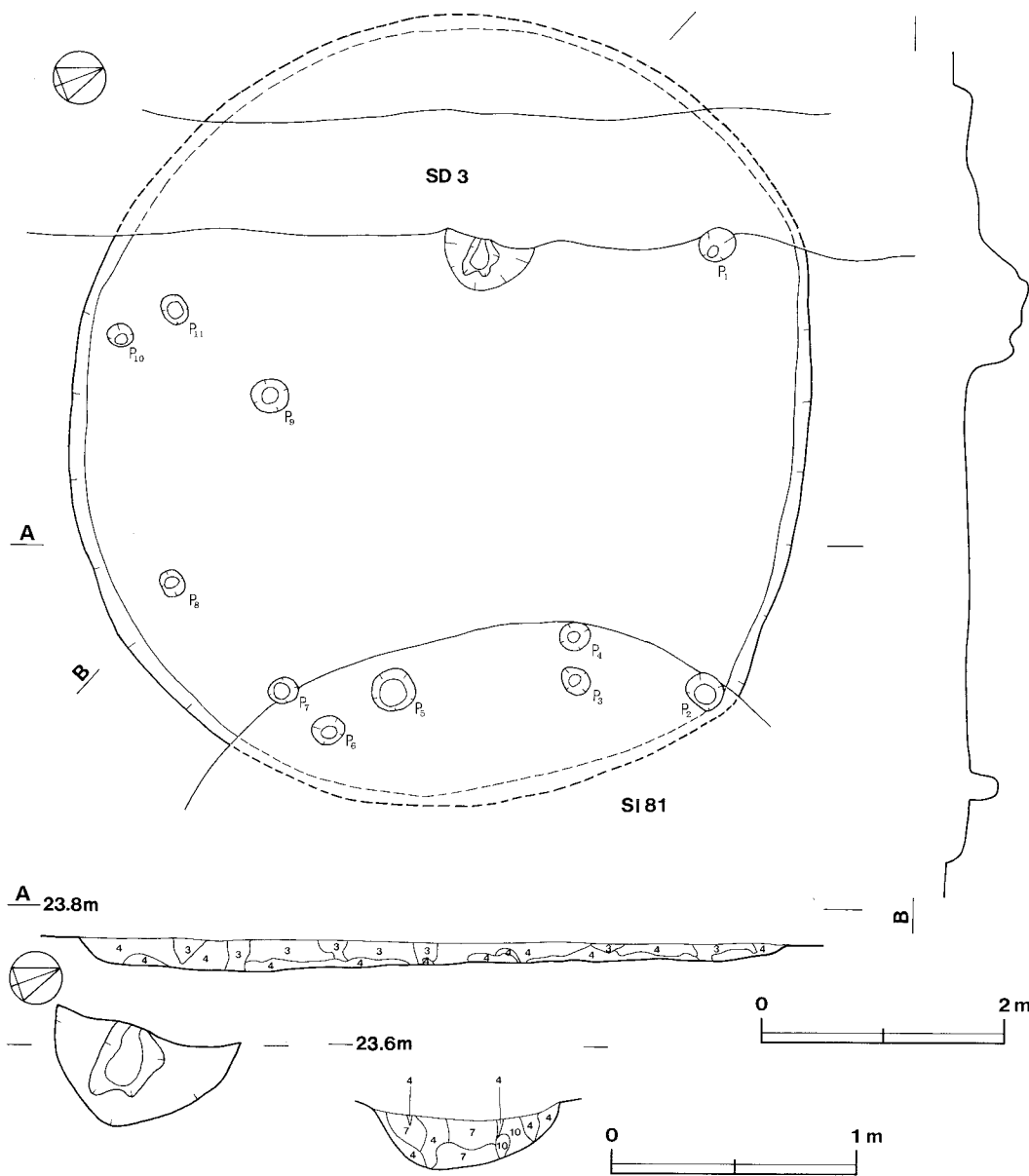
遺物は、本跡の推定範囲内から土器片879点、土器片錘5点、土製円板4点、半欠の石槍1点、石皿片1点などが出土している。石槍は先端を北西方向にむけて床面より10cmほど浮いた状態で出土してい



第 65 図 第 74 号住居跡出土土器拓影図

る。分布状況は中央部にやや多く北壁寄りにも少しまとまっている。いずれも覆土中からの出土で、床面密着のものはほとんどない。土器片の中には土師器片 2 点が混入しているが、これは北側に隣接する第 7 号住居跡に属するものかもしれない。

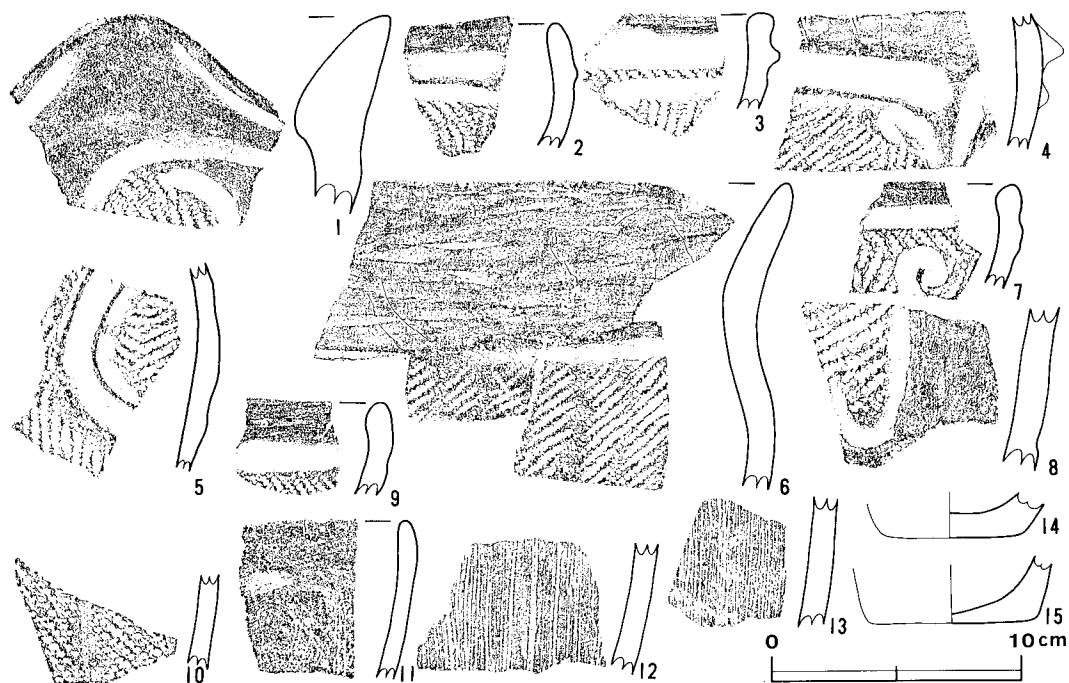
本跡の時期は、他遺構との重複関係や覆土中の出土土器から判断すれば、加曽利Ⅲ式期と考えられる。



第 66 図 第 79 号住居跡実測図

第 79 号住居跡出土土器 (第 67 図 1 ~ 15)

第 67 図 1 は、第 I 類 b 種の波頂部片で、太目の沈線による渦巻状の区画内に縄文が充填されている。2 ~ 5 は、第 II 類と判断されるが、小片が多く不明瞭である。2・3 は口縁部片、4・5 が胴部片である。3 は隆線上にも縄文が付されている。4 にも先端が軽く屈曲する沈線が付けられており特異である。5 は胴部片で、2 本組の隆線で曲線文が描かれる。6 は、幅広い無文帯を有する鉢形土器である。7 ~ 9 は、第 III 類と考えられ、7・9 が口縁部片、8 が胴部片である。7・9 は口縁直下に 1 条の凹線を巡らし、7



第 67 図 第 79 号住居跡出土土器実測図・拓影図

には先端が軽く屈曲する沈線文が描かれている。8にはU字状の区画内に縄文が充填されている。10は複節縄文が施された胴部の小片である。11～13は条線文が施されており、11は第V類h種に相当し、無文帯下に縦位波状に施文しているが、器面の磨滅が著しい。12・13は密に施文されている胴部片である。

14は、確認面から出土した深鉢形土器の底部片で、内外面とも軽いナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面がにぶい橙色を呈する。底径6.0cm、現存高1.4cmである。

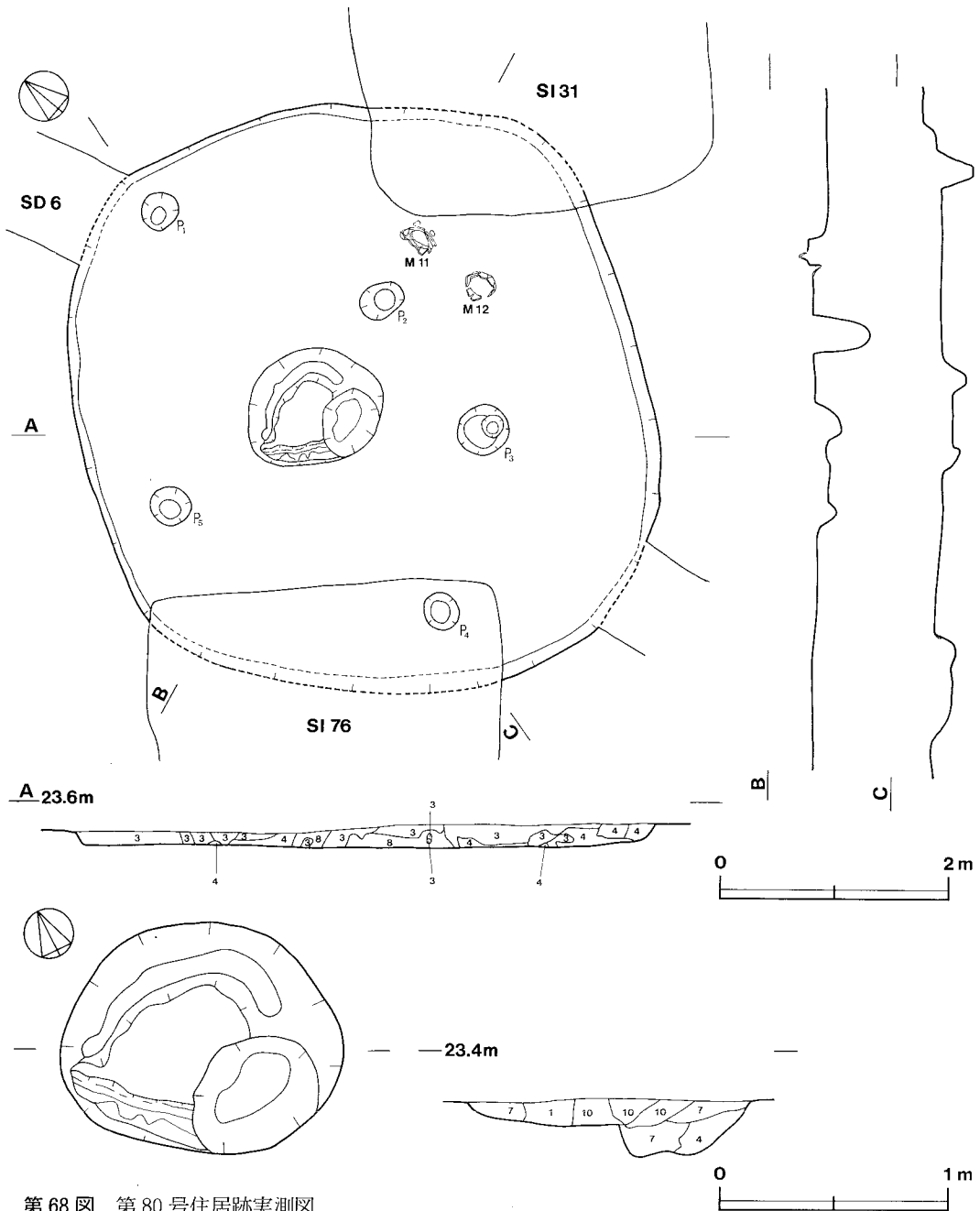
15は、覆土中から出土した深鉢形土器の底部片で、内外面とも丁寧なナデが施されている。底面中央部は薄くなっている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が黒褐色を呈する。底径6.8cm、現存高2.4cmである。

第 80 号住居跡 (第 68 図)

本跡は、調査区の北東側の K4i₂区を中心とした位置に確認され、南西側を第76号住居跡、北東側を第31号住居跡、中央部を第6号溝により削り取られており、そのいずれよりも古い。また、本跡の北東側の床面上に第11・12号埋甕遺構が検出されたが、これらは遺存状況および土器の型式などからみて本跡に伴うものと思われる。

本跡の西側約25mには第81号住居跡、西北西約18.5mには第10号住居跡、南東側約10.5mには第74号住居跡が存在している。

本跡の平面形は、他の遺構との重複が著しいため推定によらざるを得ないが、長径5.34m、短径4.94



第 68 図 第 80 号住居跡実測図

m の隅丸方形に近い楕円形を呈するものと思われる。長径方向は、N-33°-E を指している。

壁は、ロームでやや外傾して立ちあがっている。残存部が少ないが、壁高は、北西側で 12 cm、北東側で 7~10 cm、南東側で 15 cm を測り、全体的に低い。

床は、中央部がわずかに低く、周壁にむかって若干あがり気味になる。床面はロームで特に踏みしめら

れてはいないが、覆土とは識別できる硬さがある。

ピットは、P₁～P₅の5か所が検出され、これらが支柱穴と考えられる。炉の東西に位置するP₂とP₅は、径30～40 cm、深さ45～48 cmと良好であるが、他のピットは、直径30～34 cmあるが深さが10～30 cmと浅い。南側のP₄は上面を第76号住居跡により削られたものと考えられる。

炉は、本跡のほぼ中央部やや北西側に寄って位置する地床炉で、長径124 cm、短径101 cmの楕円形を呈し、南側の最深部で23～26 cm掘り込まれている。焼土は、住居跡の覆土の下位にも広がっており、炉の存在が早くから推測できた。炉壁は南側が良く焼け、炉床は赤化・硬化が著しい。また、炉の南側が一段深く掘り込まれ、他の側には溝状の落ち込みが巡っており、石囲いなどを施した痕跡かもしれない。炉内の覆土は、赤褐色、鈍い赤褐色を呈し、ローム粒子、焼土粒子を多量に含んでいて、上位ほど締まり、下位はやや締まりが弱い。

覆土は、中央部の上位が暗褐色土、下位が暗赤褐色土、壁寄りには褐色土が主体となり堆積している。各土層中にはローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含んでいる。

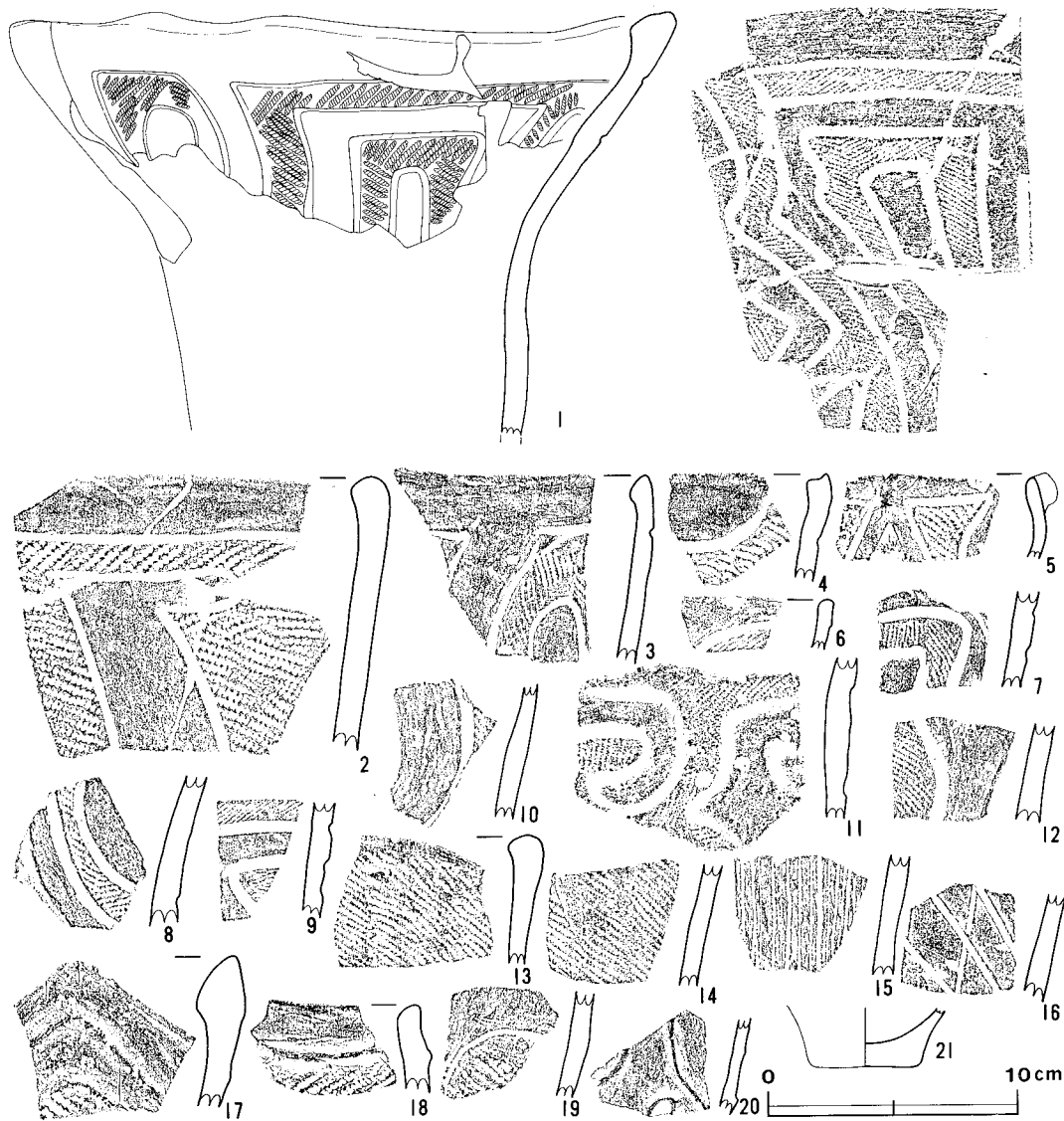
遺物は、中央部と北西壁寄りにややまとまって出土しているが、全体的に量は少なく427点の土器片と土器片錘5点、磨製石斧片1点が出土している。炉の南側の覆土下位からは、器形をほぼうかがえる称名寺式期の深鉢形土器が見つれた状態で出土している。

本跡の時期は、上記の深鉢形土器および本跡に伴うと判断される第11・12号埋甕遺構出土土器からみて称名寺式期と考えられる。

第80号住居跡出土土器（第69図1～21）

第69図1は、炉の南西側60 cm程の覆土中からまとまって出土した破片25点が接合した口縁部が大きく外反する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。口唇部は平坦でやや内削ぎ状を呈し、内側に稜をもつ。口縁部に小さな山形突起を2か所1対の部分と1か所の部分を交互に配するものと思われ、2か所の突起上には円形刺突を加えている。口縁部に幅2 cm程の無文帯を有している。器面には逆7字状、J字状などのモチーフを組み合わせた曲線的モチーフを全面に描き、モチーフ内を磨り消し、モチーフ外に単節縄文LRを充填している。器面には磨耗や欠落部分が多く、文様の全体的構成は不明瞭である。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。口径26.8 cm、現存高17.4 cmである。

2～12は、磨消縄文を特色とする土器群で、2～6が口縁部片、7～12が胴部片である。2は大形土器でスベード文が口縁部の縄文帯から垂下している。3には渦巻状のモチーフが認められ、4・6には弧状の磨消帯が観察される。5は小形土器で、三角形を組みあわせたパネル状の区画が主となっており、小突起が付されている。胴部片は曲線的磨消縄文を描くが、11は他よりやや厚手で、J字状の磨消帯を有し、胎土に石英などを多く含み、古い様相を呈している。13・14は縄文のみの破片で、施文が類似しており同一個体かもしれない。13は口唇部が内側に肥厚している。15は縦位の密な条線文、16は雑な斜格子目状の沈線が施されている胴部片である。17・18は、断面三角形の微隆線による施文が主となる口縁部片で、17の口唇部内面は強く突出し、称名寺式土器の1～3・13などと共通しており、加曾利EIV式系統の土器が、称名寺式段階まで残存したものと扱えられる。18は口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を施すものである。19は細い沈線区画内に縄文が充填されている胴部片である。20は第VII類に属する薄手の胴部片である。



第 69 図 第 80 号住居跡出土土器実測図・拓影図

21 は、覆土中から出土した無文の底部片で、内外面とも丁寧なナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい橙色を呈する。底径 4.4 cm、現存高 2.4 cm である。

第 81 号住居跡 (第 70 図)

本跡は、調査区の北側の K 3 j 4 区を中心とした位置に確認され、西側で第 79・89 号住居跡と重複し、これらを切っている。また、本跡の北東壁には第 468 号土坑が存在しているが、出土遺物からみて本跡よ

り古い。

平面形は、西側が重複により不明瞭となっているが、長径 5.64 m、短径 5.15 m の楕円形を呈し、長径方向は、N-52°-E を指すものと思われる。

壁は、最初に南・東側の壁が確認され、順次北・西方向へ追っていったもので、南東側で壁高 20 cm、南側で 10 cm、北側で 13 cm 程度でいずれもゆるやかに立ちあがっている。西側では 3~4 cm 程度しかない。壁は、ロームであるがあまり硬くなく、覆土は炭化粒子・焼土粒子が少量混入していることにより区別した。

床は、ロームで第 79 号住居跡の床に比べればやや踏み締まり、部分的にロームブロックの露出も観察できた。全体的に平坦であるが、南東側がやや低くなっている。

ピットは、本跡の推定範囲内に 14 か所認められたが、第 79・89 号住居跡に属すると思われるものもある。本跡の支柱穴は、P₁、P₃、P₆ の 3 か所と第 79 号住居跡の P₄ としたものの計 4 か所と考えられる。これらは径 22~35 cm、深さ 60~66 cm を測る。その他の浅い小ピットは支柱穴的な役割を果すものであろう。

炉は、本跡の中央部よりやや南東側に寄った位置にあり、長径 97 cm、短径 85 cm の楕円形を呈し、中央部で 26 cm 掘り込まれた地床炉である。南東側に溝状の落ち込みを有し、炉壁は赤く焼土化しているが、炉床はロームが硬化しているだけで赤化はしていない。覆土には、ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロックなどを多量に含む赤褐色土、暗赤褐色土、鈍い赤褐色土が堆積している。

覆土は、中央部上位が暗褐色土、下位と壁寄りが褐色土を主としており、いずれもローム粒子中量、炭化粒子、焼土粒子を少量含み締まっている。部分的に攪乱を受けている。

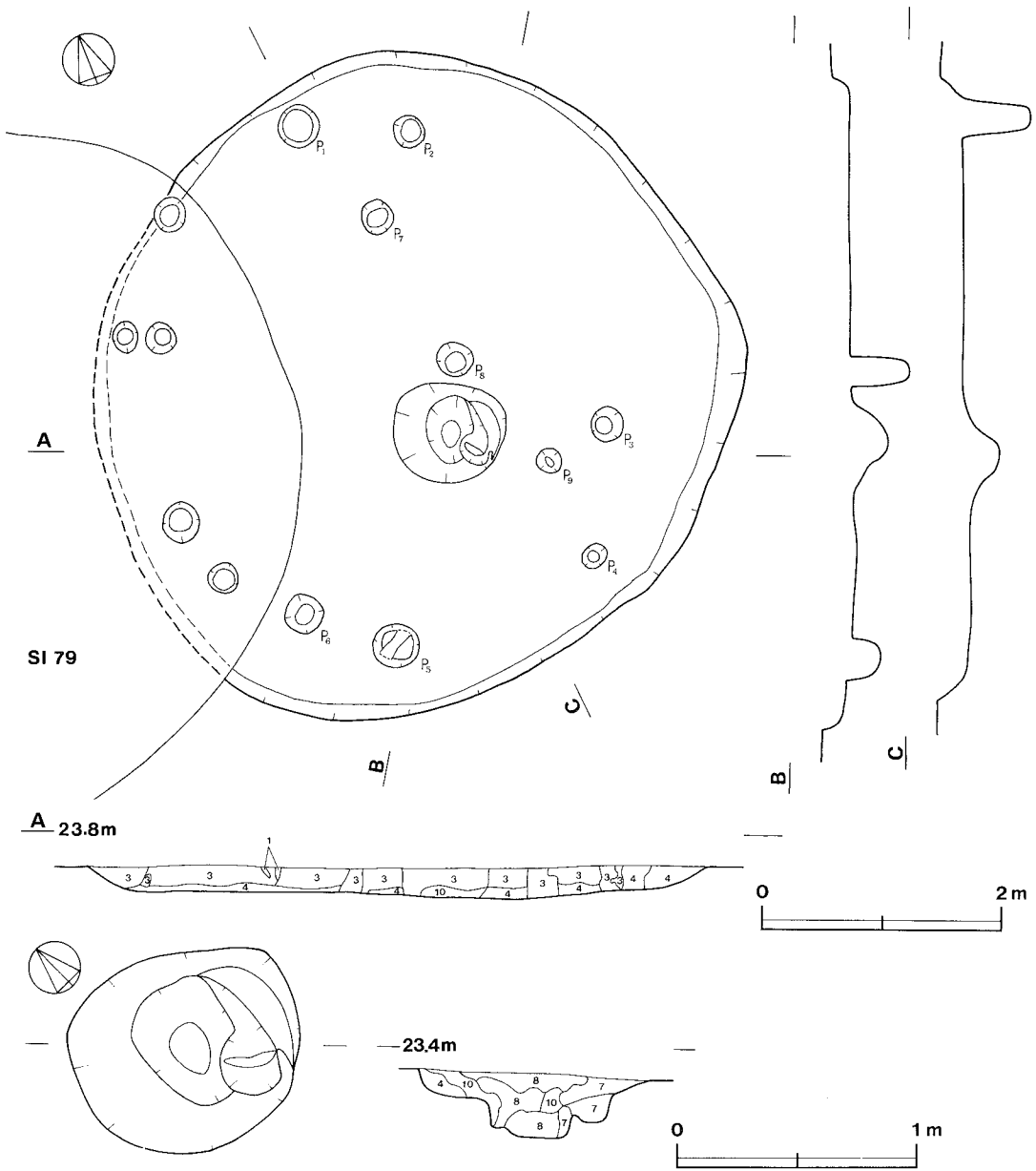
遺物は、本跡の中央部から北側にかけて集中しており、特に炉の東側や第 79 号住居跡と重複する西側部分には多く認められる。しかし、南側には少なく、南東側の壁寄りにはほとんどない。いずれも覆土からの出土で、床面密着のものはみられない。土器片は 733 点で、他に土器片錘 3 点、土製円板 1 点がある。磨製石斧 1 点が、東壁際の床面上から 10 cm 程度浮いて出土している。土器片 6 点は混入と考えられる。

本跡の時期は、遺構の重複関係および覆土中から出土した遺物より判断して堀之内 I 式期と考えられる。

第 81 号住居跡出土土器 (第 71~72 図 1~30)

第 71 図 1 は、西側の覆土中から逆位でまとめて出土した破片を中心に確認面や覆土中から出土した破片の計 34 点が接合したもので、推定で 4 単位の波状口縁を呈する深鉢形土器で、同一個体の破片が他に 8 点ある。底部から外傾して立ち上がり、胴上半部に最大径を有し、口縁部にむけてやや内傾し、波頂部で外反する。口縁部無文帯を低隆線と沈線 1 条ずつを巡らして区画し、波頂部には 8 字状貼付文を付し、貼付文の上下端には押圧文を加えている。波頂部下には 2 重沈線による卵形文が描かれ、波頂部間の胴部には蛇行沈線文が施されている。胴部上半には単節縄文 LR が地文として横位回転で施されている。胴下半部以下と内面は縦ナデが施されている。内面の上端部は横ナデされている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が明褐色を呈する。推定口径 26.0 cm、底径 11.0 cm、器高 44.0 cm である。

2 は、炉のすぐ東側の覆土中から逆位で出土した破片を中心に周囲から比較的まとめて出土した破片 64 点が接合した大形深鉢形土器で、口縁部の大半と胴下半部以下を欠失する。口縁部に推定で 4 単位の小突起を有し、ここから貼付隆帯が垂下し、幅 4 cm 程の口縁部無文帯を区画する低隆帯と接合する。各

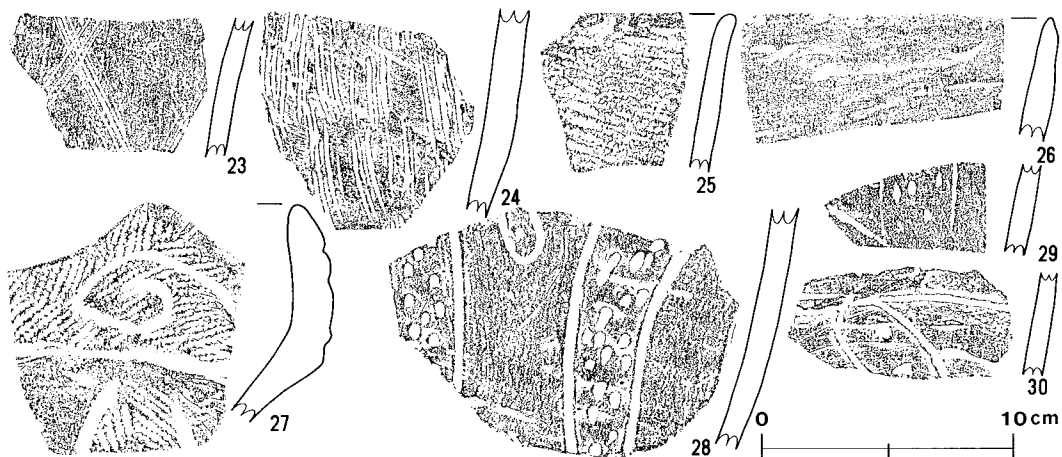


第70図 第81号住居跡実測図

隆帯上には押捺が加えられている。また小突起の頂部および隆帯の接合部には押圧が施され、凹んでいる。胴部全面には単節縄文 LR が横位・斜位回転で施文されているだけで、他に文様はない。口縁部無文帯の一部にも同様の縄文が付されている。全体に作りの悪い土器で、器面に凹凸がある。現存部下端から 15 cm 程は縦ナデが施され、無文となっている。内面上端は横ナデ、以下は縦ナデが施されているが、軽いものである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。推定口径 33.0 cm、現存高



第 71 图 第 81 号住居跡出土土器实测图·拓影图(1)



第72図 第81号住居跡出土土器拓影図(2)

47.0 cm である。

3は、第79号住居跡と本跡との重複部分の確認面から出土した破片7点が接合した底部から直線的に外傾する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁直下に幅5 mm程の無文帯を有し、以下全面に粗い単節縄文 RLを斜位、横位回転で施している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は内外面とも明赤褐色を呈する。外面には黒斑がある。推定口径25.8 cm、現存高24.3 cmである。

4は、炉の東側の覆土中から逆位で出土した破片を中心に17点が接合したもので、胴部上位に最大径を有し、口縁部が内傾し、底部にむかって直線的にすぼまる器形を呈するが、底部が欠失する。外面に単節縄文 LRを横位、縦位の順に回転施文し、胴下半部は縦ナデが加えられ、無文のまま残される。器面はやや磨耗している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は良好で、色調は外面上半と内面が橙色、外面下半が褐色を呈する。推定口径26.6 cm、現存高22.5 cmである。

5～8は、口縁部に隆帯を主として施す一群で、口縁部がほぼ直立し、2に近い器形を呈するものと思われる。5は弧状の貼付文を有する波頂部片である。6～8は押圧が加えられた隆帯を貼付する。6・8は横位に巡り、7は弧状を呈する。6の隆帯下に刺突をもつ円形貼付文や刺突文が施されている。9～13は、縄文地文上に沈線文を施すもので、9～11は口縁部片、12・13は胴部片である。9～11には穿孔や刺突・円形貼付文などの装飾がみられる。10には半円弧状文が描かれ、13には「し」の字状文内に刺突文が付加されている。14～17は、無文地に沈線文が雑に描かれる口縁部片で、14・15はやや太く明瞭であるが、16・17は細く弱々しい。18～24は、条線文が描かれるもので、18以外は胴部片である。18～21は縦位波状、22・23は雑な斜格子目状に施文され、24は縦位に断続的に施される。18は口縁部無文帯が1条の沈線で区画されている。25は口縁直下から縄文が施されている。26は無文の口縁部片で、横ナデが顕著である。27は波状を呈する屈曲の著しい口縁部片で、磨消縄文と沈線による渦巻文が施されている。称名寺式土器でも古い段階の所産と思われる。28～30は、沈線による曲線の区画内に刺突文を充填する胴部片で、称名寺Ⅱ式土器に該当する。5区に類例がある。

第 83 号住居跡 (第 73 図)

本跡は、調査区の中央部やや西寄りの L2g6 区を中心とした位置に検出され、南西側約 3 分の 1 を第 5 号溝により切られている。また、炉の北西側に、第 417 号土坑が本跡の床面を掘り込んで構築されている。また、本跡の北東壁に第 473 号土坑が、南東側の床面上に第 474 号土坑が、重複しているが、新旧関係は不明である。

本跡の南西側には第 5 号溝を挟んで第 87 号住居跡が位置し、本跡と重複すると考えられるが、溝により重複部分を切られており、新旧関係は不明である。本跡の北側約 2 m には第 20 号住居跡、北東側約 8 m には第 17 号住居跡、北西側約 9.5 m には第 28 号住居跡が存在している。

平面形は、推定で長径 5.17 m、短径 4.53 m を測り、楕円形を呈し、長径方向は、N-55.5°-E を指すものと思われる。

壁は、ロームで外傾して立ちあがり、北西側で 18 cm、北東側の高い部分で 24 cm を測り、平均して約 20 cm 程度の壁高を有する。

床は、炉を中心とした部分が良く踏みしめられており、ロームブロックが浮き出している。床面は、南西側がやや高く、小さな凹凸があり壁際から中央部に向って傾斜している。周壁寄りには締まりが弱く軟らかい。

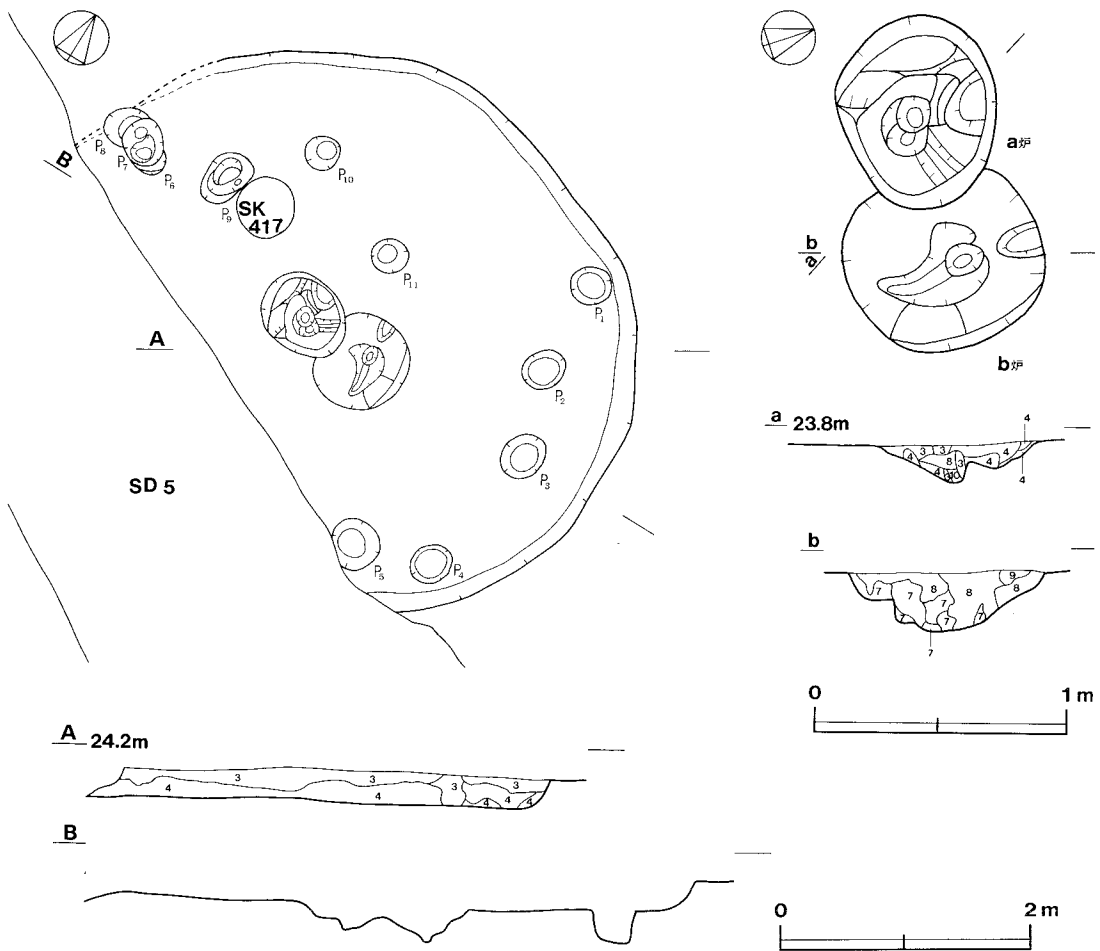
ピットは、本跡の残存する床面上に 11 か所穿たれているが、柱穴の配列が不規則で支柱穴を断定しがたい。支柱穴の可能性を有するピットは P₃、P₄、P₅~P₁₁ などであり、2 基の炉にそれぞれ対応するピットとなると思われる。また、P₅ と対応するピットとしては、第 417 号土坑としたピットも可能性がある。径 46~50 cm で、深さ 52 cm を測り、P₅ の径 40 cm、深さ 42 cm と規模が類似する。P₃、P₄、P₆~P₉ は、径 30~40 cm、深さ 25~37 cm でやや細く、浅目である。前者がより古い b 炉に、後者が a 炉に対応すると考えられる。

炉は、本跡のほぼ中央部に東西に並んで a、b 2 基が検出された。西側の a 炉が新しく、東側の b 炉の西端を切っている。b 炉は、長径 77 cm、短径 73 cm のほぼ円形を呈し、擂鉢状の深い炉で炉壁・炉床とも全体的に良く焼けて赤変しており、非常に良好である。最深部で 28 cm 掘り込まれている。a 炉は、浅い皿状を呈し、長径 79 cm、短径 65 cm の楕円形で 16 cm ほど掘り込まれている。炉床の中央部にブロック状に焼けて赤変したロームが認められるだけで、炉壁は赤化していない。a 炉の覆土は、褐色土、暗褐色土が主となり、ローム粒子・焼土粒子を中量含む部分が多い。全体的に焼土は少なく、長期的な使用は考えられない。一方、b 炉の覆土には焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子を中量から多量に含む赤褐色土、暗赤褐色土が堆積している。

覆土は、基本的には上下 2 層から成り、各所に攪乱を受けている。上位が暗褐色土、下位が褐色土で、ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含む、上位は締まりが弱く、下位は締まっている。

遺物は、覆土中に散在する状態で検出され、特に集中する個所は捉えられなかった。土器片は 479 点で、土師器片 8 点が混在している。他に、土器片錘 3 点、土製品 1 点、石棒片 1 点が出土している。石棒は b 炉の北東側約 65 cm の覆土上位から出土し、深鉢形土器の大破片は北西寄りの覆土中位から検出されている。

本跡の時期は、b 炉内より出土した土器片および覆土中より出土の土器片から推定すれば、加曾利 EIV 式期と考えられる。

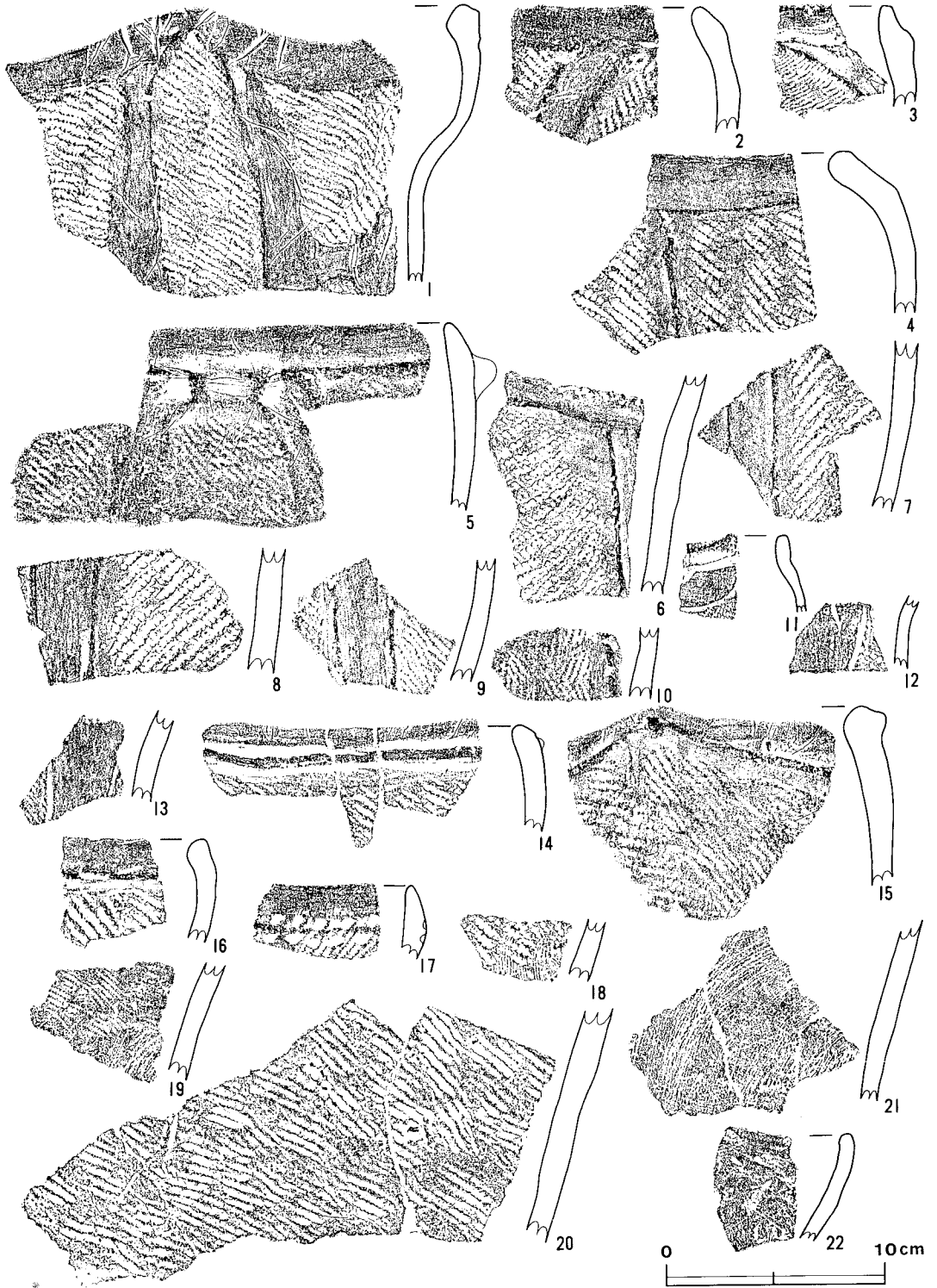


第 73 図 第 83 号住居実測図

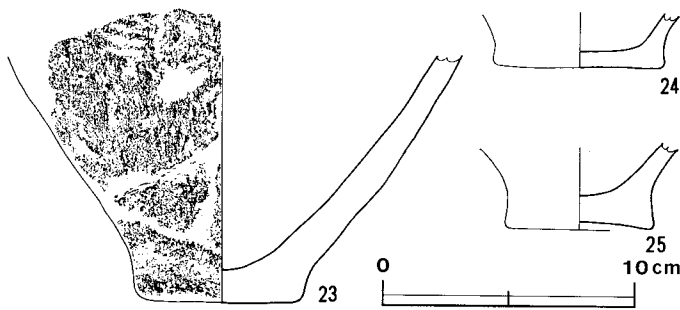
第 83 号住居跡出土土器 (第 74 ~ 75 図 1 ~ 25)

第 74 図 1 ~ 10 は、第 IV 類に該当する。1 ~ 5 が口縁部片、6 ~ 10 が胴部片である。逆 U 字状や V 字状の区画内に縄文が充填されている。口縁部無文帯を区画する微隆線の一部は 5 のように突出している。縄文は単節が多く、無節は 3 にみられる程度で少ない。11 ~ 13 は、細い沈線による曲線の磨消帯が主となる土器で、11 は口縁部片、12・13 は胴部片である。11・12 は薄手で小形土器と思われる。14 は口縁直下に貼付隆線を 1 条巡らし、以下に縄文を施すもので、第 V 類 b 種に相当する。15 ~ 17 は断面三角形の微隆線による区画を有する e 種で、15 は波状を呈する。17 の微隆線の上下には各 1 列の刺突列が巡る。18・19 は縄文と条線文を併用する i 種の胴部小片である。20 は縄文のみ、21 は条線文だけの胴部片である。22 は無文の口縁部片であるが、擦痕状の調整痕が残されている。

23 は、b 炉の南側の覆土中から出土した破片 4 点が接合した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片で、器内外面とも磨滅しており、上端に縄文がわずかに認められる。雑なナデが施されている。胎



第 74 图 第 83 号住居迹出土土器拓影图(1)



第75図 第83号住居跡出土土器実測図(2)

土に砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。底径6.4 cm、現存高10.0 cmである。

24は、東側の覆土中から逆位で出土した無文の底部片で、内外面ともナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が灰褐色、内面がにぶい赤褐色を呈する。底径6.8 cm、現存高2.2 cmである。

25は、北東側の覆土中から斜位で出土した無文の上げ底を呈する底部片で、底部は突出気味である。内外面とも軽いナデが施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面がにぶい褐色を呈する。底径5.8 cm、現存高3.3 cmである。

第86号住居跡（第76図）

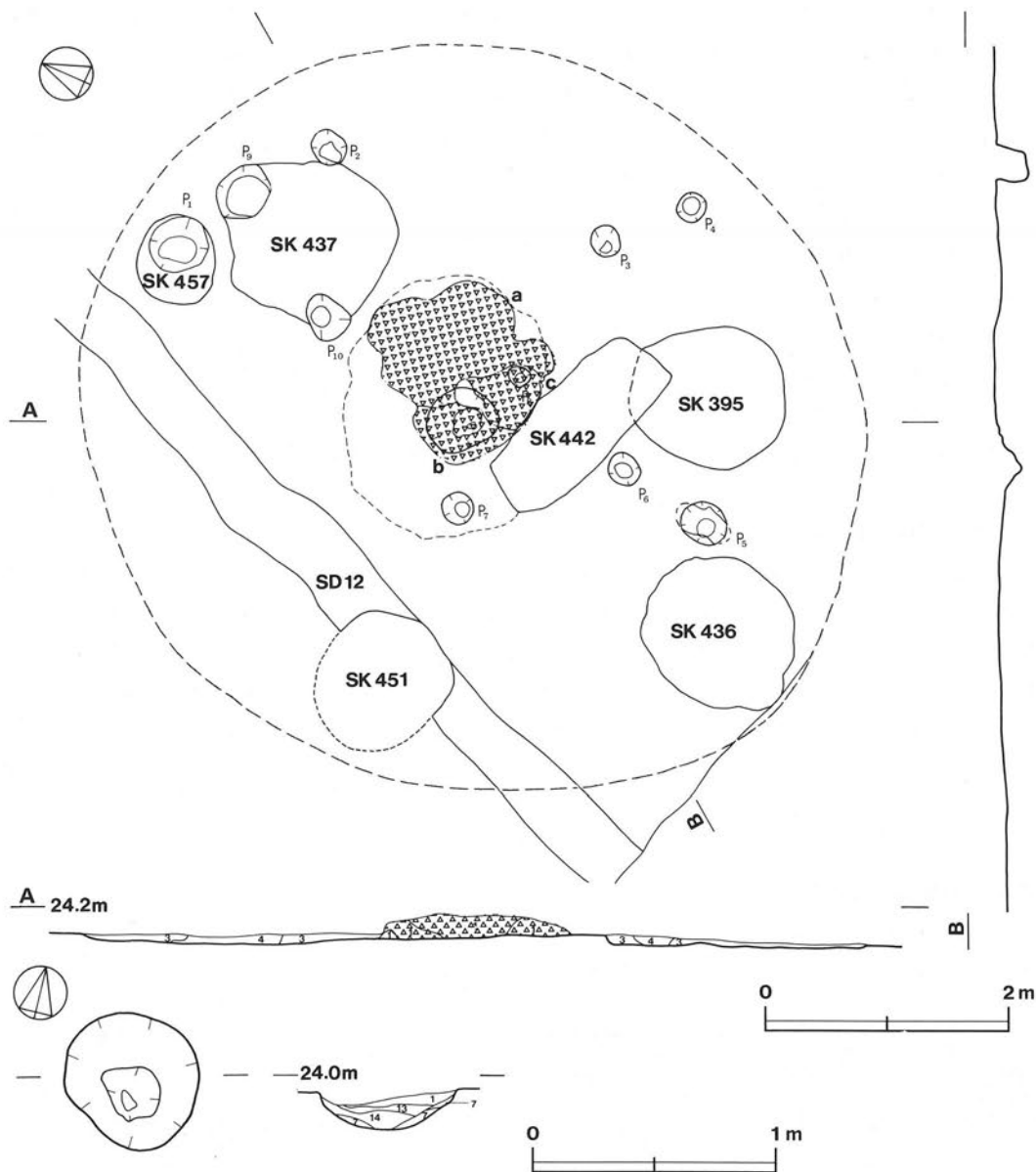
本跡は、調査区の西端のL1c8区を中心とした位置に確認されたが、壁を検出することができず、炉・床面および柱穴の存在から住居跡と確認したものである。遺構確認は、L1c8・L1c9・L1d8・L1d9の各区にまたがって広がる最大長152 cm、最大幅147 cm、最大厚20 cmの不整形を呈した貝ブロックの調査から始まり、貝ブロックの下にきわめて硬く良好に踏みしめられた床と炉を検出したことにより住居跡として調査をすすめた。本跡の推定範囲の北西側の一部は調査区域外に延びており全容は把握できなかった。

本跡は、多数の遺構と重複しており遺存状態は不良である。まず本跡の推定範囲内に第395・436・437・442・451・457号土坑が重複しており、更に北西側を第12号溝により切り込まれ、南端部は第5号溝に削られている。また、図示はしていないが、本跡の南西側の床面と南壁部分は2か所の最近のゴミ穴によって攪乱されている。各遺構との新旧関係は、第5・12号溝と第442号土坑は、本跡の床面を切っていることから新しく、第395・436号土坑も、覆土上位に貼り床が認められなかったことから本跡より新しい。第451号土坑との新旧関係は不明である。本跡の北側に位置する第437・457号土坑は、本跡に属すると思われるピットに掘り込まれていることや出土土器からみて本跡より古い。

本跡の南側には第5号溝を挟んでほぼ同時期の所産と考えられる第117、118号住居跡が隣接している。新旧関係は不明である。

平面形は、推定によらざるを得ないが長径6.60 m、短径6.03 mの楕円形を呈すると思われる。長径方向は不明である。

壁は、黒褐色土中に設けられたものと思われ、検出できなかった。



第76図 第86号住居跡実測図

床は、炉の周囲の長径110cm、短径80cmの点線の範囲内がきわめて硬くなっており、その他の部分は自然のロームの状態で、わずかに低くなっている。残存する床面は貝ブロックによって保存され、その他は削り取られたものと考えられる。

ピットは、本跡の推定範囲内に10か所認められたが、配列が不規則であり、また攪乱や他遺構との重複および調査区域外などの理由により未検出のピットも多くあると推定されるので、支柱穴の比定はしがたい。ただP₁、P₅、P₇、P₉、P₁₀などは径30～45cm、深さ48～71cmと規模や形状は支柱穴に相応しい。

炉は、貝ブロックの直下に検出され、本跡のほぼ中央部に位置するものと思われる。長径 60 cm、短径 54 cm の楕円形を呈する地床炉で、最深部は 21 cm 掘り込まれている。炉は断面形が浅目の楕鉢状を呈し、炉壁、炉床ともきわめて良く焼けて赤化・硬化が著しく、非常に強い火熱を受けたことを示している。また、炉内には厚さ 10～15 cm 程度の灰層が堆積し、上位にはハマグリ、シオフキ、サルボウなどを含む黒褐色の混貝土層が認められている。炉壁や炉床近くには、赤褐色の焼けたローム粒子を多量に含む締まった土層が堆積している。また、炉壁、炉床には灰が付着している。炉内に灰層を堆積していた炉は、第34号住居跡でも検出されている。

覆土は、その大半を失っており、炉の上位を覆っていた黒褐色の混貝土層だけが残っている。貝ブロックはいずれもハマグリ主体で、シオフキ、サルボウがこれに次いでいる。

遺物は、覆土がほとんど失われているために少量であり、132点の土器片が出土しているにすぎない。土師器片2点は混入である。

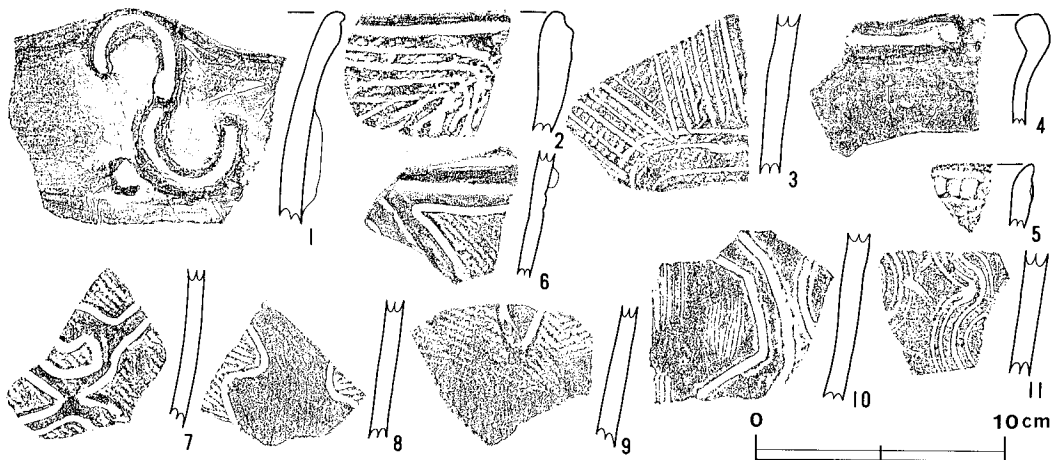
本跡の時期は、炉の北側の床面上から出土した土器片から判断すれば堀之内I式期と考えられる。

第86号住居跡出土土器（第77図1～11）

第77図1は、ゆるい波状を呈する口縁部片で、無文帯に逆S字状の貼付文を有し、貼付文上には沈線と刺突が加えられている。2・3は、縄文地文上に細目の沈線で文様を描くもので、2の口縁直下には1条の沈線が巡る。3は胴部片である。4は、口縁直下に沈線と刺突を有する以外は無文の口縁部片である。5は小形土器の口縁部片で、押圧が加えられた低平な隆線が巡っている。6は胴部片で、横位の隆線下に幾何学的な磨消縄文が構成されている。7～9は、曲線的な磨消縄文が施される胴部片で、9は底部に近い破片である。10は曲線的な沈線区画内に短かな条線が断続的に充填され、11は縦位波状の条線文が垂下する胴部片である。

第87号住居跡（第78図）

本跡は、調査区の中央部やや南西寄りのL2g6区を中心とした位置に確認され、北側を第5号溝により切られている。本跡の北東側に第83号住居跡が重複しているが、重複部分に第5号溝が走っているため



第77図 第86号住居跡出土土器拓影図

に、遺構の新旧関係は明らかではない。また、本跡の南西側に第467号土坑が重複しているが、その覆土中に本跡のピットが穿たれているので本跡より古いと考えられる。

本跡は、第5号溝により炉が切断されていたことが契機となって検出されたものである。

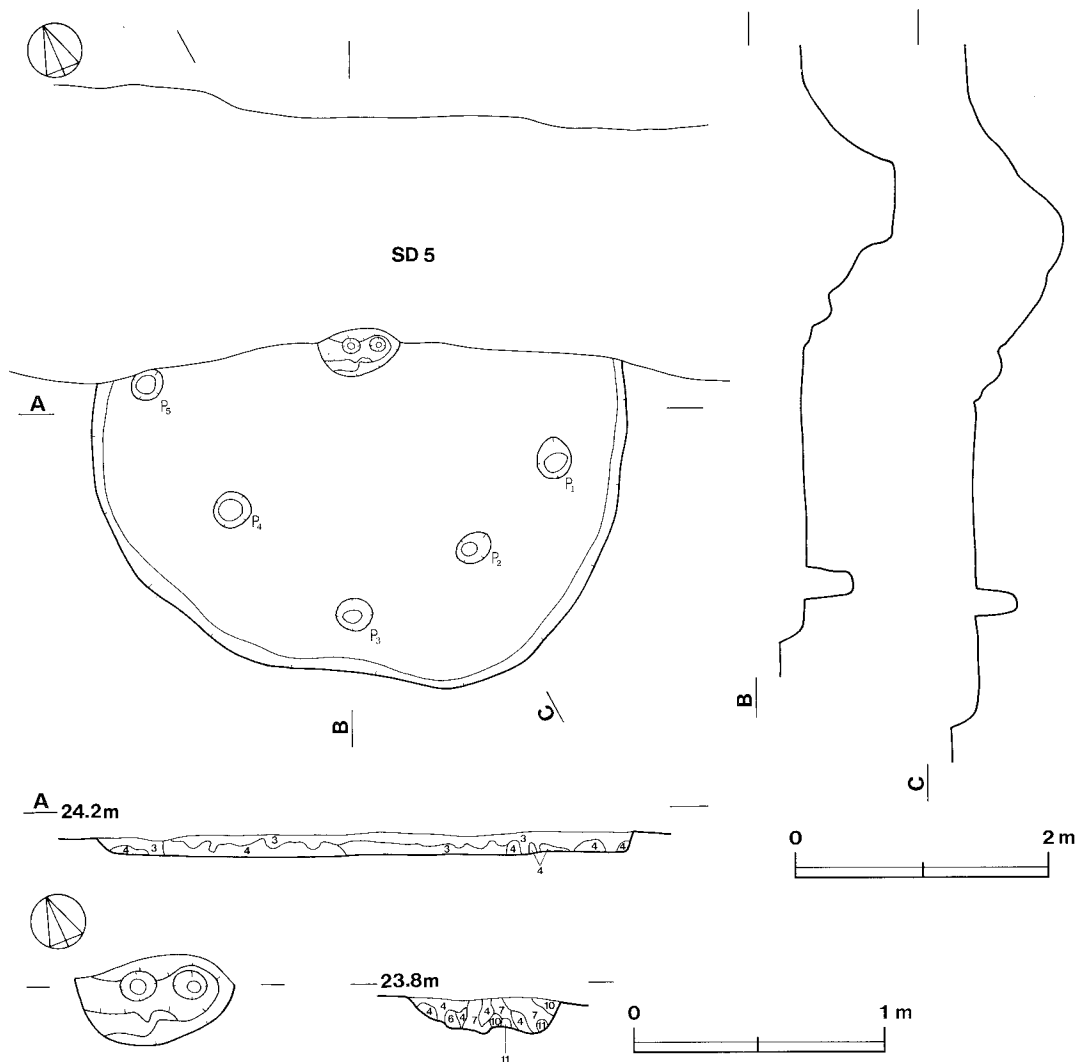
平面形は、その北半部を失っているために不明瞭であるが、楕円形を呈するものと思われる。長径の現存長2.74 m、短径4.27 mを測るが、長径方向は不明である。

壁はソフトロームでやや外傾して立ち上がり、北西側で12 cm、南西側で18 cmの壁高を有する。

床はロームではほぼ平坦であるがあまり踏みしめられていない。

ピットは、炉を囲むように巡っているP₁～P₅の5か所が支柱穴と考えられる。いずれも径25～30 cmで、深さ23～39 cmである。

炉は、本跡の中央部やや北側に位置すると考えられるが、北半部を第5溝により切られている。現存長



第78図 第87号住居跡実測図

径 65 cm, 現存短径 36 cm を測り, 最深部で 23 cm 掘り込まれている地床炉である。炉壁, 炉床とも良く焼けて赤化・硬化がみられるが, それほど著しくはない。炉内には中央部から南東側にかけて焼土粒子, ローム粒子を多量に含む締まった赤褐色土, 明赤褐色土, 鈍い赤褐色土が堆積している。炉内より土器片 1 点が出土している。

覆土は, 基本的に上下の 2 層から成り, 両者とも良く締まっている。上位は暗褐色土, 下位は褐色土でローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子を少量含んでいる。

遺物は, ごく少量で炉の周囲にややまとまっているのみで, 土器片 72 点が覆土中から出土した。土師器片 4 点が混入している。

本跡の時期は, 出土土器が少ないため不明確であるが, 加曾利EIV式期と考えられる。

第 87 号住居跡出土土器 (第 79 図 1 ~ 8)

第 79 図 1 ~ 4 は, 第 IV 類に属し, 1 以外は胴部の小片である。1 はゆるい波状を呈し, 口縁部無文帯が微隆線で区画されている。5 は縦位の条線文が密に施されている胴部片である。6・7 は, 第 V 類 e 種に分類され, 口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し, 以下に縄文が施されている。本跡の出土土器は少ないが, 加曾利EIV式期の単純な組成を示している。

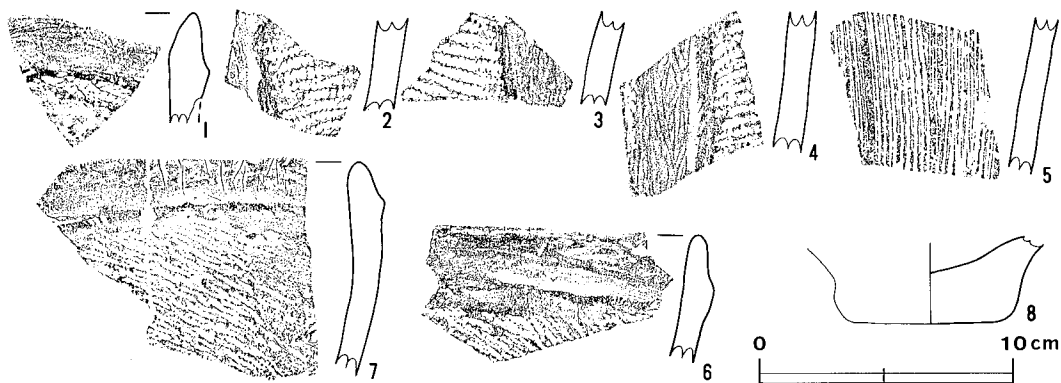
8 は, 炉の西側の覆土中から正位で出土した深鉢形土器の底部片で, 外面は雑に, 内面は丁寧にナデが施されている。胎土は砂粒, 長石粒をやや多く含み, ザラザラしている。焼成は良好で, 色調は外面がにぶい橙色, 内面が明褐灰色を呈する。底径 6.6 cm, 現存高 3.2 cm である。

第 88 号住居跡 (第 80 図)

本跡は, 調査区のほぼ中央部やや南側の L3j9 区を中心とした位置に検出され, 南東側を第 448・453 号土坑により切られている。また, この周辺は攪乱が多く, 床や壁に攪乱を受けている。

本跡の西側約 12.5 m には第 16 号住居跡, 南々東約 11 m には第 56 号住居跡, 南々西約 9 m には第 49・69 号住居跡が存在している。

平面形は, 長径 4.59 m, 短径 3.77 m の楕円形を呈し, 長径方向は, N-90°-W を指している。



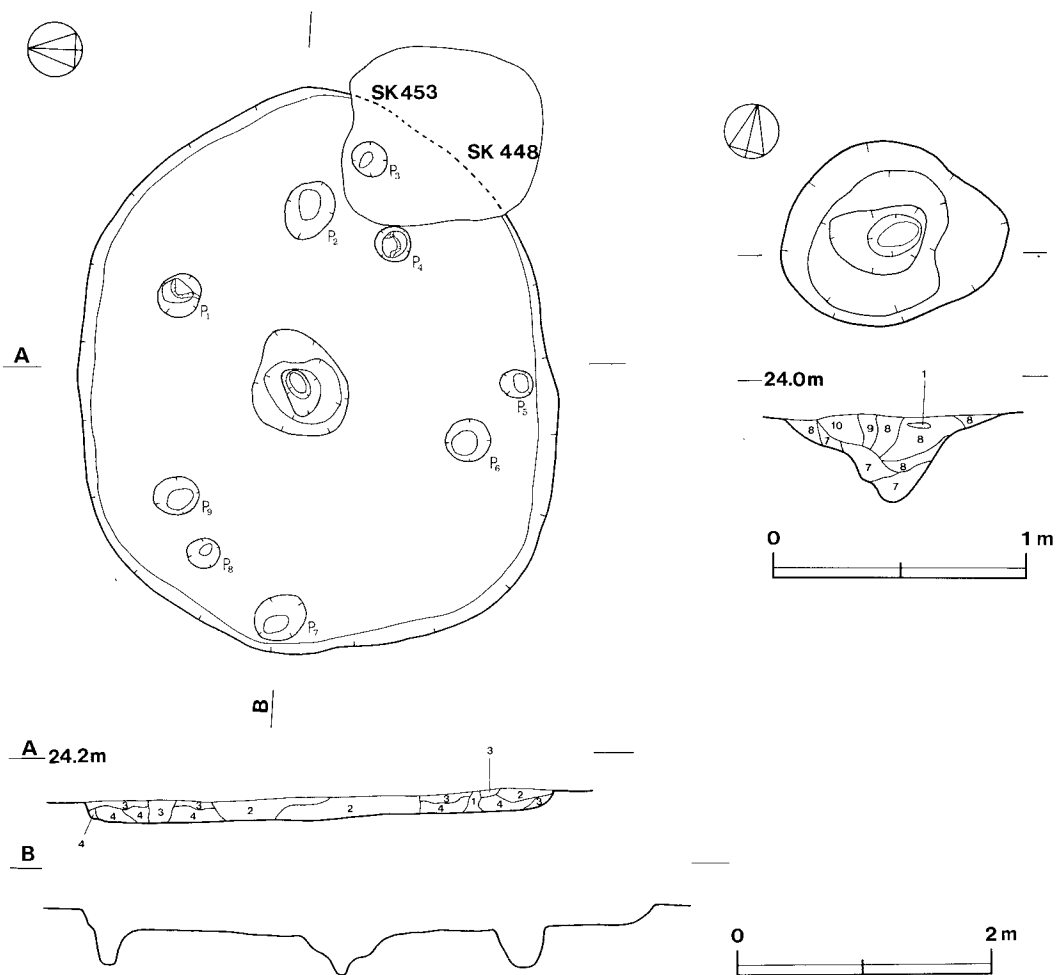
第 79 図 第 87 号住居跡出土土器実測図・拓影図

壁は、ソフトロームで外傾して立ちあがり、壁高は北側で15～20 cm、西側で15 cm 前後、南側で12～16 cm、北東側で16 cm を測る。

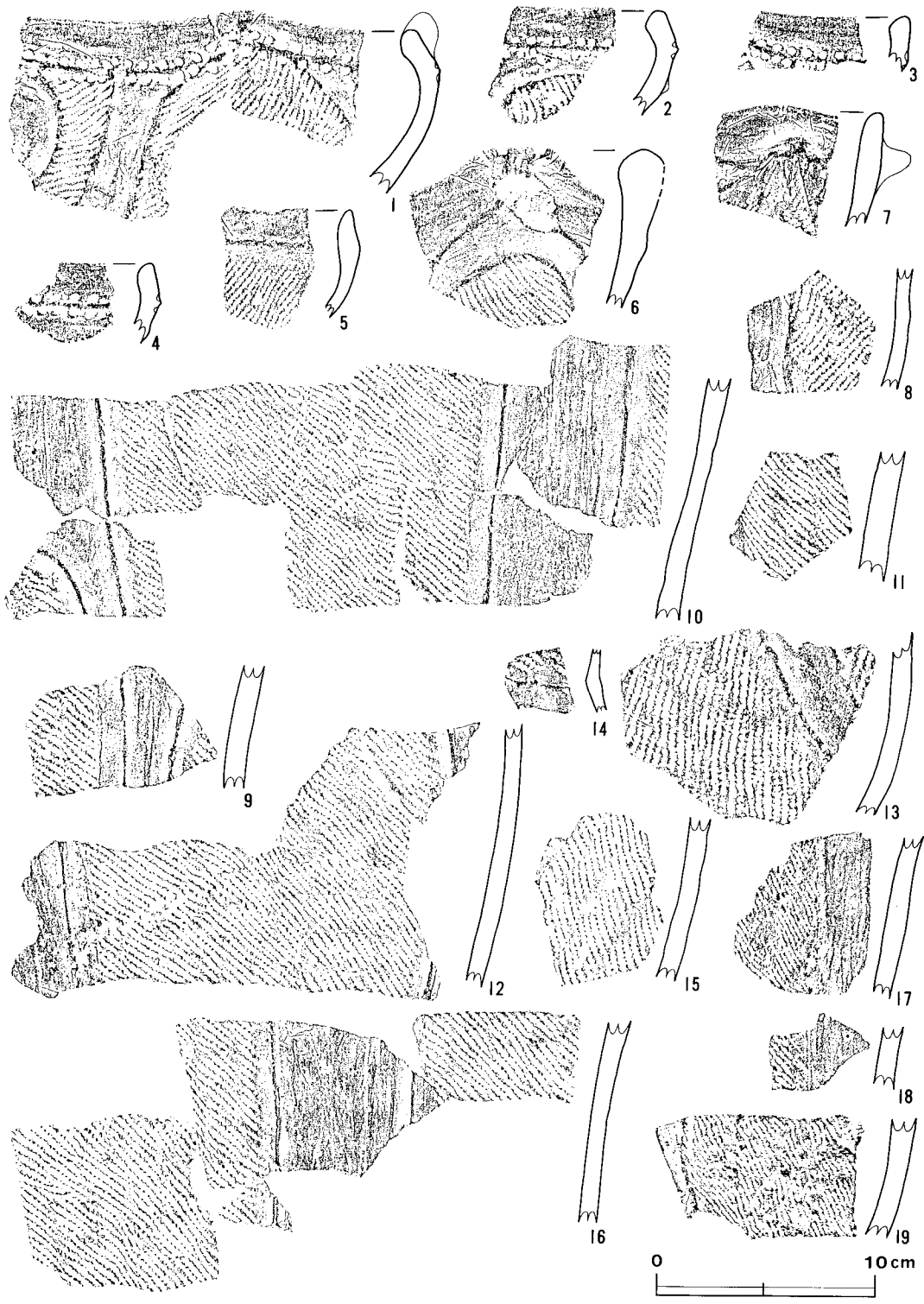
床は、ソフトロームではほぼ平坦であるが、中央部にむかってやや低くなり、中央部の床面が周りよりもやわらかい。周壁部もあまり締まっておらず、全体的にみて軟弱な床である。

ピットは、P₁～P₉の9か所が検出されたが、支柱穴は炉を挟んで対角線上に位置するP₁、P₂、P₆、P₇の4か所と思われるが、P₇の位置がやや壁寄りにずれている。いずれも径35～50 cm、深さ24～33 cm とやや浅目であるが揃っている。その他のP₄、P₅、P₈、P₉はやや小規模で深さも17～22 cm と浅い。P₃は南東側の土坑との重複部分にあり、55 cm と深いが、その性格は不明である。出入口は、柱穴の配列からみれば南西側が想定される。

炉は、本跡のほぼ中央部に位置し、長径90 cm、短径73 cmの北東側がやや突出した楕円形を呈する地床炉で、中央部が34 cm とかなり深く掘り込まれている。中央部の炉壁、炉床とも良く焼けてロームの赤化・硬化が著しいが、周壁部はロームの硬化が観察されるだけである。炉の覆土は上位にローム粒子



第80図 第88号住居跡実測図



第 81 图 第 88 号住居跡出土土器拓影图(1)

を中量から多量、炭化粒子・焼土粒子を少量含む暗赤褐色土、極暗赤褐色土、鈍い赤褐色土が、下位に焼土粒子・焼土小ブロック少量を含む締まった暗赤褐色土、赤褐色土が堆積している。

覆土は、大別して上位と下位および壁際の2つに分別される。中央部上位はローム粒子を中量から多量、炭化粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土、極暗褐色土が堆積し、下位と壁寄りにはローム粒子を少量含む締まった褐色土が堆積している。

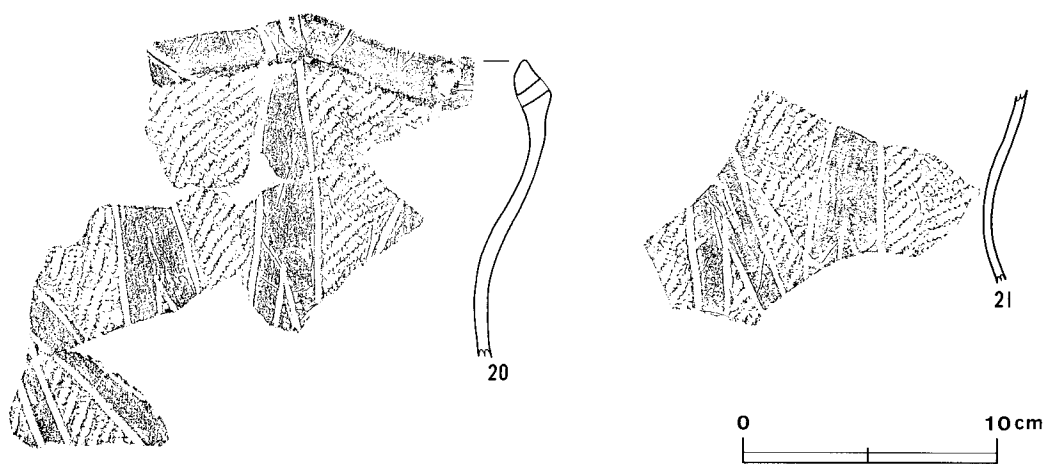
遺物は、全体的に少量で、中央部の炉の周辺にややまとまっているほかは散在するのみである。いずれも覆土中からの出土である。土器片は258点出土し、土師器片4点が混入している。その他に土器片錘4点、土製円板1点が出土している。

本跡の時期は、覆土中からの出土土器から判断すれば加曾利EIV式期と考えられる。

第88号住居跡出土土器（第81～82図1～21）

第81図1～19は、第IV類a種に属する深鉢形土器で、比較的まとまっている。1～4は、口縁部無文帯を区画する微隆線の下上に各1列の刺突列を巡らし、以下に微隆線による逆U字状などの曲線的モチーフを描き、区画内に縄文を充填している。1～4は施文の共通性からみて同一個体と思われる。5～7は1～4とは別個体の口縁部片で、8～19は胴部片である。5～7は刺突列をもたず、6・7の波頂部下に突出部を有する。突出部は1にも認められる。胴部以下は微隆線が単純に垂下する例（8・9・10・11・12・17）が多いが、10・13・14には横位や曲線的な施文もみられる。9～12・15・16は施文される縄文が共通し、同一個体の可能性が高い。17～19は、無節縄文が施され、こちらも同一個体と推定される。20・21は、第IV類b種の典型ともいべき好資料で、同一個体である。口縁部無文帯を微隆線で区画し、以下に逆V字状の磨消帯を連続して描き、区画外に縄文を充填している。無文帯には焼成後の穿孔が認められる。器形は、口縁部が内湾し、胴部で強くくびれる。薄手である。

本跡出土土器は、第IV類a・b種の単純な組成から成るが、加曾利EIV式土器の1つの典型例といえよう。

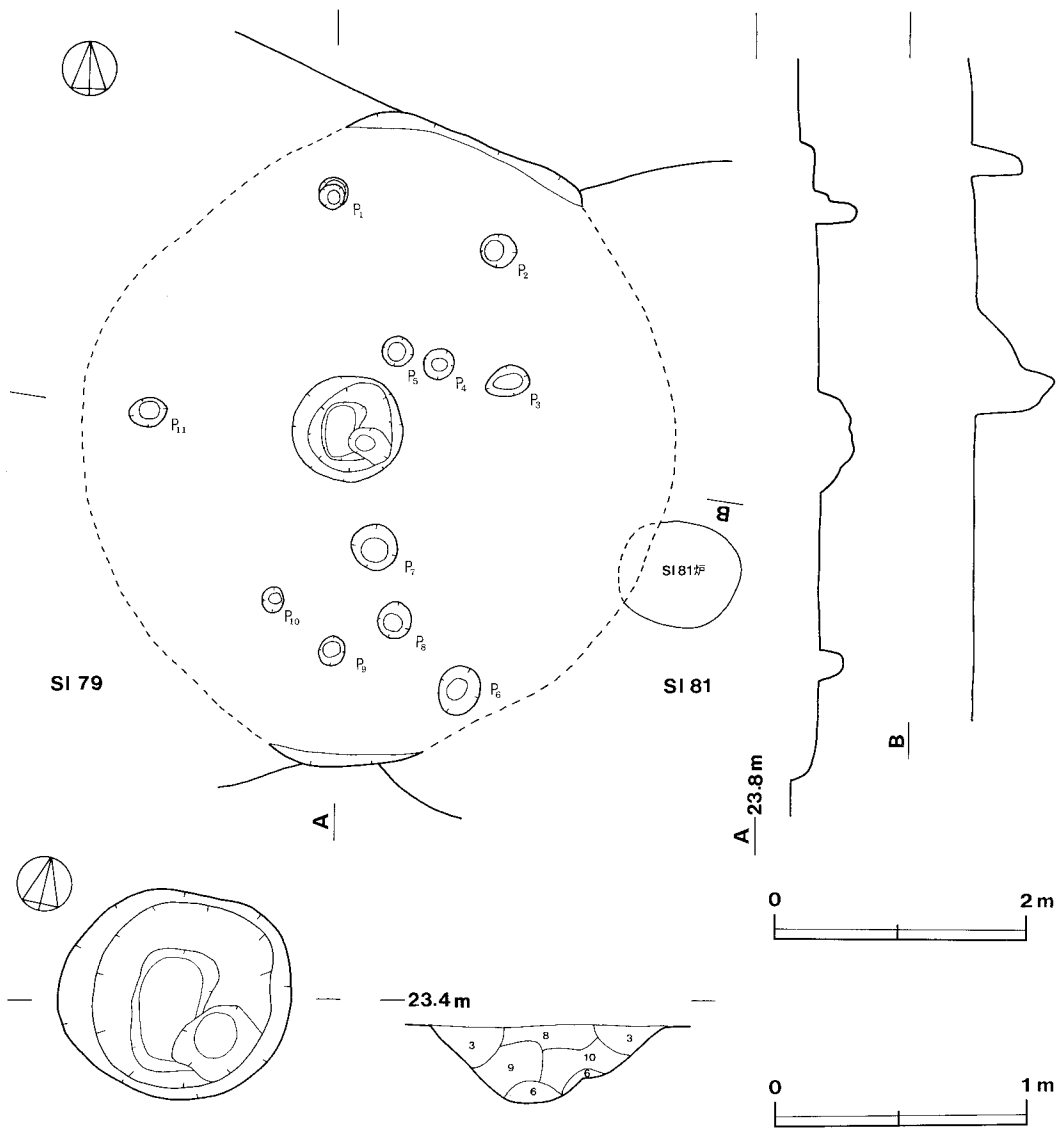


第82図 第88号住居跡出土土器拓影図(2)

第 89 号住居跡 (第 83 図)

本跡は、調査区の北側の K3j4 区を中心とした位置に確認され、第 79 と 81 号住居跡に東西を挟まれている。本跡は炉の確認から判明した住居跡で、その後の精査によって南北両端に壁と床面上にピットを確認した。本跡と第 79・81 号住居跡との新旧関係は、第 81 号住居跡は本跡より出土遺物から判断して新しく、第 79 号住居跡との新旧関係については不明である。

平面形は、推定によるが長径 5.30 m、短径 4.75 m の楕円形を呈するものと思われ、推定の長径方向は N-0° を指すと考えられる。



第 83 図 第 89 号住居跡実測図

壁は、南北の両端部が判明しただけで、他は推定によっている。壁はロームで北側で11～14 cm、南側で14～16 cmの壁高を有し、外傾して立ちあがっている。

床は、ロームでほぼ平坦であるが、特に踏みしめられてはおらず軟弱である。第79号住居跡の床と高低差がなく区別しにくい。

ピットは、本跡の推定範囲内に11か所認められたが、第79・81号住居跡に属するものもあり、本跡の主柱穴は、P₁～P₃、P₆、P₁₀、P₁₁の6か所と考えられ、炉を巡るように位置している。径20～40 cm、深さ33～58 cmとややばらつきがある。

炉は、本跡のほぼ中央部に検出された地床炉で、長径93 cm、短径83 cmの略円形を呈し、最深部で30 cm掘り込まれている。炉内南東側に床面よりの深さ37 cmを測るピットが検出されているが、これは本跡より新しく、第81号住居跡に伴う柱穴のうちの1か所と考えられる。炉壁・炉床ともかなり良く焼き締まり、凸凹しているが、炉床の一部が赤化しているのみで、他は硬化だけしている。覆土にはローム粒子・焼土粒子を多量、炭化粒子を中量含む暗赤褐色土、極暗赤褐色土、鈍い赤褐色土など暗い色調の土が堆積している。

本跡の明瞭な覆土は十分に観察できなかったが、第79・81号住居跡と同様の暗褐色土、褐色土が堆積していたものと思われる。

本跡の覆土に相当する部分には多量の土器片が認められたが、第79・81号住居跡の出土遺物として扱っている。本跡に明確に伴う遺物は、炉内出土土器片など9点だけである。

本跡の時期は、遺構の重複関係および炉内出土土器から推定すれば加曽利EⅢ式期と考えられる。

第89号住居跡出土土器（第84図1～3）

第84図1～3は、本跡の炉内から出土している。1は口縁直下に1条の凹線が巡り、以下に縄文が施されている。2は縄文のみの胴部片、3は縦位の条線文が密に施された胴部片である。

本跡からの出土土器はごく微量であるが、1からみて加曽利EⅢ式期と考えられる。

第96号住居跡（第85図）

本跡は、調査区の南側のM2c7区を中心とした位置に検出され、南西側で縄文早期の炉穴と思われる第481号土坑と重複し、これを切っている。本跡は、この地区に多量の縄文土器片が出土しているので精査した結果判明したもので、確認面にあたるM2c7、M2d7区出土土器は本跡に伴うものと考えられる。

本跡の北西側約8.5 mに第105号住居跡が存在している。

平面形は、長径4.51 m、短径3.76 mの不整楕円形を呈し、長径方向は、N-90°-Wを指している。壁は、ソフトロームでやや外傾して立ちあがり良好であるが、東壁および北壁の一部では直立する箇所もみられる。壁高は北西側で12～22 cm、南西側で13 cm、北東側で10～13 cm、南東側で12～14 cm



第84図 第89号住居跡出土土器拓影図

で、北西側の一部を除いて10～14 cm と浅い。

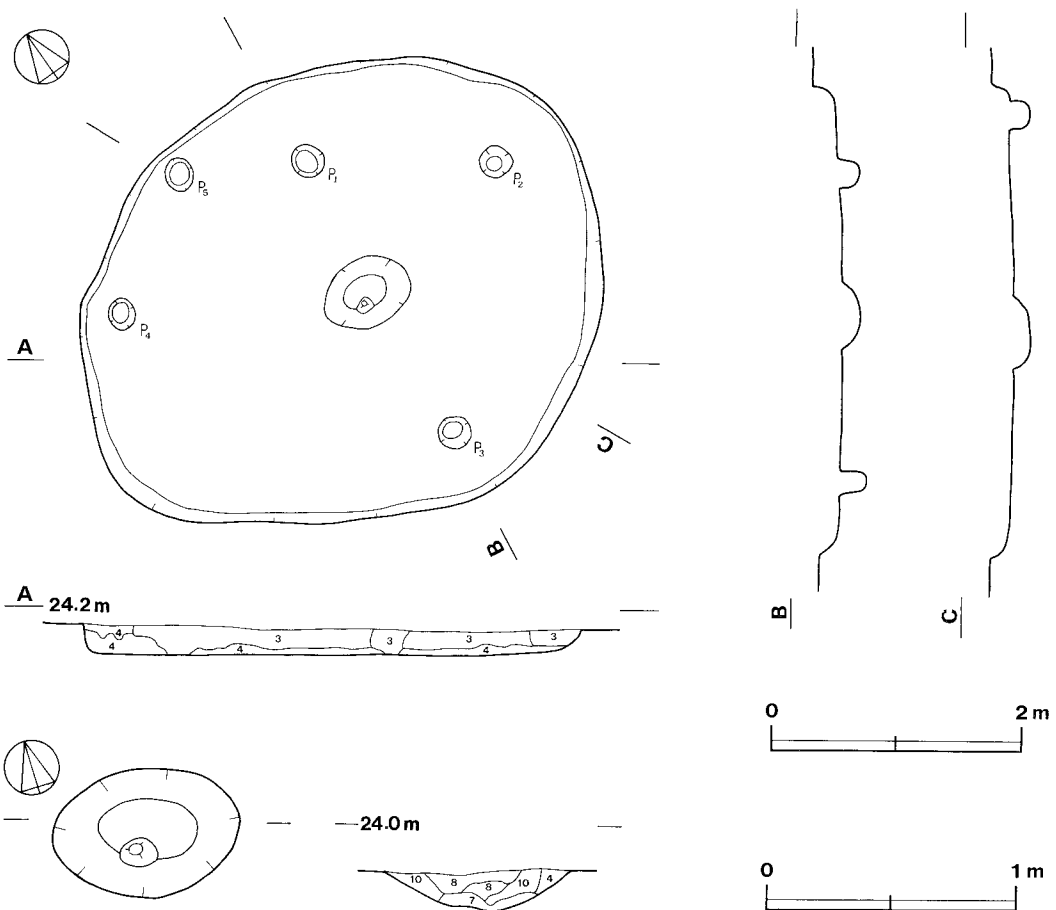
床は、全体としてはほぼ平坦でやや縮まりがあり、北・東側が少し高く、南・西側に向って低くなっている。

ピットは、P₁～P₅の5か所が壁近くを巡るように検出されており、いずれも支柱穴と考えられる。また南西側に重複する第481号土坑内にもピットが1か所あり、これも支柱穴に加えらる。いずれも径22～26 cm、深さ17～24 cmを測り、小規模なものである。

炉は、本跡のほぼ中央部に位置する地床炉で、長径75 cm、短径52 cmの楕円形を呈し、16 cmほど碗状に掘り込まれている。炉壁は中段まで、炉床はかなり良く焼けており、赤化・硬化が著しいが、炉壁の上部は硬くなっていない。炉内には、焼土粒子少量を含む縮まった暗赤褐色土、鈍い赤褐色土、赤褐色土が堆積している。

覆土は、上位が暗褐色土、下位と壁寄り褐色土が主となっており、ローム粒子を斑状に含み、縮まっている。自然堆積と考えられる。

遺物は、炉の北・東側にまとまって出土しているが、その他の北・西・南側の壁寄りにはほとんど見られない。いずれも床面より5～15 cm 浮いており、住居廃絶後に投げ込まれたものであろう。土器片は



第85図 第96号住居跡実測図

244 点で、土師器片 3 点が混入している。他に土器片錘 3 点がある。

本跡の時期は、覆土中からの出土土器から判断すれば加曾利 EIV 式期と考えられる。

第 96 号住居跡出土土器（第 86 図 1～26）

本跡からの出土土器は少ないが、確認面にあたるグリッドからは多量の土器が出土しており、その中には本跡の土器と接合する資料もあり、ここでは確認面出土土器も一括して取り扱った。

第 86 図 1～11 は、第 IV 類 a 種に属し、1～4 が口縁部片、5～11 が胴部片である。2 は口縁部に突起を有している。3 は小形土器である。4 は双頭状の突起が目につく。胴部片では直線的な磨消帯が多いが、11 のように弧状を呈するものもある。12～14 は、第 III 類に分類されるが、沈線が細く、加曾利 EIV 式段階に含まれる。12・14 は口縁部片、13 は胴部片である。いずれも薄手である。12 は小片であるが、曲線の磨消帯が描かれ、14 は縄文が付された橋状把手を有している。15・16 は、口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画する第 V 類 a 種である。16 は厚手の波頂部片で、無節縄文が施されている。17・18 は第 V 類 b 種、19 は e 種、20 は c 種に含まれる。17・18 は貼付隆線で、17 には細い沈線が沿っている。17 は単節、18～20 は無節縄文が施されている。21・22 は無文の口縁部片で、小さな山形の突起を有し、上半部横ナデ、下半部縦ナデが施されている。23～25 は胴部片で、23 は縄文、24 は曲線の条線文、25 は縄文と条線文が併施されている。26 は、本跡に伴うと考えられる称名寺式土器の胴部片で、曲線の磨消縄文を描いている。

第 105 号住居跡（第 87 図）

本跡は、調査区の南西側の M2b4 区を中心とした位置に検出され、第 93 号住居跡により北西側を切られている。本跡の北西側 3～4 m には第 106、109 号住居跡、南東側約 8.5 m には第 96 号住居跡が存在している。

平面形は、長径 4.20 m、短径 3.87 m の不整楕円形を呈し、長径方向は、N-33°-E を指している。

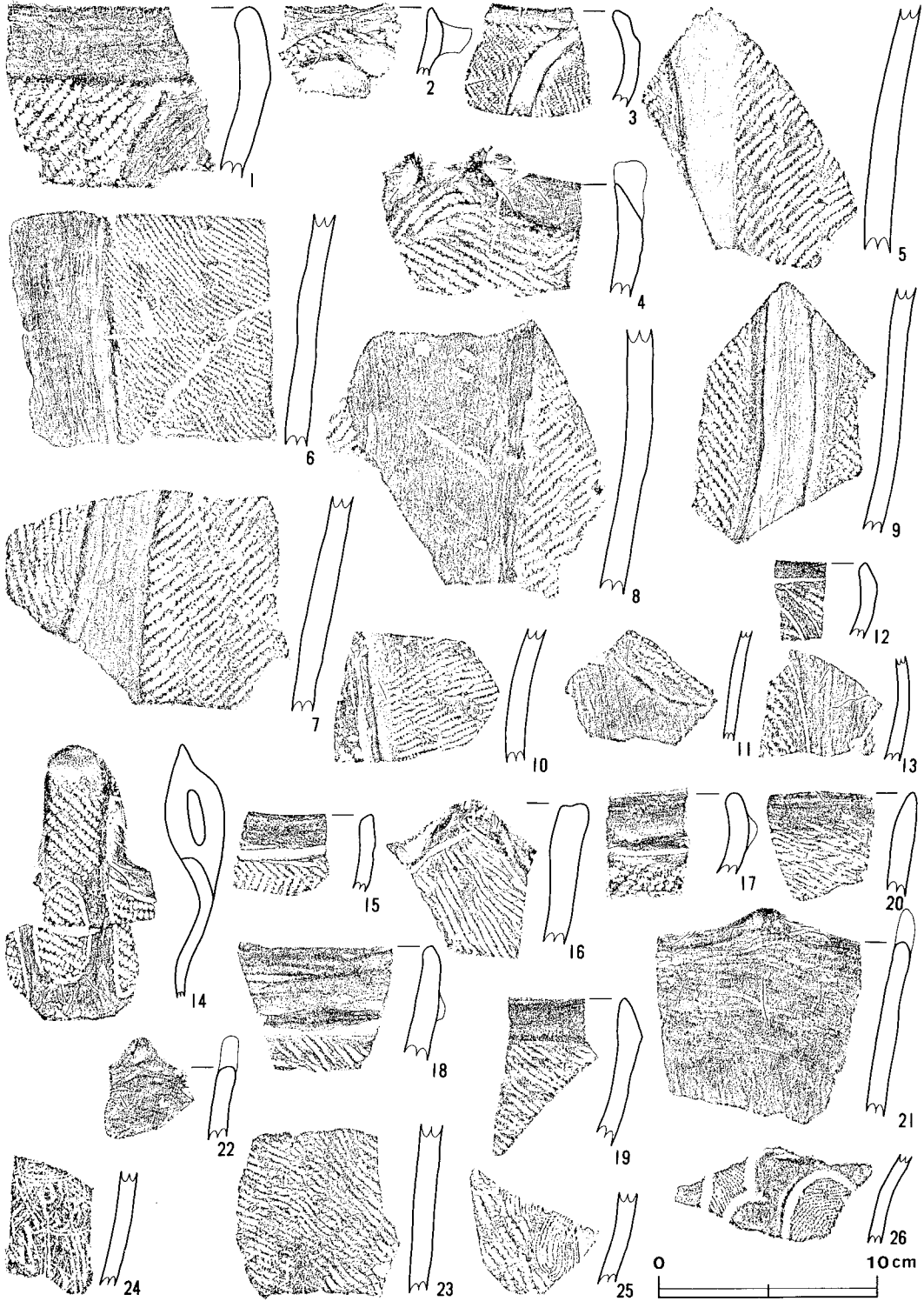
壁は、ソフトロームでやや外傾して立ちあがり、良好である。壁高は北東側がやや高く、18～24 cm、南西側は低く 12～16 cm である。北西側は 4 cm 程度の残存にすぎない。

床は、ロームで締まっているが、あまり踏みしめられてはいない。床面は、中央部が低く周壁部にむかって徐々に高くなり、中央部とは 6～10 cm 程度の差がある。

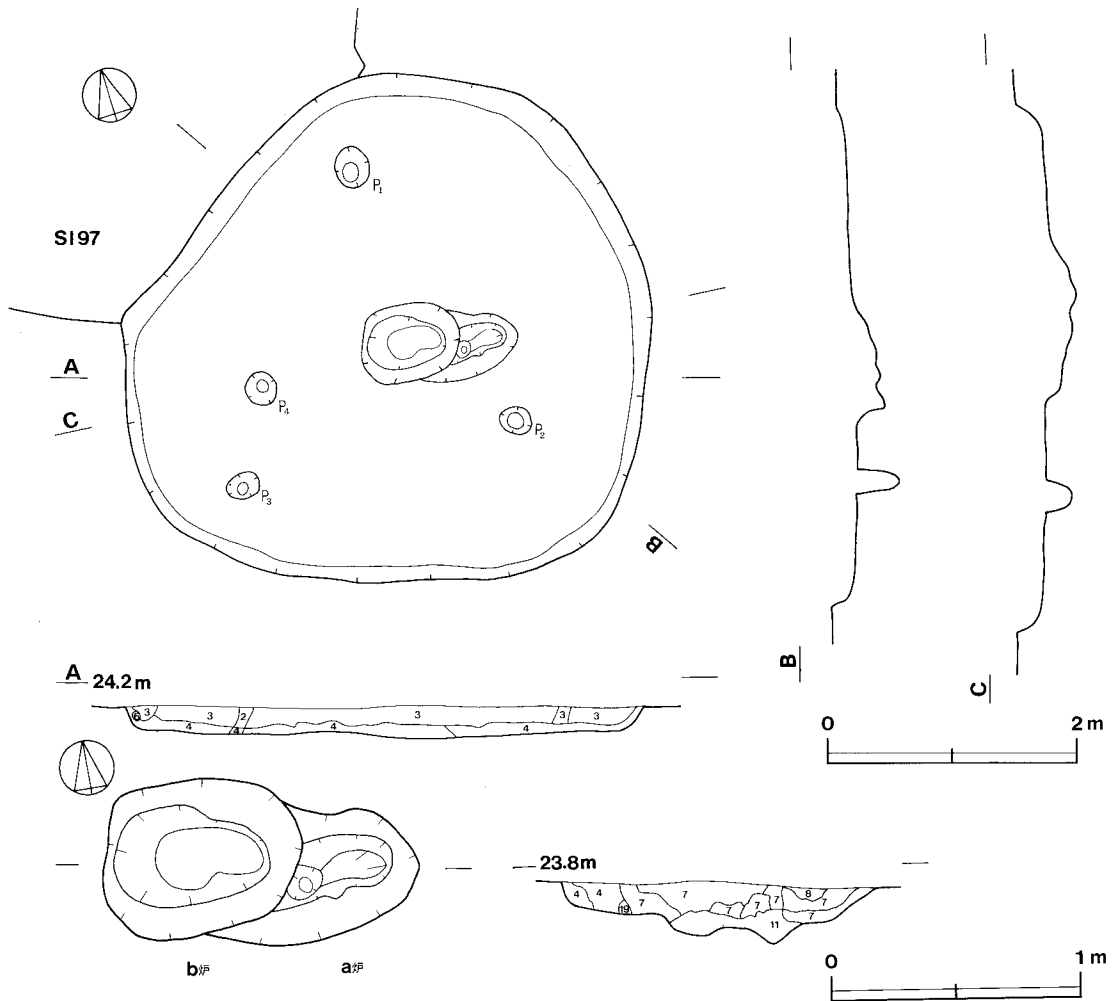
ピットは、P₁～P₄ の 4 か所が検出され、径 20～30 cm、深さ 20～35 cm でやや小規模であるが、いずれも支柱穴と考えられる。本跡には新旧 2 基の炉が検出されているにもかかわらず、ピットは 4 か所と少なく、配列もやや不規則である。

炉は、本跡の中央部やや東寄りに重複して 2 基検出され、東側の a 炉が古く、西側の b 炉がこれを切っている。a 炉は、西側を b 炉に切られているため長径は推定 100 cm、短径 55 cm の楕円形を呈する地床炉で、最深部は 26 cm 掘り込まれている。a 炉の炉壁、炉床とも焼けていてロームが硬化・赤化しているが、さほど顕著ではない。b 炉は、長径 81 cm、短径 62 cm の楕円形を呈し、17 cm 掘り込まれており、a 炉より浅いが炉床の焼けは著しく、強い赤化・硬化が認められる。炉内には焼土粒子を多量に含む硬くしまった赤褐色土が堆積している。

覆土は、基本的に上下の 2 層に分れ、上位が暗褐色、極暗褐色を、下位が褐色を呈している。いずれもローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を中量から少量含んでいる。本跡の覆土には木の根などによる攪乱が各



第 86 图 第 96 号住居跡出土土器拓影图



第 87 図 第 105 号住居跡実測図

所にあり、調査がしにくかった。

遺物は、炉の周囲と東壁寄りにややまとまって出土したほかは、ごく少量しか認められなかった。しかし、一括に近い状態で出土した大破片がいくつかあり、ほぼ器形をうかがえるものもある。いずれも床面から 10～20 cm 浮いており、出土位置から考えると東側からの遺物の投棄が推定される。また、北側の覆土中から打製石斧、東壁寄りから磨石、南壁寄りから土製円板が出土している。

土器片は全体で 125 点と少なく、土師器片 6 点は第 93 号住居跡に属するものであろう。他に土器片 2 点が出土している。

本跡の時期は、覆土中の出土土器から判断すれば加曾利 E III 式期の新しい段階と考えられる。

第 105 号住居跡出土土器 (第 88 図 1～18)

第 88 図 1 は、東壁よりの覆土中から逆位で一括出土した破片を中心に 10 点が接合したもので推定 4 単

位の波頂部がやや突出する波状口縁を呈する内湾する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁部に幅 1～1.5 cm の無文帯を有し、胴上半部には 2 本組の微隆線とこれに沿う沈線により U 字状、逆 U 字状の連続するモチーフが描かれ、モチーフ間は磨り消され、モチーフ内には単節縄文 LR が充填されている。外面には炭化物が若干付着し、内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が黒褐色、内面が灰褐色を呈する。推定口径 28.5 cm，現存高 18.5 cm である。

2 は、炉の上面の覆土中から正位で出土した把手付の破片を中心に、炉の西側および東壁寄りの覆土中から出土した破片の都合 5 点が接合したもので、橋状把手を有する鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁部無文帯は幅 5～6 cm と広く、1 条の低平な隆線で区画し、以下に単節縄文 LR を縦回転で施文している。内面は横ナデが施されている。橋状把手上にも同様な縄文が付されている。胎土は砂粒、長石粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が黒褐色、内面がにぶい褐色を呈する。推定口径 22.4 cm，現存高 16.0 cm である。

3 は、口縁直下に刺突列と 1 条の沈線を巡らし、以下に太目の沈線による区画内に縄文を充填している。4 は微隆線による区画内に縄文を施す波頂部片である。5 は、細い沈線による区画内に縄文を施す胴部の小片である。6 は、断面三角形の微隆線で口縁部無文帯を区画し、以下に縄文を施している。7～9 は、第 V 類 c 種で 8 の口唇部は外傾している。10 は第 VI 類 a 種で全面に縄文が付されている。11・12 は縄文、13・14 は条線文が施される胴部片である。15 は第 VII 類に属する薄手の胴部片で、微隆線による施文がみられる。

16 は北東側の覆土中から出土した無文の小形土器の底部で、内外面ともナデが施されている。底面の中央部は円形に 3 cm ほど凹んでいる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈する。底径 4.0 cm，現存高 2.2 cm である。

17 は、北東側の覆土中から逆位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、内外面とも縦ナデが施されているが、内面の整形は雑である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。底径 5.6 cm，現存高 3.5 cm である。

18 は、1 のすぐ西側から逆位で出土した無文の底部片で、内外面とも雑にナデが施されている。底面中央部がわずかに凹むが、磨耗が著しい。胎土は砂粒を多量に含みザラザラしている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。底径 5.0 cm，現存高 3.3 cm である。

第 106 号住居跡（第 89 図）

本跡は、調査区の南西側の M 2b₂・b₃区を中心とした位置に確認され、北西側で第 109 号住居跡と重複している。新旧関係は、本跡が第 109 号住居跡の南東側を切っており、本跡の方が新しい。また、本跡の炉の東側に第 500 号土坑が穿たれているが、新旧関係は不明である。

平面形は、長径 3.50 m，短径 3.27 m の小形の不整形円形を呈し、長径方向は、N-0°を指している。

壁は、ソフトロームでやや外傾して立ちあがり、良好に残存している。壁高は、20～25 cm であるが、第 109 号住居跡と重複する北西側では低く 10 cm 程度である。

床は、ロームで良く締まっており、全体としてはほぼ平坦であり、炉を中心とした中央部が少し低く、周壁に向いわずかに高くなっていく。また、東壁がやや高く、西方になだらかに傾斜している。

ピットは、P₁～P₇の 7 か所が検出されたが、配列からみて P₁，P₂，P₅，P₇の 4 か所ないしはこれに P₄を加えた 5 か所が支柱穴になると思われる。径 25～35 cm，深さ 16～27 cm でやや小規模である。



第 88 図 第 105 号住居跡出土土器実測図・拓影図

平面形に相応しいピットと考えられる。P₃、P₆は支柱穴であろう。

炉は、中央部やや北西寄りに位置する土器埋設炉で、深鉢形土器の上半部を正位に埋め込んでいる。長径 70 cm、短径 44 cm、最深部で 15 cm のほぼ楕円形を呈する掘り方の中央部に土器を埋設している。掘り方は、土器よりも 3～5 cm 程度広めのピットと思われ、土器の外面に接する部分にわずかに焼土が認められるだけである。土器内にはローム粒子、焼土粒子を少量から中量含む締まった暗褐色土、鈍い赤褐色土が堆積し、土器外は褐色土でわずかに焼土粒子・炭化粒子を混入しているだけである。炉床は真赤に良く焼けて、焼土ブロックが露出しており、レンガ状を呈している。掘り方の外壁も火熱を受けてブロック状となっているが赤化はしていない。

覆土は、基本的には上下の 2 層に分れ、上位は暗褐色土、下位は褐色土が主に堆積し、いずれもローム粒子少量、炭化粒子、焼土粒子を極少量含む締まっている。炉の上位には極暗赤褐色の焼土粒子を多く含む土層が 10～15 cm の厚さで認められた。

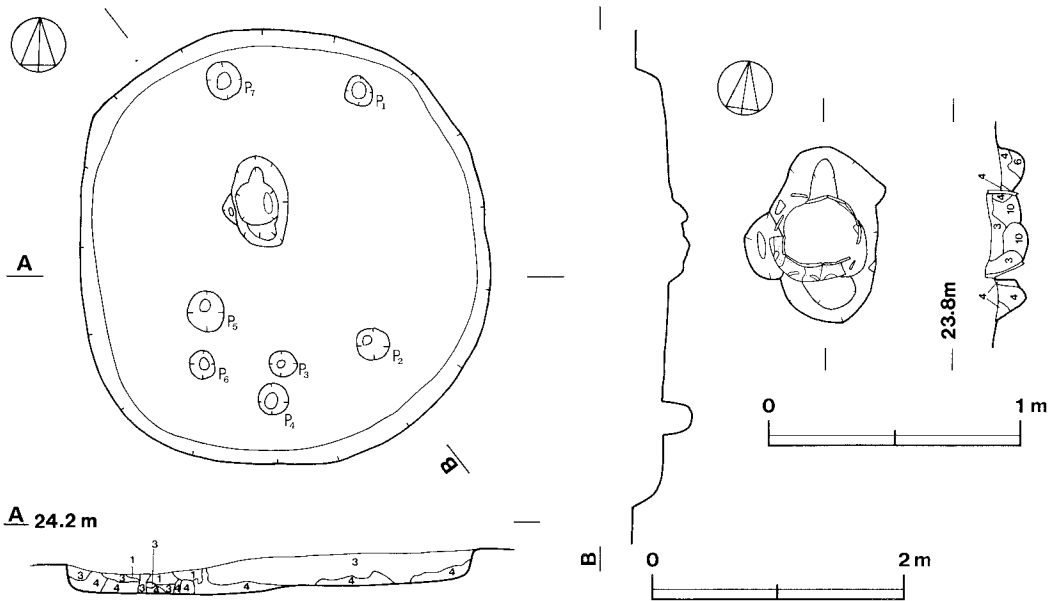
遺物は、全体的に少量で炉の南側にややまとまっているほかは、北側に若干散在している程度である。土器片は 193 点で、土師器片 13 点が混入している。石棒の頭部片が炉より 17 cm 南側から出土し、土製円板 1 点が炉の南側 75 cm の位置の覆土上位から出土している。そのほかには土器片錘が 2 点ある。

本跡の時期は、炉に埋設土器されていた土器および覆土出土土器から判断すれば、加曽利EⅢ式期の新しい段階と考えられる。

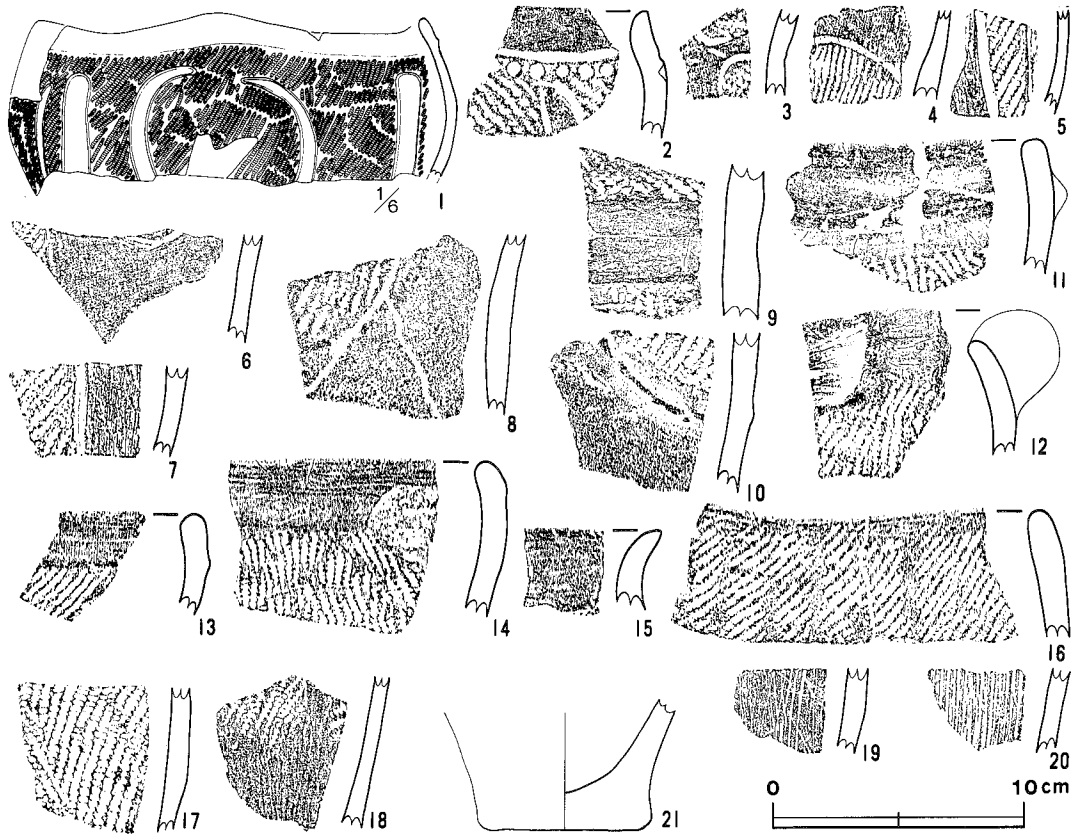
第 106 号住居跡出土土器 (第 90 図 1 ~ 21)

第 90 図 1 は、炉に正位で埋設されていた深鉢形土器で、胴上半部以下が意図的に打ち欠かれている。本跡の時期を決定する遺物である。緩い 4 単位の内湾する波状口縁を呈し、波頂部は若干外反する。幅 2 ~ 3 cm の口縁部無文帯を断面三角形の微隆線で区画し、以下に単節縄文 RL を縦位回転で施文し、これを地文として抱球状および逆 U 字状の沈線区画を 4 単位ずつ施文するが、1 か所に余白部を生じ、曲線的モチーフを描いて補っている。モチーフ内は磨消されている。各モチーフには広狭の差が著しく、また配列も不等間隔で良好な作りとはいいがたい。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。口径 31.0 cm、現存高 13.4 cm である。

2 ~ 7 は、第Ⅲ類に属する土器で、2 以外は胴部片である。2 は口縁直下に沈線と刺突列が巡り、以下に逆 U 字状の磨消帯を有する。3・4・6 は曲線の区画内に縄文が充填されており、5・7 には直線的な磨消帯が垂下している。8 ~ 10 は、第Ⅳ類の胴部片で、微隆線による区画内に縄文が施されている。11 は第Ⅴ類 b 種、12・13 は e 種、14・15 は c 種に該当し、16 は第Ⅵ類 a 種である。11 は太目の断面三角形の隆線で区画し、以下に縄文を施している。12 には大きな突出部がある。17・18 は縄文、19・20 は条



第 89 図 第 106 号住居跡実測図



第 90 図 第 106 号住居跡出土土器実測図・拓影図

線文が縦位に施されている胴部片である。18 は底部近くの破片である。

21 は、南側の覆土中から逆位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、内外面とも雑に縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が灰褐色、内面が褐灰色を呈する。底径 6.8 cm、現存高 4.8 cm である。

第 109 号住居跡 (第 91 図)

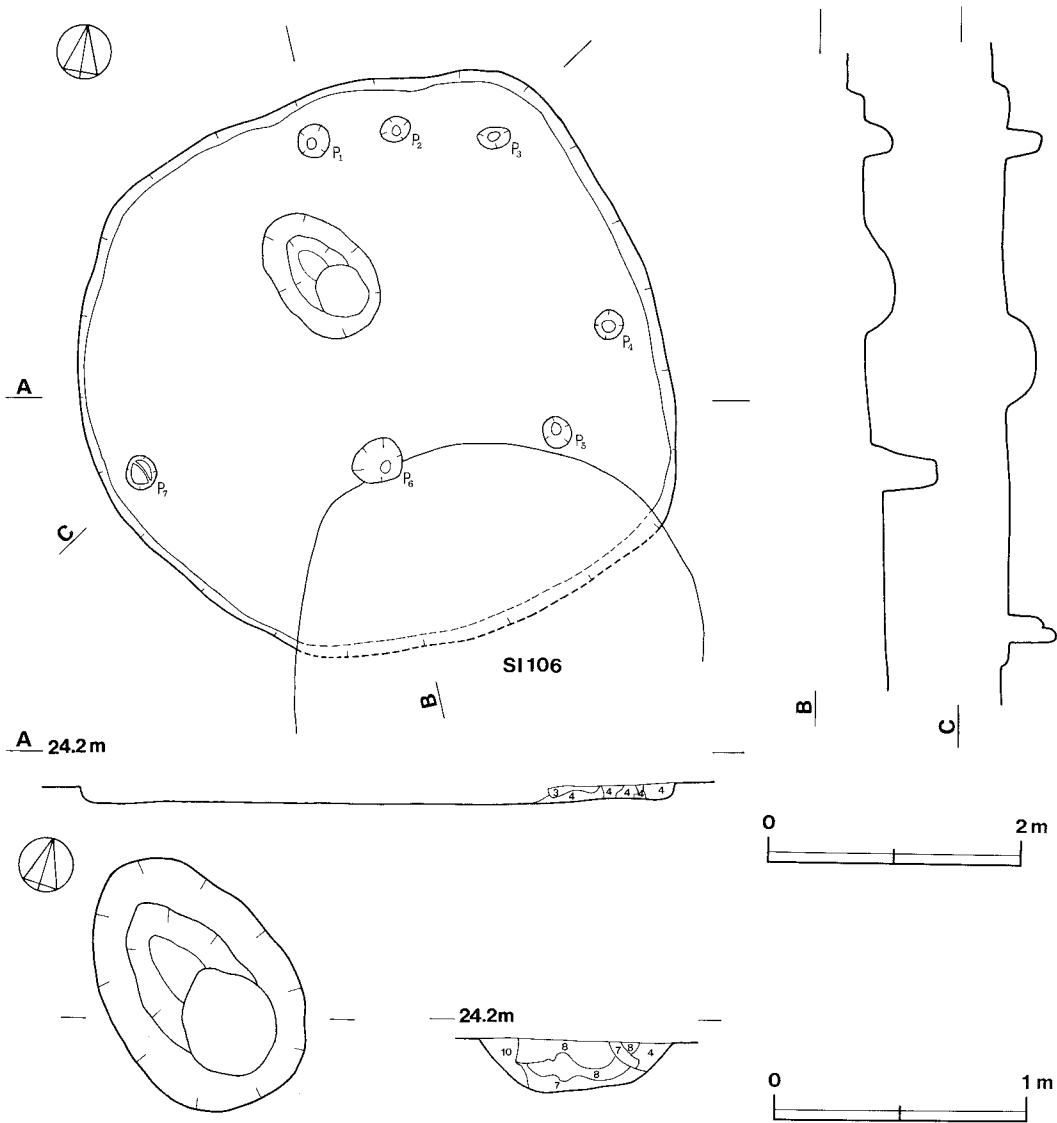
本跡は、調査区の南側の M2a2 区を中心とした位置に検出され、南東側を第 106 号住居跡により切られている。M2a2・a3・b2・b3 区は、遺構確認の段階で土器の出土が多く注意していた場所で、精査の結果 2 軒の住居跡を検出したものである。

平面形は、南東側を第 106 号住居跡に切られているために推定となるが、長径 4.75 m、短径 4.63 m の不整形円形を呈し、長径方向は、N-39°-W を指すものと思われる。

壁は、ロームで外傾して立ち上がり、壁高は 10 ~ 14 cm と低い。

床は、ロームであるがやや軟弱で、締まりが弱い。北・東側にかけて緩く傾斜している。

ピットは、P₁ ~ P₇ の 7 か所が認められるが、配列がやや不規則で北・東側に偏在している。P₆ の径 40 cm、深さ 54 cm を除いて他は径 20 ~ 30 cm、深さ 19 ~ 37 cm と小規模なピットである。支柱穴は確定しえず、したがって上屋構造も不明である。



第91図 第109号住居跡実測図

炉は、北西側にかたよっており、長径110cm、短径74cmの楕円形を呈する地床炉で、南東側の最深部で23cm掘り込まれている。炉壁、炉床とも良く焼けて赤化・硬化が著しく充分に使用された形跡がうかがえる。炉内には焼土粒子、ローム粒子を多量に含む締まった暗赤褐色土、赤褐色土が堆積している。

覆土は、中央部から北側にかけては暗褐色土、その他の壁寄りには褐色土が堆積している。暗褐色土にはローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子を少量から微量含み、褐色土にはローム粒子・ロームブロックを少量から微量、炭化粒子・焼土粒子を微量含んでいる。いずれも締まりがある。

遺物は、非常に少なく81点の土器片と炉の北側約60cmの覆土上位から出土した磨石の半欠品1点があるのみである。

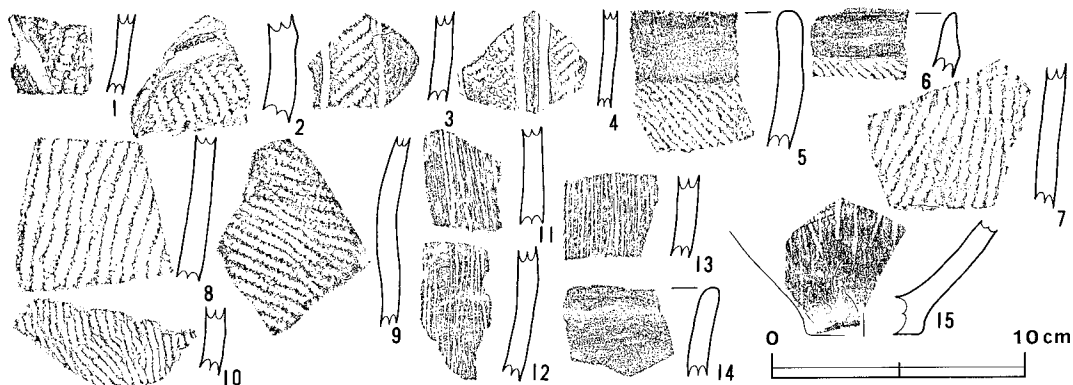
本跡の時期は、覆土出土土器片から判断すれば加曾利EⅢ式期と考えられる。

第 109 号住居跡出土土器（第 92 図 1～15）

第 92 図 1～4 は、いずれも胴部の小片で分類が困難である。2 は隆線の一部が認められ、1・3・4 は沈線による磨消帯がみられる。第Ⅱ類ないしはⅢ類であろう。5・6 は第Ⅴ類 c 種と判断される口縁部片で、比較的幅の広い無文帯下に縄文が施されている。7～13 は胴部片で、7～10 は縄文、11～13 は条線文が縦位に施文されている。14 は薄手無文の口縁部片である。

15 は、北西側の覆土中から出土した底部片で、外面に磨消懸垂文の末端部を示す沈線と単節縄文 L.R が認められる。底面近くと内面は丁寧な縦ナデが施されている。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、内面が黒褐色を呈する。推定底径 4.4 cm、現存高 4.2 cm である。

本跡からの出土土器は少ないが、加曾利 EⅢ 式期の新しい段階と考えられる。



第 92 図 第 109 号住居跡出土土器実測図・拓影図

第 117 号住居跡（第 93 図）

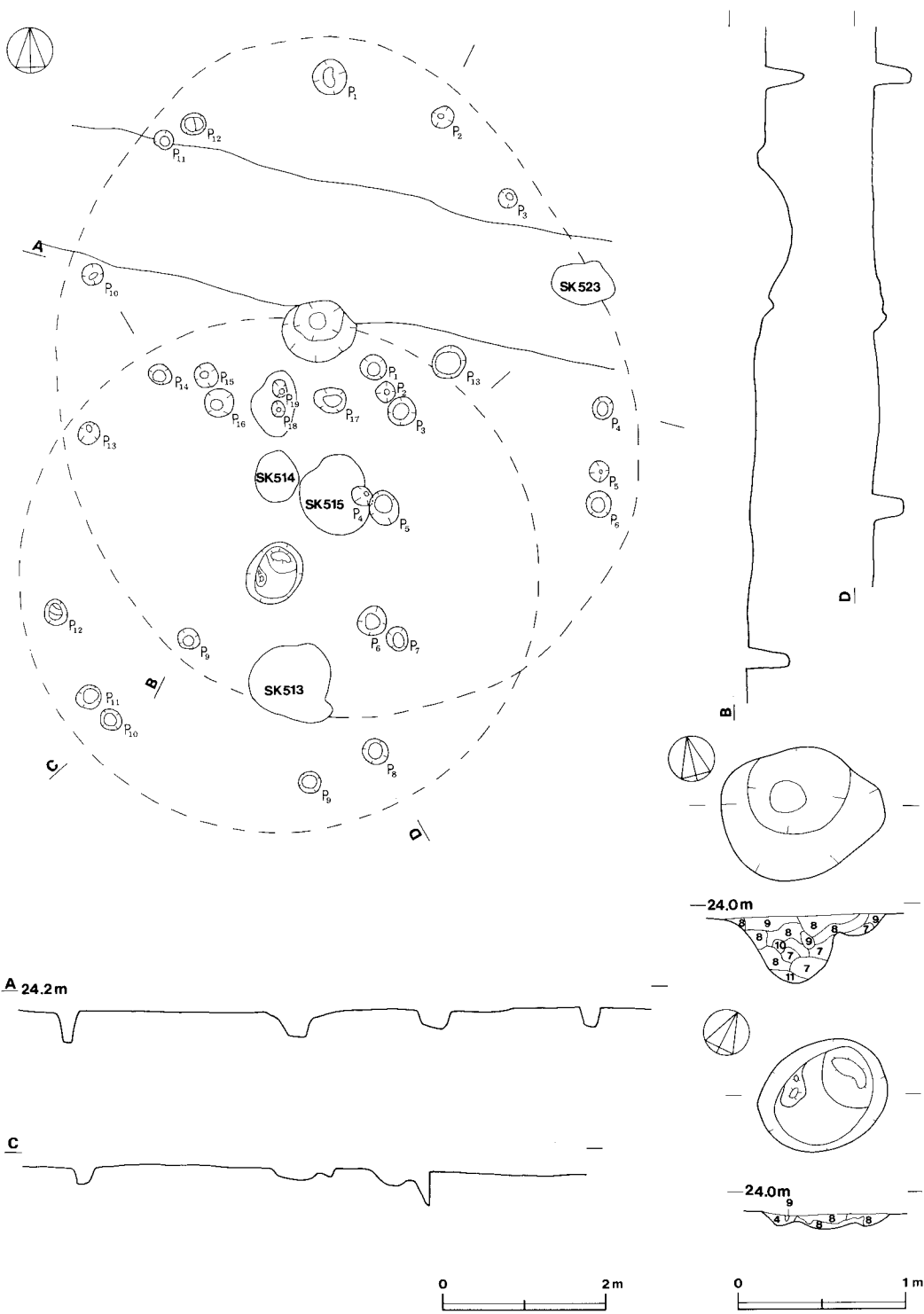
本跡は、調査区の西端の L1e8・e9 区を中心とした位置に検出され、北側で第 86 号住居跡、南側で第 118 号住居跡と重複している。いずれの住居跡も壁を失っており、炉の発見が契機となって調査がすすめられた。3 軒の住居跡とも出土土器などからみればほぼ同時期と考えられ、新旧関係は不明である。また、本跡の推定範囲内に第 395、436、513～516、523 号土坑が検出されている。このうち第 395、436、513 号土坑は、住居跡とほぼ同時期であるが、第 514 号土坑は出土遺物よりみて本跡より新しい。第 514 号土坑以外との新旧関係は不明である。第 5 号溝が本跡の北側を切断し、炉の一部も切っている。

平面形は、炉の位置と検出されたピットより推定したもので、長径 8.06 m、短径 7.02 m の長楕円形を呈し、長径方向は、N-5°-E を指すものと思われる。

壁は、検出されていない。

床は、ロームであるが炉の周辺がやや硬いだけで、他は軟弱である。

ピットは、本跡の推定範囲内に 25 か所認められたが、本跡の支柱穴は壁際を巡る 12 か所が想定され、これに第 5 号溝や各土坑によって失われたピットがいくつか加わることが予想される。径 25～40 cm、深さ 18～56 cm とやや不揃いである。



第 93 图 第 117・118 号住居跡実測图

炉は、中央部やや北寄りに位置するものと思われ、北東側を第5号溝に切られている。現存の最大長95cm、最大幅80cmを測り、最深部で40cm掘り込まれている地床炉である。炉壁は焼けてロームが硬化しているが、あまり赤化はしていない。これに対して炉床はきわめて良く焼けて赤化・硬化が著しい。炉内には焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子を含む締まった暗赤褐色土、赤褐色土が堆積しており、深鉢形土器の大破片などが出土している。

覆土は、上記のような状態のため把握できなかった。

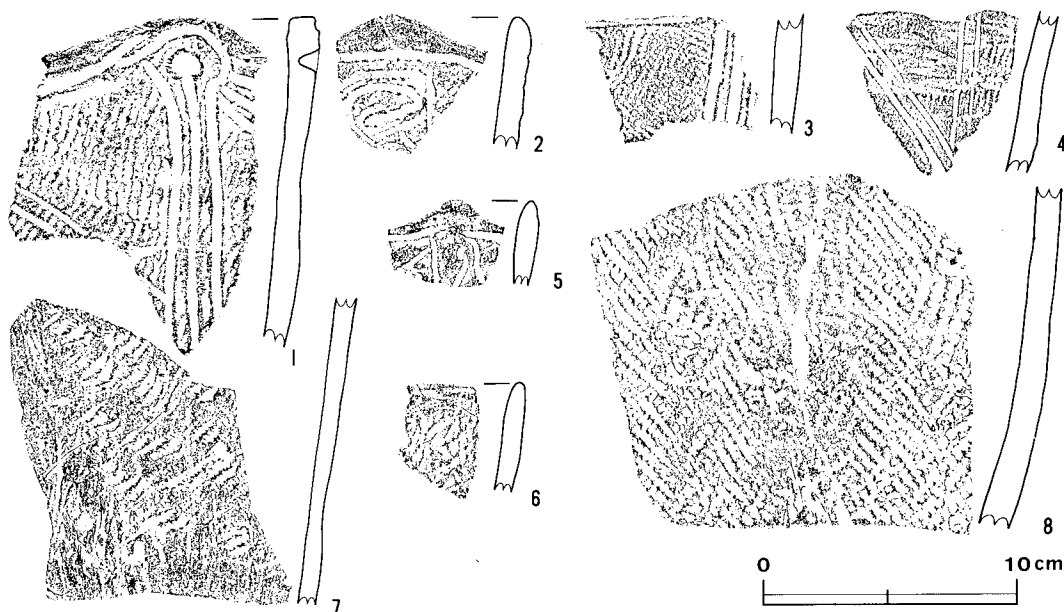
出土土器片は77点で、炉内およびピットなどから出土しており、その大半は堀之内I式期のものである。土師器片3点は混入であろう。

第117号住居跡出土土器（第94図1～8）

第94図1～5は、縄文地文上に沈線文が描かれる土器群で、1・2・5が口縁部片、3・4が胴部片である。1には波頂部から垂下する3条の沈線と斜行沈線が組みあわされており、波頂部下に深い刺突がなされている。2には蕨手文が描かれる。1・2・5とも波状縁を呈する。4・5の沈線は1～3に比べて細い。6～8は、全面に縄文が施されている。6は口縁部の小片で、8は大形の胴部片であり、縦位の羽状縄文が全面に施されている。7は底部近くの破片である。

第118号住居跡（第93図）

本跡は、調査区の西端のLee-f区を中心とした位置に検出され、第117号住居跡の南半部に大部分重なるように構築されている。新旧関係は不明である。本跡の推定範囲内に第513～516号土坑が重複している。第514号土坑が出土遺物からみて本跡より新しく、第515、516号土坑は、本跡のピットに掘り込まれていることから本跡より古く、第513号土坑との新旧関係は不明である。



第94図 第117号住居跡出土土器拓影図

本跡は炉とピットの配列から平面形を推定したものであるが、長径6.22 m、短径6.18 mの円形を呈するものと考えられ、長径方向は、N-40°-Eを指している。

壁は、検出されていない。

床は、ロームであるが特に踏みしめられた様子はなく、軟弱である。

ピットは、本跡の推定範囲内に19か所穿たれているが、周壁近くを巡るピットのうちのいくつかが主柱穴と考えられる。しかし、東側のピットは推定の東壁よりも約1.5 mも内側に寄っており、壁が内側になることも考えられる。また、北側にはピットが密集しており柱の建て替えなどが想定される。

炉は、本跡のほぼ中央部に位置すると思われ、長径70 cm、短径63 cmの楕円形を呈する地床炉で、掘り込みは最深部で18 cmと浅い皿状をなしている。炉床は良く焼けてロームブロックが凸凹して赤化・硬化も著しい。炉床の北側と西側には赤化した高まりが認められる。炉内にはロームブロック・焼土粒子を多量に含む締まった暗赤褐色土が堆積している。

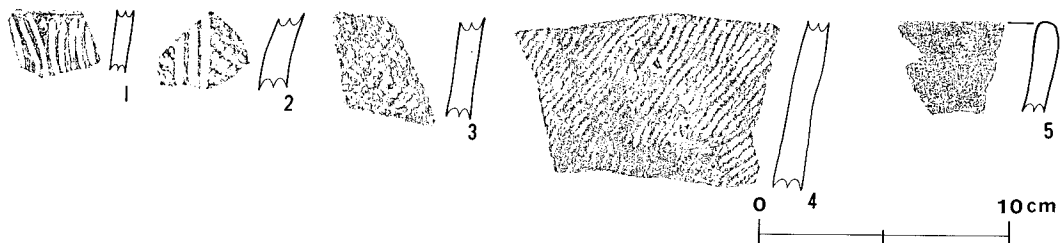
覆土は、不明である。

本跡に伴う土器片はごく少量で18点にすぎない。この他に土器片錘が1点ある。

本跡の時期は、遺構の重複関係およびごく少量の出土土器から判断すれば堀之内I式期と考えられる。

第118号住居跡出土土器（第95図1～5）

第95図1・2は、胴部の小片で、縄文地文上に沈線文が施されている。1は弧状に、2は縦位に施文されている。3・4は、やや厚手の胴部片で縄文のみが施されている。5は、無文の口縁部片である。



第95図 第118号住居跡出土土器拓影図

4 区

第3号住居跡（第96図）

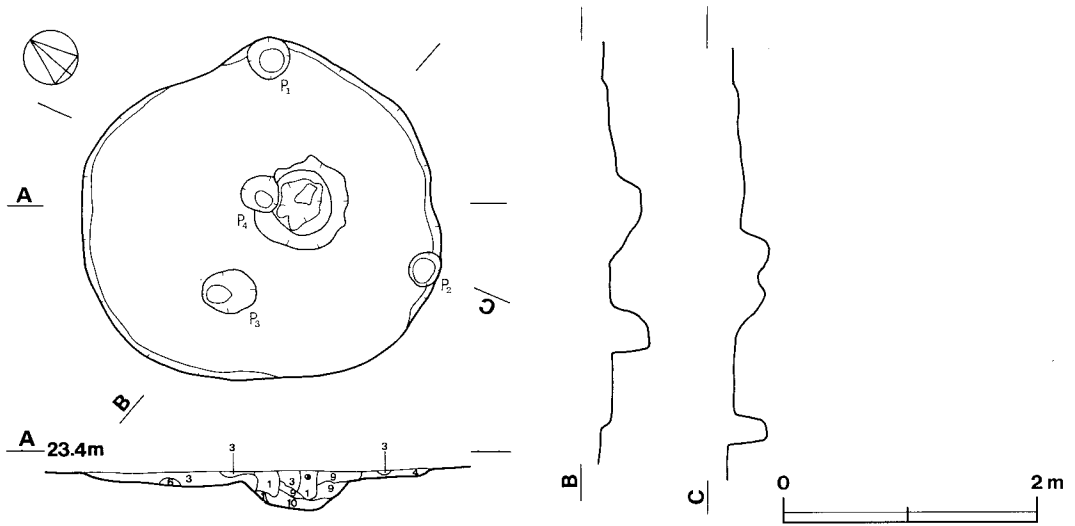
本跡は、調査区の西側のM5f0区を中心とした位置に確認され、径3 m弱のきわめて小規模な遺構である。当初は第3号土坑として調査を開始したが、炉が発見されたために周囲を精査して確認したものである。住居跡というよりは浅い掘り込みを伴う屋外炉と考えるべきかもしれない。

平面形は、長径2.84 m、短径2.73 mの不整形円形を呈し、長径方向はN-38°-Wを指している。

壁は、ロームでやや外傾して立ちあがり、壁高は最も高い西側で8 cm、その他では4～6 cmとごく低く、北東側や南西側の一部では壁は不明瞭である。

床は、ロームで平坦であるが、特に硬くはない。炉の北西側に浅い凹みが認められたが、性格は不明である。

ピットは、P₁～P₄の4か所検出されたが、P₄は炉の北西壁の一部を切っており本跡に伴わない。した



第 96 図 第 3 号住居跡実測図

がって支柱穴はP₁～P₃の3か所と思われ、3本柱の上屋構造を考える必要がある。径は25～42cmで、深さは26～46cmを測る。

炉は、中央やや南東寄りに検出され、長径78cm、短径70cmの不整円形を呈する地床炉で、最深部で27cm掘り込まれている。炉壁、炉床とも良く焼けており、赤化・硬化が著しい。炉内の上位にはローム粒子、焼土粒子を少量含む締まりの弱い黒褐色土、極暗赤褐色土が、下位には焼土粒子を多量に含む鈍い赤褐色土が堆積し、下部になるほど赤味を強く帯びる。炉の上面には一握りのヤマトシジミの貝ブロックが検出されており、炉内からは有孔円板1点が出土している。

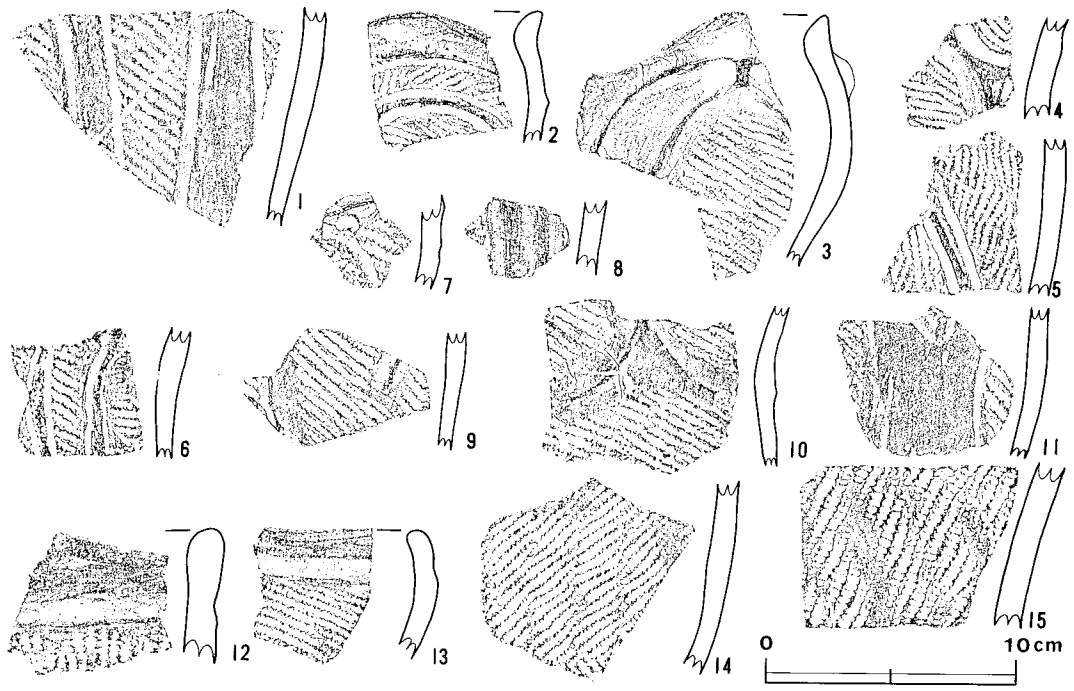
覆土は、ローム粒子、焼土粒子を少量含む暗褐色土が主となり、壁際には褐色土が堆積しており、いずれも締まっている。

遺物は、ごく少量で土器片76点と土器片錘1点が出土している。土器片の中には土師器片8点が混入している。

本跡の時期は、少量の出土土器から判断すれば加曾利EⅢ式期と考えられる。

第3号住居跡出土土器（第97図1～15）

本跡からの出土土器は少ない。第97図1は、第Ⅰ類に属する胴部片で、直線的磨消帯が垂下している。2～10は、第Ⅱ類に分類できる。2・3が口縁部片、4～10が胴部片である。隆線の断面形は丸味をもつもの（2・5・6）と三角形に近いもの（3・9・10）に分れる。3は波頂部下につまみあげたような小突起を有している。4・7・8は第Ⅱ類に含めたが、小破片のため第Ⅰ類の可能性もある。11は、第Ⅲ類に属する胴部片で、曲線的区画内に縄文が充填されている。12・13は、第Ⅴ類a種で、口縁部無文帯が浅い1条の凹線で区画され、以下に縄文が施されている。12は波状縁を呈し、厚手で直立気味である。14・15は縄文のみの胴部片で、共に単節縄文RLが縦位回転で施文されている。



第 97 図 第 3 号住居跡出土土器拓影図

第 4 号住居跡 (第 98 図)

本跡は、調査区の北西側の L5g5 区を中心とした位置に検出された住居跡であるが、中央部から西半部を残すのみで、南東部を倒木痕により失い、北・東側は最近の攪乱により消滅し、更に北西から南東側にかけては第 1 号溝が貫いている。東側に重複する第 39 号土坑との新旧関係は不明である。

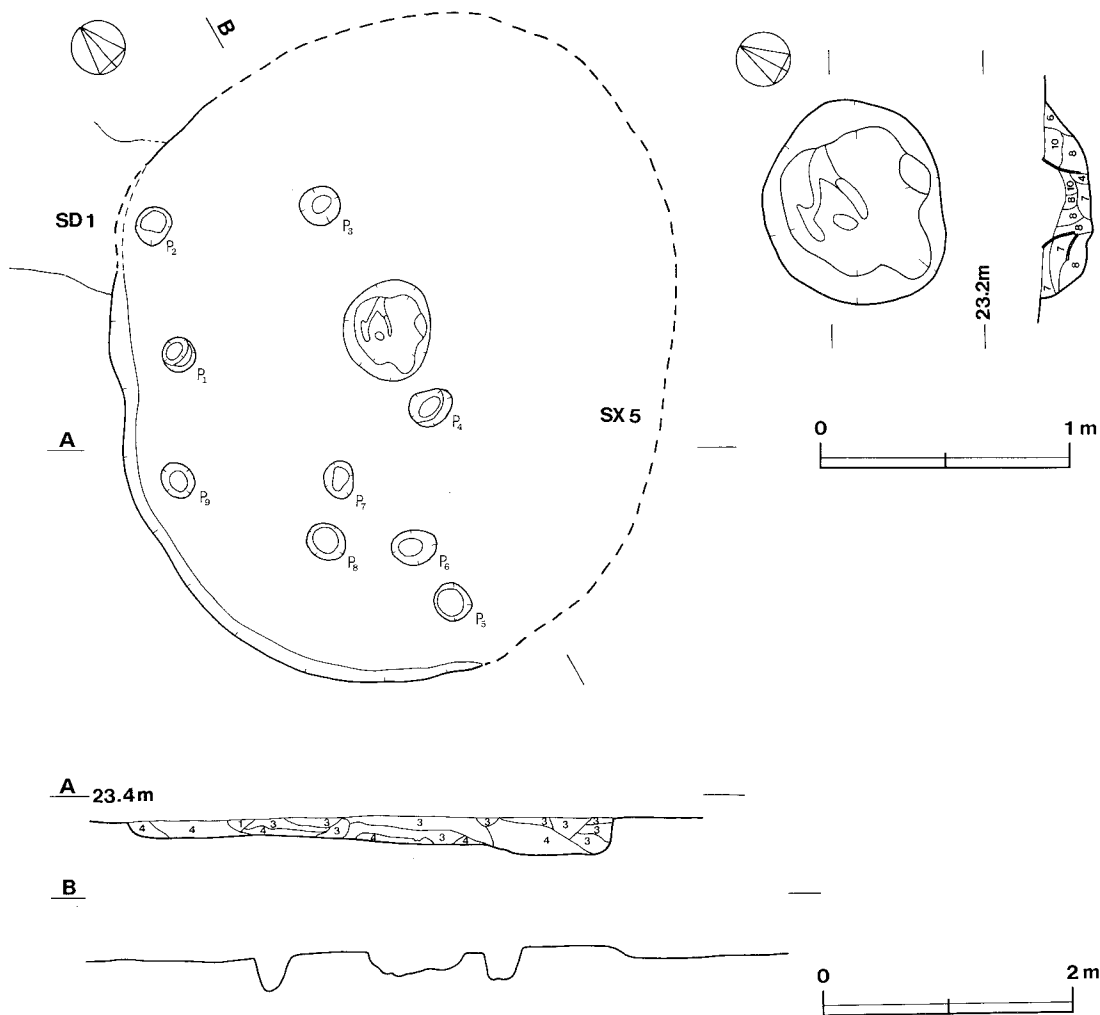
平面形は、西側の壁と炉からの推定によらざるを得ないが、長径 5.46 m、短径 4.42 m の楕円形を呈し、長径方向は N-49°-E を指すものと思われる。

壁は、ソフトロームでやや外傾して立ちあがり、壁高は南西側で 7~12 cm、北西側で 10~15 cm を測り、やや低めである。

床は、ハードロームであるが凹凸があり、中央部の炉の周囲が少し凹み、周壁に向けてなだらかにあがっている。床面は、中央部から西側にかけての部分が残存し、他は失われている。

ピットは、P₁~P₉ の 9 か所検出されたが、配列および規模から推定すれば P₁、P₃、P₈ の 3 か所と攪乱により消失したと考えられる 2~3 か所が加わって主柱穴を構成するものと思われる。いずれも径 25~30 cm、深さ 34~40 cm と揃っている。その他のピットのうち P₄ は、炉の南側にあり長径 36 cm、短径 30 cm で、49 cm の深さを有しているが、覆土からみると新しく本跡に伴わない。P₂、P₅~7、P₉ の 5 か所は西側に片寄る浅いピットで支柱穴と考えられる。

炉は、中央部に位置する土器埋設炉で、長径 84 cm、短径 73 cm、最深部で 21 cm の不整形の掘り込みの北西側に寄った位置に深鉢形土器の上胴部が一周して正位に埋設されている。炉壁、炉床とも良く焼き締まり、ロームがブロック状を呈し赤化・硬化が著しい。埋設土器内も良く焼けている。掘り込み全体が炉として使用され、土器は火種保存ないしは食物調理などに用いられたことも考えられる。炉内には



第 98 図 第 4 号住居跡実測図

ローム粒子、焼土粒子を多量に含む締まりの弱い暗赤褐色土、赤褐色土が堆積している。

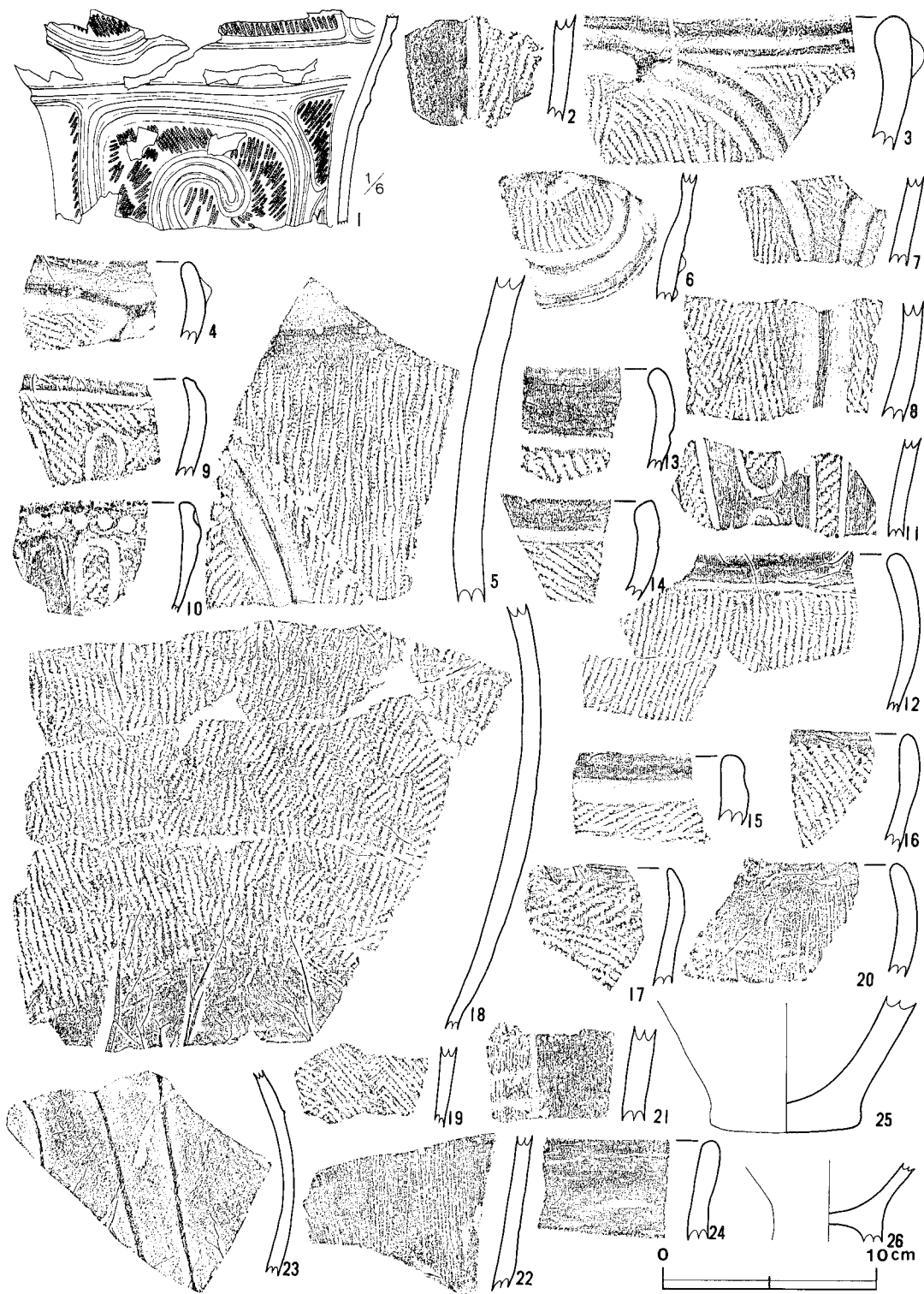
覆土は、基本的に 2 層に分れ、上位には暗褐色土、下位と壁際には褐色土が主として堆積し、ローム粒子を中量から多量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み締まっている。

遺物は、床面が残存する中央部から南西側にかけて多くみられ、その他はごく散在的である。いずれも覆土中からの出土である。土器片は 288 点で、土師器片、陶器片 4 点が混入している。他に土器片 5 点、有孔円板 1 点、石錐 1 点、磨石 2 点、敲石 1 点が出土している。磨石は南西側の壁寄りから出ている。

本跡の時期は、炉埋設土器および覆土中出土土器から判断すれば、加曾利 E III 式期と考えられる。

第 4 号住居跡出土土器 (第 99 図 1 ~ 26)

第 99 図 1 は、炉に正位で埋設されていた深鉢形土器で上下端がきれいに打ち欠かれ、胴部のみ一周し



第 99 图 第 4 号住居跡出土土器実測図・拓影図

ている。約3分の1が残存高20cmまで残り、他は15cmまでしか残存していない。最も高い部分は東側にあたる。胴中位で少しくびれ、以下はほぼ直線的に底部へ向かい、胴上位は外反する器形を呈する。胴上位は隆線とこれに沿う沈線で楕円形状の区画を施し、中位に無文帯を設け、下位には2本組の隆線で渦巻文3単位と縦長の区画文2単位を組み合わせで描き、モチーフ間には単節縄文を充填している。内面は縦ナデが施されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面が橙色を呈する。推定胴部最大径34.0cm、現存高19.6cmである。

2は、第Ⅰ類に属する胴部片で、直線的磨消帯が垂下している。3～8は、第Ⅱ類土器で、3・4が口縁部片、5～8が胴部片である。3・4ともつまみあげたような小突起が付されている。隆線は扁平な2本組の例(3・5～7)が目立ち、8のような1本で比較的太い例は少ない。3と5は共にきわめて厚手の大形土器で、隆線や縄文が類似し、同一個体と判断される。9～11は、第Ⅲ類に分類され、9・10が口縁部片、11が胴部片である。9は口縁直下に1条の沈線、10は刺突列を巡らし、以下に逆U字状文を描いているが、前者は区画内を磨消し、後者は縄文を充填しており、ポジとネガの関係を示している。11は区画内に縄文が施されている。12～15は、第Ⅴ類a種で、口縁部無文帯の幅の広い例(13)、狭い例(12・14・15)があり、区画沈線の太さも細い例(12)、中細の例(13・14)、太い例(15)に分けられる。16・17は第Ⅴ類c種で、わずかに無文帯を残し、以下に縄文を施している。17は施文方向を変え、羽状縄文を構成している。18・19は縄文のみの胴部片である。18は大形土器で底部近くまで残存する。19は縦位羽状に施されている。20～22は縦位の条線文が施されている。20は第Ⅴ類h種に相当する口縁部片である。21は直線的磨消帯が垂下する胴部片で、縄文の代わりに条線文が施されており、第Ⅰ類の2に共通する。縄文と条線文が変換された例である。23は第Ⅶ類土器の胴部片で壺形を呈するものと思われる。24は無文の口縁部片である。

25は、炉の南西側の覆土中位から逆位で出土した無文の深鉢形土器の底部片で、内外面とも縦ナデが施されているが、内面の整形は粗い。胎土は長石、石英粒を多量に含み粗雑であるが、焼成は良好である。色調はにぶい橙色を呈する。底径7.0cm、現存高6.0cmである。

26は、南側の覆土中から出土した台付土器の台部片で、外面は剥落が著しいが、内面はナデが施されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が黒褐色を呈する。推定の台部径5.1cm、残存高は3.5cmである。

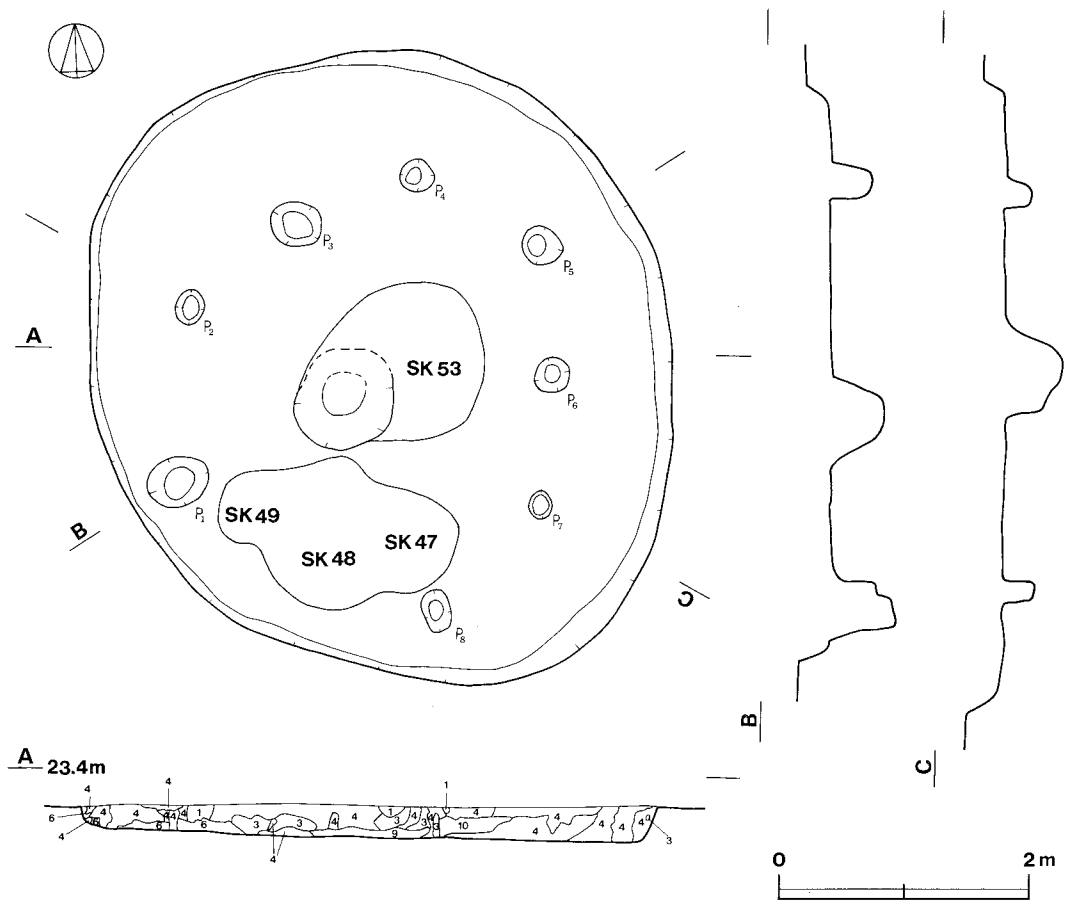
第5号住居跡(第100図)

本跡は、調査区の北東端のL7g1区を中心とした位置に確認され、覆土内の南側に投げ込まれた貝ブロックが堆積している。本跡内に第47～49、53号土坑が重複しているが、その新旧関係は、47～49号土坑は、覆土上位に本跡に伴う貝ブロックをのせていることから、第53号土坑は、その覆土中に本跡の炉が構築されていることからいずれも本跡より古い。

本跡の南東側約55mに第50号住居跡、南々東約36mに第19号住居跡、北北西約30mに第6号住居跡、西南西約25mに第4号住居跡が存在しているが、いずれもかなり離れており単独に近い状況で検出されたものである。

平面形は、長径5.42m、短径4.70mの楕円形を呈し、長径方向はN-40°-Wを指している。

壁は、ソフトルームで外傾して立ちあがり、南・東壁では30cmと当調査区の中では最高の壁高を有し、北・西壁では12～14cmと低くなっている。



第 100 図 第 5 号住居跡実測図

床は、ハードロームで硬く良く締まっており、ロームブロックが露出していて若干凹凸がある。全体的には平坦であるが、炉の周囲がやや低くなっている。

ピットは、P₁～P₈の8か所が認められたが、支柱穴はP₁、P₃、P₆、P₈の4か所と考えられる。いずれも炉を囲んでほぼ等距離に位置し、径は30～50cmとばらつきがあるが、深さが50～68cmと深くしっかり掘り込まれている。本跡のピットは、炉を囲むように壁の内側を巡っているので壁柱穴タイプの柱穴配置も考えたが、P₂、P₄、P₅、P₇は径20～30cm、深さ22～45cmと支柱穴に比較してやや浅く小規模であることから支柱穴とする方が妥当と思われる。

炉は、中央より南西に寄った位置にあり、第53号土坑の南西側の壁と覆土を掘り込んで構築されている地床炉である。このため炉の北側は掘り過ぎてしまい、一部推定によるが長径81cm、短径79cmの略円形を呈し、中央部で43cmと深く掘り込まれている。炉壁、炉床ともきわめて良く焼けており、赤化・硬化が著しい。炉内には粗いローム粒子、焼土粒子を多量に含む締まり弱い土が堆積しており、褐色、暗赤褐色、赤褐色を呈している。

覆土は、基本的に褐色土、暗褐色土の2層に分れるが、主に西・南・東側の壁近くと北半部には褐色土が堆積し、中央部から南側よりの貝ブロックが広がる部分には暗褐色土、黒褐色土が堆積し、その差は歴

然としている。覆土の色調の差は、南側に貝層を有するためと考えられるが、遺物の投棄方向とも関連して注意される。いずれの土層にもローム粒子を中量から少量、炭化粒子、焼土粒子を少量含んでいる。貝ブロックは a～f の 6 つのブロックに分けたが、a～c ブロックは小規模のため一括して取り上げた。a ブロックは、径 30 cm、厚さ 5～8 cm である。b ブロックは長径 25 cm、短径 14 cm の不整楕円形を呈し、厚さ 5～6 cm である。c ブロックは長径 20 cm、短径 12 cm の楕円形を呈し、厚さ 1～2 cm ときわめて小さい。d ブロックは、最大長 59 cm、最大幅 56 cm の不定形を呈し、厚さ 10～30 cm を測り、ハマグリを主としている。貝ブロックの下面はほぼ床面に接している。e・f ブロックはやや規模の大きいもので、第 47～49 号土坑上にかかっている。e ブロックは西側にあり、最大長 176 cm、最大幅 88 cm の不定形を呈し、最大厚は 19 cm を測る。ハマグリ、シオフキを主としている。下面は床面にほぼ接している。f ブロックは e ブロックと西側で接し、最大長 128 cm、最大幅 70 cm の不定形を呈し、最大厚は 22 cm を測る。シオフキを主体として、ハマグリ、サルボウなどを含む。下面は床面にほぼ接している。以上から考えて、貝ブロックは本跡廃絶後間もなく投げ込まれたものと思われる。

遺物は、きわめて多量に出土しており、土器片は 2,079 点で、他に土器片錘 11 点、土製円板 2 点、有孔円板 3 点、磨石片 1 点、石鏃 1 点などがある。遺物は中央部に密集し、周壁寄りはやや疎となるが、特に北壁寄りには少ない。分布は炉の東側に特に集中し、この中にはほぼ器形をうかがえる資料がいくつか含まれている。いずれも覆土中からの出土が多く、床面密着の資料はごく少量である。

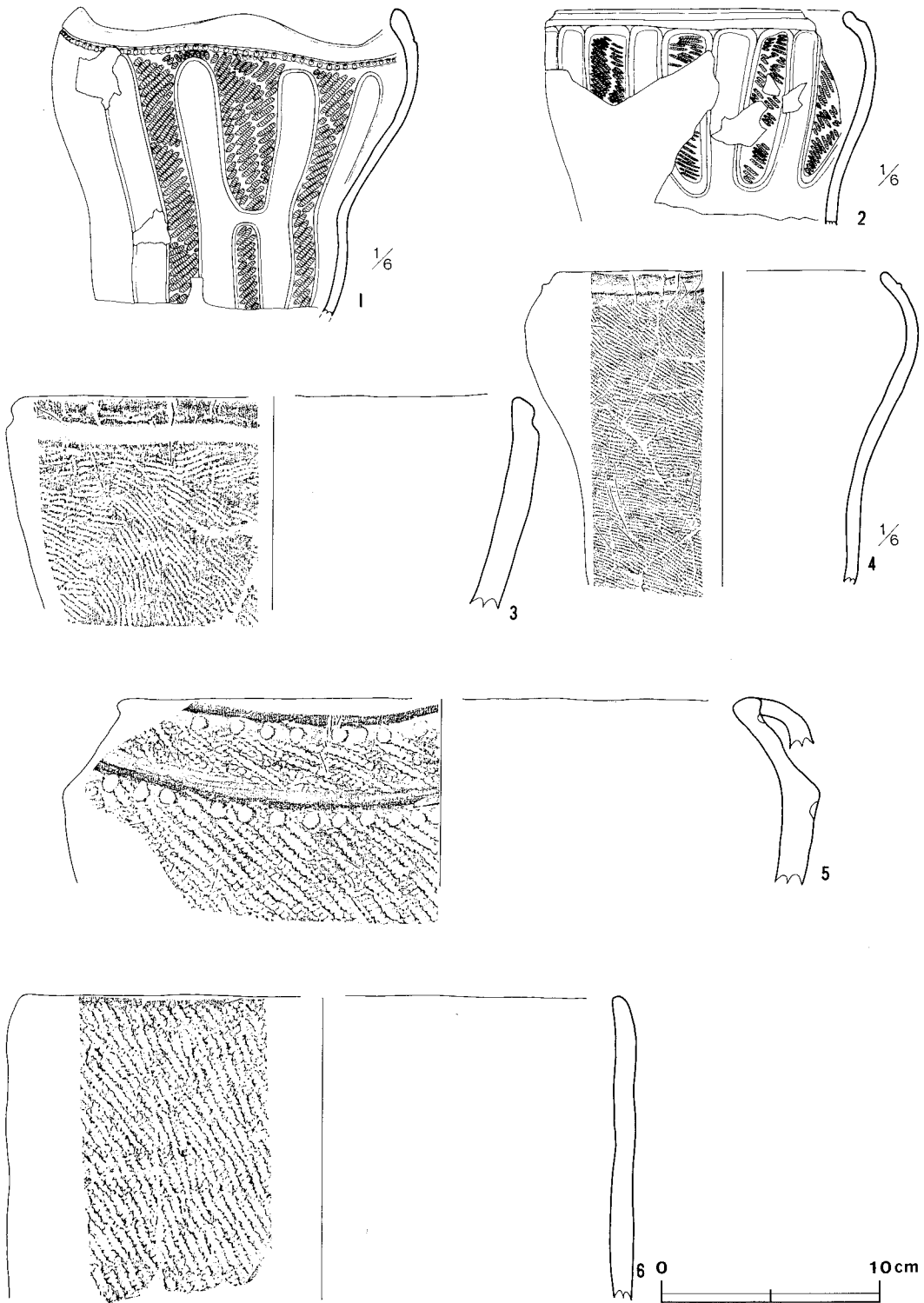
本跡の時期は、炉内出土土器および覆土中から出土した土器のうち器形をほぼ復元できた資料などから判断すれば、加曾利 EⅢ 式期と考えられる。

第 5 号住居跡出土土器（第 101～106 図 1～66）

第 101 図 1 は、中央やや東側の床面直上から口縁部を北西方向にむけて逆で一括出土した破片を中心に南東側の壁寄りの覆土中から出土した破片を含めて計 53 点が接合したもので、4 単位の波状口縁を呈する深鉢形土器で、胴中位で強くくびれる。胴部下半以下は欠失する。口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画し、沈線に沿わせて円形刺突文列を巡らす。口縁直下から胴部にかけて沈線で H 字状のモチーフを 6 単位描き、モチーフ内を磨り消し、モチーフ外に単節縄文 RL を縦位回転で充填する。胴中位のくびれ部で上下の縄文施文部が接するように施文されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。口径 29.0 cm、現存高 28.6 cm である。

2 は、北西壁寄りの覆土中位から一括して出土した破片群とそれより約 1 m 南東側に寄った覆土中位から出土した破片の計 19 点が接合した口縁部が内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。口縁直下に 1 条の太い凹線を巡らし、胴上半部に断面三角形の隆線で縦長の長方形文を連続して垂下させ、交互に縄文帯と磨消帯とする。縄文帯の下端は U 字状に納まり、磨消帯は区画されない。縄文は単節 LR の縦位回転である。内面は横ナデが施されている。胎土は粗砂を多量に含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が明赤褐色を呈する。推定口径 27.0 cm、現存高 20.0 cm である。

3 は、中央部から東側にかけての覆土中から出土した破片 3 点が接合したもので、口縁部が少し内傾する深鉢形土器である。接合しない同一個体の破片が他に 4 点ある。口縁直下に 1 条の太い沈線を巡らして幅の狭い無文帯を設け、以下全面に無節縄文 L を不定方向に回転施文している。外面は磨耗が著しく、内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。推定口径 23.0 cm、現存高 9.9 cm である。



第 101 图 第 5 号住居跡出土土器実測图(1)

4 は、中央部から南西側にかけての覆土中から出土した破片 34 点が接合したもので、胴下半部以下を欠失している。その断面には磨耗が認められ、ほぼ水平に打ち欠かされている。口縁部が内湾する深鉢形土器で、幅 1.5 cm 程の口縁部無文帯を 1 条の断面三角形を呈する微隆線で区画し、以下全面に単節縄文 LR を縦位、斜位回転で施文している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。大形の割には器壁の薄い土器である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。推定口径 30.0 cm、現存高 29.9 cm である。

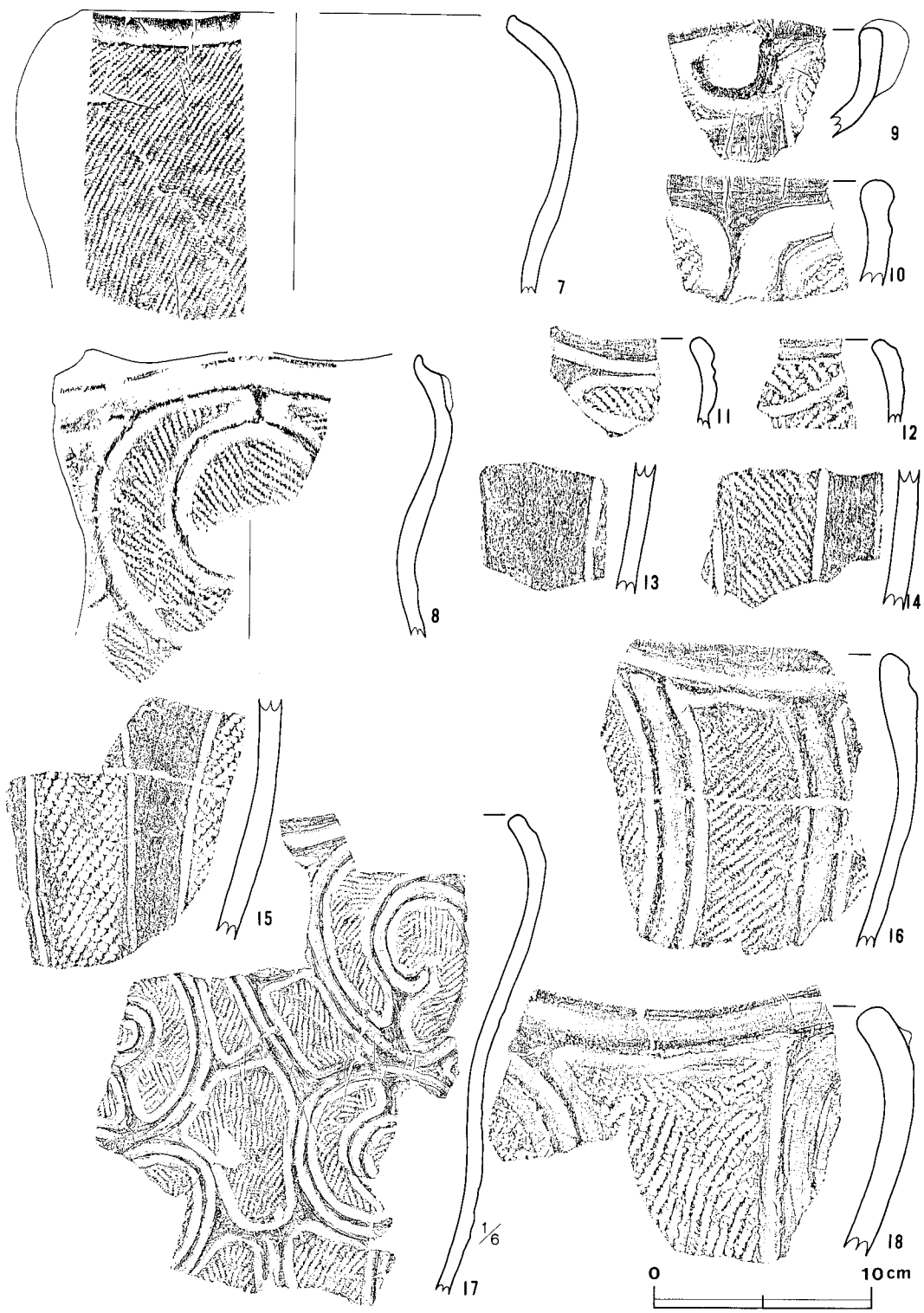
5 は、中央部出土の 3 点と東・西壁寄りの覆土から出土した各 1 点ずつの計 5 点の破片が接合した口縁部が内傾する深鉢形土器で、口唇部がやや内削ぎ状を呈する。接合しない同一個体の破片が他に 1 点ある。口縁部文様帯の幅は約 4.5～5 cm あり、断面三角形を呈する隆線で区画され、口縁直下と区画隆線の直下には棒状施文具による刺突列が各 1 条ずつ巡っている。口唇部から区画隆線にむけて橋状把手が付されているが、途中で欠損している。口縁部および胴部には単節縄文 RL が横位回転で充填されている。内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が灰褐色を呈する。推定口径 27.2 cm、現存高 8.7 cm である。

6 は、南西側の覆土中から逆位でまとめて出土した破片を中心に 10 点が接合した、ほぼ直立した口縁部がわずかに内傾する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁直下から全面に単節縄文 RL が横位回転で整然と施文されている。内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒、長石粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が灰褐色、内面がにぶい褐色を呈する。推定口径 27.5 cm、現存高 14.0 cm である。

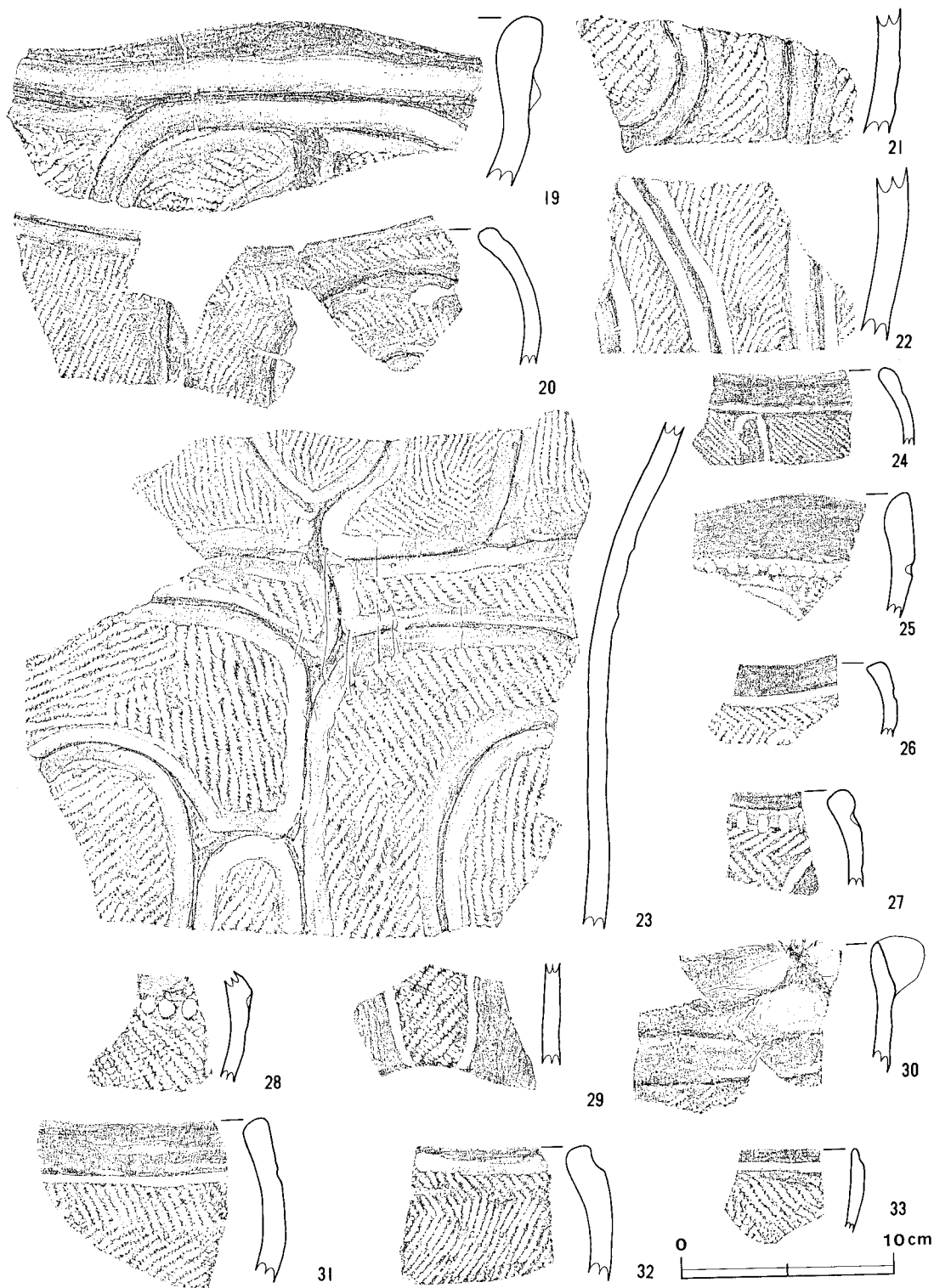
7 は、南壁寄りの覆土中から出土した破片 11 点が接合した口縁部が内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。全体に薄手で作りの良い土器である。口縁直下に幅 1 cm 程の無文帯を強いナデにより形成し、以下全面に単節縄文 RL を縦位回転で施文している。無文帯と縄文部の境は強いナデによりわずかに段状を呈し、微隆線的にみえる。内面は丁寧な横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面上半と内面が灰褐色、外面下半がにぶい褐色を呈する。推定口径 20.0 cm、現存高 13.0 cm である。

8 は、中央やや北西寄りの覆土中から出土した破片 12 点が接合したもので、ゆるい波状を呈し、口縁部が内湾する小形深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。幅 1～1.5 cm の口縁部無文帯を断面三角形の隆線で区画し、胴上半部には渦巻文と逆台形の区画を同様な隆線で描き、モチーフの間に単節縄文 LR を充填している。渦巻文と区画隆線が接する個所は X 字状を呈する小突起を形成している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。推定口径 15.5 cm、現存高 13.3 cm である。

9～15 は、第 I 類に分類される。9～12 が口縁部片、13～15 が胴部片である。9・10 が a 種、11・12 は b 種に属する。9 は渦巻状の隆線の一部がやや高く突出しているが、10 は低い。11・12 は薄手の小形土器で、楕円区画内に縄文が充填されている。13～15 は直線的磨消帯を有する例としたが、15 は沈線区画がやや曲線的で、第 III 類の胴部片の可能性もあ。16～23 は、第 II 類に属し、16～20 が口縁部片、21～23 が胴部片である。隆線によるモチーフは 17 に見られるように渦巻文と縦長の区画文を主とするものと判断されるが、モチーフを描く隆線の本数や断面形には差がある。1 本で断面形に丸味のあるもの (22)、1 本で断面が三角形のもの (20・23)、2 本組で断面三角形のもの (16～19、21) があり、モチーフの内外には単節縄文 RL、LR が施文されている。24～29 は、第 III 類に相当し、24～27 が口縁部片、28・29 が胴部片である。24・25 は口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画し、25・27・28 は刺突列が巡ら



第 102 图 第 5 号住居跡出土土器実測図・拓影図(2)



第 103 图 第 5 号住居跡出土土器拓影图(3)

されている。25は沈線上に刺突列が重ねられている。胴部には逆U字状文が描かれる例が多く、24～27は内部が磨消され、29は縄文が充填されている。30は、第Ⅳ類土器と思われるが、他の例とはやや異なっている。口縁部に小突起を付し、以下に2条の微隆線を巡らして縄文を施している。31～40は、第Ⅴ類a種の口縁部片で、36・37がゆるい波状縁を呈する以外は平縁と思われる。口縁部無文帯は幅の広いもの(39・40)、やや広いもの(31・35～38)、狭いもの(32～34)に分れる。広いものは口縁部が直立ないしは外反し、その他は内湾している。縄文は全面に施されているが、沈線直下の1段だけが横位回転され、以下が縦位回転され、一部で羽状を呈している(31・32・34)。区画沈線は細めのもの(31・33・38)と太く凹線状のもの(32・34～37・39・40)に大別される。41は、第Ⅴ類b種に相当し、口縁部無文帯を1条の貼付隆線で区画している。42～46は、第Ⅴ類c種の口縁部片で、42～44は比較的無文帯の幅が広く、45・46は狭い。器形は内湾するもの(42・43・46)、外反するもの(44・45)に別けられるが、44は屈曲が著しく、特異な器形を呈すると思われる。47・48は、第Ⅴ類e種で、断面三角形の微隆線で区画されている。49・50は、第Ⅵ類a種の口縁部片で、50は口縁部の外反が強い。51～53は縄文のみの胴部片で、53はくびれ部片、52は胴下半部片、51は底部近くの破片である。54・55は縄文と条線文が併施されている胴部片で、第Ⅴ類i種である。56～58は条線文が施されており、56は口縁部片で第Ⅴ類f種に該当し、条線文は縦位に施される。57はg種に分類され、58とともに条線文は横位に施されている。

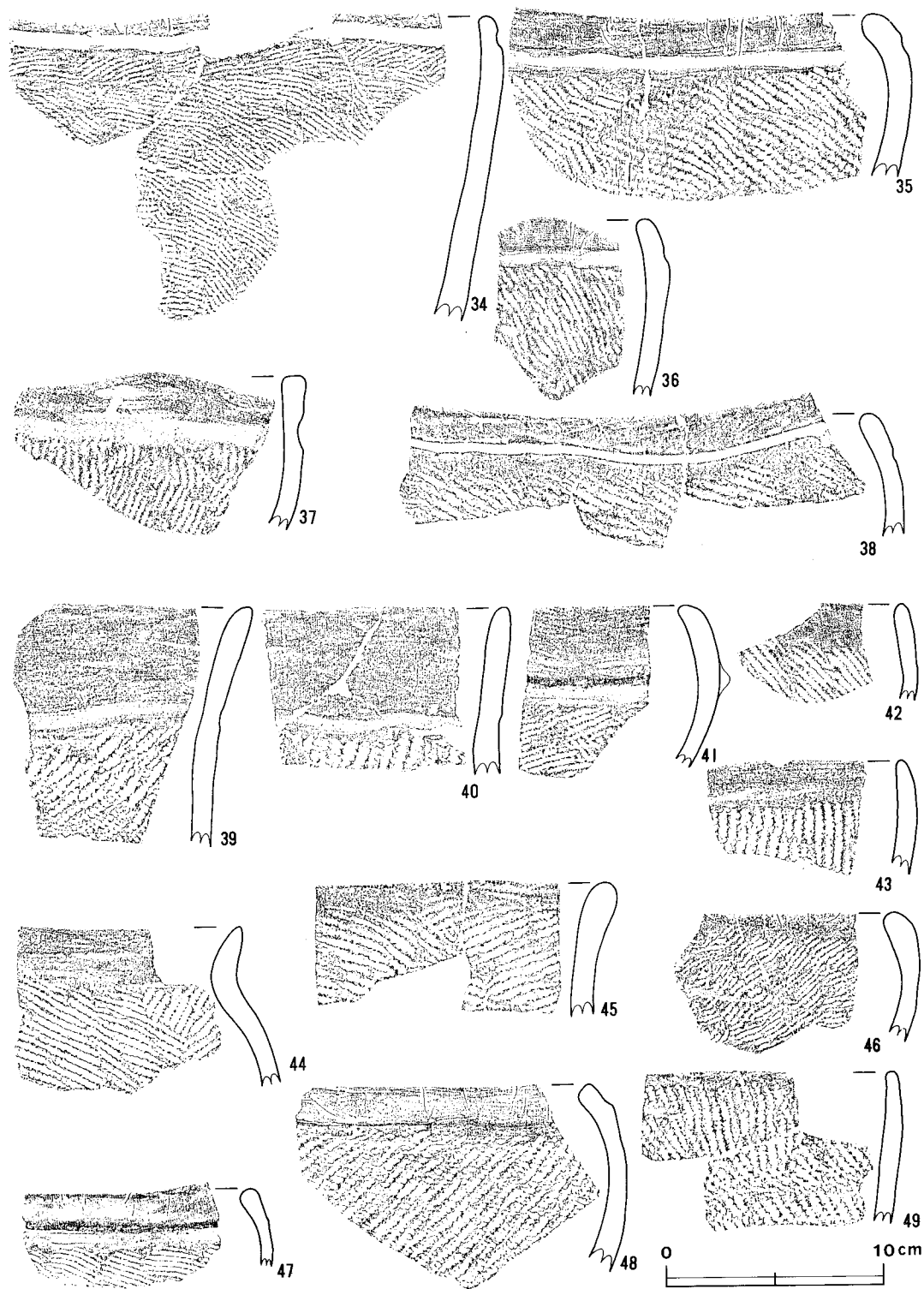
59は、南西側の覆土中から正位で出土した底部片を中心に18点が接合したもので、深鉢形土器の胴部下半から底部にかけての破片である。外面には無節縄文Lが縦位回転で雑に施文され、底面近く3～4cmほどは粗いナデのまま残されている。底部は突出する。内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は不良でもろい。色調は外面が明褐色、内面が灰褐色を呈する。底径5.9cm、現存高15.0cmである。

60は、南東側の覆土中から出土した破片12点が接合したもので、深鉢形土器の胴部下半から底部にかけての破片である。外面には縦位の細かい条線文が施され、底面から7～8cm上までは縦ナデが施され、無文のまま残されている。底部は突出気味である。内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明褐色、内面が橙色を呈する。底径6.5cm、現存高12.0cmである。

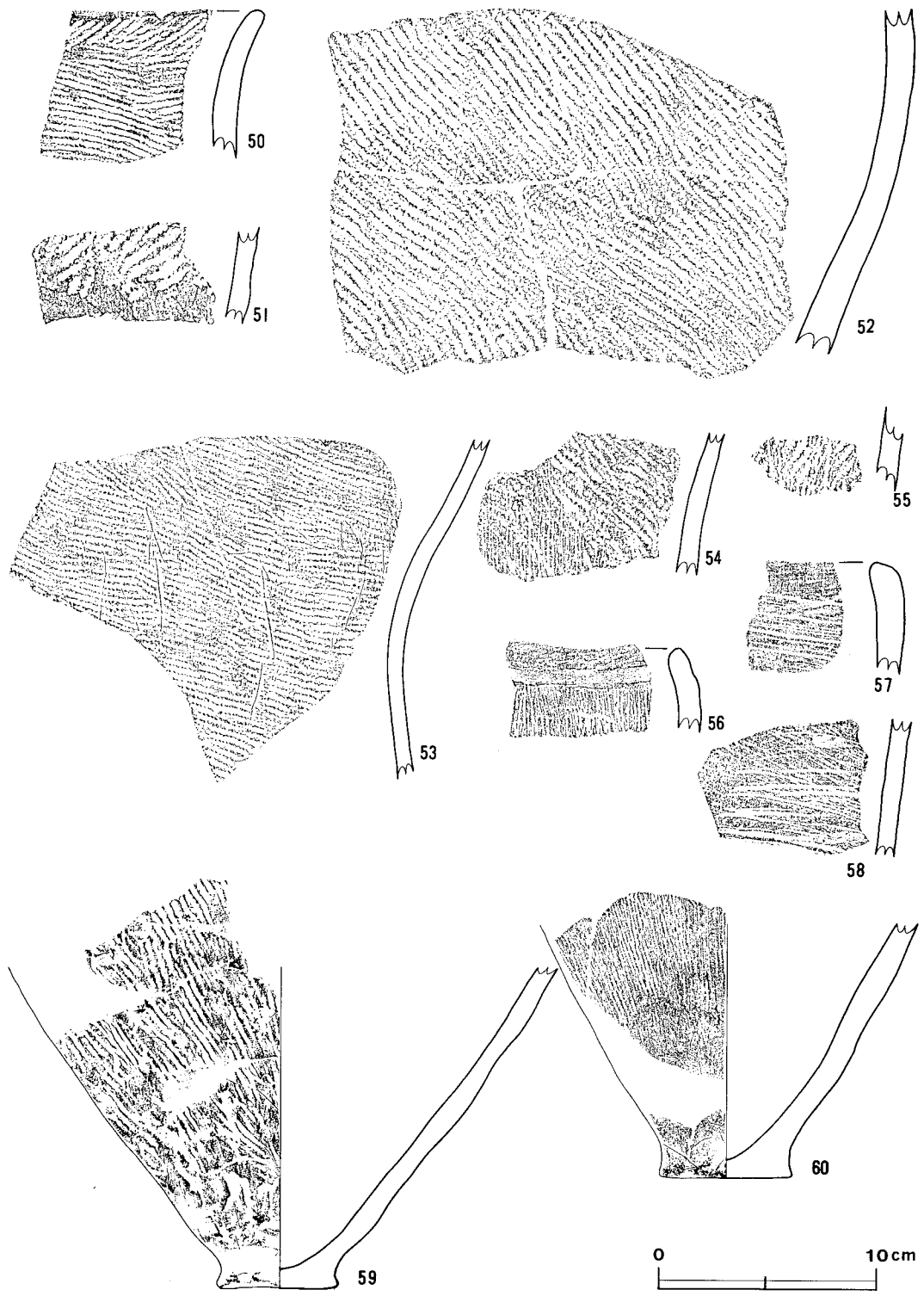
61は、中央部の覆土中から出土した破片2点が接合したもので、鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面上端に単節縄文LRが縦位回転で施文され、以下の外面と内面には縦ナデが施されているが、内面が特に丁寧である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい褐色を呈する。底径6.0cm、現存高9.5cmである。

62は、南東側の覆土中から出土した破片12点が接合した深鉢形土器の底部片で、外面上端には単節縄文が施文されているが、磨耗が著しく原体の撚りは不明である。底面から5cmほど上までは丁寧にナデが加えられている。内面は縦ナデが施され、炭化物が付着している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい赤褐色を呈する。底径6.8cm、現存高9.2cmである。

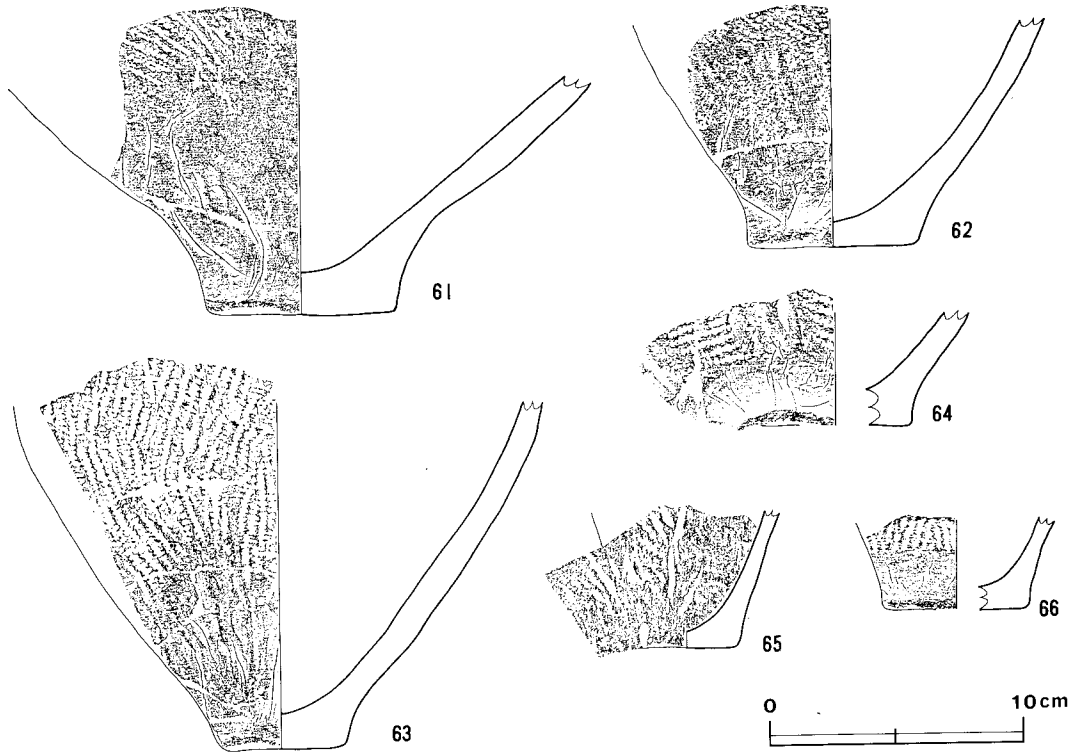
63は、南側の覆土中から出土した破片16点が接合したもので、深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面には単節縄文RLが縦位、斜位に回転施文され、底面から6cmほど上までは縦ナデが施され、無文のまま残されている。内面は縦ナデが施され、炭化物が付着している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい褐色を呈する。底径4.7cm、現存高13.9cmである。



第 104 图 第 5 号住居迹出土土器拓影图(4)



第105图 第5号住居跡出土土器实测图·拓影图(5)



第 106 图 第 5 号住居迹出土土器实测图(6)

64 は、中央やや東寄りの覆土中から出土した破片 7 点が接合したもので、深鉢形土器の底部片である。外面には推定で 5 単位の低隆線が垂下して区画をおこない、区画間には単節縄文 LR が斜位回転で充填されている。底面近くの 2 cm ほどは横ナデされ、内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が灰褐色を呈する。推定底径 6.2 cm、現存高 4.5 cm である。

65 は、中央部の覆土中から底面を北方向にむけて横倒しの状態で出土した小形深鉢形土器の底部片で、外面には雑な沈線が不等間隔に数条垂下し、無節縄文 L が縦位回転で施文されている。内面も雑なナデが施されており、全体に作りの悪い土器である。胎土は砂粒を含み、焼成は普通で、色調は外面が灰褐色、内面がにぶい褐色を呈する。底径 4.2 cm、現存高 5.5 cm である。

66 は、北西側の壁寄りの覆土中から出土した小形土器の底部片で、外面に単節縄文 RL が斜位回転で施文され、底面近くの 2 cm ほどは横ナデが加えられ、無文となっている。内面には炭化物が付着している。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。推定底径 5.6 cm、現存高 3.5 cm である。

第 6 号住居跡（第 107 図）

本跡は、調査区の北東側の L6d3・e3 区を中心とした位置に確認された住居跡であるが、第 4 号溝により中央部を切断されており、第 22、42～45 号土坑とも重複している。各土坑との新旧関係は、いずれも本跡の床面を掘り込んでいることから土坑の方が新しい。

本坑の確認は、第 4 号溝の掘り込み中に炉と思われる焼土を発見したことが契機となり、溝の東・西側を精査した結果住居跡の存在を認めたものである。しかし、遺存状態はきわめて悪く、不明瞭な点が多い。本跡の北北西約 19 m に第 7 号住居跡、南南東約 30 m に第 5 号住居跡が存在している。

平面形は、南西側の壁の一部を確認しただけであり、推定であるが長径 5.00 m、短径 4.57 m の不整形楕円形を呈し、長径方向は N-67°-E を指すものと思われる。

壁は、確認できた南西側ではソフトロームでやや外傾して立ちあがり、壁高は 10～12 cm を測る。

床は、ロームであるが踏みしめられてはおらず、壁際が高く中央に向かって低くなる。全体に床面は攪乱や他遺構との重複が激しく明確には捉えられなかった。

ピットは、P₁～P₅ の 5 か所検出されたが、いずれも径 25～35 cm、深さ 18～30 cm とやや小規模なもので、配列も不規則である。このうち P₁～P₃ が、位置からみて支柱穴と考えられ、土坑や溝により失われた 1～2 か所のピットとともに上屋を支えるものと思われる。

炉は中央部に検出され、炉床部と推定される長径 50 cm、短径 38 cm の焼土が残されているだけである。炉床は良く焼けており、十分な使用が考えられる。

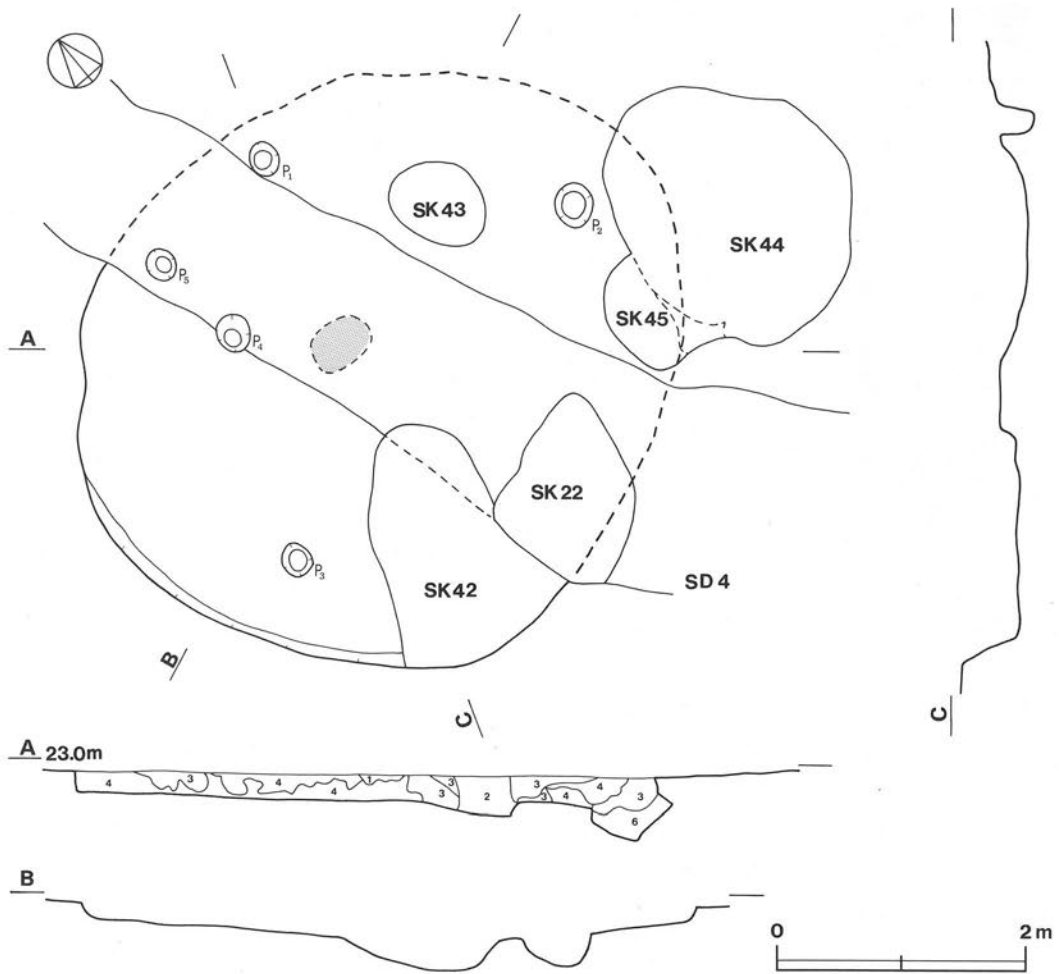
覆土は、攪乱が著しいため不明瞭であるが、褐色土、暗褐色土が主に堆積している。

遺物は、第 4 号溝より多量に出土したが、本跡に伴うと判断されたものは土器片 204 点、土器片錘 4 点である。そのほとんどが破片であるが、加曾利 E III 式期のものである。

本跡の時期は、乏しい土器片からの推定であるが、加曾利 E III 式期と考えられる。

第 6 号住居跡出土土器（第 108 図 1～12）

第 108 図 1～3 は、第 I 類土器で 1・2 は口縁部片で、3 は胴部片である。1 は低い隆線で楕円区画を

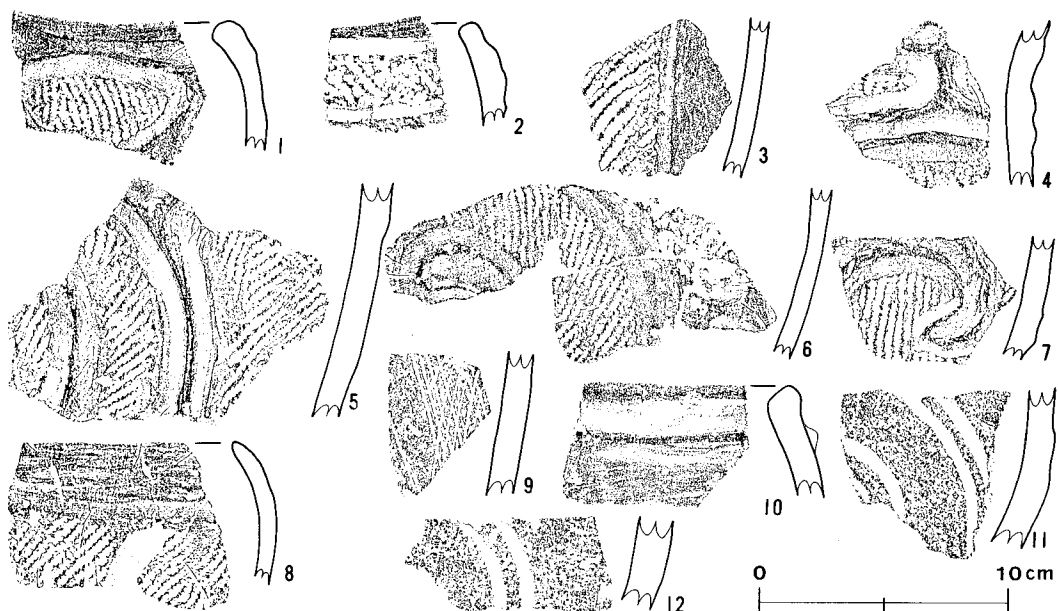


第 107 図 第 6 号住居跡実測図

描き、内部に縄文を充填している a 種，2 は沈線で区画している b 種に細別される。3 は直線の磨消帯が垂下している。4～7 は，第 II 類の胴部片である。4・5 の隆線はやや太く丸味を有し，6・7 は 2 本組で微隆線に近く，三角形を呈する。8 は，第 V 類 c 種の口縁部片で内湾している。9 は条線文が雑な斜格子目状に施されている胴部片である。10 は，口縁直下に貼付隆線が 1 条巡り，以下は無文となっており，第 VII 類に属する壺形土器の破片かもしれない。11・12 は同一個体で，2 条の沈線で曲線的モチーフが描かれている胴部片である。類例が竜ヶ崎市赤松遺跡の第 103 号土坑出土土例（第 194 図）にあり，有孔罅付土器の破片と考えられる。

第 7 号住居跡（第 109 図）

本跡は，調査区の北端の K 5 i 0・K 6 i 1 区を中心とした位置に単独で検出された住居跡であるが，覆土が浅く壁や床面の各所にかなり多くの攪乱が認められる。



第 108 図 第 6 号住居跡出土土器拓影図

本跡の南西約 30 m に第 4 号住居跡，南南東約 19 m に第 6 号住居跡が存在している。

平面形は，長径 4.50 m，短径 4.03 m の不整円形を呈し，長径方向は N-15°-E を指している。

壁は，ソフトロームでやや外傾して立ちあがっており，壁高は北東側でやや低く 20 cm，その他では 26 ~ 28 cm と比較的揃っている。

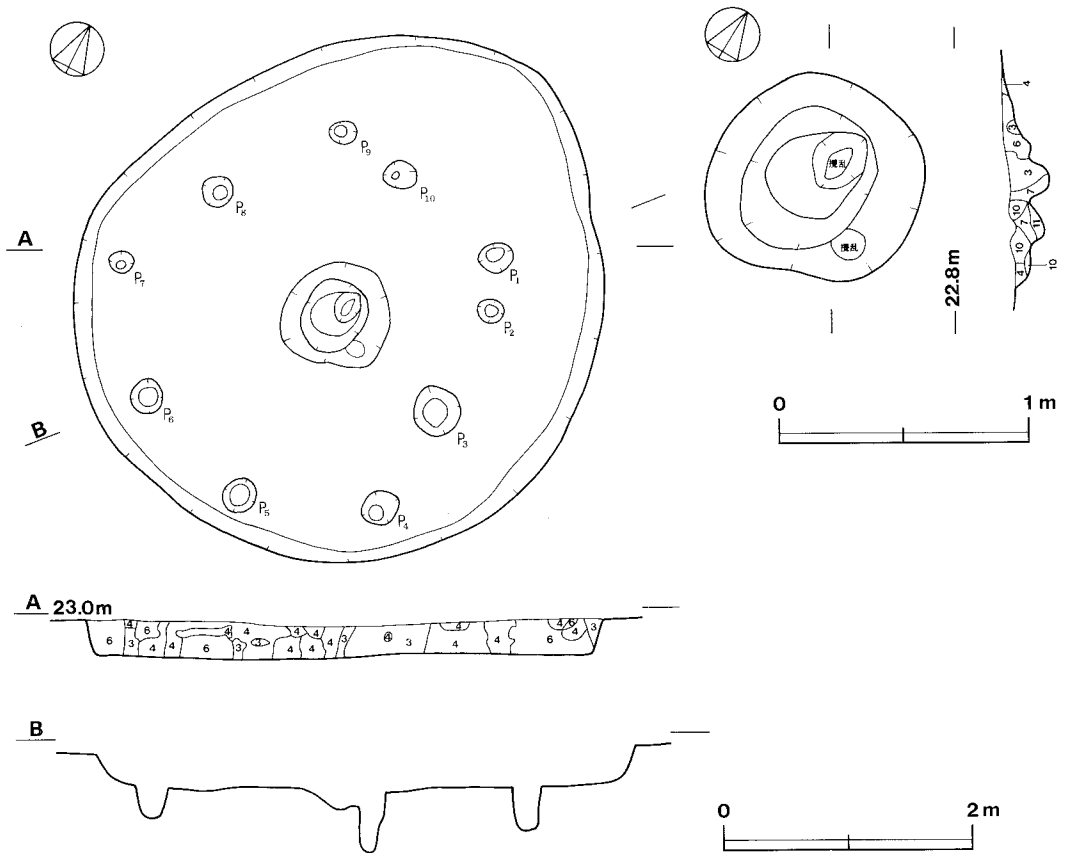
床は，ロームで硬く良好であり，中央部が若干低く，周壁に向かってあがる傾向が認められるが，特に北東壁寄りの床面はなだらかに上がり壁に至っている。出入口に関するものかもしれない。

ピットは，炉を囲むように P₁ ~ P₉ の 9 か所が穿たれている。ピットの覆土は南側の P₄ ~ P₆ が褐色土，その他は暗褐色土である。いずれも支柱穴と考えられるが，規模や配列から見るとすべてが同時存在とは思われず，建て替えなどが考えられる。

炉は，ほぼ中央部に位置する地床炉で，径 85 cm の不整円形を呈し，最深部で 19 cm 掘り込まれている。炉内の北東側と南東側には攪乱のピットが認められる。炉壁・炉床とも良く焼けてロームの硬化・赤化が著しい。炉内にローム粒子，焼土粒子を多量に含む良く締まった赤褐色土，明赤褐色土が堆積している。

覆土は，基本的に 2 層に分れ，褐色土を主体とし，中央部に暗褐色土が堆積しているが，攪乱が各所に入り，土層を複雑なものにしている。しかし，本来的には自然堆積と考えられる。

遺物は，中央部から南側にかけて集中する傾向を示し，肋骨様の文様を有する深鉢形土器の上半部は炉の南側の床面上に潰れた状態で出土した。遺物の出土は北側には少なく，北壁寄りにはほとんど認められない。遺物はその大半が覆土中の出土であり，南側から投棄されたものと推定される。このような遺物の出土状態は第 5 号住居跡にも共通し，当時の通路が，住居の南側を通っていてここから遺物を投げ込んだことも想定される。土器片は 1,036 点と多量で，他に土器片錘 8 点，土製円板 2 点，土製品 1 点，石棒片 1 点などが出土している。



第109図 第7号住居跡実測図

本跡の時期は、炉内・床面出土土器および覆土中から出土した資料のほとんどが加曾利EⅢ式期のものであることから、加曾利EⅢ式期と考えられる。

第7号住居跡出土土器（第110～112図1～44）

第110図1は、南側の床面上から口縁部を南西方向に向けて正位でまとも出土した破片を中心に、南側および中央部の覆土下位から出土した破片の合計42点が接合したもので、口縁部がやや内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。口縁直下にわずかの無文帯を有し、胴上半部には幅広で低平な隆帯とそれに沿う沈線で連続するU字状の区画を14か所設け、隆帯の下端はやや弧状を呈する同様な隆帯でつながれている。隆帯上には棒状施文具による斜位の押圧が加えられているが、区画下端を連結する隆帯上には施文されていない。隆帯間には肋骨状のモチーフが沈線で描かれ、奇異な文様を構成している。区画隆帯の下位には垂下する隆帯や横位の沈線が若干認められるが欠失しており、詳細は不明である。なお、口縁の上面観は著しい楕円形を呈する。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。内外面の一部には炭化物が付着している個所があり、胴部には2次加熱により赤褐色を呈する部分もある。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調はにぶい橙色を呈する。口径31.4cm、現存高15.6cmである。

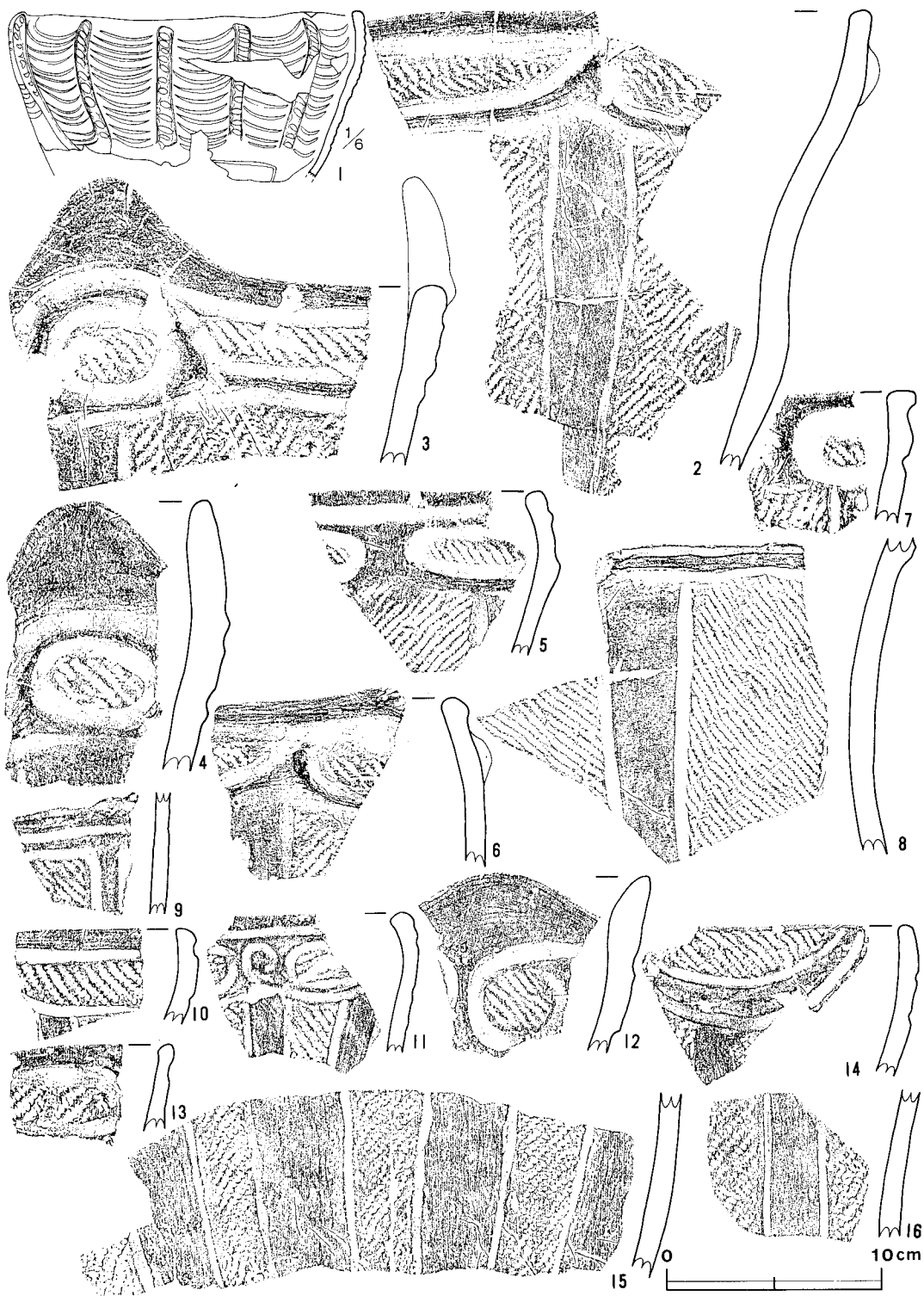
2～19は、第Ⅰ類に分類した土器で、2～9はa種、10～13はb種に細分される。14は口縁部に上

向き弧状の沈線区画を有し、以下に磨消帯を垂下させているので第Ⅰ類としたが、別類とした方が良いかもしれない。26～28とモチーフが類似しており、同類に含めるべきかもしれない。2～7は口縁部片、8・9は口縁部直下から胴部にかけての破片である。3・4は山形の波頂部を有し、大形土器である。楕円区画内に縄文を充填する口縁部から、直線的磨消帯が胴部へむかって垂下している。2は胴部のくびれが明瞭に認められる。縄文は単節RLが多く、口縁部は横位、胴部は縦位に回転施文されている(2～7)が、8はLRである。10～13の口縁部には楕円区画の他に渦巻文(11・12)がみられる。縄文はRL(10・12)、LR(11・13)がある。15～19は直線的磨消帯が垂下しており、いずれも幅が広い。17が特に広く、18は他に比較すると狭い。20～22・24は、第Ⅲ類に分類される。20・24は口縁直下に1条の沈線を巡らし、胴部に沈線で文様を描いている。20は直線的磨消帯が垂下し、24は縦位の楕円文が並列し、区画内に縄文が充填されている。21・22は胴部片で逆U字状の区画内に縄文が施されている。23は、連弧文土器である。口縁部が強く内傾し、胴上部がくびれる器形を呈し、口縁直下に1条、胴部中位に2条の沈線を巡らし、上半部には3本沈線による連弧文を描き、沈線間を磨消している。胴下半部には逆U字状の区画内に縄文を充填している。7区の第10号住居跡内出土の第1号埋甕遺構出土土器(第624図1)に類似しており、関連が目される。7区例は加曾利E式系土器との融合化が進んでいるが、本例は連弧文土器としての独立性を保っており、やや古いかもしれないが、確実ではない。25は、鉢形土器の口辺部片で、上位に無文帯を有し、楕円区画内に単節RLの縄文を充填している。26～28は、前記の14と同様な2本組の沈線による上向き弧状文を描き、沈線間を磨消している。くびれ部に巡る2条の沈線間に刺突列が施され、モチーフの内外には縄文が施されている。3点は同一個体である。文様は連弧文土器に類似しており、その関連がうかがわれる。29は口縁直下に1条の凹線を巡らせ、凹線の上下で縄文の走行を変えている。単節RLで、上部は横位、下部は縦位回転である。30は幅約7cmの広い無文帯を1条の沈線で区画し、以下に単節縄文LRを斜位回転で施文している。31は口縁直下に半截竹管状施文具による刺突列を有し、以下に縄文を施している口縁部片で、第Ⅴ類d種の可能性がある。32は第Ⅴ類c種で、無文帯の幅は狭く、5mm程度である。33は縄文のみの、34は縄文と条線文が併用される胴部の小片である。35～38は条線文が施される土器で、35は第Ⅴ類f種の好例である。35・37は多截竹管状施文具により縦位に密に施されており、厳密には条線文とはいえない。36・38は縦位に密に施されている。39は無文の口縁部片で、屈曲が激しい。40は、鏝部に孔を有する有孔鏝付土器で、胴部に磨消縄文による曲線文が描かれている。口縁部は無文で大きく外反する。

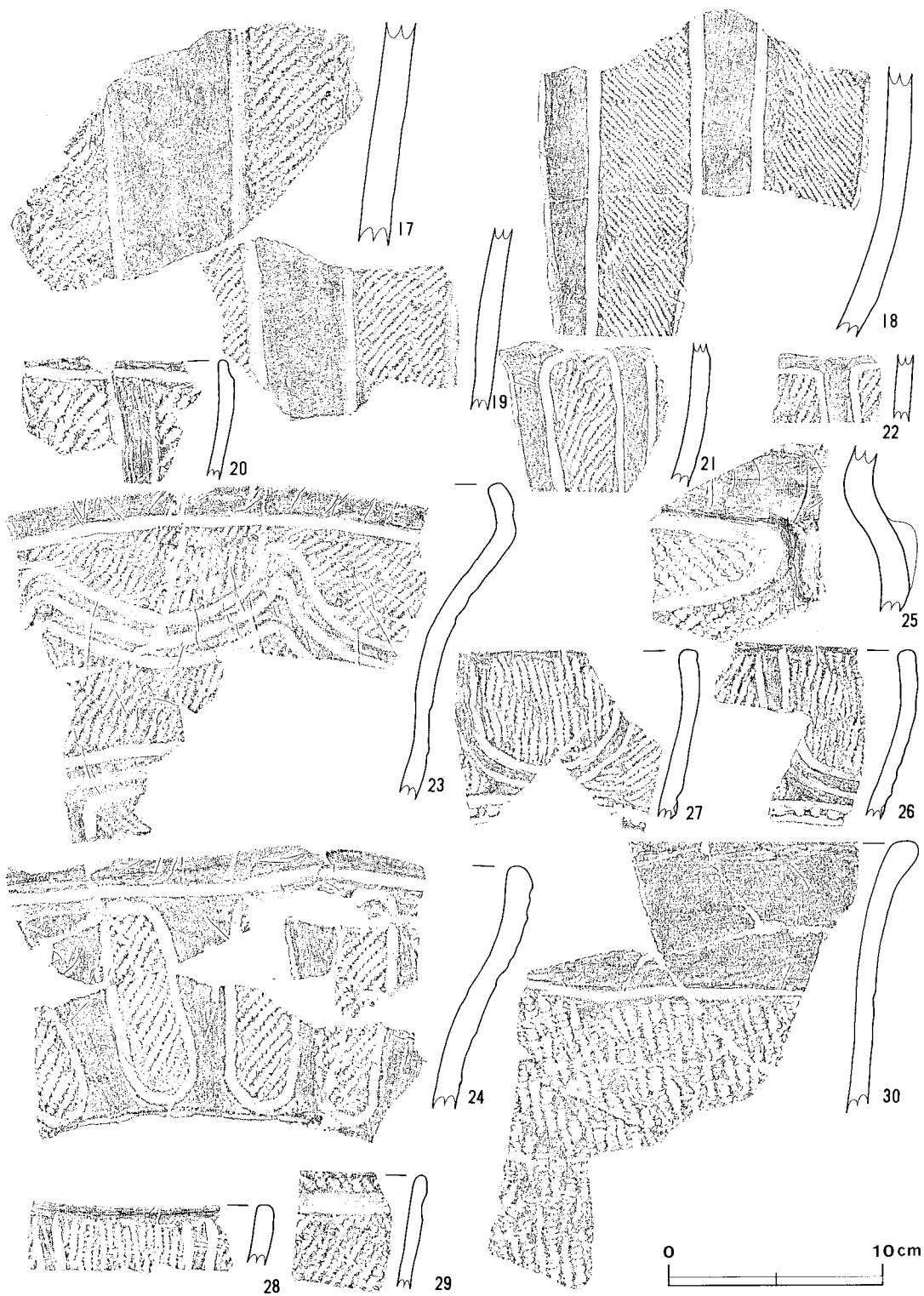
41は、北東側の覆土下位から一括して出土した破片を中心に24点が接合したもので、鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面には単節縄文RLが縦位回転で施文されているが、外面から底面にかけては磨耗が著しく不明瞭となっている。内面は縦ナデが施されている。胎土は粗砂を多量に含み、焼成は普通で、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。底径9.5cm、現存高9.1cmである。

42は、東側の覆土中から正位で出土した深鉢形土器の底部片で、外面には2本組の沈線による磨消懸垂文が数単位垂下し、区画間には単節縄文LRが縦位回転で充填されている。底面近く1cmほどは横ナデ、内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。底径7.0cm、現存高5.0cmである。

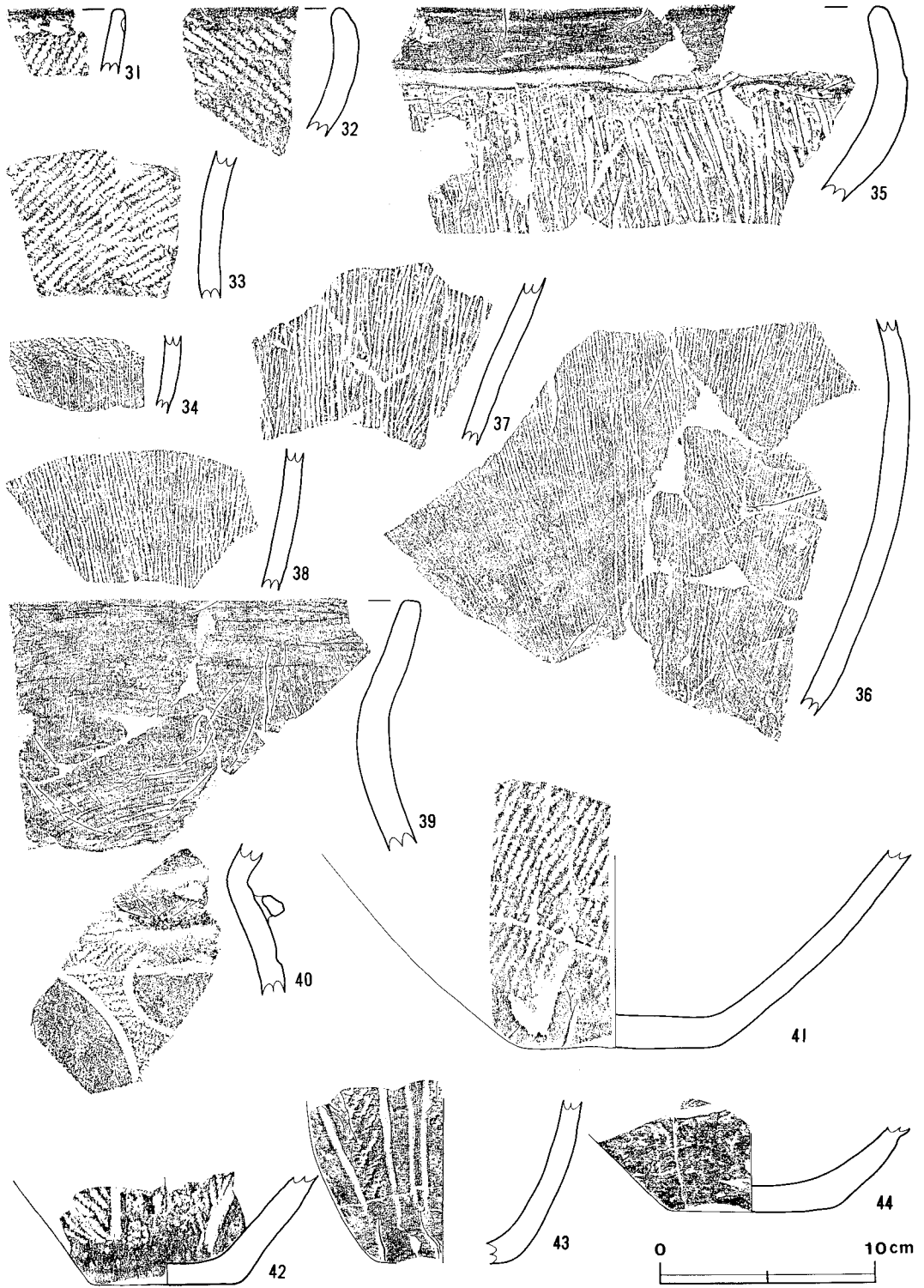
43は、中央やや南西側の覆土中から出土した破片を中心に、中央やや北東寄りの覆土中から出土した破片など5点が接合したもので、小形深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面には2本組の沈線による磨消懸垂文が垂下し、一部には磨消帯に1本の沈線が付加されている。区画間には撚り



第110图 第7号住居跡出土土器实测图·拓影图(1)



第 111 图 第 7 号住居跡出土土器拓影图(2)



第 112 图 第 7 号住居迹出土土器实测图·拓影图(3)

の弱い単節縄文 RL が縦位回転で充填されている。底面近く 2 cm ほどは横ナデ、内面は縦ナデが施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。推定底径 6.5 cm、現存高 7.7 cm である。

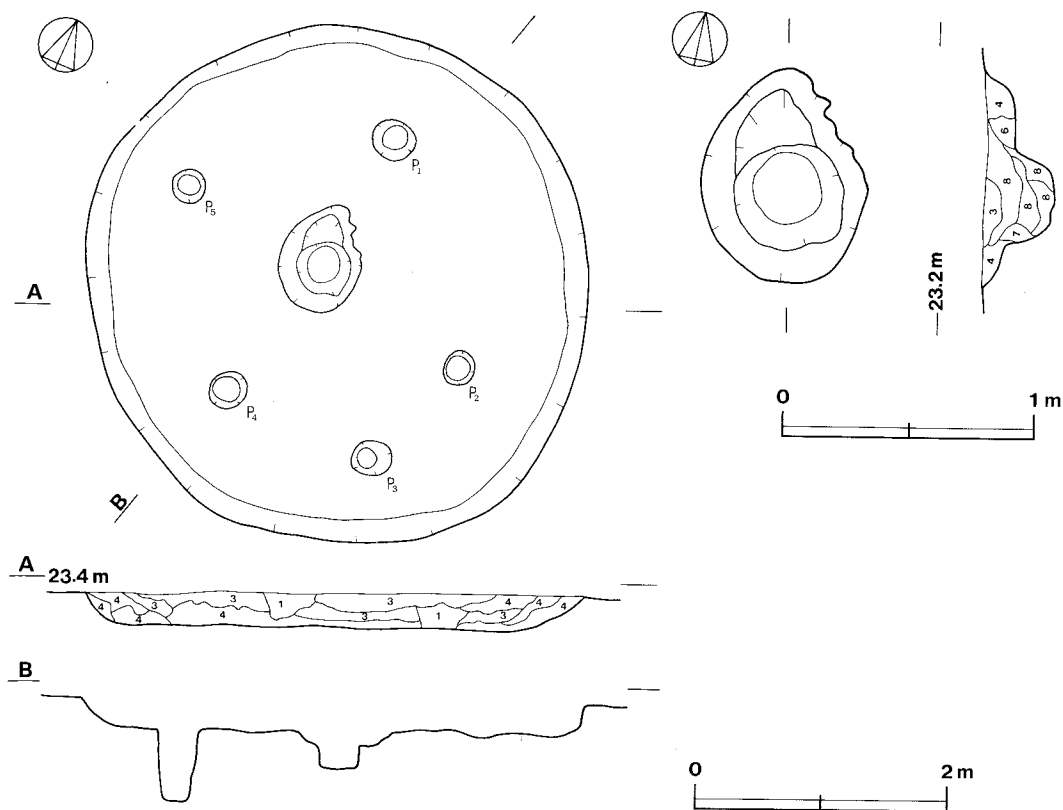
44 は、南東側の覆土中から出土した破片 10 点が接合したもので、鉢形土器の底部と思われる。外面上端には太目の沈線と縄文が認められるが詳細は不明である。底面 2 cm ほどの外面と内面はナデが施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。底径 8.0 cm、現存高 3.7 cm である。

第 19 号住居跡 (第 113 図)

本跡は、調査区の北側の M7g₅ 区を中心とした位置に単独で検出された住居跡で、南東側約 18 m に第 50 号住居跡が存在している。

平面形は、長径 4.21 m、短径 4.03 m の略円形を呈し、長径方向は N-50°-W を指している。

壁は、ソフトロームで北東側が直立気味のほかに外傾して立ちあがり、壁高は平均して 22 ~ 25 cm を測るが、西壁でやや低く 18 cm、東壁でやや高く 28 cm を有する。



第 113 図 第 19 号住居跡実測図

床は、ロームできわめて良く踏みしめられていて硬く、若干の凹凸は認められるが全体としては平坦である。南東側のP₂とP₃の間は、壁に向かって床面がやや高くなり、締まっている。位置からみても出入口部の可能性が高い。なお、床面は炉を中心とした中央部が不定形に硬くなっている。北東や北西側の壁寄りにはあまり硬くなく、あるいは寝所等として使用された空間かと考えられる。

ピットは、P₁～P₅の5か所が炉を囲んで五角形状に穿たれていることから主柱穴と思われる。径は25～35 cmで、深さは44～73 cmとやや細く深さにばらつきがあるが相当の深さを有しており、主柱穴として良いと思われる。

炉は、中央部やや北西寄りに位置する地床炉で、長径87 cm、短径66 cmの楕円形を呈し、中央部で2段に掘り込まれており、最深部で29 cmを測る。この中に石ないし土器などを埋設したことも想定される。炉の掘り込みは上部が広く、下部が狭い断面漏斗状を呈するが、炉床は少し東へ傾くがほぼ平坦である。炉壁、炉床とも良く焼けており赤化・硬化している。炉内にはローム粒子・焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土、赤褐色土が堆積している。また、炉の南壁際より炭化した堅果類が出土している。

覆土は、自然堆積で所謂レンズ状堆積を示しており、中央部の上位に暗褐色土、下位と壁寄りに褐色土が堆積している。上位はローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を少量含み、下位はローム粒子を中量から多量に含んでおり締まりがある。

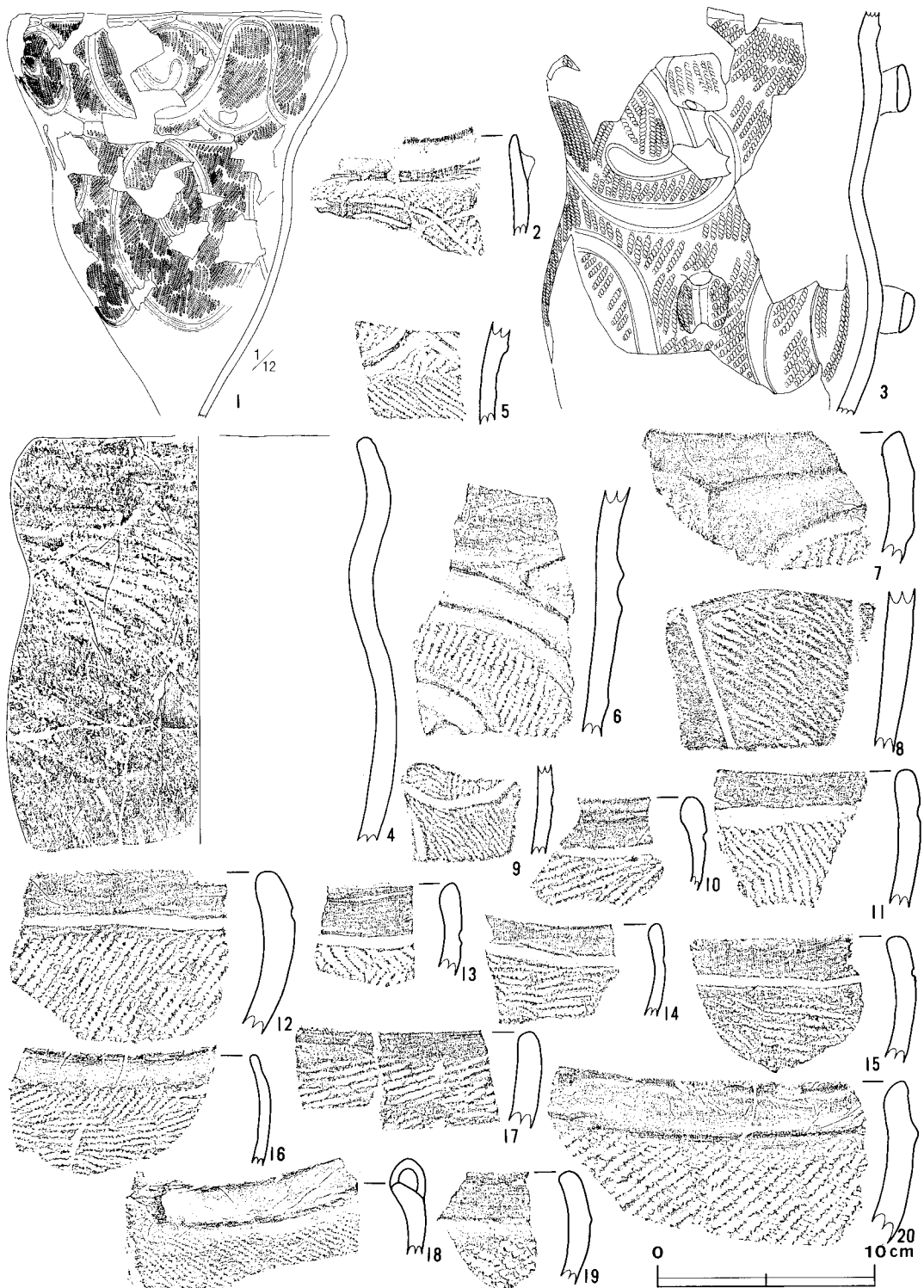
遺物は、中央部から南東側にかけて多く出土しており、南西・北西側ではごく少ない。遺物の大半は覆土から出土しており、床面密着のものはわずかである。P₁の南東側約30 cmの位置に、床面から5 cmほど浮いて径10 cm、厚さ5～6 cmの小貝ブロックが検出されている。ハマグリ、アカニシが認められたがごく少ない。土器片は548点で、土師器、須恵器片が9点混入している。この中には南東側の覆土中からまとまって出土して復元の結果、口径60 cm弱、器高75 cmとなった大形深鉢形土器も含まれている。他には土器片錘10点、土製円板1点、磨石1点などが出土している。

本跡の時期は、炉内出土土器や復元された土器などから判断すれば加曾利EⅢ式期と考えられる。

第19号住居跡出土土器（第114～115図1～34）

第114図1は、南東側の覆土中からまとまって出土した破片を中心に210点が接合して器形復元された大形深鉢形土器で、復元された個体では日本でも最大級の縄文土器といえよう。平縁のキャリパー形を呈し、底部を欠くほかはほぼ復元したが、欠落部分も多く、文様構成の不明瞭な個所もある。文様帯は胴上位と下位に分れ、中位に区画隆線を巡らしている。文様は2本組の断面三角形を呈する隆線で描かれる。上位は大柄な渦巻文が6単位描かれ、そのうち1単位だけが反時計回り、その他は時計回りで施文され、余白部の2か所には斧頭状のモチーフを描き、うち1か所は末端が巻き込まれている。渦巻文の上下端は口縁部と胴中位に巡る区画隆線と連結し、その部分がX字状の小突起となっている。胴下半部の文様は下端が連弧状を呈する縦長の楕円形に大きく6単位に区画され、各区画内の上位に大柄な渦巻文が反時計回りに施文され、そのうち1か所は時計回りとなっている。胴部のモチーフ間には単節縄文RLが斜位回転を主に充填されている。胴下半部以下18 cmほどは縦ナデが施され、無文のまま残されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されているが、剝落痕がところどころに認められている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。口径58.0 cm、現存高75.5 cmである。

2・3は、同一個体で中央やや南東寄りの覆土下位から出土した破片32点が接合したもので、壺形に



第 114 图 第 19 号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)

近いやや特異な器形を呈している。口縁部と胴下半部以下を欠失する。破片上端には口縁部を区画する隆線が一部残り、胴上位に曲線のモチーフ、下位に渦巻文が描かれ、各モチーフ内は磨消され、モチーフ外は単節縄文 RL が充填されている。胴上位と下位の同位置に、各1つずつ小突起が付されており、小突起上にも縄文が施文されている。内面は縦ナデが施されている。本土器は、欠落部分が多く、文様モチーフの全体的構成や突起の配列など不明瞭な部分が多い。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。胴部最大径 15.8 cm、現存高 19.0 cm である。

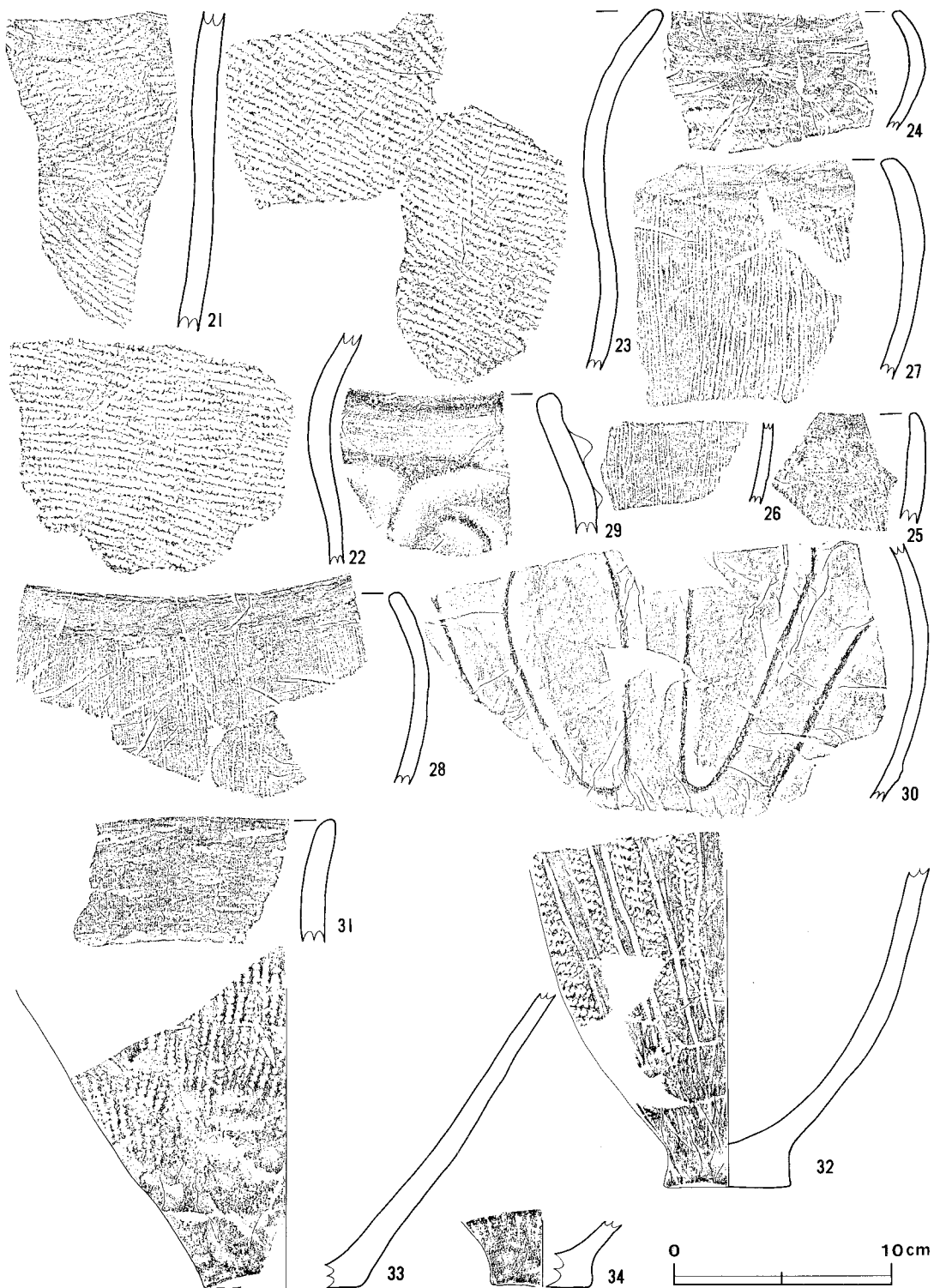
4 は、中央部の床面上から逆位で出土した破片を中心に 5 点が接合したもので、無文の口縁部が内湾し、胴上部でくびれ下部でふくらむ器形を有し、底部は欠失する。内外面とも雑な横位、斜位のナデが施され、外面下半部に炭化物が付着している。胎土は粗砂を多量に含み、焼成は普通で、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。推定口径 15.6 cm、現存高 19.0 cm である。

5～7 は、第Ⅱ類に属すると思われる。5 は胴部の小片で、丸味のある隆線で区画をおこない、2 種の太さの異なる縄文を施文している。7 は口縁部片、6 は口辺部片と思われ、断面三角形を呈する隆線で曲線的モチーフが描かれ、区画の内外に縄文が施されている。8 は直線的磨消帯を有する胴部片で、第Ⅰ類か第Ⅲ類に相当すると思われるが不明である。9 は縄文地文上に沈線が加えられる胴部の小片で、薄手である。10～16 は、第Ⅴ類 a 種である。16 以外は口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画しており、16 は口縁直下に凹線を巡らしている。14 は薄手で小形土器と思われる。17 は第Ⅴ類 c 種で、無節縄文が施文されている。18～20 は、第Ⅴ類 e 種で断面三角形の微隆線で区画しており、18 には小さな橋状把手が無文帯の一部に付されている。21～23 は縄文を主とする土器で、22 の破片上端には条線文が認められ、i 種に分類される。22・23 は全面縄文の土器で、同一個体と思われ、第Ⅵ類 a 種に相当する。胴部で強くくびれ、口縁部が外反している。24～28 は、条線文が施される土器で、26 を除いて口縁部片である。24 は内湾が著しく、横位、斜位の順に雑に施文されている。25・27・28 は、第Ⅴ類 h 種に該当する。無文帯の幅は、25 が 1 cm 前後と狭く、27・28 は 1.5 cm 以上でやや広い。共に縦位の条線文が施されている。29 は内傾するやや厚手の口縁部片で、隆線で渦巻文が描かれており、第Ⅶ類に属する。30 は薄手の胴部片で微隆線で連続する山形文が描かれており、壺形土器と思われる。31 は無文の口縁部片で、横位のナデが顕著に認められる。

32 は、中央やや東側の覆土中から出土した破片 10 点が接合したもので、深鉢形土器の胴部から底部にかけての破片である。底部はわずかに突出する。外面は幅の狭い磨消懸垂文が垂下し、区画間には粗い単節縄文 LR が縦位回転で施文され、底面近くの 5～6 cm ほどでは縦ナデされ、無文のまま残されている。内面は縦ナデが施され、炭化物が少量付着している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい赤褐色を呈する。底径 6.0 cm、現存高 15.0 cm である。

33 は、南東側の壁近くの覆土中からまともって出土した破片を中心に 12 点が接合したもので、深鉢形土器の胴部下半から底部にかけての破片である。外面に単節縄文 RL が斜位回転で施文され、底面から 5～6 cm ほどは雑なナデが施され、無文となっている。内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。推定底径 7.5 cm、現存高 14.0 cm である。

34 は、中央部の覆土中から正位で出土した小形土器の底部片で、外面に縦位の細い沈線が数条垂下しているが、磨耗が著しい。内面はナデが施されている。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。推定底径 4.8 cm、現存高 3.0 cm である。



第 115 图 第 19 号住居跡出土土器実測図・拓影図(2)

第 50 号住居跡 (第 116 図)

本跡は、調査区の北側の M7j₉区を中心とした位置にあり、壁の中央部を東西に走る現代の攪乱により切られているが、床までは達していない。

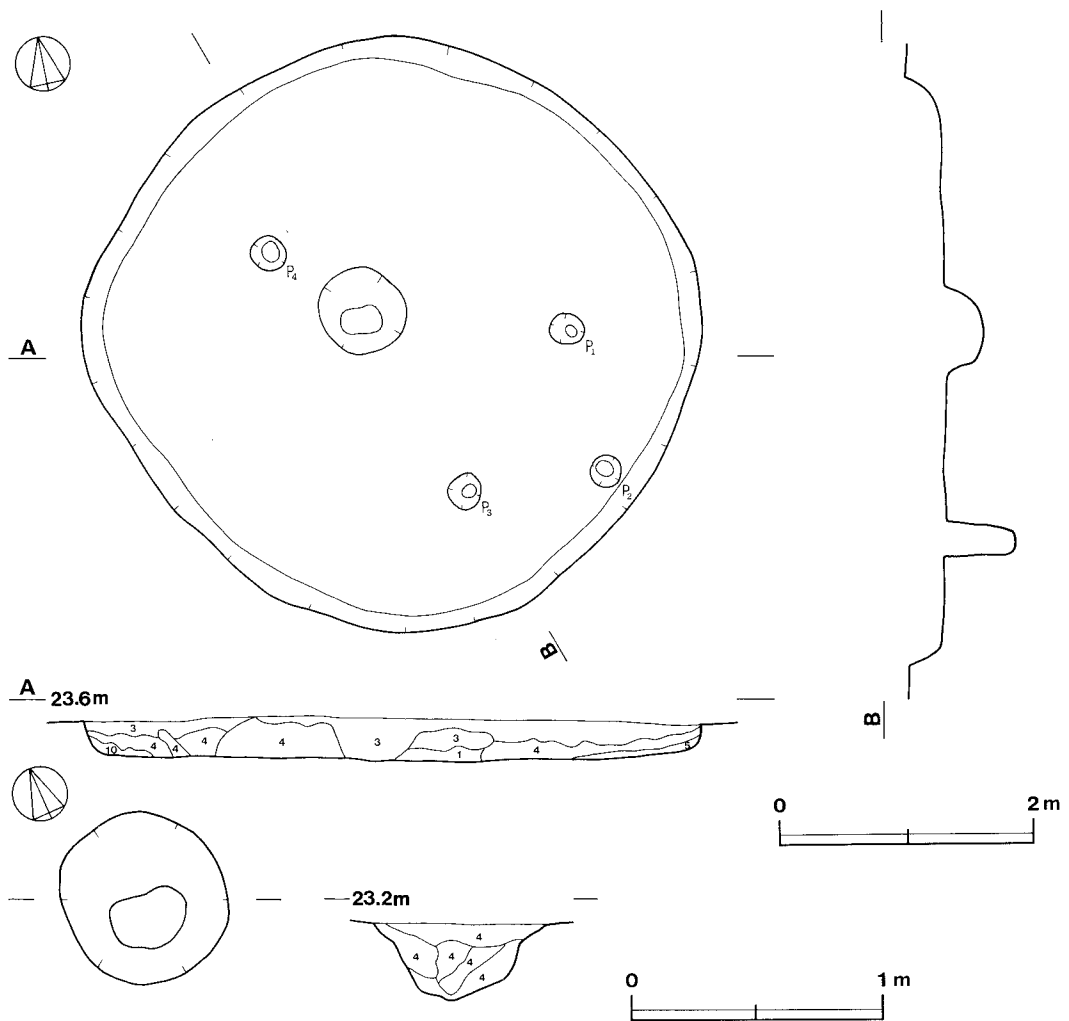
本跡の北西側約 55 m に第 5 号住居跡が存在している。

平面形は、長径 4.64 m、短径 4.60 m の略円形を呈し、長径方向は N-40°-W を指している。

壁は、ソフトロームで外傾して立ちあがるが、南・南東側の一部では直立気味である。壁高は、西側でやや低く 23 ~ 24 cm、南東側で高く 30 cm を測るが、全体としては 25 ~ 27 cm 程度である。

床は、全体に締まりの良いロームで硬く、処々にロームブロックの突出があり部分的に凹凸がみられるが、全体としてはほぼ平坦である。床面は、炉周辺の中央部から南東側が硬く踏みしめられており、特に炉の南側の壁寄りには良く踏み締まり、しかもやや高まりを有しているので、出入口部の可能性がある。

ピットは、P₁ ~ P₄ の 4 か所が検出されたが、そのうち P₁・P₃・P₄ が径 25 ~ 30 cm、深さ 55 ~ 58 cm



第 116 図 第 50 号住居跡実測図

と揃っており、いずれも暗褐色土が詰まっており、支柱穴と思われる。P₂は南東壁際に位置し、径24～26cm、深さ29cmを測り、覆土が褐色土であった。しかし、P₁・P₃・P₄だけでは柱穴配置が不規則のため、再三にわたり床面を調査したが他の柱穴は見出せなかった。特異な上屋構造を考えるべきかもしれない。

炉は、中央やや北西寄りに位置する地床炉で、長径69cm、短径65cmの略円形を呈し、炉床がやや南側に寄っていて、最深部で31cmとかなり深く掘り込まれている。断面形は播鉢状を呈している。炉壁、炉床は良く焼けて赤変しており、ブロック状を呈する。炉内にはローム粒子、焼土粒子を少量含む締まった褐色土が堆積しており、焼土はごく少ない。

覆土は、中央部が攪乱により乱れているが、基本的にはレンズ状堆積をなし、自然堆積と考えられる。土層の主体は褐色土で、ローム粒子を中量から少量、焼土粒子、炭化粒子を少量含む締まっており硬い。

遺物は、比較的小片が多く南東側にややまとまって覆土中から出土している。北・西側ではごく少量である。土器片は1,374点と多量であり、この中には21点の土師器、須恵器片が混入している。南東側の壁寄りからチャート製の片脚を欠く石鏃と磨製石斧各1点ずつが出土している。他には土器片錘77点、土製円板4点があり、土器片錘の大量出土には注目させられる。

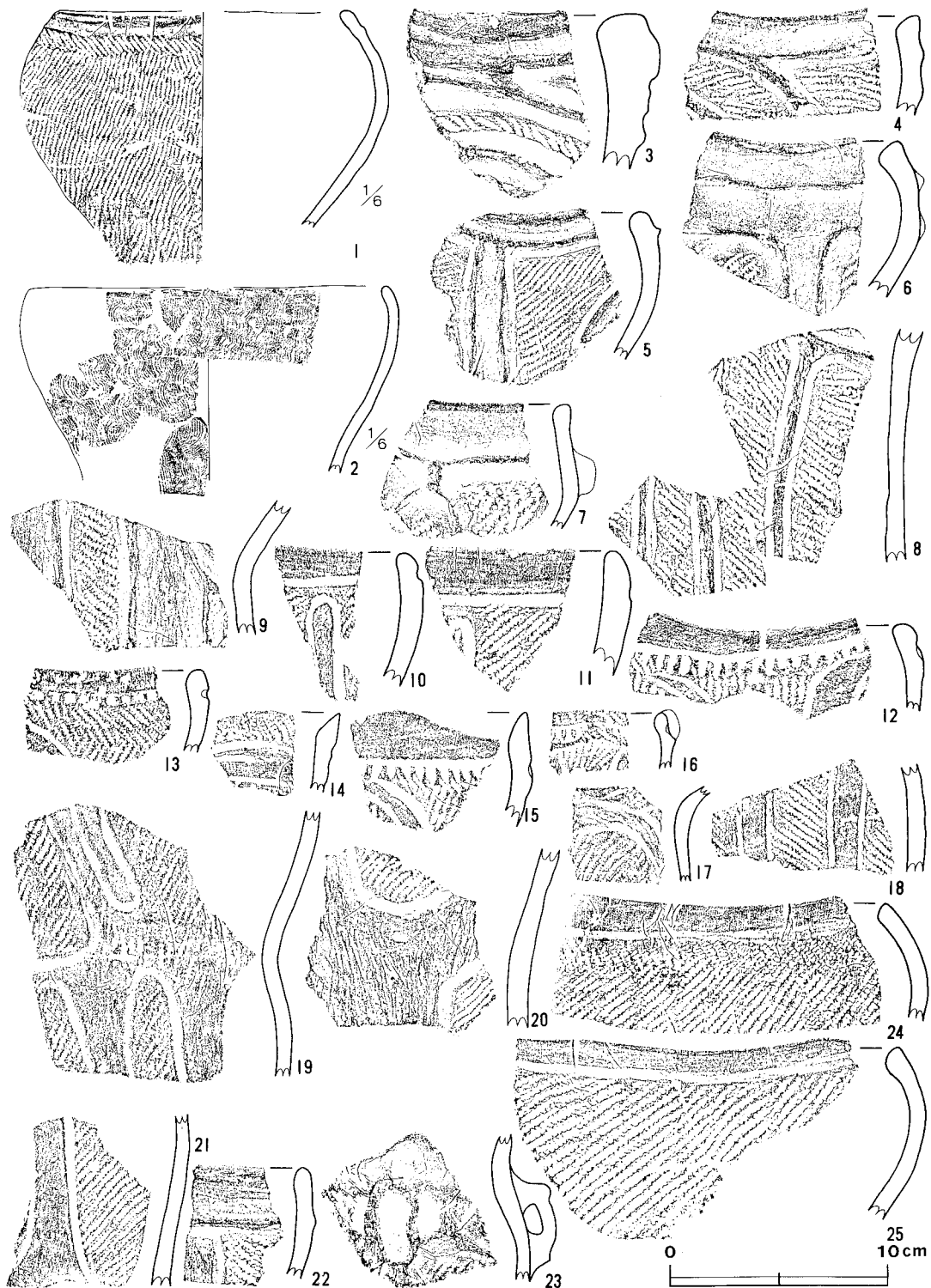
本跡の時期は、覆土中から出土した土器から判断すれば加曾利EⅢ式期と考えられる。

第50号住居跡出土土器（第117～118図1～46）

第117図1は、南側の覆土下位から逆位でまとまって出土した6点が接合した口縁部が強く内湾する鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁直下に幅の広い1条の凹線を巡らし、以下全面に単節縄文RLを施文する。口縁直下の一段は横位に、以下は縦位、斜位に回転している。内面は横ナデが施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。推定口径26.5cm、現存高20.5cmである。

2は、南側の覆土下位から正位で出土した破片を中心に16点が接合したもので、口縁部が内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。口縁直下から櫛歯状施文具による縦位の波状文が垂下している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。推定口径31.5cm、現存高17.7cmである。

3～9は、第Ⅱ類土器である。3～7が口縁部片、8・9が胴部片である。3はきわめて厚手で、隆線の断面形が丸味を帯びている。丸味を帯びる隆線は4・8にもみられる。隆線の断面形が三角形を呈するものは5～7・9にみられ、7には小突起が付されている。隆線のモチーフは曲線的なもの（3・4・6・7）が目立つが、8・9のような胴部片では縦長の区画文が多い。9は屈曲が著しい。10～21は、第Ⅲ類に分類される。10～16は口縁部片、17～21が胴部片である。10・11は、口縁直下に1条の沈線を巡らし、以下に細長い逆U字状の磨消帯を垂下させている。12・15は、施文の共通性から同一個体と判断されるが接合はできない。ゆるい波状縁を呈し、口縁直下に沈線と刺突列を巡らし、以下に2本組の沈線で曲線的モチーフを描き、沈線間を磨消している。15の口唇部断面は内削ぎ状を呈し、先端が尖っている。13は口縁直下に刺突列を巡らし、以下に曲線的磨消帯が施されている。14は、口縁部に縄文帯を有し、以下に沈線を施しているが詳しいモチーフは不明である。口唇部断面が鋭く内削ぎされ、15以上に尖っている。16はごく小形の土器の口縁部片で、口縁直下に縄文帯と刺突列を有し、小突起も合わせもっており、以下に曲線的磨消帯が加えられているが、小片のため不詳である。17・19・20はくびれ部を含



第 117 图 第 50 号住居跡出土土器実測图・拓影图(1)

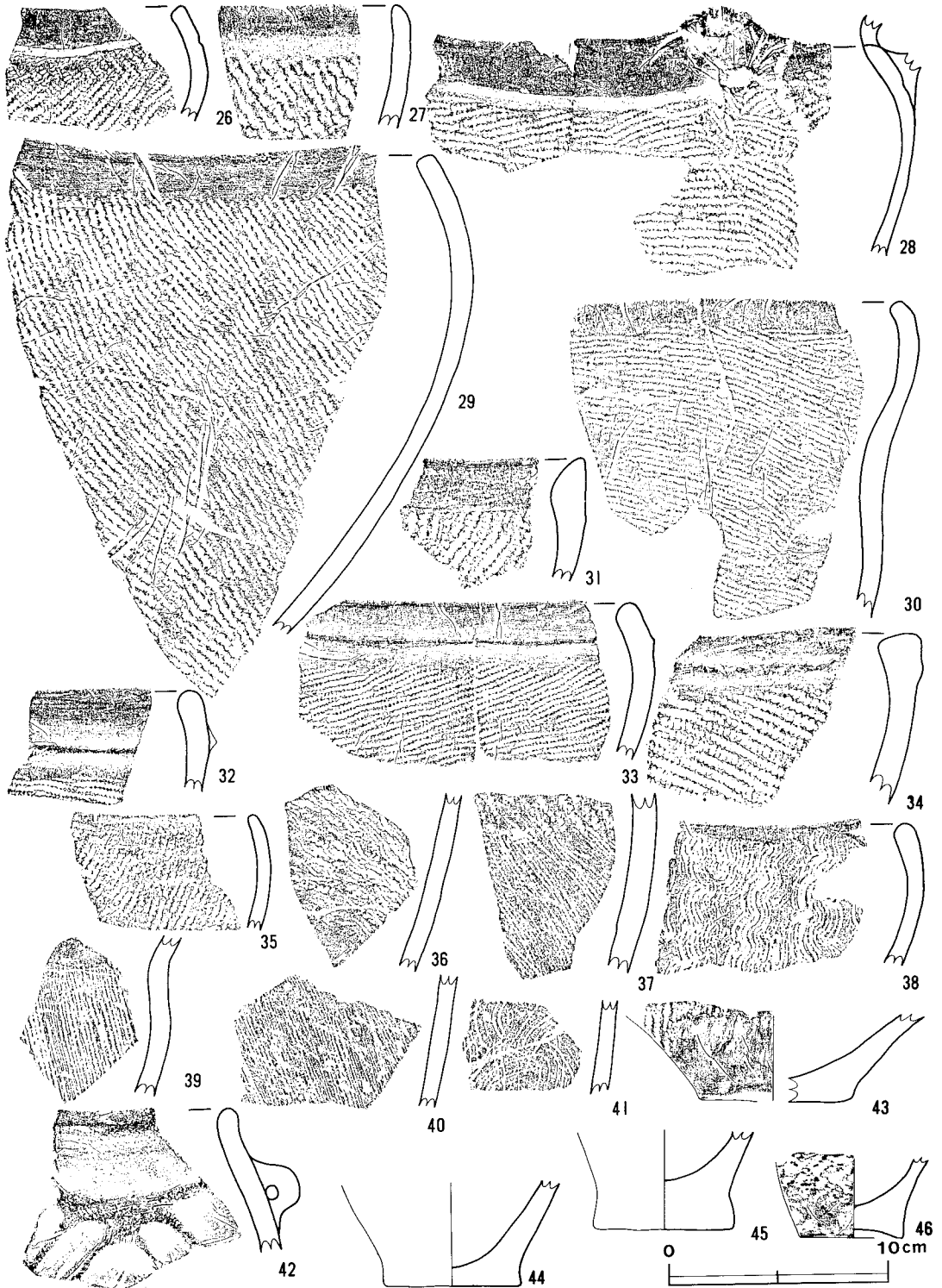
む破片で、U字状、逆U字状のモチーフが接している。19には細長い磨消帯と区画内縄文充填手法の両者が併用されており、興味深い。20は縄文帯以外は縦位に磨かれている。22は、口縁部無文帯を断面三角形の隆線で区画し、以下に直線的磨消帯を有する。23は、橋状把手を有する口辺部片で、把手には縄文は施されていない。24～28は、第V類a種の口縁部片で内湾の著しいものが多いが、27は著しくない。27は凹線状の区画を有する。26を除いて沈線区画は明瞭ではない。28には無文帯をまたぐように橋状把手が付されていたが、惜しくも欠損している。29～31は、第V類c種で無文帯の幅は1～2cmである。29は内湾の著しい器形、30は内湾し、胴部で少しくびれる器形を呈し、前者は単節LR、後者は無節Lが施されている。31は、口唇部内面が肥厚している。32～34は第V類e種に属し、断面三角形の微隆線で区画されている。32だけは貼り付け手法よることが明確であるが、他は不明である。33はナゾリによるものかもしれない。34の口縁部は肥厚している。35・36は縄文のみの破片である。35は第VI類a種で、薄手である。36は胴部片で、撚りがくずれたような縄文が施されている。37は縄文と条線文が併用されている胴部片である。38～41は条線文が施されており、38が口縁部片、39が口辺部片、40・41が胴部片である。38は第VI類b種に該当し、縦位波状に施されている。39はくびれが著しく、破片の上端部に無文帯が残されている。40は縦位で密に、41は弧状に施文されている。42は第VII類に属し、口縁部無文帯を1条の隆線で区画し、隆線の一部に横位の貫通孔が穿たれた小突起を有している。

43は、西側の覆土中から出土した破片5点が接合したもので、鉢形土器の底部片である。外面に単節縄文LRが施され、底面から2cmほどには縦ナデが施され、無文のまま残されている。内面も縦ナデが施されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい褐色を呈する。底径7.0cm、現存高4.0cmである。

44は、中央やや東寄りの覆土中から出土した破片2点が接合した深鉢形土器の底部片で、内外面とも丁寧な横ナデが施されている。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が褐灰色を呈する。底径6.2cm、現存高4.9cmである。

45は、中央やや南寄りの覆土中から逆位で出土した無文・厚手の底部片である。内外面ともナデが施され、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が橙色、内面が黒褐色を呈する。底径6.6cm、現存高4.6cmである。

46は、中央やや東寄りの覆土中から出土した上げ底を呈する小形土器の底部片で、外面上半には単節縄文RLが縦位回転で施文され、底面近くの1.5cmほどと内面は縦ナデが施されているが、外面は丁寧で光沢を発する程であり、内面は剥落がみられ雑である。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が灰褐色、内面がにぶい褐色を呈する。底径4.8cm、現存高3.7cmである。



第 118 图 第 50 号住居跡出土土器实测图·拓影图(2)

第3節 土坑と出土土器

土坑については、今回報告分は縄文時代に属するものおよび所産時期不明のものを扱ったため、明らかに古墳時代以降に属するものは省いてある。そのため土坑一覧表についても欠番がある。

今回報告分の土坑は3区で397基、4区で100基であるが、そのうち形状や出土遺物などに特色が認められる土坑については個別に解説をおこない、その他については一覧表にまとめた。

3 区

第28号土坑（第119図）

本坑は、調査区の北西側のK2e7・f7区にかけて検出された円筒形土坑で、長径145cm、短径132cmの不整形円形を呈し、118cm掘り込まれている。壁はロームでほぼ直立気味に立ちあがるが、北西側ではやや外傾し、南西側では凸凹している。底面はほぼ平坦で硬いが、南側にかけてやや傾斜している。また、本坑の北西側に第37号土坑が重複しているが、新旧関係は覆土の状態からみて本坑の方が古い。

覆土は北西側を除いて所謂レンズ状堆積を示し、中央部から下位にかけては黒色土、黒褐色土、壁寄りには暗褐色土が自然堆積し、いずれもローム粒子、炭化粒子、焼土子を含み壁寄りの土層は締まっているが、その他は締まりが弱い。

遺物は、土器片が335点出土し、そのほかにアカニシの殻軸片が1点北側の覆土上位、確認面から32cm下で検出されている。土器片は、確認面から50cm下までを上層とし、以下を下層として取り上げたが特に差異はなく、上層と下層で接合した破片もある。土器片の大半は堀之内I式土器で、本坑の時期も堀之内I式期と考えられる。

第28号土坑出土土器（第146図1～31）

第146図1・2は、曲線的な磨消縄文が施される胴部片で、称名寺式土器である。3～12は、縄文地文上に沈線文が描かれるもので、3～5が口縁部片、6～12が胴部片である。3は波頂部片で、円孔が穿たれている。沈線によるモチーフは蕨手文（7）、蛇行沈線文（9）や曲線文が描かれるもの（4・8）などがある。10の沈線はきわめて太く、5は小形土器で、沈線が細い。11は鉢形土器の胴下半部片で、横位に展開するモチーフが特徴となっている。13は、口縁直下に1条の沈線を巡らし、以下に縄文を施している。14～20は、縄文だけが施されているもので、14～19が口縁部片、20が胴部片である。14～16は口縁部無文帯を1～2cm程残し、以下に縄文を施している。17・18は無文帯の幅が5mm程度と狭い。19は無文帯を残さず、全面に施されている。21は縄文地文上に縦位の密な沈線文が施されている胴部片である。22～27は、無文地に条線文が施されているもので、22・23が口縁部片、24～27が胴部片である。22は波頂部片で、盲孔がみられる。23は斜格子目状に施されている。胴部片の条線文は、いずれも縦位に施されており、24・27はやや粗く、25は密に、26は断続的に施文されている。28～30は無文の口縁部片で、30は山形の波頂部を有し、盲孔を4孔ほど付している。

31は、北側の覆土上位から出土した小形深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片で、外面にはヘラ状施文具による細い沈線が3～4条垂下し、沈線間に綾杉状の沈線が充填されている。底面から4cmほどの内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が黒褐色を呈する。底径8.2cm、現存高7.7cmである。

第 45 号土坑 (第 120 図)

本坑は、調査区の北側の K 2_{h3}区を中心とした位置に検出された円筒形土坑で、長形 168 cm、短径 145 cm の不整形円形を呈し、88 cm 掘り込まれている。壁はロームでやや外傾して立ちあがり、底面は平坦で硬い。

覆土は所謂レンズ状堆積を示すが、覆土上位の確認面から 15～20 cm 下った位置で厚さ 8～15 cm の焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む締まりの弱い暗赤褐色土、にぶい赤褐色土が凹レンズ状に細長く堆積しており、以下にはローム粒子を多量に含む暗褐色土、極暗褐色土が、そして底面近くと壁際にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。本坑の壁や底面には焼けた箇所はなく、焼土は一時的に投げ込まれたものと判断される。このことから本坑は、下位が自然堆積、上位が人為堆積と考えられる。

遺物は、覆土の南西側の下層から称名寺Ⅱ式土器の大破片などが出土したほか、土器片 196 点が出土している。他に土器片錘 2 点がある。出土土器の主体は、称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式期にかけてのものである。本坑の時期も該期と判断される。

第 45 号住居跡出土土器 (第 147 図 1～13)

第 147 図 1 は、口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し、以下に縄文を施す口縁部片で、微隆線の直上に 1 列の円形刺突文を付している。2 は、口縁部無文帯下に 2 条の細い沈線を巡らし、以下に縄文を施している薄手の口縁部片である。3 は、薄手無文の口縁部片である。4 は、口辺部片で、無文帯を貼付隆線で区画し、以下に条線文を山形に施している。5 は、縄文のみの薄手の胴部片である。6 は、刺突文だけが施されている口縁部片である。7・8 は、沈線により J 字状、逆 J 字状文が描かれる胴部片で、同一個体の可能性が高い。9 は、胴部の小片で 2 条の沈線間に刺突文が充填されている。10～13 は、沈線による曲線的モチーフ間に爪形状の刺突文が施されている胴部片で、施文の共通性から同一個体と思われる。

第 56 号土坑 (第 120 図)

本坑は、調査区の北側の K 2_{h5}区に検出された不整形円形の土坑で、長径 123 cm、短径 95 cm を測り、最深部で 67 cm 掘り込まれている。壁はロームで南西側がほぼ直立する以外は外傾して立ちあがり、底面はほぼ平坦であるが中央部が少し凹んでいる。

覆土は、基本的に上下の 2 層に分れ、上位には東側を中心に砂粒、粘土を含む締まった黒褐色、暗褐色土が、下位にはローム粒子多量、炭化粒子、焼土粒子を中量含む良く締まった黒褐色土が堆積している。

遺物は、北側の覆土上位から条線文が施された大破片が出土したほか土器片 107 点が出土しており、出土土器の主体は堀之内Ⅰ式期のものであり、本坑の時期は堀之内Ⅰ式期と考えられる。

第 56 号土坑出土土器 (第 147 図 14～26)

第 147 図 14 は、口唇部上面が肥厚する口縁部片で、口唇部上面に X 字状の隆帯と 3 条の沈線が施され、外面には細い沈線による曲線的区画内に刺突文が充填されている。15 は、波状を呈する口縁部片で、波頂部に円孔を有し、沈線と刺突により装飾されている。波頂部から垂下する刺突列は目につく。16 は、縄文地文上に沈線文が描かれる口縁部片で、補修孔が認められる。17 は、縦位羽状の縄文が施されている胴部片である。18～24 は、条線文が施されているもので、24 以外は口縁部片である。18・19 は横ナデの後に縦位の鋭い沈線に近い条線文を口縁直下から垂下させている。20～22・24 は縦位波状に描かれており、施文の共通性からみて同一個体と思われる。25 は、細い沈線による斜格子目文が描かれる胴部

片で、26は、無文の口縁部片である。26にみられる横ナデは、18・19に共通し、特に19とは口唇部断面形が尖る形状も似ている。

第58号土坑（第120図）

本坑は、調査区の北側のK2f9区に検出された不整形の浅い土坑で、長径122cm、短径110cmを測り、最深部で26cm掘り込まれている。壁はロームでゆるやかに外傾して立ちあがり、底面はほぼ平坦であるが、西側にむけて徐々に低くなる。

覆土は、中央部が極暗褐色土、北側壁寄りが暗褐色土、南側壁寄りが褐色土で、前2者は炭化粒子を少量含み、後者はローム粒子を多量に含み締まっている。本坑の底面には南側と北東側に小さな貝ブロックが2か所認められた。前者aブロックは13×8cmの楕円形を呈し、厚さ3cmでハマグリだけである。後者bブロックは、最大長31cm、最大幅20cmの不定形を呈し、厚さ5～6cmである。ハマグリを主にサルボウ、シオフキ、アカニシを混じている。

土器片は20点と少なく、称名寺式土器片などが含まれている。本坑の時期は、明確ではないが後期前葉と考えられる。

第58号土坑出土土器（第148図1）

第148図1は、磨消縄文を特色とする称名寺式土器の口縁部片で、口唇部内面が著しく突出している。

第62号土坑（第121図）

本坑は、調査区の北側のK2f9区に検出された不整形の浅い土坑で、長径107cm、短径106cmを測り、北西側の最深部で33～34cm掘り込まれている。西壁際に長径33cm、短径24cm、深さ13cmの小ピットが穿たれている。他に北側にも浅い凹みがある。壁は、ロームで緩く外傾しており、底部は凸凹している。

覆土は、自然堆積を呈し、中央部が黒褐色土で壁にむかって暗褐色土、褐色土が順に堆積しており、ローム粒子が壁際ほど多くなる。暗褐色土は炭化粒子を少量含んでおり、締まっている。

土器片は35点と少ないが、その中では称名寺式土器が多い。本坑の時期は称名寺式期と考えられる。

第62号土坑出土土器（第148図2～11）

第148図2～7は、曲線的な磨消縄文を主とする土器で、2・3が口縁部片、4～7が胴部片である。2は口唇部内面が突出するくせを有するが、3には認められない。2と4～7は、施文されている沈線や縄文が類似しており、同一個体の可能性が高い。比較的薄手で、屈曲の強い器形を呈している。8は、口縁部の小片で、口唇部上面に刻み目を付し、若干の無文帯下の貼付隆線上に斜位の刻み目を加えている。9は、薄手の縄文のみの胴部片である。10は、縦位の条線文が密に施されている胴部片で、条線文上に×状の沈線が加えられている。

11は、南側の覆土中から出土した破片11点が接合した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片で、他に同一個体の破片6点がある。外面には多截竹管状施文具による縦位の条線文が密に施され、底面から5～6cmほどと内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が赤褐色を呈する。推定口径11.2cm、現存高13.4cmである。

第 68 号土坑 (第 121 図)

本坑は、調査区の北側の K 2g₀ 区を中心とした位置に検出された円筒形土坑で、長径 144 cm、短径 130 cm の不整形円形を呈し、82 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面はほぼ平坦であるが、北側にむかってやや傾いている。本坑の北側の上部を第 100 号土坑に切られている。覆土は、中央部が極暗褐色土、壁際が暗褐色土で、共にローム粒子、炭化粒子を含み締まっている。

土器片は 91 点とやや少ないが、中央部の覆土中位から下位にかけてややまとまって出土している。この中には片口状を呈する土製品 1 点も含まれている。本坑の時期は、出土土器から判断すれば加曾利 E III 式期と考えられる。

第 68 号土坑出土土器 (第 148 図 12 ~ 19)

第 148 図 12・13 は、隆線による口縁部文様帯を有する口縁部片で、12 は波頂部片で、口唇部先端が尖る。13 は口縁直下に凹線を巡らしている。14・15 は、微隆線による曲線の区画内に縄文が充填されている胴部片である。16 は、口縁部無文帯を断面三角形の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。17 は、胴下半部の破片で、縦走る縄文上に沈線が垂下している。18 は、縄文のみの胴部片である。19 は、薄手の口縁部片で、無文帯を浅い 1 条の沈線で区画している。

第 73 号土坑 (第 121 図)

本坑は、調査区の北側の K 2g₈ 区を中心とした位置に検出された不整形楕円形を呈する土坑で、長径 157 cm、短径 130 cm を測り、南側の最深部で 47 cm 掘り込まれている。壁はロームで西側が外傾するほかはほぼ直立して立ちあがる。底面はほぼ平坦であるが南側にむけて傾いている。

覆土は、自然堆積の所謂レンズ状を呈し、中央部に極暗褐色土、黒褐色土、壁寄りに暗褐色土が堆積しており、上位にはローム粒子、炭化粒子を少量含み、下位にはローム粒子を多量に含む締まった土層が主となっている。本坑の中央やや西寄りの覆土上面から径 20 cm、厚さ 4 cm ほどの風化が著しい小貝ブロックが検出された。ハマグリ、サルボウを含んでいる。

土器片は 78 点と少ないが、貝ブロックの北側にややまとまっており、称名寺 I・II 式土器が主となっている。本坑の時期は、出土土器から判断すれば称名寺式期と考えられる。

第 73 号土坑出土土器 (第 148 図 20 ~ 27)

第 148 図 20・21 は、磨消縄文を特色とする土器で、20 は口縁部片で、楕円形の杵状文がみられる。21 は胴部片である。22 は、縄文のみの厚手の胴部片である。23 は、沈線間に刺突文が充填されている胴部の小片である。24 は、小さな突起を有する無文の口縁部片で、下端に 1 条の沈線が巡っている。25 は、厚手の胴部片で、縦位の条線文が施されている。26 は、ごく薄手の胴部の小片で、渦巻文が描かれている。27 は、無文の口縁部片で、口唇部上面が肥厚し、沈線で渦巻文が付けられている。

第 84 号土坑 (第 122 図)

本坑は、調査区の北側の K 2j₇ 区を中心とした位置に検出された不整形円形の浅い土坑で、本坑の北西側に深鉢形土器の胴部が逆位に埋設されており、これを第 1 号埋甕遺構とした。埋設土器および器形復元できた無文の小形土器については埋甕遺構の項で解説している。本坑は、長径 90 cm、短径 86 cm で、20

cm 掘り込まれている。

覆土はローム粒子・炭化粒子を含む締まった極暗褐色土、暗褐色土が堆積している。

土器は前記の2個体を含めて55点出土しており、主体は堀之内Ⅰ式期のものである。本坑の時期は、埋設土器およびその他の土器から判断して堀之内Ⅰ式期と考えられる。

第84号土坑出土土器（第149図1～4）

第149図1は、口縁直下に1条の沈線が巡る以外は無文の口縁部片である。2は、沈線区画内に刺突文が充填されている胴部片である。3は、口縁直下に1条の沈線が施され、以下に縄文が施されている。4は、縄文地文上に沈線が施されている厚手の胴部片である。

第88号土坑（第122図）

本坑は、調査区の北側のK2h₀区に位置し、第1号住居跡により北・東側の上部の大部分を削り取られている。北側に半円形状のテラス部を有する不整円形を呈する土坑で、テラス部の最大長132cm、最大幅54cmで、深さ12～20cmを測る。本体は長径126cm、短径118cmで最深部で69cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は北西側にむけてやや傾いている。

覆土は、上位から下位にかけて黒褐色、極暗褐色、暗褐色を呈し、いずれもローム粒子、炭化粒子を少量含み締まっている。テラス部の下位の覆土は暗褐色、褐色を呈し粘性、締まりとも強い。

土器は209点とやや多量に出土し、中央やや北寄りの覆土下位や南西壁寄りの覆土中位などからややまとまって出土している。他に土器片錘2点がある。出土土器の主体は加曾利EⅢ式土器であり、本坑の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

第88号土坑出土土器（第149図5～19）

第149図5～7は、第Ⅰ類土器に属する。5は大形土器の口辺部片で、隆線による楕円区画内に縄文が充填されている。6・7は直線的磨消帯が垂下する胴部片で、7は底部近くである。8は、第Ⅱ類の胴部の小片である。9は、隆線と沈線による施文が併存する胴部片で、断面三角形の隆線による曲線的モチーフと沈線による楕円形の磨消帯間に縄文が充填されており、器形も不明である。10は、ゆるい波状を呈する口縁部片で、沈線間に単節縄文RLが横位回転で施文されている。11～14は、縄文が施文の主体となる土器である。11は口縁部無文帯を1条の凹線で区画し、以下に縄文を施すもので、第Ⅴ類a種に該当する。12は第Ⅴ類e種、13は同c種に相当する。12はナズリにより微隆線が形成されている。14は縄文のみの胴部片である。15～17は、曲線的な条線文が施されている胴部片で、15はくびれが強い。18は、無文の口縁部片で、外面に段が認められる。

19は、南西側の覆土中位から逆位で出土した無文の底部片で、内外面とも縦ナデが施されている。胎土は砂粒および微量の小礫を含み、焼成は良好で、色調は外面が褐色、内面がにぶい褐色を呈している。底径6.6cm、現存高5.7cmである。

第92号土坑（第122図）

本坑は、調査区の北側のK2j₃区に位置し、第95・120・121号土坑および第1号性格不明遺構と重複しており、正確な形状・規模は不明瞭であるが、推定では長径124cm、短径90cmの不整楕円形を呈す

るものと思われ、最深部で33 cm 掘り込まれている。本坑は、第120号土坑に切られている。壁は南・東側が残存し、ロームで外傾して立ちあがり、底面はやや凹凸がある。

覆土は、上下の2層に分れ、上位は暗褐色土、下位は褐色土でいずれもローム粒子、炭化粒子を含み、上位は締まりが弱く、下位は締まっている。

土器は278点とやや多量であるが、重複する第120号土坑に属する資料も混在している。しかし、出土土器の主体は堀之内I式期のものであり、本坑の時期も堀之内I式期と考えられる。

第92号土坑出土土器（第151図1～30）

第151図1は、南側の覆土中から出土した無文の鉢形土器の破片で、外面は斜位のナデ、内面はナデが施されている。口唇部は欠損したものを再生した擬口縁にもみえるが、ここでは鉢形土器として図示した。胎土は砂粒、スコリアを含み、焼成は普通で、色調は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈する。推定口径9.8 cm、推定底径5.5 cm、器高8.5 cmである。

2～7は、縄文地文上に沈線文が施される口縁部片で、横位（3・6・7）、縦位（5・7）に施文される土器が主体となるが、4のように同心円文が描かれる例もある。3には刺突を加えた貼付文が認められ、2には口縁直下の沈線の下に刺突列が施されている。4以外の沈線はやや太い。7の縄文は不鮮明である。8～12は、縄文のみが施されており、12以外は口縁部片である。8・9は口縁部がやや内湾し、10・11は外傾する。9は波状を呈し、その他は平縁で、10の口唇部は角頭状を呈する。13は、粗い縄文地文に雑な斜格子目文が細い沈線で描かれている胴部片である。14・15は、口縁直下に1条の沈線が施される以外は無文の口縁部片で、14の沈線は太く明瞭で、15は細く不明瞭である。16は、口縁直下に1条の沈線を巡らし、以下に条線文を縦位に施している。17～22は、条線文だけが施されるもので、17～20が口縁部片、21・22が胴部片である。17～21は曲線的に施され、口縁部にわずかに無文帯を残している。22は横位のナデの後に斜めに施文している。23は、薄手の口縁部片で、細隆線だけで幾何学的モチーフが描かれている。24～28は、幾何学的磨消縄文が器面に展開されるもので、24以外は胴部片である。24の口唇部内面はわずかに凹み、特徴がある。いずれも堀之内II式土器に比定される。24～27は施文が共通しており、同一個体と判断される。28はやや厚手である。29・30は無文の口縁部片である。30は上半部が横ナデ、下半部が縦ナデが施されている。

第95号土坑（第122図）

本坑は、調査区の北側のK2j3区に位置し、北側で第121号土坑、西側で第1号性格不明遺構と重複している。本坑は、第121号土坑に切られているが、他遺構との新旧関係は不明である。正確な平面形は不明瞭であるが、推定では長径126 cm、短径99 cmの楕円形を呈し、最深部で29 cm 掘り込まれている。壁は南側が残存し、ほぼ外傾して立ちあがっている。底面は北・西方向に傾いている。

覆土は褐色土でローム粒子、炭化粒子を含んでいる。

土器は646点ときわめて多量であるが、重複する他遺構に属するものも多く混入していると思われる。他に土器片錘1点、土製円板1点が出土している。出土土器の主体は堀之内I式期のものであり、本坑の時期も堀之内I式期と考えられる。

第 95 号土坑出土土器（第 149 図 20～29，第 150 図 1～30）

第 149 図 20・21 は、口縁部無文帯下に 1 条の押圧が加えられた隆線が巡るもので、21 には貼付隆帯や曲線的な条線文が施されている。22～第 150 図 9 は、縄文地文上に沈線文が施される土器群で、22～第 150 図 2 は口縁部片、3～9 が胴部片である。22・23 は太い沈線で描かれており、22 には楕円形の孔と刺突が付加され、口唇部上面に円形刺突が並んでいる。24・25・27 にも刺突文が口縁直下に施されている。沈線によるモチーフには斜行文（25・1・5・6・9）、弧状文（22・24・27・4）、蛇行文（3）、渦巻ないし同心円文（29・7・8）が主に認められるが、横位（26・29・2・9）、縦位（28・5・6）などもある。26 は、口縁直下に突帯状の隆線が 1 条巡り、以下に縄文が施されている。沈線文はやや太めのもの（27・3～7）と細めのもの（25・29・1・2・8・9）などに分けられる。29・1 は内面に凹みが認められ、薄手で新しい様相がうかがえる。10～14 は、縄文のみが施されている口縁部片で、14 は約 4 cm ほどの幅の広い無文帯を有し、以下に縄文を施している。他は口縁直下から縄文が施されている。15 は、口縁直下に 6 条の沈線が巡らされている口縁部片である。16・17 は、斜格子目文が施されている土器で、16 が口縁部片で、17 は胴部片である。18 は、胴部の小片で細い沈線と刺突文が施されている。19 は、口縁部無文帯に 1 条の沈線を巡らし、以下に条線文が施されている。20～27 は、条線文が施されている土器で、20・21 は口縁部片、22～27 は胴部片である。条線文は多截竹管状施文具によるもの（20・22～25）が目立ち、21・26・27 は曲線文、半円弧状文が描かれている。縦位の施文が多く、22 は三角形に描かれている。28 は、無文の口縁部片である。29・30 は、幾何学的な磨消縄文が施される胴部片で堀之内Ⅱ式土器に比定される。

第 102 号土坑（第 123 図）

本坑は、調査区の北側の K2j2 区に位置し、第 107・115 号土坑を切り、第 101・106 号土坑と隣接している。平面形は長径 154 cm、短径 122 cm の不整楕円形を呈し、最深部で 88 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面はやや凹凸を有し、中央部が凹レンズ状に凹む。

覆土は上下の 2 層に分れ、上位は暗褐色土、下位が褐色土でレンズ状に自然堆積している。いずれにもローム粒子を少量、炭化粒子、焼土粒子を微量含み、締まっている。

土器は 279 点出土し、そのうちの 1 例（第 152 図 15）は縄文だけが施文されている胴部片であるが、第 106 号土坑出土土器と接合している。出土土器の主体は堀之内Ⅰ式土器であるが、加曾利Ⅲ式土器も若干みられる。他には有孔円板の半欠品が 1 点出土している。本坑の時期は、堀之内Ⅰ式期と考えられる。

第 102 号土坑出土土器（第 152 図 1～21）

第 152 図 1 は、口辺部片で押圧を加えた隆帯が巡り、以下に縄文が施される。2～4 は、縄文地文上に沈線が施されている胴部片で、2 は多条化した沈線で同心円文と斜行文が施されている。3・4 は底部近くの破片で、縦ナデが認められる。5・6 は、縄文地文上に 2 条の沈線を巡らす口縁部片で、5 は外反し、6 は内湾している。7 は薄手の胴部片で、半截竹管による横位・縦位の沈線文と同心円文が施されている。8～16 は、縄文だけが施されている土器で、15・16 を除いて口縁部片である。8～10 は外反が著しく、口唇直下の内面に 1 条の沈線を巡らしており、同一個体と判断される。11 は山形の波頂部下に無文帯を有し、以下に無節縄文を施しているが、上端を 1 条の結節回転文で区画している。12・13 は口唇部が角

頭状を呈し、全面に縄文が施されている。14は外反する幅広い無文帯下に縄文が認められる。15・16は整形の悪い破片で、縄文が疎らに施文されている。17は、条線文が横位・斜位に施された口縁部片である。18～21は、無文の口縁部片で、19・20の整形は良いが、21は横位の整形痕が残り、雑である。18は薄手で小形土器と思われる。

第106号土坑（第123図）

本坑は、調査区の北側のK2j₂区を中心とした位置に検出され、第115号土坑の中央部を切り、南側で第102号土坑と隣接している。平面形は長径131cm、短径116cmの不整形円形を呈し、最深部で102cm掘り込まれている。壁はロームでゆるやかに外傾しており、底面は東側はほぼ平坦であるが、南西側からは急に落ち込み、最深部はピット状を呈し、33cmを測る。

覆土は、所謂レンズ状堆積を示し、中央部に暗褐色土、黒褐色土が、壁際に褐色土が堆積しているが、暗褐色土と黒褐色土の間に北西側より投げ込まれたような明赤褐色の焼土粒子を非常に多く含む土層が帯状に認められる。これ以外の土層にはローム粒子、炭化粒子、焼土粒子が少量含まれている。

土器は437点と多く、本坑の北東側、西側に密集するように出土しており、南側にもまとまりが認められる。この中には第152図22のように第115号土坑出土土器と接合した資料もある。他には土器片錘1点が出土している。本坑出土土器で注目すべきものは第153図1で、西側寄りの土器集中ブロックの中央部から内面を上にし、口縁を北東方向にむけて出土した横走撚糸文を有する鉢形土器で、後期前葉の土器としては特異な施文である。本坑の時期は、出土土器の主体が堀之内I式土器であり、遺構の重複からみても矛盾がないことから堀之内I式期と考えられる。

第106号土坑出土土器（第152図22、第153図1～24、第154図1～5）

第152図22は、中央やや北東寄りの遺物密集ブロックの中央から正立して出土した破片を中心に6点が接合した直線的に外傾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。胴部から口縁部にむけて徐々に器厚を減ずるが、全体に凹凸が著しく、作りが粗雑である。外面上半には引っ掻き傷状の施文が認められ、下半と内面には縦ナデが施されているが、内面の方が粗い。また、図示していない部分の口縁から3cmほど下には径5mmほどの補修孔が内側から穿たれている。胎土は粗砂、小礫を含み、焼成は良好で、色調は外面が褐色、内面がにぶい褐色を呈する。推定口径21.8cm、現存高17.0cmである。

第153図1は、西側の遺物密集ブロックの北寄りから口縁部を北東方向にむけた逆位の状態で出土した有段の鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。頸部に幅3.5～4cmほどの無文帯を有し、口縁部と胴部にそれぞれ横走、斜走する撚糸文Rが密に施文されている。頸部の一部に黒斑があり、炭化物が付着している。内面は横ナデが施されている。胎土に石英、雲母などによる微砂を多量に含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。推定口径24.8cm、現存高16.3cmである。

2～14は、縄文地文上に沈線文が描かれるもので、2～5、8～13が口縁部片、6・7・14が胴部片である。2～7の沈線は太く描かれ、8～14は細く3条以上の単位で描かれるものが多い。8・9は波状縁を呈し、波頂部から垂下する隆帯で口縁部文様帯が区画される。8の隆帯には押圧が、9の隆帯には斜位の刻み目が加えられており、9は外反が著しい。11～13は横位と斜位の沈線が組みあわせて施されている。13は口唇部断面が外削ぎ状を呈している。11・12は薄手で、堀之内II式土器に近い様相を呈する。15～17は、無文地に斜行沈線が施されるもので、15・16は薄手の口縁部片、17は厚手の胴部片で

ある。15は無文帯を有し、口唇部内面が肥厚している。17には縦位と横位の刻み目が加えられた隆帯が貼付されている。18は、短頸壺の口縁部片で、太い沈線による区画内に縄文が充填されている。19～24、第154図1は縄文だけが施されるもので、24と1以外は口縁部片である。20がわずかな無文帯を残す他は全面に施文されている。23は、内湾の著しい鉢形土器で、縄文が上半部では横位、下半部では縦位に回転施文されている。1は胴下半部片で、粗い無節縄文が施されている。2は、整形の雑な深鉢形土器の口縁部片で、縦位波状の条線文が主に施されているが、部分的に無節縄文の痕跡が認められ、両者が併施されている。3～5は、細い沈線様の条線文が施されている口縁部片で、4の弁状の突起は特徴的である。施文は縦位・横位・斜位・弧状に組みあわせている。

第109号土坑（第123図）

本坑は、調査区の北側のK2j5区にあり、北西壁寄りに第113号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。また、南東側にはほぼ同時期の第110号土坑が隣接している。平面形は長径155cm、短径141cmの不整形円形を呈し、23cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面はほぼ平坦であるが北東方向にむけて少し傾斜している。底面の北東側と南西側に小ピットが穿たれており、径16～18cmで、深さ15～16cmである。

覆土は黒褐色土、極暗褐色土の順に堆積し、ローム粒子を共通して含み、上位の黒褐色土には炭化粒子、焼土粒子、砂質粘土を少量含んでいる。

土器は覆土上位の中央部から北東側にかけてやや集中しているが、全体で33点と少ない。この中には縦位羽状縄文をもつ深鉢形土器1点が含まれている。本坑の時期は、出土土器からみれば堀之内I式期と考えられる。

第109号土坑出土土器（第154図6～10）

第154図6は、中央部の覆土中から逆位で出土した大破片を中心に26点が接合した胴部からはほぼ直立気味に立ちあがる深鉢形土器で、推定で4単位の山形の小突起を有し、胴下半部以下を欠失する。口唇部は外削ぎ状を呈し、以下全面に粗い単節縄文LRが縦位の羽状を構成するように施文されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されているが、内面は荒れが著しく不明瞭である。胎土は粗砂を多量に含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。推定口径29.0cm、現存高32.5cmである。

7は、6と同様な縦位の羽状縄文を構成しており、同一個体と思われる。8は、細い沈線による斜行文が描かれる胴部片であるが、器面の磨滅が著しい。9は、口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下に縄文を施している。10は、渦巻状の磨消縄文が描かれる胴部片で、湾曲している。

第112号土坑（第123図）

本坑は、調査区の北側のK2j3・i4区にまたがって検出された土坑で、南側で第93号土坑、北東側で第94号土坑と重複し、北西側には第99号土坑が隣接している。新旧関係は、本坑が重複する土坑の壁を切っていることから本坑の方が新しい。平面形は長径160cm、短径118cmの東側がやや突出する不整形楕円形を呈し、南東側に長径84cm、短径54cmの楕円形の落ち込みを、北東側の壁寄りに小ピットを有する。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は凹凸が目立ち、平坦ではない。

底面の最深部で42cm掘り込まれ、落ち込み部は更に8cmほど深い。

覆土は、ローム粒子を少量含む締まりの弱い暗褐色土を主とし、壁寄りに褐色土が堆積している。覆土の中位の北側から南西側にかけて最大長 94 cm、最大幅 54 cm の北東側に頭部をむけた瓢形を呈する貝ブロックが検出された。ハマグリ、サルボウを主とするが風化が著しい。中央の層厚の厚い部分で 20 cm、末端部で 10 cm 弱ほどの厚さである。

土器は坑内から 44 点出土し、時期は中～後期のものであるが、いずれも磨滅の著しい小片で本坑に伴うものとは考えられない。したがって、本坑の時期は不明で、覆土中の貝ブロックも 2 次堆積した可能性が強い。

第 112 号土坑出土土器（第 154 図 11～13）

第 154 図 11～13 は、胴部の小片である。11 は磨消縄文、12 は沈線と刺突文、13 は縄文のみが施されている。

第 123 号土坑（第 124 図）

本坑は、第 3 号住居跡の炉の南側を切って構築されていた土坑で、覆土内に貝ブロックが堆積している。平面形は長径 94 cm、短径 93 cm の不整形円形を呈し、38 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して 2 段に立ちあがっている。底面はロームでわずかに凹凸があるが硬く平坦である。

覆土は、中央部に貝を含む黒褐色土が、壁際にロームブロック、ローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。本坑内の貝ブロックは第 3 号住居跡覆土内の貝ブロックのうちの b ブロックに相当するもので、上位がハマグリ、サルボウ主体の黒褐色土をわずかに含む純貝層で、層厚は約 40 cm で、土坑の確認面よりも 20 cm ほど盛り上る。その下は同様の土を含む混貝土層で 8～12 cm の厚さを有し、凹レンズ状に堆積しており、以下は黒褐色土で締まっている。

土器は 8 点と少なく、中期後半のものである。本坑の時期は、重複する第 3 号住居跡との関係からみて加曽利 E III 式期と考えられる。すなわち、第 3 号住居跡の廃絶後間もなく本坑が掘り込まれ、その上に貝ブロックを含む土層が堆積して埋没していったものと推定される。

第 123 号土坑出土土器（第 154 図 14～15）

第 154 図 14・15 とも胴部の小片で、14 には直線的な磨消帯、15 には凹線と縄文が施されている。

第 139 号土坑（第 124 図）

本坑は、調査区の中央やや北西寄りの L2b8 区を中心とした位置に検出され、第 172、173 号土坑と重複しているが、覆土の堆積状況から判断すると、本坑は第 173 号土坑より新しく、第 172 号土坑よりは古い。両土坑との重複により平面形は不明瞭であるが、推定で長径 280 cm、短径 186 cm で、南東側が一段と深く凹凸不整形円形を呈するものと思われ、最深部で 60 cm 掘り込まれている。壁はロームで北西側はゆるやかに立ちあがり、南東側は外傾して立ちあがっている。底面は北西から南東方向にむけてなだらかに傾き、凹凸もみられる。

覆土には多量の貝が堆積している。上位の一部には混土貝層や混貝土層となっている個所もあるが、主体はハマグリ、サルボウを主とした純貝層で極暗褐色土をわずかに含んでいる。層厚は 25～40 cm 程度である。純貝層下や壁際にはローム粒子や貝を含む暗褐色土、黒褐色土が堆積している。

土器片の大半は貝層中に混在しており、全部で346点である。主体は堀之内I式土器でも新しい段階のものである。本坑の時期は、他土坑との重複関係および出土土器からみて堀之内I式期と考えられる。

第139号土坑出土土器（第155図1～21）

第155図1～10は、縄文地文上に沈線文が主に描かれる土器である。1～5が口縁部片、6～10が胴部片である。1は口縁直下に巡る沈線の一部に刺突が付加されている。沈線は一般に細いものが多く、棒状工具（6～10）、半截竹管状工具（3・4）、ヘラないし櫛状工具（1・2）に分けられる。沈線は横位、縦位、斜位の組みあわせが多く、7のように同心円文を描く例は少ない。10は厚手で、垂下する沈線間に刺突が充填されている。4の口唇部内面には段を有している。5は薄手で、小形土器と思われる。11～13は、口縁部無文帯を1～2条の沈線で区画し、以下に縄文が施されている。14～17は、縄文のみが施されており、17以外は口縁部片である。14は口縁部内面が肥厚している。15は無節縄文が施され、口唇部が尖る。16は、口縁部に幅1cm程の無文帯を有し、以下に縄文を縦位羽状に施している。18は、口縁部無文帯下に条線文を施している。19は、口縁部が肥厚して段をもち、横位の刺突列が巡らされ、以下に条線文が施されている。20は、細い沈線で雑な斜行文などが施される胴部片である。21は、無文薄手の口縁部片で、口唇部が尖っている。

第148号土坑（第125図）

本坑は、調査区の北端部のK3h4区にあり、第7号住居跡により上面を貼り床されている。平面形は長径139cm、短径118cmの不整楕円形を呈し、西側に不定形の12cm程の深さの落ち込みがある。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は落ち込みを除いてほぼ平坦であるが、周壁にむかって徐々に上っている。

覆土は、最上位に第7号住居跡の貼り床である厚さ5～10cmほどの褐色のロームブロック、ローム粒子を多く含む良く締まった土層があり、以下に本坑の覆土のローム子、炭化粒子を含む良く締まった暗褐色土が堆積している。

土器は68点と少ないが、中央部やや南側にまとまっている。出土土器の主体は堀之内I式土器で、略完形となった土器もある。本坑の時期は、これらの土器からみれば堀之内I式期と考えられる。

第148号土坑出土土器（第155図22～28）

第155図22は、中央やや北東寄りから正位で出土した底部と覆土中から出土した破片36点が接合して、ほぼ器形をうかがえるまでになったもので、底部から直線的に外傾する深鉢形土器である。口唇部は内削ぎ状を呈し、端部は薄くなる。外面にはまばらに無節縄文Lが横位回転で施文され、底面から14cm上までは縦ナデにより無文となっている。内面上端は横ナデ、以下は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が黒褐色、内面が明赤褐色を呈する。推定口径32.5cm、底径10.2cm、器高30.5cmである。

23～26は、曲線の磨消縄文が施されるもので、施文の共通性から同一個体と考えられる。23・24が口縁部片、25・26は胴部片である。口縁部内面に沈線を有する。27は、縄文のみの胴部片で破片上端にナゾリが認められる。

28は、覆土中出土の破片4点が接合した無文の底部片で、外面縦ナデ、内面横ナデが施されている。

底面中央部は薄くなっている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が灰褐色、内面がにぶい橙色を呈する。推定底径 9.0 cm、現存高 5.5 cm である。

第 154 号土坑（第 125 図）

本坑は、調査区の北側の L3d4 区にあり、平面形は長径 286 cm、短径 201 cm を測る楕円形を呈し、中央やや北東寄りに長径 58 cm、短径 52 cm、底面からの深さ 38 cm のピットを有している。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は中央部が低く周壁に向かって徐々に上っている。底面中央部で 26 cm 掘り込まれている。

覆土は、上位と下位の 2 層に大別でき、上位にはローム粒子・炭化粒子を少量含む締まった暗褐色土、極暗褐色土、黒褐色土が、壁寄りの下位とピットの壁際にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。自然堆積と判断される。

土器は 138 点とやや多く、中央部から西寄りにまとまって出土している。出土土器は全て加曽利 E IV 式土器に比定され、単独で良好なまとまりを示している。本坑の時期は、出土土器からみて加曽利 E IV 式期と考えられる。

第 154 号土坑出土土器（第 156 図 1～17）

第 156 図 1 は、中央やや西寄りの覆土中位から逆位で一括出土した破片を中心に 32 点が接合した深鉢形土器で、胴部下半以下を欠失する。ゆるい 4 単位の波状口縁を呈し、相対する 2 か所に橋状把手、他方の 2 か所には小突起を有している。橋状把手の片方は欠失している。口縁部無文帯は 1 条の断面三角形を呈する微隆線で区画され、無文帯中には刺突列が巡り、橋状把手の側面にも付されている。胴部には連続山形状のモチーフが、上位と下位で入り組むように描かれ、区画内に単節縄文 RL が縦位回転で充填されている。把手上面にも同じ縄文が施されている。外面は磨耗が著しく、施文が不明瞭となっている部分があり、胴下半部は特に著しい。内外面の一部には炭化物が付着している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。口径 18.5 cm、現存高 21.0 cm である。

2～5 は、第 IV 類 a 種に属する口縁部片で、微隆線による逆 U 字状の区画内に施文が充填されている。2 の微隆線の接する部分は若干突出している。6 は、第 V 類 b 種と判断され、断面三角形の隆線で無文帯を区画し、以下に縄文が施されている。7～9 は、同 c 種に属し、幅 1～2 cm の無文帯下に縄文を施している。9 の口縁端部はくびれて直立する。10 は、口縁直下に刻み目を付した断面三角形の隆線が巡らされ、以下に縄文が施されている。11 は、内湾する口縁部片で、口縁部無文帯に 2 列の刺突列を加え、以下に逆 U 字状の磨消帯を垂下させている。12 は、細い沈線区画内に縄文が充填されている胴部のくびれ部片である。13～15 は胴部片で、13 は縄文だけ、14 は縄文と条線文、15 には曲線的な条線文が施されている。16 は無文の口縁部片である。

17 は、南西側の覆土中から正位で出土した無文の小形土器の底部片で、内外面とも縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈する。底径 4.6 cm、現存高 2.8 cm である。

第 156 号土坑 (第 125 図)

本坑は、調査区の北側の L3a2 区にあり、東側で第 193 号土坑と重複しているが、底面の切り合いから判断して本坑の方が新しいと思われる。また、本坑の上面を北東から南西方向にかけて第 3 号溝が走っている。平面形は長径 163 cm、短径 152 cm の不整形を呈し、113 cm 掘り込まれている。壁はロームではほぼ直立しているが、南東側の壁は中段が内側へ張り出している。底面はほぼ平坦で硬い。

覆土は凹レンズ状に堆積し、自然堆積と判断される。上位にローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を多量に含む締まった暗褐色土、黒褐色土が、下位にはロームブロック、ローム粒子を多く含む締まった褐色土が堆積しており、壁際には壁の崩落土と考えられる明褐色土が認められる。

土器は覆土上位の黒褐色土層中に多く含まれ、北西側に集中して出土している。全部で 158 点出土し、加曽利 E III 式土器を主としている。他には土器片錘が 1 点ある。本坑の時期は、出土土器からみれば加曽利 E III 式期と考えられる。

第 156 号土坑出土土器 (第 156 図 18～21, 第 157 図 1～20)

第 156 図 18～21, 第 157 図 1～10 は、第 I 類に分類される土器で、18～20 が口縁部、21・1・4 は口縁部から胴部にかけて、2・3・5～10 は胴部の破片である。18・19 は a 種に属し、低い隆線で口縁部文様帯を渦巻文と楕円区画で構成し、区画内に単節 RL の縄文を充填している。19 は渦巻部分に刺突文を付加し、以下に直線的磨消帯を垂下させている。20・21 には沈線による楕円区画が認められ、b 種と判定される。19・21, 1～10 にはいずれも直線的磨消帯が垂下するだけで変化は少ない。しかし、磨消帯の幅は縄文帯よりも狭い傾向があり、4 には幅の広い磨消帯の間に幅の狭い磨消帯が挟まれて存在している。10 は底部近くの破片で、上端に沈線の一部が認められる。縄文は 20 を除いて単節 RL である。11・12 は、第 II 類の胴部片で、12 はくびれ部に相当し、無文帯に波状の隆線が構成されており、b 種の可能性がある。13・14 は、鉢形土器の頸部片と考えられ、低隆線による楕円区画内に縄文が充填され、上位は無文帯となり、下位には縄文が施されていると思われる。15・16 は、縄文が施される口縁部片、17・18 は、縦位の条線文が密に施される胴部片である。15 は口縁部無文帯を 1 条の凹線で区画し、以下に縄文を施すが、小突起が付されている。19 は、第 VII 類に分類される壺形土器の胴部片で、隆線による施文に加えて小さな把手が貼付されている。

20 は、南東側の覆土中から出土した底部片で、外面には磨消懸垂文の末端と考えられる沈線が残るが、剝落が激しく詳細は不明である。内面はナデが施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。底径 7.4 cm、現存高 3.5 cm である。

第 166 号土坑 (第 125 図)

本坑は、調査区の北側の L2a7 区にあり、北西側に第 86 号土坑が接しているが、出土遺物からみて本跡の方が古いと思われる。平面形は長径 94 cm、短径 73 cm の楕円形を呈し、中央部で 22 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は凹凸を有し、平坦ではない。

覆土の上位には黒褐色土を含むハマグリ主体の純貝層が、中位には暗褐色土に灰層を含むハマグリ主体の混土貝層が堆積し、下位には暗褐色土、南西側の壁際には褐色土がいずれもローム粒子を少量含んで堆積している。

遺物はきわめて少なく土器片 5 点と土器片錘 1 点が出土しただけである。土器片のうち 1 点は古式土師

器の小片である。貝の出土および覆土の状態から判断して本坑は縄文期の土坑と思われるが、時期判定できる資料の出土がなく、詳しい時期は不明である。

第 166 号土坑出土土器 (第 158 図 1～3)

第 158 図 1 は、無文の波状を呈する口縁部片で、双頭状の突起を有しており、口縁部内面が突出している。2・3 は、曲線的な沈線区画内に刺突文が充填されている胴部の小片である。

第 172 号土坑 (第 124 図)

本坑は、調査区の中央やや北西寄りの L2a8 区を中心とした位置に検出された土坑で、南東側で第 173 号土坑を切っている。また、本坑の北東側には第 139 号土坑が重複しているが、覆土の堆積状況からみて本坑の方が新しい。平面形は長径 94 cm、短径 70 cm の不整楕円形を呈し、211 cm と深く掘り込まれている。壁はロームで直立して立ちあがる部分が多いが、南西側の中段部は外側にむけて傾き込まれている。底面はほぼ平坦であるが、南側が少し高い。

覆土は、上位にハマグリを主体とした、褐色土をわずかに含む締まった純貝層が堆積し、その下位には黒褐色を呈する混貝土層があり、中位には暗褐色を呈し、わずかな破砕貝とローム粒子を全体的に含む締まりの弱い土が堆積し、下位には黒褐色を呈する締まりの弱いやや粘性のある土層が中央部に、壁寄りには粘性の強い褐色土が堆積している。中位から下位の暗褐色土、黒褐色土層には第 173 号土坑を切った際に混入したと考えられる魚骨が含まれている。

土器は 32 点と少ないが、堀之内 I 式土器が主体を占めている。本坑の時期は、他遺構との重複関係および出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 172 号土坑出土土器 (第 158 図 4～13)

第 158 図 4 は、無文の口縁部片で、口縁直下に刺突文と沈線がわずかに認められる。5 は、逆くの字状に屈曲する鉢形土器の胴部片で、弧状の隆線と沈線文が施されている。6 は、縄文地上に半円弧状の沈線などが描かれている胴部片である。7～9 は縄文が施されているもので、7 は口縁部片、8・9 は胴部片である。10 は、縦位の沈線が施されている胴部の小片である。11～13 は無文の口縁部片である。13 は、上位が横位、下位が斜位に整形されている。

第 173 号土坑 (第 124 図)

本坑は、調査区の中央やや北西寄りの L2b8 区を中心とした位置にあり、前記の第 172 号土坑に掘り込まれ、第 139 号土坑に上部を切られていることから両坑よりも古い。平面形は、北西側が第 172 号土坑に切られているため推定となるが、長径 100 cm、短径 98 cm の不整形円形を呈するものと思われ、160 cm 掘り込まれている。壁はロームで底面からはほぼ直立して立ちあがるが、上位ではやや外傾していく。底面はほぼ平坦であるが、北西側にむけて若干低くなる。

覆土の上位から中位にかけては、ローム粒子、炭化粒子を含む締まりの弱い暗褐色土が一樣に堆積し、下位には暗褐色、黒褐色を呈する小アジを主とする魚骨をきわめて多量に含むややわらかく締まりの弱い土が厚さ 30～40 cm で堆積している。なお、いずれの層にもわずかに破砕貝を含んでいる。本坑の特色は大量の魚骨が出土したことである。

出土土器は 14 点と少ないが、堀之内 I 式土器を主としており、他に土器片錘 1 点が含まれている。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 173 号土坑出土土器（第 158 図 14～18）

第 158 図 14 は、縄文地上に半円弧状や斜位の沈線が施されている口縁部片である。15・16 は、全面縄文の口縁部片で、口縁部が外反している。17 は、無文地に多条の沈線で縦位・斜位・同心円状のモチーフが描かれている胴部片である。18 は、条線文が弧状に施された胴部の小片である。

第 178 号土坑（第 126 図）

本坑は、調査区の北端の K 3g6 区に位置し、第 10 号住居跡の北側壁と重複している。新旧関係は本坑の上位の覆土がきわめて硬く良く締まっていることから、第 10 号住居跡により貼られたものと推定され、本坑の方が古いと考えられる。平面形は長径 220 cm、短径 208 cm の大形の不整円形を呈し、最も深い南側で 78 cm 掘り込まれているが、この深さは第 10 号住居跡の床面からの測定値で、本来は 30 cm 程度深い 110 cm くらいは掘られていたと思われる。壁はロームで、中位に段をもち、外傾して立ちあがっている。床面はほぼ平坦であるが、南側にむけてやや低くなる。

覆土は、水平堆積に近い状況を呈しており、上位の暗褐色土、極暗褐色土はローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み硬く良く締まっている。下位の黒色土、暗褐色土はローム粒子・炭化粒子を含み締まっている。壁際にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。人為堆積かと思われる。

土器は 548 点と土坑としてはきわめて多量に出土しており、北西側を除きほぼ全体的に検出されている。特に中央やや北側に集中個所があり、南東側にはやや大形の破片がまとまっているが、いずれも覆土の中～下位である。出土土器の主体は加曾利 E III 式土器の古い段階のものである。他に土器片錘 12 点、チャート製の剥片石器 1 点などが出土している。本坑の時期は、他遺構との重複関係および出土土器からみて加曾利 E III 式期と考えられる。

第 178 号土坑出土土器（第 158 図 19～24、第 159 図 1～11、第 160 図 12～26）

第 158 図 19 は、中央やや北寄りの覆土中から逆位で出土した底部片を中心に周囲の破片 10 点が接合したもので、底部から内湾気味に立ちあがる小形深鉢形土器である。口唇直下に無文帯をわずかに残し、以下全面に単節縄文 RL を縦位回転で施文する。底面上 1 cm ほどは横ナデ、内面は縦ナデが施されている。胎土は粗砂を多量に含み、焼成は良好で、色調は外面が極暗褐色、内面が暗赤褐色を呈する。推定口径 12.0 cm、底径 5.6 cm、器高 15.0 cm である。

20～24、第 159 図 1～10 は、第 I 類に分類されるもので、20～24・1 が口縁部、2・3 が口縁部から胴部にかけて、4～10 が胴部の破片である。口縁部文様帯はいずれも比較的高めの隆線で区画され、楕円区画が主となっているが、20 にみられる円文は渦巻文の退化形と理解される。口縁部は内湾の著しいもの（24・1）、内湾の弱いもの（21・22）、ほぼ直線的に外傾するもの（20・23）に分けられる。楕円区画内には縄文が充填されている。胴部の磨消部は、幅の広いもの（1・3・4・10）、狭いもの（2・6・8・9）に分れ、5・7 などは両者の中間的な幅を有する。10 は磨消帯に U 字状の区画が描かれ、縄文が充填されており、第 III 類に近い様相を呈している。11～13 は、鉢形土器で、12・13 は器厚や縄文が類似し、同一個体と思われる。11 は幅の広い無文帯が外反し、頸部に隆線による楕円区画が施され、

区画内に単節縄文 RL が横位、縦位回転で充填されている。12 は無文帯の幅が半分以下に狭まり、口縁部無文帯が 1 条の凹線で区画され、直立気味となっている。胴部には逆 U 字状の区画が施され、縄文が充填されている。14～18 は、縄文が施文の主役となる土器群である。14・15 は口縁部無文帯を 1 条の凹線で区画し、以下に縄文を施している。14 の無文帯には刺突文が付加されている。16～18 は、第 V 類 c 種に属する口縁部片で、16 は内湾し、17・18 はほぼ直立する。19～21 は、条線文が施されている。19 は幅の広い口縁部無文帯を 1 条の凹線で区画し、以下に縦位波状の条線文が施されている鉢形土器である。20・21 は胴部の小片で、縦位に密に施されている。22 は無文厚手の口縁部片で、外反している。

23 は、中央やや北東寄りの覆土中から正位で出土した破片を中心に 19 点が接合したもので、深鉢形土器の胴下半部から底部にかけてが残存する。外面には推定で 8 単位の直線的磨消懸垂文が垂下し、区画間には単節縄文 RL が縦位回転で充填されているが、文様の割付が不十分であったためか、磨消帯に広狭の差を生じたり、幅の広い縄文帯の中央に 1 条の太い沈線を垂下させるなどの工作をおこなっている。底面から 1.5 cm ほどは横ナデされている。全体に施文はやや粗雑である。内面は縦ナデが施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は外面が暗赤褐色、内面が極暗赤褐色を呈する。底径 7.0 cm、現存高 10.0 cm である。

24 は、南東側の覆土中から出土した底部片を中心に中央部から出土した小片など 11 点が接合したもので、小形深鉢形土器の胴下半部から底部にかけてが残存する。外面は磨耗が著しいが、直線的磨消懸垂文が 8 単位垂下し、区画間には単節縄文 RL が縦位回転で施文されている。底面から 1.5 cm ほどは横ナデが、内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が黒褐色を呈する。底径 5.0 cm、現存高 11.0 cm である。

25 は、南側の覆土中から正位でまとまって出土した破片 10 点が接合した小形深鉢形土器で、胴下半部から底部にかけてが残存する。外面には直線的磨消懸垂文が 8 単位施文され、区画間には無節縄文 L が縦位回転で施文されている。底面から 1～1.5 cm ほどは横ナデが施されている。内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗赤灰色を呈する。底径 5.6 cm、現存高 7.5 cm である。

26 は、中央部の覆土下位から正位で出土した底部片で、外面に直線的磨消懸垂文の末端が 9 単位垂下し、区画間には単節縄文 RL が縦位回転で充填されており、底面から 1.5 cm ほどは横ナデが、内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が褐灰色を呈する。底径 6.8 cm、現存高 3.2 cm である。

第 200 号土坑 (第 127 図)

本坑は、調査区の西側の L2a1 区にあり、北東側で第 196 号土坑を切っている。平面形は長径 174 cm、短径 142 cm の不整楕円形を呈し、130 cm 掘り込まれている。壁はロームで全体としては外傾して立ちあがるが、南東側や南西側では中位に明瞭な段を有している。底面は中央部が凹む形状を呈し、北東方向にむけてやや上っている。

覆土は、中央部に貝ブロックを含む黒褐色土が、壁寄りに貝を含まない褐色土、暗褐色土が堆積している。貝ブロックは基本的に上下 2 枚の第 1、2 混土貝層に分れ、上位の第 1 混土貝層としたハマグリ、シオフキ主体の貝ブロックの上下に混土貝層が認められ、下位の土層は以下の第 2 混土貝層との境をなし、所謂間層としての役割を果たしている。第 2 混土貝層もハマグリ、シオフキを主としている。壁寄りの土層は

ローム粒子中量，炭化粒子少量を含んでいる。第1，2混土貝層および中間の混土貝層中には貝の他に魚骨や土器片が混じっているが，特に目立った変化は認められず，貝ブロックは一連の流れの中で投げ込まれていったものと思われる。最上位のローム粒子，炭化粒子，焼土粒子を少量含む暗褐色土は凹レンズ状に堆積しているので，埋没過程の最後に流れ込んだものであろう。

土器は154点とやや多く，堀之内Ⅰ式土器が主体を占めている。本坑の時期は，出土土器からみて堀之内Ⅰ式期と考えられる。

第200号土坑出土土器（第161図1～13）

第161図1は，細い沈線文が施される胴部片である。2は，口辺部片で縄文地文上に渦巻状の沈線文が施され，円形貼付文も付加されている。3～5は，口縁部片で，隆線の上に刻み目や刺突が加えられている。6は，胴部の小片で2条の沈線間にD字状の爪形文が施されている。7は，縄文地文上に斜位に2条の沈線が施されている胴部片で，沈線間は磨消されている。8～11は，縄文が施文の主体となる口縁部片で，8・9は口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。10・11は全面に施文されているが，10は施文が浅く不鮮明である。9・10の口縁部内面は突出している。12・13は，縦位に波状の条線文が施される土器で，12は口縁部片で疎に，13は胴部片で密に施されている。

第214号土坑（第128図）

本坑は，調査区の南西側端部のM1a8区を中心とした位置にあり，平面形は長径171cm，短径147cmの不整円形を呈し，82cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり，底面はほぼ平坦で硬いが，やや北側にむけて高くなっている。

覆土は上位と中央部にローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む締まった暗褐色土，壁際に褐色土が堆積している。暗褐色土は粘性が弱い，褐色土は粘性がある。

土器は141点とやや多く，覆土の上位から中位の中央部にまとまって出土している。主体は加曾利EⅢ式土器である。他には土器片錘3点，半欠の有孔円板1点を検出している。本坑の時期は，出土土器からみて加曾利EⅢ式期と考えられる。

第214号土坑出土土器（第161図14～28，第162図1～3）

第161図14～18は，第Ⅰ類土器に分類される。14はa種の口縁部片で，楕円区画内に縄文が充填され，沈線による先端が軽く巻き込まれる渦巻文が付加されている。15はb種の口辺部片である。16～18は直線の磨消帯を有する胴部片で，磨消帯の幅は広い傾向がある。19～21は，第Ⅱ類の胴部片で，隆線によるモチーフ間に縄文を充填している。22は，第Ⅲ類に属すると思われる口縁部の小片で，口縁直下から逆U字状の磨消帯が垂下している。23～28，第162図1・2は，縄文が施文の主体となる土器で，23～26が口縁部片，27・28，1・2が胴部片である。23～26はいずれも比較的幅の広い無文帯を有し，以下に縄文が施されている。23は内湾するが，24～26は直立し，24のように胴部が張る器形を呈するものかもしれない。27はくびれ部片で，上端は無文帯となっている。28・1・2は縄文のみが施され，28はやや反る。3は，縦位の条線文が密に施された胴部片である。

第 219 号土坑 (第 128 図)

本坑は、調査区の北西側の L2d4区にあり、第 28 号住居跡の炉の西端部を切って構築されている。平面形は長径 77 cm、短径 68 cm の不整形円形を呈し、75 cm 掘り込まれている。壁はロームで直立気味に立ちあがるが、上部はやや外傾する。底面はほぼ平坦であるが、丸味をもっている。

覆土は、中央部が暗褐色、黒褐色を呈し、底面近くと壁際には褐色土が堆積している。覆土の中央部には貝ブロックが円筒状に貫入するように堆積しており、上部はハマグリ、サルボウ主体で確認面直下から認められ、15 cm 弱の厚さを有する混土貝層である。下部はサルボウ主体の混貝土層で、底面から約 10 cm 程浮いていて、厚さ 40 cm 程である。

土器は 45 点と少ないが、確認面から覆土上位にかけて称名寺Ⅱ式土器の大破片が口縁部を北東方向にむけて出土している。本坑の時期は、他遺構との重複関係および出土土器から判断して称名寺Ⅱ式期と考えられる。

第 219 号土坑出土土器 (第 162 図 4～9)

第 162 図 4・5 は、第Ⅳ類 b 種に属する口縁部片で、施文の共通性から同一個体と判断される。口縁部無文帯を 1 条の断面三角形の隆線で区画し、以下の縄文地上に細い沈線を加え、磨消している。加曾利 EⅣ式土器と考えられ、本坑と重複する第 28 号住居跡に所属するものと思われる。6 は、沈線間に刺突を充填する文様を有する大形の口縁部片で、本坑の時期決定遺物と考えられる。口縁部無文帯下に刻み目をもつ円形貼付文を付している。7 は、薄手の口縁部片で、口縁直下に刺突列を巡らしている。8・9 は、太い沈線と刺突文が施されている口縁部片で、9 には縄文が地文として施されている。

第 231 号土坑 (第 129 図)

本坑は、調査区の北西側の L2b3区を中心とした位置にあり、本坑内の南東側には第 6 号埋甕遺構が検出されている。平面形は長径 125 cm、短径 108 cm の不整形楕円形を呈し、最深部は 33 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面はやや凹凸を有するが、ロームで硬い。

覆土は、極暗褐色土、暗褐色土を主とし、南西側の壁寄りの下部に褐色土が認められる。ローム粒子・炭化粒子を少量含み締まりが弱い。中央部の底面に長径 20 cm、短径 14 cm、厚さ 6 cm のハマグリを主とした小貝ブロックが暗褐色の混貝土層として堆積している。

土器は埋設土器を除いては 38 点と少ないが、堀之内Ⅰ式土器が主となっている。本坑の時期は、埋設土器およびその他の出土土器からみて堀之内Ⅰ式期と考えられる。

第 231 号土坑出土土器 (第 162 図 10～15)

第 162 図 10・11 は、沈線文が主となる口縁部片である。10 は細い沈線で無文帯が区画され、以下に刺突文がみられる。11 には太い沈線が断続的に施されている。12・13 は、縄文地上に沈線が垂下している。12 は口縁部無文帯を残しており、12・13 とも厚手である。14・15 は胴部片で、14 には反捲りの縄文、15 は縦位に波状の条線文が施されている。

第 241 号土坑 (第 129 図)

本坑は、調査区の北西側の L2c2区を中心とした位置にあり、平面形は長径 154 cm、短径 137 cm の

不整楕円形を呈し、105 cm 掘り込まれている。壁はロームではほぼ直立気味に立ちあがるが、南西側は中位に段をもち上方へ外傾する。底面はほぼ平坦で硬いが、南西側にむかって徐々に高くなり、壁際に長径 34 cm、短径 28 cm、深さ 27 cm の小ピットを有している。

覆土は、基本的に上中下位の 3 層に区分されるが、中～下位については南から北側への土層の傾斜が認められる。上位は黒褐色を呈し、ローム粒子、ローム小ブロックを多量から少量、炭化粒子・焼土粒子を微量に含み締まりが弱い。中位は暗褐色を呈し、ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子、焼土粒子を少量から微量含み締まりがなくボソボソしている。下位は褐色を呈し、ローム粒子を中量から多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子、焼土粒子を少量から微量含み締まり弱い。これらからみて本坑の覆土は人為的堆積と考えられる。

土器は 66 点出土し、主体は堀之内 I 式土器である。他に土器片錘 1 点、蓋形土器と思われるもの 1 点が出土している。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 241 号土坑出土土器（第 162 図 16～25）

第 162 図 16・17 は、口縁部無文帯に隆線と沈線を伴う刺突が施される口縁部片で、以下には縄文が施されている。18～21 は、縄文地文上に沈線が描かれるもので、18・20 は口唇上面や口縁直下に 1 条の沈線が巡っている。また、16・19 は内面に沈線や刺突が加えられている。18～20 が口縁部片、21 が胴部片で、縦位・斜位の沈線が施されている。22 は、縄文のみの大破片で、口縁部にわずかに無文帯を残している。23・24 は、条線文が付された胴部片である。23 は縦位の上に斜位に施文が重ねられている。24 は半円弧状に施されている。25 は、沈線が斜格子目状に施された胴部片である。

第 251 号土坑（第 129 図）

本坑は、調査区の北西側の L2b4 区を中心とした位置にあり、平面形は長径 171 cm、短径 168 cm の不整形円形を呈し、127 cm と深く掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがるが、西・北側は傾斜が緩く、東・南側は急傾斜で、直立に近い。底面はロームで硬く平坦である。

覆土は、基本的に上中下の 3 層に区分でき、上位には黒褐色土、中位には褐色土と暗褐色土の互層、下位には褐色土が堆積しており、壁際にはローム粒子を多量に含む褐色土が認められる。上位の黒褐色土はローム粒子、炭化粒子を含み締まっている。中下位にはローム粒子が多く含まれ、炭化粒子が少ない。覆土の様子からみると人為堆積の可能性が強いと判断される。

土器は 497 点と多く出土しているが、主体を占めるのは加曾利 E Ⅲ式土器である。他には土器片錘 2 点、土製円板 1 点、有孔円板 1 点が出土している。本坑の時期は、出土土器から判断して加曾利 E Ⅲ式期と考えられる。

第 251 号土坑出土土器（第 163 図 1～32）

第 163 図 1～9 は、第 I 類に属し、1～4・6・7 は口縁部片、5・8・9 は胴部片である。1～6 は a 種、7・8 は b 種に細分される。口縁は波状を呈するものが多く、口縁部文様帯は渦巻状、楕円形に区画され、区画内に単節縄文 RL が充填されている。1 の隆線は高く突出している。胴部には直線的磨消帯が垂下する（5・8・9）。10 は、底部近くの破片で、撚糸文の地文上に縦位の沈線が密に施されている。11～16 は、第 II 類で 11 以外は胴部片である。11 は口縁部が肥厚している。隆線はやや太目で

丸味をもつもの（12～14）と細く尖り気味のもの（15）に分れ、前者にはX字状の接合部があり、扁平となる。17～24は、第Ⅲ類と考えられるが、小破片が多い。17～20が口縁部片、21～24が胴部片である。口縁直下から逆U字状文（18～20）や先端が軽く巻き込むモチーフ（17・21・23・24）が描かれ、区画内が磨消されたり（18, 20）、縄文が充填される（19, 22～24）。24には円形刺突文が付加されている。25は、口縁部無文帯を1条の凹線で区画し、以下に縄文を施している。26～29は、条線文が施文の主体となるもので、26は内湾する口縁部無文帯が1条の凹線で区画され、以下に縦位の条線文が施されている。27はわずかに無文帯を残す口縁部片で、条線文が横位に施されている。28・29は条線文が縦位に施される胴部片で、28は土器片錘に加工されている。30・31は、第Ⅶ類土器で、31には微隆線で渦巻文が施されている。30には小把手が付されている。

32は、覆土中から出土した破片5点が接合したもので、深鉢形土器の底部片である。外面上端に単節縄文RLが施されており、底面近くの3cmほどは横ナデにより無文となっている。内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が褐灰色を呈する。底径6.0cm、現存高4.6cmである。

第286号土坑（第131図）

本坑は、調査区の東側のM4e₂区を中心とした位置にあり、第41号住居跡により南東側の上部を切られているが形状はほぼ判明する。平面形は長径199cm、短径178cmで北側がやや突出する不整形円形を呈しており、106cm掘り込まれている。突出する北側には底面から34cmほど上った位置に段が有り、長径31cm、短径18cmほどのテラス部を形成している。テラス部は南から北方向へ4cmほど上っている。この部分は本坑への出入口部と考えられる。同様な足場ともいべきテラス部が第299号土坑でも確認されている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面はほぼ平坦で硬い。

覆土は、上中下位の3層に大別され、上位には極暗褐色を呈するローム粒子少量、焼土粒子、砂の小ブロックを微量に含む土がほぼ水平に堆積し、中位には粗いローム粒子を多量に含む極暗褐色土と暗褐色土が堆積し、下位には南西から北東方向にむけて投げ込まれたようなローム粒子少量、ローム小ブロックを微量含む締まった褐色土が堆積している。このような埋土からみれば、本坑は人為的に埋めもどされた可能性が強い。

土器は覆土の上中下位にわたって中央部を主として多量に出土し、535点を数える。最下位からはほとんど出土していない。この中には器形の半分ほどが復元された土器が3点含まれ、他に土器片錘1点が出土している。出土土器はほとんど加曾利EⅢ式土器であり、このことから本坑の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

第286号土坑出土土器（第164図1～12、第165図13～30）

第164図1は、中央部やや北東寄りから出土した破片51点が接合した橋状把手を有する大形鉢形土器で、口縁部の大半と胴下半部以下を欠失する。外反する口縁部無文帯の幅は広く8cmほどあり、横ナデされている。胴上半部に微隆線で円、楕円形を組みあわせた区画が描かれ、橋状把手は推定で2か所に付されていたものと思われる。区画内および胴下半部には単節縄文RLが縦位・斜位回転で主に施文され、一部で横位に回転されている。橋状把手上には施文されていない。内面にはゆるい稜をもち、上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。内外面とも剝落痕が認められる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色

調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰褐色を呈する 推定口径 40.0 cm、現存高 29.0 cm である。

2 は、中央やや北寄りの覆土下位から立位、逆位で出土した大破片を中心に 12 点が接合したもので、薄手の内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。口縁直下に 2 列の刺突列を巡らし、胴上半部は単節縄文 LR を横位回転で、下半部は無節縄文 L を縦位回転で帯状に施文している。胴上半部には炭化物が付着し、黒褐色を呈するが、下半部は 2 次加熱により剥落がみられ、明赤褐色を呈する。内面は横ナデされているが、下端には縦ナデも認められる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面が灰褐色を呈する。推定口径 18.0 cm、現存高 15.0 cm である。

3 は、2 よりやや南側の少し下位の覆土中から正位、逆位で出土した破片 7 点が接合した 4 単位の波状を呈する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。口唇直下に幅 1 cm 程の凹線を巡らし、以下に単節縄文 LR を横位回転で施文している。内外面の一部に厚く炭化物が付着する個所が認められる。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈する。推定口径 18.8 cm、現存高 15.3 cm である。

4～8 は、第 I 類土器である。4・5 が口縁部片、6～8 が胴部片である。4 は b 種で、楕円区画内に単節縄文 RL が横位回転され、胴部では縦位回転で施文されている。5 は a 種に属するが、隆線が扁平である。6～8 は比較的幅の広い磨消帯が垂下しているが、7・8 は剥落が著しい。9～17 は、第 II 類に分類され、9～12 が口縁部片、13～17 が胴部片である。9 は波状を呈し、隆線の断面形が細く尖り気味である以外は、隆線が丸味を帯びている。モチーフは曲線的で渦巻状を呈すると思われる。13・14・17 は厚手で、10 は薄手である。14 は第 I 類の可能性もあるが、ここに含めた。18～23 は、縄文が施文の主体となるもので、18～21 が口縁部片、22・23 は胴部片である。18 は口縁部無文帯を 1 条の貼付隆線で区画し、以下に縄文を横位・斜位回転で施文している。19～21 は第 V 類 c 種で、無文帯をわずかに残し、以下に縄文を施しており、21 は波状縁である。24～27 は、条線文のみが施される土器で、24 以外は胴部の小片である。24 は口縁部無文帯を残して、以下に縦位に施文するもので、第 V 類 h 種に相当する。25・26 は縦位に、27 は斜位の波状に施されている。

28 は、中央やや南西寄りの覆土上位から一括して出土した破片を中心に 13 点が接合したもので、深鉢形土器の胴下半部から底部にかけてが残存する。外面には両側にナヅリが加えられた断面三角形の隆線により縦長の区画文が描かれ、文様帯の下端は、同様の隆線で区画されている。区画内には単節縄文 RL が充填施文されている。底面から下位の区画隆線の間は横ナデされ、無文となっている。内面は縦ナデが施されているが、剥落が激しい。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面が褐灰色を呈する。底径 6.0 cm、現存高 17.0 cm である。

29 は、南東側の覆土下位から正位で出土した無文の底部片で、内外面とも縦ナデが施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が暗赤灰色を呈する。底径 6.6 cm、現存高 3.2 cm である。

30 は、中央やや北寄りの覆土上位から逆位で出土した底部片で、外面にわずかに単節縄文が施され、底面近くの 2 cm ほどは横ナデされ、無文となっている。内面はナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が褐灰色を呈する。底径 5.0 cm 現存高 3.9 cm である。

第 290 号土坑 (第 132 図)

本坑は、調査区の東側の L4: 7 区に位置し、平面形は長径 199 cm、短径 155 cm を測る不整楕円形を

呈し、100 cm 掘り込まれている。長径方向は N-40°-E を指し、北東側の壁は 2 段の段を有し、下段はテラス状をなしている。最大長 106 cm、最大幅 20 cm の三日月状を呈し、3 cm ほど上方にむかって上っている。第 286 号土坑と同様の足場とするには底面から 18 cm のところに段があり、やや低い点が気にかかる。あるいは別個の土坑の重複かもしれないが、その確証は得られなかった。上段は底面より 66cm のところにあるがテラスは形成していない。その他の壁はほぼ直立するか若干外傾気味に立ちあがっている。底面は多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦で硬い。

覆土は、粗いローム粒子とローム小ブロックを多量から中量、炭化粒子を少量から微量含む黒褐色土、締まりのある極暗褐色土、暗褐色土が西から東方向にむけて投げ込まれたように堆積しており、人為的な埋没と考えられる。

土器は 188 点出土しており、その主体は加曾利 E IV 式土器である。他には土器片錘 3 点と動物形把手 1 点が検出されている。本坑の時期は、出土土器からみれば加曾利 E IV 式期と考えられる。

第 290 号土坑出土土器（第 166 図 1～10）

第 166 図 1・2 は、第 IV 類 a 種で、1 は口縁部片、2 は胴部片である。1 はゆるい波状を呈し、断面三角形の微隆線と逆 U 字状の区画をおこない、縄文を充填している。波頂部下は舌状に突起している。3 はくびれ部片で、沈線区画内に縄文を充填している。4～8 は、第 V 類 e 種で、口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。いずれもナズリにより形成されたものらしく、8 は不明瞭である。9・10 は、胴部の小片で、9 には縄文、10 には縦位の条線文が疎に施されている。

第 294 号土坑（第 132 図）

本坑は、調査区の北西側の L2a6 区にあり、北東側を第 138 号土坑に、東側を第 4 号住居跡に切られている。平面形は、重複により不明瞭となっているが、推定では長径 389 cm、短径 227 cm の不整楕円形を呈するものと思われ、南側に不定形の落ち込みをもち、その最深部では 47 cm 掘り込まれている。壁はロームでゆるやかに外傾して立ちあがり、底面もロームで硬いが激しい凹凸がある。

覆土は、ローム粒子を中量から多量、炭化粒子を少量含む褐色土が主となっているが、本坑の上面の南西側にはハマグリ主体でサルボウを含む貝ブロックが検出され、その周囲の狭い部分のみが暗褐色土となっている。あるいはこの貝ブロックが小さい穴を穿って捨てられたものとも考えられるが、確証はない。貝ブロックは長径 42 cm、短径 22 cm の瓢形を呈し、層厚は 26 cm を測る。黒褐色の混土貝層である。暗褐色の落ち込み部は、長径 54 cm、短径 43 cm の楕円形を呈している。

土器は 109 点検出され、堀之内 I 式土器が主体を占めている。他に加曾利 E IV 式期に属する注口土器片 1 点と土器片錘 1 点が出土している。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 294 号土坑出土土器（第 166 図 11～21）

第 166 図 11 は、厚手の口縁部片で、波頂部に 1 孔を有し、隆帯・沈線・刺突の組み合わせで装飾されている。12～17 は、縄文が施文の主体となる土器で、13・14 以外は口縁部片である。12・15～17 は口縁直下に無文帯をわずかに残し、以下に縄文を施している。12 はゆるい波頂部に盲孔を有し、17 の無文帯の幅は 2 cm 程あり広い。13・14 は厚手の胴部片で、縄文地文上に沈線文が施されており、13 の沈線間は磨消されている。18・19 は、沈線文が施される口縁部片である。18 は横位に 2 条、19 は口縁部無

文帯を1条の沈線で区画し、以下は雑な斜格子目状に施されている。20・21は共に条線文が施される胴部片で、20は縦位波状、21は縦位に間隔をおいて施されている。

第299号土坑（第132図）

本坑は、調査区の東端のM5a1区にあり、平面形は長径168cm、短径160cmの不整形円形を呈し、90cm掘り込まれている。南側壁の中段部に三日月状のテラスを有し、足場としての用途が想定される。テラスの最大長は98cm、最大幅13cmを測る。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は平坦である。なお、底面の形状は長径122cm、短径94cmの楕円形を呈し、上端の不整形円形とは異なる形状を呈している。

覆土は、最上位と中央部に暗褐色土が凹レンズ状に堆積し、壁寄りと下位では褐色土が主となっている。暗褐色土にはローム粒子を中量からきわめて多量に、炭化粒子を少量から中量、焼土粒子を少量含み、部分的には鈍い赤褐色、暗赤褐色の焼土粒子を多量に含む土層が挟まっている。これらは投げ込みの焼土と判断される。褐色土にはローム粒子・ローム小ブロックをきわめて多量に含み、下位の土層は締まりが弱い。壁際の土は壁の崩落土である。人為的に埋め戻された可能性が高い。

土器は覆土の上位から中位にかけての出土が多く、下位には少ない。全体で327点とやや多く、主体を占めるのは加曾利EⅢ式の新しい段階に属するもので、柳澤清一氏の言う「加曾利E3-4中間式」に相当するものかもしれない。他には土製円板1点、石製ペンダントの半欠品1点が出土している。本坑の時期は、出土土器からみれば加曾利EⅢ式期の新しい段階と考えられよう。

第299号土坑出土土器（第167図1～21）

第167図1は、北西寄りの覆土の中位から下位にかけてまとまって出土した破片39点が接合した若干内湾する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。幅2～2.5cm程の口縁部無文帯を断面三角形を呈する明瞭な微隆線で区画し、以下全面に単節縄文RLを縦位回転で施文する。微隆線は、推定で3単位のゆるい波頂部にむかって左右から迫り上がるが、接合はしない。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土はやや大粒の石英、長石粒や雲母片を多量に含み粗雑であるが、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい橙色を呈する。口径24.6cm、現存高29.0cmである。

2は、南東側の覆土上・中位から立位で出土した破片を中心に18点が接合した内湾の著しい深鉢形土器で、胴部以下を欠失し、断面は磨滅している。幅1cm程の口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、胴部には上・下2段の波長の大きい連続波状文を描き、上位は波頂部分を磨り消し、波底部分に単節縄文LRを充填している。下位は上位と波頂部がずれるように施文され、波頂部分に縄文を充填している。縄文は縦位回転を主とするが、口縁直下の1段だけは横位に施文されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されており、部分的に剝落している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。推定口径23.6cm、現存高18.4cmである。

3～6は、第Ⅳ類a種に属し、3・4が口縁部片、5・6が胴部片である。断面三角形の微隆線による逆U字状の区画内に縄文が充填されている。3は薄手で、4は厚手で大形土器と思われる。7は、第Ⅳ類b種土器で、口縁部無文帯を断面三角形の微隆線で区画し、以下に逆V字状の磨消帯を配している。8・9は、沈線による区画内に縄文が充填される胴部片である。8はくび部に相当し、区画沈線が細い。9は厚手で、施文は雑である。10～17は、縄文が施文の主体となる土器で、10～15が口縁部片、16・17は胴部片である。10は第Ⅴ類a種、11～14は同e種、15は第Ⅵ類a種に分類される。10の口縁直下の

凹線は深く明瞭であるが、e種は11・12以外は不明確であり突出していない。15の縄文は不定方向に回転施文されている。16・17は単節縄文RLが縦位回転で施文されている。18は、条線文が曲線的に施される口縁部の小片である。19はやや薄手の無文の口縁部片で、横ナデが観察される。

20は、北西寄りの覆土下位から立位で出土した無文の底部片で、内外面とも軽く縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が褐灰色を呈する。底径5.7cm、現存高3.0cmである。

21は、中央部の覆土中位から出土した網代痕を有する底部片で、内外面とも横ナデが施されているが、内面は剥落が認められる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が黒褐色を呈する。推定底径8.7cm、現存高3.6cmである。

第304号土坑（第133図）

本坑は、調査区の東側のM4a9区を中心とした位置にあり、第336号土坑と北西側で重複しているが、覆土の観察から本坑の方が新しいと判断される。平面形は長径175cm、短径150cmの楕円形を呈し、112cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがるが、南西側には段を有している。底面は平坦で硬い。覆土は、ローム粒子とローム小ブロックを多量からきわめて多量に、焼土粒子を中量から多量、炭化粒子を少量から中量含む褐色土が大半を占め、ところどころに暗赤褐色、にぶい赤褐色を呈する焼土粒子が目立つ層がモザイク状を呈して挟まっている。特に北壁側に多く、第336号土坑の覆土に類似しており、本坑が第336号土坑を切った結果、焼土が多く認められるのかもしれない。いずれにしても本坑の埋土は人為的なものと判断される。

土器は169点とやや多いが、この中には本坑が？基の土坑の重複と判明する前にとりあげた資料も含まれており、本来は第336号土坑に属するものも混入していよう。土器は南東側や北西側にややまとまっていたが、覆土上～中位のものが多い。出土土器の主体は加曾利EⅢ式土器で、他に土器片錘4点などが出土している。本坑の時期は、出土土器からみて加曾利EⅢ式期と考えられる。

第304号土坑出土土器（第166図22～37）

第166図22～27が、第Ⅱ類土器に分類され、22～25が口縁部片、26・27が胴部片である。隆線の断面形は比較的丸味を有するもので、1本単位のもの（23～25・27）、2本単位のもの（22・26）に分けられる。25は薄手で小形土器と思われる。28～31は、第Ⅲ類と考えられる小片で、28以外は胴部片である。28は波状縁を呈し、太い沈線間に単節RLの縄文が施されている。29～31はU字状、逆U字状、直線的な磨消帯が配されている。32～36は、縄文が装飾の主体となる口縁部片で、32は口縁直下に1条の沈線が巡り、以下に無節縄文Lが縦位回転で帯状に施されている。33・34は口縁部無文帯下にごく浅く不明瞭な凹線を巡らし、以下に縄文を条が縦走するように施文している。35・36は口縁部に無文帯をわずかに残し、以下に縄文を施している。37は、縦位の条線文が施された胴部の小片である。

第313号土坑（第133図）

本坑は、調査区の東側のL4g7区にあり、平面形は、径132cmの東側に突出部をもつ不整形円形を呈し、112cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがるが、東壁は中段部の底面から70cmの位置に段を有している。この段には明瞭なテラスは形成されていない。底面はほぼ平坦であるが、中央部がわ

ずかに凹む。

覆土は、上位が暗褐色を呈し、以下は褐色を呈している。全体にローム粒子を多量に含み、特に中位にはロームブロック、ローム小ブロックをきわめて多量に混じ、炭化粒子中量、焼土粒子少量を含んでいる。このような堆積土から判断すると本坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土器は 65 点と少ないが、北西側の底面より約 30 cm 浮いた覆土下位からは口縁部を南方向にむけた斜位の状態で深鉢形土器の上半部が出土している。本坑の時期は、この土器やその他の破片から推測すれば加曽利 E IV 式期と考えられる。

第 313 号土坑出土土器（第 168 図 1～12）

第 168 図 1 は、北西側の覆土下位から口縁部を南方向にむけて斜位の状態で出土した内湾する深鉢形土器の口縁部の大破片で、胴部以下を欠失する。口縁部に幅 2～2.5 cm の無文帯を有し、断面三角形の微隆線で区画し、胴部上半に同様の微隆線で逆 U 字状の連続モチーフを描き、モチーフの内外に単節縄文 LR を縦位、斜位回転で充填している。外面には炭化物が付着し、内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を呈する。推定口径 35.0 cm、現存高 24.0 cm である。

2 は、口縁直下に 1 条の沈線と刺突列を巡らし、以下に逆 V 字状の磨消帯を配する内湾の著しい口縁部片である。3～6 は、断面三角形を呈する微隆線による施文が主となる土器で、3 は第 IV 類 a 種、6 は第 IV 類 b 種に分別される。3 は波状を呈し、逆 U 字状、V 字状の区画内に縄文を充填している。口唇部内面は大きく突出している。4 は胴部片、5 は微隆線が弧状をなして構成されているが、共に小片のため詳細は不明である。6 は口縁部無文帯を 1 条の高く突出する微隆線で区画し、以下は縄文地文上に細い沈線を描いている。また、破片の下端には条線文が縦位に施されている。7～9 は、口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画し、以下に縄文を施すもので、第 V 類 a 種に該当する。10・11 は胴部片で、10 は縄文のみが施されている。11 は胴下半部の破片で縦ナデが顕著に認められ、無文である。

12 は、南東側の覆土上位から逆位で出土した無文の底部片で、内外面とも縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が灰白色を呈する。底径 7.4 cm、現存高 3.1 cm である。

第 322 号土坑（第 134 図）

本坑は、調査区の東側の M 4c3 区を中心とした位置にあり、平面形は径 158 cm の不整形円形を呈し、136 cm とかなり深く掘り込まれている。壁はロームでほぼ直立気味に立ちあがるが、底面近くではやや内傾する個所も認められる。また、南西・南東側は壁に褐色ないし明褐色のローム粒子の多い土層が縦方向に堆積しており、壁の外傾が他壁より著しいことから壁の崩落が推測される。底面は平坦で硬いが、炭化物が全面的に散っている。

覆土は、最上位が暗褐色を呈する他は、褐色土がほぼ水平に近い状態で堆積しており、全体としては下位にむかうほどローム粒子の混入率が高くなり、締まりが弱い土層と締まりある土層が交互に堆積する状況が看取されるなど人為堆積の可能性がある。土層の区分はローム粒子・炭化粒子・焼土粒子の混入量の差や締まり具合から行ったが、ほとんど同一層に近いように見える。

土器は、60 点と少ないが、この中には器形復元できた称名寺式土器の鉢形土器が 1 点含まれている。

この土器は文様からみて称名寺式土器でも古い段階に対比され、所謂続加曾利 E IV 式土器といわれる微隆線文を特色とする土器と相伴しており、型式検討の上からも貴重な例として注目されよう。本坑の時期は、出土土器から判断して称名寺式期と考えられる。

第 322 号土坑出土土器（第 168 図 13～18）

第 168 図 13・14 は鉢形土器で、同一個体と思われるが接合しない。13 は 5 点が接合し、14 は 7 点が接合しており、他に 2 点の同一個体の破片がある。13・14 とも覆土中から散在して出土したもので、口縁直下に横長の長方形の区画文が沈線で施され、胴部から底部にかけては X 字状などの曲線的モチーフが描かれている。モチーフ内には単節縄文 LR が充填されている。内外面とも剝落が著しい。口唇部にキザミ目も認められるが、不明瞭である。内面は横ナデが施されている。胎土は粗砂を多量に含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。推定口径 29.2 cm、底径 9.0 cm で、現存高は 14.5 cm 以上である。

15 は、口縁直下に逆 U 字状の磨消帯が配される口縁部の小片である。16 は、断面三角形の微隆線による区画を描く胴部片である。17・18 は、口縁部無文帯を微隆線で区画し、以下に縄文を施す口縁部片である。

第 326 号土坑（第 134 図）

本坑は、調査区の北西側の L2d3 区にあり、平面形は長径 124 cm、短径 116 cm の不整形円形を呈し、159 cm と深く掘り込まれているが、上面に盛り上る貝ブロックの存在から考えれば、167 cm 以上の深さがあったと推定される。しかも上面はかなり広いが、底面に至っては 16 × 18 cm 程度と小さくなり、丸底状を呈している。壁は中位の各所に凹凸や段をもち、直立はしていない。本坑は、確認した時点では、かなり風化したハマグリ、シオフキ主体の貝ブロックが長径 72 cm、短径 46 cm の不整形楕円形状に広がっていただけであったが、ボーリング探査の結果、かなり深く細い土坑であることが判明したので、土坑を底面まで半截して調査する方法を採用した。

覆土は、上位（確認面から 60～70 cm まで）は黒褐色、極暗褐色のハマグリ、シオフキを主とする混土貝層が堆積し、以下には黒褐色土、極暗褐色土、暗褐色土、褐色土と色調は異なるが、ハマグリ、シオフキを主体とする混土貝層が魚骨を含んで堆積している。底面から 10 cm ほど上に厚さ 10～15 cm の魚骨を多量に含む締まりの弱い土層が認められる。壁寄りにはローム粒子を中量から多量に含む褐色土、暗褐色土が堆積している。

土器の出土は少なく 37 点であるが、最下層の魚骨を含む混土貝層からも若干の土器片が出土している。出土土器の型式は加曾利 E IV 式から堀之内 I 式にわたっているが、本坑の時期は、混土貝層出土土器などから判断すれば、堀之内 I 式期と考えられる。

第 326 号土坑出土土器（第 169 図 1～4）

第 169 図 1 は、口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し、以下に横位の条線文が認められる。2・3 は、縄文のみの破片で、2 が口縁部片、3 が胴部片で共に厚手である。4 は、条線文が縦位に施されている胴部の小片である。

第 327 号土坑 (第 134 図)

本坑は、調査区の北西側の L2c3 区を中心とした位置にあり、第 326 号土坑の北東側約 50 cm ほどに接している。本坑内の北東側には第 328 号土坑が重複しているが、その新旧関係は不明である。平面形は長径 310 cm、短径 253 cm の不定形を呈し、最深部で 42 cm 掘り込まれている。壁はロームでゆるやかに外傾して立ちあがり、底面は凹凸があり硬い。

覆土は、上位から下位にむけて極暗褐色土、暗褐色土、褐色土と変化し、自然堆積と考えられる。各土層にはローム粒子が中量から少量、炭化粒子、焼土粒子が微量含まれている。また、本坑の西側の覆土上面からは最大長 36 cm、最大幅 26 cm の撥形に近い形状を呈する貝ブロックが検出されている。シオフキ、ハマグリを主とする黒色の混貝土層で、上面は破碎が著しく散乱状態であるが、層厚は 14 cm 程度である。この貝ブロックの周囲のみに黒褐色土が堆積していて、他の覆土と異なる。あるいは小穴を穿って貝を捨てたものであろうか。

土器は 10 点ときわめて少なく、中期の小片が主となるが、1 点だけ早期の野島式土器の口縁部片がある。本坑の時期は、出土土器が少なく決定しがたいが、中期後半の所産と考えられる。

第 330 号土坑 (第 134 図)

本坑は、調査区の南東側の L4f0 区を中心とした位置にあり、平面形は径 98 cm の不整形円形を呈し、北東側が直線的になる。41 cm 掘り込まれている。壁はロームでやや外傾して立ちあがり、底面は平坦である。本坑は小さく、掘り込みが浅い割には比較的多くの土器が出土したため覆土の観察が充分におこなえなかった。

覆土は、上位が暗褐色土、下位が褐色土で、ローム粒子を中量から少量、炭化粒子を少量から微量含み締まっている。自然堆積と考えられる。

土器は 90 点で、覆土中位から底面にかけて出土している。加曾利 E IV 式から称名寺式土器の古い段階の土器が主体を占めている。この中には称名寺式土器の鉢形土器 1 点と筒状把手 1 点などが含まれている。この他に礫 2 点が南東側の中位から出土している。本坑の時期は、これらの出土土器からみて称名寺式期と考えられる。

第 330 号土坑出土土器 (第 169 図 5 ~ 16)

第 169 図 5 は、中央部の覆土下位から逆位で出土した破片を中心に 10 点が接合した口縁部が内湾する鉢形土器である。口縁部に幅 1.5 cm の無文帯を設け、以下に太目の沈線で I 字状、および渦巻状などの曲線的モチーフを描き、モチーフ内に単節縄文 LR を充填している。胎土に砂粒、雲母片を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。推定口径 20.4 cm、推定底径 8.0 cm、器高 13.6 cm である。

6 ~ 10 は、幾何学的な磨消縄文が施されるもので、区画沈線は比較的太く明瞭である。モチーフは 7・8 にみられる J 字文などがある。6・7 が口縁部片で、7 は口唇部内面が若干突出している。8 ~ 10 は胴部片で、8 は内湾しており、5 に類似している。11・12 は、口縁部無文帯を微隆線で区画し、以下に縄文を施している。11 には磨消帯が認められ、曲線的モチーフを描くものと思われる。13・14 は、細い沈線区画内に縄文を充填する胴部片である。15・16 も胴部片で、15 には縄文が疎らに、16 には条線文が縦位波状に施されている。

第 338 号土坑 (第 135 図)

本坑は、第 74 号住居跡の中央部に穿たれた土坑の 1 つで、西側に第 339 号土坑が重複している。本坑の方が第 339 号土坑より底面が高いが、覆土の堆積状況からみれば、本坑の方が新しいと考えられる。無論、第 74 号住居跡よりも新しい。平面形は、推定で長径 128 cm、短径 124 cm の不整形円形を呈し、58 cm 掘り込まれている。壁はロームでやや外傾して立ちあがり、底面はやや凹凸があり、硬い。

覆土は、すべて焼土粒子・ローム粒子を多量に含む暗赤褐色土、赤褐色土で、焼けたローム小ブロックがかなり目立つほど混入している。これらの焼土は第 74 号住居跡の炉を破壊したために混入したものと考えられる。特に上位には赤褐色土が集中しており、その上面からは土器片がまとまって出土している。また、覆土の下位からもやや北側に寄って土器片が出土している。

土器は 142 点で、加曾利 E Ⅲ 式の新しい段階から E Ⅳ 式の古い段階にかけての土器が主体を占めている。他には土器片 1 点のみが出土しているだけである。本坑の時期は、出土土器からみれば加曾利 E Ⅲ 式の新しい段階から E Ⅳ 式期の古い段階にかけての時期と考えられる。

第 338 号土坑出土土器 (第 169 図 17 ~ 32)

第 169 図 17 ~ 22 は、第Ⅲ類に属すると思われる、17 ~ 19 が口縁部、20 が口辺部、21・22 が胴部片である。17 は口縁直下に 1 条の沈線と円形刺突文を巡らし、以下に逆 U 字状の磨消帯を配している。18 は口縁直下に刺突列を加え、以下は縄文地文上に刺突列を付している。小片のため詳しい文様構成は不明である。19・20 は内湾が著しく、口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画し、以下に 2 本組の沈線で逆 U 字状の磨消帯を大きく描いている。19 には小破片のため沈線区画は認められないが、ここに含めた。22 はくびれ部に相当し、強く外反している。23・24 は、断面三角形の微隆線による曲線的モチーフが描かれる胴部片で、第Ⅳ類土器である。25 ~ 27 は、縄文が装飾の主体となる土器で、25・26 が口縁部片、27 は胴部片である。25・26 は口縁部無文帯を 1 条の凹線で区画し、以下に縄文を施している。28 ~ 30 は、条線文が施されるもので、28・29 は器厚や施文が類似することから同一個体と思われる、口縁直下から縦位を主に斜位や弧状に雑に施文されている。30 は、厚手の胴部片で、縦位に密に施されている。31 は、厚手無文の口縁部片で、下端に隆線が巡っている。32 は、太目の沈線による磨消縄文土器で、称名寺式土器の胴下半部の破片である。

第 352 号土坑 (第 135 図)

本坑は、調査区の北東側の K 4 g7 区にあり、平面形は長径 230 cm、短径 181 cm の不整形円形を呈し、西側のやや深い部分で 29 cm 掘り込まれている。本坑内には北側に第 10 号埋甕遺構、南西側に第 377 号土坑が構築されており、いずれも本坑より新しいと考えられるが、確証は得られなかった。

壁はロームで外傾して立ちあがり、底面はほぼ平坦であるが、西側にむけて傾斜している。

覆土は、上下の 2 層に大別され、上位が極暗褐色土、下位が褐色土で、最上位にローム粒子を多量に含むほかは、全体的にローム粒子少量、炭化粒子少量を含んでいる。

土器は 104 点とやや多く出土し、称名寺式土器が主体を占めている。本坑の時期は、出土土器および他遺構との重複関係からみて後期初頭の称名寺式期と考えられる。

第 352 号土坑出土土器 (第 170 図 1～12)

第 170 図 1 は、断面三角形の微隆線による区画が施される胴部片である。2～6 は、曲線的磨消縄文が施される胴部片である。5 には十字状のモチーフが認められ、6 には刺突文が付加されている。7 は、曲線的な沈線区画外に刺突文が施される胴部片である。8 には縄文地文上に、逆 J 字状のモチーフが描かれ、区画内が磨消される胴部片である。9 は口辺部片で、押圧を加えた隆帯が巡っている。10・11 は縦位や横位・斜位に条線文・細沈線文が施される胴部片である。12 は無文の口縁部片で、やや外反している。

第 353 号土坑 (第 135 図)

本坑は、調査区の北東側の K 4g7・h7 区にかけて検出され、第 352 号土坑の南側約 80 cm に隣接している。平面形は長径 154 cm、短径 132 cm の卵形に近い不整楕円形を呈し、98 cm 掘り込まれている。壁はロームで直立かやや外傾して立ちあがるが、南東側は外傾が著しい。底面は平坦で硬い。

覆土は、北西および南東方向から交互に投げ込まれたような状況を呈して、底面にはほぼ水平に暗褐色土が堆積している。上位には北西方向から焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土、赤褐色土が入り込み、その下位にローム粒子・炭化粒子を含む黒褐色土が堆積している。一方、南東側からは粗いローム粒子と焼けたローム小ブロックを多量に含む暗褐色土が流れ込むように堆積しており、本坑は人為堆積と考えられる。

遺物は上位の暗褐色土、暗赤褐色土中に多く含まれ、下位にはごく少ない。しかし、底面から 2～3 cm 浮いて雲母片岩の断面三角形を呈する大石がほぼ直立して出土し、その西側からは 7～8 cm 浮いて深鉢形土器の底部が正位で出土している。土器片は 243 点とやや多く、加曾利 E Ⅲ 式期の新しい段階のものから称名寺式期のものまでが含まれている。他には打製石斧の半欠 1 点、土器片錘 1 点などが出土している。本坑の時期は、出土土器から判断すれば最も新しい称名寺式期と考えられる。

第 353 号土坑出土土器 (第 170 図 13～28)

第 170 図 13 は、口縁部無文帯を断面三角形の微隆線と上下に施される円形刺突列で区画し、以下に縄文が施されている。14・15 は、細い沈線による曲線的区画内に縄文が充填されている。13・14 は口縁部の断面が逆くの字状を呈し、14 の内面は突出している。16～20 は、やや太目の沈線で曲線的磨消縄文が施されており、16～18 の口縁部の内面は肥厚ないし突出している。20 の縄文帯には刺突文が付加されている。21～24 は、器面全体に縄文が施されている口縁部片で、23 の口唇部内面は突出している。25～27 は、無文の口縁部片で、25 には低い隆線が巡っている。

28 は、中央やや北東寄りの覆土下位から正位で出土したわずかに上げ底を呈する底部片で、外面には部分的に単節縄文 RL が施されている。内外面とも横ナデが施され、外面にわずかに炭化物が付着する。胎土は多量の長石・石英粒を含み、粗雑であるが、焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色を呈する。底径 11.0 cm、現存高 4.5 cm である。

第 384 号土坑 (第 137 図)

本坑は、調査区の北西側の L 2c2 区にあり、西側で第 385 号土坑と重複し、北西側を最近のゴミ穴により攪乱されているために平面形は推定せざるを得ないし、新旧関係も不明である。平面形は長径 96 cm、短径 93 cm の不整円形を呈するものと思われ、最深部で 24 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して

立ちあがり、底面は凹凸があり北側へやや傾いている。

覆土の上面に小貝ブロックが3か所認められたが、西方に位置するaブロックは攪乱を受けており、西側約半分が本跡の推定範囲外へ延びている。aブロックは、最大長45cm、最大幅36cmの不定形を呈するハマグリ、シオフキ、サルボウを含む混貝土層であるが、この層の下からはビニール袋が出土している。bブロックは、aブロックの東側で本坑の北側にあり、最大長48cm、短径30cmの不整楕円形を呈し、最大厚は11cmを測る。このブロック内から堀之内I式期の土器片が出土し、ハマグリ、サルボウを主としている。cブロックは南西側に位置し、最大長31cm、最大幅22cmの不整楕円形を呈し、厚さ10cm程度である。貝ブロックはいずれも極暗褐色を呈し、ローム粒子を多量に含み、以下の土層は暗褐色、褐色を呈し、ローム粒子を中量から多量に、炭化粒子を少量含み、風化した破砕貝を微量含んでいる。

土器は49点と少なく、中～後期のものが混在しているが、プライマリーと思われるbブロックの貝層中から出土した土器片からみて、本坑の時期は堀之内I式期と考えられる。

第384号土坑出土土器（第170図29～30）

第170図29は、口縁部無文帯下に1条の沈線を巡らし、以下に縄文を施している。口唇部内面は肥厚し、突出している。30は、幅の広い無文帯下に斜行沈線を2条施し、以下に条線文を施している口縁部片である。

第385号土坑（第137図）

本坑は、調査区の北西側のL2c₂区にあり、東側で第384号土坑と重複し、北東側と南西側を最近のゴミ穴により攪乱されているために平面形は推定であるが、長径120cm、短径105cmの不整円形を呈するものと思われ、最深部で38cm掘り込まれている。壁はロームでゆるやかに外傾しており、底面は擂鉢状を呈し、凹凸がみられる。

覆土の上位の中央部に二つ山状に盛り上げる不定形のハマグリを主とした貝ブロックが、最大長48cm、最大幅24cm、最大厚18cmの暗褐色を呈する混貝土層として堆積し、この周辺と下位にはローム粒子を多量、炭化粒子を中量から少量含み、風化した破砕貝を微量挟む締まった褐色土、暗褐色土が堆積している。

土器は7点ときわめて少なく、小片のため図示できるものがないが、中期後半から後期前葉のものと思われる。本坑の時期は、他遺構との重複関係および出土土器から判断すれば後期前葉と考えられる。

第387号土坑（第137・145図）

本坑は、調査区の北側のK3i₈・i₉区にかけて検出され、土坑の上面に配石が施されている。北西側に第382号土坑が重複しているが、出土土器からみて本坑の方が新しいと思われる。平面形は長径93cm、短径71cmの楕円形を呈し、35cm掘り込まれている。配石の上部は確認面より10cmほど出ている。壁はロームで外傾して立ちあがるが、南・東側が傾斜がきつく、北・西側はゆるやかに立ちあがる。底面は南・東側が深く、西・北側にむけて徐々に上っており、平坦ではない。配石は、2つの石が組みあわされており、略東西を向いて横位に据えられた石の中央部からやや東寄りに凹穴を上面に4か所穿った稜を有する石を南方向にむけて斜めに立てかけた状態で検出され、その周囲には同質の石の小片や称名寺式期

の土器片が集中して出土している。なお、南北をむいた配石の北側の石の直下に径9 cm、深さ22 cm程度の褐色のローム粒子を多量、締まりのない黒色粒子を含むややわらかい土がやや北側に傾いて円筒状に観察された。これは配石を支えるために何か木棒のようなものが用いられたことを示していると思われる。下の石は径25 cm、長さ70 cm、上の石は径20 cm、長さ60 cmで、共に雲母片岩と思われ、くずれ易く、火を受けている可能性もあり部分的に赤変している。この配石はかなり人為を感じさせる状況を呈しており、当調査区の中でも特筆すべき遺構の1つであろう。

覆土は褐色土で、ローム粒子を中量から多量、炭化粒子を微量から少量含み、全体的に締まっている。人為的埋土と考えられる。

土器は、配石の周囲から出土したものがすべてで、称名寺式土器の古い段階に比定される。このことから本坑の時期は、後期初頭の称名寺式期と考えられる。

第387号土坑出土土器（第170図31～38）

第170図31～36は、太目の沈線で幾何学的な磨消縄文が描かれる胴部片で、施文手法が類似しており、同一個体と判断される。モチーフにはスベード文（31～33・35）が目立ち、J字文（31）などが組みあわされる。充填される縄文は単節RLである。37は、断面三角形を呈する微隆線で区画を描く胴部片である。38は、凹線と縄文が組みあわされている口縁部片である。

第390号土坑（第137図）

本坑は、調査区の北西端部のL1c0区に位置し、北側で第445、446号土坑と、南側で第23号住居跡、第398、399号土坑と重複している。新旧関係は、第445号土坑が出土遺物からみて本坑より古いと判断され、その他の土坑も覆土の上面を本坑が切り込んでいることから本坑の方が新しい。平面形は他遺構との重複が著しいため推定となるが、長径199 cm、短径164 cmの不整楕円形を呈し、中央部で35 cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は硬く中央部がやや凹み、周壁に向かって上っている。

覆土は、粗いローム粒子、ローム小ブロックを多量に、炭化粒子を微量含む締まりのない極暗褐色土、黒褐色土が堆積している。

土器は221点とやや多いが、南側に重複する第398、399号土坑に属する土器もかなり含まれているものと思われる。出土土器の主体は堀之内I式土器が占めている。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内I式期と考えられる。

第390号土坑出土土器（171図1～17）

第171図1・2は、貼付文や刺突文・沈線文で装飾される口縁部片で、特に刺突が加えられた1の円形貼付文は目立つ。3～10は、縄文地文上に沈線を主とした装飾が加えられるもので、3～6が口縁部片、7～10が胴部片である。沈線は太目のもの（3・7・9）と細目のもの（5・6・8・10）などに分けられる。4は口縁直下に1条の沈線が巡るだけである。5の口縁直下には小さな刺突列、7には1よりは小さい円形貼付文が施されて、文様にアクセントを付けている。6は横位・斜位の沈線が組みあわされている。11～14は、口縁直下にわずかに無文帯を残し、以下全面に縄文を施している。縄文はいずれも単節LRの横位回転である。15は、口縁直下に大きな円形刺突列を巡らし、以下に条線文を縦位に施し

ている。16は、口縁直下と頸部に横位の沈線を施すほかは無文の口縁部片である。17は、無文の口縁部片で逆くの字状に屈曲している。

第391号土坑（第137図）

本坑は、調査区の北西端部のL1c₀区を中心とした位置にあり、東側約20cmほどに第390、398号土坑が隣接している。平面形は長径118cm、短径116cmの不整形円形を呈し、71cm掘り込まれている。北西側の壁は2段の段を有し、他の壁も凹凸しているが、直立かやや外傾して立ちあがり、ロームで硬い。底面は、中央部が平坦で硬いが、周壁にむかって徐々に丸味をもって上がる。

覆土は、最上位に褐色土、次に暗赤褐色土、極暗赤褐色土、以下に暗褐色土を主として極暗褐色土、黒褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。褐色土にはローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を多量に含み、硬く良く締まっている。暗赤褐色土、極暗赤褐色土には粗いローム粒子と炭化粒子を多量に含み、締まっている。以下の土層には粗いローム粒子多量、ローム小ブロックを多量から少量、炭化粒子を少量含み下位ほど締まりがある。

土器は、覆土の上位の確認面から10～15cm下った位置から下にきわめて多く出土しているが、器形復元できたものは少なく、捨て場として利用されたものと思われる。467点出土し、主体は称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式期にかけてのものである。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内Ⅰ式期と考えられる。

第391号土坑出土土器（第172図1～26）

第172図1は、中央やや南西側の覆土上位からまとまって出土した破片45点が接合したもので、底部からはほぼ直線的に外傾して立ちあがる器形を呈し、胴下半部以下を欠失する。全体に磨耗している。幅1.5～2cmの口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、以下全面に粗い単節縄文LRが横位、斜位に施文され、胴下半部は縦ナデが施されている。内面上端部は横ナデ、以下は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。推定口径29.2cm、現存高40.0cmである。

2は、山形を呈する波頂部片で、口縁部無文帯を断面三角形の貼付隆線で区画し、以下に山形の沈線を描いている。波頂部・隆線・沈線とも山形を呈し、三つ重ね状になり特異である。3は、口縁部無文帯を微隆線で区画し、以下に縄文と細沈線文が施されている。4は、幾何学的な磨消縄文をもつ称名寺式土器の胴部片である。5～8は、沈線と刺突文が組みあわされる土器で、5以外は胴部片である。5の口縁部は内屈し、尖る特徴的な形態を呈し、沈線区画内に刺突が充填されている。6～8は、施文の共通性から同一個体と思われる。蛇行しながら垂下する沈線間の器面全体に雑に刺突文が施されるが、底部近くは無文のまま残される。9・10は、口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、以下に縄文が施される土器で、9の口唇部内面は突出し、縄文地文上に蕨手文が描かれる。10の無文帯には8の字文が貼付されている。11～18は、縄文が装飾の主体となる土器である。11は口縁直下に円形刺突列を巡らし、以下に縄文を施している。12と14は縄文が共通し、同一個体と思われる。12は幅広い無文帯を1条の沈線で区画し、以下に粗い単節縄文LRを斜位回転で施文している。13は口縁部にわずかに無文帯を残すほかは縄文が付されている。表裏両面から穿孔しようとした痕跡を残すが、共に盲孔のままで貫通していない。15・16は縄文地文上に沈線文が描かれる胴部片で、15は細く斜位に、16は半截竹管状工具で縦位に蛇行して施されている。17・18は縄文のみの胴部片で、17は薄手、18は厚手である。19～25は、沈線ないし条線文が施されるもので、19～21が口縁部片、22～25が胴部片である。19と21は細いヘラ状工具で斜格子

目文が描かれ、22・23はやや太目の沈線で直曲線文が施される。20は口縁直下に沈線を巡らし、以下に条線文が蛇行して垂下する。21は肥厚した口唇部上面の一部が押圧により凹む以外は無文に近い。25は曲線の条線文が施される胴部片である。26は4段の刺突列が施される胴部の小片で、三十稲場式に近い様相を呈している。

第393号土坑（第138図）

本坑は、調査区の北西側のL2c1区にあり、平面形は長径128cm、短径125cmの不整形円形を呈し、101cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は平坦で硬い。

覆土は、上位から中位にかけてが極暗褐色、暗褐色及び黒褐色を呈し、下位は褐色を呈している。中央部の覆土には粗いローム粒子を多量に含み、上位が締まり、下位の極暗褐色土、褐色土は締まりが弱くくずれやすい。壁際にはローム粒子を多量から中量含む締まりある暗褐色土が堆積している。土層が複雑に入りこんでおり、人為的な埋没と考えられる。

土器は主に中位の黒褐色土と極暗褐色土中からきわめて多く出土しており、405点を数える。この中には手づくね土器1点などが含まれ、他には土器片錘1点がある。主体は堀之内I式土器である。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内I式期と考えられる。

第393号土坑出土土器（第173図1～26）

第173図1～3は、縄文地文上に沈線文が描かれる土器で、1・2は施文の共通性から同一個体と思われる。口縁部に刺突や沈線による装飾があり、以下に太い沈線でU字状の区画を描き、内部を雑に磨消している。3は細い沈線が垂下している。4は直線的に垂下する磨消縄文がみられる胴部片である。5～7は、全面縄文の口縁部片で、5・6はわずかに無文帯を有している。8～10は、沈線と刺突文が組みあわされるもので、8は口縁直下の2条の沈線間に3列の刺突文が施されている口縁部片である。9・10は胴部片で、10には縄文が施された隆帯が垂下し、一部に縄文も認められる。刺突文は細い竹管状工具により左下から突きあげるように施文されている。11～19は、沈線文が施文の主体となる土器で、11は貼付文が付されている胴部片である。12～16は1～2条の沈線文が描かれるだけの口縁部片で、横ナデが良く残されている。15が波状縁を呈する他は平縁と思われる。16には沈線下に刺突文が付けられている。17～19は口縁直下と胴部下半に2条の沈線が巡り、区画された胴部に雑な蛇行文が描かれている。これら3点は器厚や施文が共通しており、同一個体と思われる。20～23は、条線文が施されるもので、20・21が口縁部片、22・23は胴部片である。条線文は弧状ないし曲線的に施されるもの（20～22）が多く、格子目状の例（23）は少ない。20は薄手で、口縁部無文帯も横位の条線文で区画されている。24は、無文の口縁部片で、横ナデが顕著である。

25は、北壁寄りの覆土下位から正位で出土した無文の底部片で、内外面とも縦ナデが施されている。内面にわずかに炭化物が付着している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面がにぶい褐色を呈する。底径8.2cm、現存高4.5cmである。

26は、北側の覆土上位から出土した小形手づくね土器の半欠品で、非常に作りが悪い。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい橙色を呈する。口径6.0cm、底径5.6cm、器高3.0cmである。

第 394 号土坑（第 138 図）

本坑は、調査区の北西側の L1c₀ 区にあり、西半部の上位を第 23 号住居跡の東壁により切り取られている。平面形は長径 135 cm、短径 120 cm の不整楕円形を呈し、109 cm 掘り込まれている。壁はロームでやや外傾して立ちあがり、東壁では中位に段を有している。底面は平坦で硬い。

覆土は、中央部の上位が所謂凹レンズ状の堆積を示すが、下位や壁寄りには複雑な堆積状態を呈しており、自然堆積というよりは人為堆積の可能性が強い。中央部に暗褐色土、壁寄りに褐色土が主にみられ、いずれもローム粒子を多量からきわめて多量に、炭化粒子、焼土粒子を中量から多量に含み下位より上位はやや締まりがあるが、全体にやわらかく締まりの弱い土層である。特に壁寄りにはロームブロックを多く含み壁の崩落が考えられる。

土器は 58 点と少ないが、中央部から北西寄りの覆土の上位にややまとまって出土している。堀之内 I 式期の小形深鉢形土器の半欠品が北西側の覆土中位から口縁部を東にむけて逆位で出土している。他には土器片錘 1 点が出土している。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 394 号土坑出土土器（第 171 図 18～28）

第 171 図 18 は、北西寄りの覆土中位から逆位で口縁部を東方にむけて出土した大破片を中心に 3 点が接合した小形深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁部に小突起を有していたと思われるが欠損していて不明である。口縁直下に明確な稜をもち、頸部で強くくびれ、胴上半部が張る器形を呈する。頸部に 2 条の太い沈線を巡らし、以下に単節縄文 LR を横位、斜位回転で地文として施文し、その上に斜行する入組沈線文を描き、入組部分の直下から蛇行文を垂下させている。底面近くは横ナデが施されている。内面上半は横ナデ、下半は軽いナデが施されている。内面上半に炭化物が付着している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。推定口径 9.5 cm、現存高 15.8 cm である。

19 は、口縁部無文帯下に 1 条の刺突を付した隆帯と円形貼付文を施している口縁部片である。

20 は、薄手の口縁部片で、2 条の沈線間に円形刺突文を付している。21 は、口縁直下に 2 条の沈線を巡らし、以下の縄文地文上に沈線文を施している。22～24 は、全面に縄文が施される土器で、22 が無節、23・24 は単節縄文が施されている。23 には補修孔が穿たれ、24 は胴下半部のために下端には縄文が施されていない。25 は、深鉢形土器の口縁部片で、無節縄文の地文上に条線文が曲線的に施されているが、施文が疎らなために、横ナデ、縦ナデが良く観察できる。26～28 は、条線文だけが施されているもので、26 が口縁部片、27・28 が胴部片である。26 の口唇部は内削ぎされている。27 は幾何学的に、28 は曲線的に施文されている。

第 395 号土坑（第 138 図）

本坑は、調査区の北西端の L1d₉ 区にあり、北側を第 442 号土坑に切られている。平面形は長径 132 cm、短径 115 cm の不整楕円形を呈し、108 cm 掘り込まれている。壁はロームで硬く良好で、外傾して立ちあがるが、凹凸が著しく、段が各所にみられる。また、南側には明瞭なテラスを有している。底面から 60 cm 上がった位置にあり、最大長 70 cm、最大幅 17 cm の三日月状を呈し、壁にむかって 4 cm ほど上っている。底面は硬く平坦である。

覆土は、基本的に上中下の 3 層に区分でき、上位が黒褐色土、暗褐色土で、中位が褐色土、下位が暗褐色土である。上位は凹レンズ状に堆積し、ローム粒子多量、炭化粒子を中量から多量に含み、中位の褐色土

はローム粒子中量，炭化粒子多量を含み，下位の暗褐色土はローム粒子少量，炭化粒子中量を含み，魚骨が多量に混入している締まりの弱い土層である。また，本坑の北側に寄って最大長 37 cm，最大幅 32 cm，最大厚 41 cm の不整円形を呈するハマグリを主体とする貝ブロックが覆土の中位から下位にかけて検出されている。貝ブロックの上面と東側の下部は風化の著しい混貝土層の様相を示すが，中央部は灰を含む混土貝層となり，いずれにもローム粒子を多量に含んでいる。また，貝ブロックは東から西へ傾いており，東方からの投げ込みと推定される。貝ブロック中にも魚骨片が散見される。

出土遺物としては，人体貼付文を有するソロバン玉形の注口土器の半欠品が南東側の覆土下位から横転した状態で出土している。また，貝ブロックの西側の覆土中位から頁岩製の縦長剝片が直立して出土している。出土土器は 123 点で，堀之内 I 式土器を主としている。他に土製円板 1 点がある。本坑の時期は，出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

本坑の特色は，人体貼付文注口土器の出土と，魚骨層の検出にあるといえよう。

第 395 号土坑出土土器（第 174 図 1～11）

第 174 図 1 は，南東側の覆土下位から底部を北東方向にむけた横位の状態で出土した人体貼付文土器である。ソロバン玉状の胴部を有し，口縁部にむけて内傾しながら立ちあがるが，上位を欠失する。文様は胴上半部のみで描かれ，貼付された人体文を中心に斜行する 3 本組の沈線が引かれ，中間に鋭いへう状施文具による刻み目が付されている。同様な刻み目はソロバン玉状を呈する屈曲部にも 1 列巡っている。左端には断面三角形を呈する微隆線で区画された垂下する長方形の磨消帯があり，屈曲部には横位の小さな橋状把手が貼付されている。橋状把手上には沈線と両端に刺突文が付けられている。橋状把手の左側と長方形の磨消帯の右上端には各 1 個ずつのボタン状貼付文が圧着されている。ボタン状貼付文には円形刺突文が付けられている。人体文は，左足端部を欠くほかは完存しており，ハート形に近い頭部とはほぼ水平に張った両肩，逆 V 字状に開く脚部に特徴を有している。全長 5.3 cm，最大幅 3.2 cm を測り，高く盛り上がった鼻部で 5 mm，他の部分で 2～3 mm の厚さを有する。目と口は刺突で，鼻は隆起として表現されている。両腕の先端は上り気味で，棒状工具による押圧で 2 股に分れている。下腹部に刺突があり，へその表現と考えられる。脚端部には小さな刺突を有する円形貼付文が付けられている。明確な乳房の表現はない。胴下半部は無文で，丁寧な横ナデが施されている。内面は剝落が著しく整形方向は不明である。内面に黒色の付着物が認められる。器面には赤彩が施されていたことが，刻み目の中にわずかに残る痕跡から判明する。胎土は砂粒と微量の小礫を含み，焼成は良好で，色調はにぶい褐色を呈する。推定底径 7.2 cm，現存高 8.4 cm である。

2 は，北側の覆土下位から正位で出土した無文の鉢形土器で，内外面とも横ナデにより整形されている。底面はわずかに上げ底を呈する。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で，色調はにぶい褐色を呈する。口径 10.0 cm，底径 7.6 cm，器高 6.0 cm である。

3～6 は，口縁部無文帯を 1 条の隆線ないし沈線で区画し，以下の縄文地文上に沈線文を描いている。3・6 は隆線で，4・5 は沈線で区画している。3 には 8 の字状の貼付文が付され，さらに刺突や沈線文で装飾されている。6 は大形の深鉢形土器で，2 条の沈線でしの字状や弧状のモチーフが描かれ，区画内が磨消されている。7 は口縁直下から直線的磨消帯が垂下し，区画間に単節縄文 LR が横位回転で施文されている。8～11 は，条線文が弧状（8～10）や斜格子目状（11）に施されている。8 は口辺部片で，隆線が巡っている。

第 396 号土坑（第 138 図）

本坑は、調査区の北西側の L1d₀・L2d₁区にまたがって検出され、平面形は長径 160 cm、短径 156 cm の不整形円形を呈し、101 cm 掘り込まれている。壁はロームで良好であるが、中位に段を有し、上位は外傾し、下位は内傾してフラスコ状に近い形状を呈している。特に南東側がこの傾向が著しく、東から南西側にかけても明瞭に内傾が認められ、底径の方が口径よりも広い。しかし、北東から西側にかけては段を有するものの底径は口径よりも狭い。底面はほぼ平坦で硬い。

覆土は、中央部の上～中位に所謂凹レンズ状にローム粒子多量、炭化粒子・焼土粒子を中量から少量含む締まり弱い黒褐色土、暗褐色土が堆積し、きわめて多量の土器片を伴っている。その下には南方向から投げ込まれたような形でローム粒子を多量からきわめて多量に含む締まりのある褐色土が堆積している。また、底面近くにはローム粒子多量、炭化粒子少量を含む褐色土がほぼ水平に堆積している。これらの埋土からみて本坑は人為堆積と思われる。

遺物は全体にきわめて多く、特に中央部からやや北西寄りに 2 重 3 重に折り重なるように密集して出土しており、この中には一括して取り上げた土器が 4 個体ほどあり、器形復元できた土器が 5 個体ある。土器は 621 点で、加曾利 E Ⅲ 式土器でも新しい段階の資料を主体としており、赤彩された薄手の破片が 5 点も含まれている。壺形など特殊な器形を呈すると思われる土器もある。他に土器片 7 点、土製円板、有孔円板各 1 点が出土している。本坑の時期は、出土土器からみて加曾利 E Ⅲ 式期の新しい段階と考えられる。

第 396 号土坑出土土器（第 175～177 図 1～52）

第 175 図 1 は、南側の覆土中位から一括して出土した破片 38 点が接合して辛うじて口縁部から底部まで、器形をうかがえるまでに至ったが、欠落部分が多く文様の詳細は知り得ない。口縁直下に 1 条の凹線、胴中位に断面三角形を呈する隆線が巡り、文様帯を分帯している。胴上位には簡略化された渦巻文、下位には大柄な渦巻文が施されているが、単位数や巻き方などは不明確である。モチーフの内外には単節縄文 LR が縦位回転を主に充填されている。隆線文の断面形は上位が三角形、下位は太目の扁平な山形を呈する。下端は隆帯で区画される。底面から 4～5 cm ほどは縦ナデが施され、無文のまま残されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土はやや大粒の石英、長石粒や雲母片を多量に含み、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。推定口径 35.6 cm、底径 7.0 cm、器高 45.2 cm である。

2 は、北西壁寄りの覆土の上・下位から出土した破片 5 点が接合した内湾する深鉢形土器の口縁部片で、胴部以下は欠失する。他に接合しない同一個体と思われる破片 5 点がある。口縁部に幅 2.5～3 cm 程の無文帯を設け、以下に多截竹管状施文具による縦位の条線文を密に施文する。外面の上端部には炭化物が少量付着している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。推定口径 36.0 cm、現存高 14.4 cm である。

3 は、中央やや東寄りの覆土上位から出土した破片を中心に 25 点が接合した内湾する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。口縁直下に幅の広い 1 条の凹線を巡らし、以下に単節縄文 RL を横位、斜位回転で施文している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデを施している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。推定口径 28.2 cm、現存高 22.2 cm である。

4 は、北壁近くの覆土上位から正位で出土した破片を中心に 4 点が接合した深鉢形土器で、胴部以下は欠失する。口縁部はゆるい波状を呈していた可能性があるが、ここでは平縁として図示した。口縁部に幅

1.5 cm 程の無文帯を有し、胴上半部に U 字状、逆 U 字状の連続するモチーフを描き、逆 U 字状の区画内に単節縄文 LR を縦位回転で施文し、U 字状の区画内は縦ナデを施している。外面には炭化物が微量付着し、内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。推定口径 30.0 cm、現存高 14.5 cm である。

5～9 は、第Ⅰ類土器である。5・6 は口縁部片、7～9 は胴部片である。5・6 は b 種に属し、楕円区画内に縄文が充填されている。7～9 には直線的磨消帯が垂下している。10～25 は、第Ⅱ類土器である。10～15 が口縁部片、16～25 が胴部片である。10 は大形の内湾する深鉢形土器の上半部片で、反時計回りの渦巻文が描かれ、モチーフ間には縄文が充填されている。隆線の断面形は丸味を帯びているもの（11・13・16・22）と尖り気味のもの（10・12・18・25）に分けられるが、この差が時間差として理解しうるかどうかは不明である。隆線は 1 本単位の例が多いが、2 本単位のものも 11・19・20・24 などにみられる。26 は、胴部の小片で対向する U 字状、逆 U 字状の沈線区画内に縄文が施されており、第Ⅲ類に相当する。27～40 は、縄文が装飾の主体となる土器である。27～32 は、第Ⅴ類 a 種の口縁部片で、無文帯の幅は 29 を除いて 1.5～3 cm 程度でやや広い。27～29・31 は薄手で、30・32 は厚手である。33 は口唇部が肥厚し、無文帯を 1 条の断面三角形の隆線で区画し、以下に縄文を施している。34～38 は第Ⅴ類 c 種で、34・35 の無文帯の幅は 2～4 cm で広いが、36～38 は 0.5 cm 程度とわずかである。39・40 は縄文のみの胴部片で、39 は単節、40 は無節縄文が施されている。41～45 は、縦位の条線文が施されるもので、41 以外は胴部片である。41 は口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画している。46～48 は、第Ⅶ類に属する薄手の壺形土器で、接合はできないが、同一個体である。微隆線による渦巻文が描かれている。49 は扁平な隆線が 2 条垂下する胴部片である。50・51 は外反する無文の口縁部片で、50 はきわめて薄手であり、共に横ナデが認められる。

52 は、中央部の覆土中位から底面を東方にむけて横転した状態で出土した破片を中心に 12 点が接合したもので、深鉢形土器の胴下半部から底部にかけてが残存する。外面には単節縄文 RL が斜位回転で施され、底面から 8 cm ほどと内面は縦ナデが施されている。内面の一部には炭化物が付着している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰褐色を呈する。底径 6.6 cm、現存高 15.7 cm である。

第 400 号土坑（第 138 図）

本坑は、調査区の北西側の L2a₂ 区に位置するフラスコ状を呈する土坑で、162 cm と深く掘り込まれている。断面形は開口部がやや開き、上位で少しくびれ、以下底面に向って徐々に広がる形状を呈する。開口部は 90 × 78 cm の不整形をなし、確認面から 40 cm ほど下りた位置で北側がくびれ、76 × 73 cm ほどのほぼ円形を呈し、底面より 20 cm ほど上位の最も張り出している部分で 118 × 114 cm を測り、底径は 106 cm である。壁はロームで硬く、中位に段や凹凸を有するがそれほど顕著ではない。底面はほぼ平坦で硬く、周壁にむかってやや上る。

覆土は基本的に上中下の 3 層に分れ、他に壁際に褐色の粗いローム粒子、ロームブロックをきわめて多量に含む土層が堆積し、壁の崩落土と考えられる。上位には、ローム粒子を中量から多量、炭化粒子を少量含むやわらかく締め弱い暗褐色土が、中位には粗いローム粒子をきわめて多量に含むやわらかい黒褐色土が堆積している。中位と下位の境は、底面から約 30～35 cm ほど上にあり、ほぼ水平に灰が土坑の中央部に径 80 cm ほどの範囲に 2～6 cm の厚さで堆積し、その中心部に焼土・木炭の小片が多い。灰層

の南東側に長径 34 cm, 短径 18 cm, 最大厚 9 cm のハマグリを主とする小貝ブロックが検出されている。以下の土層は、黒褐色土, 極暗褐色土, 暗褐色土を主とし, ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を中量から少量含みながら複雑に重なりあって堆積しており, 壁よりには褐色土がみられる。下位の南側から中央部にかけては魚骨を多量に含む黒褐色土が斜めに底面まで堆積している。また, 貝ブロックと下の 2 次堆積の焼土層の間には炭化した木の実を含む炭化物層が薄く認められている。下位の土層はいずれもやわらかく締まりが弱い。

土器は 179 点とやや多く出土しているが, 主体は堀之内 I 式土器である。精製の深鉢形土器の口縁部片が, 下位の灰層の上面の北西寄りから正位で出土している。この土器には第 407 号土坑から出土した小破片 1 点が接合している。土器は覆土の上位と下位から主に出土し, 中位にはあまり含まれていない。本坑の時期は, 出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 400 号土坑出土土器 (第 178 図 1～23)

第 178 図 1 は, 中央部やや北西寄りの覆土下位からまとまって出土した破片 11 点が接合した薄手の外反する深鉢形土器で, 口縁部だけが残存する。やや肥厚した口縁直下に 1 条の沈線を巡らし, 以下に 3～4 組の沈線で連続する変形した長方形区画を描き, 各区画内に斜行や上・下向き弧状文などを充填し, その余白部に単節縄文 LR を主に横位回転で充填している。口縁内面直下に段を有し, 丁寧な横ナデで整形されている。全体に作りのきわめて良い土器で, 精製土器の典型例である。胎土は砂粒を含み, 焼成は良好で, 色調は暗褐色を呈する。推定口径 27.7 cm, 現存高 8.4 cm である。

2 は, 中央部の覆土中位から逆位で出土した破片ともう 1 点が接合した小形深鉢形土器で, 胴部以下を欠失する。推定で 2 単位の突起を有すると思われるが欠損している。器面全体に単節縄文 LR を横位回転で地文として施文し, 口縁直下と胴部下位に各 1 条の沈線を巡らして文様帯を区画し, 三角形と逆三角形のモチーフを 2 段に連続して施している。胴部下半は縦ナデが施されている。内面上端に 1 条の細い沈線が巡り, 上半は横ナデが施されているが, 下半は雑にナデられているだけである。内外面に炭化物が微量付着する。胎土に粗砂を含み, 焼成は良好で, 色調は褐色を呈する。推定口径 12.1 cm, 現存高 10.3 cm である。

3～8 は, 縄文地文上に沈線が主として描かれる土器である。3～5 が口縁部片, 6～8 が胴部片である。3 は波状を呈し, 波頂下に 1 孔を有し, 口縁に沿って沈線を巡らし, 胴上部に縦位, 横位の卵形文を配し, これを数条の横位・斜位の沈線で連結している。文様帯の下限は数条の沈線で区画され, 以下は無文のままに残されている。4 と 6 は施文が共通し, 半截竹管状施文具による弧状文が密に描かれている。5 は口縁から斜位の刻み目を加えた隆帯が垂下している。7 は縦位と斜位の沈線が密に施された胴部片である。8 は菱形のモチーフが多条沈線で描かれた薄手の胴部片で, 1 と同一個体と思われる。9～11 は, 無文地に沈線が描かれるもので, 9 は口唇部が尖り, 2 条の沈線が口縁直下に巡っている。10・11 は重三角文が描かれる胴部片である。12 は, 条線文が曲線的に施された薄手の胴部片である。13 は, 口縁直下に 1 条の沈線が巡り, 以下に単節縄文 LR が横位回転で施文されている。14～23 は, 縄文のみが施されたもので 14～18 が口縁部片, 19～23 が胴部片である。16 は 20・21 と, 17・18 は 19 と縄文が共通し, それぞれ同一個体と判断される。前者は単節 LR, 後者は無節 R が施文されている。22 には一部に結節回転文が認められ, 23 は外反が著しい。

第 404 号土坑 (第 138 図)

本坑は、調査区の北西端の L1b9 区を中心とした位置にあり、北東側で第 409 号土坑、北側で第 443 号土坑と重複しているが、いずれも本坑の北側の壁を切り込んでおり、本坑より新しい。平面形は長径 187 cm、短径 157 cm の北東側に小さな突出部を有する不整楕円形を呈し、95 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがるが、北西と南西側の壁はほぼ直立している。底面は平坦で硬い。

覆土は、全体的に暗褐色土を基調とし、壁寄りに褐色土を多く含んでいる。各土層にはローム粒子を多量からきわめて多量、ローム小ブロックを少量から多量、炭化粒子、焼土粒子を少量から中量含み、上位が締まっており、下位は締まり弱い土層が堆積している。本坑の覆土の特徴は、ローム粒子が多く目立つことで、人為的な埋没土と考えられる。東側の覆土下位、底面より約 30 cm ほど浮いて長径 40 cm、短径 28 cm、層厚 12 cm のヤマトシジミを主体とする貝ブロックが検出されている。ローム粒子を少量含む暗褐色の混貝土層で、サラサラして締まりが弱い。

遺物は中央部から南東側にかけての覆土上・中位に多く出土し、下位には少ない。土器は 307 点とやや多く、加曽利 E Ⅲ式から堀之内 I 式期にかけての土器がみられるが、主体は加曽利 E Ⅲ式期のものである。他には土製円板（方形に加工）1 点、有孔円板 1 点がみられる。本坑の時期は、出土土器からみて加曽利 E Ⅲ式期と考えられる。

第 404 号土坑出土土器 (第 179 図 5～29)

第 179 図 5 は、やや太目の丸味をもつ隆線により曲線的モチーフが描かれ、縄文が充填されている胴部片で、第 II 類に属する。6 は口縁部無文帯を断面三角形の隆線と円形刺突列で区画し、以下に 2 本組の沈線で逆 U 字状の磨消帯を配している。7～12 は、第 IV 類土器で、7・8 が口縁部片、9～12 は胴部片である。7 には口縁直下に長楕円形の区画が描かれ、内部が磨消されている。きわめて珍しい例と思われる。他は U 字状、逆 U 字状の区画内に縄文が充填されている。10・11 は微隆線に沿ってナゾリの沈線が明瞭に加えられている。13～16 は、口縁部無文帯を 1 条の沈線（13・14）ないし凹線（15・16）で区画し、以下に縄文を施している。17・18 は幅の広い口縁部無文帯を断面三角形の隆線で区画し、以下に縄文を施しているが、口縁の外反が強く、鉢形土器と考えられる。19～21 は、口縁部無文帯を有し、以下に縄文を施している。22 は縄文のみの薄手の胴部片である。23・24 は、口縁部無文帯下に横位の条線文を施している。25 は沈線と曲線的条線文が組みあわされている胴部片である。26・27 は縄文と条線文が併施されている胴部片である。28・29 は無文の口縁部片で、横ナデが顕著に認められる。

第 406 号土坑 (第 139 図)

本坑は、調査区の北西端の L1b0 区を中心とした位置にあり、南西側で第 409 号土坑を切っている。平面形は長径 189 cm、短径 156 cm の不整楕円形を呈し、39 cm 掘り込まれており、底面の北東側に 60 × 52 cm ほどのピットがある。ピットの底面は平坦ではなく南東側で深くなり 27 cm を測る。壁はロームでゆるやかに外傾して立ちあがる。

覆土は中央部が暗褐色土、壁寄り褐色土が主となり、ローム粒子を中量から多量、炭化粒子少量を含む締まりのある土層が堆積している。ピット内も上位が暗褐色土、下位が褐色土である。

土器は中央部の暗褐色土中に多く密集するように包含されており、中には条線文を有する深鉢形土器も混じっている。出土土器の主体は堀之内 I 式土器である。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内 I 式期

と考えられる。

第 406 号土坑出土土器（第 174 図 12～30，第 179 図 1～4）

第 174 図 12 は，中央部の覆土上位から逆位で出土した破片を中心に 16 点が接合した深鉢形土器で，ほぼ直立気味に立ちあがり，口縁部がやや外反する。底部は欠失する。口縁部に幅 3～4 cm 程の無文帯を設け，難な浅い横位の沈線を巡らして区画し，以下に縦位に 4～5 本を単位とする櫛歯状施文具による条線文を施し，胴下半部は粗い縦ナデが施され，条線文が消されている。内面上半は横ナデ，下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で，色調はにぶい橙色を呈する。推定口径 23.6 cm，現存高 27.4 cm である。

13～23 は，縄文地文上に沈線を主とした文様が描かれる土器群で，13～16 が口縁部片，17～23 が胴部片である。13～15 は波状を呈し，波頂部が刺突や沈線で装飾され，以下に縄文や沈線が施されている。16 は口辺部に相当し，押圧を加えた隆帯が十字状に貼付されている。沈線は棒状工具による太目のもの（17～20），半截竹管状工具によるもの（23），細いもの（21・22）に分けられる。18 には刺突文が付加され，19 は薄手で小形土器と思われる。21・22 は施文の共通性から同一個体と考えられ，22 は底部近くとなり，無文部が観察される。23 は蕨手文の一部と思われる。24 は，無文地に矢羽根状の細沈線が描かれている胴下半部片である。25～27 は縄文のみの破片で，25・26 は口縁部片，27 は厚手の胴部片である。25 は波状を呈し，26 の縄文は縦位の帯状に施文されている。28・29 は，口縁部無文帯を細い沈線で区画し，以下に細沈線ないし条線文を付している。30・1～3 は，条線文が施されるもので，30 は口縁部片で縦位に，1・2 は胴部片で曲線的に施され，3 は厚手でやや太い条線文が縦位に施されている。4 は無文の口縁部片で，横位・縦位の順にナデが加えられている。

第 408 号土坑（第 139 図）

本坑は，調査区の北西端の L2b1 区を中心とした位置にあり，平面形は長径 127 cm，短径 122 cm の南東側がやや張り出す不整円形を呈し，中央部で 44 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがるが，南側壁はゆるやかな段を有する。底面は硬くほぼ平坦であるが，北側に向けて若干下る。

覆土は，中央部が黒褐色土，周りが暗褐色土，壁際が褐色土と徐々に明るくなり，ローム粒子も中量から少量，炭化粒子・焼土粒子を微量から少量含み，締まっており，自然堆積と考えられる。

遺物は中央部の覆土中位から下位にかけて集中して出土しており，北側の壁寄りからも少し出ている。底面直上から縄文のみを施した深鉢形土器が底部を北東方向にむけて横位の状態で出土している。出土点数は 82 点と少ないが，主体は堀之内 I 式土器である。本坑の時期は，出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 408 号土坑出土土器（第 180 図 1～11）

第 180 図 1 は，南東側の底面直上から底部を北東方向にむけた横位の状態で出土した大破片を中心に 78 点が接合した大形深鉢形土器で，胴中位に最大径を有し，頸部で若干くびれ，口縁部が外反する。口縁部には推定で 4 単位の低い山形突起を有し，突起部は少し肥厚し，頂部に横位の沈線が引かれている。口縁直下から胴部上半には無節縄文 L が横位回転で雑に施文され，胴下半部から底部にかけては縦ナデが施され，無文のままとなっている。全体に作りが悪く，凹凸が目立っている。内面上端のみ横ナデ，以下は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で，色調は外面が明赤褐色，内面がにぶい褐色を

呈する。推定口径 30.0 cm，底径 10.0 cm，器高 47.0 cm である。

2 は，中央やや西寄りの覆土の中・下位から出土した破片 17 点が接合した小形深鉢形土器で，胴部以下を欠失する。口縁部に推定で 3 か所のゆるい山形の突起を有し，以下全面に単節縄文 RL が横位回転で施文されているが，全体に磨滅が著しく不明確である。内面上端は横ナデ，以下は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で，色調は外面が明赤褐色，内面が橙色を呈する。推定口径 16.8 cm，現存高 9.4 cm である。

3～7 は，縄文地文上に沈線が描かれるもので，3～6 は施文の共通性から同一個体と判断される。口縁直下に 1 条の沈線を巡らし，胴部に蕨手文を数単位描き，モチーフ内を雑に磨消し，中間部には弧状文を描く。7 は厚手の胴部の小片で，同心円文などを施している。8 は沈線間に刺突を加えている胴部の小片である。9・10 は，無文の口縁部片で，9 はゆるい大きな波状を呈している。

11 は，中央やや南西寄りの覆土中位から底面を北方向にむけて出土した無文の底部片で，12 点が接合している。内外面とも縦ナデが施されているが，外面は雑で細い沈線状の擦痕が認められる。底面から 1.5～2 cm ほどは雑に横ナデされている。内面の下半には炭化物が付着している。底面は著しくあれている。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で，色調は外面が橙色，内面が明褐色を呈する。底径 10.0 cm，現存高 11.5 cm である。

第 428 号土坑（第 140 図）

本坑は，調査区の北西側の L2a6 区にあり，平面形は長径 132 cm，短径 102 cm の楕円形を呈し，21 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり，底面は平坦であるが，あまり硬くない。

覆土は，褐色土を主としており，南西側の小形鉢形土器が正位で出土した部分には締まりの弱い暗褐色土，黒褐色土が認められている。褐色土にはローム粒子少量を含み，上位では締まりが弱く，下位は粘性も締まりもある。

土器は上記の小形鉢形土器以外には 8 点の破片のみでごく少ない。小形鉢形土器は覆土の状態からみると本坑の南西側に小さな浅い穴を穿って埋設されたことも考えられるが，確認はできなかった。本坑の時期は，出土土器からみれば堀之内 I 式期と考えられる。

第 428 号土坑出土土器（第 180 図 12～14）

第 180 図 12 は，南西側の覆土上位に正位のはぼ完形の状態に埋設されていた小形鉢形土器で，口縁直下に棒状施文具による浅い押圧痕が 1 列巡り，胴上位に 2 本組の細い沈線による連続山形文が施されている。胴下半は縦ナデ，内面上半は横ナデ，斜ナデが施されている。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で，色調はにぶい褐色を呈する。口径 15.5 cm，底径 7.0 cm，器高 11.0 cm である。

13 は，口縁部無文帯を 1 条の隆線と沈線で区画し，以下に単節縄文 RL を斜位回転で施している。14 は，口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画し，以下に同じ施文具により蛇行懸垂文を数条垂下させている。

第 436 号土坑（第 140 図）

本坑は，調査区の北西端の L1a8 区にあり，南西側で第 5 号溝と接しており，第 86，117 号住居跡とも重複している。住居跡との新旧関係は不明である。平面形は長径 140 cm，短径 115 cm の南西側に小さな突出部をもつ不整楕円形を呈し，北東側の最深部で 94 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾し

て立ちあがり、西側壁は凹凸や段を有し、南西側壁はゆるやかに外傾し、北東側壁では底面から47 cm上った位置に幅10 cm程度の段を有している。底面は硬く良好であるが、南西から北東方向にむけて下っている。

覆土は、基本的の上中下の3層に分層され、上位に黒褐色土、中位に暗赤褐色土と極暗赤褐色土、及びふい赤褐色土、下位に黒褐色土と暗褐色土、及び極暗褐色土が主に堆積している。上位にはローム粒子中量、炭化粒子、焼土粒子少量を含み締まっている。中位は焼土粒子を多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量を含み締まりが弱い。焼土の広がり、中央部から北西側に及び最大長84 cm、最大幅50 cmで、46～48 cmの厚さを有する。西方から投げ込まれたことが土層の傾斜から判明する。下位は粗いローム粒子を多量からきわめて多量、炭化粒子中量を含み締まり弱い。壁際には部分的に褐色土が堆積している。

遺物は、覆土の上位の西壁寄りに深鉢形土器片が口縁部を南側にむけて正位につぶれた状態で出土し、中央やや南寄りの覆土下位には破片がまとまって出土している。土器は全体で201点あり、すべて堀之内I式土器である。この他に注目すべき遺物として、貝輪を模したと思われる土製腕輪の半欠品が出土している。出土位置は、覆土下位の南側で南東壁から約30 cm離れている。

本坑の時期は、出土土器からみて堀之内I式期と考えられる。

第436号土坑出土土器（第181図1～13）

第181図1は、西壁際の覆土上位から口縁部を南方向にむけて潰れた状態で出土した破片24点が接合した深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。推定で4単位のゆるい山形を呈する波頂部を有し、中央部に貫通孔をもち、左右に押圧を付している。口唇部は外削ぎ状を呈して無文で、以下全面に単節縄文LRが地文として施文され、多截竹管状施文具で渦巻文や直線文を施している。波頂部下にそれぞれ扁平な渦巻文が描かれ、これらの間を充填するように多条の沈線が縦位、斜位に施文され、口縁直下の波底部分には2条の沈線が波頂部をつなぐように描かれている。胴下半部は縦ナデが加えられ、無文となっている。内面上端は横ナデ、以下は縦ナデが施されている。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。推定口径31.0 cm、現存高39.0 cmである。

2～6は、縄文地文上に太目の沈線文が描かれるもので、2～4・6は施文の共通性から同一個体の可能性がある。口縁直下に円形刺突列を加え、胴部に7字状、弧状のモチーフを描き、モチーフ内を雑に磨消している。5は胴部の小片であるが、大きな円形貼付文がきわめて印象的である。7は、くの字状に強く屈曲する器形を呈し、太い沈線と突起を有する。壺形ないしは注口土器と思われるが確実ではない。8・9は、同一個体と思われる。口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、以下に粗い単節縄文LRを縦位回転で帯状に施文している。10は、条線文がわずかに認められる口縁部片である。11～13は、無文の口縁部片で、横位・縦位・斜位のナデが施されている。

第444号土坑（第141図）

本坑は、調査区の北西側のL2b3・c3区を中心とした位置に検出され、平面形は長径180 cm、短径150 cmの北側に張り出し部を有する不整楕円形を呈し、112 cm掘り込まれている。底面の北東側に最大長46 cm、最大幅34 cmの不定形の落ち込みがあり、最深部で15 cmを測る。北側の張り出し部は2段をなすが浅い。壁はロームで良好であるが、凹凸が著しい。上位は外傾するが、中位に段を有し以下は内側に挟り込まれている。特に北・東側は段が強く、挟り込みも大きい。所謂フラスコ状と形容したいが、くずれ

が激しい。底面はほぼ平坦で硬く、北東側に落ち込みを有する。

覆土は、暗褐色土が主であるが、底面近くと壁寄りに褐色土が多く認められる。ローム粒子を多量から中量、炭化粒子を中量から少量、焼土粒子を少量から微量含み締まっており、人為堆積と考えられる。覆土の南側には確認面直下から延びる長さ 73 cm、幅 4～6 cm の細長い暗褐色土が認められ、底面より 30 cm ほど上まで下りている。あるいは木杭などを立てた痕跡かもしれない。

土器は 56 点と少ないが、加曾利 E IV 式土器がまとまっている。本坑の時期は、出土土器からみて加曾利 E IV 式期と考えられる。

第 444 号土坑出土土器（第 182 図 1～11）

第 182 図 1～6 は、断面三角形の微隆線により U 字状、逆 U 字状のモチーフが器面全体に描かれる土器で、1～3 が口縁部片、4～6 が胴部片である。モチーフ内には縄文が充填されている。1 の微隆線の接点は高く突出し、2 には橋状把手が欠落した痕跡が明瞭に残されている。7 は、胴部がゆるくくびれる深鉢形土器で、肥厚した口唇部上面が凹み、小さな環状把手が付されている。器面全体に単節縄文 RL が縦位回転を主に横位でも施文されている。8・9 は、口縁部無文帯を断面三角形の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。10 は薄手の小形土器で、微隆線が垂下している。11 は、有孔鏝付土器の破片で、隆線と縄文がわずかに認められる。

第 450 号土坑（第 141 図）

本坑は、調査区の北西端の L1b8・b9 区を中心とした位置に検出され、南側で第 460 号土坑、北東側で第 461 号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。また、本坑の上面を北東から南西方向にかけて第 12 号溝が走っている。平面形は長径 183 cm、短径 148 cm の不整楕円形を呈し、72 cm 掘り込まれている。壁はロームで直立乃至はやや外傾して立ちあがり、底面はやや凹凸を有するが、硬く平坦である。

覆土は、暗褐色を呈し、ほぼ水平に堆積している。ローム粒子を多量からきわめて多量、ローム小ブロック、炭化粒子、焼土粒子少量を含み、いずれも良く締まっている。

土器は、中央部の覆土中位から深鉢形土器の大破片が口縁部を北東方向にむけて出土している。その他には赤彩された小形壺の破片などもある。出土点数は 135 点で、主体は堀之内 I 式土器である。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 450 号土坑出土土器（第 181 図 14～23）

第 181 図 14～16 は、縄文地文上に沈線が施される土器である。14 は胴部で少しくびれ、口縁部が外反する深鉢形土器で、口縁直下に隆線と沈線を各 1 条巡らし、沈線の一部は途切れ、3 個で 1 単位の刺突が加えられている。胴部には 2 重沈線による長方形文を描き、内部に単節縄文 LR を横位回転で充填している。15 は山形の波状縁を呈し、波頂部の盲孔から垂下する 3 条の沈線と左右からの斜行沈線で文様が構成されている。16 は胴部の小片である。17・18 は、薄手の破片で口縁部無文帯下と胴部に各 2 条の沈線を巡らし、沈線間を磨消し、区画間には縄文を施している。口縁部内面は強く突出している。19～21 は縄文のみの破片で、19 は口縁部片、20・21 は胴部片である。22 は口縁部無文帯下に曲線的な条線文が施されている。23 は半円弧状文が描かれている胴部片である。

第 451 号土坑 (第 141 図)

本坑は、調査区の北西端の L1c8・d8 区にかけて位置し、南西側上面を第 12 号溝により切られている。平面形は長径 116 cm、短径 104 cm の不整楕円形を呈し、175 cm と大変に深く掘り込まれている。壁はロームで、硬く良好であるが凹凸があり、特に西側は底面から約 30～35 cm 上った位置に最大径を有している。底面は中央部がやや凹むが、ほぼ平坦で硬い。

覆土は、基本的の上中下の 3 層に区分され、上中位は暗褐色土、極暗褐色土、黒褐色土で下位は褐色土である。上位はローム粒子多量、炭化粒子、焼土粒子中量を含み締まっている。中位は粗いローム粒子きわめて多量、炭化粒子中量から少量を含み、締まりが弱い。この中位には 2 か所の貝ブロックが上下にわかれて検出された。上位のブロックは、中央やや西寄りにあり、径 25 cm、厚さ 18 cm を測る極暗褐色を呈する混土貝層で、ハマグリ、シオフキを主としており、締まりが弱くやわらかい。下位のブロックは、中央部にあり、長径 28 cm、短径 26 cm、厚さ 19 cm を測る極暗褐色を呈する混土貝層で、風化した破砕貝を含み、締まりが弱くやわらかい。土層断面図には貝ブロックは一部しかあらわれていない。上下の貝ブロックの間には約 15 cm 程度の間層がある。下位は粗いローム粒子、ローム小ブロックをきわめて多量、炭化粒子少量を含み締まりが弱くやわらかい。以上の堆積状況からみて覆土は人為堆積と考えられる。

遺物は 170 点とやや多く出土し、覆土の上位から中位にかけての中央部から西側にかけてまとまって出土している。主体は堀之内 I 式土器で、加曾利 E Ⅲ 式土器も少量混入している。本坑の時期は、出土土器からみて堀之内 I 式期と考えられる。

第 451 号土坑出土土器 (第 183 図 1～19)

第 183 図 1 は、西寄りの覆土中位からまとまって出土した大破片を中心に 16 点が接合したもので、推定で 4 単位の山形の突起を有する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。上面観が楕円形を呈する。外面全体に単節縄文 LR が横位回転を主として施文され、一部に斜位回転の個所もある。内面は縦ナデを主とするが、上端は横位、中位の一部は斜位に施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。口径の長径部分で 31.0 cm、現存高 24.9 cm である。

2・3 は、橋状把手や刺突を主にした装飾が施される口縁部片である。4 は、口縁直下に沈線が巡り、以下に縄文が施されている口縁部片である。5 は、屈曲の著しい器形を呈する胴部片で、縄文地文上に「し」の字状や横位棒状のモチーフを 2 本組の沈線で描き、沈線間を磨消している。文様帯の下端は隆線で区切られ、「し」の字文の上下端には刺突を加えた円形貼付文が付されており、綱取 I 式土器の範疇に含まれよう。6～8 は、縄文の装飾を主体とする土器で、6・7 は口縁部片、8 は胴部片である。6 の口縁直下には大き目の円形刺突列が並び、以下に粗い単節縄文 LR が施されている。9 は格子目状の撚糸文が施されている胴部片である。10～17 は、条線文が施文の主体となる土器群で、10 と 11、12 と 14 はそれぞれの施文の共通性から同一個体と考えられる。10・11 は口唇部が尖り、雨垂れ状の刺突文が施されている。12・14・16・17 は、曲線的な条線文が垂下するもので、12 の口縁部にはわずかに無文帯を有している。13 は薄手の口縁部片で、口縁部無文帯を 1 条の沈線で区画し、以下に条線文を曲線的に垂下させている。15 は口縁部無文帯を 4 条の条線で区切り、以下に同じ施文具による条線を縦位に施文している。18 は斜行する 2 条の沈線と刺突文が施された胴部の小片である。

19 は、北側の覆土中位から出土した破片と上位の貝ブロック中から出土した底部破片など 9 点が接合したもので、深鉢形土器の胴下半部以下が残存する。外面は縦ナデの後に上端に細い斜行沈線が施文され、内

面は軽いナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい橙色を呈する。底径 8.6 cm、現存高 9.0 cm である。

第 458 号土坑（第 141 図）

本坑は、調査区の北側の K1j9・j0 区にかけて検出され、北東側を第 459 号土坑により切られている。平面形は、推定となるが長径 151 cm、短径 145 cm の不整形円形を呈し、南東側に最大長 100 cm、最大幅 30 cm のテラス状の段を有しており、65 cm 掘り込まれている。壁はロームでやや外傾して立ちあがり、底面は中央部に 33 × 27 cm、深さ 15 cm の浅い小ピットをもつほかは平坦で硬い。また、南西側に壁の中位を横穴状に掘り込んだ遺構が検出された。その穴は底面も浅く掘り込み、南西方向にむかって壁から約 70 cm 入っており、最大幅は 42 cm を測る。覆土は粗いローム粒子多量、炭化粒子少量を含む暗褐色土で、締まっている。テラス部には南西から北東方向にむけて更に 2 段の段を有し、廻り階段状を呈している。

覆土は、暗褐色土を主とし、壁寄りにわずかに褐色土が堆積している。上位にはローム粒子中量、炭化粒子、焼土粒子を微量含み、締まっている。下位は粗いローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子少量を含み、締まっている。

土器は 27 点出土しているが、磨滅したものが多く時期が不明瞭であるが、中期後半から後期前半にかけてのものである。本坑の時期は、出土土器からみて後期前半と考えられる。

第 458 号土坑出土土器（第 184 図 1～3）

第 184 図 1 は、口辺部から胴部にかけての大破片で、口縁部無文帯を 1 条の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。2 は、口縁直下に 1 条の沈線を巡らすことを特徴とする口縁部片で、沈線文がわずかに認められる。3 は、口唇部を欠く口辺部片で、横位の帯状縄文が施されている。

第 465 号土坑（第 142 図）

本坑は、調査区の北西側の L2a3 区に確認された小さなピット状の土坑である。2 基のピットの重複とも考えられ、中央部に明褐色のロームの壁を有する。平面形は長径 75 cm、短径 65 cm の不定形を呈し、ピットの最深部で 107 cm 掘り込まれている。壁はロームで北西側はほぼ直立するが、その他は外傾して立ちあがる。底面はほぼ平坦で硬いが、ピットを有するため平坦面が少ない。

覆土は、上位が暗褐色、下位が褐色を呈しており、暗褐色土にはローム粒子をきわめて多量、風化した二枚貝を少量含み締まりが弱い。褐色土には粗いローム粒子、ロームブロックを多量、炭化粒子少量を含み締まっている。これらの土層にわずかに風化した貝片が混じっている。

土器は、11 点と少ないが、加曽利 E Ⅲ式から堀之内 I 式期にかけての土器が含まれている。本坑の時期は、出土土器からみて後期前葉と考えられる。

第 465 号土坑出土土器（第 184 図 4～6）

第 184 図 4～6 は、いずれも胴部片である。4 には直線的な磨消帯が垂下し、5 には縄文を主とするが、左端に沈線が認められている。6 は厚手で縄文だけが施されている。

第 484 号土坑（第 143 図）

本坑は、調査区の南側の M3f₂区を中心とした位置にあり、北西側で第 485 号土坑と、東側で第 486 号土坑、南東側で第 489 号土坑と重複しているが、覆土の堆積状態および出土遺物からみて本坑が最も新しいと判断される。いずれも第 103 号住居跡の東側の貼り床の下に検出されている。平面形は長径 140 cm、短径 120 cm の不整楕円形を呈し、80 cm 掘り込まれている。壁はロームでほぼ直立かわずかに外傾して立ちあがり、底面は中央部がわずかに凹むが、ほぼ平坦で硬い。

覆土は、粗いローム粒子、焼土粒子をきわめて多量に含む締まり弱いザラザラしたにぶい赤褐色土が中央部に凹レンズ状に堆積している。壁寄りと底面近くには粗いローム粒子、ローム粒子を多量から中量、炭化粒子、焼土粒子を中量から少量含む締まりある褐色土、暗褐色土が堆積している。覆土は人為堆積と考えられる。

遺物は 86 点とやや少ないが、加曾利 E IV 式土器を主体としている。他には土製円板 1 点がみられる。本坑の時期は、他遺構との重複関係および出土土器からみて加曾利 E IV 式期と考えられる。

第 484 号土坑出土土器（第 184 図 7～16）

第 184 図 7～11 は、断面三角形を呈する微隆線で口縁部無文帯を区画し、以下に縄文を施している。9 には剝落が認められる。12 は、縄文と磨消帯が沈線で区画される胴部片である。13・14 は縄文のみの胴部片である。15 は、口縁直下にわずかに無文帯を残し、以下に条線文を密に縦位に施している。16 は無文の口縁部片で、口縁直下に指圧様の圧痕が認められる。

第 486 号土坑（第 143 図）

本坑は、調査区の南側の M3f₃・g₃区にまたがって検出され、西側で第 484 号土坑、南西側で第 489 号土坑、東側で第 490 号土坑と重複しているが、本坑は覆土の堆積状態および出土遺物から判断して、第 489 号土坑よりは新しく、第 484、490 号土坑よりは古いと思われる。平面形は長径 157 cm、短径 144 cm の不整楕円形を呈し、最深部で 120 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は硬く良好で、北東側が少し低く南西方向にむけて徐々に上っている。

覆土は、最上部に若干の攪乱を受けているが、その他はきわめて多量の焼土粒子と粗いローム粒子を含む締まった赤褐色土、暗赤褐色土、にぶい赤褐色土が堆積している。壁寄りには褐色土と黄褐色土があり、壁の崩落土と考えられる。

土器は 205 点とやや多く出土し、その主体は加曾利 E III 式土器の新しい段階と考えられる土器群で、柳澤清一氏の言う「加曾利 E 3-4 中間式」に対比されるものと思われる。したがって、本坑の時期は、加曾利 E III 式期の新しい段階と考えられる。

第 486 号土坑出土土器（第 184 図 17～33）

第 184 図 17～20 は、第 II 類土器に属し、20 以外は口縁部片である。隆線は 1 本単位で丸味をもっている。21 は、口縁直下に刺突列が巡り、以下の縄文地文上に逆 U 字状の磨消帯が配されている。22 は、口縁部無文帯を断面三角形の微隆線で区画し、以下に縄文を施す口縁部片であるが、口縁直下と微隆線の上下に沿って刺突列が巡る点が特徴となっている。23・24 は、微隆線による区画内に縄文が充填される胴部片である。25～28 は、口縁部無文帯を 1 条の凹線で区画し、以下に縄文を施している。29・30 は、

口縁部無文帯を微隆線で区画し、以下に縄文を施している。31・32は縄文のみが施され、31が口縁部片、32が胴部片である。33は条線文と縄文が併施される胴部片である。

第525号土坑（第144図）

本坑は、調査区の南西側のM2d7・d8区にかけて検出され、第102号住居跡の北西壁により南側の一部を削り取られている。平面形は、推定で長径141cm、短径137cmの不整円形を呈し、42cm掘り込まれている。壁はロームでゆるやかに外傾して立ちあがり、底面は北から南方向にやや下っていて楕円状を呈する。

覆土は、中央部上位に暗褐色土、壁際と下位に褐色土が堆積している。暗褐色土にはローム粒子中量、炭化粒子、焼土粒子微量を含み締まっており、褐色土にもローム粒子中量から多量、炭化粒子、焼土粒子を少量から微量を含み締まっている。

覆土の下位、底面から10～15cmほど浮いて深鉢形土器の半欠品が口縁部を西方にむけて横位に出土し、そのすぐ南側の底面から2～3cm浮いて完形の蓋形土器が逆位で出土している。前者は暗褐色土の下位に、後者は褐色土中から出土しているが、両者は密接な関連をもって出土したものと思われ、このことから本坑の埋土は人為的なものと考えられる。

遺物は、上記の2点を含めて81点出土しており、主体は堀之内I式土器である。本坑の時期は堀之内I式期と考えられる。性格は墓壇かと思われる。

第525号土坑出土土器（第185図1～13）

第185図1は、南西寄りの覆土の中位（底面から約15cm上）から口縁部を西に向けた横位の状態で出土した深鉢形土器で、底部を欠損している。口縁部に推定で4単位の小突起を有し、胴部全体に雑な弧状を呈する条線文を施している。器形の整形も不良で、凹凸があり、胴下半部は2次加熱を受けて赤褐色を呈し、剥落が著しい。内面は縦ナデが顕著に施され、下半部には炭化物が付着している。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は普通で、色調は褐色を呈する。推定口径18.8cm、現存高21.8cmである。

2・3は、無文の口縁部片で、2は山形の波頂部を有している。4は口縁部無文帯を1条の沈線で区画している。5～8は雑な沈線が施される胴部片で、5・6には小さな円形刺突列が横位に巡っている。9・10は沈線と刺突文が組みあわされた胴部片である。11は縦位の条線文が間隔をおいて施される胴部片である。12は曲線的な磨消縄文が施される胴部片である。

13は、南西寄りのほぼ底面から逆位で出土した蓋形土器で、周縁に細かな欠損と剥落がある。下面は中央部が凹む形状を示すが、アバタ状の剥落痕がきわめて多く、整形方向は不明である。上面は環状把手が2個付くほかは無文で、軽いナデが施されている。胎土は石英粒の他に砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は外面が赤色で、内面ににぶい赤褐色を呈する。長径15.3cm、短径14.5cm、器高1.1cmである。

第531号土坑（第144図）

本坑は、調査区の南側のM2f8・f9区にかけて検出され、第107号住居跡の東側周溝下に位置している。平面形は長径187cm、短径152cmの不整楕円形を呈し、東側の低い部分で123cm掘り込まれている。壁はロームで西側はほぼ直立するが、北東側は外傾し、南東側では内傾しわずかにフラスコ状土坑のような形状を呈する。底面は硬く良好であるが、西から東方向へ傾斜している。

覆土は、基本的に上中下の3層に区分され、上位に暗褐色土、極暗褐色土、中位に褐色土、下位と壁際に明褐色土が堆積している。暗褐色土、極暗褐色土はローム粒子多量、炭化粒子少量を含み締まっている。褐色土はローム粒子、粗いローム粒子を多量からきわめて多量、ロームブロックを少量から多量に混じり、炭化粒子を少量含み締まっている。明褐色土は粗いローム粒子多量、ロームブロック少量を含み、壁の崩落により形成されたものと思われる。

土器は64点と少ないが、加曽利EⅣ式から加曽利B式にかけての資料が含まれている。本坑の時期は、出土土器からみれば、加曽利B式期の可能性が高く、注意される。

第531号土坑出土土器（第185図14～26）

第185図14・15は、断面三角形を呈する微隆線による施文がみられるもので、14は口縁部無文帯を微隆線で区画し、以下に縄文を施している。15はやや厚手の胴部片である。16～18は、横位の（17・18）ないし幾何学的な（16）磨消文が施されるもので、16は堀之内Ⅱ式、17・18は加曽利BⅠ式土器に対比される。17の口唇部には刻み目が付され、18には縦位の区切りの短沈線が施されている。19は、口唇部が肥厚する口縁部片で、斜位の沈線が描かれており、加曽利BⅡ式土器と思われる。20～25は、上記の後期の土器群に伴う粗製土器で、21・24・25が口縁部片で、他は胴部片である。20は縄文地文上に斜行沈線が雑に施されている。21は口縁直下に押圧を加えた紐線が1条巡り、以下は粗い縄文地文上に横位に沈線が施されている。22・23は縄文のみの胴部片で、22の縄文は粗く、23は細かい。24・25は口縁部に押圧を付した1～2条の紐線が巡り、以下の縄文地文上に横位の沈線が数条施されている。24の紐線は細く、25は太く明瞭である。

26は、覆土中から出土した小形深鉢形土器の底部片で、底部が突出している。底面には網代痕が認められる。薄手で内外面とも横ナデが施されている。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。推定底径6.1cm、現存高3.2cmである。

表2 南三島遺跡3区土坑一覽表

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製 品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
1	K2 c ₂	N - 52°- W	不 定 形	68×62×28	外傾	皿状	自然	G I a	8	後期				119
10	K2 e ₄	N - 19°- E	隅 丸 方 形	110×84×60	外傾	平坦	自然	F II b	5	不明				119
15	K2 e ₅		不 整 円 形	107×100×74	垂直	平坦	自然	B II b	26	中後 後期		SK53		119
16	K2 f ₅		不 整 円 形	108×104×66	垂直	平坦	自然	B II b	42	中後 後期				119
17	K2 d ₅		不 整 円 形	100×95×80	垂直	平坦	人為	B II b	17	後 期		SK18		119
18	K2 d ₆	N - 56°- W	(楕 円 形)	(135)×107×30	垂直	平坦	自然	B II a	8	加E III	土器片 錘1	SK17 19		119
20	K2 e ₄		不 整 円 形	105×91×22	垂直	平坦	自然	B II a	12	加E III				119
21	K2 e ₆		不 整 円 形	107×106×58	垂直	平坦	自然	B II b	28	加E III	土器片 錘1			119
22	K2 d ₇		不 整 円 形	93×83×46	垂直	平坦	自然	B I a	2	加E III				119
23	K2 e ₇		不 整 円 形	91×81×31	垂直	平坦	自然	B I a	56	称 II				119
26	K2 f ₆	N - 62°- W	隅丸長方形	176×54×44	外傾	平坦	人為	F II a	27	不明				119
27	K2 e ₈	N - 18.5°- E	楕 円 形	95×77×39	外傾	凹凸	自然	A I a	15	不明				119
28	K2 f ₇		不 整 円 形	145×132×118	垂直	平坦	自然	B II c	335	堀 I		SK37		119
29	K2 f ₈		不 整 円 形	138×117×16	外傾	凹凸	自然	A II a	15	称 I				119
30	K2 e ₇	N - 67°- W	不整楕円形	195×81×72	外傾	凹凸	自然	A II b	47	不明			倒木跡	119
31	K2 g ₇	N - 23°- E	不 定 形	107×98×82	外傾	凹凸	自然	G II b	67	不明			倒木跡	119
32	K2 g ₅	N - 14°- E	不 定 形	95×57×55	外傾	凹凸	自然	G I b	22	不明			倒木跡	119
34	K2 f ₅	N - 18.5°- E	不 定 形	106×95×40	外傾	凹凸	自然	G II a	20	不明			倒木跡	120
35	K2 f ₄		(不 整 円 形)	136×(125)×97	袋状	平坦	自然	D II b	94	称II～ 堀I	土器片 錘1			120
36	K2 f ₅		不 整 円 形	93×80×26	外傾	平坦	自然	A I a	8	不明		SK16		119
37	K2 f ₇	N - 10°- E	(不整楕円形)	118×(104)×109	外傾	平坦	人為	A II c	0	不明		SK28		119
38	K2 g ₆	N - 19.5°- E	不整楕円形	184×76×62	外傾	平坦	自然	A II b	96	不明	蓋1	SK39 SD1		120
39	K2 g ₅	N - 6°- E	(不整楕円形)	149×(75)×77	外傾	平坦	自然	A II b	30	不明		SK38 SD1		120
40	K2 g ₆	N - 48°- E	不整楕円形	102×68×86	外傾	平坦	自然	A II b	60	不明		SK55 SD1		120
42	K2 g ₆	N - 25.5°- E	不整楕円形	126×68×63	外傾	北西側に傾く	人為	A II b	59	不明		SK33		120
44	K2 h ₄		不 整 円 形	140×136×50	垂直	平坦	人為	B II b	12	不明				120
45	K2 h ₃		不 整 円 形	168×145×88	垂直	平坦	人為	B II b	196	称II～ 堀I				120
48	K2 h ₅	N - 60.5°- E	不整楕円形	60×48×40	外傾	南西側に傾く	人為	A I a	1	不明		SD1		120
53	K2 f ₅	N - 41°- E	楕 円 形	78×61×70	垂直	平坦	自然	B I b	0	不明		SK15		119
54	K2 f ₆	N - 30.5°- E	(不整楕円形)	(180)×78×74	外傾	平坦	自然	A II b	4	不明		SK61 SD1		120
55	K2 g ₆	N - 86°- E	不整楕円形	105×61×70	外傾	平坦	自然	A II b	0	不明		SK40 SD1		120
56	K2 h ₅	N - 27.5°- W	不整楕円形	123×95×67	外傾	平坦	人為	A II b	107	堀 I		SD1		120
58	K2 f ₉		不 整 円 形	122×110×26	外傾	皿状	人為	A II a	20	後 期			貝ブロンク あり	120
60	K2 g ₆	N - 21°- W	不整楕円形	255×151×94	外傾	平坦	人為	A III b	178	中～ 後期	土製円 板1	S11 SK100 119,122		120
62	K2 f ₉		不 整 円 形	107×106×34	外傾	平坦	自然	A II a	35	称 I				121

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製 品	重複 関係	備 考	捕図 番号
				長径×短径×深さ										
63	K2g ₀	N - 62° - E	(楕 円 形)	(180)×(144)×44	外傾	平坦	自然	A IIa	104	堀 I		SI 1 SK67		121
64	K2f ₀		不 整 円 形	134×116×64	外傾	平坦	自然	A IIb	129	称Ⅱ 堀 I		SK70		121
65	K2g ₉		不 整 円 形	141×125×28	外傾	平坦	自然	A IIa	39	中～ 後期				121
66	K2h ₆	N - 38.5° - E	不 整 楕 円 形	138×105×42	外傾	皿状	人為	A IIa	27	堀 I		SD 1		121
67	K2g ₀	N - 41° - W	不 整 楕 円 形	211×87×42	外傾	皿状	自然	A IIIa	34	中～ 後期		SI 1 SK63		121
68	K2g ₀		不 整 円 形	144×130×82	外傾	平坦	人為	A IIb	91	加E III	不 明 土製品1	SK100		121
69	K3f ₁	N - 25.5° - E	隅 丸 長 方 形	138×107×72	外傾	平坦	自然	F IIb	37	加E III	有 孔 円 板 1			121
70	K2f ₀	N - 24° - E	(楕 円 形)	(173)×132×57	垂直	平坦	自然	B IIb	0	不 明		SK64		121
72	K2g ₇	N - 17° - E	不 整 楕 円 形	100×80×115	外傾	平坦	人為	A IIc	45	中～ 後期				121
73	K2h ₇	N - 84° - W	不 整 楕 円 形	157×130×47	垂直	平坦	人為	B IIa	78	称 I			目アロツク あり	121
74	K2i ₇	N - 26.5° - E	隅 丸 方 形	119×113×26	外傾	平坦	人為	A IIa	51	不 明				121
75	K2j ₇	N - 42° - E	楕 円 形	79×64×28	外傾	平坦	人為	A Ia	3	不 明				121
76	K2j ₇	N - 1° - W	隅 丸 長 方 形	97×76×30	外傾	平坦	自然	F Ia	23	堀 I				121
77	K2i ₈		不 整 円 形	192×180×68	垂直	平坦	自然	B IIb	20	加E IV		SK90		121
78	K2i ₈	N - 67° - W	隅 丸 長 方 形	151×118×31	外傾	平坦	自然	F IIa	147	中～ 後期				121
79	K2i ₉		不 整 円 形	110×108×32	外傾	皿状	自然	A IIa	24	不 明				122
80	K2h ₈	N - 26° - E	隅 丸 長 方 形	145×97×32	外傾	平坦	自然	F IIa	49	不 明				122
81	K2g ₈		不 整 円 形	74×68×44	外傾	平坦	自然	A Ia	11	不 明				122
82	K2i ₀	N - 62° - E	不 整 楕 円 形	98×79×39	外傾	西側に 傾く	自然	A Ia	47	堀 I		SK83		122
83	K2i ₉	N - 42° - W	不 整 楕 円 形	65×43×64	外傾	南東側 に傾く	自然	A Ib	96	堀 I		SK82		122
84	K2j ₇		不 整 円 形	90×86×20	外傾	平坦	人為	A Ia	55	堀 I		M 1		122
85	K3i ₆		不 整 円 形	84×75×21	外傾	凹凸	自然	A Ia	4	称Ⅱ～ 堀 I				122
88	K2h ₀		不 整 円 形	128×120×69	外傾	ゆるい 起 状	自然	A IIb	209	加E III	土 器 片 鏝 2	SI 1		122
90	K2i ₈	N - 1.5° - E	(不 整 楕 円 形)	215×(157)×29	外傾	ゆるやかに 南西側に 傾く	自然	A IIIa	0	不 明		SK77		121
91	K2i ₃	N - 55° - W	不 整 楕 円 形	152×99×83	外傾	南西側 に傾く	自然	A IIb	90	堀 I				122
92	K2j ₃	N - 34.5° - W	(不 整 楕 円 形)	(124)×(90)×(33)	外傾	ゆるい 起 状	自然	A IIa	278	堀 I		SK120 SX 1		122
95	K2j ₃	N - 58.5° - E	(楕 円 形)	(126)×(99)×(29)	外傾	皿状	自然	A IIa	646	堀 I	土 器 片 鏝 1 土 製 円 板 1	SK121 SX 1		122
96	K2j ₄	N - 80.5° - E	不 整 楕 円 形	110×88×26	外傾	平坦	自然	A IIa	0	不 明				122
100	K2g ₀	N - 18° - E	(長 楕 円 形)	294)×(116)×20	外傾	ゆるい 起 状	自然	A IIIa	6	中～ 後期		SI 1 SK68 122		122
101	K2j ₂	N - 33° - E	不 整 楕 円 形	220×180×82	外傾	平坦	自然	A IIIb	166	中～ 後期	土 器 片 鏝 1	SK107		123
102	K2j ₂	N - 21° - W	不 整 楕 円 形	154×122×88	外傾	皿状	自然	A IIb	279	堀 I	有 孔 円 板 1	SK107 115		123
103	K2i ₂	N - 60.5° - W	不 整 楕 円 形	117×98×33	外傾	平坦	自然	A IIa	138	堀 I				122
104	K2i ₃		不 整 円 形	106×100×109	垂直	平坦	人為	B IIc	225	称 II	動 物 把 手 1			122
105	L2a ₄	N - 25.5° - E	不 定 形	242×210×46	外傾	ゆるやかに 傾く	自然	A IIIa	23	早 期			第 1 分 穴	122
106	K2j ₂		不 整 円 形	131×116×102	外傾	凹凸	自然	A IIc	437	堀 I	土 器 片 鏝 1	SK115		123

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
107	K2j ₂	N - 46° - W	(楕 円 形)	(174)×(131)×53	外傾	ゆるい 起伏	自然	AⅡb	0	堀 I		SK101. 102.115		123
108	K2j ₅	N - 57° - W	不整楕円形	225×163×34	外傾	ゆるい 起伏	自然	AⅢa	86	堀 I				122
109	K2j ₅		不整円形	155×141×23	外傾	平坦	自然	AⅡa	33	堀 I		SK113		123
110	K2j ₅		不整円形	120×109×41	外傾	平坦	自然	AⅡa	41	堀 I				123
111	L2b ₇	N - 44.5° - E	不整楕円形	130×116×20	外傾	平坦	自然	AⅡa	52	不明				123
112	K2i ₃	N - 79.5° - W	不整楕円形	160×118×37	外傾	凹凸	人為	AⅡa	52	後期		SK93 94	貝ブロッ クあり	123
113	K2j ₅	N - 31.5° - E	不整楕円形	71×57×21	垂直	平坦	自然	BⅠa	24	後期		SK109		123
114	K2g ₆		不整円形	111×102×32	外傾	凹凸	人為	AⅡa	9	加EⅣ			屋外炉?	123
115	K2j ₂	N - 21.5° - E	(不整楕円形)	(378)×(117)×66	外傾	凹凸	自然	AⅢb	133	称Ⅱ～ 堀Ⅰ		SK102.106 107		123
116	L2c ₉	N - 40.5° - W	楕 円 形	174×142×48	外傾	凹凸	自然	AⅡa	58	早 期	磨石 2	SI 5 SK131	第2号 炉 穴	123
117	L2a ₀		不整円形	182×164×182	外傾	平坦	自然	AⅡc	46	加EⅢ		SK118		123
119	K2g ₀	N - 34° - W	瓢 不整楕円形	(209)×(114)×115	外傾	皿状	人為	AⅢc	33	堀 I		SI 1.SK60 67		124
120	K2j ₃	N - 62° - W	(不整楕円形)	(115)×(103)×(79)	外傾	ゆるい 起伏	自然	AⅡb	0	不明		SK1.SK92 121		124
121	K2j ₃	N - 62° - W	(不整楕円形)	(137)×(112)×(52)	外傾	平坦	自然	AⅡb	0	不明		SK95.120 SX1		124
123	K2j ₀	N - 27.5° - W	不整円形	94×93×38	外傾	平坦	人為	AⅠa	18	加EⅢ		SI 3	貝ブロッ クあり	124
124	K3j ₆	N - 20.5° - E	不整楕円形	99×83×85	外傾	平坦	自然	AⅠb	14	中～ 後期				124
127	L2c ₆	N - 52.5° - E	不整楕円形	140×124×34	外傾	皿状	自然	AⅡa	23	堀 I				124
129	K2i ₅	N - 38° - W	不 定 形	166×118×87	外傾	碗状	自然	GⅡb	22	不明				124
130	L2a ₇	N - 52.5° - E	不整楕円形	146×120×18	ゆるやかに 外傾	ゆるい 起伏	自然	AⅡa	12	不明		SI 4		124
131	L2c ₉		(不整円形)	(162)×148×92	外傾	平坦	自然	AⅡb	9	加EⅢ		SI 5 SK116.132		123
132	L2c ₉		(不整円形)	(151)×(144)×44	外傾	平坦	自然	AⅡa	10	不明		SI 5 SK116.131		123
134	L3a ₅	N - 9° - W	楕 円 形	174×147×28	外傾	平坦	自然	AⅡa	13	称 I		SK135		124
135	L3a ₅	N - 52° - E	楕 円 形	96×64×26	外傾	凹凸	自然	AⅠa	7	加EⅢ ～堀Ⅰ		SK134		124
137	L2a ₇		不整円形	132×121×17	外傾	皿状	自然	AⅡa	6	堀 I		SI 4 SK138		124
138	L2a ₆	N - 66° - E	不整長方形	180×109×37	外傾	皿状	自然	AⅡa	75	不明		SI 4 SK137.294		124
139	L2a ₉	N - 47° - E	(不整楕円形)	(280)×(186)×60	外傾	碗状	人為	AⅢb	230	堀 I		SK172 173		124
141	L3c ₃	N - 23° - E	楕 円 形	210×163×33	外傾	ゆるい 起伏	自然	AⅢa	47	加EⅣ ～称				124
143	L3c ₂	N - 17° - W	楕 円 形	195×164×25	外傾	平坦	自然	AⅡa	20	加EⅣ ～称				125
148	K3h ₄	N - 34.5° - E	不整楕円形	139×118×26	外傾	凹凸	自然	AⅡa	68	堀 II		SI 7		125
149	L3a ₄	N - 29.5° - W	(不整楕円形)	158×(117)×45	外傾	ゆるい 起伏	自然	AⅡa	103	中～ 後期	土器片 鏝 2	SK170		125
150	L3c ₃		不整円形	112×102×33	外傾	平坦	自然	AⅡa	15	加EⅢ				125
151	L3d ₃		不整円形	130×126×30	外傾	平坦	自然	AⅡa	26	中～ 後期				125
154	L3d ₄	N - 50° - W	楕 円 形	286×201×26	外傾	平坦	自然	AⅢa	138	加EⅣ				125
156	L3a ₂		(不整円形)	163×(152)×113	垂直	平坦	自然	BⅡc	158	加EⅢ	土器片 鏝 7	SK193 SD3		125
157	L3a ₂	N - 35° - E	不整楕円形	75×60×65	外傾	碗状	自然	AⅠb	0	不明		SK193		125

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製 品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
158	K3h ₆	N - 6.5° - E	楕 円 形	125×100×90	外傾	平坦	自然	A IIb	127	中～ 後期		SI 10 SK159		125
159	K3h ₅		不 整 円 形	118×104×101	垂直	平坦	自然	B IIc	91	中～ 後期	不明土 製品 1	SK158		125
160	K3i ₃	N - 65° - W	不 整 方 形	90×78×64	垂直	凹凸	自然	F Ib	7	不 明		SI 79 SD 3		125
161	L3d ₄		不 整 円 形	161×155×31	外傾	平坦	自然	A IIa	13	中～ 後期		SK 174		125
162	L3d ₃	N - 27° - E	(楕 円 形)	(155)×96×29	外傾	皿状	自然	A IIa	15	後 期		SK165 175		126
163	L3e ₅	N - 80° - W	不 整 楕 円 形	116×100×32	外傾	ゆるい 起伏	自然	A IIa	13	中～ 後期		SK183		126
164	L3d ₃	N - 66.5° - E	不 整 楕 円 形	146×110×26	外傾	平坦	自然	A IIa	6	加EIV				126
165	L3e ₃		不 整 円 形	108×101×29	外傾	平坦	自然	A IIa	19	称 II		SK162 175		126
166	L2a ₇	N - 5° - E	楕 円 形	94×73×20	外傾	ゆるい 起伏	人為	A Ia	5	称 II			ブロック あり	125
167	K3i ₄	N - 14.5° - W	楕 円 形	110×98×36	外傾	碗状	自然	A IIa	8	中～ 後期		SI 7		126
169	K3h ₃	N - 5° - W	楕 円 形	170×96×62	外傾	凹凸	自然	A IIb	11	不 明		SI 7		126
170	L3a ₄	N - 6.5° - W	楕 円 形	115×91×50	外傾	平坦	自然	A IIb	31	堀 I		SK149		125
171	L3b ₁	N - 35° - E	不 整 楕 円 形	183×82×96	外傾	凹凸	自然	A IIb	12	不 明		S 113		126
172	L2a ₈	N - 55° - E	不 整 楕 円 形	94×70×211	垂直	平坦	人為	B Ic	50	堀 I	石鏝 1	SK139 173		124
173	L2b ₈		(不 整 円 形)	(100)×98×160	垂直	平坦	人為	B IIc	48	堀 I	土器片 鏝 1	SK139 172	ブロック 魚骨あり	124
174	L3d ₄		(不 整 円 形)	(100)×98×160	垂直	平坦	人為	B IIc	0	不 明		SK161		126
175	L3d ₄		不 整 円 形	78×68×221	垂直	平坦	自然	B Ic	5	堀 I		SK162 165		126
176	K3h ₆		(不 整 円 形)	98×(87)×76	外傾	凹凸	人為	A Ib	13	加 E		SI 10		126
177	K3h ₅		不 整 円 形	172×164×62	外傾	平坦	自然	A IIb	113	中～ 後期		SI 10 SK 191		126
178	K3g ₆		(不 整 円 形)	220×(208)×100	外傾	平坦	人為	A IIIc	548	加EIII	土器片 鏝12	SI 10		126
179	K3h ₆		(不 整 円 形)	(153)×(138)×75	外傾	平坦	人為	A IIb	40	加EIV ～称		SI 10		126
180	L2g ₈		不 整 円 形	148×148×51	外傾	南側に 傾く	自然	A IIb	3	中～ 後期				126
181	L2e ₈	N - 0°	(楕 円 形)	(194)×116×50	外傾	碗状	自然	A IIb	14	早 期		SK182	第 3 号 炉穴	126
182	L2e ₈	N - 59° - W	(楕 円 形)	120×(90)×175	垂直	平坦	自然	B IIc	3	中 期		SK181		126
183	L3e ₅		不 整 円 形	140×132×110	垂直	平坦	人為	B IIc	1	中 期		SK163		127
184	K3i ₃	N - 30° - E	不 定 形	82×67×65	外傾	碗状	自然	G Ib	6	不 明		SI 79 SK160 SD3		127
185	K3i ₃	N - 35° - W	不 整 楕 円 形	113×75×59	外傾	ゆるい 起伏	人為	A IIb	58	中～ 後期		SI 79 SD 3		127
188	L2f ₀	N - 60° - E	(不 整 長 楕 円 形)	(212)×102×58	外傾	ゆるい 起伏	自然	A IIIb	41	早 期	播器 1	SK192,197 SD3	第 4 号 炉穴	127
191	K3h ₅		不 整 円 形	146×123×76	外傾	平坦	自然	A IIb	45	中～ 後期	土器片鏝 1 土製円板 1	SI 10 SK177		127
192	L2f ₀	N - 47° - E	(楕 円 形)	(152)×(112)×90	外傾	平坦	自然	A IIb	3	不 明		SK188 197		127
193	L3a ₂	N - 23° - E	(不 整 楕 円 形)	152×(80)×80	外傾	碗状	自然	A IIb	0	不 明		SK156, 157, SD3		127
194	K3g ₅	N - 15° - W	不 定 形	114×71×44	外傾	ゆるい 起伏	自然	G IIa	11	不 明		SI 10		127
195	K3g ₅	N - 8° - W	不 定 形	75×63×39	外傾	平坦	自然	G Ia	3	中～ 後期		SI 10		127
196	L2d ₁	N - 35° - W	(不 整 楕 円 形)	123×(111)×34	外傾	ゆるい 起伏	人為	A IIa	2	中～ 後期		SK 200	灰層あり	127
197	L2f ₅	N - 35° - E	不 整 楕 円 形	246×155×72	外傾	碗状	自然	A IIIb	10	加EIV		SD 3 SK 192		127

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
198	L2b _s		不整円形	69×67×198	垂直	平坦	自然	B I c	18	堀 I		SI 21 22		127
200	L2d ₁	N - 30° - W	不整楕円形	174×142×128	外傾	平坦	人為	A II c	290	堀 I		SK196	貝ブロンク あり	127
201	L2d ₂		不整円形	110×103×20	外傾	平坦	自然	A II a	9	不明		SK247		127
203	M1a ₀	N - 68° - W	隅丸長方形	246×165×36	外傾	平坦	人為	F III a	10	不明		SK199		128
205	M1b ₀	N - 20° - W	不整楕円形	100×88×26	外傾	ゆるい 起伏	自然	A II a	0	不明				128
211	M2c ₁		不整円形	95×93×41	外傾	塊状	自然	A I a	3	後期				128
213	M1b ₀		不整円形	96×94×32	外傾	北東側 に傾く	人為	A I a	0	不明				128
214	M1a _s		不整円形	171×147×82	外傾	平坦	自然	A II b	141	加E III	土器片 ³ 有孔円板 ¹			128
215	L1j ₇	N - 30° - W	楕円形	66×42×56	外傾	塊状	人為	A I b	0	不明				128
217	M2d ₂		不整円形	147×120×127	垂直	平坦	人為	B II c	6	加E III	有孔円 板 ¹			128
218	M2c ₁		不整円形	110×97×55	外傾	平坦	人為	A II b	8	加E III				128
219	L2d ₄		(不整円形)	(77)×68×75	垂直	平坦	人為	B I b	56	称 II		SI 28	貝ブロンク あり	128
221	M1a _s		不整円形	152×144×57	垂直	平坦	自然	B II b	11	加E III		SI 27		128
222	L2j ₁	N - 58° - W	不整楕円形	242×166×35	外傾	平坦	人為	A III a	15	中～ 後期		SK223		128
223	L2j ₁	N - 60° - W	不整楕円形	128×81×85	垂直	平坦	人為	B II b	4	不明		SK222		128
224	L1j ₇	N - 12° - W	楕円形	128×100×15	外傾	平坦	自然	A II a	3	不明				128
225	L1j ₇		不整円形	90×83×42	垂直	平坦	人為	B I a	4	後期				128
228	L1h _s		不整円形	114×103×40	外傾	平坦	人為	A II a	0	不明				128
229	L1h _s		不整円形	114×112×43	外傾	南西側 に傾く	自然	A II a	2	不明				128
230	M1a _s		不整円形	123×121×49	外傾	平坦	自然	A II a	20	不明				128
231	L2b _s	N - 37° - W	不整楕円形	138×116×33	外傾	平坦	人為	A II a	38	堀 I			M 6	129
232	L1b ₀	N - 7° - W	(楕円形)	(134)×98×30	外傾	ゆるい 起伏	自然	A II a	100	堀 I		SK246 446		129
233	L2c ₂		不整円形	162×160×91	垂直	平坦	人為	B II b	0	不明				129
234	K2j ₁		不整円形	180×171×93	垂直	平坦	自然	B II b	59	堀 I				129
241	L2c ₂	N - 55° - W	不整楕円形	154×137×105	垂直	平坦	人為	B II c	66	堀 I	土器片 ¹ 蓋 ¹			129
245	L2d ₄	N - 37° - E	不整楕円形	166×133×161	垂直	平坦	人為	B II c	56	加E IV 称		SI 28 SD13		129
246	L1b ₀		不整円形	96×89×50	垂直	ゆるい 起伏	自然	B I b	39	堀 I	土製品 ¹	SK232		129
247	L2c ₂	N - 70° - W	不整楕円形	160×136×93	外傾	平坦	人為	A II b	7	中～ 後期		SK201		129
249	K2j ₇	N - 68° - E	隅丸方形	150×145×36	外傾	平坦	自然	F II a	195	称 II～ 堀 I				129
250	L2b ₄		不整円形	149×135×22	外傾	平坦	人為	A II a	33	堀 I				129
251	L2b ₄		不整円形	171×168×127	外傾	平坦	人為	A II c	497	加E III	土器片 ² 有孔円板 ¹			129
252	L4a ₇	N - 13° - E	隅丸方形	135×128×57	外傾	平坦	自然	F II b	2	不明				130
253	L4a ₇	N - 15° - W	不整楕円形	145×122×56	外傾	平坦	自然	A II b	14	不明				130
254	K4g ₂	N - 45° - W	不整長方形	161×68×40	外傾	ゆるい 起伏	自然	F II a	6	不明		SI 30		130
255	K3f ₁	N - 42° - E	不整楕円形	109×88×87	外傾	平坦	人為	A II b	0	堀 I			SI 34 に伴う	130

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×高さ										
256	K4i ₃	N - 37° - W	隅 丸 方 形	73×69×30	外傾	平坦	自然	FI a	24	称 I		SI 31 SK257		130
258	L1h ₇	N - 40° - W	不整楕円形	85×80×22	外傾	平坦	自然	AI a	0	不 明				130
260	M4a ₁	N - 24° - E	不整楕円形	173×160×75	垂直	平坦	人為	BII b	61	加EIV		SD 6		130
261	L4c ₆	N - 47° - W	(不整楕円形)	110×(97)×97	外傾	平坦	自然	AII b	40	加EIII		SI 46 SK 264		130
262	L4c ₅		不 整 円 形	99×91×33	外傾	平坦	自然	AI a	20	称 I		SI 46		130
263	L4c ₈	N - 5° - W	不整楕円形	150×132×116	外傾	平坦	自然	AII c	54	加EIII	播器 1			130
264	L 4 c ₆	N - 35° - E	(不整楕円形)	(146)×135×116	垂直	平坦	自然	BII c	10	加EIII		SI 46 SK 261		130
265	M3c ₄		不 整 円 形	113×112×27	外傾	平坦	自然	AII a	21	加EIII		SI 38		130
266	M3c ₆		不 整 円 形	177×166×32	外傾	平坦	自然	AII a	2	加EIII		SI 38		130
267	K3g ₁		不 整 円 形	83×81×110	垂直	平坦	人為	BI c	31	堀 I		SI 34		130
268	L1i ₀		不 整 円 形	111×110×26	外傾	平坦	自然	AII a	5	不 明		SI 53		130
269	K3f ₃		不 整 円 形	86×84×20	垂直	平坦	自然	BI a	0	不 明		SI 58 SK270		130
270	K3f ₂		(不 整 円 形)	90×(85)×85	垂直	平坦	人為	BI b	5	中 期		SI 58 SK269 271		131
271	K3f ₂		(不 整 円 形)	(95)×83×73	外傾	南東側に傾く	人為	AI b	24	中～ 後期		SI 58 SK 270 263		131
272	K3c ₂		不 整 円 形	77×76×76	外傾	平坦	人為	AI b	51	堀 I		SI 58		131
273	K3e ₂		不 整 円 形	148×144×71	外傾	平坦	自然	AII b	13	加EIII		SI 58		131
274	K3g ₂		不 整 円 形	92×89×40	外傾	平坦	自然	AI a	19	加EIV	器台 1	SI 34		131
275	L2i ₁	N - 75° - E	不整楕円形	130×115×55	垂直	平坦	人為	BII b	4	不 明		SI 53		131
276	L1h ₀	N - 45° - E	不整楕円形	134×122×60	外傾	平坦	自然	AII b	1	中 期		SI 26		131
277	L3j ₃	N - 68° - W	(楕 円 形)	(120)×(92)×60	垂直	平坦	自然	BII b	0	不 明		SK278		131
278	L3j ₃	N - 68° - W	(楕 円 形)	(125)×98×62	外傾	平坦	自然	AII b	12	加EIII		SK277		131
279	M3a ₃		不 整 円 形	96×92×39	外傾	平坦	自然	AI a	16	加EIII				131
280	L3j ₃		不 整 円 形	145×132×13	垂直	平坦	人為	BII a	89	加EIV 称				131
281	M3a ₄	N - 55° - W	不 定 形	147×125×58	外傾	平坦	自然	GII b	5	中 期				131
282	M3b ₄	N - 70° - W	不整楕円形	107×96×20	外傾	平坦	自然	AII a	5	中 期				131
283	K3f ₂		(不 整 円 形)	(77)×(73)×46	外傾	平坦	自然	AI a	0	不 明		SI 58 SK 271		131
284	M3g ₈	N - 38° - E	楕 円 形	105×80×30	外傾	平坦	自然	AII a	0	不 明		SI 50		131
285	M4e ₂		不 整 円 形	130×125×95	外傾	平坦	自然	AII b	74	加EIII	土器片 錘 1			131
286	M4e ₂		不 整 円 形	199×178×106	外傾	平坦	人為	AII c	535	加EIII	土器片 錘 1	SI 41	テラス あり	131
287	M4i ₇		不 整 円 形	65×62×46	垂直	平坦	人為	BI a	7	加EIII		SI 60		132
288	L4f ₈	N - 90°	不整楕円形	136×114×60	外傾	平坦	自然	AII b	15	加EIII				132
289	L4f ₅		不 整 円 形	163×151×90	外傾	平坦	自然	AII b	46	加EIII				132
290	L4i ₇	N - 40° - E	不整楕円形	199×155×100	外傾	平坦	人為	AII c	188	加EIV	土器片錘3 動物把手1			132
291	L4i ₇		(不 整 円 形)	(105)×(94)×33	外傾	凹凸	自然	AII a	22	加EIII		SK293		132
292	L4i ₈		不 整 円 形	94×90×28	外傾	平坦	自然	AI a	4	加EIII				132

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
293	L4i ₈		(不整円形)	111×(99)×76	外傾	塊状	人為	AII b	0	不明		SK291		132
294	L2a ₆	N - 56° - E	(不整楕円形)	(389)×227×47	外傾	塊状	人為	AIII a	119	堀 I	土器片 錘1	SI 4 SK 138	貝ブロック あり	132
295	L4b ₇	N - 62° - W	不整楕円形	186×126×18	外傾	皿状	自然	AII a	53	加EIV	土器片 錘1	SK296		132
297	M4b ₉	N - 90°	楕円形	95×79×19	外傾	皿状	自然	AI a	0	不明				132
299	M5a ₁		不整円形	168×160×90	外傾	平坦	人為	AII b	327	加EIII	土製円板 ¹ 垂飾 ¹			132
304	M4a ₉	N - 35° - E	楕円形	175×150×112	外傾	平坦	人為	AII c	169	加EIII	土器片 錘4	SK336		133
305	M5d ₂		不整円形	127×118×74	垂直	平坦	人為	BII b	29	加EIII	土器片 錘3			133
307	M4e ₉	N - 25° - E	楕円形	134×93×29	外傾	南東側に傾く	人為	AII a	3	後期				133
308	L5i ₁	N - 10° - E	楕円形	127×89×20	外傾	平坦	自然	AII a	4	加EIII				133
309	L5h ₁		不整円形	109×102×23	外傾	平坦	自然	AII a	7	中期				133
310	L4h ₉	N - 52° - W	不整楕円形	150×126×35	外傾	平坦	自然	AII a	7	中～ 後期				133
311	L4g ₉	N - 50° - W	不整楕円形	159×109×23	外傾	平坦	自然	AII a	6	中～ 後期				133
312	L4g ₉	N - 65° - W	楕円形	83×70×26	外傾	ゆるい起伏	人為	AI a	5	中期				133
313	L4g ₇		不整円形	132×132×112	外傾	平坦	人為	AII c	65	加EIV				133
314	L4f ₈		不整円形	125×111×69	外傾	平坦	人為	AII b	47	加EIII ～IV				133
315	M4c ₅	N - 90°	不整楕円形	121×98×34	外傾	凹凸	自然	AII a	15	加EIV				133
316	M4b ₆		不整円形	77×71×25	外傾	塊状	自然	AI a	2	不明				133
317	M4c ₆	N - 45° - W	不整楕円形	93×70×50	外傾	凹凸	自然	AI b	1	不明				133
319	M4b ₆	N - 15° - E	不整楕円形	135×115×29	外傾	塊状	自然	AII a	16	不明				134
320	M4b ₉	N - 50° - W	不整楕円形	192×168×125	外傾	平坦	人為	AII c	51	加EIV				134
321	M4a ₄		不整円形	142×142×31	外傾	ゆるい起伏	自然	AII a	22	加EIV	土器片 錘1			134
322	M4c ₃		不整円形	158×158×136	外傾	平坦	人為	AII c	60	加EIV ～称				134
323	L4g ₅	N - 60° - W	不整楕円形	114×83×21	外傾	漏斗状	自然	AII a	10	中～ 後期				134
325	L4e ₄		不整円形	129×127×52	外傾	平坦	自然	AII b	12	不明				134
326	L2d ₃		不整円形	124×116×159	外傾	塊状	人為	AII c	37	堀 I			貝ブロック 魚骨層あり	134
327	L2c ₃	N - 70° - W	不定形	310×253×42	ゆるやかな外傾	塊状	人為	GIII a	14	中期		SK328	貝ブロック あり	134
328	L2c ₃	N - 42° - W	(楕円形)	(173)×153×60	外傾	塊状	自然	AII b	0	不明		SK327		134
329	L4h ₉	N - 25° - E	楕円形	97×76×32	外傾	漏斗状	自然	AI a	2	中～ 後期				134
330	L4f ₉		不整円形	98×98×41	外傾	平坦	自然	AI a	90	加EIV ～称				134
331	L4d ₉		不整円形	122×110×35	外傾	塊状	自然	AII a	5	加EIV				134
332	L4e ₈	N - 55° - E	不整楕円形	136×107×30	外傾	平坦	人為	AII a	8	称 I				134
333	L5i ₁		不整円形	78×70×35	外傾	平坦	人為	AI a	8	中期				134
334	M5a ₁		不整円形	139×114×92	外傾	平坦	人為	AII b	61	中～ 後期				134
335	M4c ₈	N - 90°	楕円形	122×71×20	垂直	皿状	自然	BII a	0	不明				135
336	L4i ₉	N - 44.5° - E	不整楕円形	155×142×120	外傾	平坦	人為	AII c	14	加EIII		SK304		133

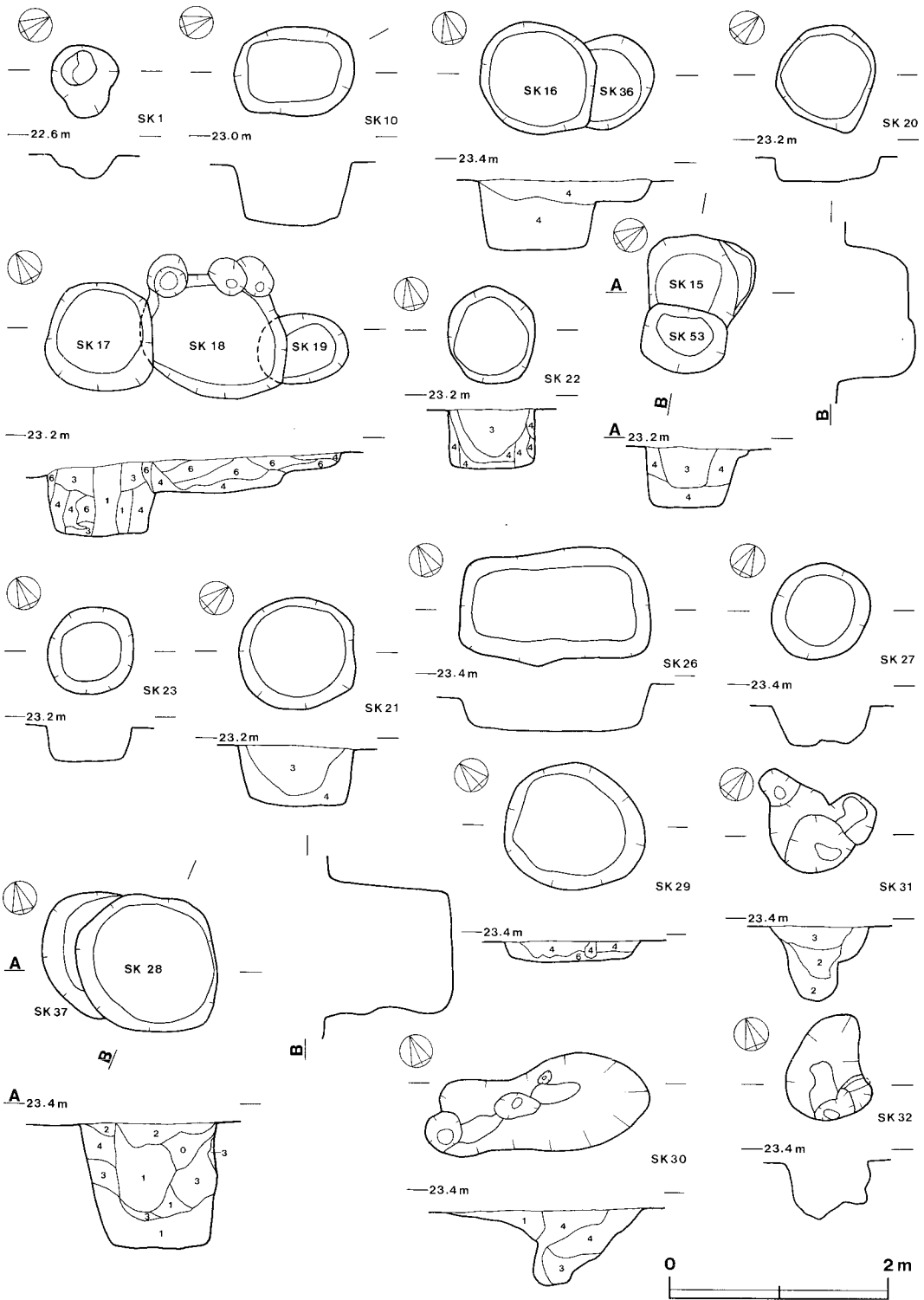
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
337	L4b ₅	N - 62° - E	不整楕円形	142×162×92	外傾	平坦	人為	AⅡ b	19	加EⅣ	土器片 錘1	SI 74		135
338	L4a ₅		(不整円形)	128×(124)×58	外傾	平坦	人為	AⅡ b	142	加EⅢ ~Ⅳ	土器片 錘1	SI 74 SK339		135
339	L4a ₅		不整円形	166×158×72	垂直	平坦	人為	BⅡ b	86	加EⅢ ~Ⅳ		SI 74 SK338		135
340	K4j ₇		不整円形	95×89×17	外傾	平坦	自然	AⅠ a	2	加EⅣ	土器片 錘1			135
341	K4j ₇	N - 83° - W	楕円形	120×87×17	外傾	平坦	自然	AⅡ a	0	不明				135
342	K4j ₆	N - 61° - W	楕円形	135×100×17	外傾	平坦	自然	AⅡ a	2	中期				135
343	K4j ₆	N - 68° - W	楕円形	83×69×23	外傾	平坦	自然	AⅠ a	2	中期				135
344	K4j ₆		不整円形	82×72×29	外傾	平坦	自然	AⅠ a	4	中~ 後期				135
345	K4j ₅	N - 71° - W	楕円形	92×58×35	外傾	碗状	自然	AⅠ a	0	不明				135
346	K4j ₅	N - 67.5° - W	不整楕円形	140×116×89	外傾	平坦	人為	AⅡ b	25	加EⅢ ~Ⅳ				135
347	K4j ₅	N - 64.5° - W	楕円形	87×72×22	外傾	平坦	自然	AⅠ a	4	中~ 後期				135
348	K4j ₄		不整円形	68×60×37	外傾	南側に 傾く	自然	AⅠ a	1	中期				135
349	K4j ₅		不整円形	91×88×70	外傾	平坦	自然	AⅠ b	16	中~ 後期				135
350	K4h ₃		不整円形	138×127×102	垂直	平坦	人為	BⅡ c	15	加EⅢ	土器片 錘1		テラス あり	135
351	K4g ₃	N - 47.5° - W	楕円形	109×84×52	外傾	碗状	人為	AⅡ b	7	中~ 後期				135
352	K4g ₇	N - 42° - W	不整楕円形	230×181×29	外傾	皿状	自然	AⅢ a	104	称 I		SK377 M10		135
353	K4h ₇	N - 54° - W	不整楕円形	154×132×98	外傾	平坦	人為	AⅡ b	243	加EⅣ ~称	土器片 錘1 打製石斧1			135
354	K4j ₉		不整円形	108×106×31	外傾	平坦	自然	AⅡ a	5	中期				136
355	L4a ₀		不整円形	140×135×90	垂直	平坦	人為	BⅡ b	185	加EⅣ ~称		SI 35 SK383		136
356	K5h ₁	N - 24° - E (楕円形)	(186)×(105)×74	外傾	平坦	自然	AⅡ b	26	後期			SK366		136
357	K4g ₀		不整円形	177×155×35	外傾	平坦	自然	AⅡ a	42	加EⅢ ~Ⅳ				136
359	K5g ₁	N - 76° - W	不整楕円形	178×132×50	外傾	平坦	自然	AⅡ b	15	加EⅢ ~Ⅳ				136
360	K4f ₉	N - 18° - W	楕円形	127×94×31	外傾	平坦	自然	AⅡ a	16	加EⅢ	土器片 錘1			136
361	K4j ₃		不整円形	165×147×32	垂直	平坦	自然	BⅡ a	24	中期				136
362	L4c ₀	N - 36° - W	不整楕円形	168×116×125	外傾	平坦	人為	AⅡ c	87	加EⅢ	土器片 錘1 土製円板1	SK363		136
363	L4c ₀	N - 55.5° - W (不整楕円形)	135×(98)×36	外傾	ゆるい 起伏	自然	AⅡ a	6	中期			SK362		136
366	K5h ₁	N - 65° - W (楕円形)	(194)×(159)×49	外傾	平坦	自然	AⅡ a	8	中期			SK356		136
367	L4h ₇		不整円形	113×109×31	外傾	平坦	人為	AⅡ a	34	加EⅣ ~称				136
368	L4h ₆	N - 35.5° - E	不整楕円形	91×72×35	外傾	碗状	人為	AⅠ a	7	加EⅣ				136
369	L4a ₅		不整円形	109×100×25	外傾	平坦	自然	AⅡ a	5	加EⅢ				136
370	L4a ₅	N - 9° - W	不整楕円形	114×90×43	垂直	平坦	人為	BⅡ a	8	中期				136
371	K3i ₈	N - 17° - W (不整楕円形)	211×(155)×85	外傾	南側に 傾く	人為	AⅢ b	42	中~ 後期			SK382		136
372	L4b ₁	N - 21° - W	不整楕円形	124×112×40	外傾	皿状	人為	AⅡ a	2	中~ 後期				136
373	L3b ₈	N - 75° - W	不整楕円形	129×109×70	外傾	平坦	人為	AⅡ b	25	加EⅢ ~Ⅳ				137
374	L3e ₇	N - 64° - W	不整楕円形	86×56×88	外傾	漏斗状	自然	CⅠ b	23	加EⅣ				137

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
375	L3c7		不整円形	97×87×64	外傾	平坦	人為	A I b	3	不明				137
376	L3c7	N - 23.5° - W	不整楕円形	135×113×57	外傾	平坦	自然	A II b	27	中～ 後期				137
377	L4g7	N - 36.5° - E	楕円形	62×46×18	外傾	平坦	自然	A I a	0	不明				137
378	L3e7	N - 64° - E	(不整楕円形)	180×(167)×70	外傾	ゆるい 起伏	人為	A II b	49	加E III		SK379		137
379	L3e7		不整円形	90×88×94	外傾	平坦	人為	A I b	7	加E III	土器片 錘1	SK 378		137
380	L4f0	N - 58° - E	(不整楕円形)	220×(173)×41	外傾	碗状	人為	A III a	25	加E IV				137
381	L4a1	N - 72° - E	不整楕円形	155×131×25	外傾	平坦	人為	A II a	25	称II～ 堀I	土器片 錘1			137
382	K3i8	N - 13° - E	(不整楕円形)	(135)×(100)×75	外傾	平坦	自然	A II b	3	中期		SK371 387		136
383	L4a0	N - 13.5° - W	(楕円形)	(80)×(66)×45	外傾	平坦	人為	A I a	9	中期		SI 35 SK355		137
384	L2c2		(不整円形)	96×(93)×23	外傾	平坦	人為	A I a	52	中～ 後期		SK385	珉アロンク あり	137
385	L2c2		(不整円形)	(120)×(105)×38	外傾	平坦	人為	A II a	7	中～ 後期		SK384		137
386	L4f0	N - 65° - W	(楕円形)	(154)×119×34	外傾	ゆるい 起伏	自然	A II a	5	中期				137
387	K3i8	N - 36.5° - W	楕円形	93×71×35	外傾	碗状	人為	A I a	30	称 I		SK 382	配石あり	137 145
389	L1c0		不整円形	101×96×31	垂直	平坦	自然	B II a	27	堀 I	土製円 板1			137
390	L1c0	N - 41° - W	(不整楕円形)	(199)×164×35	外傾	平坦	人為	A II a	221	堀 I		SK 398 399, 445 446		137
391	L1c0		不整円形	118×116×71	外傾	平坦	人為	A II b	467	称II～ 堀I				137
392	L1c0	N - 75° - E	不整楕円形	126×91×17	外傾	平坦	人為	A II a	22	堀 I		SK447		138
393	L2c0		不整円形	128×125×101	垂直	平坦	人為	B II c	405	堀 I	土器片 錘1			138
394	L1c0	N - 4° - W	不整楕円形	135×120×109	外傾	平坦	人為	A II c	58	堀 I	土器片 錘1	SI 23		138
395	L1d0	N - 1.5° - W	不整楕円形	132×115×108	外傾	平坦	人為	A II c	123	堀 I	土製円 板1		人体文土器 目ブロック 魚骨管あり	138
396	L1d0		不整円形	160×156×101	袋状	平坦	人為	D II c	621	加E III	土器片錘7 土製円板1 石孔円板1			138
397	L2e1	N - 4° - E	不整楕円形	110×98×133	外傾	平坦	自然	A II c	88	堀 I				138
398	L1c0	N - 37.5° - W	(不整楕円形)	109×(95)×17	外傾	平坦	自然	A II a	27	中～ 後期		SK390 399		138
399	L1c0		不整円形	110×102×19	外傾	平坦	自然	A II a	12	不明		SK 390 398		138
400	L2a0		不整円形	120×112×162	袋状	平坦	人為	D II c	179	堀 I			魚骨管 目ブロック あり	138
401	K2j2	N - 54° - W	不整楕円形	119×102×69	外傾	凹凸	自然	A II b	106	堀 I	土器片 錘1	SK 455		138
402	L2a1		(不整円形)	(147)×143×30	外傾	平坦	自然	A II a	32	称II～ 堀I		SK 403		138
403	L2a1	N - 64° - E	不整楕円形	118×104×42	外傾	平坦	自然	A II a	37	堀 I		SK 402		138
404	L1b0	N - 23° - E	不整楕円形	187×157×95	外傾	平坦	人為	A II b	311	堀 I	土製円板1 石孔円板1	SK 443	珉アロンク あり	138
406	L1b0	N - 45.5° - W	不整楕円形	189×156×38	外傾	碗状	人為	A II a	170	堀 I		SK 409		139
407	L2b1		不整円形	80×79×62	外傾	平坦	人為	A I b	38	堀 I				139
408	L2b1		不整円形	127×122×44	外傾	平坦	自然	A II a	82	堀 I				139
409	L1b0	N - 30° - W	(不整楕円形)	(130)×110×15	外傾	平坦	自然	A II a	28	堀 I		SK404 406		139
411	L3g2	N - 66° - E	楕円形	110×82×17	外傾	平坦	自然	A II a	2	中～ 後期				139
412	L3f3	N - 47° - W	不整楕円形	170×142×48	外傾	平坦	人為	A II a	36	堀 I				139

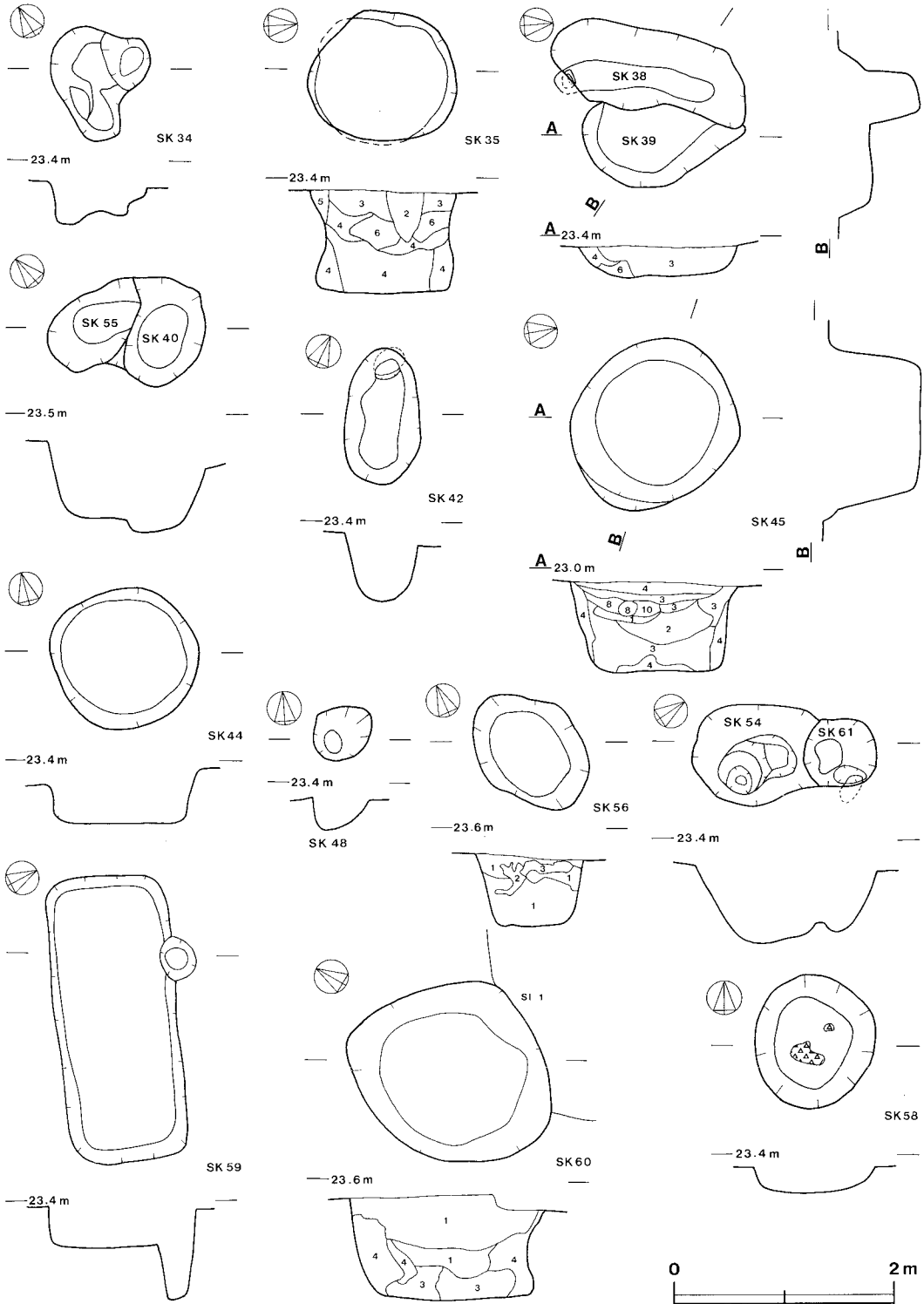
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
413	L3f ₃	N - 65° - E	不整楕円形	143×90×118	外傾	平坦	人為	AⅡ c	16	加EⅢ		SK423		139
414	L3g ₂	N - 90°	不整楕円形	155×117×54	外傾	平坦	人為	AⅡ b	45	加EⅢ	土器片 錘1			139
415	L3i ₃	N - 82° - E	不整楕円形	180×155×40	外傾	平坦	人為	AⅡ a	27	加EⅣ				139
416	L3j ₁	N - 29° - E	楕円形	110×87×40	外傾	平坦	自然	AⅡ a	2	不明				139
417	L2f ₆		不整円形	50×43×59	外傾	平坦	人為	AⅠ b	3	加EⅣ		SI 83		139
418	L2d ₅	N - 64° - W	隅丸方形	120×93×15	外傾	平坦	自然	FⅡ a	30	加EⅢ ~Ⅳ				139
420	L2d ₆	N - 52° - E	不整楕円形	152×130×25	外傾	平坦	自然	AⅡ a	14	不明		SK426		139
421	M3a ₂	N - 61° - W	楕円形	115×85×20	外傾	平坦	自然	AⅡ a	1	不明				139
422	L1a ₀	N - 30° - E	不整楕円形	156×100×27	外傾	平坦	人為	AⅡ a	24	後期				139
423	L3e ₃	N - 74° - W	(不整楕円形)	(185)×109×40	外傾	ゆるい 起伏	人為	AⅡ a	24	堀 I		SK413		139
424	K3j ₂	N - 20° - E	不整長楕円形	142×60×26	外傾	ゆるい 起伏	人為	AⅡ a	0	不明		SK425 SD 3		140
425	K3j ₂	N - 34° - E	(不整楕円形)	(140)×90×45	外傾	凹凸	人為	AⅡ a	0	不明		SI 79 SK 424 SD 3		140
426	L2d ₆	N - 51° - E	不整楕円形	145×120×27	外傾	凹凸	人為	AⅡ a	4	堀 I		SK420		140
427	L2d ₆	N - 7° - E	不整楕円形	105×93×23	外傾	平坦	自然	AⅡ a	12	堀 I				140
428	L2d ₆	N - 37° - E	楕円形	132×102×21	外傾	平坦	人為	AⅡ a	9	堀 I				140
430	L3b ₇	N - 59° - E	不整楕円形	205×150×30	外傾	北東側 に傾く	人為	AⅢ a	6	中~ 後期				140
431	L2b ₂	N - 20° - E	不整楕円形	102×85×33	外傾	碗状	人為	AⅡ a	1	不明				140
432	M3a ₉		不整円形	80×80×68	外傾	平坦	人為	AⅠ b	13	加EⅢ ~Ⅳ				140
433	M3a ₉	N - 46° - W	不整楕円形	155×137×80	外傾	平坦	自然	AⅡ b	58	加EⅣ				140
434	L3h ₈	N - 4° - W	不整楕円形	130×115×78	外傾	平坦	自然	AⅡ b	113	加EⅣ	土器片 錘1			140
435	M3a ₅	N - 41° - W	不整楕円形	165×150×85	垂直	平坦	人為	BⅡ b	3	中期				140
436	L1d ₈	N - 66° - W	不整楕円形	140×115×94	垂直	平坦	人為	BⅡ b	201	堀 I	土製 腕輪1			140
437	L1c ₉		不整円形	140×130×50	垂直	平坦	自然	BⅡ b	60	加 E				140
438	L2d ₆	N - 51° - E	(不整楕円形)	(105)×90×20	外傾	平坦	自然	AⅡ a	15	堀 I				140
439	L3g ₆	N - 9° - W	(不整楕円形)	(195)×145×45	外傾	ゆるい 起伏	自然	AⅡ a	16	加EⅢ	土器片錘1 有孔円板1	SK429		140
440	L2b ₃		不整円形	59×58×15	外傾	皿状	自然	AⅠ a	0	不明		SK441		141
441	L2b ₃	N - 8° - W	(不整楕円形)	(140)×125×155	外傾	平坦	人為	AⅡ c	24	加EⅢ	土器片 錘1	SK440		141
443	L1b ₉		不整円形	(55)×52×50	外傾	有段	人為	AⅠ b	16	不明		SK404		141
444	L2b ₃	N - 19° - W	不整楕円形	180×150×112	袋状	平坦	人為	DⅡ c	56	加EⅣ				141
445	L1c ₀		不整円形	50×45×70	外傾	平坦	人為	AⅠ b	6	加EⅢ	磨石1	SK390		141
446	L1c ₀		不整円形	70×65×43	外傾	碗状	人為	AⅠ a	37	堀 I		SK232 390		141
447	L1c ₉	N - 45° - E	不整楕円形	154×84×46	外傾	平坦	人為	AⅡ a	9	加EⅢ		SK392		141
448	L3j ₉	N - 29° - W	不整楕円形	138×102×48	外傾	ゆるい 起伏	人為	AⅡ a	13	加 E		SI 88 SK453		141
450	L1b ₈	N - 12° - E	不整楕円形	183×148×72	外傾	平坦	自然	AⅡ b	135	堀 I		SK460.461 SD 12		141
451	L1d ₈	N - 68° - W	不整楕円形	116×104×175	袋状	平坦	人為	DⅡ c	181	堀 I		SD 12	1170/7 あり	141

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
452	L1b ₉	N - 25°- E	(不整楕円形)	(80)×(57)×35	垂直	平坦	人為	BIa	9	不明		SK461		141
453	L3i ₉	N - 81.5°- W	(不整楕円形)	147×(114)×58	外傾	ゆるい起伏	人為	AIIb	0	不明		SI 88 SK 453		141
454	M3b ₁	N - 32°- E	楕円形	90×69×25	外傾	塊状	自然	AIa	45	加EIII				141
455	K2j ₁	N - 24°- E	(不整楕円形)	140×(110)×25	外傾	ゆるい起伏	人為	AIIa	28	堀 I		SK401 477		141
456	L2d ₃		不整円形	97×95×47	外傾	塊状	人為	AIa	8	不明		SD 13		141
457	L1c ₈	N - 41.5°- E	不整楕円形	75×65×64	外傾	平坦	人為	AIb	5	中～後期				141
458	K1j ₉		(不整円形)	(151)×145×65	外傾	平坦	人為	AIIb	27	中～後期		SK459	横穴あり	141
460	L1c ₈	N - 73°- W	(不整楕円形)	(82)×(64)×70	外傾	平坦	人為	AIb	7	中～後期		SK450 SD 12		142
461	L1b ₉	N - 22°- W	(隅丸方形)	(120)×(114)×32	外傾	平坦	人為	FIIa	18	中～後期		SK450 452		142
462	L2a ₂		不整円形	71×70×53	外傾	凹凸	人為	AIb	4	中～後期				142
463	L2a ₂	N - 35°- E	(不整楕円形)	(205)×104×56	外傾	ゆるい起伏	自然	AIIIb	23	早期		SI 85 SX 1	第5号 炉穴	142
464	L2a ₃		不整円形	95×88×33	外傾	塊状	自然	AIa	5	称 I				142
465	L2a ₃	N - 59°- W	不定形	75×65×73	外傾	平坦	人為	GIIb	11	中～後期				142
467	L2g ₆	N - 36°- W	楕円形	146×80×25	外傾	ゆるい起伏	人為	AIIa	0	早期		SI 87	第6号 炉穴	142
468	K3i ₅	N - 30°- W	不整楕円形	122×89×45	外傾	ゆるい起伏	自然	AIIa	33	中～後期	蓋 1			142
470	K4i ₃	N - 35°- E	楕円形	160×127×28	外傾	平坦	自然	AIIa	16	称 I				142
471	L2c ₃	N - 47°- E	不整楕円形	100×60×33	外傾	平坦	自然	AIIa	0	不明				142
472	L2f ₈	N - 66°- W	不整楕円形	136×96×25	外傾	ゆるい起伏	自然	AIIa	8	不明				142
473	L2f ₇	N - 42°- W	不整楕円形	98×85×46	外傾	ゆるい起伏	自然	AIa	11	中期		SI 83		142
474	L2g ₇	N - 1.5°- E	不整楕円形	90×73×15	外傾	凹凸	人為	AIa	0	不明		SI 83		142
475	N4c ₇		不整円形	144×135×23	外傾	平坦	人為	AIIa	27	加EIII		SI 78 82		142
476	N4d ₇	N - 58.5°- W	不整方形	140×132×50	外傾	平坦	人為	FIIb	2	不明		SI 82		142
477	K2i ₁	N - 76°- E	(不整楕円形)	132×(120)×51	外傾	平坦	人為	AIIb	25	称II～堀I		SK455		142
478	L2j ₅	N - 56.5°- W	楕円形	114×76×24	外傾	凹凸	人為	AIIa	4	早期			第7号 炉穴	142
480	M3h ₃		不整円形	102×98×52	外傾	平坦	人為	AIIb	43	加EIV				142
481	M2d ₇	N - 26°- W	不整長楕円形	325×108×44	外傾	ゆるい起伏	自然	AIIIa	24	早期		SI 96	第8号 炉穴	142
482	M3h ₃	N - 48°- E	(不整楕円形)	(100)×89×50	外傾	平坦	自然	AIIb	0	不明		SK483		143
483	M3h ₃	N - 25°- W	(不整楕円形)	(65)×42×40	外傾	平坦	人為	AIa	0	不明		SK482		143
484	M3f ₂	N - 25°- E	不整楕円形	140×120×80	垂直	平坦	人為	BIIb	86	加EIV	土製円板 1	SI 103 SK485 486		143
485	M3f ₂		(不整円形)	(50)×45×80	垂直	平坦	人為	BIIb	1	中期		SI 103 SK484 488		143
486	M3f ₃	N - 90°	不整楕円形	157×144×120	外傾	平坦	人為	AIIc	205	加EIII～IV		SI 103 SK484 489 490		143
488	M3f ₂	N - 35°- W	不整楕円形	67×45×98	垂直	平坦	人為	BIIb	0	不明		SI 103 SK485		143
489	M3g ₃	N - 9°- E	(不整楕円形)	(122)×(100)×41	外傾	塊状	自然	AIIa	9	加EIII	土器片 鏝 1	SI 103 SK486		143
490	M3f ₃	N - 18.5°- E	不整楕円形	145×120×121	外傾	塊状	人為	AIIc	43	中～後期		SI 103 SK486		143
491	M2a ₁		不整円形	105×100×34	外傾	ゆるい起伏	自然	AIIa	2	中期				143

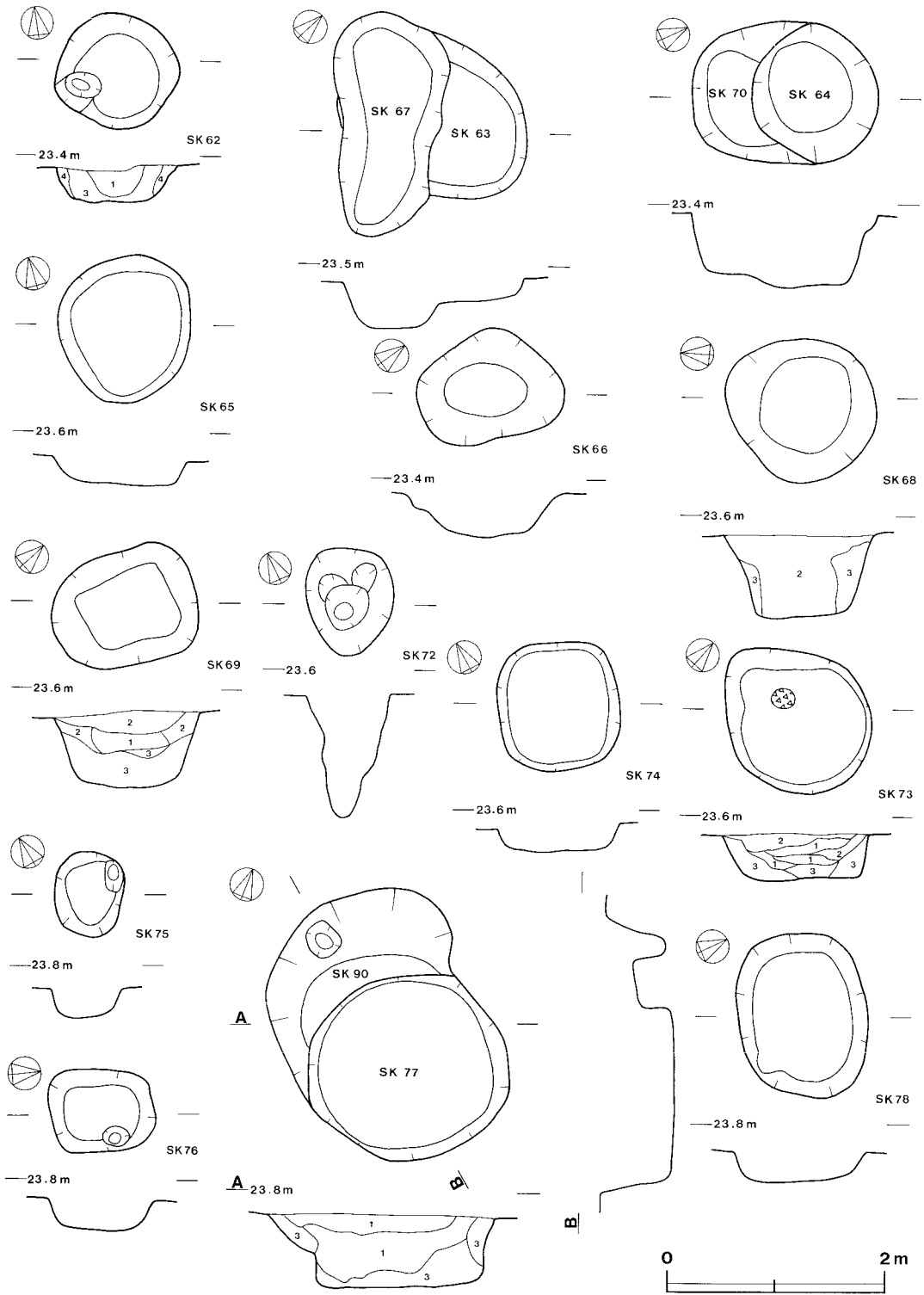
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿 図 番 号
				長径×短径×深さ										
493	M2h _o		不整円形	102×98×35	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡa	60	中～後期		SI 99		143
494	M2h _o		不整円形	90×86×83	垂直	ゆるい起伏	人為	BⅠb	59	後期		SI 104		143
495	M2i _o		不整円形	122×114×22	外傾	平坦	自然	AⅡa	3	中～後期		SI 99		143
497	M2h _o		不整円形	184×178×118	袋状	平坦	人為	DⅡc	87	後期				143
499	M2f _o		不整円形	170×168×176	袋状	平坦	人為	DⅡc	58	中～後期				143
500	M2b ₃		不整円形	73×65×20	外傾	平坦	自然	AⅠa	0	不明				143
507	M2a ₅		不整円形	92×87×36	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅠa	4	後期				143
511	M2a ₅	N - 34° - E	(不整楕円形)	(95) × (79) × 48	外傾	平坦	自然	AⅠa	1	不明				143
512	M2a ₅	N - 68.5° - W	(不整長楕円形)	(242) × 106 × 48	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅢa	11	早期		SK 506 520	第9号 炉穴	144
513	L1f ₈	N - 54° - W	不整楕円形	109×97×117	外傾	南西側に傾く	自然	AⅡc	90	堀Ⅰ	凹石1			144
515	L1e ₈	N - 37° - W	不整楕円形	94×78×26	外傾	平坦	自然	AⅠa	0	不明				144
516	L1e ₈	N - 17° - E	不整楕円形	80×52×48	外傾	凹凸	人為	AⅠa	1	中期				144
517	L1e _o		不整円形	51×39×40	外傾	凹凸	自然	AⅠa	6	後期				144
519	M2b ₅	N - 57.5° - W	(不整楕円形)	(151) × (97) × 64	外傾	北東側に傾く	人為	AⅡb	0	不明		SK 505		144
520	M2a ₅	N - 64° - W	(不整楕円形)	(94) × (74) × 48	外傾	碗状	自然	AⅠa	2	不明		SK 512		144
522	L1e _o	N - 72.5° - W	不整楕円形	120×66×69	外傾	碗状	自然	AⅡb	20	不明				144
523	L1e ₉	N - 66° - W	不定形	76×63×76	外傾	凹凸	自然	GⅠb	0	不明				144
525	M2d ₈		(不整円形)	(141) × 137 × 42	外傾	平坦	人為	AⅡa	81	堀Ⅰ	蓋1	SI 102		144
531	M2f ₈	N - 29° - E	(不整楕円形)	187 × (152) × 123	垂直	平坦	人為	BⅡc	64	中～後期		SI 107		144
532	M2f ₈		不整円形	110 × 104 × 16	外傾	平坦	人為	AⅡa	5	中～後期		SI 107		144
533	M2g ₈	N - 45° - W	楕円形	88 × 66 × 39	外傾	ゆるい起伏	人為	AⅠa	28	後期				144



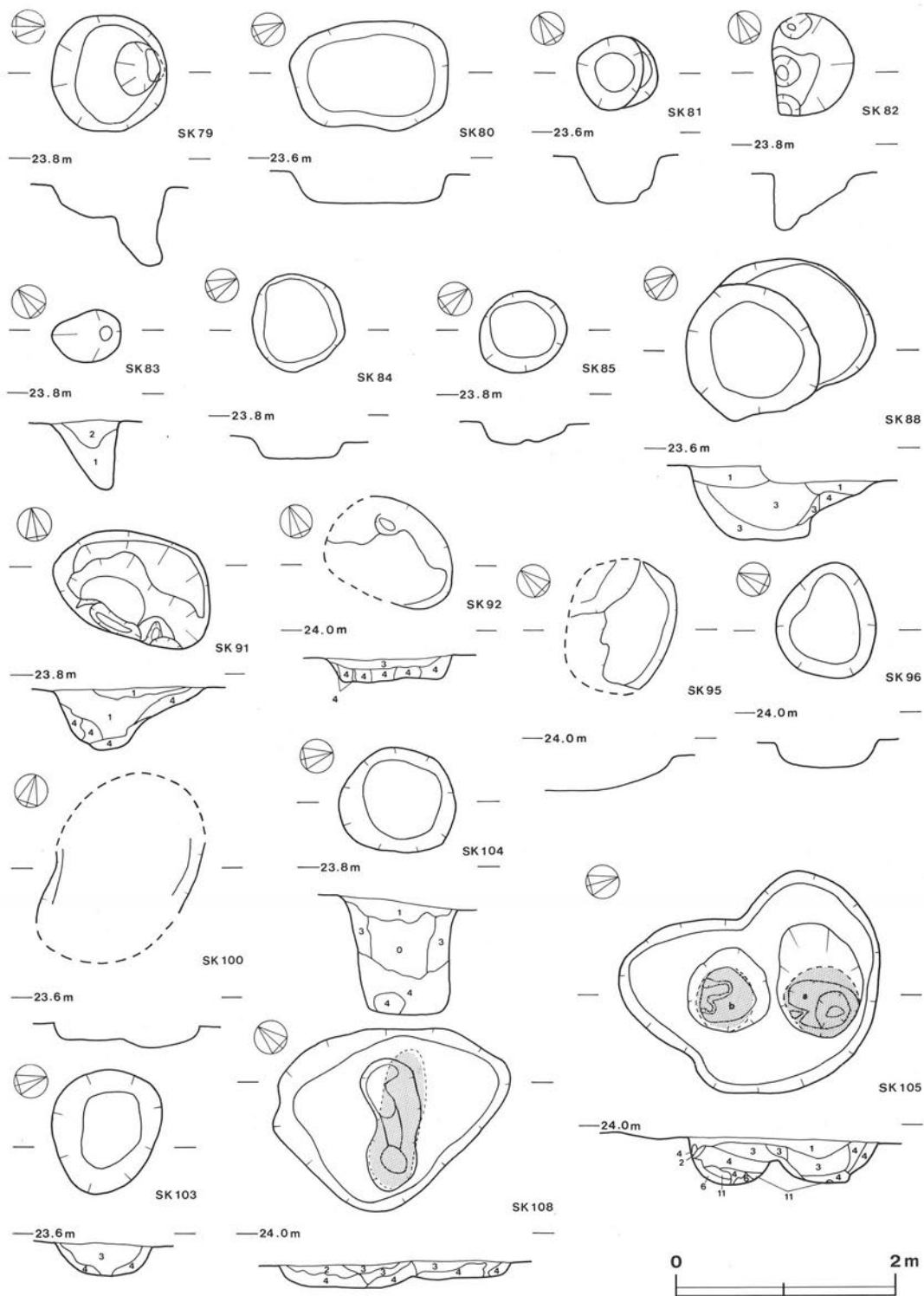
第 119 图 土坑实测图(1)



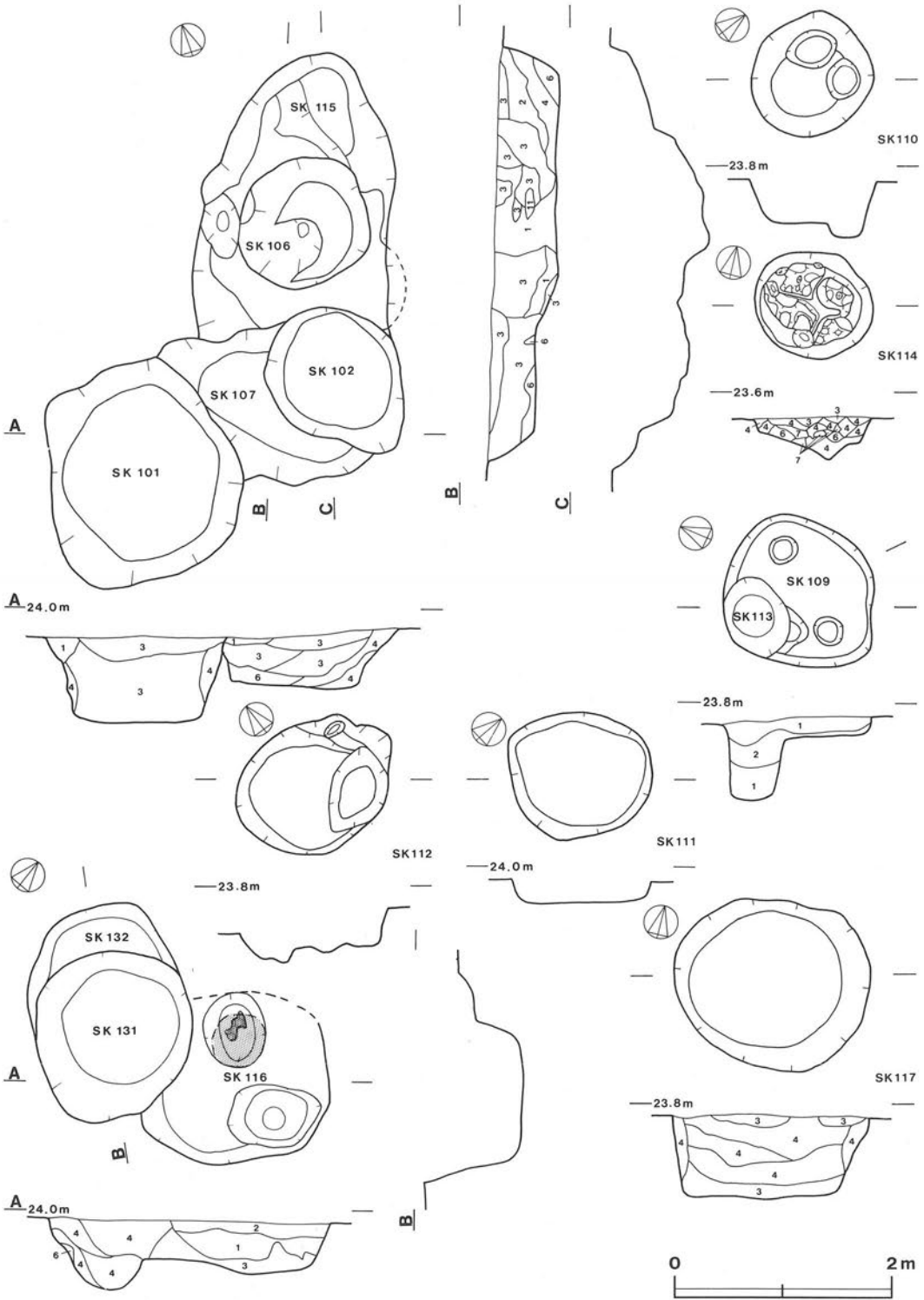
第 120 图 土坑实测图(2)



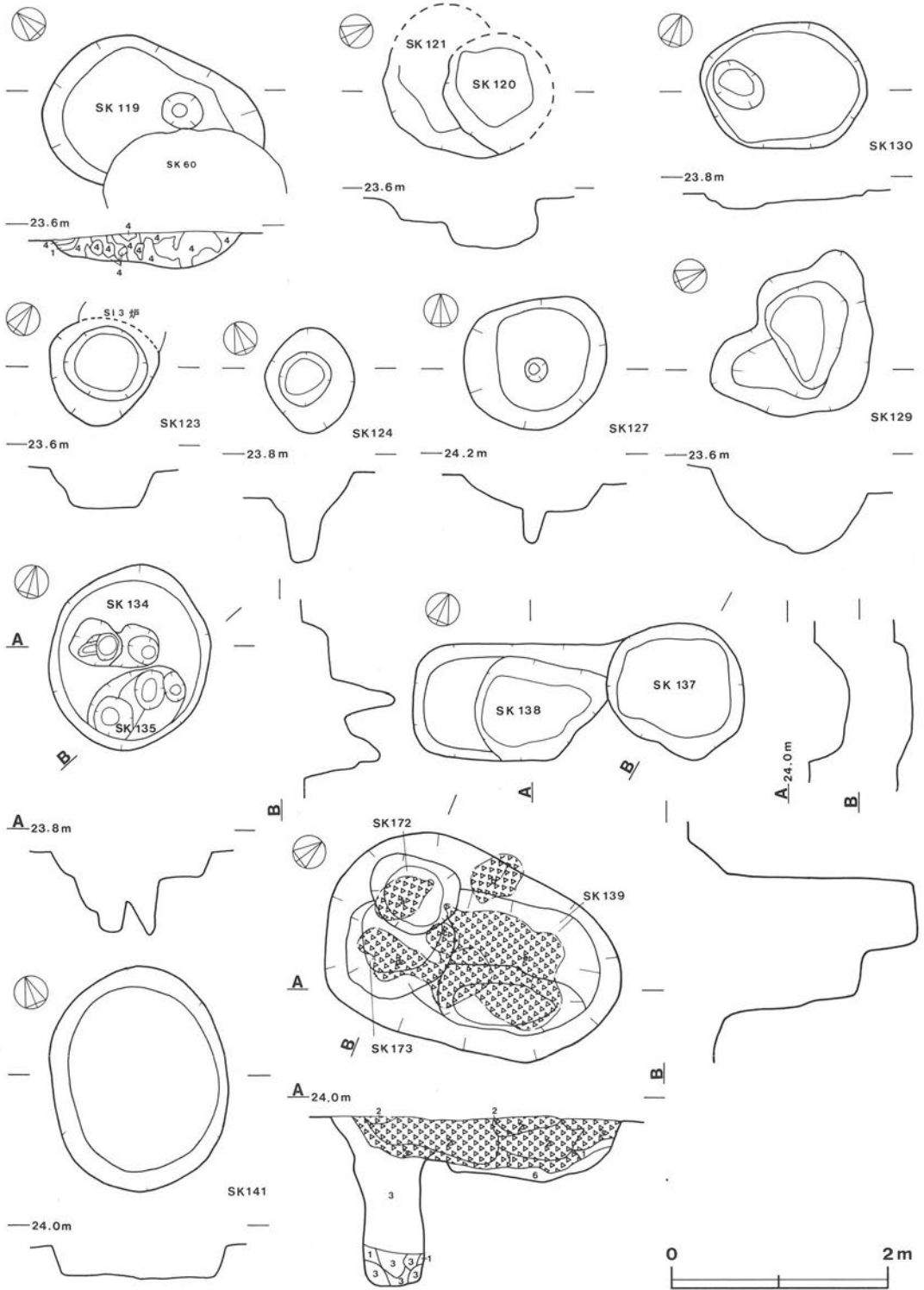
第 121 图 土坑实测图(3)



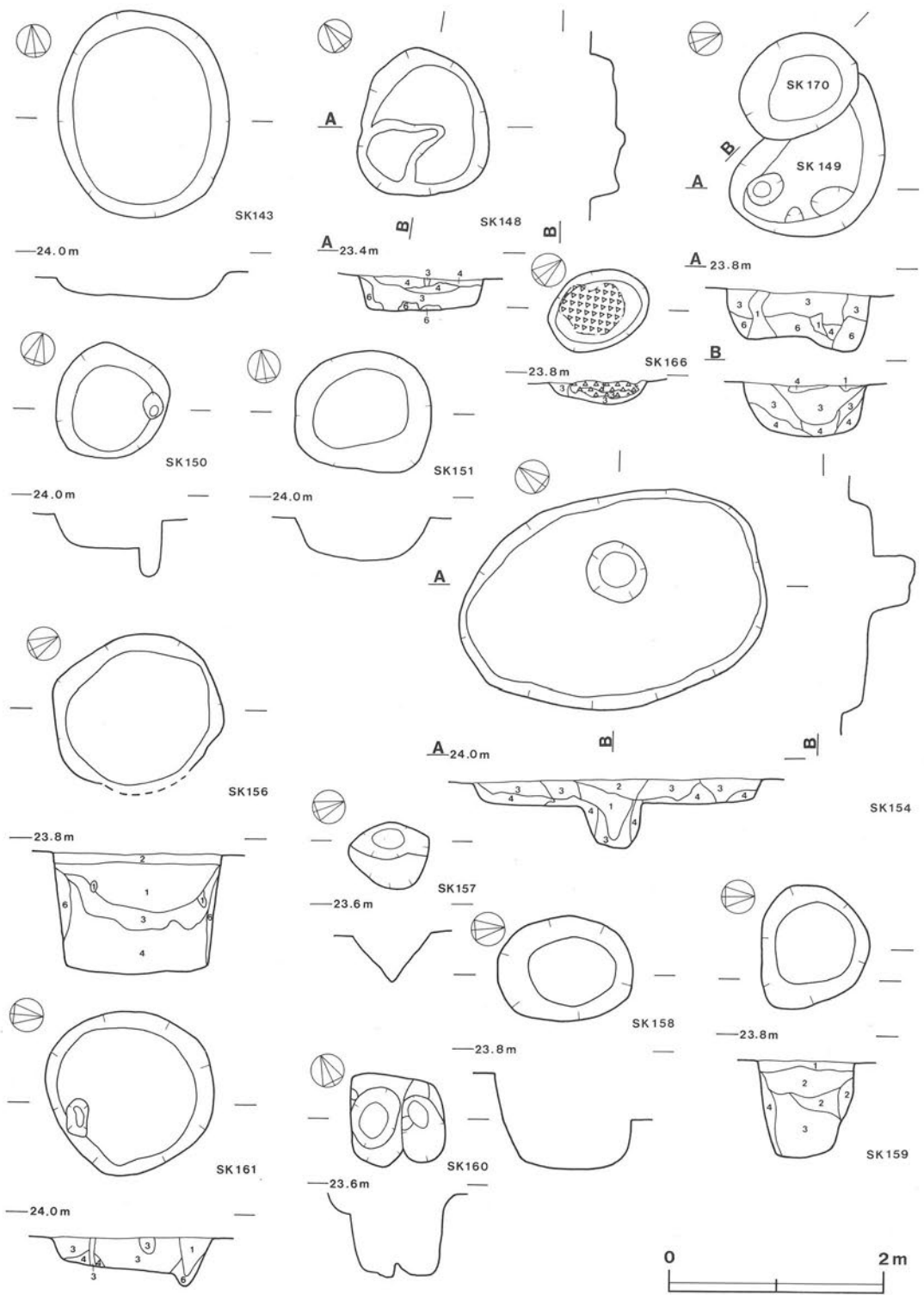
第 122 图 土坑实测图(4)



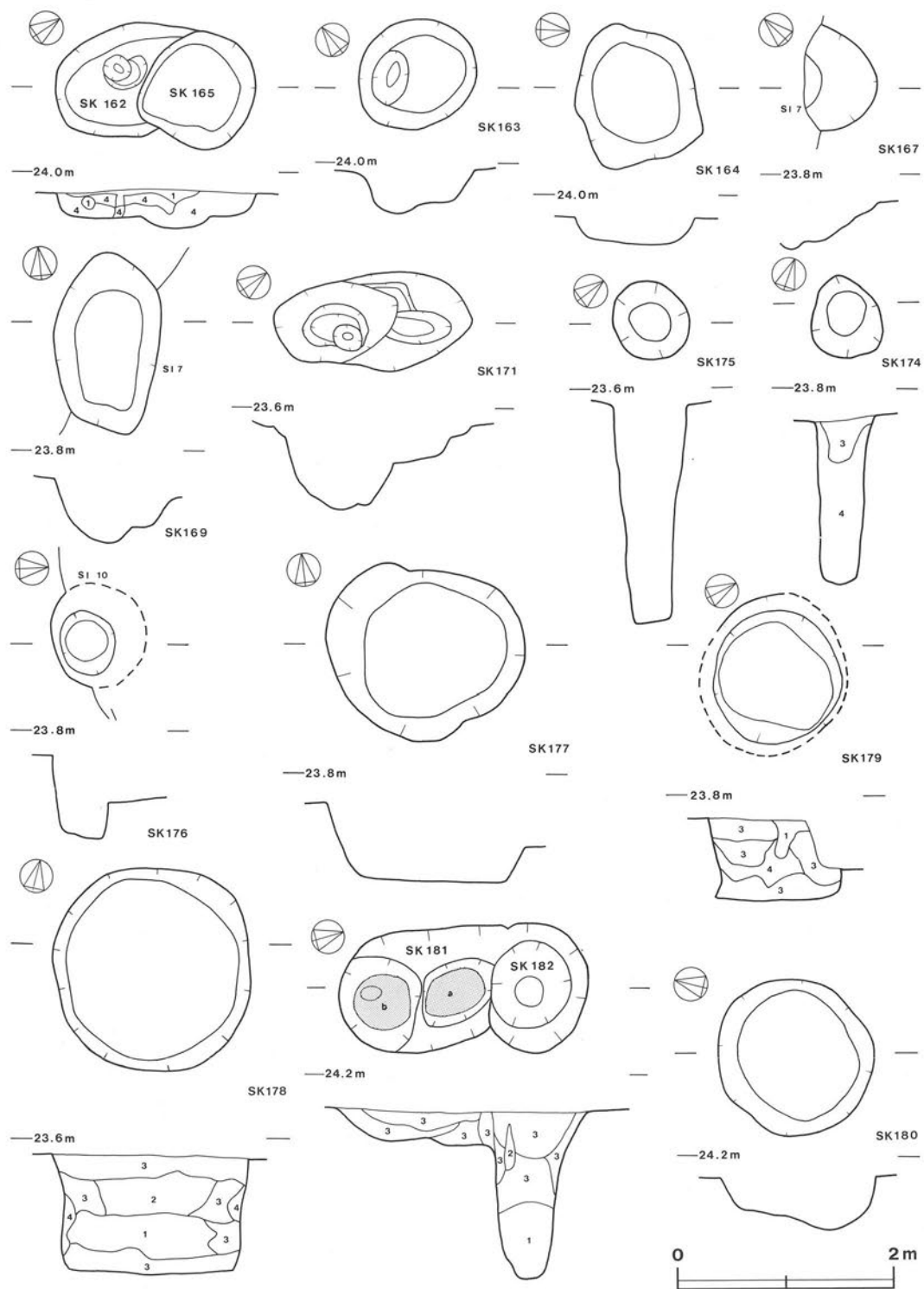
第 123 图 土坑实测图(5)



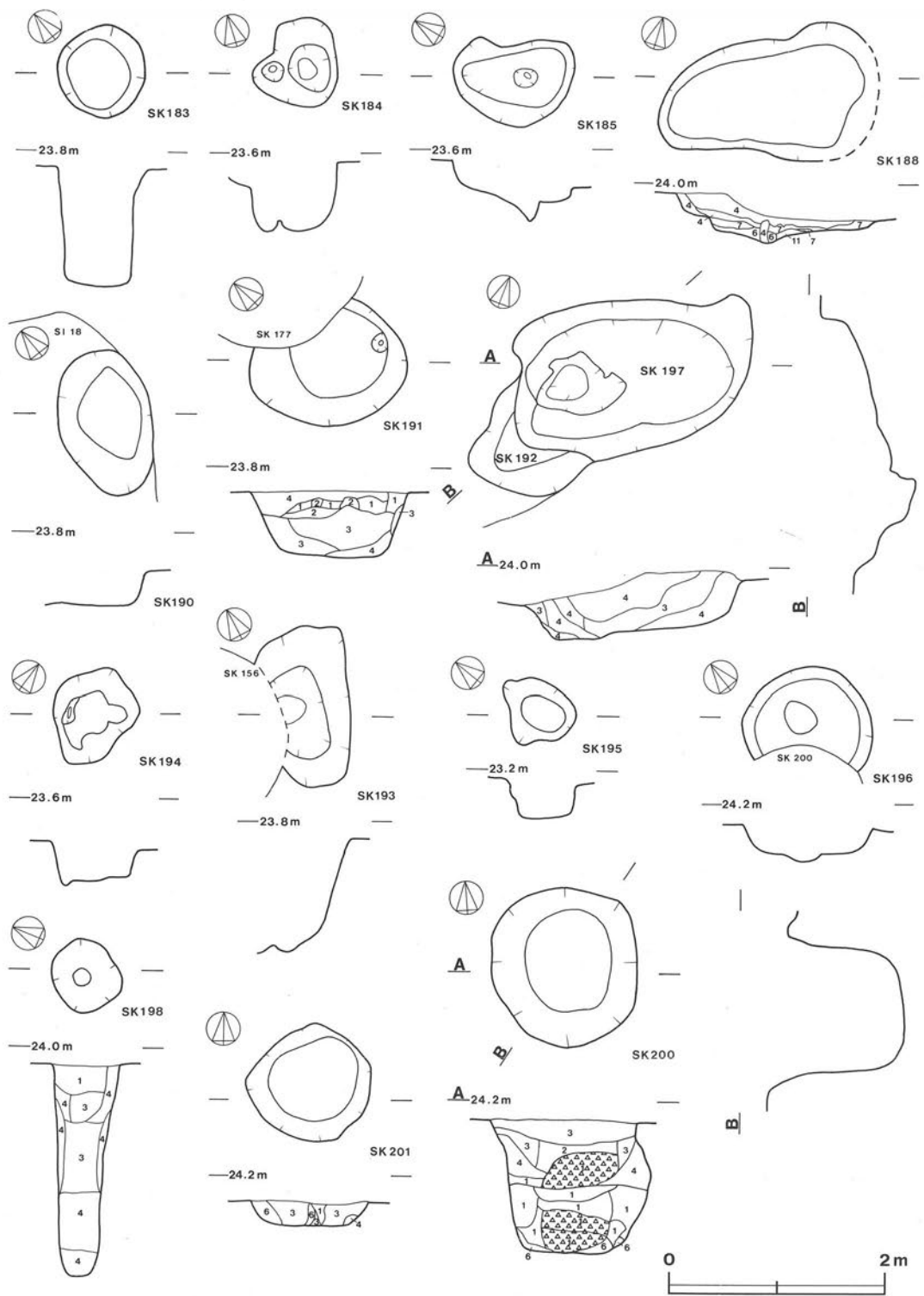
第 124 图 土坑实测图(6)



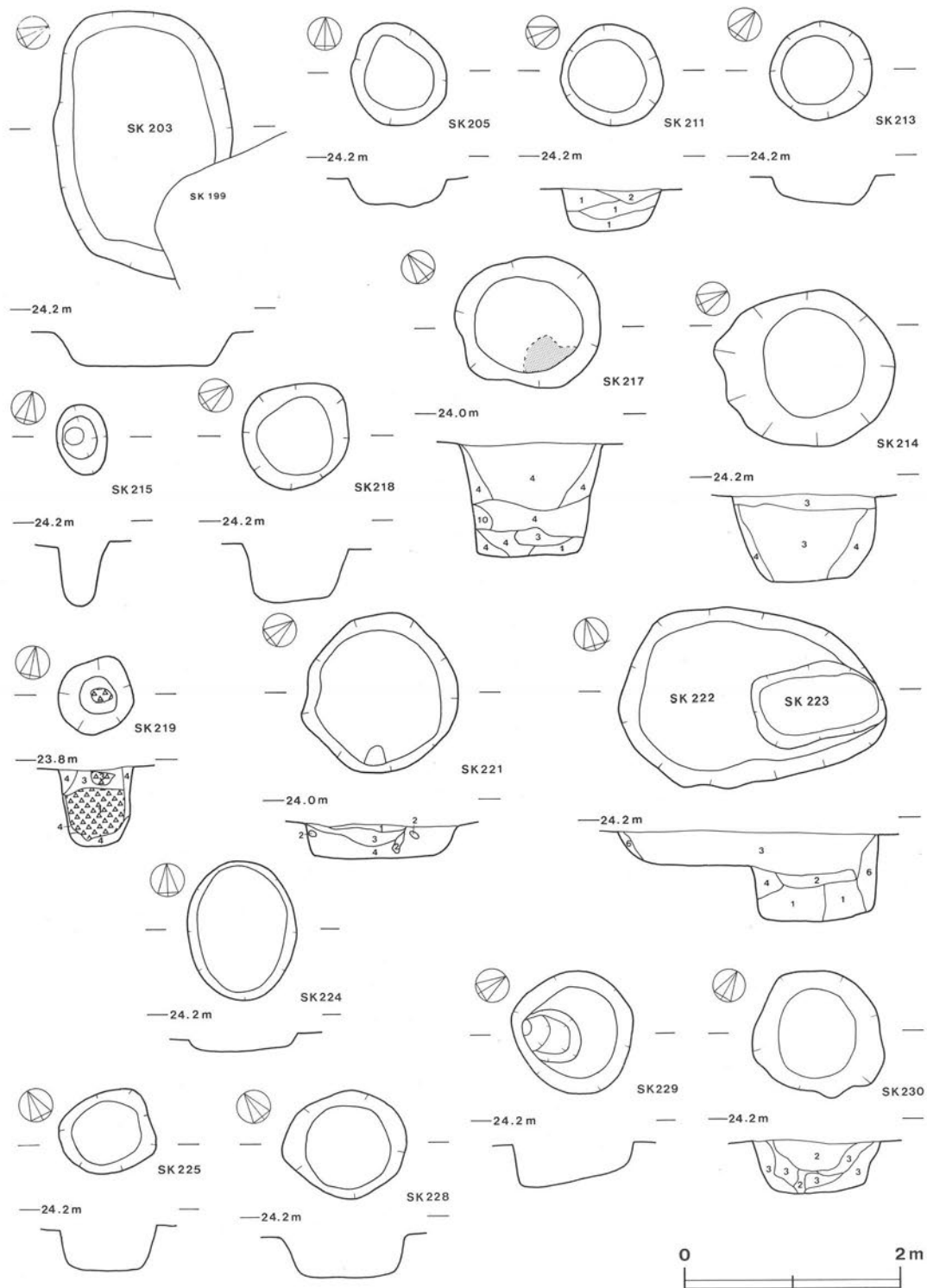
第 125 图 土坑实测图(7)



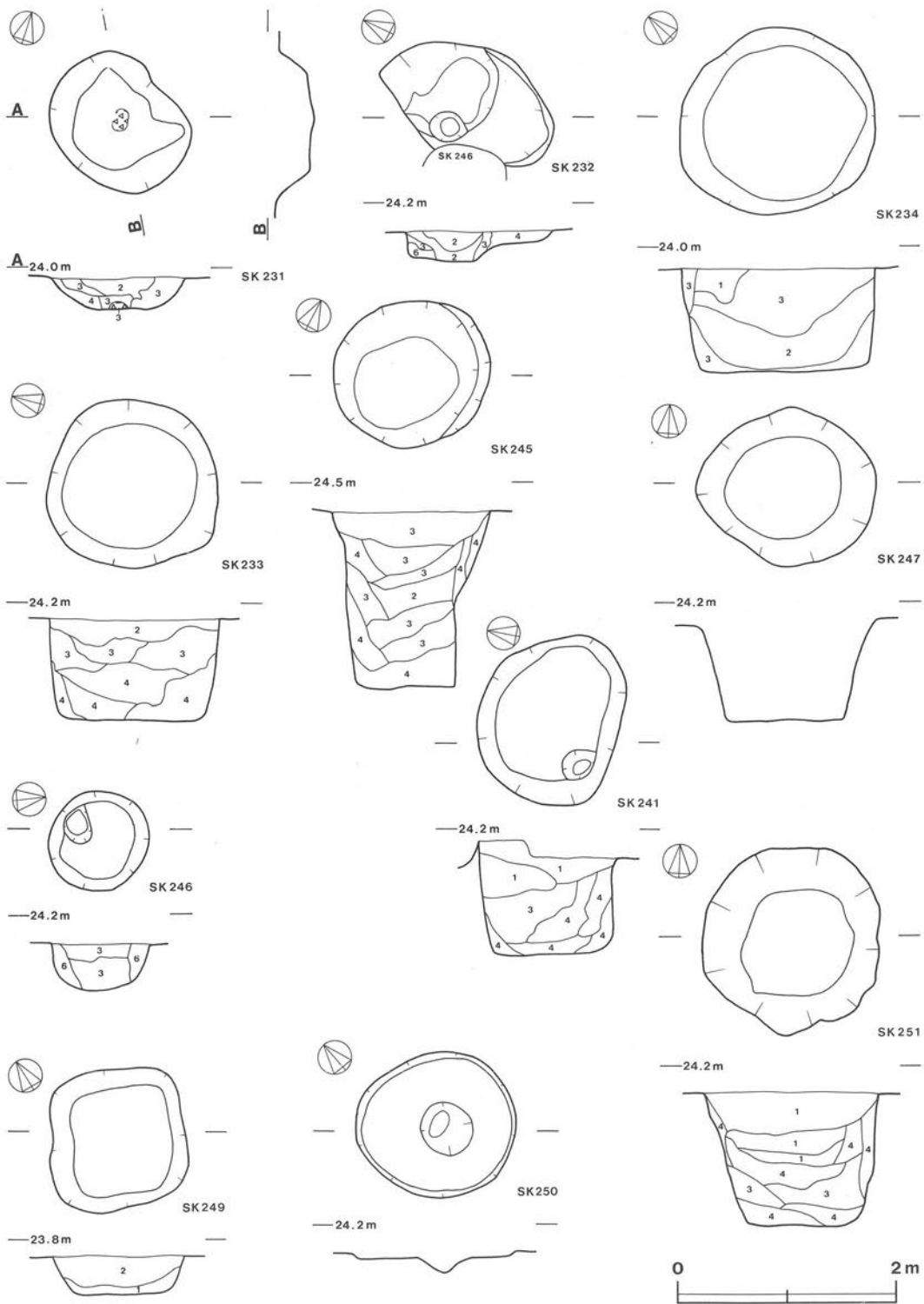
第 126 图 土坑实测图(8)



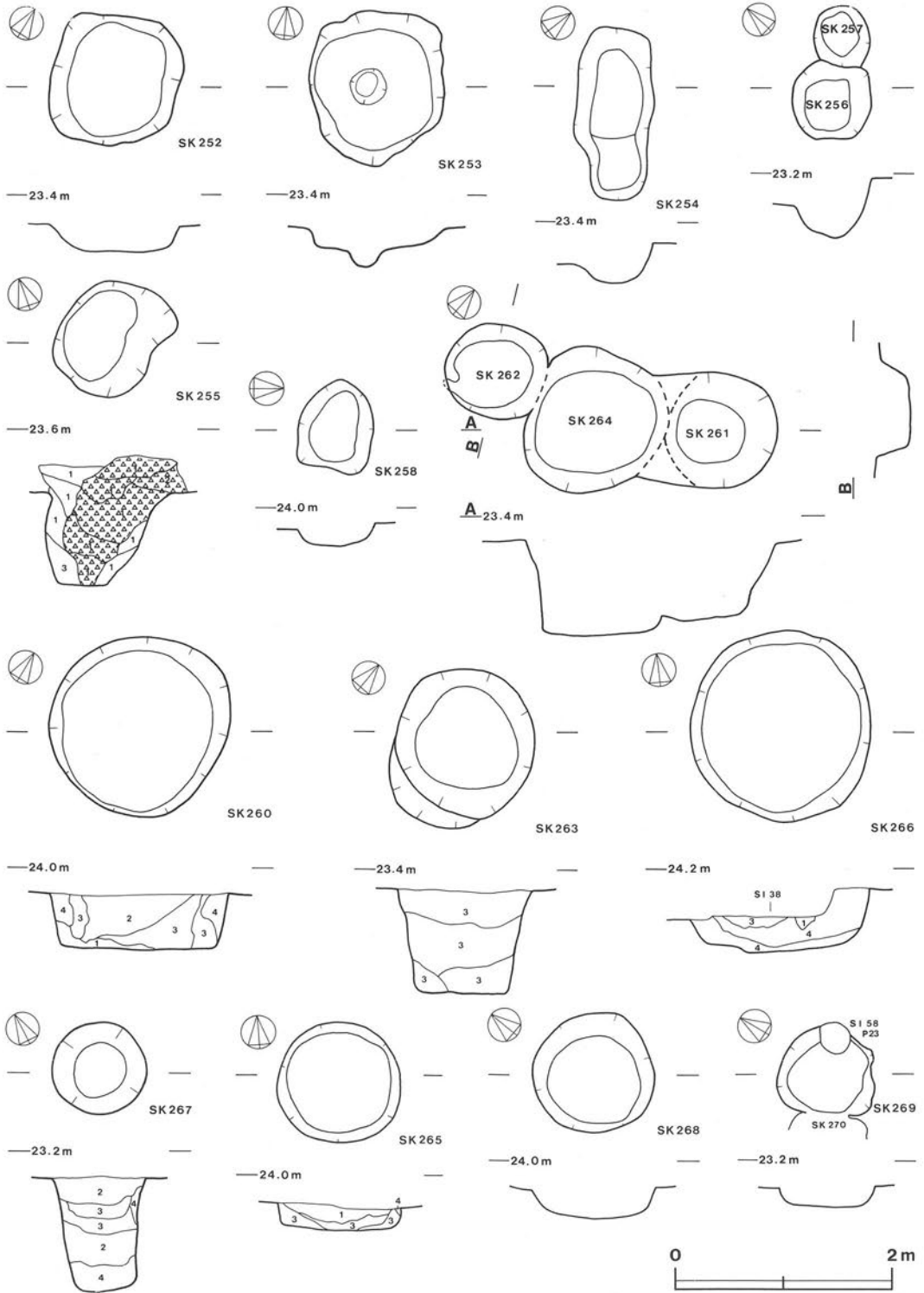
第 127 图 土坑实测图(9)



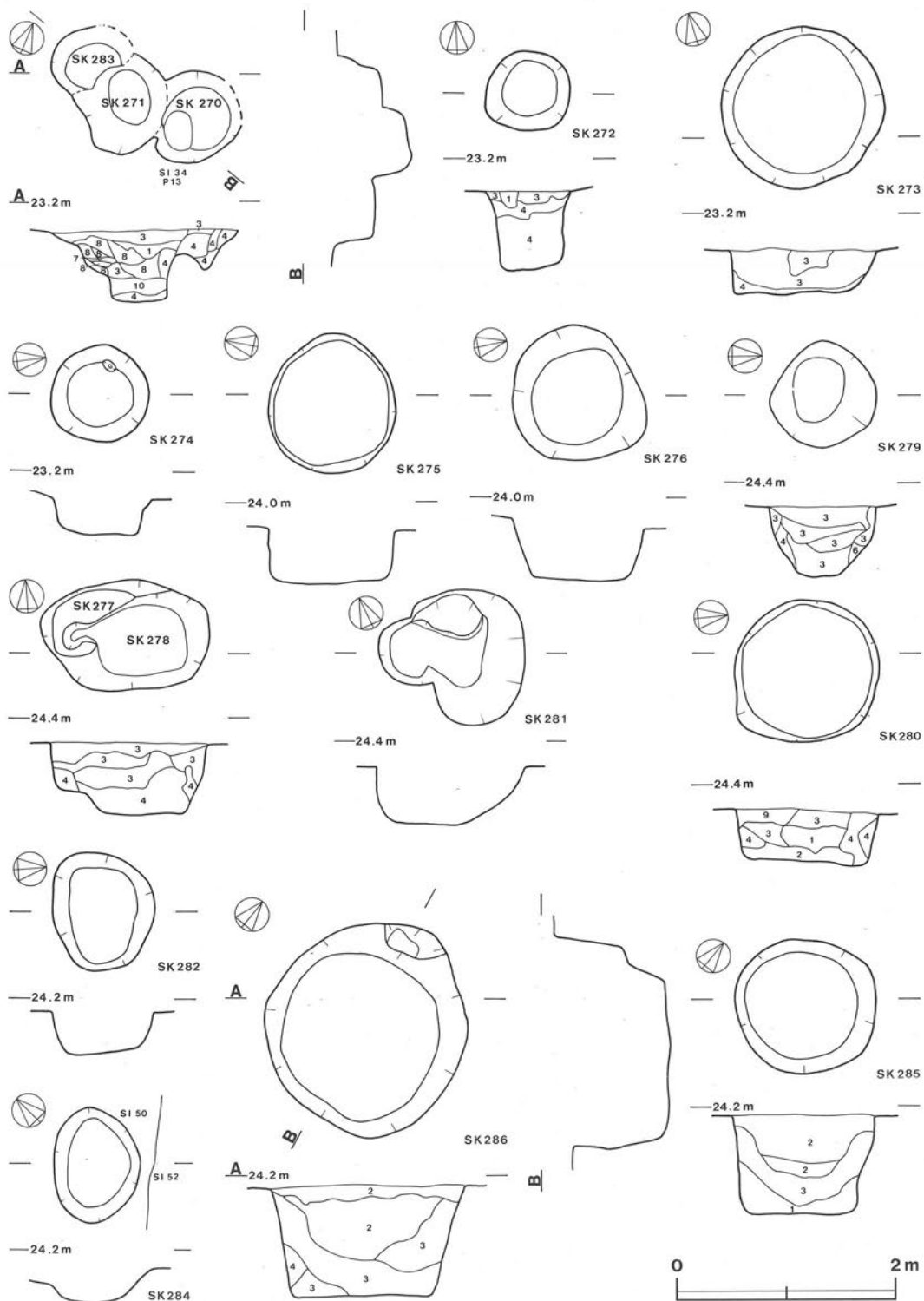
第 128 图 土坑实测图(10)



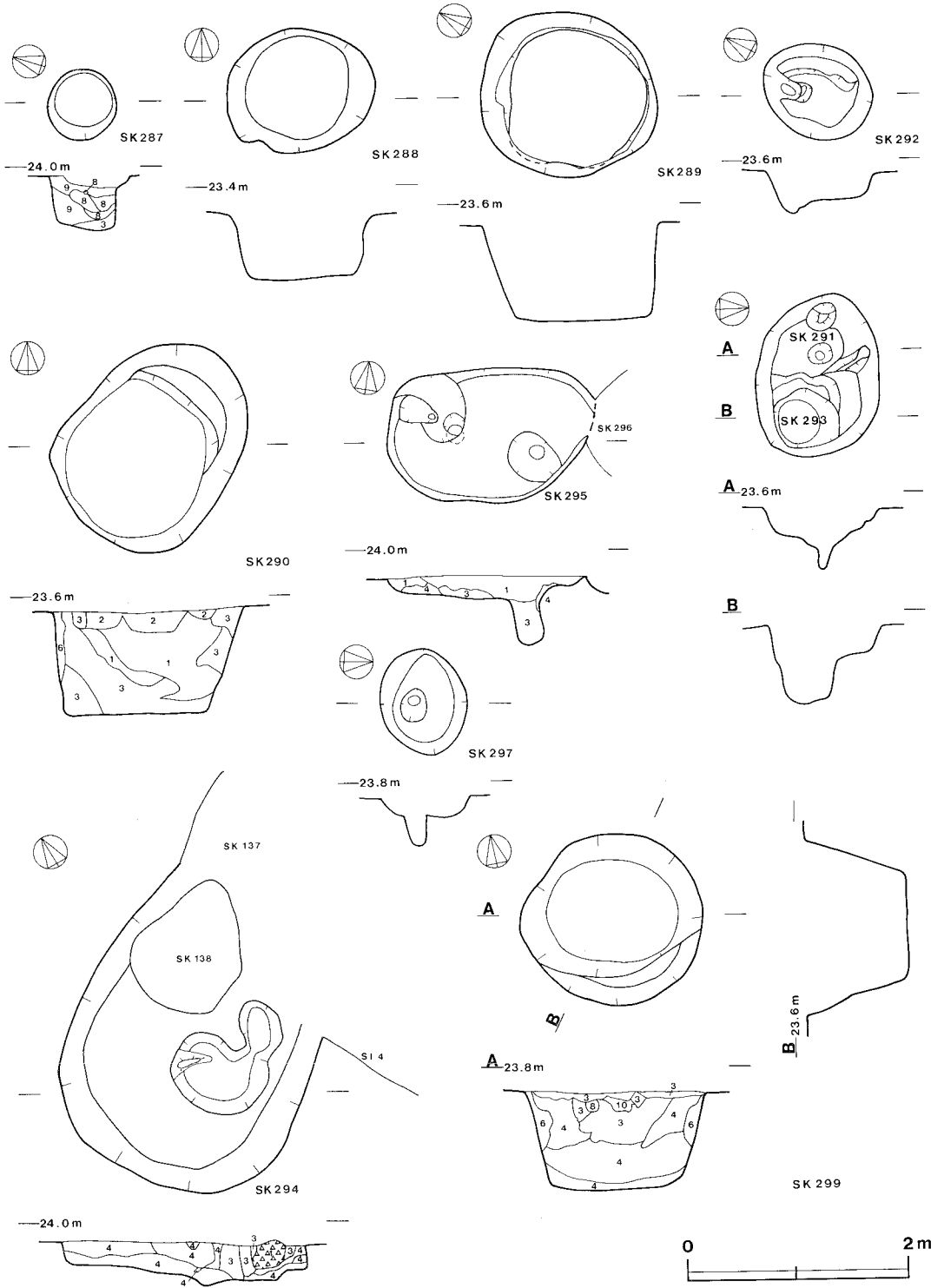
第 129 图 土坑实测图(11)



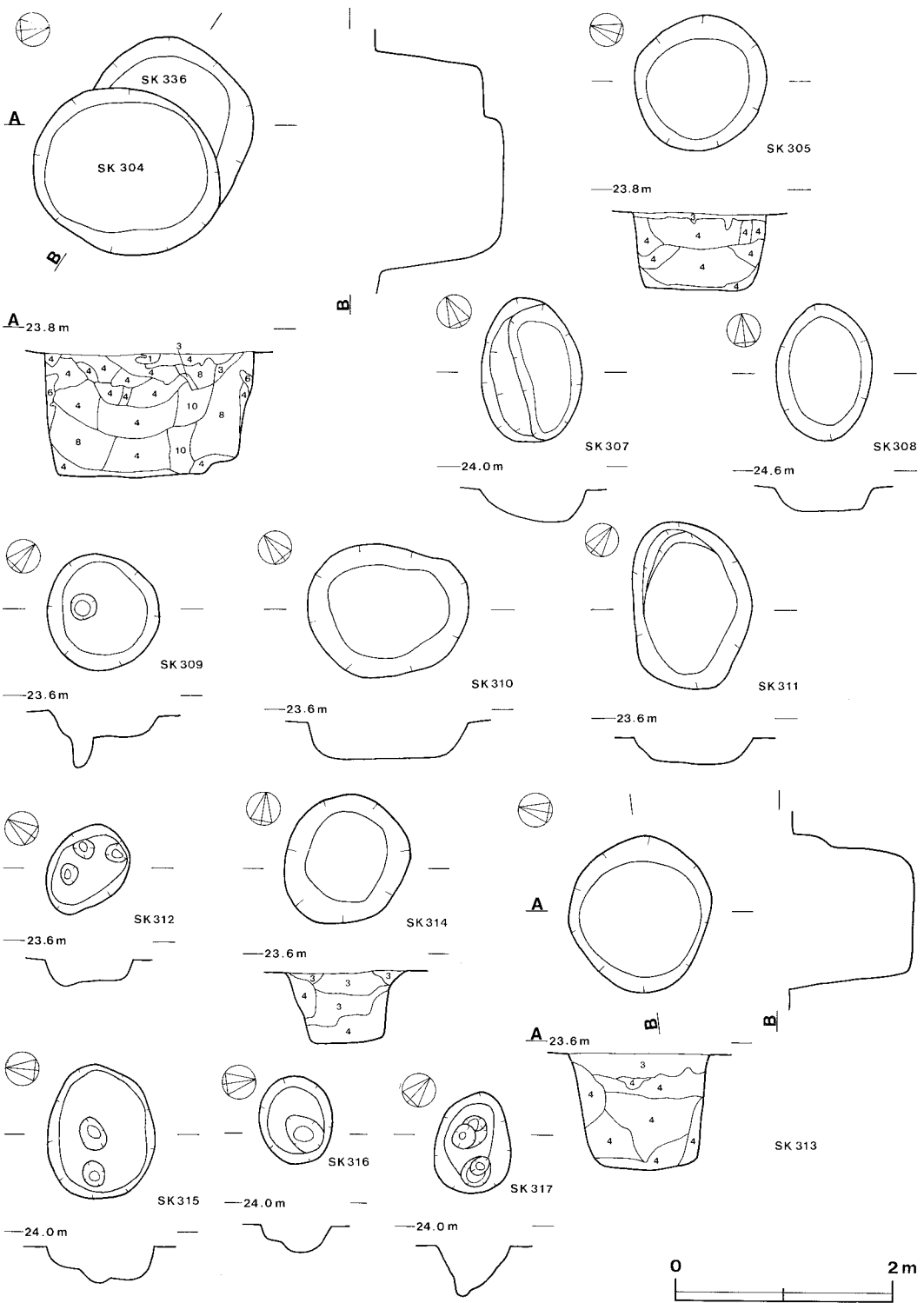
第 130 图 土坑实测图(12)



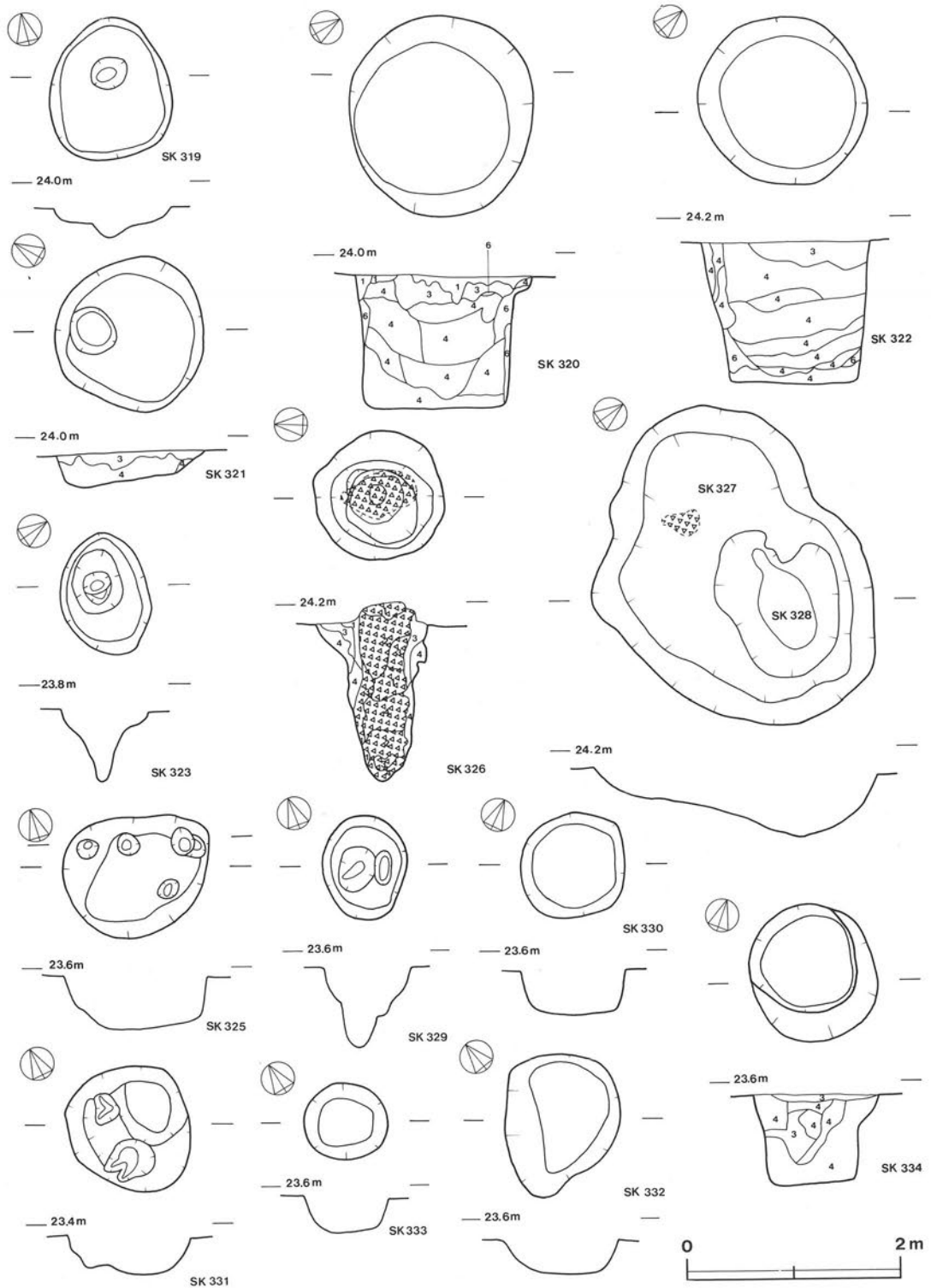
第 131 图 土坑实测图(13)



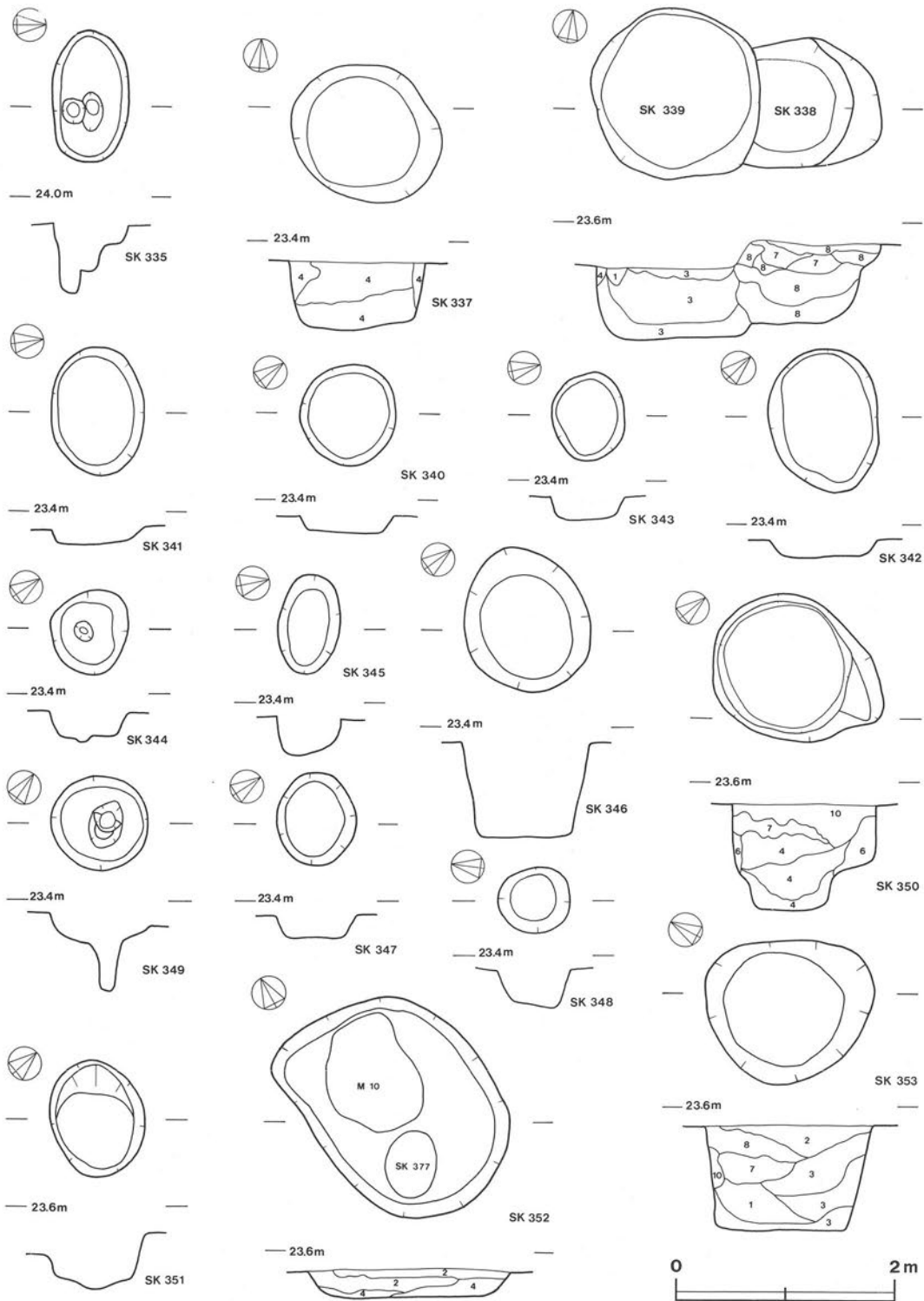
第 132 图 土坑实测图(14)



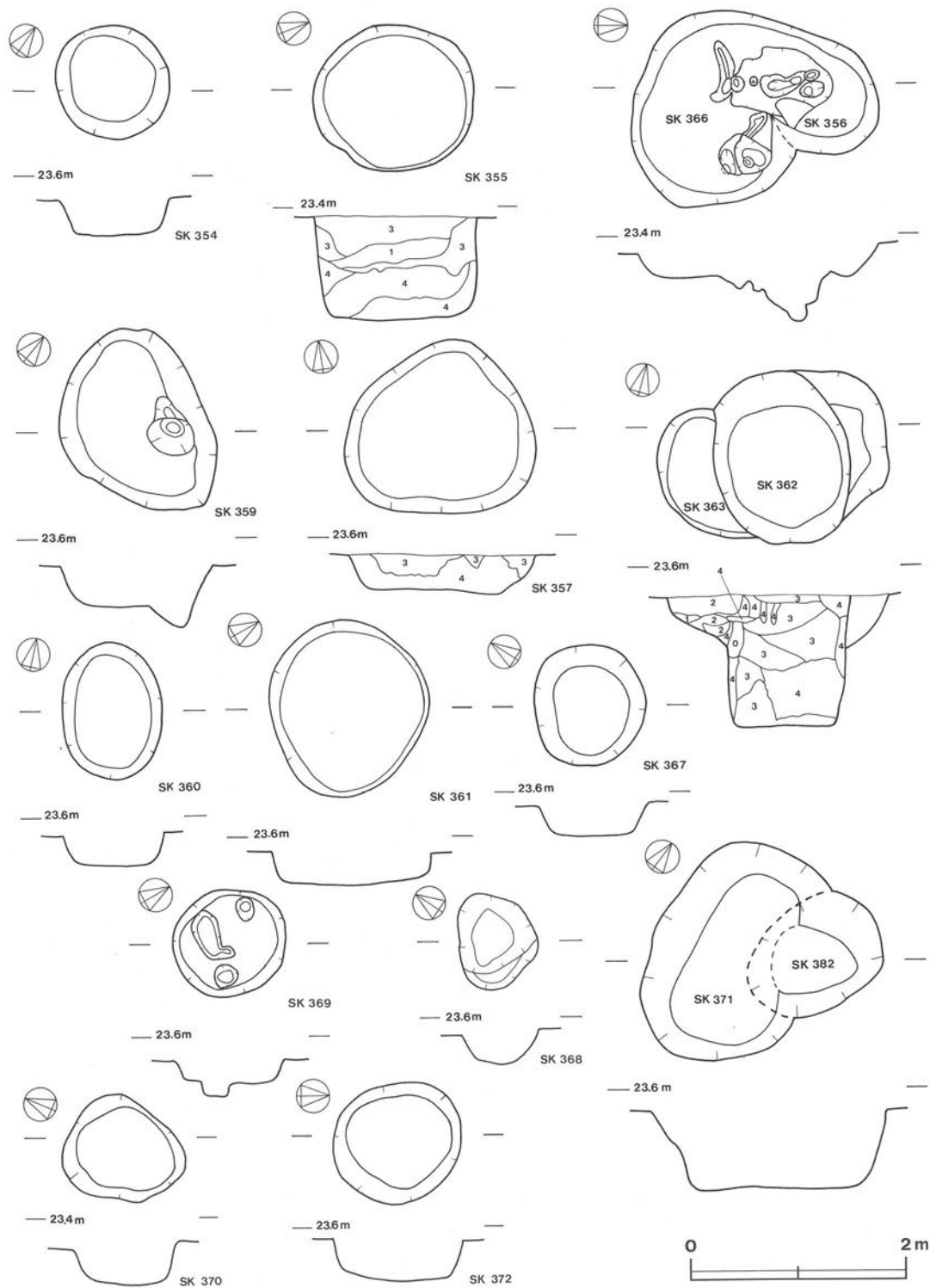
第 133 图 土坑实测图(15)



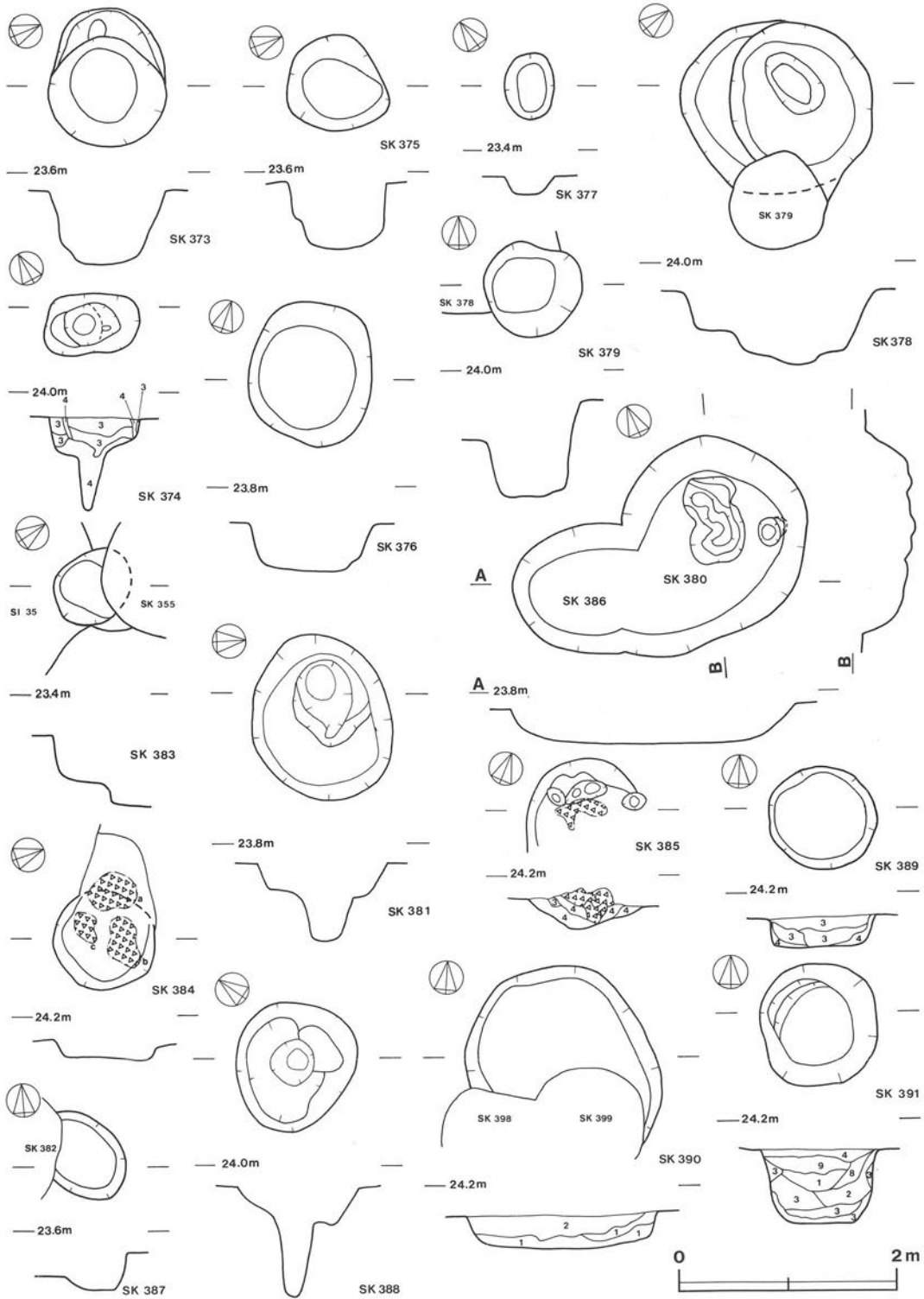
第 134 图 土坑实测图(16)



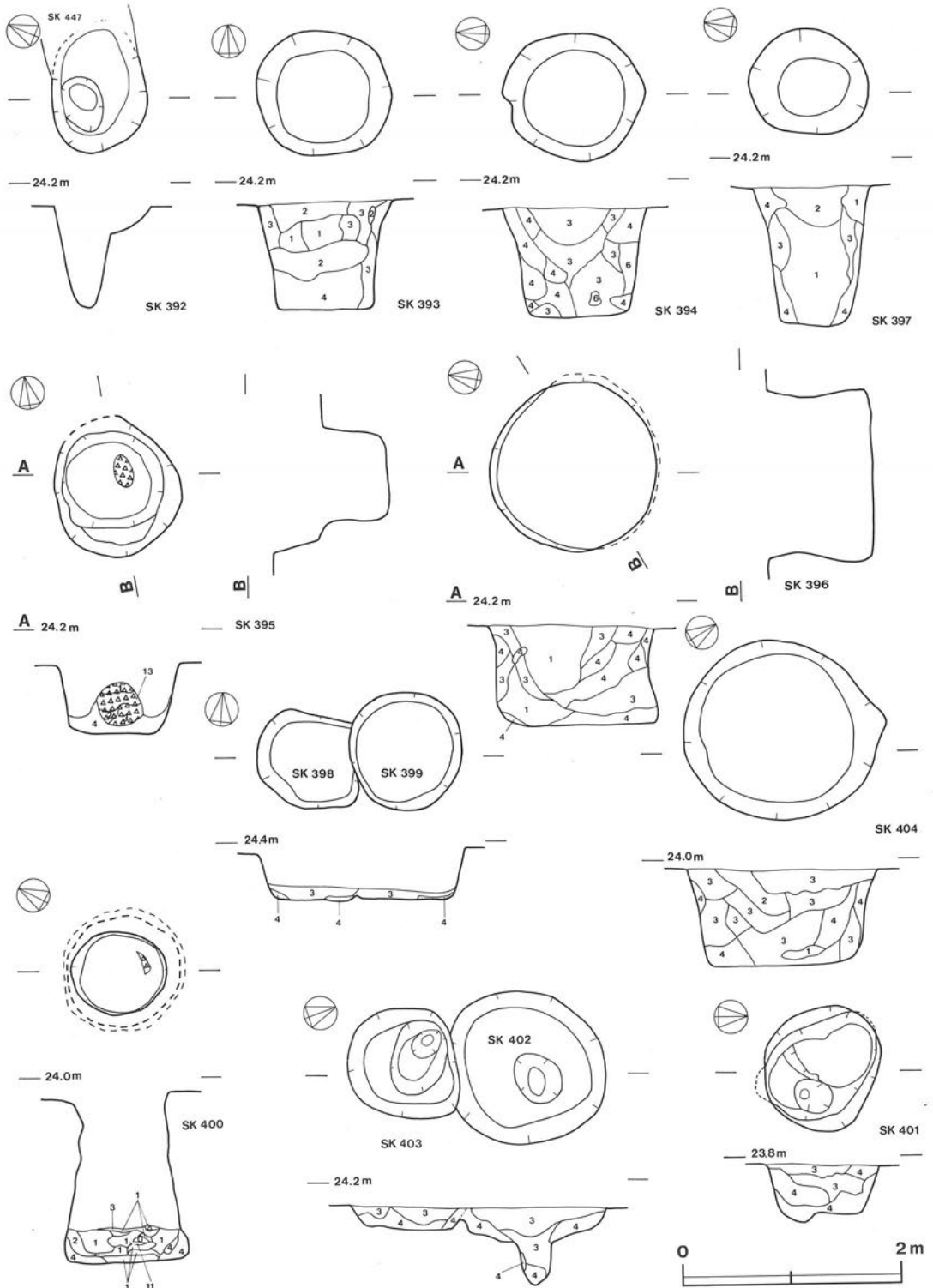
第 135 图 土坑实测图(17)



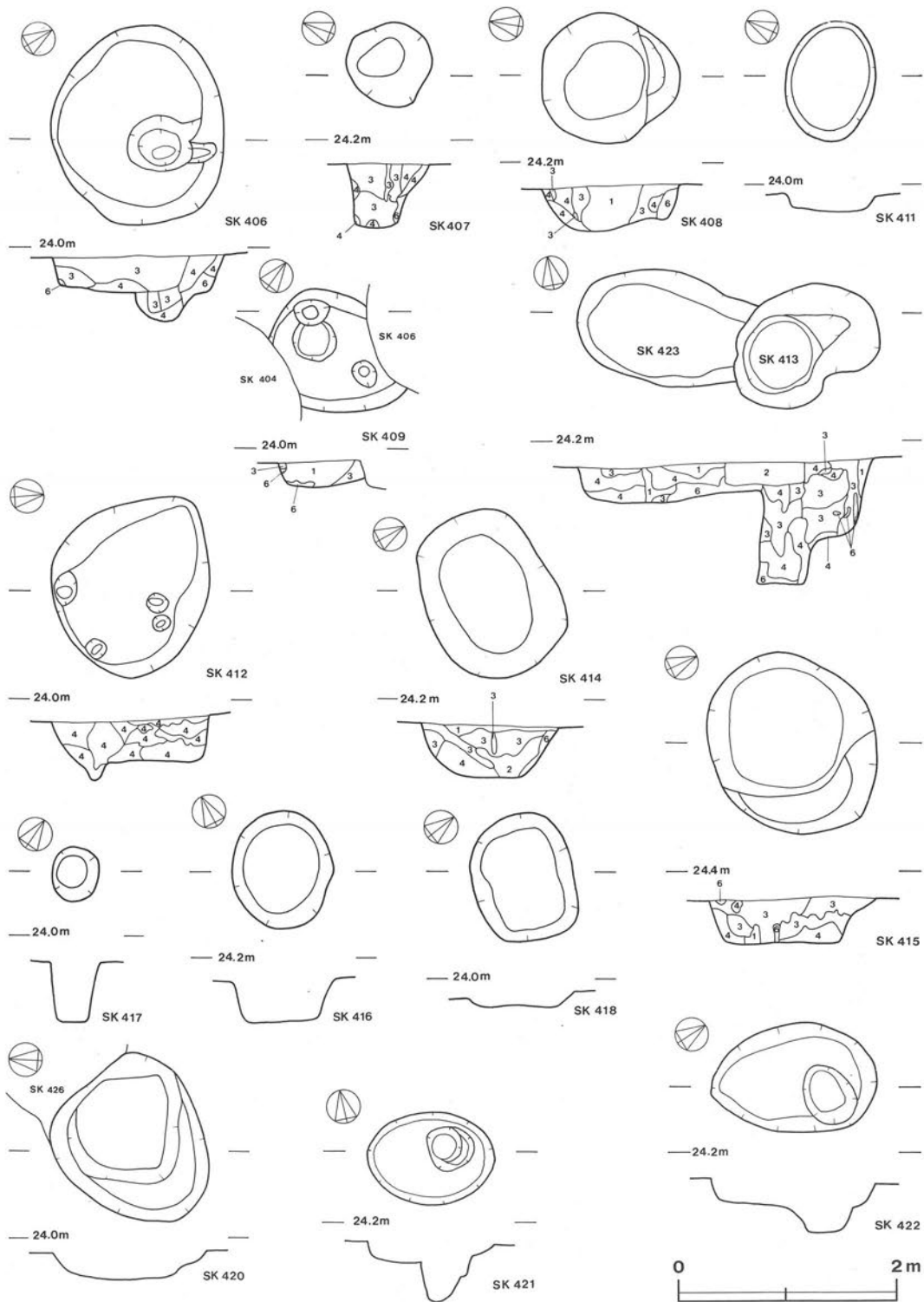
第 136 图 土坑实测图(18)



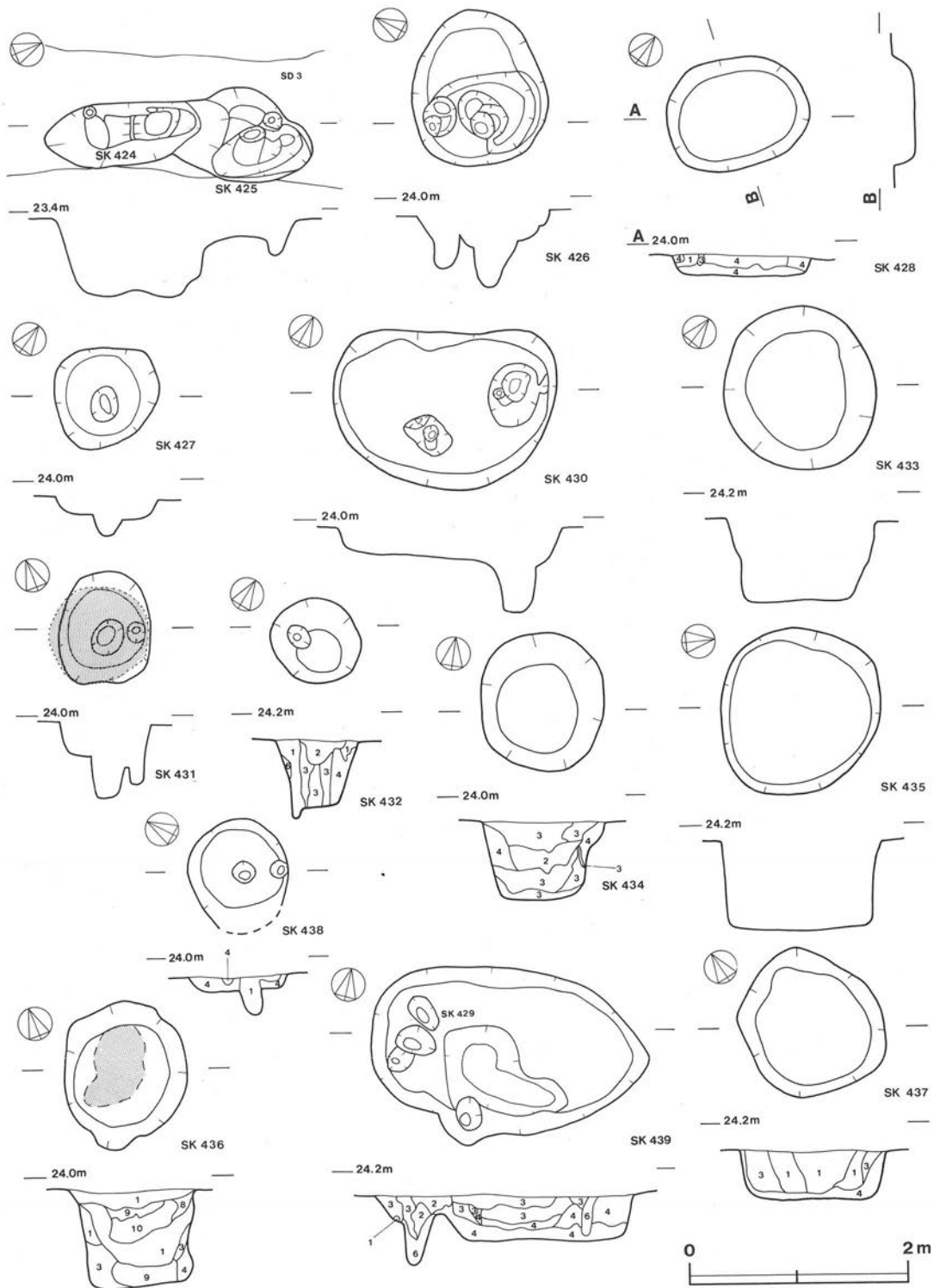
第 137 图 土坑实测图(19)



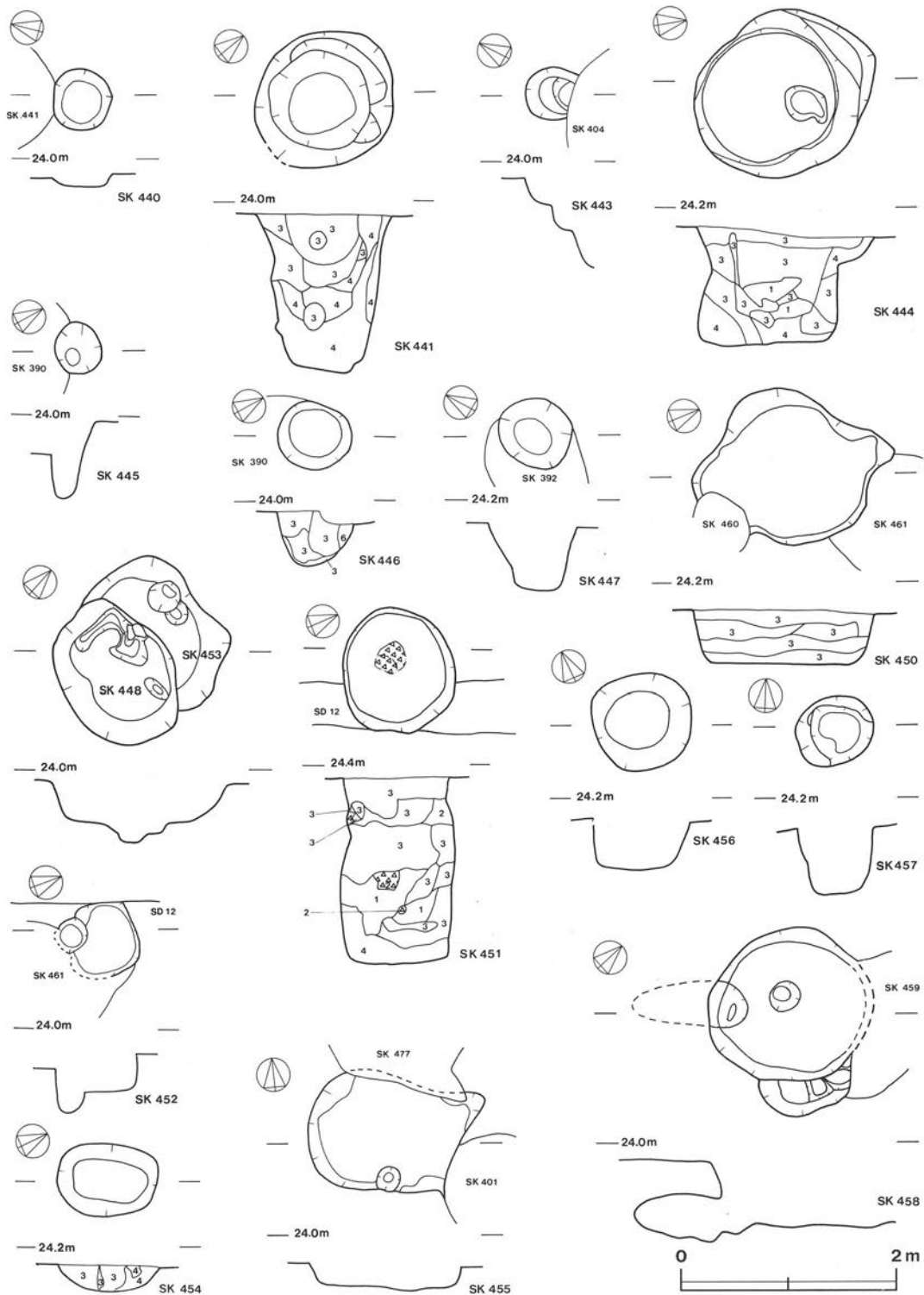
第 138 图 土坑实测图(20)



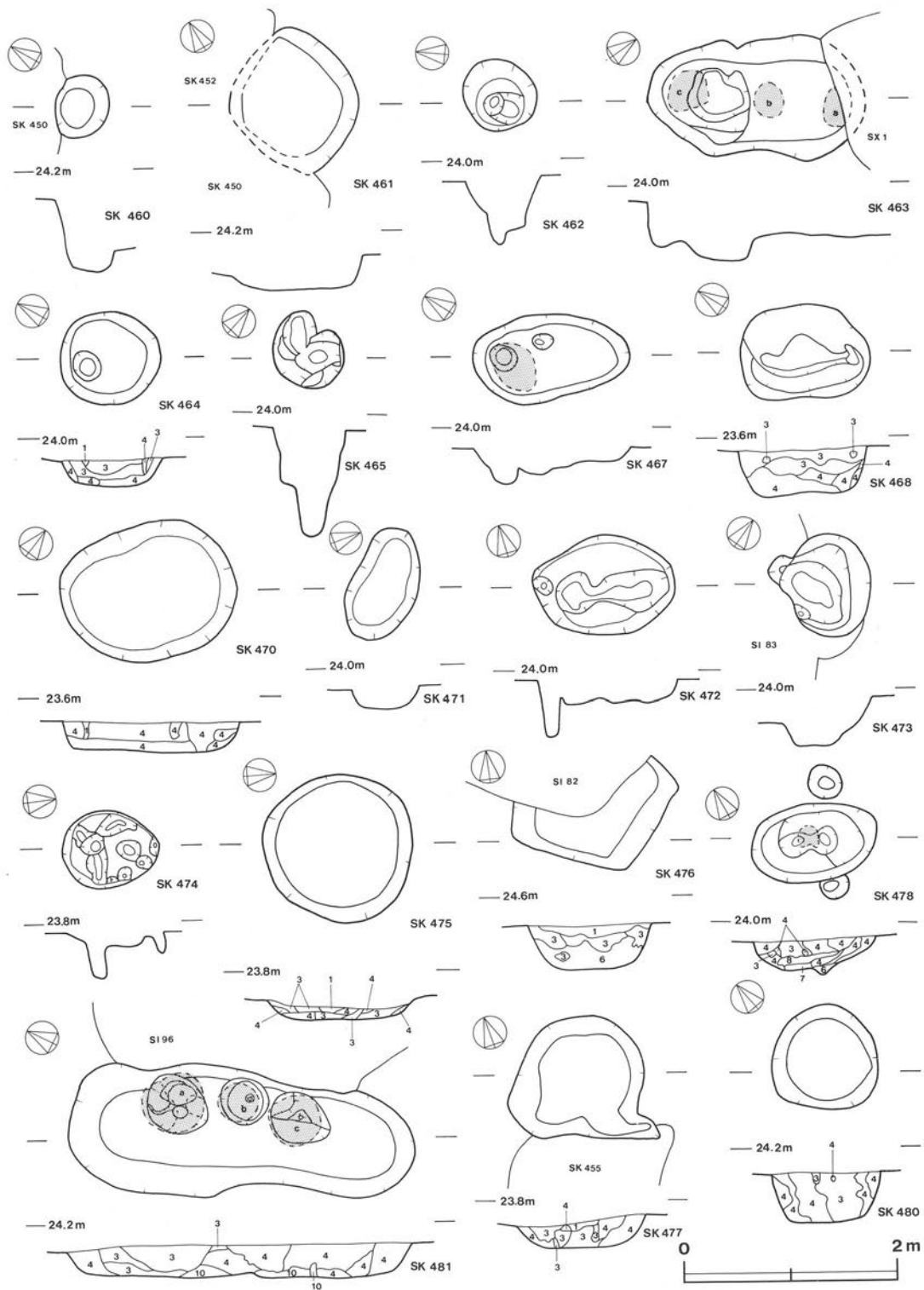
第 139 图 土坑实测图(2)



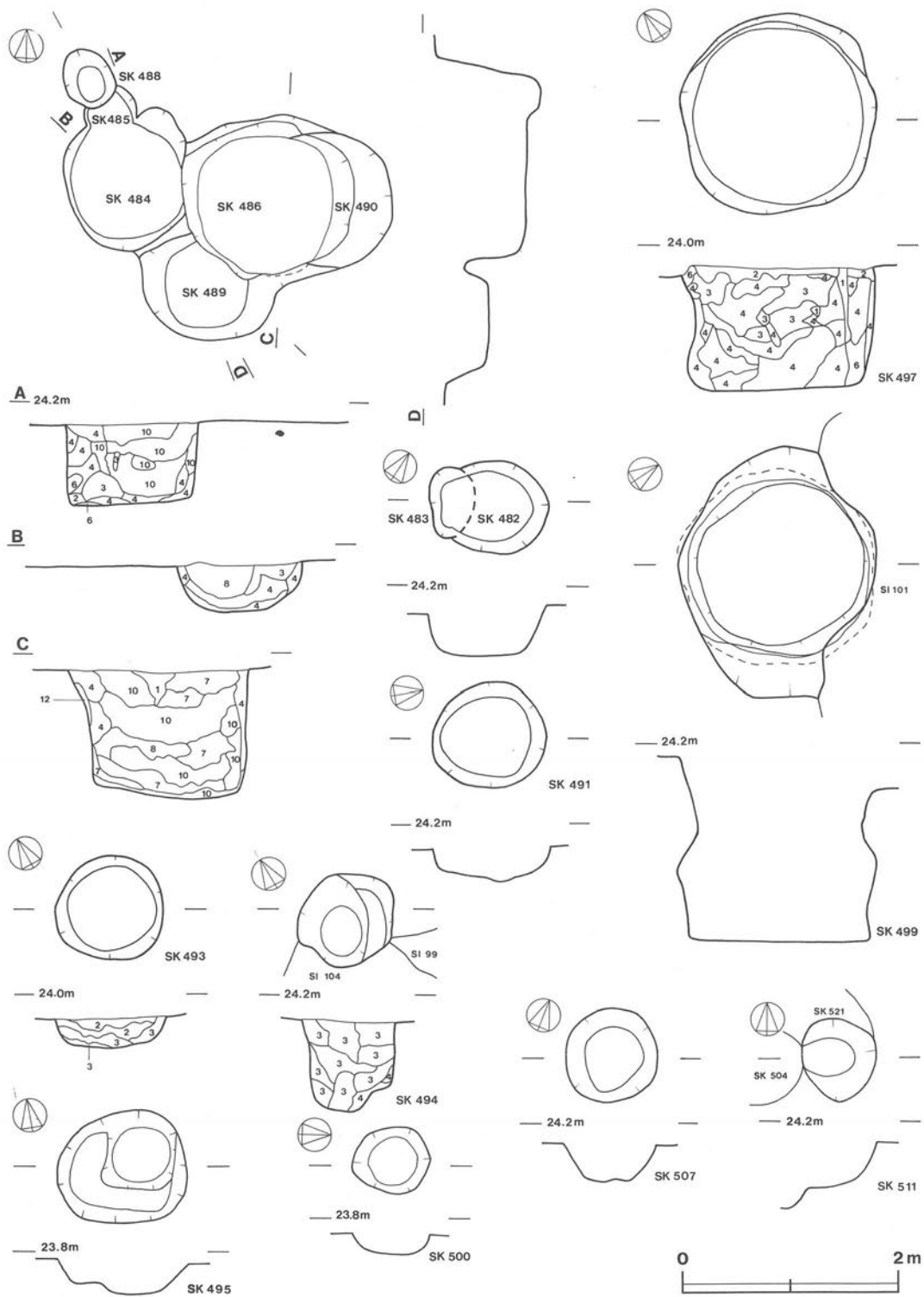
第 140 图 土坑实测图



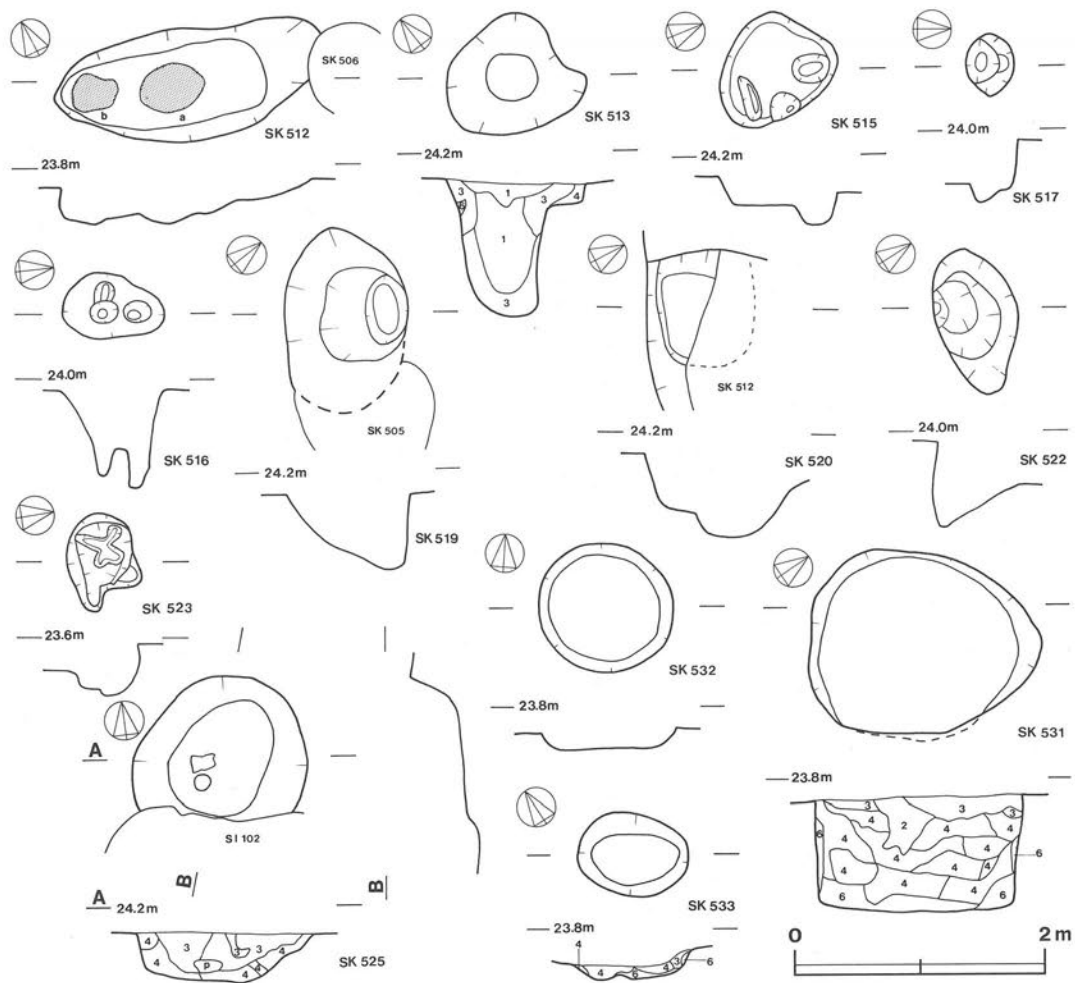
第 141 图 土坑实测图(23)



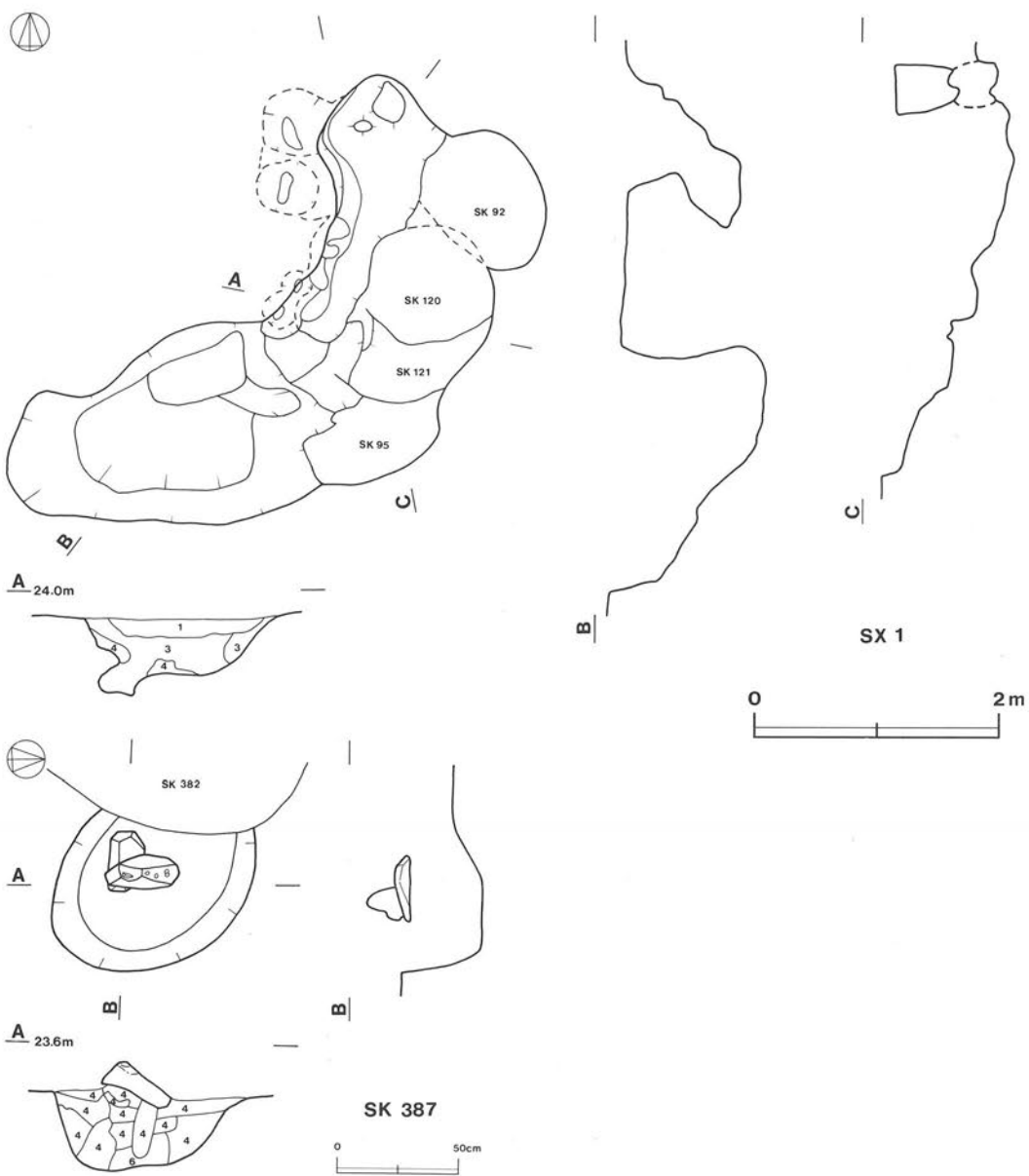
第 142 图 土坑夷测图(24)



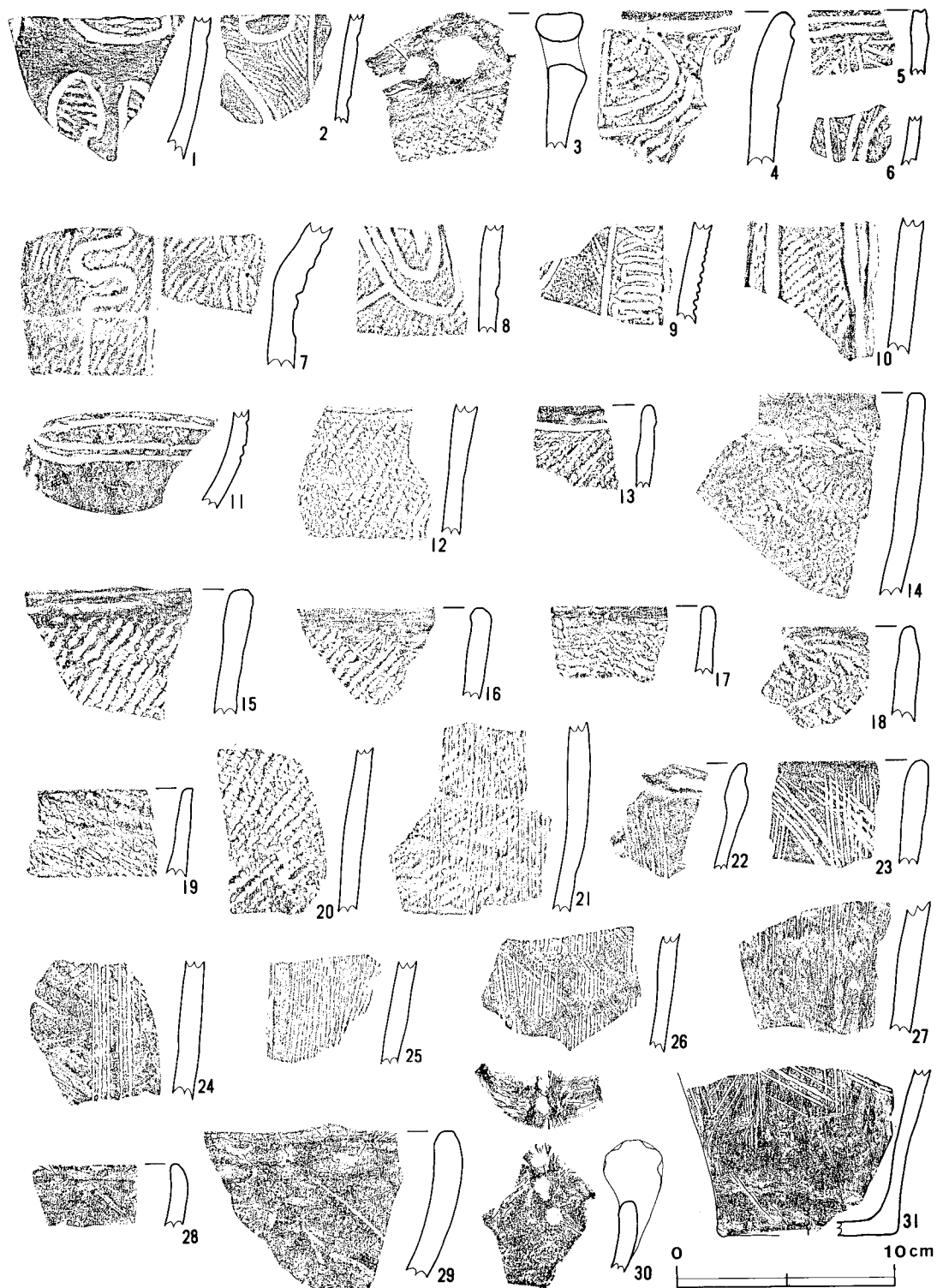
第 143 图 土坑实测图(25)



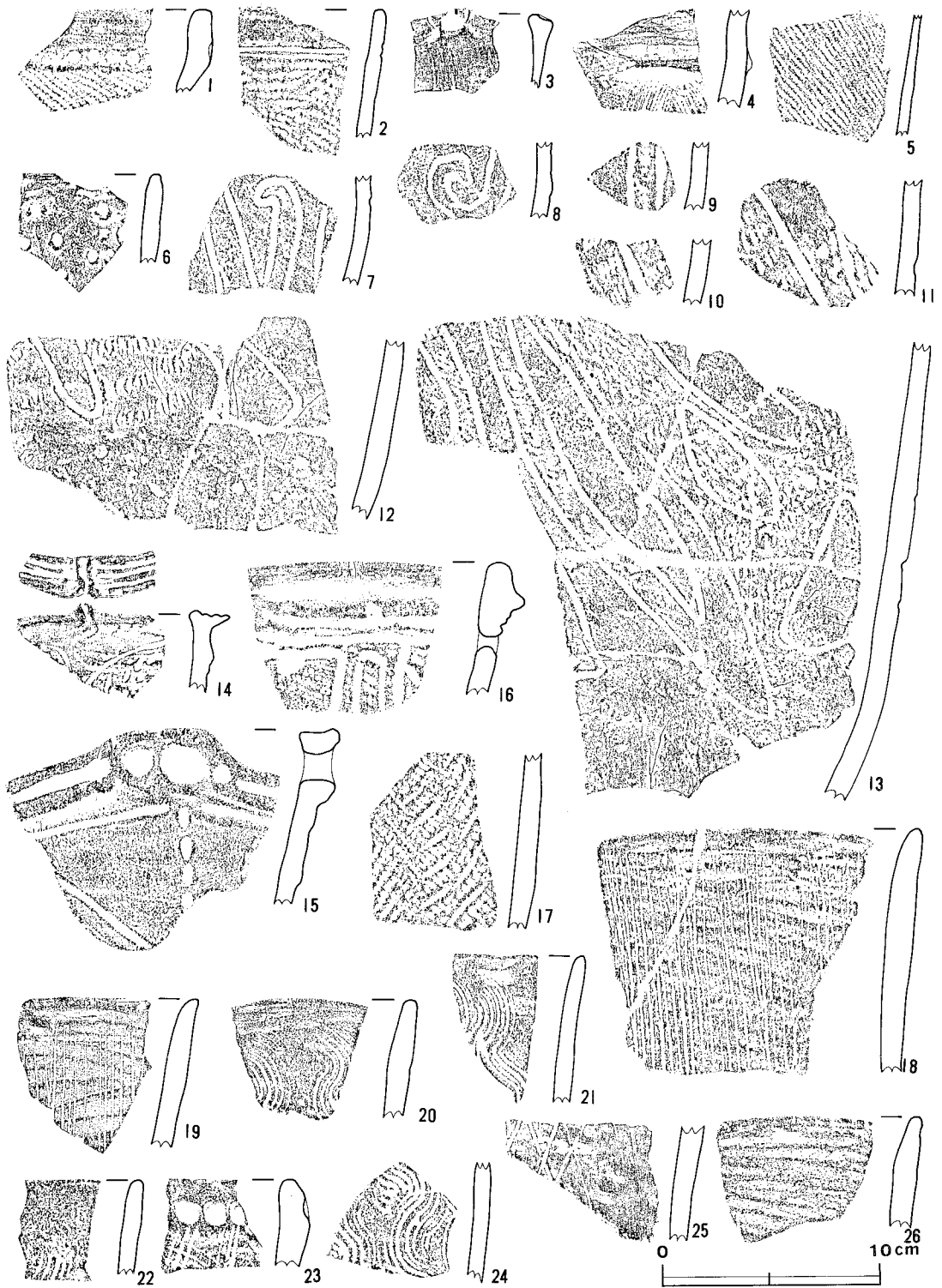
第 144 图 土坑实测图(26)



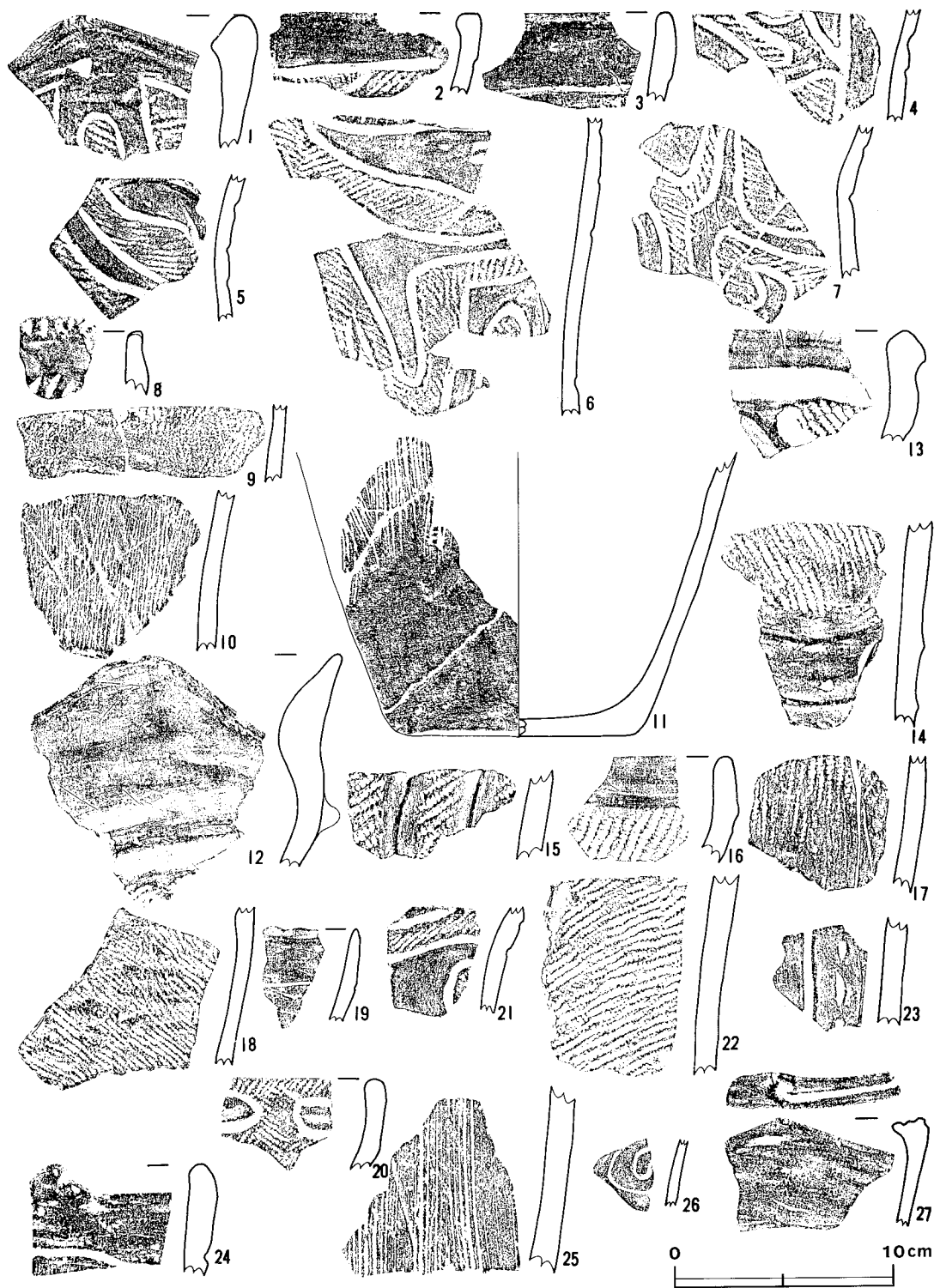
第 145 図 土坑・性格不明遺構実測図(切)



第 146 图 第 28 号土坑出土土器实测图·拓影图



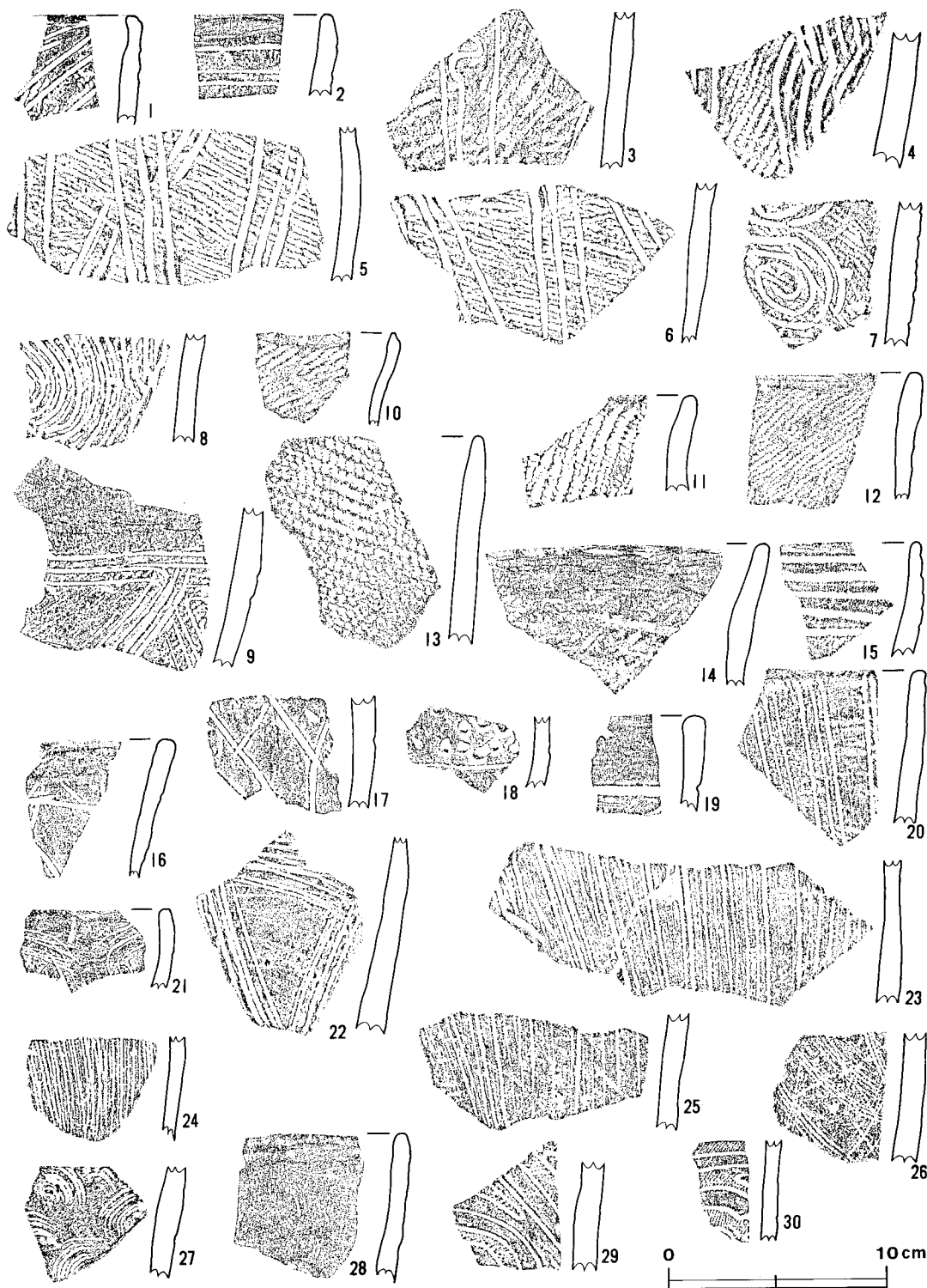
第 147 图 第 45·56 号土坑出土土器拓影图



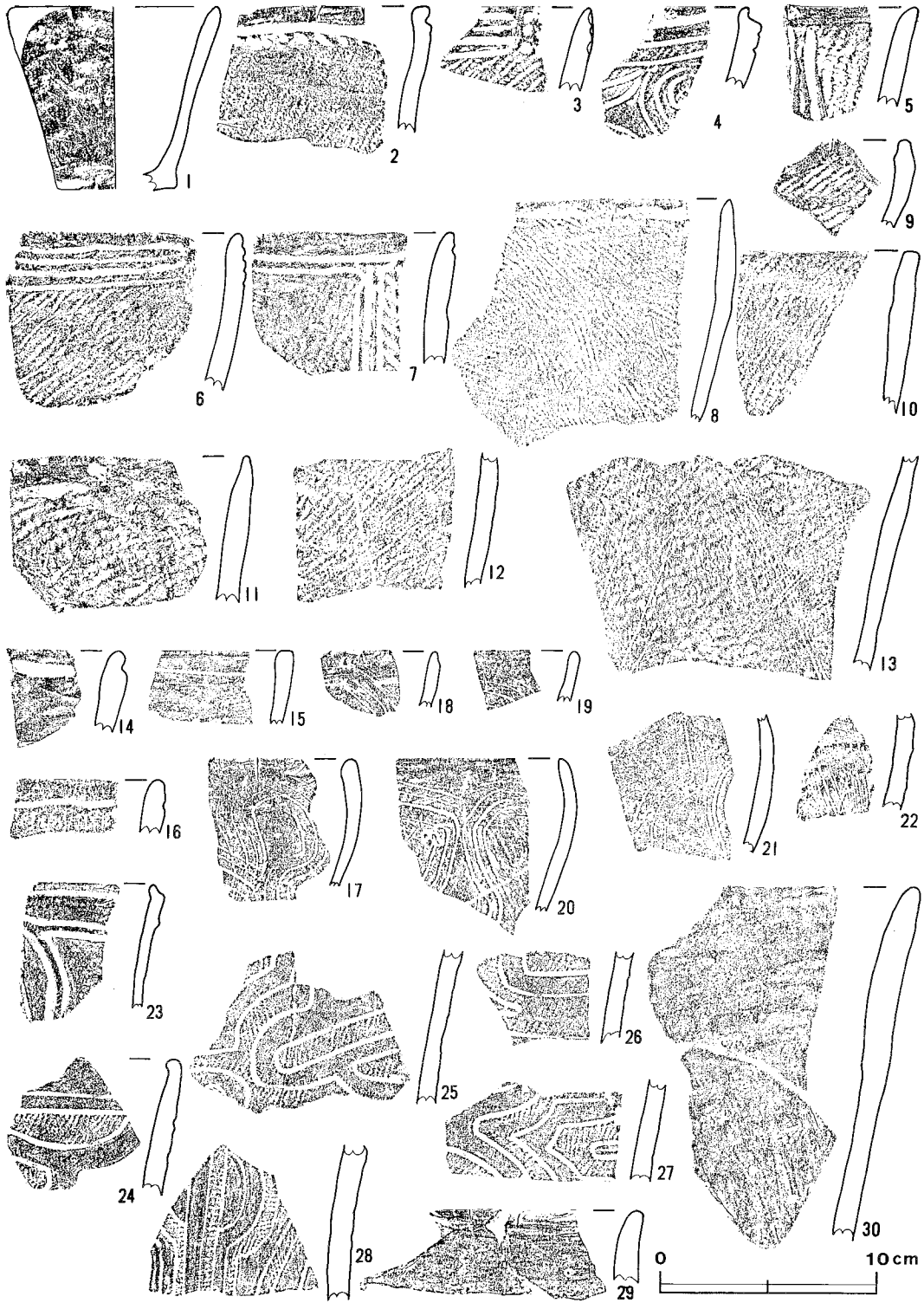
第 148 图 第 58·62·68·73 号土坑出土土器实测图·拓影图



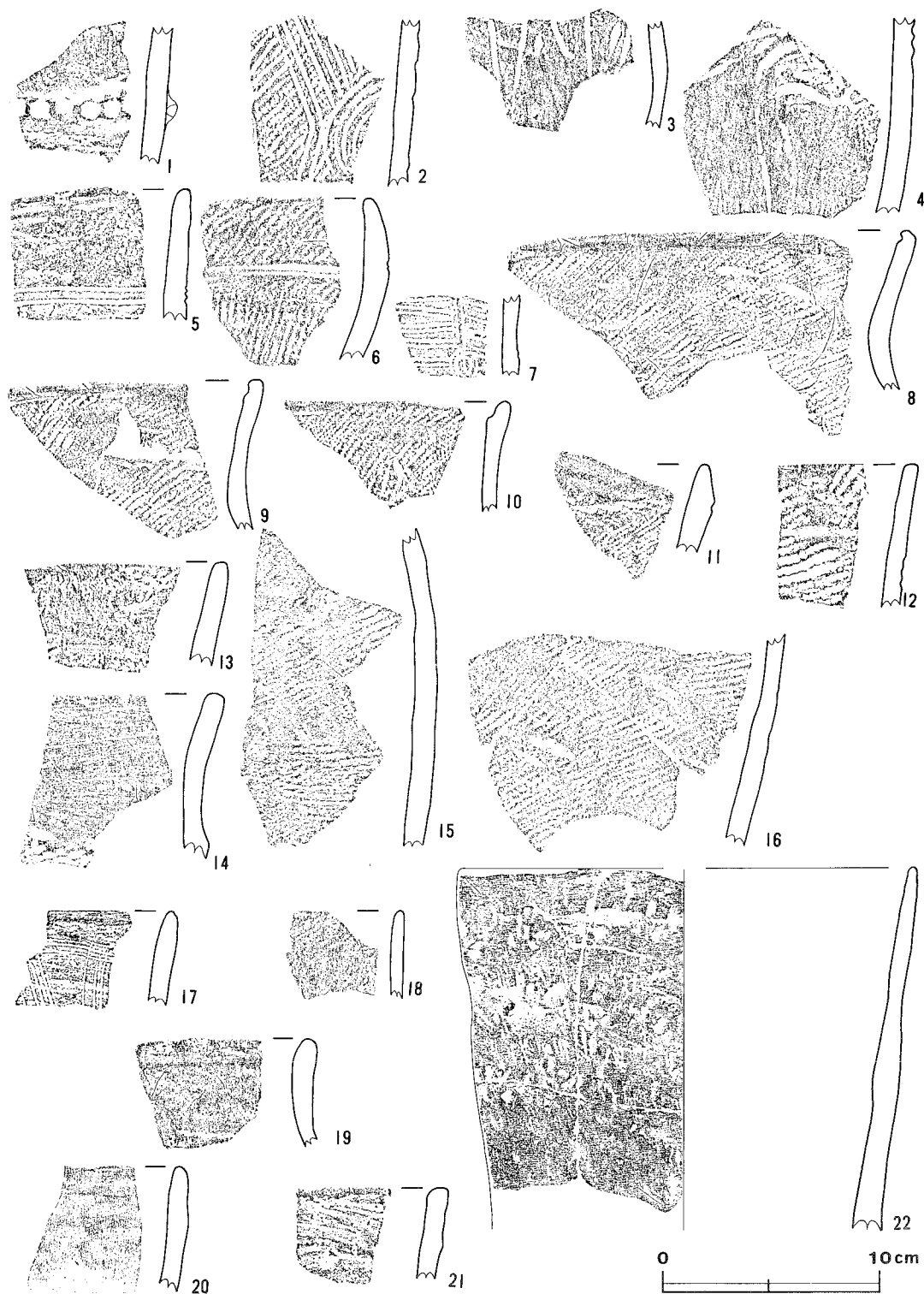
第 149 图 第 84·88·95 号土坑出土土器实测图·拓影图



第 150 图 第 95 号土坑出土土器拓影图



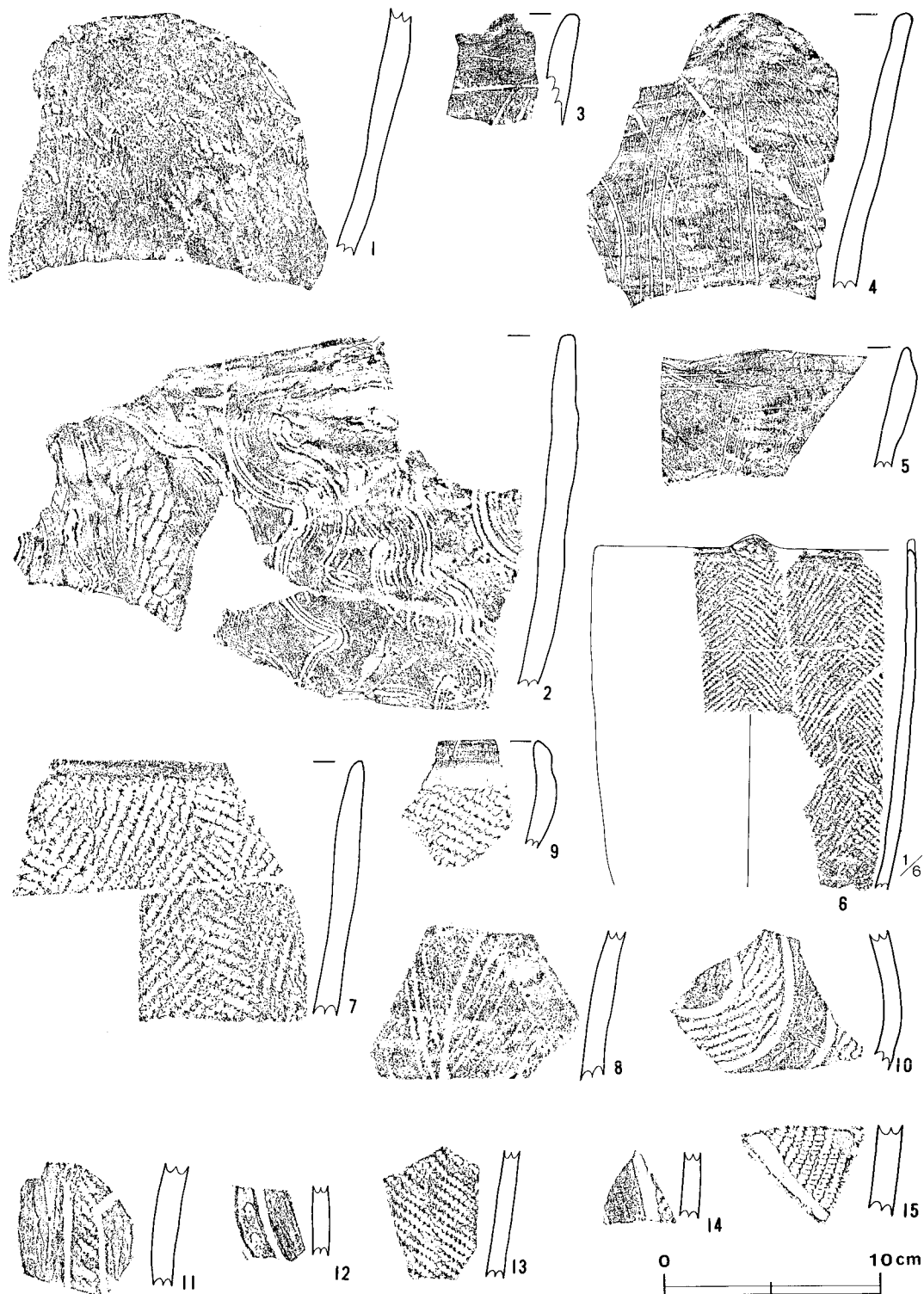
第 151 图 第 92 号土坑出土土器实测图·拓影图



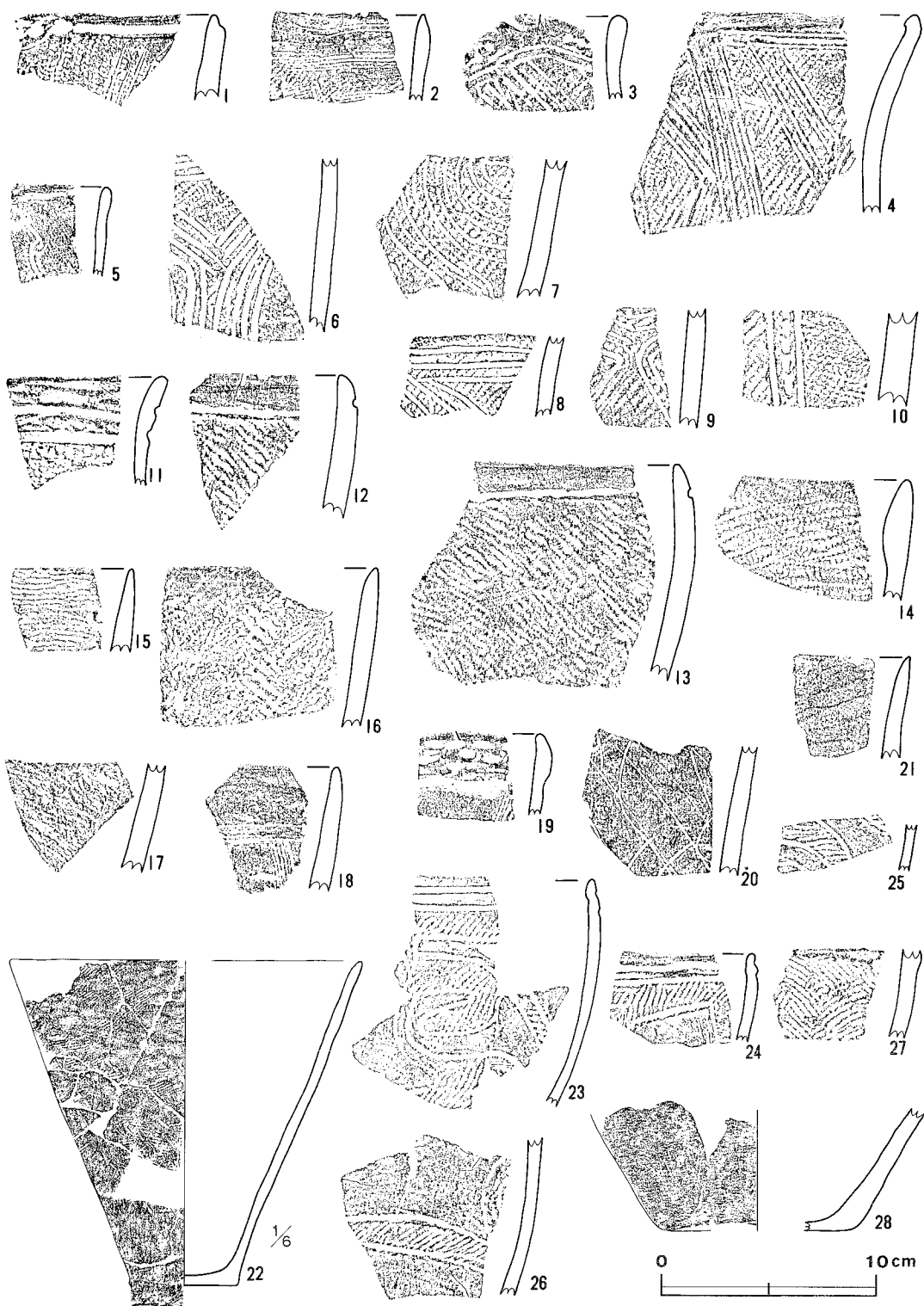
第 152 图 第 102·106 号土坑出土土器夷测图·拓影图



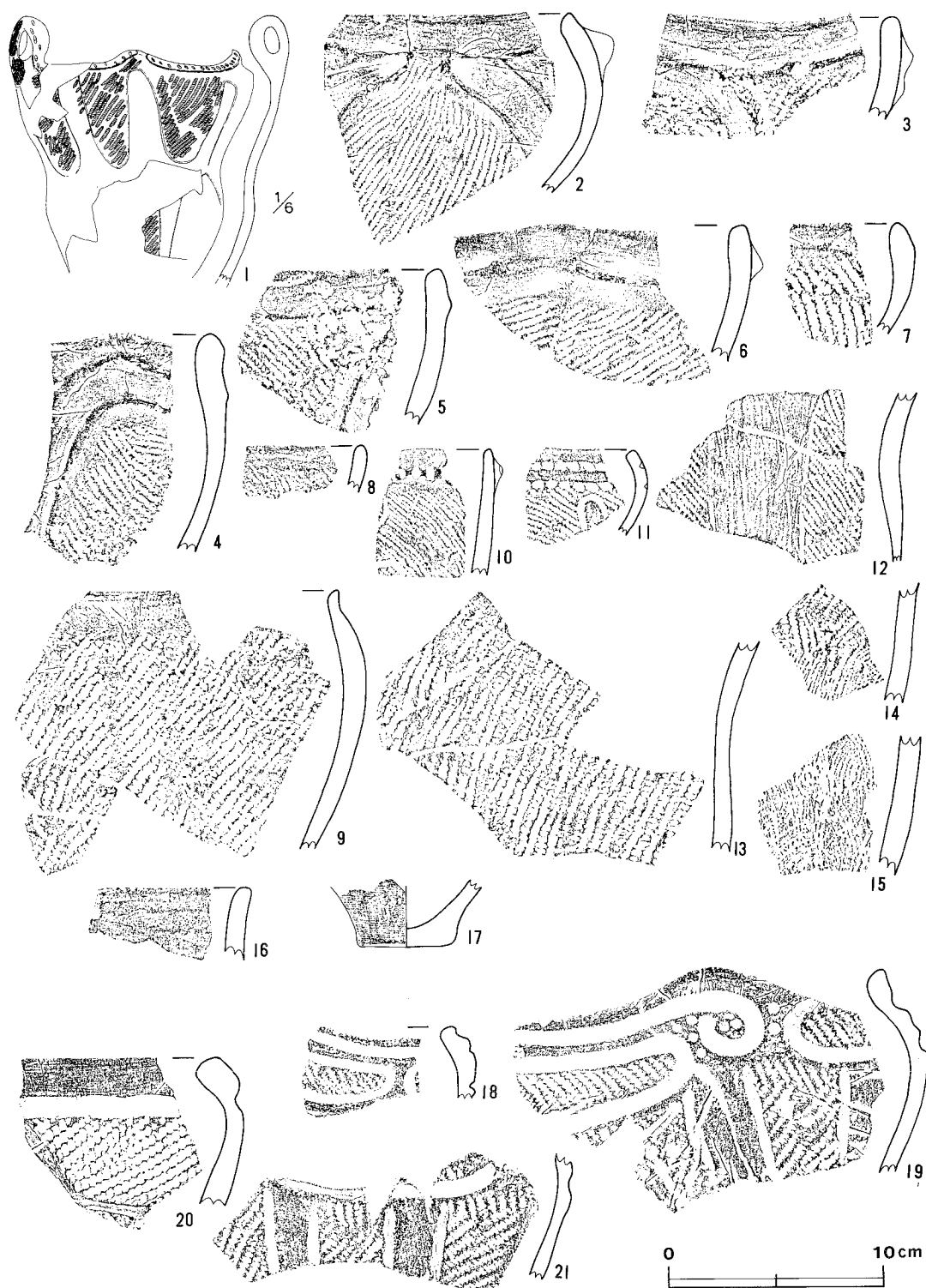
第 153 图 第 106 号土坑出土土器实测图·拓影图



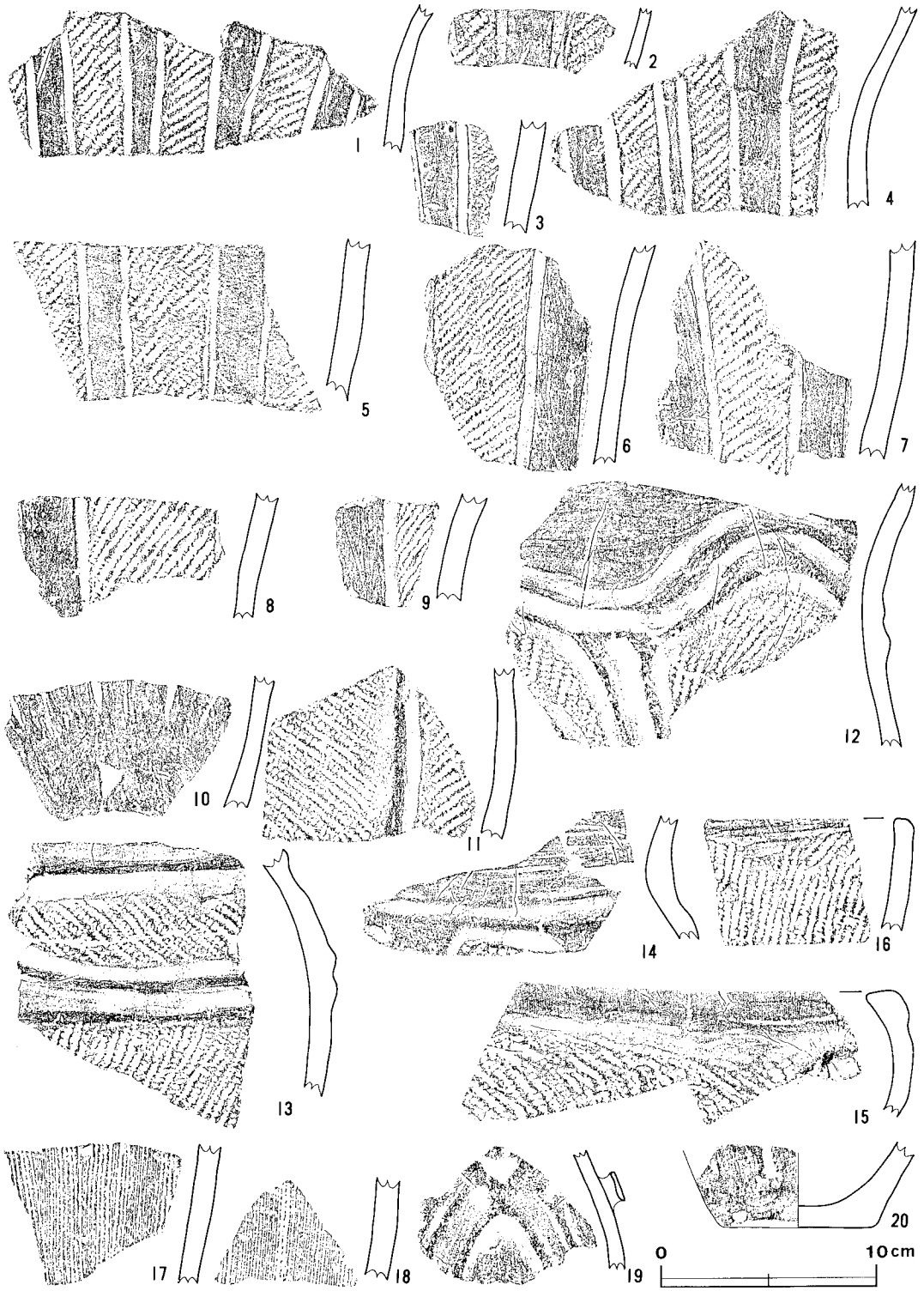
第 154 图 第 106 · 109 · 112 · 123 号土坑出土土器实测图 · 拓影图



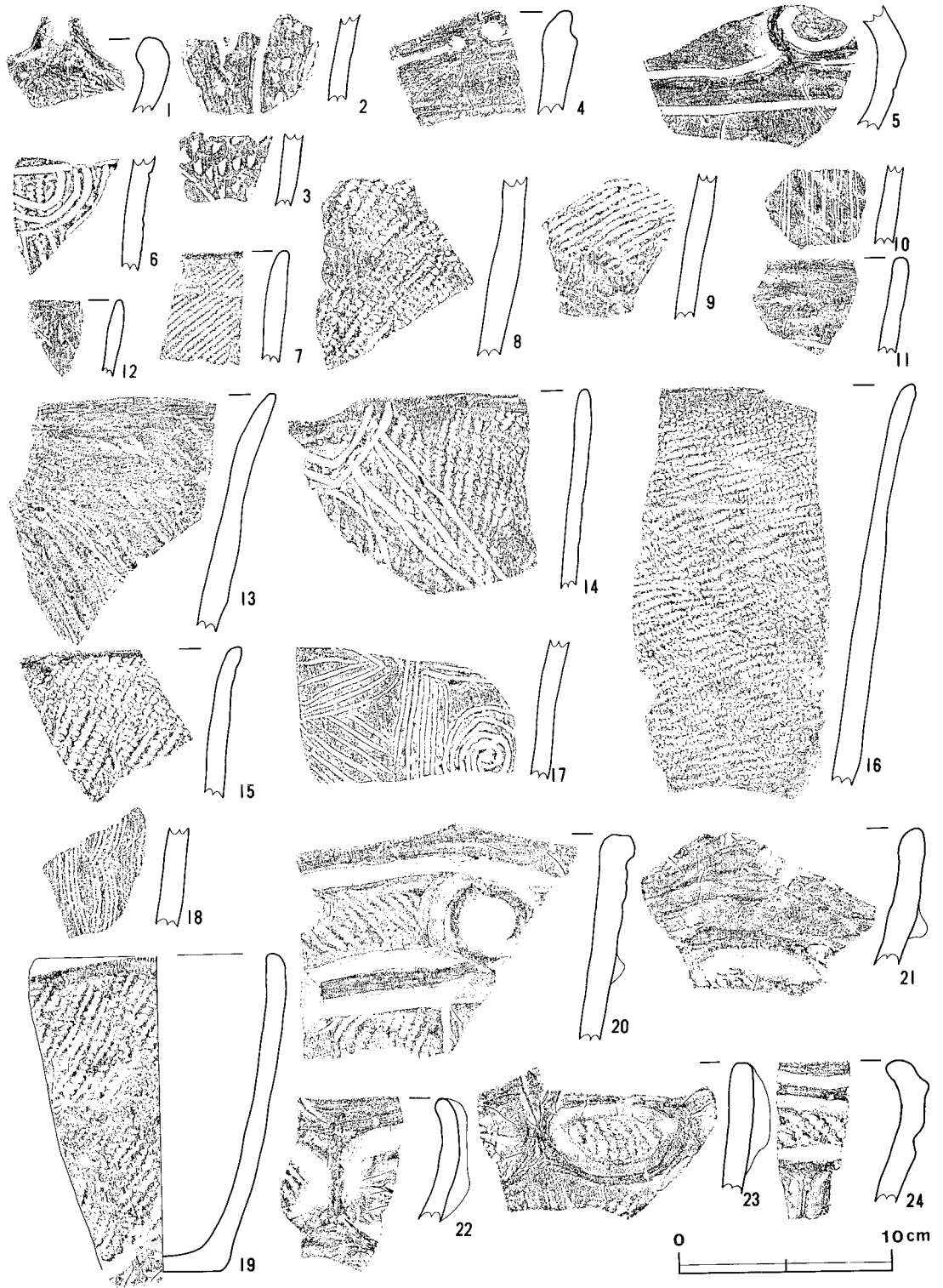
第 155 图 第 139·148 号土坑出土土器实测图·拓影图



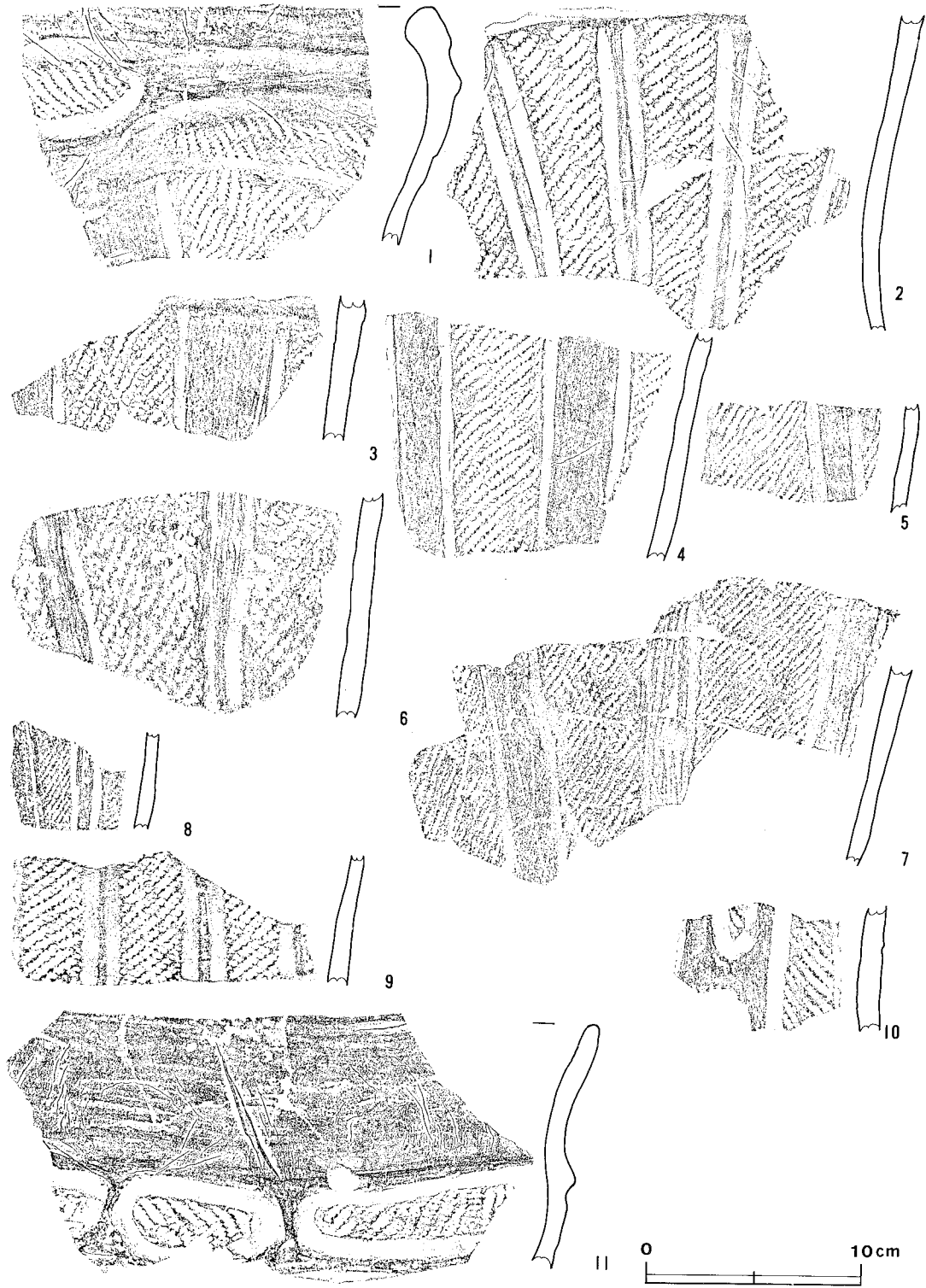
第 156 图 第 154 · 156 号土坑出土土器实测图 · 拓影图



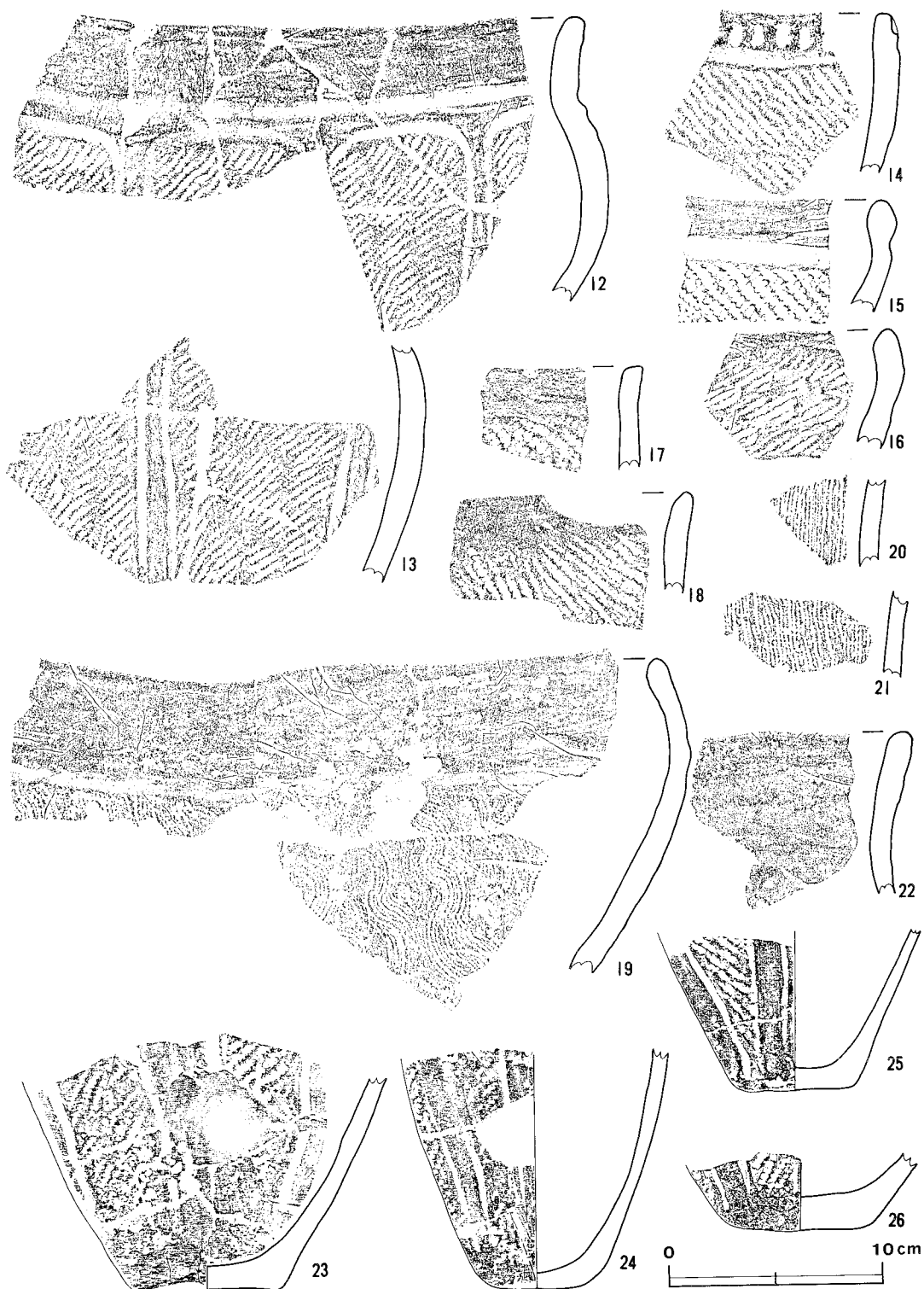
第 157 图 第 156 号土坑出土土器实测图·拓影图



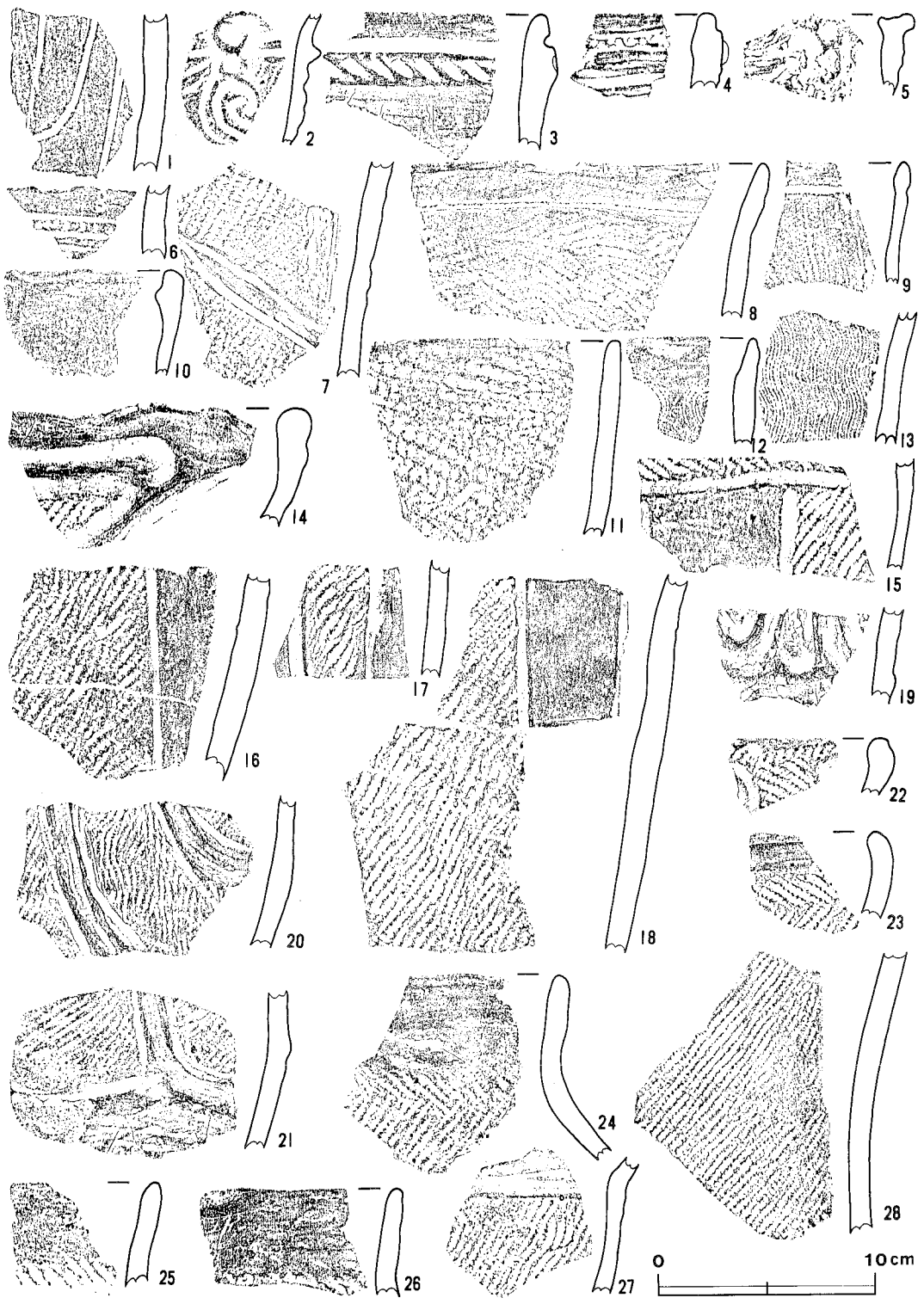
第 158 图 第 166 · 172 · 173 · 178 号土坑出土土器实测图 · 拓影图



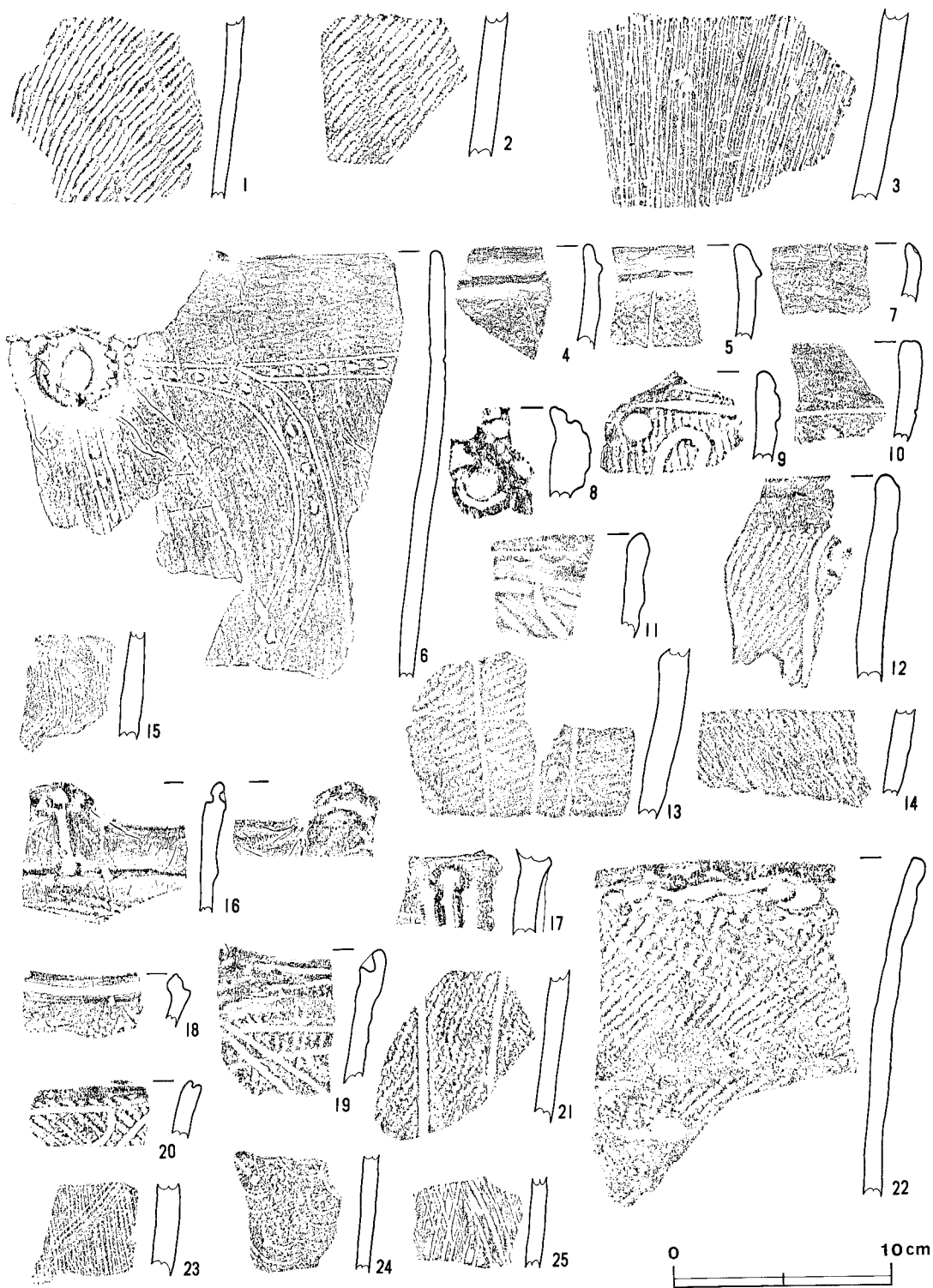
第 159 图 第 178 号土坑出土土器拓影图(2)



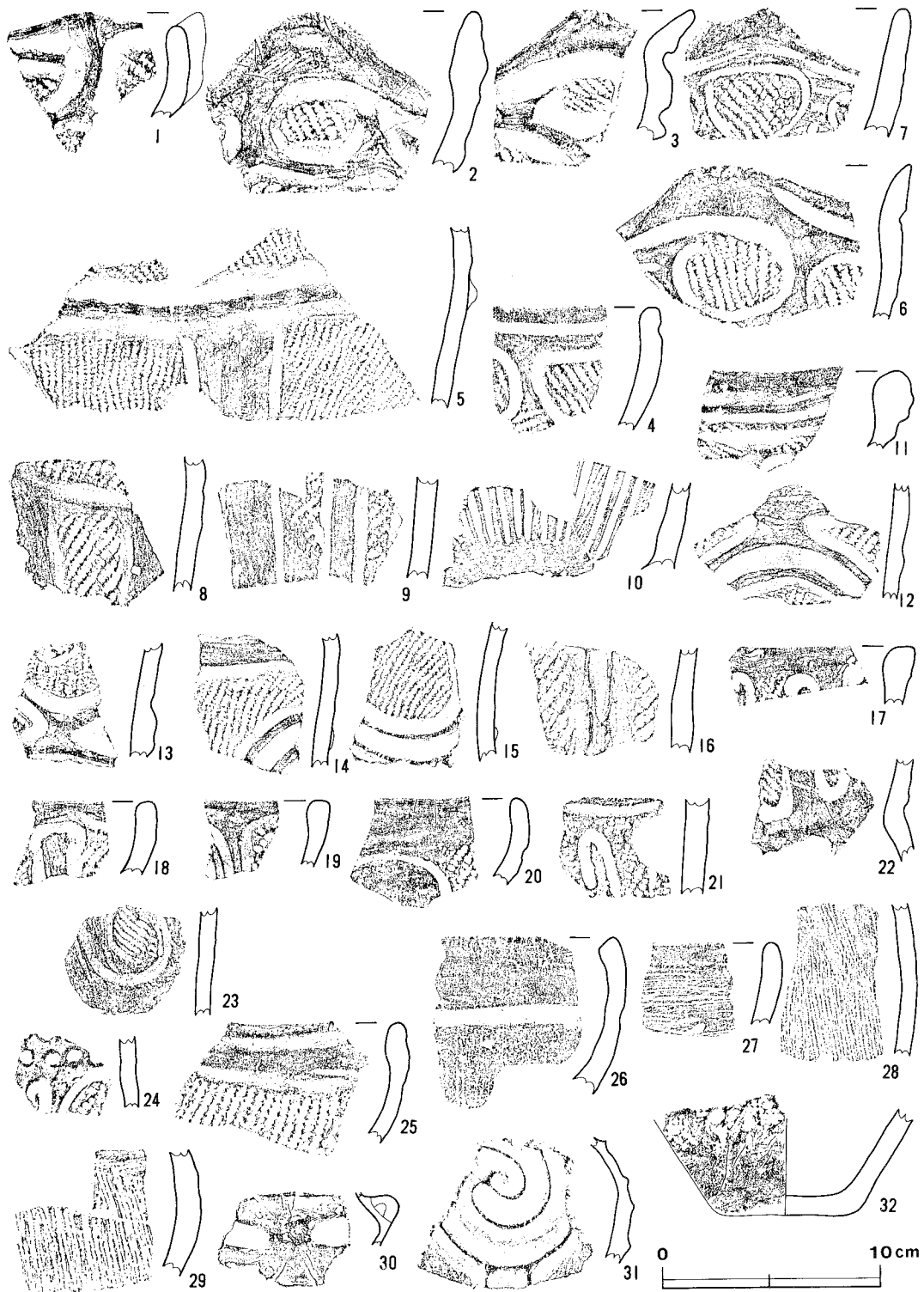
第 160 图 第 178 号土坑出土土器实测图·拓影图(3)



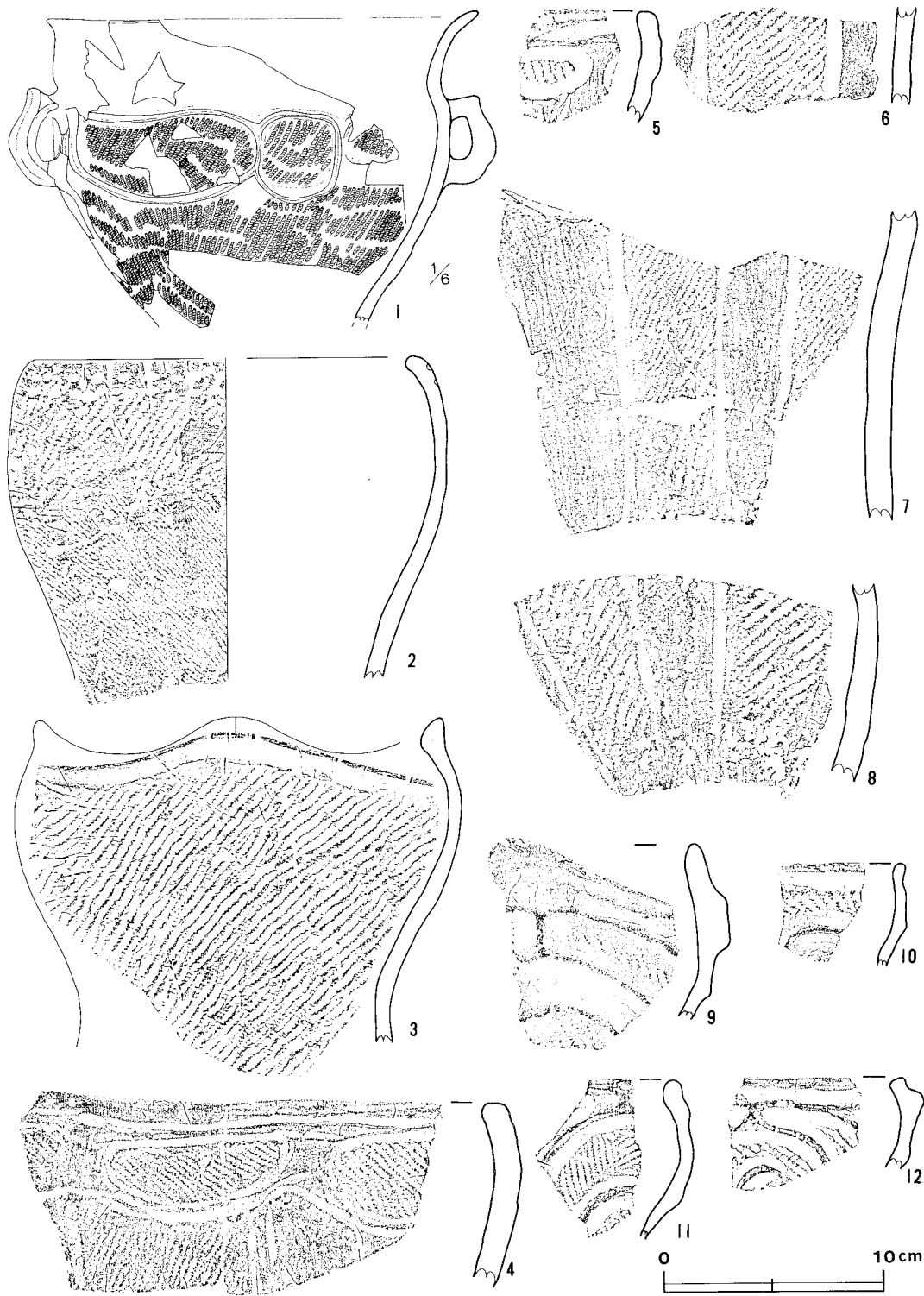
第 161 图 第 200·214 号土坑出土土器拓影图



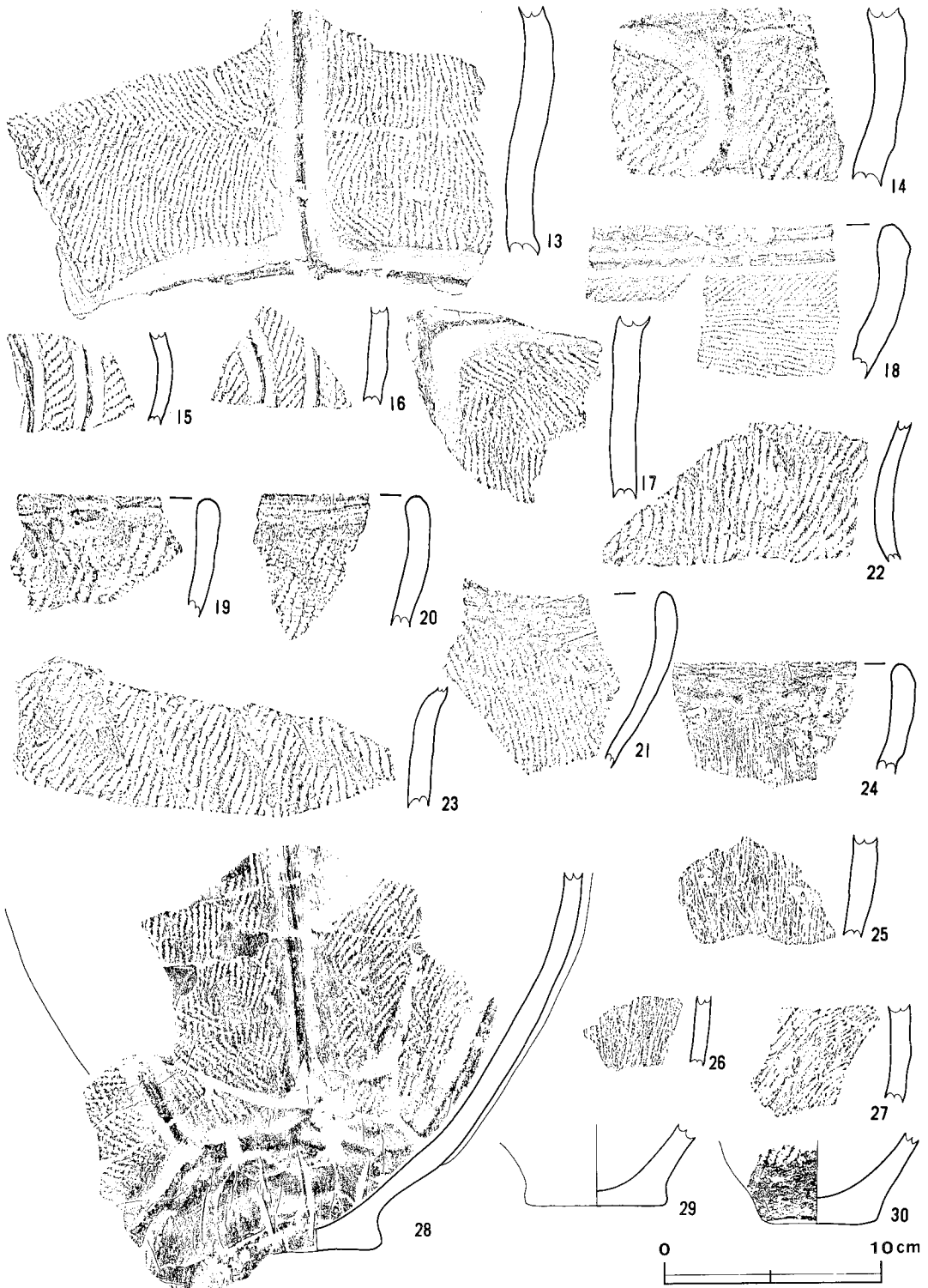
第 162 图 第 214 · 219 · 231 · 241 号土坑出土土器拓影图



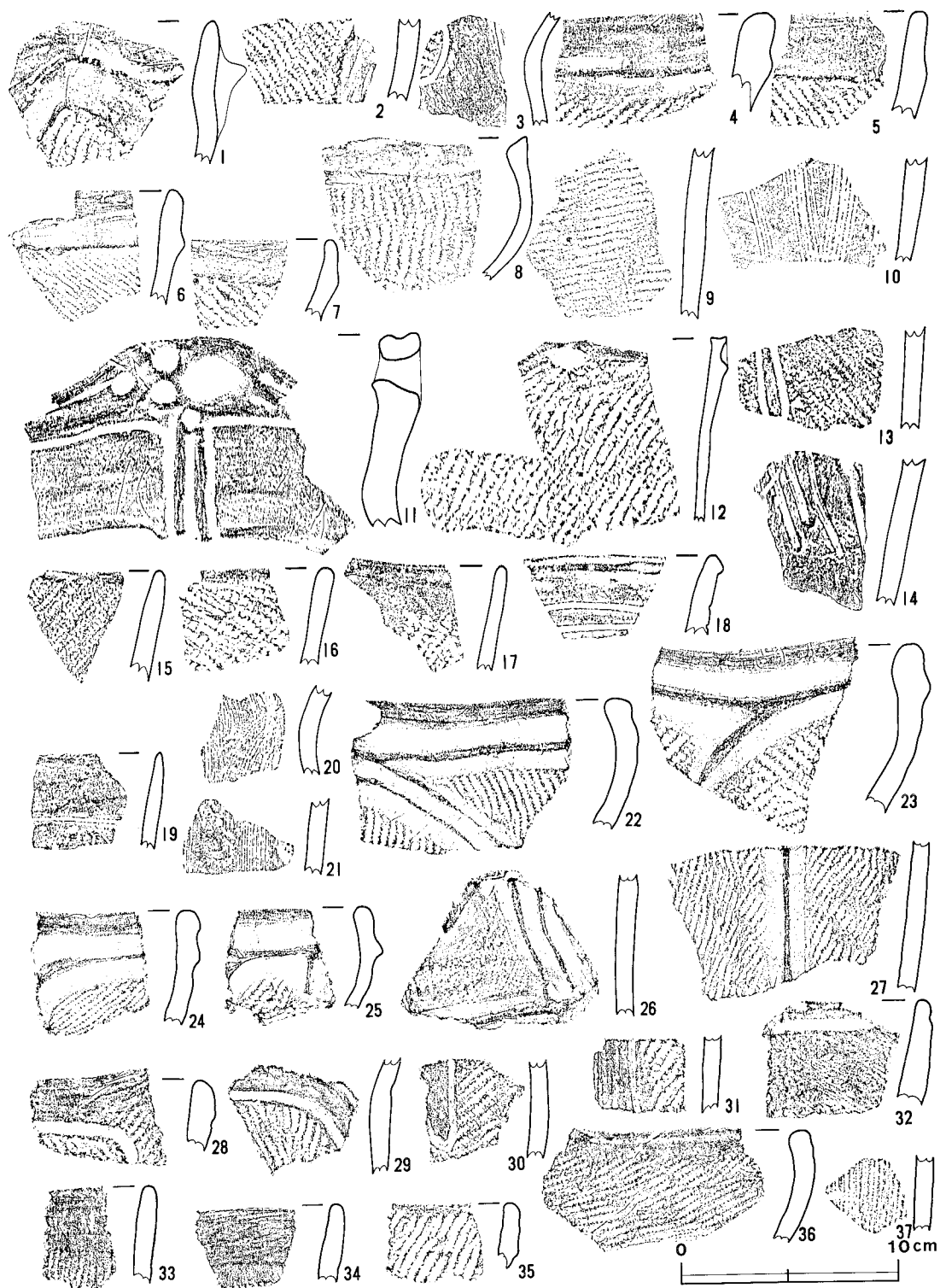
第 163 图 第 251 号土坑出土土器实测图·拓影图



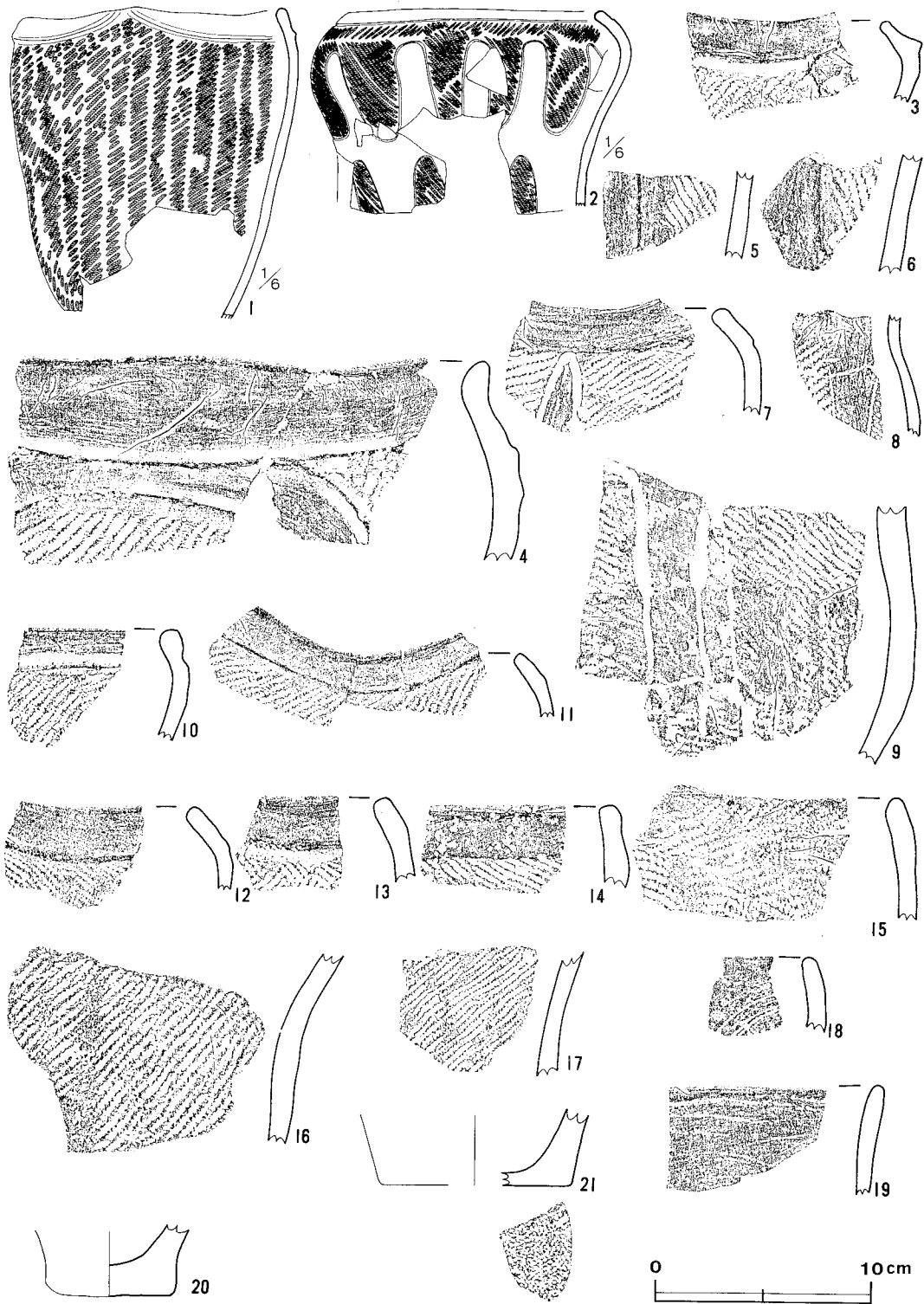
第 164 图 第 286 号土坑出土土器实测图·拓影图(1)



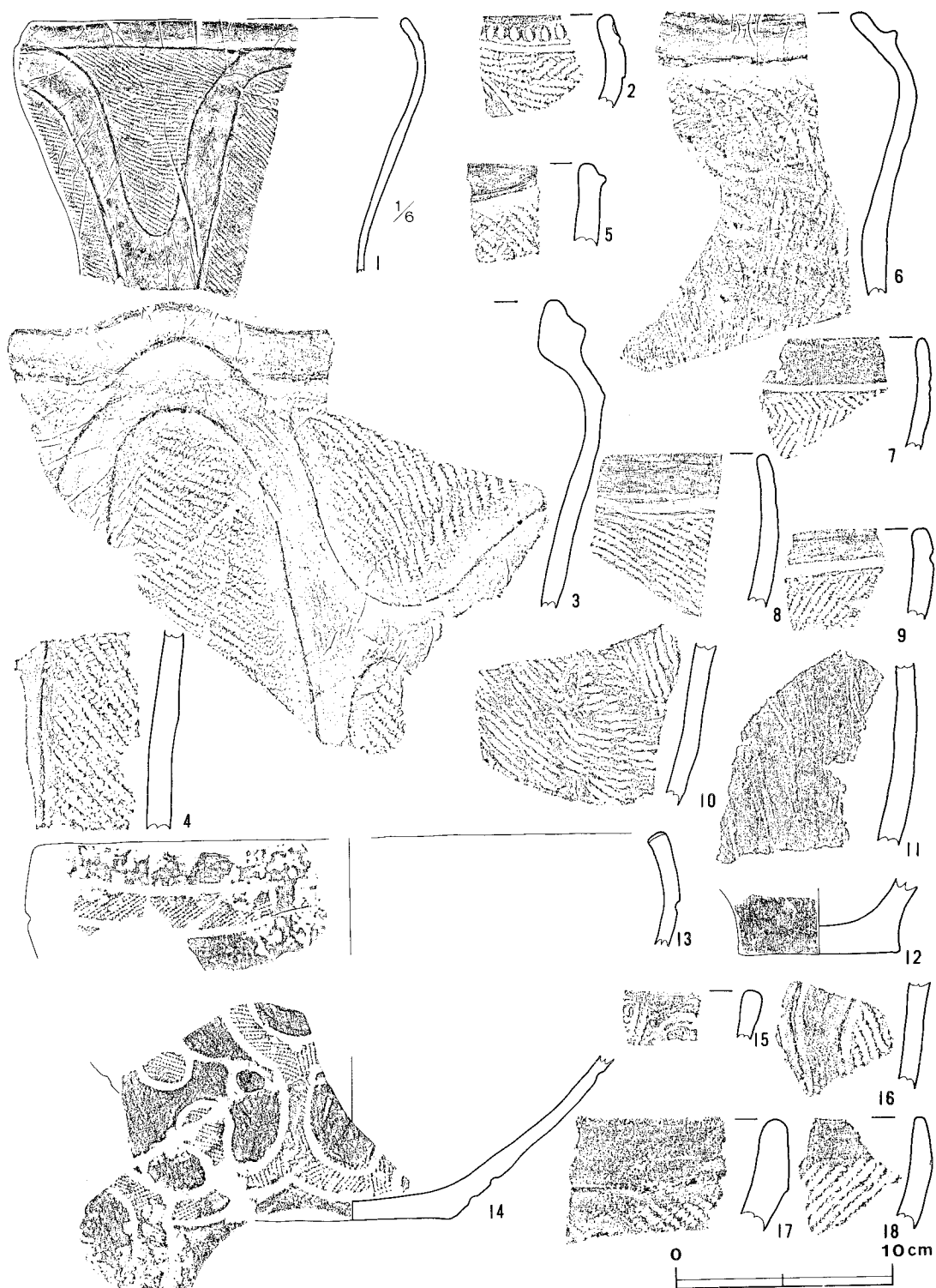
第 165 图 第 286 号土坑出土土器实测图·拓影图(2)



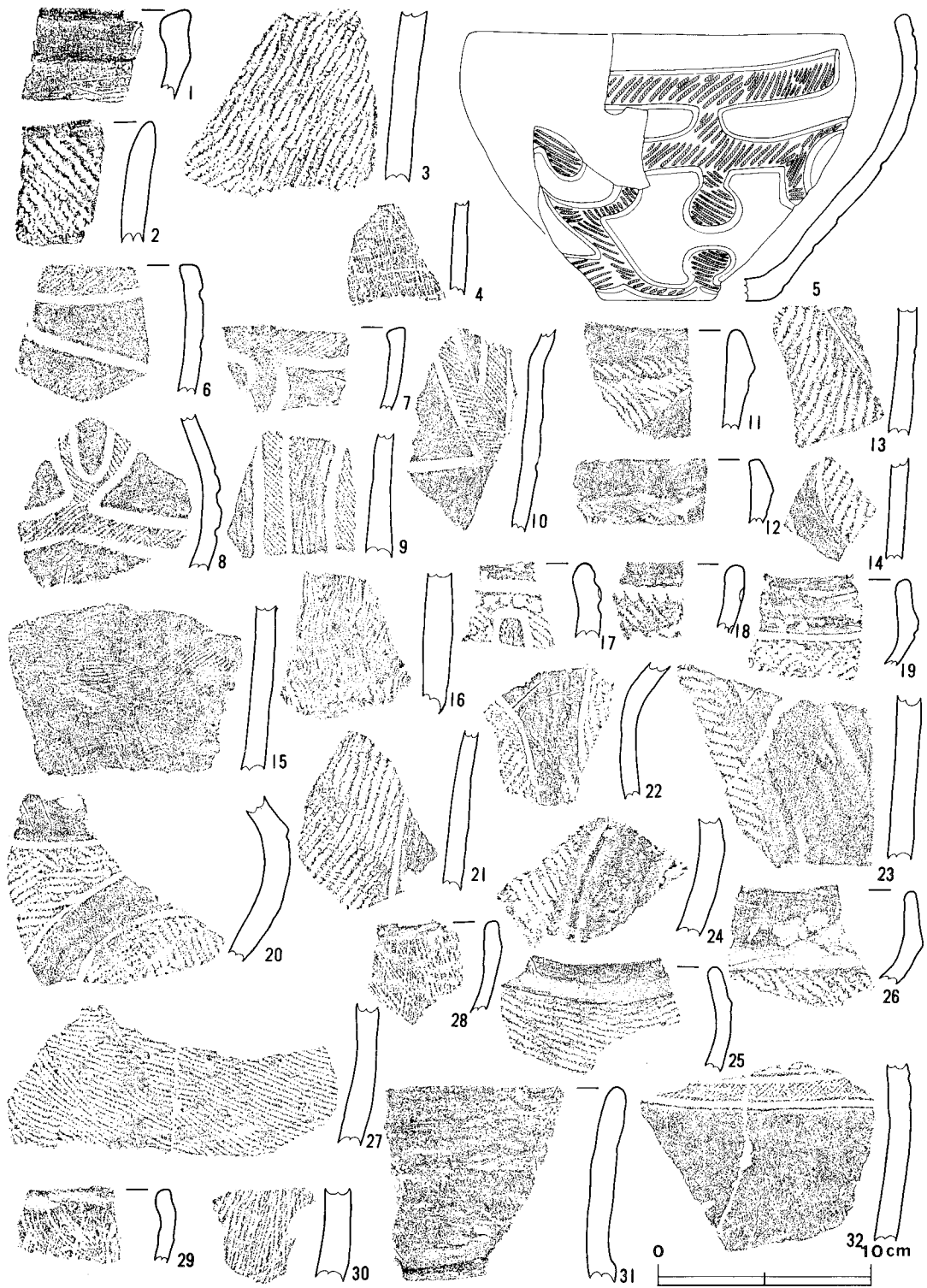
第 166 图 第 290·294·304 号土坑出土土器拓影图



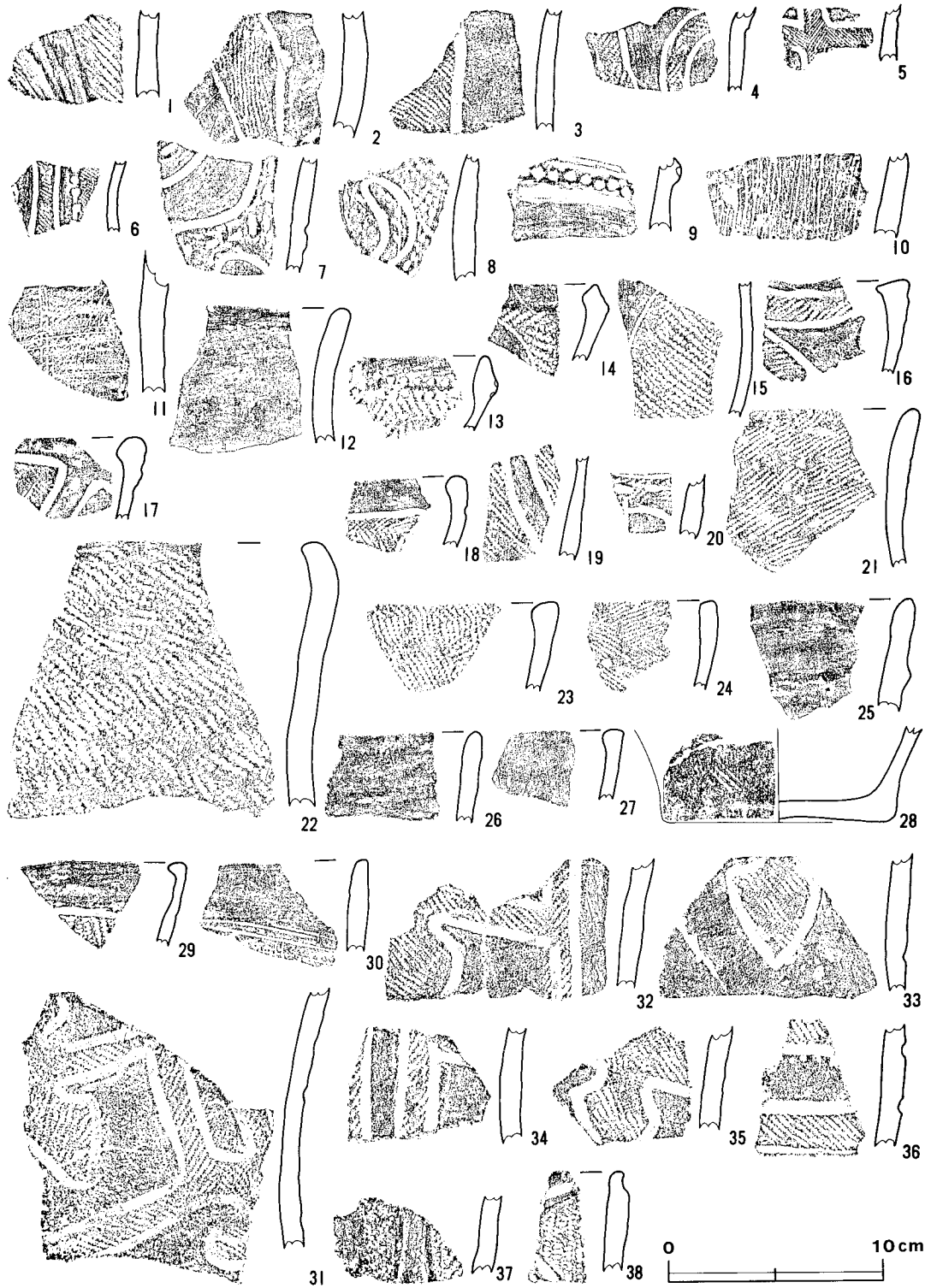
第 167 图 第 299 号土坑出土土器实测图·拓影图



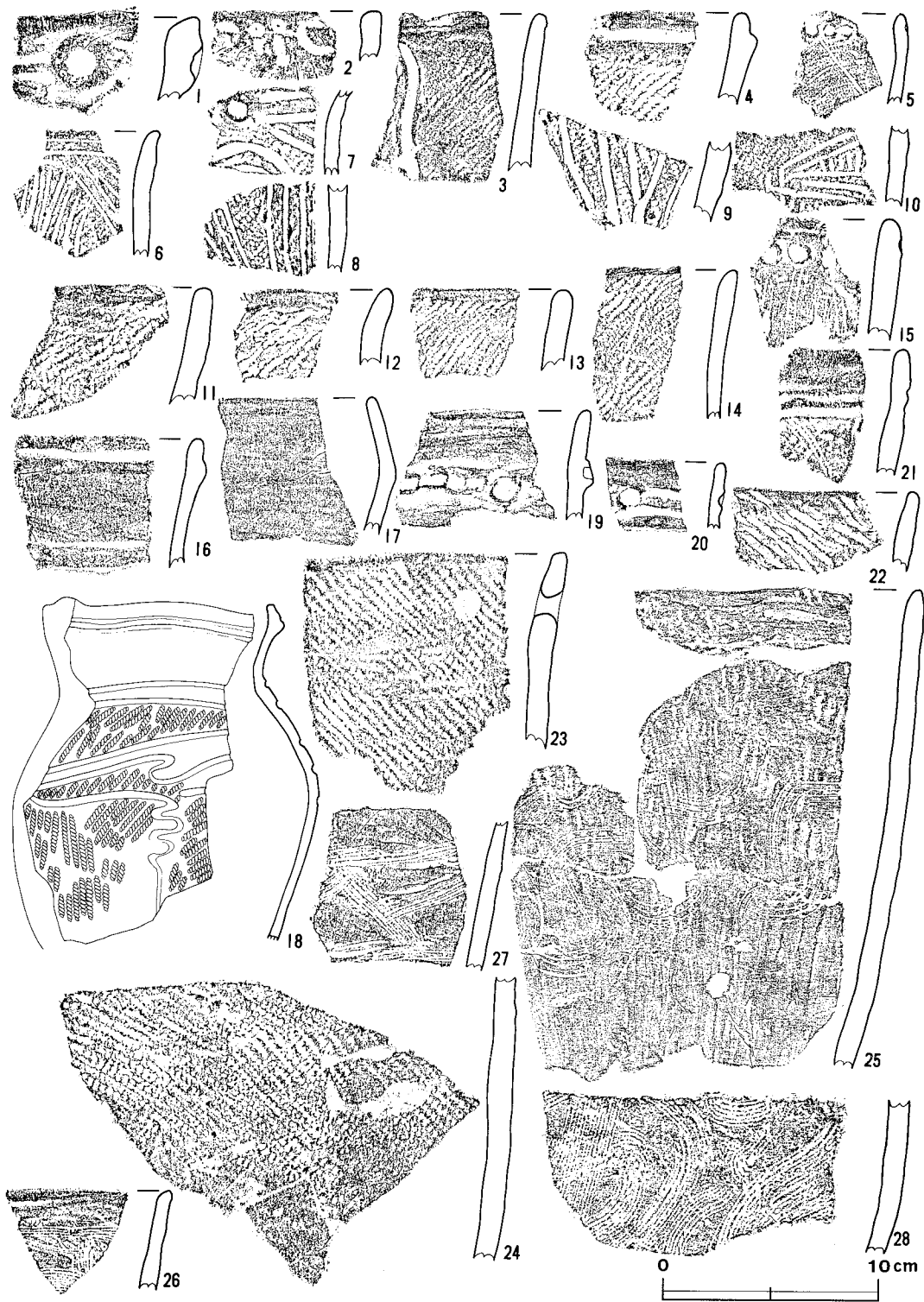
第 168 图 第 313·322 号土坑出土土器实测图·拓影图



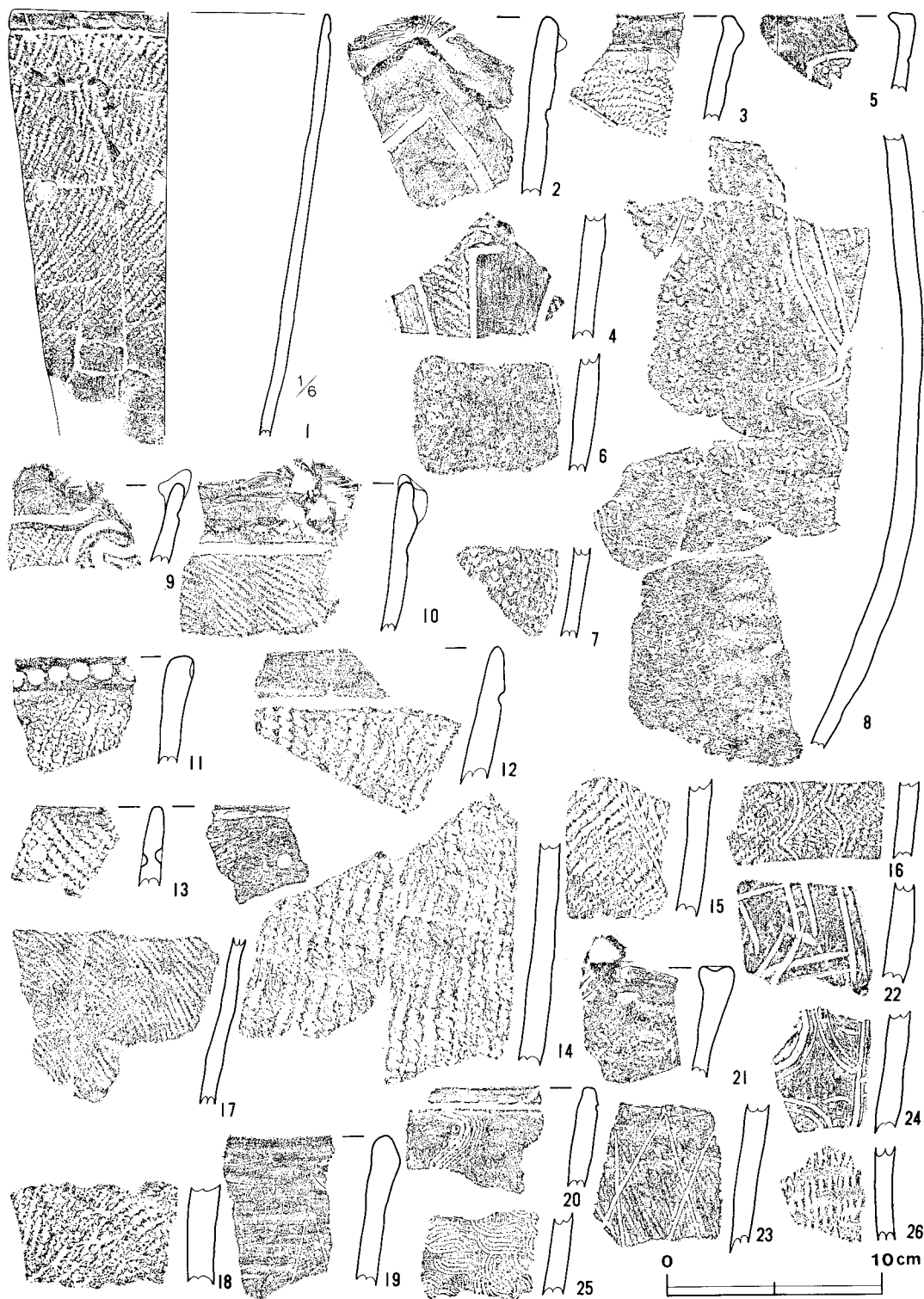
第 169 图 第 326 · 330 · 338 号土坑出土土器实测图 · 拓影图



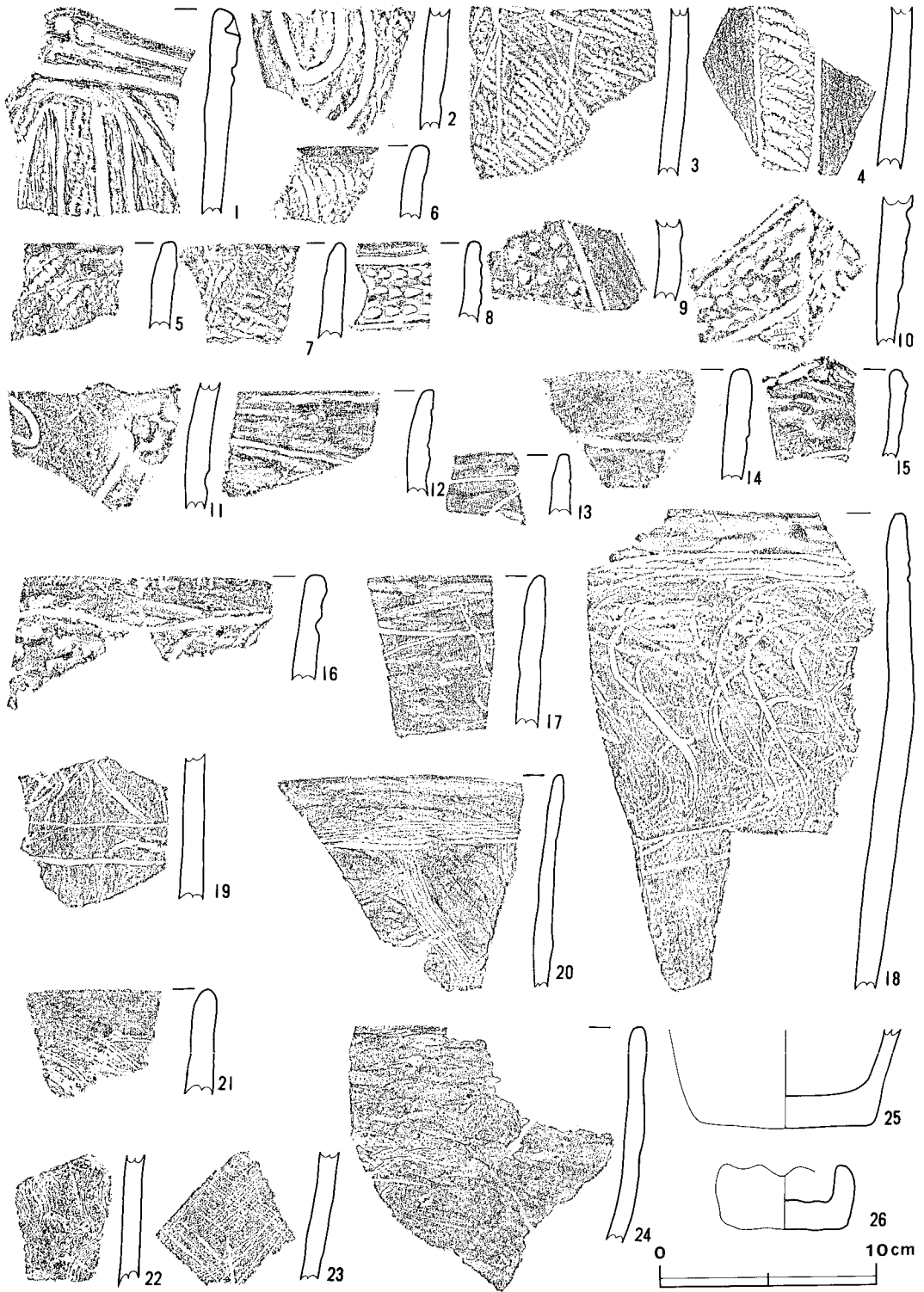
第 170 图 第 352 · 353 · 384 · 387 号土坑出土土器实测图 · 拓影图



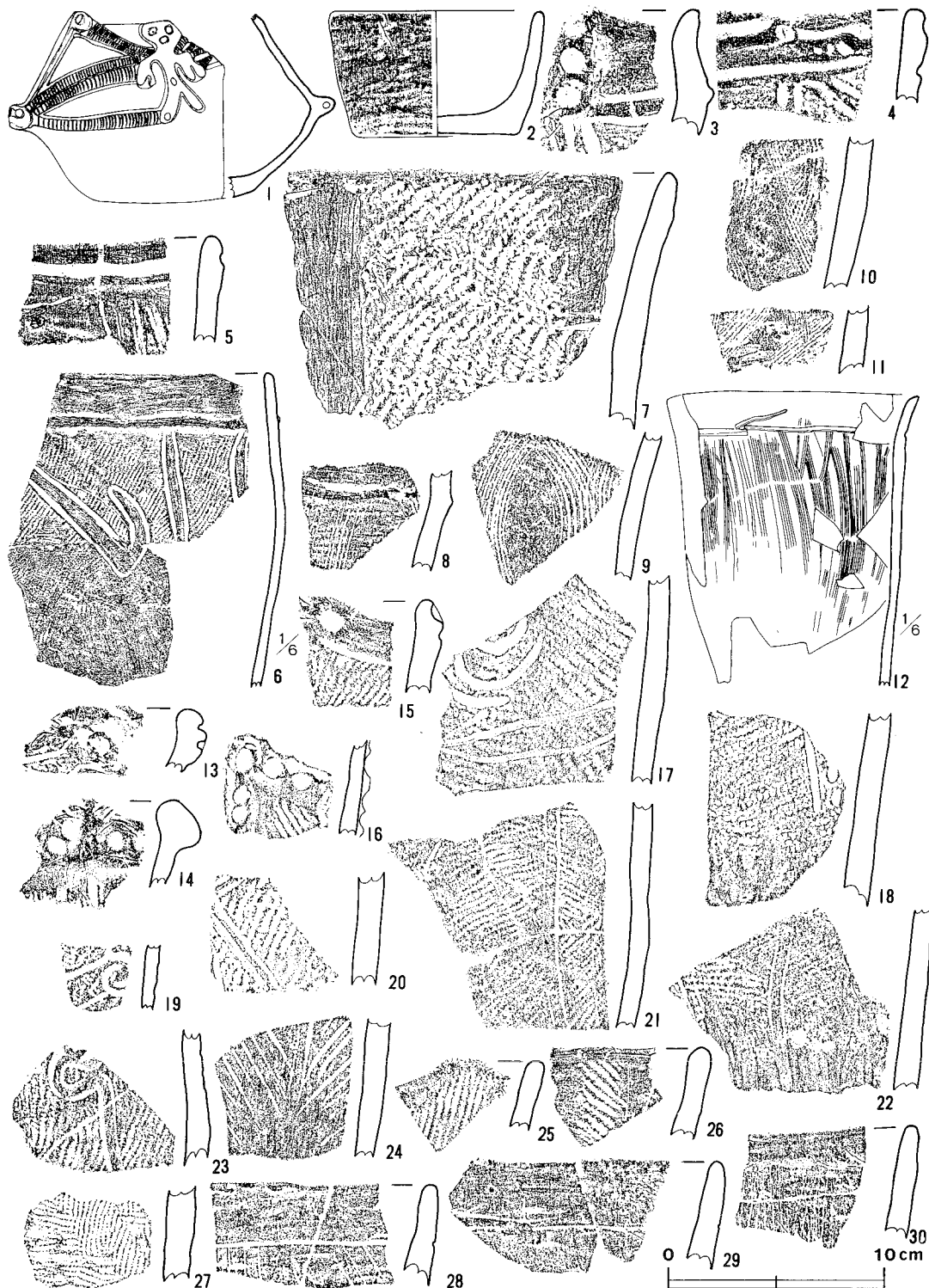
第 171 图 第 390·394 号土坑出土土器实测图·拓影图



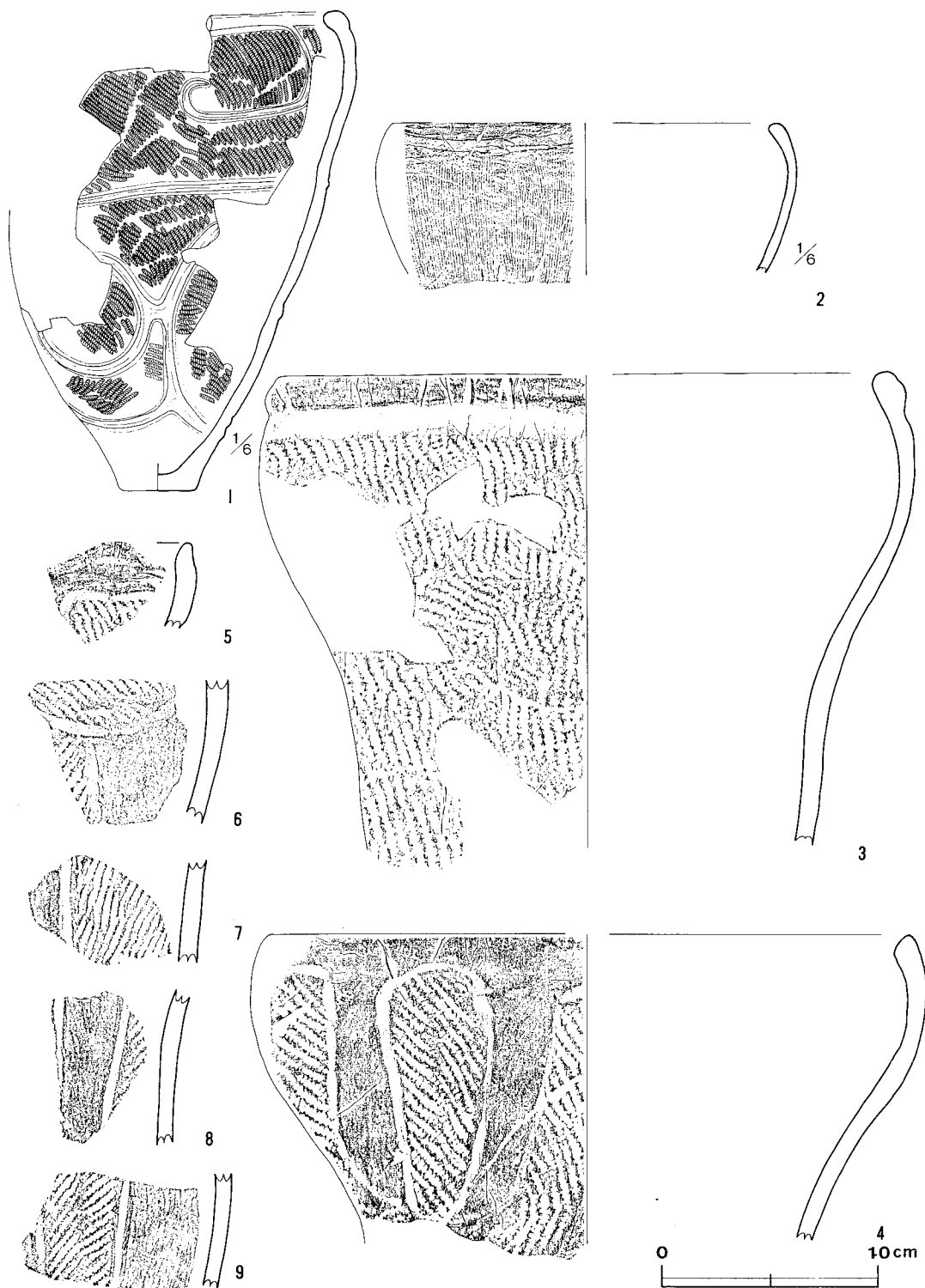
第 172 图 第 391 号土坑出土土器实测图·拓影图



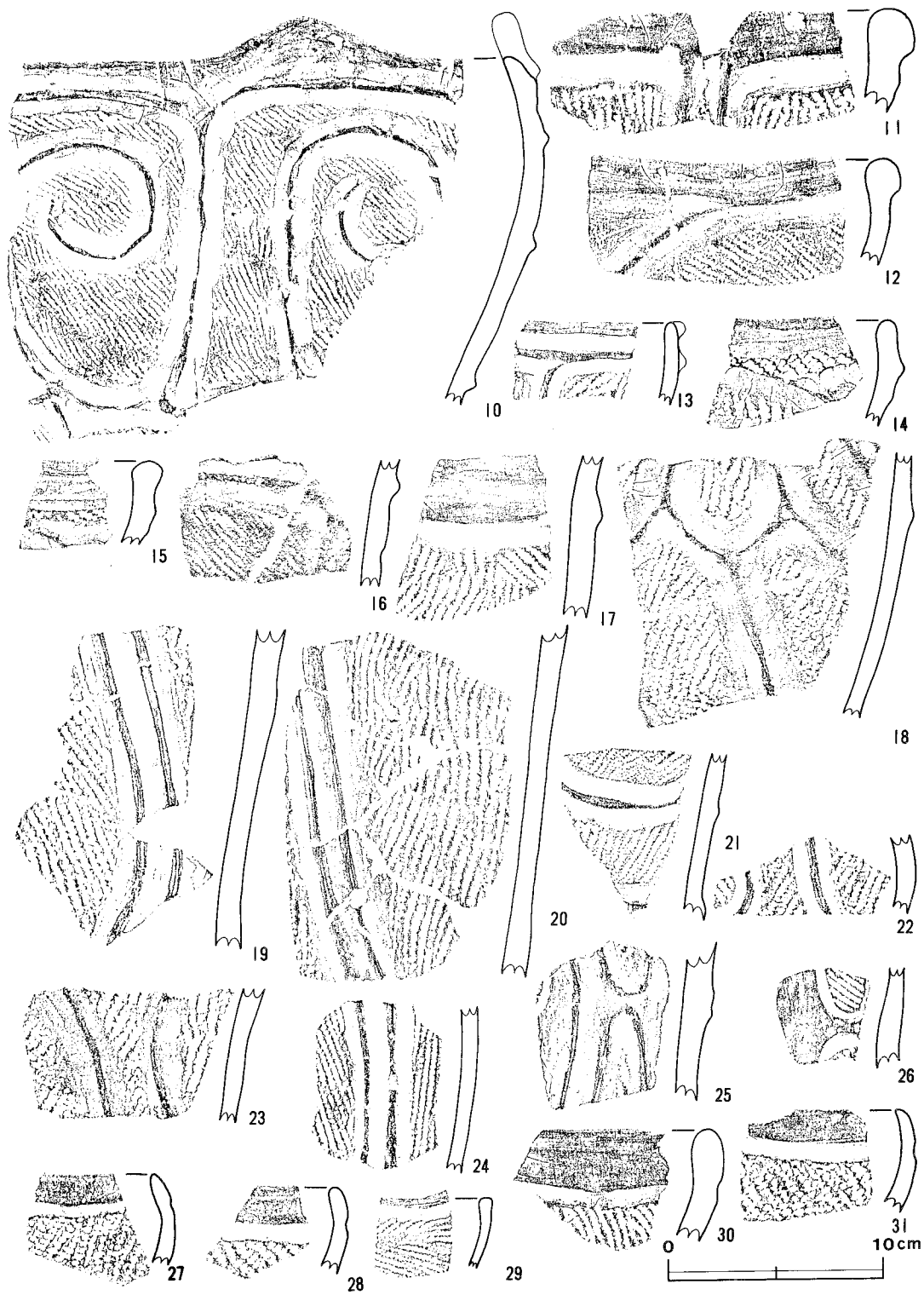
第 173 图 第 393 号土坑出土土器实测图·拓影图



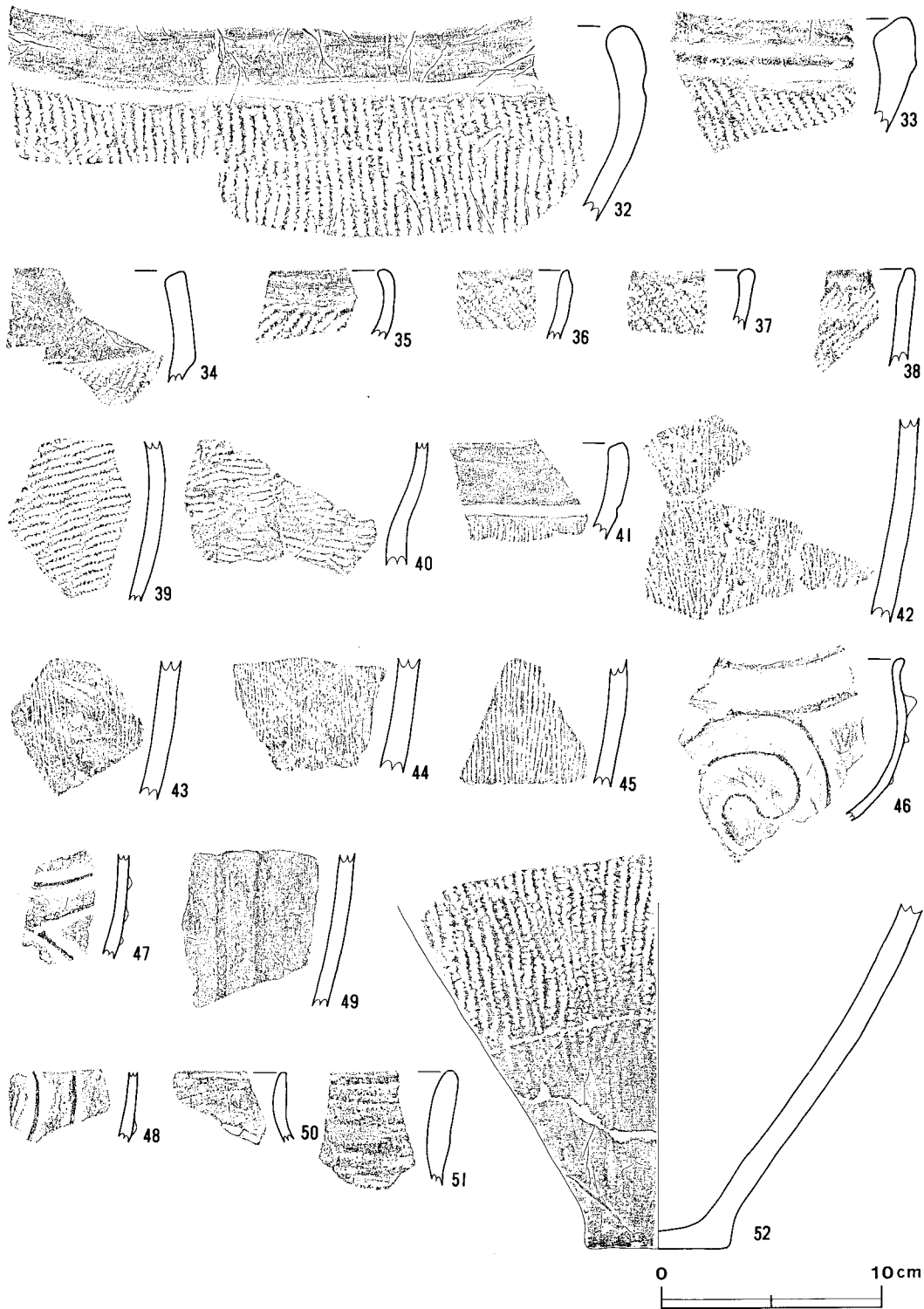
第 174 图 第 395·406 号土坑出土土器实测图·拓影图



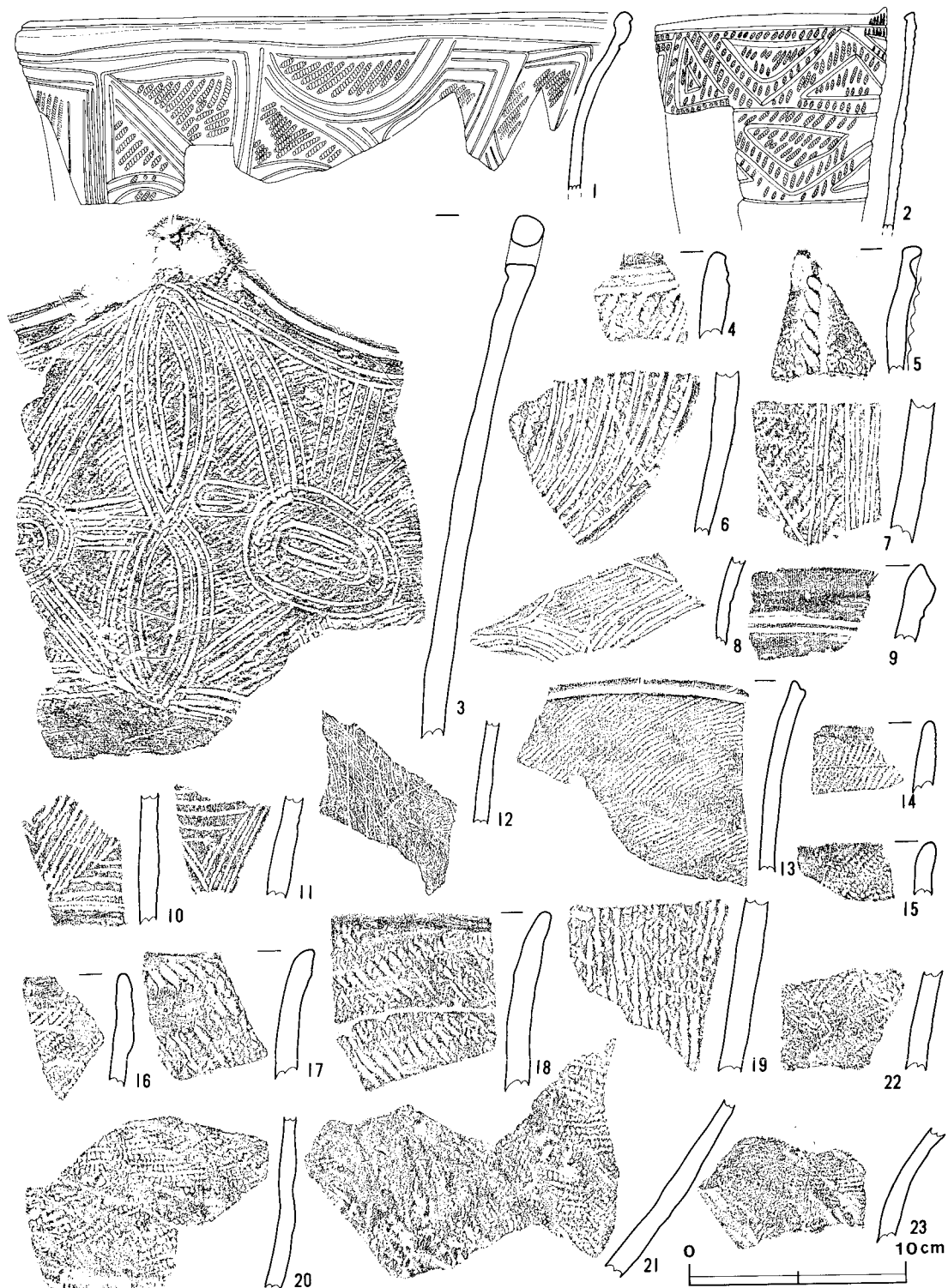
第 175 图 第 396 号土坑出土土器实测图·拓影图(1)



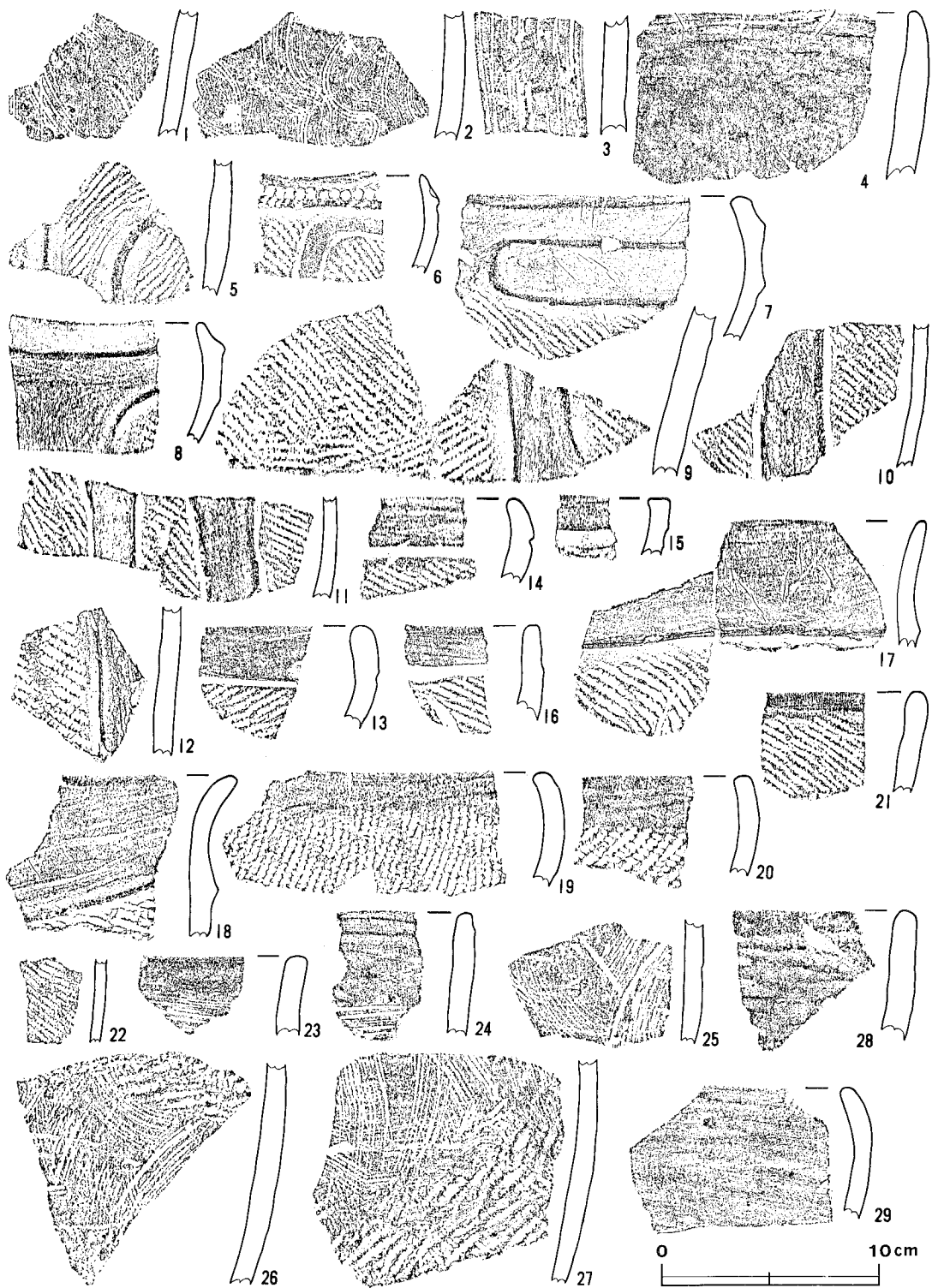
第 176 图 第 396 号土坑出土土器拓影图(2)



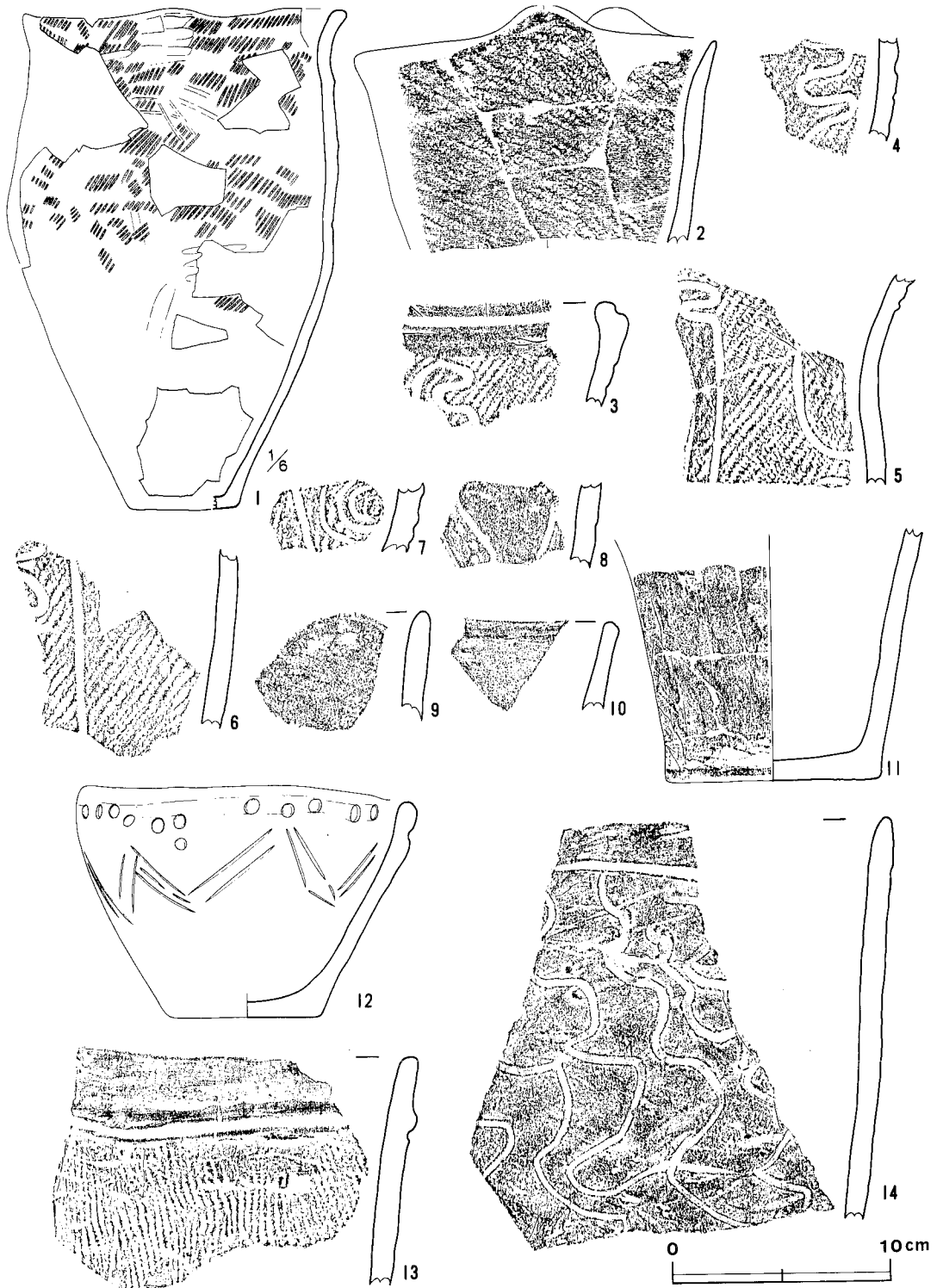
第 177 图 第 396 号土坑出土土器实测图·拓影图(3)



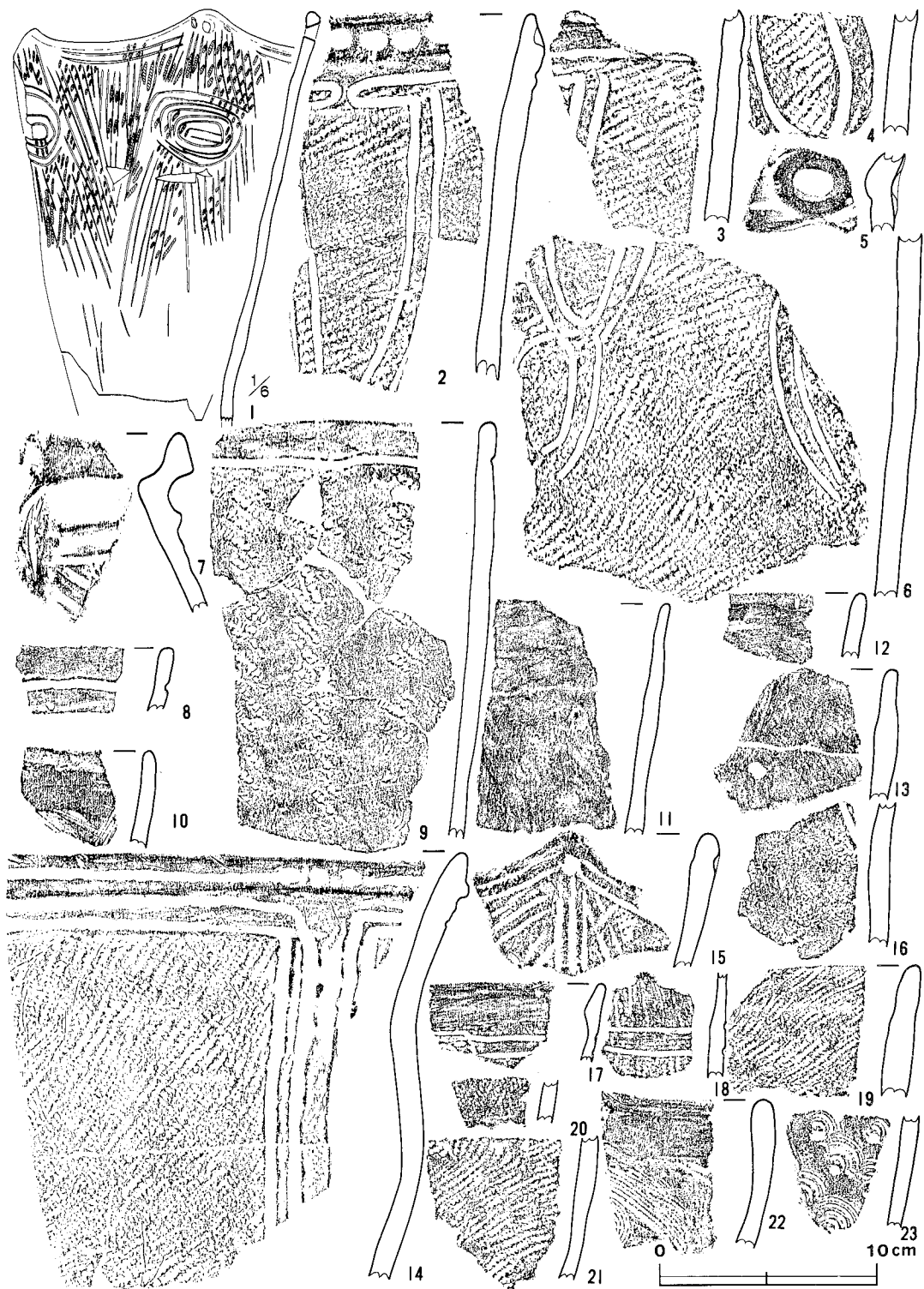
第 178 图 第 400 号土坑出土土器实测图·拓影图



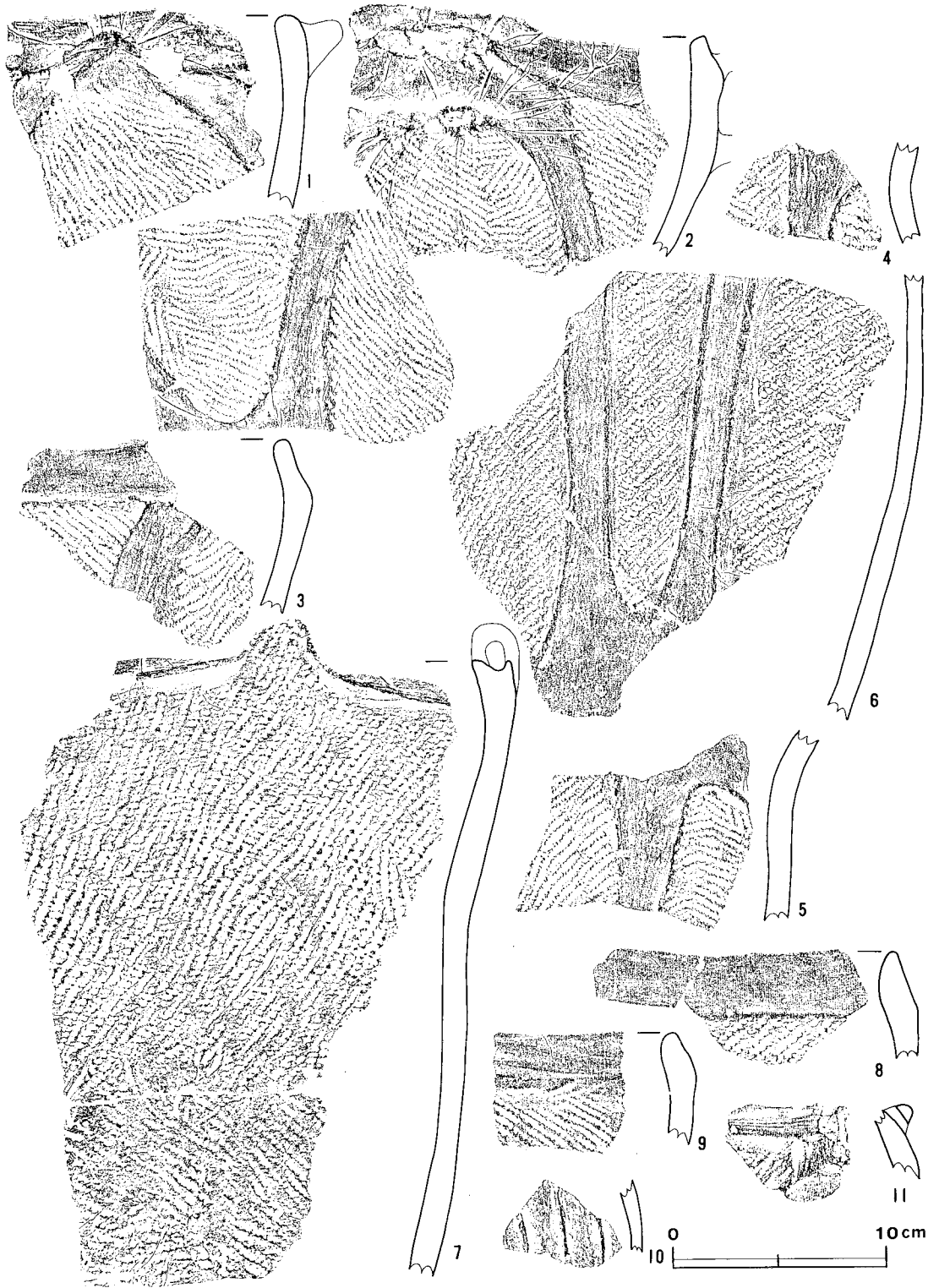
第 179 图 第 404·406 号土坑出土土器拓影图



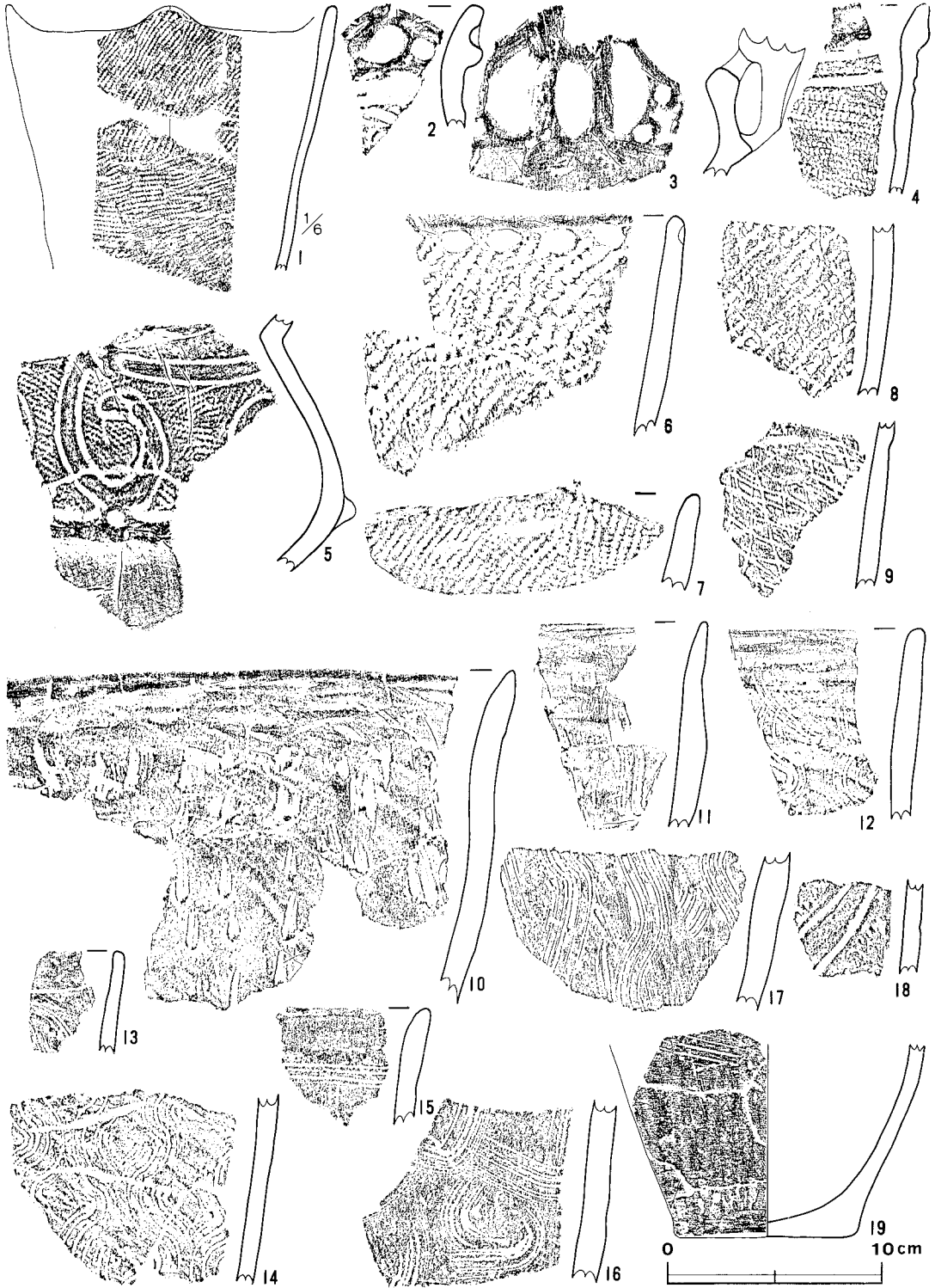
第 180 图 第 408·428 号土坑出土土器实测图·拓影图



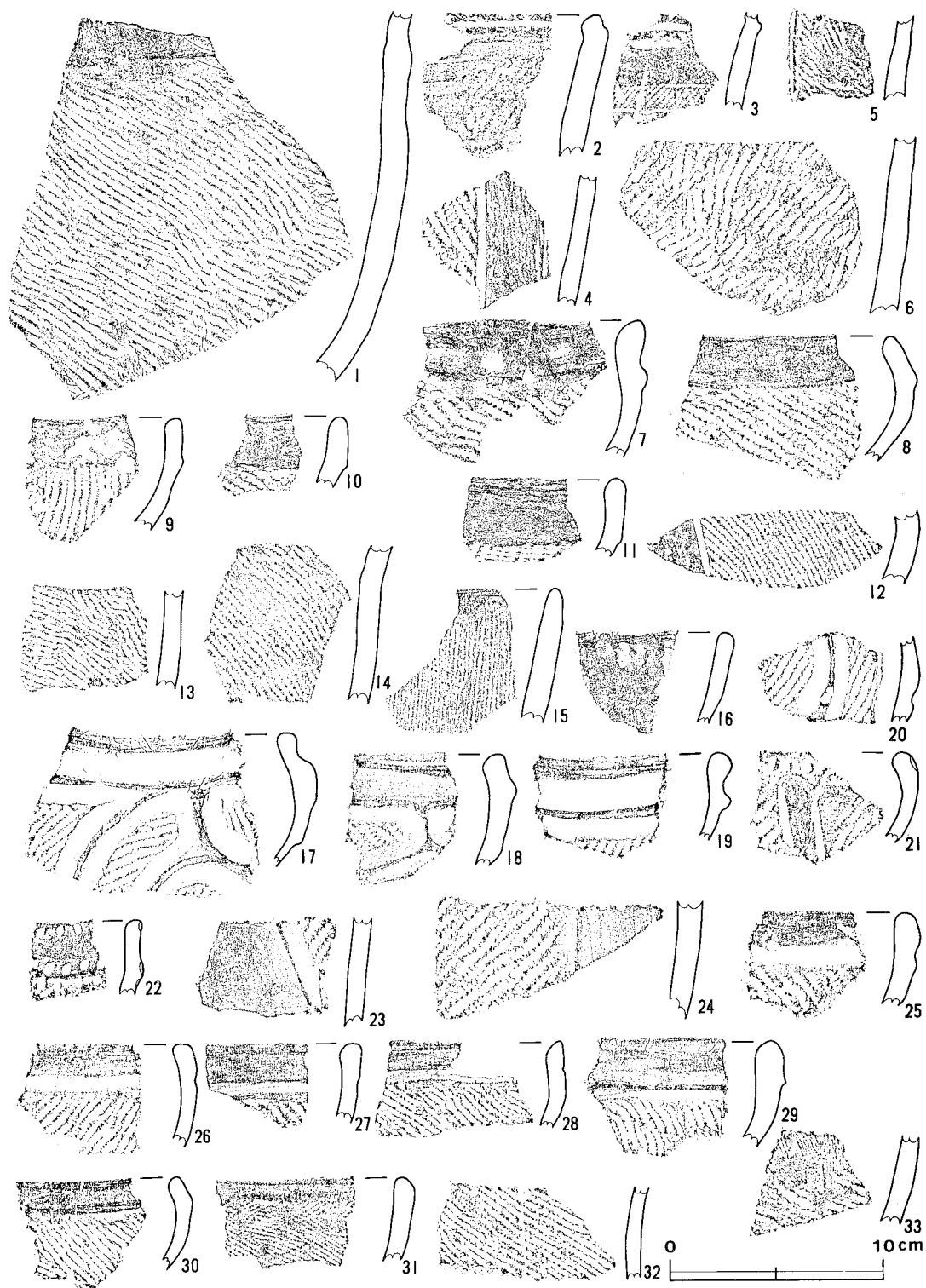
第 181 图 第 436 · 450 号土坑出土土器实测图 · 拓影图



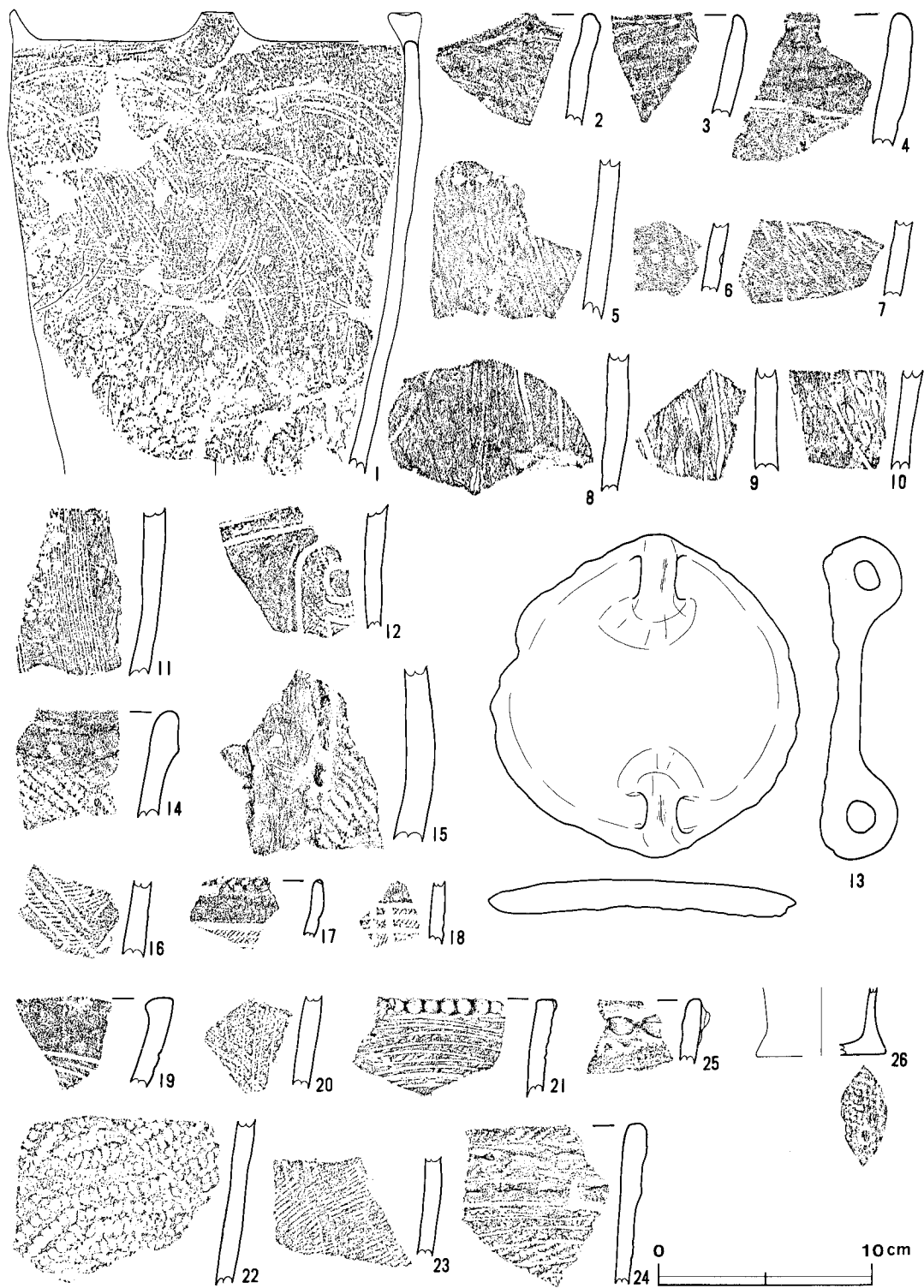
第 182 图 第 444 号土坑出土土器拓影图



第 183 图 第 451 号土坑出土土器实测图·拓影图



第 184 图 第 458 · 465 · 484 · 486 号土坑出土土器拓影图



第 185 图 第 525·531 号土坑出土土器实测图·拓影图

4 区

第 24 号土坑 (第 186 図)

本坑は、調査区の南西側の N5a7 区に検出され、歴史時代に属する第 2 号住居跡の南側の床面下に検出され、北西側を第 12 号土坑により切られている。平面形は、推定で長径 136 cm、短径 112 cm の不整楕円形を呈し、80 cm 掘り込まれている。壁はロームで北東側が外傾するほかはほぼ直立気味に立ちあがっている。底面は硬く良好で、平坦である。

覆土は、暗褐色土を主とし、壁寄りにわずかに褐色土を含む。詳しくみると上中下の 3 層に区分され、上位と下位はローム粒子、炭化粒子を少量含んでおり、中位は粗いローム粒子を多量に含んでいる。南西側の上位に攪乱を受けているが、人為堆積と思われる。

土器は 7 点ときわめて少ないが、加曽利 E IV 式土器を主としている。他に土器片錘・土製円板各 1 点がある。本坑の北側の壁の底面近くから深鉢形土器の底部が逆位で出土している。本坑の北西側を切っている第 12 号土坑からは加曽利 E IV 式土器が 58 点と多く出土し、土器片錘 2 点、土製円板 1 点、磨石片 1 点がみられる。これらは本坑に伴うものと考えられる。以上から本坑の時期は加曽利 E IV 式期と考えられる。

第 24 号土坑出土土器 (第 193 図)

第 193 図 1 は、口縁部無文帯を 1 条の断面三角形の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。

第 27 号土坑 (第 187 図)

本坑は、調査区の西側の L5g7 区に検出され、南東側で第 26 号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長径 204 cm、短径 173 cm の不整楕円形を呈し、157 cm と深く掘り込まれている。壁はロームで、中位に最小径をもつ所謂フラスコ状を呈している。底面は平坦で硬い。

覆土は、褐色土、暗褐色土が主体となっており、上位と壁際に褐色土、下位に暗褐色土が堆積している。全体的に粗いローム粒子、ローム小ブロックを多量と炭化粒子を少量含み締まっている。複雑な土層堆積を示しており、人為堆積と考えられる。

土器は 22 点と大形土坑の割に少なく、加曽利 E III～IV 式土器である。本坑の時期は、出土土器からみて加曽利 E IV 式期と考えられる。

第 27 号土坑出土土器 (第 193 図 2)

第 193 図 2 は、波状を呈する口縁部片で、断面三角形を呈する微隆線で口縁部無文帯を区画し、以下に微隆線と沈線による曲線的モチーフを描き、区画内に縄文を充填するが、欠落部分が多く詳細は不明である。

第 28 号土坑 (第 187 図)

本坑は、調査区の西側の L5f7 区に検出され、南東側で第 29、41 号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長径 195 cm、短径 180 cm の不整円形を呈し、149 cm 掘り込まれている。壁はロームで、中位に最小径をもつ所謂フラスコ状を呈し、底面は硬く平坦であるが、南東方向にむけてやや傾いている。

覆土は、褐色土を主とし、上位から中位にかけて凹レンズ状に暗褐色土がみられ、壁際に明褐色土が堆積している。全体的に粗いローム粒子、ローム小ブロックをきわめて多量に、炭化粒子、焼土粒子を少量から微量含み、上位は締まっているが、下位ほど締まりが弱くザラザラしている。人為堆積と考えられる。

土器は40点で、加曾利 E Ⅲ式土器を主としている。他に土器片錘2点、有孔円板1点が含まれている。本坑の時期は、出土土器からみて加曾利 E Ⅲ式期と考えられる。

第28号土坑出土土器（第193図3～5）

第193図3は、口辺部片で低い隆線と沈線による区画下に縄文が充填されている。4は、直線的磨消帯が垂下する胴部片で、縦位の条線文も付加されている。5は口縁部無文帯を残し、以下に縄文が施されている。

第33号土坑（第187図）

本坑は、調査区の西側のL5e7区に検出され、北側に第37号土坑、西側に第35号、南東側に第28号土坑が隣接している。平面形は長径208cm、短径200cmの不整形円形を呈し、90cm掘り込まれている。壁はロームではほぼ直立気味に立ちあがっているが、北西側はやや外傾し、南西、南東側は中位から上位に段を有し、以下は内湾する形状を呈しているが、壁の崩落によるものと思われる。底面は平坦で硬い。

覆土は、ほとんど褐色土で粗いローム粒子、ローム粒子を多量からきわめて多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量を含み、壁寄りに明褐色土がみられる。堆積は複雑で人為的な埋没と考えられる。

土器は39点と少ないが、橋状把手を有する鉢形土器の大破片が、底面から5cmほど浮いて逆位で口縁部を北東方向にむけて出土している。本坑の時期は、これらの出土土器からみて加曾利 E Ⅳ式期と考えられる。

第33号土坑出土土器（第193図6～9）

第193図6は、中央部の底面直上から逆位で出土した大破片を中心に6点が接合した橋状把手を有する鉢形土器で、胴部以下を欠失する。幅6cm程の広い口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に単節縄文LRを縦位回転を主に施文し、一部に横位、斜位回転を用いている。口唇部は薄く尖り気味で、外反する。橋状把手は区画微隆線から胴部最大径部分にかけて縦位に貼付され、上面にLRの縄文が縦位回転で施文されている。胴部には炭化物が付着している。内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が明褐色を呈する。推定口径19.0cm、現存高16.0cmである。

7は、口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、以下に縄文を施している。8・9は胴部片で、8は縄文、9には縦位の条線文が施されている。

第37号土坑（第187図）

本坑は、調査区の西側のL5e7区に検出され、南側に第33号土坑、南西側に第36号土坑が隣接している。平面形は長径186cm、短径185cmの不整形円形を呈し、115cm掘り込まれている。壁はロームではほぼ直立しているが、西側でやや外傾し、北側の壁の下位は若干内側に挟り込まれている。底面はほぼ平坦で硬い。

覆土は、褐色土を主体とし、ところどころに暗褐色土をブロック状に挟み、壁際に明褐色土がみられる。全体に粗いローム粒子やローム小ブロックをきわめて多量に含み、ザラザラしていて締まりが弱い。炭化粒子、焼土粒子も少量から微量含んでいる。人為堆積と考えられる。

土器は 17 点と少ないが、覆土下位の北側からややまとまって出土しており、主体は加曾利 E IV 式土器である。本坑の時期は、出土土器からみて加曾利 E IV 式期と考えられる。

第 37 号土坑出土土器（第 193 図 10～12）

第 193 図 10～12 はいずれも胴部片である。10・11 は断面三角形を呈する微隆線で曲線的区画を描き、縄文を施している。12 は縄文のみの胴部の小片である。

第 47 号土坑（第 188 図）

本坑は、調査区の北東端の L7g1 区に検出され、第 5 号住居跡の南側床面を切っている土坑群の 1 つであるが、西側を第 48 号土坑に切られている。平面形は、推定で長径 85 cm、短径 80 cm の不整形円形を呈し、62 cm 掘り込まれている。壁はロームでゆるやかに外傾して立ちあがり、底面は西方向へ傾いている。

覆土は、粗いローム粒子、ローム小ブロックを多量、炭化粒子中量を含む褐色土で、上位にわずかに風化した貝片が混じっている。

遺物は少ないが、土器片 24 点の他に土器片錘 1 点、磨石片 1 点が出土している。土器の主体は加曾利 E III 式土器である。本坑の時期は、出土土器からみて加曾利 E III 式期と考えられる。

第 47 号土坑出土土器（第 193 図 13～16）

第 193 図 13～16 は、いずれも胴部片である。13 は微隆線による区画と縄文が施されている。14～16 は縄文のみで、16 は胴下半部と考えられ、無文部が認められる。

第 66 号土坑（第 189 図）

本坑は、調査区の北西端の K5h8 区にあり、平面形は長径 148 cm、短径 140 cm の不整形円形を呈し、90 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがるが、北側では直立気味となっている。底面は北東側がやや凹むほかはほぼ平坦で硬い。

覆土は、凹レンズ状の堆積を示しており、上位と下位に大別できる。上位は暗赤褐色、暗褐色を呈し、ローム粒子、焼土粒子を中量から少量、炭化粒子を少量含み締まりが弱い。下位は暗褐色を呈し、ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子、焼土粒子を少量含み締まりがある。壁際にはローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含む褐色土がみられる。

土器は 31 点と少ないが、早期末の条痕文土器と中期の加曾利 E III 式土器が混在している。本坑の覆土上位に焼土粒子をやや多く含む土層が認められたことから考えると、本坑が早期の条痕文土器を伴う炉穴を切ったことも推測される。他には極小さい土器片錘 1 点が出土している。本坑の時期は、出土土器からみて加曾利 E III 式期と考えられる。

第 66 号土坑出土土器（第 193 図 17～18）

第 193 図 17 は、橋状把手の破片で、縄文が施され、焼成前の穿孔が認められる。18 は、縄文のみの胴

部片である。

第 76 号土坑（第 190 図）

本坑は、調査区の北西側の L5i0 区にあり、平面形は長径 204 cm、短径 192 cm の不整形円形を呈し、181 cm と深く掘り込まれている。壁はロームで良好であり、中位でくびれ上位にむかってやや内傾しながら立ちあがり、底面にむかっては内傾する所謂フラスコ状を呈する。底面から 80～90 cm 上った位置で最小径 182 × 172 cm を測り、底径の最大値は 224 × 212 cm を測りかなり大きなものである。底面は硬く平坦である。

覆土は、褐色土を主体として、最上位と中位に凹レンズ状に暗褐色土が帯状に認められる。いずれもローム粒子、ローム小ブロックを多量に、炭化粒子を少量含み締まりの弱い土層である。底面近くは小木炭片をやや多く含み締まりがある。

土器は 60 点出土しているが、小破片が多く時期判定が困難なものが多い。底面およびその直上から小破片 6 点が出土しており、そのうち 5 点は南側の壁に沿って出土し、中位の段よりも内側に入っている。東側の底面直上から出土した口縁部片には炭化物が付着している。本坑の時期は、底面直上から出土した口縁部片などから判断すれば加曾利 E IV 式期と考えられる。

第 76 号土坑出土土器（第 193 図 19～21）

第 193 図 19 は、波状を呈する口縁部片で、断面三角形の微隆線で逆 U 字状の区画を描き、区画内に縄文を充填している。微隆線は太くしっかりしている。20 は、口縁部無文帯を微隆線と沈線で区画し、以下に縄文を施している。21 は、幅の広い口縁部無文帯を細い 1 条の沈線で区画し、以下に刺突文を斜位に施している。

第 170 号土坑（第 191 図）

本坑は、調査区の北側の M6a7・a8 区にかけて検出され、平面形は長径 132 cm、短径 124 cm の不整形円形を呈し、96 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、下位～中位に段をもっている。底面は平坦で硬く良好である。

覆土は、基本的に上中下の 3 層に分層でき、上位が暗赤褐色土、鈍い赤褐色土、中位が褐色土、下位が暗褐色土である。上位は焼土粒子を多量、ローム粒子、炭化粒子を少量含む。中位はローム粒子中量、ローム小ブロック、炭化粒子を微量含み締まっている。下位は中位と含有物はほぼ同様である。壁際にはローム粒子多量、ローム小ブロック少量を含む土がみられ、壁の崩落土と考えられる。

遺物は 19 点と少ないが、このうち 11 点に土器片錘としての加工が認められた。これらは覆土の中位の上半部からまとまって出土している。本坑の時期は、出土土器からみて加曾利 E III 式期と考えられる。本坑の特徴は、なんとと言っても土器片錘が一括出土したことであり、この点については別途検討したい。

第 170 号土坑出土土器（第 193 図 22～23）

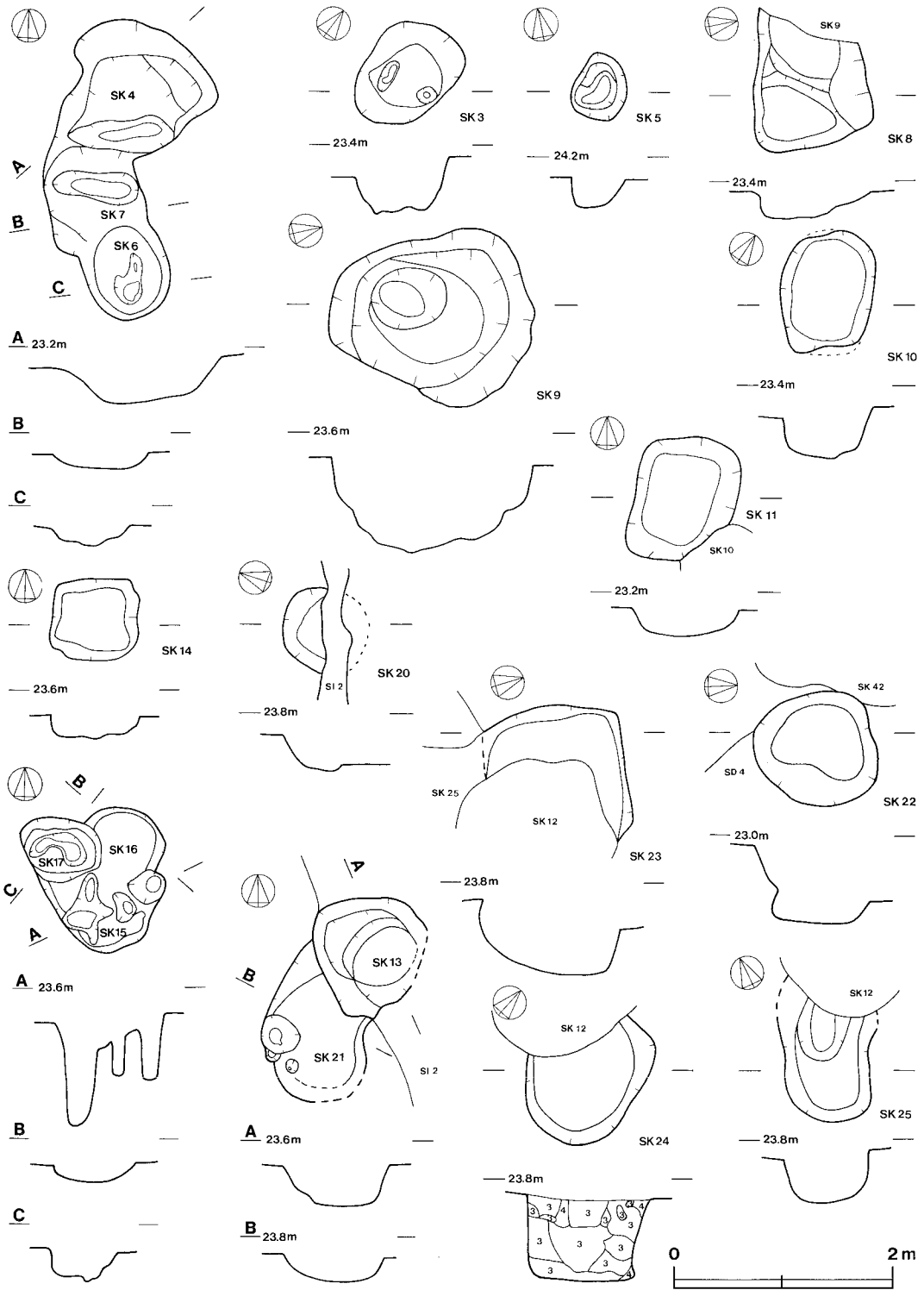
第 193 図 22 は、口縁部無文帯を有し、以下に縄文が施される口縁部片である。23 は、縄文と条線文が併施される胴部片である。

表3 南三島遺跡4区土坑一覽表

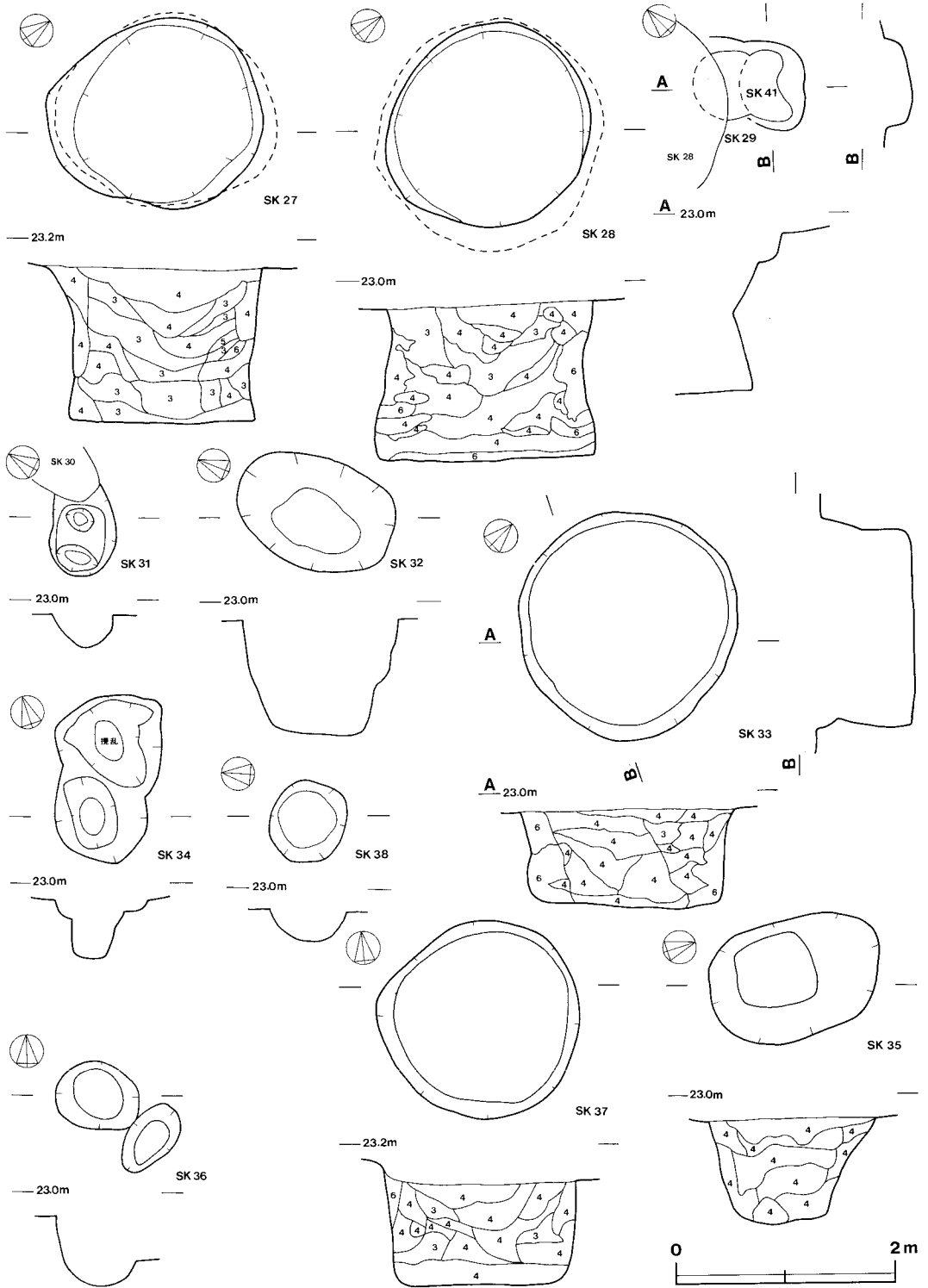
土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模 (cm) 長径×短径×深さ	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推 定 期	土・石 製 品	重 複 関 係	備 考	挿 図 番 号
3	M5c ₇	N-0°	不整楕円形	106×75×54	外傾	凹凸	人為	AⅡb	3	不明		SD 2		186
4	L5j ₇	N-19°-E	不 定 形	121×119×45	外傾	ゆるい起伏	人為	GⅡa	8	不明		SK7		186
5	L5j ₇	N-37°-E	不整楕円形	60×50×27	外傾	平坦	自然	AⅠa	0	不明				186
6	L5j ₇	N-0°	(楕 円 形)	(95)×80×14	外傾	凹凸	人為	AⅠa	0	不明		SK7		186
7	L5j ₇	N-15°-W	(不整楕円形)	(107)×85×15	外傾	ゆるい起伏	人為	AⅡa	0	不明		SK4,6		186
8	M5c ₇	N-28°-E	(不整長方形)	(126)×(102)×26	外傾	南へ傾く	人為	FⅡa	0	不明		SK9 SD2		186
9	M5c ₇	N-36°-E	不整楕円形	185×159×90	外傾	塊状	人為	AⅡb	2	不明		SK8 SD 2		186
10	M5c ₇	N-29°-W	(隅丸長方形)	(117)×83×47	外傾	塊状	人為	FⅡa	3	不明		SK11 SD 2		186
11	M5b ₇	N-15°-E	隅丸長方形	120×95×28	外傾	塊状	人為	FⅡa	2	不明		SK10 SD 2		186
13	M5j ₆		不 整 円 形	110×104×37	外傾	平坦	人為	AⅡa	0	不明		SI 2 SK21		186
14	M5j ₇	N-0°	不 整 方 形	80×76×22	外傾	凹凸	人為	FⅠa	1	不明		SI 2		186
15	M5j ₇	N-55°-E	(不整楕円形)	97×(55)×30	外傾	凹凸	人為	AⅠa	5	不明		SK16, 17		186
16	M5j ₇	N-33°-E	(楕 円 形)	(97)×(77)×16	外傾	皿状	人為	AⅠa	2	不明		SK15 17		186
17	M5j ₇	N-61°-W	楕 円 形	80×62×18	外傾	凹凸	人為	AⅠa	7	不明		SI 2 SK15,16		186
20	M5i ₇	N-53°-E	(不 整 方 形)	(86)×(80)×31	外傾	平坦	人為	FⅠa	0	不明		SI 2		186
21	M5j ₆	N-9°-E	(不整楕円形)	(147)×92×26	外傾	塊状	人為	AⅡa	0	不明		SK13		186
22	L6e ₃		不 整 円 形	115×110×73	外傾	平坦	自然	AⅡb	10	加EⅢ		SI 2 SK42 SD4		186
23	M4j ₇	N-22°-W	(不整長方形)	(145)×(116)×70	外傾	塊状	人為	FⅡb	0	不明		SI 2 SK12,19,25		186
24	N5a ₇	N-58°-W	(不整楕円形)	(136)×(112)×80	垂直	平坦	人為	BⅡb	18	加EⅣ	土器片錐1 土製円板1	SK12		186
25	N5a ₇	N-57°-W	(不整楕円形)	(146)×(77)×50	垂直	塊状	人為	BⅡb	0	不明		SK12 23		186
27	L5g ₇	N-42°-W	不整楕円形	204×173×157	袋状	平坦	人為	DⅢc	22	加EⅢ ~Ⅳ		SK26		187
28	L5f ₇		不 整 円 形	195×180×149	袋状	平坦	人為	DⅡc	40	加EⅢ		SK29 41		187
29	L5f ₇		(不 整 円 形)	65×(60)×152	外傾	塊状	自然	AⅠc	0	不明		SK28		187
31	L5e ₈	N-55°-E	(不整楕円形)	(86)×60×30	外傾	塊状	自然	AⅠa	0	不明	磨石1	SK30		187
32	L5e ₈	N-5°-E	楕 円 形	150×106×110	外傾	平坦	人為	AⅡc	0	不明				187
33	L5e ₇		不 整 円 形	208×200×90	垂直	平坦	人為	BⅢb	39	加EⅣ				187
34	L5e ₇	N-26°-E	(楕 円 形)	(102)×85×55	外傾	平坦	人為	AⅡb	0	不明				187
35	L5e ₇	N-0°	不整楕円形	162×110×98	外傾	平坦	人為	AⅡb	16	加EⅢ				187
36	L5e ₇	N-70°-W	不整楕円形	80×62×65	外傾	塊状	人為	AⅠb	0	不明				187
37	L5e ₇		不 整 円 形	186×185×115	垂直	平坦	人為	BⅡc	17	加EⅣ				187
38	L5f ₆		不 整 円 形	77×70×30	外傾	塊状	人為	AⅠa	0	不明				187
39	L5g ₆	N-0°	楕 円 形	153×134×59	垂直	平坦	人為	BⅡb	6	加EⅢ		SI 4 SD 1		188
40	L5e ₈	N-26°-W	不整楕円形	138×75×38	外傾	塊状	自然	AⅡa	1	不明				188
41	L5f ₈	N-44°-E	(不整長方形)	80×(75)×32	垂直	塊状	人為	FⅠa	0	不明				187
42	L6e ₃	N-32°-E	不整楕円形	195×104×56	外傾	ゆるい起伏	自然	AⅡb	30	加EⅢ	石皿1	SI 6 SK22 SD 4		188

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
43	L 6d ₃	N - 43°- W	不整長方形	75×60×30	外傾	塊状	人為	F I a	2	加 E		SI 6		188
44	L 6e ₄	N - 0°	(不整楕円形)	226×(177)×80	外傾	ゆるい起伏	自然	A III b	7	加 E		SI 6 SK45SD3		188
45	L 6e ₃	N - 11°- E	(楕円形)	90×(43)×27	外傾	塊状	自然	A I a	2	加 E		SI 6 SK44		188
46	L 6d ₂	N - 44°- W	不整楕円形	159×133×40	外傾	塊状	自然	A II a	0	不明				188
47	L 7g ₁		(不整円形)	(85)×(80)×F2	ゆるやかに外傾	平坦	人為	A I b	24	加 E III	磨石 1	SI 5 SK48		188
48	L 7g ₁	N - 17°- E	不整楕円形	124×106×63	外傾	平坦	人為	A II b	6	加 E III		SI 5 SK47.49		188
49	L 7g ₁		(不整円形)	(73)×(67)×70	外傾	塊状	人為	A I b	6	加 E III		SI 5 SK48		188
50	K 5i ₇	N - 40°- W	不整楕円形	210×133×46	外傾	北西側に傾く	自然	A III a	37	加 E III	土器片 錘 2			188
51	K 5h ₇	N - 3°- E	不整楕円形	200×134×57	外傾	ゆるい起伏	自然	A III b	8	加 E III				188
52	K 5h ₆		不整円形	128×114×23	外傾	皿状	自然	A II a	5	中～後期				188
53	L 7g ₁	N - 55°- E	不整楕円形	165×128×69	外傾	平坦	人為	A II b	14	加 E III		SI 5		188
54	K 5h ₄	N - 39°- W	楕円形	112×94×46	外傾	塊状	自然	A II a	6	中～後期	土器片 錘 1			188
55	K 5g ₅	N - 9°- W	不整方形	141×138×27	外傾	平坦	自然	F II a	27	加 E III				188
56	K 5h ₅	N - 90°	楕円形	101×76×27	外傾	ゆるい起伏	自然	A II a	0	不明				188
57	K 5g ₅	N - 50°- E	不整楕円形	63×53×39	外傾	塊状	自然	A I a	3	加 E III		SK 58		189
58	K 5h ₅	N - 13°- E	不整長方形	100×72×39	外傾	塊状	自然	F II a	5	加 E III		SK 57		189
59	K 5h ₅	N - 39°- E	不整楕円形	120×(106)×24	外傾	平坦	自然	A II a	4	不明		SK 58 60		189
60	K 5h ₅	N - 56°- E	不整長方形	176×(157)×15	外傾	ゆるい起伏	自然	F II a	2	不明	土器片 錘 1	SK 59		189
62	K 5g ₆	N - 40°- E	不整楕円形	130×114×39	外傾	東へ傾く	自然	A II a	9	不明				189
63	K 5g ₅	N - 2°- E	不定形	150×112×35	外傾	凹凸	自然	G II a	3	不明				189
64	K 5j ₅		不整円形	102×90×28	外傾	南東へ傾く	自然	A II a	5	不明				189
65	K 5i ₆	N - 90°	楕円形	118×96×20	外傾	平坦	自然	A II a	0	不明				189
66	K 5h ₈		不整円形	148×140×90	外傾	平坦	自然	A II b	31	加 E III	土器片 錘 1			189
67	L 6i ₁	N - 12°- E	楕円形	164×142×19	外傾	平坦	自然	A II a	0	不明		SK 70		189
68	L 5g ₀	N - 90°	楕円形	175×116×77	外傾	平坦	人為	A II b	1	堀 I			段あり	189
69	L 6g ₁	N - 31°- E	不整楕円形	253×203×58	外傾	ゆるい起伏	自然	A III b	11	加 E				189
70	L 6i ₁	N - 18°- W	不整楕円形	134×109×46	外傾	平坦	自然	A II a	3	不明		SK 67		189
71	L 6i ₁	N - 26°- E	不整楕円形	111×79×21	外傾	ゆるい起伏	自然	A II a	0	不明				189
72	L 5i ₀	N - 24°- E	不整長楕円形	206×100×29	外傾	ゆるい起伏	自然	A III a	2	不明				189
73	L 5j ₀	N - 40°- W	楕円形	156×138×56	外傾	ゆるい起伏	自然	A II b	8	不明				189
74	L 5j ₀	N - 30°- W	不整楕円形	156×103×42	外傾	凹凸	自然	A II a	0	不明				190
75	L 5j ₀		不整円形	110×104×30	外傾	平坦	自然	A II a	0	不明				190
76	L 5i ₀		不整円形	204×192×181	袋状	平坦	人為	D III c	60	加 E IV			袋土 杖坑	190
77	L 6g ₂	N - 49°- E	不整長楕円形	220×125×30	外傾	ゆるい起伏	自然	A III a	10	加 E III		SK 80		190
78	L 6g ₃	N - 26°- W	不整楕円形	(172)×151×26	外傾	東へ傾く	自然	A II a	0	不明		SK 79 80		190

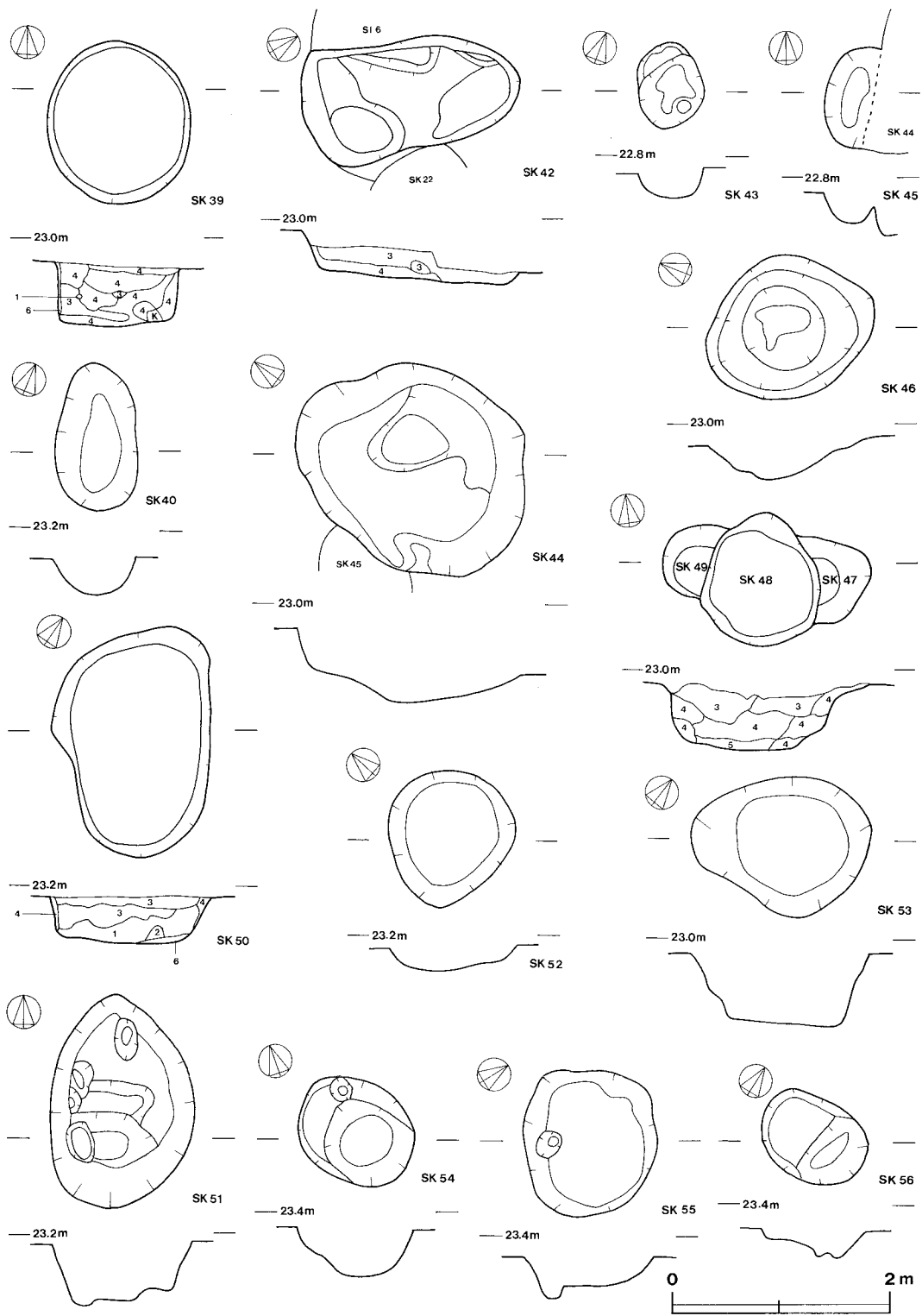
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土 土器片	推定 時期	土・石 製品	重複 関係	備考	挿図 番号
				長径×短径×深さ										
79	L6g ₃		不整円形	76×67×33	外傾	ゆるい起伏	自然	A Ia	0	不明		SK 78		190
80	L6g ₃	N - 57°- E	不整楕円形	222×(190)×20	外傾	凹凸	自然	A III a	0	不明		SK 78		190
115	P7a ₂	N - 90°	不整長方形	138×113×57	外傾	平坦	人為	F II b	0	不明				190
135	N7i ₆	N - 90°	不整楕円形	115×87×12	外傾	平坦	自然	A II a	0	不明				190
149	N7j ₀		不整円形	100×93×15	外傾	平坦	自然	A II a	0	不明				190
150	N8j ₂		不整円形	135×133×44	外傾	平坦	自然	A II a	4	不明				190
151	N8i ₂		不整円形	94×83×20	外傾	平坦	自然	A I a	0	不明				190
156	O7j ₂	N - 50°- W	(不整楕円形)	105×(84)×40	外傾	平坦	自然	A II a	0	不明		SK114		190
158	N7c ₉		不整円形	105×100×50	外傾	平坦	自然	A II b	0	不明				190
159	N7b ₉		不整円形	125×116×25	外傾	ゆるい起伏	自然	A II a	0	不明				190
160	M7i ₅		不整円形	170×156×45	外傾	中凹 中央む	自然	A II a	0	不明				191
161	M7h ₅		不整円形	150×139×24	外傾	ゆるい起伏	自然	A II a	0	不明				191
162	M7i ₅		不整円形	106×93×25	外傾	ゆるい起伏	自然	A II a	0	不明				191
163	M7f ₅		不整円形	120×119×34	外傾	塊状	自然	A II a	2	不明				191
164	M7e ₄	N - 53°- W	隅丸長方形	106×84×30	外傾	ゆるい起伏	自然	A II a	0	不明				191
166	M6f ₈	N - 56°- W	不整楕円形	136×111×25	外傾	東傾 へく	自然	A II a	0	不明	土器片 錘1			191
167	M6e ₇		不整円形	156×153×49	外傾	凹凸	人為	A II a	1	不明				191
168	M6i ₀	N - 26°- E	不整楕円形	126×120×17	外傾	平坦	自然	A II a	15	称 II				191
169	M6i ₉	N - 0°	不整楕円形	125×115×22	外傾	底面に段	自然	A II a	5	不明				191
170	M6a ₈		不整円形	132×124×96	外傾	平坦	人為	A II b	8	加E III	土器片 錘11			191
171	N6a ₆	N - 37°- E	不整楕円形	152×135×82	外傾	平坦	自然	A II b	20	中～ 後期	土器片 錘2		テラスあり	191
172	M6i ₅	N - 61°- W	楕円形	162×123×38	外傾	南西に傾く	自然	A II a	2	加 E	土器片 錘1			191
173	M6i ₆		不整円形	97×92×25	外傾	平坦	自然	A I a	7	加E III	不明石 製品1			191
175	M6f ₅	N - 42°- E	楕円形	150×132×20	外傾	皿状	自然	A II a	12	中～ 後期	土器片 錘1			191
176	M6e ₅	N - 70°- W	不整長楕円形	253×132×41	外傾	塊状	自然	A III a	9	不明				191
177	M6b ₈	N - 34°- W	不整楕円形	114×99×35	外傾	塊状	自然	A II a	0	不明				191
178	M7b ₁	N - 54°- W	不整長方形	168×138×44	外傾	底面に段	自然	F II a	3	不明				192
179	M6b ₄	N - 71°- E	不整楕円形	120×84×50	外傾	ゆるい起伏	自然	A II b	0	不明				192
180	M6g ₄	N - 11°- W	不整楕円形	166×134×83	外傾	平坦北 へ傾く	人為	A II b	0	不明				192
181	M6c ₃		(不整円形)	(273)×(263)×86	外傾	掃鉢状	人為	A III b	6	加E III	土器片 錘2	SD 3		192



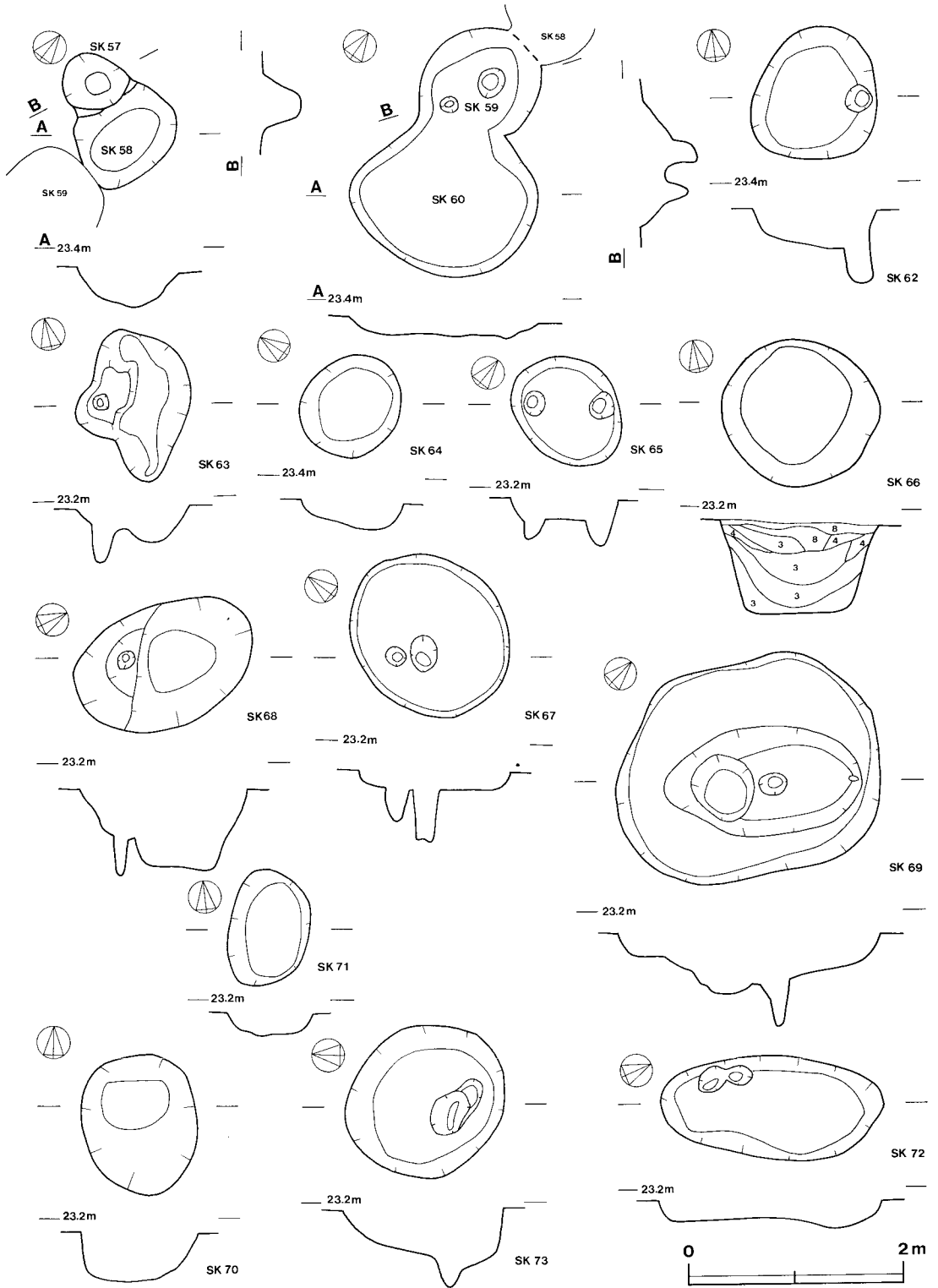
第 186 图 土坑实测图(1)



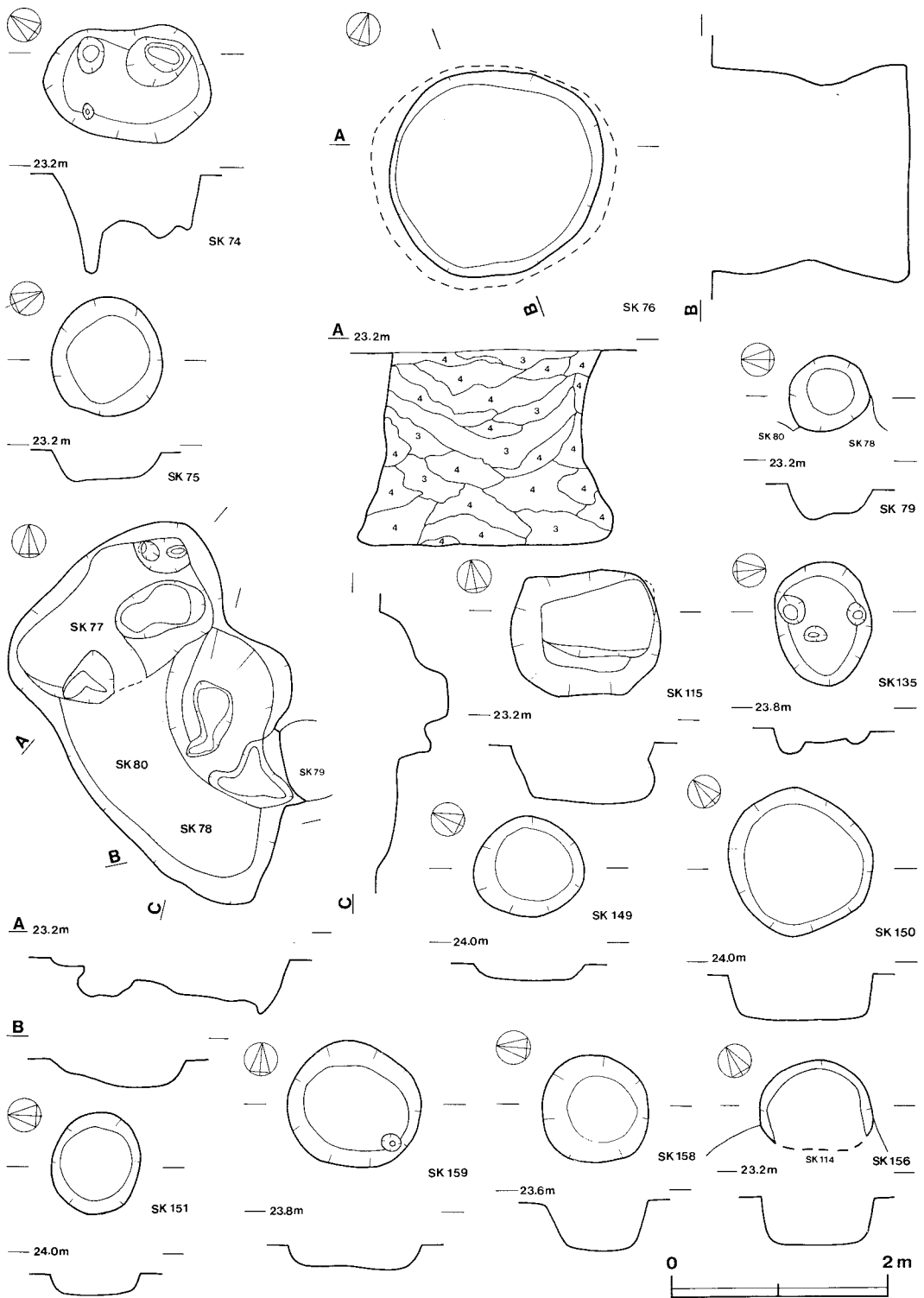
第 187 图 土坑实测图(2)



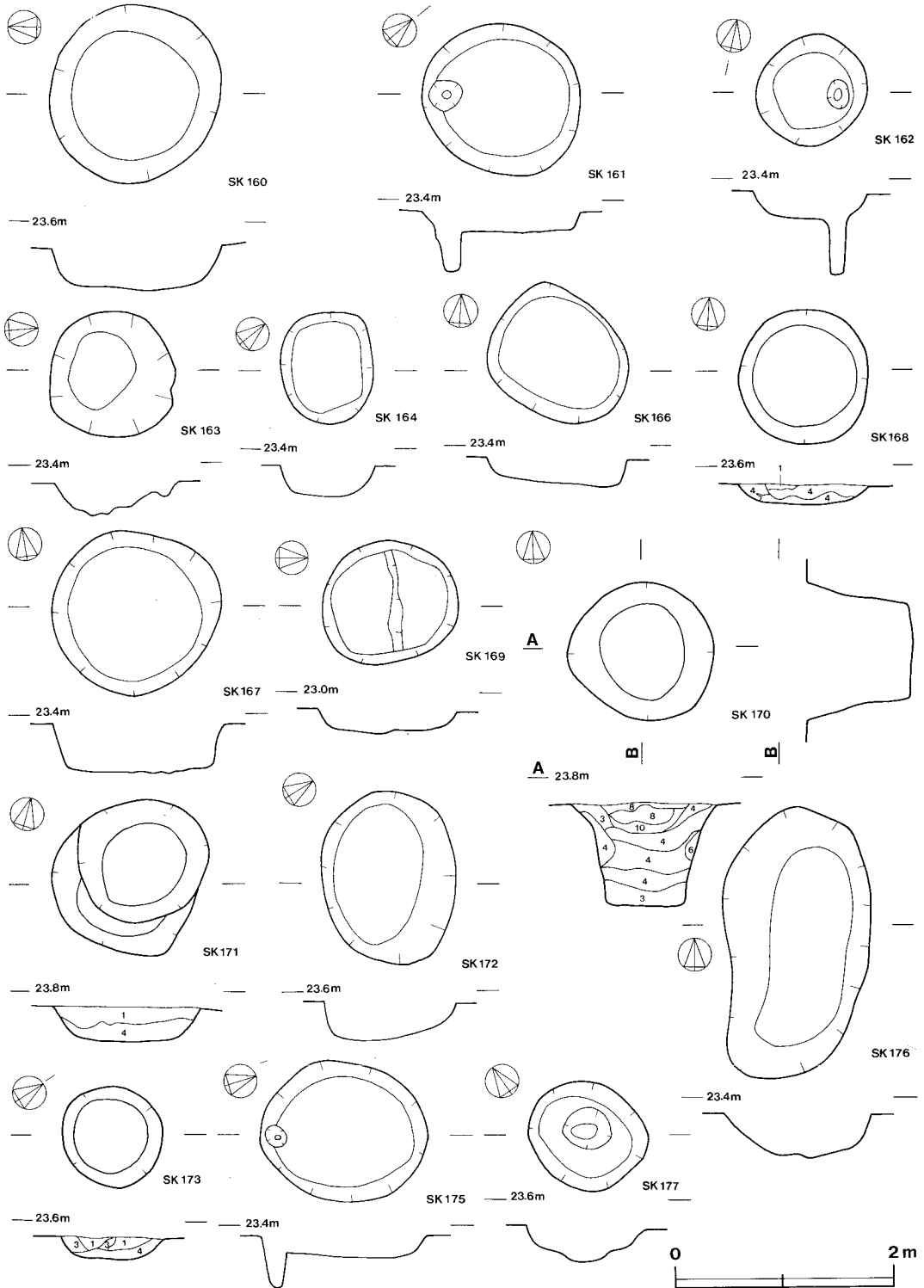
第 188 图 土坑实测图(3)



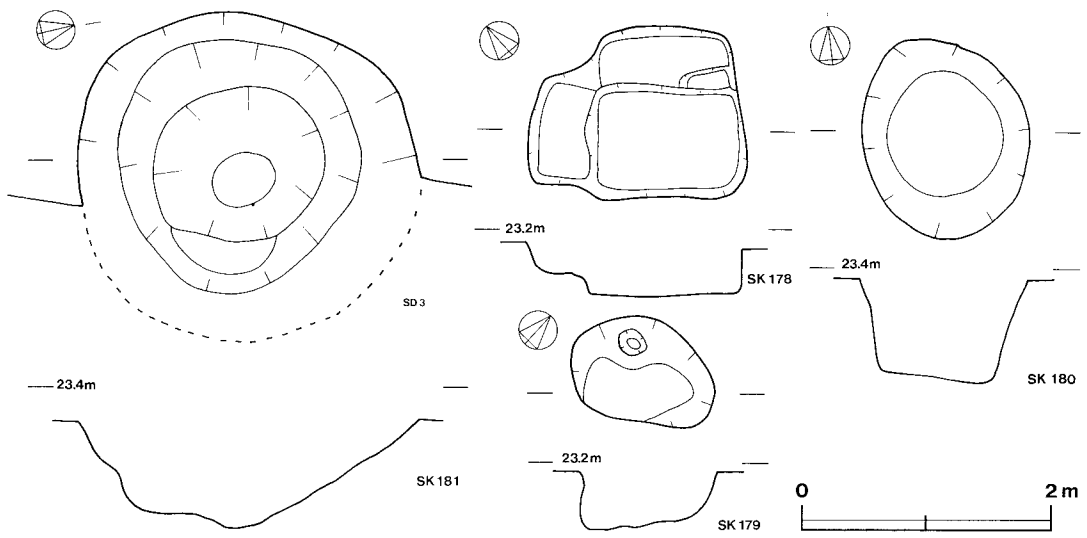
第 189 图 土坑实测图(4)



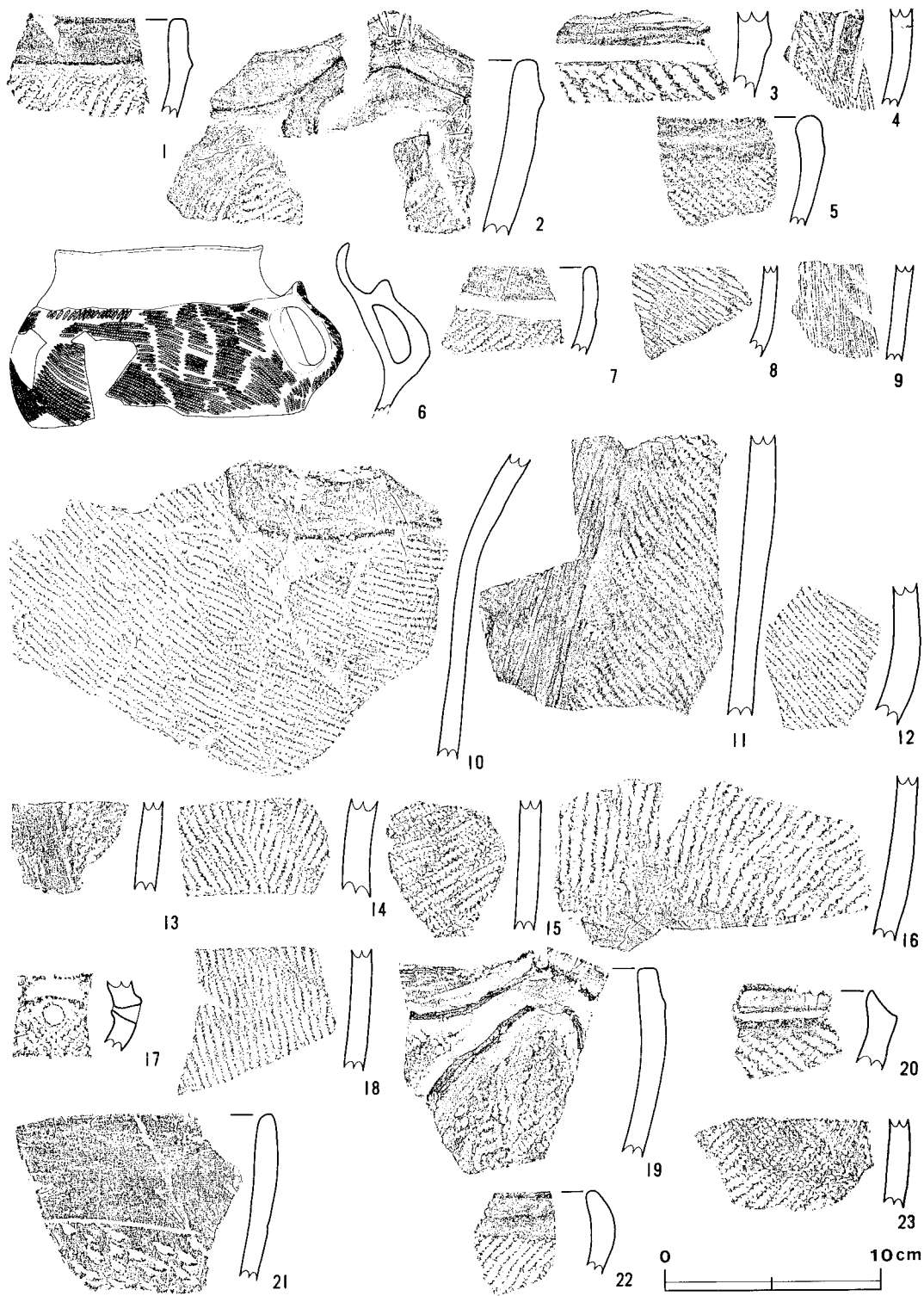
第 190 图 土坑实测图(5)



第 191 图 土坑实测图(6)



第 192 图 土坑实测图(7)



第 193 图 第 24 · 27 · 28 · 33 · 37 · 47 · 66 · 76 · 170 号土坑出土土器实测图 · 拓影图

第4節 炉穴と出土土器

第1号炉穴（第122図）

本跡は、調査区の北西側の K2j4・L2a4区にまたがって検出され、第105号土坑を改称したものである。本跡の南東側には第142号土坑、南西側には第14号埋甕遺構が重複しているが、いずれも本跡を切っていて新しい。平面形は最大長242cm、最大幅210cmの西側に括れ部をもつ不整楕円形を呈し、最深部で46cm掘り込まれている。壁はロームでゆるやかに外傾して立ちあがり、底面には2か所の炉部が検出されており、凹凸がみられる。北側の炉部をaとし、南側の炉部をbとする。aは東側が深く西側にむかって浅くなる長径110cm、短径80cmの楕円形を呈し、東側の中央部の底面に焼土ブロックをもち、炉床は良く焼けているが、炉壁はあまり焼けていない。bは径78cmの不整円形を呈し、南側に焼土ブロックをもち、炉床は良く焼けている。bの南壁の下位は焼けて硬化が著しい。覆土は上位が黒褐色、暗褐色で、下位は褐色を呈している。上位はローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量ずつ含み締まっている。下位も上位とほぼ同様の含有物であるが、底面近くになると焼けたローム小ブロックや焼土粒子を多量に含み締まっている。

土器は23点と少ないが、早期の条痕文系土器が主体を占めている。本坑の時期は、早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第1号炉穴出土土器（第194図1～7）

第194図1は、口縁端部がわずかに折り返されている口縁部片で、軽い擦痕が施されている。2～7は条痕文だけの胴部の小片である。2は浅く不鮮明であるが、他は深く明瞭に施文されている。

第2号炉穴（第125図）

本跡は、調査区の北側の L2c9区にあり、第116号土坑を改称したものである。本跡は西側で第131・132号土坑と、北西側で第5号住居跡と重複しているが、いずれにも切られており最も古い。また、本跡の南東側には長径89cm、短径62cm、深さ156cmのピットが認められるが、本跡に伴うものではない。平面形は、推定で長径174cm、短径142cmの不整楕円形を呈し、最深部で48cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は中央部が少し凹み、凹凸がある。炉部は北西側の壁寄りにあり、長径72cm、短径55cmの楕円形を呈し、中央部やや北寄りが帯状に強く焼けている。炉部の覆土は13cmの深さを有し、上位が暗赤褐色、下位が赤褐色を呈し、上位には焼土小ブロックが多量に含まれているが締まりが弱く、下位は焼土粒子・焼土小ブロックの混入率が上位より少ないが、粘性や締まりがある。炉穴の覆土は、極暗褐色土、黒褐色土、暗褐色土の順に堆積しており、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む締まった土層で、焼土粒子は目立つほどではない。

土器は58点出土し、そのほとんどは早期の条痕文土器である。中・後期の縄文土器片は第131・132号土坑、土師器片は第5号住居跡との重複により混入したものである。他に磨石2点が出土している。本坑の時期は、遺構の形態および出土土器からみて、早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第2号炉穴出土土器（第194図8～16）

第194図8は、条痕文上に斜位のナデが加えられた口縁部片で、条痕文はほとんど消えている。9・10

は、口唇部上面に斜位の刻み目が施された口縁部の小片で、条痕文が斜位に施されている。11～16は、条痕文だけの胴部片であるが、第1号炉穴出土土器に比べると条痕が浅く不明瞭である。斜位（11・14）、縦位（13・15・16）があり、両者を重ねた例（12）もある。

第3号炉穴（第126図）

本跡は、調査区の中央部のL2e8区を中心とした位置にあり、第181号土坑を改称したものである。北側を第182号土坑に切られている。平面形は、北端を切られているため推定となるが、長径194cm、短径116cmの楕円形を呈し、南側の深い部分で50cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがるが、東側の傾斜がきつく、西側はゆるやかである。また、南側の立ちあがりはやや急角度である。底面は播鉢状に凹む。南北2か所に炉部を有し、北側をa、南側をbとする。aは北端部を第182号土坑に切られているが、長径82cm、短径56cmの楕円形を呈し、14～15cm掘り込まれている。覆土には焼土粒子・ローム粒子を含む褐色土が堆積し、炉床と東西両側の壁の下部が良く焼けてブロック状を呈し、赤化・硬化している。南壁側は硬化だけしている。bはaと接しており、長径96cm、短径79cmの不整円形を呈し、22～23cm掘り込まれている。bにもaと同様の褐色土が堆積し、中央やや西側と南側の壁の下部と炉床が良く焼けて赤化・硬化しているが、aほど著しくない。

土器は、aの覆土中位より1点とbの南側の覆土上位より2点の計3点の条痕文土器が出土しており、全体で14点を数えるが、中期の土器片も混入している。本坑の時期は、遺構の形状や出土土器からみて早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第3号炉穴出土土器（第194図17～20）

第194図17～20は、いずれも条痕文だけが施されている。17・18は口唇部片で、口唇部が若干尖り気味となり、斜位に施されているが、剝落が激しい。19・20は胴部片で、縦位を主に施文されている。19は厚手である。

第4号炉穴（第127図）

本跡は、調査区の中央部のL2f9・f0区を中心とした位置に検出され、第188、189号土坑を改称したものである。本跡の東側に第192・197号土坑が重複しているが、これらは本跡より新しい。また、本跡の上面を第3号溝が南西から北東方向に走っている。平面形は、東端が第192、197号土坑に切られているために推定であるが、長径212cm、短径102cmの楕円形を呈し、南西側の炉部の最深部で58cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、北側ではゆるやかで、南・西側は少し急である。底面は中央部が凹み、周壁にむかって上がる。炉部は長径92cm、短径64cmの不整楕円形を呈し、底面に3か所の小ピットを有し、最深部で16cm掘り込まれている。底面および壁は良く焼けており、特に南西側、東側は赤化・硬化が著しい。北側は焼け方が弱い。また、本跡の北東側の壁寄りにも若干の焼けた跡が認められたが、著しいものではない。北東側が若干高く南西側にむかって傾いており、北東側に足場をもつ炉穴と考えられる。

遺物は炉部からは出土していないが、覆土からは41点とやや多く出土しており、主体は早期の条痕文土器である。本跡の時期は、遺構の形態および出土土器からみて早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第4号炉穴出土土器（第194図21～24）

第194図21～24は、いずれも条痕文だけが施されている。21は外反する薄手の口縁部片で、条痕は斜位である。22～24は胴部片で、22は縦位に、23・24は横位、斜位に施文されている。22の条痕は深く明瞭である。

第5号炉穴（第142図）

本跡は、調査区の北西側のL2a2区を中心とした位置に検出され、第463号土坑を改称したものである。北東側を第1号性格不明遺構により切られている。また、南西端部には第85号住居跡に伴うと思われるピットが穿たれている。東側約4mには第1号炉穴が存在する。平面形は長径205cm、短径104cmの不整楕円形を呈し、最深部で56cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面に3か所の炉部が北東から南西側にかけて検出され、a、b、cとした。aは北東側に位置し、半分ほどを第1号性格不明遺構に切られており、規模は不明であるが、底面まで焼けている。bは中央部に位置し、長径35cm、短径28cmの楕円形を呈し、底面まで良く焼けている。cは南西側の端部に位置し、長径38cm、短径36cmの不整円形を呈し、底面まで良く焼けが通っている。bとcの間には長径58cm、短径50cmの不定形を呈し、中央部で22cm掘り込まれた落ち込みがある。底面は全体として南西側に傾き、ゆるやかな起伏を有している。

覆土は、上位にローム粒子・焼土粒子を多量から中量含む締まった暗褐色土、中位にはローム粒子・焼土粒子を多量に含む締まり弱いにぶい赤褐色土、下位にはローム粒子多量、焼土粒子少量を含む粘性が強く良く締まった褐色土が堆積している。

土器は23点出土したが、早期と中期の土器片が混在している。本跡の時期は、図示できなかった早期の条痕文土器片が3点あり、遺構の形状とあわせて早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第6号炉穴（第142図）

本跡は、調査区の中央部のL2g6区に位置し、第87号住居跡の床面下から検出された第467号土坑を改称したものである。北西側に第87号住居跡に伴うピットが穿たれている。本跡の北東側約11mには第4号炉穴が存在する。平面形は長径146cm、短径80cmの楕円形を呈し、最深部で25cm掘り込まれているが、上面を第87号住居跡に削平されているため、構築当初はより深かったことが想定される。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面にはゆるい起伏をもち、炉部は北西端部に構築されている。炉部は長径52cm、短径37cmの不整楕円形を呈し、底面まで良く焼けている。北側は第87号住居跡のピットに切られている。炉穴の覆土は、ローム粒子少量、炭化粒子微量を含む締まった褐色土、明褐色土が主に堆積し、炉部の周囲にはローム粒子・焼土粒子を少量から多量、炭化粒子を微量から少量含む締まりの弱い暗赤褐色土、赤褐色土、にぶい赤褐色土が堆積している。

本跡からの出土土器は無いが、第87号住居跡の覆土から出土した少量の早期の土器片は本跡に伴うものと考えられるので、第6号炉穴出土土器として扱った。本跡の時期は、遺構の形状から判断して早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第6号炉穴出土土器（第194図25～31）

第194図25～30は、条痕文のみが施された土器である。25・26は口縁部片で、横位・斜位に施文され、

25には焼成後の穿孔があり、補修孔と思われる。27～30は胴部の小片で、縦位や斜位に施されている。28・30の条痕文は明瞭である。31は、本炉穴群出土土器の中で唯一の条痕文以外の文様を有するもので、条痕文の地文上に微隆起線で幾何学的区画をおこない、内部に同様の微隆起線による斜行文を充填している。胴部片であるが、野島式土器と判定できる。

第7号炉穴（第142図）

本跡は、調査区の中央部のL2i5・j5区にまたがって検出され、第478号土坑を改称したものである。本跡の上面は第90号住居跡により貼り床され、北東、南西側に各1か所ずつの小ピットが接している。平面形は長径114cm、短径76cmの楕円形を呈し、最深部で36cm掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面の中央部に焼土がみられ、焼土にかかるように小ピットが2か所検出されている。このピットを含めた炉部は東側に片寄り、長径82cm、短径53cmの瓢形に近い楕円形を呈している。炉部の底面は良く焼けて赤化・硬化しているが、壁寄りには特に硬化はしていない。覆土は、上位に粗いローム粒子・ローム小ブロックを多く含む締まりの強い褐色土、暗褐色土があり、これは第90号住居跡の貼り床と考えられる。下位の中央部には焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色・赤褐色土が堆積し、壁寄りにはローム粒子少量を含む締まった褐色土がみられる。

土器は4点と少ないが、そのうち3点が早期のもので、他に小礫2点が出土している。本跡の時期は、遺構の形状および出土土器からみて早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第7号炉穴出土土器（第194図32～33）

第194図32・33は共に胴部の小片で、32には擦痕文、33には条痕文が施されている。

第8号炉穴（第142図）

本跡は、調査区の南西側のM2c6・c7・d6・d7の各区にまたがって検出され、第481号土坑を改称したものである。本跡の東側は第96号住居跡と重複して上面を削られ、北側の炉部の東側は第96号住居跡に伴うピットにより切られている。平面形は長径325cm、短径105cmの長楕円形を呈し、南・北側の炉部の最深部で44cm掘り込まれている。壁はロームで東側を除いてゆるやかに外傾して立ちあがり、東側は住居跡との重複により立ちあがり低い。底面には東側に寄って北から南へa、b、cの3か所の炉部が認められる。いずれの炉部も上面に焼土が広がっていて確認は容易であった。aは長径60cm、短径52cmの不整形形を呈し、11cmほど播鉢状に掘り込まれ、焼土や焼けたローム小ブロックを多量に含む締まった赤褐色土が堆積し、炉床は良く焼けてガリガリしている。bは径44cmの円形を呈し、8cmほど播鉢状に掘り込まれ、焼土粒子を多量に含む赤褐色土、褐色土が覆土中のところどころに見られるが、全体的には赤褐色土を含む黄褐色土が主に堆積しており、底面や壁面に火熱による硬化はみられるが、著しい赤化は認められない。bはaよりも焼け方が弱い。cは長径58cm、短径48cmの不整形形を呈し、7cmほど皿状に掘り凹められており、全体的に焼土粒子を多量に含むにぶい赤褐色土が堆積し、下位には焼けたローム粒子が多量に含まれている。上位は締まりが弱い、下位は締まっている。底面や壁面は良く焼けており、aとほぼ同様でガリガリしている。本跡の覆土は、ローム粒子・焼土粒子を中量から少量、炭化粒子を少量から微量含むよく締まった褐色土である。

土器は24点出土し、早期と中期のものが混出しているが、早期の条痕文土器が主体を占めている。中

期のものは第 96 号住居跡に伴うものと思われる。他には礫が 1 点みられる。本跡の時期は、遺構の形状および出土土器からみて早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第 8 号炉穴出土土器（第 194 図 34～38）

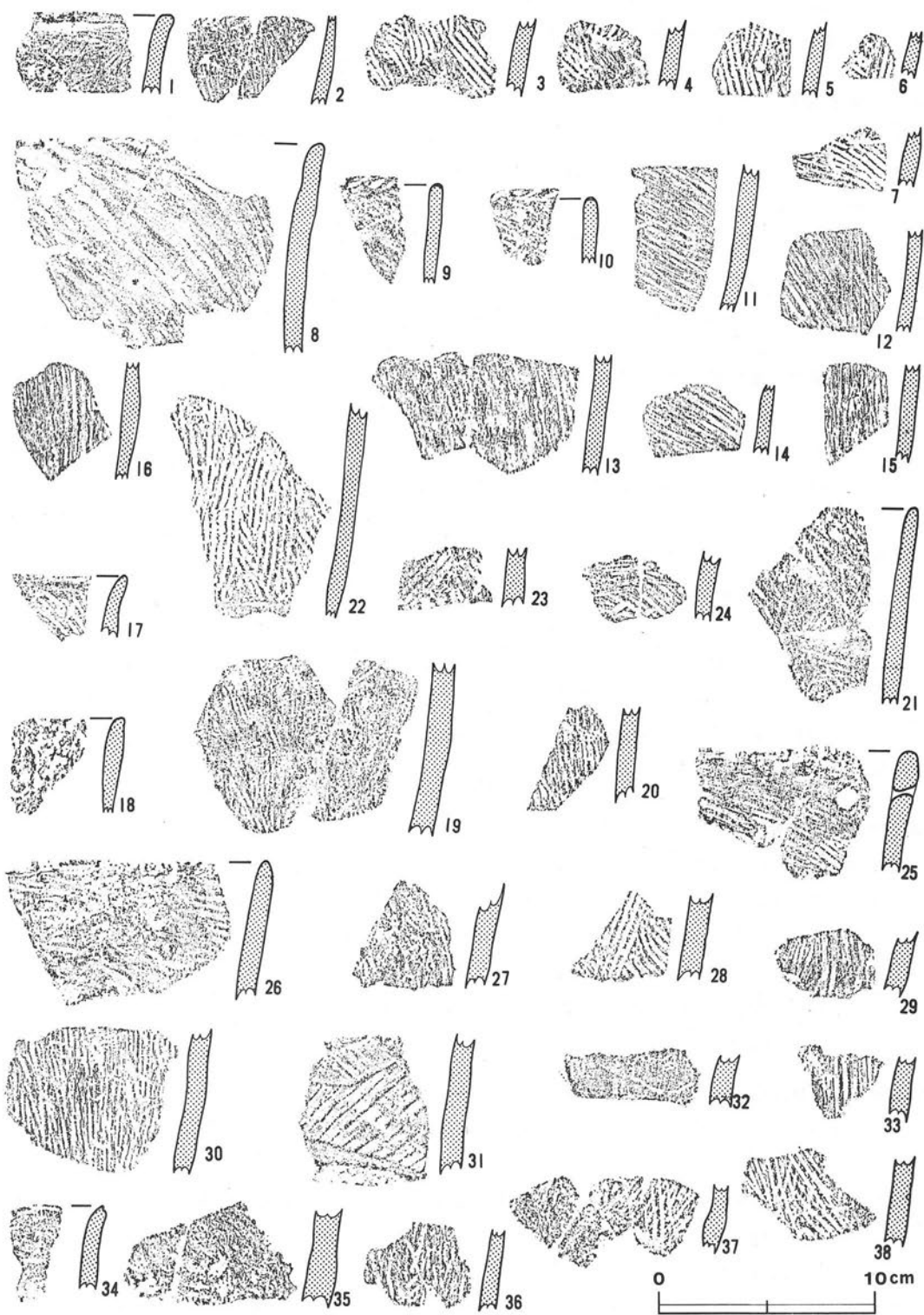
第 194 図 34・35 は擦痕文、36～38 には条痕文が施されており、34 以外は胴部片である。34 の口縁部は外反し、端部に細い沈線が認められる。35 は 34 に比して厚手である。36～38 は条痕文が縦位と斜位の組みあわせで施文されている。

第 1～4，6～8 号炉穴出土土器は、いずれも胎土に繊維を含み、第 6 号炉穴出土の 31 から判断すれば、野島式土器と考えられる。

第 9 号炉穴（第 144 図）

本跡は、調査区の南西側の M2a5 区に検出され、第 512 号土坑を改称したものである。南東側を第 506 号土坑、北西側を第 502 号土坑、南西側を第 520 号土坑に切られている。平面形は長径 242 cm、短径 106 cm の不整長楕円形を呈し、最深部で 48 cm 掘り込まれている。壁はロームで外傾して立ちあがり、底面は西から東側にかけてゆるやかな起伏をもちながら傾斜しており、a, b 2 か所の炉部を有している。東側の a は長径 52 cm、短径 38 cm の楕円形を呈し、5～7 cm の赤褐色土が堆積し、きわめて良く焼けて赤化・硬化が著しい。西端部の b は長径 38 cm、短径 30 cm の不整楕円形を呈し、3 cm ほどの赤褐色土が堆積し、a 以上に焼けが著しく、赤化・硬化が激しい。また、西端から北寄りの壁は底面より 35 cm ほど上まで壁面が強く焼けて焼土化し、真赤になっている。西端の南寄りの壁はロームが焼けて硬化しているが、赤化はしていない。炉部の位置からみて本跡の足場部は東側であったと想定される。覆土は、上位にローム粒子・焼土粒子を中量含む締まった暗褐色土、中位に焼土粒子を多量、ローム粒子・炭化粒子を中量含む硬くよく締まったにぶい赤褐色土、下位に焼土粒子・焼土小ブロックを多量に含む硬くよく締まった赤褐色土、壁際にはローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含む締まった褐色土がそれぞれ堆積している。

土器は 11 点と少なく、早期の土器は出土していないが、本跡の時期は、遺構の形状からみて早期の条痕文土器群の時期と推定される。



第 194 图 炉穴出土土器拓影图

第5節 埋甕遺構と出土土器

第1号埋甕遺構（第195図）

本遺構は、第84号土坑の中央やや北西側に寄った位置に深鉢形土器の胴部が南西側に傾いて逆位に埋設されていたもので、土坑自体が浅く小規模である。埋設土器の南側に接して無文の小形深鉢形土器が3片ほどに割れて横位に出土している。埋設土器の支えとしたものかもしれない。その他の小片も周囲に散在している。埋設土器内には暗赤褐色、極暗赤褐色のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む締まった土が、土器外には暗褐色のローム粒子を含む締まった土が土器の両側に堆積している。掘り方としての土坑の大きさは長径90cm、短径86cmの略円形を呈し、最深部で20cm掘り込まれている。

第1号埋甕遺構出土土器（第197図1・2）

1は、埋設されていた深鉢形土器の胴部で、口縁部および底部を欠いている。残存部上半に粗い単節縄文LRを縦位を主に横位を従として回転施文し、一部で縦位羽状の効果をあげている。この縄文を地文として、棒状施文具による沈線で、垂下文と蛇行文を交互に3単位ずつ描き、垂下文は4条ずつ、蛇行文は両側を垂下文で囲まれている。底部に近い下半は縦ナデが加えられ、無文である。内面は上半横ナデ、下半縦ナデであるが、比較的雑である。下半部に炭化物が少量付着している。胎土は小石粒、砂粒を含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。最大胴部径28.4cmで、現存高20.8cmである。堀之内I式土器である。

2は、無文の小形深鉢形土器で、ほぼ完形である。円筒状を呈するが器体にやや歪みがあり、縦ナデにより整形されている。内面は、口縁直下だけ横ナデで、下位は縦ナデである。胎土は砂粒を多量に含み雑で、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。口径12.0cm、底径9.0cm、高さ19.5cmである。1と同時期と思われる、堀之内I式土器と判断される。

第2号埋甕遺構（第195図）

本遺構は、調査区の西側のL1d₀区の東端に検出され、深鉢形土器が北東方向に傾いて正位に埋設されていたもので、掘り方はごく小さく、土器の径にはほぼ一致している。埋設土器の下半部は良く残っているが、上半部にあたる口縁から胴部にかけての大破片2点は上下に重なって共に口縁を西方向にむけて表面を上にして土器の内部にそっくり入っていた。土器内の覆土最上位には暗褐色土、以下に褐色土が堆積し、共にローム粒子少量、炭化粒子微量を含んでいる。土器外にも褐色土がみられる。掘り方は長径30cm、短径28cmで、確認できた最深部で14cm掘り込まれている。

第2号埋甕遺構出土土器（第197図3・4）

3は、4の中に上下に重なって出土した大破片2点が接合したもので、深鉢形土器の上半部だけの半欠品である。4と同一個体と判断されるが、接合はできなかった。器面全体に単節縄文LRを横位回転で施文し、口唇部外面を斜めに削いでいる。内面は口縁直下が横ナデ、以下は斜方向の粗いナデが加えられている。胎土は砂粒と小石粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐灰色、内面が明褐灰色を呈する。口径20.5cm、現存高19.0cmである。器形および整形の手法などから堀之内I式土器と思われる。

4は、埋設されていた深鉢形土器で、底部から胴下半部にかけて残存している。遺存状態が悪いが、底部から外傾して立ちあがり、胴下半部でやや内湾する。文様は磨耗が著しいために不鮮明だが、単節縄文

LRが横位回転で施文されている。底面から約15cm程は無文で縦ナデが加えられている。内面も縦ナデにより整形されている。本土器は全体的に磨耗が著しく、詳しい観察はできない。胎土は砂粒を多量に含み、焼成も良く、色調はにぶい橙色を呈する。最大胴部径26.0cmで、現存高24.5cm、底径11.2cmである。

第3号埋甕遺構（第195図）

本遺構は、第2号埋甕遺構の北東約80cmの位置にあり、L1a1区の北西側にあたる。深鉢形土器の胴部が正位で東に傾いた状態で、小さな掘り込みの内部に埋設されている。掘り方は土器よりわずかに5～6cm大きい程度の長径40cm、短径36cmにすぎず、深さも確認できた最深部で16cmで、底面が少し東へ傾いている。土器内には黒褐色、暗褐色、褐色のローム粒子・炭化粒子を含む土がモザイク状に堆積し、人為的に埋められたことが推測される。

第3号埋甕遺構出土土器（第197図5）

5は、埋設土器で、口縁部無文帯を1条の斜位の刻み目を加えた紐線で区画し、以下に粗い単節縄文RLを横位回転で施文する深鉢形土器である。口縁部の大半と胴部以下を欠損しているが、下端部はきれいに打ち欠かれている。内面は丁寧な縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。現存部最大径は25.6cm、現存高24.5cmである。施文の特色からみて堀之内I式土器と思われる。拓本は5と同一個体と思われる口縁部片である。

第4号埋甕遺構（第195図）

本遺構は、調査区の西側のL2c1区の北東側に検出され、深鉢形土器の胴部のみが南東側へ大きく傾いて埋設されていたもので、掘り方はごく小さく、土器の下半部がやっと納まる程度で、上半部は外へ出てくる。土器内には上位にローム粒子・炭化粒子を含む締まった暗褐色土、下位に褐色土が堆積している。掘り方は長径24cm、短径21cmの不整楕円形を呈し、確認できた最深部で8cm程度掘り込まれている。

第2～4号埋甕遺構は、土器の上位がいずれも掘り方よりも上に出ており、本来の掘り方はより深かったことが推測される。

第4号埋甕遺構出土土器（第197図6）

6は、深鉢形土器の胴部のみで、上下端とも輪積み部分で丁寧に打ち欠かれており、意図的に欠いたものと思われる。全面に撚りの雑な短い原体の単節縄文LRが縦位回転で施文されている。内面は縦ナデが丁寧に施されており、残存部下端にわずかに炭化物が付着している。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。最大胴部径23.3cm、現存高20.6cmである。器形および施文の特徴からみて堀之内I式土器と思われる。

第5号埋甕遺構（第195図）

本遺構は、調査区の西側のL2b1区やや西寄りに位置し、胴下半部を欠損する深鉢形土器が逆位で伏せられたような状態で出土したものである。土層断面を切って観察してみたが明瞭な掘り方を検出することができなかった。土器の南々西約20cm離れて磨石1点が敲打の著しい部分を北西方向にむけて出土

しており、この南西側には土器片がやや散っている。土器内には上位にローム粒子少量、炭化粒子微量を含む褐色土が、下位にはソフトロームが堆積していた。土器内からの出土遺物はない。

第5号埋甕遺構出土土器（第197図7）

7は、逆位で出土した深鉢形土器で、胴下半部を欠いているが下端は比較的きれいに打ち欠かれている。上半部は完存し、口縁部に4か所のつまみあげたような小突起と無文帯を有し、微隆線でU字状、逆U字状のモチーフを交互に描き、モチーフ内に整った単節縄文RLを縦位回転で充填し、区画外は磨消して無文帯としている。微隆線は低平で、あまり明瞭ではない。U字状の区画のうちの1か所には刺突文が5つ付されている。内面上半部は横ナデ、以下は縦ナデが施されているが丁寧である。胎土は小石粒、砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。口径28.0cm、現存高15.8cmである。所謂加曾利EIV式土器である。

第6号埋甕遺構（第195図）

本遺構は、調査区の西側のL2b3区を中心とした位置に確認された第231号土坑の南東側の覆土中に位置し、深鉢形土器が口縁部を南東方向にむけて傾いた斜位の状態で見出されたものである。土坑のほぼ中央部の底面に長径20cm、短径14cm、厚さ6cmのハマグリを主とした小貝ブロックが検出されている。埋設土器の下面は底面より6～11cm程度浮いている。掘り方は径40cm、深さ20cm程度と考えられ、東から西方向へ斜めに穿たれたものと推定される。土器の内外ともにローム粒子少量、炭化粒子微量を含む暗褐色土が堆積している。土坑内からは埋設土器とほぼ同時期の堀之内I式期の土器片が出土している。土坑自体の大きさは、長径125cm、短径108cmの不整楕円形を呈し、29～33cm掘り込まれている。底面はロームで硬いが、やや凹凸がある。

第6号埋甕遺構出土土器（第198図8）

8は、斜位に埋設されていた深鉢形土器で、底部を欠くほかはほぼ完存し、上胴部で緩くくびれ、胴部がやや張る器形を呈している。口縁部に推定で5か所の小突起と無文帯を有し、以下全面に単節縄文LRを横位回転で施文し、その上に棒状工具による沈線で一筆描き状のモチーフと蕨手文を交互に施文しているが、そのうち1か所は文様の割り付けの失敗のためか幅が狭くなりすぎ、蕨手文が省略されている。小突起のうち1か所には1対の刺突文が加えられ、他には認められない。この部分を土器の正面と仮定すると、この右側の蕨手文が省略されたことになり、あるいは意図的な欠落とも考えられる。一筆描き状のモチーフは作者が右利きだとすると、下から上へ、左から右へ描いたと考えられ、後でモチーフの中央部に逆U字状文と刺突列を加えたと思われる。刺突文も下から突きあげるように施している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが丁寧に加えられている。全体的に大変に作りの良い土器である。胎土は砂粒と若干の小石粒を含み、焼成は良好である。色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。口径28.0cm、現存高33.8cmである。堀之内I式土器である。

第7号埋甕遺構（第195図）

本遺構は、第47号住居跡の南東壁をわずかに掘り込んで構築された掘り方内に深鉢形土器の胴部がやや北東方向に傾いた正位の状態で見出されたもので、出土状況からみて第47号住居跡に伴うものと

思われる。埋設された土器は、北東方向が比較的良く残り、南西側はごく少量しか残っていないが、一周している。掘り込み面は床面下 10～15 cm で、平均して 12 cm 程度である。壁の切り込みは 5～9 cm とごくわずかである。掘り方は長径 42 cm、短径 37 cm の不整形円形を呈している。土器内には上位には住居跡の覆土と同様の暗褐色土が、下位には褐色土が堆積し、いずれにもローム粒子を中量から少量、炭化粒子を微量含んでおり、締まっている。

第 7 号埋甕遺構出土土器 (第 198 図 9)

9 は、胴部のみが残存する深鉢形土器で、胴部中位でややくびれる。断面三角形を呈する微隆線で第 5 号埋甕遺構出土土器とほぼ同様の U 字状、逆 U 字状のモチーフを描き、モチーフ内に単節縄文 LR を密に縦位回転で充填している。一部には縦位の結節回転文も認められる。無文帯と内面は丁寧な縦ナデが加えられている。胎土は微砂を含むが緻密で、焼成も良好である。色調は外面がにぶい褐色、内面が橙色を呈する。最大胴部径 30.4 cm、現存高 22.0 cm である。文様からみると加曾利 EIV 式土器に近似するが、時期的には後期初頭まで降るものかもしれない。

第 8 号埋甕遺構 (第 195 図)

本遺構は、調査区の南東側の M4e8 区の西側に位置し、小形深鉢形土器が、ややくずれているがほぼ原形をとどめて正位に埋設されていたもので、その下部は掘り方の底面より 10 cm 程浮いている。埋設土器は掘り方のやや南側に偏しており、土器の上面と周囲には同一個体とそうではない個体の破片が散在している。掘り方の北側がやや攪乱を受けているが、土器の内外にはローム粒子少量、炭化粒子微量を含む締まった褐色土が堆積している。掘り方は、長径 58 cm、短径 52 cm の不整形円形を呈し、深さは 15 cm である。埋設土器の口縁上部は確認面より 5 cm 程度上に出ている。

第 8 号埋甕遺構出土土器 (第 198 図 10)

10 は、埋設されていた小形深鉢形土器で内湾の著しい器形を呈している。約半分を欠損しているが器形はうかがえる。内傾の著しい幅 1 cm 程の口縁部無文帯を有し、以下に単節縄文 RL を上 3 段は横位に、その後は斜位に回転しており、底部から 3 cm 程は無文としている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデを丁寧に施している。胎土は砂粒と若干の小石粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。推定口径 17.1 cm、底径 5.0 cm、器高 19.8 cm である。器形および施文手法からみて加曾利 EIV 式土器と思われる。

第 9 号埋甕遺構 (第 195 図)

本遺構は、調査区の北東側の L4a3 区の北側に確認され、深鉢形土器の胴部が正位に埋設されていたものと思われるが、土圧により上半部は折れて破片となり周囲に散っている。検出面は、表土除去後の褐色土からソフトロームへの漸移層中であり、他の単独埋甕もほぼ同様の層位で検出されている。土器内にはやや暗い褐色土がローム粒子少量、炭化粒子、焼土粒子を微量含んで堆積している。土器本来の掘り方は土器より 2～3 cm 大きい程度のもと思われる。掘り方は、長径 57 cm、短径 54 cm の略円形を呈し、最深部で 20 cm 掘り込まれているが、北西、北東方向にむかってなだらかに上っている。土器内からは何も検出されていない。

第 9 号埋甕遺構出土土器 (第 198 図 11)

11 は、ほぼ直線的に外傾する深鉢形土器の胴部で、ヘラ状工具による縦位の鋭い沈線が全面に施されている。胴下端はほぼ平坦になるように欠き取られている。内面は剝落が著しいため方向は不明瞭であるが、軽いナデが加えられている。胎土は小石粒、砂粒を含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈する。最大胴部径 24.7 cm、現存高 13.0 cm である。特色に乏しい土器のため明確な時期比定はできないが、中期後葉のものと思われる。

第 10 号埋甕遺構 (第 195 図)

本遺構は、第 352 号土坑内の北側に検出されたもので、口縁部と胴下半部を欠失する深鉢形土器が北西方向にやや傾いて正位で埋設されている。土器は破損が著しく、胴部が辛うじて北側を除いて周るほかは破片となり、土器内および周囲 20～40 cm ほどの範囲に散っている。掘り方は、長径 108 cm、短径 83 cm の西側に張り出しをもつ不整楕円形を呈しており、15～19 cm 掘り込まれている。しかし、土器は掘り込み面よりも 7～8 cm 上位に下端が位置していることから本来の掘り込みはより深く、第 352 号土坑の覆土中に構築されていたものと思われるが、検出できなかった。土器内の上位にはローム粒子少量、炭化粒子微量を含む締まった暗褐色土、下位には褐色土が堆積している。

第 10 号埋甕遺構出土土器 (第 198 図 12)

12 は、口縁部無文帯の一部と胴上半部が残存し、内傾する口縁部と大きく張り出す胴部を有する壺形に近い器形を呈する大形土器である。口縁部無文帯に 1 条の断面三角形の微隆線を巡らし、微隆線上の数か所には舌状の突起を付すものと思われるが、欠損している。胴部には全面に粗い単節縄文 LR が縦位回転を主に施文されており、微隆線直下の一部は横位、胴中位は斜位に回転されている。胎土は砂粒と若干の小石粒を含み、焼成は良好である。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が橙色を呈し、外面の一部には黒斑が認められる。最大胴部径 41.0 cm、現存高 23.0 cm である。器形および施文の特徴からみて後期初頭のものと思われる。

第 11 号埋甕遺構 (第 195 図)

本遺構は、第 12 号埋甕遺構とともに第 80 号住居跡の北東側の床面上に南北に並んで検出されたもので、第 12 号埋甕遺構の北側約 25 cm に位置している。土器は西から東方向へ斜めに掘り込まれた浅く小規模な掘り方内に傾斜に沿って口縁部を西にむけた横位の状態で埋設されている。埋設土器は底部も残り、遺存状態は良いが、土圧により上位は破損し、破片が中に落ち込んでいる。下半部は南北断面図のように完全に残っている。土器内には暗褐色土を主としているが、南側よりの下半部には褐色土が詰まっており、いずれもローム粒子少量、炭化粒子微量を含み、締まりが弱い。土器内からは特に遺物は出土しなかった。掘り方は明瞭には検出できなかったが、径 50 cm ほどの東側がやや広がる不整円形を呈するものと思われ、西側の最深部で 21 cm 掘り込まれている。

第 11 号埋甕遺構出土土器 (第 198 図 13)

13 は、復元したところ胴上部でくびれる深鉢形土器で、口縁部は外反することが判明したが、口縁部は接合できなかった。文様は棒状工具でしの字状、逆しの字状のモチーフを組みあわせて描き、モチーフ

内に単節縄文 LR を充填し、区画外は丁寧な縦ナデにより無文化している。また、底部近く 10 cm 程度は同様に無文としている。口縁部片には 7 の字状、スベード文などが描かれている。内面上半部は横ナデ、底部から 16 cm ほど上で輪積み部分が認められるが、この部分より下位は縦ナデが施されている。整形方向の違いからみて、この部分で一旦整形を中断し、少し乾燥してから接合したと想定される。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。最大胴部径 32.8 cm、底径 8.8 cm、現存高 39.0 cm である。称名寺式土器である。

第 12 号埋甕遺構 (第 195 図)

本遺構は、第 11 号埋甕遺構の南側約 25 cm に位置し、床面を浅く小規模に掘り込んだ掘り方内にやや西に傾いた正位に深鉢形土器が埋設されている。掘り方は南西側が浅く不明瞭となるが、推定で長径 41 cm、短径 33 cm の楕円形を呈し、北東側でやや深く 11 cm 掘り込まれ、南西側にむかってなだらかに上がっている。土器内にはローム粒子少量、炭化粒子微量を含む暗褐色土が上位に、褐色土が下位に認められ、土器外には内部よりやや明るい褐色土が堆積している。土器の上部は確認面より 10 cm ほど上に出ている。第 11・12 号埋甕遺構は、その出土状態からみて第 80 号住居跡に伴うものと考えられる。

第 12 号埋甕遺構出土土器 (第 199 図 14)

14 は、胴部でややくびれる深鉢形土器で、口縁部を欠くかはほぼ完存している。器面全体に単節縄文 LR が縦位、斜位、横位の回転により施文されており、底部から 2 cm 程だけが横ナデにより無文となっている。内面上半は横ナデ、下半は横ナデの上に軽い縦ナデが重ねられている。器面の一部は磨耗により剥落している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈しており、部分的に黒斑が認められる。最大胴部径 26.3 cm、底径 9.0 cm、現存高 31.8 cm である。器形および施文の特徴からみて称名寺式土器と考えられる。

第 13 号埋甕遺構 (第 196 図)

本遺構は、調査区の北側の K3i2 区の南東側に検出され、底部を欠く深鉢形土器がやや大きめの掘り方のほぼ中央部に逆位に埋設されたものと思われるが、北側からの土圧を受けて口縁が中へ入り込むなどかなり原形を失っており、破片が折り重なった状態で出土している。土器の下面は掘り方の底面から 11 cm ほど浮いており、土器は掘り方のかなり上部に埋設されたものと思われる。覆土は、上位が暗褐色土、下位が褐色土が主となり、ローム粒子少量、炭化粒子微量を含んでいる。掘り方は、長径 78 cm、短径 73 cm の不整形円形を呈し、最深部で 22 cm 掘り込まれている。底面は平坦ではなく陥状をなし、壁も緩やかに立ちあがっている。本遺構は、第 79 号住居跡の推定範囲内の西端に位置するが、住居跡に伴うか否かは判断できなかった。

第 13 号埋甕遺構出土土器 (第 199 図 15)

15 は、口縁部がほぼ直立し、胴部が張る器形の深鉢形土器で、胴下半部以下を欠いている。口縁直下に 1 条の沈線を巡らし、以下に縦位、斜位に櫛歯状施文具による蛇行文を全面に描くが、胴下半部は無文のまま残されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが比較的丁寧に施されている。胎土は粗砂を多量に含み、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。口径 28.2 cm、現存高 28.4 cm である。器形および施

文の特徴からみて後期前葉のものと思われる。

第 14 号埋甕遺構 (第 196 図)

本遺構は、調査区の西側の L2a4 区の西側に検出され、鉢形土器が口縁部を北東方向にむけた横位の状態で、浅い掘り方内に埋設されている。本遺構は、第 105 号土坑と東端で重複しているが、新旧関係は不明である。土器は下半部が良く残っているが、上半部は土圧により破片となって内側に落ち込んだり、周囲に散っている。掘り方は、長径 64 cm、短径 59 cm の不整楕円形を呈し、底面が 2 段に掘り込まれ最深部で 15 cm、他の部分で 9 ~ 14 cm を測る。掘り方内の覆土は、ローム粒子中量、炭化粒子少量を含む暗褐色土で締まっており、土器内の土もほぼ同様であるが、ローム粒子の量が少ない。

第 14 号埋甕遺構出土土器 (第 199 図 16)

16 は、口縁部の一部と以下は約半周を残す鉢形土器で、口唇部は薄くやや尖り気味に作出されている。胴部がやや張り、全体に凹凸があり作りは良くない。口縁直下から単節縄文 LR が横位回転で、施文され、底部から 7 cm ほどは無文のまま残されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデにより調整されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面にがぶい褐色を呈する。推定口径 24.2 cm、底径 8.5 cm、器高 22.0 cm である。器形および施文の特徴からみて後期前葉、堀之内 I 式土器と思われる。

第 15 号埋甕遺構 (第 196 図)

本遺構は、第 14 号埋甕遺構の西南西 1.5 m に位置しており、L2a3 区のはぼ中央部にあたる。深鉢形土器が逆位に埋設されていたために埋甕遺構と把握して調査を進めた。その結果は土器埋設炉と考えた方が妥当かと思われたが、埋甕遺構として調査を進めたため、本項で記載する。土器が 3 個体認められ、いずれも縄文のみが施されている。土器は 2 重ないし 3 重に廻っており、外側の土器は壁側を向いている。土器に囲まれた内側には焼土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子を中量から少量、灰を多量から少量含む締まりの弱いにがぶい赤褐色土、暗赤褐色土が堆積し、土器外には焼土粒子を多量に含む締まりの弱い土層が堆積している。土器内の下部の灰層の中には焼けたハマグリや骨片が若干含まれている。掘り方の壁、底ともにきわめて良く焼けており、赤化が著しく、底面には凹凸があり、ロームが硬化しボロボロしている。壁はロームブロックが多量に浮き出しており、やや赤味を帯びて焼けている。また、土器の真下の底面の南側に深さ 18 cm の小ピットを有するが、このピットの壁面もかなり下まで焼けている。掘り方は、長軸 115 cm、短軸 100 cm の不整長方形を呈し、ピットを除く最深部で 35 cm 程度掘り込まれている。本遺構は、住居跡に伴う炉の可能性もあり、屋外炉と断定することはできなかった。

第 15 号埋甕遺構出土土器 (第 199 図 17 ~ 19)

17 は、内側に廻っていた大破片を主として復元された深鉢形土器で、胴下半部以下を欠くが直線的に外傾している。器面全体にやや太目の粗い単節縄文 LR が横位回転で施文されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが加えられている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は全体的にみると橙色を呈するが、灰褐色の部分もある。推定口径 32.0 cm、現存高 26.0 cm である。器形および施文の特徴からみて堀之内式土器と思われる。

18も同様な深鉢形土器の破片で、縄文はLR、内面の整形は上半横ナデ、下半縦ナデである。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

19は、外反する深鉢形土器で、にぶい赤褐色を呈する。その他は17と同様である。

第16号埋甕遺構（第196図）

本遺構は、調査区の北側のK3h2区の北東側に位置し、深鉢形土器の胴下半部がわずかに南側に傾いてほぼ正位に埋設されていたものである。土器は小さく割れて約1mの範囲内に散っていたが、別個体の破片も若干混在している。掘り方は、長径55cm、短径49cmの楕円形を呈し、最深部で14cm掘り込まれ、西側にむかって上がっている。しかし、土層断面図からみると本来の掘り方は、径40cm程度と考えられ、深さは確認面から10cmであったが、土器の高さから判断すればより深かったことが推測される。覆土は、ローム粒子少量、炭化粒子微量を含む暗褐色土で締まりが弱い。

第16号埋甕遺構出土土器（第199図20）

20は、深鉢形土器の胴下半部で、底部をわずかに残している。残存部の上端に単節縄文RLを斜位、縦位に回転した縄文が認められるが、磨滅や縦位のナデにより消えかかっている不鮮明である。内外面とも縦ナデが加えられている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明黄褐色を呈する。最大胴部径25.8cm、現存高20.3cmである。残存部が少ないため詳しい時期は不明だが、中期後葉のものと思われる。

第17号埋甕遺構（第196図）

本遺構は、調査区の中央やや北側のM2b8区の西側に検出され、口縁部を欠損する大形深鉢形土器がほぼ正位に埋設されたものであるが、東側よりの土圧を受けて西側に若干傾いている。また、上半部は小さく割れて土器の内側および周りに散っているが、この中には別個体の破片も混じっている。土器内にはローム粒子少量、炭化粒子微量を含む暗褐色土が主に堆積し、土器外には褐色土が認められる。掘り方は明瞭には把えられなかったが、径65cmの円形をなすものと思われ、北側がやや深く22cmで、南側にむかって徐々に浅くなるが、土器の遺存状態からみると28cm以上の深さがあったものと考えられる。土器内からは何も出土していない。

第17号埋甕遺構出土土器（第199図21）

21は、胴部でゆるくくびれる大形深鉢形土器で、底部は小さい。口縁部文様帯は両側にナゾリを加えた細く低平な隆線で弧状に区画され、胴部は縦位の縄文帯と磨消帯を交互に垂下させている。区画の沈線は太く浅い。縄文は単節RLで、口縁部文様帯の内外は斜位回転を主とし、縦位回転の個所もあり、条が縦走、横走している。胴部の区画内は縦位回転を基本とし、斜位回転する個所もある。磨消帯の幅は広く、8～10cm前後で6単位である。破損面の上端には輪積み強化用の刻み目がいくつか認められる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈するが、部分的に黒斑がある。最大胴部径56.4cm、底径8.4cm、現存高58.8cmである。器形および施文の特徴からみて加曾利EⅢ式土器と判断できる。

第 18 号埋甕遺構（第 196 図）

本遺構は、調査区の南側の M3j3 区の北東側に位置し、深鉢形土器の胴部がほぼ正位で埋設されているものである。土器は小さく割れていたが胴部は一周する。土器の東側に接して自然石が 1 点出土しているが、その意味は不明である。掘り方は長径 52 cm、短径 47 cm の不整形円形を呈し、中央部の上位は暗褐色土、下位と壁寄りには褐色土が主に堆積し、ローム粒子を中量から少量、炭化粒子を微量含み締まりがある。土器の内外とも特に変化はなく、内部から遺物は出土していない。

第 18 号埋甕遺構出土土器（第 199 図 22）

22 は、口縁部および胴下半部以下を欠く深鉢形土器で、胴部中位でゆるくくびれ口縁部にむかって内湾する。細く鋭い沈線で V 字状、逆 V 字状のモチーフを上下に入り組むように 9 単位ずつ施文し、モチーフ内に単節縄文 LR を縦位回転で充填している。外面には炭化物の付着が著しい。内面は丁寧な横ナデが加えられている。胎土は微砂を含むが緻密で、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。最大胴部径 27.0 cm、現存高 18.0 cm である。器形および施文の特徴からみて加曾利 EIV 式土器と判断される。

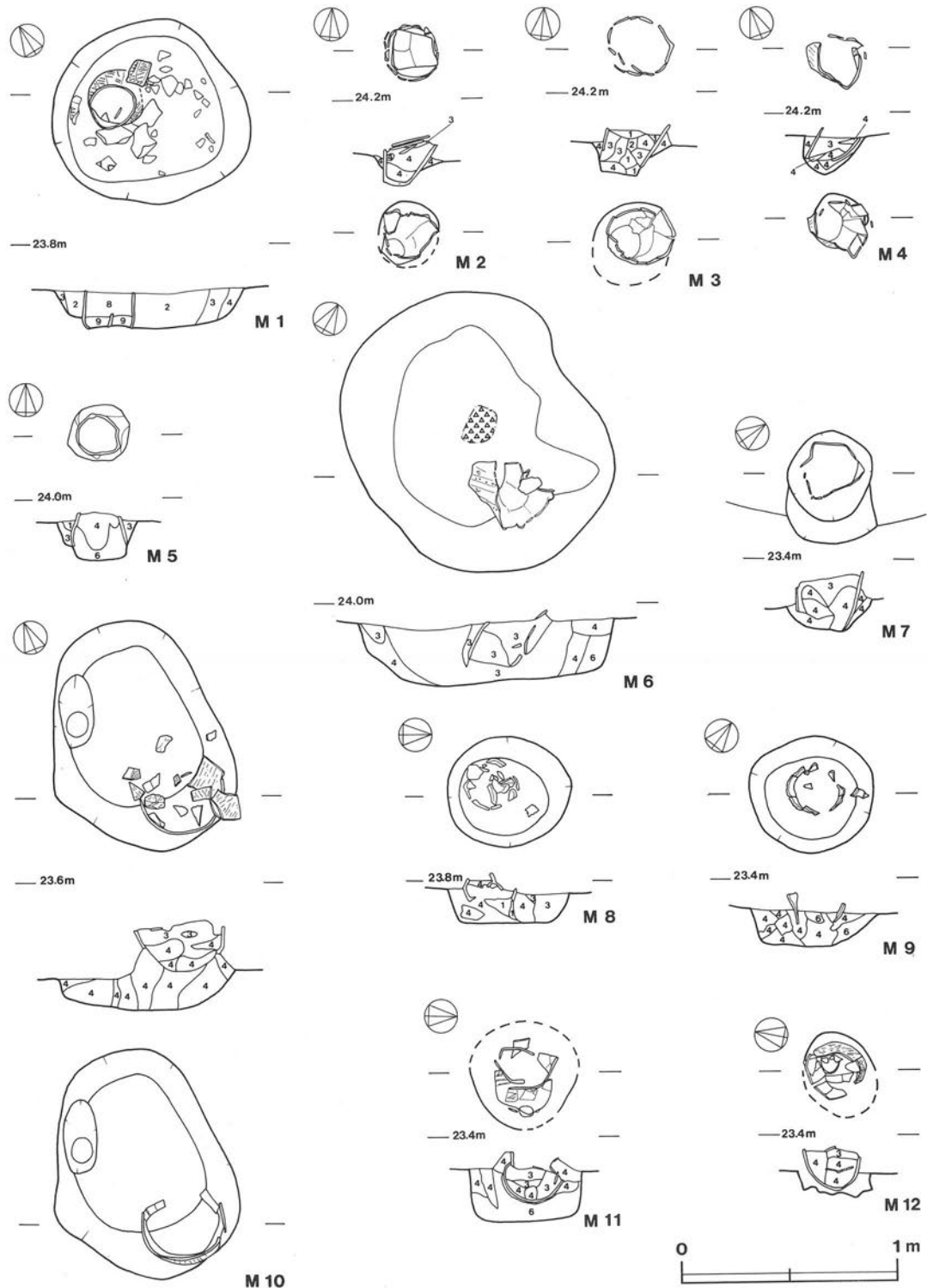
第 6 節 その他の遺構

第 1 号性格不明遺構（第 145 図）

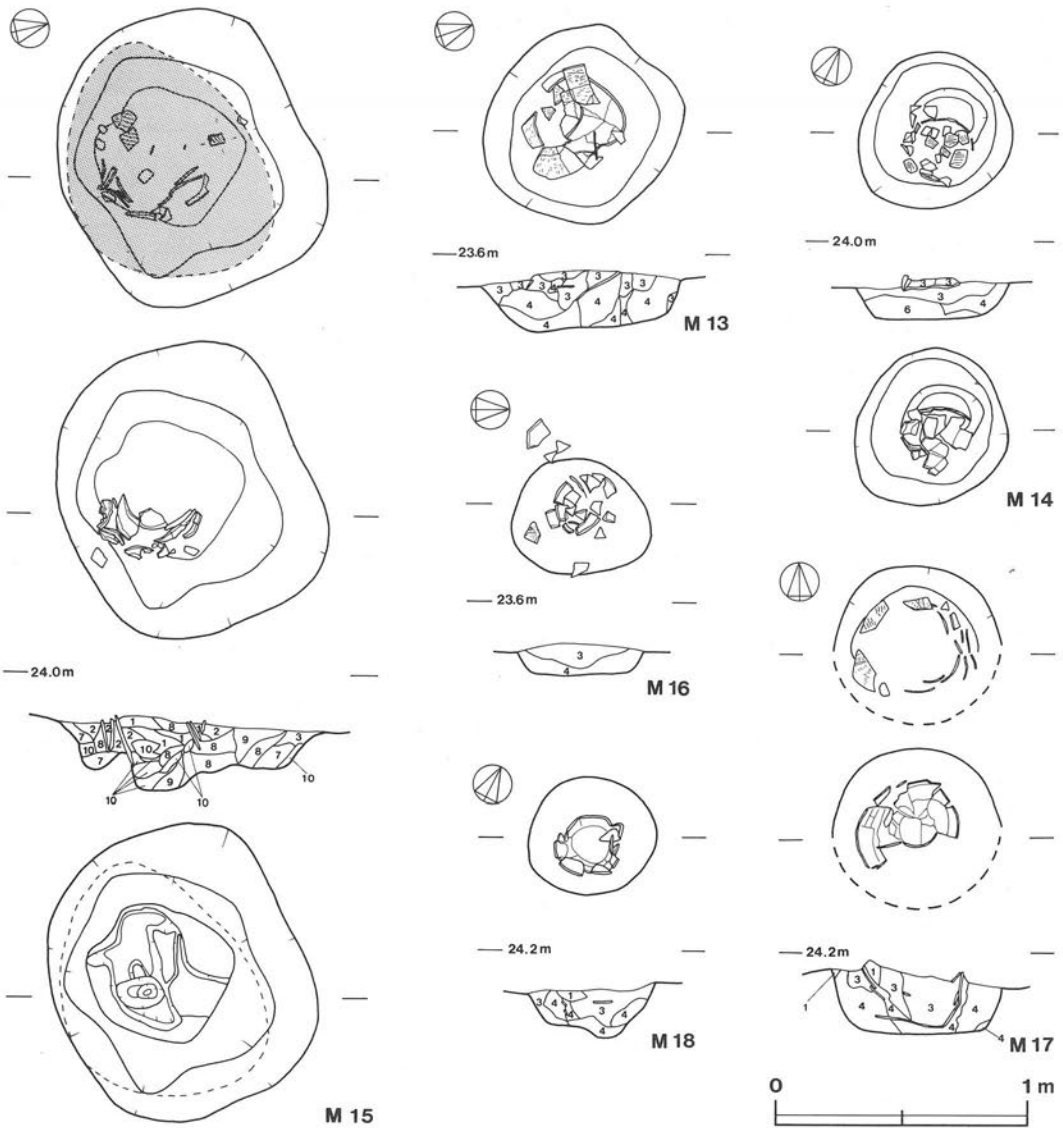
本跡は、調査区の北側の K2j3 区を中心とした位置にあり、東側で第 92・95・120・121 号土坑、南西側で第 463 号土坑とそれぞれ重複しているが、第 463 号土坑以外との新旧関係は不明である。また、北側には第 91・93 号土坑が隣接している。平面形は不整な弧状を呈し、最大長 500 cm、最大幅 168 cm を測り、最深部で 55 cm 掘り込まれている。壁はロームで南・南西側は外傾して立ちあがっているが、北・西側は傾斜がきつい。東側は各土坑との重複により不明となっている。また、西側の壁は中位から西側にむけて抉り込まれ、北西側の壁も第 91 号土坑につながるように抉り込まれ、トンネル状を呈している。底面は中央部が凹み、周壁にむかって上る傾向を示すが、凹凸が激しい。

覆土は他土坑との重複が著しいために充分には観察できなかったが、上位に黒褐色土、下位に暗褐色土、壁際に褐色土が堆積する傾向が認められ、ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を中量から少量含み締まっている。下位の暗褐色土には更にローム小ブロックを含む。

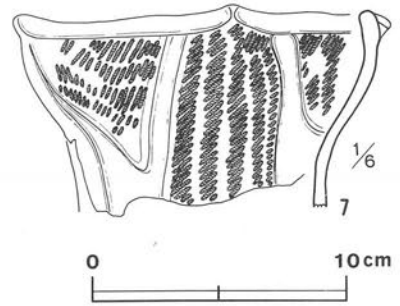
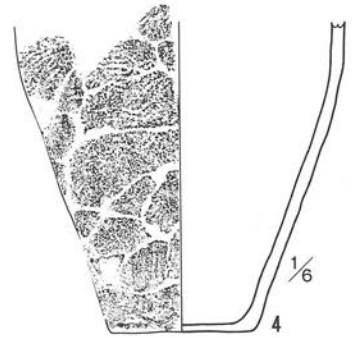
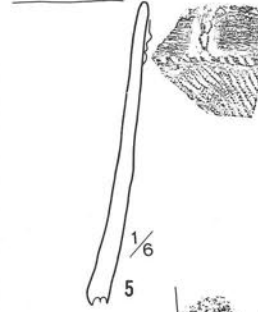
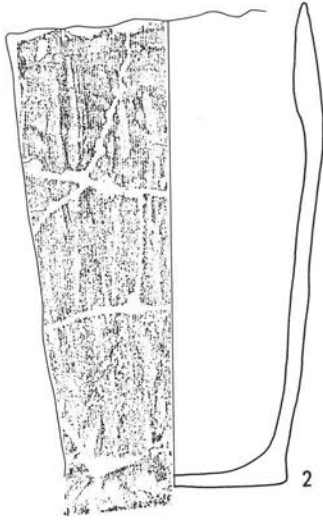
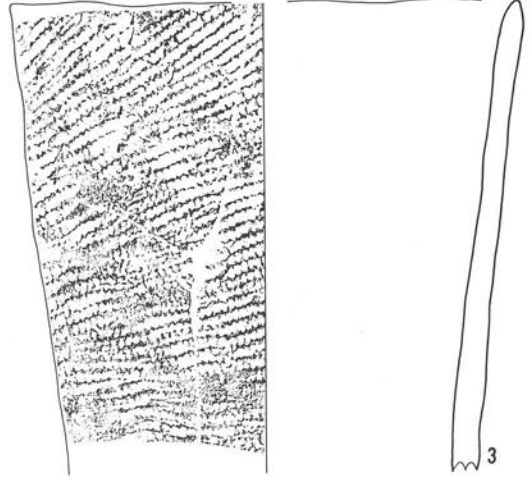
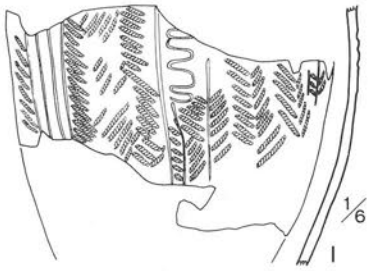
遺物は本跡の範囲内より多量に出土し、全体で約 1,000 点にもおよぶが、そのほとんどは第 92・95 号土坑の出土土器として扱っている。本跡に明瞭に伴うと思われる土器は、弧状を呈する本跡の西側の屈折部の壁寄りの覆土中からまとまって出土した 27 点だけである。これらの土器は堀之内 I 式土器である。また、重複ないしは隣接する他遺構からの出土土器も堀之内 I 式土器である。このことから本跡の時期は、堀之内 I 式期と考えられる。本跡の性格については、形状が不定形であることなどから推定すれば、当時の遺物捨て場のようなものと考えておきたい。



第 195 図 埋甕遺構実測図(1)



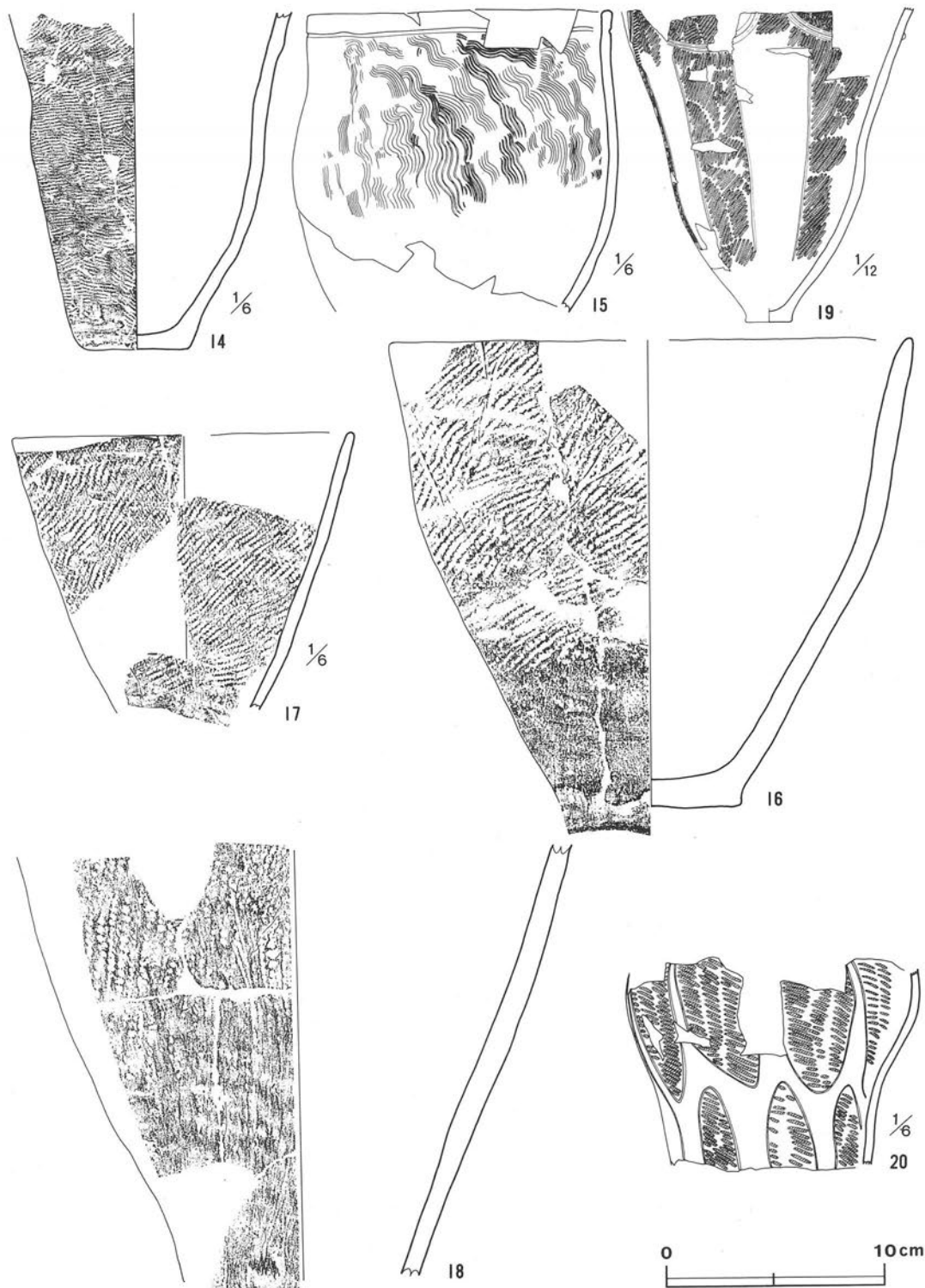
第 196 図 埋甕遺構実測図(2)



第 197 图 埋甕遺構出土土器実測图(1)



第 198 图 埋甕遺構出土土器実測図(2)



第 199 図 埋甕遺構出土土器実測図(3)

第7節 貝塚と魚骨層

1 貝塚

当遺跡3・4区からは縄文時代中・後期の所産と考えられる貝塚が、ごく小規模なブロック的なものを含めて3区で25か所、4区で3か所の合計28か所が検出されている。いずれも住居跡および土坑の覆土に堆積していたものである。3区では第34号住居跡出土の貝塚（ブロック的なものも含めて本稿ではこう呼ぶ）が最も規模が大きく、貝類の量も多い。これに次いで第86号住居跡・第139・200・326号土坑などからも多量に出土している。4区では第5号住居跡が目立つのみで、他の2か所はごく少ない。貝塚の形成時期は、加曾利EⅢ式期から堀之内I式期にわたるが、加曾利EⅢ式期の例と堀之内I式期の例が多く、中間の加曾利EⅣ式期や称名寺I式期と断定できる貝塚は検出されていない。貝塚のほとんどはハマグリを主とするもので、シオフキ、サルボウ、ヒメシラトリガイなどがこれに次いでいる。この中で3区の第404号土坑、4区の第3号住居跡はヤマトシジミが目立っており、特異である。貝類以外の自然遺物は第34号住居跡を中心に出土しており、その他の貝塚からはごく少量検出されているにすぎない。3区の第3号住居跡、4区の第5号住居跡からは共に甲殻類のカニの遺骸が出土している。特に後者の出土例はシオフキの殻の中に閉じ込められた状態にあり、合貝をこじあけたところ出現したものである。

調査の方法は、規模の大きなものは16区画に分割したが、他の小規模なものについては小ブロックに分け、半截するなどの方法によった。更に小規模のブロック的なものは一括して取り上げた。整理の方法は、当遺跡6区の方法に準じた。

貝種は、海産種・淡水産種・陸産種あわせて31種におよび、斧足綱16種、腹足綱14種、掘足綱1種である。

斧足綱

サルボウ	<i>Anadara (Scapharca) subcrenata</i> (LICHKE)
ベンケイガイ	<i>Glycymeris albolineata</i> (DUNKER)
ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i> PHILIPPI
イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i> LISCHKE
マガキ	<i>Grassostrea gigas</i> (THUNBERG)
ヤマトシジミ	<i>Corbiculina (Corbiculina) leana</i> (PRIME)
アサリ	<i>Tapes (Amyodala) japonica</i> (DESHAYES)
オキシジミ	<i>Cyclina orientis</i> (SOWERBY)
カガミガイ	<i>Dosinorbis (Phacosoma) japonicus</i> (REEVE)
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (RÖDING)
ミルクイ	<i>Tresus keemae</i> (KURODA et HABE)
シオフキ	<i>Mactra veneriformis reeve</i> (REEVE)
サビシラトリガイ	<i>Macoma contabulata</i> (DESHAYES)
ヒメシラトリガイ	<i>Macoma incougrura</i> (MARTENS)
マテガイ	<i>Solen strictus</i> (GOULD)
オオノガイ	<i>Mya (Arenomiya) arenaria oonogai</i> (MAKIYAMA)

腹足綱

ウノアシガイ	<i>Patelloida (Collisellina) saccharina</i> (LINNE)
イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> (LAMARCK)
カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i> (PHILIPPI)
カワアイ	<i>Cerithideopsilla djadjariensis</i> (MARTIN)
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE)
ツメタガイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i> (RÖDING)
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i> (VAIENCIENNES)
イボニシ	<i>Thaistvmulosa clavigera</i> (KÜSTER)
ムギガイ	<i>Mitrella bicincta</i> (GOULD)
アラムシロ	<i>Nassairus testivus</i> (POWYS)
バイ	<i>Babylonia japonica</i> (REEVE)

腹足綱 — 陸産種

ナミギセル	<i>Stereophaedusa japonica</i> (CROSSE)
オカチョウジガイ	<i>Allopeas kyotoensis</i> (HIRASE)
ヒダリマキマイマイ	<i>Euhadra guaesita</i> (DESHAYES)

掘足綱

ツノガイ	<i>Antalis weinkauffi</i> (DUNKER)
------	------------------------------------

貝種を当遺跡1・2区の報告, 6・7区の報告, 5区の報告と比較すると以下のような差異が指摘できる。斧足綱では, 1・2区では14種, 6・7区では11種, 5区では13種が検出され, 今回の3・4区の16種よりはいずれも少ない。1・2区ではベンケイガイ, イタボガキ, マガキ, ミルクイ, サビシラトリガイの5種が欠落し, 代わりにイタヤガイ, マツカサガイ, マルサルボウの3種が検出されている。6・7区ではベンケイガイ, イタボガキ, マガキ, カガミガイ, ミルクイ, サビシラトリガイの6種が欠落し, 代わりにマツカサガイ1種が検出されている。5区ではイタボガキ, マガキ, ミルクイ, マテガイの4種が欠落し, 代わりにインガイ1種が検出されている。以上のように各区の貝種をみても, 共通するものが多く, 相異なるものはごく少数の検出にとどまっている。3・4区だけに検出されたイタボガキ, マガキ, ミルクイ3種のうちイタボガキ, ミルクイの2種は貝輪あるいはその他の貝製品の素材または未製品と考えられるもので搬入品と考えられる。3・5区から検出されているベンケイガイは貝輪として加工されており, カガミガイの一部は貝刃として利用されている。

腹足綱では, 1・2区で10種, 6・7区で9種, 5区で13種検出され, 今回の3・4区での14種よりはいずれも少ない。各区の貝種はほぼ共通するが, 5区で検出された, イボキサゴ, イボウミニナ, ヒロクチカノコガイ, 今回の3・4区で検出されたウノアシガイ, ツメタガイ, バイはいずれも非常に少ない。特に目立つのはウノアシガイ3点で, いずれも垂飾として加工されている。

掘足綱のツノガイも今回が初検出で, 装飾品として加工されたものである。

当遺跡1・2区では検出された貝種については, その形態的特徴や生息環境等に関して1・2区の報告

書に詳細に記されているので、その後明らかとなった貝種について若干の説明を加えておきたい。なお、この記載については、波部忠重、小菅貞男共著の『標準原色図鑑全集3 貝』（保育社1967）を参考とした。

ベンケイガイ（タマキガイ科）

殻は横長の楕円形で厚く、色は黄褐色を呈し、後部は色が濃くなる。房総～九州の水深5～20mの砂底に生息する。殻質が厚く、貝輪として利用される例が多い。後期に入って急増するとされ、当遺跡の例も後期前葉に属する。

イタボガキ（イタボガキ科）

殻形は不規則であるが、殻長に細かい放射肋と楡皮状の成長脈がある。内面のじん帯の両側に細かい刻みがある。本州以南や中国大陸の内海や内湾の浅海の岩や小石に着生する。カキの仲間では殻が厚く、貝輪にも利用されている。

マガキ（イタボガキ科）

殻形は一定しておらず、殻長の成長脈はひれ状に荒く、黄白色で紫色の縞ができる。樺太以南・中国大陸・東南アジアの内湾などの比較的塩分の低い潮間帯の岩礁に付着している。

ミルクイ（バカガイ科）

殻はふくらみ厚く、後端が大きく開いている。北海道～九州の内湾の泥底に生息する。殻質が厚いので、加工品とされることもある。

サビシラトリガイ（ニッコウガイ科）

左右の両殻ともヒメシラトリガイなど同属の種のように、後方のひだでねじれない点で異なる。陸奥湾～九州、中国大陸の内湾奥の泥底に一般に生息する。

ウノアシガイ（ユキノカサガイ科）

殻は通常7本の著しい放射肋が出て、星状を呈する。日本産の個体は一般に殻が薄い。いろいろの加工品に用いられ、3区の第34号住居跡から出土した3点も環状垂飾として貴重な例である。

イボキサゴ（ニシキウズガイ科）

キサゴに似ているが、縫合の下の広い肋には結節ができています。また、臍盤は殻径の半分より大きく、この点がキサゴとの区別点である。殻長の模様は変異が大きい。北海道南部以南に分布し、潮間帯の砂底に多く産する。キサゴとともに千葉市加曽利貝塚では多出している。

ヒロクチカノコガイ（アマオブネガイ科）

殻頂は高まらず、殻口は広く、内唇は広がるので殻は全体として横長の形状を呈する。紀伊以南の汽水域に通常生息する。

イボウミニナ（ウミニナ科）

殻は細長く、螺肋は細くて離れ、縦肋により、いぼ状となる。体層の底面では弱まる。殻口の外唇は前方へ湾曲する。北海道南部以南の潮間帯に分布し、砂泥底に生息する。

ツメタガイ（タマガイ科）

殻は褐色で、殻底は白い。臍は大きく深いが、臍盤も大きく突き出て、溝で2分され、黒褐色を呈する。北海道以南の潮間帯下の細砂底に生息する。

バイ（エゾバイ科）

殻表に紫褐色の斑を有する。北海道南部～九州の潮間帯より20mの砂底に生息する。

魚・鳥・獣類については、各住居跡・土坑の貝層中から検出された遺物に大雑把に目を通した程度であり、整理期間等の制約により十分な分類・抽出および同定・分析作業を実施することができなかった。このため、辛うじて種類が判明したにすぎず、出土遺存体の部位別の出土量などは不明である。今後の検討を待ちたい。

各遺構ごとに判明した種名は、貝塚一覧表に記載した。

以下、各住居跡および土坑の貝類組成、殻長などの成育状況、およびその他の自然遺物等について個別に記していく。なお、各貝塚の検出状況などについては、各遺構の項を参照していただきたい。

3区

第3号住居跡内貝塚

本貝塚は、住居跡内の覆土中の中央部から北西側にかけて形成されており、a～eの5つのブロックに分けられる。bブロックの大半は、第123号土坑の覆土上位に堆積しているために第123号土坑内貝塚として扱い、別項で記載する。貝は遺物収納ケースで2箱分あるが、ここでは南東端に位置するeブロックの貝をもって本貝塚の概要を報告する。

eブロックは、ハマグリ、サルボウ、シオフキ、ナミマガシワ、アカニシの5種から成り、ハマグリ、サルボウが主体を占めている。ハマグリは124点あるが、計測不能の個体が多く、最大殻長54mm、最小28mmで、28～45mmの間の個体が主である。サルボウは111点で、そのうち75点を計測したが、殻長25～40mmの間の個体が多くを占め、特に26～35mmの個体が大半である。最大殻長48mm、最小22mmである。ナミマガシワは3点と少なく、殻長が15・18・26mmで小形のものである。シオフキは2点でいずれも計測不能である。アカニシは2点で、殻高43・45mmである。

その他の貝ブロックもeとほぼ同様であり、特に目立った変化はない。本貝塚は、貝層中の出土土器からみて加曽利EⅢ式期の形成にかかるもので、ハマグリ、サルボウを主体とする純鹹貝塚である。なお、eブロックの下面から鳥骨片が出土している。

第34号住居跡内貝塚

本貝塚は、住居跡内の覆土の中央部を盛り上って覆うように堆積していたもので、当遺跡3・4区では最大の貝塚である。貝やその他の自然遺物は遺物収納ケースに124箱分ときわめて多量で、そのすべてについて詳細に点検することはできなかった。本稿では抽出できた貝および自然遺物の概要にふれるにとどめる。貝塚は、全体としては最大長4.3m、最大幅2.3mの不整長方形に広がっている。a～gの7つのブロックに分割したが、そのうちa, b, d, eブロックは比較的規模が大きく、c, f, gブロックは小規模である。前者の代表としてa, d各ブロックの一部を、後者の代表としてfブロックの一部を抽出して計測した。ほぼこれらの貝ブロックの様相が本貝塚全体のあり方を表わすものと考えられる。

aブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、オオノガイ、アサリ、ヤマトシジミ、ナミマガシワ、ウミニナ、カワニナ、アラムシロ、アカニシの11種から成り、ハマグリが主体を占め、シオフキがこれに次いでいる。ハマグリは170点あり、計測したものは105点である。殻長21～55mmの個体が主となるが、特に26～35mmのやや小形の個体が多い。最大殻長75mm、最小19mmである。シオフキは54点あるが、計測し得たものは19点と少ない。殻長36～40mmの個体が目立ち、最大殻長47mm、

最小 28 mm を測り、成育状況はやや良い。サルボウは 32 点あり、計測したものは 25 点である。殻長 26 ~ 45 mm の個体が主であり、特に 36 ~ 40 mm の個体が多い。オオノガイ、アサリは各 3 点ずつで計測不能である。ヤマトシジミは殻長 18 mm と小さな右殻 1 点だけである。ナミマガシワは 3 点あり、殻長 32 mm の右殻 1 点だけが計測できた。ウミニナは 2 点で、殻高 35 mm の個体が計測された。アラムシロは 1 点だけで殻高 18 mm を測る。カワニナ 2 点、アカニシ 1 点は計測不能である。

d ブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、ナミマガシワ、アサリ、ヤマトシジミ、ヒメシラトリガイ、オオノガイ、カガミガイ、カワニナ、ウミニナ、アラムシロの 12 種から成り、ハマグリ、シオフキが主体を占める点は a ブロックと同様であるが、シオフキがハマグリよりも多いブロックもあり、貝層内でも差が認められる。ハマグリは 543 点あり、計測したものは 311 点で、殻長 26 ~ 45 mm の個体が主となり、特に 31 ~ 40 mm の個体が多い。最大殻長 65 mm、最小 22 mm である。シオフキは 552 点あるが、計測不能の個体が多く計測し得たのは 190 点である。殻長 31 ~ 45 mm の個体が主となり、特に 36 ~ 40 mm の個体が目立ち、ハマグリよりもやや大き目である。最大殻長 47 mm、最小 26 mm である。サルボウは 102 点あり、そのうち 88 点を計測したところ、殻長 36 ~ 45 mm の個体が多くを占め、最大殻長 53 mm、最小 23 mm を測った。ナミマガシワは 11 点で、計測し得たのは 7 点である。最大殻長 39 mm、最小 18 mm である。アサリは 5 点で、殻長 25・27 mm の 2 点が計測された。ヤマトシジミは殻長 24 mm の左殻 1 点だけである。ヒメシラトリガイは 42 点あるが、殻が薄く破損したものが多いため、計測できたものは 22・31 mm の殻長を有する 2 点にすぎない。オオノガイ 2 点、カガミガイ 1 点はともに計測不能である。カワニナは 2 点で、1 点は殻高 14 mm を測る。ウミニナも 2 点で、1 点は殻高 27 mm を測る。アラムシロは 2 点で、1 点は殻高 20 mm を測る。

f ブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、ヒメシラトリガイ、ナミマガシワの 5 種から成り、シオフキが主体を占め、ハマグリがこれに次いでいる。ハマグリは 48 点あり、24 点が計測できた。殻長 36 ~ 40 mm の個体が多く、最大殻長 68 mm、最小 25 mm である。シオフキは 138 点あり、49 点が計測可能で、殻長 31 ~ 40 mm の個体が主となり、特に 36 ~ 40 mm の個体が多い。最大殻長 43 mm、最小 25 mm と比較的揃っている。サルボウは 13 点で、12 点を計測したところ、最大殻長 41 mm、最小 23 mm で、やや小さ目である。ヒメシラトリガイは 5 点で、4 点の計測値は 19・21・25・27 mm で、殻長の平均は 23 mm である。ナミマガシワは計測不能の個体 1 点だけである。

なお、その後の貝類の選別中にイボキサゴとウバガイが a ブロックから検出されたので付記する。また、貝層中からイノシシ、シカの獣骨および鳥骨とクロダイ、スズキ、コチ、フグなどの魚骨が出土している。全体としては鳥獣骨が少なく、魚骨が多い傾向が指摘される。

本貝塚は、貝層中出土の土器から判断して堀之内 I 式期に形成されたもので、ハマグリ、シオフキを主とする純鹹貝塚であり、ごく微量の汽水産のヤマトシジミを含んでいる。

第 69 号住居跡内貝塚

本貝塚は、住居跡の中央部から南および西側にかけて堆積していたもので、北側、南側、西側の順に a ~ h ブロックとした。このうち d ブロックはやや規模が大きいので、土層断面を観察しながら取り上げ、その他は一括して取りあげた。貝は遺物収納ケースに 5 箱分ある。このため、d ブロックの他に c, e, h ブロックの一部を抽出して計測した。

c ブロックは、ハマグリ、サルボウ、シオフキ、ウミニナの 4 種から成り、ハマグリが圧倒的多数を占

めている。ハマグリは146点あり、96点を計測した。殻長20～35mmの個体が主となり、特に20～25mmの小形の個体が多い。最大殻長77mm、最小18mmを測る。サルボウは6点で、殻長26・29・36mmの3点だけが計測できた。シオフキは12点、ウミニナは4点あるが、いずれも計測不能である。

eブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、ウミニナ、アカニシの5種から成り、ハマグリが主体を占め、シオフキがこれに次いでいる。ハマグリは104点で、54点を計測したところ、殻長26～45mmの個体が主となり、特に31～40mmの個体が多い。最大殻長64mm、最小22mmを測る。シオフキは44点で、そのうち9点が計測できた。殻長21～25mmの小形の個体が目立っている。最大殻長46mmで、最小20mmを測る。サルボウは3点で、25・27・39mmの殻長を有する。ウミニナは22点含まれ、5点が計測可能で、最大殻高28mm、最小15mmを測る。アカニシは計測不能の個体1点だけである。

hブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、オオノガイ、ヒメシラトリガイ、ヤマトシジミ、ウミニナ、アラムシロ、イボニシ、アカニシ、カワアイの11種から成り、全体的にはハマグリ、シオフキの両種が主体を占めるが、資料の採取個所によってハマグリ主体とシオフキ主体の差がみられる。たとえば、dブロック東側の上位ではハマグリが多く、下位ではシオフキが主体を占めている。この両者の貝組成と計測値を以下に示す。上位はハマグリ、シオフキ、サルボウ、ヒメシラトリガイ、ヤマトシジミ、アラムシロ、イボニシ、ウミニナの8種で、下位はシオフキ、ハマグリ、サルボウ、ウミニナ、アラムシロ、イボニシの6種である。上位のハマグリは152点あり、121点を計測したところ、殻長21～30mmの小形の個体が多数を占めた。最大殻長45mm、最小18mmである。シオフキは91点で、30点を計測したところ、殻長26～45mmの個体が主となっている。最大殻長46mm、最小22mmを測る。下位のシオフキは215点あり、141点を計測したところ、殻長36～45mmの個体が大多数を占め、シオフキとしては大形の個体である。最大殻長50mm、最小24mmである。これに対してハマグリは27点にすぎず、計測し得た23点のうちの大半が殻長19～29mmの間に収まり、小形で成育不良の個体である。最大殻長59mm、最小19mmである。ハマグリ、シオフキの殻長分布については、他の資料についてもほぼ同様で、全体にハマグリは小さく、シオフキが大きい傾向に変化はない。上記の2種以外の貝については、dブロック全体で計測した資料にもとづいて記載する。サルボウは33点で、24点を計測したところ、最大殻長46mm、最小21mmを測り、26～35mmの個体が多くみられる。オオノガイは計測不能の右殻1点のみである。ヒメシラトリガイは計測不能の左右殻1点ずつである。ヤマトシジミは殻長19・24mmの2点のみである。ウミニナは246点と多量に含まれているが、殻高を計測し得たのは15点だけで、最大殻高29mm、最小14mmで、16～25mmの個体が多い。アラムシロは6点と少なく、殻高12～14・17mmの個体が各1点ずつ計測された。イボニシは10点で、殻高25～34mmの間に収まる。アカニシは3点だけで、そのうち殻高32mmと小形の個体が1点計測された。カワアイは計測不能の個体1点だけである。

本貝塚は、貝層中の出土土器から判断して加曾利EⅢ式期の新しい段階に形成されたものと考えられる。ハマグリ、シオフキを主とする純鹹貝塚とみて良い。汽水系のヤマトシジミはごく微量にすぎない。

第86号住居跡内貝塚

本貝塚は、住居跡の炉の上面を覆うように堆積していたもので、住居跡発見の端緒ともなった貝塚である。貝ブロックは、a～cの3つに分割したが、北側のaブロックが大きく、南側のcブロックは小さい。

bブロックは西側に位置する。いずれもハマグリを主とするが、a, cはシオフキの混入率が高く、サルボウは少ない。これに対してbブロックは、シオフキとほぼ同量のサルボウが含まれており、サルボウの混入率の高いことから区分した。貝は遺物収納ケースに16箱ある。本稿ではそのうちa, bブロックの一部を抽出し、計測をおこなった。

aブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、ヤマトシジミ、アサリ、ナミマガシワ、オキシジミ、イボニシ、ウミニナの9種から成り、ハマグリが大多数を占め、シオフキがこれに次いでいる。ハマグリは901点あり、718点が計測可能で、殻長26～50mmの個体が主となり、中でも31～40mmの個体が多い。最大殻長68mm、最小20mmを測るが、全体的にみるとハマグリはやや小形の個体が目立つ。シオフキは292点あり、237点が計測可能で、殻長31～45mmの個体が主となり、特に36～40mmの個体が多い。最大殻長53mm、最小25mmを測る。サルボウは76点あり、71点が計測できた。殻長26～40mmの個体が主となり、31～35mmの個体の中でも多い。最大殻長50mm、最小21mmを測る。ヤマトシジミは3点にすぎず、殻長21・23・26mmの左殻である。アサリは2点で、殻長22mmの左右殻1点ずつで同一個体と思われる。ナミマガシワは6点で、最大殻長41mm、最小22mmである。オキシジミは殻長42mmの右殻1点だけである。イボニシ、ウミニナはそれぞれ殻高33・25mmの個体1点ずつである。

bブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、アサリ、オキシジミ、ナミマガシワの6種から成り、ハマグリが主体で、シオフキ、サルボウがこれに次いでいる。ハマグリは282点あり、264点が計測可能で、殻長分布は主に21～50mmに広がっているが、主体は殻長26～40mmの個体である。最大殻長63mm、最小20mmである。シオフキは174点で、166点を計測したところ、殻長31～45mmの個体が主となり、特に36～40mmに集中している。最大殻長46mmで、最小26mmである。サルボウは103点で、その全てが計測できた。殻長31～45mmの個体が多く認められたが、31～40mmの個体がシオフキよりも多くやや小さい傾向がうかがわれる。最大殻長48mmで、最小24mmである。アサリは2点で、殻長38mmの左右殻1点ずつで同一個体である。オキシジミ、ナミマガシワは各1点ずつで、前者は殻長46mmの左殻、後者は殻長21mmの右殻である。

本貝塚は、貝層中出土土器からみて堀之内I式期に形成されたもので、ハマグリ、シオフキ、サルボウを主体とする純鹹貝塚である。

第58号土坑内貝塚

本貝塚は、a, b 2か所の貝ブロックから成る。

aブロックはハマグリだけで、計測不能の個体のみ11点ある。

bブロックはハマグリ、サルボウ、シオフキ、アサリ、ナミマガシワの5種から成り、ハマグリが主体である。ハマグリは、殻長26～30mmの個体が多く、最大殻長43mm、最小25mmで、60点ある。サルボウは計測可能な個体が5点で、不能が2点にすぎない。殻長25～40mmである。他の貝はいずれも1点ずつで、計測不能である。

第73号土坑内貝塚

本貝塚は、貝の風化が著しく計測できたものはない。ハマグリ、サルボウの2種だけである。

第 112 号土坑内貝塚

本貝塚は、2次堆積の可能性が高いもので、詳しい時期は不明であるが、縄文時代中期後半から後期前半にかけてのもとの思われる。瓢形を呈する貝ブロックを北東側から南西側にむけて a, b, c の3つのブロックに分けて取り上げたが、3者は一連のもので特に切れ目はない。貝は遺物収納ケースで2箱分ある。

a ブロックはハマグリ、シオフキの2種のみで、計測できたものはハマグリ1点だけで殻長23mmの小さな個体である。他のハマグリ22点とシオフキ1点は計測不能である。

b ブロックはハマグリ、シオフキ、サルボウ、ヤマトシジミの4種から成り、主体はハマグリ、シオフキで他はごく少ない。ハマグリは64点あるが、計測できたものは13点と少なく、殻長24～64mmで、大きさにばらつきが目立つ。シオフキは27点で、計測したものは3点だけで、42・43・45mmを測る。サルボウは2点で計測不能である。ヤマトシジミは8点あり、殻長18～25mmで、いずれも小形である。

c ブロックはハマグリ、シオフキ、サルボウ、オキシジミ、ヤマトシジミの5種から成り、ハマグリ、シオフキが主体を占める。ハマグリは103点で、計測し得た個体は29点あり、殻長31～55mmの間の個体が多い。最大殻長63mm、最小31mmである。シオフキは43点あるが、計測し得た個体は7点にすぎず、殻長29～46mmを測る。サルボウは3点で、殻長44mmの個体1点が計測された。オキシジミは6点で、32・35・40mmの個体5点が計測され、計測不能は1点のみである。ヤマトシジミは計測不能の個体1点だけである。

第 123 号土坑内貝塚

本貝塚は、第3号住居跡の炉を切って構築された土坑内に堆積したもので、第3号住居跡内貝塚のbブロックとしたものの大半を占める。貝は遺物収納ケースに4箱分あるが、そのうちの一部を抽出して計測した。貝種はハマグリ、サルボウ、シオフキ、ナミマガシワ、アカニシ、イボニシの6種で、ハマグリ、サルボウが主体を占めている。ハマグリは1,342点で、956点を計測したところ、殻長26～50mmの間の個体が主となり、31～40mmの個体が特に多い。最大殻長は73mmで、最小は18mmである。サルボウは1,141点で、1,103点を計測したところ、殻長26～40mmの間の個体が主となり、26～35mmの個体が多い。最大殻長は51mmで、最小は19mmである。シオフキは43点と少なく、計測できたものは30点である。殻長30～40mmの個体が多く、最大殻長48mm、最小25mmである。ナミマガシワは15点で、計測したものの10点は、殻長11～14mmと20～23mmの2群に分れる。アカニシは8点で、殻高42～49mmの個体が多く、最大殻高は54mm、最小33mmである。イボニシは殻高37mmの個体1点だけである。

本貝塚は、貝層中出土の土器からみれば加曽利EⅢ式期の形成と考えられる。ハマグリ、サルボウを主とする純鹹貝塚である。

第 139 号土坑内貝塚

本貝塚は、第172・173号土坑内貝塚と一連のもと考えられ、貝は遺物収納ケースに37箱分と多量にある。そのため貝の分析は、一部を抽出しておこなった。貝塚の構成貝種は次の12種から成り、ハマグリが圧倒的多数を占める。ハマグリ、サルボウ、シオフキ、ヒメシラトリガイ、オオノガイ、ナミマガシワ、アサリ、ヤマトシジミ、ウミニナ、アラムシロ、アカニシ、カワニナ。ハマグリは2,297点あり、そ

のうち1,274点を計測したところ、殻長21～35mmの個体が主となり、21～30mmのやや小形の個体が多い。最大殻長63mm、最小14mmを測る。サルボウは272点あり、238点を計測したところ、殻長31～45mmの個体が主となり、特に36～45mmの個体が多くみられる。最大殻長57mm、最小21mmを測る。シオフキは648点あり、そのうち189点を計測したところ、殻長21～45mmの個体が主であるが、中でも36～45mmの比較的大形の個体が多く、成育良好と判断される。最大殻長52mm、最小18mmを測る。ヒメシラトリガイは37点で、9点を計測したが、殻長18～25mmの範囲に収まる。オオノガイは57点あるが、破損した計測不能の個体がほとんどで、計測し得たのは殻長75mmの右殻1点だけである。ナミマガシワは計測不能の3点だけである。アサリは6点で、計測し得たものは2点で殻長21mmを測る小形の個体である。ヤマトシジミは5点で、計測し得たのは殻長19mmの左殻1点だけである。ウミニナは9点で、計測した5点の殻高は24～28mmを測る。アラムシロは5点で、計測した4点は殻高13～24mmの間に収まる。アカニシは2点で、いずれも計測不能の個体であるが、1点は殻高100mm前後の大形の個体である。カワニナは計測不能の個体1点だけである。

本貝塚は、貝層中出土の土器からみて堀之内Ⅰ式期に形成されたものと考えられ、ハマグリ、シオフキ、サルボウを主とする純鹹貝塚である。

第166号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の覆土内に堆積していた貝ブロックで、上位の純貝層と下位の灰を含む混土貝層に分れる。貝は遺物収納ケースで3箱分あるため、それぞれの一部を抽出して計測した。

上位の純貝層は、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、ナミマガシワ、ウミニナの5種から成り、ハマグリが圧倒的多数を占めている。ハマグリは1,529点あり、817点を計測したところ、殻長21～45mmの個体が主となるが、特に26～35mmのやや小形の個体が多くを占める。最大殻長62mm、最小18mmを測る。シオフキは97点あるが、計測し得たのは30点にすぎない。殻長36～40mmの個体がやや目立つが、計測数が少なく明瞭な傾向は把握できない。最大殻長45mm、最小26mmを測る。サルボウは12点と少なく、同一個体の資料も含まれ、殻長29～45mmの間に収まる。ナミマガシワは5点で、いずれも左殻で計測し得た2点は殻長32・39mmの個体である。ウミニナは計測不能の個体1点である。

下位の灰を含む混土貝層は、ハマグリ、シオフキ、サルボウの3種から成り、ハマグリが圧倒的多数を占め、主体である。ハマグリは906点あり、647点を計測したところ、殻長分布は21～45mmの間に広がるが、特に26～40mmの個体が多い。最大殻長62mm、最小19mmを測る。シオフキは82点あるが、計測できた個体は22点にすぎない。殻長36～40mmの個体が多く、最大殻長49mm、最小25mmを測る。サルボウは8点にすぎず、殻長は20・32・40・45・48・49mmを測る。

本貝塚は、貝層中からの出土土器が少なく、形成時期が特定できないが、称名寺Ⅱ式土器片が出土していることから、後期初頭に形成されたハマグリ主体の純鹹貝塚と考えられる。

第172号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の覆土上位に堆積していた純貝層である。貝は遺物収納ケースで5箱分あり、この中には第173号土坑を切った際に混入したと考えられる魚骨も含まれている。貝は一部を抽出して計測をおこなった。構成貝種は、ハマグリ、サルボウ、シオフキ、オオノガイ、アサリ、ヤマトシジミ、オキシジミ、アカニシ、ウミニナ、キセルガイの10種で、ハマグリが圧倒的多数を占めている。ハマグリは2,936点あ

り、そのうち1,777点を計測したところ、殻長分布は21～45mmの間に広がるが、主体は21～35mmの個体で、やや小形と判断される。最大殻長65mm、最小16mmを測る。サルボウは209点あり、189点を計測したところ、殻長26～45mmの個体が主となり、中でも36～45mmの個体が多い。最大殻長55mm、最小20mmを測る。シオフキは204点あるが、計測できたものは50点にすぎない。殻長26～40mmの個体が主となり、最大殻長46mm、最小15mmを測る。オオノガイは計測不能の5点だけである。アサリは6点あるが、計測できたのは1点のみで殻長30mmを測る。ヤマトシジミは2点で、殻長19mmの個体1点が計測できた。オキシジミ、アカニシ、ウミニナ、キセルガイはいずれも計測不能の個体1点ずつである。

本貝塚は、貝層中出土の土器および他遺構との重複関係からみて堀之内I式期の形成と考えられ、ハマグリを主体とする純鹹貝塚である。

第173号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の覆土上位に堆積していたもので、貝を含む自然遺物は遺物収納ケースに9箱分あり、この中にはきわめて多量の魚骨が含まれている。貝は一部を抽出して計測をおこなった。構成貝種は、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、アサリ、ヒメシラトリガイ、オオノガイ、ヤマトシジミ、ナミマガシワ、オキシジミ、アカニシ、ウミニナ、アラムシロの12種で、ハマグリが圧倒的に多い。ハマグリは3,649点あり、そのうち2,144点を計測したところ、殻長21～40mmの個体が主となり、中でも21～30mmのやや小形の個体が目立っている。最大殻長72mm、最小14mmとばらつきも大きい。シオフキは445点あるが、計測し得たのは87点にすぎない。殻長26～40mmの個体が主で、特に36～40mmの比較的大形の個体が多い。最大殻長46mm、最小14mmを測る。サルボウは189点あり、175点を計測したところ、殻長26～40mmの個体が多くを占めている。最大殻長52mm、最小17mmを測る。アサリは31点あり、18点を計測したところ、殻長分布は15～33mmの間に分散するが、ほとんどは殻長20mm台の個体である。ヒメシラトリガイは43点で、12点を計測したところ、殻長分布は14～30mmの間に広がるが、ほとんどは殻長20mm台の個体である。オオノガイは66点認められたが、いずれも破損していて計測不能である。ヤマトシジミは2点で、計測できた1点は殻長16mmの右殻である。ナミマガシワも2点で、計測できた個体は殻長25mmの右殻1点である。オキシジミは殻長41mmの左殻1点だけである。アカニシは4点で、計測できた1点は殻高84mmを測る。ウミニナは9点あり、4点が計測でき、殻高21・22mmである。アラムシロは4点あり、2点が計測でき、殻高12・13mmである。

本貝塚は、貝層中出土の土器および他遺構との重複関係からみて堀之内I式期に形成されたものと考えられ、ハマグリを主とする純鹹貝塚である。

第200号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の覆土中に基本的に上下の2層に分れて検出されたもので、貝は全体で遺物収納ケースに32箱分ある。そのため、上下の各々から一部を抽出して計測をおこなった。

上位はハマグリ、シオフキ、サルボウ、オキシジミ、ヤマトシジミ、ナミマガシワ、オオノガイ、サビシラトリガイ、ヒメシラトリガイ、アサリ、イボニシ、アカニシ、カワニナ、ウミニナ、ヒダリマキマイの15種から成り、ハマグリ、シオフキが主体を占めている。ハマグリは897点あり、462点を計測

したところ、殻長分布は 21～45 mm の間に広がるが、26～40 mm の個体が多くを占める。最大殻長 66 mm で、最小 18 mm である。シオフキは 475 点あり、199 点を計測したところ、殻長分布は 26～45 mm の間に広がるが、31～40 mm の個体が多い。最大殻長 50 mm、最小 17 mm を測る。サルボウは 115 点あり、109 点を計測したところ、殻長 31～45 mm の個体が多く、最大殻長 58 mm、最小 22 mm を測る。オキシジミは 15 点あり、13 点を計測したところ、殻長分布は 34～46 mm に広がる。ヤマトシジミは 22 点あり、16 点を計測したところ、殻長分布は 17～36 mm に広がるが、20 mm 台の小形の個体が多い。ナミマガシワは 4 点にすぎず、計測できた 3 点は殻長 23・31・42 mm を測る。オオノガイも 4 点で、いずれも計測不能である。サビシラトリガイは 74 点あり、48 点を計測したところ、殻長分布は 31～57 mm に広がるが、36～45 mm 程度の個体が多い。ヒメシラトリガイは 22 点で、11 点を計測したところ、殻長分布は 19～33 mm に広がる。アサリは 7 点で、殻長 21・26・30・33 mm の 4 点が計測できた。イボニシは殻高 27 mm の個体 1 点だけである。アカニシも 1 点で計測不能である。カワニナは 2 点で、殻高 30 mm の個体 1 点が計測できた。ウミニナは 2 点で、殻高 26 と 28 mm である。ヒダリマキマイマイは陸産貝で、縄文時代の所産とは断定できないが、計測不能の 2 点がある。

下位はハマグリ、シオフキ、サルボウ、アサリ、ヤマトシジミ、オオノガイ、ヒメシラトリガイ、ナミマガシワ、マガキ、オキシジミ、イボニシ、アカニシ、ウミニナ、アラムシロ、キセルガイの 15 種から成り、ハマグリが多数を占める点は上位と同様である。ハマグリは 736 点あり、465 点を計測したところ、殻長分布は 21～45 mm の間に広がるが、26～35 mm の個体が多い。最大殻長 64 mm、最小 17 mm を測る。シオフキは 315 点あるが、計測できたものは 88 点である。殻長 31～45 mm の個体が主であり、特に 36～40 mm の個体が多い。サルボウは 49 点あり、45 点を計測したところ、殻長 31～40 mm の個体が主となる。最大殻長 55 mm、最小 23 mm を測る。アサリは 18 点で、11 点を計測したところ、殻長分布は 21～38 mm の間に収まり、24～33 mm の間に集中する。ヤマトシジミは 7 点あり、5 点を計測したところ、殻長 16・18・21・23・28 mm を測り小形である。オオノガイは 10 点あるが、計測できたものは殻長 60 mm の右殻 1 点だけである。ヒメシラトリガイは 38 点あり、26 点を計測したところ、殻長 21～35 mm の個体が多く、最大殻長 45 mm、最小 21 mm を測る。ナミマガシワは 3 点で、計測できた 2 点は殻長 33・36 mm である。マガキとオキシジミは計測不能の左殻 1 点ずつである。イボニシは 2 点だけで、計測できた個体は殻高 32 mm を測る。アカニシは計測不能の個体 1 点だけである。ウミニナは殻高 22 mm の個体 1 点、アラムシロは殻高 12・15 mm の 2 点である。陸産貝のキセルガイは 5 点あり、計測できた 4 点は殻高 17～19・21 mm を測る。

本貝塚は、上下 2 層に分れるが、貝層中出土の土器からみると両層とも堀之内 I 式期の形成と考えられ、時間差は捉えられない。両層の貝層構成にもほとんど差異は認められず、ハマグリ、シオフキを主体とする純鹹貝塚である。

第 219 号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑内に堆積していた貝ブロックで、貝は遺物収納ケースに 1 箱分である。構成貝種は、ハマグリ、サルボウ、シオフキ、ナミマガシワ、アサリの 5 種から成り、サルボウを主としている。ハマグリは 40 点あり、33 点を計測したところ、殻長 26～30 mm の個体が多いが、ばらつきが目立つ。最大殻長 49 mm、最小 22 mm を測る。サルボウは 184 点あり、177 点を計測したところ、殻長分布は 26～45 mm の間に広がるが、中でも 31～40 mm の個体が多い。最大殻長 46 mm、最小 22 mm を測る。シオ

フキは10点で、全てを計測したところ、殻長分布は32～43 mmの間に収まる。ナミマガシワは2点で、計測できた1点は殻長30 mmである。アサリは殻長31 mmの右殻1点である。

本貝塚は、貝層中出土の土器片からみると称名寺Ⅱ式期に形成されたものと考えられ、サルボウを主とする純鹹貝塚である。

第231号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の底面から検出された小ブロック的な混貝土層である。貝種はハマグリだけで、計測し得る個体はない。本貝塚は、土坑の出土土器から判断して堀之内Ⅰ式期のものと考えられる。

第294号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の上面から検出された貝ブロックである。貝種はハマグリ、サルボウ、シオフキ、ヒメシラトリガイ、オオノガイ、ナミマガシワ、アカニシ、イボニシ、カワニナ、カワアイ、ウミニナ、アラムシロの12種で、ハマグリが最も多く、サルボウがこれに次いでいる。ハマグリは715点あり、686点を計測したところ、殻長分布は21～45 mmの間に広がり、26～35 mmの個体が比較的目的立つ。最大殻長60 mm、最小17 mmを測る。サルボウは219点あり、214点を計測したところ、殻長分布は21～40 mmの間に広がり、26～35 mmの個体が多い。最大殻長49 mm、最小18 mmを測る。シオフキは16点と少なく、14点を計測したところ、殻長分布は17～43 mmと広がるが、26～35 mmの個体がやや多い。ヒメシラトリガイは4点で、計測できた3点の殻長は23・26・27 mmである。オオノガイは殻長51 mmを測る個体1点だけである。ナミマガシワ1点、アカニシ1点、カワニナ2点はいずれも計測不能である。イボニシは2点で、殻高19・23 mmである。カワアイは殻高22 mmの個体1点だけである。ウミニナは7点あり、計測できた3点の殻高は19・20・29 mmを測る。アラムシロは5点で、計測できた4点の殻高は11・12・14 mmである。

本貝塚は、貝層中出土の土器からみて堀之内Ⅰ式期の形成と考えられ、ハマグリ、サルボウ主体の純鹹貝塚である。

第326号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の上面から覆土中にかけて堆積していたもので、覆土の中位から下位にかけては魚骨も含まれている。貝を主とする自然遺物は遺物収納ケースに13箱分ある。このために、貝の分析はごく一部を抽出しておこなわざるを得なかったため不十分な面がある。今回は、最上面の貝ブロックをもって概要を報告する。

構成貝種は、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、アサリ、オキシジミ、ヤマトシジミ、サビシラトリガイ、ヒメシラトリガイ、カワニナ、カワアイ、ウミニナの11種で、ハマグリが主体となり、シオフキがこれに次いでいる。ハマグリは156点で、135点を計測したところ、殻長21～40 mmの個体が主となるが、特に26～35 mmの個体が多い。最大殻長69 mm、最小19 mmを測る。シオフキは58点で、50点を計測したところ、殻長26～40 mmの個体が多く、最大殻長47 mm、最小19 mmである。サルボウは13点で、12点を計測したが、最大殻長38 mm、最小20 mmでやや小形の個体が多い。アサリは3点のみで、計測できた2点の殻長は24・31 mmである。オキシジミは2点で、殻長38・51 mmの左殻である。ヤマトシジミは殻長20 mmの右殻1点である。サビシラトリガイは3点で、殻長41・48 mmを測

る。ヒメシラトリガイは6点あり、計測できたのは4点で、殻長分布は24～29 mmの間に収まる。巻貝3種はいずれも計測不能の個体で、カワニナ、カワアイ各1点、ウミニナ6点である。

本貝塚は、貝層中出土の土器から判断して堀之内I式期の形成と考えられ、ハマグリ、シオフキ主体の純鹹貝塚である。

第327号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の覆土上面から検出された貝ブロックであるが、破砕したものが多く計測し得たものはごく少ない。貝種はハマグリ、サルボウ、シオフキの3種である。ハマグリは8点で、最大殻長57 mm、最小31 mmを測るが、31～35 mmの小形の個体が多い。サルボウも8点で、殻長分布は22～57 mmに広がるが、31～35 mmの個体が多い。シオフキは4点で、殻長36・38・43 mmを測る。

本貝塚は、小ブロックで計測できた個体も少ないが、純鹹貝塚であり、形成時期は貝ブロック中出土の土器片からみて中期後半と推定される。

第384号土坑内貝塚

本貝塚は、a～cの3つの貝ブロックに分れるが、攪乱を受けて遺存状態は不良である。その中ではbブロックが攪乱をほとんど受けていないと判断されるので、本稿ではbブロックの一部を抽出して計測をおこなった。貝は遺物収納ケースに3箱分ある。貝種はハマグリ、サルボウ、シオフキの3種にすぎない。ハマグリは4点で、計測し得た3点は殻長26・38・48 mmを測る。サルボウは5点で、殻長は31・37・42・43・47 mmを測る。シオフキは1点で、殻長35 mmである。

本貝塚は、ハマグリ、サルボウを主とする純鹹貝塚であるが、攪乱を受けており詳しい形成時期は不明である。

第385号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑内の覆土上位に堆積していた混貝土層で、ハマグリを主とするが、風化や破砕が進み、計測し得るものがない。また、貝層中からの出土土器もなく形成時期は特定できないが、覆土内出土土器からみて後期前葉と考えられる。

第395号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑内の覆土の中位から下位にかけてブロック的な状態で検出されたもので、下位の魚骨層を含めて遺物収納ケースに8箱分の量がある。そのため、貝についてはごく一部を抽出して計測したにすぎない。

構成貝種は、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、ナミマガシワ、アサリ、イボニシ、ウミニナ、ムギガイの8種で、ハマグリが主体をなし、シオフキ、サルボウがこれに次いでいる。ハマグリは132点あり、122点を計測したところ、殻長分布は主に26～50 mmの間に広がるが、31～45 mmの個体が多い。最大殻長58 mm、最小19 mmを測る。シオフキは36点で、34点を計測したところ、殻長36～45 mmの個体が多く、最大殻長は50 mmで、最小28 mmである。サルボウも36点で、33点を計測したところ、殻長36～45 mmの個体が多く、最大殻長51 mm、最小21 mmである。ナミマガシワは16点で、殻長21～35 mmの個体が多く、最大殻長45 mm、最小21 mmを測る。アサリは殻長27 mmの左殻1点で

ある。イボニシは2点で、殻高30・32 mmを測る。ウミニナ、ムギガイは1点ずつで、それぞれ殻高27・11 mmを測る。

本貝塚は、貝層中出土の土器からみて堀之内I式期の形成と考えられ、ハマグリ、シオフキ、サルボウ主体の純鹹貝塚である。

第400号土坑内貝塚

本貝塚は、土坑の下位にひとにぎりの小ブロック的に検出されたもので、貝種はハマグリのみ1種だけである。ハマグリは12点あるが、計測できたものは5点にすぎない。最大殻長31 mm、最小20 mmを測り、比較的小形の個体である。

本貝塚からは土器片は出土していないが、土坑内からは堀之内I式土器が多く出土しているため、本貝塚の形成時期も堀之内I式期と推定される。ハマグリのみ純鹹貝塚である。

第404号土坑内貝塚

本貝塚は、覆土の下位から検出された小貝ブロックで、ヤマトシジミを主体としている点で特異である。構成貝種は、ヤマトシジミ、ハマグリ、サルボウの3種で、圧倒的にヤマトシジミが多い。ヤマトシジミは332点あり、280点を計測したところ、殻長16～30 mmの個体が大半を占め、特に16～25 mmの小形の個体が多い。最大殻長34 mm、最小16 mmを測る。ハマグリは2点で、殻長18・19 mmときわめて小さい個体である。サルボウも殻長43 mmの右殻2点だけである。

本貝塚は、貝層中出土の土器からみて加曾利EⅢ式期の形成と考えられ、ヤマトシジミを主とする主淡貝塚である点は注目される。

第451号土坑内貝塚

本貝塚は、覆土の中位に検出された小貝ブロックで、上下2つのブロックに分れる。

上位はハマグリ、シオフキ、サルボウの3種から成り、ハマグリ、シオフキを主とする。ハマグリは26点で、22点を計測したところ、殻長分布は主に21～40 mmの間に広がるが、36～40 mmの個体が多い。最大殻長46 mm、最小21 mmを測る。シオフキは20点あり、10点を計測したところ、殻長36～40 mmの個体が多くを占め、最大殻長41 mm、最小23 mmを測る。サルボウは殻長27 mmの左殻1点だけである。

下位はハマグリ、サルボウ、シオフキ、ヤマトシジミ、ヒメシラトリガイの5種から成り、ヒメシラトリガイが主体を占める点で特徴がある。ハマグリは9点で、計測した4点の殻長は28～49 mmの間に収まる。サルボウは3点で、計測した2点の殻長は33・35 mmである。シオフキとヤマトシジミは計測不能の右殻1点ずつである。ヒメシラトリガイは85点あり、計測した72点の殻長分布は23～34 mmの間に集中している。

本貝塚は、上下2つのブロックに分れ、両層で主体貝種が異なる純鹹貝塚である。形成時期は、出土土器からみて共に堀之内I式期と考えられる。両者の差異は嗜好の差としておくべきであろう。

第465号土坑内貝塚

本貝塚は、ごくわずかの二枚貝片が覆土中から検出されたもので、貝塚という名に値しない。貝種も判

明しない。

4 区

第3号住居跡内貝塚

本貝塚は、住居跡の炉の上面から検出されたひとにぎりの小ブロックである。貝種はハマグリ、サルボウ、ヤマトシジミの3種である。ハマグリは6点で、計測した1点は殻長47 mmの右殻である。サルボウは計測不能の1点だけである。ヤマトシジミは7点で、計測した2点は共に殻長20 mmの左右殻で同一個体である。

本貝塚は、住居跡の時期から推測すれば、加曾利EⅢ式期の形成と考えられる。

第5号住居跡内貝塚

本貝塚は、住居跡の中央部から南側にかけての覆土下位から検出されたもので、a～fの6つのブロックに分けられたが、a～cは規模が小さいため一括して取りあげた。d～fは比較的規模が大きいので断面観察をおこないながら取り上げた。貝は遺物収納ケースに10箱分と多量にあるため、小ブロックの代表としてbブロックを、d～fはごく一部を抽出して計測をおこなった。

bブロックは、ハマグリ、シオフキ、アサリ、ヤマトシジミ、ウミナナの5種から成るが、いずれも少数である。ハマグリは2点で、殻長34・35 mmを測る。シオフキも2点で、計測した1点は殻長38 mmである。アサリは1点で殻長19 mm、ヤマトシジミは2点で、殻長17・21 mmを測る。ウミナナは計測不能の2点である。

dブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、ヤマトシジミ、ウミナナ、イボニシ、アカニシの7種から成るが、イボニシ、ウミナナの巻貝がやや目立つほかは全体的に数が少ない。ハマグリは7点で、殻長は19・20・22・26・30・33・41 mmを測る。シオフキも7点で、計測した4点の殻長は19・21 mmの小形と40・42 mmの大形に2分される。サルボウは2点のみで、殻長は28・32 mmを測る。ヤマトシジミは6点で、殻長19～26 mmの小形の個体である。ウミナナは19点あり、計測できた3点の殻高は22～25 mmの間に収まる。イボニシは18点で、計測した16点の殻高分布は15～33 mmに広がるが、21～30 mmの個体が多い。アカニシは計測不能の1点だけである。

eブロックは、ハマグリ、シオフキ、サルボウ、オキシジミ、ヤマトシジミ、アサリ、ナミマガシワ、ヒメシラトリガイ、イボニシ、アラムシロ、ウミナナ、カワアイの12種から成り、ハマグリ、シオフキが主体を占めている。ハマグリは756点あり、668点を計測したところ、殻長分布は16～45 mmの間に分散するが、特に16～35 mmの小形の個体が多い。最大殻長51 mm、最小14 mmを測る。シオフキは512点で、424点を計測したところ、殻長分布は21～45 mmの間に広がるが、31～40 mmの個体が多い。最大殻長49 mm、最小11 mmを測る。サルボウは29点で、27点を計測したところ、殻長分布は16～48 mmの間に広がり、少数ずつであるが26～30 mmの個体がやや目につく。オキシジミは殻長38 mmの左殻1点だけである。ヤマトシジミも1点で、殻長33 mmを測る。アサリは26点あり、24点を計測したところ、殻長分布は15～29 mmに及ぶが、殻長16～20 mmの小形の個体が多い。ナミマガシワは3点で、計測した2点の殻長は33・49 mmである。ヒメシラトリガイは2点で、殻長は25・33 mmを測る。イボニシは4点で、殻高は22～32 mmの間に収まる。アラムシロは2点で、殻高10・14 mmを測る。ウミナナは138点と多いが、計測できたのはわずか2点にすぎず、殻高21・30 mmで

ある。カワアイは計測不能の個体1点だけである。

fブロックは、ハマグリ、サルボウ、シオフキ、アサリ、ヤマトシジミ、ヒメシラトリガイ、オキシジミ、アカニシ、イボニシ、ウミニナ、アラムシロ、カワニナ、カワアイ、バイの14種から成り、シオフキが多数を占めている。ハマグリは98点で、77点を計測したところ、殻長分布は26～45mmに広がるが、26～30mmに比較的集中している。最大殻長86mm、最小19mmを測る。サルボウは113点で、96点を計測したところ、殻長26～40mmの個体が主となり、中でも26～30mmの個体が多い。最大殻長49mm、最小20mmを測る。シオフキは1,004点を数え、そのうち751点が計測できた。殻長分布は21～45mmの間に広がるが、26～40mmの個体が多くを占める。最大殻長48mm、最小15mmを測る。アサリは42点あり、41点を計測したところ、殻長16～25mmの小形の個体が多い。最大殻長28mm、最小15mmを測る。ヤマトシジミは60点あり、57点を計測したところ、殻長16～25mmに集中し、最大殻長28mm、最小16mmを測る。ヒメシラトリガイは殻長47mmの左殻1点だけである。オキシジミは5点で、計測できた4点の殻長は34～37mmに集中する。アカニシは計測不能の個体のみ3点である。イボニシは29点あり、殻高分布は16～33mmの間に広がるが、21～30mmの個体が多い。ウミニナは253点と多いが、計測できたのはわずかに15点である。殻高21～30mmの個体が多くを占め、最大殻高33mm、最小16mmを測る。アラムシロは12点あり、11点を計測したところ、殻高は10～16mmの間に収まる。カワニナは7点で、計測できた2点の殻高は35・36mmである。カワアイ、バイは共に計測不能の1点ずつである。

この他にマテガイ、ツメタガイがeブロックの貝類を選別中に摘出されたので、付記しておく。

本貝塚は、貝層中出土の土器からみて加曽利EⅢ式期の形成と考えられ、ハマグリ、シオフキを主とする純鹹貝塚で、汽水系のヤマトシジミをごくわずかに含む。

第19号住居跡内貝塚

本貝塚は、覆土中からほんのひとにぎり検出された小貝ブロックで、辛うじてハマグリ、アカニシの2種が判明したにすぎない。両種とも計測不能である。

本貝塚は、住居跡内出土土器からみて加曽利EⅢ式期の形成と考えられる。

表4 南三島遺跡3・4区貝塚一覧表

所在位置	構成貝種	主体貝種	その他の自然遺物	形成時期	備考
3区 第3号住居跡	サルボウ、ナミマガシワ、ハマグリ、シオフキ、アカニシ	ハマグリ、サルボウ	鳥、ガザミ	加EⅢ	
第34号住居跡	サルボウ、ヤマトシジミ、ナミマガシワ、アサリ、カガミガイ、ハマグリ、シオフキ、ヒメシラトリガイ、オオノガイ、イボキサゴ、カワニナ、ウミニナ、アカニシ、アラムシロ	ハマグリ、シオフキ	クロダイ、スズキ、キジ、シカ、イノシシ	堀Ⅰ	
第69号住居跡	サルボウ、ヤマトシジミ、ハマグリ、シオフキ、ヒメシラトリガイ、オオノガイ、カワアイ、ウミニナ、アカニシ、イボニシ、アラムシロ	ハマグリ、シオフキ		加EⅢ	
第86号住居跡	サルボウ、ナミマガシワ、ヤマトシジミ、アサリ、オキシジミ、ハマグリ、シオフキ、ウミニナ、イボニシ	ハマグリ、シオフキ サルボウ		堀Ⅰ	
第58号土坑	サルボウ、ナミマガシワ、アサリ、ハマグリ、シオフキ	ハマグリ		後期前半	

所在位置	構 成 員 種	主 体 員 種	その他の自然遺物	形成時期	備 考
第 73 号土坑	サルボウ, ハマグリ			称	
第 112 号土坑	サルボウ, ヤマトシジミ, オキシジミ, ハマグリ, シオフキ	ハマグリ, シオフキ		不 明	
第 123 号土坑	サルボウ, ナミマガシワ, ハマグリ, シオフキ, アカニシ, イボニシ	ハマグリ, サルボウ		加 E III	
第 139 号土坑	サルボウ, ナミマガシワ, ヤマトシジミ, アサリ, ハマグリ, シオフキ, ヒメシラトリガイ, オオノガイ, カワニナ, ウミニナ, アカニシ, アラムシロ	ハマグリ, サルボウ, シオフキ		堀 I	
第 166 号土坑	サルボウ, ナミマガシワ, ハマグリ, シオフキ, ウミニナ	ハマグリ		称 II	
第 172 号土坑	サルボウ, ヤマトシジミ, アサリ, オキシジミ, ハマグリ, シオフキ, オオノガイ, ウミニナ, アカニシ, キセルガイ	ハマグリ		堀 I	魚骨層あり
第 173 号土坑	サルボウ, ナミマガシワ, ヤマトシジミ, アサリ, オキシジミ, ハマグリ, シオフキ, ヒメシラトリガイ, オオノガイ, ウミニナ, アカニシ, アラムシロ	ハマグリ	アジ, ウナギ, スズキ	堀 I	魚骨層あり
第 200 号土坑	サルボウ, ナミマガシワ, マガキ, ヤマトシジミ, アサリ, オキシジミ, ハマグリ, シオフキ, サビシラトリガイ, ヒメシラトリガイ, オオノガイ, カワニナ, ウミニナ, アカニシ, イボニシ, アラムシロ, キセルガイ, ヒダリマキマイマイ	ハマグリ, シオフキ	クロダイ	堀 I	魚骨層あり
第 219 号土坑	サルボウ, ナミマガシワ, アサリ, ハマグリ, シオフキ	サルボウ		称 II	
第 231 号土坑	ハマグリ			堀 I	
第 294 号土坑	サルボウ, ナミマガシワ, ハマグリ, シオフキ, ヒメシラトリガイ, オオノガイ, カワニナ, カワアイ, ウミニナ, アカニシ, イボニシ, アラムシロ	ハマグリ, サルボウ		堀 I	
第 326 号土坑	サルボウ, ヤマトシジミ, アサリ, オキシジミ, ハマグリ, シオフキ, サビシラトリガイ, ヒメシラトリガイ, カワニナ, カワアイ, ウミニナ	ハマグリ, シオフキ		堀 I	魚骨層あり
第 327 号土坑	サルボウ, ハマグリ, シオフキ			中期後葉	
第 384 号土坑	サルボウ, ハマグリ, シオフキ	ハマグリ, サルボウ		堀 I	
第 385 号土坑	ハマグリ			後期前葉	
第 395 号土坑	サルボウ, ナミマガシワ, アサリ, ハマグリ, シオフキ, ウミニナ, イボニシ, ムギガイ	ハマグリ, シオフキ, サルボウ		堀 I	魚骨層あり
第 400 号土坑	ハマグリ		アジ, ウナギ, スズキ	堀 I	魚骨層あり
第 404 号土坑	サルボウ, ヤマトシジミ, ハマグリ	ヤマトシジミ		加 E III	
第 451 号土坑	サルボウ, ヤマトシジミ, ハマグリ, シオフキ, ヒメシラトリガイ	ハマグリ, ヒメシラトリガイ		堀 I	
第 465 号土坑	二枚貝			後期前葉	
4区 第 3 号住居跡	サルボウ, ヤマトシジミ, ハマグリ	ハマグリ, シオフキ		加 E III	
第 5 号住居跡	サルボウ, ナミマガシワ, ヤマトシジミ, アサリ, オキシジミ, ハマグリ, シオフキ, サビシラトリガイ, ヒメシラトリガイ, マテガイ, オオノガイ, カワニナ, カワアイ, ウミニナ, ツメタガイ, アカニシ, イボニシ, アラムシロ, パイ	ハマグリ, シオフキ	カニ	加 E III	
第 19 号住居跡	ハマグリ, アカニシ			加 E III	

2 魚骨層

当遺跡3区の調査において最も特徴的な成果の1つが、堀之内I式期に形成された魚骨層の発見であった。3区の第172・173・200・326・395・400の6基の土坑から魚骨が検出されたが、第172号土坑は第173号土坑に形成されていた魚骨層を切断したために、混入したものと判断される。これらの土坑は調査区の西側よりのL1・L2区に集中しており、東西約40m、南北16mの範囲に分布している。第172・173号土坑は第139号土坑と重複しており、L2a₈・b₈区に位置する。第200・326・395・400号土坑は、L2a₁・L2d₃・L1d₉・L2a₂区に位置し、相互に7～18mの比較的近距离にまとまっている。172・173号土坑とは最も近い第326号土坑とでも約23m離れている。各土坑の形状や規模は様々で、特に規格性は認められない。形状は第172・200・395号土坑が不整形円形、第173・326・400号土坑が不整形円形を呈している。規模は長径が94・100cmの第172・173号土坑、120～132cmの第326・395・400号土坑、174cmと大きい第200号土坑に大別されるが、深さは108～211cmといずれも深い土坑である。形状と規模を組みあわせた当遺跡の土坑分類にあてはめると、壁が外傾して立ちあがり、長径・深さとも100cm以上のAIIcタイプが3基（第200・326・395号土坑）、壁が垂直に立ちあがり、長径が100cm未満で、深さ100cm以上のBIcタイプが1基（第172号土坑）、壁が垂直に立ちあがり、長径100cm以上、深さ100cm以上のBIIcタイプが1基（第173号土坑）、壁が袋状を呈するDIIcタイプが1基（第400号土坑）に分れる。

これらの土坑の分布をみると、K2区の西半部に所在する谷部の南側の縁辺部に沿って分布する様子が観察される。いずれも貝ブロックが伴っている。

以下、各土坑ごとに魚骨層の検出状況について記載する。

第172号土坑

本坑内に認められる魚骨は、上記のように第173号土坑の北端部を切断したことにより混入したものと考えられる。魚骨は、底面から約50cm程までの覆土下位の中央部に堆積していた黒褐色土（8層）に認められている。壁ぎわの褐色土（9層）中には含まれていない。黒褐色土は、破碎貝や褐色土粒子を斑点状に含み、ロームブロックや炭化粒子を微量含みやわらかく締まり弱い。貝ブロックは最上位に認められるだけで、中位にはごく微量の破碎貝を含む締まり弱い暗褐色土（7層）が堆積している。

第173号土坑

本坑が当遺跡における魚骨層発見の端緒となった土坑であり、覆土下位を掘り込み中に魚骨を検出してから、底面近くに残された土層の調査を実施した。このため、魚骨を含む土層は底面から約40cm上までは確認できたが、その上にどの程度の魚骨を含む土層がどのように堆積していたかは判明していない。しかし、魚骨を含む土層は全て収納できたことは幸いであった。単に魚骨層として一括して取り上げたものがこれに相当し、底面より約40cm程度上から出土したもので、土層断面図中の第11層の下位にあたる。底面から約30～40cm上の部分の土層は、第13～18層に細分できたが、このうち魚骨を含まないのは北東側の壁寄りの上位に確認された黒褐色の第16層だけで、その他には魚骨が含まれていた。特に多くの魚骨が含まれていたのは底面から20～23cmほどの両壁寄りの最下層に堆積していた第17層で、暗褐色を呈しており、ほとんど魚骨のみというような状態であった。中央部上位の第13層が黒褐色である以外は、暗褐色土でいずれもやわらかく締まりが弱い土層で、サルボウなどの破碎貝とローム小ブロッ

クを微量混入している。

第 200 号土坑

本坑は、魚骨を含む土坑の中では比較的大形の土坑で、覆土の上位・下位に分れてハマグリ、サルボウ、シオフキを含む混土貝層が、混貝土層の間層 2 枚を挟んで堆積している。いずれも覆土の中央に位置し、黒褐色土を主としている。上位の混土貝層は 7 層で、層厚 30～35 cm を測り、貝層断面中にクロダイの顎骨などが含まれていた。直下の混貝土層は 9 層に相当し、層厚は 10～14 cm であり、その下位の混貝土層は 10 層で、層厚は 8～25 cm を測る。下位の混土貝層は 14 層で、層厚 20～40 cm を測り、下端は底面に接している。これらの 3 枚の貝層からは調査中の観察では魚骨は認められていない。

第 326 号土坑

本坑には、覆土の上位にハマグリ、シオフキを主とする混土貝層が 2 層に分れて、層厚約 60～70 cm 程度に堆積し、中位以下にはハマグリ、シオフキを主とする破砕貝が目立つ混貝土層が順次堆積している。本坑は、土坑を縦位に半截する調査方法を採用したために、断面において魚骨の存在が確認できた。魚骨は中位以下の混貝土層中に認められ、4・6・7・9 層には少量、8 層には多量に含まれている。4 層は黒褐色を呈し、締まり弱い。6 層は褐色を呈し、4 層よりもわずかに締まり弱い。7 層は極暗褐色を呈し、締まり弱い。4・6・7 層は各々約 30 cm 前後の層厚を有し、ほぼ水平に堆積している。8 層は底面から 10 cm ほど上に位置する小ブロック状の堆積を示し、9 層に取り囲まれている。8 層は厚さ 10～15 cm で、暗褐色を呈し、締まりはきわめて弱い。9 層は、底面について凹レンズ状に厚さ 10 cm 程度で堆積しており、4 層と同程度に魚骨を含む褐色土層である。本坑は、他の土坑と異なって底面が平坦ではなく、碗状を呈し、小さい。

第 395 号土坑

本坑には覆土の中位から下位にかけて貝ブロックが検出され、底面上の 20～30 cm に堆積している暗褐色土層の 10 層には魚骨が多量に含まれている。貝ブロックは、土坑のやや北側に径 32～33 cm の不整形円形を呈し、最大厚 42 cm で堆積している。貝種はハマグリ、サルボウを主体としており、上面と下面は混貝率が低く、混貝土層の状態を呈し、中央部は混土貝層である。上・下面は貝の風化が著しい。魚骨を含む暗褐色土は、主に土坑の中央から南側に認められ、炭化粒子が目立って混入しており、締まりはきわめて弱い。なお、人体貼付文注口土器は、本坑の南東側の底面近くからやや斜めをむいた状況で出土している。

第 400 号土坑

本坑は、断面が三角フラスコ状を呈し、袋状土坑に分類した。貝ブロックは南東側に認められ、長径 23 cm、短径 18 cm の楕円形を呈するが、厚さ 9 cm と薄く、ハマグリ主体である。検出位置は底面から 36 cm ほど上である。ほぼ同一面上の中央部には焼土・小木炭片・破砕貝を含む灰層が一面に径 76 cm ほどの円形に広がっており、中央部の径 30 cm ほどの範囲は特に灰や木炭が多い。この面上の北側には第 178 図 1 に示す堀之内 I 式期でも新しい段階の深鉢形土器の口縁部片がまとまって出土している。魚骨は、底面から 30～38 cm 上の灰層よりも下位の各層に含まれているが、特に目立つのは、南西側の中央部分で、

北・東側にはあまり目立たない。目立った魚骨層は、西壁寄りの断面図の第12・16・19の各層で、極暗褐色ないし黒褐色を呈し、ローム粒子・炭化粒子を多く含む締まりの弱い土層で、いずれも多量の魚骨を含んでいる。南壁側から中央にむけて斜めに16・12・19層の順で堆積しており、中央部の下面にあたる19層は魚骨がきわめて多い。また、中央部を通る土層断面によると、底面近くの6～12cmに位置する第13・14層に魚骨が多く含まれている。13・14層とも黒褐色を呈し、ローム粒子・炭化粒子を多く含み、やわらかく締まり弱い。底面に付いている14層は魚骨がきわめて多い。

各土坑出土の魚骨層から検出された自然遺物については、早稲田大学の金子浩昌先生に同定・分析を依頼し、玉稿をいただいた。

第8節 土器以外の人工遺物

1 把手（第200～201図1～19）

当遺跡3区からは縄文中期後半から後期初頭の土器に伴って数多くの把手が検出されているが、ここでは特徴のある把手を抽出して解説する。

1は、環状把手片で下端はきれいに剝離している。外面下端にわずかに縄文の痕跡が認められる。内面下端は丁寧に縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。（第16号住居跡出土）

2は、筒状把手の破片で全面に単節縄文RLが横位回転で施文され、外面下端に太い沈線が1条弧状に施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。（第17号住居跡出土）

3は、動物を象った^{かたど}と考えられる把手の破片であるが、上下端を欠失している。背面にあたる外面に縦位の沈線を施し、両側面には盲孔を有する円形貼付文と沈線および2つの貫通孔などにより文様を構成している。内面にもやや大ぶりの円形貼付文と沈線による施文が加えられている。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。（第23号住居跡出土）

4は、大きな環状把手で外面から頂部上面にかけて単節縄文RLが密に施文され、外面上位と頂部に焼成前の孔を有する。内面上位は縦ナデ、下位は横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。（第28号住居跡出土）

5は、鳥頭形を呈する把手で、器面には「8」字状乃至は「S」字状の隆帯が貼付されていたが、大半が剝落している。貼付隆帯の上部から嘴部にかけては断面三角形をなす鋭い隆線が延びている。両側面には隆線で渦巻文が描かれている。貼付隆帯には上下2か所の孔を有するが、上位は盲孔、下位は貫通孔となっている。内面には指頭により「S」字文が描かれている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。（第31号住居跡出土）

6は、鳥頭形を呈する無文の把手で、中央部に貫通孔を、両側面に盲孔を1つずつ穿っている。嘴部は細く尖り気味に整形され、下端は若干突出する。胎土は砂粒を含み、焼成は普通で、色調はにぶい褐色を呈する。（第32号住居跡出土）

7は、内外面に盲孔と沈線を加えた半月隆帯を貼付した把手の破片で、内面に明瞭な段を有する。内面からはかなり深い盲孔が穿たれている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。（第32号住居跡出土）

8は、深鉢形土器の把手で、先端が細く尖る形状を呈するが、途中で欠損している。把手の下部は一部橋状を呈する。上面には単節縄文LRが縦位回転で施文されている。把手の下端には同じ縄文が横位回転で施され、沈線で区画されている。口縁部の内外面は丁寧に横ナデされている。また、内外面に炭化物が付着しているが、内面の下端が顕著である。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。(第35号住居跡出土)

9は、筒状把手と環状把手が結合したもので、環状把手の外表面全体に単節縄文LRが施文され、筒状把手の頂部は凹み、外面には沈線で区画された磨消帯と縄文および刺突文が施されている。側面の片側には図示したような刺突文が雑に付され、内面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。(第56号住居跡出土)

10は、鳥頭形を呈する把手で、嘴部の先端を欠く。把手の頂部は平坦に作出されている。外面には断面三角形の微隆線で「S」字状のモチーフが描かれ、モチーフ間には単節縄文RLが充填されている。両側面には3個ずつの押圧を加えた円形貼付文が施され、最上部のそれは目をあらわすものとみられる。内面には押圧による凹みがあり、口縁部内面直下に明確な稜を有する。外面には若干炭化物が付着している。胎土は粗砂を含み、焼成は良好で、色調は浅黄色を呈する。(第290号土坑出土)

11は、筒状把手で頂部の中央部が凹み、頂部平坦面には「つ」の字状、逆「つ」の字状の扁平な隆帯が入り組むように施され、「つ」の字状の隆帯は外面に続き、「8」の字状のモチーフを描き、逆「つ」の字状の隆帯は内面につながり、「8」の字状のモチーフを描く。両側面には縦位の刺突列を付している。

「8」の字状のモチーフの上位部には貫通孔が外面から内面にむけて穿たれ、下位部には盲孔を有しているが、以下を欠失している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。(第330号土坑出土)

12は、小さな橋状把手を有する口縁部片で、外面には外傾する頂部に盲孔を有し、橋状把手につらなる。把手上には単節縄文LRが縦位回転で施文されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。(K5j1グリッド出土)

13は、大きな橋状把手を有する口辺部片で、把手の上端は断面三角形を呈する微隆線の区画に接続し、上位には口縁部無文帯が認められる。把手上を含めて胴部全体に単節縄文LRが縦位回転で施文されている。器面の磨耗が著しい。内面は縦ナデが加えられている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。(L1b0グリッド出土)

14は、鳥頭形を呈する把手と考えられる。嘴部が他の類例のように尖らず、頂部に小さな逆「S」字状の貼付文が付されている。外面中央部には縦長の楕円形貼付文が施され、その上下端には小さな橋状把手が付けられたと思われるが欠失している。把手の両側面には中央に1条の沈線を加えた隆帯による渦巻文が貼り付き、渦巻部に貫通孔を有している。渦巻隆帯の上面には単節縄文RLが施されている。把手の内面には逆「S」字状の扁平な隆帯が貼付され、隆帯の上位部には貫通孔が外面にむかって穿たれており、外面中央部の楕円区画文の孔と連結する。下位部は盲孔となっている。また、把手の下端には両側面を貫通する小孔が横位に穿たれている。以上に記したごとく複雑に見える装飾を有する把手であるが、基本的には鳥頭形把手をやや変形し、抽象化したものにすぎないといえよう。施文と特徴からみて中期終末の所産と思われる。胎土は砂粒を含み、色調はにぶい橙色を呈する。(L3b7グリッド出土)

15は、環状把手を有する口縁部片で、口縁部無文帯を1条の沈線で区画している。把手は無文であるが、わずかにひねりを加えた隆帯が縦位にかぶせられている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。(L3j6グリッド出土)

16は、動物を模したと考えられる把手で、両目は円形竹管で深めに刺突され、鼻孔はヘラ状施文具による軽い刺突、口は沈線を巡らして表現している。正面からみると頸部がふくらみ、頭頂部が盛り上っている。把手は深鉢形土器に附着しているもので、外面には断面三角形の微隆線による区画が施され、地文として単節縄文LRを縦位回転で施文している。把手の内外面ともヘラで丁寧にナデられており、整形は良好である。胎土は石英粒、砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。(L4e1グリッド出土)

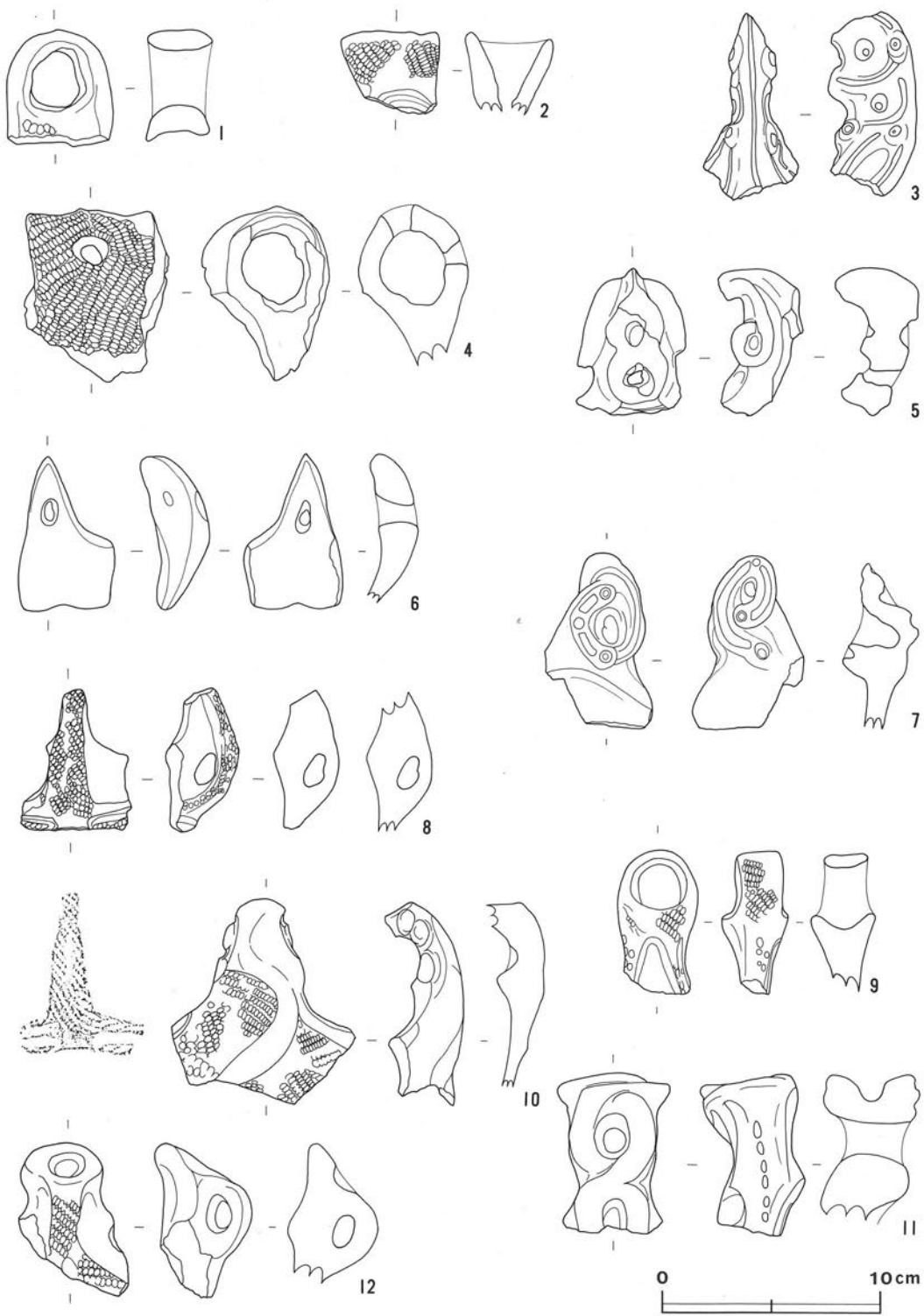
17は、筒状把手に橋状把手が付けられているもので、筒状把手の頂部が少し凹み、頂部と内面は丁寧なナデが施されている。橋状把手上には単節縄文LRが縦位回転で施文されている。胎土は石英粒、砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。(M3b0グリッド出土)

18は、鳥頭形を呈する把手で、嘴部を欠失している。外面は貼付隆線でU字状の区画をおこない、区画内に「8」の字状貼付文を加えている。欠失した嘴部から両側面にむけて渦巻文が貼付され、渦巻部を中心に小さな円形刺突文が付されている。内面にも双頭渦巻状や円形の貼付文が施され、人面を抽象化したものとも考えられる。貼付隆線のモチーフに沿って渦巻部と同様の刺突文が施されている。把手が付着している口縁部には外面に隆線区画と単節縄文LRが縦位回転で施され、内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。(M4a4グリッド出土)

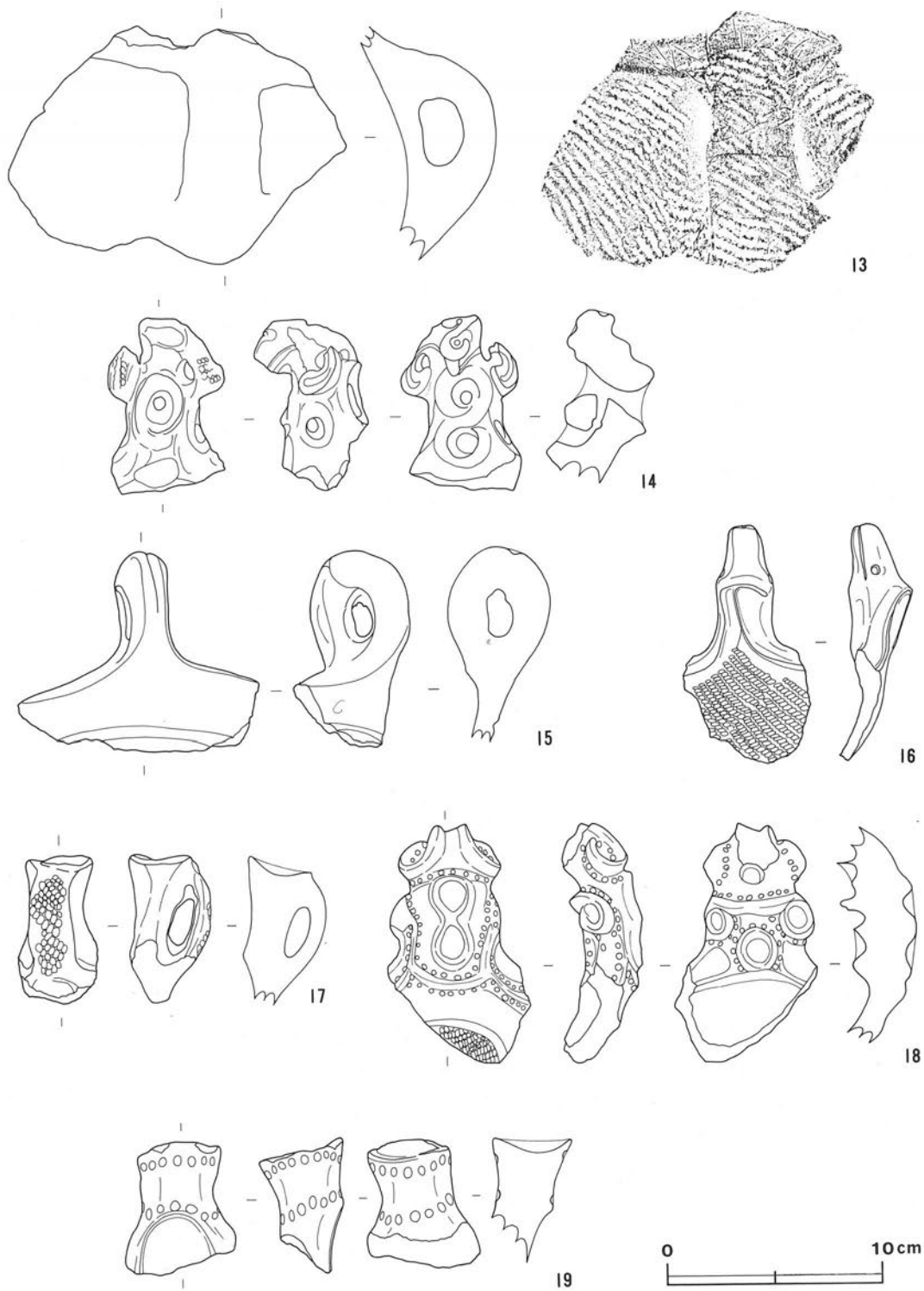
19は、筒状把手で頂部は皿状に凹み、把手の上半には全周を2段にわたって円形刺突列が巡り、下半には逆U字状の区画が断面三角形の隆線で描かれ、区画内は丁寧に磨消されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。(M4a9グリッド出土)

表5 把手一覧表(3区)

挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚さ (cm)	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚さ (cm)	出土位置	備	考	台帳 番号
第201号 1	PL48	(5.4)	(5.9)	3.0	SI16	環状把手		173	11	PL48	(7.3)	(5.2)	4.8	SK330	筒状把手		186
2	PL48	(3.8)	(4.5)	4.1	SI17	筒状把手		175	12		(7.0)	(5.2)	4.6	K5j1	橋状把手		187
3	PL48	(8.5)	(4.3)	4.0	SI23	動物把手		176	第201号 13		(11.1)	(15.8)	6.3	L1b0	橋状把手		188
4	PL48	(8.1)	(6.7)	5.9	SI28	環状把手		177	14	PL48	(8.2)	(5.5)	5.2	L3b7	鳥頭形把手		190
5	PL48	(6.8)	(5.1)	4.9	SI31	鳥頭形把手		178	15		(9.4)	(11.2)	5.5	L3j6	環状把手		191
6	PL48	(7.1)	(4.4)	3.2	SI32	鳥頭形把手		179	16	PL48	(11.0)	(5.9)	3.4	L4e1	動物把手		196
7	PL48	(8.0)	(4.9)	3.2	SI32	把手		180	17		(7.0)	(3.7)	3.9	M3b0	筒状把手		192
8		(6.5)	(5.1)	3.1	SI35	把手		181	18	PL48	(11.2)	(6.7)	3.7	M4a4	鳥頭形把手		194
9	PL48	(6.6)	(3.6)	3.0	SI56	環状把手		182	19		(6.2)	(5.2)	3.9	M4a9	筒状把手		193
10	PL48	(8.9)	(8.5)	3.6	SK290	鳥頭形把手		184									



第 200 图 把手实测图(1)



第 201 图 把手实测图(2)

2 土製品

当遺跡3・4区からは多様な土製品が出土している。一般的な土器片錘、土製円板、有孔円板などの他に土偶、垂飾および土器片を加工した三角形土製品も検出されている。これらの土製品の大半は、当遺跡出土土器の様相からみて縄文中期後半から後期前葉の時期に属するものと考えられる。以下にその概要を説明する。

(1) 土器片錘 (第202～209図1～19, 第213～215図1～7)

3区で640点、4区で179点出土しているが、このうち欠損品の大半や文様が不明瞭なものを除いて3区で369点、4区で103点を図示し、一覧表を作成した。土器片錘を出土遺構別にみると、3区では住居跡出土が280点と多く、以下土坑出土が102点、溝出土が13点、グリッドおよび表採のものが245点である。4区では住居跡出土が122点、土坑出土が28点、溝出土が16点、グリッドおよび表採のものが13点である。住居跡出土例では、縄文時代中期の加曾利EⅢ・IV式期の住居跡からのものが多く、4区の第50号住居跡からは口縁部破片を含み、相互に接合する資料が2個体分出土し、注目される。一方、古墳時代以降に比定される住居跡からの出土例もかなりある。土坑出土例では、4区の第170号土坑から11点がまとめて出土した例が注意される。これ以外の土坑や溝の覆土中から出土した土器片錘は、住居跡出土例も含めて廃棄された状態で出土している。また、遺存の状況からみると、完形のものが3区で366点、4区で98点で、それぞれ約57%、55%を占めている。完形のものの重量分布をみると、3区では16～45gの間の重量をもつものが多く、特に16～35gの間のものが多数を占めている。最も軽いものが4.2g、最も重いものが137.8gで、平均重量は34.3gである。4区では、11～40gの間の重量のものが多く、特に16～25gの間のものが多い。最も軽いものが3.0g、最も重いものが118.9gで、平均重量は35.4gである。

(2) 土製円板 (第210～211図1～22, 第215図8～13)

3区で120点、4区で9点出土しているが、このうち欠損品や文様の不明瞭なものを除いた3区で83点、4区で6点を図示し、一覧表を作成した。土製円板を出土遺構別にみると、3区では住居跡出土が55点、土坑出土が15点、溝出土が3点、グリッドおよび表採のものが47点である。4区では住居跡出土が7点、土坑出土が2点である。遺存状態は完形および一部欠損のものが3区で72点、4区で5点で、それぞれ約60%、56%を占める。完形および一部欠損のもので重量分布をみると、3区では11～25gの間のものが多く、最も軽いものが6.1g、最も重いものが59.3gで、平均重量は22.8gである。4区では完形および一部欠損のものが5点にすぎないが、重量分布は12.1g～28.5gの間に収まり、平均重量は17.8gとなる。3・4区とも一部欠損のものを含めているので、重量はやや軽くなっている。また、土製円板の中に、方形に整形されたもの(第211図10)も便宜的に含めている。

(3) 有孔円板 (第211図23～212図27, 第215図14～23)

3区で49点、4区で9点出土しており、断片も含めて全て図示、表示した。有孔円板を出土遺構別にみると、3区では住居跡出土が33点、土坑出土が9点、グリッド出土が7点である。4区では住居跡出土が7点、土坑出土が1点、グリッド出土が1点である。遺存状態をみると、欠損品が圧倒的に多く、完形のまま出土したものは3区で9点、4区で2点で、それぞれ18%、22%を占めるにすぎず、非常に破

損率が高い点が指摘できる。中央部に穿孔するという遺物の特性に由来する現象かもしれないが、使用法ともかかわると考えられ、今後の検討が必要であろう。完形品 11 点のうち 6 点の過半数が穿孔途中の例であり、有孔のものは 5 点にすぎない。穿孔途中の 6 点の重量分布は 6.5 g ~ 39.4 g の間に広がるが、両極値の例はいずれも各 1 点ずつで特異な例である。最も軽い 6.5 g の資料は、4 区の第 50 号住居跡出土で、最も重い 39.4 g の資料は 3 区の K3j3 グリッド出土である。この他の 4 点は 11.9 g ~ 18.1 g の間に収まり、平均重量は 14.7 g である。有孔のもの 5 点の重量分布は 14.0 ~ 36.2 g の間に広がるが、最も重い 36.2 g の例を除くと、14.0 g ~ 19.7 g の間に収まる。最も重い例は 3 区の第 10 号住居跡出土例である。他の 4 点の平均重量は 16.8 g となる。上記の数値はごく少ない資料から抽出したものにすぎないが、当遺跡の有孔円板についての平均重量を示しているものと考えられ、15 g 前後の個体が一般的であったと推測される。

(4) その他の土製品

上記以外の土製品は数が少ないので一括して表示することにし、各種類ごとに若干の解説を加える。土偶、腕輪、垂飾などは意図的に製作されたものであるが、三角形土製品、不明土製品と称したものは土器片を加工したものである。

イ 土偶 (第 216 図 1 ~ 7)

土偶と推測したものは 7 点あるが、いずれも肩部、腕部、脚部と思われる破片で、明確に部位を特定できないものが多い。1 は形状からみて土偶の腕から手先にかけての破片と推定したが、先端が扁平となり、へら状の土製品の可能性もある。第 1 号住居跡の覆土から出土しているが、重複する第 34 号住居跡に伴うものであろう。2 ~ 5 は、いずれもその形状からみて土偶の肩部と推定したが、5 は上端部に小突起状の瘤を有しており、脚部の可能性も考えられる。脚部とすれば、天地逆となり、膝を曲げた状態を示すものかもしれない。破片の下端の他、内側の上下端にも欠損部があり、いかなる形状を呈するのか明らかではない。6 は山形土偶の腕部片と推定される。手先がわずかに反りかえり、外面上方に 2 条の沈線が巡り、沈線間に細かな刻み目を付し、その他の外面には単節縄文 LR を横位回転で施文している。内面は少し凹み、粗いナデが加えられている。形状および施文からみて加曾利 B 式期の所産と考えられる。7 は脚部と考えられる。全体に作りが悪く、凹凸が認められる。脚の底面は 5 ~ 8 mm 程度凹み、脚端部に三角形の挟り込みを有する。1 ~ 5・7 は無文で、形状的にもあまり特徴がなく、時期の特定は困難であるが、出土遺構や出土地区などを勘案すれば、後期前葉から中葉にかけての所産と思われる。

ロ 垂飾 (第 216 図 8 ~ 9)

8・9 も古墳時代以降の所産と考えられる遺構の覆土から出土しているが、形状や施文および胎土・焼成からみて縄文時代のものであると思われる。8 は上面が甲高で、下面が平坦な形状を呈し、上面に雑な弧状の沈線を施し、両端に焼成前の 2 孔を有する。胎土に石英粒、砂粒を含み、焼成は普通である。9 は断面蛤刃状を呈する碁石状の無文の土製品で、全面丁寧に磨かれ光沢を有するほどである。中央部に焼成前の小孔をもつ。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。

ハ 腕輪 (第 216 図 10)

10 は貝輪を模したと考えられる土製品で、左上半分を欠失する。形状からみてサルボウを模倣したものである。幅 2.5 cm、最大厚 1.0 cm ほどの環状を呈し、上端はへら状工具で削ってやや薄く形が整えられるが、下端は少し厚手である。内外面とも横ナデが施されているが、さほど丁寧ではない。胎土

表6 土器片錘一覽表(3区)

插图 番号	写真 番号	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	出土位置	備 考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	出土位置	備 考	台帳 番号
第202回 1	PL49	5.4	4.5	1.0	23.0	SI1	口縁部片	1	32		3.7	3.5	1.0	18.2	SI10		32
2	〃	6.0	7.1	1.6	47.1	SI1		2	33		5.0	4.2	1.2	35.3	SI10		33
3	〃	6.1	3.9	1.0	36.6	SI1		3	34		4.4	3.4	1.1	21.3	SI10		34
4	〃	3.4	3.5	0.8	10.1	SI1		4	35		4.3	3.6	1.2	26.5	SI10		35
5	〃	5.6	3.9	1.0	24.7	SI2		5	36		4.4	3.8	1.0	21.1	SI10		36
6	〃	5.7	4.4	1.2	36.0	SI3		6	37		7.5	4.3	0.9	34.2	SI10		37
7	〃	5.3	4.4	1.4	26.9	SI3		7	38		4.5	2.8	1.2	18.0	SI10		38
8	〃	4.9	4.3	1.0	28.4	SI3		8	39		4.3	3.3	1.5	20.8	SI10		39
9	〃	4.7	3.9	0.9	17.8	SI3		9	40		4.0	3.3	1.9	26.5	SI10		40
10	〃	5.1	4.9	1.2	39.1	SI3		10	41		3.3	3.1	0.8	9.5	SI10		41
11	〃	6.8	5.4	1.1	39.0	SI6		11	42		3.0	3.0	1.0	8.0	SI10		42
12	〃	2.7	2.7	1.0	8.2	SI7		12	43		7.3	5.3	1.3	61.9	SI15		43
13	〃	5.6	4.5	1.0	40.3	SI8		13	44		5.3	4.3	1.3	33.2	SI15		44
14	〃	6.2	3.7	1.0	34.4	SI8		14	45		4.2	3.6	1.9	26.2	SI15		45
15	〃	5.2	4.1	1.1	30.1	SI8		15	46	PL49	6.8	6.1	1.0	53.8	SI16	口縁部片	46
16	〃	4.3	4.0	0.9	21.5	SI8		16	47	〃	7.4	7.2	1.3	66.3	SI16		47
17	〃	5.0	4.3	1.1	28.5	SI8		17	48	〃	3.5	2.4	1.1	11.1	SI16		48
18	〃	4.3	4.5	1.2	30.9	SI8	口縁部片	18	49	〃	6.0	5.6	0.9	32.2	SI16	口縁部片	49
19	〃	6.3	5.0	1.2	38.3	SI8	口縁部片	19	第203回 1	〃	8.2	5.7	1.1	63.8	SI16		51
20	〃	4.1	4.4	0.9	18.2	SI8		20	2	〃	4.5	7.8	1.1	42.9	SI16		50
21	〃	6.0	4.9	0.9	37.7	SI8		21	3	〃	4.6	4.1	1.1	23.6	SI16		52
22	〃	6.3	3.6	1.5	40.2	SI8	口縁部片	22	4	〃	3.9	3.3	1.1	19.0	SI17		53
23	〃	4.2	3.7	0.8	19.6	SI9		23	5	〃	4.6	4.2	0.8	18.2	SI17		54
24	〃	6.5	5.1	1.7	63.2	SI10		24	6	〃	4.3	3.1	1.0	17.9	SI17		56
25	〃	7.4	5.9	1.7	71.6	SI10	口縁部片	25	7	〃	6.5	5.0	1.1	44.8	SI17		55
26	〃	5.6	4.0	1.4	40.4	SI10		26	8	〃	4.7	4.0	1.3	34.5	SI17		58
27	〃	7.0	3.6	0.9	29.5	SI10		27	9	〃	5.7	5.6	1.4	39.6	SI17	口縁部片	57
28	〃	6.9	5.1	1.4	53.2	SI10		28	10	〃	6.1	4.1	1.2	41.8	SI17		59
29	〃	3.5	3.8	1.4	24.0	SI10		29	11	〃	4.6	4.3	1.1	23.0	SI19		60
30	〃	7.3	6.7	1.7	71.7	SI10	口縁部片	30	12	〃	3.0	2.3	0.7	6.2	SI19		61
31		5.9	5.2	1.2	46.9	SI10		31	13	〃	7.4	7.1	1.1	68.9	SI20		62

插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号
14	PL49	6.2	4.9	1.1	38.7	SI20		63	45	PL49	4.3	3.1	1.1	18.8	SI 34	口縁部片	94
15	〃	4.6	4.8	1.0	21.5	SI20		64	46	〃	6.0	5.2	1.1	36.1	SI 35		95
16	〃	8.3	5.4	1.1	60.9	SI20		65	47	〃	6.5	5.2	1.0	42.4	SI 35		96
17	〃	9.1	5.8	1.4	87.3	SI20		66	48	〃	5.7	5.3	1.1	41.7	SI 35		99
18	〃	10.2	7.4	2.1	137.8	SI20	口縁部片	67	49	〃	5.2	4.2	0.8	29.0	SI 35		97
19	〃	6.5	6.4	1.0	51.0	SI20		68	第204号 1	〃	7.6	5.9	1.1	53.7	SI 35		98
20	〃	6.5	6.1	1.0	55.6	SI20		72	2	〃	5.8	6.2	1.2	46.9	SI 35		100
21	〃	4.4	4.1	0.9	20.9	SI20		69	3	〃	7.1	4.8	1.2	43.1	SI 35		101
22	〃	7.4	4.7	1.1	60.9	SI20		71	4	〃	5.4	3.7	0.9	23.9	SI 35	口縁部片	102
23	〃	3.6	3.5	1.0	13.9	SI20		70	5	〃	5.3	4.5	0.9	25.3	SI 35		103
24	〃	6.0	4.2	0.7	27.6	SI21		73	6	〃	6.1	4.5	1.0	35.1	SI 35		104
25	〃	3.1	3.1	0.9	10.1	SI21	口縁部片	74	7	〃	6.2	4.8	1.1	44.0	SI 35		105
26	〃	4.3	3.5	0.9	16.3	SI25		75	8	〃	5.5	5.2	0.9	30.4	SI 38		106
27	〃	(4.3)	5.0	0.8	28.2	SI25		76	9	〃	5.7	4.4	1.0	36.9	SI 41		107
28	〃	4.5	4.1	0.7	23.1	SI26		77	10	〃	6.9	5.4	1.0	53.6	SI 41		108
29	〃	(5.8)	4.6	1.2	28.5	SI30		78	11	〃	7.2	5.0	1.1	49.3	SI 41		109
30	〃	4.2	3.3	0.8	15.4	SI30		79	12	〃	4.2	3.3	1.1	21.3	SI 46		110
31	〃	5.1	4.3	0.9	25.9	SI30		81	13	〃	4.7	3.7	0.8	20.1	SI 47		111
32	〃	5.0	3.8	1.0	27.3	SI30		80	14	〃	6.3	5.4	1.3	58.3	SI 47		112
33	〃	7.2	4.8	1.0	45.3	SI30		82	15	〃	7.8	7.3	1.5	81.2	SI 48		113
34	〃	6.9	6.6	1.1	58.9	SI31		83	16	〃	4.0	3.9	1.3	24.9	SI 49		115
35	〃	7.1	6.3	1.0	51.6	SI32		84	17	〃	4.3	4.3	1.5	27.3	SI 49	口縁部片	116
36	〃	6.4	4.6	1.3	50.0	SI32	口縁部片	85	18	〃	3.6	3.0	0.9	11.5	SI 49		117
37	〃	4.1	3.5	0.7	17.8	SI32		86	19	〃	5.1	4.5	0.8	23.1	SI 49		118
38	〃	4.6	4.0	1.1	24.3	SI32		87	20	〃	8.5	4.2	0.9	48.4	SI 49		114
39	〃	5.6	4.0	0.9	21.5	SI32		88	21	〃	5.9	4.6	1.0	34.6	SI 49		119
40	〃	4.1	3.3	1.0	17.9	SI33		89	22	〃	6.2	4.5	1.1	36.3	SI 51		120
41	〃	4.1	4.7	1.3	31.0	SI33		90	23	〃	4.1	2.9	0.8	11.6	SI 56		123
42	〃	6.5	3.6	1.2	37.1	SI33		91	24	〃	7.0	4.7	1.2	57.4	SI 56	口縁部片	121
43	〃	5.7	5.2	1.4	42.5	SI34	口縁部片	92	25	〃	5.6	4.7	1.2	43.7	SI 56		122
44	〃	4.6	4.7	0.7	24.0	SI34		93	26	〃	4.4	4.4	1.4	28.0	SI 57		124

挿図 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号
27	PL49	5.6	5.7	1.1	36.7	SI 59		125	8	PL50	3.7	3.1	1.1	16.0	SI107		156
28	〃	4.4	3.0	1.3	20.5	SI 61	口縁部片	126	9	〃	3.8	3.5	1.0	16.2	SI108		157
29	〃	5.6	3.9	1.4	28.5	SI 62		127	10	〃	8.1	4.6	0.9	47.0	SI112		158
30	〃	4.1	3.3	1.1	17.5	SI 68		128	11	〃	5.1	4.4	1.2	39.9	SI112		159
31	〃	6.0	5.2	1.7	47.7	SI 71		129	12	〃	7.2	3.6	1.0	35.5	SK18	口縁部片	160
32	〃	4.8	3.5	0.9	19.0	SI 74		131	13	〃	5.7	3.9	0.9	24.9	SK35		161
33	〃	4.0	4.0	0.9	14.4	SI 74		132	14		4.7	4.3	1.0	21.2	SK45		162
34	PL50	4.8	3.5	1.0	19.4	SI 74		134	15		5.9	5.7	1.3	64.2	SK57		163
35	〃	6.1	4.5	0.8	28.1	SI 74		133	16		5.5	3.4	1.1	29.9	SK95		165
36	〃	5.6	5.4	1.1	34.0	SI 74		130	17		5.6	5.0	1.2	41.0	SK101		166
37	〃	5.7	4.7	1.1	31.8	SI 76		135	18		7.2	5.9	1.9	70.7	SK88	口縁部片	164
38	〃	5.5	4.4	0.9	22.8	SI 76		136	19		4.1	3.3	1.5	22.5	SK128		168
39	〃	4.8	3.8	1.0	22.7	SI 78		137	20		5.9	4.2	1.2	37.3	SK106		167
40	〃	6.3	4.7	0.9	40.6	SI 79		138	21		5.5	4.2	0.9	29.0	SK145		170
41	〃	5.3	3.2	0.7	17.5	SI 79		140	22		5.0	5.1	1.1	26.4	SK145		171
42	〃	3.9	3.1	0.9	16.5	SI 79	口縁部片	139	23		4.9	3.5	1.2	27.3	SK136		169
43	〃	5.1	4.2	1.4	31.8	SI 83		143	24		3.6	2.4	0.9	13.1	SK149		172
44	〃	6.5	4.4	1.0	35.6	SI 80		141	25		6.5	4.3	1.1	30.1	SK154		173
45	〃	6.3	5.1	1.0	40.5	SI 81		142	26		4.8	4.3	0.8	22.3	SK154		174
46	〃	5.9	5.5	1.1	44.0	SI 88		144	27		6.2	3.8	1.0	31.3	SK154		175
47	〃	6.3	4.9	0.9	32.0	SI 88		145	28		7.0	4.7	0.9	40.1	SK154		176
48	〃	6.1	4.9	1.1	31.2	SI 93		146	29		6.0	3.9	0.9	36.5	SK156		177
49	〃	7.5	7.5	1.0	74.7	SI 96		147	30		5.1	4.0	1.4	38.0	SK156		178
50	〃	4.2	4.9	0.9	23.7	SI 96		149	31		5.8	3.7	1.1	30.5	SK156		179
第205図 1	〃	5.2	3.6	1.7	25.9	SI 96	口縁部片	148	32		8.2	4.7	1.2	64.4	SK156		180
2	〃	4.5	3.9	0.8	19.7	SI101		150	33		6.1	6.1	1.4	62.5	SK156		181
3	〃	3.8	3.0	0.9	16.7	SI104		151	34		2.8	2.8	0.8	6.9	SK166		182
4	〃	3.9	2.6	0.9	12.8	SI104		152	35		3.6	3.0	1.3	18.4	SK191		190
5	〃	5.1	3.8	1.0	30.5	SI105		153	36		5.9	4.2	1.2	35.7	SK173		183
6	〃	4.1	3.7	0.9	20.4	SI105		154	37		5.8	6.1	1.4	50.6	SK178		184
7	〃	5.4	5.1	1.0	25.3	SI107		155	38		6.5	5.6	2.0	46.1	SK178	口縁部片	185

插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号
39		3.6	3.4	1.6	20.8	SK178	口縁部片	186	19		5.6	5.1	0.9	29.9	SD 5		218
40		4.4	4.4	0.9	17.2	SK178		187	20		8.6	5.3	1.2	64.7	SD 5	口縁部片	219
41		5.2	3.1	1.1	19.8	SK178		188	21		9.2	5.6	1.4	95.1	SD5		220
42		5.0	4.4	1.7	26.2	SK178		189	22	PL50	5.2	4.1	1.1	20.6	表採		221
43		7.1	4.9	1.3	53.2	SK214		191	23	◇	5.8	5.2	1.1	40.1	表採		222
44		6.5	5.6	1.4	61.7	SK214		192	24	◇	5.8	4.2	1.1	21.5	表採		223
45	PL50	6.5	5.5	1.3	52.0	SK230		193	25	◇	4.8	4.7	1.4	32.0	表採	口縁部片	224
46	◇	6.2	4.9	1.3	50.6	SK251		194	26	◇	4.3	2.9	1.0	15.1	表採		225
47	◇	5.1	3.0	1.1	22.5	SK251	口縁部片	195	27	◇	6.6	5.3	1.3	34.3	表採		226
48	◇	6.4	4.9	1.2	42.6	SK286		196	28	◇	5.4	3.3	1.1	22.5	表採		227
49	◇	5.0	3.3	0.9	16.0	SK286		197	29	◇	5.1	3.3	1.1	22.4	表採		228
50	◇	4.3	4.3	1.6	30.8	SK290		198	30	◇	7.5	6.1	1.4	72.7	表採		229
51	◇	6.5	5.8	1.0	38.9	SK290		199	31	◇	6.3	3.9	0.9	34.2	表採		231
第206回 1	◇	7.8	5.8	1.7	63.3	SK295	口縁部片	200	32	◇	7.2	5.5	1.3	47.2	表採	口縁部片	230
2	◇	6.0	4.5	1.2	35.4	SK304		201	33	◇	7.4	6.0	1.2	57.1	表採		232
3	◇	3.7	2.7	1.0	12.2	SK304		202	34	◇	6.8	6.1	1.1	52.3	表採		234
4	◇	3.3	3.4	0.9	13.7	SK305		203	35	◇	5.1	4.6	0.8	24.8	表採		235
5	◇	3.0	2.5	0.9	9.2	SK305		204	36	◇	5.0	3.5	0.8	20.1	表採		236
6	◇	5.2	3.7	0.9	22.8	SK337		205	37	◇	5.2	4.7	0.9	25.7	表採		237
7	◇	5.4	4.1	1.0	25.3	SK338		206	38	◇	6.8	3.9	1.0	28.5	表採		233
8	◇	5.8	4.9	1.1	37.9	SK350		207	39		5.0	3.8	1.1	21.1	表採		238
9		4.0	3.1	1.1	13.7	SK353	口縁部片	208	40		6.5	4.0	1.1	31.2	表採		240
10		4.9	4.6	1.4	39.8	SK362		211	41		5.4	3.5	1.0	23.1	表採		239
11		5.8	4.8	1.6	39.9	SK362	口縁部片	210	42		5.5	5.6	1.6	33.4	表採	口縁部片	241
12		7.1	5.1	1.3	61.1	SK362	口縁部片	209	43		4.7	4.3	1.5	31.2	表採	口縁部片	244
13		5.4	3.1	1.1	23.5	SK362		212	44		5.6	4.3	1.0	25.5	表採		242
14		4.8	4.4	1.0	25.4	SK386		213	45		7.3	5.4	1.7	65.6	表採	口縁部片	243
15		6.6	4.4	1.1	34.5	SK393		214	46		6.0	4.6	1.2	42.2	表採		246
16		3.8	2.9	1.1	12.2	SK394		215	47		3.6	3.8	0.9	15.3	表採		245
17		4.2	3.9	1.1	21.5	SK396		216	48		5.3	4.2	1.2	35.5	K2f9		247
18		5.2	4.7	0.9	30.7	SD3		217	49		5.3	5.1	1.1	38.9	K2g9		248

插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備	考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備	考	台帳 番号
50		6.2	4.6	1.0	33.2	K3g8			250	30		5.3	3.1	1.0	20.9	K4j8			280
51		2.5	3.4	1.0	10.0	K3f7			249	31		8.0	6.1	1.2	74.9	L1f0			281
第207回 1		6.3	5.4	1.2	41.3	K3h5			251	32		4.6	4.3	1.2	29.1	L1b0			282
2		3.7	3.5	1.1	16.1	K3h5			252	33	PL50	3.4	3.0	0.7	9.5	L2b1			283
3		6.3	4.1	1.0	31.1	K3h5	口縁部片		253	34	◇	5.1	3.5	1.1	28.0	L2b6			284
4		5.4	4.2	1.4	26.1	K3h8	口縁部片		254	35	◇	4.4	3.8	1.0	20.2	L2e1			287
5		4.8	4.5	1.3	32.0	K3i1	口縁部片		255	36	◇	8.5	6.7	1.4	96.1	L2e7	口縁部片		288
6		3.5	3.1	0.8	10.2	K3i5			256	37	◇	8.2	5.2	1.3	58.7	L2d2			286
7		7.3	5.2	1.0	43.3	K3i5			257	38	◇	7.1	5.4	0.8	33.4	L2d1			285
8		7.0	6.0	1.2	41.0	K3i6			258	39	◇	7.6	5.6	1.6	77.8	L2e9	口縁部片		290
9		5.8	5.4	1.0	33.5	K3i9			260	40	◇	5.0	4.6	1.2	27.7	L2e9	口縁部片		289
10		5.1	4.4	1.2	31.4	K3i8			259	41	◇	7.3	4.9	1.0	40.4	L2j5			291
11		(3.3)	4.7	1.1	22.9	K3i9			261	42	◇	6.2	5.9	1.3	51.4	L2j8			292
12		4.0	2.3	0.8	10.8	K3j3			262	43	◇	5.1	3.7	0.9	17.9	L3a5			293
13		4.9	4.7	1.2	32.6	K3j3			263	44	◇	4.4	3.8	0.9	23.2	L3a7	口縁部片		294
14		4.9	5.0	1.0	28.0	K3j6			264	45	◇	5.4	4.6	1.1	34.4	L3a7			295
15		6.2	4.4	0.9	42.1	K3j7			265	46		6.0	4.3	0.8	24.0	L3b6	口縁部片		296
16		4.4	3.3	1.0	18.0	K4g6			266	47		7.7	7.2	1.4	75.7	L3c5			299
17		4.2	3.3	1.0	13.8	K4g6			267	48		5.6	4.3	1.4	39.1	L3c5	口縁部片		300
18		3.5	3.6	1.2	16.5	K4g9			269	49	PL50	4.9	3.1	0.9	21.2	L3b7			297
19		6.1	6.1	1.2	42.7	K4g9			268	50	◇	4.1	3.5	1.3	23.9	L3b7			298
20		6.7	4.7	1.2	52.0	K4h9			271	第208回 1		6.4	5.9	1.5	74.6	L3c5			301
21		5.9	3.9	1.0	20.7	K4h9			270	2		7.1	4.7	1.6	60.0	L3c6			302
22		5.5	4.8	1.1	32.0	K4i6			272	3		6.6	4.9	1.6	62.5	L3c0			303
23		6.7	5.0	1.4	55.4	K4i8			273	4		5.0	4.9	1.4	33.0	L3e6	口縁部片		304
24		4.6	4.8	1.1	29.8	K4j5			274	5		5.8	4.8	1.2	39.2	L3e7			305
25		5.4	3.3	1.0	21.2	K4j5			275	6		5.9	4.6	1.0	33.0	L3g6			306
26		5.2	3.9	1.0	22.2	K3j5			276	7		5.4	4.6	1.0	29.8	L3h0			309
27		6.8	4.2	1.7	48.5	K4j6	口縁部片		277	8		7.9	6.4	1.0	47.1	L3g9			307
28		4.9	4.4	1.3	32.2	K4j6			278	9		8.5	6.2	1.0	60.9	L3g0			308
29		4.5	3.5	1.0	17.2	K4j7			279	10		4.6	2.4	0.9	13.4	L3i1			310

插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備	考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備	考	台帳 番号
11		5.0	4.4	1.0	28.2	L3i9			311	42		4.7	4.6	1.3	30.2	L4j1	口縁部片		343
12		5.0	4.9	1.3	38.1	L3i0			312	43		3.2	4.4	0.9	18.0	L4i9			342
13		5.7	4.8	0.9	24.3	L4a5			313	44		5.4	4.8	1.0	34.4	L4i7			344
14		5.8	5.6	1.0	31.2	L4a5			314	45		3.8	3.0	1.0	15.2	L4			346
15		5.2	4.3	1.4	32.8	L4a5			315	46		5.3	3.8	1.5	40.5	L4			345
16		5.7	5.7	1.1	42.8	L4a5			316	47		5.8	5.7	1.3	37.1	L4			347
17		5.2	4.1	1.2	29.4	L4a6	口縁部片		318	48		6.3	4.8	1.2	47.7	M2a5			348
18		5.2	5.3	1.1	40.6	L4a6			317	49		6.0	5.3	1.1	47.1	M2d2			349
19		3.8	3.0	1.0	13.2	L4a7			319	50		6.2	4.8	1.8	44.1	M2h8			350
20		4.0	3.0	0.9	13.7	L4a8			320	第209回 1		6.8	6.5	1.1	50.0	M3a0	口縁部片		351
21		4.8	3.1	1.2	19.7	L4a8			321	2		6.0	5.4	2.8	63.9	M3c7	口縁部片		352
22		5.7	4.0	0.7	23.8	L4b9			322	3		5.5	4.9	1.2	38.4	M3c7			353
23		5.4	5.2	1.3	33.3	L4c3			323	4		3.5	3.6	0.9	9.3	M3i1	口縁部片		354
24		4.3	3.6	1.0	19.5	L4c3			324	5	PL50	3.2	3.1	0.9	8.1	M4a6	口縁部片		355
25		4.9	3.8	0.7	19.5	L4c3			325	6	〃	4.9	4.2	0.8	19.5	M4c3			356
26		4.1	3.8	1.2	22.1	L4c7	口縁部片		326	7	〃	3.7	3.1	1.2	14.5	M4c5			357
27		5.2	4.7	1.2	33.5	L4c9			327	8	〃	5.2	5.0	1.1	37.8	M4d2			358
28	PL50	5.7	4.9	1.2	32.5	L4d0	口縁部片		328	9	〃	6.6	4.5	0.9	23.8	M4e1			359
29	〃	7.0	6.7	1.4	85.0	L4e5			329	10	〃	7.0	4.9	1.5	53.1	M5a2			360
30	〃	4.6	4.6	1.2	31.9	L4e5			330	11	〃	4.2	3.5	1.0	17.5	M5b2			361
31	〃	7.3	3.8	1.2	44.0	L4e7			331	12	〃	7.4	5.7	1.1	52.3	N1a9			362
32	〃	6.3	4.4	1.2	34.3	L4e9	口縁部片		332	13	〃	5.5	4.8	1.1	38.9	N4a2			363
33	〃	4.1	3.9	0.8	18.8	L4f2			333	14	〃	7.3	6.0	1.3	48.5	SI 34			497
34	〃	5.7	4.9	1.1	34.7	L4g7			334	15	〃	6.2	3.3	0.9	25.2	SI 34			496
35	〃	4.8	4.0	1.0	26.1	L4h2			335	16		7.1	6.4	1.1	60.5	SI 88			520
36	〃	6.0	4.4	1.4	34.6	L4b5	口縁部片		336	17	PL50	3.6	2.6	0.8	4.2	S149			498
37	〃	5.4	4.5	1.7	38.2	L4i5	底部片		337	18		10.2	7.4	0.9	97.5	SI 106			521
38	〃	6.8	3.2	0.9	31.1	L4i7			338	19		10.3	5.8	1.1	81.8	SI 106			522
39	〃	5.5	5.8	1.4	51.1	L4i7			339										
40	〃	3.4	3.2	0.8	9.9	L4i8			341										
41	〃	5.8	5.5	1.0	29.6	L4i8			340										

表7 土器片錘一覽表(4区)

挿図 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備	考	台帳 番号
第213区 1	PL50	3.5	2.9	1.1	15.0	SI4			1	32		6.7	6.0	1.1	53.7	SK170			32
2	〃	3.8	2.9	0.8	12.7	SI4			2	33		5.8	3.9	1.1	28.8	SK170			33
3	〃	3.9	3.4	1.1	20.5	SI4			3	34		8.6	6.4	1.8	70.7	SK171	口縁部片		34
4	〃	5.7	3.3	1.4	33.3	SI4			4	35		4.6	3.9	1.2	21.3	SK171			35
5	〃	8.2	7.1	1.5	118.9	SI5			5	36		4.6	3.7	1.5	32.2	SK172			36
6	〃	7.7	6.5	1.4	68.4	SI5	口縁部片		6	37		5.8	3.3	1.1	24.5	SK175	口縁部片		37
7	〃	3.7	4.9	0.9	19.3	SI5			7	38		5.4	5.6	1.2	31.2	SK181			38
8	〃	5.8	4.5	1.3	39.6	SI5			8	39		5.4	4.5	1.1	27.1	SK181			39
9	〃	5.5	5.0	1.1	37.5	SI5			9	40		3.7	3.1	1.1	15.2	SD2			40
10	〃	4.7	3.9	1.0	22.3	SI6			11	41		5.0	4.7	1.2	35.1	SD2			41
11	〃	3.5	3.2	0.9	11.8	SI6			10	42		7.0	4.6	1.1	41.1	SD4			43
12	〃	4.3	3.2	1.5	23.9	SI7			12	43		6.1	3.9	2.0	53.6	SD4	口縁部片		42
13	〃	4.8	3.6	1.0	20.7	SI7	口縁部片		13	44		9.3	7.3	1.4	85.9	L6			44
14	〃	9.7	5.9	1.2	80.7	SI19			14	45		5.8	5.8	1.2	56.0	M70	口縁部片		46
15	〃	6.4	4.5	0.9	24.0	SI19			15	46		4.3	3.5	1.0	18.5	M6e4			45
16	〃	5.5	5.7	1.0	28.4	SI19			16	47		5.5	4.9	1.4	39.4	N7d7			47
17		4.5	4.3	1.0	26.6	SI39			17	48		5.1	4.6	0.9	28.3	N7e5			48
18		4.2	4.0	0.8	16.7	SK28			18	49		4.8	3.8	1.2	27.3	N7i3			49
19		4.2	3.1	1.0	17.4	SK47			19	50		3.9	3.5	1.1	19.8	SI4			51
20		3.8	4.0	0.8	13.6	SK51			20	51		4.0	3.0	1.0	12.6	SI4			50
21		1.9	1.9	0.7	3.0	SK66			21	第214区 1		9.3	5.9	1.1	66.5	SI50	口縁部片		68
22		4.7	4.3	1.0	24.4	SK166			22	2		6.2	5.4	0.9	41.7	〃	口縁部片		69
23		8.2	5.8	1.1	51.0	SK170	口縁部片		23	3		5.8	(4.7)	1.0	(55.9)	〃	口縁部片		70
24		7.2	5.2	1.4	65.0	SK170			24	4		7.1	7.2	0.7	53.7	〃	口縁部片		71
25		6.7	4.5	1.0	39.3	SK170			25	5		4.8	4.2	1.0	22.3	〃	口縁部片		72
26		5.0	4.3	0.7	20.3	SK170			26	6		7.2	5.8	1.0	56.7	〃			73
27		5.8	3.7	0.9	24.3	SK170			27	7		5.1	6.4	1.0	41.4	〃			74
28		6.6	5.3	1.2	38.6	SK170			31	8		8.8	7.2	0.8	69.0	〃			75
29		5.5	4.9	1.1	34.2	SK170			30	9		6.1	5.4	1.0	43.2	〃			76
30		3.4	3.7	1.1	18.2	SK170			28	10		6.2	5.2	1.0	46.7	〃			77
31		4.0	3.3	0.8	12.3	SK170			29	11		7.1	6.2	1.2	79.8	〃			78

插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号
	12	6.3	5.9	0.7	35.3	SI 50		80	33		5.0	4.1	0.9	19.5	SI 50		100
	13	8.6	7.8	1.3	97.5	〃		79	34		4.5	5.3	0.9	23.9	〃		101
	14	7.1	5.2	0.9	44.6	〃		81	35		3.4	3.6	0.9	15.3	〃		102
	15	5.9	4.4	1.0	24.2	〃		82	36		4.4	4.2	0.9	23.1	〃		103
	16	7.2	6.5	1.1	60.1	〃		83	37		3.7	3.3	0.7	13.6	〃		104
	17	6.4	4.6	1.1	43.3	〃		84	38		2.7	2.0	0.9	5.7	〃		106
	18	5.7	6.3	1.2	49.3	〃		85	39		2.6	2.1	1.0	7.1	〃		107
	19	6.7	4.7	1.2	47.5	〃		86	40		7.3	5.6	1.1	63.4	〃	口縁部片	109
	20	6.2	5.1	0.9	29.0	〃		87	41		8.0	6.5	0.8	62.7	〃		110
	21	5.8	4.8	1.1	38.1	〃		88	42		6.7	5.5	0.8	46.9	〃		111
	22	6.1	3.8	0.9	23.6	〃		89	43		7.3	6.5	1.0	63.6	〃	口縁部片	113
	23	5.9	3.3	1.0	35.2	〃		90	44		(8.4)	6.0	0.9	(58.4)	〃		114
	24	5.4	4.1	1.1	35.4	〃		91	45		8.4	5.2	0.9	45.9	〃		115
	25	4.1	4.2	1.1	21.8	〃		93	第215図 1		4.4	4.3	0.8	19.3	〃		105
	26	4.9	3.2	0.9	18.9	〃		94	2		4.6	5.0	1.2	29.5	〃		108
	27	5.1	4.7	0.7	21.1	〃		92	3		(3.4)	4.7	0.7	(14.8)	〃		112
	28	4.5	4.1	1.0	21.9	〃		95	4		(3.9)	6.1	0.9	(26.4)	〃		116
	29	4.6	4.9	0.8	26.0	〃		96	5		5.6	3.9	1.0	24.2	〃		117
	30	5.2	4.2	1.2	35.4	〃		98	6		(4.6)	3.9	0.7	(17.2)	〃		118
	31	4.5	4.4	0.9	19.7	〃		97	7		5.5	5.3	0.9	30.5	〃	口縁部片	119
	32	4.7	3.2	1.0	17.9	〃		99									

表8 土製円板一覧表(3区)

挿図 番号	写真 番号	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	出土位置	備	考	台帳 番号
第210図 1	PL51	4.5	4.3	1.2	22.1	SI 1	完	形	C 364	32	PL51	3.4	3.5	1.3	12.5	SI 49	一部欠損	B	395
2	〃	4.1	3.6	1.2	14.7	SI 1	一部欠損	B	366	33	〃	3.5	3.4	1.1	16.2	SI 49	一部欠損	B	396
3	〃	3.3	3.2	1.0	8.9	SI 1	一部欠損	B	365	34	〃	5.9	5.8	1.1	25.4	SI 49	一部欠損	C	397
4	〃	4.8	4.1	1.0	20.5	SI 2	一部欠損	A	367	35	〃	5.8	5.6	1.2	34.9	SI 50	一部欠損	B	399
5	〃	5.7	5.7	1.4	49.8	SI 3	完	形	B 368	36	〃	3.2	3.0	1.0	11.8	SI 60	完	形	B 398
6		4.6	3.9	1.0	17.9	SI 3	一部欠損	C	369	37		(3.8)	5.6	1.5	(34.0)	SI 72	半	欠	A 400
7		4.1	(3.3)	0.9	(10.3)	SI 3	欠	損	A 370	38		(2.3)	3.8	0.9	(6.3)	SI 72	半	欠	B 401
8	PL51	4.3	4.8	1.5	31.2	SI 3	完	形	B 371	39	PL51	3.8	3.9	0.9	13.2	SI 78	一部欠損	B	402
9	〃	3.5	3.5	1.1	12.4	SI 4	一部欠損	B	372	40	〃	2.7	2.8	1.1	7.5	SI 78	一部欠損	B	403
10	〃	5.6	5.6	1.2	46.9	SI 5	完	形	B 373	41	〃	3.9	3.8	1.1	17.9	SI 79	完	形	A 404
11	〃	2.8	2.7	1.0	7.2	SI 5	完	形	B 374	42		(3.2)	4.5	1.1	(19.2)	SI 79	半	欠	A 405
12	〃	3.9	4.1	1.4	23.0	SI 9	一部欠損	B	377	43	PL51	5.2	5.1	1.1	29.0	SI105	完	形	A 407
13	〃	4.7	4.8	1.5	30.9	SI 9	底部使用 一部欠損	A	378	44	〃	2.8	2.8	1.0	8.2	SI 88	一部欠損	A	406
14	〃	6.4	6.4	1.8	45.3	SI 9	完	形	A 376	45	〃	4.0	3.8	1.1	17.6	SI106	一部欠損	A	408
15	〃	3.5	3.2	1.3	13.1	SI 7	一部欠損	B	375	46		4.8	5.2	1.1	23.4	SI107	一部欠損	B	409
16		5.4	(4.7)	1.4	26.0	SI 10	欠	損	A 379	47		2.7	3.0	1.2	10.9	SI107	一部欠損	B	410
17	PL51	3.0	3.1	0.7	6.4	SI 10	一部欠損	A	380	48	PL51	4.2	3.9	1.0	18.0	SK60	一部欠損	B	411
18	〃	4.8	4.6	1.0	24.9	SI 10	一部欠損	B	381	49	〃	5.7	5.6	1.1	27.9	SK95	一部欠損	C	412
19	〃	4.5	4.6	0.9	23.7	SI 16	一部欠損	A	382	50	〃	3.0	3.1	1.3	12.3	SK101	完	形	A 413
20		(4.3)	(3.0)	1.0	(14.0)	SI 16	断	欠	A 383	51	〃	4.0	4.6	0.9	16.6	SK145	一部欠損	C	414
21		(5.0)	6.8	1.4	(44.7)	SI 17	欠	損	A 387	52	〃	3.6	3.6	1.3	18.0	SK191	一部欠損	B	415
22	PL51	3.9	4.3	1.0	17.3	SI 17	完	形	A 385	53	〃	(2.8)	3.8	0.9	(11.0)	SK251	半	欠	A 417
23		4.4	5.2	1.1	28.2	SI 17	一部欠損	C	386	54	〃	4.2	4.6	1.3	28.0	SK230	完	形	B 416
24	PL51	5.1	5.5	1.4	38.5	SI 17	一部欠損	A	384	55	〃	4.2	4.3	1.1	22.8	SK299	一部欠損	B	418
25	〃	4.7	4.3	1.2	26.3	SI 19	一部欠損	B	388	56	〃	3.6	3.9	1.3	18.6	SK362	一部欠損	B	419
26		3.0	3.3	1.2	13.1	SI 19	一部欠損	C	389	57	〃	4.8	4.7	0.8	19.3	SK389	一部欠損	B	420
27	PL51	4.8	4.8	0.8	19.3	SI 20	完	形	A 390	58	〃	3.3	3.1	0.8	9.0	SK396	一部欠損	A	421
28	〃	4.0	4.0	1.3	21.4	SI 20	一部欠損	C	391	59	〃	4.0	4.2	1.2	21.3	SK396	完	形	A 422
29	〃	3.5	3.3	1.0	12.1	SI 30	一部欠損	C	392	60	〃	4.5	3.6	1.4	23.1	SK404	方板完形	B	423
30	〃	6.5	6.4	1.4	54.4	SI 34	完	形	C 393	61	〃	3.2	3.3	1.0	13.3	K3f1	一部欠損	B	424
31	〃	5.8	5.8	1.3	38.8	SI 49	完	形	B 394										

插图 番号	写真 番号	縦(cm)横(cm)厚(cm)重(g)				出土位置	備	考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦(cm)横(cm)厚(cm)重(g)				出土位置	備	考	台帳 番号
		縦	横	厚	重							縦	横	厚	重				
第211区 1	PL51	5.5	5.8	1.4	36.5	K37	一部欠損	B	425	12		(3.1)	(4.5)	0.9	(10.3)	L4a7	半欠	A	436
2	〃	4.1	4.4	0.8	16.0	K39	一部欠損	B	426	13		3.3	3.7	1.2	19.1	L4b4	方板完形	A	437
3		2.9	2.5	1.0	6.1	K4g3	一部欠損	B	427	14	PL51	5.8	6.5	1.4	59.3	L4c3	一部欠損	B	438
4		(2.9)	6.2	1.2	(16.1)	K4i0	断欠	A	428	15	〃	4.3	4.8	1.1	23.7	M3a3	一部欠損	C	439
5	PL51	3.3	3.7	1.3	17.1	L1j0	一部欠損	B	429	16	〃	4.6	4.7	1.1	27.9	M3a4	一部欠損	A	440
6	〃	3.1	3.2	1.0	10.1	L2g4	一部欠損	B	430	17	〃	4.5	4.8	1.3	30.7	M4d8	口縁利用 一部欠損	A	441
7	〃	4.1	3.5	0.9	21.6	L3d7	一部欠損	B	433	18		2.6	2.3	1.0	6.1	M5c2	一部欠損	B	442
8	〃	2.9	4.3	1.6	38.4	L3i9	方板 一部欠損	A	434	19		4.8	4.6	1.4	26.6	SD 7	一部欠損	A	443
9	〃	3.2	3.0	1.2	12.8	L3a7	完形	A	431	20		6.5	6.7	1.2	49.3	表採	一部欠損	A	444
10	〃	4.0	3.8	1.1	18.9	L3a7	方板 完形	A	435	21		(4.0)	4.1	1.0	(18.3)	表採	半欠	A	445
11	〃	5.9	6.0	1.4	38.9	L3c7	一部欠損	C	432	22		4.7	5.3	1.2	31.7	M3c7	口縁利用 一部欠損	B	446

表9 土製円板一覧表(4区)

插图 番号	写真 番号	縦(cm)横(cm)厚(cm)重(g)				出土位置	備	考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦(cm)横(cm)厚(cm)重(g)				出土位置	備	考	台帳 番号
		縦	横	厚	重							縦	横	厚	重				
第215区 8		5.3	(3.0)	1.2	(15.2)	SI 7	半欠	A	52	11		(2.4)	3.8	0.9	(8.2)	SI 50	半欠	A	55
9		3.3	3.5	1.0	12.1	SI 5	一部欠損	A	53	12		3.3	3.2	1.1	12.3	SK12	一部欠損	A	57
10		3.8	3.6	1.3	16.9	SI 19	一部欠損	A	54	13		4.8	5.1	1.1	28.5	SK24	一部欠損	C	58

表10 有孔円板一覧表(3区)

插图 番号	写真 番号	縦(cm)横(cm)厚(cm)重(g)				出土位置	備	考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦(cm)横(cm)厚(cm)重(g)				出土位置	備	考	台帳 番号
		縦	横	厚	重							縦	横	厚	重				
第211区 23	PL51	(4.5)	(2.5)	1.2	(11.4)	SI 3	断欠		447	36	PL51	(3.3)	(2.2)	1.1	(6.9)	SI 20	断欠		460
24	〃	(4.3)	(2.2)	0.9	(8.0)	SI 3	断欠		448	37	〃	(3.1)	(1.7)	0.7	(3.6)	SI 20	断欠		461
25	〃	5.9	(3.7)	1.3	(24.1)	SI 3	半欠		449	38	〃	(3.3)	(2.1)	0.8	(5.1)	SI 20	断欠		462
26	〃	4.2	4.5	1.4	19.7	SI 3	完形		450	39	〃	4.7	(2.3)	1.1	(9.9)	SI 30	半欠		463
27	〃	3.5	(1.9)	0.9	(4.3)	SI 3	半欠		451	40	〃	(3.2)	(2.0)	1.0	(7.2)	SI 30	断欠		464
28	〃	5.7	5.7	1.4	36.2	SI 10	完形		452	41	〃	(2.5)	(2.3)	0.9	(4.4)	SI 33	断欠		465
29	〃	(5.4)	(2.8)	1.1	(11.0)	SI 10	断欠		453	42	〃	3.5	3.3	1.1	11.9	SI 47	完形 穿孔途中		466
30	〃	(4.2)	(2.2)	1.1	(7.5)	SI 10	断欠		454	43	〃	4.0	3.9	1.2	17.4	SI 47	完形		467
31	〃	(3.5)	(2.2)	0.9	(6.9)	SI 10	断欠		455	44	〃	(4.5)	(2.5)	1.0	(11.5)	SI 49	断欠		468
32	〃	(2.5)	(1.8)	1.2	(4.2)	SI 11	断欠		456	第212区 1	〃	(4.4)	(2.3)	1.3	(10.5)	SI 49	断欠 穿孔途中		469
33	〃	(3.6)	(1.8)	1.1	(5.8)	SI17	断欠		457	2	〃	(4.3)	(2.4)	1.0	(7.8)	SI 49	半欠		470
34	〃	4.5	(3.0)	1.7	(19.1)	SI 20	半欠		458	3	〃	(3.0)	(1.6)	1.0	(3.9)	SI 49	断欠		471
35	〃	(3.5)	(1.7)	1.7	(9.6)	SI 20	断欠		459	4	〃	(3.8)	(2.7)	1.2	(9.6)	SI 49	断欠		472

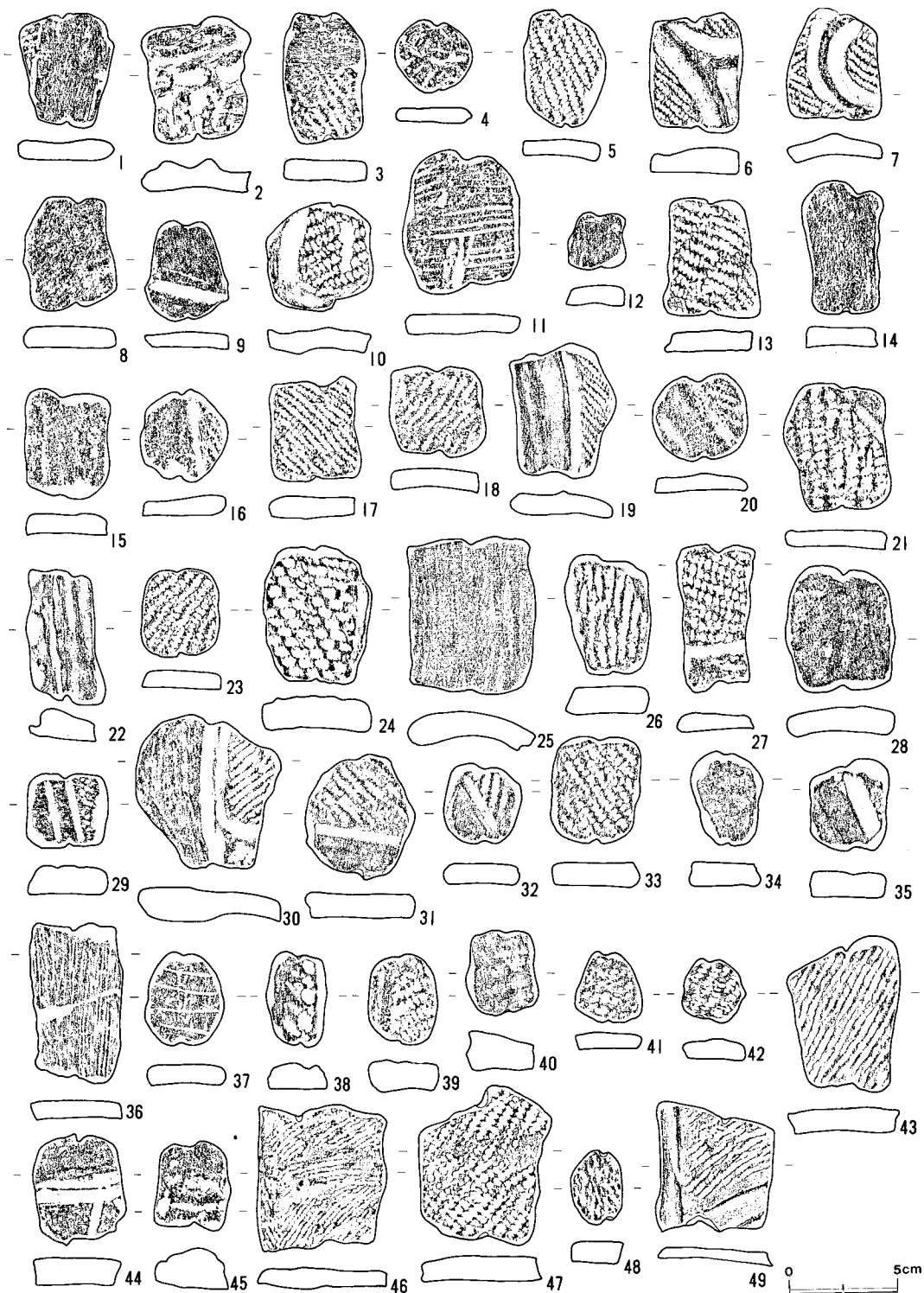
挿図 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号
5	PL51	(3.2)	(1.9)	1.2	(5.8)	SI 49	断欠	473	17	PL51	3.8	3.8	1.5	15.9	SK251	完形	485
6		6.2	(3.5)	1.5	(27.6)	SI 72	半欠	474	18		(5.8)	(3.4)	1.1	(17.0)	SK404	断欠	487
7		(3.5)	(1.8)	1.0	(5.2)	SI 79	断欠	475	19		(4.8)	(2.8)	1.4	(15.9)	SK439	断欠	488
8		(3.5)	(2.4)	1.0	(7.3)	SI 79	断欠	476	20		5.2	(3.1)	1.2	(16.9)	L4g6	半欠	489
9		3.9	3.8	1.3	15.6	SI 81	完形 穿孔途中	477	21		(2.3)	(3.2)	1.3	(11.1)	SK396	断欠	486
10		(3.1)	(1.9)	1.1	(6.4)	SI103	断欠	478	22		5.0	(2.8)	1.2	(17.8)	K4g8	半欠 穿孔途中	490
11		3.4	3.2	1.3	13.3	SI104	完形 穿孔途中	479	23	PL51	5.9	5.9	1.2	39.4	K3j3	完形 穿孔途中	491
12		(3.6)	(2.0)	1.4	(9.0)	SK69	断欠	480	24		(2.6)	(2.3)	1.0	(5.5)	K4h5	断欠 穿孔途中	492
13		(2.5)	(1.6)	1.1	(3.7)	SK102	断欠	481	25		(3.2)	(1.6)	1.0	(3.8)	M3c7	断欠	493
14		(5.7)	(3.0)	1.2	(16.0)	SK251	断欠	484	26		(4.0)	(1.9)	1.0	(5.3)	L1j0	断欠	494
15		4.2	(2.9)	0.9	(8.4)	SK214	半欠	482	27		(3.4)	(2.3)	0.8	(6.3)	K3	半欠 穿孔途中	495
16	PL51	4.2	4.2	1.0	18.1	SK217	完形 穿孔途中	483									

表 11 有孔円板一覽表 (4区)

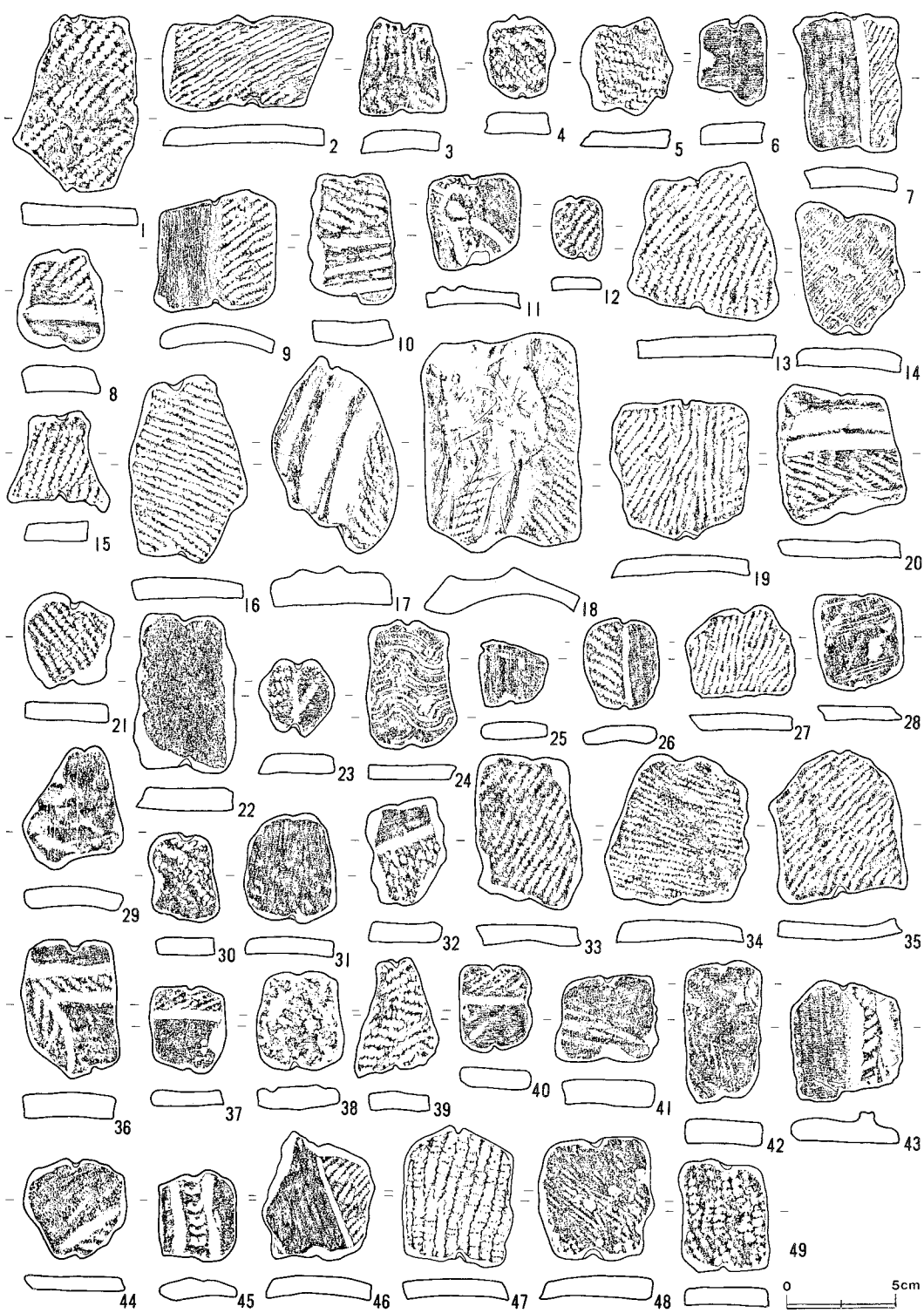
挿図 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号
第215図 14		(3.8)	(2.1)	1.7	(11.1)	SI 4	断欠	60	19		3.8	4.3	1.1	19.1	SI 50	一部欠損 穿孔途中	56
15		3.6	3.6	1.3	14.0	SI 5	完形	61	20		3.0	3.1	0.8	6.5	SI 50	完形 穿孔途中	64
16		(3.9)	(2.1)	1.3	(9.0)	SI 5	断欠	62	21		(2.3)	(1.4)	0.9	(2.7)	SI 50	断欠	65
17		(2.5)	(2.1)	1.0	(4.2)	SI 5	断欠	63	22		(3.3)	(2.2)	1.1	(7.2)	SK28	断欠	66
18		(2.5)	(1.4)	0.8	(1.9)	SI 3	断欠	59	23		(3.0)	(2.0)	1.2	(5.0)	N7d6	断欠	67

表 12 土製品一覽表 (3区)

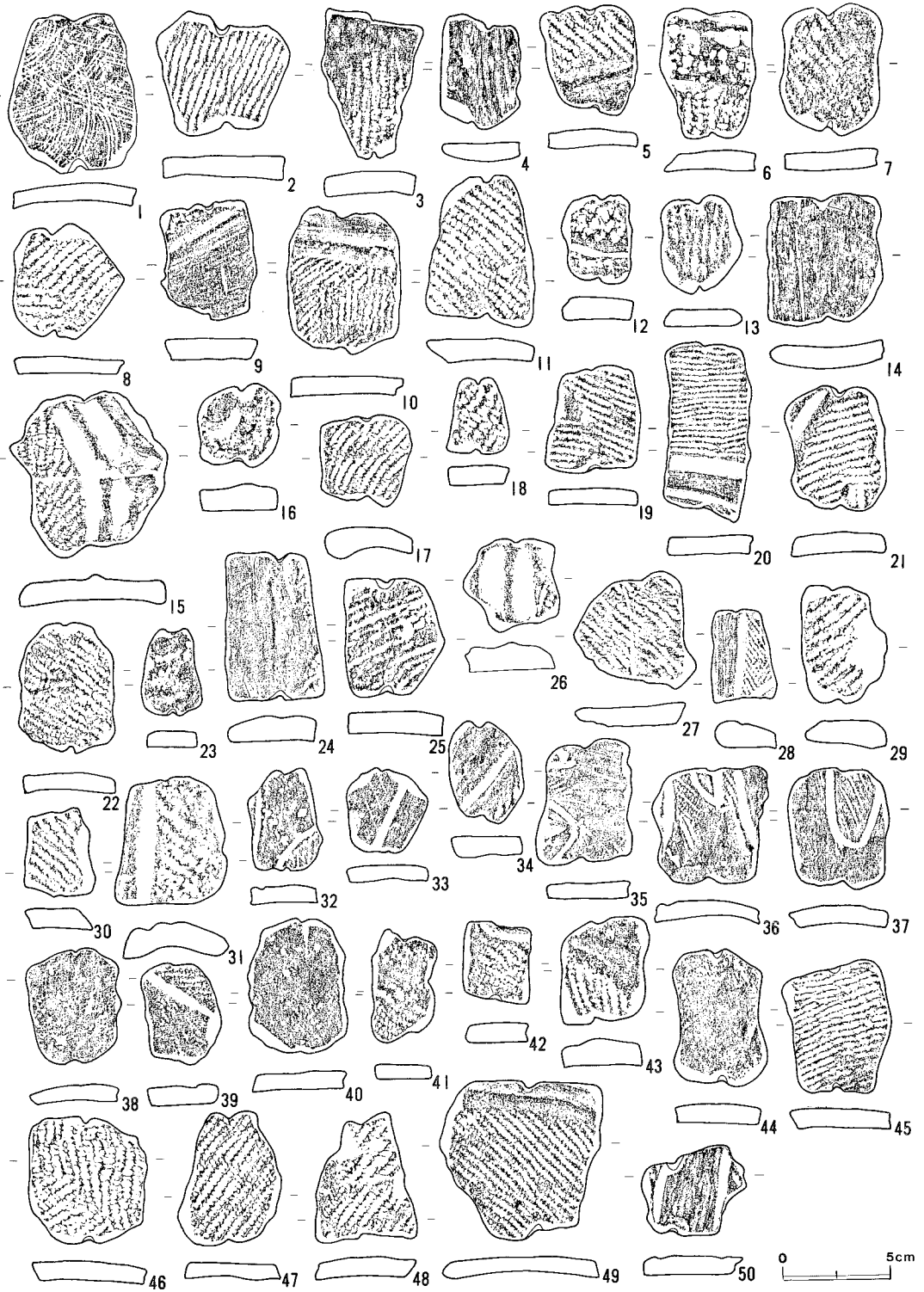
挿図 番号	写真 番号	名 称	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	名 称	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	備 考	台帳 番号
第216図 1	PL52	土 偶	(4.2)	1.7	1.3	6.6	SI-1	腕	449	11		管状 土製品	3.6	(3.2)	(2.8)	23.8	SI 83	半欠	512
2	〃	土 偶	(6.7)	(3.2)	2.7	38.4	SI 5	肩	514	12		球状 土製品	1.4	1.5	1.4	2.6	SI49炉	剝落多し	518
3		土 偶	(3.7)	(2.4)	1.3	8.3	SI 11	肩	513	13	PL52	人面付 土器片	(4.8)	(4.8)	1.0	29.9	L2j2		510
4	PL52	土 偶	(4.0)	(2.2)	1.5	10.8	SI 21	肩	500	14	〃	三角形 土製品	4.6	5.5	1.5	26.5	SI 34	土器片利用 穿孔途中	502
5	〃	土 偶	(5.6)	(2.3)	2.3	23.4	SI 32	コブあり 肩	501	15	〃	三角形 土製品	5.7	7.0	1.4	30.5	SK86	土器片利用	504
6		土 偶	(4.0)	(2.9)	2.1	20.0	SI 112	腕	503	16	〃	三角形 土製品	5.0	6.0	1.2	27.8	K3g7	土器片利用 穿孔	505
7	PL52	土 偶	(5.6)	(4.8)	4.7	58.2	M4g5	脚	515	17	〃	三角形 土製品	4.1	4.0	1.2	15.5	L4a3	土器片利用 穿孔	506
8	〃	垂 飾	2.9	2.9	0.8	4.8	SK126	穿孔2ヶ	508	18	〃	三角形 土製品	(3.3)	(2.8)	1.0	6.1	SK145	土器片利用 穿孔	511
9	〃	垂 飾	3.8	3.7	1.2	16.7	SD5	穿孔2ヶ	509	19	〃	不明 土製品	(6.5)	(7.4)	(1.4)	52.5	SK158 159・280	土器片利用 赤彩	516
10	P52	腕 輪	(6.0)	(7.4)	1.0	39.6	SK436	半欠	519	20		不明 土製品	6.0	(5.8)	2.0	49.8	L1b0	土器片利用	517



第 202 图 土器片锤头测图(1)



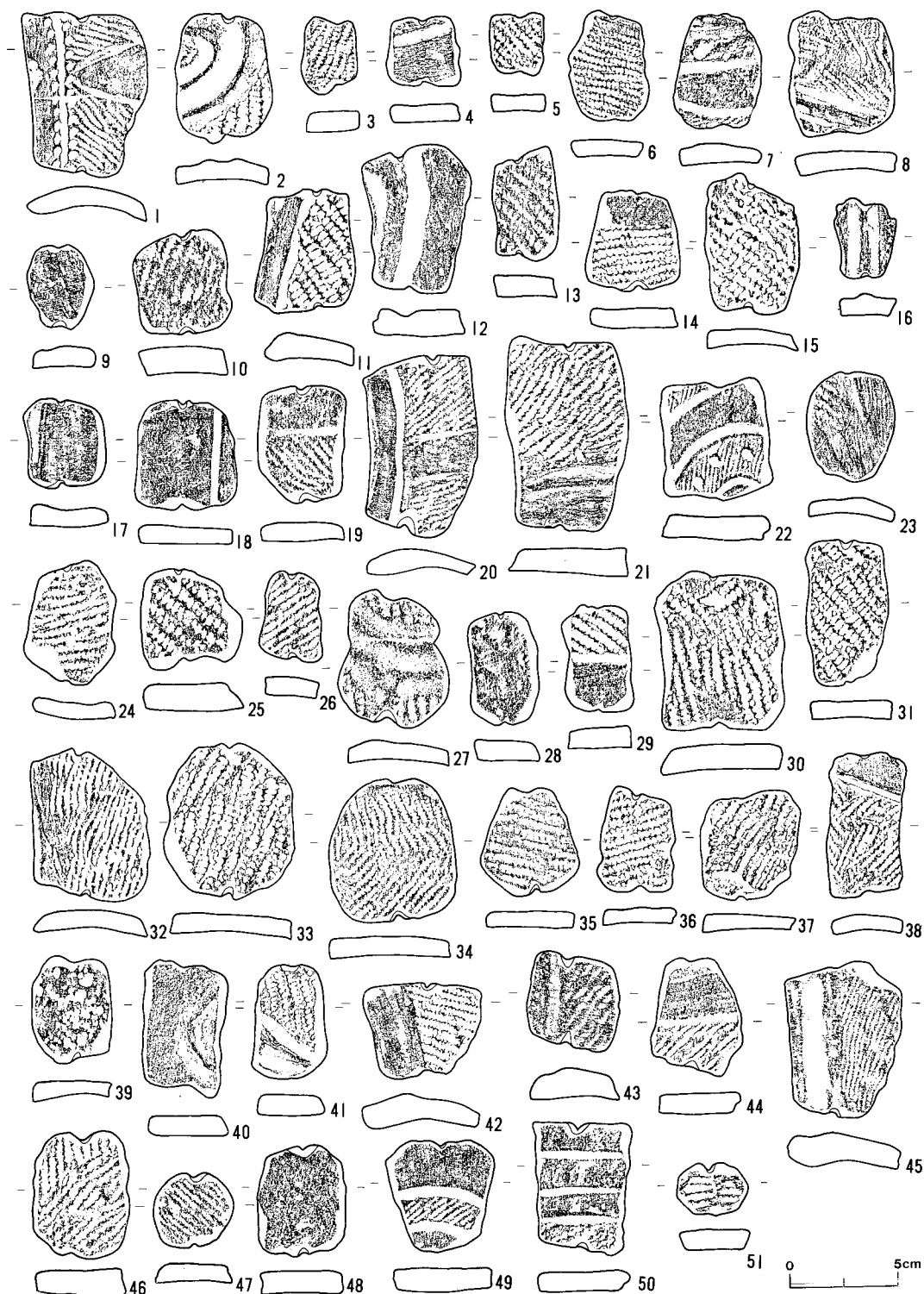
第 203 图 土器片锤実测图(2)



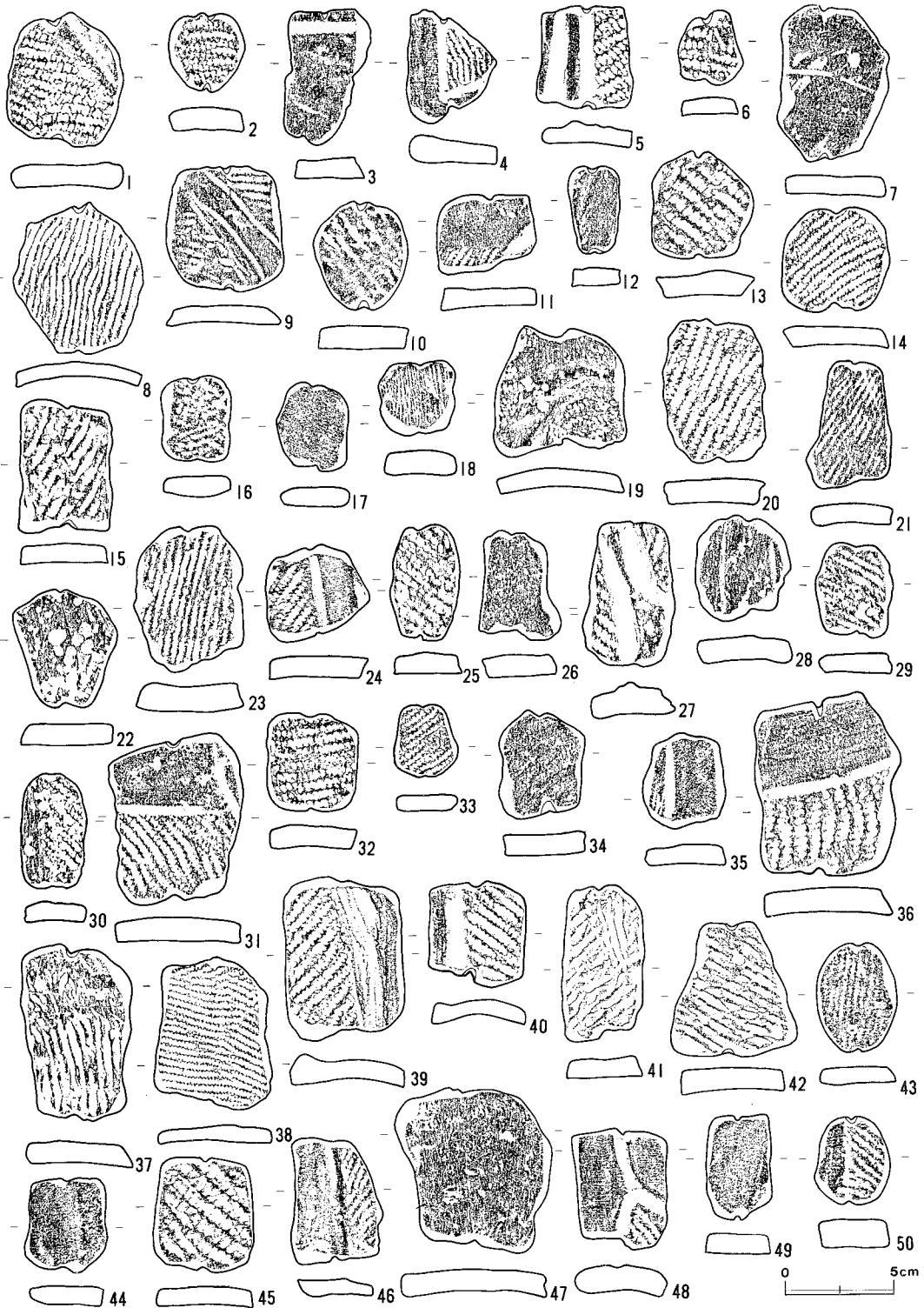
第 204 图 土器片锤实测图(3)



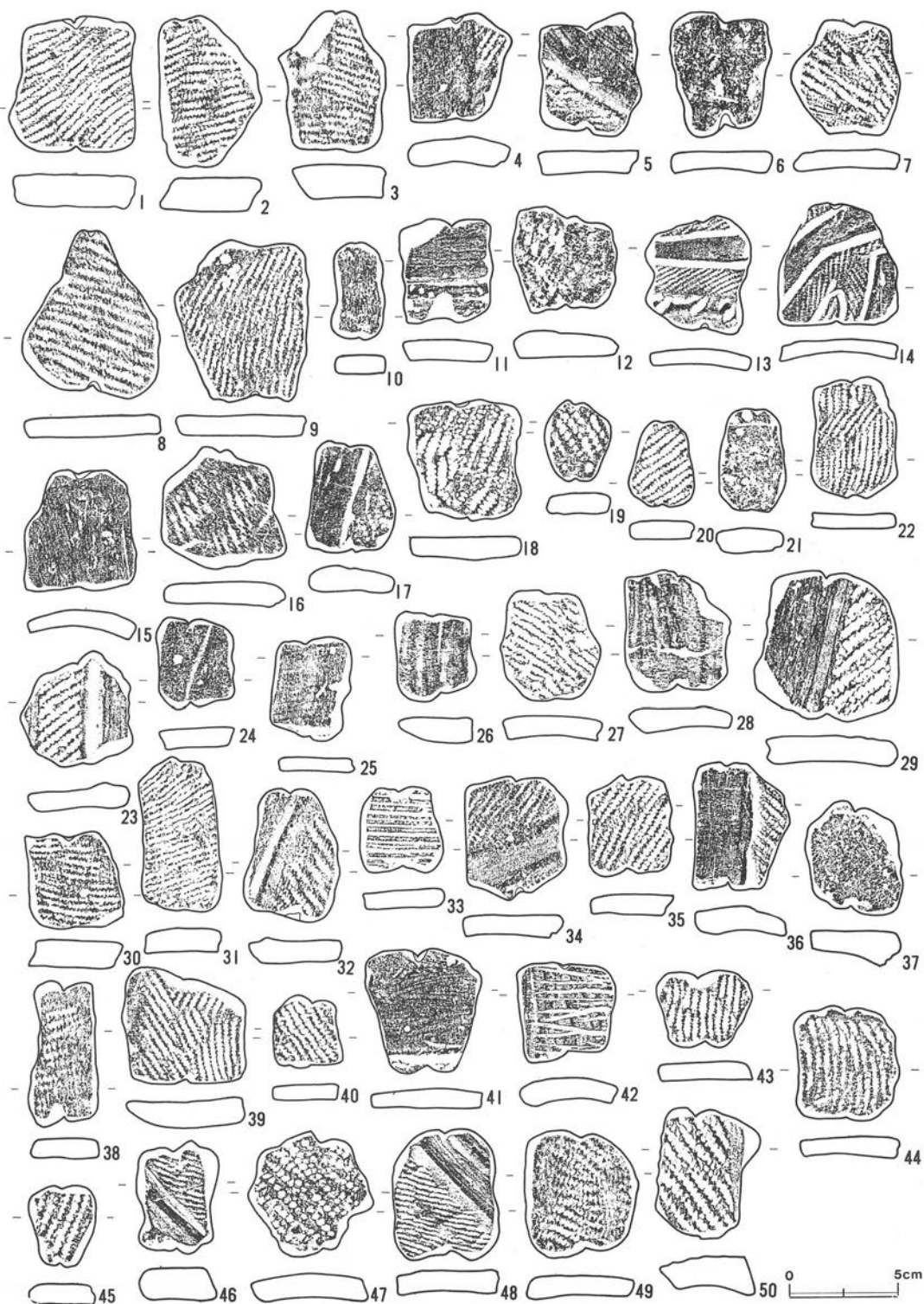
第 205 图 土器片锤実测图(4)



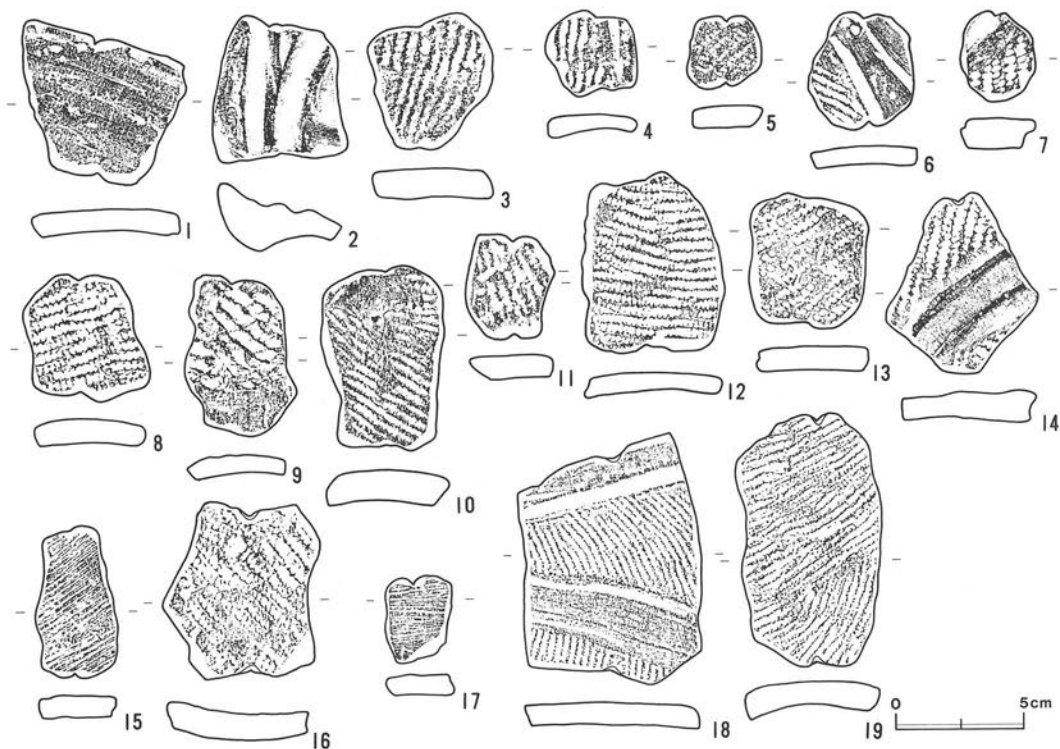
第 206 图 土器片锤実测图(5)



第 207 图 土器片锤实测图(6)



第 208 图 土器片锤実测图(7)



第 209 図 土器片錘実測図(8)

に小石と砂を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。類例は、下館市外塚遺跡⁽¹⁾に 7 点あり、他には栃木県後藤遺跡⁽²⁾からも出土しているが、共に遺物の時期は不明である。本品の意義は、出土した第 463 号土坑の伴出土器からみて、明確に堀之内 I 式期と判断できる点にある。貝輪の研究とあわせて今後の検討が待たれる。

註 1 川崎純徳他『外塚遺跡』 下館市教育委員会 昭和 60 年 3 月

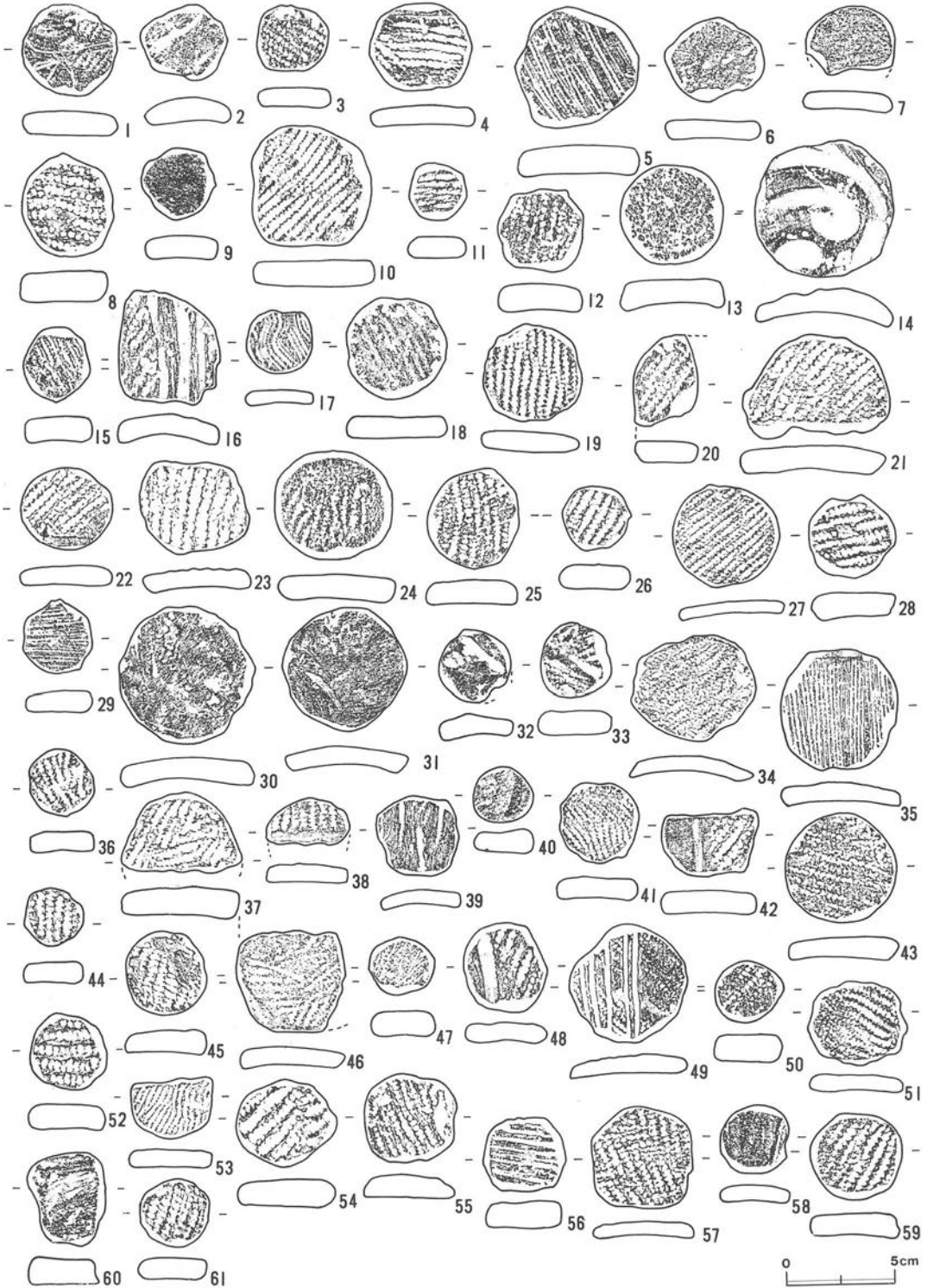
2 栃木県立博物館蔵品による。鈴木正博氏のご教示により、同館学芸員上野修一氏のご好意で実見させていただいた。

ニ 管状土製品 (第 216 図 11)

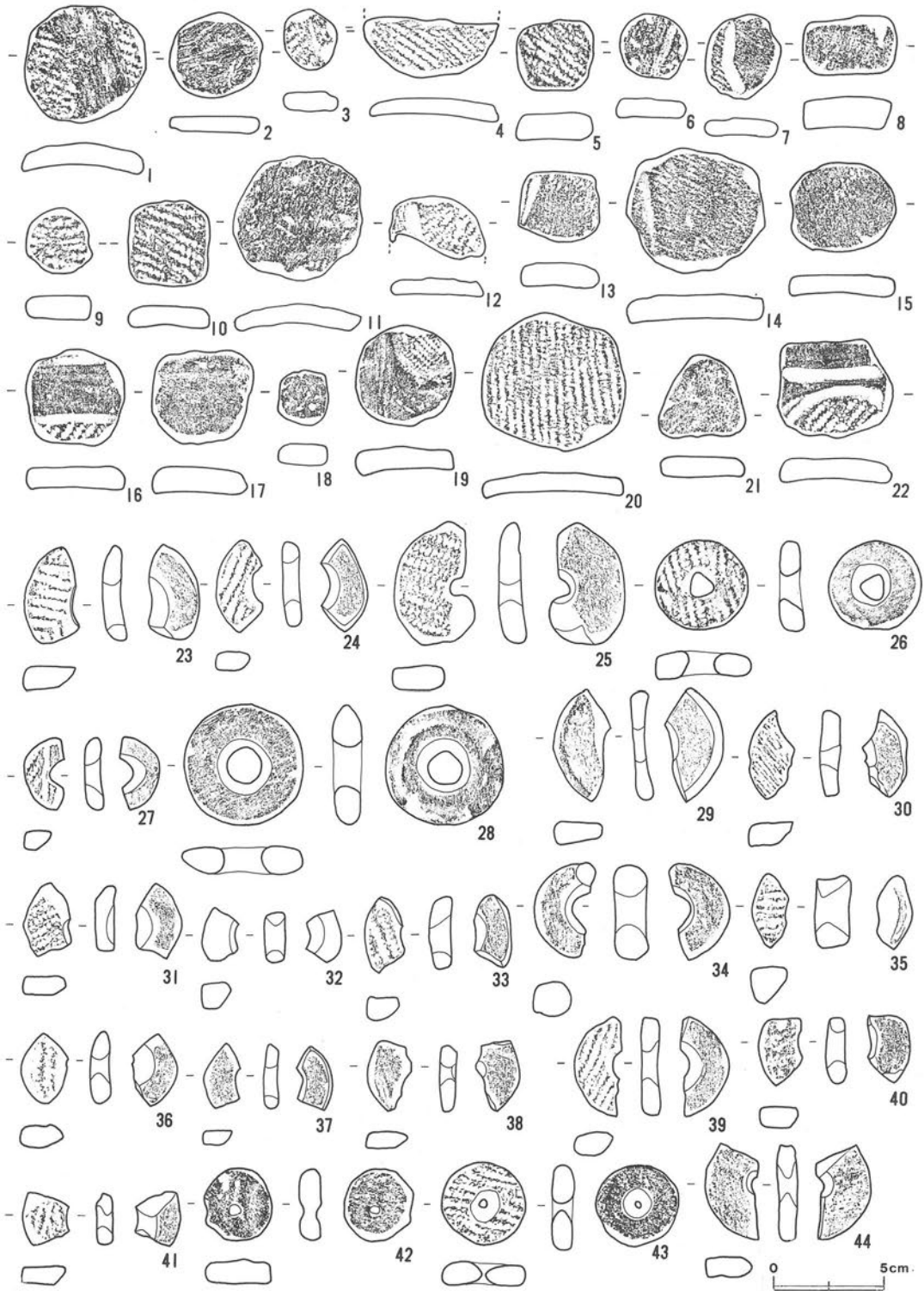
11 は縄文中期末葉の第 83 号住居跡の覆土から検出された無文の土製品で、上下端は斜めに切り落とされている。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。小さな橋状把手の可能性もあるが、ここでは管状土製品として扱った。

ホ 球状土製品 (第 216 図 12)

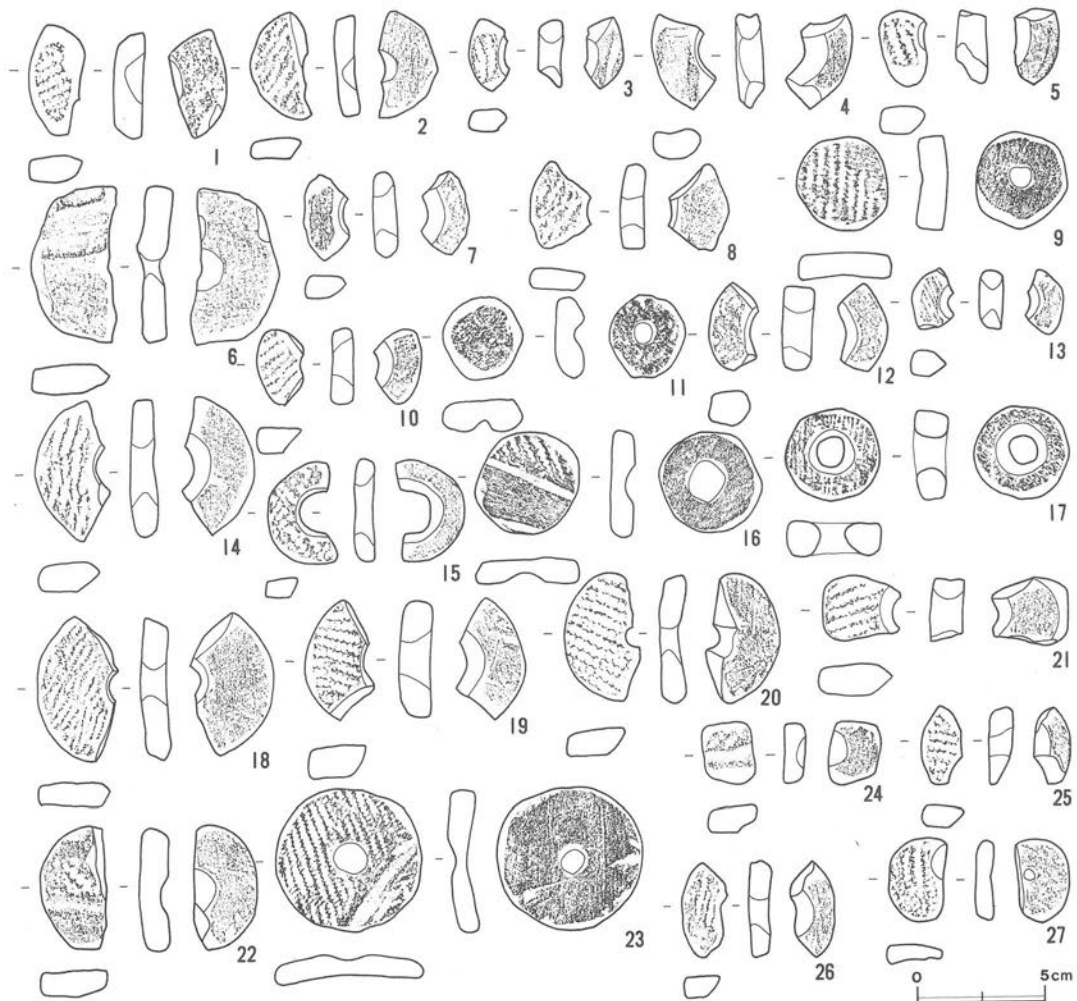
12 は第 49 号住居跡の炉中央部の覆土から検出された小さな球形の土製品である。焼成がやや不良で、剝落痕が著しい。胎土は微砂を含み、色調は褐色を呈する。当遺跡 6 区の第 46 号住居跡から類品が出土している。



第 210 図 土製円板実測図



第 211 図 土製円板・有孔円板実測図



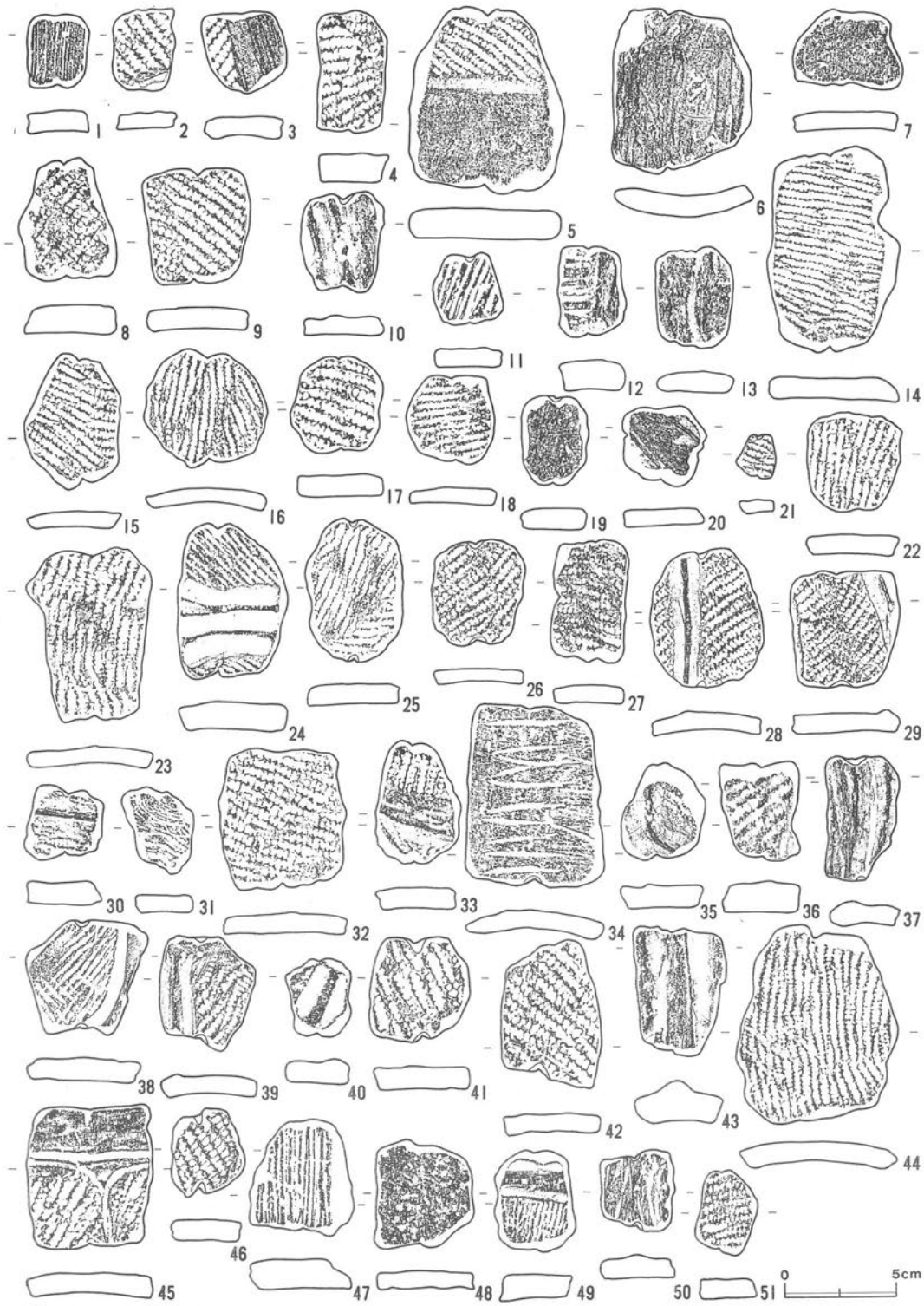
第 212 図 有孔円板実測図

へ 人面付土器片 (第 216 図 13)

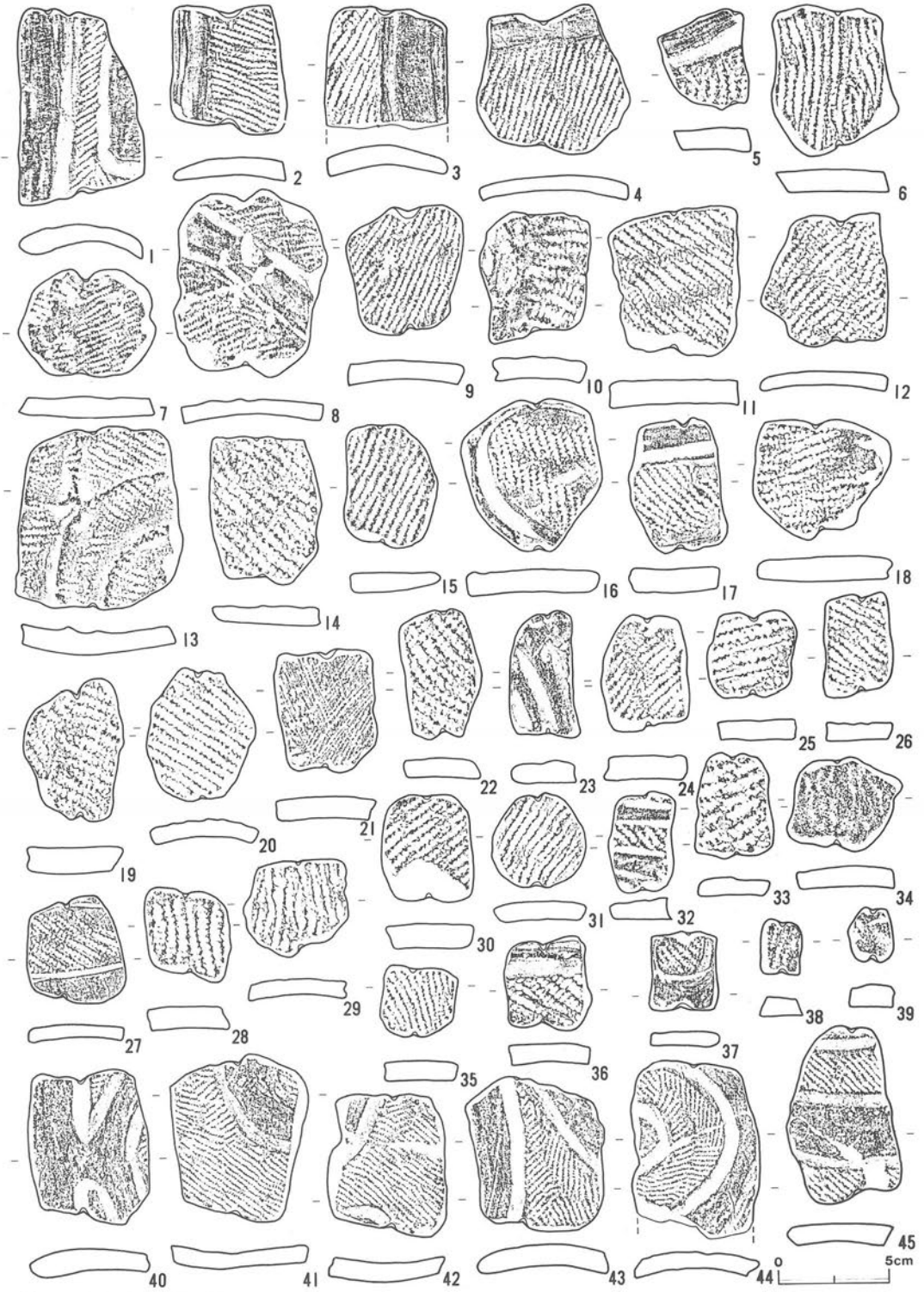
13 はグリッド出土土器の分類, 抽出作業をおこなっている際に検出したもので, 土器の胴部片に人面が沈線と刺突により描かれている。残存部から推定すると顔面は逆三角形を呈すると考えられ, 形状と施文手法からみると後期初頭から前葉にかけての時期の所産と考えられる。地文は櫛歯状施文具による細かい刺突文が付されている。

ト 三角形土製品 (第 216 図 14 ~ 18)

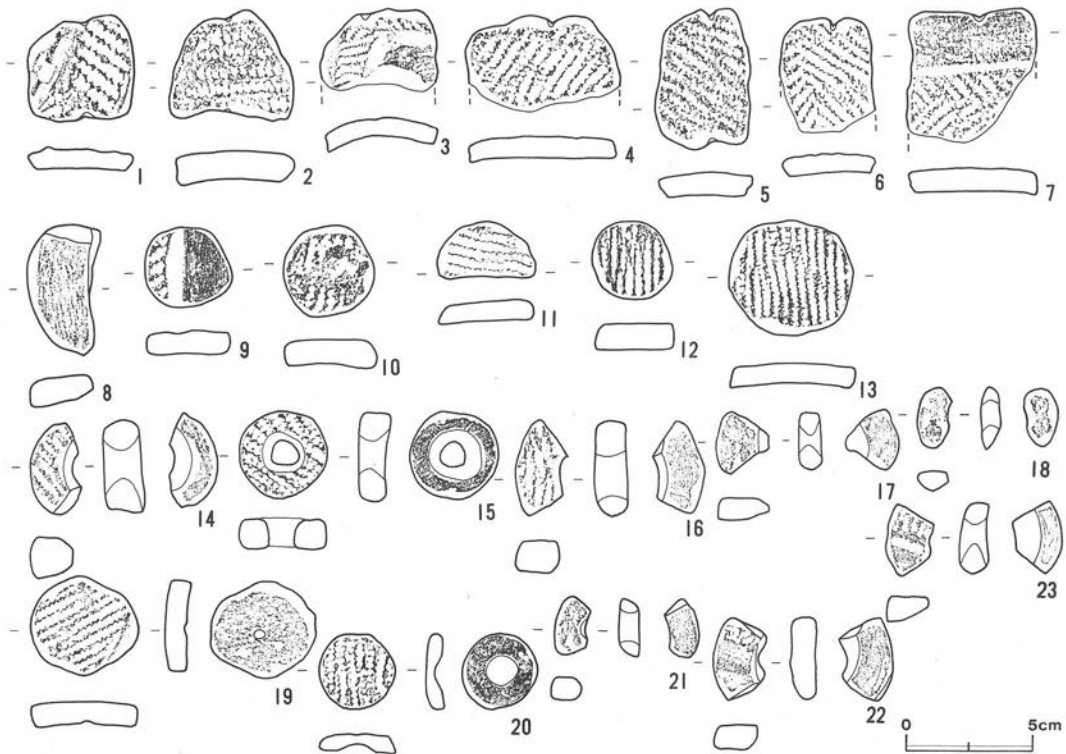
14 ~ 18 は土器片を三角形に加工したもので, 土器片利用という共通点からすれば, 土器片錘, 土製円板, 有孔円板と同列に扱うべきものかもしれない。特に, 後 2 者と本土製品は関連する面が認められる。土製円板としたものの中には方形に近いものもあり, 三角形と類似する。また, 本土製品 5 点のうち 4 点は, 穿孔および途中の例である。しかし, 意識的な形状の差異は, 本土製品の必要性を表わしているものと考え区別した。所謂三角形土製品といわれるものには, 土器片利用のものと本来的に三角形に造作した



第 213 图 土器片锤突测图(1)



第 214 图 土器片锤実测图(2)

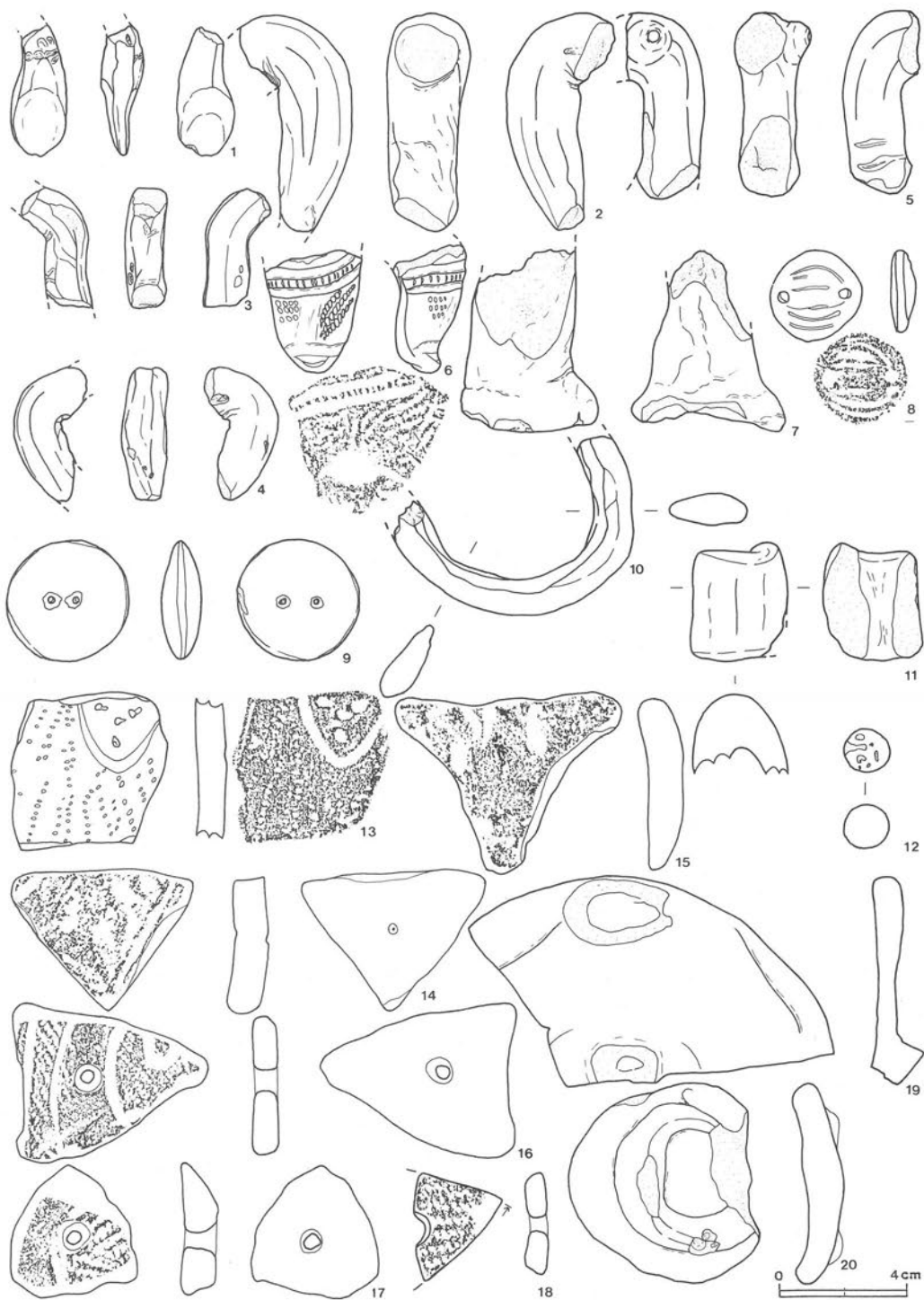


第215図 土器片・土製円板・有孔円板実測図

ものの2つがある。一般に東北、北陸地方の縄文中・後期の遺跡から多く出土するが、関東地方では例の少ない遺物の1つである。当遺跡の例は、土器片利用であるが、形状や孔の有無に差異がある。15は、称名寺式土器の胴部片を利用しており、これらの遺物の所属時期は、後期初頭から前葉にかけての時期と推測される。用途は不明である。

チ 不明土製品 (第216図19～20)

19～20は土器片を加工したものである。19は、第158・159・280号土坑出土の破片各1点ずつが接合したもので、外面に微隆線による施文と把手の剝落痕を残す薄手の破片である。内外面とも赤彩痕が顕著である。土器片の周縁部をきれいに磨って円形をなすように整形しているが、破片のため全体の形状は不明である。施文の特徴からみて中期末葉の土器片を利用している。20は、グリッド出土で、隆帯が円形状に貼付され、一部を欠損している。周縁は磨って加工され、内面には指頭圧痕状の凹みが残っている。



第 216 图 土製品実測図

3 石器および石製品

当遺跡3・4区から出土した石器および石製品は、3区では石鏃、石槍、石錐、搔器、磨製石斧、打製石斧、礫器、磨石、石皿、凹石、敲石、軽石製品、石棒、垂飾など多種にわたるが、4区では石鏃、石錐、磨製石斧、打製石斧、磨石、石皿、凹石、敲石、砥石、石棒とやや種類も少なく、量的にも減少する。本稿では、各器種ごとに若干の解説をおこなう。個々の石器、石製品の法量・石質・出土位置などについては実測図・写真・一覧表を参照されたい。

(1) 石鏃 (第217図1～16, 22, 第231図2～3)

3区で17点、4区で2点を図示したが、他に3区の第173号土坑内の貝層中から検出されたチャート製の小形無茎石鏃が1点ある。合計20点の石鏃について石質をみると、チャート製のものが12点、黒曜石製のものが5点、メノウ、ホルンフェルス、安山岩製のものが各1点ずつある。6区の報告でも記したようにチャート、黒曜石、メノウなど鋭い縁辺部を有し、加工し易い石質が選ばれている。無茎石鏃が大半を占めるが、5の1点だけが小形の有茎石鏃である。無茎石鏃は、茎部の挟りのほとんど無いもの(14～16)から浅いもの(5・6)、深いもの(1～4, 7～13, 第231図2・3)までを含み、バラエティに富んでいる。挟りの形にも弧状を呈するもの、山形状を呈するものなどが認められる。形状的にも、側縁が直線的なもの(2～5, 10・11)外湾気味のもの(1・7・22)があり、6区の第394図10のような明瞭に内湾する例は無い。14・16は部厚く、剥離も雑である。15は未製品である。その他の石鏃は全体的に調整剥離が丁寧に施されている。中でも3・7・9は側縁が鋸歯状を呈している。

(2) 石槍 (第217図17)

石槍は、3区の第79号住居跡の覆土中から出土し、基部を欠いている。調整剥離は表裏面とも比較的丁寧であるが、表面の左側縁にはコブ状の高まりがある。先端は薄く仕上げられ、断面形は菱形を呈する。黒色の頁石を用いている。縄文中期の出土例としては珍しいものである。

(3) 石錐 (第217図19・20, 第231図1)

3区で2点、4区で1点の出土である。石質はチャートが2点、ホルンフェルスが1点である。形状をみると撮みを明瞭に作り出しているものが20と1で、19は撮みの一部を欠損しており、錐部より少し太く厚みがある程度である。3点とも錐部の先端を欠くが、断面形は菱形を呈し、丁寧に作り出されている。

(4) 搔器 (第217図18・21)

3区からだけ2点出土している。共にチャートの剝片を利用して、18は右側縁を刃部として、21は下縁を刃部としている。18は第4号炉穴から出土しており、早期の所産の可能性が高い。この他3・4区からはチャートを主とした剝片が出土しており、その中には使用されたものもあると思われるが、今回は取り上げることができなかった。

(5) 磨製石斧 (第218図23～37, 第231図4)

3区から15点、4区から1点出土しており、そのすべてを図示した。石質は、16点のうち砂岩5点、緑泥片岩3点、粘板岩2点で、その他に千枚岩、角閃片岩、流紋岩、安山岩、ホルンフェルス、チャート

が各1点ずつ出土している。ほぼ完形のものが24・27・29・37と4の5点で、他は基部ないし刃部を失った破片であり、中には体部のみの断欠もある。定角式の整った磨製石斧が多いが、23・29のように小礫を研磨して、刃部は打ち欠きの上に磨きを加えた例もある。いずれも片刃を呈している。23の基部は打ち欠きのまま残され、刃部は斜刃をなす。29は右側縁が細かく剝離されている。24は非常に良く使い込まれた小形の石斧で、何度か研ぎ直されており、表面の中央部が図のように凹んでいる。25は刃部が大きく欠損しているが、光沢を有している。30は小形石斧で、基部を欠き、刃部の裏面が大きく欠損している。32は刃部に細かい刃こぼれが認められる。33は大形石斧の刃部片で、光沢を有するが一部を欠損している。36も刃部片で、表裏面に光沢を有している。37は全面に丁寧な磨きが施され、刃部の一部がわずかに欠損する。4は小形石斧で、刃部が鋭く作出され、基部は斜めに加工されている。

(6) 打製石斧（第218～219図38～46、第231図5）

3区から9点、4区から1点の計10点が出土しており、その全てを図示した。石質は流紋岩が5点で、以下安山岩、ホルンフェルス各2点で、4区の1点は石英斑岩を用いている。完形品は少なく、40・42・43の3点で、ほぼ形状がうかがえるのが41・5の2点である。他は半欠かそれ以下の破片である。形態分類をすれば、分銅形石斧がほとんどで、短冊形石斧と考えられるのは39だけである。39は表面の周縁に打調が施されるのみで、その他の面や裏面は剝離面のまま残されている。左側縁に薄く鋭い刃を有するが、刃部は厚く鈍い。38は表裏面とも粗く打ち欠かれており、表面の刃部近くに自然面がわずかに残されている。43は小形の分銅形石斧で、自然面が多く残されている側を図示したが、裏面は全面に粗い打ち欠きを加えられている。刃部はやや磨耗しているが、挟り込み部には磨耗痕はほとんど認められない。45は周縁を粗く加工した石斧で、裏面は全くの自然面である。刃は片刃状を呈する。40は表裏面の中央部に自然面を残す厚手の石斧で、右上縁の一部を欠損する。挟り込みは深く、左側の磨耗は著しい。41は表裏面に剝離面が残されている薄手の石斧で、左上半を欠損する。挟り込みは明瞭に認められ、若干の潰し加工が施されているが、左右の位置にややずれがある。上半は粗く打ち欠かれているが、下半は左側縁の一部を除いて加工されていない。このような点を考えると本石器は失敗作として捨てられたものではなかろうか。44は分銅形石斧の半欠品で、裏面には自然面を多く残す。左側縁が厚く、右側縁が薄いやアンバランスで、ねじれたような形を呈する。46も半欠品で表裏面に自然面を残している。周縁の剝離は薄く丁寧である。42は全体的に磨滅の著しい完形品で、表面に大きく自然面を有し、裏面は粗く剝離されている。挟り込み部は著しく磨耗しており、刃部も鈍くなっていることから長期的な使用が推測される。5は左上半部を欠損する分銅形石斧で、表裏面に自然面を残している。刃部は比較的鋭く作り出され、挟り込み部には潰し加工が施されているが、ほとんど磨滅はしていない。

(7) 礫器（第219～220図47～55）

3区にのみ9点が検出された。石質は砂岩、安山岩が各2点、石英斑岩、緑泥片岩、流紋岩、粘板岩、チャートが各1点ずつである。形状的にみると礫の一端に打ち欠きを加え、刃部を作出する例が多くを占め、46・48・50・53・54の5点がこれに分類される。47は厚手の礫を用い、下端を表裏両側から大きく打ち欠き、両刃を作出している。48は棒状礫の下端を片側から打ち欠いて、片刃を形成したもので、刃部には若干磨耗が認められ使用痕とも考えられる。54も棒状礫の下端を片側から大きく打ち欠いて刃部を作出したもので、裏面にもわずかに剝離が及んでいる。刃部には使用によるものか否かは不明であるが、

顕著な磨痕が観察される。52はチャートの甲高の剝片を利用した石器で、刃部は表裏両側からの比較的細かい剝離によって作出されている。左側縁には自然面を残している。形状からみれば搔器として分類する方が妥当かもしれないが、ここに含めておいた。49は棒状礫の下端をほぼ水平に切断したもので、切断面に明瞭な使用痕は認められないが、敲石的な用途に用いたものかもしれない。いわゆるスタンプ形石器とは異なるものと思われる。51は扁平な板状礫の側縁と下端に打欠痕や磨滅痕が認められるもので、礫器として扱った。53は扁平小形な楕円形礫の左側縁から下端にかけて表裏面からの打ち欠きを加えられているもので、裏面は大きく打ち割られて厚さが減じられている。形状や大きさからみれば搔器として分類する方が妥当かもしれない。50は扁平な小礫の下端を主として片側から丁寧に打ち欠いて刃部が作出された礫器である。55は部厚い礫を周縁から粗く打ち欠いているもので、上半を欠損する。右側縁には抉り込みが観察されるので、あるいは打製石斧の未製品かとも思われるが、ここでは礫器としておく。

(8) 磨石 (第220～223図56～109, 第231～232図6～19)

3区で54点, 4区で16点の計70点が検出され, 68点を図示した。当遺跡で最も出土数の多い石器である。石質は3区では安山岩23点, 流紋岩14点, 砂岩10点の3種が主となり, 他にホルンフェルス, アプライト各2点, 石英斑岩, 緑泥片岩, 花崗岩各1点がある。4区では安山岩が11点, 砂岩, 石英斑岩が各2点, 雲母片岩が1点である。両区をあわせてみると, 安山岩が34点と全体の半数近くを占め, 流紋岩14点, 砂岩12点がこれに次いでいる。磨石は欠損品が多く, 完形で出土する例は割合に少ない。3区の54点のうち完形品は12点で, 全体の22%にすぎない。4区では16点のうち完形品は2点で, 全体の13%にあたる。半欠品や断片が多いのはそれだけ使用される機会が多かったことを暗示している。磨石は一般に表裏面よりも側面に顕著な磨痕が認められることが多いが, 当遺跡の磨石にも同様な傾向が看取される。形状は楕円形を呈するものが多く, 円形に近いものや石けん状を呈するものも含まれる。また, 表裏面に凹みを有する例や側縁に敲打痕が認められる例もかなりの頻度で検出され, 複数の機能を有する石器としての認識が必要である。以下に磨石のうち特色を有するものについて若干説明を加える。64は卵形に近い形状の磨石で, 側縁の全周が磨られ, 先端部には敲打痕もみられる。66は楕円形を呈する磨石で, 表裏面, 側面とも良く磨られており, 上下端には敲打痕があり, 表面には2か所の凹みを有している。75も不整楕円形を呈する磨石で, 表面に凹みを有している。73は不整円形を呈する磨石で, 側面が全周良く使い込まれている。77は磨痕と敲打痕が併存する例で, 表裏面に凹みをもっている。82は石けん状を呈する扁平な磨石で, 上下端と側面の一部に敲打痕を合わせて有する。86は表面に凹みを有する磨石である。94は表裏面に深く明瞭な凹みを有する石けん状を呈する磨石である。100はやや扁平な円形の磨石であるが, 磨痕はあまり顕著ではない。101は不整楕円形を呈する磨石で, 表面に凹みをもち, 上下端に敲打痕を有している。106は磨痕の著しい磨石の半欠品である。98は楕円形を呈する典型的な磨石で, 表裏面に敲打による凹みを有している。4区の7・17は完形の磨石で, 7は楕円形, 17は円形を呈し, 両者とも側面がきわめて良く磨られている。19は欠損品であるが, 断面形が蛤刃状を呈するタイプの磨石と考えられる。このタイプの磨石は, 石英乃至は石英斑岩, アプライトなどの石材を用いており, 特異なものとして筆者はここ数年間関心をもって類例の探索につとめている。いずれこのタイプの磨石についてまとめてみたいと考えている。

(9) 石皿 (第 225 ~ 227 図 123 ~ 144, 第 232 図 20 ~ 23)

3区で22点, 4区で4点の計26点検出されているが, いずれも破片で完形のものはない。石質は3区では安山岩が圧倒的に多く20点で, 他に砂岩, 凝灰岩各1点がある。4区も安山岩が3点で, 雲母片岩が1点である。石皿には凹みを有するものが多くあり, むしろ凹みをもたないものの方が珍しい程である。131は古墳時代の第1号住居跡の覆土中から出土しているが, 重複する縄文後期前葉の第34号住居跡に属するものであろう。当遺跡で唯一の脚付石皿であり, 約3分の1を欠損しているが, 隅丸方形を呈するものと思われる。中央部はかなり深く4cm程凹み, 流し口部にむけて徐々に高まる。裏面に長軸7cm, 短軸6cm, 厚さ0.5cm程の脚を2か所有し, 表面に2か所, 裏面に5か所の凹穴が穿たれている。133は砂岩製の小形石皿の欠損品で, 表裏面とも平坦であるが磨痕が認められる。いわゆる平盤石皿と考えられる。136は表裏面に多数の凹穴をもつ断片である。132は表面と側面に凹穴を有する。139は流し口部の破片で, 表面と側面に凹みをもつ。134は凝灰岩製で, 表面が浅く凹む中央部の断片である。126は表裏面とも使用されている石皿で, 表面は1.9cm, 裏面は0.6cm凹んでいる。123は流し口部の破片で, 表面が0.6cm程凹み, 裏面に4か所の凹穴をもっている。128は縁が明瞭に立ちあがり, 表面は最深部で2cmほど凹んでいる。144は流し口部の破片で, 縁にむかって緩やかに立ちあがっている。図では右側が流し口となる。142は小形石皿で縁が明瞭に立ちあがり, 表面に2か所, 裏面に3か所の凹穴がある。130も流し口部の破片で, 図の右側が流し口となる。裏面に1か所凹みをもつ。141は表裏両面が使用されている石皿で, 共にきれいに磨られ, それぞれ0.5, 0.6cm凹んでいる。4区の21は薄手の石皿の断片で, 0.8cmほど凹んでいる。22は雲母片岩製の石皿の断片で, 表裏両面が使用されており, 0.4, 0.3cm凹んでいる。23は石皿の周縁部のみを残す断片である。当遺跡の石皿の特徴は, 表裏両面が使用されていることが目立つ点である。

(10) 凹石 (第 223 ~ 224 図 110 ~ 122, 第 232 図 24)

3区で13点, 4区で1点の計14点が出土している。磨石・石皿・敲石として分類したものの中にも凹穴をもつ資料は数多くあり, 凹石としての機能を有する石器はこの14点以外にもある。石質は安山岩5点, 砂岩4点, 角閃片岩2点, 雲母片岩, 石英安山岩, アプライト各1点ずつである。安山岩, 砂岩が多い点は磨石, 石皿, 敲石とも共通しており, 各石器の機能が複合する点も肯げよう。完形品は4点で, 14点に対して30%弱である。110は雲母を多く含む砂岩製で, 表面に4穴をもつ。114は剝離しやすい雲母片岩製で薄手であり, 表面に2穴を有する。111は表裏面に深い凹みをもつ破片で, 石皿片を再生した可能性が高いが, やや薄手である。115は楕円形の典型的な凹石で, 表裏面に大きな凹みを1か所ずつもつ。117は棒状礫の全側面に凹穴を2~3か所ずつもつ凹石で, 下端をわずかに欠損する。119・121は上狭下広の平面形を呈する凹石で, 表面に凹みを有する。116は凹石の断片であるが, 左側の断面に横位の擦痕が数条走っており, 砥石的な用途に転用された例と思われる。118・120は凹石の半欠品で, 120は表面だけ, 118は表裏両面に凹みを有している。

(11) 敲石 (第 228 ~ 229 図 145 ~ 158, 第 232 図 25・26)

3区で14点, 4区で2点の計16点が出土している。石質は3区で砂岩6点, 安山岩, 石英斑岩各3点, 花崗岩2点である。4区は砂岩と安山岩である。敲石には, 細長い棒状礫の端部に敲打痕を有するもの, 楕円形状を呈し, 磨痕や敲打痕を側面などに有するものに大別できる。後者は凹みを併用する例もある。

表 13 石器(石製品)一覽表(3区)

挿図番号	写真番号	器種	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	石質	備考	台帳番号
第217区 1	PL54	石 鏃	(2.7)	2.0	0.4	(1.7)	S12	チャート	先端欠	119
2	PL54	石 鏃	2.8	2.0	0.5	1.7	L2c ₅	チャート	完形	127
3		石 鏃	(2.4)	1.9	0.5	(1.2)	SI10	チャート	先端欠	120
4	PL54	石 鏃	(1.8)	1.1	0.3	(0.4)	K4h ₁	チャート	先端欠	126
5	PL54	石 鏃	2.5	1.4	0.6	1.3	M2e ₈	黒曜石	完形	132
6	PL54	石 鏃	(2.4)	1.6	0.5	(1.2)	S174	黒曜石	先端欠	123
7	PL54	石 鏃	3.2	2.1	0.4	2.3	L3i ₁	チャート	完形	129
8		石 鏃	3.1	(1.5)	0.5	(1.1)	SI112	安山岩	左脚欠	124
9	PL54	石 鏃	(2.0)	(1.5)	0.4	(0.6)	K3h ₅	黒曜石	先端, 右脚欠	125
10	PL54	石 鏃	1.9	1.6	0.4	0.6	L2h ₇	メノウ	完形	128
11	PL54	石 鏃	1.7	1.2	0.3	0.3	M3d ₃	黒曜石	完形	133
12		石 鏃	(2.5)	(1.9)	0.4	(1.1)	SI10	チャート	先端, 右脚欠	122
13	PL54	石 鏃	(2.6)	(1.6)	0.5	(1.1)	L3表採	黒曜石	半欠	131
14	PL54	石 鏃	3.3	2.0	0.9	4.1	S11	チャート	完形	118
15		石 鏃	2.5	2.0	0.4	2.5	L3j ₃	チャート	未製品	130
16	PL54	石 鏃	2.4	1.9	0.8	3.0	S11	チャート	完形	170
17	PL54	石 槍	(5.3)	2.3	1.1	(10.0)	S179	頁岩	基部欠	134
18	PL54	搔器	5.3	2.8	1.0	12.2	SK188	チャート	完形	185
19	PL54	石 錐	(4.7)	1.5	0.5	(4.9)	M4a ₉	チャート	先端欠	136
20	PL54	石 錐	(2.7)	2.0	0.5	(2.5)	K4j ₂	ホルン フェルス	先端欠	135
21	PL54	搔器	2.9	4.0	0.9	9.3	SK263	チャート	完形	206
22	PL54	石 鏃	1.8	1.2	0.4	0.7	SI10	チャート	有茎完形	121
第218区 23	PL54	磨製石斧	(4.6)	4.4	1.4	(26.7)	S19	千枚岩	頭部欠	2
24	PL54	磨製石斧	4.8	2.7	1.2	23.7	SI14	緑泥片岩	完形	4
25	PL54	磨製石斧	(5.6)	5.5	2.6	(122.3)	S\34	角閃片岩	刃部片	5
26	PL54	磨製石斧	(4.0)	(6.6)	3.8	(168.3)	S19	砂岩	胴部片	3
27	PL54	磨製石斧	6.5	4.4	1.4	68.0	S161	緑泥片岩	完形	6
28	PL54	磨製石斧	(7.7)	5.4	2.8	(203.8)	S177	砂岩	基部片	8
29	PL54	磨製石斧	5.7	3.3	1.0	24.0	SI107	粘板岩	完形	10
30	PL54	磨製石斧	(4.0)	2.8	1.1	(20.3)	SK145	流紋岩	基部欠	12
31		磨製石斧	(4.6)	(5.0)	1.3	(30.0)	SI107	砂岩	刃部片	11
32		磨製石斧	(4.3)	4.8	2.1	(57.6)	SK154	緑泥片岩	刃部片	13
33	PL54	磨製石斧	(7.4)	7.6)	3.7	(265.9)	SK178	ホルン フェルス	刃部片	14
34		磨製石斧	(4.2)	(3.3)	1.0	(12.4)	SD7	砂岩	刃部片	16
35		磨製石斧	(3.7)	(4.5)	2.6	(81.6)	L1a ₀	安山岩	器面あれ胴部片	18

挿図番号	写真番号	器種	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	石質	備考	台帳番号	
	36	PL54 磨製石斧	(5.8)	5.5	3.3	(109.1)	L2d ₂	砂岩	刃部片	19	
	37	PL54 磨製石斧	10.8	5.5	2.5	245.2	L4f ₇	チャート	完形	24	
	38	PL55 打製石斧	(5.5)	8.0	2.1	(94.8)	S15	流紋岩	頭部欠	1	
	39	PL55 打製石斧	(6.8)	5.5	1.7	(81.9)	SK353	ホルンフェルス	頭部欠	15	
	40	PL55 打製石斧	11.7	7.9	2.9	291.1	K3h ₉	安山岩	完形	17	
第219図 41		PL55 打製石斧	(12.0)	6.8	1.9	(133.4)	L3b ₆	流紋岩	頭部欠	20	
	42	PL55 打製石斧	11.0	7.3	1.8	185.9	L4a ₄	流紋岩	完形	23	
	43	PL55 打製石斧	8.9	7.0	1.9	121.4	S174	安山岩	完形	7	
	44	PL55 打製石斧	(8.0)	5.3	1.7	(101.9)	L3c ₆	流紋岩	頭部欠	21	
	45	PL55 打製石斧	(5.4)	8.2	2.2	(104.8)	S1105	ホルンフェルス	刃部片	9	
	46	PL55 打製石斧	(6.5)	7.3	2.0	(89.1)	L4a ₁	流紋岩	刃部欠	22	
	47	PL55 礫器	7.3	9.1	4.7	331.0	S117	石英斑岩	完形片刃	151	
	48	PL55 礫器	13.6	6.5	3.8	478.8	S136	安山岩	完形片刃	152	
	49	PL55 礫器	(6.5)	6.1	3.5	(182.9)	S172	流紋岩	下端欠	155	
	50		礫器	5.3	4.2	1.5	43.3	SK240	砂岩	完形片刃	158
	51		礫器	19.3	6.0	2.6	374.3	S191	緑泥片岩	扁平	156
	52		礫器	5.3	4.4	2.0	45.1	S156	チャート	完形	154
	53		礫器	5.5	4.0	1.1	29.7	SK57	粘板岩	完形片刃	157
	54		礫器	9.6	4.9	3.1	191.2	S149	砂岩	完形片刃	153
第220図 55		PL55 礫器	(7.4)	(8.5)	4.6	(291.3)	K4h ₀	安山岩	断欠	159	
	56	PL55 磨石	(7.3)	7.4	3.6	(271.1)	S13	安山岩	半欠	56	
	57	PL55 磨石	(4.9)	8.7	3.5	(219.5)	S19	安山岩	半欠	57	
	58		磨石	8.6	(4.8)	4.7	(265.7)	S19	石英斑岩	半欠	58
	59	PL55 磨石	(7.8)	(3.9)	3.9	(152.6)	S110	流紋岩	断欠	59	
	60	PL55 磨石	9.3	5.3	3.3	146.8	S122	緑泥片岩	完形	60	
	61		磨石	(5.3)	(7.7)	5.0	(292.4)	S134	安山岩	断欠	63
	62		磨石	(7.1)	(5.1)	4.7	(157.0)	S130	安山岩	断欠	61
	63	PL55 磨石	(12.3)	(4.8)	4.3	(304.2)	S147	砂岩	半欠	65	
	64	PL55 磨石	12.4	9.1	4.7	(705.1)	S133	砂岩	完形	62	
	65	PL55 磨石	(10.6)	(6.9)	4.5	(465.4)	S146	砂岩	一部欠	64	
	66	PL55 磨石	13.5	7.5	4.4	630.8	S149	砂岩	完形凹み2ヶあり	66	
	67	PL55 磨石	(6.8)	8.5	3.0	(259.3)	S181	安山岩	半欠	67	
	68	PL55 磨石	(5.4)	7.8	3.7	(195.9)	S191	流紋岩	半欠	68	
	69		磨石	(5.6)	(4.4)	5.2	(184.5)	S191	ホルンフェルス	半欠	69
	70	PL55 磨石	9.1	(5.7)	2.5	(184.7)	S191	砂岩	一部欠	70	

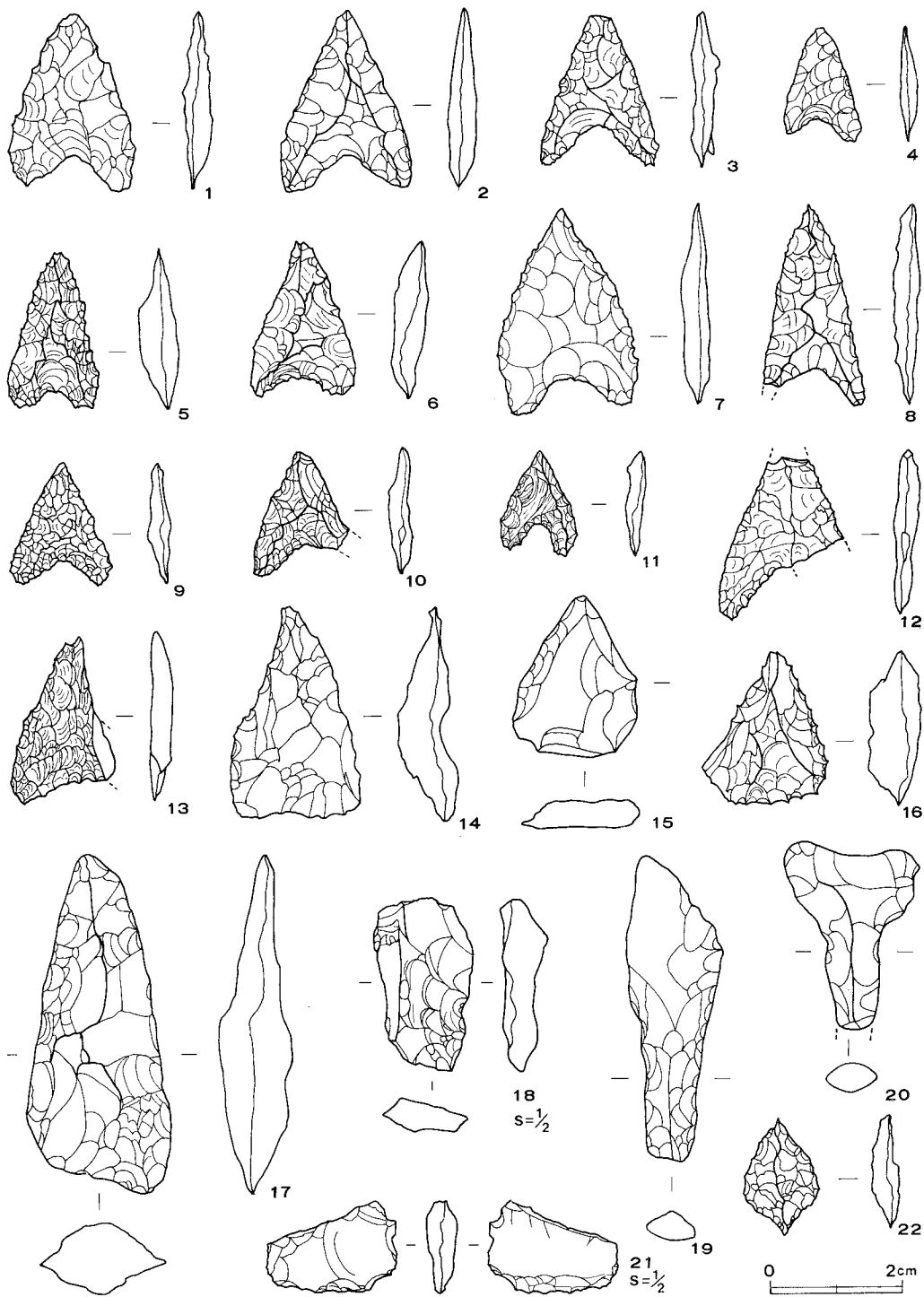
挿図番号	写真番号	器種	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	石質	備考	台帳番号
第221図 71	PL55	磨石	(8.8)	(5.3)	3.5	(154.5)	SI93	安山岩	半欠	71
		磨石	(10.1)	(5.4)	5.0	(335.6)	SI109	流紋岩	半欠	74
	PL55	磨石	5.6	5.8	3.4	141.2	SI112	安山岩	完形	75
	PL55	磨石	(8.6)	9.2	5.6	(428.1)	SI97	流紋岩	半欠	72
	PL55	磨石	10.9	(8.7)	4.4	(594.2)	SI105	流紋岩	凹みあり	73
		磨石	(10.2)	(4.3)	3.1	(176.6)	SK38	砂岩	半欠	76
	PL55	磨石	10.8	7.4	3.8	464.2	SK116	安山岩	表裏面に浅い凹み完形	78
	PL55	磨石	(9.3)	(4.1)	4.5	(198.6)	SK116	ホルンフェルス	半欠	77
		磨石	(5.1)	(6.5)	6.3	(289.4)	SK154	流紋岩	断欠	79
	PL58	磨石	(8.6)	(8.3)	5.6	(509.6)	K2g7	安山岩	断欠	96
81		磨石	(4.6)	(5.5)	(3.4)	(129.4)	SK160	安山岩	断欠	81
PL55	磨石	14.8	8.8	4.2	(939.5)	SK237	安山岩	完形	83	
PL55	磨石	(7.6)	(4.2)	4.1	(139.6)	SK251	流紋岩	半欠	84	
PL55	磨石	(6.0)	6.7	3.4	(212.4)	SD5	流紋岩	半欠	92	
85		磨石	(4.8)	(2.8)	3.4	(45.4)	SK171	安山岩	断欠	80
第222図 86		磨石	11.8	8.2	5.0	(635.6)	SK255	安山岩	完形	85
	87		(7.7)	(3.8)	4.5	(133.3)	SK264	安山岩	断欠	86
	88		(9.0)	10.5	6.0	(841.7)	SK280	流紋岩	半欠	87
	89		(6.9)	(8.8)	5.5	(354.9)	SK445	花崗岩	半欠	88
	PL55	磨石	(10.0)	(5.0)	3.9	(242.9)	SK530	アブライト	半欠	89
	91		(7.8)	(3.8)	5.0	(151.4)	SD3	砂岩	断欠	90
	92		(4.9)	(4.3)	4.1	(87.5)	SD5	砂岩	断欠	93
	PL55	磨石	7.4	(5.7)	5.0	(189.2)	SD6	安山岩	一部欠	95
	PL58	磨石	10.6	5.6	3.2	344.8	K4h ₆	安山岩	完形	99
	95		(5.4)	(5.6)	2.6	(74.0)	SD5	安山岩	断欠	94
96		磨石	(6.8)	(5.3)	4.0	(148.4)	表採	安山岩	断欠	114
PL58	磨石	(4.9)	(6.5)	4.1	(178.7)	K4h ₉	流紋岩	断欠	101	
PL55	磨石	11.3	8.4	4.1	588.0	SI49	流紋岩	表裏面に凹み完形	117	
PL58	磨石	(9.1)	11.1	5.1	(719.4)	L4a ₁	安山岩	半欠	107	
第223図 100	PL58	磨石	8.1	7.8	3.6	324.7	L3e ₇	砂岩	完形	104
	PL58	磨石	8.7	7.0	5.3	472.8	L3f ₃	流紋岩	表裏面に凹み完形	105
	PL55	磨石	9.2	7.2	5.7	484.1	M3a ₃	流紋岩	完形	108
	PL55	磨石	(6.3)	9.1	4.2	(346.7)	表採	安山岩	半欠	112
	PL58	磨石	(7.5)	8.0	4.0	(311.6)	M3a ₃	流紋岩	半欠	25
	PL58	磨石	(8.5)	(6.8)	5.5	(398.8)	L1f ₆	安山岩	半欠	103

挿図番号	写真番号	器種	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	石質	備考	台帳番号
106	PL55	磨石	(7.3)	6.8	3.5	(275.9)	表採	安山岩	半欠	115
107	PL58	磨石	(9.2)	(7.0)	4.7	(354.9)	M3e ₉	安山岩	半欠	110
108	PL58	磨石	(4.8)	6.5	3.6	(147.1)	L3表採	アブライト	半欠	116
109	PL55	磨石	(6.7)	9.5	5.2	(431.5)	M4a ₇	砂岩	半欠	111
110	PL58	凹石	8.8	9.0	5.9	524.8	S11	砂岩	完形	170
111	PL58	凹石	(8.6)	(10.8)	4.5	(299.2)	S193	安山岩	断欠	173
112		凹石	(4.3)	(5.3)	3.5	(63.5)	S19	安山岩	断欠	171
113		凹石	(4.0)	(9.3)	4.0	(170.1)	L3c ₅	安山岩	断欠	181
第224図 114	PL58	凹石	17.7	13.1	3.8	1136.0	S17	雲母片岩	完形	172
115	PL58	凹石	12.8	7.9	4.6	609.0	SK57	安山岩	敲石兼用完形	174
116	PL58	凹石	(8.3)	(7.8)	4.2	(347.3)	SD6	砂岩	砥石兼用	178
117	PL58	凹石	(14.0)	4.7	4.2	(511.3)	SK255	角閃片岩	一部欠	175
118	PL58	凹石	(6.9)	7.2	3.8	(265.7)	表採	安山岩	半欠	184
119	PL58	凹石	10.9	7.1	5.0	474.2	SD1	砂岩	完形	176
120	PL58	凹石	(7.0)	8.1	5.1	(432.2)	K4f ₇	アブライト	半欠	179
121	PL58	凹石	(9.9)	7.2	5.0	(469.4)	L4a ₅	砂岩	一部欠	182
122	PL59	凹石	(9.1)	4.9	2.7	(145.1)	M4a ₉	角閃片岩	一部欠	183
第225図 123	PL57	石皿	(16.9)	(14.3)	5.4	(1415.9)	S147	安山岩	断欠	36
124		石皿	(7.5)	(7.0)	4.8	(223.9)	M3i ₅	安山岩	断欠	54
125		石皿	(5.3)	(5.4)	4.9	(150.2)	K4g ₉	安山岩	断欠	46
126	PL57	石皿	(14.4)	(11.9)	5.3	(1230.1)	S144	安山岩	断欠	35
127	PL57	石皿	(6.4)	(7.2)	3.6	(174.0)	L4e ₁	安山岩	裏面に凹み断欠	52
128	PL57	石皿	(12.8)	(10.2)	5.3	(774.9)	S179	安山岩	縁あり断欠	39
129		石皿	(11.9)	13.9	4.6	(752.5)	SD13	安山岩	半欠	43
130	PL57	石皿	(9.6)	(9.5)	3.2	(314.4)	L2e ₇	安山岩	断欠	49
第226図 131	PL57	石皿	(28.3)	(19.8)	7.0	(3530.7)	S11	安山岩	脚付凹みあり半欠	26
132	PL57	石皿	(11.9)	(10.3)	5.4	(556.0)	S117	安山岩	断欠	29
133	PL57	石皿	(8.5)	(13.2)	4.2	(670.9)	S13	砂岩	半欠	27
134		石皿	(6.3)	(4.4)	3.3	(96.3)	S123	凝灰岩	断欠	33
135		石皿	(9.0)	(5.5)	(5.9)	(295.9)	S135	安山岩	断欠	34
136	PL57	石皿	(12.2)	(13.7)	6.6	(820.0)	S110	安山岩	表裏面に多数の凹み	28
137		石皿	(6.9)	(3.8)	3.4	(65.5)	SD14	安山岩	断欠	44
138		石皿	(5.0)	(3.5)	4.7	(76.6)	SK513	安山岩	断欠	41
139	PL57	石皿	(16.0)	(10.0)	4.6	(1834.7)	S118	安山岩	表面側面に凹み	31
140		石皿	(7.1)	(6.5)	4.2	(214.5)	S174	安山岩	裏面に凹み多数断欠	38

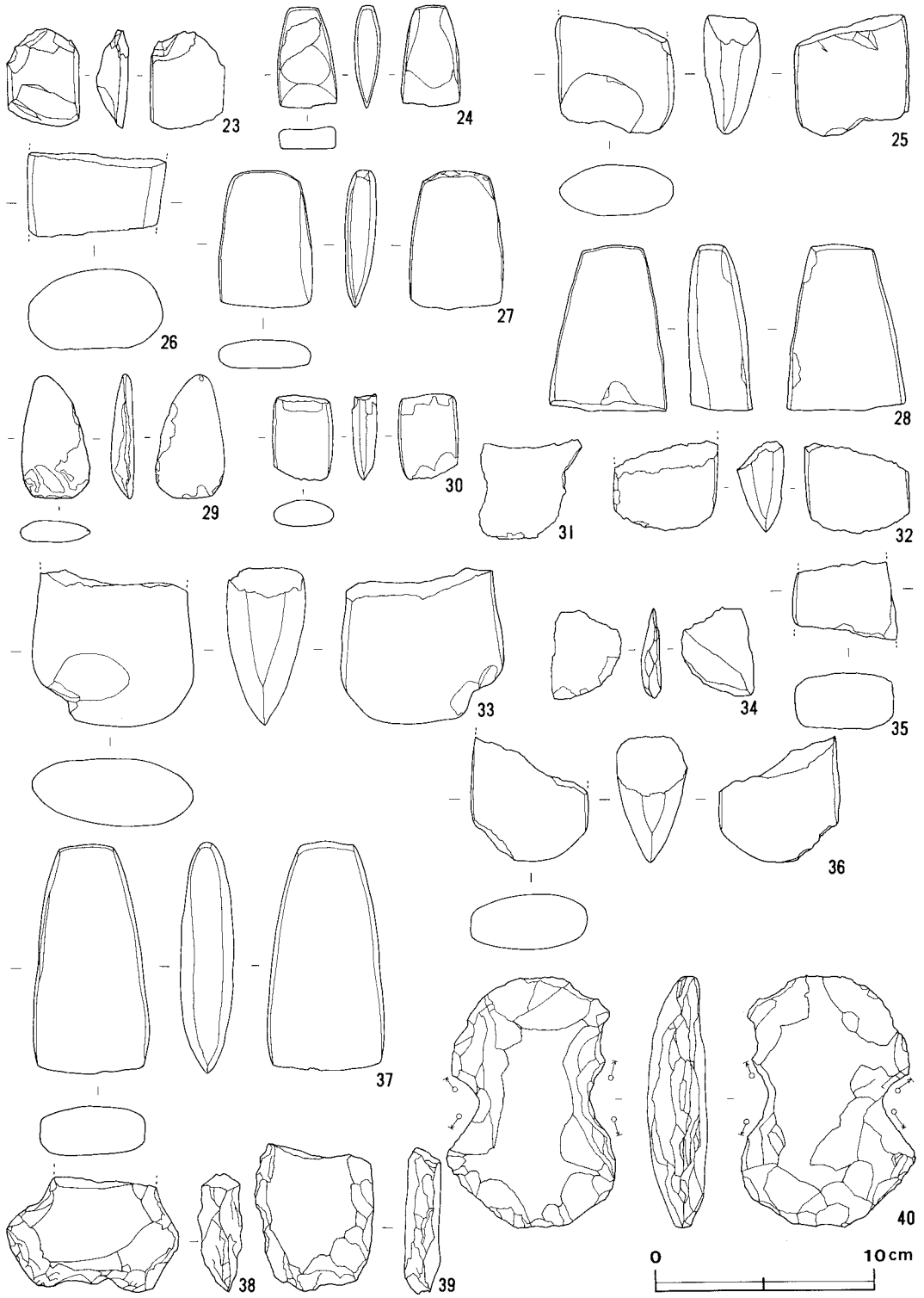
挿図番号	写真番号	器種	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	石質	備考	台帳番号
第227図 141	PL57	石皿	(15.7)	(8.9)	5.7	(1,181.4)	L2j ₀	安山岩	断欠	50
142	PL57	石皿	(15.1)	(9.2)	4.4	(676.4)	L1b ₄	安山岩	表裏面に凹み半欠	47
143		石皿	(9.9)	(3.7)	4.1	(96.2)	L4g ₁	安山岩	断欠	53
144	PL57	石皿	(15.2)	(12.1)	4.2	(939.8)	SI79	安山岩	断欠	40
第228図 145	PL57	敲石	10.3	5.0	4.7	325.3	SI1	石英斑岩	完形	191
146	PL57	敲石	6.0	3.5	3.3	99.0	SI18	安山岩	完形	192
147	PL59	敲石	(9.9)	6.2	3.3	(286.9)	SI47	砂岩	凹石兼用半欠	195
148	PL58	敲石	(9.9)	6.4	4.2	(379.9)	SI18	石英斑岩	半欠	193
149		敲石	(4.9)	(6.3)	5.1	(157.0)	SD1	安山岩	断欠	196
150	PL59	敲石	10.2	4.4	3.7	183.0	SI32	砂岩	完形	194
151	PL57	敲石	10.9	6.0	7.4	692.9	SD5	砂岩	剥落多し完形磨石兼用	197
152	PL59	敲石	9.0	6.2	2.6	199.6	K3i ₉	石英斑岩	完形	198
153	PL59	敲石	(8.7)	6.1	2.7	(187.6)	表採	砂岩	一部欠	203
154		敲石	(7.2)	(5.4)	5.2	(297.6)	K4j ₅	砂岩	断欠	199
第229図 155	PL59	敲石	13.2	8.6	5.2	770.6	L1g ₇	安山岩	凹石兼用一部欠	200
156	PL57	敲石	10.4	8.0	4.0	472.2	L4a ₅	砂岩	磨石兼用完形	201
157	PL57	敲石	11.8	7.2	4.8	627.5	M3c ₇	花崗岩	剥落多し完形	202
158	PL59	敲石	11.3	5.9	4.5	406.7	表採	花崗岩	完形	204
159		軽石製品	3.7	3.9	1.8	3.9	SK84	軽石	無孔	167
160		軽石製品	5.0	2.8	1.5	2.6	SK255	軽石	無孔	168
161	PL59	軽石製品	10.3	6.5	3.4	28.6	SI16	軽石	1孔	163
162		軽石製品	3.6	3.8	2.3	4.5	SI32	軽石	無孔	164
163	PL59	軽石製品	8.3	6.0	4.5	38.0	SI73	軽石	無孔	165
164	PL59	軽石製品	6.0	4.8	1.7	5.3	SI5	軽石	無孔	162
165		軽石製品	5.0	3.3	1.7	2.8	SI97	軽石	無孔	166
166		軽石製品	4.0	3.8	2.0	4.0	SI5	軽石	1孔	161
第230図 167	PL59	石棒	59.8	9.7	9.6	8,930.0	SI47	角閃片岩	完形	187
168	PL59	石棒	(10.4)	3.6	3.5	(191.4)	SI38	角閃片岩	断欠	186
169		石棒	(12.2)	(10.0)	(3.3)	(415.2)	SI96	角閃片岩	頭部断欠	188
170	PL59	不明石製品	4.7	1.6	0.6	3.8	SD7	ホルンフェルス	一部欠	137
171		垂飾	(4.7)	3.6	1.1	(20.2)	SK299	砂岩	半欠	205
172	PL59	石棒	(4.7)	8.6	(6.7)	(299.9)	SI106	安山岩	頭部断欠	189

表 14 石器(石製品)一覽表(4区)

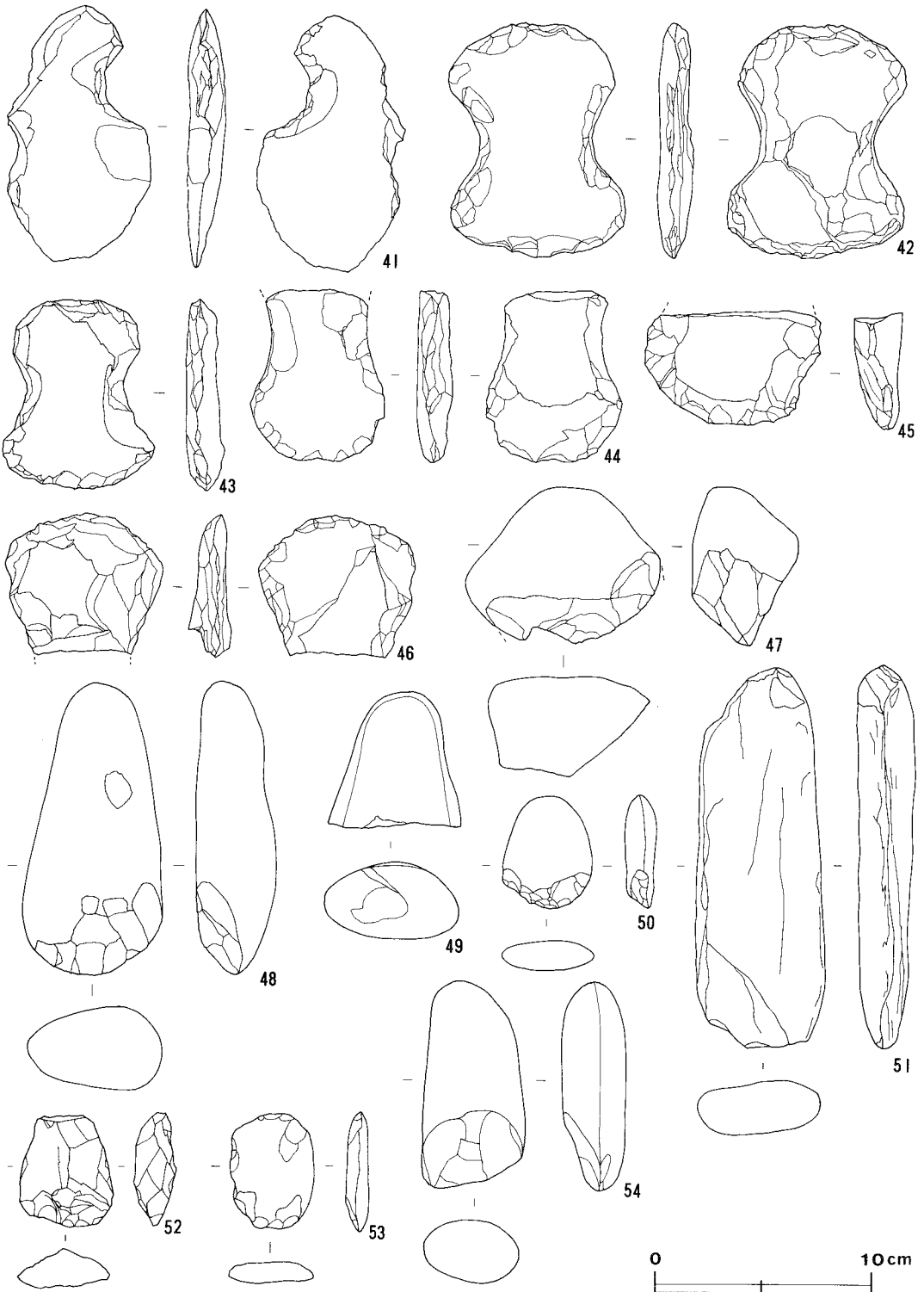
挿図番号	写真番号	器種	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	石質	備考	台帳番号
第231図 1	PL59	石 鎌	5.8	2.4	0.7	6.6	SI 4	チャート	完形	3
2	PL59	石 鎌	2.4	2.1	0.5	1.5	SI 5	ホルン フェルス	完形	1
3	PL59	石 鎌	3.3	(2.0)	0.4	(2.1)	SI 50	チャート	右脚欠	2
4	PL59	磨製石斧	3.3	3.1	1.3	19.4	SI 50	粘板岩	小形完形	6
5	PL59	打製石斧	(9.8)	7.3	2.2	(131.6)	SD 4	石英斑岩	頭部欠	7
6		磨石	(6.9)	(4.9)	(3.3)	(109.2)	SI 5	安山岩	断欠	11
7	PL60	磨石	12.8	9.8	4.2	748.4	SI 4	石英斑岩	完形	10
8		磨石	(7.5)	(10.6)	4.2	(337.5)	SI 4	砂岩	断欠	8
9	PL60	磨石	(4.1)	(5.7)	(4.1)	(129.0)	SD 4	安山岩	半欠	25
10		磨石	(6.5)	(5.7)	(3.7)	(238.2)	SK12	砂岩	断欠	17
11		磨石	(7.4)	(6.0)	(3.4)	(228.0)	SI 19	安山岩	半欠	13
12	PL59	磨石	(8.2)	(5.6)	(4.5)	(273.0)	SK31	安山岩	半欠	19
第232図 13		磨石	(4.7)	(2.5)	(4.1)	(31.4)	SI 19	安山岩	断欠	14
14		磨石	(6.7)	(5.3)	(2.8)	(120.2)	SD 4	雲母片岩	断欠	26
15	PL59	磨石	(8.9)	(6.0)	(4.8)	(285.8)	SI 4	安山岩	半欠	28
16		磨石	(5.0)	(4.0)	(5.2)	(124.3)	SD 4	安山岩	断欠	24
17	PL60	磨石	5.9	5.5	4.4	190.7	O6b _s	安山岩	完形	32
18		磨石	(4.4)	(4.7)	(3.3)	(76.3)	SD 1	安山岩	断欠	23
19		磨石	(4.1)	(4.2)	2.5	(52.8)	O6g ₉	石英斑岩	断欠	33
20	PL59	石 皿	(4.4)	(5.3)	3.8	(88.6)	SI 4	安山岩	裏面凹み2ヶ断欠	16
21	PL59	石 皿	(7.7)	(8.4)	3.3	(206.3)	SK85	安山岩	断欠	18
22		石 皿	(5.7)	(7.3)	2.9	(124.3)	SK42	雲母片岩	断欠	20
23	PL60	石 皿	(13.1)	(5.5)	5.3	(323.3)	P7e _s	安山岩	断欠	34
24		凹石	(7.5)	(6.3)	4.9	(223.0)	SI 4	石英安山岩	断欠	31
25	PL59	敲石	8.2	3.9	3.7	177.2	SI 4	砂岩	完形	9
26	PL60	敲石	(5.0)	(3.3)	2.1	(53.6)	SD4	安山岩	半欠	27
27	PL60	石 棒	(5.8)	(3.7)	(2.9)	(85.1)	N6a _s	角閃片岩	胴部片	36
28	PL60	石 棒	(6.2)	(5.3)	(1.8)	(73.3)	SI 7	角閃片岩	頭部片	35
29	PL60	不明石製品	(2.6)	(5.9)	(1.2)	(35.9)	SK173	角閃片岩	断欠	22
30	PL60	砥石	(9.4)	6.2	2.5	(176.6)	SI 50	砂岩	一部欠	15
		磨石	(2.6)	(3.2)	(3.8)	(29.4)	SI 4	安山岩	断欠	29
		磨石	(6.7)	(3.0)	(6.0)	(108.5)	SI 4	安山岩	断欠	30



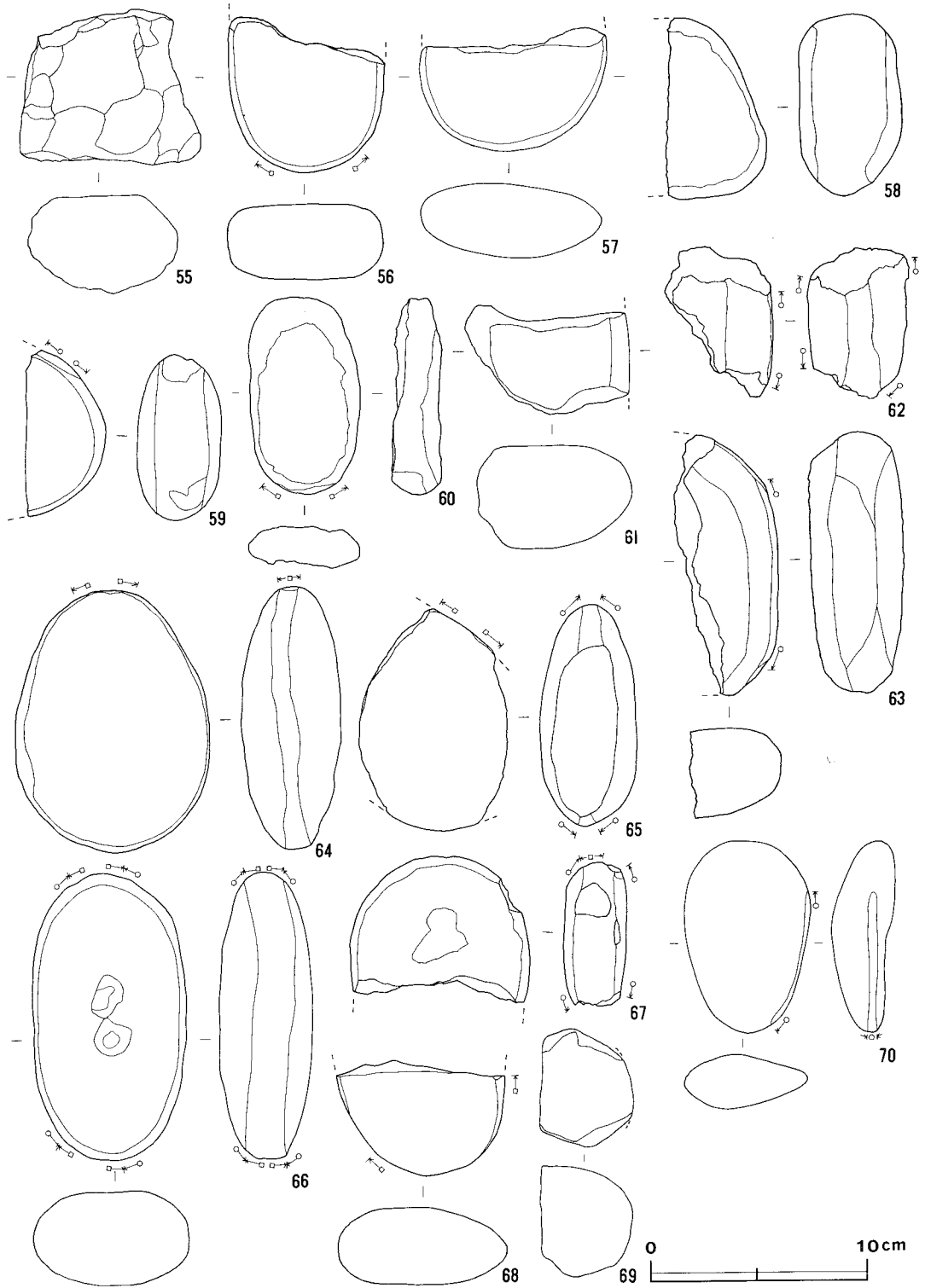
第 217 图 石器实测图(1)



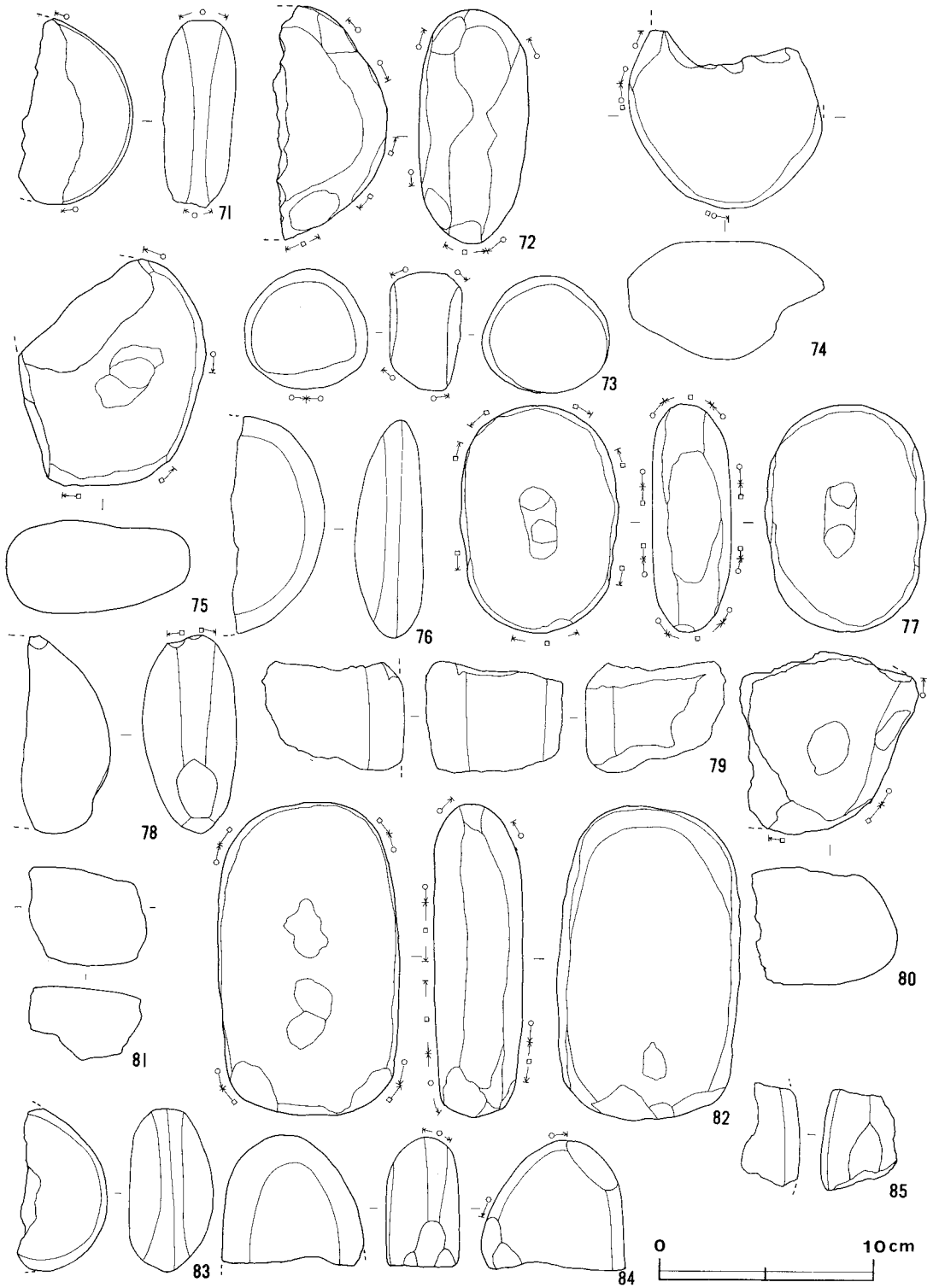
第 218 图 石器实测图(2)



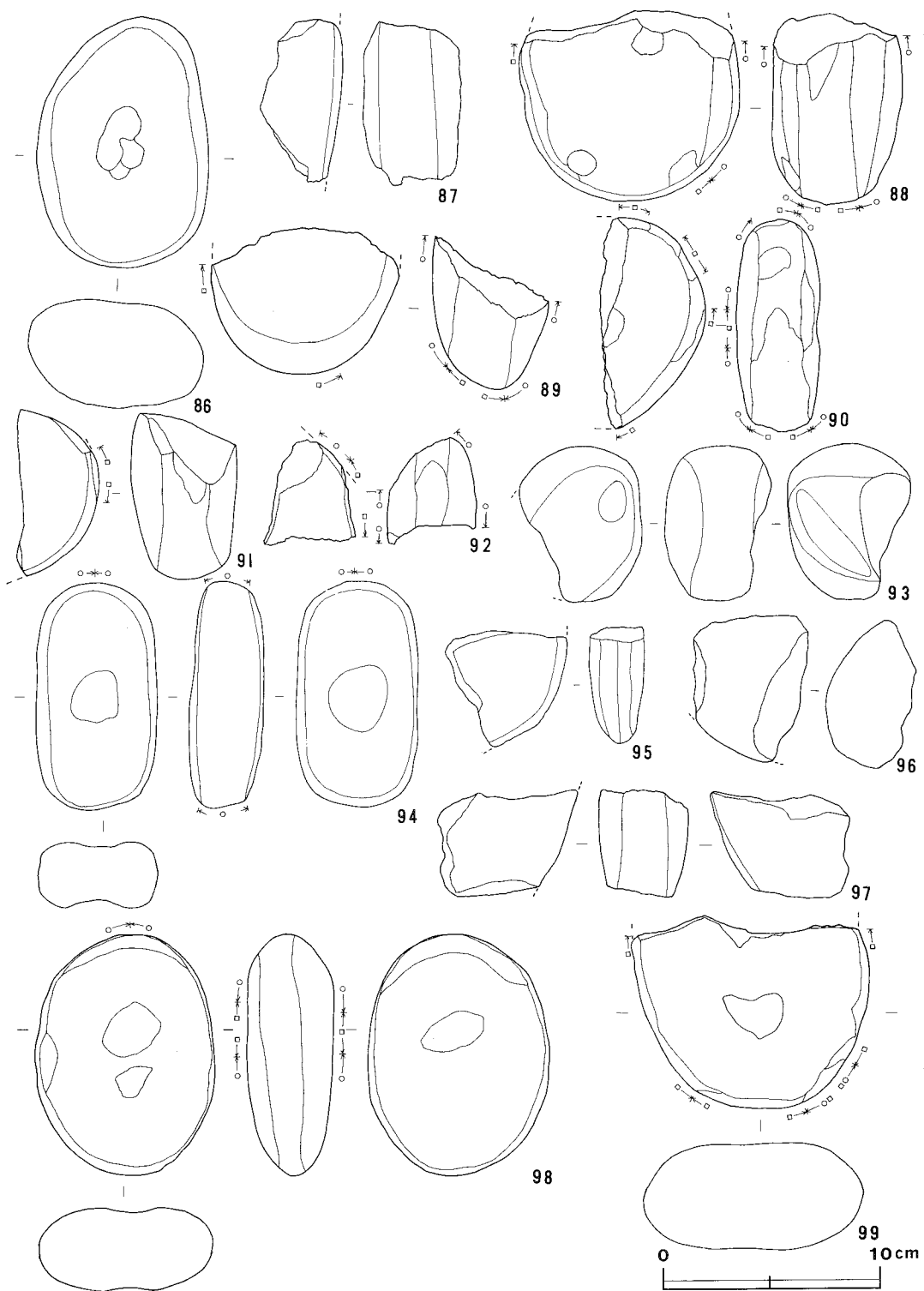
第 219 图 石器实测图(3)



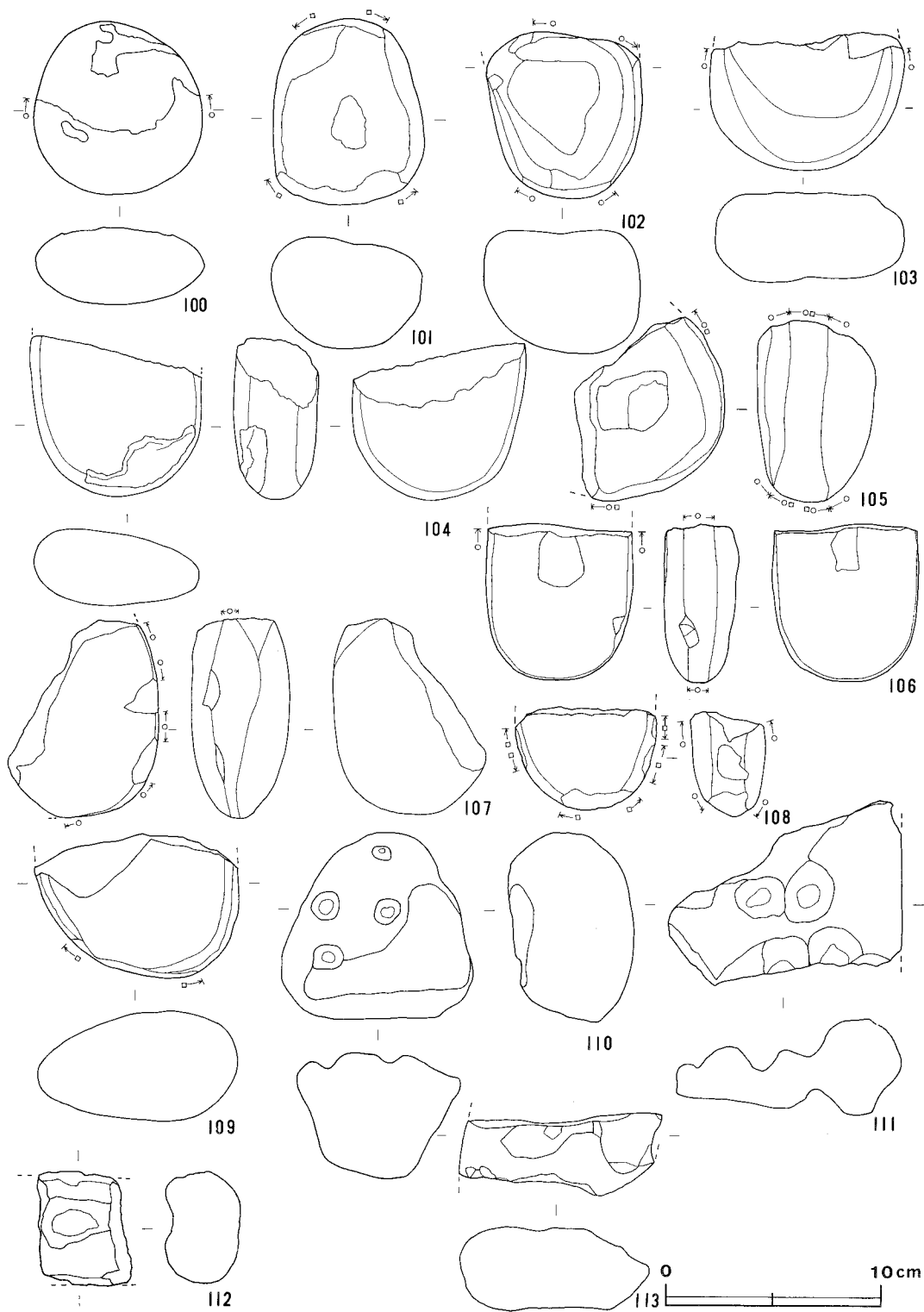
第 220 图 石器实测图(4)



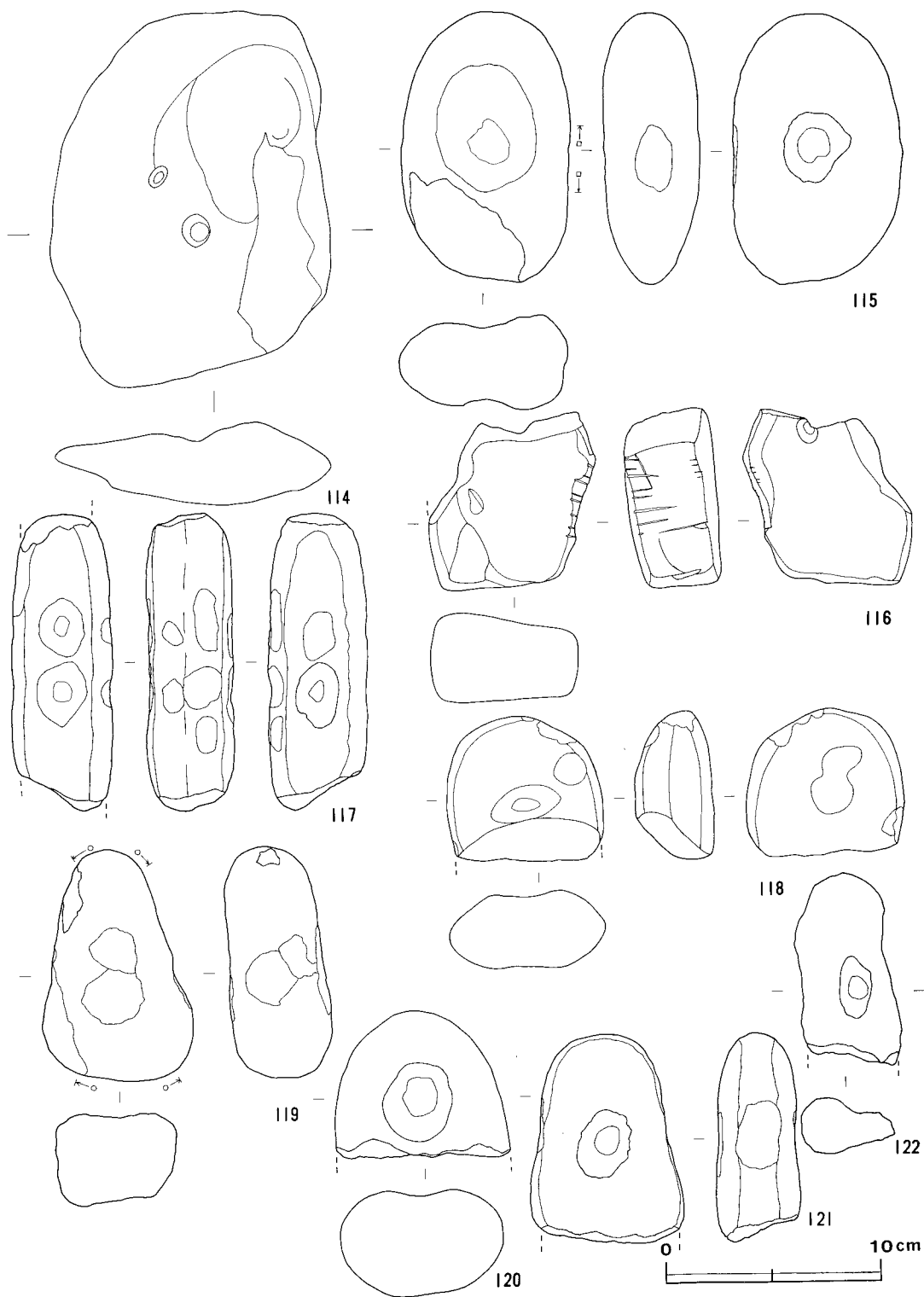
第 221 图 石器实测图(5)



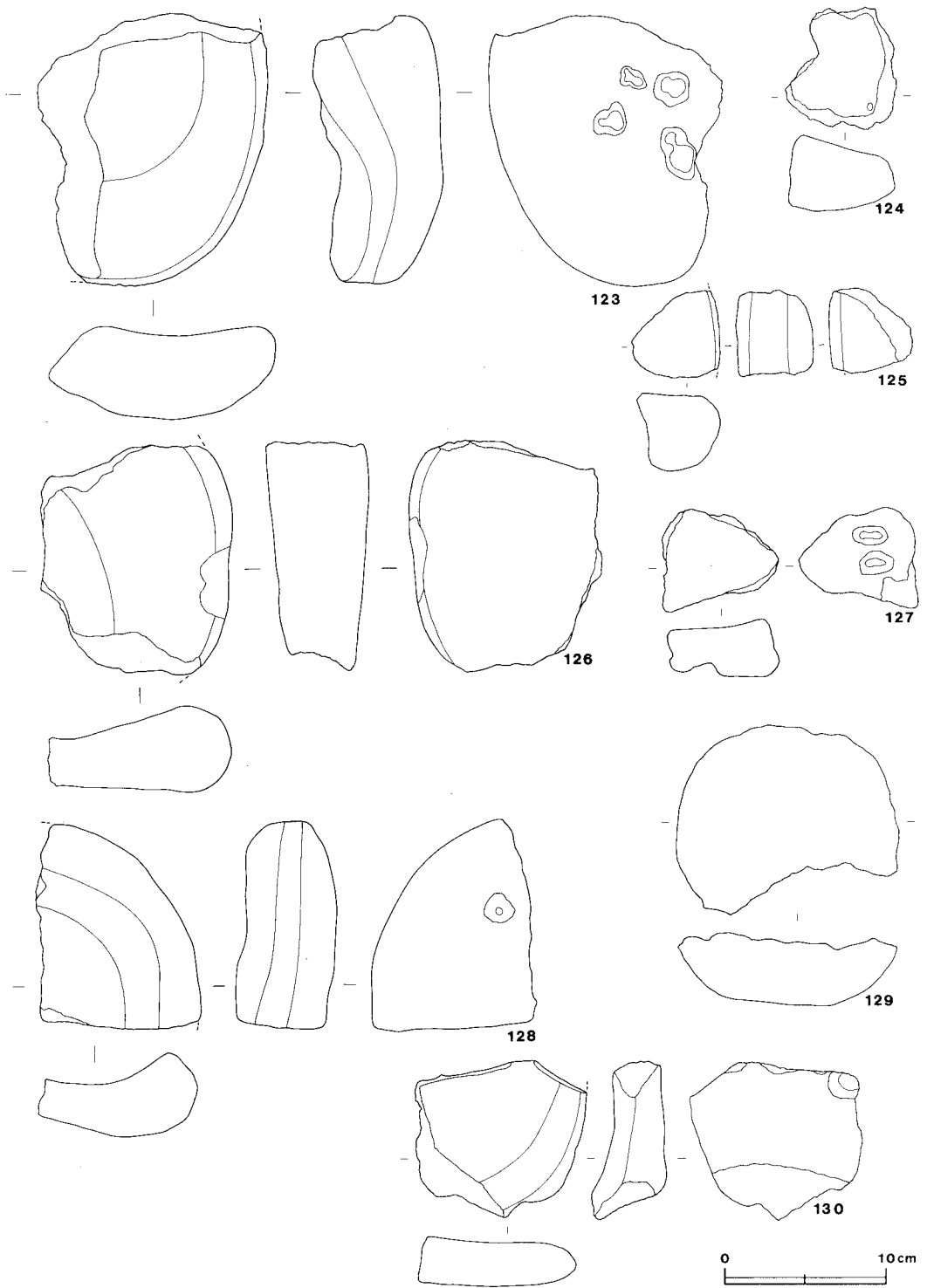
第 222 图 石器实测图(6)



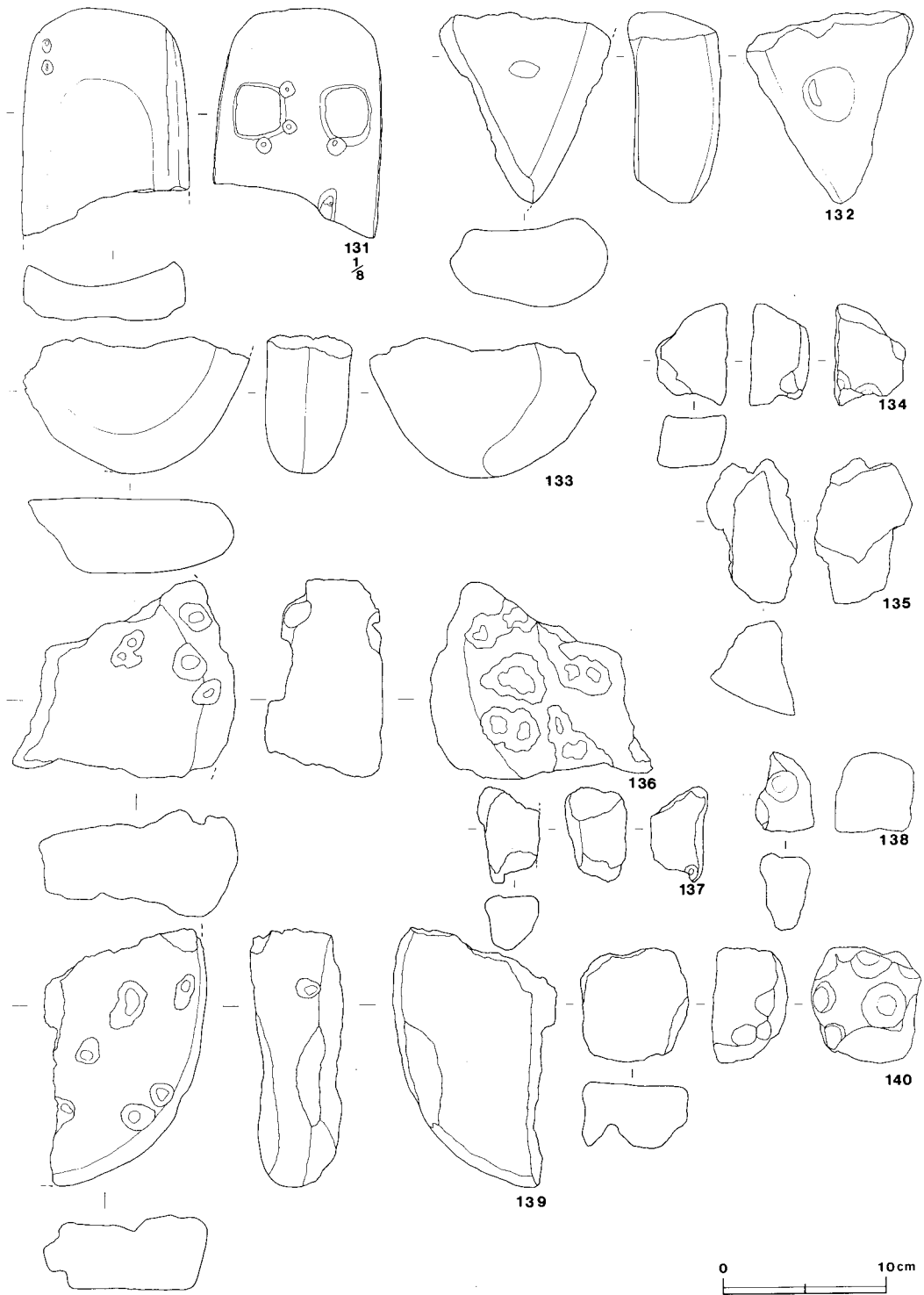
第 223 图 石器实测图(7)



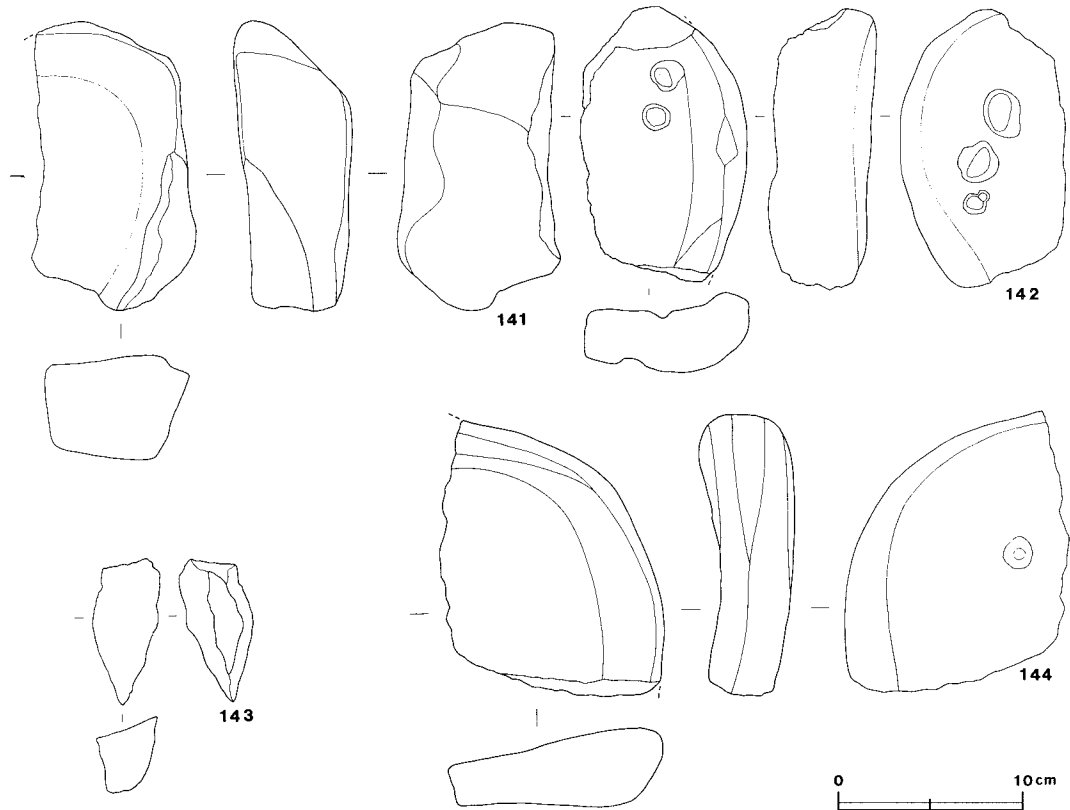
第 224 图 石器实测图(8)



第 225 图 石器实测图(9)



第 226 图 石器实测图(10)



第 227 図 石器実測図(11)

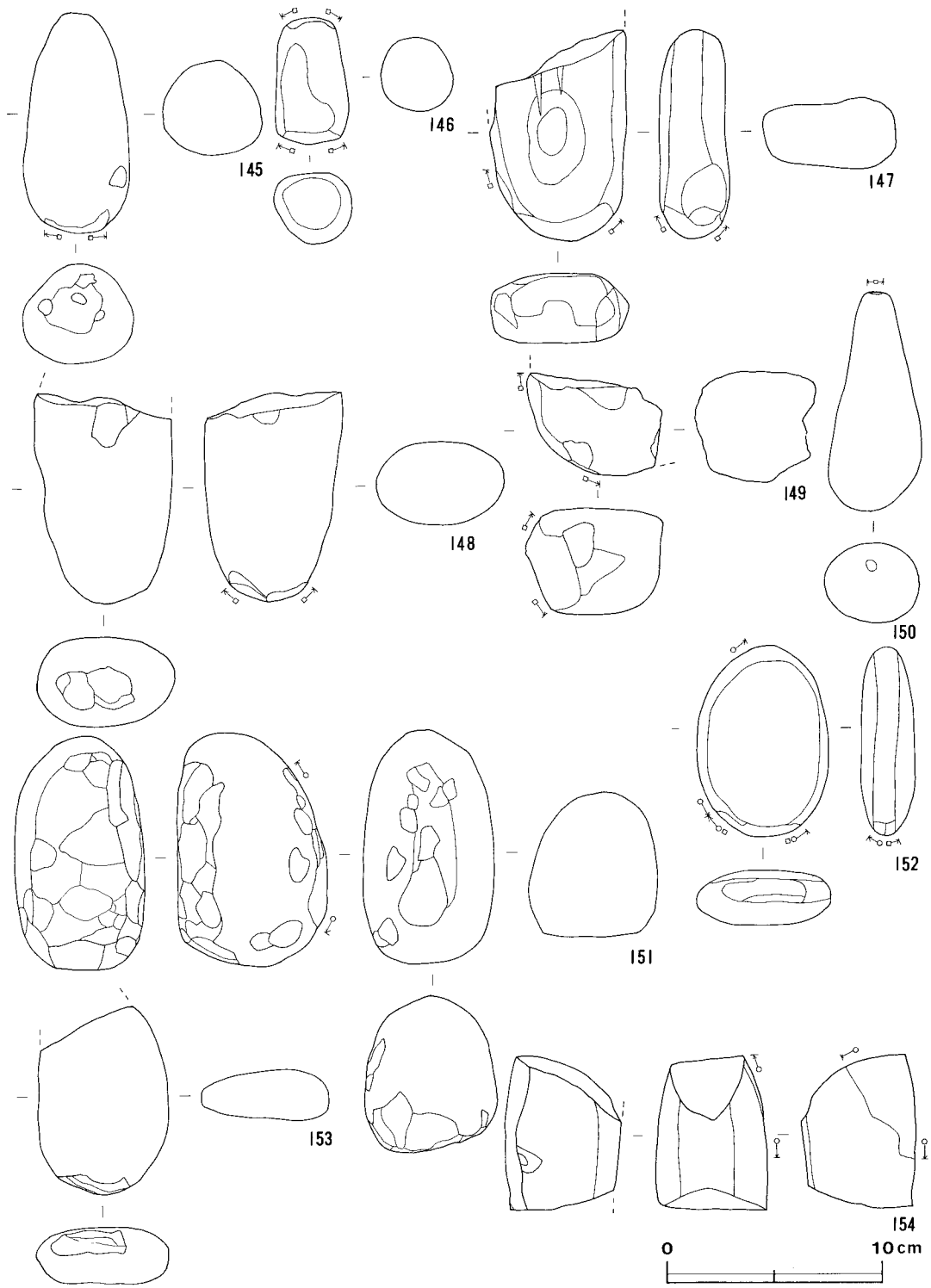
145・146・150・158 と 4 区の 25・26 は前者に属する例であり、146・158 は上下両端に敲打痕が認められ、他は一端にだけ敲打痕がある。146 は小礫であるが、敲打が顕著である。147・148・156 は凹みを表面に有している。147・149・151～157 は後者に属し、磨痕と敲打痕が複合している。150・154・155 は敲打による剥落が認められる。

(12) 砥石 (第 232 図 30)

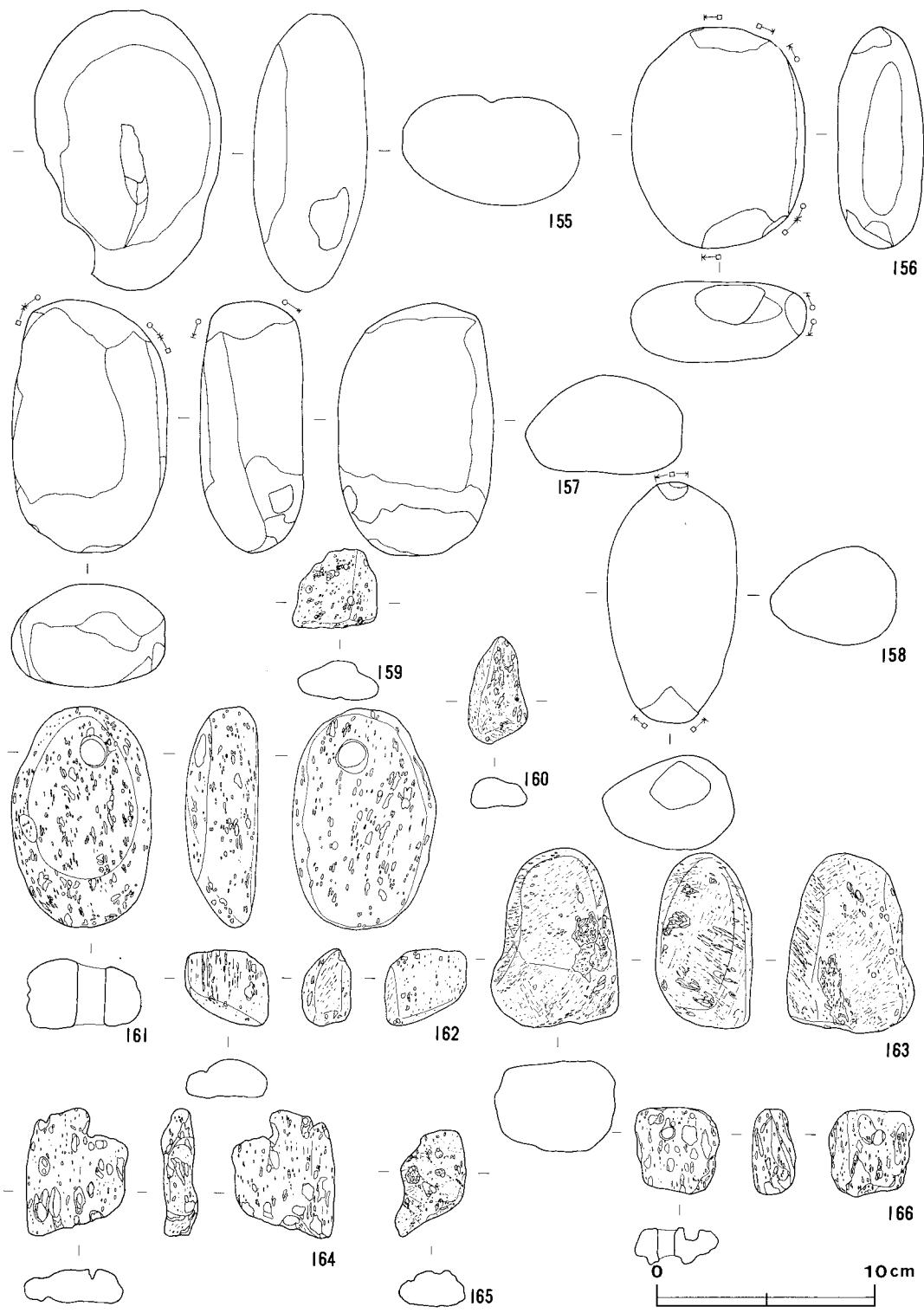
4 区の第 50 号住居跡から 1 点出土している。扁平な自然石を用い、表裏面に磨痕が認められるが、表面の方が顕著である。上端右方を欠損している。住居跡が縄文中期の所産であり、本石器も縄文時代のものと考えられる。

(13) 軽石製品 (第 229 図 159～166)

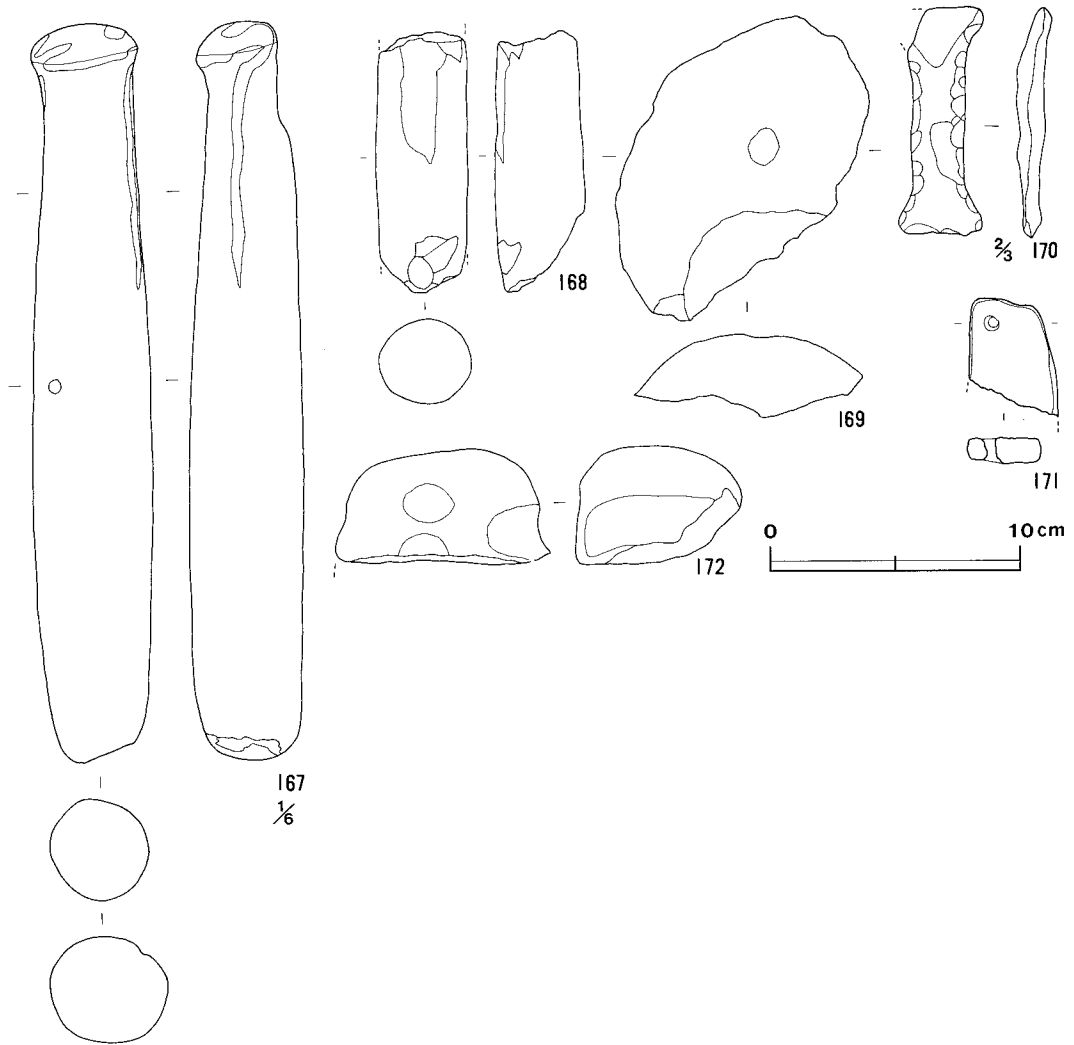
3 区からだけ 8 点出土している。この他にも軽石の小片はあるが、製品としての加工が明らかではないので割愛した。有孔のものは 161・166 の 2 点で、他は無孔である。166 は不整形に整形され、上方に 1 孔を穿っている。161 は楕円形に整えられ、断面形はカマボコ状を呈し、裏面は平坦に作出されている。上方に約 1.5 cm 程の 1 孔を穿っている。163 は上狭下広の平面形に整形され、下端は斜めに削られている。160 と 162 には明瞭な整形痕が認められる。形状が整えられたり、穿孔されているものは、何らかの



第 228 图 石器实测图(12)



第 229 图 石器实测图(13)

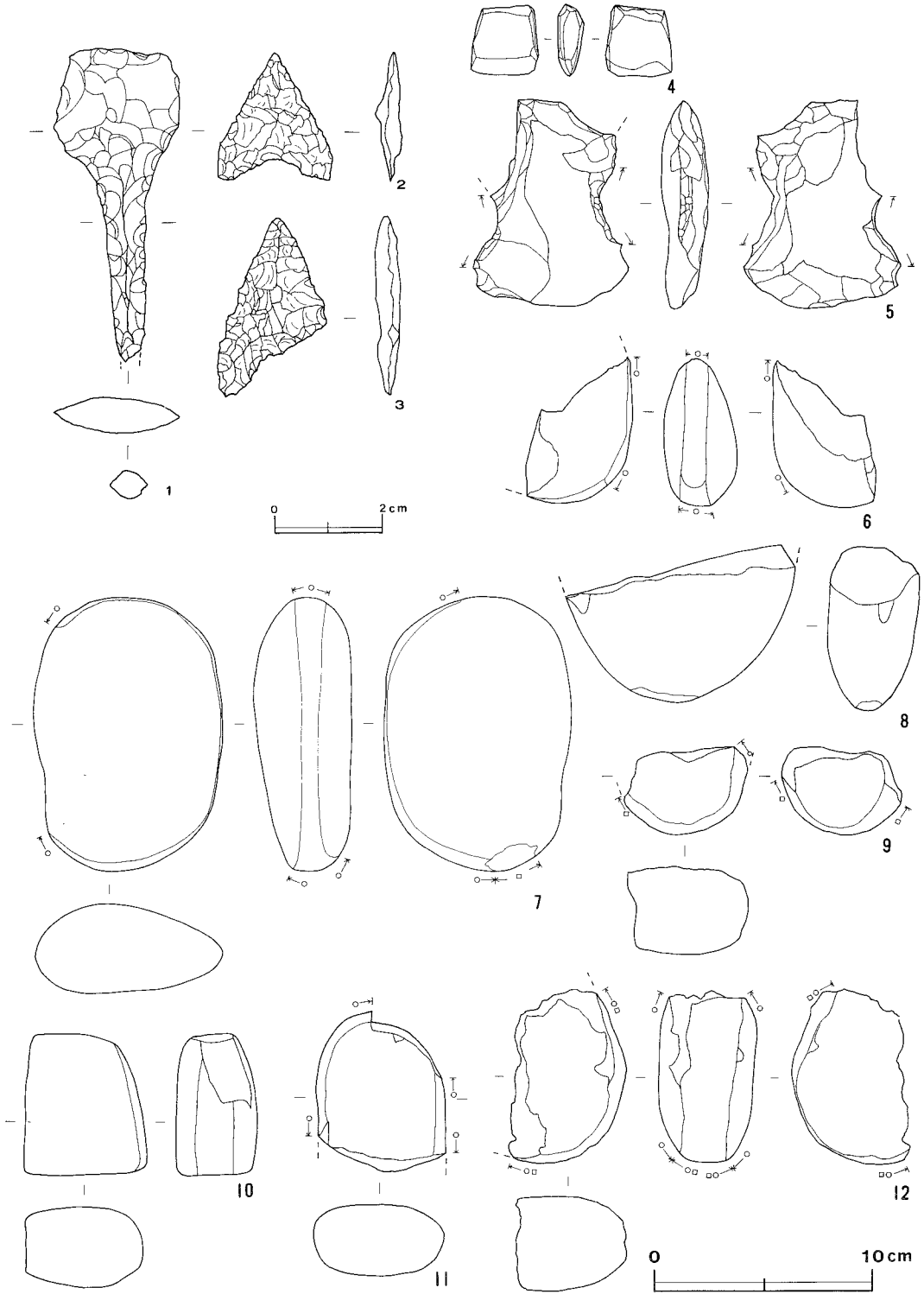


第230図 石器・石製品実測図(14)

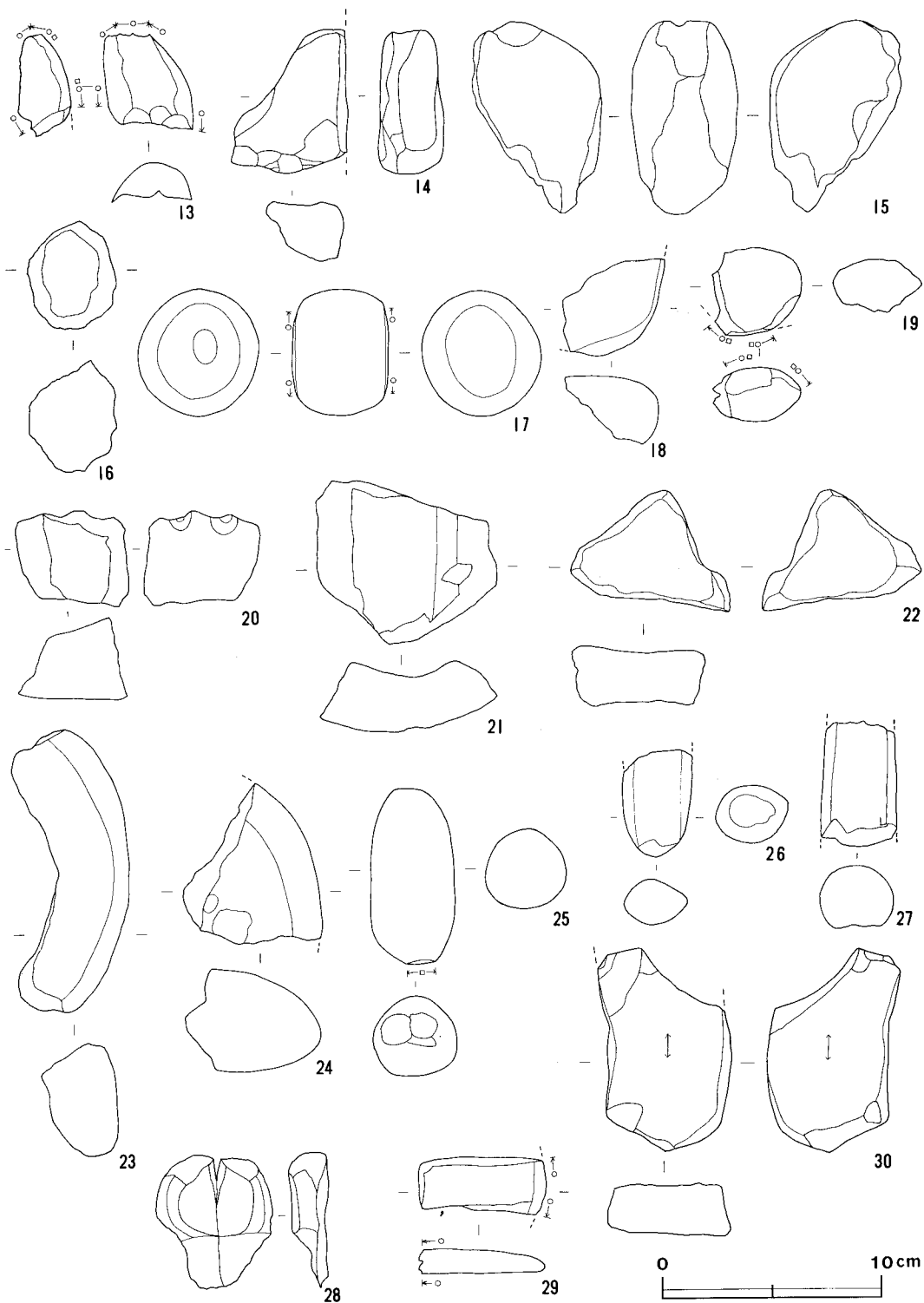
用途にあてられた製品であるが、詳しい用途は不明である。浮標としておくのが妥当であろう。

(14) 石棒 (第230図167～169, 172, 第232図27・28)

3区から4点, 4区から2点の計6点が出土している。石質は角閃片岩が6点中5点を占め, 3区の1点だけが安山岩である。167は第47号住居跡から出土した有頭石棒で, 頭部の半面を欠損するほかは完形であり, 体部中央に1か所の凹みを有する。頭部から体部上半にかけて黒色の変色部分が認められるが, これがいかなる原因によるかは不明である。完形の石棒は当遺跡でも初めての出土であり, きわめて貴重な資料である。169・172および4区の28は頭部片で, 前2者は大形石棒の断欠で, 後者は小形石棒で扁平で剥落している。168と27は共に細身の体部片である。



第 231 图 石器实测图(1)



第 232 图 石器实测图(2)

(15) 垂飾 (第 230 図 171)

3 区の第 299 号土坑から出土しており、縄文中期の所産と考えられる。石質は砂岩で、下半を欠損している。上端左方に 1 孔を穿ち、周縁を丁寧に研磨している。なお、表面には小波状の模様があるが、自然作用によるものと思われる。

(16) 不明石製品 (第 230 図 170, 第 232 図 29)

3・4 区から各 1 点ずつ検出されているが、類例がなく用途不明のものを便宜上一括した。3 区の 170 は第 7 号溝の覆土中から出土しているが、形状からみて縄文時代のものと思われるが、詳しい時期は判明しない。扁平で周縁からの剝離によって糸巻形に整形されている。上部左端を欠損する。4 区の 29 は第 173 号土坑の覆土中から検出され、伴出土器からみて縄文中期のものであろう。断片のため形状は不明で、周縁は上下面から丁寧に磨って整形され、表裏面も平坦に作出されている。表面はやや丸味をもつが、裏面は水平である。

4 骨角貝製品

当遺跡 3 区の貝塚を伴う住居跡および土坑の覆土中からは骨角貝製品が検出されている。その種類としては、獣・魚骨製の刺突具、鳥獣骨および貝製の垂飾、貝刃、貝輪が主なものである。これらの製品 58 点のうち 52 点は第 34 号住居跡の覆土に堆積していた貝層中から出土しており、その他の住居跡・土坑からは 1～2 点の貝刃が出土しているにすぎない。4 区からは骨角貝製品は出土していない。

(1) 刺突具 (第 233 図 1～4)

刺突具とした 4 点のうち 3 点はシカの中手骨か中足骨を使用したヤスである。完形品は 1 点で、他は先端部片と基部片である。1 は、完形で先端は光沢を有しているが、基部は剝落が著しく整形痕が観察できない。断面形は扁平である。2 は基部片で、基端部に斜位の整形痕が認められるが、剝落痕が目立つ。3 は先端部片で、2 次加熱を受けて灰黒色を呈している。4 は、エイの尾棘を利用した刺突具で、先端および基部の一部を欠き、棘もかなり磨耗しており、使用痕が顕著である。

(2) 垂飾 (第 233 図 5～11)

垂飾は、骨製と貝製に大別される。5 は一端を欠損するが、他端はきれいに切断されている鳥骨製の管玉状の製品で、2 次加熱を受けて灰白色を呈する。6 はウミガメの背甲の肋骨板外側の突起を加工した装飾品で、上下端とも欠損しているが、上端には穿孔が認められ、右側縁には抉り込みが施されている。ウミガメの腹甲板を利用した穿孔品が江戸崎町椎塚貝塚⁽¹⁾から出土している。7～9 はほぼ同形同大のウノアシガイを加工した製品で、出土遺構からみて堀之内 I 式期に伴うものと思われる。いずれも殻を水平に切り取るが、7 が少し小さく、8・9 はほぼ同大である。また、放射肋の磨滅の程度は、9 が最も減っており、7 がこれに次ぎ、8 はほとんど磨滅していない。これらの製品は、環状垂飾⁽²⁾と分類されているもので、貴重な例といえよう。10・11 はツノガイを切断した加工品で、垂飾と考えられる。10 の上端はきれいに切断されているが、下端と 11 の両端は欠損している。縦肋が共に明瞭に認められる。

(3) 貝刃 (第 233 ~ 234 図 12 ~ 44)

貝刃は 39 点あり、そのうち 33 点が堀之内 I 式期の第 34 号住居跡の貝層中から出土している。また、他の 5 点も堀之内 I 式期の土坑からの出土品で、第 69 号住居跡出土の 1 点だけが加曾利 E III 式期のものと考えられる。貝刃はほとんどがハマグリを利用しているが、1 点だけシオフキの腹縁中央部を鋸歯状に欠きとっている断欠の資料が検出されたので、貝刃として取り上げておく。殻自体が薄く弱いシオフキを本当に使用したかどうかは今後の検討に待ちたい。しかし、千葉県加曾利貝塚、同山野貝塚、神奈川県北川貝塚、宮城県南境貝塚などから類例⁽³⁾が検出されているようであり、使用された可能性が高い。ハマグリ製の貝刃は 38 点で、右殻利用が 14 点、左殻利用が 17 点で、断欠のため不明なもの 7 点ある。遺存状態をみると、完形または一部欠損するだけの例が 31 点で、腹縁部の一部のみ残存する例が 7 点である。ハマグリ製貝刃のうち完形の例 22 点について殻高・殻長分布をみると次のようである。殻高は 38 ~ 59 mm に及び、平均殻高は 47 mm である。殻長は 44 ~ 71 mm に及び、平均殻長は 59 mm である。これを貝刃を多数出土した第 34 号住居跡のハマグリ製の殻長分布と比較してみると、通常の殻は殻長 31 ~ 40 mm の個体が多くを占め、より小さい個体も多い。これに対して貝刃として利用されているものは明らかに大きく、意図的な選択がなされていたことは確実である。次に刃部加工の方法についてみると、殻の外側に付刃する例、内側に付刃する例、内外の両側に付刃する例に大別されるが、当遺跡ではその全てが揃っている。この分類方法は、金子・忍沢 (1986)⁽⁴⁾によっている。それによれば外側に付刃する例は更に a ~ d の 5 型に細分され、内側に付刃するものは e 型、内外の両側に付刃するものは f 型とされている。この分類に従えば、当遺跡には e 型が 6 点、f 型が 3 点認められる。e・f 型は類例の比較的小さいもので、今後注目されるべき型といえよう。また、今回の報告において注意を喚起しておきたいのは、貝刃の断欠または残片とされる例がシオフキ製の 1 点を含めると 8 点も出土している点である。これらは単なる破片として未報告のまま取り残されることも多いと思われるが、筆者はこれらの中には意識的に小さく打ち割って使用した例があるのではないかと考えている。細かい加工に用いるには大形の貝刃よりは使い易かったのではないかとと思われる。

(4) 貝輪 (第 234 図 45 ~ 50)

貝輪として認定したものはサルボウ製 3 点、イタボガキ製 2 点、ベンケイガイ製 1 点の計 6 点である。この他にミルクイの断片が 1 点第 34 号住居跡より出土しているが、明瞭な磨痕は認められず、貝輪とは判定しがたい。サルボウ製 3 点のうち明瞭な加工痕を残しているのは 48 の 1 点だけで、45・49 は切断痕が一部に認められるだけである。イタボガキ製の 2 点 (46・47) も極小の破片で、切断痕がみられるだけである。47 は 2 次加熱を受けて暗灰色を呈している。ベンケイガイ製の 50 は殻頂部の内面に歯丘列を残すが、丁寧に加工されている断片である。

(5) 穿孔貝製品 (第 234 図 51)

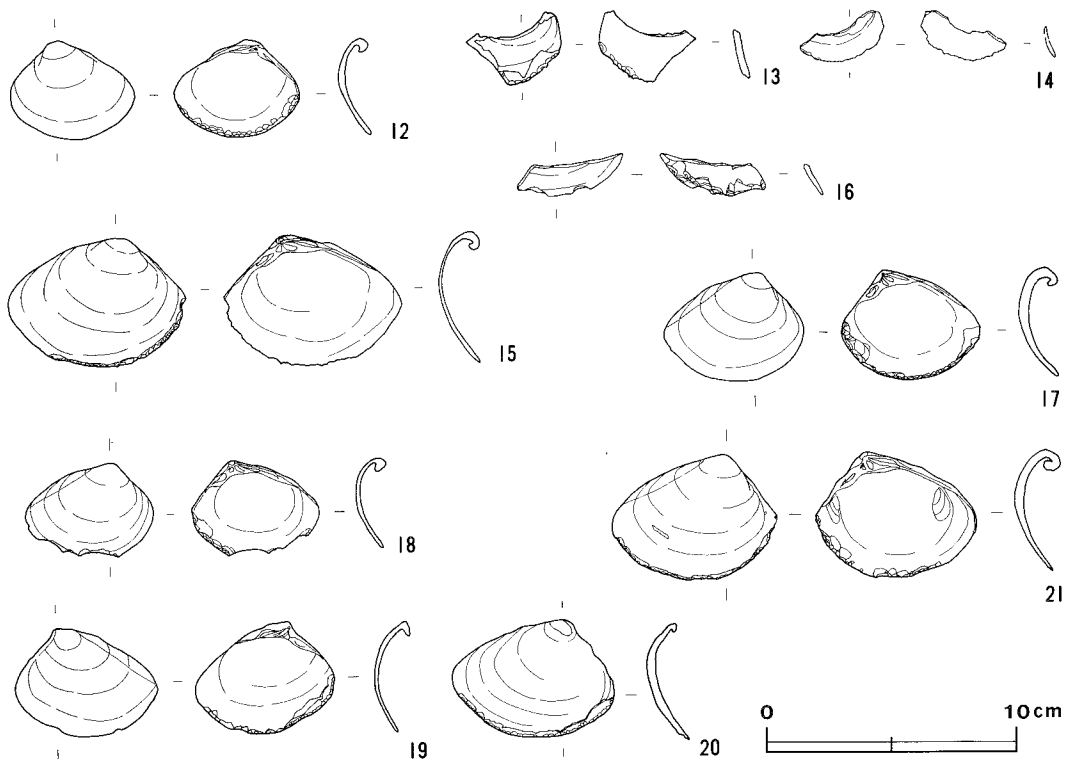
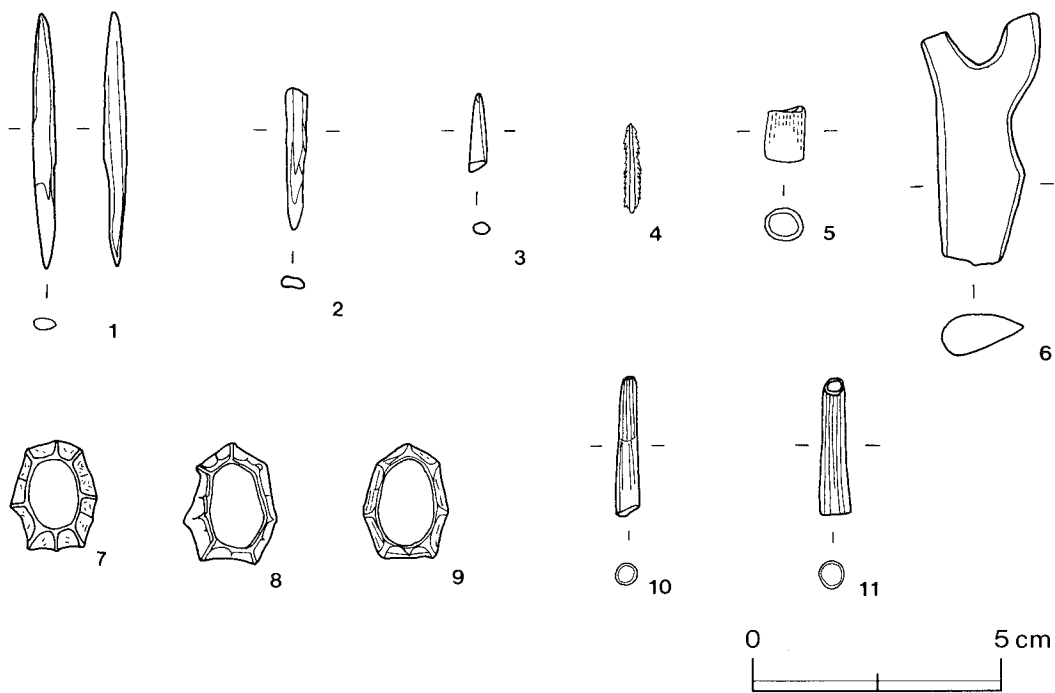
51 は推定殻長 42 mm 前後のシオフキの左殻を利用した貝製品で、殻頂下に直径 8 mm ほどの孔を穿っている。有孔の貝については、垂飾などの装身具としての利用や、貝製錘としての活用などが考慮されるが、前者としては一般的な貝である点が、後者としては薄く軽量である点などが不都合な点としてあげられよう。今後検討されるべき資料として提出しておきたい。

注 1 ~ 4 金子浩昌・忍沢成視『骨角器の研究 縄文篇 I・II』慶友社 昭和 61 年

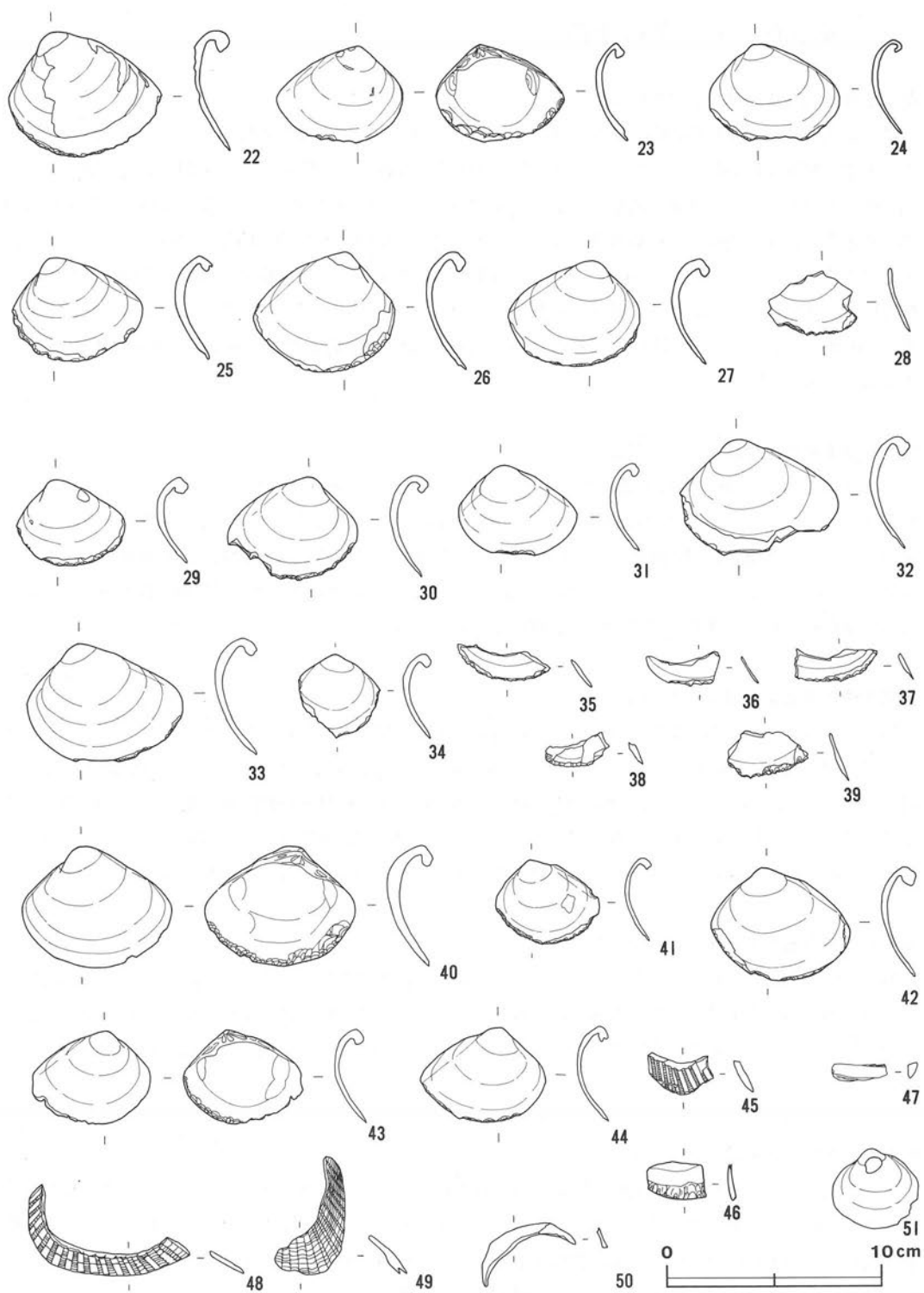
表 15 骨角貝製品一覧表 (3区)

挿図番号	写真番号	名 称	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	材 質	備 考	台帳番号
第233区 1	PL 6 0	刺 突 具	5.1	0.4	0.2	0.5	SI 34	シカ 中手か中足	完 形	B 3
2	PL 6 0	刺 突 具	(2.7)	0.4	0.2	(0.3)	SI 34	シカ 中手か中足	先 端 欠	B 4
3	PL 6 0	刺 突 具	(1.6)	0.3	0.2	(0.05)	SI 34	シカ 中手か中足	先 端 の み	B 5
4	PL 6 0	刺 突 具	(1.8)	0.3	0.1	(0.05)	SI 34	エイ 尾棘	断 欠	B 6
5	PL 6 0	垂 飾	(1.1)	0.8	0.7	(0.3)	SI 34	鳥 骨	2 次 焼 成	B 1
6	PL 6 0	垂 飾	(5.0)	(2.4)	0.8	(3.7)	SI 34	ウミガメ	断 欠	B 2
7	PL 6 0	垂 飾	2.2	1.8	0.1	0.6	SI 34	ウノアシガイ	完 形	S15
8	PL 6 0	垂 飾	2.5	1.8	0.1	0.4	SI 34	ウノアシガイ	完 形	S16
9	PL 6 0	垂 飾	2.3	1.8	0.1	0.4	SI 34	ウノアシガイ	完 形	S17
10	PL 6 0	垂 飾	(2.8)	(0.5)	0.4	(0.3)	SI 34	ツノガイ	断 欠	S18
11	PL 6 0	垂 飾	(2.8)	(0.6)	0.5	(0.5)	SI 34	ツノガイ	断 欠	S19
12	PL 6 1	貝 刃	3.9	5.0	0.2	8.0	SI 34	ハマグリL	完形内刃	S 1
13	PL 6 2	貝 刃	(2.9)	(3.8)	0.2	4.1	SI 34	ハマグリ	断欠内外刃	S 2
14		貝 刃	(2.0)	(3.4)	0.2	(1.1)	SI 34	シオフキ	断 欠	S 5
15	PL 6 1	貝 刃	5.2	7.1	0.2	23.7	SI 34	ハマグリR	完形外刃	S 7
16	PL 6 2	貝 刃	(1.7)	(4.2)	0.2	(2.0)	SI 34	ハマグリ	断欠内刃	S10
17	PL 6 1	貝 刃	4.4	5.6	0.4	12.1	SI 34	ハマグリR	完形内刃	S11
18	PL 6 1	貝 刃	(3.8)	5.1	0.2	(7.9)	SI 34	ハマグリR	一部欠内刃	S12
19	PL 6 1	貝 刃	4.5	5.7	0.2	11.6	SI 34	ハマグリL	完形内刃	S13
20	PL 6 1	貝 刃	4.7	6.5	0.4	17.2	SI 34	ハマグリR	完形外刃	S14
21	PL 6 1	貝 刃	5.1	6.5	0.3	21.3	SI 34	ハマグリR	完形内外刃	S20
第234区 22	PL 6 1	貝 刃	5.9	7.1	0.4	24.2	SI 34	ハマグリL	完形外刃	S21
23	PL 6 1	貝 刃	4.5	5.9	0.3	11.6	SI 34	ハマグリR	完形内外刃	S22
24	PL 6 1	貝 刃	4.6	6.1	0.3	10.6	SI 34	ハマグリL	完形外刃	S23
25	PL 6 1	貝 刃	4.9	5.1	0.4	15.4	SI 34	ハマグリL	完形外刃	S24
26	PL 6 1	貝 刃	5.7	6.6	0.4	22.9	SI 34	ハマグリR	完形外刃	S25
27	PL 6 1	貝 刃	4.9	6.1	0.4	17.7	SI 34	ハマグリR	完形外刃	S26
28	PL 6 2	貝 刃	(3.0)	(4.2)	0.2	(5.3)	SI 34	ハマグリ	断欠外刃	S27
29	PL 6 1	貝 刃	4.0	5.0	0.3	11.2	SI 34	ハマグリL	完形外刃	S30
30	PL 6 1	貝 刃	4.8	6.0	0.4	13.0	SI 34	ハマグリR	一部欠外刃	S31
31	PL 6 1	貝 刃	4.3	5.5	0.3	8.4	SI 34	ハマグリL	完形外刃	S32
32	PL 6 1	貝 刃	(5.4)	7.4	0.4	(21.9)	SI 34	ハマグリL	一部欠外刃	S33
33	PL 6 1	貝 刃	(5.6)	6.3	0.4	(28.6)	SI 34	ハマグリL	一部欠外刃	S34
34	PL 6 1	貝 刃	(3.9)	(3.8)	0.3	(5.6)	SI 34	ハマグリL	一部欠外刃	S35
35	PL 6 2	貝 刃	(1.8)	(4.3)	0.2	(2.0)	SI 34	ハマグリ	断欠外刃	S36

挿図番号	写真番号	名称	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	出土位置	材質	備考	台帳番号
第234図 36	PL62	貝 刃	(1.6)	(3.4)	0.1	(2.0)	SI 34	ハマグリ	断欠外刃	S37
37	PL62	貝 刃	(1.6)	(3.9)	0.2	(2.0)	SI 34	ハマグリ	断欠外刃	S38
38	PL62	貝 刃	(1.6)	(3.0)	0.3	(1.8)	SI 34	ハマグリ	断欠外刃	S39
39	PL62	貝 刃	(2.2)	(3.7)	0.2	(3.2)	SI 34	ハマグリ	断欠外刃	S40
40	PL61	貝 刃	5.6	7.0	0.6	26.3	SI 34	ハマグリL	完形内刃	S41
41	PL61	貝 刃	4.0	4.9	0.2	7.3	SI 34	ハマグリL	完形外刃	S42
42	PL61	貝 刃	5.3	6.5	0.3	18.4	SI 34	ハマグリL	完形外刃	S43
43	PL61	貝 刃	4.4	(5.6)	0.3	(9.7)	SI 34	ハマグリR	一部欠内刃	S44
44	PL61	貝 刃	4.4	5.8	0.2	12.6	SK 139	ハマグリR	完形外刃	S46
45	PL60	貝 輪	(2.0)	(3.0)	0.3	(3.2)	SI 34	サルボウ	断 欠	S 3
46		貝 輪	(1.8)	(2.8)	0.3	(1.6)	SI 34	イタボガキ	断 欠	S 4
47		貝 輪	(0.9)	(2.6)	0.5	(0.7)	SI 34	イタボガキ	2次焼成断欠	S 6
48	PL60	貝 輪	(4.4)	(7.5)	0.2	(14.4)	SI 34	サルボウ	断 欠	S 8
49	PL60	貝 輪	(5.5)	(3.3)	0.4	(8.1)	SI 34	サルボウ	断 欠	S 9
50	PL60	貝 輪	(3.0)	(3.3)	0.2	(2.1)	SI 34	ベンケイガイ	断 欠	S28
51	PL60	穿孔貝製品	3.7	(4.0)	0.1	(3.2)	SI 34	シオフキ	孔径 8mm	S45
		貝 刃	(4.1)	(4.9)	0.2	(9.0)	SI 34	ハマグリL	一部欠外刃	S47
	PL62	貝 刃	(4.3)	(5.0)	0.2	(7.0)	SI 69	ハマグリL	一部欠外刃	S48
		貝 刃	4.5	6.1	0.2	13.6	SK 166	ハマグリL	完形外刃	S49
	PL62	貝 刃	3.8	4.4	0.1	6.5	SK 200	ハマグリR	完形外刃	S50
		貝 刃	4.5	5.3	0.2	8.4	SK 200	ハマグリR	一部欠外刃	S51
		貝 刃	4.6	5.5	0.2	10.9	SK 326	ハマグリR	完形外刃	S52



第 233 图 骨角貝製品実測图(1)



第 234 图 貝製品実測图(2)

第9節 その他の土器

第170号土坑出土土器（第235図1）

第235図1は、本坑の南側の覆土中位からまとまって出土した破片群と重複する第149号土坑の西壁寄り、推定で本坑の東壁際からまとまって出土した破片群の両者に他に覆土中出土の破片のいくつかの計18点が接合したもので、口縁部が内傾し、胴上位で屈曲し、以下底部にむかってすばまる鉢形土器で、口縁部の大半と底部を欠失する。口縁直下に推定で6単位の刺突が施された円形貼付文が付され、これを基準として2重沈線による楕円文が描かれている。口縁部には地文として複節縄文RLRが横位回転で施文されている。屈曲部以下は無文で、横ナデ、縦ナデが施されているが雑である。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。推定口径22.7cm、現存高12.5cmである。

第246号土坑出土土器（第235図2）

第235図2は、中央部の底面近くから逆位で一括して出土した破片を中心に21点が接合したもので、胴下半部から直線的に外傾する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠失する。口縁直下に幅2cm前後の無文帯を設け、以下全面に単節縄文LRを横位回転を主に施文している。胴下半部は2次加熱により赤褐色を呈している。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデを施している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。推定口径29.8cm、現存高26.7cmである。

第250号土坑出土土器（第235図3）

第235図3は、中央部の落ち込みの中から口縁部を南西方向にむけて一括して出土した土器で、上位は土圧を受けて細かく破砕されていたが、下位は比較的良く形状を残していた。破片79点が接合したが、胴下半部以下は欠失している。器面全体に粗い単節縄文LRが横位・斜位回転で施文されているが、底面近くは縦ナデが施され、無文となっている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。推定口径31.8cm、現存高34.0cmである。

第161号土坑出土土器（第235図4）

第235図4は、南西壁寄りの覆土下位から正位で出土した無文の底部片で、内外面とも雑なナデが施されているが、凹凸があり、一部に剝落もみられる。全体に厚手で作りの悪い土器である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい橙色を呈する。推定底径11.6cm、現存高11.7cmである。

第179号土坑出土土器（第235図5）

第235図5は、中央やや南西側の覆土中位から正位で出土した大破片を中心に6点が接合した大形深鉢形土器の無文の底部片である。内外面とも縦ナデが施されているが、胎土にやや粒の大きいきわめて多量の長石・石英粒を含むために、内面の整形は不明である。底面に網代痕が残されているが、不明瞭である。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。底径11.4cm、現存高7.5cmである。

第 454 号土坑出土土器（第 235 図 6）

第 235 図 6 は、北端から正位で出土した底部片を中心に覆土中や確認面出土の破片 11 点が接合した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面には両側にナズリを加えた低隆線で楕円形状の区画が施され、区画内には単節縄文 RL が横位、斜位回転で施文されている。底面から 10 cm ほどは縦ナデが加えられ、無文のまま残されている。内面は縦ナデされている。胎土は長石・石英粒を多量に含み粗雑であるが、焼成は良好である。色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい橙色を呈する。底径 9.0 cm、現存高 15.0 cm である。

第 433 号土坑出土土器（第 235 図 7）

第 235 図 7 は、南西側の覆土中から出土した無文の底部片で、内外面とも縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が灰褐色である。推定底径 6.0 cm、現存高 5.0 cm である。

第 280 号土坑出土土器（第 235 図 8）

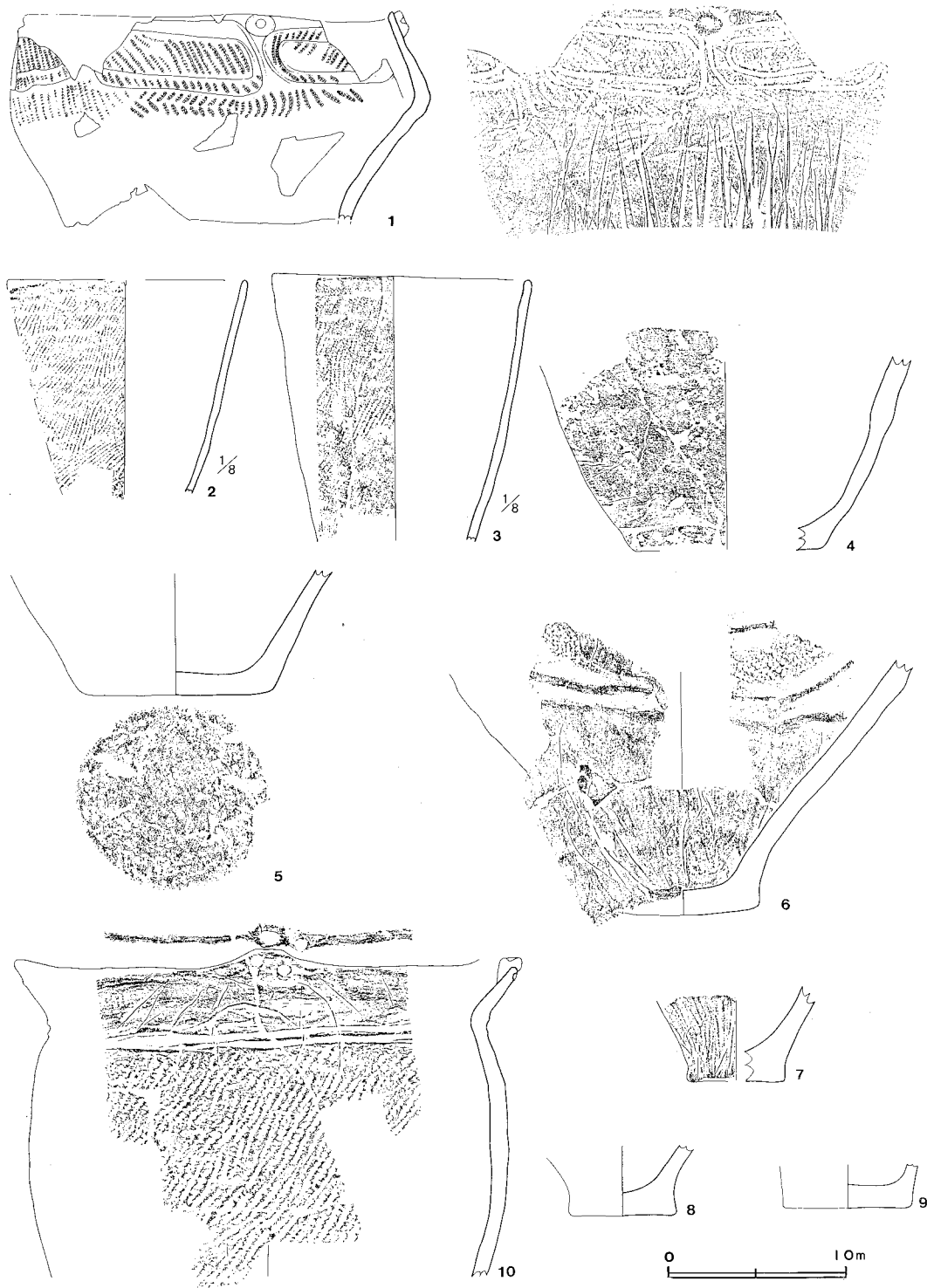
第 235 図 8 は、東壁寄りの覆土中位から逆位で出土した無文の底部片で、内外面とも縦ナデが施されているが、外面が丁寧である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい褐色、内面が褐灰色を呈する。底径 6.6 cm、現存高 4.1 cm である。

第 267 号土坑出土土器（第 235 図 9）

第 235 図 9 は、覆土中から出土した破片 5 点が接合した無文の底部片で、外面は縦ナデ、内面は雑なナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。底径 8.0 cm、現存高 2.7 cm である。

遺構外出土土器（第 235 図 10）

第 235 図 10 は、L2b1 区の中央やや北西寄りの遺構確認面からまとめて出土した破片 8 点が接合した口縁部が外反する深鉢形土器で、胴部以下を欠失する。他に同一個体の破片 11 点がある。口縁部に推定で 4 単位の小突起を有し、頂部が少し凹んでいる。この小突起の左右および直下に各 1 個ずつの円形刺突文が付されている。外反する口縁部無文帯は幅 3.5 cm ほどで、2 条の沈線で区画され、以下に単節縄文 LR が横位回転で施文されている。内面上半は横ナデ、下半は縦ナデが施されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。推定口径 31.0 cm、現存高 19.3 cm である。



第 235 図 土坑・グリッド出土土器実測図

第4章 ま と め

第1節 遺構について

本節で取り扱う遺構は縄文時代の所産と推定されるもので、時期不明のものは原則として扱わない。さて、当遺跡3・4区で検出された縄文時代の遺構には次のものがある。竪穴住居跡、土坑、埋甕遺構、炉穴、性格不明遺構。竪穴住居跡は3区で34軒、4区で7軒の計41軒で、中期加曾利EⅢ式期の住居跡が3区で19軒、4区で7軒の計26軒と多数を占め、加曾利EⅣ式期の住居跡は7軒、後期称名寺式期の住居跡が2軒、堀之内I式期の住居跡が6軒である。土坑は3区で397基、4区で100基の計497基を報告しているが、縄文時代の所産と推定されるものは3区で296基、4区で35基である。その他の土坑は時期不明である。埋甕遺構は18基検出され、中期加曾利EⅢ・Ⅳ式、後期称名寺式、堀之内I式土器を用いている。炉穴は9基検出され、いずれも早期末葉の所産と考えられる。性格不明遺構としたものは1基のみで、多数の土坑の複合の結果と考えられ、全体としては弧状の平面形を呈している。

次に各遺構ごとに若干のまとめをおこなうが、本節では3・4区の成果を中心として、必要に応じて他区や他遺跡の同種遺構との比較を試みることにする。なお、その際既報告の当遺跡1・2・5～7区の報告内容と異なる記載があるかもしれないが、その点は筆者の判断によるものであることを前もって断っておきたい。

1 竪穴住居跡について

当遺跡3・4区から検出された住居跡は41軒である。南三島遺跡は広大な面積を有する縄文時代から弥生・古墳・奈良・平安時代にかけての大集落跡であり、一部近世の遺構も検出されている。調査された面積は1～7区あわせて100,313m²であるが、6・7区の北側、3・4区の西・南側などには遺構の広がり認められており、100,000m²を越える広大な遺跡である。これほどの規模の集落跡は全国的に見ても稀有の存在であろう。縄文時代の住居跡に限ってみても1～7区あわせて403軒検出されており、この数で調査面積を割ってみると約250m²に1軒という数値が出てくる。約16×16mの範囲に1軒が存在するという計算が成り立つ。しかし、これは遺跡全体の平均値であって、これを各区ごとに検討してみると更に興味深い結果が導かれる。最も住居跡数の多い2区をみると85m²に1軒という超過密状態がみられ、逆に数の少ない4区をみると2402m²に1軒という過疎状態となる。前者は約9×9mの範囲に1軒となる。住居跡が密集する2・6区は縄文時代の所産と考えられる土坑の構築数も多く、当該期の集落の中心部を形成していたと推定される。縄文時代の住居跡は大きくみると、5区および7区の西・南側に所在する谷にむかって半円弧状に分布しているように観察される。中期の住居跡は1～7区の各区に存在するが、1区は西端部にのみ遺構が分布しており、これ以上東へは集落が延びないものと考えられる。また、遺跡の南北端に位置する4・7区の住居跡は加曾利EⅢ式期のものがほとんどで、7区の第35号住居跡だけが称名寺Ⅱ式土器を伴っている。3・5区にも中期の住居跡は広がり、中期後半の加曾利EⅢ～Ⅳ式期が当遺跡が最も繁栄した時期と把握される。集落は、最も広い部分で幅200mにもおよぶベルト状に形成されていたと推定される。

後期の住居跡は、称名寺Ⅰ式期、称名寺Ⅱ式期、堀之内Ⅰ式期に大別される。称名寺Ⅰ式期の住居跡は、

表 16 3区住居跡一覧表

住居番号	位置	長径方向	平面形	規模		床面	ピット数	炉		覆土	出土遺物	時期	備考
				長径×短径(m)	壁高			位置	種類				
3	K2j ₀	N-53.5°-W	楕円形	7.52×5.90	20~25	平坦	9	北西寄り	地床炉	人為	2,271点 磨石 石皿	加EⅢ	貝ブロックあり
8	K3i ₆		不整円形	3.76×3.65	72	平坦	3			自然	604点	加EⅢ	小竪穴状遺構
9	L3b ₆		不整円形	4.56×4.18	24~40	中央が凹む	7	南西寄り	地床炉	自然	819点 磨製石斧 磨石 凹石	加EⅢ	石囲い炉の可能性あり
10	K3g ₅		(不整円形)	(5.64)×(5.40)	18~45	凹凸	8	中央	地床炉	自然	3,119点 石鏃 磨石 石皿	加EⅢ	
16	L3i ₄	N-48°-E	楕円形	4.66×3.88	20~25	平坦	9	中央	地床炉	自然	574点 軽石製品	加EⅣ	
17	L2e ₉	N-57.5°-E	(隅丸長方形)	(4.50)×(2.83)	20~25	凹凸	4	北西寄り	地床炉	自然	926点 礫器 石皿	加EⅢ	
20	L2e ₆	N-38.5°-W	長楕円形	4.80×3.48	20~25	ゆるい起伏	3	西寄り	地床炉	自然	1,681点	加EⅢ	
22	L2b ₅		(円形)	(5.70)×(5.55)	20~25	中央が凹む	10	北寄り	地床炉	自然	419点 磨石	堀之内Ⅰ	
28	L2d ₄		不整円形	4.00×3.75	20	平坦	2	中央	地床炉	自然	139点	加EⅣ	
34	K3f ₂	N-35.5°-W	柄鏡形	8.38×(6.12)	20~35	平坦	35	南西寄り	地床炉	人為	4,712点 磨製石斧 磨石, 赤銅, 銅, 鉄, 土器, 土器片	堀之内Ⅰ	貝層あり SI 58と重複
35	L4b ₀	N-52°-E	不整楕円形	5.30×3.92	25~30	平坦	6	南寄り	地床炉	自然	1,681点 石皿	加EⅣ	
46	L4c ₆		不整円形	3.90×3.77	20~24	平坦	8	中央	(地床炉)	自然	307点 磨石	加EⅢ	
47	L4g ₈		不整円形	5.08×4.62	20~35	中央が凹む	18	中央	地床炉	人為	463点 磨石 石皿 載石 石棒	称名寺	石囲い炉の可能性あり
48	M4a ₇		不整円形	4.03×3.73	15~22	平坦	6	中央	地床炉	自然	419点	加EⅢ	
49	M3c ₇	N-38.5°-E	(不整楕円形)	(7.12)×(5.68)	15~28	平坦	23	北寄り	地床炉	自然	1,774点 土球 礫器 磨石	加EⅢ	SI 69と重複 土器片は SI 69と一緒
56	M3c ₀		円形	3.36×3.26	24~28	中央が凹む	6	中央	土器埋設炉	自然	711点 礫器	加EⅣ	
58	K3f ₂	N-17.5°-E	(楕円形)	(7.80)×(6.82)	20~30	平坦	31	中央	(地床炉)	自然	111点	加EⅢ	SI 34と重複
69	M3b ₈		(円形)	(3.87)×(3.80)	15~20	平坦	10	中央	地床炉	人為	貝刃	加EⅢ	貝ブロックあり SI 49と重複
72	N4c ₂	N-69°-W	(楕円形)	(4.65)×(1.92)	14~16	平坦	3	中央	地床炉	自然	181点 礫器	加EⅢ	2分の1調査区域外
74	L4a ₅		不整円形	5.81×5.46	20~25	平坦	13	中央	(地床炉)	(自然)	1,070点 石鏃 打製石斧 石皿	加EⅢ	土坑との重複多し
79	K3i ₃	N-49.5°-W	(楕円形)	(7.52)×(5.96)	8~15	平坦	11	北西寄り	地床炉	(自然)	879点 石槍 石皿	加EⅢ	SI 81, 89と重複
80	K4i ₂	N-33°-E	(楕円形)	(5.34)×(4.94)	7~15	中央が凹む	5	北西寄り	地床炉	自然	427点	称名寺	
81	K3j ₄	N-52°-E	(楕円形)	(5.64)×(5.15)	10~20	平坦	14	南東寄り	地床炉	自然	733点 磨石	堀之内Ⅰ	SI 79, 89と重複
83	L2g ₆	N-55.5°-E	(楕円形)	(5.17)×(4.53)	18~24	中央が凹む	11	中央	a, b 地床炉	自然	479点	加EⅣ	SD 5に切られる
86	L1c ₈	N-0°	(楕円形)	(6.60)×(6.03)	0	平坦	10	中央	地床炉	不明	132点	堀之内Ⅰ	貝ブロックあり SI 117と重複
87	L2g ₆	N-40°-E	(楕円形)	(2.74)×(4.27)	12~18	平坦	5	北寄り	地床炉	自然	72点	加EⅣ	SD 5に切られる
88	L3j ₉	N-90°	楕円形	4.59×3.77	15~20	平坦	9	中央	地床炉	自然	258点	加EⅣ	
89	K3j ₄	N-0°	(楕円形)	(5.30)×(4.75)	11~16	平坦	11	中央	地床炉	(自然)	9点	加EⅢ	SI 79, 81と重複
96	M2c ₇	N-90°	不整楕円形	4.51×3.76	10~22	平坦	5	中央	地床炉	自然	244点 石棒	加EⅣ	
105	M2b ₄	N-33°-E	不整楕円形	4.20×3.87	4~24	中央が凹む	4	東寄り	a, b 地床炉	自然	125点 打製石斧 磨石	加EⅢ	
106	M2b ₃		不整円形	3.50×3.27	10~25	平坦	7	北西寄り	土器埋設炉	自然	193点 石棒	加EⅢ	SI 109と重複
109	M2a ₂		(不整円形)	(4.75)×(4.63)	10~14	ゆるい傾斜	7	北西寄り	地床炉	自然	81点 磨石	加EⅢ	SI 106と重複
117	L1e ₈	N-5°-E	(長楕円形)	(8.06)×(7.02)	0	平坦	25	北寄り	地床炉	不明	77点	堀之内Ⅰ	SI 86, 118と重複
118	L1f ₈		(円形)	(6.22)×(6.18)	0	平坦	19	中央	地床炉	不明	18点	堀之内Ⅰ	SI 117と重複

表 17 4区住居跡一覧表

住居番号	位置	長径方向	平面形	規模		床面	ピット数	炉		覆土	出土遺物	時期	備考
				長径×短径(m)	壁高			位置	種類				
3	M5f ₀		不整円形	2.84×2.73	4~8	平坦	4	南東寄り	地床炉	自然	76点	加EⅢ	
4	L5g ₅	N-49°-E	楕円形	(5.46)×(4.42)	7~15	中央が凹む	9	中央	土器埋設炉	自然	288点 石錐 磨石 石皿 凹石 磨石	加EⅢ	
5	L7g ₁	N-40°-W	楕円形	5.42×4.70	12~30	平坦	8	南西寄り	地床炉	人為	2,079点 石鎌 磨石	加EⅢ	貝ブロックあり
6	L6d ₃	N-67°-E	(不整楕円形)	(5.00)×(4.57)	10~12	中央が凹む	5	中央	地床炉	攪乱	204点	加EⅢ	
7	K6i ₁		不整円形	4.50×4.03	20~28	中央が凹む	9	中央	地床炉	自然	1,036点 石棒	加EⅢ	
19	M7g ₅		円形	4.21×4.03	18~28	平坦	5	北西寄り	地床炉	自然	548点 磨石	加EⅢ	小貝ブロックあり
50	M7j ₉		円形	4.64×4.60	23~30	平坦	4	北西寄り	地床炉	自然	1,374点 石鎌 磨製石斧 磨石	加EⅢ	

2区を中心に3区・5区・6区にも広がるが中期に比べて分布範囲が狭くなり、より西側で、環状の内側にかたまる傾向を見せはじめる。称名寺Ⅱ式期になると住居跡の軒数が激減し、5区の4軒を中心に7区に1軒という凋落状態を示す。堀之内Ⅰ式期には住居跡数が17軒となり、やや増加を示すが、かつての繁栄とは較ぶべくもない。当遺跡の南西側の3・5区に分布し、小貝塚を伴うものが目立つ。以上のような住居跡の分布状況からいえることは次の点である。まず、当遺跡に集落が本格的に形成され始めるのは中期後半の加曾利Ⅲ式期であり、最も分布範囲が広い。北端の7区の第9号住居跡と南端の4区の第50号住居跡の間は実に400m以上も離れており、とても同一集落を形成するものとは考えにくいほどである。加曾利Ⅲ式期は住居数も多く、集落の発展期といえよう。続く加曾利Ⅳ式期の住居跡は2区を中心に3・6区に分布するだけとなり、比較的狭い地域に密集する傾向を示す。加曾利Ⅳ式から継続する称名寺Ⅰ式期の住居跡はほぼ前段階と同様の広がりを見せるが、以後は急激な衰えが顕著となる。

第 18 表 南三島遺跡縄文時代住居跡数および分布密度

地区	軒数	調査面積	1軒当りの面積
1区	18	20,771㎡	1,154㎡
2区	199	16,840㎡	85㎡
3区	34	13,602㎡	400㎡
4区	7	16,811㎡	2,402㎡
5区	24	10,526㎡	439㎡
6区	84	10,451㎡	124㎡
7区	37	11,312㎡	306㎡
全体	403	100,313㎡	249㎡

a 加曾利Ⅲ式期の住居跡について

3区の加曾利Ⅲ式期の住居跡は19軒、4区の住居跡7軒はすべて加曾利Ⅲ式期のものである。この中には、加曾利Ⅲ式期でも古い段階のもの、新しい段階のもの、更に新しく加曾利Ⅲ-4中間式として取りあげられているものなどを含んでいる。加曾利Ⅲ式期の住居跡同士でも重複があることは上記の細別に裏づけを与えるものである。3・4区の加曾利Ⅲ式期住居跡は、前記した当遺跡の加曾利Ⅲ式期集落の南縁を構成するものと認識される。3区の第3、69号住居跡と4区の第3・5・19号住居跡からは規模の大小はあるが貝ブロックが検出されている。加曾利Ⅲ式期26軒のうち5軒という比率は20%弱となる。このうち規模の大きいのは3区の第69号住居跡と4区の第5号住居跡で、3区の第3号住居跡がこれに次いでいる。その他はほんの一握りの小ブロックにすぎない。貝種はハマグリ、シオフキ、サルボウを主とし、純鹹ないし主鹹貝塚であるが、4区の第3号住居跡はヤマトシジミが目立っている。これらの貝ブロック中からの貝以外の自然遺物の検出はきわめて少なく、3区の第3号住居跡から鳥

骨片微量とカニ類の殻片が出土し、4区の第5号住居跡からはシオフキの合せ貝中にカニ類の甲殻が1個体分検出されているのが注意されるだけである。3・4区の加曾利EⅢ式期の住居跡の平面形は、円形ないし楕円形を呈するものが圧倒的に多くを占めるが、整った形状の住居は少なく歪みや張り出しを有する不整形や不整楕円形と表現した方が妥当なものが多い。しかし、中には3区の第17号住居跡のように隅丸長方形を呈する住居もある。当遺跡全体の加曾利EⅢ式期の住居跡は144軒あり、これに加曾利EⅢないしはEⅣ式期の住居14軒を加えると158軒となり、全住居跡403軒に対する比率は約40%となり、この数値からも当遺跡の繁栄期が加曾利EⅢ式期であったことが推定される。住居跡の平面形は3・4区の傾向と大差はない。

次に規模について考えてみると、加曾利EⅢ式期の住居跡144軒のうち、平面形の計測可能な住居跡は105軒あり、平均長径4.96m、短径4.42mを測る。全体としては比較的小さなものが目につく。これを各区別にみても規模に変差があり、注目される。1区では8軒すべてが計測可能で、平均長径4.69m、短径4.31mを測り、小規模である。2区は38軒のうち32軒が計測でき、平均長径4.97m、短径4.48mを測り、全体の平均値に最も近い。3区は19軒のうち計測可能は9軒だけで、平均長径4.70m、短径4.16mで、長短比が大きく、楕円形の傾向が強い。4区は7軒のうち5軒が計測でき、平均長径4.32m、短径4.02mと各区の中で最も小さく、円形の傾向が認められる。5区は6軒のうち5軒が計測でき、平均長径5.94m、短径5.13mを測り、他区よりずば抜けて大きい。しかし、これは軒数が少ないのと同区には稀な長径7m以上の住居跡が2軒も含まれていることが原因している。6区は34軒のうち18軒だけが計測可能で、平均長径4.70m、短径4.10mで、3区と計測値が類似しており、楕円形の傾向が認められる。7区は32軒のうち28軒が計測でき、平均長径5.40m、短径4.76mを測り、5区について大きい。

炉の有無は住居跡の構成要件として、柱穴とともにきわめて重要な一要素である。ところが、144軒のうち46軒が炉を保有していない。炉の保有率は約68%となり、3軒に1軒は炉を有しない事実には注目しないわけにはいかない。炉が無く、柱穴配置も不規則な遺構については竪穴状遺構という名称を付して、通常の住居跡と区別して報告する例も多い。このような遺構は往々にして床面もあまり硬くなく、長期間の使用が推測されない場合が目立っている。それにしても当遺跡の加曾利EⅢ式期の住居跡には炉無しが多すぎるように思われる。これを各区別にみても次のようになる。1区は8軒のうち7軒に炉があり、それもほぼ中央に位置する傾向が認められる。第219号住居跡のみ中央やや南寄りであるが、中央と考えても差しつかえない。すべて地床炉である。2区は38軒あるが、このうち第70・98・141号住居跡は壁高が54～94cmもあり、底面中央に1か所のピットをもつという共通性がある竪穴状遺構である。また、第85・173号住居跡も竪穴状遺構とされているのでこれら5軒を除くと住居跡は33軒となり、このうち炉無しは9軒で、炉の保有率は約73%となる。これは1区の約88%よりは低い、かなりの高率となる。炉の位置は中央部にある例が多いが、中央から壁近くに片寄る例も11例あり、北寄り、南寄りが各3例、西寄りが2例、東寄り、北東寄り、南西寄りが各1例ずつである。炉の種類としては地床炉が断然多いが、第18・128・130・216号住居跡には土器埋設炉が存在している。その他に第142号住居跡には石囲い炉が推定されているが、炉石が1個残存しているだけで他は抜き取り痕の凹みとなっている。3区は20軒のうち炉無しは第8号住居跡の1軒のみであるが、これは壁高72cmで、中央ピットと小土坑3基を伴う竪穴状遺構で、通常の住居跡とは考えられないので、これを除外すると19軒となり、すべてに炉が保有されている。第46・74号住居跡は中央部を土坑群により切断されているため、炉は存在しな

いが土坑覆土中の焼土からその存在が推測される。したがって炉の保有率は100%となる。炉の位置は中央部が9軒と多いが、北西寄りに片寄り住居跡が5軒と目立っている。その他北寄りが2軒、南、西、東寄りが各1軒ずつである。炉は地床炉が大半を占め、第106号住居跡にのみ土器埋設炉が存在している。また、第9、69号住居跡の炉の周囲には凹みが巡り、これを石の抜き取り痕と考えれば石囲い炉の可能性が指摘できるが、凹みが小さく通常の石囲い炉とは考えにくい。4区は7軒すべてに炉があり、炉の保有率は100%である。炉の位置は中央部が3軒、北西寄りが2軒、南東寄り、南西寄りが各1軒ずつである。炉の種類は地床炉が主であるが、第4号住居跡のみ深鉢形土器の胴部を使用した土器埋設炉を有している。5区は6軒のうち2軒に炉が無く、炉の保有率は約67%で、2区に比べても低い。炉の位置は中央ないしは中央やや南寄りが3軒で、他の1軒は北壁に著しく片寄っており特異である。炉はいずれも地床炉である。6区は34軒のうち13軒に炉が無く、炉の保有率は約62%と低い。6区でも特に北東寄りの地区に炉を保有しない住居跡が多く認められる傾向があり、注意しておきたい。炉の位置は中央にあるものがほとんどであるが、これは遺構の重複が著しかった6区の南西寄りの住居跡のプランを炉を中心として推定した影響もあると思われる。また、6区では複数の炉をもつ住居跡が2軒あり、住居の拡張や縮小などの改築が行なわれたものと考えられる。第50号住居跡では2基の地床炉が検出され、南側の炉の方が規模も大きく、良く焼けていた。第51号住居跡からは3基の炉が検出され、2基が地床炉で1基が土器埋設炉であった。2基の炉を有する住居跡は稀な存在で他には3区の第83・105号住居跡の炉が重複しているだけである。炉の種類は地床炉が圧倒的に多いが、土器埋設炉が6区の第51・74号住居跡の2軒に存在し、土器片囲い炉が6区の第11号住居跡で検出されている。7区は当遺跡の北端にあたり32軒のうち炉無しが15軒と半数近くを占め、炉の保有率が約53%ときわめて低い。炉の位置はほとんどが中央部にあり、すべて地床炉である。

以上、各区の状況について記したが、これを総括してみると遺跡中央部から北部にかけての地区の住居跡に炉の無いものが多く認められ、南側の3・4区などには炉の無いものがほとんどない。竪穴状遺構としたものは壁高が50cm以上で中央にピットを有し、小土坑などを伴うものと壁高が10～20cm程度で柱穴配置の不規則なものに大別される。前者は、径3m前後の小形のものが多く、何らかの特殊な用途をもつ建屋であった可能性が高い。祭祀的な行為を執行するものと推定したいが、これについては別稿で検討する。後者は、炉の無いこと、柱穴配置が不規則なこと、往々にして床面が軟らかいことなどが特徴としてあげられ、これらの特徴を満たす用途としては物置き小屋的な施設と考えることが妥当と思われる。作業小屋的な機能も考えられるが、頻繁に使用するものであれば、炉の無いことや床面が軟らかい点は不利であろう。

次に柱穴配置について考えてみてみよう。3区の住居跡では4～6か所の支柱穴を有するタイプ(第9、49、79、89、105、106号住居跡)、壁に沿って7～8か所のピットが巡る壁柱穴タイプ(第10、74号住居跡)、不規則な配列を示すタイプ(第20、28、109号住居跡)が認められるが、重複や未調査部分があるためにタイプ分類しえない住居跡も多い。4区では支柱穴タイプが第4、5、19号住居跡の3軒で、壁柱穴タイプとしては第7号住居跡が考えられるが、不明確である。不規則タイプに属する第3、6、50号住居跡のうち第3と50号住居跡は3本柱の構造を考えるべきかもしれない。既報告の1・2・5～7区の住居跡にも上記の3タイプの存在が認められ、宮本長二郎氏による分類⁽¹⁾に該当させることができる。宮本氏は加曾利EⅢ式期にこれまでの支柱穴タイプ主流から壁柱穴タイプや不規則タイプの急増傾向を指摘している。この指摘は当遺跡にもあてはまるものと考えられる。

b 加曽利 E IV 式期の住居跡について

加曽利 E IV 式期の住居跡は 3 区に 7 軒検出されているが、4 区には無い。加曽利 E IV 式期と判断した住居跡は加曽利 E IV 式土器およびそれ以前の土器が出土している住居跡で、称名寺式土器を共伴しないものとした。両者が共伴する住居跡は後期初頭の所産と考え、別に扱った。3 区の 7 軒の住居跡からは貝ブロックは未検出である。その他の区の加曽利 E IV 式期の住居跡では 6 区の第 49 号住居跡からシオフキ主体の小貝ブロックが検出されている。3 区の住居跡の平面形は、円形・楕円形・不整楕円形を呈するものに分けられる。他区の同期の住居跡もほぼ 3 区と同様の平面形を有しており、不整円形と分類されているものもあるが、すべて円形系統であることには変りはない。平面形については前段階の加曽利 E III 式期を継承しているといえる。

次に規模を見ることにしよう。加曽利 E IV 式期の住居跡は 4・5・7 区には検出されず、1 区に 6 軒、2 区に 54 軒、3 区に 7 軒、6 区に 13 軒の計 80 軒であり、加曽利 E III 式期 144 軒の半数近くに減少している。80 軒のうち平面形の計測可能な住居跡は 70 軒で、平均長径 4.79 m、短径 4.26 m を測り、加曽利 E III 式期と比較すると長径で 17 cm、短径で 16 cm 小さくなっており、小形化の傾向が認められる。この傾向は宮本氏も指摘しておられ、かなり確実なものと思われる。加曽利 E IV 式期の住居跡の最大長径は 2 区の第 139 号住居跡で 7.17 m、2 番目は 6 区の第 53 号住居跡の 6.80 m であるが、いずれも加曽利 E IV 式期でも古い段階の土器を出土している。各区ごとに住居跡の規模をみてみると次のようである。1 区は 6 軒がすべて計測でき、平均長径 4.47 m、短径 3.98 m を測り、全体の平均値よりも小さい。2 区は 54 軒のうち 51 軒が計測され、平均長径 4.86 m、短径 4.39 m を測り、全体の平均値に最も近い。3 区は 7 軒のうち 5 軒が計測され、平均長径 4.48 m、短径 3.72 m を測り、当遺跡で最も小さい。筆者が調査を担当した 3 区では、発掘当時から加曽利 E IV 式期は住居が小さいとの印象をもっており、それが裏づけられた結果となった。6 区は 13 軒あるが計測可能なものは 7 軒にすぎない。平均長径 5.34 m、短径 4.94 m を測り、当遺跡の中では最も規模が大きく、7 区の加曽利 E III 式期の住居跡の数値に近似している。6 区の加曽利 E III 式期の住居跡に比べると長径で 64 cm、短径で 84 cm も大きく、全くの逆転現象を示している。

次に炉の問題に移ろう。加曽利 E IV 式期の住居跡 80 軒のうち 20 軒には炉が検出されていない。炉の保有率は 75 % となり、4 軒に 1 軒は炉をもたないという計算になる。これを各区域にみてみると 1・3 区の住居跡はすべて炉を有していて、2・6 区には炉の無い住居跡が集中するという傾向がみられる。1 区の 6 軒の炉の位置は中央部が 3 軒、北東寄り 2 軒、北寄り 1 軒で、北側に片寄る。炉の種類は地床炉が 4 軒で、土器埋設炉が 2 軒である。2 区は 54 軒のうち炉無しが 15 軒あるが、このうち第 25・48 号住居跡は竪穴状遺構として扱われているので除外すると 52 軒のうち 13 軒が炉無しということになり、炉の保有率は 75 % である。炉の位置は中央部が最も多く 21 軒、西寄りが 6 軒、南・北・東寄りが各 3 軒ずつ、北東・北西寄りが 1 軒ずつある。第 97 号住居跡は他の住居跡に切られているため地床炉の存在を推定されているが、その位置は不明である。炉の種類は地床炉がほとんどであるが、第 137 号住居跡 1 軒だけに石囲い炉が設けられていた痕跡が残されていた。3 区は 7 軒すべてに炉があり、位置は中央部の例が多い。第 35 号住居跡だけは平面形がやや不整形のためか炉が南側に片寄っている。炉の種類は地床炉が主であり、第 83 号住居跡では地床炉が 2 基切り合っている。また、第 56 号住居跡の炉は深鉢形土器の胴部を用いた土器埋設炉である。6 区は 13 軒のうち 5 軒に炉が無く、炉の保有率は約 62 % と低い。炉の位置はいずれも中央部にあり、第 49 号住居跡がやや北寄り、第 67 号住居跡がやや西寄りであるが中央部としても

良い。炉はすべて地床炉である。

以上、各区の状況について記してきたが、これを総括してみると遺跡中央部に炉無しの住居跡が集中し、東・西端の地区には炉無しの住居跡は認められない。このような現象は、炉無し住居跡の性格や機能を考える上でひとつの手がかりを与えるものかもしれない。すなわち、居住区の中央部にややまとまって存在し、通常の住居とは異なる役割を果たすことが期待されていたのであろう。その具体的な役割を指摘することは困難であるが、竪穴状遺構と同様の物置き小屋的な役割の他に床面の硬いものについては作業小屋的な役割を推定したい。通常の住居跡とセットをなし、付属施設としての性格が与えられるものではなかろうか。

さて、次には柱穴の配置や数について検討してみよう。まず3区の7軒の住居跡から調べると、いずれも4～6か所の支柱穴を有するタイプと考えられ、明瞭な壁柱穴タイプ、不規則タイプは認められない。他区をみると壁柱穴タイプと思われるものが2区の第24・50号住居跡、6区の第38号住居跡などにみられるが、きわめて少ない。また、不規則タイプも2区の第29・153号住居跡にみられる程度で少ない。宮本氏は、加曽利EⅣ式期に入ると、加曽利EⅢ式期まで盛行してきた支柱穴数本によるタイプは後退し、壁柱穴タイプが主流となると述べている。当遺跡の加曽利EⅣ式期の住居跡は、宮本氏分類による壁柱穴A型（周壁に沿って5～10本の柱を疎に配置し、柱間隔1m以上のもの）、B型（周壁に沿って0.5～1.0m間隔に密に配列するもので、柱径10～15cm、深さ30～80cm程である）、C型（支柱を壁に沿って配り、支柱間に小支柱を配置するもの）のうちA・C型の例が多いと考えられるが、支柱穴4～6本のタイプとの区別がむずかしい例もある。

c. 加曽利EⅣ式・称名寺式土器を共伴する時期の住居跡について

加曽利EⅣ式土器と称名寺式土器とを共伴する住居跡は、2・3・6区に検出され、当遺跡全体では62軒である。2区が52軒と最も多く、3区は1軒、6区は9軒にすぎない。該期の住居跡は当遺跡の中央部に集中する傾向を示し、加曽利EⅣ式期よりもやや広がり小さくなっている。平面形が円形ないし楕円形を主とすることは前時期と変化はない。規模は、加曽利EⅣ式期よりは大きくなる。62軒のうち平面形の計測可能な55軒の住居跡の平均長径は5.50m、短径は4.94mである。この数値は加曽利EⅢ式期の平均値よりも大きい。該期の住居跡を各区ごとにみてみよう。2区は52軒のうち51軒が計測でき、平均長径5.07m、短径4.53mを測り、全体の数値よりもかなり小さいが、このくらいの数値が一般的と思われる。3区は第47号住居跡1軒だけで、長径5.08m、短径4.62mの不整形を呈する。この計測値が2区の平均値ときわめて近似する点は、偶然とはいえ興味深いことである。6区は9軒あるが、遺構の重複が著しく平面形の計測可能な住居跡は3軒にすぎない。平均長径6.34m、短径5.67mを測り、2区にくらべて大きいですが、例数が少なく信用度の低い数値といわざるを得ない。

次に炉について検討する。2区は52軒のうち23軒が炉をもたず、炉の保有率は約56%で、かなり低い。炉の位置は、中央部のものが16軒と過半数を占め、以下南・東寄りのもの各3軒、北・西寄り各2軒、南西寄り1軒である。第99号住居跡の炉は重複する土坑により破壊されたと推定されており、位置は不明である。また、第114号住居跡には大小の地床炉各1基が設けられている。炉はすべて地床炉である。3区の第47号住居跡の炉は、地床炉の形態を示すが、周囲に小さな凹みが巡っており、石囲い炉であった可能性もあるが、確実ではない。6区は9軒のうち5軒に炉が無く、炉の保有率は約44%で、きわめて低い。しかし、該期の住居跡が検出された6区の南西側は遺構の重複が激しかった区域であり、この点は

割り引いて考えねばならない。炉はいずれも地床炉で、中央部に位置している。

次に柱穴についてみる。該期の住居跡の柱穴数は4～23本まであり変差が大きい。5～10本の例が62軒のうち41軒に達し、主流を占める。11本以上の柱穴を有するものは建て替えによるものと判断の方が妥当と思われる。これらの住居跡の柱穴配置は、宮本氏分類の壁柱穴A・C型に属するものと考えられ、前時期を踏襲しているものとみられる。

d 称名寺Ⅰ式期の住居跡について

称名寺Ⅰ式期の住居跡は、2・3・5区に検出され27軒を数える。平面形の計測可能な住居跡は22軒あり、すべて2区から発見されている。平均長径5.38m、短径4.78mを測り、2区の加曾利EⅣ式土器と称名寺式土器を共伴する時期の住居跡よりは長径で31cm、短径で25cm大きくなっている。3区は第80号住居跡1軒のみで、平面形も他時期の遺構に切断されているため推定となるが、長径5.34m、短径4.94mの楕円形を呈しており、2区の平均値に近似している点は興味深い。5区には3軒あるが、いずれも平面形は推定である。平均長径6.36m、短径5.82mを測り、2区に比較すると長径で98cm、短径で104cmと約1mずつも大きく、俄には信用しがたい。

炉について検討すると次のようである。2区は23軒のうち炉の無い住居跡が12軒あり、そのうち第111号住居跡は竪穴状遺構とされているので除外すると、22軒のうち半数の11軒が炉をもたないこととなり、保有率は50%である。炉の位置は中央部が多く5軒、西寄り2軒、南・北・北東寄りが各1軒ずつである。第79号住居跡は炉を土坑により破壊されたと考えられ、位置は不明である。炉のほとんどは地床炉であるが、第91号住居跡には土器埋設炉が設けられている。3区と5区の4軒はすべて地床炉で、位置は中央から北・北東・南・西寄りに片寄っている。

該期の住居跡の柱穴についてみる。柱穴数は5～18本まで認められたが、27軒のうち16軒は8～11本の間集中しており、この程度の本数を有する住居が一般的であったと考えられる。宮本氏分類の壁柱穴A・C型に相当するものが多いと思われ、前時期の柱穴配置を継承しているものであろう。

e 称名寺Ⅱ式期の住居跡について

称名寺Ⅱ式期の住居跡は5区で4軒、7区で1軒の計5軒しか発見されておらず、当遺跡の集落が最も凋落した時期と考えられる。分布も遺跡西側の一角に限定されており、ごく小規模なものと思われる。5軒うち平面形が計測できるのは4軒で、平均長径4.66m、短径4.30mで、称名寺Ⅰ式期よりも長径で72cm、短径で48cm小さくなっており、明瞭に小形化が指摘される。該期の最大規模の住居跡は5区の第15号住居跡で、長径5.17m、短径4.76mである。最小規模の住居跡は7区の第35号住居跡で、長径3.80m、短径3.40mである。炉は5軒のうち2軒に無く、炉の保有率は60%である。炉はいずれも地床炉で、中央かやや南東寄りに設けられている。

柱穴数を見てみると1～9本までであるが、7～9本が壁の内側に配列されるタイプが一般的と思われる。7区の第35号住居跡は炉もなく、中央に柱穴1本が認められただけであり、特異なものである。

f 堀之内Ⅰ式期の住居跡について

堀之内Ⅰ式期の住居跡は、2・3・5区からあわせて17軒検出されており、称名寺Ⅱ式期よりは増加するが、中期および後期初頭に比較すれば衰えは隠せない。2区の第108号住居跡は、小破片からの時期

推定であり、出土土器の中で最も新しい時期の土器を選ぶと堀之内 I 式期となるというだけで、確実性に欠ける。分布範囲は、2 区の西端をかすめて 5 区と 3 区に中心部があり一部 3 区の西側の調査区域外にのびる可能性が指摘できる。堀之内 I 式期の住居跡で注目すべき点は、柄鏡形住居跡の出現である。3 区の第 34 号住居跡と 5 区の第 39 号住居跡の 2 軒である。柄鏡形住居跡は、加曾利 E IV 式期にその特異な形態が確立するが、⁽²⁾ その張り出し部の機能は出入口施設と考えられる。本県に入って来るのは称名寺式期と考えられ、堀之内 I 式期に盛行するものと見られる。⁽³⁾ その他の住居跡では楕円形を呈するものが目立っている。

次に規模を検討するが、2 区の第 108 号住居跡は時期比定にやや問題があり、3 区の 6 軒の住居跡はいずれも平面形が重複や削平により推定値となっているので除外し、5 区の 10 軒の住居跡を対象とする。10 軒のうち 6 軒が平面形の計測が可能で、平均長径 6.28 m、短径 5.82 m を測る。当遺跡の住居跡の中では最も平均値が大きい。

炉の位置については中央の例が 5 軒と多く、中央からややずれているものを含めると 10 軒となり、大半を占める。他には北寄り 2 軒、西寄り、南西寄り、北西寄り、南東寄り各 1 軒ずつである。炉は地床炉がほとんどであるが、5 区の第 38・41 号住居跡の炉は土器片囲い炉で他と異なる。

柱穴の本数は 5 ～ 35 本ときわめて変差が大きいが、柄鏡形住居跡の 2 軒は 35 本と 13 本であり、宮本氏分類の B 型に相当するものと考えられる。35 本の 3 区の第 34 号住居跡は加曾利 E III 式期の第 58 号住居跡と重複しているためと思われる。その他の住居跡では 10 本・13 本などの例が目立ち壁柱穴タイプが主流となっている。

以上、当遺跡の縄文時代の住居跡について、3・4 区の事例を中心に時期別に検討してきたが、ここであらためて当遺跡の縄文時代の所産と考えられる住居跡 403 軒の時期別の内訳を見てみると次のようである。

加曾利 E III 式期（古・新段階および加曾利 E 3 - 4 中間式を含む）のもの 144 軒（36 %）

1 区 1・4・8・209・210・211・212・219（8 軒）

2 区 13・18・19・20・23・26・27・28・33・37・40・41・44・58・62・70・75・77・81・85・98・
123・128・129・130・140・141・142・160・164・173・181・195・196・203・207・216・223
（38 軒）

3 区 3・8・9・10・17・20・28・46・48・49・58・69・72・74・79・89・105・106・109（19 軒）

4 区 3・4・5・6・7・19・50（7 軒）

5 区 2・3・7・8・26・31（6 軒）

6 区 5・11・12・15・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・37・39・42・45・46・48・50・
51・52・54・59・62・63・64・65・71・74・81・84・85（34 軒）

7 区 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・13・14・15・16・18・19・21・22・23・24・
25・27・28・29・30・31・32・33・34・36・37（32 軒）

加曾利 E III ないしは E IV 式期と思われるが決定しがたいもの 14 軒（3 %）

2 区 34・86・120・143・170・190・192・197（8 軒）

6 区 13・35・60・72・73・79（6 軒）

加曾利 E IV 式期（称名寺式土器を共伴しない、古い段階）のもの 80 軒（20 %）

1 区 5・6・7・9・213・214（6 軒）

2区 11・12・15・16・22・24・25・29・30・31・36・38・42・47・48・50・51・53・56・57・59・
61・65・93・97・121・122・127・133・134・137・139・145・146・153・154・161・163・165
・172・175・176・180・184・185・186・189・191・193・194・198・202・220・227 (54軒)

3区 16・35・56・83・87・88・96 (7軒)

6区 34・36・38・40・41・47・49・53・67・68・69・76・77 (13軒)

加曾利EⅣ式・称名寺式土器が共伴する時期もの 62軒 (15%)

2区 21・43・45・52・55・60・67・72・73・78・87・88・89・90・94・95・99・107・109・110・
113・114・118・119・124・125・126・131・132・135・136・138・147・148・149・150・152・
155・156・162・166・167・168・171・174・177・178・182・183・199・206 (52軒)

3区 47 (1軒)

6区 55・56・57・58・61・66・70・80・82 (9軒)

加曾利EⅢ式から称名寺式土器まで混在して時期不明のもの 3軒 (1%)

2区 54・144・179 (3軒)

称名寺Ⅰ式期のもの 27軒 (7%)

2区 66・68・69・74・79・80・91・92・100・101・103・104・105・106・111・112・117・151・
157・158・159・188 (23軒)

3区 80 (1軒)

5区 33・42・44 (3軒)

称名寺Ⅱ式期のもの 5軒 (1%)

5区 11・15・40・45 (4軒)

7区 35 (1軒)

堀之内Ⅰ式期のもの 17軒 (4%)

2区 108 (1軒)

3区 22・34・81・86・117・118 (6軒)

5区 4・12・13・14・32・38・39・41・43・46 (10軒)

時期不明 (遺物皆無ないしは少量、または出土土器が図示されていないため判断できないものを含む)
のもの 51軒 (13%)

1区 2・3・10・225 (4軒)

2区 14・17・32・35・39・46・49・76・96・116・169・200・201・204・205・208・218・222・226
・228 (20軒)

5区 36 (1軒)

6区 1・2・3・4・6・7・8・9・10・14・16・17・18・19・20・21・22・23・43・44・75・
78 (22軒)

7区 12・17・20・26 (4軒)

この中で注意すべきことは、加曾利Ⅳ式期を称名寺式土器を共伴するものとししないものに2分した事である。報告書に図示されている資料から主に判断したために実情とは異なる点があるかも知れない。また、全住居跡のうち約15%にあたる54軒が時期不明ということも気にかかることである。

さて、これまで当遺跡の住居跡の時期毎の分布状況および平面形、規模、炉の有無・種類・位置、柱穴

配置等についてみてきたが、次にはこの他の住居跡に伴う付属施設と炉の問題について若干検討してみたい。まず、出入口施設についてであるが、これは住居には当然設置されていたものである。ピットの位置や床面の硬さおよび炉との相対的位置関係などから推定可能な例がある。一般的には住居の長軸線上の炉と反対側の壁際にある1～2本のピットが出入口に伴うものと思われ、主柱穴よりは小さく浅いものが多い。加曾利 E IV 式期に確立する柄鏡形住居跡の柄の付根に位置する対ピットは2本柱の出入口施設を引き継ぐものと考えられる。この段階で明確となった出入口施設は以後後期から晩期にかけて、若干形を変えるが継承されていく。称名寺式・堀之内式期には柄鏡形が続き、他に張り出し形、溝状張り出し形などもあらわれ、加曾利 B 式期以降には柄鏡形は消失して、溝状張り出し形が主流を占める。当遺跡3区の第34号住居跡は堀之内 I 式期の柄鏡形住居跡で、平行溝状の出入口施設を有している。

次に周溝について考えよう。周溝はあるものと無いものがあり、絶対に無ければならないという施設ではない。全周するもの他に部分的な例も多く、必ずしも必要とはいえない。周溝は前期に入って出現し、中葉から後葉にかけて盛行するが、前期末から中期初頭には衰え、再び中葉の勝坂～加曾利 E II 式期にかけて多くみられ、加曾利 E III 式期には少なくなり、加曾利 E IV 式期以降は稀な存在となる。当遺跡の周溝についてみると次のようである。周溝を有する住居跡は2区の第12・26・40・44・76・216号住居跡の6軒のみで他区からは検出されていない。これらのうち第26・40・44・216号の4軒は加曾利 E III 式期のもので、44・216号が古い段階、26・40号が新しい段階に属し、40号住居跡の出土土器は加曾利 E 3-4 中間式といわれるものに相当しよう。第12号住居跡は加曾利 E IV 式期と考えられ、周溝が一部途切れる東壁寄りが出入口部と推定されている。P₃、P₄を入口施設に使用したと考えているが、P₄は主柱穴と考え、P₃のみを出入口施設に伴うと判断した方が良いと思われる。第76号住居跡は、出土土器が図示されておらず残念ながら時期不明である。しかし、いずれにしても上記の宮本氏の周溝の盛衰に関しての見解は当遺跡についても該当する。

炉の種類について若干補足しておきたい。当遺跡では加曾利 E III 式期から堀之内 I 式期にかけての時期の住居跡が発見されているが、その大半は地床炉を有するものである。403軒のうち推定を含めて炉が検出されている住居跡は255軒で、炉の保有率は約63%となる。地床炉以外の炉の種類としては、土器埋設炉、土器片囲い炉、石囲い炉があげられる。土器埋設炉が最も多く、1区の第6・7号住居跡、2区の第18・91・128・130・216号住居跡、3区の第56・106号住居跡、4区の第4号住居跡、6区の第51・74号住居跡の計12軒の住居跡から検出されている。深鉢形土器の胴部を使用した例が多いが、3区の第106号住居跡では口縁部を利用している。加曾利 E III 式期の例が8例と多く、E IV 式期が2区の第6・7号と3区の第56号住居跡にあり、称名寺式期の例が2区の第91号住居跡である。土器片囲い炉は、5区の第41号住居跡、6区の第11号住居跡の2軒にあり、後者が加曾利 E III 式期、前者が堀之内 I 式期である。石囲い炉は2区の第137・124号住居跡の例をはじめ3区の第34・47・49・58号住居跡などは炉の周囲に凹みが巡り、石囲い炉の石が抜かれたものと推測されるが、確証はない。本県南部は一般に石が少なく、石囲い炉も確実なものがない。当遺跡の例も別な観点からの再検討が必要と思われる。

次に住居跡に伴う埋設土器、即ち埋甕についてみてみよう。当遺跡では2区で14基、3区で18基、5区で14基、6区で6基、7区で5基の計57基の埋甕遺構が検出され、1・4区には認められていない。このうち住居跡から出土した埋甕は2区の第45・72・129・188号住居跡、3区の第47・80号住居跡、5区の第33・38・41・44・45号住居跡、6区の第50・53・66号住居跡、7区の第10・15・31・37号住居跡の計18基で、全体の約32%を占める。その他は土坑内埋設の例や屋外埋設と考えられるものである。

さて、住居跡からの埋甕の出土状況をみると、床面に正位に埋設されているものが最も多いが、斜位埋設の例もあり、7区の第10号住居跡例のように床面上に逆位で伏せられた状態で出土するものもある。このような特異な例は厳密には住居跡に伴うとは考えられない。また、6区の第53号や66号住居跡出土例のように覆土中および覆土上位から検出されることもあり、これは明らかに住居跡には伴わない。埋設土器の遺存状態をみると、完形の例は2区の第45号住居跡出土例ぐらいで稀な存在である。胴下半部以下だけを欠失する口縁部および胴部を利用するもの、口縁部および底部を欠損する胴部だけのもの、胴部から底部を残存するものなど各種がある。他県の例に認められる底部を意図的に欠いた例は無い。出土状況や土器の遺存状態を検討して確実に住居跡に伴うと考えられるのは2区の4例と3区の2例、5区の5例、6区の第50号住居跡の2基のうちの1基、7区の第15・31号住居跡出土の諸例である。なお3区の第47号住居跡の南東壁寄りに検出された埋甕は床面を浅く掘り込み、深鉢形土器の胴部だけが正位で壁に立てかけられたような状態で出土したもので、本跡に伴うものと思われるが、床面からかなり高く出ていることが考えられ、通常の埋甕とは出土状態に差がある。これらの埋甕を時期別に検討してみると、加曾利EⅢ式期のものが、2区の第129号、6区の第50号、7区の第15・31号住居跡の4軒である。加曾利EⅣ式期のものは無く、加曾利EⅣ式土器と称名寺式土器が共存する時期の例が、2区の第45・72号、3区の第47号住居跡の3軒である。2区の第188号と3区の第80号、5区の第33・44・45号住居跡は称名寺式期である。3区の第80号住居跡と5区の第45号住居跡からは2基の埋甕が検出されている。5区の第38・41号住居跡の例は堀之内Ⅰ式期である。住居跡内埋甕は、中期前葉の勝坂・阿玉台期に確立し、加曾利E式期に盛行し、称名寺式・堀之内式期まで続く。当遺跡の例は、加曾利EⅢ式期から称名寺・堀之内Ⅰ式期に属する。当遺跡はきわめて多数の住居跡が検出された割には、住居跡内埋甕の比率は低く、埋甕風習が本県にはあまり流入しなかったものと考えられる。

次に炉の無い住居跡とした遺構について若干触れておきたい。当遺跡1・2区の報告者は、炉の無い住居跡を2つに大別している。第1は、掘り込みが深く、床面が非常に硬く、中央に深いピットを有している。類例として第70・98・141号住居跡があげられ、貯蔵用の倉庫的な働きが想定されている。その後の調査により類例が、7区の第409号土坑、3区の第8号住居跡として追加された。これらを総合してみると上記の共通項の他に2区の第98号住居跡において指摘された床面をさらに掘り込んだ掘り込みが2～3基存在することが加えられよう。筆者は、目下この種の遺構に注目しており、類例を検索中である。北海道市筒戸A・B遺跡の第28号住居跡は、当遺跡2区の第141号住居跡と同様の壁外柱穴を有するものである。これらは、今のところすべて加曾利EⅢ式期の所産と考えられ、該期における特殊遺構として重要なものと思われる。当遺跡から検出された5基は長径2.85～4.40mの円形ないし不整形を呈し、壁高は50～100cmに及び、深い掘り込みを有する。底面はいずれも硬く踏み締められており、中央ピットも54～98cmと深くしっかりしている。類例としてあげた6基のうち焼土をもつ遺構は、当遺跡7区の第409号土坑と筒戸A・B遺跡の第28号住居跡で、共に浅い掘り込み内に焼土が充満しており、底面にて火を使用したことは間違い無いが、通常の炉とは異なる。以下は推測であるが、中央のピットにトートムポール状の祭柱を建て、この近くで火を用いた祭祀的な儀礼をおこなったものと考えられる。祭祀的儀礼の具体的な内容は知り得ないが、7区の第409号土坑内のBピットからは特異な土製品が出土しており、何らかの動物供儀をおこない、豊猟や豊穡を祈ったのではなかろうか。

当遺跡から検出された土坑は、きわめて多数であるが、このような遺構の類例は乏しい。上記の5例の他に可能性としては5区の第102号土坑があげられる。

第2は、掘り込みが浅く、壁・床面ともに軟弱な遺構で、柱穴配置も不規則で、出土遺物も少ないものである。これについて、報告者は居住施設ではなく、性格は不明と結論づけている。このようなタイプの遺構は、1・2区以外にも多く検出されている。筆者は、前記のように物置き小屋的な機能を想定しているが、日常的に使用するものとは床面の軟弱さから考えられず、使用頻度の低い遺構と推定している。

2 土坑について

当遺跡3・4区から検出された土坑のうち今回は3区で397基、4区で100基の計497基を報告している。縄文時代の所産と推定される土坑は3区で296基で、約75%を占めるが、4区では35基と少なく、35%にすぎない。しかも縄文時代と考えられる土坑は、4区でも西ないし北側に片寄っており、3区と2区の遺構の広がりそれぞれ東端および南端として把握される。縄文時代の土坑のうち出土土器から時期推定が可能な土坑は更に限定され、3区で161基、4区で25基となり、それぞれ約54%、71%にあたる。この他にも加曽利EⅢ～Ⅳ式期、加曽利EⅣ式から称名寺Ⅰ式期、称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式期に対比される遺構もあるが、不確実なため今回は除外している。3・4区の土坑を時期別にみると次のようである。

加曽利EⅢ式期 71基

3区 18・20・21・22・68・69・88・117・123・131・150・156・178・214・217・218・221・251・
261・263・264・265・266・273・278・279・285・286・287・288・289・299・304・305・308・
336・350・360・362・369・378・379・396・413・414・439・441・445・447・454・475・489
(52基)

4区 22・28・35・39・42・47・48・49・50・51・53・55・57・58・66・77・170・173・181 (19基)

加曽利EⅣ式期 30基

3区 77・114・154・164・197・260・274・290・295・313・315・320・321・331・337・340・368・
374・380・415・417・433・434・444・480・484 (26基)

4区 24・33・37・76 (4基)

称名寺Ⅰ式期 11基

3区 29・62・73・134・256・262・332・352・387・464・470 (11基)

称名寺Ⅱ式期 6基

3区 23・104・165・166・219 (5基)

4区 168 (1基)

堀之内Ⅰ式期 69基

3区 28・56・63・66・76・82・83・84・91・92・95・102・103・106・107・108・109・110・119・
127・137・139・148・170・172・173・175・198・200・231・232・234・241・246・250・255・
267・272・294・326・389・390・392・393・394・395・397・400・401・403・404・406・407・
408・409・412・423・426・427・428・436・438・446・450・451・455・513・525 (68基)

4区 68 (1基)

各期の土坑の分布状況を概観すると、加曽利EⅢ・Ⅳ式期のものが最も広範囲に広がり、称名寺Ⅰ・Ⅱ式期の土坑は、3区の北側に主として分布しており、一部は4区の北側にも及んでいる。これに対して堀之内Ⅰ式期の土坑は、3区の西側に集中する傾向を示し、更に西側の調査区域外にも延びるものと予想

される。

当遺跡の他区でも多数の土坑が検出されているが、時期を推定できるものは少ない。各区の報告書に掲載されている出土土器を中心に若干の再検討をおこなったところ、他区における土坑の時期別は次のようである。1・2区についてはその数がきわめて多く、報告書掲載以外の資料について点検することができなかつたために、時期を推定できた土坑は非常に少ない。5～7区に関しては未掲載資料の一部を点検し、若干の補訂をおこなうことができた。

加曾利 E Ⅲ式期 224 基

1・2区 1・6・10・14・18・19・20・22・23・25・26・39・40・41・69・95・100・170・178・186・190・215・217・250・268・275・278・280・290・294・333・346・373・415・423・482・493・510・511・566・578・603・689・787・810・851・862・910・954・976・981・1007・1023・1034・1041・1043・1045・1123・1172・1230・1279 (61基)

5区 1・2・7・19・22・23・24・28・47・50・51・63・74・75・85・102 (16基)

6区 57・61・63・69・76・78・79・92・100・114・124・125・135・142・144・153・155・164・165・194・196・197・199・201・212・215・223・225・226・231・251・257・267・268・277・281・284・288・290・291・303・304・311・319・320・321・322・330・332・333・337・342・343・347・355・359・363・364・365・367・368・370・372・379・383・393・394・398・402・412・415・417・421 (73基)

7区 13・36・46・86・87・93・97・110・112・136・138・141・142・143・148・153・154・155・160・164・199・201・215・223・230・237・255・262・279・282・283・284・288・289・295・304・313・316・318・323・333・335・342・343・346・348・353・354・355・357・358・361・363・368・373・380・384・386・387・388・391・393・394・401・407・409・411・413・415・419・422・433・435・461 (74基)

加曾利 E Ⅳ式期 89 基

1・2区 15・66・85・132・165・200・203・205・213・214・228・237・269・286・287・298・310・318・331・370・377・378・380・409・454・481・495・501・627・676・685・804・915・917・958・964・985・997・1002・1018・1024・1096 (42基)

5区 41・52・53・57・66・86・89・120・122・123 (10基)

6区 153・155・156・162・177・178・179・180・181・182・185・198・205・249・252・260・270・272・308・309・310・312・338・339・340・344・345・346・354・358・362・388・392・405・419・420 (36基)

7区 395 (1基)

加曾利 E Ⅳ・称名寺式共存期 9 基

1・2区 374・435・436・1038・1065 (5基)

5区 14・18 (2基)

6区 390・416 (2基)

称名寺 I 式期 25 基

1・2区 433・474・504・526・548・563・583・763・815・817・986・989・996・998・1245・1285 (16基)

5区 10・17・29・42・48・77・78・97・140（9基）

称名寺Ⅱ式期 3基

5区 67・95・100（3基）

堀之内Ⅰ式期 15基

5区 43・45・55・88・90・92・96 103・105・111・115・121・134・138（14基）

7区 321（1基）

上記の加曾利Ⅲ～堀之内Ⅰ式期の土坑が当遺跡では多数を占めるが、これ以外の時期の土坑もわずかに認められる。6区の第149号土坑は阿玉台式期の所産で、小貝塚を伴い、貝刃1点、土器片錘2点などが検出されている。7区の第34号土坑は前期の浮島式期の可能性があるが、確実ではない。また、5区にはいくつか堀之内Ⅱ式期の可能性がある土坑（第104・119号など）もあるが、不明瞭のため今回は省いた。

さて、土坑の時期についてみると加曾利Ⅲ式期が1～7区あわせて295基と圧倒的多数を占めるが、これは時間幅が大きいためと考えられる。加曾利Ⅳ式期は119基で、称名寺式土器を共存する時期を含めても128基にすぎない。加曾利Ⅲ式期を3段階、加曾利Ⅳ式期を2段階程度に細分して考えてみると、1段階あたりの土坑数は約80～90基となり、加曾利Ⅲ・Ⅳ式期の住居跡（加曾利Ⅲ式期144軒、加曾利Ⅳ式期およびⅣ・称名寺式共存期142軒）とほぼ対応し、当遺跡の集落が加曾利Ⅲ～Ⅳ式期と継続して繁栄していたことを土坑の数の点からも裏づけることになる。ところが、住居と同じように土坑も称名寺Ⅰ・Ⅱ式期に至ると激減する傾向を示す。称名寺Ⅰ式期36基、称名寺Ⅱ式期9基で、分布も2・3・5区に限定される。堀之内Ⅰ式期には住居と同様に土坑の数もやや盛り返す。堀之内Ⅰ式期の土坑は84基あるが、3区の西側と5区の南側に偏在し、該期の住居跡の周囲に集中する。

次に土坑の平面形・規模・形状などについて触れたい。これまでの当遺跡の土坑の分析は、時期別の特徴を抽出することに力点を置かずにおこなわれてきた傾向がある。形態分類の方法は、平面形・断面形・平面規模・深さの組み合わせによりおこなわれ、更に底面におけるピットの有無および数により細分されている。既報告の1・2・5・6・7区の土坑の分類規準は、ほとんど一致しており、3・4区の土坑の分析にあたってこれを踏襲し、これに時期的な特徴などを加味して行きたい。なお、ここで分析の対象とする土坑は、上記の時期を推定できたものを主とする。平面形と断面形の組みあわせ方については、各報告書で若干の差異があるが、平面規模と深さの点については全く同一である。

平面形と断面形の組みあわせについては、1・2区の分類を主に若干の改変を加えた。

土坑の分類規準は以下のとおりである。

(1) 平面形と断面形

- A 類 平面形が円形か楕円形の円形系統で、壁は外傾あるいはゆるやかに立ちあがるもの。（不整円形・不整楕円形を含む）
- B 類 平面形が円形か楕円形の円形系統で、壁はほぼ垂直に立ちあがるもの。
- C 類 平面形が円形か楕円形の円形系統で、断面がV字状を呈するもの。
- D 類 平面形が円形か楕円形の円形系統で、断面が袋状を呈するもの。
- E 類 平面形が円形か楕円形の円形系統で、深いピット状を呈するもの。
- F 類 平面形が方形か長方形の方形系統であるもの。（隅丸方形・長方形・不整方形・長方形を含む）
- G 類 平面形が不定形のもの。

H 類 平面形が不明のもの。

(2) 平面規模

I 平面規模の長径が、100 cm 未満

II 平面規模の長径が、100 cm 以上 200 cm 未満

III 平面規模の長径が、200 cm 以上

(3) 深 さ

a 深さが 50 cm 未満

b 深さが 50 cm 以上、100 cm 未満

c 深さが 100 cm 以上

上記の規準で各区の時期が推定される 556 基の土坑を分類してみると次のようである。理論上は 72 通りの分類が可能な訳であるが、実際に検出されたのは 32 通りにすぎない。まず(1)についてみると A 類と B 類では A I c タイプのみが 1 例の検出もない。逆に C 類では C I b タイプだけが 2 基検出されている。D 類の袋状土坑は D II b, D II c, D III c タイプに分れる。E 類は 1・2 区で 16 基検出されているが、いずれも時期不明で今回は取り上げていない。F 類は方形を主とするタイプで、F I b, F I c, F II c, F III c は未検出である。G 類は不定形を一括しているが、G I c, G II c, G III c の 100 cm 以上の深さを有するタイプは存在しない。G 類は複数の土坑の重複により不定形の形状を呈するものが多いように観察される。H 類は平面形が不明なものとして分類したが、1・2 区の Z 類に相当する。2 区の第 89 号土坑 1 基だけが、Z I a として分類されているが、平面形は楕円形で、長径 97 cm, 短径 72 cm, 深さ 70 cm を測り、壁面は外傾し、底面は凹凸がある。出土遺物はない。第 208 図掲載の図面から判断すると、3 区の第 30～32・34 号土坑と同様の倒木跡と考える方が妥当であろう。

(2)の規模についてみると I の 100 cm 以下のうち最小の長径は 39 cm, III の 200 cm 以上では最大の長径は 490 cm を測る。前者は小ピット状を呈し、後者には小竪穴ないしは竪穴状遺構として分類されるものが含まれている。

(3)については a のごく浅いものの深さ 8 cm から 211 cm のとてつもなく深いものまでバラエティに富んでいる。

次には各タイプの土坑について、遺跡全体、時期別、地区別などを考慮して若干の検討をおこなってみたい。まず、各タイプの土坑の地区別、時期別の分類表をかかげる。

各形態のうち最も検出数の多いものは A II a タイプで 124 基、以下 A II b, B II b タイプと続き、平面形の長径が 100～200 cm の間、深さが 100 cm 以下で、壁は外傾ないし垂直に立ちあがるものが当遺跡の土坑の主体を占めることが理解される。556 基のうち、上記の 3 タイプをあわせると 291 基あり、約 52% の過半数となる。次は B II c, A I a, A III a, B II a, A II c の順となり、各々 34～21 基存在する。以下は A III b, A I b, B I a, D II c が 17～10 基あり、2 桁の数字を示す。その他は 1 桁にすぎず、当遺跡の土坑の形態としては一般的なものとは考えられない。しかし、これらのタイプの中には数が少ないが、特徴ある分布や時期的な片寄りを示すものもあり、見過すことはできない。D III c, F III b, G I a は各 1 基ずつである。

各タイプの土坑を時期的にみってみると興味深い。加曾利 E III 式期には、296 基の土坑があり、32 タイプのうち、B I c, C I b, D III c, G I a の 4 タイプを除く大半が揃っており、バラエティがある。主体を占めるのは A II a, A II b, B II b で全体の傾向を当然反映している。この 3 タイプで 159 基あり、約

54%を占める。以下、BⅡc、AⅢa、AⅠa、AⅡc、AⅢb、BⅡaなどが続く。加曽利EⅢ式期の特徴ともいえる土坑はBⅠaタイプで、全体で10基のうち8基が該期に集中している。長径100cm以下で深さ50cm未満で、壁が垂直といういわゆるタライ状を呈する土坑である。8基の土坑をあらためて見直してみると、長径は65～93cm、短径60～86cmで円形・不整形円形・楕円形を呈し、深さは28～47cmである。底面がいずれも平坦であることも共通している。長径の平均値83cm、短径76cmで、深さは38cmとなる。

D類の所謂袋状土坑については、加曽利EⅢ式期から堀之内I式期にかけての存在が当遺跡において確認されたことが最大の収穫である。加曽利EⅢ式期に6基、EⅣ式期に6基、加曽利EⅣ・称名寺式共存期に1基、称名寺I式期1基、堀之内I式期2基の計16基である。袋状土坑はDⅡcタイプが主で10基、DⅡbタイプ5基、DⅢcタイプ1基がある。このうちDⅡbタイプは、深さが54～83cmと浅く、長径は115～157cm、短径は90～130cmを測る。深さの平均値が70cm、長径が140cm、短径が116cmとなりやや小形で浅い袋状土坑といえよう。壁のオーバーハングも顕著ではなく、口径より底径がわずかに広く大きいという程度の土坑が多く、6区の第394号土坑はやや底径の広がり大きい。DⅡcタイプの10基とDⅢcタイプの1基(4区の第76号土坑)の平面形における差は204cmと195cmで、10cm足らずであり、一括しても良いと考えられる。この11基をあらためてみると平面規模や深さの点で2分されることに気づく。即ち、平面規模の長径が150～200cmのグループと115～120cm程度のグループである。前者には3区の第396号土坑、4区の第28号土坑、6区の第291号土坑、7区の第353号土坑(以上加曽利EⅢ式期)、3区の第444号土坑、4区の第76号土坑(以上加曽利EⅣ式期)、5区の第48号土坑(称名寺I式期)が含まれる。後者には2区の第997号土坑、6区の第198号土坑(以上加曽利EⅣ式期)、3区の第400・451号土坑(以上堀之内I式期)が含まれ、傾向としてはあるが、新しくなるにつれて袋状土坑は小形化するようである。前者の長径・短径の平均値(長径176cm、短径165cm)は、後者よりもそれぞれ60cm、63cm大きく、明確な差があると判断される。深さは前者の平均122cm、後者が133cmと小形な方が10cm程度深いという値が出ている。以上のように袋状土坑は3つのタイプに細分されそうであるが、例数が少ないので断定的な判断は下せない。3つのタイプが加曽利EⅢ～称名寺式期にかけて併存した可能性が高く、堀之内I式期にはやや小形化するのかもしれない。壁のオーバーハングは、DⅡcタイプもDⅡbタイプと同様に顕著ではないが、DⅡbタイプよりは明瞭になり、5区の第48号土坑や3区の第400号土坑は三角フラスコ状を呈する。

袋状土坑は、縄文前期中葉頃から本格的に構築され始め、中期中葉の阿玉台式期末から加曽利EⅠ式期に盛行するが、以後は衰えつつ後期前葉にまで及んでいる。⁽⁴⁾当遺跡の袋状土坑は、衰退期から末期にかけて構築されたもので、形状もオーバーハングが著しくなくなる。茨城県では竜ヶ崎市赤松遺跡⁽⁵⁾、桜村下広岡遺跡⁽⁶⁾、石岡市東大橋原遺跡⁽⁷⁾、同大作台遺跡⁽⁸⁾、牛久市赤塚遺跡⁽⁹⁾、鹿島町塩釜遺跡⁽¹⁰⁾、水戸市高天原遺跡⁽¹¹⁾、同塙東遺跡⁽¹²⁾、日上市諏訪遺跡⁽¹³⁾等で盛期の袋状土坑が検出されているが、衰退期から末期の袋状土坑の調査例は少なく、当遺跡の資料は貴重なものである。

その他のタイプの土坑は5例以下である。

加曽利EⅣ式期の土坑は122基あり、AⅢc、BⅠa、BⅠc、FⅠa、FⅢb、GⅠa、GⅠbの7タイプが存在しない。主体を占めるのはAⅡa、AⅡb、BⅡbであり、加曽利EⅢ式期と同様の傾向を示している。3タイプの合計は61基となり、丁度50%にあたる。以下、BⅡa、BⅡc、AⅢa、AⅠaなどが続く。加曽利EⅣ式期に特徴的な土坑といえるものは無く、EⅢ式期に比例して各タイプの土坑の数

が減る状況を示すが、この中で B IIa タイプの突出が注目される。平面規模が 100～200 cm、深さが 50 cm 未満で、壁が垂直というこのタイプは、加曽利 E III 式期では 10 基で全体のわずか 3% 強にすぎないが、該期では 8 基あり、全体の 6.5% を占めるようになり倍増している。両者とも形態的な変化はあまり認められず、前者の長径の平均値が 130 cm、短径が 102 cm、深さが 35 cm で、後者はそれぞれ 132 cm、97 cm、38 cm を測る。後者の方がやや平面形の楕円形化が進み、若干深くなる傾向を示している。

加曽利 E IV 式・称名寺式土器共存期の土坑は、9 基ときわめて少なく、特徴を抽出するまでには至らない。しかし、これまで主体を占めた 3 タイプのうちでは A IIb タイプが 3 基あり目立つほかに、E IV 式期で取り上げた B IIa タイプが 2 基含まれている。

称名寺 I 式期の土坑は、36 基とやや多くなり、主流 3 タイプの中では A IIa タイプが突出し 16 基で、A IIb、B IIb タイプはそれぞれ 2 基、3 基となり落ち込みが著しい。これに対して A Ia タイプが 5 基認められ、該期の土坑が一般的にみて前時期に比較して浅くなる傾向を明瞭に示している。主流 3 タイプの合計は 21 基で、約 58% を占めている。次には B IIa タイプの 2 基がつづき、他はすべて 1 基ずつである。

称名寺 II 式期の土坑は、9 基とこれもまた少なく、時代的特徴は指摘しがたいが、A IIa タイプだけが 3 基あり、前時期の浅くなる傾向を継承していることが推定される。その他は各 1 基ずつで、A IIb、B IIb タイプのものはない。

堀之内 I 式期の土坑は、84 基あり、A IIa タイプが 28 基と多数を占め、以下 A IIb タイプ 13 基、A IIc タイプ 7 基と続き、加曽利 E III・IV 式期には主流をなした B IIb タイプは 2 基と激減している。該期の土坑の形態的特徴は、前代以来の浅くなる傾向を維持しつつも、A IIc タイプや後記する B Ic タイプの出現などに代表される深い土坑の二者に両極分化する点にあると考えられる。主流 3 タイプの合計は 43 基で、約 51% を占めている。上記以外では A Ia、A IIIb、B Ic、B IIc が各 4 基ずつあり、ここでも深さの点での両極分化が認められる。

堀之内 I 式期の土坑で特徴的なものは B Ic タイプである。このタイプは該期に初めて出現し、口径の小さい割に深さの深い点が特徴である。いずれも堀之内 I 式期の土坑が卓越する 3 区の西部に位置している。3 区の第 172・175・198・267 号土坑の 4 基が B Ic タイプに分類されるが、他に第 172 号土坑と重複し、同坑に切られている第 173 号土坑も推定長径が 100 cm にすぎず一括して考えて良い土坑と思われる。これらの土坑の長径・短径・深さの平均値はそれぞれ 85 cm、77 cm、180 cm を示しきわめて小形で深いという特徴を明瞭に示している。第 267 号土坑は第 34 号住居跡との重複があり、深さが 110 cm にすぎないが、本来はもっと深かったと推定される。いずれも底面は平坦である。このタイプの土坑の用途は不明であるが、第 173 号土坑の底面から多量の魚骨が層をなして検出されていることから考えると、ゴミ穴として深く掘り込まれた可能性があるように思われる。

さて、次に各期の土坑を地区別にみてみよう。構築時期を推定できたものは、1・2 区では検出された土坑 1, 184 基のうち 124 基にすぎず、約 10% 強である。3 区では 397 基のうち 162 基で約 41% を占める。4 区では 100 基のうち 25 基で 25% である。5 区は 113 基のうちの 56 基で約 50% を占め、高率である。6 区は攪乱穴を除く 402 基のうちの 113 基で、約 28% にすぎない。7 区は攪乱穴を除く 432 基のうちの 76 基で、約 18% と低率である。

最初に各タイプの土坑のうち当遺跡の中で主体を占める A IIa、A IIb、B IIb タイプの土坑について各区ごとにみてみると次のようである。加曽利 E III 式期では、A IIa タイプは 4・5 区に皆無で、1・2 区で全体の 5% 程度と少なく、3 区で 20%、6 区で 22%、7 区で 34% と増加する。A IIb、B IIb の

両タイプは壁が垂直かやや外傾するかの規準で区別されており、ほぼ同一タイプに近いので一括して考える。各区から満遍なく検出されているが、1・2区では32基で約52%を占めており、当区の主体をなす土坑といえる。3区では33%、4区では42%、5区で50%、6区で30%、7区で24%を示している。これから言えることは、AⅡaタイプの浅い土坑は6・7区に目立ち 反対にやや深いAⅡb、BⅡbタイプは1・2区や4・5区に多いということである。

土坑の形態分類に関しては、平面の形状・規模・断面の形状や深さなどに機械的な規準を設けて分類せざるを得ないが、適宜工夫を加えて分類することも必要であろう。

AⅠaタイプの浅い小形の土坑は各期にむらなく分布しているが、少数である。

次に、BⅡc、BⅢb、BⅢcなどの比較的深く大形の円筒形土坑については、1・2区の26%を最高に、6区の11%、3区の8%、5区の6%、7区の3%というように4区を除いた各区に分布しているが、当遺跡の中央部である2・6区にその中心があるようにみられる。

加曾利EⅣ式期になると、AⅡaタイプは2・3・6区で10%前後の占有率を示しているが、他区ではきわめて少ない。AⅡb、BⅡbタイプは2区で30%、5区で25%、3区で13%、6区で11%の占有率を示している。4・7区は加曾利EⅣ式期の土坑自体が少なく検討し得ない。

AⅠaタイプは加曾利EⅢ式期と同様に少数ずつ各区に分布する。

BⅡc、BⅢb、BⅢcタイプの大形円筒形土坑は、2・4・5・6区に分布するが、2・5・6区にその中心がある。

称名寺式期・堀之内Ⅰ式期の土坑は3・5区にはほぼ分布が限定されるため、各区ごとの比較はおこなわない。

最後に、各タイプの土坑についての若干のまとめをおこなっておく。

A類 本類は平面形が円形か楕円形の円形系統で、壁は外傾あるいはゆるやかに立ちあがるタイプの土坑の総称で、8タイプ合計で330基あり、土坑全体の約59%を占めており、当遺跡で主体となる土坑である。中でもAⅡa、AⅡbとした長径100～200cm、深さ100cm未満の土坑が218基とA類の中の約66%を占め圧倒的である。平面規模からみると、長径が490cmの6区の第215号土坑、336cmの5区の第102号土坑などの大きなものから、65cmの3区の第83号土坑まで各種のパラエティがある。深さも3区の第117号土坑の182cmのきわめて深いものから5区の第74号土坑の11cmときわめて浅いものまでである。このような差異の著しい各種の土坑の用途について考えることは非常に困難であるが、規模の大きな土坑の中には小堅穴ないしは堅穴状遺構として分類することが妥当であるものも含まれている。その他の長径が100～200cm前後、深さ30～100cm未満の土坑（AⅡa、AⅡbタイプ）の用途としては、墓壙説、貯蔵穴説、作業場説などが提出されているが、埋土の状況や出土遺物のあり方などから各説の可能性を検討することが必要である。まず、墓壙としての要件をあげると埋土が人為的であること、副葬品としての土器・石器・土製品・石製品などが検出されること、形態の比較的整った土坑が一定区域にまとまって分布することなどが考えられる。まず、第1の人為的埋土については当遺跡のA類の土坑にはかなり多く認められる。次にこの副葬品の有無については、ほとんどの土坑から出土しておらず、非常に少ない状況にある。第3の同タイプの土坑の集中についても十分に把握できず、今後の課題である。このことからA類の中には墓壙としての性格を有する土坑が多く含まれる可能性が高いが、墓域の把握や墓壙の形態

分類については不十分である。貯蔵穴は開口状態で使用されるのが常であり、使用が終了し、廃棄された状態の遺構から以前の機能を推定することはむずかしい。A 類の中でも A II b、A II c タイプなどの中には当初は貯蔵穴の目的をもって掘られた穴が多いと考えられるが、廃棄の時点では他の用途にあてられたもの（墓壙やゴミ穴など）もある。作業場説については竪穴状遺構の項で触れたので省略する。この他にゴミ穴として最初から穿たれた穴もあると見られるが特定はできない。

- B 類 本類は平面形が円形か楕円形の円形系統で、壁はほぼ垂直に立ちあがるタイプの土坑の総称で、9 タイプ合計で 169 基あり、土坑全体の約 30 % を占め、A 類に次ぐ数がある。中でも B II b、B II c、B II a の 3 タイプがあわせて 130 基と多数あり、B 類の中の主流で、約 77 % を占める。このことは土坑の一般的な平面規模の長径は 100 ~ 200 cm の範囲内にあることを示しており、A 類にも通ずることである。B 類でみると I 類の 20 基、III 類の 19 基を大きく引き離している。B 類の最大長径は 5 区の第 103 号土坑の 337 cm で、最小は 7 区の第 198 号土坑の 69 cm である。B 類の土坑についても A 類とほぼ同様の用途が推測されるが、決定的な証拠が残されていないために推定にとどまる。ただ、A 類に比較して b、c タイプの深い土坑（円筒形土坑）が多いことが特徴としてあげられる。これらは貯蔵穴としての用途が最も相応しいものと考えられ、6 区の南側や 4 区の北西側、2 区の南西側などにややまとまって検出されており、その群在性が機能解明に役立つものと思われる。
- C 類 本類は平面形が円形か楕円形の円形系統で、断面が V 字状を呈するタイプの土坑であるが、C I b の 1 タイプ 2 基のみしか検出されておらず、当遺跡ではきわめて稀な存在であったと考えられる。加曽利 E IV 式期に属する 3 区の第 374 号土坑、称名寺 I 式期に属する 2 区の第 1285 号土坑の 2 基で、他に 2 区の第 101 号土坑が C I a に分類されるが、出土土器がなく時期不明のため取り上げていない。いずれも長径 100 cm 以下の小さな土坑で、深さは 30 ~ 88 cm である。なお、2 区の第 1285 号土坑は埋設土器の掘り方と考えられ、図面から判断する限りでは底面はほぼ平坦であり、C 類に分類しなくとも良いと思われる。規模からみて T ピットとしての陥し穴とは考えられず、用途は不明である。
- D 類 本類は平面形が円形か楕円形の円形系統で、断面が袋状を呈するタイプの所謂袋状土坑である。D II b、D II c、D III c の 3 タイプ合計で 16 基検出され、全体の約 3 % にすぎず非常に少ない。しかし、前記したように袋状土坑は当遺跡では加曽利 E III 式期から堀之内 I 式期にまで継続しており、一定の役割を有していたことは確実である。袋状土坑の用途については食料などの貯蔵穴と考えることが妥当と思われ、墓壙と推定することには疑問がある。船橋市高根木戸遺跡⁽¹⁴⁾の袋状土坑からは人骨が検出されているが、これはごく稀な転用例と考えられる。
- E 類 本類は平面形が円形か楕円形の円形系統で、深いピット状を呈するものとして 1・2 区の報告書において分類されたタイプである。土坑一覧表によれば 18 基検出されているが、いずれも時期を推定できなかった。平面形の長径が 50 cm 程度で、深さ 1 m 内外のものが多くと記されているが、16 基の長径・短径・深さの平均値は約 79 cm、66 cm、91 cm となり、平面形が若干大きい。また、他の土坑の分類基準となっている壁の立ちあがり方をみると、外傾の A 類が 7 基、垂直の B 類が 11 基ある。底面の状態は平坦なもの 3 基、皿状を呈するも

が多く12基、凹凸のあるもの3基に分類される。18基を数値だけで素直に分けると、B I bタイプが7基、B I cタイプが4基と多くを占めるが、他にA I bとA II cタイプが各2基、A I a、A I c、A II bタイプが各1基ずつに細分される。出土遺物は皆無の土坑が多く11基、少量が7基である。以上からE類とした分類はあまり妥当とは考えられず、A・B類として理解した方が良いように思われる。

F類 本類は平面形が方形か長方形の方形系統であるタイプの総称で、5タイプ合計で16基にすぎない。全体の3%弱であるが、各期に存在している。いずれも長辺が200 cm以下、深さ100 cm未満である。深さ50 cm以上の土坑は4基と少なく、深さの平均値は38 cmほどである。これらの土坑は、一般的に浅いものが多く墓墳的な性格が強いと思われるが、確証はない。小形のF I a、F II a、F II bタイプは長辺70～141 cm、短辺57～138 cmの間に収まり、屈葬に近い埋葬姿勢が考えられる。

G類 本類は平面形が不定形なものを一括したもので、6タイプ合計で23基検出され、全体の約4%にすぎない。G類は形状が不明瞭なものが多く、掘り込みも浅いものが目立ち、cタイプの100 cm以上の例はない。最も深い土坑が5区の第78号土坑で86 cm、浅い土坑が6区の第290号土坑の15 cmで、平均値は51 cmである。平面規模は100 cm以下が5基、100～200 cmの間が9基、200 cm以上が9基で大きいものが主となっている。これらは複数の土坑の重複の結果と考えられるものが多いと判断される。壁が垂直か外傾し、底面が平坦なものほどこの可能性が高く、壁がゆるやかに立ちあがり、底面に凹凸や起伏を有するものは、倒木痕などではないかと思われる。

H類 本類は平面形が不明なものを指すが、上記のように2区の第89号土坑1基だけで、しかも検討したように倒木痕と考えられる。

3 炉穴について

当遺跡3区から検出された炉穴は9基で、4区には認められない。3区の炉穴は出土土器および遺構の共通性から判断していずれも早期後半の条痕文土器群の時期の所産と考えられる。3区の炉穴9基のうち1基からは出土土器がないが、ほぼ同時期のものと思われる。当遺跡の炉穴は3区以外では1・2区から67基、5区から1基、6区から5基の73基が検出されており、全部で82基となる。多数の炉穴が検出された1・2区の報告書では炉穴を平面形、平面規模、炉跡の数の3つの視点から分類している。そこで、今回の報告でも基本的にこの分類を活用し、若干のコメントを付け加えることにしたい。

まず、最初に炉穴の時期については、各区の炉穴とも条痕文土器片を出土しており、早期後葉に属することは確実である。また、出土土器のうち文様や器形を観察できる資料は多くはないが、その全てが野島式土器に比定されることから、炉穴の構築時期は野島式期と考えられる。¹⁵1・2区では炉穴間に重複関係があり、最低2時期の継続が考えられるが、いずれも野島式土器の範疇に含まれる。

平面形については、I類円形、II類楕円形、III類不定形に大別される。I類が15基、II類が52基、III類が15基である。I類の円形は1・2区にのみ検出され、他区には認められない。II類の楕円形が当遺跡では最も多く、全体の約63%を占める。III類の不定形は15基あり、1・2区に多く、3・6区には各1基ずつにすぎない。I類とともに全体の約18%ずつを占める。

平面規模は、a 100 cm未満、b 100 cm以上200 cm未満、c 200 cm以上の3タイプに分類した。a

タイプの小形が10基、bタイプの中形が48基、cタイプの大形が24基となり、それぞれ約12%、59%、29%を占め、bタイプが主となる。

炉の数については、1基のものを1、2基のものを2、3基以上のものを3として分類した。1基のみ有する単独の炉穴が最も多く65基、2基のものが11基、3基のものが5基、4基有するものは1・2区の第16号炉穴1基だけである。単独の炉部を有する例が65基で、約80%弱を占め圧倒的に多い。

次にこれらを組み合わせた分類（理論的には27通り考えられるが、実際には16通りしか存在しない）を見ると、Ⅱb1タイプが30基と最も多く、次にⅠb1タイプが10基、Ⅱc1タイプが7基、Ⅱa1タイプが6基となり、これらを合わせると53基あり、約65%を占める。これ以外は4基以下である。最も多いⅡb1タイプは、平面形が楕円形を呈し、長径100～200cmの間で、炉部を1か所有するもので、このタイプが当遺跡では主流をなす炉穴であったと考えられる。これに平面形が円形のⅠb1タイプ10基を加えると40基を数え、炉穴の約半数を占める。2か所の炉部を有する炉穴11基の内訳は、Ⅱcタイプ4基、Ⅲcタイプ3基、Ⅱbタイプ2基、Ⅰb、Ⅲbタイプ各1基である。円形の例は1・2区の第11号炉穴で、長径145cmとやや大きい。楕円形の6基のうち長径が計測できる4基の平均長径は251cmで大形に属する。最大長径375cm、最小長径158cmである。不定形の4基の平均長径は234cmで、最大長径267cm、最小長径190cmである。3か所以上の炉部を有する炉穴6基の内訳は、Ⅱc、Ⅲcタイプ各3基ずつで、Ⅰ類の円形の例はない。Ⅱ・Ⅲ類とも長径200cm以上のcタイプであることは注目される。4か所の炉部を有する1・2区の第16号炉穴の炉部は相互に重複はしていないが、同時使用は炉穴の大きさからみて考えられず、2～3回にわたる使用が推定される。その他の3か所の炉部を有する炉穴についても、炉穴の重複による不定形化（Ⅲ類）、炉部の複数回使用（Ⅱ類）が考えられる。

以上のことから、複数の炉部を有する炉穴の規模は一般的に大きく、しかも一回だけの使用ではなく、複数回使用されたと考えて良い。

次に炉穴の使用法について若干検討したい。安孫子昭二氏は、炉穴の使用法についてイラストを用いて具体的に示している。¹⁶⁾それによれば、炉穴は本来足場を有するもので、炉穴内で火を使用する場合と炉穴外で使用する場合の2通りが考えられる。前者は炉穴外に煙道を有するタイプで煙出口に煮炊き用の土器を据えて火を焚く。後者の場合も、炉部の上がブリッジ状を呈していたと想定され、前者と同様の機能を持っていたと思われる。ブリッジは火熱や冬季の霜害などにより崩壊しやすく、痕跡を残さないものと考えられる。3区の第9号炉穴の炉壁の下部には顕著な焼けが認められている。当遺跡では煙道付きの炉穴は検出されていないので、後者のような使用法が一般的であったのかもしれない。

最後に当遺跡の炉穴の分布状態についてみてみる。最初に記したように1・2区の北部のG7区（北区炉穴群とされ7基が集中している）やH7区などに集中部分がみられ、中央部には散在している。3区の炉穴9基は西部のL2・M2区にまとまって分布している。6区の5基のうち第1・2号炉穴はF6・G6区にあり、1・2区のG7区の北区炉穴群と関連するものと思われる。またH5区に検出されている第3～5号炉穴はH7区の集中部分の西端部としてとらえられる。5区の1基はI3区にあり、や他区の炉穴と離れており単独に近い。

当遺跡では82基とかなり多数の炉穴が検出され、野島式土器も多量に出土しているにもかかわらず、該期の住居跡は見つかっていない。当遺跡の南北端にあたる4・7区には炉穴はなく、土器も少ない。これに対して1・2・3・6区には炉穴が検出され、土器も目立っている。

4 埋甕について

当遺跡3区からは18基の埋甕遺構が検出されているが、第15号埋甕遺構は別記したように屋外炉的性格が強いものと判断されるので、除外すると17基となる。これらの埋甕を諸要素にもとづいて分類すると17基のうち、住居跡に伴うものが3基、土坑内から検出されたものが3基、他に単独出土のものが11基である。第13号埋甕遺構は第79号住居跡に伴う可能性も考えられるが、確証がないため除外している。3区以外では1・2区で14基、5区で14基、6区で6基、7区で5基の39基が検出され、4区には認められなかった。合計56基の埋甕遺構を対象として以下若干の分析を試みたい。

まず、埋甕を大きく分類すると屋内埋甕と屋外埋甕に分れる。前者は住居内に埋設されたもので、後者は土坑内埋設のものと単独出土のものに細分される。屋内埋甕は次の諸例である。

- 2区第45号住居跡（加曾利EⅣ式・称名寺式共存期） 北東壁寄り 正位1基 完形
- 第72号住居跡（加曾利EⅣ式・称名寺式共存期） 南東側 正位1基 胴下半部欠
- 第129号住居跡（加曾利EⅢ式期） 南東側 正位1基 胴部のみ
- 第188号住居跡（称名寺Ⅰ式期） 南西側 正位1基 胴下半部のみ
- 3区第47号住居跡（加曾利EⅣ・称名寺式共存期） 南東壁 正位1基 胴部のみ
- 第80号住居跡（称名寺Ⅰ式期） 北東側 正位、横位各1基 胴下半部のみ 略完形
- 5区第33号住居跡（称名寺Ⅰ式期） 北東壁寄り 正位1基 完形
- 第38号住居跡（堀之内Ⅰ式期） 南側 正位1基 胴部のみ
- 第44号住居跡（称名寺Ⅰ式期） 南東側 斜位1基 完形
- 第45号住居跡（称名寺Ⅰ・Ⅱ式期） 南東側、北東側 正位各1基 略完形 胴部のみ
- 6区第50号住居跡（加曾利EⅢ式期） 南側、西側 正位各1基 胴部のみ 胴下半部のみ
- 7区第15号住居跡（加曾利EⅢ式期） 北東側 正位1基 胴下半部のみ
- 第31号住居跡（加曾利EⅢ式期） 北西側 正位1基 胴下半部欠
- 第37号住居跡（加曾利EⅢ式期） 南西側 正位1基 底部のみ

以上の14軒、17基が住居跡に伴うと考えられる埋甕で全体の約30%を占める。2基の埋甕を有する住居跡は3軒あり、3区の第80号住居跡は確実に2基の共伴と考えられるが、他の2軒は共伴がやや疑わしい。5区の第45号住居跡の2基は、一方が称名寺Ⅰ式、他方が称名寺Ⅱ式土器で、しかも第44号住居跡とはほぼ全面的に重複しており、共伴の確認は困難である。6区の第50号住居跡のうち南側の1基は住居跡に伴うと思われるが、西側の1基はその判断がむずかしい。その他は1基ずつで、埋甕の位置は南東側5軒、北東側4軒、南・南西側が各2軒、北西側が1軒あり、南・南東・南西側を含めた南側の例が9軒と多数を占める点は他の一般の屋内埋甕と類似するが、北東側・北西側の例が5軒もあることは注目される。埋設形態は正位の例が圧倒的に多く、横位、斜位の例が各1基ずつ認められるだけである。埋設土器の遺存状態を見ると完形ないし略完形のは2区の第45号住居跡例、3区の第80号住居跡の1例、5区の第33・44・45号住居跡例の5例で、33号住居跡の埋甕にはほぼ同時期と考えられる深鉢形土器の口縁部片が蓋として用いられていたという。これら3点はいずれも底部が完存しており、意識的に底部に穿孔するとか打ち欠くなどの行為はなされていない。その他の底部を残す埋設土器についても同様の行為はなされておらず、当遺跡ではこのような風習は無かったものと判断される。次は胴下半部以下を欠損する例で、2区の第72号住居跡例と7区の第31号住居跡例がある。いずれも正位に埋設され、底部を欠くが、埋設にあたって特に底部を打ち欠いたものとは思われない。胴部のみで口縁部および底部を欠く

例は5例ある。これらの中では5区の第45号住居跡出土の1例の覆土中から小形磨製石斧1点が2つに折れた状態で出土しているのが注目される。胴下半部および底部だけを残す例は5例で、いずれも底部は完存している。

埋甕に使用されている土器の時期は、加曾利EⅢ式期から堀之内I式期にまで及び、それぞれの住居跡の時期を決定するのに役立っている。

屋内埋甕の用途については、幼児埋葬施設⁽¹⁷⁾、胎盤収納施設⁽¹⁸⁾などが提起されているが、当遺跡の例からはその判断を下せなかった。

7区の第10号住居跡からは胴下半部以下を欠失した深鉢形土器が床面にほぼ接するように伏せられて出土している。所謂伏甕として理解されるものであるが、住居跡に伴うものとは考えられないので除外した。土器は所謂連弧文土器のモチーフに近い文様を有しており、当遺跡としては極めて稀な存在であることから、何らかの意図をもって伏せられたことは確かであるが、用途は不明である。他に住居跡の覆土中から出土した例がいくつか認められるが、単独出土として扱う。

次に屋外埋甕に移る。土坑内埋設として報告されているものと単独出土として扱われているものの2者に分れるが、土坑内埋設とされていても掘り方が小さいものは単独出土として考えたい。まず、土坑内埋設例を示すが、これらの大半は土坑の一部を掘り込んでおり、土坑よりも新しいものと考えられる。

2区第454号土坑例（加曾利EⅣ式期）	西壁	底面	正位1基	略完形
第911号土坑例（称名寺I式期）	中央	覆土上位	正位1基	底部欠
第954号土坑例（加曾利EⅢ式期）	中央	覆土中位	正位1基	口縁部欠
第996号土坑例（称名寺I式期）	中央	底面	正位1基	完形
第998号土坑例（称名寺I式期）	中央	覆土上位	逆位1基	胴部以下欠
3区第84号土坑例（堀之内I式期）	中央	底面	逆位1基	胴部のみ
第231号土坑例（堀之内I式期）	南東側	覆土中位	斜位1基	底部欠
第352号土坑例（称名寺式期）	北側	覆土中位	正位1基	胴部のみ
6区第310号土坑例（加曾利EⅣ式期）	南側	覆土上位	正位1基	胴部のみ
7区第316号土坑例（加曾利EⅢ式期）	中央	覆土上位	正位1基	略完形

以上の10か所、10基が検出されており、各1基ずつである。全体の約18%を占める。これらの中には2区の第454・996号土坑、3区の第84号土坑の3例のように埋甕の下底部が底面に接しているものもあるが、他は覆土の中位ないし上位に位置している。上記の3例は確実に土坑に伴うものと考えられるが、他例は問題がある。埋甕の位置をみると、中央部が最も多く6例、いずれかに片寄っているもの4例で、特に2区の第454号土坑例は西壁に付いて底面にも接している。中央部の諸例は、土坑を意識して埋設位置が決定されたものと推定され、土坑と何らかの関連をもったものと思われる。埋設形態は正位が最も多く7例、斜位1例、逆位2例で、住居跡には全く認められなかった逆位例が2例もある点は注目される。3区の第84号土坑例は胴部のみが残存であるが、2区の第998号土坑例は口縁部を明瞭に残しており、意識的に伏せられたものとみて良く、埋設者が他と区別する意図のもとにおこなったと考えられる。埋設土器の遺存状態は完形ないし略完形のものが3例、胴部以下を欠くもの3例、口縁部を欠くもの1例、胴部のみもの3例となる。底部を残す4例を見た限りでは底面に意図的な欠落（打ち欠き、穿孔などの再加工）は認められない。底部を欠く3例については、2区の第911号土坑例には作務的な底部の欠落があると報告されているが、実測図等では明瞭でない。

埋甕に使用されている土器の時期は、加曾利 E Ⅲ式期から堀之内 I 式期に及んでいる。

単独出土の屋外埋甕と判断されるのは以下の 28 か所、28 基である。

2 区第 375 号土坑例	(無文 時期不明)	正位	胴部のみ	
第 921 号土坑例	(縄文 時期不明)	斜位	口縁部欠	
第 983 号土坑例	(縄文 時期不明)	正位	口縁部欠	
第 992 号土坑例	(縄文 時期不明)	正位	口縁部欠	
第 1285 号土坑例	(称名寺 I 式期)	正位	完形	
3 区 L1d ₀ グリッド例	(堀之内 I 式期)	正位	口縁部欠	M 2
L2d ₁ グリッド例	(堀之内 I 式期)	正位	胴部以下欠	M 3
L2c ₁ グリッド例	(堀之内 I 式期)	斜位	胴部のみ	M 4
L2b ₁ グリッド例	(加曾利 E IV 式期)	逆位	胴部以下欠	M 5
M4e ₈ グリッド例	(加曾利 E IV 式期)	正位	半完形	M 8
L4a ₃ グリッド例	(沈線文 時期不明)	正位	胴部のみ	M 9
K3i ₂ グリッド例	(条線文 時期不明)	逆位	胴部以下欠	M 13
L2a ₄ グリッド例	(堀之内 I 式期)	横位	半完形	M 14
K3h ₂ グリッド例	(縄文 時期不明)	正位	口縁部欠	M 16
M2b ₈ グリッド例	(加曾利 E Ⅲ式期)	正位	口縁部欠	M 17
M3j ₃ グリッド例	(加曾利 E IV 式期)	正位	胴部のみ	M 18
5 区第 34 号土坑例	(無文 時期不明)	正位	底部のみ	M 2
第 56 号土坑例	(称名寺 I 式期)	正位	胴部のみ	M 3
第 65 号土坑例	(称名寺 I 式期)	正位	底部欠	M 4
第 72 号土坑例	(称名寺 II 式期)	正位	胴部以下欠	M 5
第 82 号土坑例	(称名寺 I 式期)	正位	略完形	M 7
第 84 号土坑例	(称名寺 II 式期)	正位	口縁部・底部欠	M 8
第 91 号土坑例	(称名寺 II 式期)	正位	口縁部欠	M 9
第 106 号土坑例	(称名寺 II 式期)	正位	胴部以下欠	M 11
第 117 号土坑例	(堀之内 I 式期)	斜位	底部欠	M 14
6 区 G4h ₇ グリッド例	(加曾利 B II 式)	正位	胴部欠	M 1
H4c ₀ グリッド例	(加曾利 E IV 式期)	正位	胴部のみ	M 5
H4i ₉ グリッド例	(加曾利 E Ⅲ式期)	正位	胴下半部のみ	M 6

当遺跡の埋甕 56 基のうちの丁度半数を占めるのが、上記の単独屋外埋甕である。これらの中には 6 区の M 5・6 のように住居跡の覆土中から検出された例もあるが、出土状況から判断して住居跡とは無関係に埋設されたものである。2 区および 5 区の土坑内埋設とされている例は、いずれも掘り方の長径が 100 cm 以下で小さく、埋設土器の設置のためにのみ掘られたものと考えられるので、前記の土坑内埋設の諸例とは区別した。これらの例からは埋設土器以外の出土遺物が無いことも上記の推定を裏づける。埋甕の位置は、掘り方のほぼ中央に位置するものが多いが、若干片寄るものもある。しかし、掘り方の長径が小さいので、特にこの点には注意を向けなかった。

埋設形態は正位のものゝ圧倒的に多く 22 例、斜位 3 例、横位 1 例、逆位 2 例で各々約 79%、11%、

4%, 7%を占める。正位の中には土圧等により傾いた例も含まれるが正位として扱っている。埋設土器の遺存状態をみると、完形ないし略完形の例が2例と少ない点が目につく。また、他のタイプの埋甕には認められなかった半完形の例が2例あるのは注目される。半完形とは口縁部から底部まで一部分が残存するもので、器形はうかがえるが土器としては不完全なものである。その他は胴部以下を欠損するもの6例、口縁部を欠損するもの8例、胴部のみのも6例などが主となり、底部のみ、胴下半部のみなどの例などがある。底部を残すものをみると、穿孔などはみられない。

埋甕に使用されている土器の時期は、加曾利EⅢ式期から堀之内I式期に及ぶが、加曾利EⅢ・Ⅳ式期の例は少なく称名寺〜堀之内I式期のものが多くなっている。また、時期の記入にあたっては遺存状況の悪い土器や型式的特徴の乏しい土器についても無理に判断したために型式名はほぼその時期ないしは併行期と理解していただきたい。また、時期不明としたものの大半は器形および施文の特徴ないし底部が比較的大きいことなどから後期初頭ないしは前葉のものと考えられる。屋内埋甕に対して屋外埋甕は後期初頭ないしは前葉の例が多いことが指摘できる。

屋外埋甕の用途については、小児埋葬、成人の洗骨葬などを含む甕棺としての理解が最も妥当と思われるが、底部のみの例などは該当しないであろう。

5 地点貝塚について

当遺跡3・4区からはあわせて28か所の小貝塚が検出されている。竪穴住居跡および土坑の覆土内に堆積していたものが大多数で、グリッド内の凹みに残されていた小貝塚は5区に2か所みられただけである。貝塚の規模は径1m以上の比較的大きなものから径5~10cmの一握り程度のもまでバラエティがあり、そのほとんどがハマグリ、シオフキ、サルボウを主体貝種とした鹹水産貝塚であり、稀にヤマトシジミを主とする主淡貝塚がみられる。貝塚を地区ごとに分けると1・2区に13か所、3区に25か所、4区に3か所、5区に22か所、6区に6か所、7区に1か所となり、合計70か所である。各区の比率は約19%、36%、4%、31%、9%、1%で、当遺跡の南西側にあたる3区・5区に多くみられる。貝塚の形成時期を出土土器や検出された遺構との関連で推定すると次のようになる。

阿玉台式期 6区第149号土坑

加曾利EⅢ式期 2区第216号住居跡, 第10・441・907・1011・1043・1123号土坑, 3区第3・69号住居跡, 第123・404号土坑, 4区第3・5・19号住居跡, 5区第102号土坑北西側, 6区第15・25号住居跡, 第194号土坑, 7区第358号土坑 (19か所)

加曾利EⅣ式期 2区第564・1024号土坑, 6区第49号住居跡, 第392号土坑 (4か所)

称名寺I式期 2区第986号土坑, 3区第73号土坑, 5区第42・44号住居跡, 第78・140号土坑 (6か所)

称名寺II式期 3区第166・219号土坑, 5区第40号住居跡, 第67・114号土坑 (5か所)

堀之内I式期 3区第34・86号住居跡, 第139・172・173・200・231・294・326・384・395・400・451号土坑, 5区第38・39・41・46号住居跡, 第77・80(83)・85・94・102南側, 116・127・138号土坑 (25か所)

貝塚の形成時期を推定できたのは以上の59か所で、残りの11か所については出土土器に各時期のものが混在していたり、出土土器片に型式的特徴が乏しかったりしたために中期後葉、後期前葉程度にしか推定できなかった。5区の凹みに残されていた2か所の貝塚はいずれも径25~45cmの小規模なもので、

ハマグリ、シオフキを主としており、称名寺Ⅰ～Ⅱ式期の小破片が伴っている。

加曾利EⅢ式期と堀之内Ⅰ式期に形成された貝塚が目立ち、中間期にあたる加曾利EⅣ・称名寺Ⅰ・Ⅱ式期にはやや貝塚の形成が不活発になる傾向が認められる。また、加曾利EⅢ式期の貝塚は1区を除く各区にみられるのに対して、堀之内Ⅰ式期には遺跡の西側の3・5区に集中する点が特徴的である。これは他の遺構の分布状況とも密接に関連しており、貝塚が当時の人々の生活区域内に形成されたことを示すものと考えられる。

次には貝塚の規模や出土遺物についてみてみよう。加曾利EⅢ式期の貝塚でやや規模が大きいのは2区の第216号住居跡、第1011号土坑、3区の3・69住居跡、4区の第5号住居跡、6区の第15・25号住居跡などであるが、ほとんど貝ばかりという出土状況である。3区の第3号住居跡で鳥骨片微量、同住居跡と4区の第5号住居跡からカニが出土しているにすぎない。4区の第5号住居跡から出土のカニはシオフキの合せ貝中から検出されたものできわめて珍しい出土例である。加曾利EⅣ式期では2区の第564号土坑内の貝塚が長径150cm、短径90cmの規模を有していて最も大きい。その他はごく小規模である。第564号土坑内貝塚はシオフキが圧倒的に多く、その他のサルボウ、ハマグリなどはごく少ない。貝類以外の自然遺物は出土していない。

称名寺Ⅰ式期の貝塚では2区の第986号土坑、5区の第42号住居跡、第140号土坑などが規模的に目立つ存在で、シオフキ、ハマグリなどを主としている。この時期から当遺跡では貝塚以外の自然遺物の出土が一般的となるようであり、5区の4か所の貝塚からは、ニシン目・サケ科・ウナギ科・アジ科・スズキ科・タイ科・ハゼ科・カレイ目に同定される魚骨が少量ずつ出土している。2区の貝塚からの出土は確認されていない。また、いずれからでもイノシシ・シカなどの獣骨の出土が認められていない点は不思議である。

称名寺Ⅱ式期の貝塚では5区の第40号住居跡が最も規模が大きく、他は土坑内の堆積でさほど大きくない。ハマグリ、シオフキ主体の貝層である。獣骨は確認されておらず、魚骨が主となっている。5区の3か所の貝塚からはニシン目・カタクチイワシ科・サケ科・ウナギ科・サバ科・アジ科・スズキ科・タイ科・ハゼ科の魚骨が前時期よりもやや多く出土している。この中ではウナギ科が3か所すべてから出土していて最も多く目立っている。ニシン目は第67号土坑だけから出土している。

堀之内Ⅰ式期の貝塚は当遺跡の中で最も数も多く、規模も大きいものとなっている。3・5区の各号住居跡に堆積している貝塚の規模はいずれも大きく、多量の遺物を出土している。その他では3区の第173・400号土坑の底面近くからはきわめて多量の魚骨が層をなして検出されている。アジ、スズキ、ウナギが主となっている。その他に3区の200・326・395号土坑からも小規模な魚骨層が検出されている。また、各住居跡の貝層中からも多量の魚骨と少量の獣骨（イノシシ、シカ、タヌキなど）、鳥骨（キジなど）も出土しているが分類、抽出、同定、分析の作業が不十分である。土坑内出土の魚骨層については別項に記載した。

最後になるが、貝類以外の自然遺物の出土量が増加する称名寺Ⅰ式期以降の貝塚からは、貝刃（ハマグリ）、貝輪（ベンケイガイ）などが目立って出土し始める点も注意される。堀之内Ⅰ式期になると貝刃、貝輪に加えて、貝製（ウノアシガイ・ミミガイ科）の垂飾品や刺突具などがみられるようになり、当遺跡における貝塚文化の隆盛期を迎えている。

注1 宮本長二郎「関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷」 『文化財論叢』 同朋社 1983年

- 2 村田文夫「柄鏡形住居址考」 『古代文化』 第27巻第11号 1975年
村田文夫「続・柄鏡形住居址考」 『考古学ジャーナル』第170号 1979年
- 3 竜ヶ崎市廻り地 A 遺跡, 仲根台 B 遺跡に該期の類例がみられる。
- 4 桐生直彦「東京都における縄文時代の袋状土坑」 『東京考古』第3号 1985年
- 5 川井正一『赤松遺跡』 茨城県教育財団 1980年
- 6 加藤雅美『下広岡遺跡』 茨城県教育財団 1981年
- 7 川崎純徳他『石岡市東大橋原遺跡一第1～3次調査報告一』 石岡市教育委員会 1978～80年
- 8 川崎純徳他『石岡市大作台遺跡発掘調査報告』 石岡市教育委員会 1981年
- 9 瀬谷昌良他『赤塚遺跡発掘調査報告書』 牛久町赤塚遺跡発掘調査会 1984年
- 10 本田勉他『塩釜遺跡発掘調査概報』 鹿島町教育委員会 1979年
- 11 井上義安『高天原』 水戸市高天原古墳発掘調査会 1985年
- 12 磯前順一他『塙東遺跡』 茨城高等学校史学部 1978年
- 13 鈴木裕芳他『諏訪遺跡発掘調査報告書』 日立市教育委員会 1980年
- 14 岡崎文喜他『高根本戸』 船橋市教育委員会 1971年
- 15 佐藤明生「炉穴」研究ノート」 『貝塚』33 物質文化研究会 1984年
- 16 安孫子昭二「炉穴はこのように使われた」 『東京の遺跡』No.6 1985年
- 17 渡辺誠「縄文時代の埋甕風習」 『考古学ジャーナル』第40号 1970年
- 18 木下忠「縄文と弥生 一二つの種族文化の重なり」 『民族学研究』第36巻第1号 1972年

第2節 遺物について

本節で取り扱う遺物は縄文時代の所産と考えられるもので、土器を主に土製品・石器・石製品・骨角貝製品に及ぶ広範囲な出土品である。まず、最初に当遺跡全体を通した縄文式土器のあり方を若干記載し、次に当遺跡において主要な位置を占める早期後半の野島式土器、中期の加曾利EⅢ・IV式、後期の称名寺式・堀之内I式土器の様相をまとめ、最後に蓋形土器についてふれる。また、当遺跡3区で今回初めて出土した人体貼付文土器や切断壺形土器についても少し検討を加えたい。石器やその他の製品については当遺跡の様相をまとめるにとどめた。

1 縄文式土器について

当遺跡出土の縄文式土器は、草創期から晩期に至るが、各土器型式が揃っているわけではなく、早期の野島式、中期の加曾利EⅢ・IV式、後期の称名寺式・堀之内I式土器が充実しているほかは、少量である。その中では阿玉台式期、加曾利B式期が若干の遺構を伴っている。

当遺跡から検出されている土器型式は、稲荷台式、田戸下層式、野島式、黒浜式、浮島式、興津式、十三菩提式、阿玉台式、勝坂式、加曾利EⅢ・IV式、称名寺I・II式、三十稲場式、堀之内I・II式、加曾利BI・II・III式、安行I・II・III a式、前浦式土器である。⁽¹⁾

a 野島式土器について

当遺跡の野島式土器については、当遺跡の1・2区および6・7区の各報告書においてまとめられてい

るので、簡単に記したい。野島式土器の出土量は、多数の炉穴が検出された1・2区に最も多く、隣接する3区や6区にも目立つが、他の区では少ない。器形をうかがえるまでに復元しえた資料は少ないが、2区の第4・17・58号炉穴や6区の第3号炉穴出土例がある。これらを見ると底部からほぼ直線的に外傾するものと底部からやや内湾しながら立ちあがり胴上部乃至は口縁直下にくびれや屈曲を有するものに2分される。後者には小さな平底を呈する例もあり、前者から後者への変化が推定される。野島式土器に後続する鶴ヶ島台式土器が屈曲の著しい器形をなすことを考慮すれば、このことは首肯されよう。また、当遺跡には明確な鶴ヶ島台式土器は出土しておらず、野島式土器の器種構成や文様構造を分析する上ではきわめて恵まれた好条件を提供している。しかし、残念なことに炉穴に伴出しなかった多数の資料は未報告のままであり、これ以上の検討はできない。

b 加曾利EⅢ・EⅣ式土器について

当遺跡で最も多数の住居跡や土坑が構築・使用された時期にあたる加曾利EⅢ・Ⅳ式期の土器は誠に歴大な量にのぼる。土器の基本的な分類は、6・7区の報告書にておこなった分類に従い、若干の補足を加えながら、検討を進めていきたい。

まず、深鉢形土器を中心に次のように分類した。

第Ⅰ類 キャリパー形を呈する深鉢形土器で、口縁部文様帯と胴部文様帯が明瞭に区別されるもの。平縁と波状縁の両者がみられる。

a種 口縁部文様帯を隆線と沈線によって、渦巻文と楕円文を主に区画し、胴部文様帯には沈線による直線的な磨消帯を垂下させるもの。

b種 口縁部文様帯を太めの沈線によって、円文と楕円文を主に区画し、胴部文様帯にはa種と同様の磨消帯を垂下させるもの。

第Ⅱ類 胴部が緩くくびれ、口縁部に向って内湾しながら開く器形を呈し、底部が小さな平底をなすもので、口縁部から胴部にかけて両側にナゾリを加えた隆線による大柄な渦巻文を主とする曲線的な文様が描かれるもので、文様間には縄文が充填される。平縁と波状縁の両者がみられる。

a種 両側にナゾリを加えた隆線による文様が器面全体に描かれているもの。

b種 両側にナゾリを加えた隆線による文様が器面全体に描かれているが、くびれ部に無文帯を有しているもの。

第Ⅲ類 胴部がくびれ、口縁部に向って内湾しながら開く器形を呈し、沈線によるU字状、V字状、逆U字状、逆V字状、およびそれらを連結した文様が施され、区画内を磨消しているもの。

a種 口縁部文様帯が沈線によって簡単に表現されているもので、刺突文を付加するものや、刺突文が沈線文の代りに付されているものもある。胴部文様帯が上下に分れていないもの。

b種 口縁部文様帯が沈線によって簡単に表現されているもので、刺突文を付加するものや、刺突文が沈線文の代りに付されているものもある。胴部文様帯が上下に分れているもの。

c種 口縁部文様帯が省略され、沈線による文様が器面に展開されているもの。胴部文様帯が上下に分れていないもの。

第Ⅳ類 胴部がくびれ、口縁部に向って内湾しながら開く器形を呈し、微隆線によるH字状、U字状、逆U字状およびそれらを連結した文様が施され、区画内を磨消しているもの。

a種 口縁部文様帯が微隆線で区画され、胴部は曲線的な文様が微隆線で展開されているもの。

- b種 口縁部文様帯が微隆線で区画され、胴部は曲線的な文様が細めの沈線で展開されているもの。
- 第Ⅴ類 口縁部無文帯を有し、以下に縄文ないしは条線文が器面全体に施されているもの。
- a種 口縁部無文帯を1条の沈線（凹線）で、区画し、以下に縄文が施されているもの。
- b種 口縁部無文帯を1条の隆線で区画し、以下に縄文が施されているもの。
- c種 口縁部無文帯を沈線および隆線で区画せず、以下に縄文が施されているもの。
- d種 口縁部無文帯を1条の刺突文列で区画し、以下に縄文が施されているもの。
- e種 口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文が施されているもの。
- f種 口縁部無文帯を1条の沈線（凹線）で区画し、以下に条線文が施されているもの。
- g種 口縁部無文帯を1条の隆線で区画し、以下に条線文が施されているもの。
- h種 口縁部無文帯を沈線および隆線で区画せず、以下に条線文が施されているもの。
- i種 縄文と条線文が同一個体中に併用されているもの。この種は第Ⅵ類にも共通する。
- 第Ⅵ類 口縁直下から縄文ないし条線文が器面全体に施されているもの。
- a種 口縁直下から縄文が器面全体に施されているもの。
- b種 口縁直下から条線文が器面全体に施されているもの。
- 第Ⅶ類 隆線ないし微隆線だけによる曲線文が施されているもの。壺形土器・蓋形土器・注口付土器・浅鉢形土器など特殊な器形を呈するものが多い。
- 第Ⅷ類 無文の土器で、有孔罏付土器・器台形土器など特殊な器形を呈するものを含む。
- 第Ⅸ類 その他上記に含まれないものを一括する。

上記の分類に従って以下記載を進める。

第Ⅰ類は加曾利E式土器の主流をなす器形で、最も普遍的なものである。a種とb種は口縁部文様帯の区画が隆線とこれに沿う沈線によるか沈線だけによるかの差異であり、両種の同一遺構内の共存例もあり、時間差とばかりは断定はしえない。平縁と波状縁の両者があると記したが、後者は4単位の突起と表現した方が妥当と考えられる。口縁部文様帯に渦巻文が施される例はa種に多く、b種には少ない。しかし、渦巻文はしっかりと巻き込まれた6区の第74号住居跡例（第195図2）、7区の第32号住居跡例（第491図1）のようなものは少なく、痕跡程度のもが目立ち、簡単な円文化への傾向が認められる。

a種を主とする遺構は比較的多く認められる。2区の第141号住居跡、第39・278号土坑、5区の第3号住居跡、6区の第74号住居跡、7区の第11・19・28・31・32・33号住居跡、第409号土坑などが代表的であり、当遺跡の北部の7区に比較的古い段階の加曾利EⅢ式土器が多いと言えそうである。

一方、b種を主に出土する遺構はみられず、a種に共存する状態で検出されている。b種の代表例としては、2区の第128号住居跡例（第246図5）、第1007号土坑例（第255図2）、7区の第409号土坑例（第553図54）、7区の第25号住居跡（第464図1）などがあげられるにすぎず、第409号土坑ではa種やⅡ類の土器と共存している。

Ⅰ類に特徴的な胴部の直線的磨消帯については、加曾利E式新段階のメルクマルとされているものであるが、初現期の加曾利EⅡ式段階では該期の土器の一部に磨消手法が採用されるだけで、EⅢ式期になると組成の多くの土器に磨消手法が入ってくることになる。この点にEⅡ式とEⅢ式の1つの差異を見出したい。これにより当遺跡の加曾利E式土器の古い段階の土器を加曾利EⅢ式土器とした次第である。

該期の磨消帯は口縁部文様帯から直線的に垂下するのみで上下端とも開いているものが多いが、中には上端が連結した例が、7区の第31・32号住居跡例（第488図1、第491図1）に認められる。これらの

土器は伴出土器からみると、同じ7区の第11・19・28・33号住居跡などよりはやや新しい様相を示すように考えられる。磨消帯に1本の沈線を付加する例もあるが、これはあまり時間差をあらわす表徴とは考えられない。

Ⅱ類土器は、出土状況を見るとⅠ類またはⅢ類土器と遺構内で共存する例が多く認められ、Ⅳ類の微隆線を主要な施文手法とする土器群と伴う例はほとんどないといえる。Ⅱ類はa種が大半を占め、b種はごく少なく稀な存在で、7区の第27号住居跡例(第468図1)が好例といえるぐらいである。a種では、4区の第19号住居跡例(第114図1)、7区の第316号土坑例(第632図1)が代表的で、器高60cm以上の大形土器である。このⅡ類土器には大形土器が小形土器に比較して多い傾向がうかがえる。Ⅱ類の基本的モチーフは、渦巻文と縦長の区画文の組みあわせによるものであるが、他に縦長の区画文を若干変形させたようなモチーフを主とするものが2区の第28号住居跡例(第241図5)、40号住居跡(第242図4)、6区の第48号住居跡(第117図4)などにみられる。この両者は遺構内で共存することがあり、ほぼ同段階の所産と考えられる。ナゾリが加えられた隆線について観察してみると、主に1本の隆線でモチーフを描くものの中には隆線の断面が丸味を帯び、太く高めでしっかりしているものと断面が三角形に尖り気味で、やや細く低めのものの2者が認められる。また、2本組の隆線でモチーフを描くものには断面が丸味を帯びるものはほとんどなく、隆線の断面が尖り気味で低く扁平化する傾向がみられる。基本的には断面が丸味を帯びるものから尖り気味のものへ移行し、更に断面三角形を呈する微隆線文の土器へと変化することが予想される。しかし、一部のものは時間的に併行することが考えられる。

第Ⅰ類と第Ⅱ類が時間的に密接な関係を有していることは6・7区の報告書の840頁でとりあげた事例から証明され、更に第Ⅱ類と第Ⅲ類が時間的に併行することは当遺跡の3個体の事例から十分に考えられる。2区の第26号住居跡例(第241図3)、6区の第48号住居跡例(第116図1)、7区の第409号土坑例(第553図55)が実例で、いずれも上半部に渦巻文と縦長の区画文をナゾリを加えた隆線で描き、下半部に沈線で逆U字状のモチーフを施し、モチーフ内に縄文を充填している。

なお、6・7区の報告書において第Ⅱ類b種のくびれ部に明確な無文帯を有する例(第468図1)をa種より新しい傾向を示すと記したが、同土器は隆線が太くしっかりしており、断面も丸味を帯びていて全体としてより古いものと考えられるに至ったので前説を撤回する。くびれ部において上半部と下半部の文様帯が分離し、それぞれ独立する点が第Ⅱ類の特徴の1つといえるかもしれない。しかも上下で文様モチーフが異なる場合と相似たモチーフを描く場合の両者があり、前者では上半部が渦巻文、下半部が縦長区画文の例が多い。

第Ⅲ類は、口縁部文様帯が退化・簡略化されるもので、これまで胴部文様帯に施されていたモチーフが上にせり上ってくるものである。第Ⅲ類は第Ⅰ類からの移行形態と考えられるが、b種の文様帯が上下に分れるものは、器形のくびれの著しいものに多くみられる。これは第Ⅱ類の器形と文様帯の分離の影響と考えられる。a種は、Ⅰ類b種の口縁部文様帯が簡略化され、1条の沈線ないしは刺突文により区画されたもので、胴部の磨消帯の上端が連結し、逆U字状を呈するものが多い。a種の例としては、3区の第58号住居跡例(第58図1)、4区の第5号住居跡例(第101図1)、5区の第3号住居跡の2例(第12図2、第13図6)、第31号住居跡(第37図2)、6区の第32号住居跡例(第72図1)、第48号住居跡例(第118図8)、7区の第407号土坑例(第549図1)などがあげられる。このうち5区の第3・31号住居跡は第Ⅲ類a種の他に第Ⅰ類a・b種、第Ⅱ類、第Ⅲ類b・c種を伴出しており、これらの各類がほぼ同一時期の所産である可能性を示している。これらは加曾利EⅢ式期の一括資料として良好なものと考え

えられる。

4区第5号住居跡例(第101図1)と6区第32号住居跡例(第72図1)は胴部に明瞭なH字文を表現しており、他の諸例とは異なっている。また、縦長の楕円文と逆U字文が連結したような一種独特な文様を有する土器を出土した6区第48号住居跡は第Ⅱ類土器が目立ち、第Ⅲ類b種などを伴い、加曽利EⅢ式の新しい段階を示す土器群と考えられる。

b種は、口縁部文様帯が1条の沈線によって代替され、胴部に細めの沈線による曲線文が上下に分れて施文されるものである。b種は、第Ⅲ類の大半を占め比較的例が多い。完形に近い代表例としては、5区第63号土坑例(第135図11)、6区第42号住居跡例(第92図3)があり、他にもほぼ器形をうかがえる例が数例にとどまらない。2区第1号住居跡例(第240図1)、第43号住居跡例(第243図2)、第75号住居跡例(第244図8)、第113号住居跡例(第245図6)、第1205号土坑例(第257図2)、3区第20号住居跡例(第26図1)、第106号住居跡例(第90図1)、第299号土坑例(第167図2)、6区第15号住居跡例(第31図1・2)、第42号住居跡例(第92図2)などが注意される資料である。これらの中には先年柳澤清一氏によって加曽利E3-4中間式として取り上げられた資料も含まれて⁽²⁾おり、全体としては加曽利EⅢ式期の新しい部分からEⅣ式期の古い部分に相当しよう。加曽利E3-4中間式として指摘された土器は6区第15号住居跡出土例で、柳澤論文では第5号住居跡と誤記されている。このような指摘を受けて調査を進めていた3区第106号住居跡からは炉内埋設土器として「加曽利E3-4中間式」が出土し、明確に該期の遺構の存在が明らかになった。第90図1に示したものがそれで、柳澤氏の言う加曽利E3-4中間式の特徴に合致するものである。すなわち、加曽利E3-4中間式のメルクマルとしてあげられた3つの特徴のうちの抱球文・垂球文等の文様系列の発展に対応するもので、抱球状のモチーフが表現されている。しかし、柳澤氏のあげられた抱球文系の加曽利E3-4中間式土器はいずれも口縁部から胴部上半部にかけての部分しか残存しておらず、全体の器形や文様構成が今一つ明確となっていない点が残念である。抱球文状のモチーフを有する土器としては2区第1205号土坑例があり、この段階の土器の存在が推測される。柳澤氏が加曽利E3-4中間式並行土器として取り上げられた埼玉県原遺跡出土例に類似する例が2区第75・113号住居跡例にあり、これからこの「加曽利E3-4中間式」の実態が次第に明らかになることが期待される。

c種は、口縁部文様帯が全く省略されるもので、口縁直下から直線的な磨消帯が施されている。類例はきわめて少なく、2区第37号住居跡出土の第279図20、第250号土坑出土の第336図12などが目につく程度である。施文の特徴からみれば、ほぼ第Ⅲ類a種に併行する時間帯に位置づけられるであろう。

第Ⅳ類は、微隆線による施文を主とするもので、a種は、微隆線による曲線的区画内に縄文が充填されている。b種は、微隆線と細い沈線による施文が組みあうもので、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に細い沈線による曲線的モチーフを描き、区画の内側または外側を磨り消し、地文としての縄文が施されるものである。

第Ⅳ類ではa種が多く、b種は少ない。a種は、幅の狭い口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、器面全体に大柄な曲線的モチーフを構成するものが一般的であるが、2区第93号住居跡例(第245図1)、6区第392号土坑例(第290図1)のように胴部文様が上下に分れる例もある。これらは第Ⅱ類b種の系統を引き、第Ⅲ類b種とも関連する土器群と把握される。特に、2区第93号住居跡例(第245図1)には、C字状、逆C字状の所謂アルファベット文が観察され、6区第392号土坑例(第290図1)

には抱球文状のモチーフが認められ、加曾利EIV式期でも古い段階に属するものと考えられる。また、1区の第6・7号住居跡例（第240図3・4）は、H字文を有する例で、上記2例とともに古い段階と推定される。

a種の代表例としては、2区の第15号住居跡例（第240図11）、第110号住居跡例（第245図5）、第121号住居跡例（第246図1）、第133号住居跡例（第247図3）、第227号住居跡例（第250図3）、3区の第16号住居跡例（第19図1）、第5号埋甕遺構出土例（第197図7）、6区の第49号住居跡出土の3例（第128図1～3）などがあり、胴部文様帯の上端が口縁部の微隆線に接する例と離れる例があり、前者の方が目立っている。離れるタイプの2区の第121号住居跡例（第246図1）は、やや古い様相を示すものかもしれない。

また、第IV類に属する土器が、称名寺式土器と遺構内で伴出する例が当遺跡ではかなり多数認められており、これらの共存関係による細分も考慮される。しかし、これらの事例には完形ないしは器形をうかがえる資料が少なく、相互の具体的な変化を追求しえないのは残念である。今後の課題としたい。

b種は、口縁部無文帯を区画する微隆線の他は文様が細めの沈線で描かれるもので、a種に比較すると量は少ないが普遍的に存在する。しかし、図示できる例は3区の第154号土坑例（第156図1）、6区の第49号住居跡例（第129図4）、第198号土坑例（第251図1）などにあるのみで、小破片の例が目立つ。b種を出土した遺構の出土土器を見ると称名寺式土器を伴出しているものはほとんどなく、加曾利EIV式期でも古い段階の所産と考えられる。

以上、第I類から第IV類土器までが、所謂精製土器に相当する有文の装飾の顕著な土器群であり、型式的特徴が比較的明瞭なものである。

次に第V類・第VI類に移るが、これらは所謂粗製土器に相当する装飾の簡素な土器群で、型式的特徴が比較的乏しいものである。第V類と第VI類は口縁部無文帯の有無をもって分けたが、無文帯には広狭があり、区別の困難な資料もある。

第V類a種は、最も一般的なもので類例が多く出土している。区画沈線は浅く、凹線状を呈するものから深く鋭い明瞭なものまで含まれるが、一括している。前者の断面形は幅広いU字状、後者は幅狭いV字状を呈するが、一般的には碗状の断面形を呈している。器形は口縁部が内湾する深鉢形が普通で、少量口縁部が外反する鉢形土器が存在する。後者は前者よりも口縁部無文帯の幅が広い。a種は共伴遺物から判断してほとんどが加曾利EIII式期のものと考えられるが、加曾利EIV式期にまで若干残る可能性がある。b・g種の口縁部無文帯を隆線で区画する例はきわめて少なく、稀である。隆線と微隆線の区別は不明瞭であり、貼り付けによるものとナゾリにより形成されるものがある。b種と考えたのは6区の第15号住居跡例（第31図3）、7区の第34号住居跡例（第497図3）などであるが、e種として一括すべきものかもしれない。g種とした6区の第49号住居跡例（第132図56）は小破片にすぎない。

c・h種は、口縁部無文帯を区画しない例で、a種などよりは時間的に新しい傾向が認められ、加曾利EIII式期の新しい段階からEIV式期にかけて伴出するようである。d種もきわめて少数であり、6区の第15号住居跡例（第31図5）、7区の第30号住居跡例（第480図2）などがあげられるにすぎない。7区の例は、区画沈線の上に刺突を重ねたものでa種に近い。刺突列はe種の微隆線で区画されるタイプと併用されることもあり、加曾利EIII式期からEIV式期にかけて量は少ないが使用される装飾手法である。

e種は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画するもので、前記のように刺突列を伴うものや舌状突起、橋状把手、つまみあげたような小突起と組み合わせられるものもあり、e種のバラエティを示すと同時に時

間差をも表わしているように思われる。刺突文や刻目文の付加およびつまみあげたような小突起は柳澤氏により加曾利E3 - 4中間式のメルクマールとして取り上げられているように、e種の中でも比較的古い要素と考えられる。これに対して舌状突起を有する2区の第454号土坑例(第252図2)、6区の第388号土坑例(第287図1)などは新しい様相をもつものと思われる。

f・g・h種は条線文を施すもので、3者の中ではf種が最も多く、h種がこれにつづき、g種はきわめて少ない。f種とh種の新旧関係については、共伴遺物およびa種とc種の間関係を考慮すれば、f種を古く、h種を新しいと考えることができよう。しかし、両者は一部時間的に併行関係を有する。f種の例としては2区の第44号住居跡例(第243図3)、6区の第42号住居跡例(第95図12)、7区の第10号住居跡例(第428図1)などがある。7区の第30号住居跡例(第481図9)は口縁部に浅い沈線による楕円文が施され、以下縦位の条線文が施文されている例で、やや異質ではあるがf種の範疇に加えられる。楕円文が加曾利EⅢ式期の所産であることを明示している。また、2区の例は通常の条線文とは異なるが、ここに含めた。

h種で器形の判明するものは少なく、2区の第22号土坑例(第250図6)、6区の第42号住居跡例(第95図13)がある程度である。この土器はf種の第95図12と共存しており、両種が時間的に併行することが証明される。

i種は、a～h種とは分類規準が異なるが、加曾利EⅢ・Ⅳ式期にはかなり普遍的に存在するタイプと考えられるので、1種を設けておく。代表例として2区の第40号住居跡例(第242図1)、6区の第51号住居跡例(第137図1)があり、他にも破片として多くの住居跡などから出土している。口縁部無文帯を有する例と有しない例がある。

第Ⅵ類は、口縁部無文帯を持たず口縁直下から縄文(a種)、条線文(b種)が施文されるもので、加曾利EⅢ・Ⅳ式期の例では、口縁部が内湾する例がほとんどを占めている。これに対して後期の称名寺式期以降になると口縁部が外反するものや直線的に外反するタイプが一般的となってくる。a種の例としては、2区の第40号住居跡例(第242図2)、6区の第45号住居跡例(第105図3)、第420号土坑例(第300図1)、7区の第30号住居跡例(第481図8)、第3号埋甕遺構出土例(第628図1)などがあり、b種の例には2区の第1172号土坑例(第257図1)、6区の第48号住居跡例(第120図16)などがあげられる。

第Ⅶ類は、隆線ないしは微隆線だけで施文がおこなわれるもので、施文の特徴や器形の差異、それに共伴土器の検討などから時間的細分が可能である。器種としては壺形土器や注口付土器に分類されるものが主となると思われるが、2区の第1018号土坑例(第255図4)は浅鉢形を呈する特異なもので、加曾利EⅣ式期に属する。

縄文中期後葉から終末期にかけての注口付土器については、先年、丹野雅人氏により集成と分析がおこなわれた⁽³⁾。同論文にとりあげられた茨城県内の資料は、注口土器として4遺跡5例、有孔罌付土器1遺跡1例、有溝小把手付土器3遺跡5例である。当遺跡の注口付土器は、2区の第99号住居跡例(第245図2)と3区の第69号住居跡例(第60図1)の2例が第Ⅶ類に属するもので、相互の器形・文様および共伴遺物からみると3区例が古く、2区例が新しく位置づけられよう。前者は加曾利EⅢ式期の新しい段階、後者は加曾利EⅣ式期でも新しい段階と考えられ、両者の間に若干の空白期が想定される。他に6区の第194号土坑例(第247図4)が、胴下半部のみが残存であるが、同タイプと思われる。渦巻文が微隆線で描かれており、共伴遺物からみると3区の例に近いがやや古い時期の所産と推測される。

深鉢形を呈する注口付土器が1点、6区の第57号住居跡(第157図1)から出土しており、両者の関

連にも注意を払いたい。

壺形を呈する第Ⅶ類土器は、当遺跡の2区からほぼ器形をうかがえる資料が4点出土しており、それぞれが特色を有していて、時間の変遷を示すものと考えられる。この他にも破片としては多数の資料がある。第45号住居跡例（第243図8）、第133号住居跡例（第247図4）、第39号土坑例（第251図4）、第1123号土坑例（第256図9）の4例が代表例で、器形・文様手法および共伴遺物から判断すると第39号土坑例—第1123号土坑例—第133号住居跡例—第45号住居跡例の順に編年されよう。前2者は、加曾利EⅢ式期に属し、それぞれ古い段階、新しい段階を示す。後2者は加曾利EⅣ式期から称名寺式期に属するもので、第133号住居跡例は加曾利EⅣ式期、第45号住居跡例は称名寺Ⅰ式期に降るものと思われる。

有溝小把手付土器として丹野氏により分類された土器は、当遺跡でも出土している。6区の第42号住居跡例（第95図14・15）などが器形復元されたもので、他は破片である。

第Ⅷ類土器には、有孔鏝付土器や器台形土器などが含まれるが、この両者については当遺跡の6・7区の報告書において若干記したので、その後刊行された5区の報告書の成果と今回報告の3・4区の事例について付け加えるだけに止める。有孔鏝付土器は、5区で2点図示（第205図7・8）されている。7は胴上半部に抱球状のモチーフが細い沈線で描かれており、2点とも鏝部に孔を穿っている。加曾利EⅢ式期後半の資料と判断される。器台形土器は3区に小片がみられただけである。

第Ⅷ類には無文の特殊な土器やミニチュア土器と考えられる土器も含まれる。類例は少ないが、2区の第121号住居跡例（第246図2）、第981号土坑例（第254図3）、6区の第47号住居跡例（第112図3）、第48号住居跡例（第121図29）、第51号住居跡例（第137図3）、第52号住居跡例（第141図19）、7区の第14号住居跡例（第437図1）などがあげられる。このうち6区の第47号住居跡例は、丸底の浅鉢状を呈する特殊な器形を有し、小把手が2か所付けられている。その他は手づくねによるミニチュア土器で、7区の第14号住居跡例はその形状からみて有孔鏝付土器を模したものと考えられ、注目される。これらは、共伴遺物からみて加曾利EⅢ～Ⅳ式期の所産と思われる。

第Ⅸ類には、各種の土器が含まれるが、6・7区のまとめで取り上げた4例の土器の類例は以後の調査では検出されていない。第Ⅰ類から第Ⅷ類に包括できない資料は、上記の4例以外にも出土している。4区の第7号住居跡から検出された第110図1は、口縁部から胴上半部しか残存していないが、縄文を一切使用せずに隆帯と沈線の組みあわせによる施文である点に特徴があり、上面観が楕円形を呈している。文様の特色からみれば、所謂曾利系の土器に系譜を引くものではないかと考えられるが、当遺跡では全く類例のない土器である。他の共伴遺物から推定すれば、加曾利EⅢ式期に属するものと思われる。曾利系土器の胴部に施文されている隆帯と弧状の沈線との関連が考えられる。

7区の第409号土坑例（第553図53）の胴部にみられる懸垂する隆帯上の突起部について、その後類例を探索したところ、宮城南南境貝塚出土の大木9式と深鉢形土器の胴部に同様の突起が付されているのを知った。『縄文土器大成② 中期』（講談社）の27頁の58の土器である。6・7区の報告では在地性の強い土器と考えていたが、今後は北に目をむけて更に検討を進めたい。大木9式と加曾利EⅢ式土器の併行関係を考える上で有効な例証の1つとなるかもしれない。

最後に、第Ⅰ～Ⅸ類土器について加曾利EⅢ・Ⅳ式土器との関連を述べると次のようになる。

第Ⅰ類 a・b種、第Ⅱ類 a・b種、第Ⅲ類 a・b・c種のほとんどは、加曾利EⅢ式土器に認定される。第Ⅰ類は、第Ⅲ類に比して相対的に古いものと考えられる。第Ⅰ類 a・b種における隆線と沈線の差異も、大局的には a種から b種への変化が予測される。また、第Ⅲ類 a・b種の差異も、器形の変化とからみ合

わせて新旧差を示すものと思われる。しかし、これらはあくまで相対的な変化の予測にすぎず、住居跡や土坑などにおける出土状態を見ると両類や各種が共存するのが一般的あり方で、土器の分類と出土状態（廃棄の同時性と認識している）が必ずしも一致している訳ではない。しかし、だからといって土器の形態（器形・装飾）の分類が無意味かという決してそうではない。土器の研究は、分類と出土状態の吟味の繰り返しによって成り立つといっても過言ではない程、その両者はきわめて密接な関係にあり、そのどちらか一方にだけ片寄せた議論では稔りは少ないものと思われる。発掘および調査報告書の役割りの1つは、出土状況の客観的な記述と提供にあり、分類もまた欠かせない。

第Ⅲ類b種の分類規準はかなり大まかであったため、各種の土器が混在する結果となっている。例えば、2区の第43・75・113号住居跡出土例などは、加曾利EⅣ式期の範疇に属するものと考えられる。

加曾利EⅢ・Ⅳ式期の土器群のまとまりについては、深鉢形土器を主に分類をおこなったために鉢形土器（両耳壺を含む）については不十分なものとなっている。当遺跡でも、良好な両耳壺の例が検出されている。2区の第40号住居跡例（第241図6）、第216号住居跡例（第250図1）、第566号土坑例（第252図6）、3区の第286号土坑例（第164図1）、6区の第48号住居跡例（第117図5）などは比較的良く器形の残る例で、加曾利EⅣ式期の例は破片が多い。

第Ⅳ類は、加曾利EⅣ式土器と認定されるが、この中には後続する称名寺Ⅰ式期に伴う加曾利EⅣ式系統の土器ないしは続EⅣ式土器などと呼称されるものも含まれている。例えば、3区の第47号住居跡の南東壁際から検出された第7号埋甕遺構出土土器（第198図9）や5区の第49号土坑出土例（第134図10）などが該当すると考えられる。この両系統の土器が共存する段階については今後とも一層の分析と検討を進める必要がある。所謂加曾利EⅣ式系統の土器は、群馬県荒砥二之堰遺跡第27・33号住居跡の例⁽⁴⁾などをみれば、称名寺Ⅱ式期にまで残存する可能性が示唆される。称名寺式土器の研究はこのタイプの土器群の検討を抜きにしてはおこなえない状況に立ち至っている。

第Ⅴ類と第Ⅵ類は口縁部無文帯の有無により分類したもので、第Ⅰ～Ⅳ類に比較すると装飾の少ない一群である。しかし、量的にはこの一群が多くを占め、日常生活用器としては第Ⅰ～Ⅳ類よりも比重が高かったと思われる。

第Ⅴ類a種とe種が最も多く、それぞれ加曾利EⅢ式、EⅣ式期を代表するタイプと把握されるが、一部は時間的に併行する資料も認められる。c種の口縁部無文帯に区画線を有さないタイプは、加曾利EⅢ式期の新しい段階以降に多く見られるようである。f・h種の条線文を施すタイプも、1条の沈線で区画するf種の方が古く、区画を有さないh種の方が新しい傾向が感じられるが確実ではない。d種の刺突列で区画する例は少ないが、加曾利EⅢ式期の新しい段階以降と推測される。b・g種はきわめて少なく位置づけは不明である。

第Ⅳ類はa・b種とも加曾利EⅢ・Ⅳ式を個別の資料で分別することは難しい。

第Ⅶ～Ⅸ類については上記したとおりである。

c 称名寺式土器について

当遺跡出土の称名寺式土器は、5区を中心として一部2・3・6・7区にも及んでいるが、器形復元できる例は、5区が最も多く、2区・3区・6区と続いている。称名寺式土器の古い段階は、所謂加曾利EⅣ式系統の微隆線を主な文様要素とする土器を伴出することが一般的な在り方であることが、最近の調査例から明らかになっている。この点は当遺跡でも確認され、両者が共存する遺構が多数検出されている。

称名寺式土器は、神奈川県横浜市称名寺貝塚⁽⁵⁾出土土器を標式資料として吉田格氏によって型式設定された土器型式で、その後多くの研究者が研究を重ねた結果⁽⁶⁾、その編年の位置づけおよび基本的な型式変遷は明らかになり、確立したと言っても良いと思われる。

当遺跡では、称名寺Ⅰ式の古い段階から称名寺Ⅱ式に属する刺突文を多用する土器群まで各段階の土器が出土しているが、器形をうかがえるものは中間の部分の資料が多く、古い段階や新しい段階の資料は少ない。

称名寺式土器の古い段階の資料としてあげられるのは、2区の第157号住居跡例（第248図3）、第526号土坑例（第252図4）、第1038号土坑例（第256図3）、3区の第47号住居跡例（第47図1）、5区の第3号埋甕遺構出土例（第146図4）、6区の第416号土坑例（第195図3）などである。文様はJ字文を主とし、単独や縦位に連結して施文される例が多いが、3区の例は紡錘文を主に4単位で構成される見事なパネル装飾を有しており、文様帯の下端は垂下文を有する帯縄文で区画されている。小形の完形品で、逸品である。文様帯を区画する特徴は他の土器にも共通する。これらは第1038号土坑例、416号土坑例などのように加曽利EⅣ式系統の土器を共伴している。

これに続く段階と考えられる一群が、2区の第199号住居跡例（第249図1・2）、第815号土坑例（第253図3）、第817号土坑例（第253図4）などと考えられるが、遺存状態が不良で、口縁部ないしは胴部のみで器形や文様構成の全容が不明な点は残念である。J字文やスベード文、鍵文などを組みあわせて施文している。文様帯の下端は区画されると思われる。

称名寺Ⅰ式期で最も良好な資料が揃っているのが、3番目の段階で、5区の埋甕遺構に埋設されていた土器が主である。2区の第188号住居跡例（第248図4）、3区の第80号住居跡例（第69図1）、5区の第1号埋甕遺構出土例（第145図1・2）、第13号埋甕遺構出土例（第149図14）、第77号土坑例（第135図12）、第97号土坑例（第136図18）が代表的である。口縁部が平縁の例が多いが、小突起や把手を付す例もある。文様は、J字状文、X字状文、渦巻文が縦位に連結するように組みあわせており、文様帯の下限は区画されず開放されている。

その他称名寺Ⅰ式期に属すると判断される土器に2区の第68号住居跡例（第244図4）、第998号土坑例（第254図8）、5区の第7号埋甕遺構出土例（第147図8）、第12号埋甕遺構出土例（第148図12）があるが、文様が特異であったり、型式的特徴が乏しいために位置づけはむずかしい。第68号住居跡例は、無文で2か所の小突起を有する深鉢形土器で、器形などから該期のものと判断した。当住居跡は、加曽利EⅢ式期の第142号住居跡と重複しており、遺物の混在が認められる。第998号土坑例は、口縁部に無文の枠状区画を有する他は縄文が全面に施されている。縄文部が一部口唇部まで延びていて、古い段階と推定されるが、共伴遺物がなく不明確である。第7号埋甕遺構出土例は、全面縄文が施されているくびれの強い深鉢形土器である。第12号埋甕遺構出土例は、口縁直下の縄文帯と胴部に垂下する5単位の長方形文に特徴を有する深鉢形土器で、類例のきわめて少ないものと思われる。そのため編年の位置づけもおこない難いが、口縁直下の縄文帯から判断すれば、古い段階と考えられる。

また、5区の第97号土坑で、第136図18と伴出した第136図17の土器は、口縁部無文帯に貼付された半月状隆帯の特色からみて、綱取Ⅰ式土器⁽⁷⁾と判断され、両者の共存例は貴重な資料となろう。綱取系の土器は、5区の第33号住居跡出土の第47図64・66や第42号住居跡出土の第70図1、遺構外出土の第205図4などに指摘でき、称名寺式期にはかなり入り込んでいたと考えて良い。

称名寺Ⅱ式土器は、称名寺Ⅰ式期に比較すると極端に少なくなり、器形をうかがえるような資料は5区

に集中している。5区の第6号埋甕遺構出土例（第147図7）が、沈線による曲線のモチーフ内に刺突文を施す胴部で、典型的であるが、その他は貼付隆帯、条線文、沈線文、刺突文などの特徴から称名寺Ⅱ式期に比定したものである。5区の第5・8・9・11号埋甕遺構出土例（第146図6，第148図9・10，第149図13）や遺構外出土の第205図2などが該期と考えられる。これらは貼付隆帯などの特徴からみると綱取系土器群との関連が強く認められ、該期は称名寺Ⅱ式土器に対して綱取系土器の割合がⅠ式期よりも増加すると考えられる。

d 堀之内Ⅰ式土器について

堀之内Ⅰ式土器は、千葉県市川市堀之内貝塚出土土器を標式として山内清男氏により型式設定された⁽⁸⁾後期前葉に位置する土器で、現在はⅠ・Ⅱ式に細別され、更にⅠ・Ⅱ式をそれぞれ3ないし5つに区分する動き⁽⁹⁾が顕著となっている。

当遺跡の堀之内Ⅰ式土器の出土量は 称名寺Ⅱ式期に比べると増加し、一時的な盛行期を迎える。堀之内Ⅰ式土器を伴う遺構は3区と5区に集中し、他区ではきわめて稀で、土器の出土もごく少量である。

該期の代表的な土器群を出土した遺構は、3区の第34号住居跡、第81号住居跡、5区の第38・39・41・43号住居跡などである。これらの出土土器を相互に比較してみると全体的な傾向としてであるが、3区の第81号住居跡が当遺跡では最も古く、次いで3区の第34号住居跡、5区の第38号住居跡、第41・43号住居跡が位置づけられ、最も新しい段階を示す土器群が5区の第39号住居跡と考えられる。しかし、個々の出土土器を観察すると各段階の土器が、同一住居跡内に混在しており、出土状況だけから編年について云々しても限界がある。共伴などの出土状況の確認や層位的な新旧関係の把握を主として、土器の型式学的な分析を加えて、検討を進めなければならない。

筆者も、以前に本県の堀之内Ⅰ式土器の編年について若干記したことがある⁽¹⁰⁾。その後もこの部分についての資料の増加は認められるが、詳しい分析や検討をおこなった論文や報告に接していない。そこで、本稿では旧稿を補うかたちで、当遺跡の3・5区から出土した堀之内Ⅰ式土器について検討してみよう。

旧稿において筆者は堀之内Ⅰ式土器を3段階に区分し、1a，1b，1c式と記し、各段階についても若干の新旧の差を指摘した。県内ではその後、当遺跡の他に、高萩市小場遺跡⁽¹¹⁾，下館市外塚遺跡⁽¹²⁾で、堀之内Ⅰ式期の良好な資料が検出された。前者では主に古い部分があり、綱取系土器群との関連が目立され、後者では新しい部分が多く、堀之内Ⅱ式との関係に注意が払われている。

茨城・千葉県方面に主として分布する堀之内Ⅰ式土器には、ほとんどの土器に縄文が地文として施されている。これに対して神奈川県方面に主として分布する土器には縄文はほとんどなく、無文地に沈線でモチーフが描かれる。

さて、当地域の堀之内Ⅰa式土器の特徴は、縄文地文上に1本の太目の沈線で独立の単独モチーフ（卵形文、蕨手状文、J字状文、蛇行沈線文など）が描かれるものと考えられる。モチーフ内の縄文を磨り消す一群と磨り消さない一群に細別は可能で、しかも前者が古く、後者が新しい可能性は十分に考えられる。しかし、遺構内での両者の共存が目立つことや、新旧の層位的な証明がなされていないことなどを理由として今回は同段階と考えておきたい。いずれにしても綱取系土器の影響の強い段階といえよう。

当遺跡のⅠa式期の土器としては、3区の第81号住居跡例（第71図1），5区の第38号住居跡例（第51図2，第52図11・14，第180図1・2），第39号住居跡出土例（第186図20）がある。第180図1・2は、第38号住居跡内に堆積した貝ブロックの中から出土しており、モチーフ内が磨り消されている。そ

の他では3区の第1・6号埋甕遺構出土例(第197図1, 198図8), 5区の第10・14号埋甕遺構出土例(第148図11, 第150図15)も1a式期と考えられる。この段階の資料は、当遺跡に隣接する竜ヶ崎市の廻り地A遺跡⁽¹³⁾に多くみられ、相互の比較検討をおこなっていききたい。

Ib式期は、Ia式段階の独立、単独モチーフを描く沈線がやや細くなる傾向をみせるとともに、多条化し始め、これらのモチーフが横位に連結されるようになる。Ib式の古い段階とした陸平貝塚の一括出土例は、頸部がくびれる甕形土器2例、朝顔状に開く深鉢形土器2例、縄文のみの粗製深鉢形土器1例、条線文の鉢形土器1例と良好なセットを示している。Ib式の典型的な例として、廻り地A遺跡の第656号土坑例(第300図5・6)があげられる。第300図5と酷似した土器が、当遺跡3区の第34号住居跡例(第37図1)にみられ、ほぼ同段階と考えられる。この他の当遺跡出土のIb式段階を示す土器は、5区の第39号住居跡出土例(第57図2・4・5, 第58図9・12, 第59図15・16, 第60図19・23～25)が代表的であり、5区の第43号住居跡例(第72図1)なども含まれる。

Ic式段階になるとIb式以来の単位文様の連結化が更に進み、連結による空間を充填する様相が発達してくる。この段階の好例は、廻り地A遺跡の第1624号土坑にて検出され、堀之内Ⅱ式古段階の鉢形土器3点と共存している。第333図1・2・4などが該当する。当遺跡の例では、5区の第39号住居跡出土の第57図1・6, 第58図7・8・11などが相当すると思われる。これらはIb式とした同住居跡出土の土器群と共存しており、廻り地A遺跡の第1624号土坑例よりは古いものと考えられる。3区の第436号土坑例(第181図1)もIc式期に属するものである。

以上、当遺跡3・5区出土土器を中心に堀之内Ⅰ式土器の所謂精製の深鉢形土器を中心に記してきたが、縄文ないし条線文のみが施文された粗製土器も多数共伴している。粗製土器では口縁部無文帯を1条の沈線で区画する例が少なくなり、無文帯の幅も狭くなる傾向が認められ、口縁直下から全面に縄文ないし条線文が施される例が主となる点は加曾利EⅢ・Ⅳ式期との明瞭な差である。また、該期には波状口縁を呈する全面縄文の粗製土器が目立ってくる。今回は、称名寺、堀之内Ⅰ式期の粗製土器や深鉢形土器以外の器種にはほとんど触れることができなかった。今後の課題としたい。

e 人体貼付文土器について

当遺跡3区の第395号土坑の覆土下位から土偶様の人体を貼付した土器が出土した。遺存状態はあまり良好ではなく、胴部上半部以上を欠く半欠品である。底部は一部残り、ソロバン玉状の胴部を呈する注口土器と推定されるが、注口部は残存しておらず壺形土器の可能性もある。しかし、時期は共伴土器からみて堀之内Ⅰ式期である。該期の資料で、このような器形を有するものは注口土器であるので、ここでは注口土器として扱っておく。

人体文は、胴部上半に貼付され、左脚部先端を欠くほかはほぼ完存し、体高約5cm, 最大幅約3cmと小さなものである。顔面は逆三角形を呈し、両目と口は刺突で、鼻は隆起により表現されている。首は明瞭に立ちあがり、ほぼ水平に肩部につながる。両肩は張り、手先を若干反りかえらせている。両手には押圧が加えられている。胴部下半に刺突がみられるが、乳房は表現されていない。脚部は大きく逆V字状に開き、足先に刺突が加えられた円形貼付文が付されている。人体に沿ってナヅリの沈線が施されている点は注意される。

人体貼付文の類例はきわめて少なく、中期の勝坂式期の有孔鏝付土器にみられる若干の例(神奈川県厚木市林王子遺跡例, 同県平塚市上ノ入遺跡例, 長野県富士見町藤内遺跡例⁽¹⁴⁾など)をあげうるにすぎない。

い。これらの諸例もやや抽象化されており、人体以外の表現とも言われている。その他中期以後には人面を表現した土器や土製品は、勝坂期の顔面把手をはじめとしてしばしば検出されているが、人体をそのものを表現した例は後期以前にはほとんど知られていなかった。後期以降の人体表現の例としても、北海道茂辺地遺跡出土の人体が磨消縄文を主に描かれた異形注口土器（『縄文土器大成』③ 後期 12）、青森県十腰内遺跡出土の縄文が全面に施された人体貼付文を有する壺形土器（同書 23）があげられる程度であった。

当遺跡の資料を発見したのは昭和 60 年 12 月で、この時の一瞬は今でも忘れられない。興奮した面持で、緊張をおさえながら作業員らに説明したことが昨日の事のように浮かぶ。この時すでに浦和市馬場小室山遺跡出土の安行系の深鉢形土器に、2 体の土偶が貼付されている例が出土していること⁽¹⁴⁾は承知しており、当資料はこれよりもずっと古く、きわめて珍しい資料であると判断したのであった。ところが、その後新潟県能生町から中期後半の人体貼付文土器が出土している由、新聞報道で知り、しかも明瞭な男女の表現がある点は非常に驚きであった。

縄文時代の人体貼付文土器の類例は、筆者の知る限りではこの程度であり、全国的にみてもきわめて稀な遺物であることには変りはない。

さて、当資料を中期後半と時期比定されている能生町⁽¹⁶⁾の例、後期後半に位置づけられる浦和市の例と比較してみよう。まず、当資料は貼付されている人体は 1 例で、本来は他者のように 2 体あったものが欠損したかどうかは定かではない。しかし、貼付されている人体に乳房の表現を欠くことなど、他 2 者の 2 体の組みあわせから推定すると、2 体のうちの 1 体で乳房の表現をもたない個体と判断したい。この前提で話を進めると、3 例とも 2 体が対となり、一方には乳房を表現しないという製作上の約束事があったと推定される。すなわち、能生町の例で明瞭に示されているように、乳房を有する方が女性、乳房を有さない方が男性と判定される。この推定からみれば、当遺跡の例は男性像で、反対側に女性像が貼付され対をなしていたと考えられる。

なぜ、男性像には乳房が表現されないのかは不明である。

浦和市馬場小室山遺跡出土例の土偶の性別について検討した岩井重雄氏⁽¹⁷⁾は、土偶は本来的にはすべて女性像であるべきで、仮に手なぐさみ的に男性像を製作したとしても、それはもはや土偶としての価値を有さないものになってしまうであろうと記して、あくまで土偶は女性を象ったものとしての位置づけをおこなっている。筆者は、当遺跡例をあえて土偶付土器とは呼称せず、能生町井の上遺跡出土例との比較によって、人体貼付文土器として報告したのは、女性像としての土偶の観点からだけではなく、より広い視点（土面や土版、人面表現を有する各種の土器・土製品など）から検討する必要があると考えるからである。

浦和市例は、2 体とも頭部を失っている。能生町例は、男性像は頭部が残るが、女性像は失っている。当遺跡例は頭部を有している。頭部の形態は、逆三角形を呈し、刺突による施文が主となっている。当遺跡の例は、神奈川県横浜市市ノ沢中崎遺跡出土の「どくろ」を象ったといわれる土製品⁽¹⁸⁾と類似している点があり、注目される。市ノ沢中崎遺跡出土例は、中期後半の加曾利 E 式期の所産と推定されており、関連を更に追求したい。また、脚部が逆 V 字状に大きく開く点は当遺跡例と能生町例に共通する特徴と考えられるが、浦和市例はあまり開脚していない。

いずれにしても当遺跡例は、きわめて珍しい出土品で、今後の分析・検討を期待したい。

f 蓋形土器について

縄文時代後期前葉の堀之内式期には、蓋形土器あるいは土製蓋が伴うことは戦前から知られている。船橋市古作貝塚出土の貝輸入蓋付土器はあまりにも有名である。⁽¹⁹⁾しかし、本格的に蓋形土器に取り組んだ論攷は少ないように思われる。注口土器や壺形土器などとともにそろそろ集成作業や分析・検討がおこなわれるように期待したい。当遺跡からもいくつか良好な蓋形土器が出土しているので若干ふれておきたい。

安孫子昭二氏は、昭和45年刊行の埼玉県庄和町神明貝塚の報告書⁽²⁰⁾において、一項を設けて土製蓋について論及している。氏は対象とする蓋の所属時期を堀之内I式期に限定し、a～d型の4タイプに分類し、蓋の結縛方法の差異にも目をむけている。

a型 器面に文様は施されず、中央部の脹らむかたちで、橋状のつまみが中央部に1ヶ所もしくは両側縁に1ヶ所ずつ貼付される型。

b型 円板状の表面に、太い沈線で同心円状の文様が描かれ、両側縁に1対の孔が穿たれる型。

c型 平面形が饅頭のようなかたちで、全面無文の型。両側縁に橋状把手ないしは2孔を有し、a・b型よりも大形。

d型 中央のつまみの部分が十字形の橋状を呈する型。

上記の4タイプはやや分類規準に統一性がなく、不十分な点が指摘される。大きさ、平面形、断面形、把手の形状と位置、穿孔の数と位置、文様の有無などから分類する必要がある。しかし、今回は当遺跡の事例を紹介し、時間的変遷について若干検討するにとどめる。

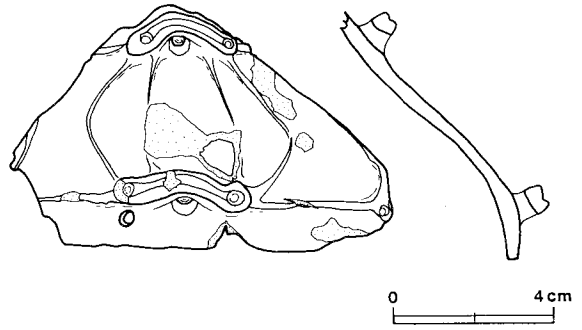
当遺跡の蓋形土器は、2区の第159・189号住居跡から各1点ずつ出土し、3区の第47号住居跡、第525号土坑からはほぼ完形品が出土している。この他3区からは第38・468号土坑出土の断欠2点、およびグリッド出土の3点の計5点が出土している。このうちK4j5グリッド出土の例は径5.3cm前後の小形品で、両側縁につまみ状の橋状把手がつけられている。5区の第39号住居跡からはつまみ状の把手と2孔を有する例(第214図18)が検出されている。

当遺跡の例は、以上の10点があげられるが、5区の例を除いていずれもつまみ状の橋状把手を中央部もしくは両側縁に有する例となり、特徴的である。蓋形土器は無文の例が多いが、2区の第189号住居跡、3区の第47号住居跡例には微隆線による弧状、曲線状のモチーフが表面に描かれている。大きさをほぼ完形の例から推測してみると、3区の第525号土坑例が直径14～15cmで最も大きく、第47号住居跡は直径9cm前後でやや小さく、K4j5グリッド例は直径5cm前後と更に小さい。この計測値は、安孫子氏が集成された土製蓋の大きさの範囲内に収まり、当遺跡例も蓋として理解される。次に蓋形土器の所属時期について共伴遺物から比定してみると次のようになる。まず、2区の第189号住居跡例は、加曾利EⅢ式期の新しい段階かEⅣ式期の古い段階と考えられ、最も古い。次が2区の第159号住居跡例と3区の第47号住居跡例で、称名寺I式期と考えられる。前者は所謂加曾利EⅣ式系統の土器を伴わず、後者は伴うことからすれば若干の時間差があろう。最も新しい例が、3区の第525号土坑例で、堀之内I式期中段階以降の土器を伴出している。この3段階の変遷を当遺跡だけの例でみると、微隆線による施文を有し、内面が平坦で橋状把手をもつタイプが1・2段階にあり、2段階には饅頭状の断面形を呈する例があらわれ、3段階には、断面形が平坦で大形の例がみられるということになるうか。

以上、当遺跡例の紹介を通して蓋形土器について記してきたが、今後の検討は、蓋形土器だけではなく、身(容器)となるべき注口土器、壺形土器との関連、中身として納められていた貝輪⁽²¹⁾、小形磨製石斧などの分析もあわせた総合的な視点からおこなわれねばなるまい。

g 切断壺形土器について

当遺跡3区の第452号土坑から1点の赤彩が施された切断壺形土器が出土した。伴出土器は少なく9点で、縄文のみの小破片だけで時期は決定しがたい。しかし、他遺構との重複関係からみれば、後期前葉の堀之内I式期前後の所産と考えられる。残存部は壺形土器の胴上半部の4分の1程度で、口縁部と胴下半部を欠いている。外面には赤彩痕が顕著にみられるが、内面には認められない。外面には微隆線による弧状、曲線状のモチーフが描かれ、頸部と胴部の屈曲部に横位に小さな橋状把手が付され、把手の両端に盲孔が1か所ずつ施されている。また、屈曲部から約1cmほど下ではほぼ水平に切断され、把手下に1か所の焼成前の穿孔がある。器面は丁寧にナデられ、内面は横ナデが施されている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。胎土は細砂や石英粒などを含み、特に精選されているとは思えない。



切断壺形土器は、阿部氏の研究²²⁾によれば、東北北部の螢沢式から十腰内I式期にかけて数段階の変遷をたどる特殊な土器で、これらの間接的な影響を受けた東南北部から茨城県北部の地域にかけては、東北北部とは異なる切断部位と方法をもつ一群が綱取式土器の分布圏内に存在する。

また、堀之内I式土器の分布圏である関東地方においては、埼玉県神明貝塚側のような水平な接合面に紐通しの穿孔を有する一群がある点を指摘されている。

同氏は、上記の各群についてa類（胴上半部に切断痕を残すことが特徴 螢沢・十腰内I式土器の分布圏）、b類（胴下半部にかみ合わせの大きい切断痕を残すことが特徴 綱取式土器の分布圏）、c類（屈曲部のやや下位で水平に切断し、接合することが特徴 堀之内I式土器の分布圏）の3つに分類し、それぞれの土器型式の分布圏と対応させ、切断壺形土器の型式学的な地域差を指摘している。

当遺跡の例は、阿部氏の分類にあてはめればc類となると思われるが、屈曲部の下端に明確な焼成前の水平な切断痕が認められ、阿部氏が神明貝塚例を上下を分離した成形手法をとると判断していることとは異なる。

当遺跡例と関連する切断壺形土器は、阿部氏分類のb類およびc類と考えられるので、この両者を取り上げる。b類の例は、いわき市綱取貝塚の例²³⁾と約100km南下した茨城県大洗町大貫落神貝塚²⁴⁾に1例（第65図6～8）あり、綱取系土器の分布範囲に合致するといえる。b類の器形上の特徴は胴部の丸味の強い点にあり、極端な屈曲は持たないように思われる。綱取例には切断部に6か所の穿孔をもつが、落神例には現存部には認められない。

c類は、神明貝塚例²⁰⁾（報告書第24図1）の他に、東京都小金井市武蔵野公園低湿地遺跡例²⁵⁾（第62図86）に存在することが判明した。また、落神貝塚の第65図2・3の例や第61図6の例、竜ヶ崎市廻り地A遺跡第1584号土坑例¹³⁾（第327図1）も、c類に分類した方が妥当と思われる。すなわち、落神例の第65図2・3と廻り地A例は、胴部の屈曲が著しくソロボン玉状の器形をなし、屈曲部のやや下位に切断面が認められ、廻り地A例には孔が穿たれている。b類が胴下半部に切断部を有する点から考えれば、c類とした方が良いと思われるが、欠損部分が多く不明である。落神例の第61図6は、切断壺の下

半部で水平な切断痕を残し、4か所の孔を穿つなどc類の特徴を有している。

以上の類例から当遺跡例を位置づけてみると、阿部氏分類のc類に属し、堀之内I式期の所産である。c類は、類例が茨城・東京・埼玉に分布し、若干の形態差を有しており、今後の検討によっては、a類のような変遷過程が明らかにされる²⁶可能性がある。胴上半部に限定される文様も微隆線もしくは隆帯により施文されるもの（当遺跡例、武蔵野公園低湿地遺跡例）と沈線により施文されるもの（落神貝塚例、神明貝塚例）があり、今後の集成や分析が期待される。

2 土製品について

当遺跡からは各種の土製品が出土しているが、土器片を再利用した土器片錘・土製円板・有孔円板が主なもので、その他に三角形に加工したものや穿孔土器片として報告されたものもある。

また、再加工作品ではない土製品にも各種の垂飾・耳栓や用途不明なものが検出されている。

土器片錘は、1・2区で1,121点、3区で640点、4区で179点、5区で385点、6区で542点、7区で303点の合計3,170点あり、当遺跡を代表する土製品である。紐かけ用の挟り込みが長軸両端にあるものが圧倒的多数を占めるが、短軸にある例や4か所に挟りをもつ例などもある。また、利用される破片は胴部が最も多く、口縁部片がこれに次いでいる。底部を加工した例はきわめて少ない。4区の第50号住居跡から出土した土器片錘のうち3点（第214図43～45）は、同一個体の破片を利用しており、相互に接合するきわめて珍しい例である。また、4区の第170号土坑出土の11点の土器片錘（第213図23～33）は覆土の上位から一括して出土したもので、漁網につけられたままの状態を示すものかもしれない。この11点はいずれも完形品で、23が口縁部片のほかは胴部片を利用している。長径3.4～8.2cm、短径3.3～6.0cmの間に収まり、長径の平均値が5.9cm、短径の平均値が4.6cmを測り、重量は最小値が12.3g、最大値が65.0gで、平均値が35.1gである。1つの漁網にこの11点が同時に使用されたと考えると総重量は385.7gを測る。1つの漁網の規模としては小規模なものが推測される。

各区ごとの土器片錘の形状や重量等についてはそれぞれの報告書を参照されたい。

土製円板は、1・2区で85点、3区で83点、4区で6点、5区で17点、6区で72点、7区で24点の合計287点出土しており、土製片錘に次ぐ出土量である。

有孔円板は、1・2区で77点、3区で49点、4区で10点、5区で3点、6区で56点、7区で18点の合計213点検出されている。1・2区および5区の報告で土製円板と一括して報告されているので、土製円板のうち有孔および穿孔途中とされているものを有孔円板として分離して計数した。土製円板と有孔円板については、両者を一連の製作過程にある遺物として一括する考え方と別個のものとする考え方があり、当遺跡の報告でも両説の観点から考察されている。

1・2区の報告書で穿孔土器片とされたもの（第365図7～15）のうちには土器片の縁部を意図的に加工したものが3点含まれており、報告者の言うように何らかの意図をもった土製品と考えられる。形状は、各種あり星形・台形・不整台形・不整五角形・不整六角形などと称されている。類例は6区の第392図19や第393図1などであり、3区で三角形土製品として報告した有孔品を含めてこれから検討されるべきものと思われる。

耳栓は、2区の第810号土坑から1点、5区のJ3b1グリッドから1点、6区の第55号住居跡から1点、7区の第409号土坑から1点の計4点が出土している。形状をみると、有孔で赤彩されているのは2区の第810号土坑例だけで、他は無孔で上下面が凹むタイプで、赤彩された痕跡は認められない。2区例

と7区例は共伴遺物からみて加曾利EⅢ式期の可能性が高く、6区例も本来は重複している加曾利EⅢ式期の第74号住居跡に伴う遺物と考えられる。以上から推測すると耳栓は、中期後半の所産と思われる。

1・2区の報告で管状土錘とされた第365図19～21の3点のうち19は、同図6に有孔円板とされているものと同タイプと考えられ、刺突文を多用し、中央に1孔を有する特徴が共通する。両者の厚さは異なるが、垂飾などの装飾品とした方が良いと思われる。6は第44号住居跡、19は第784号土坑から出土している。6は共伴遺物から加曾利EⅢ式期と考えられるが、19は不明である。20・21は、6区で管状土製品とされたもののうち第393図2・3・7などの類例と考えられる。第393図7に近似する例が3区の第83号住居跡から半欠品として検出されている。これらの土製品は、いずれも共伴遺物から加曾利EⅢ～Ⅳ式期のものと推定される。6区の第393図10の類例は未検出である。

垂飾は、2区の上記の2点を除くと、3区の2点（第216図8・9）と6区の第70号住居跡出土例（第393図9）の計3点にすぎない。3区の例は有文と無文の差異はあるが、径3～4cmの円板状の土製品で、2孔が穿たれている。6区例は、径2.4cmの環状土製品で、一端に2孔をもつ。2孔を有する点では共通するが、その違いは大きい。6区例は、共伴遺物から加曾利EⅣ式系統の土器を伴う称名寺式土器の古い段階の所産と思われるが、3区例は時期不明である。

また、6区の第46号住居跡出土の「球状土製品」（第393図12）の類例は、3区の第49号住居跡の炉内から検出された。共に無文の径1.0～1.4cmの土球で、前者は1.0g、後者は2.6gときわめて軽く、小さい。伴出遺物からみて縄文中期の所産と思われるが、類例を知らない。

7区の茶匙状土製品（第443図103）や動物形土製品（第552図52）の類例も、当遺跡からは出土していない。今後は、広い視野で探索に努める必要を感じる。

土偶は、5区から3点、3区から7点の合計10点検出されているが、3区の諸例は手・脚の断片ばかりである。5区の例は頭部から胴部にかけてが1例、胴部のみ2例である。これら3点とも乳房を残し、うち1点は背部に渦巻状の沈線文が描かれている。これらは顔面の特徴や文様からみて後期前葉、堀之内Ⅰ式期の所産と推定される。3区の例は、堀之内Ⅰ式期から加曾利B式期のものと思われる。

3区の第436号土坑から出土した土製腕輪は半欠品であるが、共伴土器から堀之内Ⅰ式期のものと推測できたことは大きな収穫であったといえる。貝輪との関連など今後の追求を期待する。

最後に、6区で取り上げた棒状土製品・塊状土製品について若干ふれたい。この中には網代痕をもつ例や指痕が明瞭に認められる例もあり、意図的な産物であることは確実である。最近、東京都の多摩ニュータウン遺跡群でも縄文前期の所産と考えられる類品が出土していることを実見により知った。何気ないこのような遺物にも目を向ける姿勢が大切ではないかと考えられた。

3 石器について

当遺跡から検出された石器には各種のものがある。石を素材として製作されたものは日常的な生活に用いる実用的な石器と非日常的な用途にあてられる石製品に大別される。当遺跡の既刊の報告書とは、石器と石製品の分離に差異があるが、ここでは上記のような観点から統一的に区分する。

石器としては、石鏃・石槍・打製石斧・磨製石斧・礫器・搔器・磨石・凹石・敲石・砥石・石錘・石錐・石皿・軽石製品などがあり、その他に石核や使用痕の認められる剥片も出土している。

石鏃は、1・2区から30点、3区から18点、4区から2点、5区から22点、6区から14点、7区から9点の合計95点出土しているが、図示されているのは71点である。無茎石鏃が圧倒的多数を占める。

有茎石鏃は、2区に1点、3区に1点、6区に2点、7区に2点の計6点で、全体の中の約6%にすぎない。欠損品が多いためもう少し比率は高くなるかもしれないが、いずれにしても少ない。有茎石鏃の出土した遺構の相伴遺物をみると、加曾利EⅢ・IV式期の土器が出土している例が多く、当遺跡の例は中期後半のものと考えられる。石質は、図表化されている72点をみると、チャート製が断然多く50点で約70%弱を占める。次に黒曜石の11点がつづき、約15%である。この2者で約85%に達し、石質の記載のない23点についてもこの2者に属する可能性が高い。以下流紋岩3点、石英・頁岩・メノウ各2点、安山岩・ホルンフェルス各1点ずつである。石鏃の形態分類については、当遺跡の1・2区でおこなわれているので参照されたい。

石槍は、3区の第79号住居跡から半欠品が1点出土しているだけである。加曾利EⅢ式期の所産と考えられ、珍しい例と思われる。

打製石斧は、1・2区で34点、3区で9点、4区で1点、5区で17点、6区で3点、7区で1点の合計65点出土しているが、1・2区で打製石斧に分類されたものの中には第368図4・8～11のように礫器とした方が妥当なものも含まれており、実数は少し減少しよう。図示されている資料は1・2区で11点(実数は6点)、3区で9点、4区で1点、5区で7点、6区で3点、7区で1点の27点である。打製石斧のほとんどは銅形を呈し、袈り部分に明瞭な磨滅痕を残すものが目立っており、着柄方法や用途・機能を推測する手がかりを与えている。図表化されている34点の石材をみると、流紋岩が12点で3分の1強を占め、以下砂岩7点、安山岩6点とつづき、片麻岩・ホルンフェルス各2点、粘板岩・頁岩・雲母片岩・石英斑岩・結晶片岩各1点の順となる。打製石斧の石質としては、流紋岩・安山岩・砂岩の3種で20点と約74%を占め、主体であったことが判明する。この結果は当財団が発掘調査した主要遺跡の石質を分析した青木氏の結果²⁷⁾ともほぼ一致している。

磨製石斧は、1・2区で44点、3区で15点、4区で1点、5区で20点、6区で9点、7区で1点の合計90点出土し、打製石斧を上回っている。図示されている資料は1・2区で17点、3区で14点、4区で1点、5区で5点、6区で9点、7区で1点の47点である。石質の明らかな57点についてみると、砂岩11点、緑泥片岩11点、硬砂岩・結晶片岩各7点の4種が主体を占め、4種あわせた数の36点は、全体の約63%と過半数をこえている。以下は流紋岩が4点とつづき、安山岩・チャート・閃緑岩各3点、片麻岩・粘板岩各2点、千枚岩・角閃片岩・ホルンフェルス・斑礫岩各1点あり、磨製石斧の石質は14種ときわめて多種類に及んでいる点が注目される。形態は大半が定角式の磨製石斧で、両刃(蛤刃)を呈するものが主体をなしている。1・2区から検出されている3点の片刃の石斧はいずれも小形で刃部のみ磨製した局部磨製石斧である。磨製石斧の出土状態で注目されるのは5区の第208図20の小形磨製石斧が、半分に折れた状態で、称名寺Ⅱ式土器を用いた第6号埋甕遺構の覆土の中央部から出土した例である。

礫器には、各種の形態のものが含まれるが、出土量は比較的少ない。1・2区で21点、3区で9点、6区で3点、7区で2点の合計35点出土している。礫器としては自然礫を用いて数回程度の打ち欠きを加え、片刃状の刃部を作出したものが主となっている。この観点からすると、1・2区の報告の第380図1～3などは、報告者のいうように搔器とした方が良いと思われる。この3点の石質はチャート2点、安山岩1点で、他の礫器が砂岩を主としている点とは異なっている。

搔器として報告されているものは、1・2区で1点、3区で2点、5区で1点、6区で2点、7区で1点の合計7点にすぎない。石質はチャートが4点、頁岩2点、ホルンフェルス1点で鋭い縁部を有する石質が選択されている。その他、剝片、ブレイド、ポイント、削器、彫器、使用痕のある剝片などいろいろ

な名称で報告されている石器も、縄文時代中・後期の石器の1つとして搔器（スクレイパー）の範疇に含めて良いと思われる。石質も黒曜石・メノウなどが上記に加わる。

磨石・敲石・凹石の3者は、相互に機能を併有するものが多く、各器種に区分することは困難であったが、各報告書の区分に従った。

磨石は、1・2区で114点、3区で54点、4区で16点、5区で152点、6区で42点、7区で27点の合計405点と当遺跡で最も数の多い石器である。多数であることは、当遺跡の主たる石器であり、当然に主生業に関わっていたと推定される。磨石の主な機能を植物質食料の加工にあると考えれば、当遺跡の生業形態が浮かびあがってくる。磨石の石質は、判別されている資料が228点で約56%であるが、その内訳をみると、砂岩が50点、安山岩99点、流紋岩40点の3種で189点に達する。全体の約83%を占め、磨石の石質がこの3種に限定されると言っても良い程である。以下は石英斑岩が14点、アプライト6点、硬砂岩4点、花崗岩3点とつづき、多孔質安山岩・斑糲岩・ホルンフェルス各2点、軽石・石英岩・緑泥片岩・雲母片岩・礫岩・凝灰岩が各1点ずつで、石質は16種にも及ぶ。

敲石は、1・2区で100点、3区で14点、4区で2点、5区で2点、6区で1点、7区で2点の合計121点出土しているが、1・2区にきわめて多い点が目につく。このうち石質の判明している資料は43点と少なく、約36%にすぎない。その石質の内訳をみると、砂岩が14点で最も多く、次いで、安山岩・石英斑岩の各8点とつづき、その3種で30点となり、全体の約70%を占める。流紋岩は5点で、石英斑岩より少ない。磨石の上位3種のうち、流紋岩と石英斑岩が入れかわっているが、資料が少なく確実とはいえない。その他の石質としては、チャートが3点、花崗岩2点、玢岩・硬砂岩・アプライトが各1点である。敲石は、磨石よりもやや硬い石質のものが利用される傾向にあるように思われ、磨石より石質が少なく9種である。

凹石は、1・2区で21点、3区で13点、4区で1点、5区で2点、6区で2点の合計39点出土している。石質の明らかな資料は26点で、全体の3分の2である。石質をみると、安山岩が12点と断然多く、次いで砂岩の4点である。この2種で全体の約62%を占める。以下は1～2点ずつで、硬砂岩・角閃片岩・雲母片岩各2点、流紋岩・花崗岩・石英安山岩・アプライト各1点である。凹石の石質としては、安山岩が主体を占め、敲石とは異なり、磨石と近似する傾向を示している。

砥石は、共伴遺物や形態から縄文時代のものと考えられるものを取り上げる。出土数は、1・2区で8点、4区で1点、6区で1点の合計10点みられるが、縄文時代の所産と考えられるのは1・2・4区の縄文時代の住居跡出土の3点と6区のグリッド出土例1点の4点にすぎない。石質は流紋岩1点、硬砂岩1点、砂岩2点である。形態にもバラエティがあり、1区の第8号住居跡例（第379図5）は、断面V字状を呈する溝を有し、有溝砥石²⁸として分類され、所謂矢柄研磨器とは別種のものであろう。2区の第40号住居跡例（第379図6）は、長径3.6cm、短径1.7cmのきわめて小さな薄い砥石で、骨角器製作の最終仕上げにでも利用されたものではないかと想像される。砥石は、縄文時代においても非常に大切な器具の1つであったことは明らかであり、当遺跡出土例を含めて再検討される必要がある。

石錘は、1・2区において3点検出されただけで、他区からは出土していない。そのうち2点は、2区の第151号住居跡から出土し、切目石錘A種²⁹に属する。磨り込みは浅いように観察される。その他の1点は出土遺構や形態は不明である。

石錘は、3区で2点、4区で1点、5区で4点、6区で1点の合計8点出土しており、撮みが明瞭に作り出されるものと錐部よりやや太くなる程度で不明瞭なものに大別される。3区の1点と4区の例、5区

の3点の5点は前者に属し、3区の1点と6区例は後者に属す。5区の1点は錐部のみの残欠である。錐部の断面形は菱形を呈し、鋭いものが多い。

石皿は、1・2区で13点、3区で22点、4区で4点、5区で1点、6区で5点、7区で2点の合計47点出土しているが、ほとんどは破片であり、完形のまま出土したのは6区の第144号土坑出土の2点と第81・84・85号住居跡が重複する部分の床面上に据え置かれたような状態で出土した台石的な石皿をあげるにすぎない。共に出土状態には注目すべき点があり、今後の検討が待たれる。また、3区の第34号住居跡からは、脚付石皿の欠損品が1点出土している。共伴遺物からみて堀之内I式期の所産と考えられる。石皿の石質は47点とも判明しており、安山岩が38点と最も多く、安山岩が石皿として最も適切な石材であったことを証明している。約81%に達する。以下砂岩3点、雲母片岩2点とつづき、片麻岩・凝灰岩・流紋岩・点紋粘板岩は各1点ずつである。しかし、6区の台石的な石皿や3区の平盤石皿と考えられる例は砂岩を用いている。また、前記の第144号土坑の完形石皿のうちの1点で壁に立てかけられて出土した例は流紋岩製である。

当遺跡の石皿には表裏両面が使用されているものが目立つ。石材が少なく、貴重品としての取り扱いがこんなところにもうかがわれる。

軽石製品は、1・2区で11点、3区で8点、5区で6点、6区で6点、7区で2点の合計33点出土している。ここに取り上げられたものは軽石を一定のかたちと大きさに整形するために切断や研磨が加えられた痕跡を有するものがほとんどである。この他にも軽石の破片は多く出土している。製品として良好に整形され、ほぼ完全なかたちを残すものは、2区に2点、3区に2点、5区に2点、7区に1点ある。2区の第382図11は、長方形を呈し上端に1孔を有する。同図13は台形を呈し上端に1孔を有する。3区の第5号住居跡例の第229図166は、不整形を呈し上方に1孔を有する。第16号住居跡出土例の第229図161は、きわめて良く整形され、楕円形を呈している。5区の第210図52は楕円形を呈し上端に1孔を有する。同図54は楕円形を呈するが無孔である。7区の第647図47は、撥形を呈し、下端部は片刃状に作り出されているが、無孔である。軽石製品には有孔の例も上記のほかにも多数ある。軽石製品の用途としては、漁網用ないし一本釣り用の浮子とする考え方が一般のように思われるが、丁寧に製作された例は果して浮子に使用されたのであろうか。非日常的な行為のための儀器、模造品などは考えられないであろうか。一転して、無孔の不定形な軽石製品などは、石質の適合性から獣皮などの製品を仕上げるための皮滑し用具、骨角製品の研磨のための用具なども推定されよう。

石製品としては、石棒・垂飾および不明石製品が出土している。

石棒は、1・2区で8点、3区で4点、4区で2点、5区で3点、6区で8点の合計25点が出土しているが、破片が多く、ほぼ完形のもの3区の第47号住居跡から倒れた状態で出土した1点にすぎない。角閃片岩製で長さ60cm、太さ約10cm、重量約9kgの逸品である。石棒は、有頭と無頭に大別される。当遺跡では有頭は2区に2点、3区に3点、4区に1点、6区に4点の計10点あり、40%が有頭である。無頭石棒は頭部と基部の区別がむずかしい。また、大形のもの小形の例が縄文中期後半から知られた点は興味深い。2区の第45号住居跡出土例(第381図2)は、炉に近接した床面に直立した状態で埋め込まれて検出されている。称名寺式期の古段階の住居跡と考えられ、完形の埋甕をも伴っており、その性格が注目される遺構である。

石棒の石質は、角閃片岩が8点と多く、安山岩5点、流紋岩4点とつづき、花崗岩・結晶片岩・緑泥片岩各2点、アプライト・緑色凝灰岩各1点となる。

垂飾は、2区に3点、3区に1点、5区に1点のあわせて5点検出されている。それぞれに特徴があり、個性的である。2区の第379図8は、断欠ながら有溝・有孔の扁平な作品で、研磨が行き届いている。チャート製。同図9は、珧状耳飾と報告されているが、片面と側面にU字状の溝があり、珧状耳飾とは考えられない。チャート製。同図10は、青白色の縞模様を有する大珠で、上半部に両側から穿孔されている優品である。流紋岩製。3区の例は、半欠品であるが上端に1孔を穿っている。砂岩製。5区の例は管玉として報告されているが、垂飾とする方が良いと思われる。蛇紋岩製。

不明石製品は、2・3・4区に各1点ずつ計3点出土している。2区の例は、弓状に反った流紋岩の棒状礫を研磨した作品である。出土遺構からみて称名寺I式期のものと推定される。3区の例は、打製品で、糸巻形に整形されており、糸巻形石器とでも仮称したいものである。ホルンフェルス製。4区例は磨製品の断片である。角閃片岩製。

4 骨角貝製品について

当遺跡から検出された骨角貝製品には、刺突具・貝刃・貝輪・垂飾・穿孔貝製品があり、貝刃の出土量が目立っている。骨角貝製品は、3・5・6区から検出されているが、6区は貝刃1点にすぎず、主体は堀之内I式期の貝塚を伴う3・5区の出土品である。

刺突具は、3区の第34号住居跡を覆う貝塚の中から検出された4点だけである。このうち3点は、シカの中手ないしは中足骨を利用したもので、1点が完形品で、他は先端部と基部の断片である。いずれも堀之内I式期の所産と考えられる。当遺跡に近接する廻り地A遺跡からも同様の刺突具4点が、後期前葉の土器に伴って出土しており、相互の関係が考えられる。

貝刃は、3区から39点、5区から19点、6区から1点の合計59点が検出されている。利用されている貝種はハマグリが圧倒的に多く、3区の1点がシオフキ、5区の1点がカガミガイであるにすぎない。貝刃の所産時期を出土遺構や遺物から推測すると、6区の第149号土坑出土例が阿玉台Ib式期と考えられ、ハマグリは左殻を使用している。3区の例は、第69号住居跡出土の1点を除くといずれも堀之内I式期の所産と考えられる。第69号住居跡は、加曾利EⅢ式期の新しい段階の土器を出土している。5区の例は、19点のうち7点が称名寺式期、12点が堀之内I式期と考えられる。当遺跡においては、貝刃は後期に入って盛行する様相がうかがえるが、中期後半の加曾利EⅢ・Ⅳ式期にはあまり使用されていなかったのか、あらためて再検討する必要があるように思われる。また、貝刃の製作法をみると、内側から打ち欠いて外面に刃を作る外刃と逆に内側に打ち欠きが認められる内刃と更に両者をもつ両刃に大別される。当遺跡の3区からは一般的な外刃に混じて、少数の内刃や両刃の例が検出されている。金子浩昌氏らの最近の研究³⁰⁾によれば、このようなタイプは縄文早期から類例が知られているようであり、詳細な分析や検討が待たれる。

貝輪は、3区から6点、5区から1点の計7点出土しているが、明瞭に認定できるものは3区の2点と5区の1点である。その他は切断痕がみられるだけで、未製品とも考えられる。利用されている貝種は、3区でサルボウ3点、イタボガキ2点、ベンケイガイ1点で、5区の例はベンケイガイ製である。サルボウ製の第234図48は、表面が良く研磨されているが、肋脈は残されている。ベンケイガイ製の3区の第234図50は、殻頂部分を残し、非常に良く研磨されている。5区の第215図20は、腹縁部分を残すもので、肋脈は明瞭に残されている。貝輪は、5区の例が称名寺式期、3区の例が堀之内I式期の所産と考えられる。

垂飾は、3区から7点、5区から1点の計8点出土している。使用されている材質には各種のものがある。3区の第233図5は鳥骨製、同図6は、ウミガメの背甲板外側の突起を利用したものである。同図7～9は、ウノアシガイ製、10・11は、ツノガイ製である。5区の例はミミガイ科のアワビ類を加工した垂飾品である。鳥骨製の垂飾は、両端を切断した管玉状の製品で、刻目などの装飾は加えられていない。類例は、千葉県大倉南貝塚・加曾利貝塚・古作貝塚・宮本台貝塚、福島県綱取C貝塚・寺脇貝塚などにある。ウミガメの骨を利用した垂飾は、東北の岩手・宮城県から北陸の石川県にも分布が認められるが、数的に多いのは千葉県で、茨城県にも江戸崎町椎塚貝塚（腹甲板）、水海道市金土貝塚（指骨）の例が知られており、当遺跡例は県内で3例目ということになる。ツノガイを切断した垂飾は、千葉県西広貝塚・神奈川県宮ノ原貝塚に類例があり、県内では草創期の利根町花輪台貝塚から検出されている。ウノアシガイ製の環状垂飾は、宮城県里浜貝塚・福島県真石貝塚に知られる³⁰程度で類例は少なく、県内では初めてである。堀之内I式期に属する3点の資料が追加されたことは貴重な収穫というべきであろう。アワビ類を加工した垂飾は、両端に挟り込みを有し、組み合わせの腕飾りとも考えられる。

穿孔貝製品は、シオフキに穿孔したもので、今後の検討が必要なものと思われる。

注1 当遺跡出土の縄文式土器のうち、田戸下層式・勝坂式は3区の出土土器中に破片を確認し、十三菩提式については2区の、三十稲場式については5区の遺物整理中に実見している。

2 柳澤清一「竜ヶ崎市南三島遺跡出土の土器 その1 加曾利E3-4中間式について」『古代』第81号 早稲田大学考古学会 1986年

3 丹野雅人「注口土器小考－縄文時代中期終末期における様相－」『研究論集』Ⅲ 東京都埋蔵文化財センター 1985年

4 石坂茂『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年

5 吉田格『横浜市称名寺貝塚』武蔵野文化協会 1960年

6 柿沼修平「いわゆる称名寺式土器に関する二、三の疑義」『史館』創刊号 1973年

下村克彦「称名寺式土器の意匠二態」『埼玉考古』第11号 1973年

下村克彦「大宮市北袋出土の称名寺式土器」『埼玉考古』第12号 1974年

笹森建一『志久遺跡』埼玉県遺跡調査会 1976年

谷井彪「称名寺式土器の推移について」『埼玉県立博物館紀要』3 1977年

青木秀雄「称名寺式土器の再検討」『埼玉考古』第16号 1977年

今村啓爾「称名寺式土器の研究（上・下）」『考古学雑誌』第63巻第1・2号 1977年

柳澤清一「称名寺式土器論（前篇・中篇・続・結編）」『古代』第63・65・66・68号 1977～1980年

石井寛他『称名寺式土器に関する交流研究会資料集』港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1985年

奥村恭史「大宮台地周辺に於ける称名寺式土器の一考察－その成立段階に於ける西日本からの影響と再編試案－」『埼玉の考古学』新人物往来社 1987年

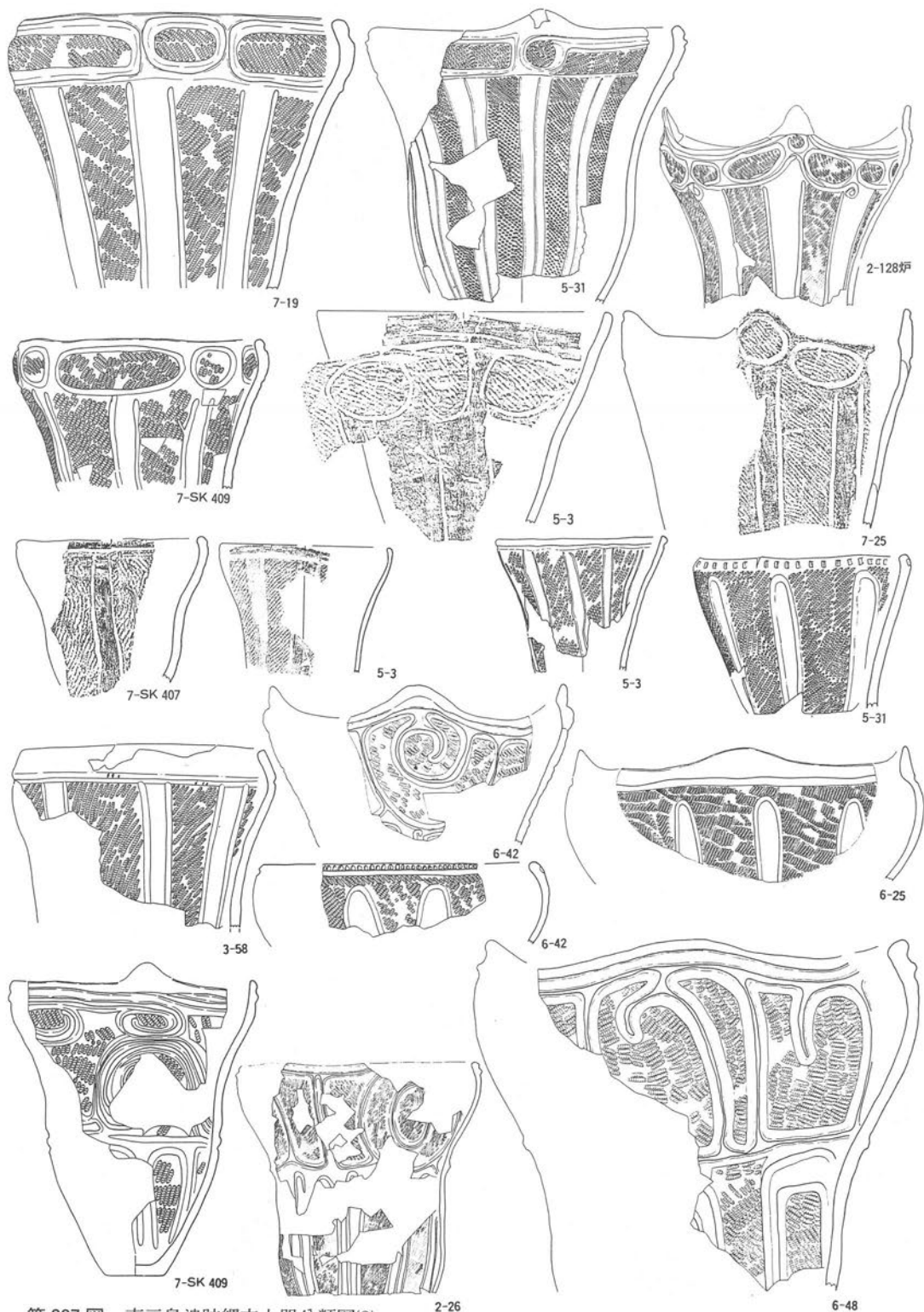
7 馬目順一「南東北－福島県いわき市愛谷遺跡出土品－」『シンポジウム堀之内式土器資料集－各地の堀之内式土器とその変遷－』市立市川考古博物館 1982年

8 山内清男「堀之内式土器」『日本先史土器図譜』第VI輯 1940年（1967年合冊再版）

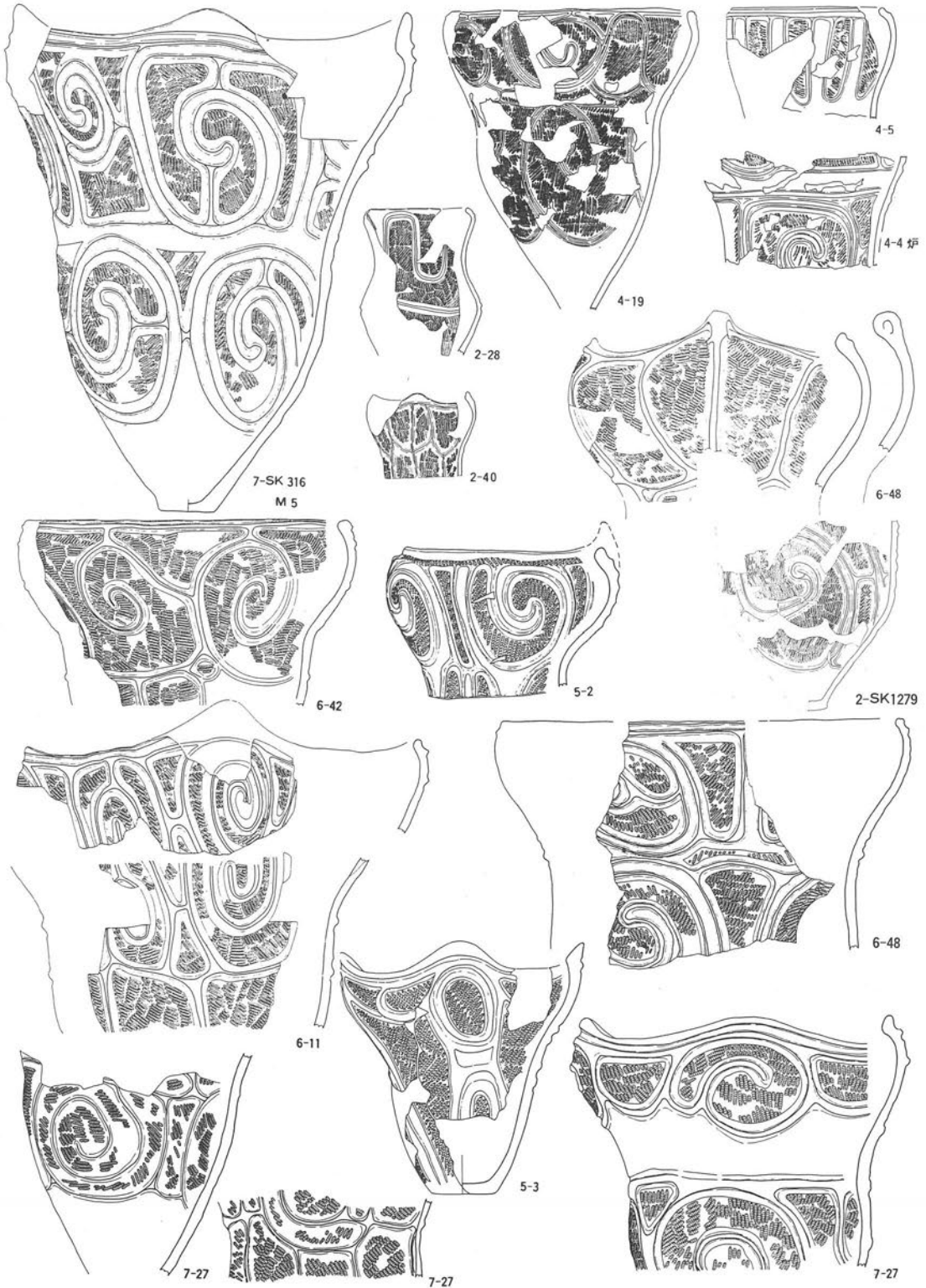
- 9 注7文献所収の諸氏の論文
 柳澤清一「称名寺式土器論（結編）」『古代』第68号 1980年
 今橋浩一「中妻貝塚の堀之内2式土器について」『取手と先史文化』上巻 1979年
 今橋浩一「堀之内式土器について」『大田区史（資料編）考古II』 1980年
 石井寛「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究集録』第5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1984年
 小川和博「堀之内2式土器編年の課題－東関東地方を中心として－」『奈和－15周年記念論文集－』 奈和同人会 1984年
 庄司克「堀之内Ⅱ式土器小考（1）」『貝塚博物館紀要』第7号 千葉市加曽利貝塚博物館 1981年
- 10 齊藤弘道「北関東」注7文献所収
- 11 沼田文夫『小場遺跡』 茨城県教育財団 1986年
- 12 今橋浩一『外塚遺跡』 下館市教育委員会 1985年
- 13 瓦吹堅他『廻り地A遺跡（上・下）』 茨城県教育財団 1982年
- 14 小林公明他『縄文土器大成② 中期』講談社 1981年
- 15 青木義脩他『馬場（小室山）遺跡』 浦和市教育委員会 1982年
- 16 小島幸雄他『井の上遺跡』『能生町史 上巻』 新潟県能生町役場 1986年
- 17 岩井重雄「馬場小室山遺跡出土の土偶付土器－貼付される土偶の性別について－」『研究調査報告書』第11集 浦和市立郷土博物館 1984年
- 18 江藤昭他『市ノ沢中崎遺跡』 横浜市市ノ沢中崎遺跡調査団 1980年
- 19 八幡一郎「最近発見された貝輸入蓋付土器」『人類学雑誌』第43巻第8号 1928年
- 20 安孫子昭二『神明貝塚』 庄和町教育委員会 1970年
- 21 茨城県五霞村冬木A貝塚からは貝輸入土器が発掘され、日立市南高野貝塚からオオツタノハ製の貝輪12点がまとめて検出された例も、本来は土器などに納められていた可能性が高い。
 高村勇他『冬木A貝塚・冬木B貝塚』 茨城県教育財団 1981年 写真24の6参照
 今橋浩一「オオツタノハ製貝輪の特殊性について」『古代探叢』 早稲田大学出版部 1980年
- 22 阿部芳郎「持ち運ばれる土器－「切断壺形土器」の移動と地域間交流－」『季刊考古学』第12号 雄山閣 1985年
- 23 馬目順一「綱取貝塚第四地点発見の堀之内Ⅰ式期土器の考察」『小名浜』 福島県いわき市教育委員会磐城出張所 1968年 第9図1
- 24 藤本彌城「大貫落神貝塚」『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』 1980年
- 25 中山真治『武蔵野公園低湿地遺跡』 武蔵野公園泥炭層遺跡調査会 1984年
- 26 成田滋彦「切断蓋付土器考」『弘前大学考古学研究』第3号 1986年
- 27 青木義夫「石器と岩石について」『年報』3 茨城県教育財団 1984年
- 28 宮下建司「日本における研磨技術の系譜－先土器・縄文時代の砥石と研磨技術を中心として－」『論集日本原史』 吉川弘文館 1985年
- 29 渡辺誠『縄文時代の漁業』 雄山閣 1973年
- 30 金子浩昌他『骨角器の研究 縄文篇Ⅰ・Ⅱ』 慶友社 1986年



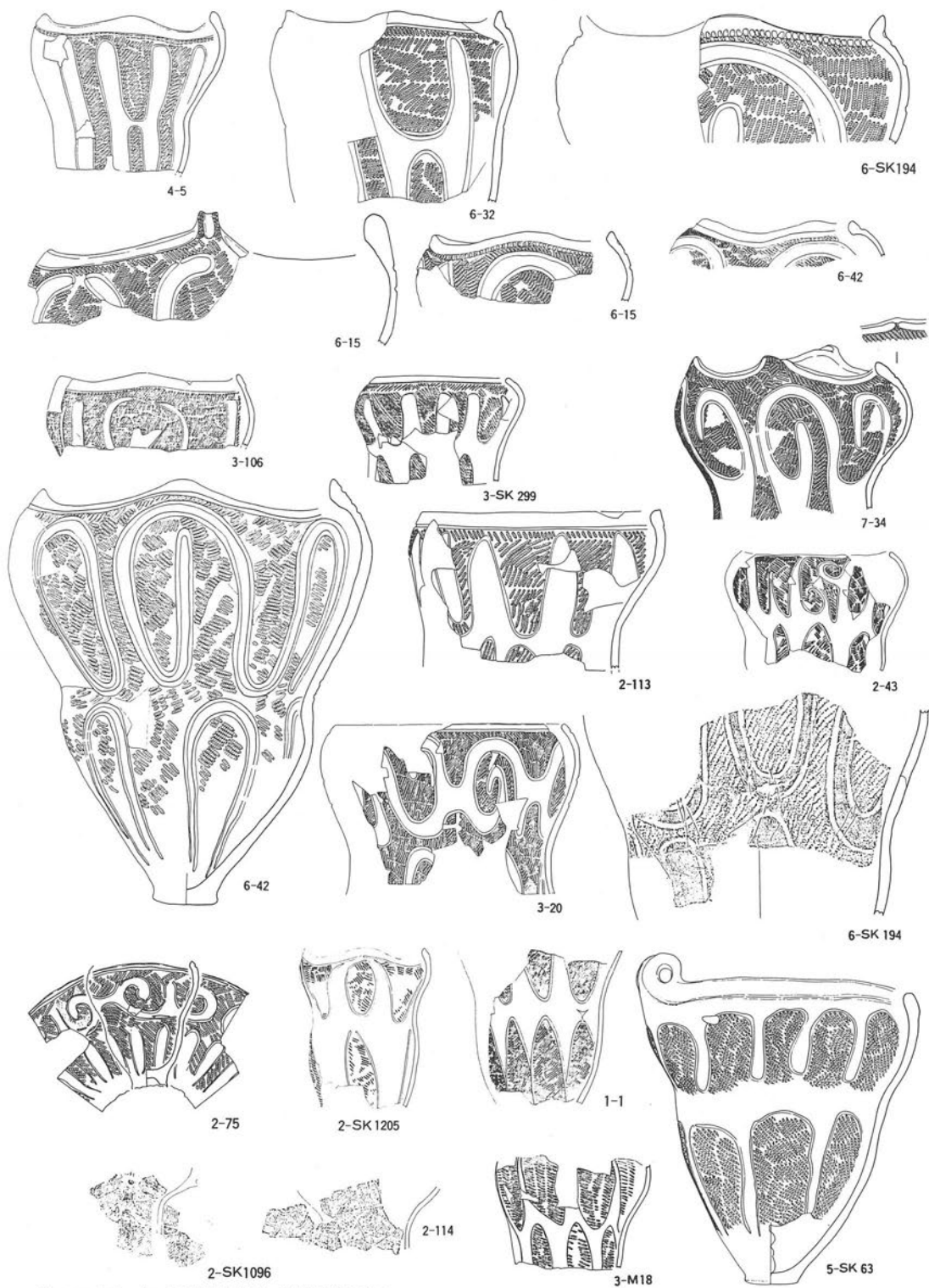
第 236 図 南三島遺跡縄文土器分類図(1)



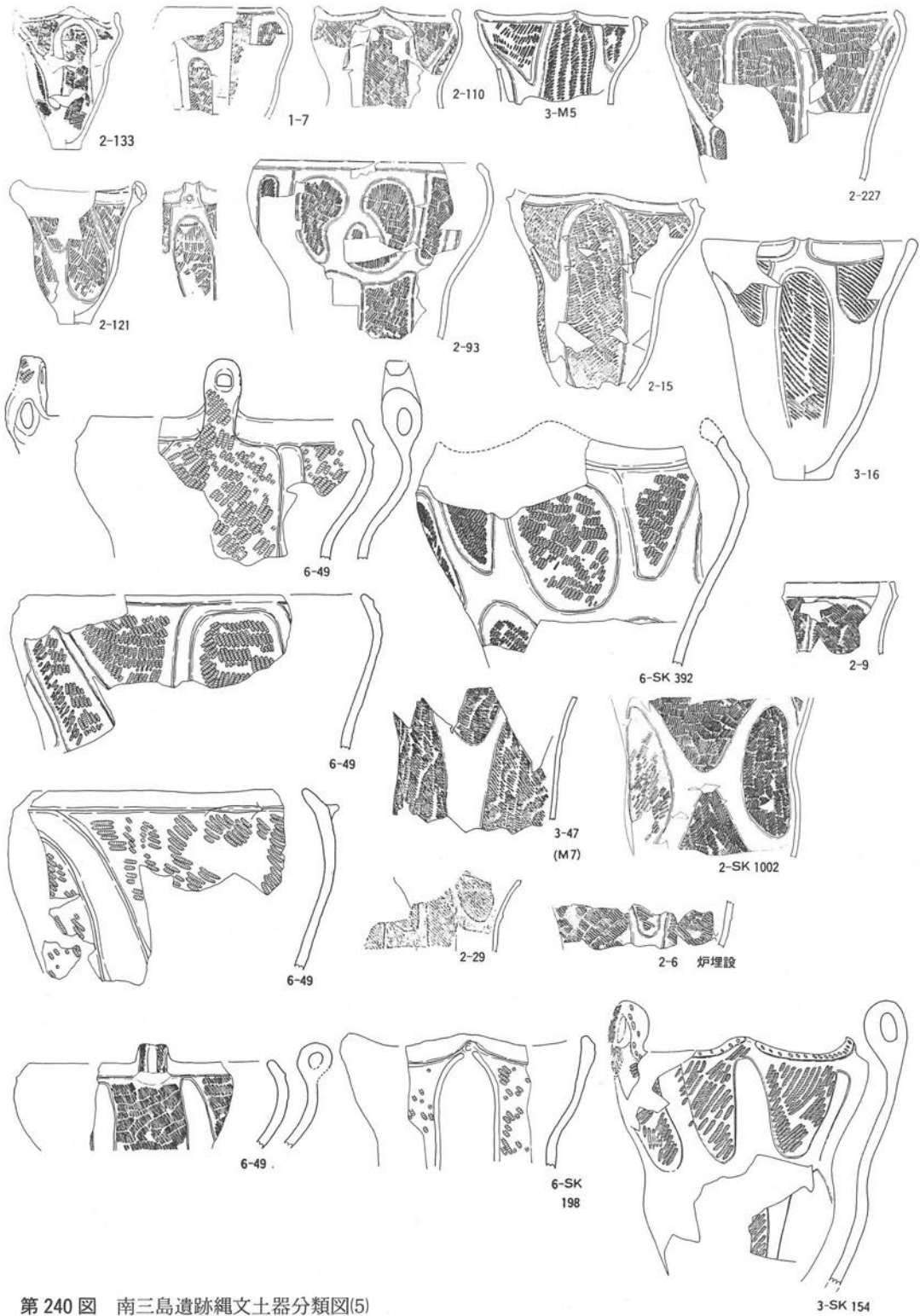
第 237 図 南三島遺跡縄文土器分類図(2)



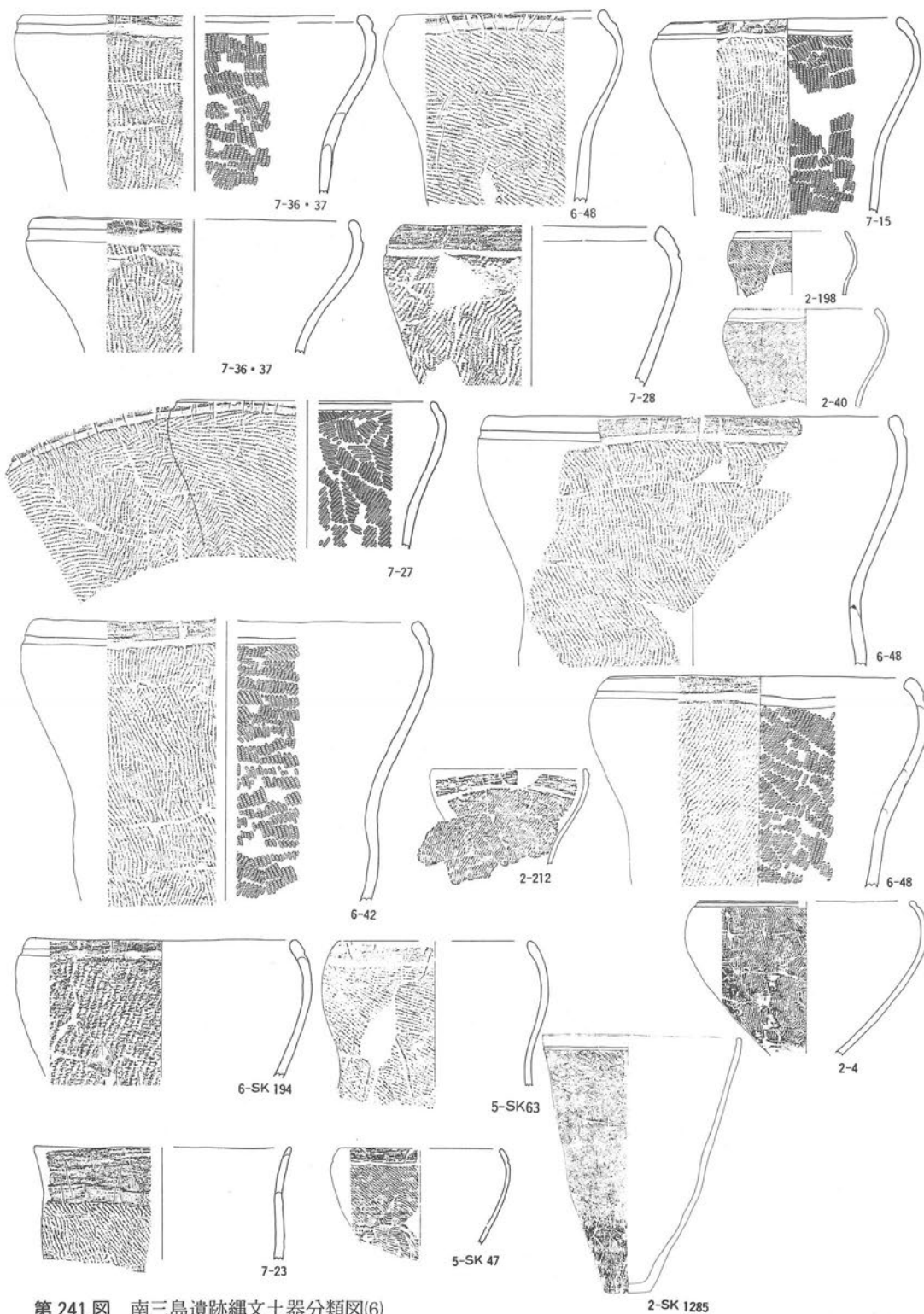
第 238 图 南三島遺跡縄文土器分類图(3)



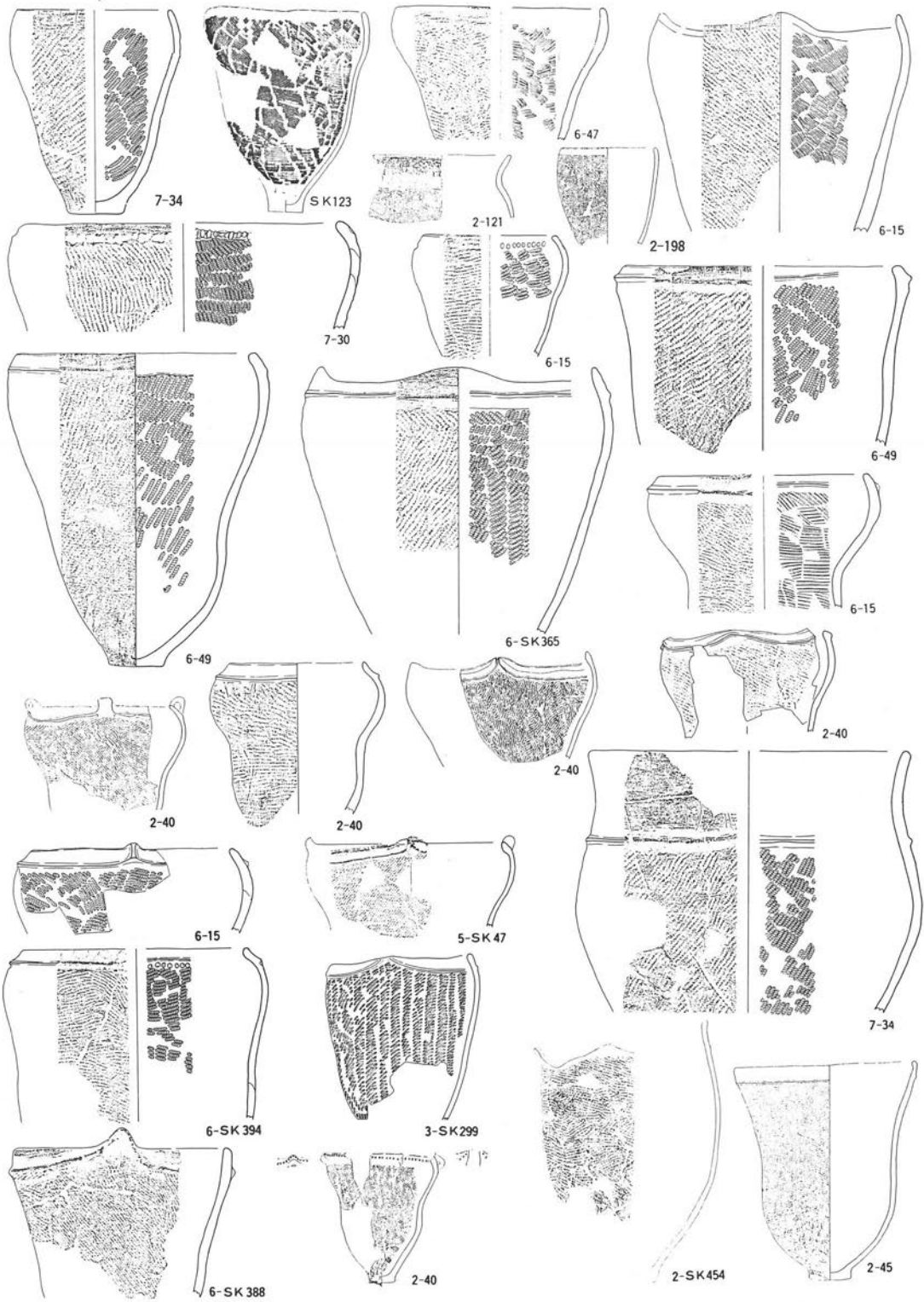
第 239 図 南三島遺跡縄文土器分類図(4)



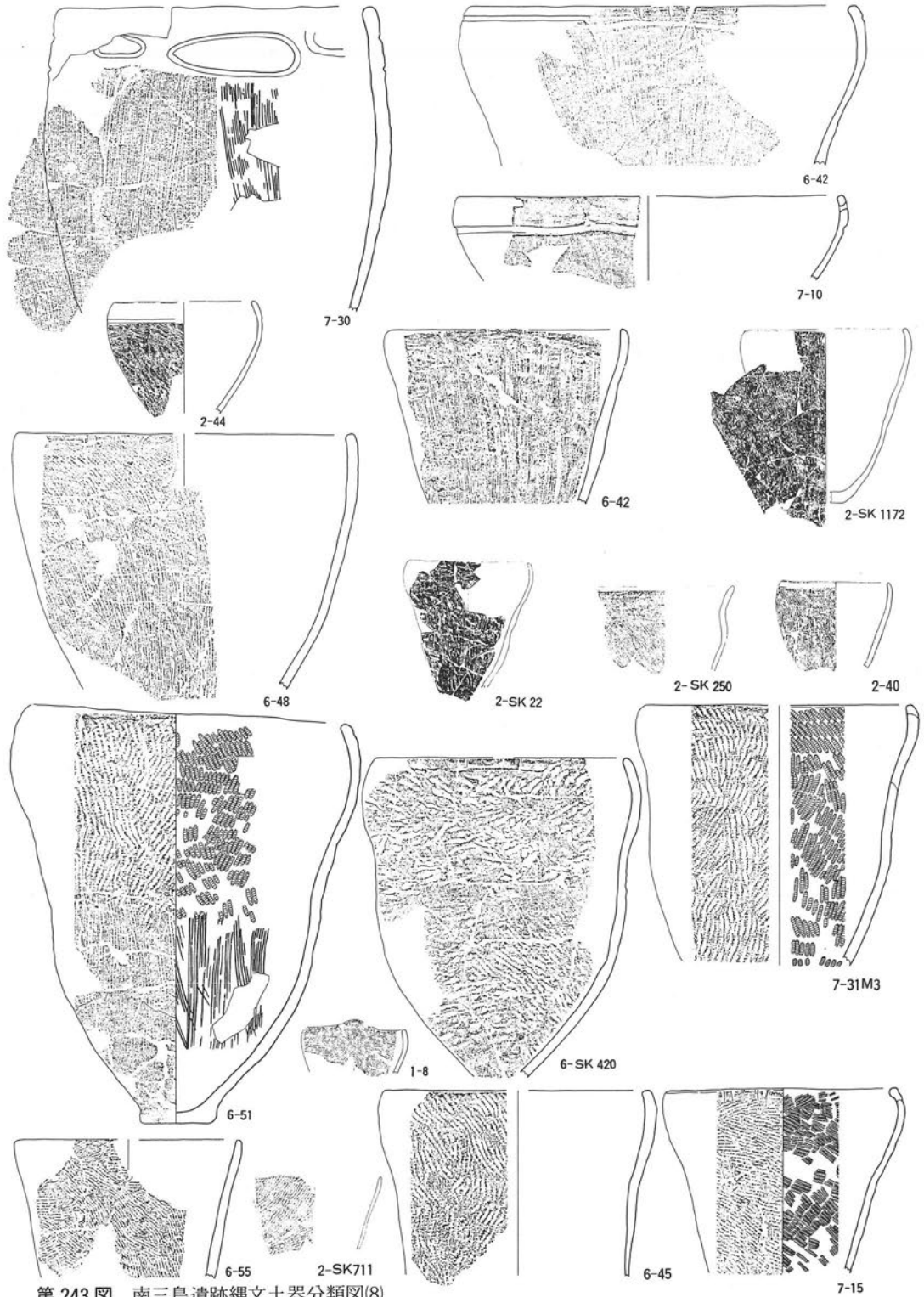
第 240 図 南三島遺跡縄文土器分類図(5)



第 241 図 南三島遺跡縄文土器分類図(6)



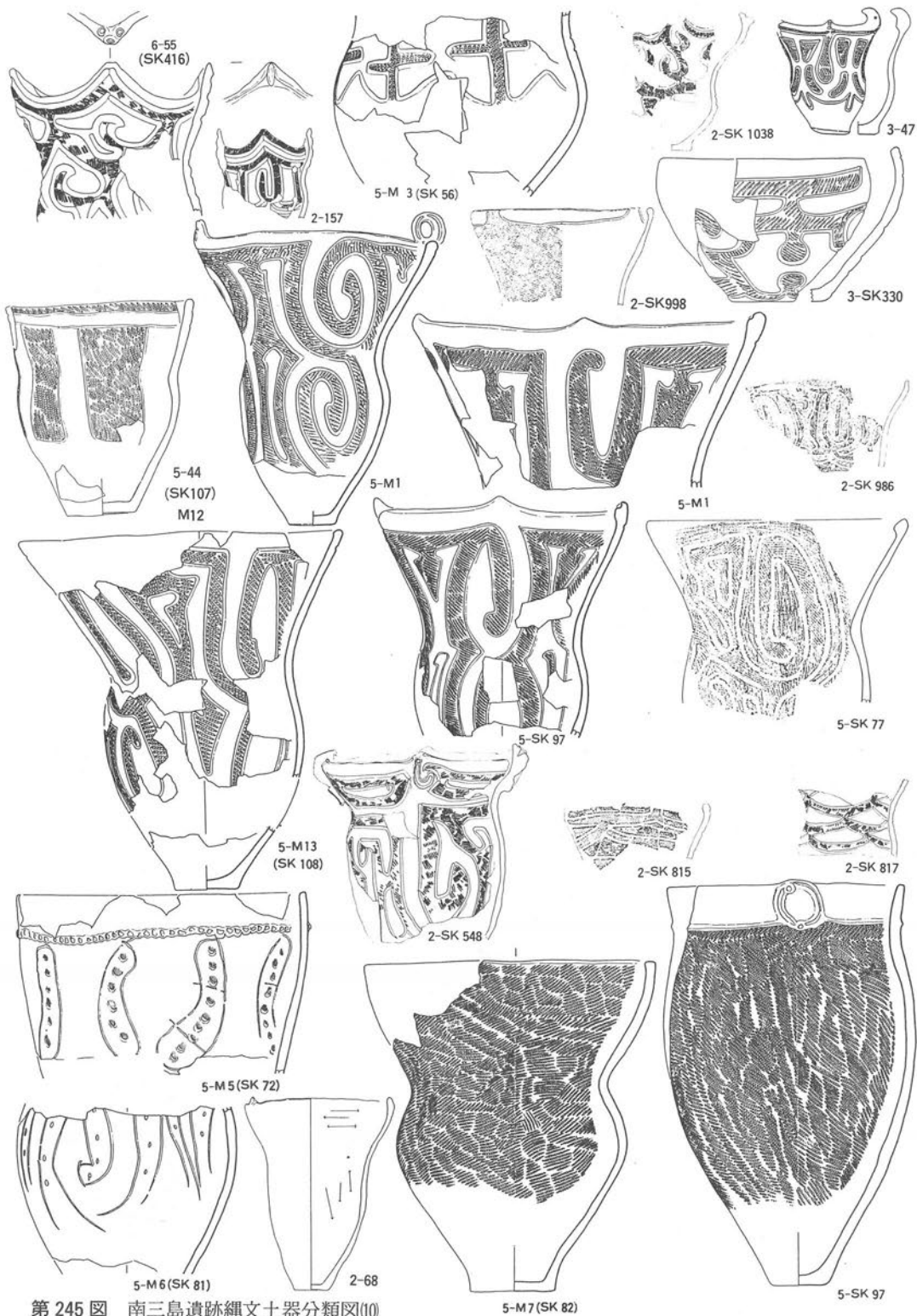
第 242 図 南三島遺跡縄文土器分類図(7)



第 243 図 南三島遺跡縄文土器分類図(8)



第244図 南三島遺跡縄文土器分類図(9)



第 245 図 南三島遺跡縄文土器分類図(10)

終章 む す び

昭和 56 年度から開始された広大な南三島遺跡の発掘調査は、昭和 61 年 7 月 31 日をもって終了した。調査に要した期間は 5 年 4 か月に及び、縄文時代から弥生・古墳・奈良・平安時代と続き、近世に至る複合遺跡であることが判明した。

南三島遺跡 3・4 区の調査は、昭和 60 年 4 月 1 日から昭和 61 年 7 月 31 日の 16 か月をかけて実施された。その結果、縄文時代早期後葉の炉穴 9 基、中期後葉から後期前葉にかけての住居跡 41 軒、弥生から古墳・奈良・平安時代にかけての住居跡 130 軒、土坑約 700 基、埋甕遺構 18 基、貝塚 28 か所、溝 34 条などが検出された。本書においては、縄文時代関係の遺構と遺物について報告し、若干の検討を加えた。

縄文時代早期後葉の野島式期の炉穴群は、2 区の北側を中心に 6 区や 3・5 区にもひろがりをもっている。中期後葉の加曾利 EⅢ 式期は、当遺跡が最も繁栄した時期と考えられ、1～7 区の各区から該期の住居跡が検出され、遺跡の南北両端に位置する住居跡は相互に約 400 m 以上も離れている。加曾利 EⅣ 式期の住居跡はやや分布範囲が狭くなり、1～3・6 区に存在する。称名寺式期の住居跡は 2・3・5～7 区に散っているが、数は少なくなる。堀之内 I 式期の住居跡は遺跡の西側の 3・5 区にはほぼ限定される傾向を示している。

堀之内 I 式期に属する 3 区の第 173・326・400 号土坑などからはアジ・スズキなどを主とする魚骨層が検出されたことは特筆されるべき成果である。また、同区の第 395 号土坑からは堀之内 I 式期に属する人体貼付土器が発見され、県内初例であり注目される。

貝塚は、住居跡や土坑の覆土中から大小のブロックとして検出される場合が多く、凹地に形成されたものはごく少ない。貝塚の形成時期は、加曾利 EⅢ・Ⅳ 式期と称名寺・堀之内 I 式期に大別されるが、前者では貝類以外の自然遺物がきわめて少なく、後者では鳥獣魚骨などが比較的多く出土している。また、称名寺・堀之内 I 式期の貝塚からは、貝刃・貝輪・垂飾・刺突具などの骨角貝製品が検出され、当遺跡の特徴の一つとなっている。

以上、当遺跡の調査成果を 3・4 区における縄文時代の遺構と遺物を中心として、既報告の他区の成果をも取り入れつつまとめてみたが、不十分である。今後とも、引きつづいて調査成果の分析・検討がなされることを期待したい。

なお、当遺跡 3・4 区の調査成果の一部をまとめ、若干の分析・検討をおこなうにあたっては、調査担当者のもとより、関係各位の御指導や御理解・御協力を得たことに対し、文末ながら深く感謝の意を表するものである。

附 章

南三島遺跡 3・4 区出土の脊椎動物遺存体

早稲田大学
金子浩昌

1984～85年の南三島遺跡における貝塚の発掘と動物遺存体の検出は、その5区における35か所の地点貝塚において確認され、報告されている。それらは縄文後期の称名寺式期から堀之内I式期に及ぶもので、貝類としてはハマグリ、シオフキ、ヒメシラトリガイを主体とするものであった。脊椎動物としては魚骨が多く、量的に最も多くを出土した第1貝塚(SMI)についてみると、ハゼ、アジ類、ウナギを主とするものであったらしい。この点では今回報告の土坑400での内容と近似するものがあり注目される。しかし、前回の報告では個体数推定のための十分な標本検出が行われていないし、その記載もないので比較検討はできない。いずれ再検討する必要があるであろう。いずれにしても、今回の調査のような土坑内堆積と一般の貝塚との二通りがこの遺跡にはあったわけである。そのうち、土坑内資料については一応全資料について目を通すことができた。そして最小個体数を調査することができたが、骨類標本のすべての検出を終了できたわけではない。今後も引きつづいて調査に当たりたいと考えている。

土坑以外の地点貝塚資料については量的にも少ないので、別に表示した。それらは縄文中・後期に相当する時期のもので、中期と後期にはいつからの漁獲量の著しい差異(標本のすべてが検せられたわけではないが)にこれまた注目されるであろう。

今回の調査に当り、山村貴輝氏、立正大学学生井上雄孝氏の協力を得、遺物の写真撮影は水上昭宏氏によった。これらの方々の御協力に厚く御礼を申し述べたい。

南三島遺跡にて検出された脊椎動物遺存体種名表

節足動物門	PHYLUM ARTHROPODA
甲殻綱	Class Crustacea
十脚目	Order Decapoda
短尾亜目	Suborder Brachyura
コブシガニ科	Family Leusosiidae
コブシガニ属	<i>Philyra sp.</i>
脊椎動物門	PHYLUM VERTEBRATA
軟骨魚綱	Class Chondrichtyes
エイ目	Order Rajiformes
1 科・属不明	Fam. et gen. indet.
コイ目	Order Cypriniformes
2 コイ科	Family Cyprinidae
3 ウグイ属	<i>Tribolodon sp.</i>

ナマズ目	Order Siluriformes
ギギ科	Family Bagridae
4 ギバチ	<i>Pseudobagrus aurantacus</i>
ウナギ目	Order Anguilliformes
ウナギ科	Family Anguillidae
5 ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>
ボラ目	Order Mugiliformes
6 ボラ科	Family Muilidae
7 ボラ	<i>Mugil cepbalus</i>
スズキ目	Order Perciformes
スズキ科	Family Serranidae
8 スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i>
ニベ科	Family Sciaenidae
9 属・種不明	Ge. et sp. indet.
イサキ科	Family Pomadasyidae
10 コショウダイ属	<i>Plectorhynchus sp.</i>
タイ科	Family Sparidae
11 マダイ	<i>Pagrus major</i>
12 クロダイ	<i>Acanthopagrus schlegeli</i>
アジ科	Family Carangidae
13 マアジ	<i>Trachurus japonicus</i>
ブリ	<i>Seriota quinqueradiata</i>
ハゼ科	Family Gobiidae
14 属・種不明	Ge. et sp. indet.
フグ目	Order Teraodontiformes
マフグ科	Family Tetraodontidae
15 ヒガンフグ	<i>Fugu pardale</i>
カサゴ目	Order Scorpaeniformes
カサゴ科	Family Scorpanidae
16 属・種不明	Gen. et sp. indet.
コチ科	Family Platycephalidae
17 コチ	<i>Platycephalus indicus</i>
カレイ目	Order Pleuronectiformes
カレイ科	Family Pleuronectidae
18 属・種不明	Ge. et sp. indet.
両生目	Class Amphibia
無尾目 (カエル類)	Order Anura

1 科・属不明	Fam. et gen. indet.
鳥 綱	Class Aves
ガンカモ目	Order Anseriformes
ガンカモ科	Family Anatidae
1 ヒシクイ属	<i>Anser sp.</i>
2 カモ類	Ge. et sp. indet.
キジ目	Class Galliformes
キジ科	Family Phasianidae
3 キジ属	<i>Phasianus sp.</i>
哺乳綱	Class Mammalia
食肉目	Order Carnivora
イヌ科	Family Canidae
1 タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
偶蹄目	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
2 イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
シカ科	Family Cervidae
3 ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

次に地点別に脊椎動物遺存体の特徴についてのべる。この他の哺乳類にはネズミ類数種が含まれる。

土坑内出土の脊椎動物遺存体

魚 類

エイ類：いずれの土坑においても少なかった。極めて僅かな歯と椎体があるのみであったところをみると、坑中にあった魚も頭部や胴部の一部であったのにすぎないことになる。椎体は径数 mm 程度のものであるが、魚体長は 30 cm 位はあったものなのであろう。

ウグイ類：主として咽頭骨で数を調べている。殆んど土坑 173 に含まれていたが、骨は小さく、咽頭骨上下間の最大長が 10 mm 前後もしくはそれより小さいものが多かった。

ウナギ：土坑 400, 326, 173 で目立った魚種であり、特に土坑 400 で多かった。大・小の個体のものが含まれ、大型のものでは歯骨が全長 22.0, 小さいので 12.0 mm 位のものである。現在普通にみかける“かば焼”用のウナギが体長 35 cm 位で歯骨の全長は 15.0 mm である。

ボラ類：一般に少なく、土坑 400 のみでやや多かった。小さな個体のものである。

スズキ：どの土坑にも含まれ、やや目立った種類である。土坑 173 と 400 に特に多かった。土坑内のスズキの骨もまた小さい個体のものであった。最も普通にみられたのはその歯骨の全長が 13.0 mm 前後のもので、体長は 100～200 mm 位であったと思われる。そして極く僅かであるが、200 mm 位になる個体の顎骨なども出土している。

クロダイ：スズキよりも少なく、土坑 173, 326 でやや目立った程度である。本種もまた小さい個体の

もので、前上顎骨全長6.0～8.0 mm 位である。体長は100 mm 前後、もしくはそれよりも小さい個体であったと思われる。

マアジ：土坑173において大量にみられたものであるが、その他の土坑では極く少なく、土坑400において若干が出土するという極端な量差を示す魚類であった。土坑173内のマアジは内蔵骨各部位の骨をよく遺していたが、保存率の良好であった腹棘によって個体数を確認することが出来ると考えられる。土坑173のみで1,143個体があり、貝層中の全域にわたってこれらが埋存していたのである。ここで出土したマアジは、その顎骨や腹棘の大きさからみて、体長100 mm 前後のものが大部分で、130 mm 位の個体が僅かにみられた位である。マアジは普通貝塚にみる標本には180 mm 以上になる大型の個体はみられないが、150 mm 前後の個体が多い。本遺跡のはそれよりも明らかに小型であった。

ハゼ類：本種もまた本遺跡において比較的多く出土し、土坑173, 400の他土坑326, 395においても少数であるが出土したものである。これらも体長100～120 mm 位の個体のものであったろうことが顎骨から推定される。この大きさは、これまで筆者がみた貝塚産のものとはほぼ同じであったと思われる。

フグ類：ごく稀にみられたに過ぎない。これも小さな個体のものである。前上顎骨、歯骨のエナメル質部分の長さが7.0～8.0 mm 程度の大きさしかないのである。

カレイ類：土坑173, 400で僅かに出土している。これも小型のものである。

以上の他にさらに5～6種の魚の遺骸が出土しているが、いずれも数少ない。しかし、そのいずれもが上述のスズキ、クロダイなどと同様に小型のものであったことは変りない。

両生類、鳥類、哺乳類

カエル類と若干の鳥骨（小型のカモ類である）、野ネズミ類とタヌキが1点（土坑173）みられた。カエル、野ネズミ類が、土坑173, 400でやや目立つが、これを食用としたものとみるかどうかはその出土の状況が問題となろう。つまり食用とされたとすれば当然解体されているはずであるから、骨はそのような出土を示すはずである。これについては発掘時に確かめなければならない点であり、今では確認し難い。しかし、出土量の全体が特に多いものではなく、こうした小獣、小動物を捕食する効果がどれ程であったかを考えると、自然の混入と考えることが妥当のようにも考えられる。

以上が土坑内の動物骨の概要であるが、特徴のある在り方を示すものであった。特にウナギ、アジ、スズキ、クロダイ、ハゼを主体とする魚種群があり、そのいずれもが体長100～120 mm 程の小さい個体のものによって占められていた。特にスズキ、クロダイなどの小さいことは、かつて縄文貝塚においては殆んどみることのなかったもので、しかも、それらが大量に出土していることはある特定の時期に特定の方法で捕獲された魚であったことが推察される。上記以外の魚もそのいずれもが小さい個体のものであり、同じ時期あるいは同じ方法で捕られたものであろうことが推察される。その量が違うのは、生息していた量の差が大きかったことを示そう。

上述した5か所の土坑の中で最も魚骨の多かったのは土坑173で、その個体数の85%はマアジであった。この魚は漁礁に好んで棲息するが、砂泥底を広く回遊する。かつて湾内の定置網などで大量にとれ、それも簡単な藁縄網であった。アジの産卵は大体4・5月頃で、7月には9 cm 位、8・9月は12 cm ～15 cm になる。土坑173のマアジは、上述したように体長10 cm 前後の個体が多く、おそらく夏の初め頃群をなして湾内にはいつてきたのを追い集めて捕ったのであろう。そうした機会が幾度かあり、その都度同じ場所に処理されていたのである。

土坑400はハゼを主体として、ウナギ、アジの検出が多かった。検出したハゼがマハゼとすれば、初夏

から秋にかけてが主たる漁期であったろう。特に秋には岸近くに寄るので漁獲も多くなったであろう。

土坑 173, 326, 400 のスズキやクロダイが小型のものが多いのも興味深い。クロダイは体長 10 cm 前後かそれより小さい。5・6月の産卵で、その年の秋口には 12 cm 位になるから、その頃の漁獲であろう。スズキも内湾の魚であり、12～1月に産卵、8月には 11 cm 位になる。本遺跡のスズキもそれ位の大きさである。

このように春から秋口にかけて、本遺跡の立地するような浅海域にまで回遊する小型の魚を捕る漁法があり、それぞれの魚の漁期に合わせるような方法を考えていたのであろう。従来の考古学的な知見によると、本遺跡にみられるような内湾のかなり奥部においては漁獲資源の少ないことが通説となっていたが、事実はこのような小型魚ではあるが、かなりの量の漁獲もある漁法があったのである。こうした事実を明らかにした本遺跡の意義は大きい。

南三島遺跡 3・4 区住居跡・土坑出土の魚・鳥・獣骨

3 区第 3 号住居跡内 b 貝層

カニのハサミ

4 区第 5 号住居跡内 f 貝層

ヘリトコブシ

3 区第 139 号土坑内 d 貝層 2 層東ベルト (最下層)

シカ 脛骨?

3 区第 173 号土坑内 d 貝層 2 層西ベルト

クロダイ 上顎骨 L (小形)

アジ 椎体 4 鱗 2 鱗棘 7

タヌキ \bar{C} (下顎犬歯)・L

イノシシ 臼歯・破片 踵骨 R

シカ 頸椎

3 区第 200 号土坑内第 1 混土貝層

クロダイ 前上顎骨 L (30 mm)

3 区第 200 号土坑内 2 区 3 層

ウナギ 腹椎

3 区第 326 号土坑 3 区貝層 10 層

ウナギ 椎体 40

3 区第 395 号土坑内 1 区貝層

カモ 尺骨 L 遠位端

3 区第 400 号土坑内灰層

ネズミ 切歯・(下顎) L

表 20 南三島遺跡3区各土坑別魚鳥獸類遺存体出土量表

類別	部位	R83	R83	R83	R83	R83	173計	R83	R83	R83	395計	R83	R83	R83	R83	R83	R83	R83	R83	R83	R83	最小個体数										
		172 1区X	173 1区X	173 2区X	173 d貝層 2層	173 中央部		326 1区 貝層8層	395 1区 9層	395 1区 10層		400 下面1区 灰	400 下面2区 3層	400 2区 4層	400 2区 5層	400 2区 6層	400 2区 7層	400 2区 12層	400 2区 13層	400 2区 14層	400 計	172	173	326	395	400						
エイ類	歯		4				4														5	5										
	椎体	1	18	5		2	25					1									1	2	1	1	0	0	1					
ウグイ	歯骨	r										1					1				4		6									
		l																				5		5								
	咽頭骨	r		3	4		3	10														4	1	5	0	12		0	6			
		l		4	6		2	12															6		6							
ウナギ	鋤骨	r	2	5	1		3	9	4			4	1								13	3	22									
		l	2	10	2		6	18	24	1	1	2	1	1								35	4 (mx2)	43	6	18	24	2	43			
	歯骨	r	6	7	5		(mx1)1	(mx1)1	14(mx3)4			2	2	1			vert 1	1				33(mx3)4	3 (mx2)	40								
		l																														
ボラ	歯骨	r		1			1															1	1	2								
		l		2			2																2	4	6	0	2	2	0	6		
	眼下骨	r		1			1															1		1								
	(主鰓蓋骨)	l		pm1	pm1		pm1															1		1								
スズキ	前上顎骨	r		8			16	24	2													5	6	12								
		l		6			20	26															2	2	5							
	歯骨	r	5	6	4		3	13	2			1	1								1	12	3	18								
		l	4	9	6		6	21	9	2	3	5	1	1								14	6	23	11	26	15	5	23			
	魚骨	r	2	5	1		3	9	2														10	4	15							
		l	2	4			5	9	6	1	3	4	1	1									14	4	18							
前鰓蓋骨	r	8	9	3		8	20	15	1		1	3								1	14	1	19									
	l	11	13	7		6 (vo2)	26 (vo2)	7	3	1	4		3									6 (vo4)	7	16								
クロダイ	前上顎骨	r		4	2		3	9																								
		l		3	1		1	5															1	1	2							
	上顎骨	r		2			1	3																								
		l		3			2	5																	1	1						
	歯骨	r	1	5	1		4	10															3	1	4	1	10	10	0	4		
		l		5	2		1	8																3		3						
	角骨	r	1	2				2																								
		l		2				2																	1		1					
前鰓蓋骨	r																															
	l																															
マアジ	前上顎骨	r		142	6	5		153														1			4	1	6					
		l	2	137	8			145																	3	2	5					
	歯骨	r	2	247	23		51	321																	6	8	14	2	1,143	0	0	32
		l	2	238	36	1	52	327						1											3	3	7					
腹棘	2	870	124		147	1,141						1												13	19	33						
ハゼ類	前上顎骨	r	3	25	29		14	68	6	1	4	5	1	2								1			37	16	57					
		l	3	26	19		15	60	9	2	3	5	2	1											52	24	80	3	98	14	10	93
	歯骨	r		58	24		16	98	11	1		1	2	1												50	11	65				
		l		38	25		13	76	14	2	8	10	1	1	1	vert 1										76	14	93				

表 21 南三島遺跡 3 区第 34 号住居跡魚類遺存体出土量表

種類	地点	skull 頭 骨*1	prem 前上顎骨	max 主上顎骨	den 歯 骨	preo 前鰓蓋骨	ope 鰓蓋骨	V abd cau 腹椎*2尾椎*3	付属骨格	外部骨格	破 片
コ イ	a e	r l						v 2 + 1			fr7
		r l						v 1 + 1			
ウ ナ キ	e	r l						v 10			
ギ キ	a 1	r l								胸鱗 3	
ス ズ キ	a e	r 角骨 1 l 舌顎 1		1	1.1		1				
		r l 角骨 1		1							
マ ダ イ	a 1	r 前頭 1 l	1 (35.0)							背鱗	
		r l	1 (37.0)								
ク ロ ダ イ	a e	r l	1 (34.0)				2 -(タイ科) 1				
		r 口蓋 2 l									
ハ ゼ 類	e	r l						v 10			
		r l						v 1			
ヒ ガ ン フ グ	a e	r 舌顎 1 l	1		22.0			v 1.1			
		r l	1		1						
カ サ ゴ 科	a e	r l	1 1	1 小型 1			1 1				
		r l			1	1		v 1			
ゴ 科	e	r l						v 1			
		r l	1			1					

種類	地点	skull 頭骨*1	prem 前上顎骨	max 主上顎骨	den 歯骨	preo 前鰓蓋骨	ope 鰓蓋骨	V abd cau 腹椎*2尾椎*3	付属骨格	外部骨格	破片	
コ チ	a	1	r	1								
		l	1		1		1					
	d	r										
		l					1					
e	13~	r	1									
	14	l										
カ レ イ 類		r						V 1				
		l										
魚 骨 片	a	1	r					不明 ♡		fin 10	125	
		l										
	6	r									1	
		l									トリ fr	
	d	r								fin 8		
		l										
	e	13~	r								大型の腎鰓血管間棘	3
		14	l									
13	r							不明 ♡ 5			35	
	l											

〈頭骨〉 *1 fro 前頭骨, supo 上後頭骨, bao 基底後頭骨, prev 鋤骨, para 副蝶形骨, ifo 眼下骨, ang 角骨, pal 口蓋骨, qua 方骨, hyo 舌顎骨, bra 鰓条骨, upp pha 上咽頭歯, low pha 下咽頭歯

*2 at 環椎, ax 軸椎 V椎骨

*3 preu 尾鰓椎前椎体, ura 尾鰓椎, epu 上尾骨, urn 尾神経骨, hyu 下尾骨, urs 尾部棒状骨

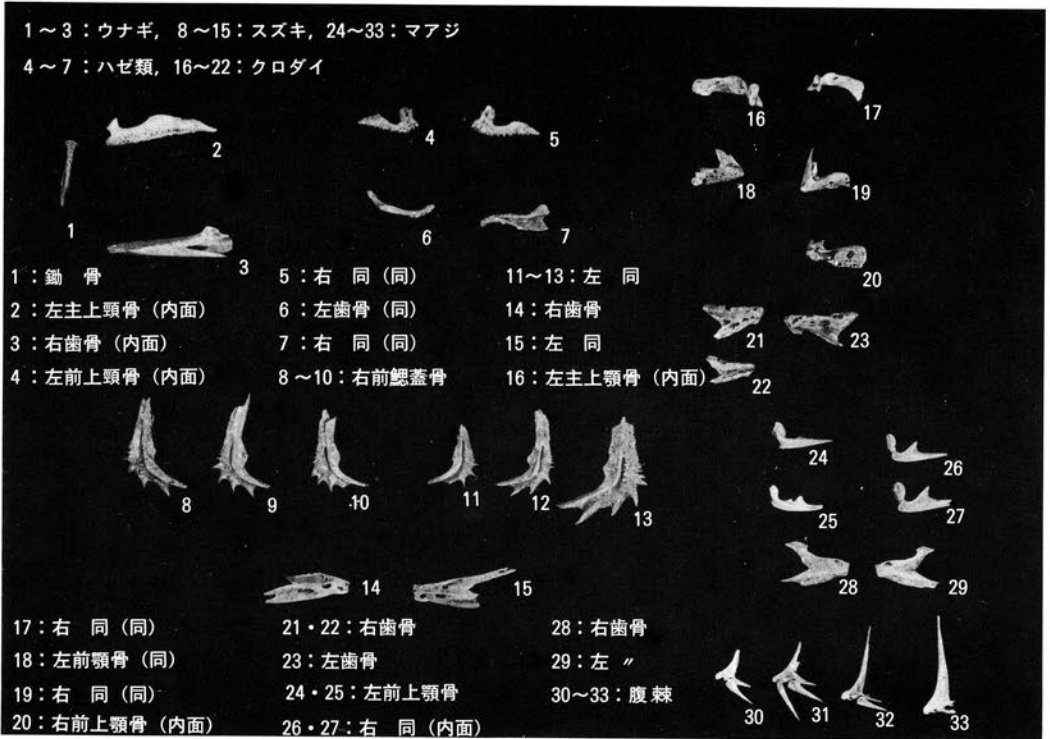
〈付属骨格〉 scap 肩甲骨, cra 烏口骨, cle 擬頰骨, pel 腰帶, act 射出骨, inn 神経間棘, hes 血管間棘

〈外部骨格〉 scale 鱗, spine 棘, soft ray 軟条, D 背鰭, A 臀鰭, C 尾鰭, P 胸鰭, V 腹鰭

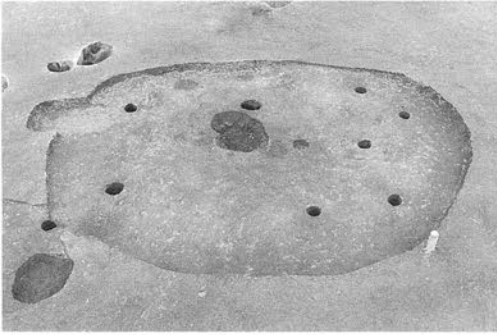
表 22 南三島遺跡 3 区第 34 号住居跡鳥獸類遺存体出土量表

種類	地点	cra 頭蓋骨 * 1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*2	scap 肩甲骨 * 3 p ⊕ d	hum 上腕骨 p ⊕ d	nad 桡骨 p ⊕ d	ul 尺骨 p ⊕ d	mc 中手骨 p ⊕ d	pel 寛骨 p ⊕ d	fe 大腿骨 p ⊕ d	tib 脛骨 p ⊕ d	fib 腓骨 p ⊕ d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p ⊕ d	dig 指骨 I ⑩ ⑪	破片
カ モ 類	a 1	r l					1											
	2	r l					1											
	3	r l				1					1							
	1~6 ベルト	r l				1												
	b	r l				鳥口 1					1 (ガン骨)							
	d	r l							①									
キ ジ	a 1	r l							1									
	1~6 ベルト	r l						1 1 別個										
不明	a	r l																1
タ ヌ キ	d 8	r l	M ₁															
	e 8~13 ベルト	r l													1			
	14	r l		頸椎														
イ ノ シ	a 1	r l	Ir ⊕, C ⊕, Is															
	1~2 ベルト	r l	後頭顆															2
	6	r l	頸椎											1				
	1~6 ベルト	r l	吻端骨 Is ⊕															
シ	b 8	r l																中節骨
	d	r l	I ₁ ⊕															1
	e 13~16 ベルト	r l	r C ⊕															3 4
シカ	a 1	r l												1				
ヒ ト	a 1	r l										1						3
	1~6 ベルト	r l									1							

* 1 occ 後頭骨, par 頭頂骨, tem 側頭骨, fro 前頭骨, inc 切歯骨, zygo 頬骨, hyo 舌骨 ⊕ : エナメル質磨耗
 * 2 At 第1頸椎, Ax 第2頸椎, Cer 頸椎, T 胸椎, L 腰椎, S 仙椎, Cau 尾椎, R 肋骨
 * 3 cora 鳥口骨, clav 鎖骨



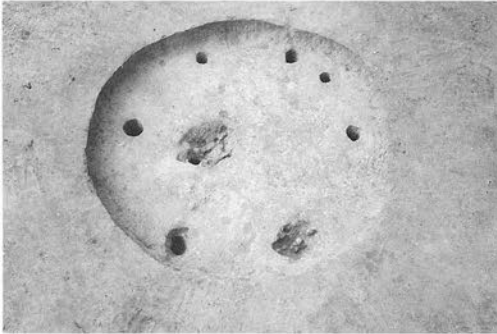
写 真 图 版



第3号住居跡



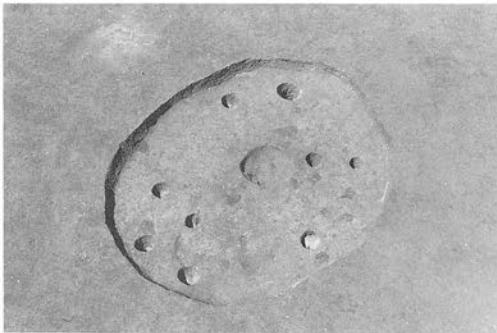
第8号住居跡



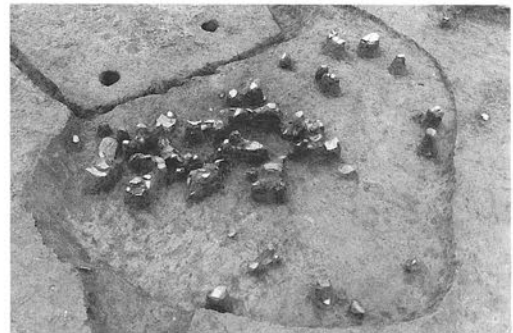
第9号住居跡



第10号住居跡



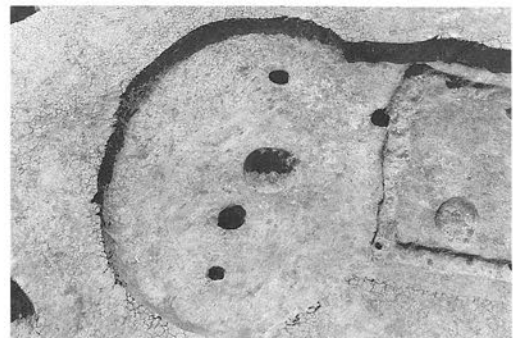
第16号住居跡



第17号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡



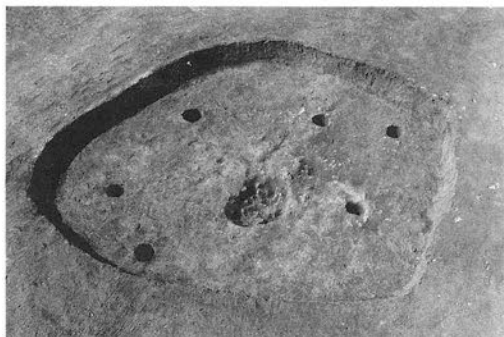
第20号住居跡



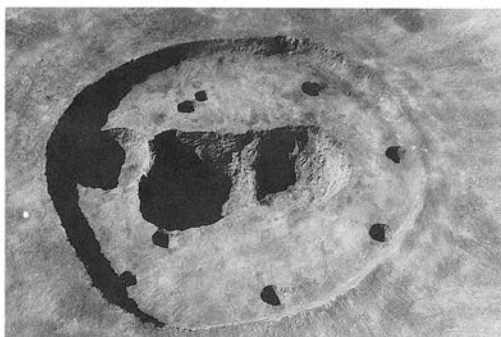
第28号 住居跡



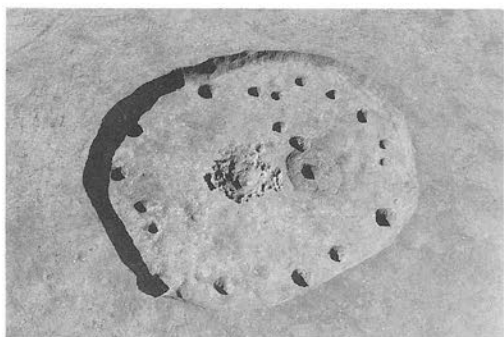
第34・58号 住居跡



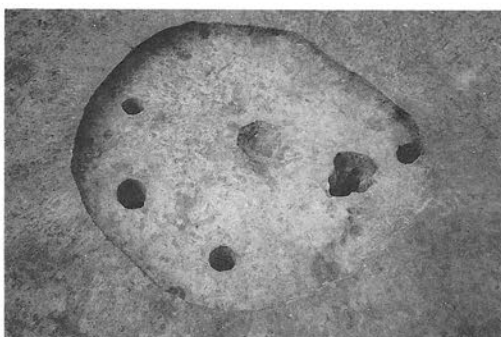
第35号 住居跡



第46号 住居跡



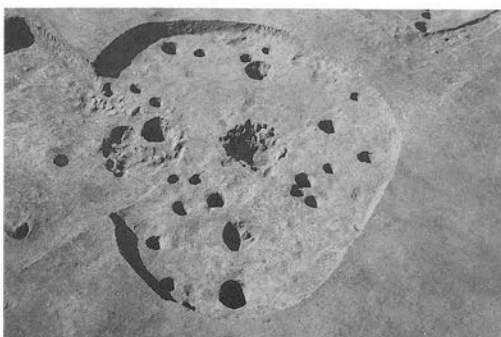
第47号 住居跡



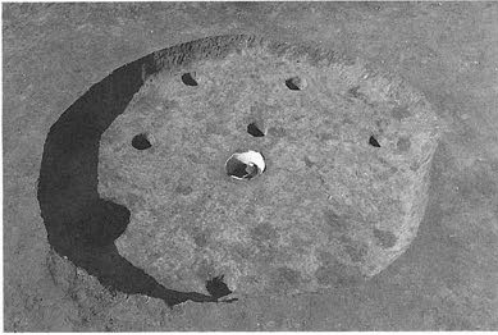
第48号 住居跡



第69号 住居跡遺物出土状況



第49・69号 住居跡



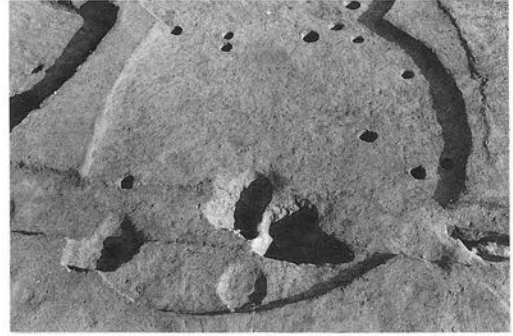
第56号 住居跡



第72号 住居跡



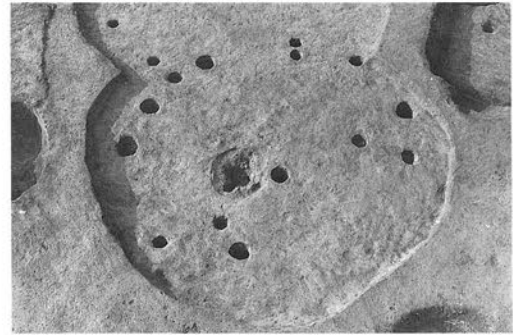
第74号 住居跡



第79号 住居跡



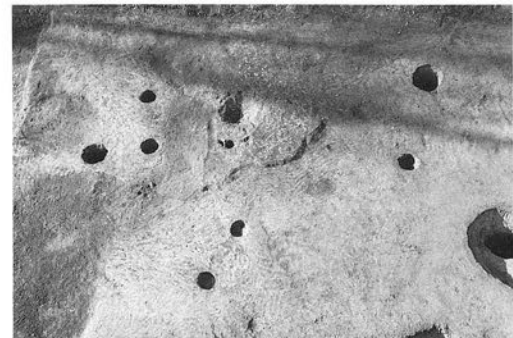
第80号 住居跡



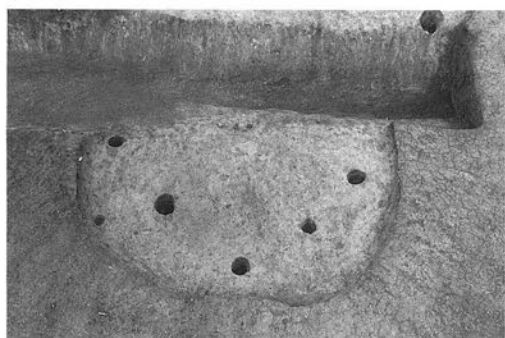
第81号 住居跡



第83号 住居跡



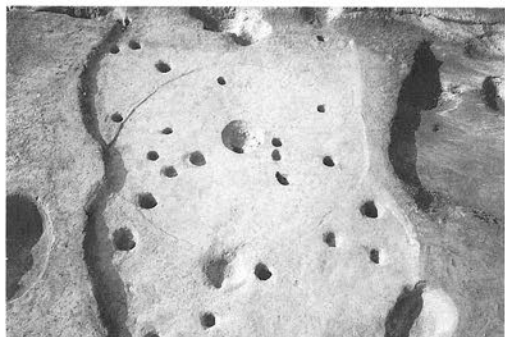
第86号 住居跡



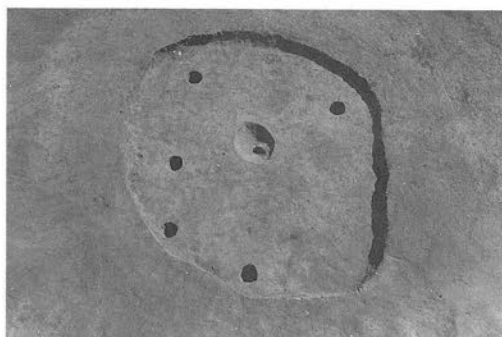
第87号 住居跡



第88号 住居跡



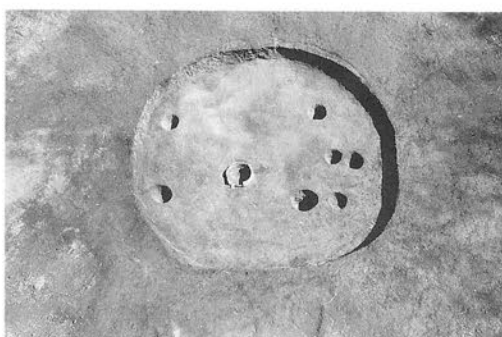
第89号 住居跡



第96号 住居跡



第105号 住居跡



第106号 住居跡



第106・109号 住居跡



第117・118号 住居跡



第 9 号 住居跡炉



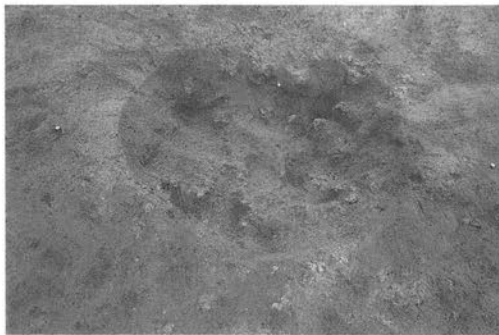
第 34 号 住居跡炉



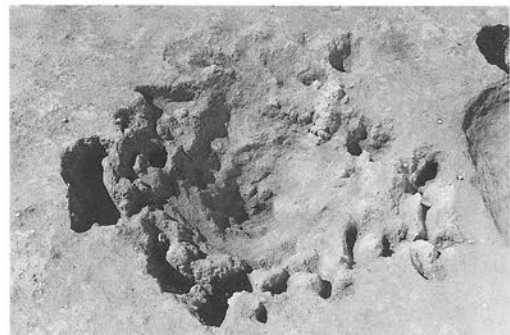
第 34 号 住居跡炉



第 34 号 住居跡炉



第 35 号 住居跡炉



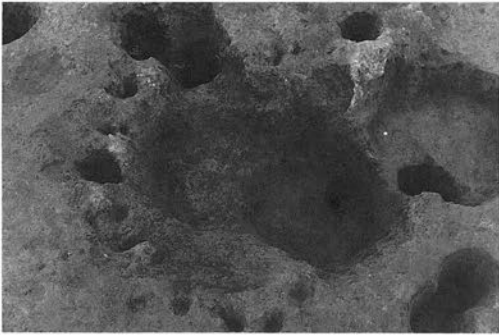
第 47 号 住居跡炉



第 49 号 住居跡炉



第 56 号 住居跡土器埋設炉



第 58 号 住居跡炉



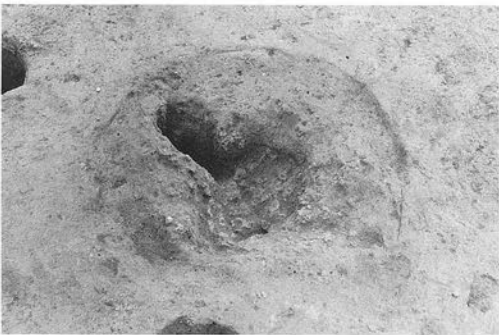
第 69 号 住居跡炉



第 79 号 住居跡炉



第 80 号 住居跡炉



第 81 号 住居跡炉



第 83 号 住居跡炉



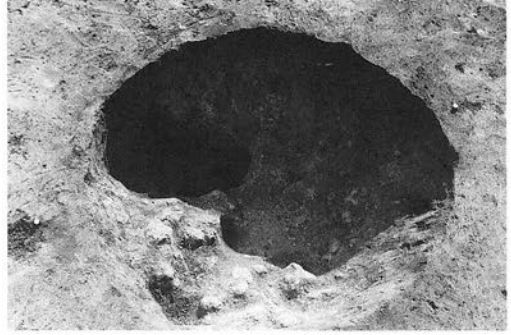
第 86 号 住居跡炉



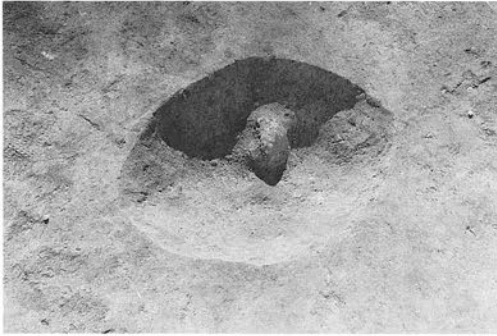
第 87 号 住居跡炉



第 88 号 住居跡炉



第 89 号 住居跡炉



第 96 号 住居跡炉



第 105 号 住居跡炉



第 106 号 住居跡土器埋設炉



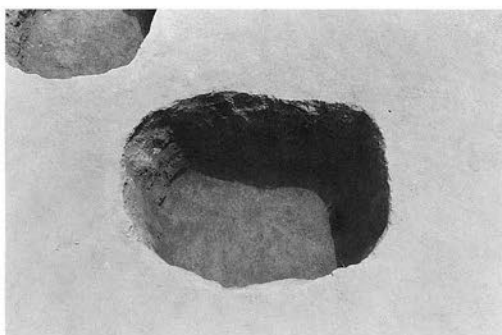
第 106 号 住居跡土器埋設炉



第 117 号 住居跡炉



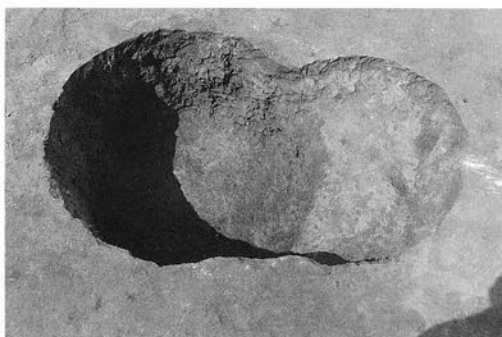
第 118 号 住居跡炉



第 10 号 土 坑



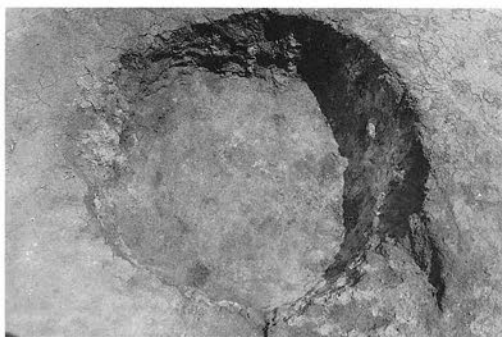
第 15 · 53 号 土 坑



第 16 号 土 坑



第 22 号 土 坑



第 23 号 土 坑



第 28 号 土 坑



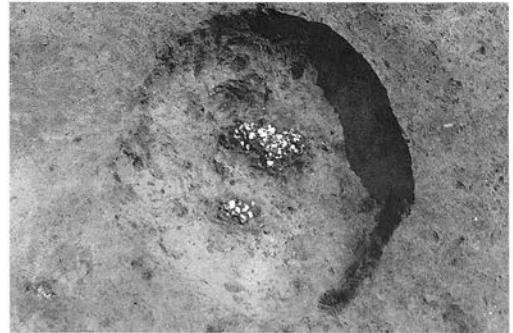
第 35 号 土 坑



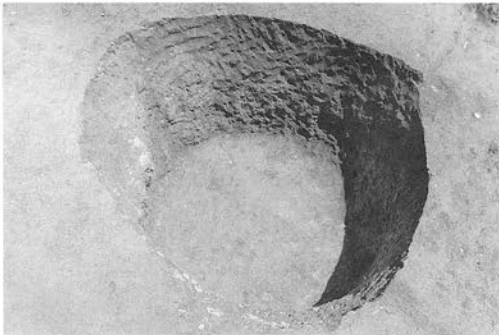
第 45 号 土 坑



第 56 号 土 坑



第 58 号 土坑貝ブロック検出状況



第 60 号 土 坑



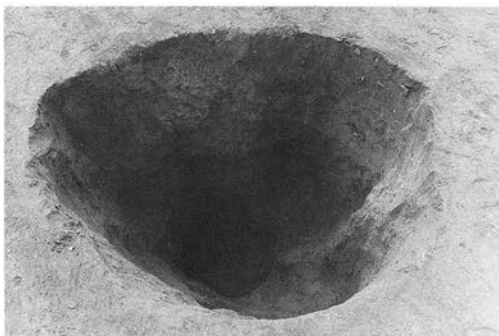
第 64・70 号 土 坑



第 68 号 土 坑



第 69 号 土 坑



第 72 号 土 坑



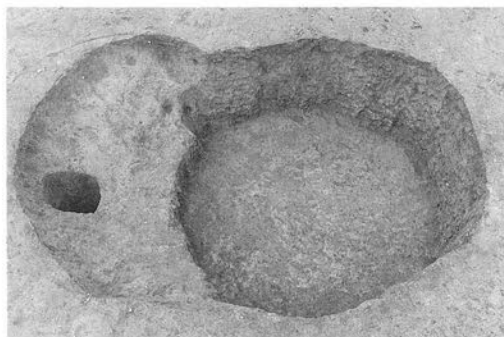
第 73 号 土坑貝ブロック検出状況



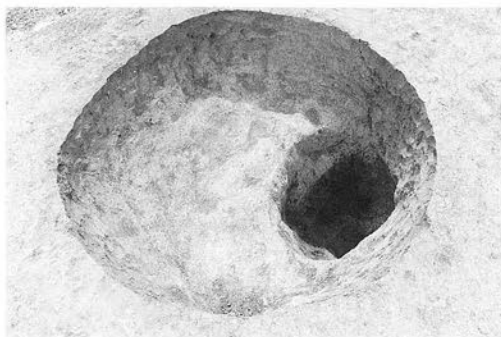
第76号土坑



第77号土坑



第77·90号土坑



第79号土坑



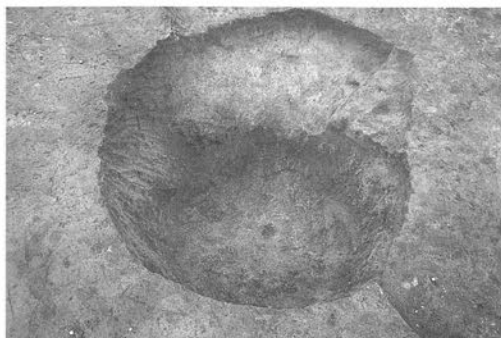
第81号土坑



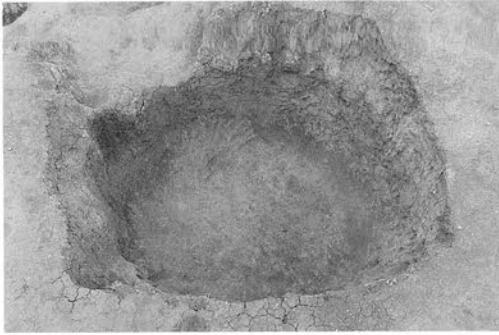
第82号土坑



第84号土坑



第88号土坑



第 101 号 土 坑



第 104 号 土 坑



第 109 号 土坑遺物出土状況



第 110 号 土坑遺物出土状況



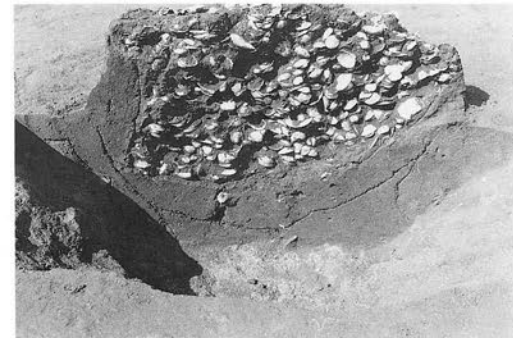
第 112 号 土坑貝ブロック検出状況



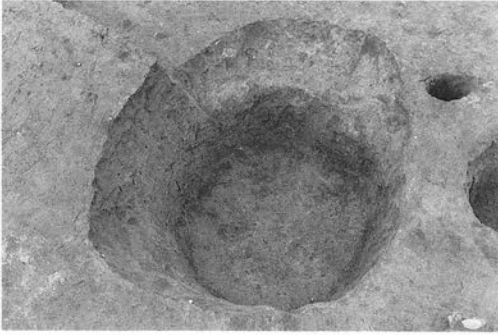
第 114 号 土 坑



第 117 号 土 坑



第 123 号 土坑貝層断面



第 131 号 土 坑



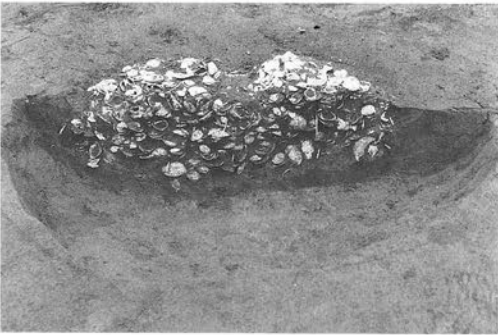
第 139 号 土坑貝層断面



第 139 号 土 坑



第 156 号 土 坑



第 166 号 土坑貝層断面



第 166 号 土 坑



第 172 号 土 坑



第 173 号 土坑魚骨層



第 173 号 土坑魚骨層断面



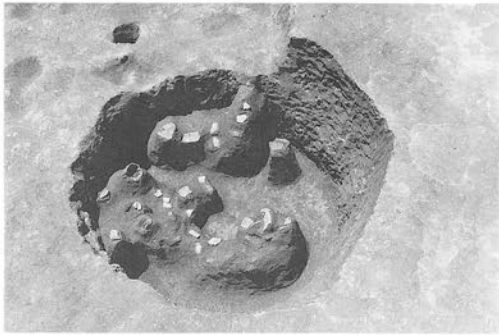
第 173 号 土 坑



第 174 号 土 坑



第 177 号 土 坑



第 178 号 土坑遺物出土状況



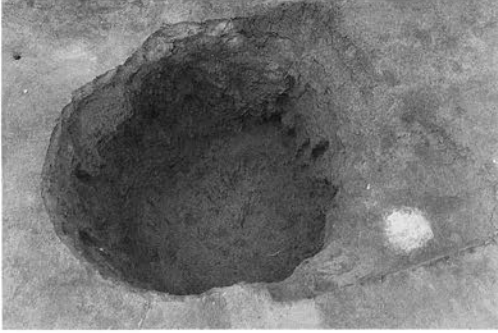
第 178 号 土 坑



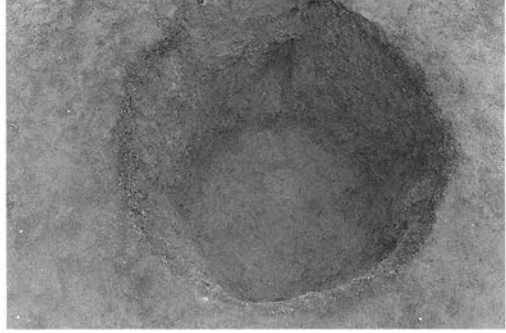
第 196 号 土坑灰ブロック検出状況



第 200 号 土坑土層断面



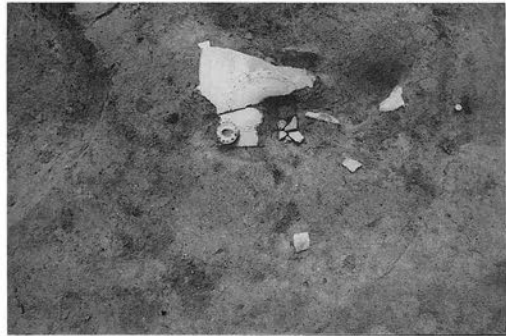
第 200 号 土 坑



第 214 号 土 坑



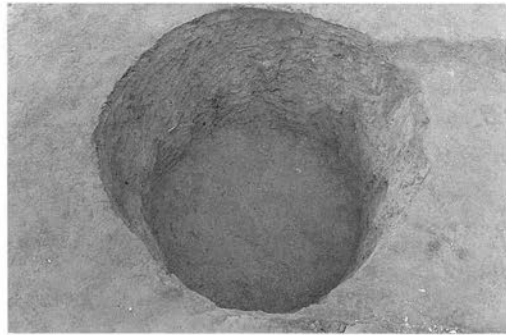
第 217 号 土 坑



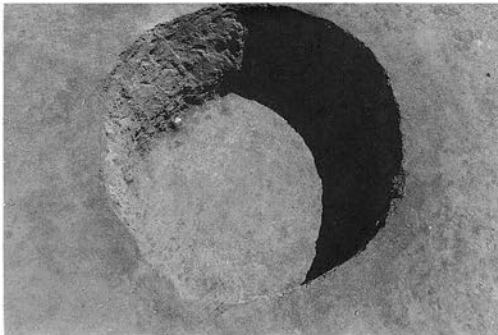
第 219 号 土坑遺物出土狀況



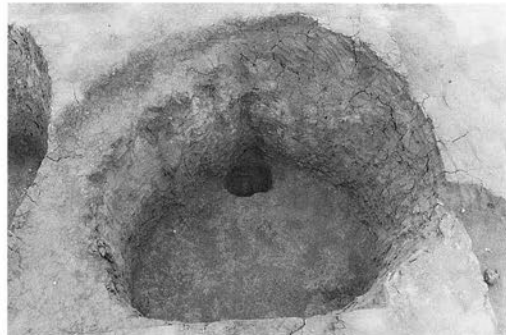
第 231 号 土 坑



第 233 号 土 坑



第 234 号 土 坑



第 241 号 土 坑



第 245 号 土 坑



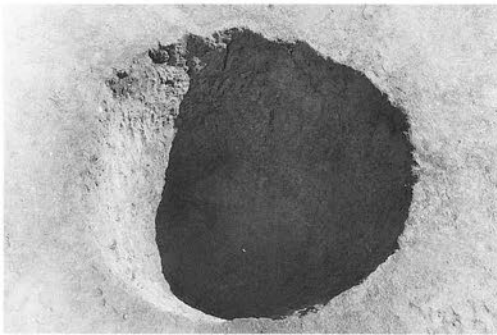
第 246 号 土坑遺物出土狀況



第 247 号 土 坑



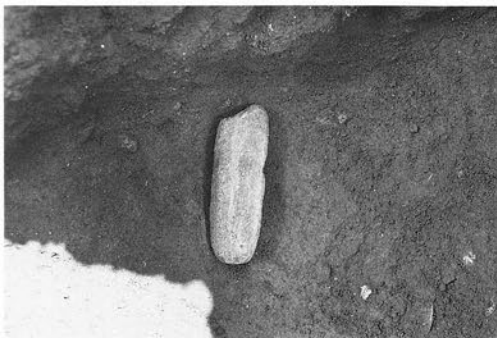
第 249 号 土 坑



第 251 号 土 坑



第 255 号 土坑遺物出土狀況



第 255 号 土坑遺物出土狀況 (凹石)



第 260 号 土 坑



第 263 号 土 坑



第 267 号 土 坑



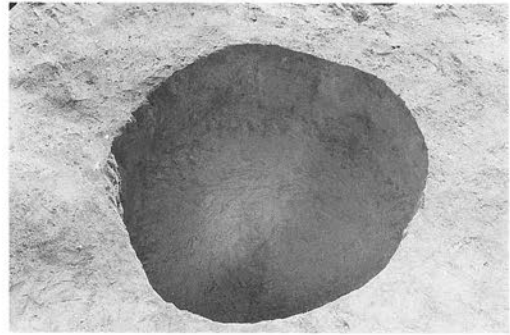
第 272 号 土 坑



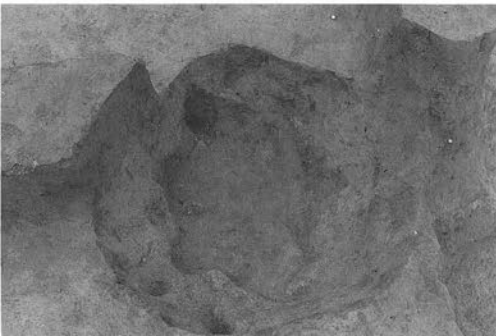
第 273 号 土 坑



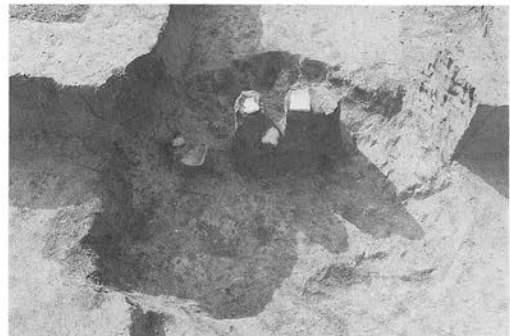
第 274 号 土 坑



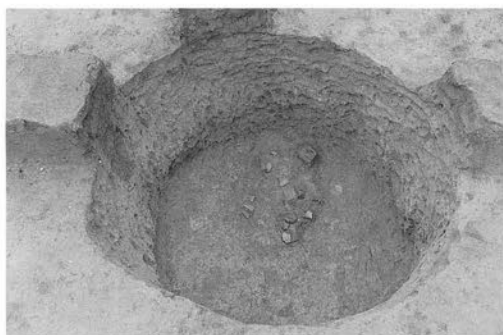
第 275 号 土 坑



第 279 号 土 坑



第 280 号 土坑遺物出土狀況



第 285 号 土坑遺物出土状況



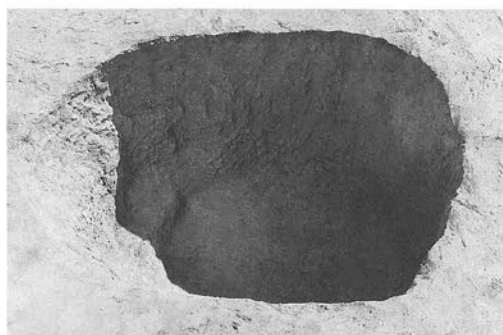
第 286 号 土坑遺物出土状況



第 286 号 土 坑



第 289 号 土 坑



第 290 号 土 坑



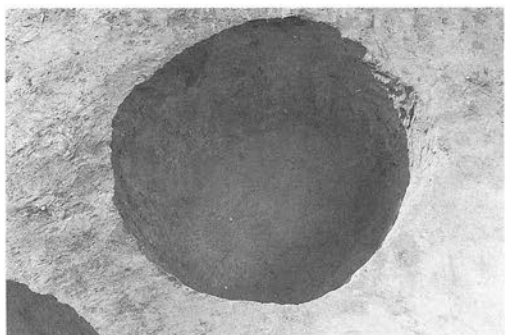
第 294 号 土坑上面貝ブロック検出状況



第 299 号 土 坑



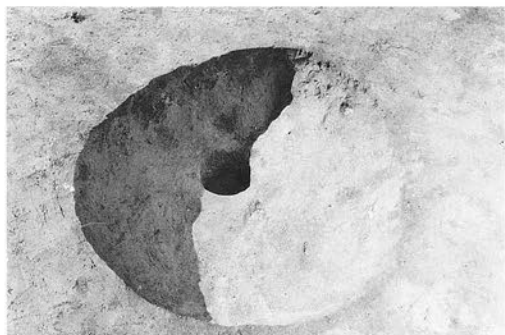
第 304・336 号 土 坑



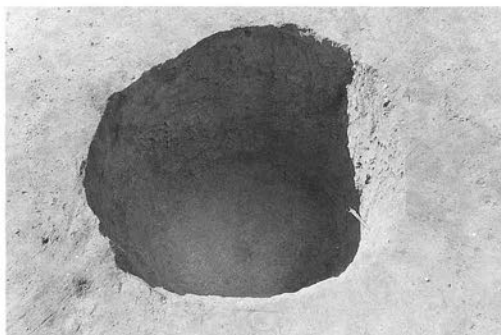
第 305 号 土 坑



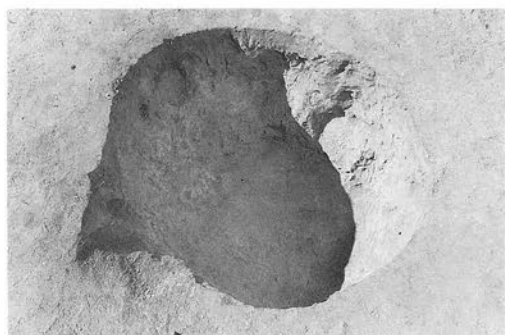
第 308 号 土 坑



第 309 号 土 坑



第 313 号 土 坑



第 314 号 土 坑



第 315 号 土 坑



第 320 号 土 坑



第 322 号 土 坑



第 326 号 土坑土層断面



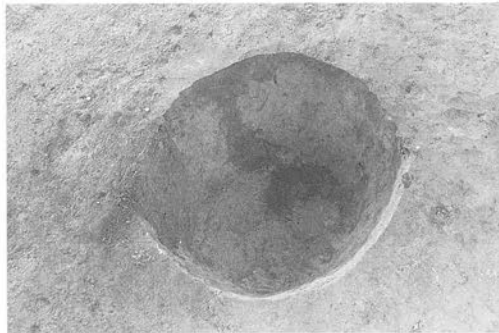
第 326 号 土坑上面貝ブロック検出状況



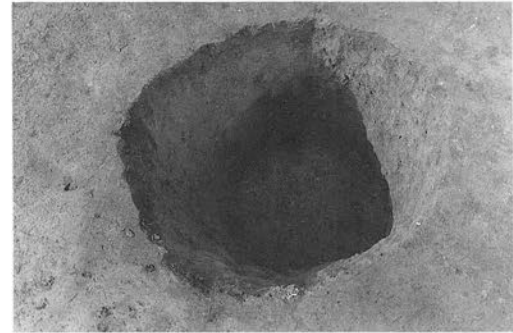
第 329 号 土 坑



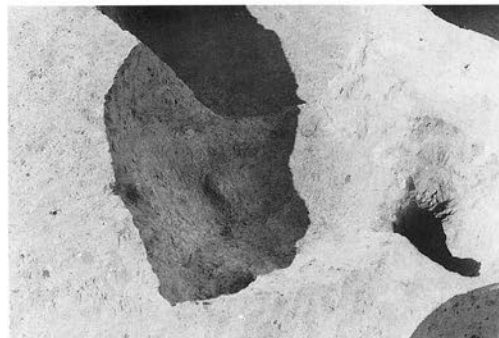
第 330 号 土坑遺物出土状況



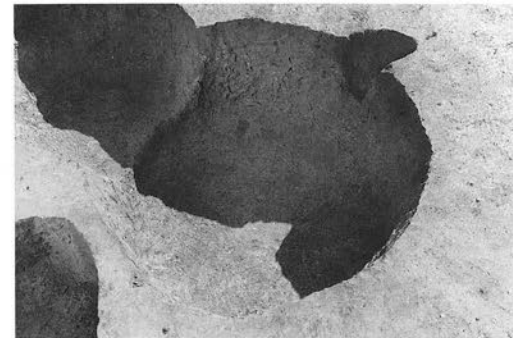
第 333 号 土 坑



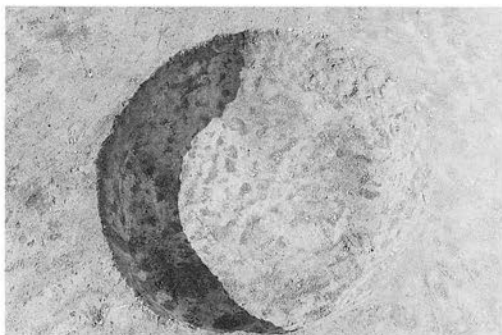
第 334 号 土 坑



第 338 号 土 坑



第 339 号 土 坑



第 340 号 土 坑



第 350 号 土 坑



第 352 号 土 坑



第 353 号 土 坑



第 354 号 土 坑



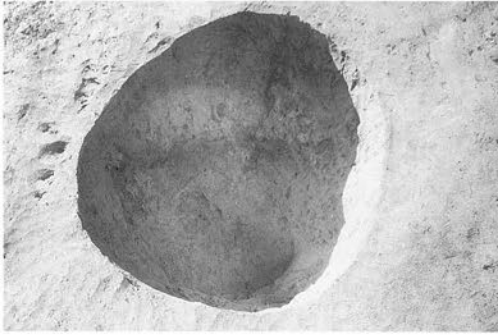
第 355 号 土 坑



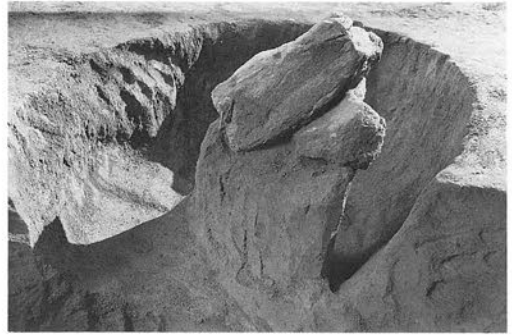
第 357 号 土 坑



第 362 · 363 号 土 坑



第 373 号 土 坑



第 387 号 土坑配石出土状况



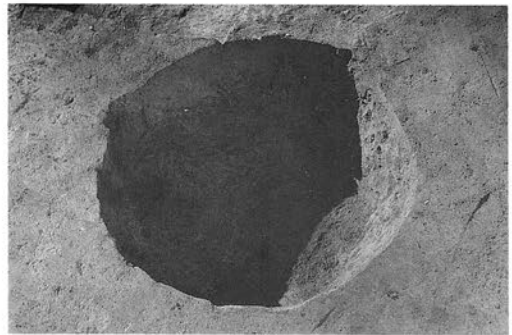
第 387 号 土坑配石出土状况



第 387 号 土 坑



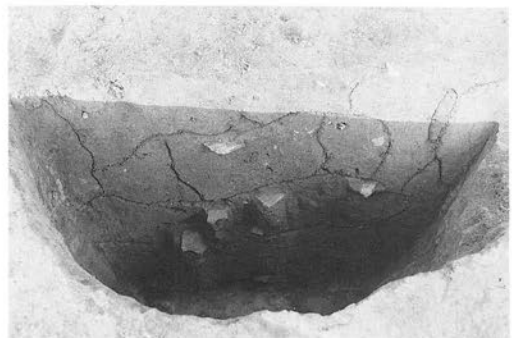
第 388 号 土 坑



第 389 号 土 坑



第 391 号 土 坑



第 393 号 土坑土层断面



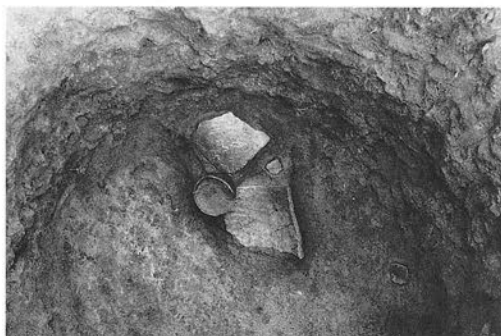
第 393 号 土 坑



第 394 号 土坑遺物出土狀況



第 395 号 土坑遺物出土狀況 (人体文土器)



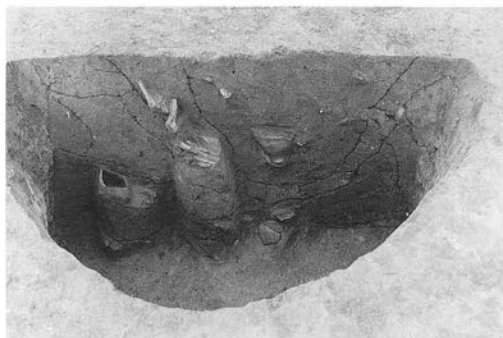
第 395 号 土坑遺物出土狀況



第 395 号 土 坑



第 396 号 土坑遺物出土狀況



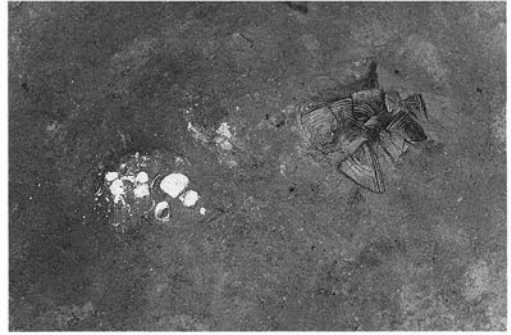
第 396 号 土坑土層断面



第 396 号 土 坑



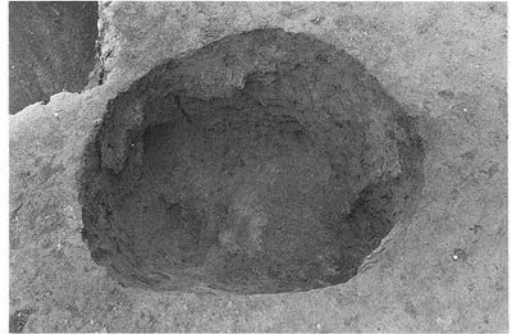
第 397 号 土 坑



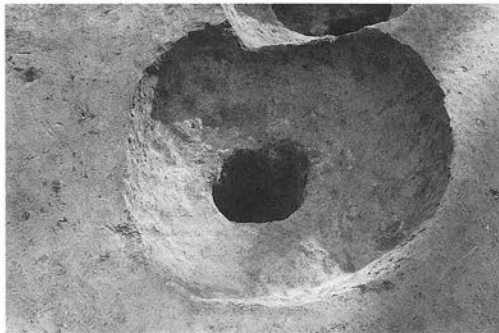
第 400 号 土坑遺物・貝ブロック検出状況



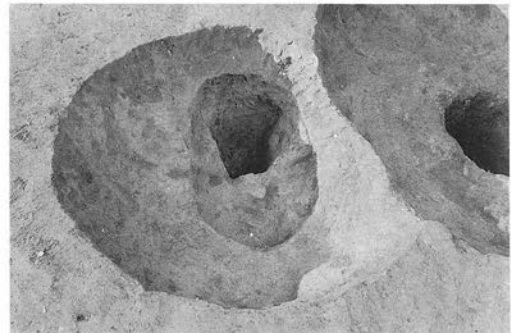
第 400 号 土 坑



第 401 号 土 坑



第 402 号 土 坑



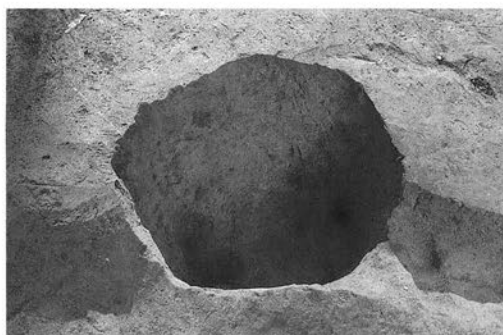
第 403 号 土 坑



第 404 号 土 坑



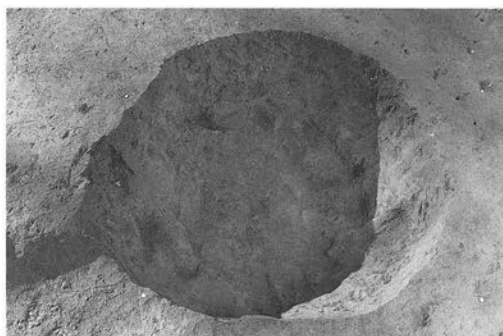
第 406 号 土 坑



第 407 号 土 坑



第 408 号 土坑遺物出土狀況



第 408 号 土 坑



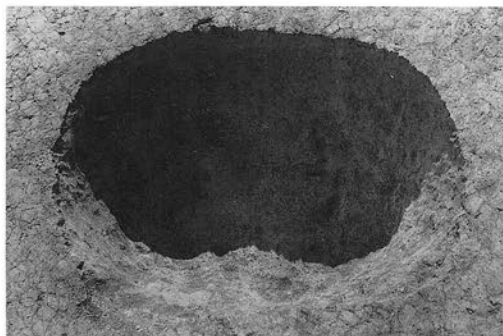
第 411 号 土 坑



第 412 号 土 坑



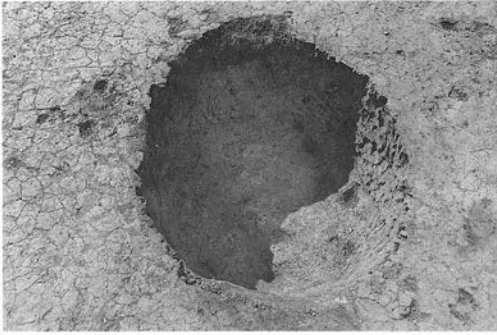
第 413 号 土 坑



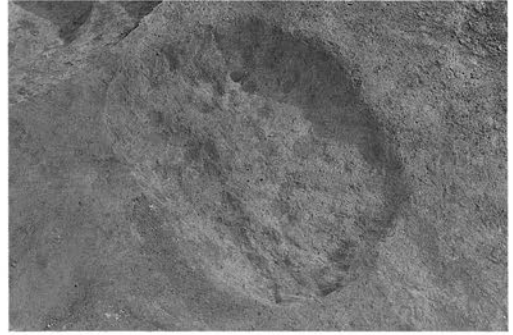
第 414 号 土 坑



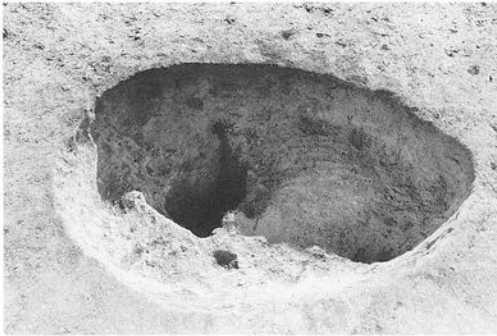
第 415 号 土 坑



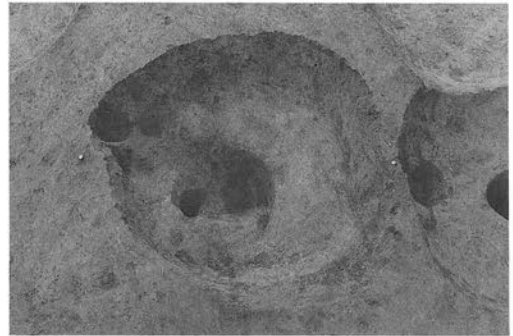
第 416 号 土 坑



第 418 号 土 坑



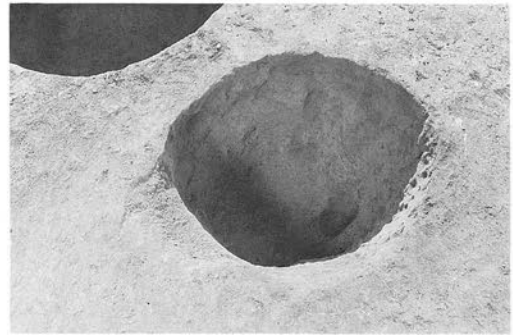
第 422 号 土 坑



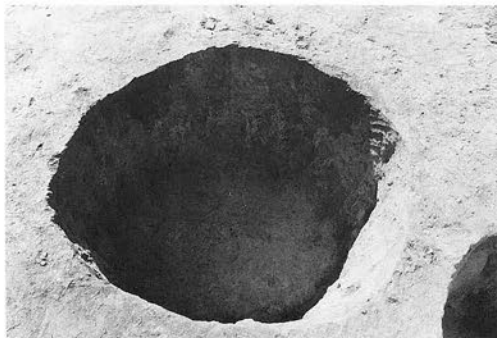
第 427 号 土 坑



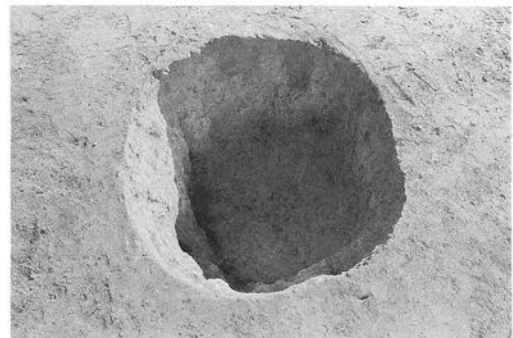
第 428 号 土 坑



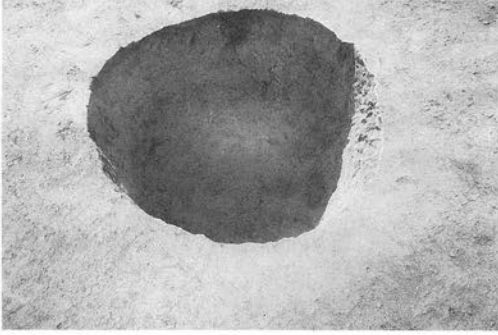
第 432 号 土 坑



第 433 号 土 坑



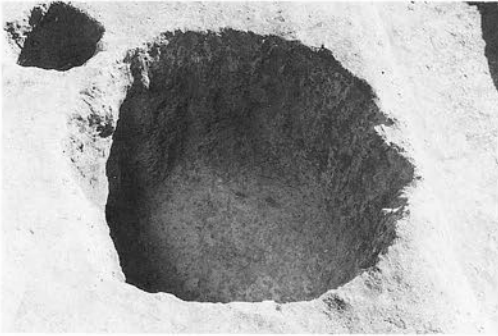
第 434 号 土 坑



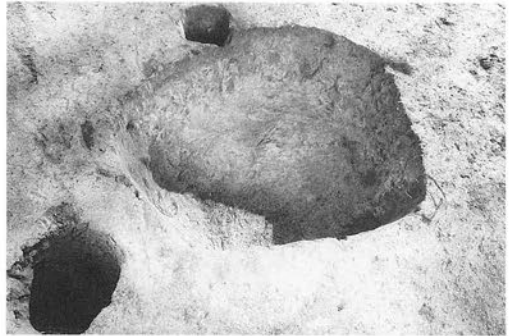
第 435 号 土 坑



第 436 号 土坑遺物出土狀況



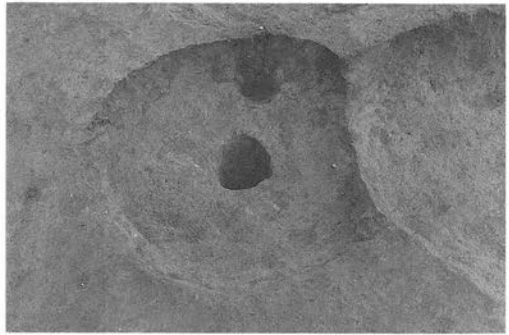
第 436 号 土 坑



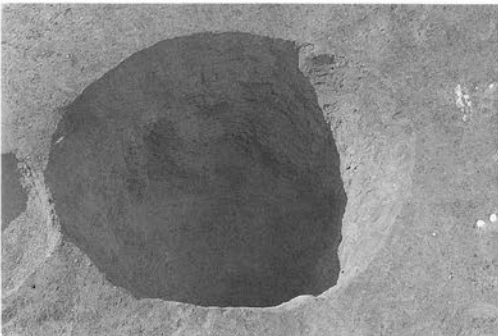
第 437 号 土 坑



第 437 号 土坑遺物出土狀況



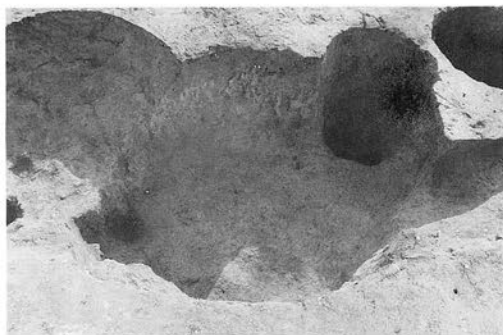
第 438 号 土 坑



第 441 号 土 坑



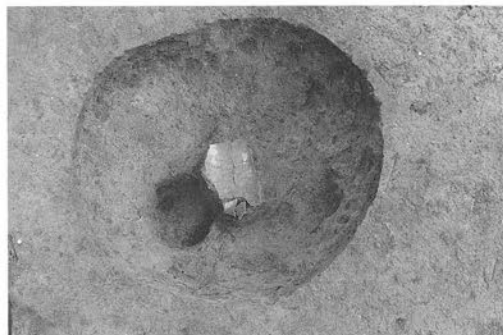
第 444 号 土 坑



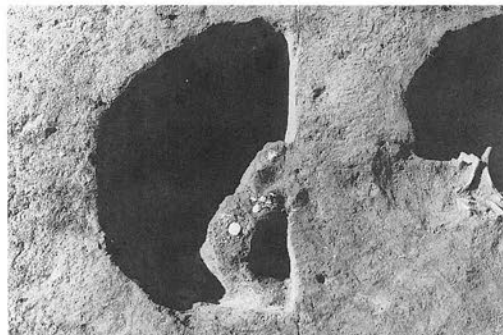
第 450 号 土 坑



第 451 号 土 坑



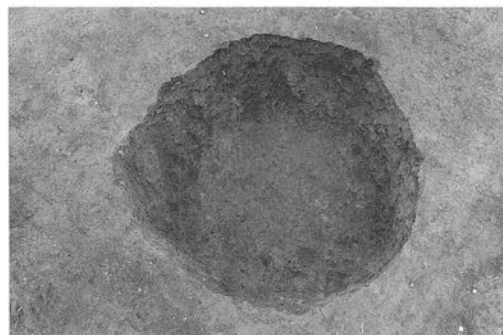
第 464 号 土坑遺物出土状況



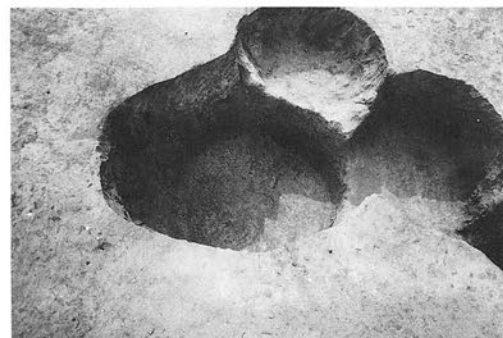
第 465 号 土坑貝ブロック検出状況



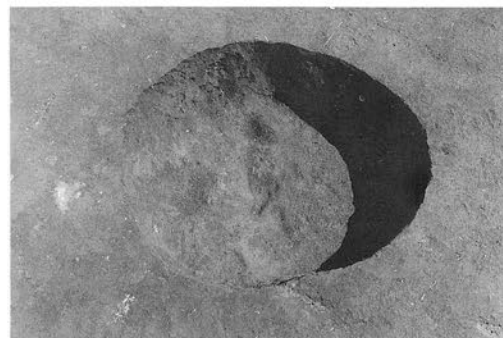
第 470 号 土 坑



第 480 号 土 坑



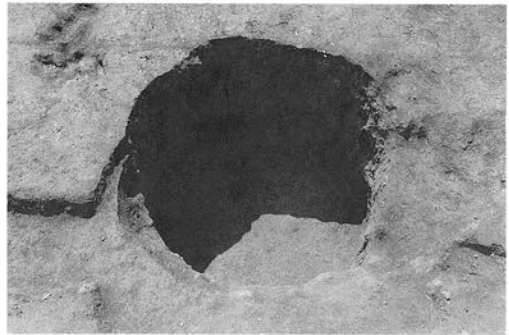
第 486・490 号 土 坑



第 491 号 土 坑



第 493 号 土 坑



第 497 号 土 坑



第 499 号 土 坑



第 507 号 土 坑



第 525 号 土坑遺物出土狀況 (蓋形土器他)



第 525 号 土 坑



第 531 号 土 坑



第 1 号 性格不明遺構



第1号 炉 穴



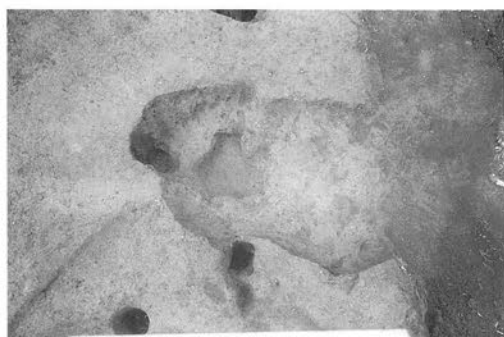
第2号 炉 穴



第3号 炉 穴



第4号 炉 穴



第5号 炉 穴



第6号 炉 穴



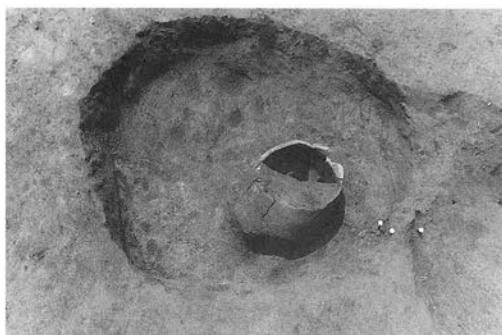
第7号 炉 穴



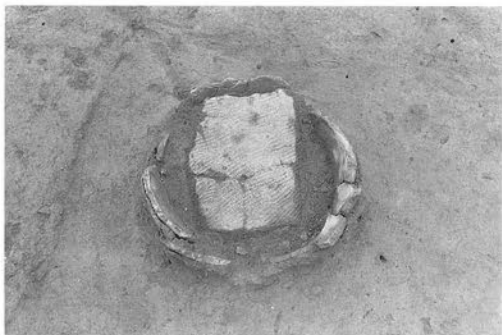
第9号 炉 穴



第1号 埋甕遺構



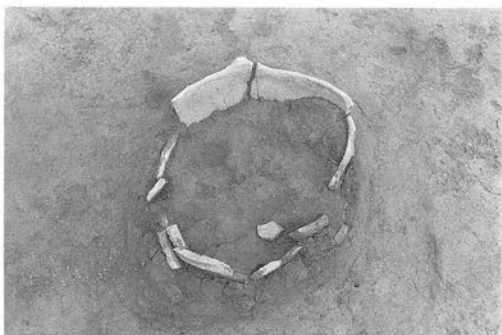
第1号 埋甕遺構



第2号 埋甕遺構



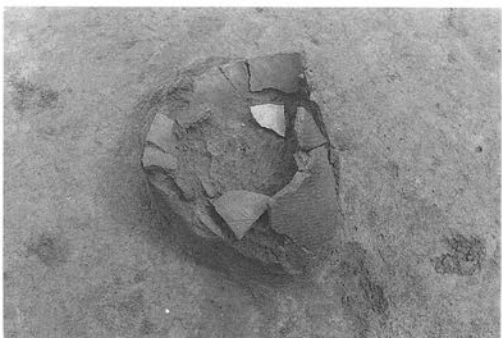
第2号 埋甕遺構



第3号 埋甕遺構



第3号 埋甕遺構



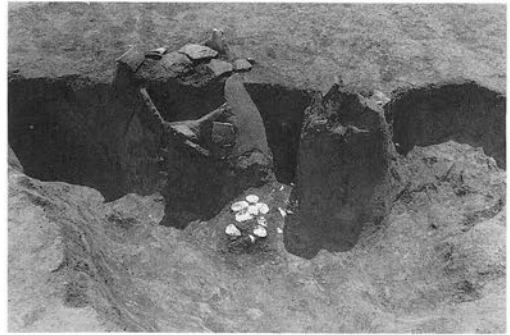
第4号 埋甕遺構



第4号 埋甕遺構



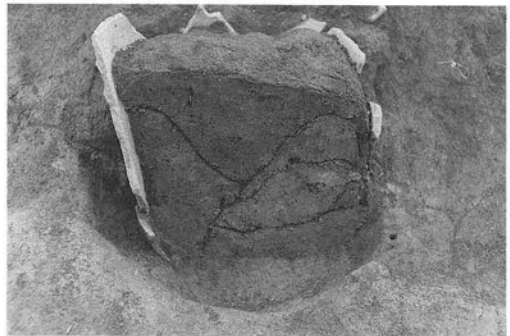
第5号 埋甕遺構



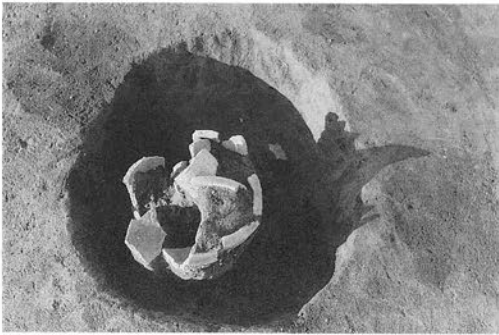
第6号 埋甕遺構



第6号 埋甕遺構



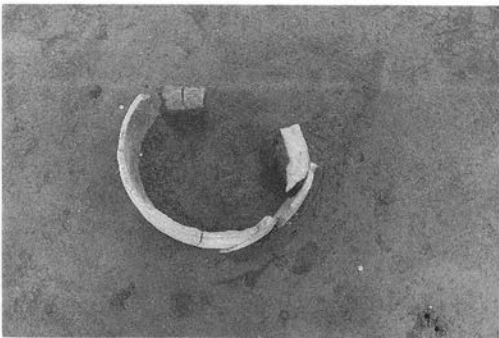
第7号 埋甕遺構



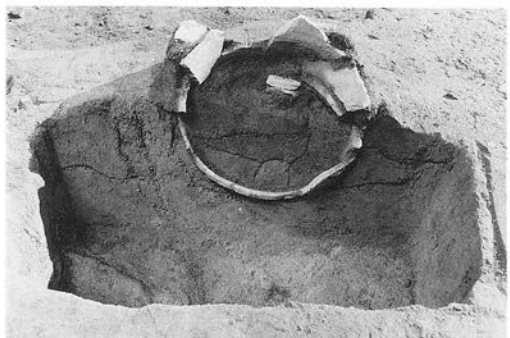
第8号 埋甕遺構



第10号 埋甕遺構



第10号 埋甕遺構



第11号 埋甕遺構



第12号 埋甕遺構



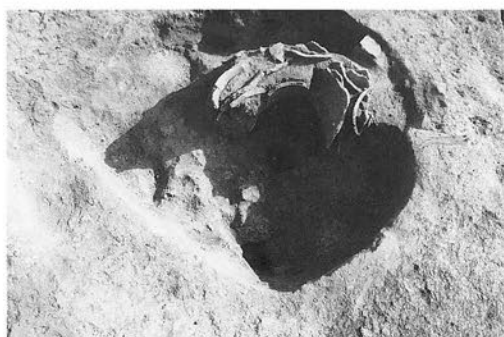
第13号 埋甕遺構



第14号 埋甕遺構



第14号 埋甕遺構



第15号 埋甕遺構



第16号 埋甕遺構



第17号 埋甕遺構



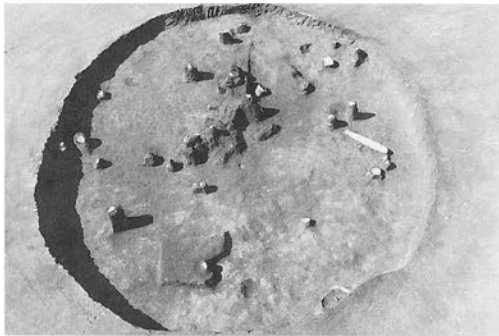
第18号 埋甕遺構



第 1 号 住居跡遺物出土状況 (脚付石皿)



第 46 号 住居跡遺物出土状況



第 47 号 住居跡遺物出土状況



第 47 号 住居跡遺物出土状況 (小形深鉢形土器)



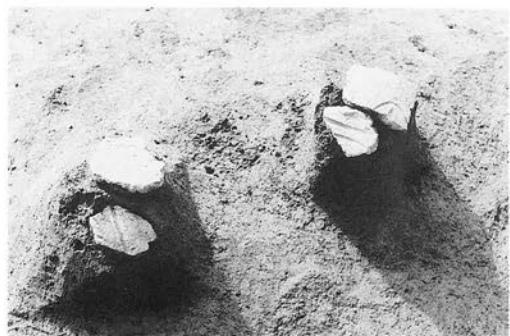
第 47 号 住居跡遺物出土状況 (蓋形土器)



第 47 号 住居跡遺物出土状況 (石棒)



第 49 号 住居跡遺物出土状況 (磨石)



第 74 号 住居跡遺物出土状況 (土器片錘)



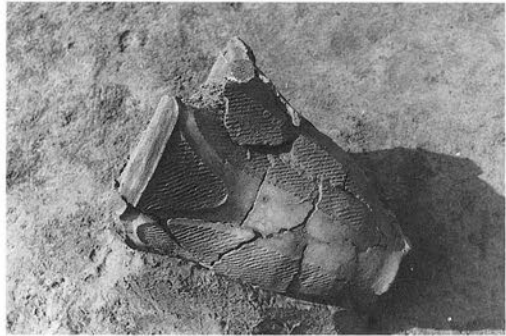
第 9 号 住居跡遺物出土状況



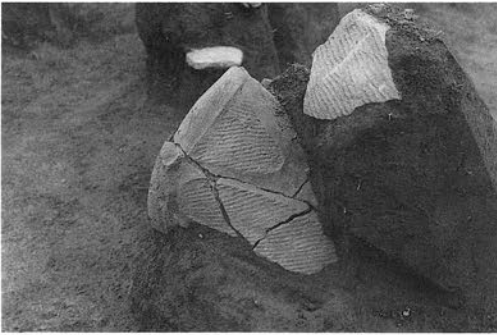
第 9 号 住居跡遺物出土状況 (磨石)



第 10 号 住居跡遺物出土状況 (有孔円板)



第 16 号 住居跡遺物出土状況 (深鉢形土器)



第 16 号 住居跡遺物出土状況



第 16 号 住居跡遺物出土状況 (軽石製品)



第 34・58 号 住居跡遺物出土状況



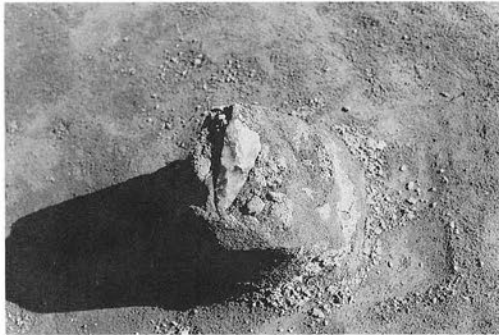
第 34 号 住居跡遺物出土状況 (イノシシ牙)



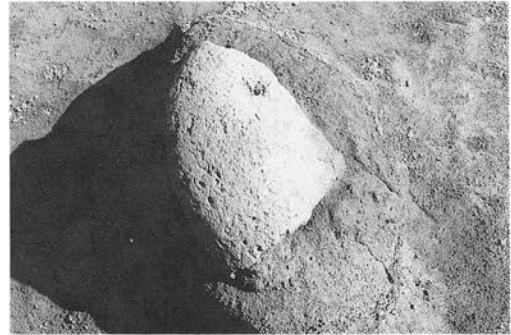
第 80 号 住居跡遺物出土状況 (深鉢形土器)



第 400 号 土坑遺物出土状況 (深鉢形土器)



第 79 号 住居跡遺物出土状況 (石槍)



第 79 号 住居跡遺物出土状況 (石皿)



第 81 号 住居跡遺物出土状況 (磨製石斧)



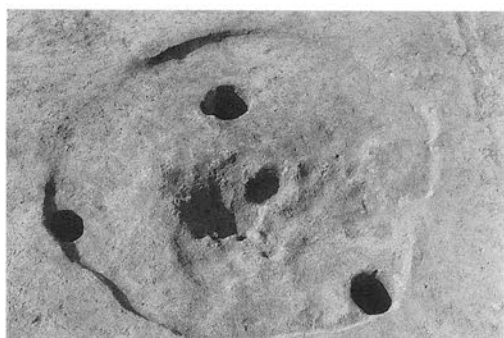
第 106 号 住居跡遺物出土状況 (磨石)



第 5 号 溝遺物出土状況 (垂飾)



L 4 i 1 区 遺物出土状況 (石鎌)



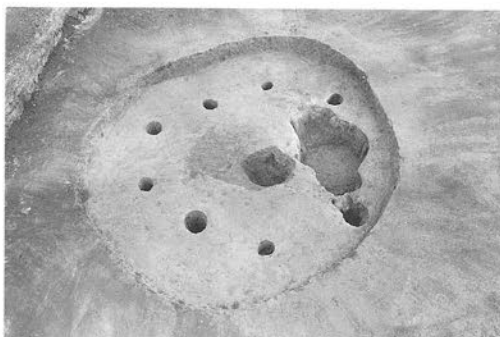
第3号 住居跡



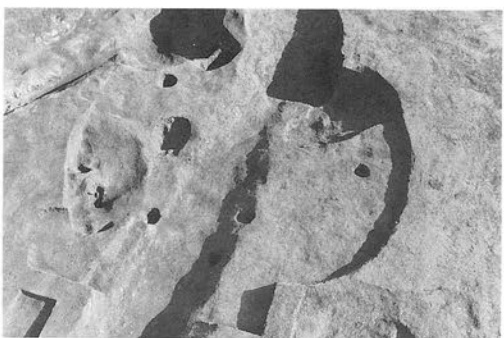
第4号 住居跡



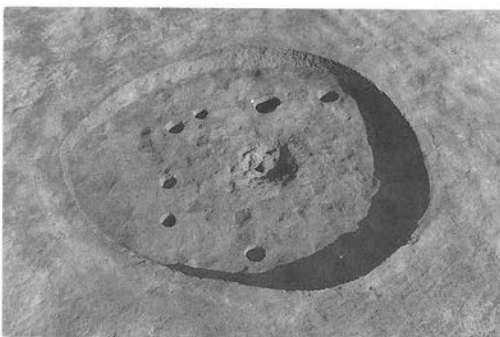
第5号 住居跡貝ブロック検出状況



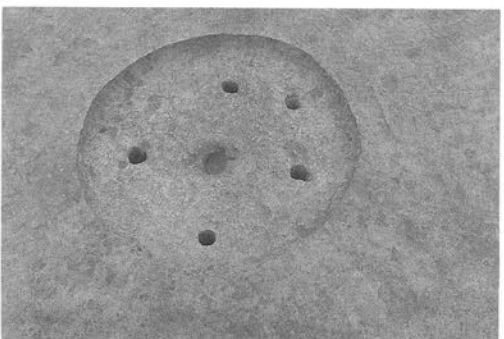
第5号 住居跡



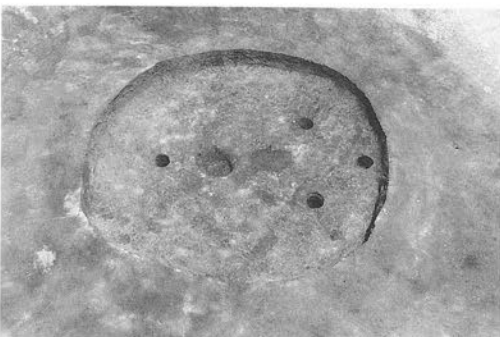
第6号 住居跡



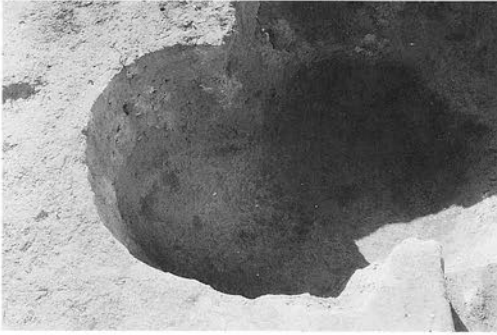
第7号 住居跡



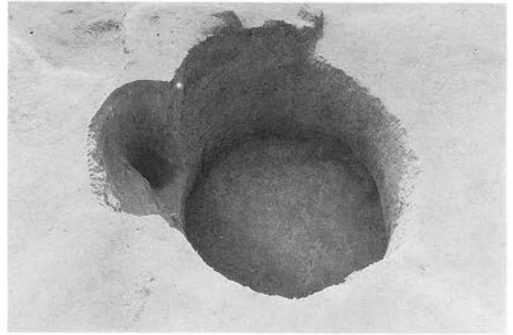
第19号 住居跡



第50号 住居跡



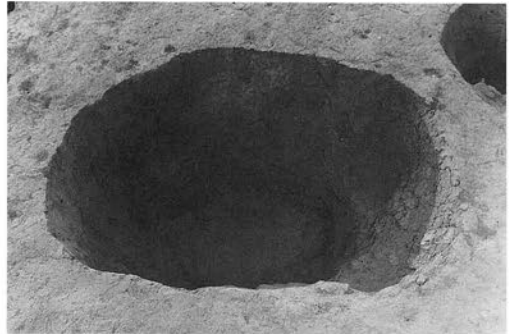
第 24 号 土 坑



第 26・27号 土 坑



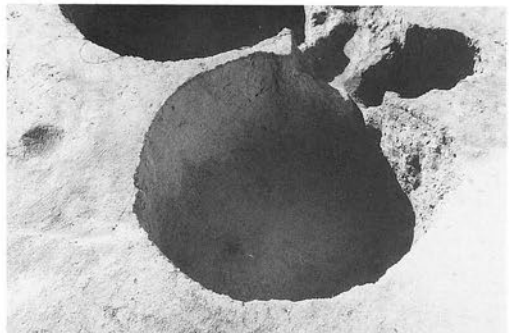
第 28 号 土 坑



第 32 号 土 坑



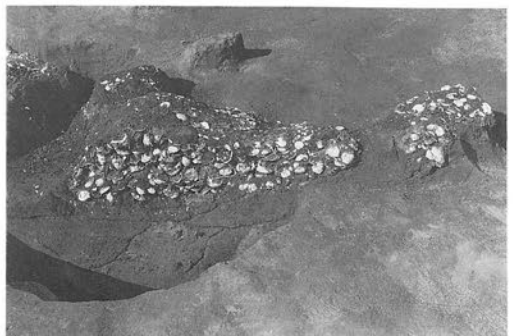
第 33 号 土 坑



第 37 号 土 坑



第 39 号 土 坑



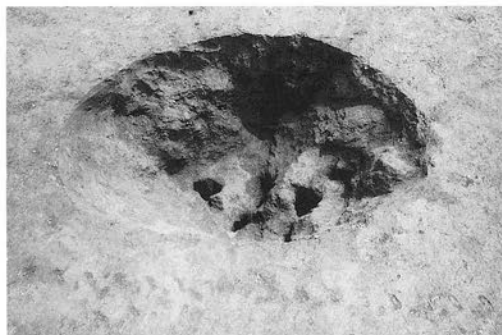
第 47 号 土坑貝ブロック断面



第 47 ~ 49 号 土 坑



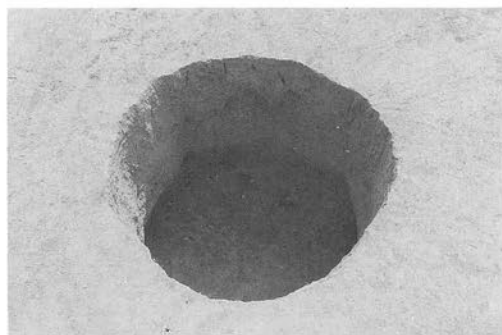
第 66 号 土 坑



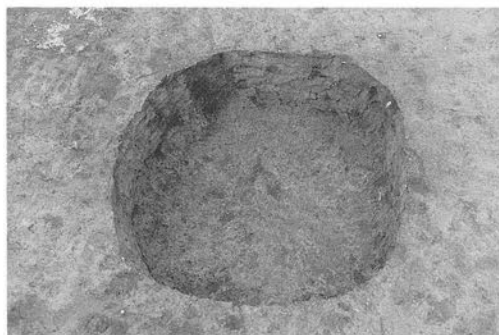
第 68 号 土 坑



第 74 号 土 坑



第 76 号 土 坑



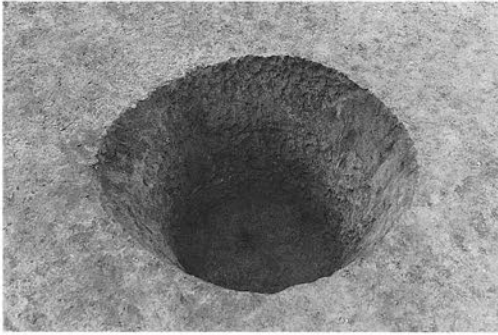
第 150 号 土 坑



第 167 号 土 坑



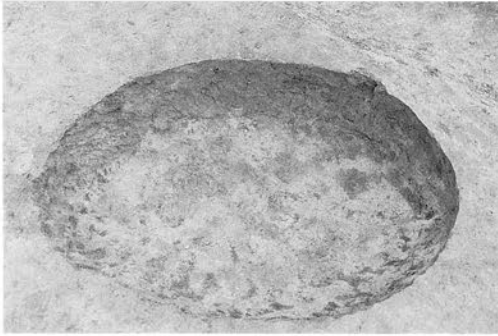
第 170 号土坑土层断面



第 170 号 土 坑



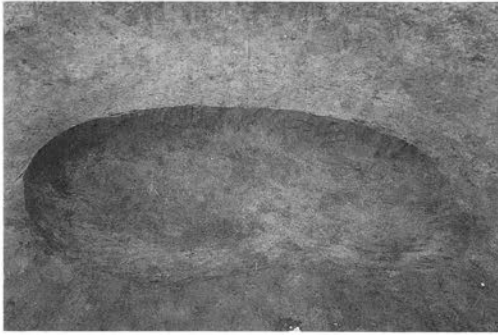
第 171 号 土 坑



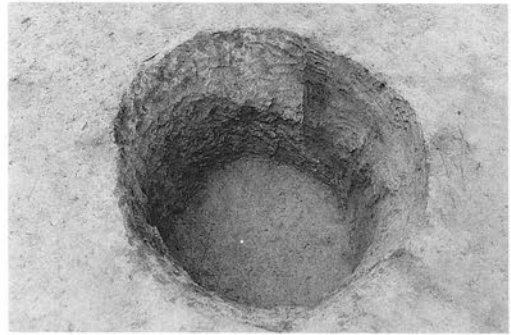
第 172 号 土 坑



第 173 号 土 坑



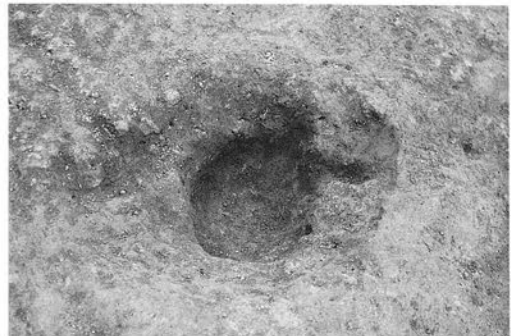
第 176 号 土 坑



第 180 号 土 坑



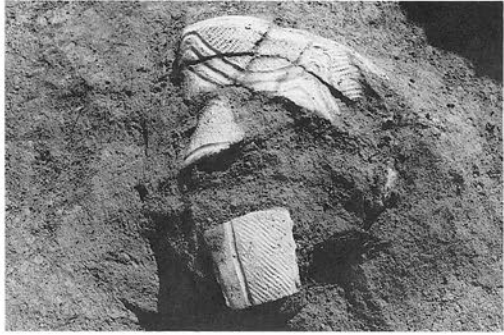
第 4 号 住居跡土器埋設炉



第 19 号 住居跡炉



第 5 号 住居跡遺物出土状況 (深鉢形土器)



第 7 号 住居跡遺物出土状況 (深鉢形土器)



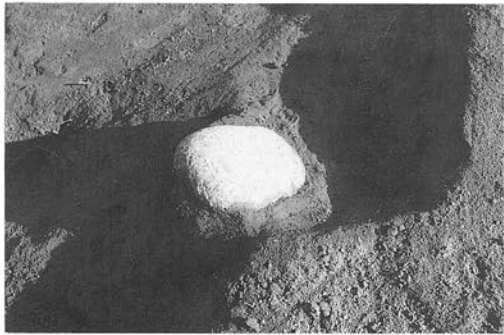
第 7 号 住居跡遺物出土状況 (深鉢形土器)



第 19 号 住居跡遺物出土状況



第 4 号 住居跡遺物出土状況 (石錐)



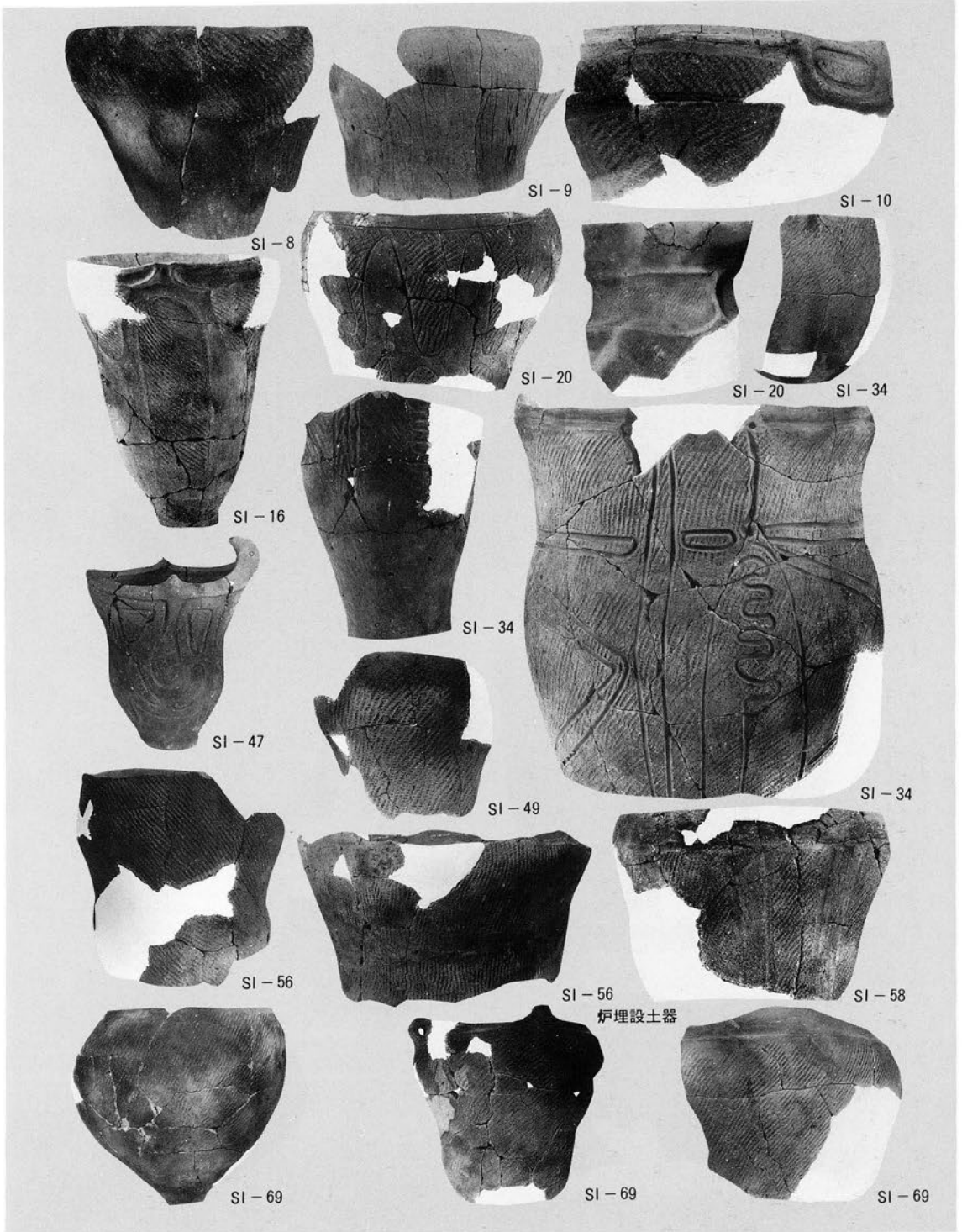
第 4 号 住居跡遺物出土状況 (磨石)



第 5 号 住居跡遺物出土状況 (有孔円板)



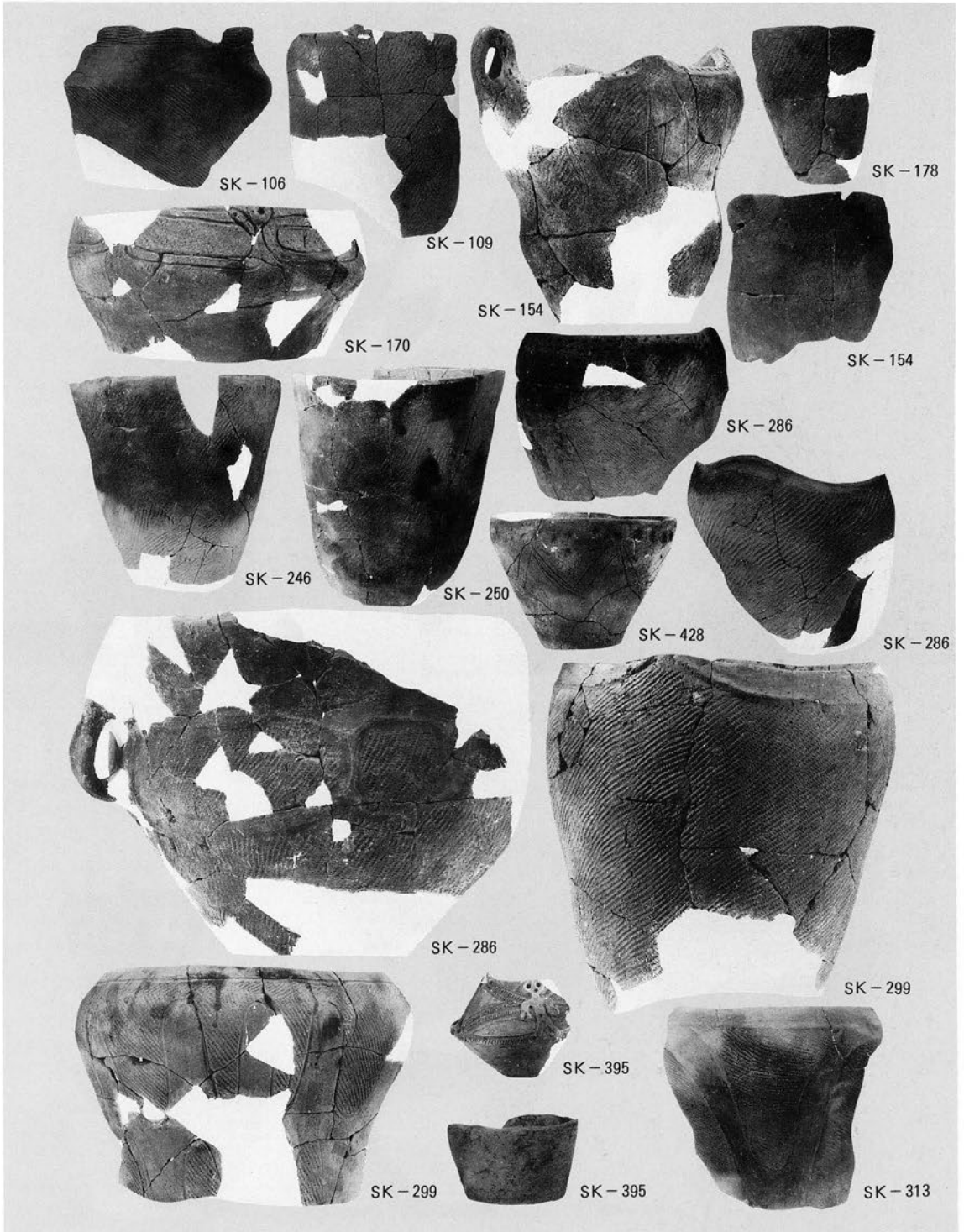
第 50 号 住居跡遺物出土状況 (石鎌)



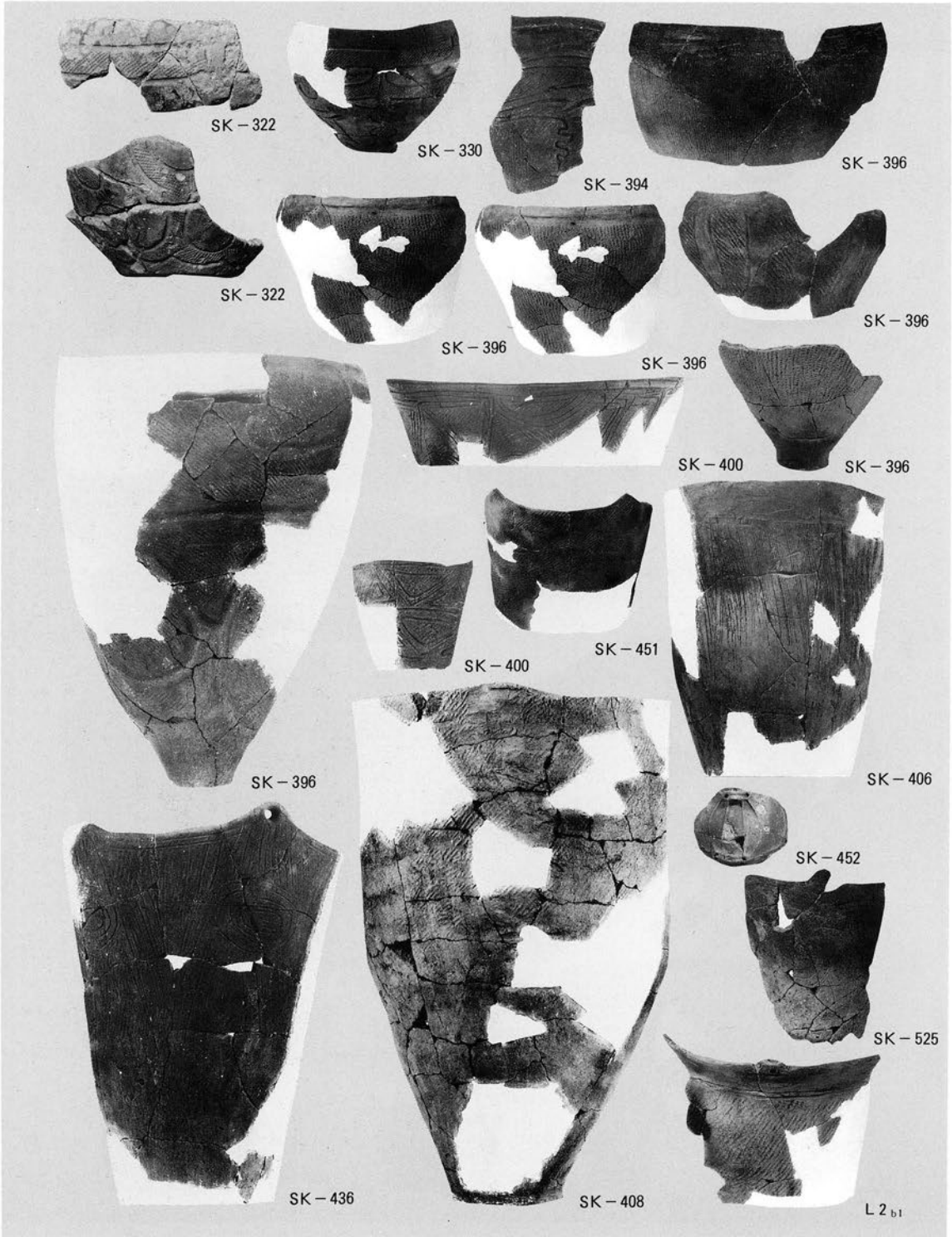
住居跡出土土器(1)



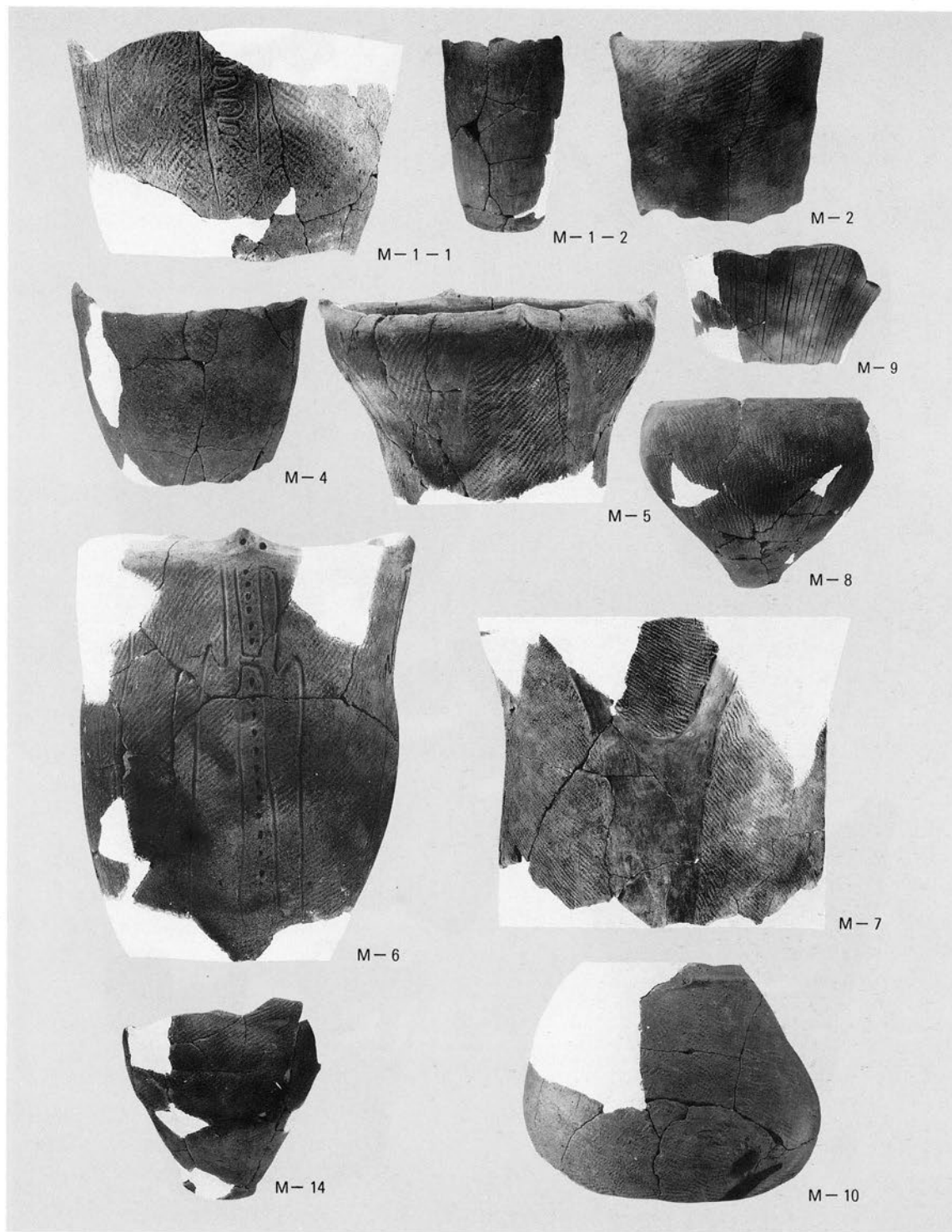
住居跡出土土器(2)



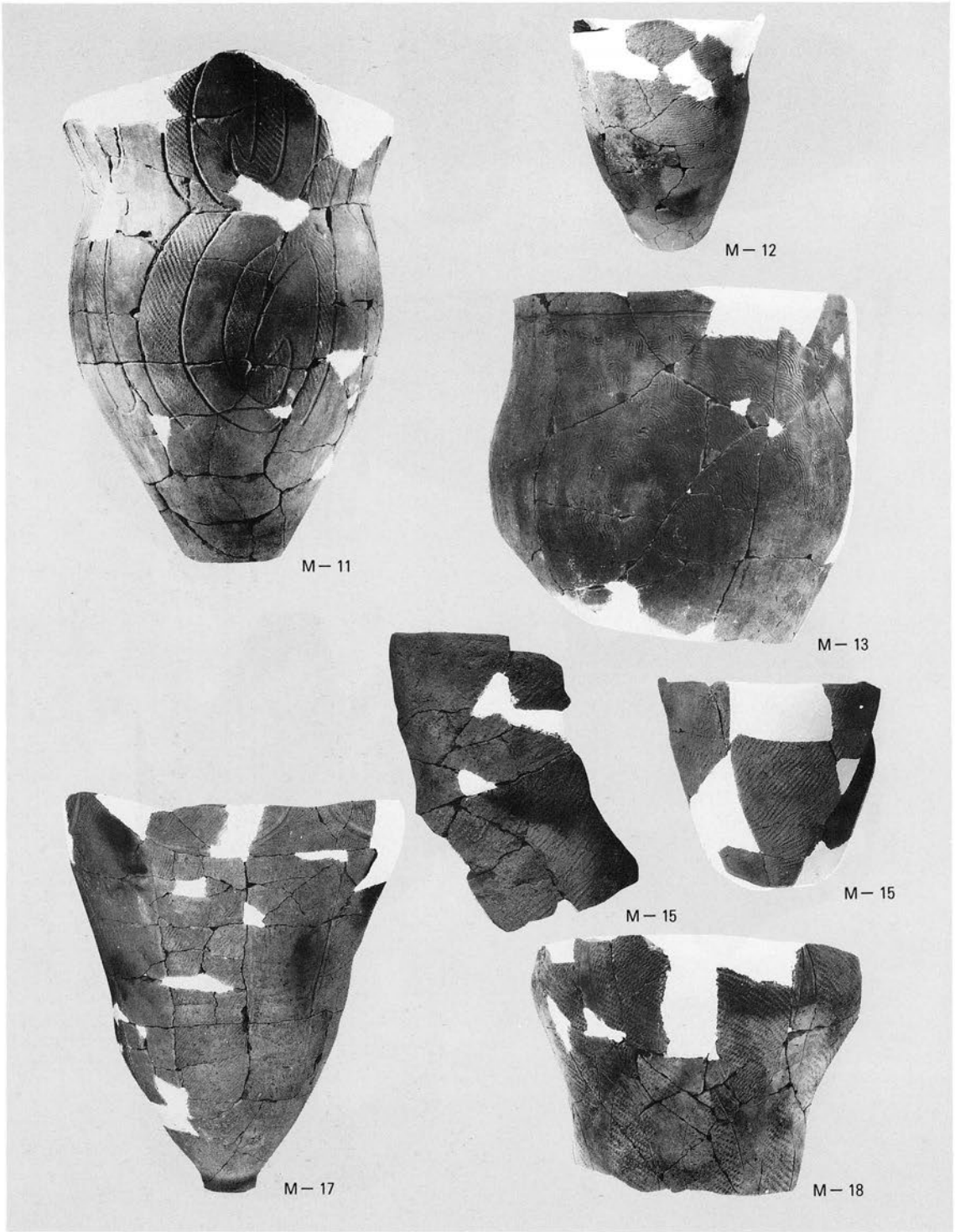
土坑出土土器(1)



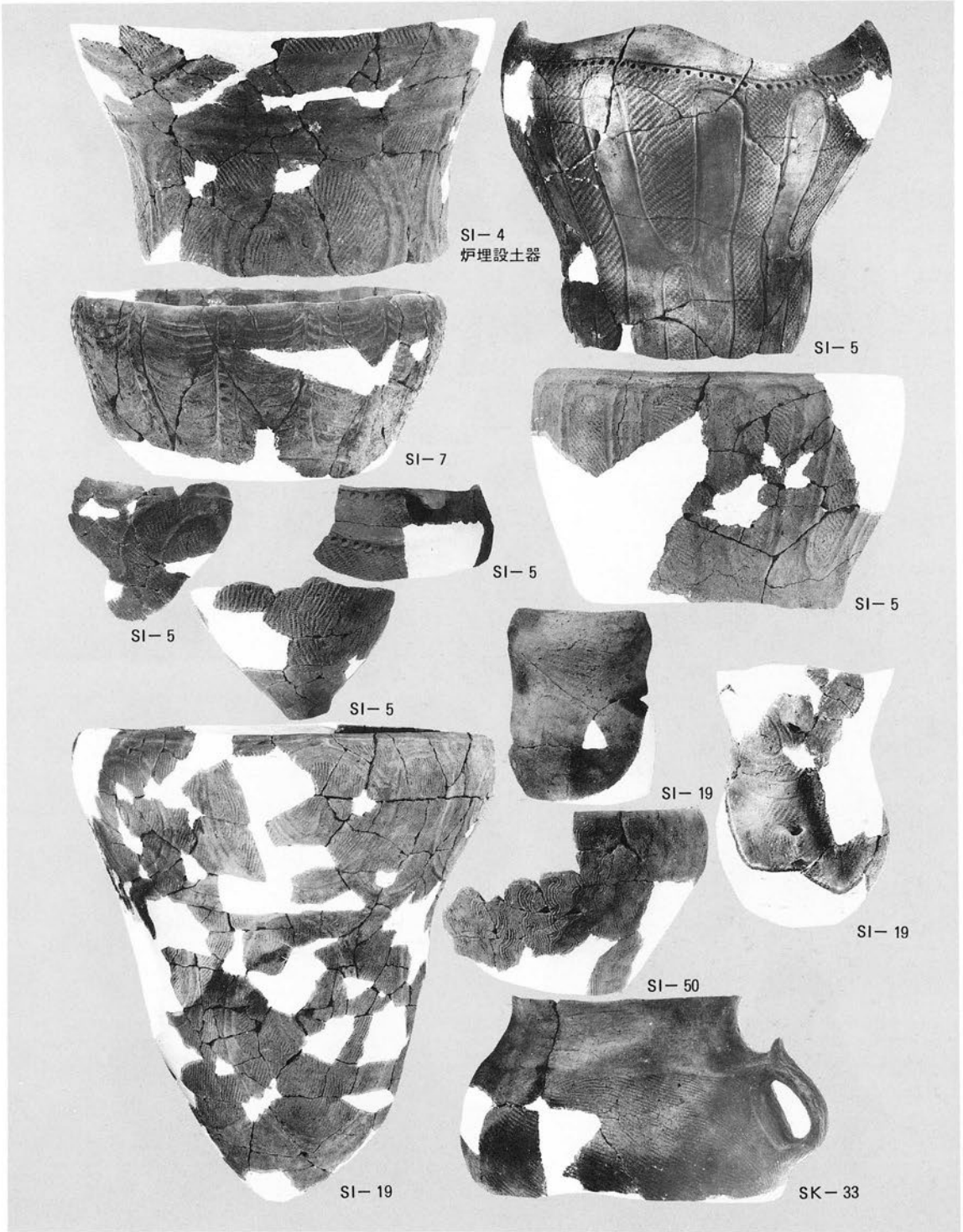
土坑・グリッド出土土器(2)



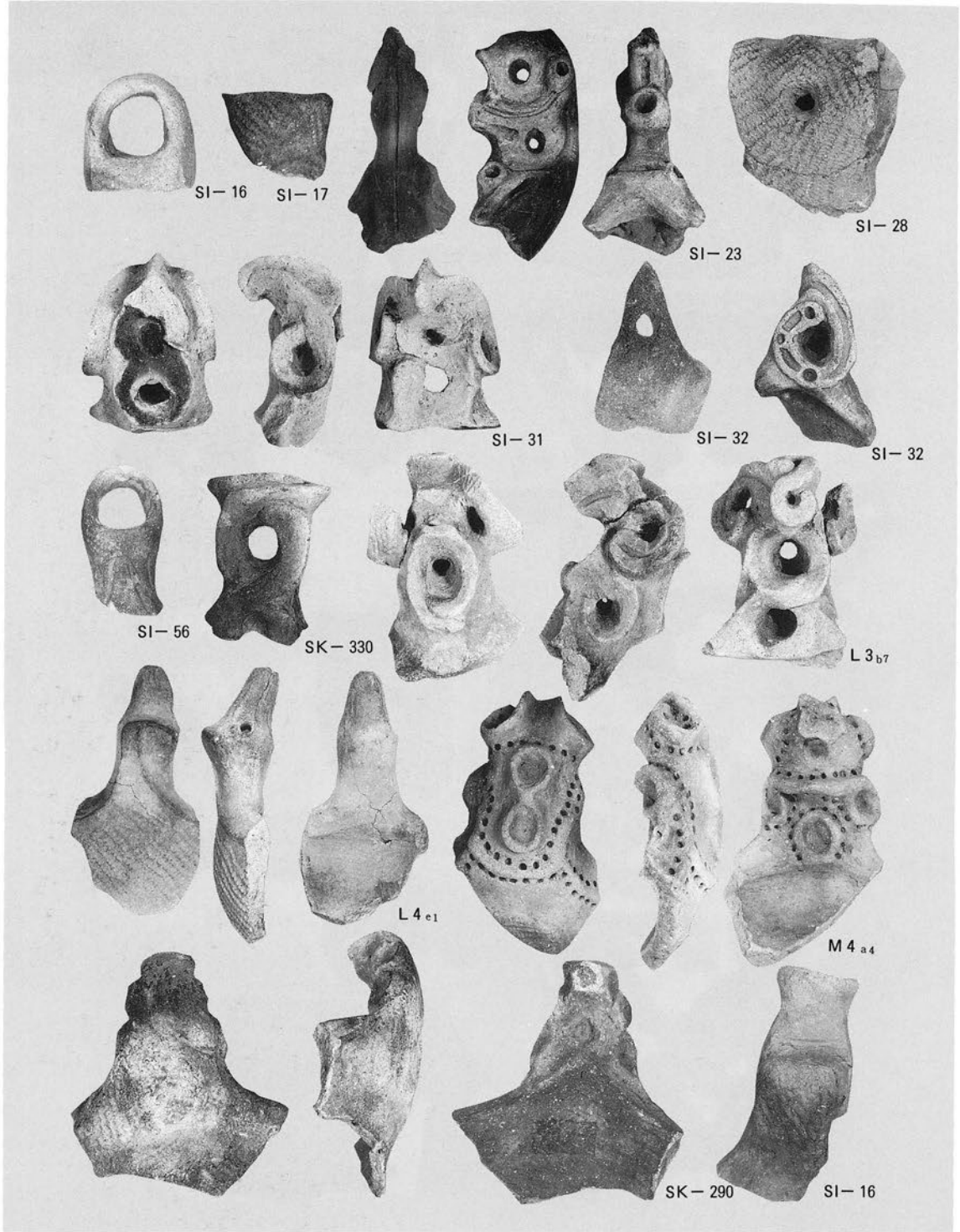
埋塞遺構出土土器(1)



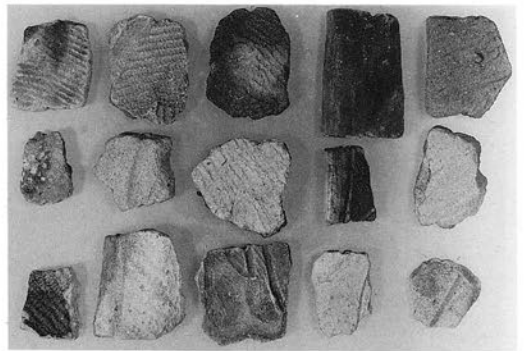
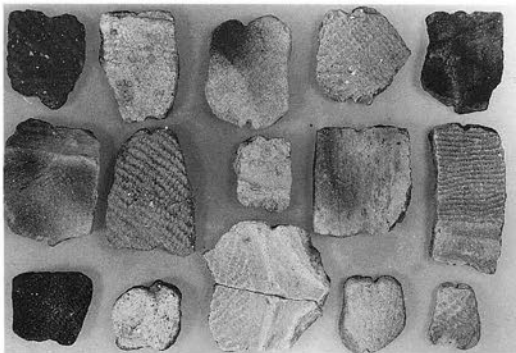
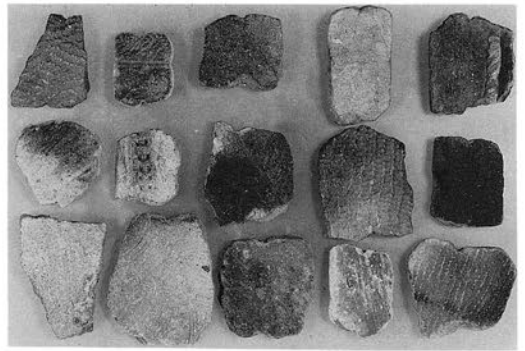
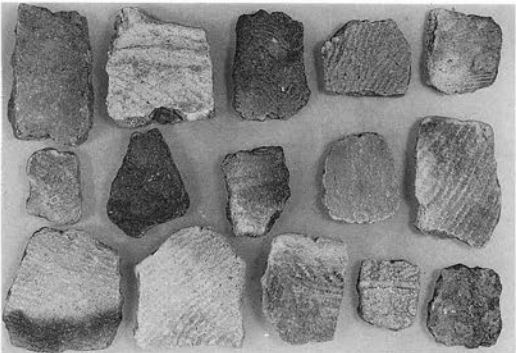
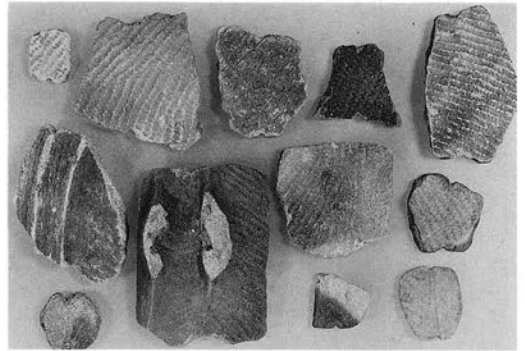
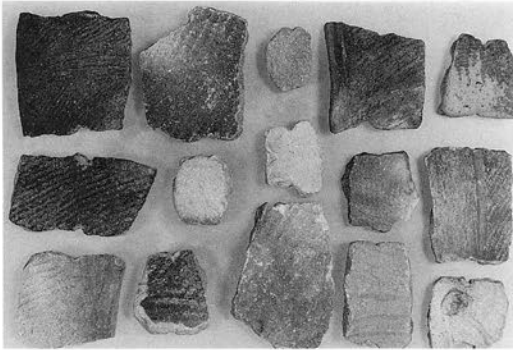
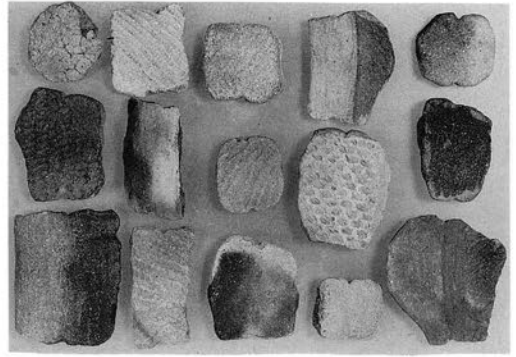
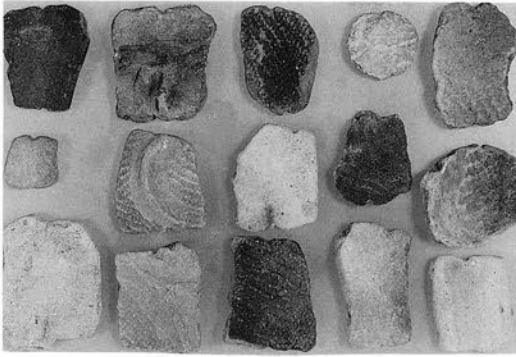
埋塞遺構出土土器 (2)



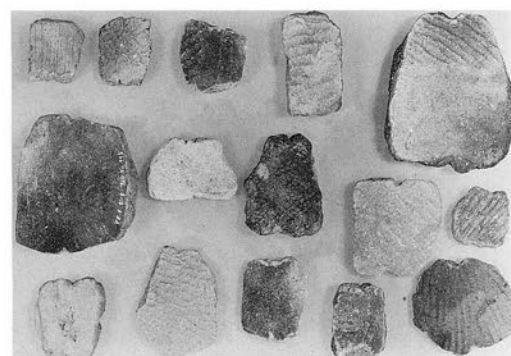
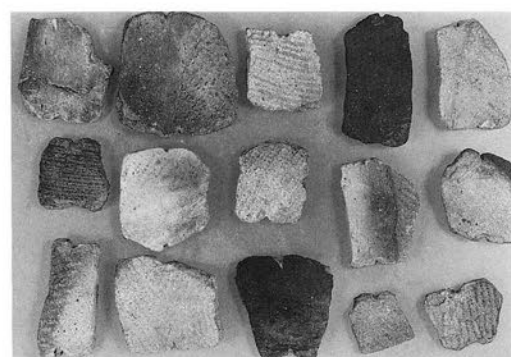
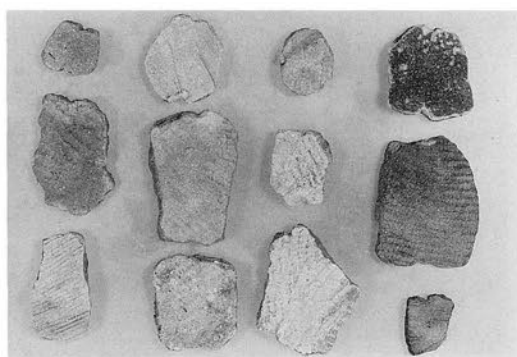
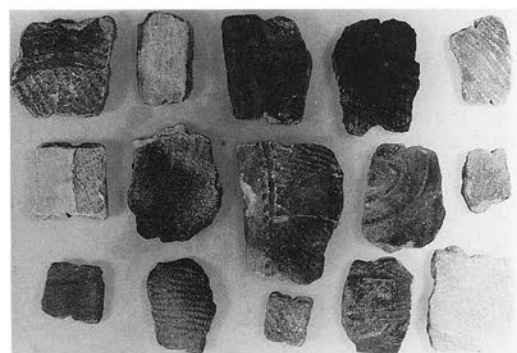
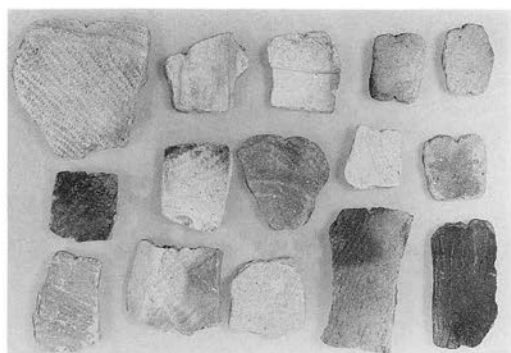
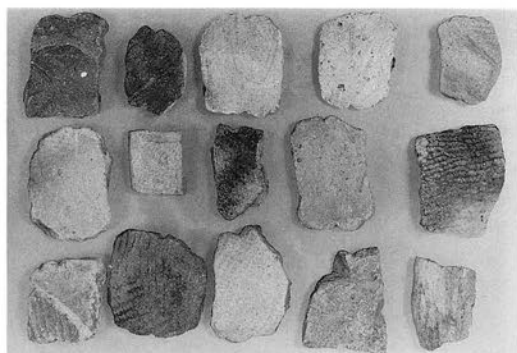
住居跡・土坑出土土器



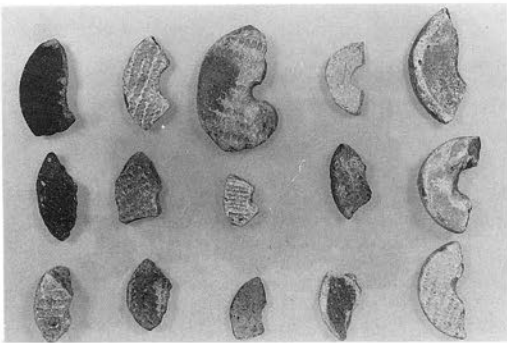
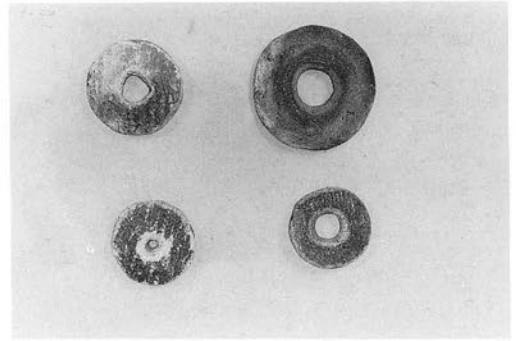
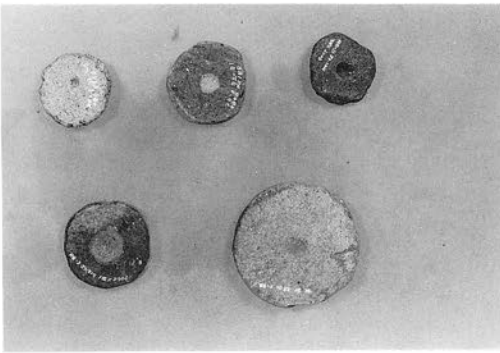
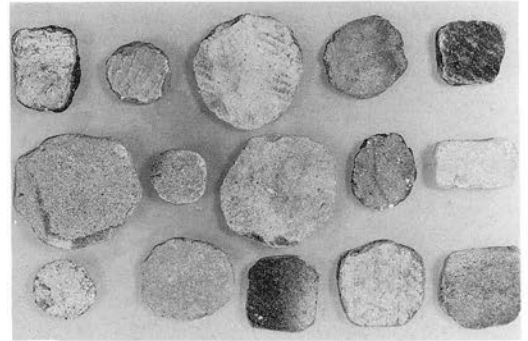
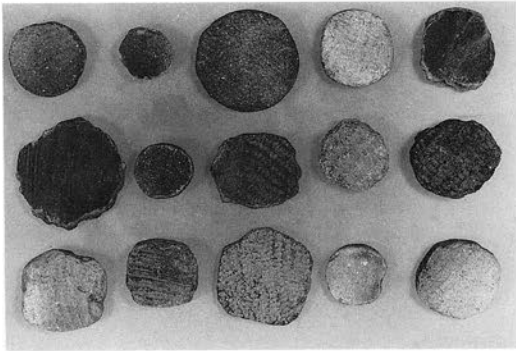
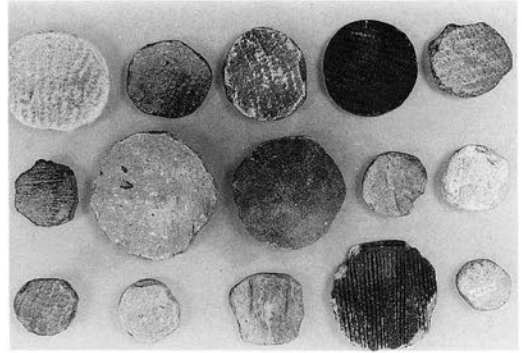
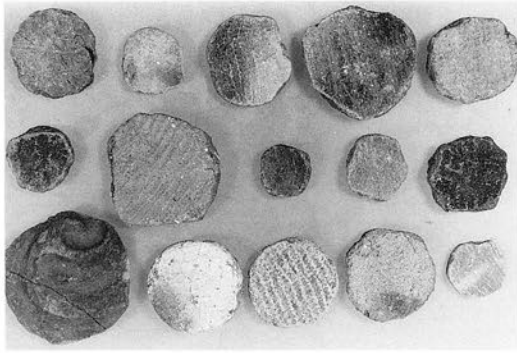
把手



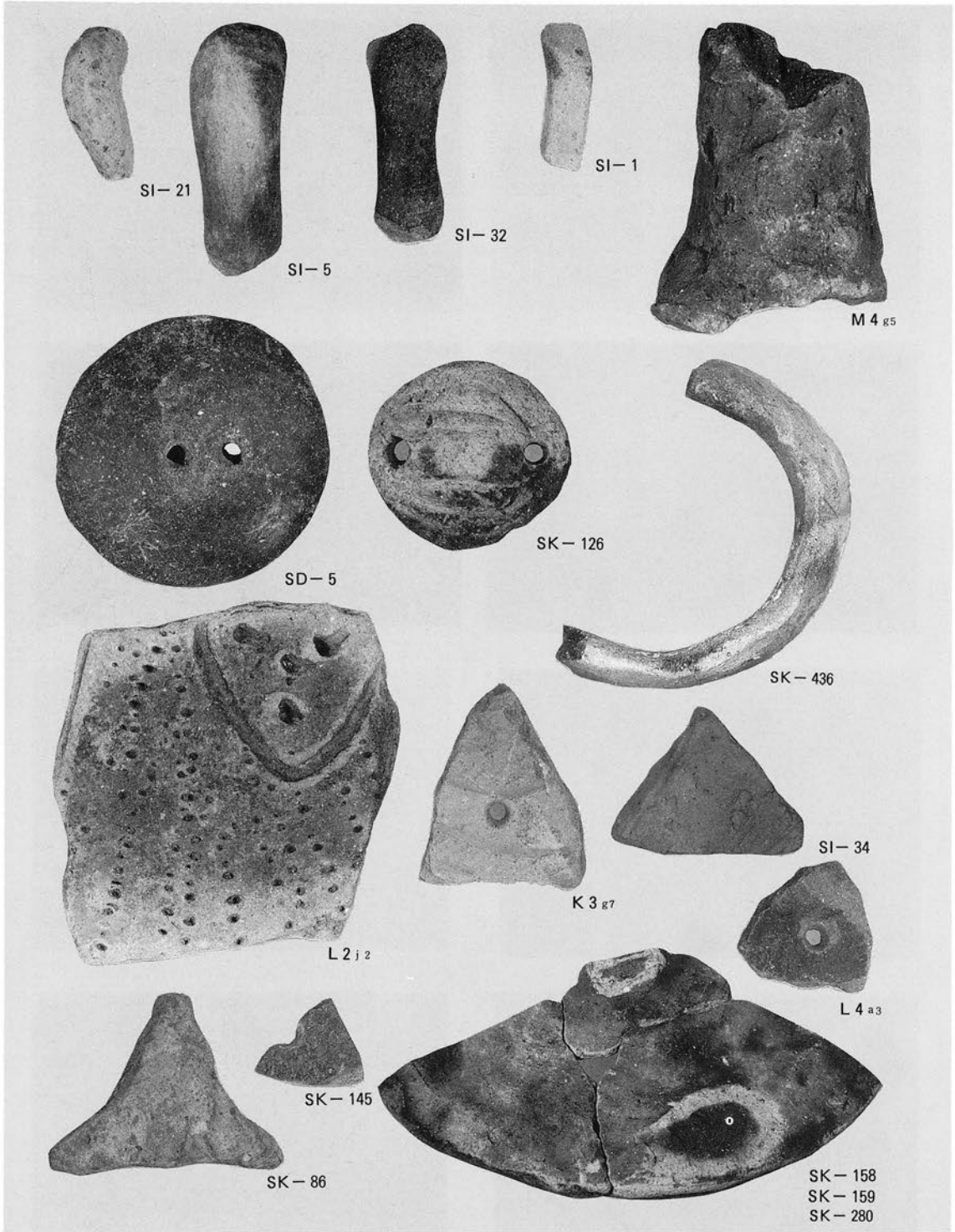
土器片錘 (1)



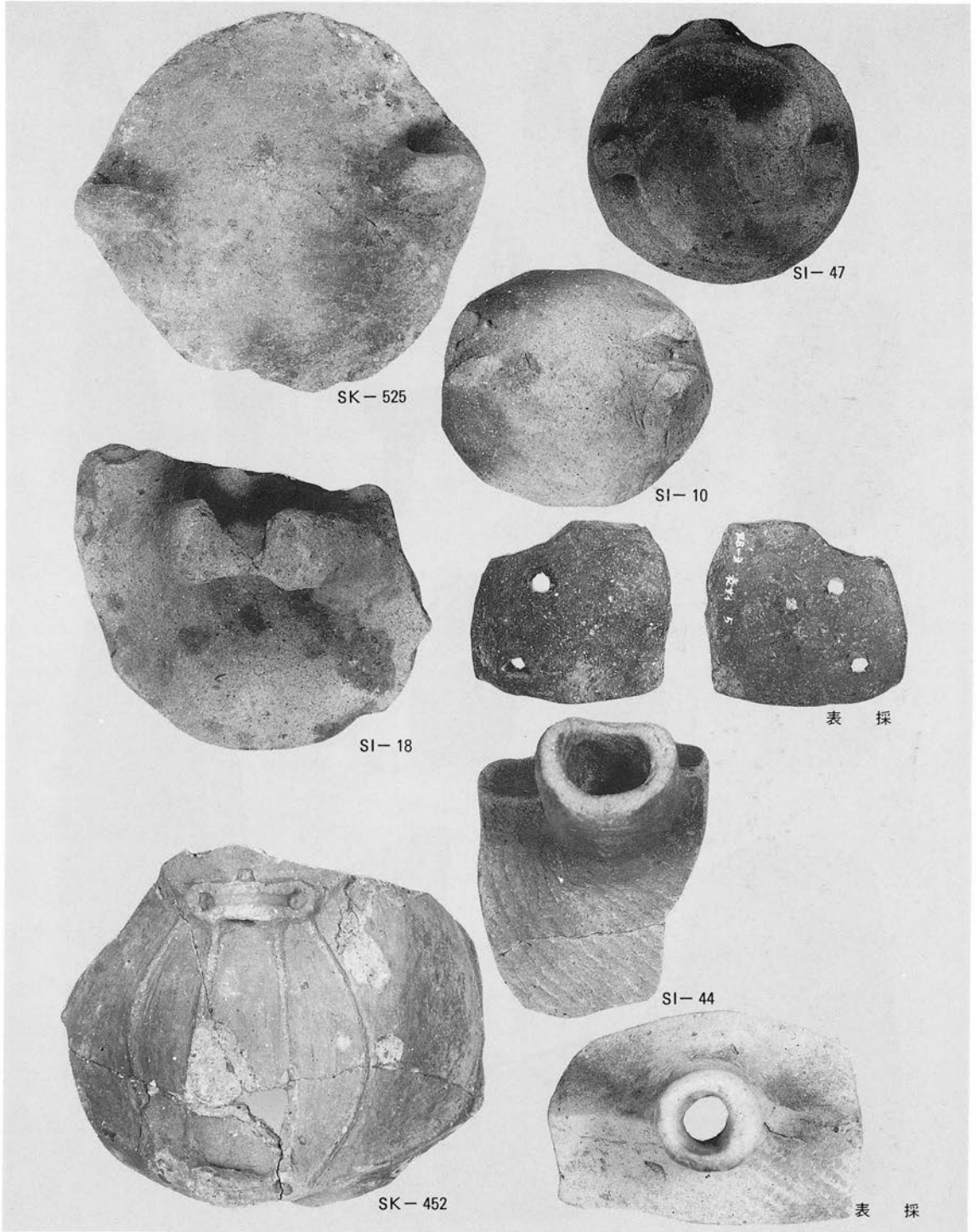
土器片錘 (2)



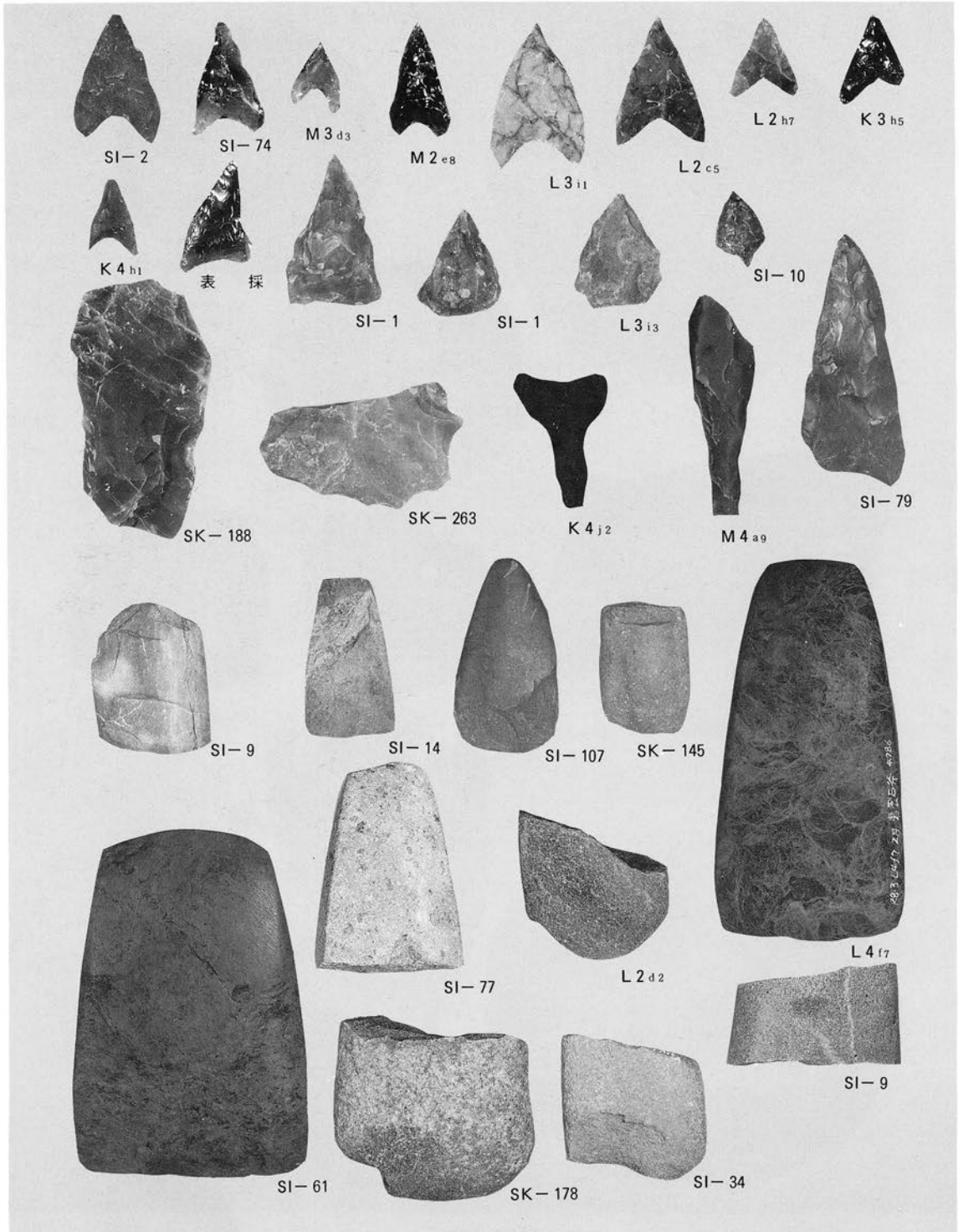
土製円板・有孔円板



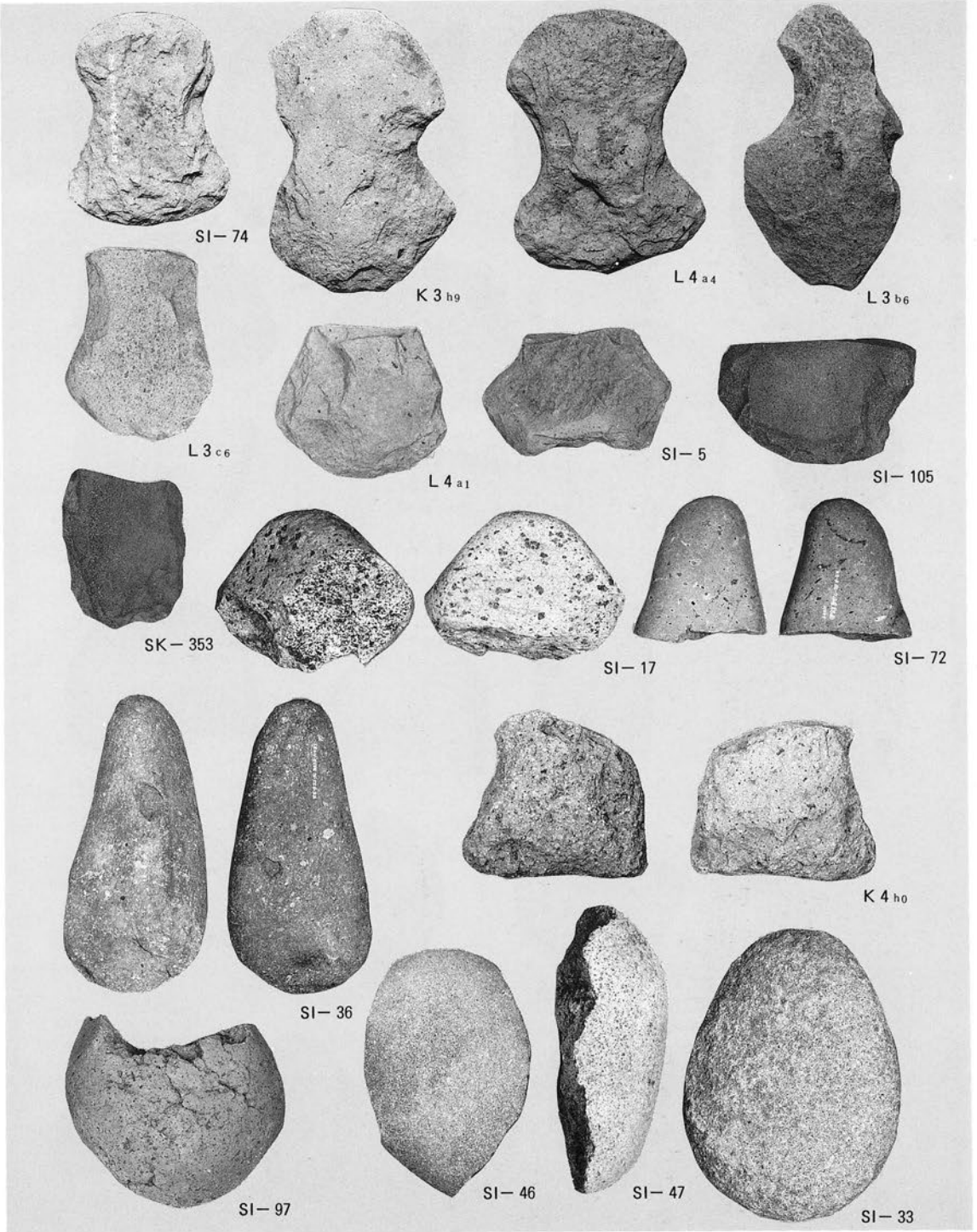
土製品



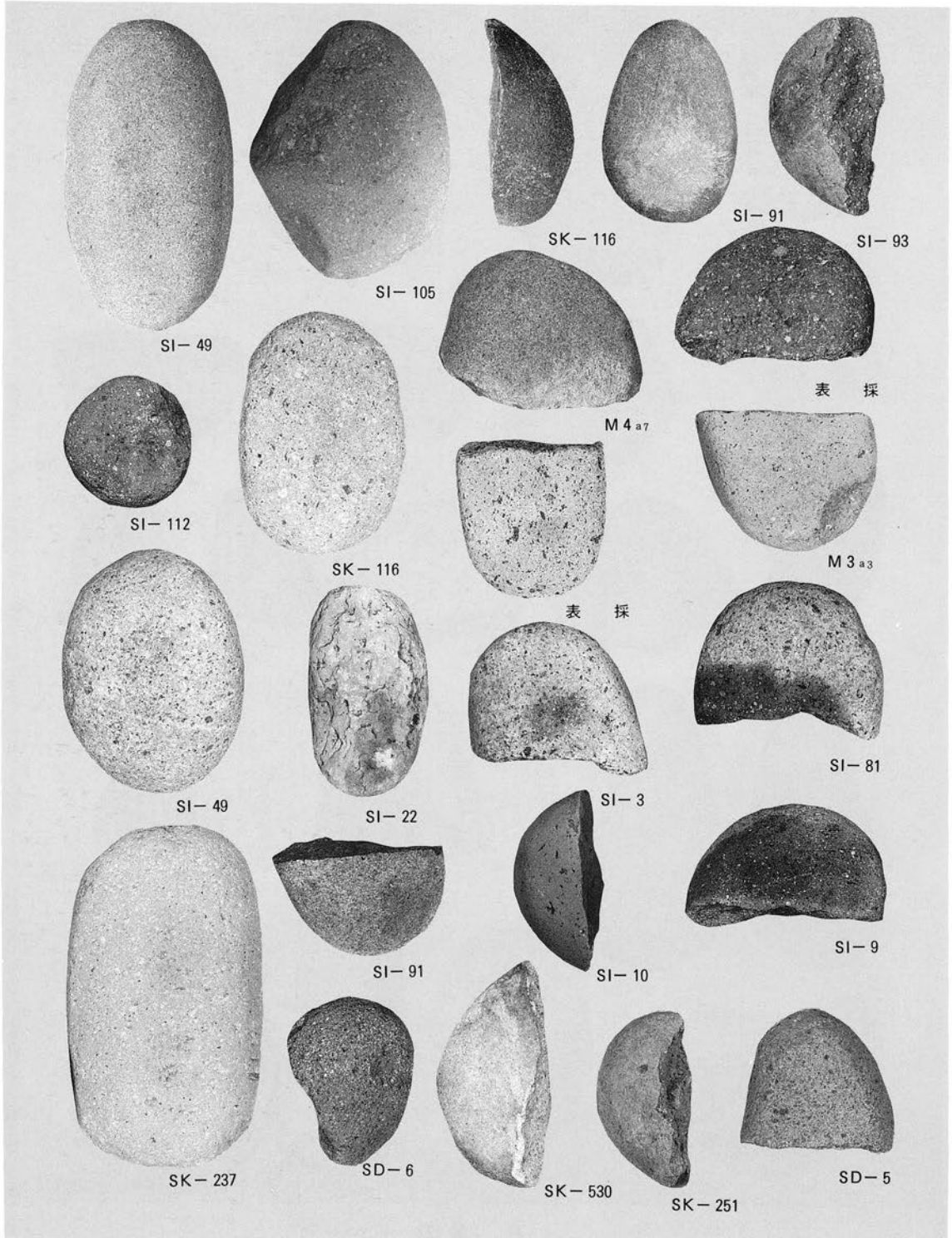
特殊土器



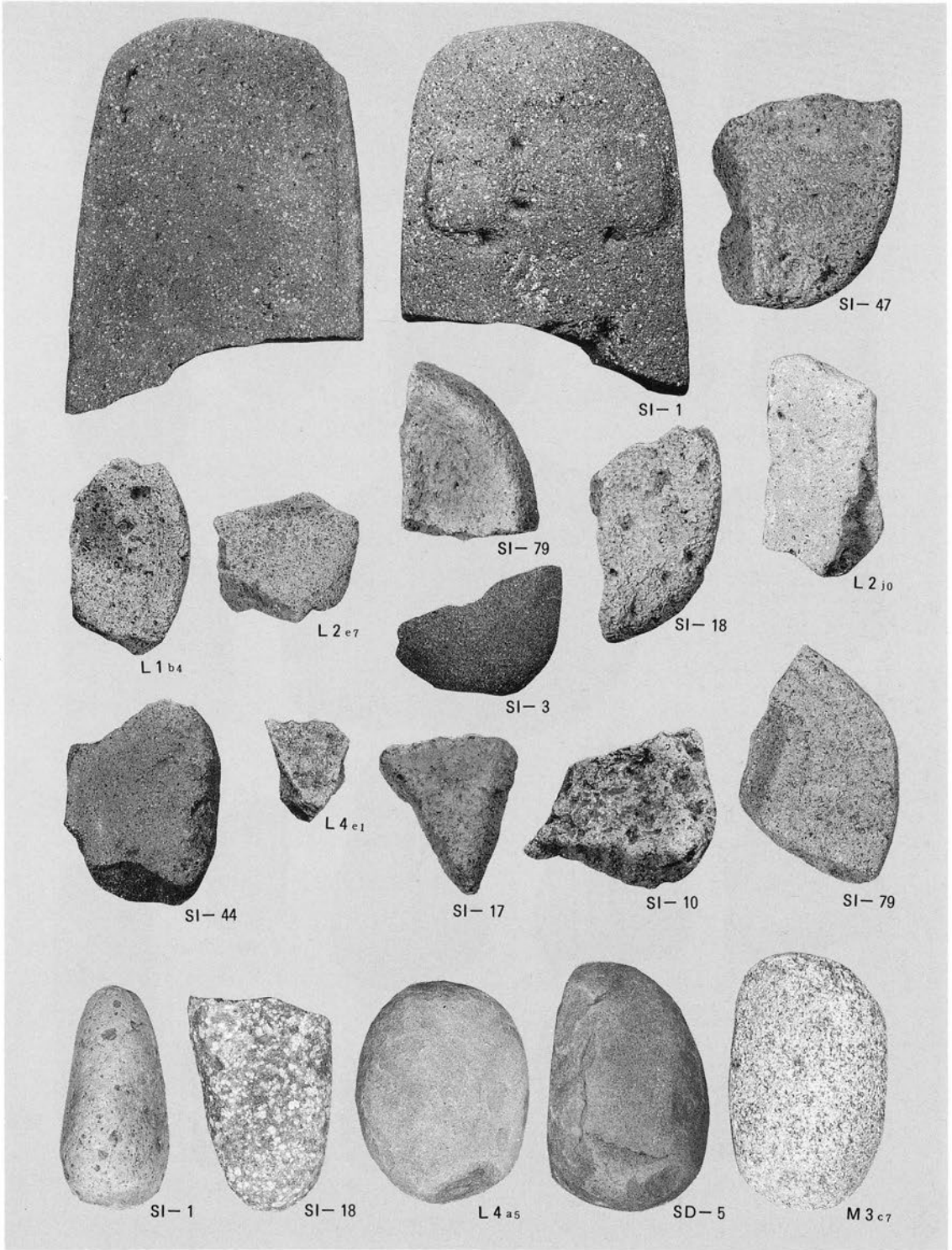
石 器 (1)



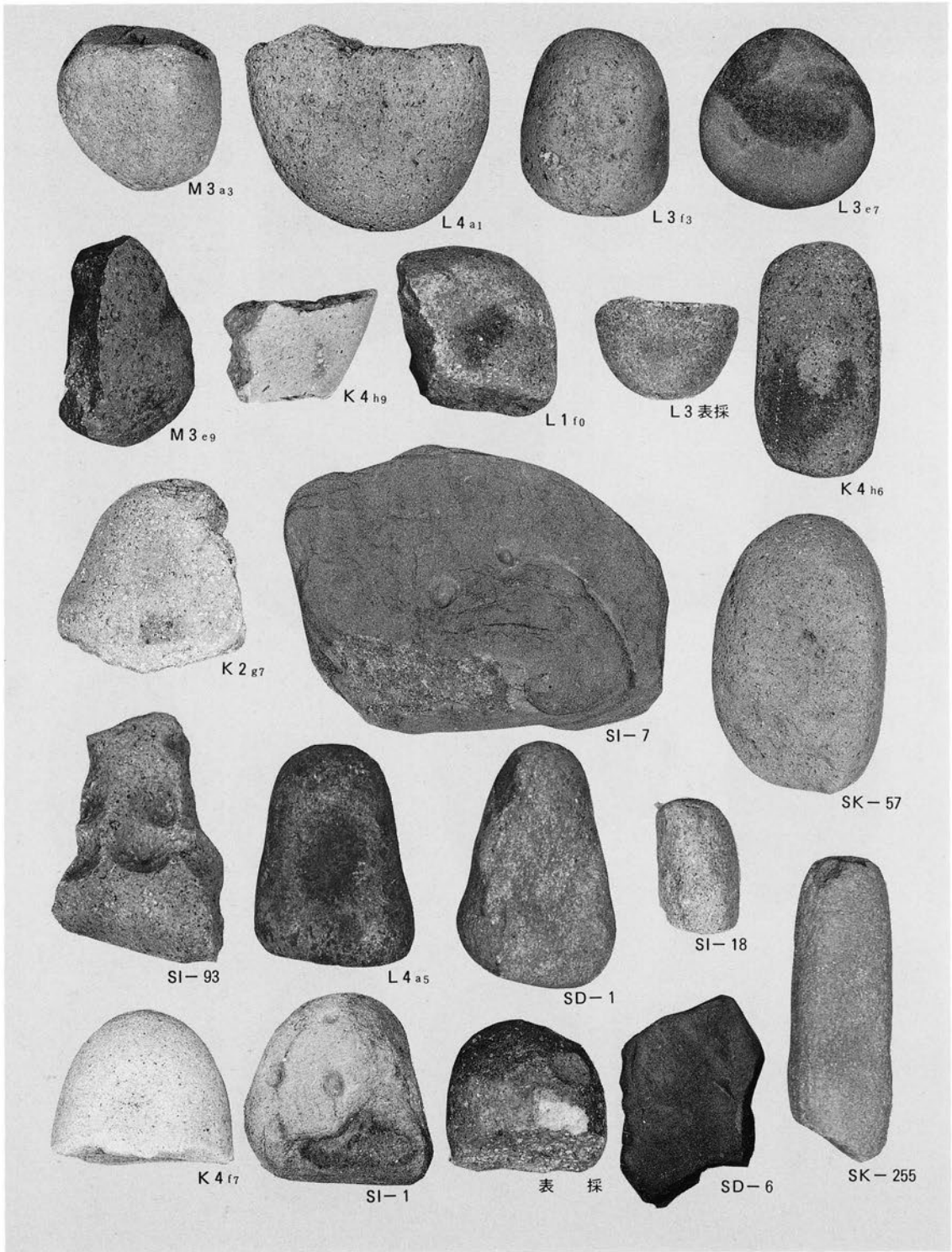
石 器 (2)



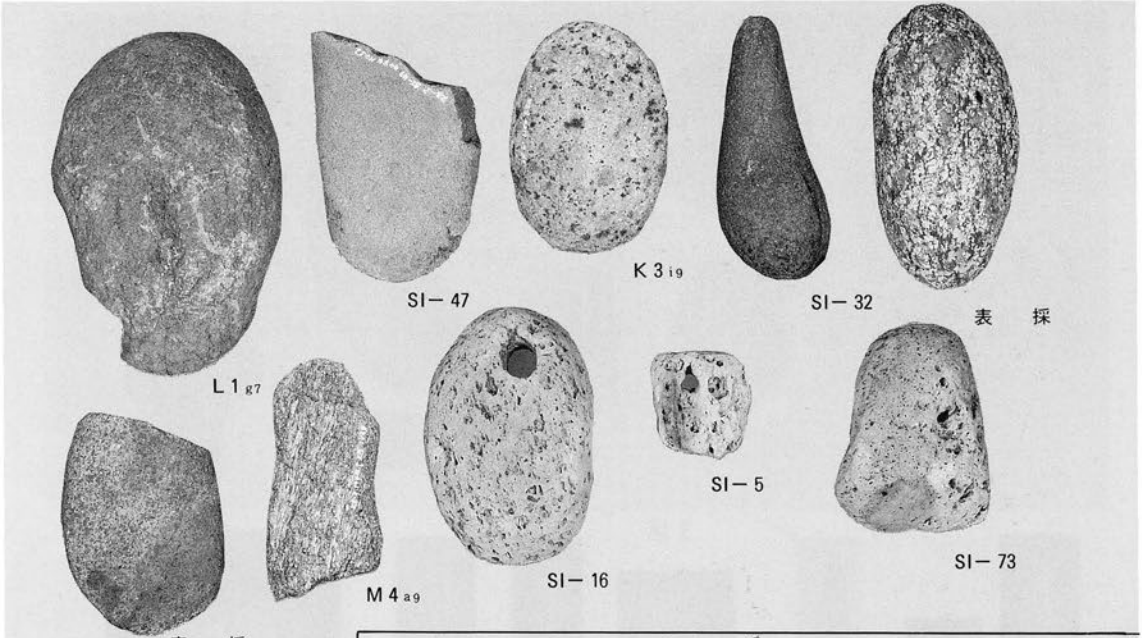
石 器 (3)



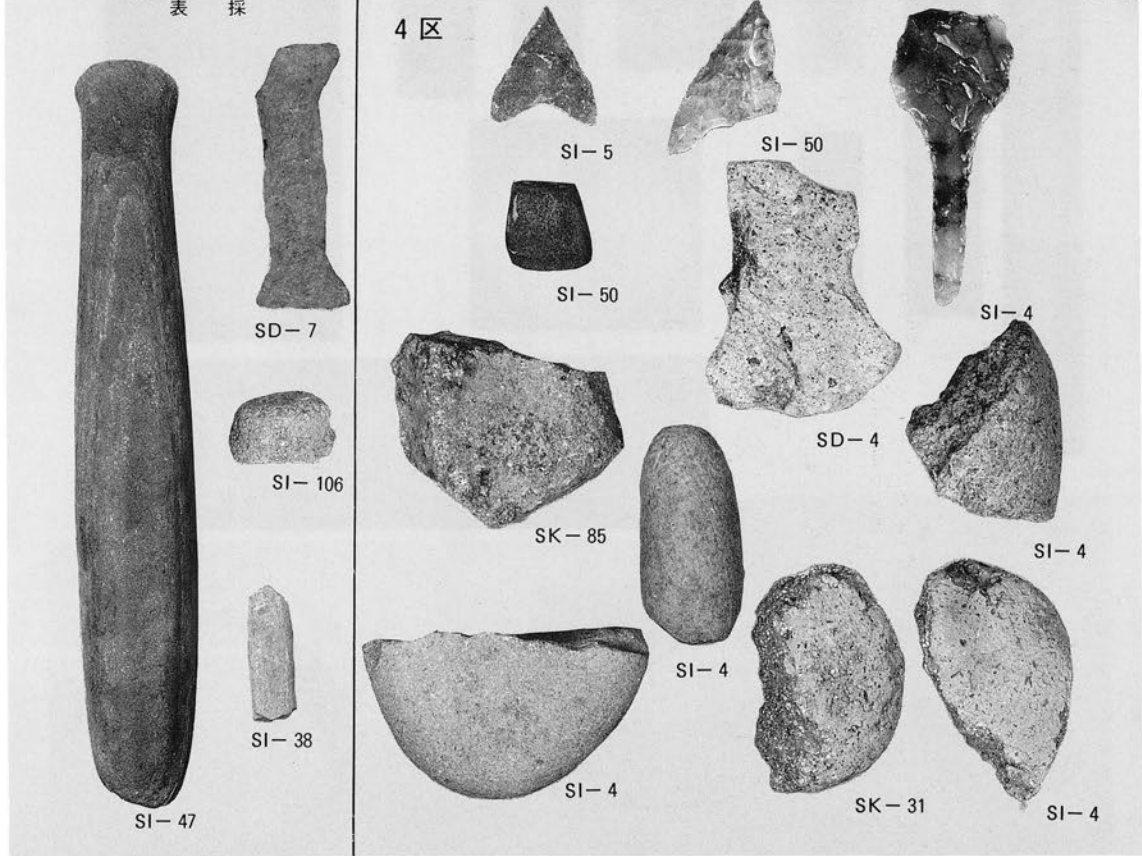
石 器 (4)



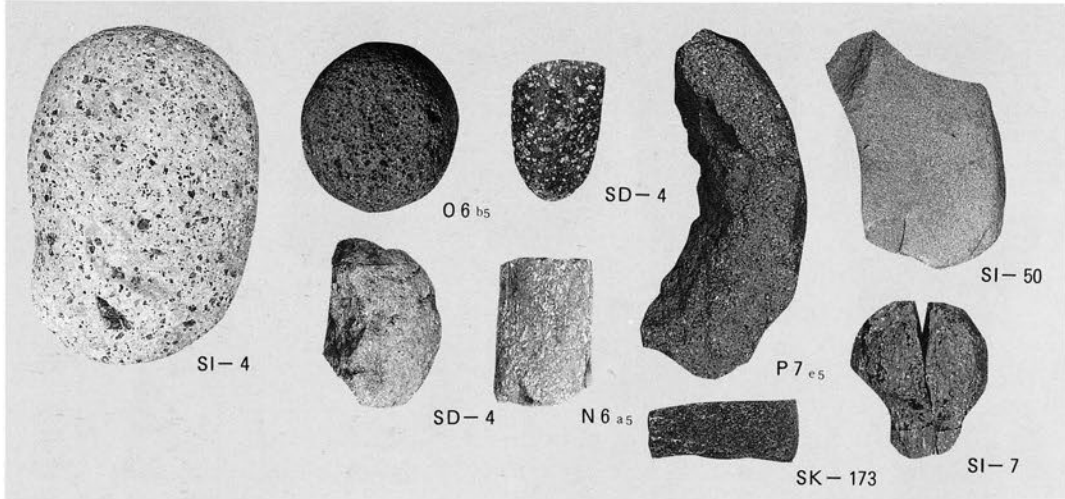
石 器 (5)



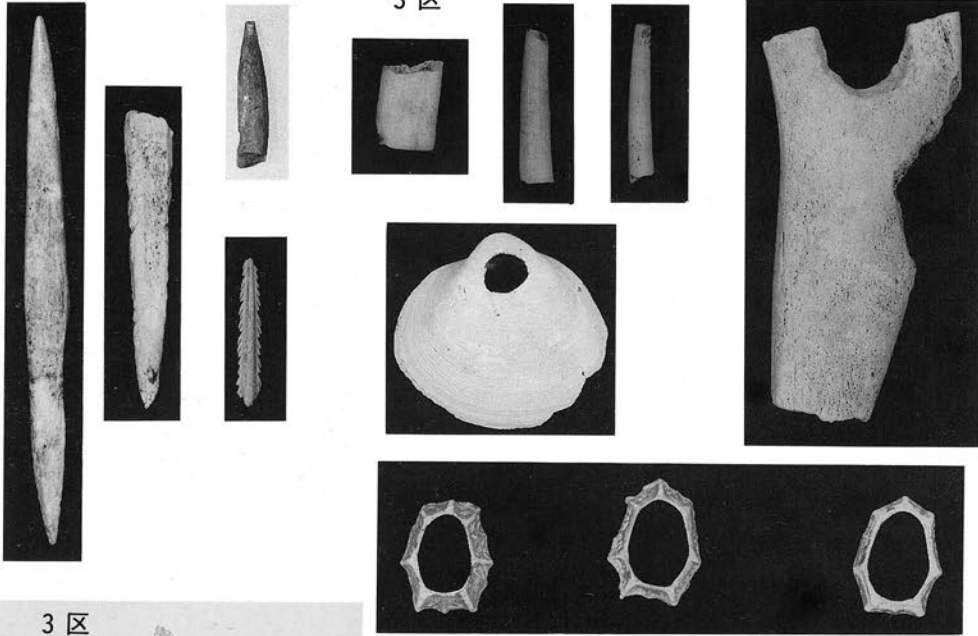
4 区



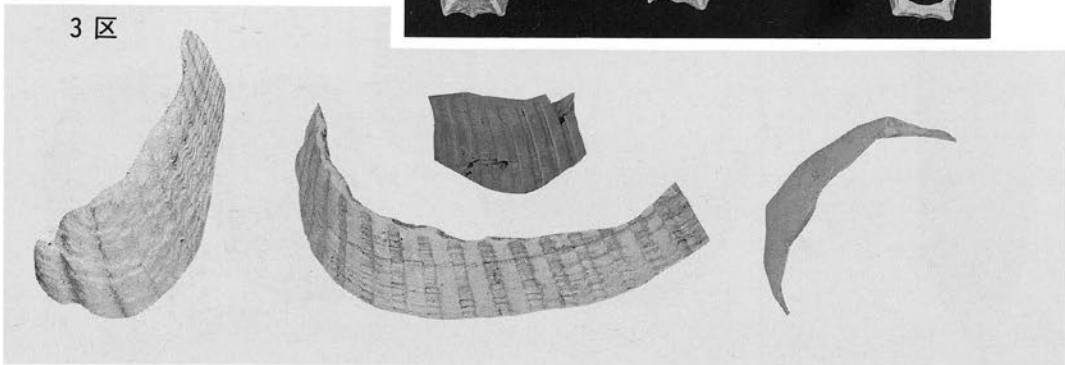
石 器 (6)



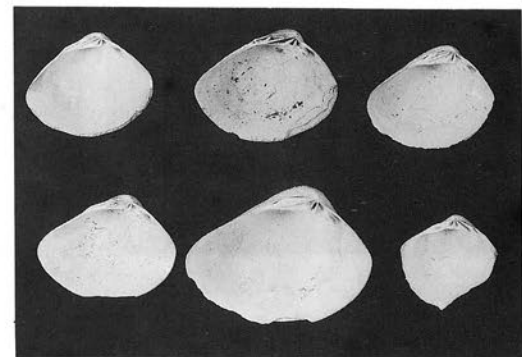
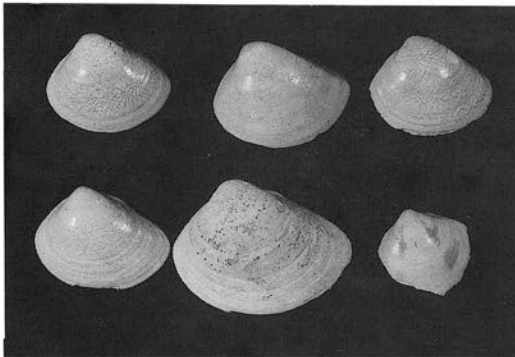
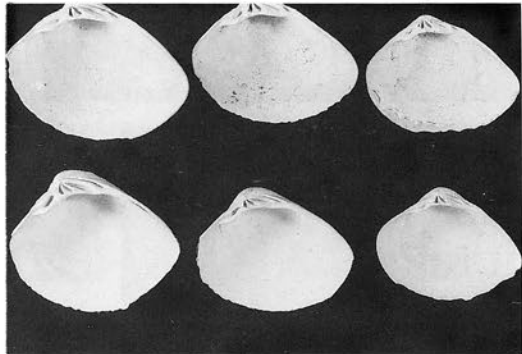
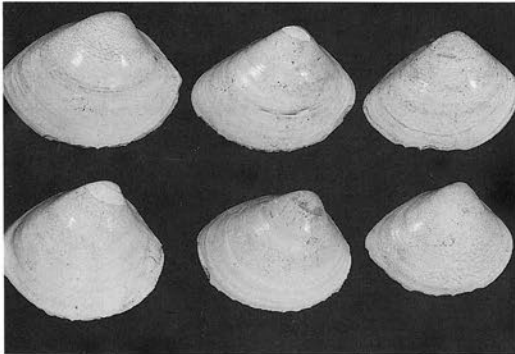
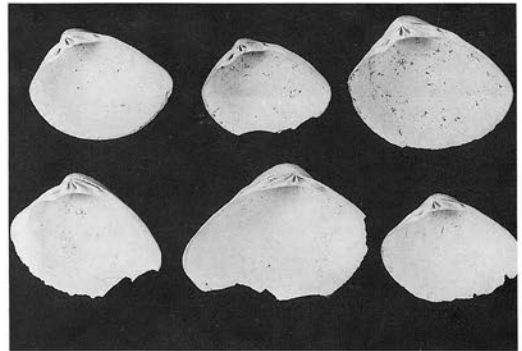
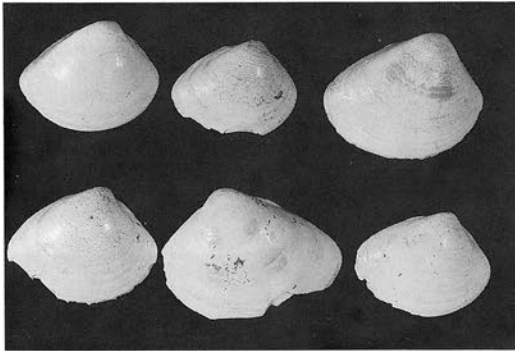
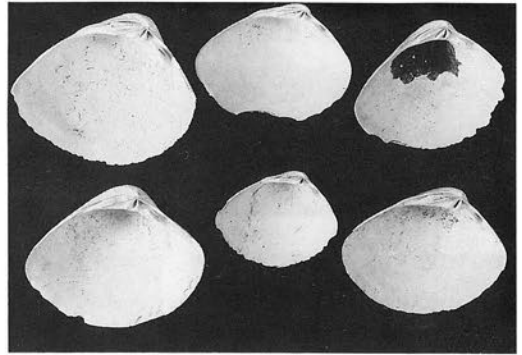
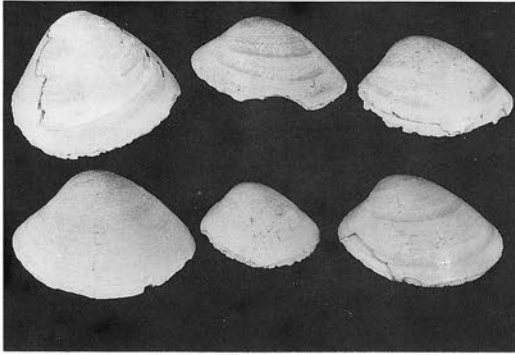
3 区



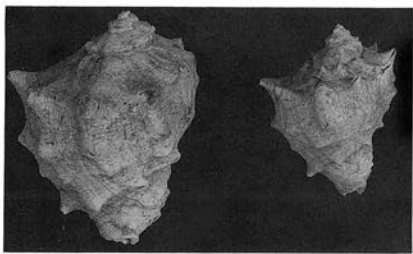
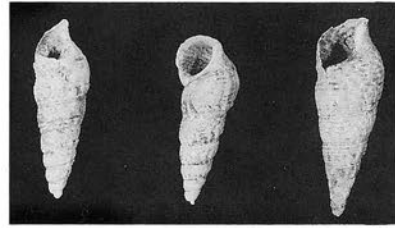
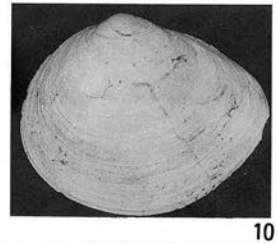
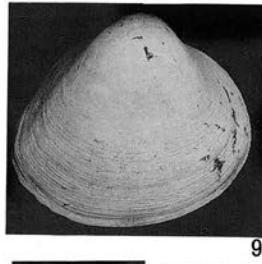
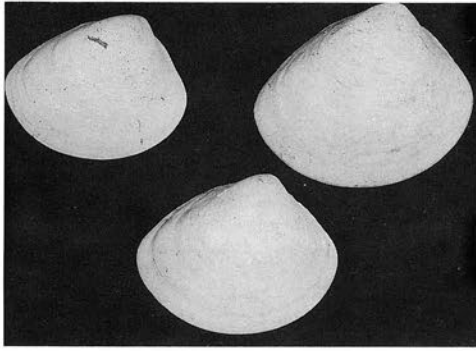
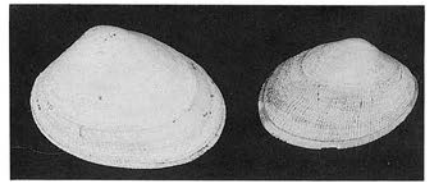
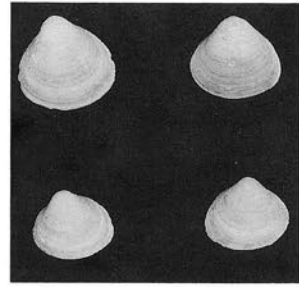
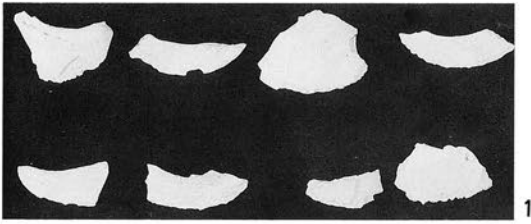
3 区



石 器 (7) 骨角貝製品



住居跡・土坑内出土貝刃



住居跡・土坑内出土貝刃・貝

- 1~3 貝 刃 4 サルボウ 5 ナミマガシワ 6 ヤマトシジミ 7 ハマグリ
- 8 アサリ 9 シオフキ 10 サビシラトリガイ 11 オオノガイ 12 カワニナ
- 13 ウミニナ 14 アカニシ 15 アラムシロ 16 ダンベイキサゴ 17 キセルガイ
- 18 オカチョウジガイ 19 ヒダリマキマイマイ

茨城県教育財団文化財調査報告第44集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16

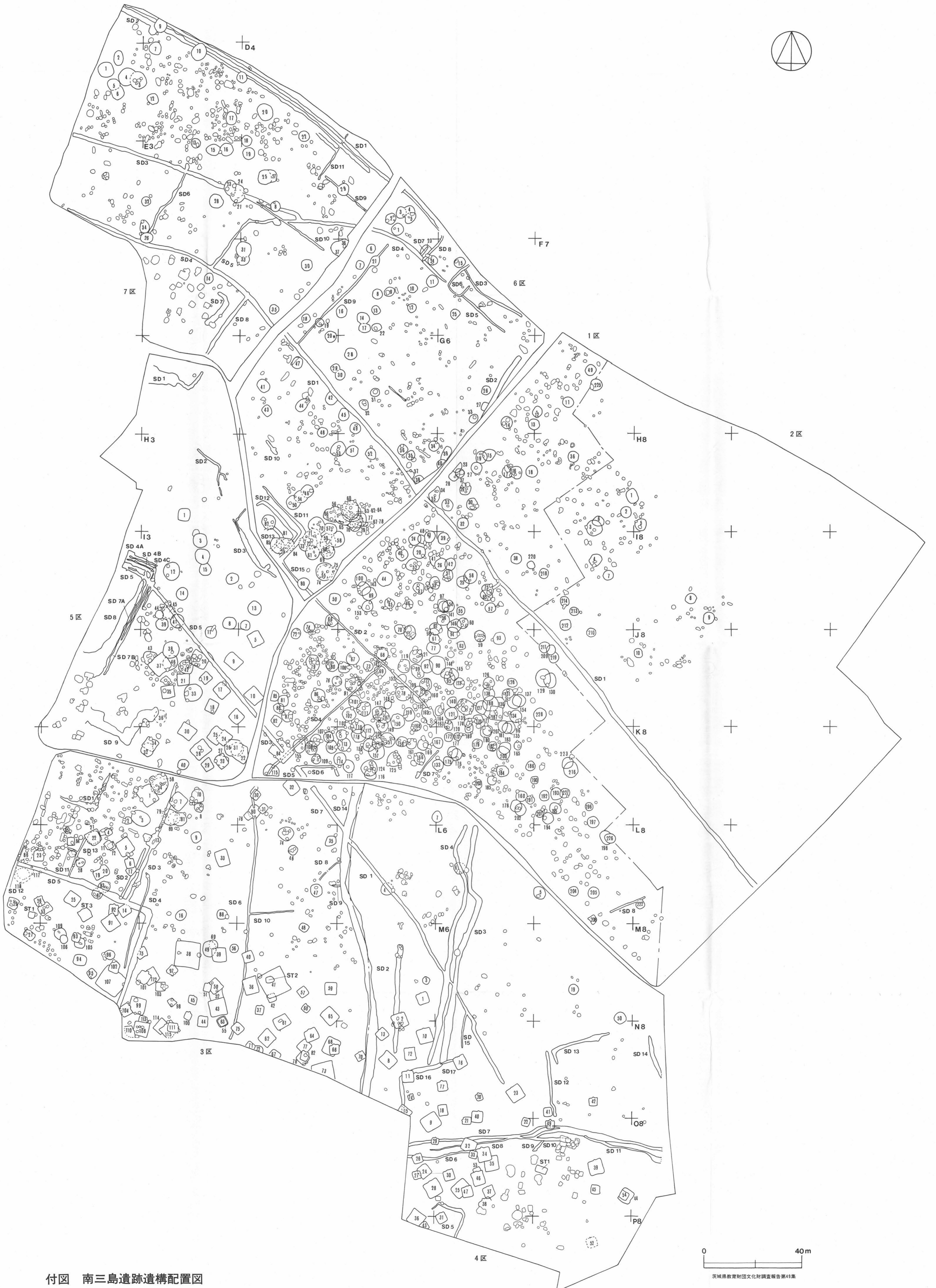
南三島遺跡 3・4区(I)

昭和62年12月4日 印刷

昭和62年12月4日 発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号

印 刷 ワタヒキ印刷株式会社
水戸市城東1-5-21



付図 南三島遺跡遺構配置図



第1図 南三島遺跡3・4区遺構分布図

